

---

# 葵と精霊と九十九神と悪魔と...

鉄 桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

葵と精霊と九十九神と悪魔と…

### 【Nコード】

N8915K

### 【作者名】

鉄 桜

### 【あらすじ】

突然のことです…。一人の男の人が落とし穴に落ちました。目の前には少女の姿をした神様が…。そして、また男の人は落とし穴に落ちました。目の前に映る光景は…。ドラゴンだった…。時は流れ、魔法大戦の時代。葵は魔法世界に来た。なんとなく戦争に参加するために！そして生み出される数々の兵器！葵はどこまで行くのか！？寧ろどこに行こうとしているのか！？ - 作者にもわからない

o r z

## オリジナルキャラ紹介（前書き）

今更ですが要望がありましたので急いで作ってみました。  
これからも変更していきます。

## オリジナルキャラ紹介

葵と精霊と九十九神と悪魔と…

……。

### 主人公

落とされる前は極普通の大学3年生。親友2人以外は浅く広い交友関係を持つ。

隠れオタクを自称しているが親友2人には既にバレている。少し鈍感気味。

猫に好かれる体質。でも本人は犬派の人。もちろん猫も嫌いではない。

子犬には好かれるが成長すると噛まれる。それでも懲りずに撫でようとする。

一部の親しい人を対象にだが怖がりだけど思いやりは人一倍ある。ホラーが苦手。

### ・九重・葵

俺

アルケミスト・ワン

「錬金術師」の称号を名乗るように発明好き。

黒髪、黒い瞳。身長170cm。体重62kg。身体年齢21歳  
(実年齢820歳)。

日本人。性別は男性。気が長い…というか長過ぎる。家族思い…いや溺愛している。

家族、友人、他人、敵の四つに分類する人。長い年月で思考がやや変化した。

全体的に中世的だが少し男性よりの容姿。目鼻立ちはハッキリしている。強面ではない。

目元は釣り上がっていて怖いが良く見ると優しい瞳の色を宿している。眠たげ。

現実世界から女神（幼女）の手によって“ネギま！”の世界に落された。

女神（幼女）の力で丈夫（頑丈？）な不老の身体になった。可愛いものが好き。

世界に落とされた直後、遭難して空腹で倒れた以降、食べ物を粗末にすることを嫌う。

様々なチート力を手にしたが把握できていない。発明チート。未だ実験検討中。

ハガレン錬金術、あらゆる世界の知識、技術チートなど……。ナデ コ、いいよね。

葵の科学力は宇宙一いい！！と叫ばずには居られない。by作者  
臆病者。小心者。ヘタレ。お調子者。気分屋。お人好し。やや鈍感。ロリコン気味。

でも人外にはイヤと言うほど好かれる、というか崇拜？敬愛？信仰？なぜだ？

好き嫌いがハッキリしているが筋が通れば妥協できる性格。でも嫌いなものは嫌い。

喫茶店クレイドルの店長。お姉さん好きを自称している。でもツボは少女（幼女）。

最近の外出着は紅のシャツに黒のスーツ。黒のネクタイにルビーのネクタイピン。

薄い黒のサングラス。冬にはワインレッドのコートを羽織る。どこの組の人？

黒と赤の色を好む傾向がある。葵本人は目立たない服装を選んだつもり。

……。

悪魔姓名〓〓〓〓・D・スタニツク  
精霊姓名〓〓〓〓・S・アナムス

精霊3人娘

葵と付き合いが一番長い3人。出会ってから700と数十年。

葵の魔力を抽出、濃縮、ろ過しより純粋な魔力にした霊薬を飲用し続けたため存在。

世界を創世した四大精霊に匹敵する力を得た精霊。全力で使われることはまず無い。

人外では最初の家族。初めて会った時の姿は50cmほどの小さな可愛らしい少女達。

可愛いモノ好きである葵の溺愛の切欠。以降、家族は溺愛の対象。目覚めたとも言う…。

精霊らしく調和を望む傾向が強い。

・ミリエール・S・アナムス

主様あ private

海のような清廉な青いサラサラなロングヘア。おっとり優しい目をした美しい女性。

愛称がミリー。水精霊の高級精霊。ほとんどオールマイティに仕事ができる。

顕現した時の服装は魔力で構成された海を思わせる青い絹のような衣を纏った姿。

喫茶店の店内では正統派メイド服に（似た！）服装に着替えている。

精霊3人娘の中で長女のような存在、全てを受け入れる優しいお姉さん。

・ウリエール・S・アナムス

あるじー ウーリ

愛称がウーリ。風精霊の上级精霊。ほのぼのした子。好きなことはお昼寝。手先が器用。

外見は若草のような優しい緑色の肩まである髪と可愛い目が特徴の女の子。

顕現した時の服装は魔力で構成された草原の緑と思わせる少し短い衣を纏った姿。

喫茶店の店内ではミニスカメイド服に（似た！）服装に着替えている。

手先が器用なことからアクセサリ系の魔法アイテムなどの細かい細工が得意。

最近はその独特な思考力と発想力からプログラム関係にも興味を持っている。

精霊3人娘の中で三女のような存在、のほほんとしている女の子。

・マリエール・S・アムス

主 私

愛称がマリー。火精霊の上级精霊。義理堅い。鍛冶場関係や鉄工関係が得意。

炎のように赤く燃えるような髪とキリッとした目が魅力の女性。時代劇が好き。

金属加工が得意なことから武器や防具、一般の金物まであらゆる金属の加工が出来る。

顕現した時の服装は魔力で構成された炎の赤を思わせる揺らめく衣を纏った姿。

喫茶店の店内では和風メイド服に（似た！）服装に着替えている。最近では新しい金属。具体的には艦船の新しい装甲版の開発作製に

精を出している。

精霊3人娘の中で次女のような存在、長女と三女の間で色々がんばる女性。

.....。

陽月姉妹

葵の懐刀。600年ものの守護刀。それぞれの鞘の拵えが白と黒とハッキリしている。

白い鞘に納まるのは陽<sup>ハオ</sup>。黒い鞘に納まるのは月<sup>ユエ</sup>という。姉妹刀。

製作当時、鍛冶場関係を担当していたマリエールだが個人の力だけでは足りなかった。

そこで属性は違うが同じ精霊のミリエールやウリエールと協力して製作に当たった。

当時は小さな存在だったために魔力の補充に葵の魔力も注ぎに注いで作られた。

誕生から100年後、九十九神となり双子のような姉妹の姿をとる。

喫茶店では主に用心棒役。いざという時に頼れるお姉さん達。

・陽月 ハオ

我が君 私（吾ら）

「白と黒の双姫」の白の剣姫。美しい白の姉さん。剣の九十九神。どこまでも白い、新雪の雪のように穢れの無い腰よりも長い髪。

凍えるような白い瞳をしている。でも葵には優しい眼差しをする。流し目？

女性の姿の時は鞘の拵えと似た白い和服を着崩した姿。床にすりそうですらない。

僅かに見える肩が色っぽく艶やかさを演出している。ちょっと動く胸元が…。

・陽月 ヌエ

我が君 私（吾ら）

「白と黒の双姫」の黒の剣姫。美しい黒の姉さん。剣の九十九神。

どこまでも黒い、深遠の夜のように全てを包み込みそうな腰よりも長い髪。

見たもの全てを見透かすような黒い瞳。でも葵には優しい眼差しをする。流し目？

女性の姿の時は鞆の拵えと似た黒い和服を着崩した姿。床にすりそうですらない。

僅かに見える肩が色っぽく艶やかさを演出している。ここだけ八才より大きい…。

……。

悪魔3人娘

葵と出会ってから300年は経っている。爵位を持たない下級悪魔。

葵の魔力を抽出、濃縮した霊薬を飲用し続けたため存在としては大公爵級になった。

深層意識下で葵と五感を共有できる。オン、オフの切り替えができる。

数十年ほど前から徐々にだが魔界（暫定）との繋がりが薄くなり始めている。

悪魔契約を切欠に葵の世界に取り込まれた模様。霊薬の影響もあり顕著に効果が現れた。

現実世界に顕現する時に世界の拘束が緩い。葵の愛情（霊薬）の影響か？

葵との初対面の時は敵対していたらしい。3人の絆は強い。

・オリビエ・D・スタニツク

葵 あたし

下級悪魔。爵位は持っていない。力（魔力）だけは大公爵級。女性型悪魔。

固有能力は“切断”、あらゆるものを斬り伏せる。前衛担当には持って来いの能力。

悪魔らしい黒い髪を後頭部で結ってポニーテールにしている。瞳も黒いがやや赤い。

3人の中で最もバランスの取れた戦士。加えて指揮能力も高い。万能タイプ。

大剣による接近戦、遠距離魔法による砲撃戦。どちらも高い水準でまともっている。

動きやすさを重視しているため結構薄着で際どい水着のような服装をしている。

大きな黒い翼と頭の左右から鋭い角を生やした勝気な女性。3人のリーダー的存在。

でも、中身は家庭的で炊事洗濯、更には料理までこなす家庭的な女の子。

・リビエラ・D・スタニツク

葵ちゃん 私

下級悪魔。爵位は持っていない。力(魔力)だけは大公爵級。女性型悪魔。

固有能力は悪魔にしたら珍しい“光”、それを霧やレーザーのように使える。

3人の中で一番魔法の操作に長けている。遠距離戦ではまず敵は居ない。

キラキラした黒いセミロングの髪と白金色の瞳をしている。

頭の左右から立派な角を生やして細いボンテージを幾重にも纏った女王様然とした姿。

翼や尻尾になる部分は普段から隠している。ただし戦闘時には展開される。

格好こそ女王様だが、とても礼儀正しい。少しおつちよこちよいなところがある。

・シルビア・D・スタニツク

お兄ちゃん ボク

下級悪魔。爵位は持っていない。力（魔力）だけは大公爵級。女性型悪魔。ボクっ娘。

小さな頭に西洋の兜の様に角を左右から生やしている。眠そうにしている目元が特徴。

小柄な身体には不釣り合いな大きな翼と長い尻尾を持っているがリビエラ同様隠している。

固有能力は極レアで2つ所持。一つは“怪力”、もう一つは“鉄壁”だ。

暴力的怪力の一振りで敵を消滅させる。近距離に限れば3人中で最強クラス。

敵攻撃は堅い防御力の前では無意味。魔法障壁とは別個のスキル。皮膚自体が堅くなる。

3人の中で力や突破力で言え一番。頭一つ跳びぬけて強い。

小柄な身に不釣り合いなほど大きな斧槍ハルバートを小枝のように振り回す。

それでもお昼寝姿は癒されマスコット。葵のことをお兄ちゃんと呼び慕う。

.....。

AI3人娘（内1体が???)

常時接続して相互協力するため電子情報内で相互に情報のやり取りを行なっている。

擬似人格を構成している根幹部分以外を並列化、情報の共有をしている。

それぞれ艦搭載型、個人用支援型、対地上戦闘型とタイプが異なる。

ある意味一番、葵のネタが集まった集団。しかも強力だから手に

負えない。

葵の戦力の大多数を管理している。主に無人兵器類。上位機種とされた娘達。

これからも機械娘が増えるかは神（作者の指）のみぞ知る…。

・アングレカム

お父さん 私

形式番号X 01次世代電子精霊融合型統合制御AI。割と大きな多次元量子CP。

対艦砲雷撃戦、対電子情報戦が得意。艦の全ての制御するオペレーター役目がある。

移動端末の見た目は12〜3歳の少女。姿は自由に調整できる。極度のファザコン。

長いサラサラの銀髪をポニーテールに、瞳の色は金色。モデルはRURIRURRI!

服装はレースが施された白のワンピース、胸元に輝く赤いブローチがワンポイント。

葵を電子情報面で協力にバックアップしている。あらゆる電子暗号を解読可能。

愛称は彼女の本体が搭載されているアングレカムから取ってアンと呼ばれている。

・ラミエルさん

我が主 了解

正八角形をした青いクリスタル。デバイス(?)。構成人格は女性型。負けず嫌い。

待機状態は3cmの正八面体のペンダント。いつも葵の胸元で揺れている。

最大展開では100mの巨体になる。空中要塞。次元結界を独自に習得した。

大小様々な荷電粒子砲を搭載。最近はミサイルも完備。掘削用ドリルを搭載。

Dフィールドの強度はアンよりも1.7倍ほど強力。現在は拮抗している。

葵の有人機動兵器プロテアを一時吸収した。無機物に関しては悪食。

プロテアを空間領域に格納している。趣味は自己進化、自己強化。孫の手完備。

・COS MOS

マスター 私

機械人形。姿はゼノ マキナ・マーターガ?のK S - M S。手抜きにあらず。

姉弟機としてシュワさん(型番Syuwa-TXN-02)が順次生産されている。

地上制圧型人型戦闘機械人形。イレギュラーだがシュワさんの上位機種として登録。

各種兵器を多数所持。大まかな区別として内部兵装と外部兵装がある。

全長169cm。重量143kg。身体の構成物質は金属骨格とナノマシン集合体。

戦闘時の服装は機械的な白いボディスーツ。防刃・防弾・防魔などの耐性に優れる。

ボディスーツはナノマシンで構成されているので服装はある程度なら変更可能。

服飾のデータ収集ができれば変更可能なのでコスプレ少女には羨ましがられる機能。

.....。

精魔奇兵のお姉さん達

精魔奇兵。素体物質と精霊か悪魔を融合させた新しい種族。悪魔合体にあらず。

外見は人の姿に酷似している。融合時に外見はある程度、本人の意思が反映される。

髪や瞳の色は大多数が元となった精霊の属性や悪魔の固有能力などが反映される。

「火精霊なら赤い髪や瞳。“毒”の固有能力なら紫色の髪や瞳…」などである。

ただし悪魔は黒色が最も反映される。赤みがかかった黒などのような場合が多い。

融合後の特徴として身体能力・総保有魔力の飛躍的な向上が見られる。

素体を主構成しているナノマシンにより並列思考・高速思考の能力が付加される。

葵至上主義の傾向が強い。……訂正、それしか居ない？

・アイリス・D・スタニツク

閣下 私

元悪魔。愛称はアイリ。親衛隊所属。精魔奇兵のまとめ役。非常に優秀。

紫がかった長い黒髪、毛先のほうを紫色のリボンで結っている。リボンはお気に入り。

瞳の色は普段は黒いが一定以上興奮すると濃い紫色になる。

私生活は優しく柔らかい雰囲気のお姉さん。任務中は鬼のように厳しい。

固有能力は“毒”。地味に強力過ぎるバイオ兵器なので普段から使われることが無い。

仲間思いのため人望もある。反面、割と心配性のため葵を過保護なままでに守ろうとする。

組織経営が優秀。ある意味、葵が頼りにしている人物の1人。

・ファレノプシス・S・アニメス

葵ちゃん 私

元火精霊。愛称はファレノ。親衛隊所属。精魔奇兵の実質N02。ウェーブした茜色の髪。オレンジ色のバレッタで髪を留めている。赤い瞳は光の反射で色の濃さに微妙な変化を与えて反射する。

戦闘能力・事務処理能力共に優秀。後方任務が得意。そのため、ややサポート向き。

時たま落ち着きがなくなるが何故かミスが無く基本的に気の利く子。

火を操るのが得意。温泉が大好き。

・フリチラリア・D・スタニツク

葵様 わたくし

元悪魔。愛称はリチラ。親衛隊所属。精魔奇兵の実質N03。指揮能力が高い。

黒髪だが光の加減で薄水色に見える。魔力に反応するとより鮮明に見える。

瞳の色だがこちらはハッキリと薄い水色をしている。肌は雪のように白い。

固有能力は“氷”。対象を一瞬にして氷像に変えることが可能。止めに砕くのが好き。

冷やし中華や冷製スープなどの冷製料理が得意。特に手作りバリライスは絶品。

精魔奇兵の制服をデザインしたのは彼女。お洒落さん。

・コーレア・S・アニメス

葵くん 私

元気いっぱいな元風精霊のお姉さん。葵にも割とフレンドリーに接する。

薄いライトグリーンの髪を短いポニーテールにしている。瞳の色も髪と同様。

趣味はアウトドア関係、あとはお喋り。特技は風系統の魔法全般。

・サルビア・D・スタニツク

マスター 私

元悪魔。冷静沈着に思考が過激。綺麗な青みがかつた黒髪と目が魅力的な少女。

ワンポイントは小さなメガネ。趣味は読書。特技はナイフコンバット。

固有能力は“腐”、有機物・無機物関係無く腐敗させ、組織崩壊させる。

・ランタナ・S・アニメス

葵様 私

親衛隊所属の古参の1人。元地精霊。赤茶けた肩まである髪と鋭い目元が特徴。

マジメな性格。真実、工作中的の彼女はマジメだ。責任感が強い。

・マトリカリア・S・アニメス

主様 私

元水精霊。親衛隊所属の古参の1人。後方任務を得意とする。事務処理なども優秀。

濃い青色をした腰よりも長い髪を後頭部で一本に結っている。

少し目尻の下がったおっとりとした雰囲気を持つ女性。

ただ仕事中は雰囲気とは逆の印象を与えるほどキリツとしている。

・ドラセナ・D・スタニツク

閣下 私

元悪魔。情報部三課所属の10あるチームの一つ、第4チームの

リーダー。

固有能力の“影”を持ち漆黒の髪と瞳。複数を統率指揮する能力が高い。

・ラナンキュラス・D・スタニツク

主 あたし

元悪魔。情報部三課第4チーム所属。デルタ3のコードを持つ。緑がかった黒いショートの髪と、髪と同じ色の瞳をした彼女は潜入任務を得意とする。

“風”の固有能力を持つ。風精霊同様、風を操ることができる。

・ディプラデニア・D・スタニツク

葵様 あたし

元悪魔。情報部三課第4チーム所属。デルタ2のコードを持つ。腰より長い髪は黒より尚暗く瞳も同様、見たもの全てを飲み込みそうな漆黒をしている。

固有能力は“闇”。亜空間に飲み込みエネルギーの吸収・発散ができる。

・ダチュラ・D・スタニツク

マスター 私

元悪魔。情報部所属。ダリアの姉。体型が幼女すてんなのが悩み。

一課、二課、三課の三つを纏める情報部部长。陰謀、謀略が大好き。

銀と黒の合わさった色の肩より長いウェーブした髪と優しげな色を宿した瞳。

固有能力は“幻惑”。対象を甘露な夢の中に墮とし幻想空間に誘う。

可愛らしい外見とは裏腹に少し黒い。でも笑顔は花が咲いたように愛らしい。

妹は好きだが大きい（胸的な何か）のが気に入らない。子供扱いを嫌う。

・ダリア・D・スタニツク

葵様 私

元悪魔。情報部所属。ダチュラの妹。体型が大きい（ボンツキユツボンツ！）のが悩み。

影に日向に姉を支える情報部副部長。情報整理、作戦計画、書類作成etc何でもござれ。

銀と黒の合わさった色をした髪をアップで纏め、瞳は鋭く伶俐な色を宿している。

固有能力“支配”。生物の精神に干渉する能力。夢を媒介に精神支配を可能とする。

全身から怖い雰囲気醸し出しているが実は可愛いものが好き。パジャマがうささん。

自室には可愛いぬいぐるみが沢山ある。趣味は姉の服を着せ替えること。

幼少の明日菜の着せ替えファッションショーにも参加した記録がある（後に削除された）。

姉は好きだが自分の体型にコンプレックスあり。理由は（色々と）大きいから…。

2011/3/14再更新

## オリジナルキャラ紹介（後書き）

気になる点があれば感想などで受け付けます。 誹謗中傷は勘弁。

では！

第零話「プロローグ的な……？」（前書き）

こういう段階を省いて始めてしまったので今更ながら掲載。

この作品を始めたのは勢いだったから「いいかな？」と思って省いちやっつたのですよね。

ちよくちよく指摘があったので掲載することにしました。

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

## 第零話「プロローグ的な……？」

桜の咲き乱れる四月中旬、季節は春を迎えていた。今の時刻は日も暮れた午後七時半だ。星も月も良く見える。

そんな夜空の下、街灯が点る道を歩き進む。どこからともなく飛ばされてくる桜の花弁と柔らかな風に思いを馳せながらも家までの帰り道をただ歩く。足取りは心なし軽く感じた。

俺は九重・葵<sup>くえい・あおい</sup>。今年大学四年生になるところに居る普通の男だ。ただ、少し言い難いことがあるのだが俺は、その…世間で言うところのオタクだ。漫画からゲーム、アニメ、映画まで色々と世相はな

い。  
楽しければいい。それが俺の信条だ。可愛いはこの世の真理なんだ。うん。

「ああ、もう。あのバカが。どれだけ飲ませれば気が済むんだって話したよなああ」

大学で新しく知り合った友人達とこうして飲み会を開いて既に何度目だったか。大学三年生の頭に二十歳になってから飲み始めたがもう数えるのもバカらしいくらい飲みに行ったり友人の家で飲んだりしたものだ。

この春から四年生になる。早生まれの俺は二十一歳になった。今日は誕生会と言う大儀を得た友人達がそれにかこつけて飲み会を始めてしまった。無論嬉しくないわけではない。飲むことが目的だったとは言え俺も楽しかったのだから。

「それでもなあ……俺以外全員が潰れるとかどうよ……」

お陰で居酒屋の料金は俺が立て替える羽目になった。諭吉さんが三人旅立たれて逝きましたよ……。明日は絶対に借金の取り立てなくては、と俺は心の底から、そう決意した。

「あつとすつこし……。もうすぐ我が家へってね」

家まではあと一つ角を曲がった直ぐそこだ。ほろ酔い気分のまま足取り軽く進んだ。進んだら。

「は？はあああああああ……！！！！」

いきなり地面が消失した。

……。

……。

目を覚ますとそこは俺の部屋だった。

「……あー！……つうう、夢かあ。酔っていたとは言いきなり落下する夢ってなんだよ、まったく……」

寝違えたのかわからないが身体中がジンジン痛かった。二日酔いのそれとは違うそれは、まるで高いところから飛び降りて地面にシコタマ叩き付けられたように……って、は？え？

「痛い？なんでだ、これ？つうう……！」

「それは私が招待したからなのですよお……！」

……………は？

「あ……えと、誰？」

「女神なのでちゅー！」

「……………（噛んだよ……）」

「……………女神、なのですっ……！」

「……………（言い直したよ……）」

上半身を起こした俺の目の前に居るのは、その、一言で表すならば……幼女だ。それもとても可愛らしい幼女。ちょっと特殊でおつきなお友達が見かけたら思わずお菓子片手にお持ち帰りしたくなりそうなほど可愛らしい幼女だった。

「……………いや、言い直さなくてもいいけどな。それで女神様（幼女）なお嬢ちゃんはどこから入ってきた？ここは俺の借りてるアパートなんだが」

「ちゃんと聞いていたのですか？ここへは“私が招待した”と言ったのでちゅ……言ったのですよ？」

「……………（なるほど。このお嬢ちゃんは舌つたらずなんだ。だからよく噛むんだな）」

「変なところで納得しないでほしいのですよっ！？余計なお世話なのですう……！」

「おっ？人の顔色でなに考えてるかわかったのか？すごいな！お嬢

ちゃん！よしよし」

子供は気配に敏感とは言うが本当だな。俺の考えていることがわかっていくかのようだ。こういうところが女神様ってあだ名になっているのかね？いや見た目そのものがとても可愛らしいからそこがらきたのかもしれないな。

「はふうう………はっ！？違うのです！そうじゃないのですよ！」  
「はい。怒鳴らな～い、怒鳴らな～い。いい子だからね～」

ふふふのふ。アパートのご近所から時たまベビーシッターの真似事みたいなこと小遣い稼ぎしていたから子供の扱いはちょっとしたもんだよ。特に撫でるスキルは秀でていると言っても過言ではないね。

「やん………あうあう。気持ちいいのですう………はふうう」

「………（ああ。癒される～！なんなのこの子！？すっごい和むし可愛いんだけど！）」

「え？わ、私…可愛い、ですか！？」

「………（どこの娘さんかな？一階の山本さんとかか？いや、あそこは男の子だったはず。あつ、お隣の木村さんとか？あー、でも木村さんとは今年で中学に上がるって奥さんが言ってたっけ……）」

「んー…気持ちいいのですう………って！だから私は女神だと言っているですよ！ちゃんと話しを聞いてくださいなのですう！」

「あーはいはい。女神様（幼女）。女神様（幼女）ね。そんなお嬢ちゃんはお家に帰らなくていいのかなー？よしよし」

女神………女神ねえ……。このお嬢ちゃんが女神様か。いや、女神様は女神様でも幼女神様じゃね？………いや、可愛いから文句はサラサラないけどね。

だって今も撫でているわけなのだけど……かーいーねー！

「んん…もうちょっと右……って！だからここへは私が招待したのですよお！」

「はいはい。招待、招待。それで本当のところはどうよ？二つ隣の深山さんとこの娘さん？それか姪っ子か？」

「う、ううう……話しを聞いてくれないのですうう……」

そろそろここらが引き際、かな。これ以上はイジメになってしま  
う。イジワルは楽しいけどイジメはダメだ。うん。悪意しか残らな  
いし。

でも最後にもうひと弄り……。

「いやいや、聞いている。聞いているって。それでお嬢ちゃんはどちら  
さんの娘さんで。どこから来たのかな？もう遅いから送っていくぞ  
？泊まっていくなら一度親御さんに連絡取りたいから電話番号を…

…」

「だ・か・ら！ここは私が作り出した部屋なのですよお！貴方のお  
部屋は“ここではないどこか”にあるのですう！」

ふう………ごほんっ。さて、いい加減にふざけるのはやめて  
。

「最初から真面目に話しを聞いてほしかったのですよお！？」

「悪かった。悪かったって。それで？ここはお嬢ちゃんの作った部  
屋であるってことだけど………どづいづことよっ。」

「づづづ……ちゃんと、ううう……聞いて、くれるのですか？」

ちょっとからかいすぎたか。軽く涙目じゃないか……。

「ああ。ここからはマジだ。状況を説明してもらいたいだがな」

「ぐずっ…わかりました。では、まずはそこに立つてくださいです

」！

「ん？ここか？こんな感じ？」

「はいっ！そのままあ、そのままなのですよあ………えいっ！」

ぽふんっ。

「あ？」

背後から衝撃（？）が襲ってきた。お嬢ちゃんの背丈が低いから太股辺りに軽い衝突を感じた。

「えいっ！んー、えいっ！えいえいっ！！」

ぽふんっ。ぽふんっ。ぽふんぽふんっ。

「え？いや、あの？……え？」

軽いタツクル（？）とか、駄々っ子パンチとか……。このお嬢ちゃんには本当に何がしたいのだろうか？いや軽い衝撃がマツサージのよっぴに感じられて気持ちいいような気がしないでもないけど……。

これはアレか？おしくらまんじゅう？

「えいっ！………うー！なんで落ちないのですかああ！？うっうう…

……！」

ついには泣きじゃくり始めたんですけど……。え？これって俺が悪いの？えー…。

「あー、よくわからないけど。よしよーし。泣くなー？泣くんじゃないぞー。お嬢ちゃん強い子だろー？よーしよーし」

「あうあう…は、恥ずかしいのですよお…ぐすっ」

なんで俺はこんなところで幼女を慰めているのでしょうか？神様……あ、このお嬢ちゃんが女神様だった。幼女だけ……。

「それでなぜに…と言うか何をしようとしたわけよ？落ちる落ちないとか言ってたけど」

「そ、それは……」

幼女神様、もとい女神様（幼女）が言うには暇だったから偶然引っかかった俺を“こことは違う世界に送り込む”つもりだったようだ。

まあ「暇潰しかよ……」と内心思わなくもないけど女神様（幼女）という可愛らしいお嬢ちゃんと知り合えたので良しとすることにした。無理矢理、ね。

俺は可愛らしい女の子には優しいのよ？限度を越えなければ。

それで、あのおしくらまんじゅうは話をキチンと聞かなかった俺を驚かそうと思って説明しないまま穴に落とそうとしたらしい。本来はキチンと説明したあとで自分から穴に飛び込んでもらうとのことだった。

うん。話を聞かなかった俺が悪かったと思うが、それはヒドイ。

いや、何事もなかったからこれでお相子と言えはお相子だと思うけどさ。イキナリ人のこと拉致っておいて扱いがこれか？はあ……。

ここに来たらもう元の世界に帰れない、とも言われた。要は、「もうサツサと覚悟を決めて旅立て」と言うことだ。これについてはいい。両親も俺が高校の時に他界しているし兄弟も居ない。親しい親戚もだ。

うん……こうして考えると元の世界に未練らしいものはない……いや、先程友人達と飲んだ時に立て替えた料金。……クツ！借金の取立てができないじゃないか！奢り損ですかね、これ！？……はあ。

まあこれは仕方ないからいい。通貨が買えても向こうの世界で使えるかも怪しいし。

ただまあ一つ。その一つだけが納得できないことがあった。その穴……“世界を越える穴”に落ちると本人の意思に関係なくランダムに行く世界が決まるらしい。

これはどうなのよ？ どうせ逝くなら、もとい死んでないってのこほん……行くなら自分で行く世界を選びたいものだ。だが、このことで抗議しても「無理なものは無理なのですよお……」と涙目で言われてしまった。

それえも出現する時間や時代はある程度調整できると言う。なぜここだけ？

まあそれなら仕方ない。幼女を泣かせてまで無理強いする気は毛頭無いのだからこれについては残念だが、本当に残念だが諦めるこ

とにした。その代わりにここに居る間女神様（幼女）を膝に乗せて愛でることにした。

愛で倒した！！

これで鬱憤は、とりあえずは晴れた。……とりあえずだけだな！それでもあ話しを続けるがこの俺の膝の上でタれている女神様（幼女）が言うには“穴”と通る時に所謂“特典”が付与されるらしい。

この“特典”とは簡単に言ってしまうえば二次創作でよくある好きな能力を貰える、というものだ。この“穴”の中で落ちている間に欲しい能力を強く願えば幾つでも付与されていると言うことだ。

だがしかし、落ちる時間や距離は様々であり一秒で抜けることもあれば年単位で時間が掛かることもあるらしい。

因みに基本的に身体能力は強化される。行く先の世界に“気”や“魔力”、その他の“力”があればそれも基本的に最大限まで強化されるとのことだ。あと簡単に死なないように不老化する。

つまり、だ。“穴”と通る間に欲しい“特典”はそれら以外のモノを願うことが肝要だ。そうじゃないと願い事が重複して無駄になるからな。

でも話しを聞き終わって俺は思ったことがある。それは……。

「……これって“欲したモノは全て叶う”と願えばいいだけじゃない？これなら願い事が一つで済むわけだし」

例えば“欲したモノは全て叶う”と一つ願い、それが叶ったとす



「あう…んん…はふう……………はっ！？危なかつたのです……………貴方の撫でる手は凶器ですよお！？撫でられると気持ちよくてボーっとしますう！」

「えー…なんかヒドインですけどー……………」

女神様（幼女）めエ…。凶器とはヒドイ言いようではないか。気持ちいいならそれでいいじゃないか。刹那的快樂とかはイヤだけど和む的な楽しさだったらいくらでも欲しいものだよ。うん。

「もう！それよりもいい加減に“穴”に飛び込んでくださですよお！ちつとも話しが進みやしないのですう！」

「……………（ボソツ）気持ちよかつたくせに」

「そ、そそそれは関係ないのですうう！！！！！！」 紅潮。赤面。瞬間沸騰。

いいね。このお嬢ちゃんはからかうと楽しくて仕方ない。可愛いんだもの。うん。

ともあれ遊んではかりもいられない。一応“穴”を通る時に何を願うかを考えておかないといけない。

俺が絶対に欲しいものは……………。

一つ、某キンピカの「王の宝物庫」（これは中身に関しては最悪なくてもいい）。

一つ、“あらゆる世界（漫画、アニメ、映画など）の科学や魔法、その他の技術の知識”。

一つ、“上記のそれらを創造、作製、行使することができる”。

一つ、そして尚且つ“創造物、技術を使いこなせるようになる”ことだ。

以上の四つだ。これなら“なんでもできる”。つまり俺が欲しいモノは“一芸特化”ではなくあらゆる事態に対応できる“万能多芸”なのだから。

これは某人形師の考えだがとても共感できる考え方だった。それは“必ずしも俺自身が最強である必要性はない”ということだ。

例えば、自分が弱いのであれば強いモノを創造すればいい。それは魔法生物であつたり、それは機械ロボットであつたり、それは武器や兵器であつたり。とにかく様々だ。

例えば、“魔力”や“資源”、そして何よりも大事な“情報”が足りないとするなら外から持つてくればいい。時間を掛けて収集して蓄えればいい。

例えば、“軍”としての戦力が足りないなら創ればいい。機械でも魔法生物でも何でも……だ。そして敵対者よりもより強靱な者を鍛え上げたり、ドーピングしたりと、ね。

これだけあればどんな世界でも一応は簡単に死ぬことは無いだろう。最悪の場合は原作から遠ざかればいい。

……。

……。

さて。この愛らしい女神様（幼女）のことを散々にからかつて楽しめた。……もう……いいかな。うん……。

「あいあい。それじゃ行くでしょうかな」  
「やつと行く気になってくれたですか!? やたーっ!」  
「でもちよつと残念とか思ってるだろ?」  
「そ、それは……その……」  
「くくくつ。いや、言わなくていい。今の態度を見てわかった」  
「あう……」

俺の撫ユツトでハンドる手を嘗めるなよ? ふふふのふ。

最後に女神様（幼女）の頭をひと撫でして“穴”の前に立つ。

「それじゃ、まあ……行つてきます」

「はい! 行つてらっしゃい! ……お兄ちゃん!」

くくくつ…… “お兄ちゃん” ねえ? 女神様（幼女）だと言つのだから君のほうが年上だろうに。いや、こんな可愛い子にそう呼ばれるのは悪い気はしない。……ああ、悪くない。

「つ、くくくつ! じゃあな!」

“穴”に飛び込んだ……。意識が遠くなる……。

父さん…母さん…。妹みたいな存在ができたよ……。あの世界も存外に悪いものじゃなかったな……。うん。悪くない……。

……。

……。

彼が飛び降りたことで役目を終えた“穴”は塞がった。

「まったく……あの人も困ったものですよお」

私は“穴”のあった場所を見て思う。

ここまでバカに？コケに？ううん？違う？可愛がる？そう、可愛がられたのは初めてでしたですよ。

「困った、人ですよお……」

本当に困った人なのですよ。こんなに楽しかったのは実に数億年ぶりなのですよ……。少し……本当に少しだけですけど物足りないと思ってしまうじゃないですか……。

どうしてくれるんですか……あの人は、もう……。

あ、そうだ……。

「私を困らせたのですから……」

これくらいはいいですよねえ……。にゅふふ。

「楽しんでくださいですよお。私の勝手な願いですけどねえ……」

これはほんのお返し。小さな八つ当たり。私の勝手な……願い（思い）ですよ。

「貴方と貴方の周りに幸あれ、ですよお」

貴方は男性なんですから“綺麗な女の子に囲まれば幸せ”です

よね！仮にも女神の祝福なのですから幸せになりやがれですよ！  
の、呪いじゃないですよ？本当なんですよ？ちょっと時代間  
違えたりしましたけどそれはちょっとした意趣返しなのですよ。  
他意はないのですよお？

にゅふふふふふふ。

……。

……。

「……あ……ああ……んん？」

目が覚めてみれば視界に入るものは木、木木、木木木……。一面  
緑と地面ばかりだ。

「……は……」

ああつと……確かあの“穴”に飛び込んで……願い事して……それから  
意識が遠のいて……そうどこか違う世界に降り立つんだっただな。それ  
でここは……。えーと……？

「マジでどこだ……？」

どこかの森か？森？なんだ？ここは？……もしかしてモンハンの  
世界か？森と丘なのか？ここから見渡す限り木ばかりなんだけど  
……。マジかー……。

ゴゴン……ゴゴン……ゴゴン……

え？なに？何この音は？音が大きくなっている気がする？いや、こっちに近付いているのか？え？近付いている、だと？こっちに？え？

ヤバイ……イヤな予感しかしない……。と思った瞬間。飛び出してきたのは巨大な。

「ガアアアアアアアツ！！！！」  
「なんかデカイの来たーっ！！！！？」

轟音。イキナリ現れたものの正体、それは大きなドラゴンだった……。マジ怖いんですけどねー！！

第零話「プロローグ的な……？」（後書き）

プロローグでした！  
ではでは！

第一話「思い出してみればこんな時代!?!」(前書き)

私にとっては、初ネギま!です。

一応、転生物です。

色々、試したかったです…orz  
更新は追々していきます。

10/20修正。

## 第一話「思い出してみればこんな時代!？」

S i d e 葵

今日も今日とて資金稼ぎのために金塊の練成と、その資金で得た材料や自分達が足を運んだ場所で採取した物を加工、生成して作った魔法薬や魔法アイテムを作って日々を過ごしている。

「主様あ？補充分の魔法薬が完成しましたよあ？」

「ありがとう。それじゃいつもの棚に足りない商品を並べておいて」「わかりましたわあ」

俺のことを主と呼ぶこの子は水の精霊のミリエール。愛称はミリエールです。海のような清廉な青いサラサラなロングヘアの髪とおっとりとした優しい目をした美しい女性の姿をしています。こう見えて彼女上級精霊なんです。精霊には性別はないと言ったことだったんですが、こうして顕現出来る様になってからはこの姿です。

昔はまだちっちゃくて力もそんなに強くなかって言葉も片言だったんですが、今ではとつても賢くて、いろんなことを知っている何かと頼りになる子です。ほとんどオールマイティにこなしてくれるから大変助かっています。

「あるじー？魔法薬の材料、「菜園」から持ってきたよー」

「ご苦労様。それは種類別に調合棚に仕舞っておいてね」

「あい。仕舞っておくねー」

このほのぼのした子はミリーと同じで、風の精霊のウリエール。愛称はウーリ。若草のような優しい緑色の肩まである髪と可愛らしい目が特徴の可愛い子です。彼女も上級精霊なんですよ。

そして、この子はですね？手先が器用なのです。細工が細かい物、例えばアクセサリー系の魔法アイテムなんかの細工をやってくれるんですが…。大変いい仕事してくれるんです！評判もいいです。普通に小物を作らせても出来がいいので女性客には好評です。

好きなことはお昼寝らしいです。たまにお店を休みにした時などに一緒にお昼寝することがあります。その時この子は寝ている俺の胸を枕に寝ています。本人曰くポカポカしていていい気持ちらしいですよ？彼女もミリーと同じでまだ力の弱い下級精霊の時から付き合いです。

「主、「工房」内の鍛冶場の準備が出来ました。いつでも作成可能です」

「ありがとね。それじゃ今夜からでも仕事に取り掛かろうかな…」  
「御意に。その時は私も手伝わせてもらいます」

この仰々しい子は火の精霊のマリエール。愛称はマリー。赤く燃えるような髪とキリッとした目が魅力の上級精霊で、とても義理堅い子です。会話からも分かるかもしれませんが、鍛冶場関係を任せられています。

武器や防具、そして金物まで金属の加工が得意です本当にいい仕事しますよ？この前、家で使っていた包丁が刃こぼれして使い物にならなかつた時にマリーが打ち直して、研いでくれたんですけど…。

切れ味がね？別物なんですよ。信じられますか？切った時に食材

ごまな板も切れちゃったんですよ？慣れないと危なくて使えませんよ…。

昔から精霊さん達が直接作る物は何かしらの加護と言うか力が宿るとは言いますが、包丁はないでしょう？それからは俺が間に入って打ち物を作ってみることにしたんですよ。そしたら直接ではないにしても精霊と協力して作った物です。

大変よく切れます。ですが俺が間に入っているので所謂程よい切れ味と言うやつです。近所の奥様方には大変重宝されていますよ？え？マリー個人で作った物は商品にしないのかって？出来ませんよ。なぜって？危ないからに決まってるじゃないですか…。

表の品としては危なすぎで、とても商品としては出せません。でもですね？裏としてなら…。そう、武器関係です。魔法の武器としてなら問題ありません。切れて当たり前なんですから。

そんなこんなで、ここは俺の店「クレイドル」。錬金術師としての一面を持つ俺と家族だけの城。豊富な魔法薬と魔法アイテムを取り揃えている事が自慢。

魔法関係の品は大体、揃えているつもりです。たとえ今、無い品でも材料さえあれば作ってみせる自信もありますよ？そう、材料さえあれば…。珍しい品になると今では採れない材料を使う物もあるから出来ない物もあるけどね？

いや、昔に散々採りに行ったから今では採れないような材料も在庫はあるにはあるんですけど、今では採れない事もあって材料自体の価値が高騰していて数に限りがあるので滅多な事で使いたくないというのが正直な所だったりします。

まあ、材料に限りがあるとは言っても相当量を確保しているので無くなる事はよっぽどの事が無い限り大丈夫だとは思っけどね？いや、マジで。

飯に無くなったとしても「工房」内に隣接されている「牧場」に色々な貴重種が自然に近い形でそれぞれが生息していますから採れます。これは内緒ですよ？お兄さんとの約束です。

でも、あの頃は無茶しましたあ…。十二分な魔力とか頑丈な不老の身体は貰ったんですけどね？戦うための術が無かったのですよ…。いや、能力はあったんですよ？でも、使い方を知らなかったんです…。死ぬかと思いました…。

分かりますか？目の前にですね。西洋物語に出てくるようなドラゴンが居たんですよ…。ええ、ホントに死ぬかと思いました。形振り構わずに全力疾走で逃げましたよ。

何とか逃げ切ったんですが、こちらの世界に来たときは戦う以前に生活基盤となる物も何も無かったものですから動き回った所為かお腹が空いてしまつて餓死してしまうかと思いましたがからね…。

それも今ではいい思い出ですよ？家族とも言えるような存在、精霊の彼女達と出会うことが出来て今ではこうしてお店を開いて、そこそ楽しく過ごすことが出来ているのですから。あ。あとですね。剣の九十九神つくもがみが二柱と、契約した悪魔が三体居ます。

九十九神の方は、今は顕現して人の姿になって「工房」内の管理をしています。主にですね。隣接してある「菜園」内の薬草栽培の為の畑や「牧場」内で飼育している生き物の世話をしてもらって

ます。九十九神の彼女達は。

ん？ええ、彼女達ですよ。実は顕現した姿は美しいお姉さん達でした。姉妹ですよ？お姉さんの方は眩しいほどに綺麗な白い髪と鋭い目をした仕事の出来る女性といった感じです。名前は陽ハオです。

妹さんは姉とは逆で艶やかな黒髪とお姉さんに似た鋭い眼をしています。名前は月ユエです。二人とも目は鋭いのですが、その瞳には慈愛に満ちた優しさが見て取れます。俺は、この二人の瞳が好きです。綺麗ですから。

この二人とは彼是六百年近くの付き合いになりますね。精霊の子達、ミリー達と出会ってから百年してから精霊さん達の協力の元、作ったのが方手持ちで片刃の少し反りの入った二振りの剣。突く事よりも斬る事に重点を置いた剣。

この姉妹刀「陽月ようげつ」は、当時マリーだけの力では足りないのもあってミリーやウーリの力、そして俺の魔力を注ぎに注いで作られた特別製。ちよつとやそつとじゃ刃毀れどころか切れ味一つ落ちることとは無い。

それでも手入れは確りやりましたよ？じゃないと折角作った武器に申し訳が立ちませんからね。

そうして完成した二振りを大事に使っていたらですね？九十九年経った次の年、百年目になるうかという夜の時にどこからか声が聞こえてきたのですよ。最初は空耳だと思ったのです。

そしていつも通りに剣の手入れをしようとしたら、突然二振りの剣が光ったと思ったら、そこには美しい白と黒の姉さん達が剣の変

わりに居たものですから何が何やら分からなくて初めのうちは混乱しましたよ。

でも彼女達の話しを聞いて納得できました。自分達のことを九十九年間、大事に使ってくれたことが、とても嬉しかったらしいです。そして穢れることなくいられたことを感謝して、これからもより一層俺の力になってくれるそうです。

大体は傷つけた相手の血を浴び過ぎることで嫌われて朽ち果てるのが多いそうです。俺？そんなことしませんよ？自分の為に作った大切な武器ですから嫌ったりなんかしません。

それで彼女達が九十九神として顕現出来る様になってから、しばらくして錬金術に必要な材料を狩りに行ったのです。

その時に使った陽月の切れ味が…。異常でした。斬った感覚がです。ね？気も通してないのに殆んど、しないんですよ？今まで気を通してても多少なりとも突っ掛かる様な感覚があったのに、熱した金属でバターを斬るように手応えというものがすごく軽いんです。

因みにですね。彼女達は自分達で自律して戦うことも出来るみたい。です。それぞれが自身の魔力で複製を作り出して、それを自ら振るって戦うんです。剣の九十九神だけに、その剣舞は見事な物です。

ですが、相手からしたら悪夢でしょうね…。信じられますか？複製ということとは魔力が続く限り、幾つでも作り出せるんですよ？あの切れ味のものがブーメランのように何十、何百、何千と白と黒の剣が飛んでくるんです…。並大抵の魔法障壁なんて物の役にも立ちませんか？

阿鼻叫喚物でした……。

俺が魔力を込めただけあって上限が高いこと高いこと。今度魔力を込めて武器を作る機会があったら少し自重しようとか心から誓いました。

それにしても、ただの剣であつた頃から言えばそれなりに長い付き合いですよ。顕現できるようになってから五百年近く。合わせて六百年……。訂正します。それなりではなく、精霊さん達もですが九十九神の彼女達とも結構長い付き合いです。

そして契約している三体の悪魔なんです。今顕現はしていません。なぜかと言うとこちらの世界に呼び出された悪魔では長くこちらに居られないからのようです。どんなに長くても一週間くらいしかもちません。

「工房」内のように魔力で満たされた空間ならそれなりに長く居られるようですが、それでも二週間ほどで戻らなくてはならないようです。精霊さん達と違って長く居られないことに不満のようです。

よく三体のリーダー的な位置にある大剣を持った悪魔が、そこぼしてました。寂しいのですね？わかります。俺も精霊さん達や九十九神達が居なかつたらと思うと寂しくて泣いてしまひそうです……。家族は大切にしたいですよ？

そうそう。悪魔達の名前なんです。が当時は下級悪魔だったこともあり名前がありませんでした。まあ、その点は精霊さん達も変わりませんが。九十九神達ですか？あの子達は初めから俺が名前をつけていましたから違いますよ？

名前が無いうちは意識が希薄らしいです。名前を得るとそれを起点にして自意識のような物が確立されるようです。今では名前を得たことで魂の成長とでも言えはいいのかな？

倒した敵の魂や魔力、そして俺の血を触媒にした霊薬を食べることで成長して爵位こそ無いものの今では公爵級までの力を得ています。

霊薬に関しては精霊さん達も食べることが出来ます。でも、精霊さんはそのままでは吸収することは出来ません。相性のようなものが悪いそうです。

そこでその霊薬を更に浄化して純粋な魔力に変えます。これで、やっと精霊さん達のご飯になります。沢山食べて上級精霊です。育てた者としては大変嬉しいです。

話がそれました。

悪魔達のことですね。そうです。力に関しては出会ってから百年かけて公爵級まで育てることが出来ました。そう、力に関しては、です。正直やり過ぎました…。知らなかったのです…。本来であれば自然に何百年とゆっくり時間をかけて悪魔としての等級が上がっていくのですが…。

俺がしたことは言ってしまえばドーピングです。急激な力の増長は本来なら悪魔達の魂自体が崩壊して消滅してもおかしくないらしいです。

でも俺と契約によるパスが繋がっていたんですが、その恩恵と言うのはおかしいけど、その所為で悪魔達の魂が強化、補正されて、

より契約者である俺に適した形に魂という名の器を変形、拡張させたようなのです。

この身と魔力は神様に与えられた物ですから他への影響も計り知れない物だったようです。それでも爵位はもらえないみたいですし、力だけです、はい。

それで彼女達の名前なんですけど…。なんですか？…ええ、またですよ？いいじゃないですか？女の子で。可愛いですよ？

それで名前なんですけど立派な角を左右から生やして女王様然とした女性型の悪魔にリビエラという名前にしました。彼女は格好こそ女王様みたいですが、とても礼儀正しい悪魔です。…なんでそんな格好してるのか不思議なくらいに。

戦闘では後衛からの大規模殲滅魔法を得意としています。初めて強くなった力を使った時なんか、危うく俺ごと殲滅されそうになりましたよ？掠りました。…死ぬかと思いました。まあ、彼女も悪気があった訳じゃなかったみたいです。

その後に誠心誠意謝罪してきましたから。あの時、涙目の彼女を見てちよつと可愛いと思ってしまった自分は悪くないと思いたいです…。

そんな彼女ですが今では後衛に限ればほぼ万能と言っていいほどの実力です。大雑把な殲滅魔法だけじゃなくて、的確に敵の隙間を縫うようにして精密狙撃をして敵の頭をつぶすのです。

すごくないですか？誘導性の魔法とは言え隙間なんてどこにあるの？と言うような状況なのに必殺必中ですよ？狙われたら最後逃げ

られません。

そして二体目の悪魔なんです。大きな黒い翼に鋭い角を左右から生やした勝気そうな女の子です。この子の名前はオリビアにしました。彼女は勝気な性格をしているのですが、実はなかなか家庭的で炊事洗濯、更には料理までこなす家庭的な子なのです。

格好が動きやすさを重視しているようで結構薄着で際どいのが、見ているこちらとしては恥ずかしくなったりしています。彼女はその勝気な性格と相まって前衛です。悪魔だけに見た目によらず力が強いです。

公爵級の力がついた時は、やっぱり彼女も悪魔なんですね。とても嬉しそうにしていました。

今の力は大体、公爵級と大公爵級の間くらいでしょうか？何気にすごいです。見た目からは想像も出来ませんよ。それとですね？彼女の使う大剣ですが、実は俺と精霊さん達の作った品だったりします。

家族にはいい品を使ってもらいたいですからね。でも、陽月のことがあるので自重しましたよ？ホントだよ？だって九十九神化してないもん。それ以外は一切自重しなかつたけどね！

最後に三体目の悪魔の女の子は小柄な身体にまるで西洋の兜の様に角を左右から生やして眠そうにしている目元が特徴です。名前はシルビアです。この子、普段は眠そうにしていますが戦闘になった時や仲間が危険になった時は尋常じゃないほどの力を振ります。

正直な話し三体の悪魔の中で力や突破力と言えばこの子が一番だ

と思います。小柄な身に不釣り合いなほどに大きな斧槍、所謂ハルバート（俺と精霊作）を使って向かってくる敵を文字通り木っ端微塵にしてみました。

わかります？敵の身体がブロック塊じゃなくてまるで消滅したかのように粉微塵になっていたんですよ？敵ながら哀れでした…。

おそらくですが近いうちに大公爵級に匹敵するのではないかと思っています。それでもこの子のお昼寝姿は、見ていると癒されますね。これを見ていると戦鬼の様に戦う姿は、とても想像できません。

そんな悪魔達ですが精霊さん達より付き合いは短いです。短いと言っても出会ってから三百年は経っているので、一概にそうとは言えないけどね？思えば俺がこの世界に来てから七百と数十年…。神様、長過ぎです…。原作なんか殆んど忘れてます…。

いくら神様が修行する時間をあげると言ったとは言え原作より八百年も前ってなんですか？苛めですか？最初の百年で原作なんか忘れてしまいましたよ…。辛うじて覚えているのでも何か大きな戦争が魔法界で起きて…。

えーと…。何でしたっけ？

そう！ナギ・スプリングフィールド率いる紅き翼が戦争の黒幕を突き止めて終戦に導いた。で、よかつたんだっけなあ？ダメ…。自信ないわあ。覚えてない…。うんっ、気楽に行こう。考えても思い出せないし。はあ。

まあね？この世界に送ってきたあの神様には感謝していますよ。

こんなに充実した生を謳歌出来るんですから。新しい家族も出て嬉しいですよ？皆、ヒトじゃないとは言え美人さんばかりですし。まあそもそも俺はそんな細かいことは気にもしないけどね。可愛かったり、美人さんだったりすれば文句なんかありませんよ。と言うより大満足ですね。

このまま面白おかしく過ごせればいいですね。でも、ここまで戦力を充実したなら少しは原作に介入して、それを特等席にて見てみたいものですね。

あれ？そういえば今は何年なのでしょう？

80年???

え？19

アレレー？うる覚えだけでもう何年かしたら戦争じゃない？…っ  
！…どうしよう！？戦力は用意したけど原作介入の準備は何もして  
ないよ！？ふう…。落ち着け俺。こういう時は羊を数えるんだ…。

羊が一匹…羊が二匹…羊が…って！これじゃ眠くなるわ！ん？い  
や、完璧だ…。気持ちには落ち着いているじゃないか…。

ふう…。うん、よく考えれば戦力があれば介入できる、よな？寧  
ろナギ達以上の戦力じゃないか？水、風、火の上級精霊さん達に三  
体の上級悪魔達、それも力だけを見たら公爵級。おまけに九十九神  
が二柱、この二人も九十九神とは思えないほどの性能だよな。

十分じゃないか。介入の用意？いらんだろう。一応この店自体を  
影に沈めれば移動も容易いし。アレ？準備いらないじゃん。直ぐに  
でも出発できるよ。よしっ！魔法界に行くか！早速皆に話して移動  
の準備してもらわなくちゃ。今までお世話になったご近所の人とか  
にも挨拶しなくちゃなあ。

ああ、そういえばマリーに鍛冶場の準備させてたなあ。今夜かあ。  
…うんっ、中止しよう！行くのは一週間後にしよう。…ん？なにか  
言いたいことでも？…いいんですよ。正直、戦争なんかよりも家族  
との触れ合いのほうが大事なんですから。

…なに？家族なんかほつとけ？そんなこと言う人は…シネバイイ  
ノニ。…ハッ！？何か黒い物がまとわりついたような感じがしたの  
ですが…。気のせい、ですね。

そうと決まれば早速行動です。皆に一週間後にはここを発つこと  
を伝えなくては！皆とは契約やな何やらで離れていても念話で事足

りるのですが、やはり、直ぐ側に居るのだから直接話したいじゃないですか？それでは…。

「皆々。お話ししておきたいことがあるから集まって〜」

「主様あ、どうかしましたのぉ？」

「あるじー、どうしたのー？」

「主、話しとは何でありましょうや？」

俺が呼んだら直ぐに答えて来てくれました。やっぱりこの子達はいい子です。嫁にはやりませんともっ！…話しが逸れました。あまりの嬉しさに、つい…。いけませんなあ。…歳でも取ったかな？いや、関係ないかな？だって俺、不老だし？あ、でも、魂は元はただの人間だしなあ。

神様に改造されても精神までは違うのかな？魂が磨耗してる？いやいやいや、大丈夫。俺、正常ですよ？ホントだよ？だって肉体的には歳なんて取らないからね。精神は肉体に引っ張られるとも言っし大丈夫でしょ！

「主？先程から黙ってどうされたのですか？話しがあるのでは？」

「むっ？」

…いけません。つい、思考が別のところに行ってしまったようです。この子達に心配されてしまいました。マリー、ありがとう。意識が戻りました。そうです。一週間後にここを発って魔法界に行くことを伝えるために集まってもらったのでした。早速伝えなくては。

「ごめんね、マリー。ついつい、考え事していたら、それにのめり込んでしまったよ」

「そうだったのですか？呼ばれて来てみたら深刻な顔をして黙って

おられるから心配してしまいました」

「大丈夫、心配ないよ？俺は昔も今も元氣だからね。皆も居るんだし。それで伝えたいことがあるんだけど…」

皆に、これから準備して一週間後に魔法界に行くことを伝えていきます。話し終わると皆、突然のことに驚いていますですが文句は出ませんでした。今から準備してくれませう。そんな中でマリーに声をかけました。

「なにか？主」

鍛冶場での予定をキャンセルされたと思い怒っているのでしょうか？言葉がいつもより硬い感じがします。：俺、泣きそうですよ？誤解なんですよ？予定通りに仕事にはかかります。家族との約束は大切にしたいですからね。そのことをマリーに伝えると彼女は実に嬉しそうにしています。

「御意です 主。：お待ちしておりますね？」

なんて言っただけでスキップしながら鍛冶場のある「工房」内に向かいました。いつに無くご機嫌ですね。家族達が嬉しそうにしていると俺も嬉しくなります。今夜は張り切っとうと思ひます。：仕事をですよ？勘違いしてはダメです。そんな人には神様の罰が当たればいいのです。

俺もここを発つ前にお世話になったご近所の人達に今からご挨拶してきましようかね。人付き合いは大事です。仲良くしなくてはいいけません。

それでも生理的に受け付けられない人も稀にはありますが居ますけ

どね？そういつ点を見ると俺はまだまだ商売人としては未熟なものがありますね。反省です。それでも仕事以外で付き合いたいとは微塵も思いませんけどね。

店を出て考えながら歩いていたら着きました。俺の目の前にはごく一般的な家屋が建っています。表札には「一ノ宮」とあります。これから分かるように俺達は今日日本に居ます。

結局何百年経とうと自分が育った国の空気は魂が覚えているように昭和の時代後半になってからこちらの日本に来てしまいました。

味噌汁最高！温泉大好き！緑茶持ってこいやあ！な俺ですからこの地は、やはり落ち着きます。たとえこの日本に俺が生まれ育った地が無いとしても、この雰囲気は変わることはありません。

おっと。そんなことを人様の家の前で考えてたら変質者と間違われてしまいます。まあ、この辺りの人達とは、殆んど知り合いなので、そんなことはまず無いですけどね？ともかく挨拶しなければ。表札近くのインターフォンを押してしばらく待つと、この家の人が出てきました。

「こんにちは、葵君。今日はどうしたの？こんな時間に」

「こんにちは、碧さん。今日はお別れのご挨拶にお伺いしました」

「...はい?？」

おお。碧さん、驚いています。目なんかまん丸にして。この人は一ノ宮・碧さん。二年前にお店の近くのここに引っ越してきた夫婦です。碧さんは主婦です。旦那さんはシステムエンジニアをしていると聞いたことがあります。

「ご近所では一番付き合いが深いと思ったのでここだけは挨拶しておきたかったのです。はい。それと碧さんが言った葵という名前が俺の名前だったりします。本名九重・葵くぐみ・あおいです。何気にここまで俺の名前出てきてくない？」

……ちよつと凹んでたのは秘密です。

碧さんがまだ固まっています。まあ、まだ日の高いうちから俺がお店をほったらかしてここに居るんですから吃驚しているのもあるんでしょうがね。

あ、因みですが表のお店は喫茶店兼プチ雑貨屋という感じでやっています。表の方もそこそこに繁盛してますよ？ケーキセットが人気です。プチ雑貨は小物関係とたまにですが金物なんかもですね。小物関係はお茶をしながら選べるので女性に好評をいただいています。

「あの、お別れってどういうこと？…お店が潰れちゃうって事！？あたしの所為？あたしが毎日、デザートのカキをただで食べてた所為で潰れちゃうの？ねえ！？」

碧さん、痛いです。襟元掴まないでください…。きまっています！いい感じに氣道がきまっています…。ああ、ダメ。そんな勢いよく振らないで…。振らないでください…。気持ち悪いです…。うぶっ。

「碧さん、落ち着いてみようか？ね？お願いだから襟を掴んでる手を離して。それとそんな前後に振らないで。切実にお願ひします…」  
「???ああっ！ごめん！苦しかったよね？ごめんね？」

碧さん…。貴女はこんなにいい腕を持っていたのですね？女子プ

ロレスならベルトとる事も出来るんじゃないですか？魔力や気で強化していなかったとは言え…。油断しました…。

「けほつけほつ…。いえ、俺なら大丈夫ですよ。碧さん、落ち着きましたね？それとケーキの代金なら貴女の旦那さんが週毎に払ってくれていますから大丈夫です。お店も潰れるわけじゃなくて引越すだけですから問題ありません」

「あ、そうなんだ…。よかつた…。…って！！あの人にケーキのとバレてたの！？」

ええ、そうなんですよ。旦那さん、知っていました。「どうやって知ったのですか？」と聞いたところによると「勘ですね」「って右手人差し指を立てて笑いながら言っていました。勘ですか？これが夫婦の絆というものなんでしょうか？素晴らしいです。ある意味理想の夫婦ですね。

「大分前から知っていたみたいですよ？いつだったか「碧のことは俺が一番知ってるからね」って笑いながらこぼしていましたから」「いやん 流石あたしのだ・ん・な・さ・ま ふふふ」

いやん、って…。碧さん…。相変わらずラブラブですね？終いは砂、吐きそうです…。でも、しません。なんだかんだ言っても俺はこの夫妻を気に入っていますから。見ていて飽きませんからね。

「…いつまで経っても新婚さん気分ですね。いいことなんでしょうけど。独身には堪えますね…」

「うふふ、当たり前よ」。ああ、そうじゃなかった。引越しだっけ？人手が足りないなら手伝おっか？昼間は家のお掃除が終わると暇だし」

残念。荷物は手持ちの最低限の物があれば、あとは影に沈めるだけですから。正直な話し「荷造り？何それ？美味しいの？」ってな具合です。やるうと思えば今すぐにも発てますよ。でも、今回はしません。今夜はマリィと約束がありますからね。何度も言いませうけど仕事ですからね？

「ありがとうございます。でも、それは大丈夫です。荷物は殆んどまとめてありますから、あとは簡単な手続きだけです」

「…相変わらず、仕事速いね。葵君は」

「それ程でもありませんよ？それじゃ今までお世話になりました。これからお元気で」

「あいあい。…ん？あたしの方がお世話になつてた気がするけど。」

「…まあいいや。新天地でも元気でね？身体には気を付けるんだよ？」

「はい、ありがとうございます。それでは…」

さて、とりあえず今日一日はがんばって。明日からお店を閉めるために張り紙しておかないと。ああ、それと一応だけど手荷物ぐらいはまとめておかないと。なんだかマリィがやっついてくれそうな気がしたけど……。

気のせいかな？もしそうなら、今度まとめてお礼とかしようかな。そうこうしている内に着いたみたいです。中に入りますか。

カランコロン。

「いらっしやいませえ。あらあ？主様でしたかあ。お帰りなさい」「ただいま、マリィ。変わりありませんか？」

店番はマリィだけのようですね。他の二人は「工房」でしょうか？今回のついでに掃除と整理でもしているのでしょうか。よく出来

た子達で俺も嬉しい限りです。店の中はお客様のピークが過ぎていたために誰も居ません。

「ん〜。ないですねえ。いつも通りでしたわあ」

「そう。それじゃ俺は簡単に手荷物まとめてくるからしばらくお店の方はお願いね？」

忙しくないうちに手早くて荷物をまとめておきましょう。早いうちにおけば、いざという時に慌てることもありませんからね。まとめている間はミリーにお店を任せます。がんばってくださいね？

「はい。でもあ…」

「ん？なに？」

「いええ。荷物なら主様が出掛けておられる間にまとめておきましたよあ？」

「…それはミリーがですか？」

「はい。ご迷惑でしたかあ？」

予想通りです。本当によく気の付く子に育ってくれて俺は嬉しいです。でも、ホントに何かお礼を考えておいたほうがいいかもしれませんね。がんばる子にはご褒美がなければいけません。

「いやいや。ありがとう、ミリー。手間が省けました」

「どういたしましてえ。でも、気になさらなくてもよろしいのですよあ？気付いたからしたまでですからあ。」

「それでも感謝してますよ。俺には勿体無いぐらい出来た子だから

本当に良く出来た子達です。何処に出しても恥ずかしくありません。俺の自慢です。でも、時々不安になる事があります。皆、いつか俺から離れていくのでは？と…。

皆は、そんなこと万に一つもありえない！と笑いながら言い切ります。実際今までその通りだったのですが。それでも。分かっていても、フとした時に不安になる時があります。度し難いほどの臆病者です…。

「そんなことありませんよお？わたし…わたし達はあ、主様だから一緒に居たいのですからあ。…それに他の方はちょっとご遠慮したいですねえ」

「ありがとう、ミリー。詰まらない事を言ってしまったようです。反省ですね」

「そうですね？わたし達が主様をおいて行く訳が無いですわあ。いつまでも一緒ですよお？」

やっぱりミリーはミリーですね。…皆の、この言葉を聞くたびに俺は安堵します。

「そうですね。よろしくお願いしますね？ミリー」

「はいい いつまで一緒です」

本当に詰まらない事を言っしまいました。ミリーには感謝です。さて、ミリーと話していたら、いつの間にか日が沈んできました。そろそろお店を閉めますか。ああ、ついでに閉店することを知らせる張り紙もおかなければなりませんね。

それが終わったらマリーのところに行きましょう。いや、その前に夕食ですね。お腹、空きました。何にしましょうか？鍛冶場仕事ですからガッツリ食べたいですね。焼肉にしましょうか？出立祝いもかねてちょっと豪華にしてみますか。

そうなると悪魔の三人娘も呼ばなくてははいけません。精霊さん達は人間のように食事は出来ませんから。その点、悪魔の彼女達はお酒も飲むしご飯も食べられます。

九十九神の八才とユエは精霊さん達と同じで食べることはありません。食べれないことは無いようですが意味が無いそうです。それでも食卓には呼びたいです。食べなくても大勢で居れば楽しいですから。

その日の夕食はとても賑やかに行われました。飲めや歌えやのお祭り騒ぎです。

リビエラが持って来た向こうの世界、ここでは仮に魔界としましょう。その魔界のお酒を皆で飲みました。こちらの世界とまた違ったコクがありました。美味しかったです。

でも、これ飲み易さに騙されてはいけません。アルコール度数がかなり高いみたいです。俺は一杯飲んで顔が真っ赤になりました。

これは、うる覚えなんです。俺の左右に居た八才とユエに抱きついたりしような気がします。その時の二人は「わ！我が君！？お戯れを！？」などと慌てていたと思うんだけど。自信がありません。でも、気が付いた時に見た彼女達は俺と視線を合わせないようにはしてました。

顔が赤いのが気になったけど、それよりも気になったのがあります。…彼女達に俺は嫌われたのでしょうか？抱きつき魔な主は嫌だ、と思われたのでしょうか？どうしよう？…マジで泣きそうです。

でも、その後で誤解であることが分かって安心しました。二人と

もただ恥ずかしくて照れていただけみたいです。普段表情の変化が殆んど無いので悪いとは思ったけど新鮮でした。可愛かったです。

そして約束通りにマリーの待つ「工房」内の鍛冶場に行きました。早速、仕事開始です。物作りは楽しいです。ただの材料から想像もつかない物ができる時などは感動したこともあります。

今では材料によっては何が出来るのかとかは大体予想できるようになりましたから感動は滅多に無いですが作業自体が楽しいのでやめられません。やめるつもりもありませんけどね。

そうこうしている内に完成です。魔法技術を取り入れて作ると時間が短縮できるから嬉しいですね。その技術も精霊のマリーがいるから出来ることなんですよ？仮に時間短縮だけで作ったら性能はガタ落ちです。早くできるだけで中身がスラスカなんです。

そこで精霊さん達です。時間短縮して尚且つ性能も抜群です。強化と補正が掛かるみたいですから素晴らしい品が出来ます。俺も時間さえかければいい品は作れるけど、やっぱり精霊さん達に協力してもらったほうが丈夫に早くできるから、そっちの方がいいです。

何より一緒にするのがいいです。楽しいですからね。

……。

……。

そんなこんなで日は過ぎていっついでいよいよ出発の日になりました。日本から近い魔法界へのゲートがあるのはイギリスのゲートですね。飛んで行ってもいいけど近代化が進むにつれてそれも難しくなっ

きたからね。まあ見つかるようなへまはしないけどね。

ただ長時間の飛行は疲れるしね？イヤなのよ。夜中の海を飛ぶとかロマンチックな気もするけどね。…なに？…それじゃ転移魔法は？出来ますよ。出来るけどさ、それじゃ旅行の楽しさが無いでしょ？考えるまでも無く却下でしょ？ダメ！絶対！

そして俺は今、小さなトランクを一つ持って空港に居ます。飛行機の出発は一時間後です。もう直ぐですね。ん？精霊さん達や皆はどうしたかですか？精霊さん達は姿を透過させてついて来てますよ？悪魔の三人娘はいつも通り顕現していません。

九十九神の二人は影の中の「工房」内に居ますよ。そう、俺は今、一人で居ます。…寂しいです。精霊さんは見えないだけで一緒に居るんですけどね？こう…なんて言うか。うん、気持ち的なものです。

ん？そんなことを考えてたらアナウンスが始まりました。どうやら、時間のようです。

「それじゃ行きますか！」

Side out 葵

第一話「思い出してみればこんな時代!？」（後書き）

どうでしょう!？

ありきたりですかね？

いや、まだプロローグもいいとこなんですがね？

これからですね。ハイ。

感想&アドバイス&参考になりそうな二次物！

あったら何でもお願いしますね!？

第二話「紅き翼との出会いと詠春の回想と」(前書き)

どもども。

更新しました。

楽しんでいただけたら嬉しいです。

では、どうぞ！

10/20修正。

## 第二話「紅き翼との出会いと詠春の回想と」

S i d e 葵

イギリスのゲートから無事に魔法界へと辿り着いた俺は転送施設の受付で預けた手荷物を受け取って外に出た。

んー。懐かしいかな？前にこっちに居たのは百年ぐらい前だった気がする。よしっ！とりあえず適当に宿を確保しよう。移動で疲れだから今日は早めに寝て明日から行動しよう。

……。

一夜明けて翌日。

疲れも行動するのに問題が無いほどに回復したから……。うーむ。何をどうするか……。実際、原作の事なんか結構忘れてる。

とりあえず、戦争が始まるまでは旅でもしようかな？…うん。いいんじゃない？それ。しばらくこっちの方には来てなかったし丁度いいかもしれない。世界中旅すればいつか会えるかもしれないしね？それじゃ、適当に行きますか！

……。

……。

数カ月後…。

ついに戦争が始まった…。

戦争を見るのは初めてじゃないけど、やっぱり見慣れない。人が死ぬ。獣人が死ぬ。召喚された悪魔が掻き消される。魔法が飛び交うのがここでの戦場の風景。血生臭い中にファンタジーが混ざる。

その光景は常人が見れば馬鹿にしているように見えることだろう。でも、ここじゃこれが…。

アタリマエノコト。

俺は今、戦闘が起きているところを割りに近い位置から見ていたりする。

目の前の光景。それを見てみると、とても不毛な物に思えてくる。七百と数十年近く生きると俗世の事は大概がどうでもよくなってくるから不思議。ここ世界に来る前は原作介入だ！ヤッファー！みたいにしていったのになぁ…。

今の俺には力もある。頼りになる仲間達も数百と居る。後は最後のピースが揃えば、まだヤル気が出るんだけどなぁ。結局ね？この時期までナギ達「紅き翼」とは出会えなかったのよ…。

何これ？苛め？神様、ご都合主義はどこにいったの？探せってか？これ以上何処探せってんだよ…。世界中行けるところは行ったよ。これで見つからないって何？今は戦闘のあるところで綱張って待ち構える形なだけどさぁ？

もう旧世界に帰ろうかなー？なんか面倒になってきた…。

「我が君？」

「んー？なに？二人とも。戦闘が終わったのー？」

「ハッ。つい先程ここの戦闘に豪快に乱入した者が居りましたが。アレが我が君の探し人であらせられるか？」

「ん？どんな奴？」

「はい。赤毛の子供。刀を持った男。魔法使いらしい格好の人物。白髪の子供。外見的特徴通りなら間違いなく「紅き翼」ではないかと思われませんが。我が君、いかがなされますか？」

「……………は？」

「紅き翼」キターーーー！！何これ！？散々探し回ってこれ！？俺の時間返せよって感じなんだけど！！…いや、不老だから別に時間はいいんだけどさ？なんて言うの？気持ちの問題？っていう奴だよ！ハア…。馬鹿らしい。そんじゃ行きますか！

「ハオ。ユエ。行くぞ？愚かな者共に本物の蹂躪とはどういうものか教授してやれ」

「承知。吾等の全てを持って教えてやりましょうぞ！」

さて！一丁ヤツたりますか！

Side out 葵

Side ナギ

連合軍の援軍要請が来たから駆けつけたけどよう。なんでここまでボロボロにやられてんだよ？情けねえなあ…。

「おいっ！ナギツ！一人で突っ込むな！とあれほど言っただろうが！？なに早速約束破ってんだ！このバカッ！」

「あー！詠春！うっせ！うっせ！いいんだよ！そのお陰で助かった味方も居るだろうが！？」

「あっ！？こら！ナギ！待て！」

俺は更にスピードを上げて詠春を引き離れた。なんだよ…。そんなに怒鳴んなくてもいいじゃねえかよ。早く着けばそれだけ沢山の味方が助かるんだからいいじゃねえか！まったくよお！

「ふふふ。ナギは相変わらずですねえ。そのバカなところが、この突破力を持つんですから興味深いですね…」

「こやつは、昔からバカなんじゃよ。呪文一つ教えても本人に覚える気なんぞさっぱり有りはせん。すぐにあんちよに頼るのだから儂の手には負えんよ」

「アルも師匠も！うっせ！うっせ！黙って敵を倒しやがれ！！」

まったくよお。詠春だけじゃなくて今度はアルと師匠まで俺のこゝとバカバカ言いやがって！この戦闘が終わったらぜってー×る！！よっしやー！まだまだ敵は居るんだ！ジツとしてたら殺られるのはこっちだ。大呪文の魔法で一氣にやってやらあああ！！

「とりあえず呪文が分からんからあんちよこを見てっ…。よしっ！これだ！…来たれ雷精！風の精！雷を纏いて！吹きすさべ！南洋の嵐！食らいやがれ！雷のぼっ！？なんだ！？」

シユンシユンシユン……。シユンシユンシユン……。シユンシユンシユンシユン……。

鋭く風を切る音が聞こえる……。

ザクツ！ザンツ！グサツ！……。ザクツ！ザンツ！グサツ！……。

音の正体は無数に飛び交う白と黒の剣……。

ぎゃ！？なんだ！これは！？

た！助けっ！？ぎゃあああああ！！？？

腕が！！俺の腕が！！！？？グフツ！！？

じ！陣形を整えろ！！防御を！障壁を展開するんだ！！ぐはっ

！！？？？

死にたくねえ……！死にたくねえよおおお！！！！

撤退だ！撤退しろ！！撤たっ！ぎゃあああ！？足が！？俺の足が無い！！！！！！！！！！

出来上がる剣の墓標と重軽傷者、死者の山……。

呪文を完全に発動させる前に何百、何千、何万という大量の黒と白の剣が帝国軍目掛けて降り注いで次々と戦闘不能にさせていく。

一瞬でここは阿鼻叫喚の地獄のようになっていた。俺は…俺達」

紅き翼」は見ていた。

一撃で死ねなかつた者も手が足またはその両方を切り取られたかのように無くなつていた。もちろん、その間も帝国軍の奴らも抵抗しなかつたわけじゃない。集団で固まつて障壁を全体に展開して防ごうとしていた。

だが、その障壁も、この剣雨の中では余りにも無意味だつた…。障壁は紙同然と言わんばかりに切り裂かれ貫通して帝国軍の奴らを壊滅へと押しやった。

「もう、終わりか？帝国軍とは存外に脆いのだな。…皆殺しにするべく追うか？」

「姉上。そう言うでない。我が君は本来無益な殺生は好まぬお方だ。退くのなら追う必要な無い」

帝国軍が撤退していくそんな時、土煙の向こうから姿を現せた白と黒の二人の女の声が聞こえた。

Side out ナギ

Side 葵

「もう、終わりか？帝国軍は存外に脆いのだな…。皆殺しにするべく追うか？」

「姉上、そう言うでない。我が君は本来無益な殺生は好まぬお方だ。

引くのなら追う必要は無い」

後からゆっくり来たら既に戦闘は終わっていた。

二人が展開した白と黒の剣がこちらに刺さっていたが、それもやがては空間に溶けるようにして消えてなくなった。残るのは無傷とは言えないけど連合軍の生き残った兵士達と僅かな帝国軍の捕虜達。そしてこちらを警戒の眼差しで見つめてくる「紅き翼」の者達だけだ。

……まあ突然こんなことされたら警戒するよね？

やがて、警戒しながらだが赤毛の少年 ナギだと思っただけだがこちらに近づいて来た。その後続くようにして「紅き翼」のメンバーも近づいてくる。

パツと見、気付かないがナギ以外のメンバーは何かあればいつでも仕掛けられるように俺たちの周りを半円形に展開している。ハア……。こうやって警戒されたくないから戦争前に接触したかったのに……。神様のバカ……。

「おい！お前何者だ！？」

ああ、ナギがいい感じに警戒してるよ……。ハア……。あ？なんだか最近溜め息増えたな。やだなあ。幸せ逃げちゃうじゃん。もう……。

「黙れ！下郎が！我が君に何という口の聞き方か！？」

おお。少し現実逃避してたら、なんか知らんが八才がナギにすごい喧嘩腰なんですが！？どういうこと！？

「姉上、落ち着け。我が君はそのような些事では怒りはせぬだろう？」

「だがな、ユエ！あの下郎の我が君への言葉遣いはなんだ！？」

ああ、なるほど、ね。八才は俺のために怒ってくれたのね？ううん、やつぱり、いい子達だな。お兄さん嬉しいですよ？でも、ここはマズイから俺が直接話すしかないかな？よしっ！八才を静めて、それから…。えーと…。とりあえず声をかけるところから始めよう！

「八才、ユエ。ここは大丈夫だから少し下がっててくれるか？」

「しかし、我が君！」

「八才、俺は気にしてないから。…お願い、下がってて？」

俺からの説得もありなんとか八才は下がってくれそうです。八才はいい子なのですが、俺の事になると、途端に過保護になる時があります。俺も、もういい歳なだけだなあ…。

「くっ…！承知しました、我が君。…下郎、命拾いしたな？」

「へっ！お前が、だろ？」

「責様っ！？」

「姉上！我が君の命です！ここは下がりますぞ！こっちに來るのです！」

なんだか少し目を離しただけで、また喧嘩になりそうなんだけど…。なにがあった？この数秒の間になにがあった！？ハア…。うん。気を取り直してナギと話すことから始めよう！うん！そうしよう！ハア…。テンション上げてかないと辛いなあ…。

「ごめんね？八才はとてもいい子なんだけど俺の事になると途端に

怒りやすくて…ふう」

「あ？ああ、いや。俺も喧嘩売ったみたいなものだから、別にどうでもいいな。それよりお前は何者なんだよ？帝国軍を倒したって事は連合軍か？」

お？以外にも話しはちゃんと聞いてくれそうだな。うん。まずは自己紹介からだよね？第一印象なんかは、この際無視だ。第二印象からは改善してかないとな。

「挨拶が遅れたな。俺は九重・葵だ。魔法使いで錬金術師をしている。後ろの二人は白いのがハオで、もう一人がその妹のユエ。彼女達は、んー？…相棒、だな。うん。俺の右腕と左腕だ。所属は今のところ無所属だ。そちらは？」

「へっ！俺はナギ・スプリングフィールド！連合軍に味方してる。そして俺は最強の魔法使いだ！」

「まだ、誰もそんなこと言ってないだろうが…」

「そこ！詠春、てめえ！聞こえてっぞ！？それにこれから証明してくからいいんだよ！そんな細かいことは！」

なんだか、目の前でコント的な何かを展開されているのですが…。でも、この時期のナギってまだ「千の呪文サウザンド・マスタの男」とは言われて無いのな？ああ、アレか？まだ戦争始まったばかりだから異名を付けられるほど有名じゃないとか、か？

「やはり、ナギはバカですね。実にいいですよ」

「このバカ弟子が…」

なんだか他のメンバーもナギのことバカにしてるんですけど？ここまで扱き下ろされるナギって、…ナニ？流石に可哀想になってきたから大丈夫か聞いてみようかな？うん。

「ナギ…。大丈夫か？お前、あんなこと言われてるけどいいのか？」  
「アオイ…。お前いい奴だな…。大丈夫だ！あいつ等は後で×るこ  
とが決定してるからな！そんなことよりもよ！アオイ達は無所属な  
んだよな！？」

「あ、ああ。そうだけどそれが何？」

さっきまでメンバーにバカにされて仲間を追い掛け回して疲れて  
いたのに…。変わり身早いな…。

こいつはアレか？バカなのか？バカだから元気いっぱいなのか？  
いや、よく観察してみたら「紅き翼」の連中もナギのことをバカに  
しているようで、実際は楽しんでるな。うん。

ナギも怒ってる様で楽しんでるな。いや、アレは素で怒って楽し  
んでるのか？バカは難しいな…。何を考えてるのか想像も出来ない。

「俺達の仲間にならないか！？お前達が入ってくれたら「紅き翼」  
はもっと強くなる！いいだろ！？いいな！？いいって言え！コラッ  
！！」

「ナギ！落ち着いて！そんなに凄まないでいいから！入る！入るか  
ら！！」

アレレ？心の中でナギとバカと「紅き翼」の考察をしている間  
になんだか仲間になることが決まっちゃいましたよ？

…何時そこまでの好感度が上がった？アレか？強い奴なら歓迎だ  
！っていう単純な判断なのか？…大丈夫かな、「紅き翼」…。あと  
ナギ！いい加減、首から手を離せて！微妙に絞まってるんだよ！

「よし！これでアオイ達は俺達「紅き翼」の正式な仲間だ！アル！お前らも自己紹介しとけよ！」

「こほつ、こほつ…。まったく、もつ…」

苦しかったなあ、もう…。んー？おう！？俺の後ろで八才が今すぐ殺さんばかりの目でナギのことを睨んでらっしゃる！？

ああ、ユエ！八才のこと抑えてて！落ち着いて！八才！俺なら大丈夫だから！あとで一身体（剣）のお手入れしてあげるから！ねっ！？あつ、一瞬勢いが弱まりましたよ！チャンスですね？分かります！八才、ここで落ち着いてくれたら頭、撫でてあげます。ダメですか？

…やっと、落ち着いてくれましたよ？済し崩し的にユエも撫でることになりましたが構いません。今回の功労者ですから。ご褒美になるか分かりませんが精一杯撫でてあげましょう！ハア…。…疲れた。

「まったく、ナギの奴も強引で困った者だ…。俺は近衛・詠春。神鳴流剣士だ。こんなところで同郷の者に会えるとは嬉しいものだな。これからよろしく頼む」

「うん。よろしくね。…なんだか、詠春とは気が合いそうだよ」

詠春とは、いい友達になれそうです。主に苦労性としてですが…。それでも同郷の者同士というのもありますけどね？お味噌汁に白いご飯が今、無性に食べたくなりました…。後で「工房」内から食材持ってきて皆で食べよう。

「私はアルビレオ・イマ。重力魔法を使います。これからお願いしますね？…そう、色々と、ね？」

「僕はゼクト。あのバカの師匠をしておる。これからよろしく頼むぞ？アオイ」

「うん？二人ともよろしくね」

重力魔法ですか？あれって便利ですよね？金属の合成とか。俺個人でやる場合、重力下では金属の比重の問題で混ざり難い物もありますから。

え？精霊さん？彼女達がいるなら簡単ですよ。不思議なくらいアツサリ混ざります。最初コレを見たとき、俺の努力つてナニ？つて三日ほど落ち込みました…。皆が慰めてくれなかつたら一週間は落ち込んでましたね。

ゼクトさん？ゴメンナサイ…。記憶の薄れた俺には貴方のことが思い出せません…。でも、会ってみるといい人そうです。なんだかんだ言っても手を貸してくれそうな雰囲気がありますね。だからバカの師匠もしていただけるのだろうか…。

そういえばこのメンバーが揃ってるって事はオスティアが解放されたって事だよな？確かそんな情報もあつたしなあ。ん？という事は近いうちにもう一人の筋肉バカが来るんだっけ？

ああ、印象的な事は断片的には思い出すんだけど繋がらないな。どうしてくれようか？とりあえずバカが増える前にナギで慣れるようにしよう。慣れたくないけど、仕方ない…。俺の精神の安定のためだ…。

…詠春、今度酒でも飲もう。今のうちに溜め込んでるモノを出しておかないと胃がもたないからね。

Side out 葵

回想…。

Side 詠春

ナギ達の仲間になった葵は共に数々の戦場を駆け巡る事になる。  
例えばこんな戦場を前にしたこんなやりとりの光景なんかを…。

……。

「もう少しで到着だ！行くぞ、野郎共！！帝国の連中を蹴散らして  
やろっぜー！！」

「ナギは相変わらず元気だなあ。なあ詠春？」

「そうだな…。まあバカだからなあ」

葵の言葉に頷く俺だが葵もある意味で言えばバカだと思う。なに  
せ、葵自身も強者である事もあから文句は無いが戦闘は葵個人が  
しなくてもこいつの側にいつも控えるようにしている二人の女性が  
全て終わらせてしまうのだから…。

想像できるか？数秒もしないうちに敵の真上に途方も無い数の白  
と黒の剣が現れて降って来るんだぞ？魔法障壁なんか紙のように切  
れる剣が…。あれはダメだ。防ぐことよりも回避に専念して魔法か、  
それに類するもので逆に吹き飛ばすでもしなければ無理。

飯にそれを抜けたとしても回避した目の前には姉妹ならではの連携抜群の接近戦で仕留められてしまう。初めて観察した時はホントに苛めかと思つた…。分かるか？敵なのに同情したんだぞ？實際冷や汗より涙が出てきたよ…。

「アオイ！詠春！聞こえてるぞ！後でやるから、覚えとけよ！？」

「ほう…小童こわっば、毎度の事ながらよく吠えたな？我が君に挑みたくば…。まず、私を倒すのだな」

「姉上、私も加勢するぞ。ふふ、我が君には指一本触れさせはせぬよ」

「ハオ、落ち着いて…。ユエも、ね？いつものことなんだから」

「葵は相変わらず愛されてるな？」

「うん。俺も嬉しい限りだよ。（ボソツ）度が過ぎなければね…」

「アハハハ…ハア…」

葵が最後に呟いた言葉が聞こえてきて俺は苦笑する事しか出来なかった。いや、ホントに彼女達、ハオさんとユエさんは葵のことになると途端に過保護になるんだ。妹のユエさんはまだマシだけど。姉のハオさんは…。スゴイ…。その一言に尽きる。

この前、戦闘が起きた時の話しなんだが…。まあ簡単に言っしまえば撤退する連合軍の殿を任されたんだ。その戦闘で葵の着ている服に傷をつけた敵バカが居たんだよ。傷と言っても少しだぞ？小指ほどのな。でもな？そのことに我慢できないお方が居たんだよ…。

そう、ハオさんだ。

信じられるか？撤退戦だぞ？混戦に次ぐ混戦で乱戦状態にあつたのに戦場全体がハオさんの溢れ出る殺気で止まったんだよ…。敵も味方も、な。もちろん俺達「紅き翼」もだ。

その後は思い出したくも無い。地獄と言うのも生温いと言わんばかりの光景が…。あ、ダメ。思い出しそう…。マジで勘弁だわ…。

「ハオ、ユエ。今回は俺も前に出るから戻ってくれる？」

「なんと！？我等を使つてくださると！？」

「姉上…。興奮し過ぎだ。よろしいので、我が君？」

「うん、大丈夫。それにたまには動かないと勘が鈍るからね」

葵が珍しく前に出て戦うらしい。お前…。やめるよな…。下手したらあの時の光景が再現されちゃうだろ？さつき思い出しかけたばかりだからマジで勘弁なただけど…。

と言うか戻るとか使うつてなんだ？アレか？過保護なのに耐えられなくなつて彼女達に実家に帰つてもらうつて事か？実家の方でお手伝いさんみたく使うつて事か？

…いいじゃないか！俺の精神的にも大変、素晴らしい！ただでさえナギというモノを抱えている俺としては歓迎すべきことだ。このままじゃ俺の身体ももたないからな。いくら鍛えているといつても限界はあるんだよ…。

ハオさんが、その…。ヤンチャした時は三日間魔されて、体重が四キロも減つたんだ…。お陰で前よりも随分引き締まった身体になったが、それはそれだろ？それは、ともかく負担が減るなら、こんなに喜ばしいことは無い！是非やつてくれ！主に俺の胃の健康のため…！！

「アオイ？何の話してるんだ？」

「ん？まあ見ててよ、ナギ。…二人ともお願い」

「承知!!」

彼女達から眩しいほどの光が奔ったと思つて驚いていると次の瞬間にはハオさんとユエさんの姿は無く。代わりにと言うように葵は二振りの白と黒の美しい剣を持っていた。アレ？消えた？どういうことだ…？まさか…！？

「なっ！？小太刀なのか？」

「おいおい！なんだよ？これは？」

「興味深いですね…」

「うむ。あの者等は一種の精霊か何かなのかの？」

「これが九十九神にして相棒。そして最強の矛。その名も姉妹刀「陽月」。俺の愛刀達だ…」

「九十九神か…。実際に見たのは俺も初めてだな。しかし、これは剣としても見事だ…」

初めて見た。現代のような使い捨てが当たり前前の世界で九十九神とは…。いや、それだけ古い品なのかもしれないな。なんにせよ驚いたな…。

「詠春、一人で納得してないで説明してくれ。そのツクモガミってなんなんだよ？」

「ん？ああ。俺の故郷の話しなんだがな？物も長い時間経つと魂を持つって言い伝えのようなものがあるんだ。だが、これは…。いや、彼女達に悪しきものは感じなかった。大抵、刀剣などの武具は血を浴びる事によつて変異するのに彼女達には、それが無い…。ということは余程、大事に使われてきたのだろう。それに…」

「ああ！詠春！説明が長い！要するになんだよ!？」

「長いつてお前は…。あのなあ？彼女達はそれだけですごい事なんだぞ？これ程にまでなると最早、聖剣や神剣と言つても過言じゃ無

いのに……。はあ……。まあ、ナギだしな。つまりな？彼女達は剣の精霊みたいなもんだよ」

「おう！それなら分かりやすいな！」

このバカは……。絶対、分かってないな。賭けてもいい。実際すごい事なんだ。武器の九十九神なんて珍しいモノは。

武器はその性質上、必ずと言っていいほど血に染まり血に溺れるモノが大半だ。なのに……。これには殺傷武器として刃に曇り一つ無い単体でアレだけのことが出来るんだ。さぞ、沢山の血を流させてきただろうに……。美しいと素直に思ってしまう。

「ツクモガミですか？興味深いものですね」

「なるほどの。これも東洋の神秘というものが」

アルとゼクトさんが興味をそそられている。俺も分かる気がする。これだけの美しさと内包された魔力。俺も剣士だ、目を奪われる。

「ふふん。彼女達は美刀だろ？詠春」

「あ、ああ、これはすごいな……」

葵……。お前が羨ましいよ。これだけの業物、いや、大業物達がお前のことを慕っている。剣を使う身としてお前のことを尊敬するよ。

「……あげないからね？」

「そんなこと思っていないわ！このバカ！」

こいつは……。素直に尊敬してみればコレだ！まったく！

「…少しも？これっぽっちも無い？」

「……………少しは思いました。ゴメンナサイ」

ホント、ゴメンナサイ。少し、欲しいなと思ってしまいました。

「ううん。こっちもごめんね？意地悪なこと言って」

葵よ？剣士に大業物の刀剣が欲しくないのか？と言われれば、大抵の奴は欲しいと答えると思うぞ？あの質問はダメだ。俺もまだまだ未熟だな…。

「なんか知らんけど、この話しは終わりだな？」

「そうですね。おや？そろそろ時間のようですよ？」

「よしっ！アル！それに他の奴らも行くぞ！俺達に敵は無い！必ず勝つぞ！」

今回の戦場で俺達は遊撃の任務を任せられた。現状の戦闘は連合軍が不利なようだ。だが、俺達「紅き翼」が、この戦闘で連合側を勝利させてみせる！

そしてこの戦闘では「紅き翼」がその絶大な力を振るうことで勝利に終わった。

Side out 詠春

回想、完。



第二話「紅き翼との出会いと詠春の回想と」(後書き)

どうだったですか？

上手く出来ましたかね？

これからがんばりますね。ハイ。

毎度の事ながら！

感想&アドバイス&参考になりそうな二次物の紹介！などなど…。  
あつたら何でもお願いしますね！？

### 第三話「葵と悪魔達とバカと」(前書き)

三話を投稿!

ごめん…。今はネギま!を書くのが楽しくてたまりません。  
それじゃ、続きです。

10/20修正。

### 第三話「葵と悪魔達とバカと」

Side 葵

今、俺達は次の作戦地に向けて移動している。まあもう昼時と言うこともあつてご飯の準備中なんだ。今回の当番は詠春。何を作るのかと見ていれば、どうやら鍋料理にするらしい。

久しぶりの鍋だ。日本人として、これは外せない。本当は、ここで日本酒なんかを飲みたいけど、この近くはまだ戦闘地域に指定されているから何が起きるかわからないから我慢…。我慢だ、葵…。今から鍋だ。そう鍋料理だ！それで十分じゃないか！うん…。

お腹、空いた…。お義父さん（詠春）ご飯まだ…？

「誰がお義父さんか！？もう少し待つてる！今から食材を入れるから！」

…なぜ、分かったのだろうか？詠春には名前が聞こえていたはずなのに…。なかなかヤルな！詠春も！

「そんなにちまちま入れてないで一気に入れちまえよ！」

「ああ！？このバカナギ！！何してんだ！？」

「な、なんだよ？じれつたいから食材を入れただけじゃねえか…」

「このバカ！鍋料理はな！食材を美味しく食べるための順序というものがあるんだ！バカ！」

「葵の言うとおりだ！このバカ！肉から入れる奴があるか！バカ！」

「二人して二回もバカって言われた！？上等だてめえら表に出る！」  
「…バカだバカだとは思ってはいたけど、ここまでバカとは…。バカナギに教えてやる。いいか、バカ？今俺達は外に居る。分かるか、バカ？もう既に表に居るんだよ。分かったな、バカ？」

「今度はバカバカ沢山言われた！？葵！てめえ覚悟しっ！！ぷげろば！！??？」

「小童、我等のことを…」

「忘れてもらっては困るな」

「すげえ…。あのナギがゴム鞠のように飛んでいったよ…。もしかしてこの二人、ナギより強い？確かに昔は加減が分からなくて注げる限りの魔力を注いだけど…。」

「アレ？今、二人の魔力量を感じてみたんだけど。んー？前より増えてる？なんでだろ？ああ、成長してるんだね？うん。お兄さんは嬉しいですよ！家族の成長を喜ばないことなんてありません。今まで気付いてあげられなかったから今度お手入れする時は念入りにやっつてあげよう。」

感謝を込めて！

「ふふ、ナギは学習しませんね？見ていて飽きませんよ」

「…学習しないからあんちよこなどに頼るようになるのじゃ。師匠として情けないの…」

「よし。出来たぞ！皆、食べる！」

「よっしゃー！肉は頂いたー！！」

「あつ！？この！肉ばかり取るんじゃない！野菜もちゃんと食べる！」

詠春…。黙々と作業してたのね？そしてナギよ？お前いつ帰って

きたの？かなりの飛距離だったよね？転移か？いや。こいつ転移魔法全般使えないし…。瞬間移動でもしたのか？それともこれがギャグ補正とかいうやつか？ああ、ダメだ。脳に栄養が足りない俺も食べよう。

「我が君。こちらをどうぞ。既に確保しております」

「ん？ありがとう、ユエ。ん、美味しい。やっぱり鍋はいいね」

久しぶりの鍋はいいねえ。なんというか、精神的な事が癒されま

す。  
「はい。皆で食すことの出来るこの料理は実に良いものと私も思います。…あ、お代わりですか？はい、こちらをどうぞ」

お鍋の具材をユエがよそってくれます。よく気が付く子に育ってくれて嬉しいですね。受け取る時にお礼を言うのを忘れてはいけません。誠意は大事にしていきたいですからね。

「うん、ありがとうね。あの三人にも食べさせてあげたいな。今度、紹介がてら召喚しようかな。二人はどう思う？」

「私は良いと思うのですが姉上が…」

「ん？八才は反対なの？」

…これは、もしかしたら家庭内崩壊でしょうか！？だとしたら直ぐにでも解決に向けて動かなければなりません！戦争？そんなの後ですよ！俺は家族が無事なら構いません。まあこの目にとまる人ぐらいなら助けることは吝かではありませんが…。それよりも今は家族の危機です！

「反対というわけではありません…。しかし、彼奴等キヤウは我が君に対

して…その、馴れ馴れし過ぎるので、私は…」  
「?????」

違うみたいです。とりあえず家族の危機ではないようです。安心しました。でも、それだとなぜにハオは渋っているのでしょうか？ん？ユエが近くに来て俺の耳元で話しかけてきました。ユエ達は美人さんですからお兄さん、ドキドキですよ？

「我が君。要するに姉上はあの三人に嫉妬しているのです。素直に我が君に甘えることが出来る、あの者等が羨ましいのですよ」

「ユエエツ!!!???な、なな何を言っておるのだ!!!そ、そそそのような事は…ゴニヨゴニヨ」

なるほど…。理解しましたよ！要するに家族としての触れ合いが不足していたんですね？わかります。俺も長い間、皆と離れて暮らすと考えたら寂しくて耐えられません！長く生きたことの弊害ですかね？ごめん、ハオ。気付いてあげられなくて！うん。ここはやっぱり…。

「ハオ？甘えてみる？」

「わ、わわわ我が君!!!???何をなさいますか!??お、おおおおお戯れはやめてくださいれ！」

「…嫌だった？」

ん？？触れ合いといえば、ハグだと思ったのですが、違ったのですか？俺としては頑張ったつもりなただけ。

何度も言いますがハオ達姉妹は美人さんだからお兄さん、ドキドキです。あと俺達を見て嘸し立てるようにしてる「一紅き翼（バカ共）」！からかうんじゃないよ!??今の俺はもういっぱいいっぱい

なんだから！

「そ、そそのような事は、決して……！」

「じゃ、いいよね」

「っ……っ……！」

嫌じゃ無いそうです。ここからは家族の触れ合いタイム！スキンケアは過度にならないくらいが適切です。やり過ぎるとウザがられて嫌われてしまいますから。

喫茶店時代に娘さんの居るお父さん方がそう話してました。とても、参考になります。

ん？ハオの顔が真っ赤になっています。名残惜しいけど、ここまです。やり過ぎダメ！絶対！……だから！バカ共！からかうんじゃない！喧嘩売ってんのか？今の俺なら買うぞ！！コラ！？

「良かったな？姉上」

「う、うむ……」

もちろん、ここでは撫でることはしませんでしたがユエとも後日しっかりスキンケア取ったのは余談だから省きます。だが！ここで一つだけ言っておこう！一緒に寝るのは勘弁してください……。マトモに寝られませんでした……。

「とにかく、あの子達の事も紹介したいし今度、召喚してみよう。

ハオ、いいよね？」

「っ……っ……！んっ……！我が君がお決めになられた事です。否やはありません」

「よし、それじゃ……」

…食事を再開して食べようとしたらお鍋の上にラカンどバカが降ってきました…。詠春以外は素早く自分の分のご飯を確保して退避します。詠春、大丈夫かな？火傷してなければいいけど。モロだったしね。

それにしても、このラカンどバカ…。シネバイイノニ。……ハッ！？また、思考が黒くなった気がします。気を付けなければいけません。ただ…。

ユルセマセン！

「お食事中にしつつれ〜い！！」

「っ！？何者だ！？曲者めが！」

「おほっ！？色っぽい姉ちゃんが二人も居るじゃねえか！？おかしいな？情報には無かったが…。まあ細かい事はいいや！俺は放浪の傭兵剣士のジャック・ラカン！「紅き翼」さんよう？ちよつくら喧嘩に付き合ってくれやあ！！」

「五月蠅いぞ！下郎が！我が君は食事中だ！即、消えろ！」

「我が君？我が君、大丈夫でしたか？火傷等はしませんでしたか？我が君？」

ハオ…。今、このバカを帰すわけにはいかないんですよ…。お話しなければならぬことがあるのですから…。それとユエ、火傷はしていません。俺よりも詠春の方が酷いです。もう一度言いますがモロだったんですよ？飛んだ鍋ごと熱した出汁を浴びてるのだから、でも、平気みたいです。咄嗟に気で強化したからですかね？いや、そんなことより、まずは…。

「…し…き…や…」

「我が君？今なんと？」

「お仕置きしてやる！！食べ物を粗末にしやがって！！その筋肉バカ！！覚悟しやがれ！！」

「我が君！？」

「ハッ！いいねえ！俺の目的は最強とか言ってるナギ・スプリングフィールドって奴だが…。丁度いい肩慣らしだ。お前から来いや！！」

肩慣らし？いい度胸だ！その余裕の顔を俺の持つ最大戦力で叩き潰してやる！！

「暗き泉！仄暗き世界！今ここに！理を繋げる！召喚！オリビエ！リビエラ！シルビア！」

「ハッ！召喚に応え来たわよ。どうしたの、葵？いつもより荒々しい感じがしたけど」

「そつよ？葵ちゃん。何があつたの？意地悪されたならお姉さんが「めっ！」ってしてあげるからね？」

「お兄ちゃん…。苛められた？そいつ…。…殺る？」

オリビエ荒くなってごめん。リビエラ、その優しい口調で今少し冷静になれました。少しだけどな！シルビア、君はいつも優しいね。ありがとう。一緒に巨悪どバカを滅ぼそう…。

「オリビエ、リビエラ、シルビアよく来てくれた…。今回は目の前に居るこの「ド」バカを懲らしめたい…。力を貸してくれ…」

「葵が、ここまで怒るなんて…。九十九神の姉妹！この筋肉バカはなに遣らかしたのよ!？」

「その…これはだな…」

「なによ？そんなに言い難い事なの？」

「ここは私が話そう。姉上、他の者等を避難させてやってくれ」

「う、うむ。では、ユエ任せたぞ？」

「うむ。…それでだな。此度の事だが理由こたひは簡単だ。…そのバカ者が食材を粗末にしたから我が君は怒られておられるのだ」

フフ、フフフ。こつちの世界に来た当初は何度、空腹で倒れ餓死しかけたことか…。食べ物粗末にする者には一神（俺）の鉄槌が降るのだ！覚悟するがいい！地獄という名の世界を見せてやるう！  
！フフ、フハハハハッ！！

「あちゃゝ…。それはダメだね。葵に、それは禁止事項だもんね…。わかった。なるべく穏便に片付けるように頑張ってみるわ…。ほら？二人も行くわよ」

「はゝい。悪い子には「めっ!」ってしちゃうんですから」

「お兄ちゃんの仇…。討つ…!」

「いや、死んでないから…」

オリビエ、訂正ありがとう。シルビア、俺はまだ死んでません。  
…理性は死にそうだけど。

「やっと話しはまとまったみたいだなあ？」

「アンタ…。ホントにバカなのね？あたし達が話してる間に逃げれば無事に居られたのに…。もう、それも無理ね…」

「ハッ！随分、威勢のいい姉ちゃんじゃねえか？…しかし、なんだ

あ？女の悪魔ばかりだな。奴の趣味か？“軟弱”な野郎だな！ハッハッハッ！！」

ピシッ…！！

「…オイ、クズ？お前、今なんて言った？軟弱？あたし達のマスタ―をバカにしたな？そうなんだな？…いい度胸だ！てめえの腸は何色だ！？ブチマケタイノカ！？いいだろう！今すぐ地べたにその空っぽの頭をめり込ませて土下座させてから、ブツコロシやる！！」

「おおー！！！？なんだ！？このプレツシャーは！！力量的には公爵級！？いや！それよりもこれは？？もつと上だと！！！？？」

「フ、フフフ…。軟弱？この俺が、こんな筋肉バカに言われた？フフ、フフフ…」

オリビエのプレツシャーに怯むような奴に俺は軟弱と言われた？いいよお、いいよお！いい感じにキレてきたよ！ただでは殺さん！まずは、正座させての説教を俺が満足するまでやる…！全ての話しはそれからだ！！

「あ、あ〜！？オリビエちゃん〜！落ち着いて〜！？早まつちゃダメよ〜！葵ちゃんも落ち着いてね〜？ね〜？あ〜ん！シ、シルビアちゃん〜！？オリビエちゃんを止めるの手伝って〜！」

「オリビエ、ダメ」

「なんだい！？シルビア！お前もあたしを止めるのか！？」

「私が…。最初に…。殺る…！」

「んんっ！！？またプレッシャーが増しただと！！？それもさつきよりずっと強い！！なんなんだ！あの嬢ちゃんは！？」

「きゃ〜！！シルビアちゃんまでキレてます〜！？あっ！！？葵ちゃん！二人を止めてくださ〜い！！！」

「…二人とも徹底的にやっつけていい。ただし！殺すな。まだ、言い足りないことが山ほどあるからなあ…！」

そうだよ。たとえ許せないことがあるとは言え殺しちゃいかんよな？…ギリギリまでは殺るけどな！

「ちっ！…わかった。でも！ギリギリまでは死なす！！！」

「ギリギリ…。難しい…。(ボソツ)あ、事故なら…。イイ、かな？」

「うわ〜ん！殺すことはなくなっただけで、葵ちゃんも二人も怖いよ〜！というかシルビアちゃん！？事故に装ってとかダメだからね〜！」

「わかった…。じゃ、善処する…！」

「政治家的発言ほど、信じられないものなんて無いよ〜！？絶対ダメだからね〜！」

「…わかった…」

シルビア、何気に君が一番怒ってるのかな？優しい子だから家族をバカにされたのが我慢ならなかったのか？でも、事故で殺っちゃうにはいかんよ？それとそんな政治家みたいな言葉いっただいどこから覚えてきたの？お兄さん心配ですよ？最後にリビエラに念押しされてるけど…。うわあ、すごい不満そうにしてる。やっぱりラカ<sup>カ</sup>ンでも生きているんだから殺すのはいかんよな。うん。時間が経つと頭が冷静になってきた。

「なんで不満そうなの〜！？大体、今すぐ殺しちゃったら簡単すぎるじゃなくい！？こういうことは捕獲してからジワジワと殺るからイイのよ〜？？」

「いや！リビエラの方が酷いから！！」「  
「???」

リ、リビエラが怖い…。簡単に殺そうとした俺らよりも悪魔が居る…。あ、この子達悪魔だった…。：ならいいの、か？いやいやいや！ダメダメダメ！そんなこと許したらとてもじゃ無いが放送できないような事になってしまふ！！止めなくては！

「：今度はなんだ？？プレッシャーというより悪寒のような感じがしたが…」

「え〜！？何ですか〜？殺していませんよ〜？ちよつと痛いかもですけど〜、生きていますよ〜？ほら〜 問題ないじゃないですか〜」

「いや、リビエラ？それは…。な、なあ？葵」

「うっ？うん。リビエラ？とりあえず今回は俺も暴走して悪かったから。適度にボコる方針に変更しようと思うんだ。：だから、ね？」

オリビエ……。ここで俺に話しを振らないでくれよ……。とりあえず、俺自身が殺す気が無いことをアピールして事態を軟化させよう。これでダメだったら……。ラカン<sup>どバカ</sup>、さよなら……。君の事は三秒ほど忘れないよ！！

「あう……。そうですか……。残念です……。でも……」

「いい加減、やるのか、やらないのか、ハッキリしてくれねえか？」

「黙れ！バカ！！お前の命がかかっているんだから黙れ！このバカ！」

「黙れ！バカ！死にたいのか！？誰のために頼んでると思ってるんだ！……この子供達を呼んだのは俺だけだよ……。お前も死にたくないだろ？」

「黙れとバカを二人同時に！？それも二回も言われた！？というか俺の心配してくれるのか？？」

「いや、どうでもいいな！！」

はい。どうでもいいです！だって、お前バグキャラだろ？殺しても死にそうにないじゃん。それにバカだし。ギャグ補正もかかるさ！

ん？？…な、なんて完璧なんだ！？これじゃ死なないんじゃないか？……試すか！？ここで殺るか？殺っちゃうか！？

いやいやいや！ダメダメダメ！間違っただらどうするのさ！？誰がこっちで主人公 名前は忘れた を鍛えるのさ！……俺が鍛えるか？

いやいやいや！ダメダメダメ！やってやれないことはないけど、どうせ教えるなら女の子がいい！！なによりも俺が面倒くさい。却

下だ！却下！アレ？そういえばシルビアはどこに???

「自信満々に否定された!?どうでもいいって言われた!?お前らひでえな!!?」

「お前…。五月蠅いな…。少し黙れ…」

ドゴンツ!…グシャ…!…。  
ポタツ…ポタツ…。

「…ヒツ!?!」

シ、シルビアアアアア!?!?なんだか聞こえてはいけない音が聞こえていたのですが!?それにハルバートから滴ってる血が…。なんていうか…。その…。多くないか!?

血が、さ。ほら?まるで横たわってるバカの周りが血の池のよう…。これってダメじゃね?死ぬか?死ぬのか!?ギャグ補正はどこいった!?<sup>どバカ</sup>ラカン、カムバツーク!!

「大丈夫…。生きてる…。(ボソツ)多分…。」

「…今!多分って言った!?!」

「むう…。言っ…ない」

「か…勝手に…殺すんじゃ…ねえよ…(バタツ)」

「ア、アアアルウウウ！！治療を！！治療魔法をおおお！！」

とりあえずジャック・ラカンという偉大なバカが犠牲になって今回の事件は終幕を迎えた。

さよなら、バカ！君の事は…。最早、遠い記憶の彼方のそのまた彼方にて忘れな……。いや、忘れそうだな……。ごめんラカン<sup>どバカ</sup>、俺は筋肉バカより家族と綺麗な女の子を主軸に覚えていたんだ！！さよなら！バカ！もう会うこともあるまいよ！！

完！！！！

いやー。めでたし！めでたし！はははははっ！

「死んでない！俺は死んでねえからな！？生きてるからな！！」

「……ちっ！生きてたか……」

「お前らホントひでな！！マジでよ！！」

ちっ！生きて……じゃないだろ……。殺しちゃダメだろ？悪魔達三人娘も九十九神の姉妹も似たことを考えたのかラカンと目が合いそうになるとサツ！と視線を逸らしますよ！？

でも、まあアルの治療が間に合っつてよかったじゃん。流石はラカン！ギャグ補正は最強だな！……っつかよう？なんで、アレで生きるの？あの出血量から考えてありえないでしょう？身体の二割以上の血は流れてたよ？

……アレか？バカ過ぎて、あの世ですら拒否されたとかか？

だとしたら、もうラカンどバカ無敵じゃね？正直、俺の手に負えないんですけど。ハア……。またバカが増えるのか……。

詠春、次の戦闘、終わったら飲みに行かない？俺が奢るからさ？  
…あ、行く？よしっ！飲もう！…わ、わかってるって詠春さん、戦闘が終わったらダヨ？今じゃないヨ？ホントダヨ？

「なあ？アオイ。とりあえずそいつ等、誰なんだ？いや、悪魔召喚っていうのは何となくわかってるんだけどよ」

「それは私も気になりますね。皆さんのこと先程から観察していましたが三体とも爵位で言えば公爵、そちらの小柄なお嬢さんは大公爵に迫るほどと感じられます」

「そうじゃな。だが、こやつ等、力だけで爵位は持ち合わせておらんようじゃ。何よりも力に関する制約の鎖が無さ過ぎる。見たところお主との繋がりがだけが異常なほどに頑丈に出来ている。これはどういうことじゃ？」

「葵、これだけ強力な悪魔をよく使役できるな。感心するぞ。ここまでの者など、そうは居ないだろうな。どうやったんだ？」

「うわーい。皆が興味ありまくりだよ。ちゃんと紹介したかったのに…。これもそれもーラカン（筋肉バカ）のせいだ！ついでにポストが赤いのもみんなこいつのせいだ！他意はない！ただの腹いせです！

アルとゼクトさん、この子達に爵位がないのよく分かりましたね？すごいです。

でも、なんて答えようかな？「イヤー、数百年前から自分が手ずから育ててますからー」なんて言えるわけないじゃん！悪魔を育てられるほどの長生きって何！？うわー…どうしよう。

うん。とりあえずこの子達に自己紹介してもらおう！その間に何か考えられればいいじゃない！？…おほんっ。それじゃ皆、自己紹介してね？

「はいはい。あたしはオリビエ。戦闘では前衛を担当してるわ。趣味は家事全般と敵を叩きのめすこと。あたし達、葵とは彼是…ん？三百年くらいの付き合いかな？」

「私はリビエラと申します。主に後衛からの広域殲滅から対個人の狙撃までこなせますね。趣味は…。ヒ・ミ・ツ・です。そうね。葵ちゃんには、私達をここまで育てて貰った恩もありますしね？」

「シルビア…。前衛…。お兄ちゃんが…。死ぬまで…。一緒にいる…」

「バカ。死なせるかよ。あたし達のマスターだぞ？」

「そうですよ？それに私達も、お護りしているのですから。万に一つもありませんよ」

「ごめん…。言い方…。悪かった…。お兄ちゃんとは…。ずっと…。一緒…。うん…」

おう…。この子達、素で俺の実年齢が異常なほど高い事と、この子達を俺が育てたことをバラしてくれましたよ…。

どうしよう！？どうしたらいいの！？吸血鬼とかに勘違いされたらイヤ過ぎる…。追いかけられる生活なんてイヤですよ！

いやまあでも、見つからない自信ならあります。伊達にこの七百年と数十年、俺の存在を隠して生きていません。認識阻害の魔法はほぼ完璧です。

たまに居る目撃者やこのことを知った人は記憶をこれでもかと言  
うくらいメルヘンな記憶に変えておきましたから周りから見たらち  
よっと頭の可哀想な子としか見られませんか。それ以外は普通に生活  
できますよ？壊したわけじゃありませんからね。うん。

……俺、悪くないですよ？ホントですヨ？？

「葵、なんだかオリビエ…さん、か？この子、三百年がどうとか言  
つてたような気がしたんだけど…。どゆこと？」

「私も、気になりますね。彼女達にも興味が絶えませんが…。アオ  
イ、どういうことでしょう？」

「うむ。儂も気になるの。そこ悪魔娘、リビエラと言ったか。彼女  
が言う、お主が育てたというのが気になる」

んんー？？ナギ以外の三人が彼女達の言葉に、これまた興味をそ  
そられたようです。いったいどないしょー？？いつそのこと正直に  
話しちまうかな？それでダメだったら…。イジるか？こつ…頭の中  
を、ね？イジっちゃおーか！？

アレ？よく考えたら俺の戦力つて現時点で言えば最強クラスじゃ  
ないか？？俺にハオとユエ、それに悪魔三人娘を加えて…。最高じ  
やないか…！我が軍は圧倒的ではないかね！？

これで足りなくても精霊さん達も居る！彼女達が居れば魔法に関  
して言えば三属性を封じることも出来るはず！！ヤっちゃうか！？  
…いや、落ち着け、俺。まだ、そうと決まったわけじゃないんだか  
ら…。とりあえず、話し合おうか？みんな？あのね…。

「ちよつと、あんたら？随分、葵に気安いけど何なの？」

「いや、俺達は…」

「っ！？まさか！あのバカの仲間！？葵の不老の秘密が知りたくて、あのバカと一緒に襲ってきたのね！？くっ！葵って、たまに抜ける時があるから、そこにつけ込んで騙そうとかそういうことね！？そうなんですよ！？」

「は？いや、俺達のはな…」

「黙りなさい！こうなったら問答無用よ！！葵を…。あたし達のマスターを騙そうなんて！？そうはさせないんだからね！！葵はあたし達が護るんだから！！」

…おお！？俺が説明しようとしたらオリビエがいい感じに盛り上がっていらっしやる！？

マズくない？これ？マズイよね？止めないと不味いですよ！！いやね？勝つことなら出来ますよ？出来るけど…。やりたくないです。やったら最後…。殲滅戦になっちゃうからやりたくありません！大体なぜ、やりたくないかと言うと後始末が面倒臭いからです！！

…ん？ああ！？オリビエさん！落ち着いてっば！違う！違うからね！誤解なんだって！詠春！ちよつと待っててくれる？この子達に説明してくるから！

オリビエさん！落ち着い…。なにそんなにムクれていらっしやるの？…え？さん付けして他人行儀みたいにするな？今、この状況ではどうでもよくないか！？…なに？どうでもよくない、これは気持ちの問題、大事な事なのよ！？ですか…。

説明中です。しばらくお待ちください…。

「オリビエ！ちょっと、こっち来て！」

「なによ！？こいつら懲らしめるんだから用件は早くしてよね！」

「だから！それは誤解なんだって！」

「誤解って何よ！？」

説明中です。もうしばらくお待ちください…。

「…話しは理解したけど…。それはともかく、あの薄笑いしてる魔法使い然とした男って何なのよ！？」

「薄笑いって…。彼はアルビレオ・イマ。ちょっと悪戯っ子だけどいい人だよ？」

「悪戯っ子でいい人って…。だって、あいつ、さっきからシルビアを見る目が怪しいんだけど？それにローブからはみ出てるスクール水着とネコミミカチューシャはなんなのよ…？？」

「それは…」

説明中です。ごめん…。もうしばらくお待ちください…。

「ともかく！俺は騙されてないの！この人達は仲間なの！」

「そんなの信じられないわよ！見るからに怪しいじゃないの！」

「アルはいい人だよ！その…。ちょっと趣味が特殊なだけだよ！」  
「はあ？特殊って何よ！？ますます怪しいじゃない！」

説明終了です。大変、お待たせしました。

「…はあ、はあ。よ、要するに、こいつらは今、行動を共にしているやつらで。葵は騙されたわけじゃないのね？」

「そ、そう…。はあ、はあ…。大体、ナギが…、ああ、このチームのリーダーみたいな人がバカなんだから。そんなこと考え付くわけがないよ」

疲れた…。やっと説得できた…。なんだか主にアルのことで揉めてた気がするけど…。ハア…。

説得するまで、随分と時間がかかつちゃった…。もう夕飯時だよ？ラカンが来た時がお昼だから…。ホントに疲れたわー。

シルビアなんて天気がいいものだから木陰で寝てるしさ。俺もお昼寝したいなあ。リビエラはリビエラでシルビアのこと膝枕して、こっちのこと微笑ましそうに見てるだけだし…。

リビエラも手伝ってくれても、よくない？んー！とりあえず戻ろうかな。あ、リビエラ！シルビア起こしてくれる？皆のところに戻るからさ。ほら、オリビエ、行くよ！

「おお、アオイ！遅かったな！飯は出来てるぞ！」

「話しはユエさんから聞きましたよ。今まで大変だったようですね？」

「そうじゃな。アオイ、何か困ったことがあったなら僕も手を貸そう。いつでも言うがよいぞ」

「葵…。俺達は仲間だ！何か困ったことがあったら言ってこい！力になるからな！」

「不老ね？オレは興味ねえからパスだな。どうでもいい。…おっ！？コレうめえな！」

何から突っ込んだらいいのだろうか…。

人が必死にオリビエを説得しているうちに、皆は歓迎モードですよ？なにこれ？あ？何？ユエ。…勝手に話して怒ってないか？ですか？怒ってませんよ？どういふことにせよ俺のことを思ってるの行動だったのだから。怒れませんよ。どうせこの後、皆には話す予定だったからね。

ユエの気遣いには感謝です。言い方は悪いけど手間が省けました。ありがとう、ユエ。え？ハオも説明してくれたの？ありがとうね？大変だったでしょ？本当にありがとう。

さて、ここで俺は気付きました。

え？なにに？つて。……なんでラカンと一緒にご飯、食ってるんだよ？いつ和解した？敵だったじゃん！何？アル、なにがあったの？…俺達を待ってる間にラカンの体力が全快したからってナギと喧嘩してたら仲良くなった？

え？

なにそれ？バカなの？アレか？バカ同士になにか惹かれるものでもあったのかね？それにしても打ち解けるのが早くない？ああ、バカには時間は関係ないのか…。コレだからバカは…。まあとりあえず受け入れてくれた皆には感謝しなければいけません。礼節は大事な事なのです。

ありがとう、皆…。

「我が君。食事はこちらに用意して御座います。ほら、お前達も食べるが良い」

「ありがとう、ユエ。いやー、オリビエの説得していたらお腹、空いちゃったよ。ん？コレ、美味しいね？誰が作ったの？今日の当番は詠春だけど…。味付けが違うよね？だれ？」

ユエ、いつもありがとう。ホントに気立てのいい子です。…こいつらは俺らが戻らなかつたら最後まで食べ尽くしてしまうから危険です。そうなった場合、ご飯抜きですからね…。

仲間になりたての時、初めての野宿…。その時まで知りませんでした。この「紅き翼」内で食事は早い者勝ちなのです…。取りそこねたら最後…。最初そのことを知らなかった俺は久しぶりにキレました。

今回ほどじゃありませんでしたよ？粗末にしたわけじゃないですから。ほどほどです。ええ。

しかし、料理を一口食べて疑問。今日の食事当番は詠春のはずなのに味付けが違います。詠春の料理は生まれが京都だけに少し薄味です。でもコレは…。どこか…。そう、これは俺好みの味付けに近い感じですよ。誰が作ったのが気になります。…褒めてあげたい。

いい仕事しています。

「ハツ。それは…姉上の手による物で御座います。どうやら、お口に合いましたようで姉上も、さぞや安堵したことでしょう。…ほら、姉上！こつちに来んか。恥ずかしがるでない」

「ユ、ユエ？しかし、だな？初めて我が君にお出したのだ。私の作った物で満足していただけたのが不安で、な？」

「姉上。我が君は姉上の料理を美味しいと言っておるではないか？自信を持つが良い」

「そ、そうか？ユエ。…わ、我が君？本当にお口に合いましたでしょうか？」

「なんと？作ったのはハオでしたか。料理できたんですね？知りませんでした…。いつから練習していたのでしょうか？気になります。」

「でも、こういうことを聞くのはデリカシーに欠けるかもですし、聞きませんかよ？まあ、どうしても聞きたくなったら聞いちゃうかもしれませんが、ね？とにかく、ハオに料理が美味しかったことを伝えなくてはいけません。言葉にしないと伝わらないこともあるのですよ。」

「ハオの料理、美味しかったよ。ありがとう。また作ってくれと嬉しいな」

「あ、有り難き幸せ！！是非に作らせていただきます！！」

「はは。そんなに力まなくてもいいのに。でも、ありがとうね」

「実際の話し普通に俺好みの味付けでした。また食べてみたいです。ご飯は、一日の糧ですからね。どちらかと言えば好きな味で楽しみたいですよ。その点ハオは見事に俺の好みを把握していたようで嬉しい限りです。ハオ、ありがとうね。」

「あら？ホントに美味しいわね。ハオもやるじゃない？」

「本当ね〜。あ、これも美味しいわ〜」

「うん…。美味しい…」

「ふ、ふふん。当然だ！我が君にお出しするものだからな！下手な物をお出しするわけにはいかんよ！」

オリビエがハオの作った料理を褒めています！？彼女、アレでなかなか料理が上手いのですよ？いつでもお嫁さんに出せるほどです！

誰にもやらんがな！！この子達が欲しいなら最低でも俺よりも強い奴でなければ安心して任せられません！！まあ、その前に彼女達自身の意志を尊重しますがね？

でも！！チャラ男だったりしたら…。泣きますね…。泣きながら撲殺します！！メツタメタに顔の形が変形するまでボコボコにしてやります！！殺しませんよ？死ぬギリギリのところ…。つまりは、ですね？…三途の川を渡る直前まではやめてやりません！！

話しが逸れましたね…。

……。

……。

こんなドタバタした一日でしたが楽しかったです。騒ぎに騒いでの大騒ぎ。

それにラカンですが彼も、現在も一緒に行動しています。敵方に

雇われた傭兵なのがいいのかな？なぜ居るのが理由を聞いてみたら  
ですね？

…「お前らと居るほうがこれから楽しくなりそうだから」なんで  
す…。

ああ、やっぱり、この人バカなんだな、と改めて思いました。だ  
って、傭兵ですよ？帝国からお金貰ってるんだから働きなさいよ。

なに？…「何度か襲撃ケンカしたから、一応の義理は果たした」って…  
…いいのか？それってさ？今後の信用問題とかになつたりしないよ  
な？

傭兵だけじゃないけど信用って大切よ？目に見えない事が大切な  
事ってあるんだから。あ、そうか…。こいつはバカだった…。考え  
てるわけないか。ダメじゃん。でも、結果が出るんだから、ラカン  
もすごいよな…。バカだけど…。

S i d e o u t 葵

数週間後…。

「紅き翼」のメンバーに帝国の占領下にある地…。グレートリッ  
ブリッジ奪還作戦への参加要請が打診された。「紅き翼」はこれを受  
諾。奪還作戦の作戦地に向けて出発した。



### 第三話「葵と悪魔達とバカと」(後書き)

今回は悪魔三人娘の登場でした。  
ちよつと無理矢理だったけどね？  
会話文が難しい…。失敗したか？  
もう少し考えたほうがいいか…？  
それじゃ、みんな！また会おうね！？

第四話「グレートブリッジ奪還作戦・前編」(前書き)

戦闘場面そこそこです。上手く出来てるか自信ないわあ…。  
とりあえず、続きをどうぞ。

#### 第四話「グレート＝ブリッジ奪還作戦・前編」

グレート＝ブリッジ奪還作戦。その作戦は連合側にとって今後の戦況にも影響するほどの重要なものだった。この作戦に失敗は許されないのだ。失敗すれば最期…。連合側は一気に瓦解することは必至だろう。連合側は今回の作戦に可能な限りの戦力を用意して挑むのだった…。

Side 葵

作戦開始の時間まであと少しかあ。ああ、よくよく思い出してみたらこんな大きな戦争に直接参加するのって初めてだ。大体、いつもだったら裏側から徐々に相手の戦力を削っていつて交渉に持ち込むような裏方的な事してたからなあ。俺の正体は極力、表に出したくなかったしね。原作開始時期までに問題があったら大変だしさ。目立たないようにしてきた。まあ、その自重もここまでだけだな！ やつとここまで来たんだ。今までの鬱憤を、今回の作戦で吐き出す勢いやらせてもらうとしよう。帝国の兵隊さん。がんばって、ね？ クスツクスクス…。

こっちの世界に来てから「工房」で少しずつコツコツ作っている兵器があるんだけど残念ながら今回の作戦には間に合わなかった。それがちよつと…。ウソです。ものすごく残念です！何の兵器かと

いうとですね？趣味で造ったんです。ああ！でも、やっぱり今は秘密！お披露目はまた今度です。七割ほどは完成しているのですが主武装の取り付けとその調整、あと主機関部の出力調整がまだなんです。男なら一度は憧れると思います。早く使ってみたいな。

「作戦開始までもう直ぐだな…」

「そつだね。…なに？詠春ったら緊張してるの？」

「してない…って言ったら嘘になるな。こんな大きな作戦、それも連合の未来が左右されるようなものは初めてだからな。失敗したらと思うと怖いな」

「ははは。詠春らしいね。緊張するな、とは言わないよ。だけどいつも通りにやれば大丈夫。失敗することなんて無いから」

いや、実際勝てるでしょ？詠春、自信持ちなよ。間違いなく剣士としては強いよ？この場で純粹に剣技だけで勝てる人が居るかな？…居ないでしょ？…俺？そもそも話し、そんな力を制限した勝負をすることなんかしないね。やるからには使えるもの全て使って勝ちに行きます。…女性や子供を巻き込むような外道な手にならなければ、ですがね？何でも使います。負ける？イヤですよ…。俺ってこう見えて結構負けず嫌いなんです。

「此度の戦には我が君のみではなく吾等も居るのだ。帝国の未来は敗北のみ。不安になる事がどこにある？」

「然り。姉上の言葉の通り、吾等が我が君に捧げるは勝利のみ。吾等が敗北するなどありえぬよ」

「詠春、大丈夫だよ。絶対勝てる。俺が保証するよ。ハハハッ！」

「ハオさん、ユエさん、葵…。そうだな…。そうだよな？必ず勝てる！俺達も居るんだ！負けるわけがないよな！」

良かった。詠春、元気が出たみたいだ？戦いを前に不安な気持ちで挑んだら危ないものね。解消出来る時にしておかないと。俺も怖いよ？怖いけど不安はない。だって信頼できる仲間が居る。そして何よりも永い時を共に生きてきた家族達が居るから不安はありません。戦力比？そんなもの数ではこちらは負けてますけど。質的にはこっちが圧倒的でしょ？極端な話で言えば時間さえかければハオとユエだけでも勝てます。どれだけ時間がかかるかわかんないけどね？

「詠春、アオイ。作戦開始まで五分を切りました。皆さん、こちらに来てください」

「もうそんな時間か？葵、お二人も行きましょう」

「うん、そうしようか。ハオ、ユエ、行こう」

「ハッ！」

作戦開始時間が迫ったようです。ハア…。最近、癒しが少ない気がします。うん。戦争しているからってのは分かっている。分かっているけど？今まではずっと自分と家族のためにしか行動してこなかったから、こういう大規模な事はしてなかったんだよ？避けてたといってもいいね。幸いにも見つからないで居られる術は持っていたから今まで安穩としていられたけどね。まあ最初の数年は失敗を何回もしてきたから正体とかがバレるとかはともかく寂しかったかな

？こつちに来た当初は一人だったから辛かったなあ…。

要するに何が言いたいかというのですね？また、のんびり、喫茶店して過ごしたいなと思うわけですよ。こつち来てからというものの戦いに、戦いに、戦いです。はつきり、言おう…。厭きてきました。戦うこと事態は嫌いじゃないですよ？言い方はダメですけど生きているって言う充実感のような物に満たされる感覚もあります。でもそれがしばらく続くと鬱になりますね…。ここに家族達が居なかつたら「工房」に引き籠もつてましたね。ん？そんなことを考えていたら皆が集合している場所に着いたようですよ。

「詠春達を連れて来ましたよ」

「詠春とアオイ達も着たようだな！この作戦、絶対に成功させるぞ！！」

「おう！やっと来たな！俺は逃げたかと思つたぞ！ハッハッハッ！！」

「バカか？勝てると分かりきっている戦で何故、逃げねばならぬのだ」

「はは。そうだね。でも勝てるとしても怪我とかには気を付けようね？」

「我が君の御身は吾等がお護りするゆえ、どうかご安心を」

「ユエ、ありがと。頼りにしてます。もちろん、ハオもね。この子達もいるから安心です。あ、詠春はゼクトさんと話してます。ここから聞いていると、ゼクトさんは詠春がこんなに大きな作戦だから

緊張してると思って心配していたようです。やっぱり、いい人です。こんな人が近くに一人居ると不思議と安堵しますよね？

というよりジャック…。逃げるわけじゃないじゃないか。連合軍と「紅き翼」に加えて俺の個人所有の戦力があるんだよ？小さな国とだったら余裕で勝てるよ。コレだけの戦力があるんだから逃げるわけないよ。

因みに俺の持つ戦力は精霊さん達三人娘と悪魔達三人娘の将官クラス個人戦力と俺の両腕であるハオとユエの姉妹。更に言えば数に限りはあるけど下士官クラスが十八体、居てですね。兵隊クラスは二百十六体居ます。

内訳の戦力は将官クラスの精霊さん達三人娘と悪魔達三人娘とハオとユエの姉妹、それに俺、それぞれの下に下士官クラスが二体ずつ居て、更にその下に兵隊クラスが二十四体、居るのです。

例えば俺だったら…

俺

下士官二体

兵隊十二体一（三体編成の四小队）×2

…に、なりますね。この戦力ですが人形とかではないんです。いや、人形といえは人形なんですがね？どういことかというところ、まず身体の素体となる物を用意して、そこに中級や下級の精霊や悪魔を魔法薬や降霊術の応用など、様々な特殊な方法を使って憑依させ

て…。え？…無理矢理じゃないよ？同意の基です。そんなの基本ですよ。無理矢理ダメ！絶対！…それで続きですけど憑依させたら素体の方が憑依者に適した身体に最適化、形状変化などが行われるんですね。性別の決定は、その時に決まります。見た目とかは人間と変わりませんね。まあ性別に関しては自身の意思ですから俺にはどうしようもありませんし…。それでも、俺に同意してくれる精霊や悪魔は何故か女性体ばかりなんですけどね。ハハハ…。男性体ばかりのむさ苦しいよりは花があつていいと思います…。皆、美人さんですから恥ずかしいです。平気でブラチラ、パンチラしてくるんですから。お兄さんドキドキものです。はい。こうして生まれた彼女達のことを俺は精魔奇兵と名付けました。一人一人名前は俺が付けてあるけど、紹介はまた機会があつた時にでもしようかな。

でも、この戦力はまだ使いません。普段は「工房」内にて与えられた仕事をしてれています。戦闘ばかりが生活じゃありませんからね。それでも二百年ほど前からコツコツと作り出した我が部隊は万全です。訓練も欠かしていません。部隊連携は完璧です。俺に協力してくれる精霊さん達も悪魔さん達も基本、真面目でいい人ばかりですから怠けることなんかありません。どんどん力を付けていきます。憑依した素体のおかげで基本性能も高いですね。大体、元々の力で比較したら全体の三十七%の向上がみられましたね。下手な魔法使いより強いです。

彼女達も俺の家族です。俺は臆病だから持てる力は持つておく主義なんです。個人の力然り、仲間の力然り、組織の力然り。でも、政治的な権力とか、いりません。邪魔です。俺の持つ戦力は個人で持つには過剰戦力もいいところですから政治的な権力を持つたら縛りが多くなりそうですからね。面倒くさいことは勘弁です。必要な事なら苦勞してでもやりますけどね？例えば家族関係。あとは「紅き翼」の頼みならある程度なら聞いてあげてもいいかなと思ってい

ます。

「お前ら時間だ！行くぞ！」

「ハッーハッハッハッ！！いっちょヤツたるか！！」

「儂らも行くとするか。バカ共ばかりでは心配だからの」

「そうですね。でも、そこがナギのいいところですよ。どんな時にも諦めない。そのバカさがいいのですよ」

「そうかもな。よし！俺達もナギに続くとしよう！！」

おっと。自分の戦力を改めて整理していたら作戦開始のようです。俺達も行かなくちゃ。

「ハオ、ユエ。俺達も行くとしよう」

「ハッ！」「」

「ユエ、私は前に出る。お前は我が君の御身を死守せよ」

「承知した。姉上、無茶してくれるな？我が君が心配なさるからな」

「わかっておるわ。では、行ってくる」

Side out 葵

Side 名の無き帝国軍將兵

私達が連合側の防衛の要とも言える一つの要塞「グレートブリッジ」に大規模転移による奇襲を仕掛けて見事に占領してから数日、予想したものより早くに連合側に動きがあった。どうやら可能な限りの戦力を以ってこの要塞を取り戻すつもりのようにだ。無駄な事を……。戦力差は歴然だと言うのに愚かな奴らだ。

連合が行動を起こすという情報が入ってからしばらく経って連合は情報通りに動き出し戦闘は開始された。戦力差は圧倒的だ。まず、負けることは無いだろう。戦争は兵の質も大事だが、やはり数を揃える事が重要だ。その点、我が軍は質も数も充実している。

それでも油断はしない。慢心は己の目を曇らせることになる。冷静に物事を見極めなければ將兵達を無駄死にさせてしまうことに繋がる。それだけは容認できないことだ。負傷者や死者が出るのは仕方ないがより少なくするのは間違ではないはずだ。

それだと言うのに閣下は余程、連合側に所属する「紅き翼」と名乗る連中がお気に召さないようだ。我が軍全体の二割にも届く、過剰とも言える戦力を彼の者等に向かわせたのだ。戦況的には問題は無いが、これはやり過ぎではないかと私は考える。

考えてみて欲しい。敵、それもたった一部隊にも満たない数の者達に割り振るべきものだろうか？ 答えは否だ。閣下はそれだけ彼等を警戒しているのだろうか？ 今回に限って言えば過剰もいいところだ。閣下は何をそんなに恐れているのだろうか？

「ほ、報告します！！左翼エリア、敵の猛攻に遭い。既に部隊の二十五%以上が壊滅！至急援軍、遣されたし！との事です！」

「なっ！？」

「……………やはりか」

し、信じられん…。左翼エリアと言えば閣下が兵を向かわせた場所ではないか！！どういうことだ！？あそこには全体の四割もの部隊が展開していたのだ！鬼神兵も多く配備してあるのに！なぜだ！？こんな状況などありえん！！

それに閣下はこのことを危惧なされていたのか？まるで、こういうことが分かっていたかのような態度でいらっしやるが…。いったい現場では何が起きているのだ！？それに閣下は何を知っているのだろうか？

「…予備戦力を左翼エリアに投入する。後詰の部隊は鬼神兵と共に後方に展開後、遠距離からの殲滅魔法による攻撃を開始させる」

「ハッ！」

「か、閣下！？それでは我が軍、全ての兵力を投入することになります！それでは戦闘の継続も不可能になりかねません！ご再考を！」

そこまでしななければならない敵が居るとでも言うのですか、閣下？今後の作戦に支障をきたしたとしても打倒しなければならぬほどの敵が…。あそこに居るとも言うのですか！？閣下！なんなんだ？あそこに居るのはなんなんだよ！？

冷静になろうとしてもなれない。それほど異常な事が起きている。戦闘開始から僅か数分で左翼エリアに展開していた部隊の二十五%以上を壊滅まで追い遣られてしまった。もはや、悪夢としか考えられない…。本当にコレは現実なのか？夢なら早く覚めてくれ…。お願いだ…。

Side out 名の無き帝国軍将兵

Side 陽<sup>ハオ</sup>

私は戦場を駆ける。縦横無尽に駆け回り敵を一人また一人と斬り捨てていく。我が君のことはユエに任せてあるので心配は無い。今の私に与えられた役目は少しでも速く戦場を駆けて帝国の連中を後方から攪乱しつつ敵を屠っていく事。ただ、それだけだ。

敵陣深くに切り込み周りは誰も彼も敵ばかりだ。ふむ。この辺りでいいか…。私は程度のいい広場を見つけてそこに立ち止まった。周囲の敵は突然、私が止まった事に観念したと勘違いしたようだ。一人の部隊長らしき男がゆっくりと近づいてくる。

「ようやく観念したか？」

「観念したか、だと？それはお前達の方だ。忠告しよう。我が君は無益な殺生は好まぬ。降伏しろ。…死ぬのは怖かるう？」

「ふん！この状況で強気な事だ。だが女、大人しく投降するなら命

だけは助けてやるが……。どうする？」

「……………下衆が」

目の前の男が私の身体を纏わり付くような視線で見てる感じがした。気持ち悪い……。このような輩は初めてではない。よって何を考えているのかは大体だがわかる。そして私にそのような視線をよこしてきた者の末路は……。

「ふはは！下衆ときたか！……もう一度言おう。投降しろ。命は助かるぞ？……命だけだが、な？くっくっく」

「黙れ。下衆が。この身は全て我が君に捧げしモノ。二振りの剣の片割れにして懐刀。下衆にやるものなど何も無いわ！」

下衆共の頭上に数万の我が分身達を顕現化する。純白に輝く白き剣。真なる我が姿。全てを屠り主たる我が君を護るべく生まれた私の姿。その分身達に、この下衆共は気付きもしない。へらへらと笑い私という獲物を前に舌なめずりしている。

この者達の最期。冥土の土産に教えてやろう……。獲物を前にして愉悦に浸るなど二流だ。ましてや自分達の頭上に命の危険があるといつのに気付かないとは三流だ。一度敵と決めたのなら躊躇わずに一息に殺してやるのが定石というものよ……。さあ、踊れ。愚かな者共よ……！

シュンシュン、ヒュンヒュン、シュンシュン、ヒュンヒュン、  
シュンシュン……。

ザンツ！…グサツ！…スパツ！…ザクツ！…ズバア！

なんだ！？これは！？いつたい！ぎゃあああああ！？

どこからの攻撃だ！？一人ではなかつ！？ぐぼあ！！

見張りは何をしていた！？敵はつ！ぐつ！！？

反撃しろ！反撃しつ！？腕がああああ！！？俺の腕が！！

ま、まさか！？これはあの時の！？いやだ！俺はまだ死にたくない！！！？？

どこに居やがるんだ！？出て来い！俺があいつ！！ぎゃ！！？

応援を要請しろ！このままではこの部隊は壊滅だ！早くしつ！

これはお前がやっているのか！！？今すぐやめつ！？さ…せ…。

この事態に今更、気付いたか者が居たか…。だが、もう遅い。私

の忠告を聞き入れなかったお前達が悪いのだよ。慈悲は最初に提示されていたのだ。それを無視したのは、お前達なのだから。精々、私の舞踏に付き合っておくれ。ふふ…。そして、この身をお前達の下衆な視線で汚したことを後悔しながら死ぬが良い。

Side out ハオ陽

Side キエ  
月

今のは姉上か？どうやら余程、癪に障ったらしいな。ここからでも分かるほどの剣雨が上空に展開されている。少々過剰に過ぎると思うのだが今は戦だ。敵側には同情するが、我が君の前に立ちはだかるのだから諦めてもらおう。それに私が姉上から与えられた役目は我が君の守護。“あの”姉上が我が君のことを任せてきたのだ。失敗は許されぬ…。失敗する気もないが。

「紅き翼」の連中も思い思いに暴れているようだ。其処そこかしこ彼処からバカ二人の何やら楽しそうな笑い声が聞こえてくる。…何が“どちらが多く倒せるか競争だ”か？そんなものまとめて潰してしまえば変わらぬではないか。

そんな風に周囲を観察していたら一部の敵部隊が突出してこちらへと突撃してきた。どうやらこちらには私と我が君しか居らぬから壁は薄いと判断されたようだ。愚かな…。見た目に騙されるなど、戦場いくさばではあってはならぬ事であるのに。

「我が君。敵がこちらへ来ます。ここは私にお任せを」

「うん。お願いするね。…それにしても俺ってあんまり戦ってないなあ」

我が君？それは違いますぞ。我が君が後ろに居てくれるからこそ、吾等は安心して前だけを見て戦えるのですから。背中是我が君が護ってくださるから心配してはおりません。適材適所なですよ？我が君。

ま、まあ？たまに吾等を使ってくれと少し…。とても…。大変嬉しく思いますが！私でなく“姉上が”ですぞ？それは私も…。その…。ふう…。意地を張るのはやめよう。使ってくれとしたり武器の九十九神として、これほど嬉しいことはない。この前使われた時などは嬉しくて思わずいつも以上に力を解き放つてしまい敵部隊の半数を剣の一振りで見つ二つにしてみました…。アレは失敗だった。心なしか我が君もお顔が若干引き攣って居られるように見えた。

「二人？八八ハツ！連合のバカ共め！ここに二人しか配置しないとはな。最低でも十数人は居ると考えていたのだが…。投降しろ。殺しはしない。こんなところで二人しか居ないようなバカだ。殺す気にもならん」

「黙れ、下郎が。我が君の御前である。口を慎まぬか！それに武士ものふならば口ではなく己が力を以って示してみせよ！」

「くっ！優しくしてやってれば付け上がりやがって…。いいだろう！その言葉後悔させてやる！おい！お前達は後ろに居る男を殺せ！」

…この下郎は今何と言った？…我が君を殺す、と言ったのか？…  
ふふ、ふふふ。下衆風情が調子に乗って言うじやないか？私の目の  
前で我が君を陥れる事を言ったのだ。相応の覚悟は出来ているのだ  
ろうな？なに、ただでは殺さぬよ。出血死で徐々に死ぬことを思い  
知りながら、この地で朽ち果てるが良いわ！

ザンッ！…ズバツ！…ザクッ！…。

ほと…。

ほと…。

ビチャッ…！

「？…！！ぎゃああああ！！…？腕が！！！」

「あ、足が！？ぐううううう！！！」

「ぐふっ！！血が！？だ、誰か！助けて！！ああああ…」

「黙れと言ったぞ、下郎共が…」

私は駆けた。目の前の愚か者に向けて斬りかかる。急所ではない。  
それには別の狙いがある。先に宣言した通りにただでは殺さぬため  
だ。敵の腕を斬り捨て、足を斬り捨て、腹を致命傷にならないほど  
に深く斬りつける。全てが即死するには足りなく、戦うには出血で  
不可能な状態。

本来であれば敵は一撃の下に斬り倒す事が定石であろう。敵は何が起きたのかも知らずに死ぬ。それが戦闘者としての一つの到達点だと私は考えるのだ。しかし、今回はそれを敢えて枉げてでも許せぬことが起きた…。

私の目の前で我が君の事を陥れる発言をこの者達はしたのだ…！我慢など出来ようか！？私には出来ない！！普段は姉上が真つ先に切り捨てるのだが今は私だけが守護を担っている。私がやらずに誰がやるというのか！楽に死ぬると思うなよ…。

Side out 月<sup>コエ</sup>

Side 葵

姉さん！事件です！こつちに帝国兵が来て俺達二人しか居ないことが分かって笑いなから降伏を言い渡してきたんです。こつちとしては失笑モノだったんですけどね？降伏？バカじゃないの？確かにここに居るのは俺達しか居ないけどね。だからってあからさまに油断してちゃダメでしょ？

どんな敵でも油断なんかしてはいけませんよ。こいつらバカなの？死ぬの？…ん？…うわぁ。ユエが怒ってます。もうね？容赦なく敵の腕とか足や腹を斬りつけてます。でも、おかしいな？…ん？何がつて？敵の皆さん即死じゃ無いんです。なんて言うか。血だけが派手に出てる感じ？お陰でここいら一帯まるで血の池ですよ？

ハア…。時間かかるようなら援護しようかと考えてたけど必要なさそうです。ユエ、一人無双って感じです。…俺っていらんじやない？ここにいらんじやないよね？ナギ達のところに行こうかな？あつちは敵の数も多いからまだ派手にやってるみたいだし。

でも、ホントにあのバカ二人は元気だよな？かなり離れてるはずなのにここまで笑い声が聞こえて来るんだよ？どれだけ楽しんでるの？でも、いいなあ。楽しそう。だって今の俺ってかなり暇なんだもの。敵が俺のところまで来ません。いや、わかってるよ？ユエが護衛としての役目を果たしているって事ぐらいね。でも、暇なんだもの仕方ないでしょ？

そう言う訳だからここはユエに任せることにして俺は敵陣後方。先行したハオよりも奥深くに行きたいと思えます。ブツちゃけて言っちゃうとね？ユエ一人でここは十分なのよ。俺ってばここに居てもただの余剰戦力扱いだしね？とりあえず、ユエに先に行くことを伝えなくては…。

「ユエ…？ここは任せるから俺、敵陣の奥に行ってくるね」

「なっ！？お待ちください！あと少しで殲滅出来るのです！だからっ！…置いて行かないでください！…！」

え…？あ、ホントだ。あと少しじゃないか…。これなら待つてあげてもいいかな？ふふ、さっきのユエの「置いて行かないで」の発言の時。ちよつと涙目になってるところが可愛いと思った俺は悪くないと思いたい…。悪くないよな？

それとユエ？これだけは言いたい。いいかい？懇願するなら敵を斬る手を止めて話さない。俺と話しながらも戦闘を続けるなんて

無駄に器用な事をしてからに。俺はちゃんと君と目を見て話したいです。なぜかって？俺が寂しいからに決まってるじゃない。

ん？そうこうしているうちに先程までの戦闘音が聞こえなくなってきました。辺りに聞こえるのは倒れた帝国兵の呻き声と風に揺れる葉の音ぐらいです。生きている敵もこのままではいずれ失血死は必至でしょう。バイバイ。生き残れたらいいね？

「我が君。雑事は片付けました。私もお供します。…よろしいですね？」

終わっちゃったよ…。帝国兵の皆さん早過ぎです。ちゃんと訓練しているんでしょうか？その程度じゃ祖国なんか護れませんよ？アレ？この程度なら俺の戦力だけでも帝国倒せるんじゃない？いや、流石にそれは無理…かな？無理って言い切れないから性質が悪いな。

とにかくこの敵はユエが殲滅したので状況はクリアです。次の制圧目標エリアに行くとします。でも「紅き翼」に任せられた、このエリア…。敵の数がおかしいくらいに多いんですけど？お偉いさんの嫌がらせか何か、か？玉碎して来いとか？やだなあ。

とにかくユエの仕事が終わったなら問題ありません。連れて行くことにします。ほら、ユエ行きますよ？うん。ご苦労様ね？大変だったでしょう？一人でやらなくても俺に少し任せてくれればいいのに。…え？ダメ？それじゃ姉上に任せられた役目を果たせない？

なんていい子なんだ…。姉との約束を健気を守ろうとするなんてお兄さん感激です。とりあえず、いっぱい褒めることにします。より具体的に言うと頭をナデナデします。いーこ。いーこ。む？このしつとりとした髪感触…。いいですね！大変いいです！

「わ！我が君！こんな時にやめてください！…あ、ああ！？違うのです！違うのです！決してイヤな訳ではありません！…ただ、ここは戦場<sup>いくさば</sup>。後程では、なりませぬか？」

なるほど…。確かにここは戦場。ゆつくりとユエを一褒める（愛でる）事なんて出来ません。うん。納得です。…ここは、やはりアレでしょう。そう！一刻も早く一帝国兵（邪魔者）を排除しなければならぬのですね？わかります。

少々名残惜しくはありますが仕方ないです。ここは直ぐにでも行動に移しましょう。家族との触れ合いに勝るものはありません。帝国兵が、その障害となるなら…。ふふふ…。さあ？行くとしますか。覚悟はいいか？

「ユエ、行くよ。この戦い終わらせる」

「ハッ！お供いたします！」

帝国兵の部隊が展開している遙か後方に大規模魔法を行使しようとしている集団がありました。鬼神兵も数体確認できますね。どうやら敵さんの目的は「紅き翼」のいるこのエリア一帯のようですね？このままではナギ達を中心に展開している部隊が居る辺りに殲滅魔法規模の爆撃がされてしまいそうです。

そうはさせません。させませんとも。後方に展開している帝国兵部隊は俺がイタダキマス。美味しくいただきますよ？全て、ね…。後方に展開している部隊以上に前衛部隊はまだ多い。一々相手なんかしていられませんよ。殺しすぎて恨みを買うのは面倒ですからね？まあ来たたら来たで返り討ちにしますが。

何か文句でも？俺にとつては大分、昔ですが所謂、復讐者という人が突然俺達に襲撃を仕掛けて来た事がありました。その時は油断してしましてね…。家族の一人が重傷を負ったのです。一応一命は取り留め今も一緒に居ますけどね。

あの時の事は今も忘れませんよ。家族が死ぬかもしれないという言いようも無い絶望感。その時から敵として立ちはだかつて来た者達は、良くて戦闘不能。悪ければ死ぬだけです。余計な情けをかけたリスクを背負うよりは排除して家族の安全を俺は取ります。

おや？

「我が君。陽月が白剣。ハオ、只今帰還いたしました。指定された攻略目標であるエリア一帯の敵、これを殲滅。よって私は本来のお役目、我が君の守護に戻ります」

「無事で良かった。どこも怪我とかしてない？あつたら言つてね？直ぐに治療するから」

「有り難きお言葉！されど我が身は我が君の守護の御為おんために存在するのです。お気になさらぬよう…」

「ハオ、そんな悲しい事言わないで？どんな時だつて家族の心配はするものだよ。…うん。それじゃ、行こうか？」

「ハッ！…（ボソツ）ありがとうございます、我が君」

ハオが無事に帰ってきました。この程度の敵にやられる事はないと信じてますよ？でもね？不安は無いけど心配はしますからね。そ

れとなく八才の事を良く見てみましたが怪我どころか掠り傷一つありません。剣の九十九神としての体が丈夫だからでしょうか？

…あー、俺は思い出した事があるのです。それは今まで一度も八才とユエが大きな傷を負ったところを見た事がないことを…。傷らしきものはつきますよ？着ている服に小さな傷ですけどね。もしもこの時の為に昔、一度だけ「致命傷みたいな怪我を負ったらどうなるか？」と二人に聞いたことがあるんだけど。

その時の答えは「実際になつてみないと分からない。ただ…、しばらく人の姿になれない、ような気がする？」との事。本人達も答える時に疑問系でした。だけど死ぬわけじゃないとは言え、しばらくの間話せないのは寂しく思います。まあ家族がそんな事にならないようにするために色々と準備しているんですけどね。

ん？ふふん 見つけましたよ？魔力反応が大きい場所まで敵と戦うのが面倒だったから迂回して来ましたから相手は今まさに魔法が発動しようとしていますかね？問題ありません。どうやら魔法の系統は火と風の大呪文をそれぞれが集団詠唱で威力を向上させて攻撃するつもりようです。

甘いですね…。火と風の属性というところが相手に運がありません。なぜならこちらには火と風の上級精霊達が居るので相手から相手の魔法を減衰、一時的にですが無効化出来ます。ただ普通の上級精霊では、こうはいきません。俺の自重のない育て方をした事による恩恵というか弊害というか…。ハア…。

まあ今はその事はいいか。とりあえず目の前の部隊を排除しよう。それでは彼女達に協力を頼みましょうか…。

ウーリ……。マリー……。お願い、力を貸して……。

ピシッ！……ピキッ……ピキッ……。

パツリイイーン！……。

敵の魔法は砕かれた……。

Side out 葵

Side 帝国側後方部隊の部隊長

今まさに集団詠唱による大呪文の詠唱が完了した。あとは目標地域へと放つだけとなった。ようやく連合のやつらの喉元に剣を突き立てられるチャンスなのだ。この要塞は何としても死守しなければならない。

オスティアの時は二度も連合に煮え湯を飲まされたが今回はそうはいかない……！今度は、こちらが連合の愚か者達に我らが帝国の力を思い知らせてやる！

「よし。殲滅魔法！発動準備！その後、合図と共に一斉射！いいな！？」

「発動準備、完了！いつでも可能です！」

「連合の馬鹿者共に帝国の誇りと意地を見せてやれ！殲滅魔法！一斉射！開っ！？なんだ！これは！？」

ピシッ！…ピキッ…ピキッ…。

パツリイイーン！…。

な！なんだとおお！？一体何が起こった！？発動準備が終わり、いつでも放てるはずだった殲滅魔法が突然、前触れもなく魔法陣ごとと砕け散ったのだ。俺の目の前でだ！！何があった！？どこを失敗したんだ！ん？あそこに居るのは…？

展開されてる俺の部隊の上空に人影を三人確認した。男を中心に白と黒の女が左右に待機している。まさか、これはあいつらがやったのか？馬鹿な！そのような事が可能なものか！魔法を任意に無効化、無力化するなど出来るはずがないではないか…。

ともかく、この状況は不味い。集結した魔力は既に霧散してしまっている。もう一度、展開するとなると時間がかかってしまう。…どうしたらいい？どうしたら…。そうだ…。今、一時は鬼神兵の砲撃を展開するとして、その間に兵達の回復の時間を稼ぐ。これしかない。

「あ、あー。帝国将兵に告ぐ。大人しく投降するなら生命の保証は

しよう。もちろん条約に基づいて捕虜の扱いは、これを順守する。繰り返す。大人しく投降するなら……」

男がいきなり、そんな事をほざきやがった……！このお……嘗めやがってえ……！こいつはバカなのか！？これだけの数を前に、そんなことを言いやがってえ……！殺してやる……！これは俺だけではなく我らが帝国への侮辱だ……！決して許してはならない……！

「全将兵に告げる……！今、我らの前に愚かにもふざけた事をぬかすために、たった三人で来た馬鹿共が居る……！これは我ら帝国への侮辱も同じだ……！諸君……！目の前のゴミ虫共を殺せ……！殺して後悔させる……！誰に喧嘩を売ったのかを分からせてやるのだ……！」

俺の言葉を合図に風属性で拘束して、そこから威力の高い火属性の魔法の射手の連射、掃射、乱射。火属性で威力の高い中位魔法が放たれようとしていた。今も上空にて不敵な態度で降伏勧告をしている男と、そいつを護るように居る二人の白と黒の女。男はこちらに投降する意思はないと諦めたようでも左右の二人に指示を出した。

それが終わると、こちら側から見ると男をその場に残し白い女が左から黒い女が右から三人はそれぞれに行動、進撃してきた。女達は両手に白の双剣と黒の双剣をこちらに向け突撃してくる。男はその場に残ってなにやら呪文を唱えている。だが、遅い……！こちらは低位の魔法や中位魔法とは言え即発動が可能……！今更、何をしようがこの数の前には塵も同然だ……！

「全部隊……！撃てえ……！！」

…、…、…、…、…。

スイスイー…ン…！！…。

ま、また消えた…だと！？俺の部隊は風と火の魔法では帝国でも屈指の実力者達だぞ！？何度もこんなミスが起こるとは思えない！  
！一体、何が…？ハッ！しまった！？

「呆けていて良いのか、下郎共よ？そのままでは瞬く間に死ぬぞ？」

キイイーン…！！…。

…ばた。…ばた。どさっ…。ズチャ…。…。…。

「戦いを前にして呆けるなど愚かな…。鍛錬が足りぬよ。一度死んで出直すのだな」

キイイーン…！！…。

ズチャ…。…ばた。どさっ…。…ばた。…。…。

「こ、今度は、なにが起こったのだ？女達が一瞬消えて次に現れた時には数十人の兵達が物言わぬ死体にならなっていた…。その死に顔は、まるで自身でも何が起きたのかを分かっていないかのような表情だ。戦場ということでも若干の強張りはあるが、それがなかったとしても自然な表情をしていた。あれは即死だ…。実際、斬られた本人は分からなかったのだろう。それを見ていた俺や他のやつらも理解できないでいた。」

「俺の呼びかけを無視して戦う意志を以って拒んだんだ…。ここからは覚悟してもらおう。さあ！殲滅戦の始まりだ！！」

俺は、この時認識した。俺はここで何の抵抗も出来ずにただ死ぬのだろう、と…。

Side out 帝国側後方部隊の部隊長

……。

……。

…。

第四話「グレートブリッジ奪還作戦・前編」(後書き)

グレートブリッジを少し細かく書いてみたかったです…。

まだ、そんなに見たことないなあ。と思ったので。

ただ単に俺が見つけられてないだけ、かもですけどね。

感想&要望お待ちしています。ではでは。

第五話「グレートブリッジ奪還作戦・後編」(前書き)

後編です。前編とうだったかなあ…。

上手く出来てればいいけど。

まあ続きをどうぞ。

## 第五話「グレートブリッジ奪還作戦・後編」

連合軍は帝国の必死な防衛に膠着状態になる。しかし一部の戦線では、これに該当しない。そう…。「紅き翼」が展開しているエリアである。彼らのみが戦線を押し上げているのだ。連合は彼らを基点に帝国軍を徐々に撃退していった。

そしてここで帝国軍の後方部隊を前に「紅き翼」所属の九重・葵と彼の両腕たるハオ、ユエ達三人は戦いを…。いや、蹂躪を開始した…。

S i d e 葵

やっぱり降伏はしないか…。まあ仕方ないかな。帝国には帝国の誇りや意地があるしね。何もしないで、ただ降伏は出来ないよね。うん。仕方ない。だから彼らには知ってもらおう。絶対的な強者が一体どういうものをかね…。

帝国側の大呪文を一度と低位や中位魔法の一斉射の合計二回の攻撃は無効化した。二回目の一斉射での予想だが、どうやらこの部隊の得意魔法は火と風の二つ。戦法は単純に、まず風の拘束魔法で相手を絡め取って動きを止める。そして動けない相手を属性魔法の中で比較的高い威力の火属性の魔法の一斉射で相手を仕留める。単純

故に決まれば十分なダメージを敵に与えることができる。

だが、それも俺達ではなかったらの話だったね。残念！さつきも言ったように俺の家族には精霊さん達が居るのですから！彼女達を象徴する属性と、それに類する属性は無効化または威力を減衰させる事が出来る。

魔法に関してはこれでいいかな？精霊さん達にはこの戦闘の間だけ相手の魔法の無力化とかを頼んでおいたし。ハオとユエには帝国が攻撃態勢を整えるのを確認した時に左右から挟撃を仕掛けるように指示した。

彼女達が敵に奇襲を仕掛け相手が混乱している間に俺は敵を屠る準備をする。この世界で言うところの魔法を使うための始動キーにあたるものを自分の脳内に意識を集中して、描いていく。やがて脳内には巨大で緻密、そして機械の回路のような魔方陣が意識される。俺はそれに魔力を流し込む。すると仄かに光っていた魔法陣は命を吹き込まれたかのように眩しく輝きだす。

… アストラル・ライン アクション  
… 精神魔導回路、起動。

… バラレル・キャスター スタート  
… 並列詠唱、開始。

… クイック・キャスター スタート  
… 高速詠唱、開始。

… 術式「燃える天空・改」を展開。

… 術式「燃える天空・改」を展開。

… 術式「燃える天空・改」を展開。

スベル・メモリー  
コンプリート  
… 全術式展開、完了。

セレクション  
アニメレート  
… 選択、広域殲滅型を形成。

… 集束。 … 集束。 … 集束。

… 圧縮。 … 圧縮。 … 圧縮。

オール・コンプリート  
… 全工程、完了。

意識内の全工程を終えて後は魔法を放つためのトリガーボイスを  
発するのみとなった。二人に後退するように念話で指示を出す。

【…二人とも！退け！！…】

【【…ハッ！…】】

「…大規模殲滅魔法「メギド」、エグザート発動！焼き払え！」

…ヒュウウウウウンン…！！…。

放たれた膨大な熱と圧倒的な光の塊は帝国兵達へ迫る。

破壊の光が地上に着弾した…。

次の瞬間…。

…カッ！！…ドヒュウウウウウン！！！！！！！！

破滅の炎は一瞬の閃光の後、思う俟にその力を振るう。

帝国兵、鬼神兵…分け隔て無く、その炎で全てを喰らい尽くしてい

った。

後に残るのは焼け爛れた不毛の大地のみ…。

ああ……………。うん…。

…シクツた。やり過ぎたわ…。地形が変わったどころか、なんかドロドロの溶岩になってるんですけど…？どうすんのコレ？俺のせい？いやいやいや！違うでしょう！？だってこのエリアの敵の殲滅が俺らに任されたことでしょ？…アレ？殲滅じゃなくて撃退だった…かな？アレレー？

アハ、アハハハハ！…。ちよつと失敗しちゃった てへっ！…じやないよ！！？え？なにこれ？俺のせいになるの！？ちよつとやめてよね！力加減間違えただけでしょ？俺、悪くないよ？ホントだって！うわー…。明日からどうしようかなー？確実に危険人物扱いじゃね？

死体とか焼却じゃなくて消滅だもんな…。人も鬼神兵もみんな関係なく…。…逃げるか？危険人物扱いされて捕まるくらいなら逃げちやうか？でも、ナギ達を残して行くのもな…。…ああダメだ。考えが全部ネガティブな方向に行っちゃうな。

「我が君、お疲れ様でした！実に見事な戦果でございましたな！私は嬉しいですよ！」

「姉上、落ち着けというに…。しかし、私も同じ思いです。お見事でした」

「うん…。二人とも、ありがとね…」

二人が今回の戦果を褒めてくれます。…少し気分が落ち着きました。やっぱり家族は偉大ですね。うん。とりあえず、今回の目的は要塞「グレートブリッジ」を取り戻すことだから問題無いでしょ。無事一（？）に取り戻したんだから文句は無いはずだ。…だよな？ だったらいいな…。

Side out 葵

Side ナギ

今、すげー爆発したのは確か…。あ…。葵達が担当してたところか？あいつら死んでないかな？…大丈夫か。確かアレは葵の仕業だよな？…つてかよう！？ホント、すげーな！？ここからでも分かるぐらい異常な魔法だったな！何だアレ！？「燃える天空」か？でも、それにしちや範囲も威力も桁違いだし。アレ、半径数キロがクレーターじゃねえか！…俺にも出来るか？やってみるか！？

「ナギ…。お前、今変な事考えたろ？」

「……………なんにも考えてねえよ！うつさいぞ！？詠春！」

「その返答までの間が信用出来ないと云ってるんだ！」

いつも変なところで詠春は勘が鋭いから困るな。おちおち大魔法

もぶつ放せねえじゃねえか。あーあー！葵はいいなー！好きなだけ暴れられてよー？俺なんかちょーっ！敵陣の中に飛び込むだけで怒られるんだぜ？やってられねーっての！

あつ！？そつか！今度やらかす時は葵に着いて行けばよくな？そうすれば詠春達とは別行動！好きなだけ暴れられる！…かも！？…あー…。ごめん。やっぱ、ダメだわ。葵は問題ねえけど、ツクモガミの姉妹が問題だ。絶対なんか言われる。

あいつら葵の事となると目の色が変わるからな…。あの状態の二人には俺でも勝てる気がしねえわ、マジで。ただでさえ、あの剣の前では魔法障壁が紙ほどにも役に立たねえのにキレると更にスペックが跳ね上がるんだからな…。アレは、もう手に負えない。無理！メンドクサイ！

出合ったばかりの時に何度かケンカでやり合ったけど…。信じられるか？あの二人は俺の「雷の斧」を涼しい顔で斬り捨てるんだよ…。それがムカついたからムキになって「千の雷」をぶつ放そうとした時は詠春とお師匠にマジボコりにされたっけなあ…。その後、木に吊るされたな。

あーっ！くそっ！思い出したらムカついてきた！大体よお、何もボコった拳げ匂に木に吊るすことないじゃんかよ！？半日だぞ！？半日も吊るされたんだよ…。頭に血が上って来て死ぬかと思った。こっそりアオイに助けてもらわなかったら…。あの時はマジで助かったな。うん。

ともかく！アオイの大魔法をくらって後方部隊が全滅したことで帝国側は浮き足立ってやがる。攻めるなら今がチャンスだな。

「よし！野郎共、アオイが作ったチャンスだ！無駄にするなよ！？行くぞ！」

Side out ナギ

Side 名も無き連合軍将兵

信じられない…。

その一言に尽きた。人格的な癖は強いものの間違いなく最高位の魔法使い達。連合軍所属の彼ら「紅き翼」の一人が帝国の後方部隊を一瞬のうちに消滅させてしまったのだ。私はこれを行った者に恐怖したのと同時に子供のような憧憬にも似た感情を感じた。

何者にも負けない力。敵を完膚なきまでに打ち倒す力強いその姿。それは、今は忘れた子供の頃に憧れたヒーローを思い出させる。戦力は数で劣っていた我々連合軍だが、これを見たらその考えは吹き飛んでしまった。

実に帝国軍の推定二割ほどが消え去った…。帝国側は突然の事態に浮き足立ち、一部が恐慌状態に陥っていた。無理もないことだ。私だってこんな事が自軍で起きたらと思うと恐怖で頭がおかしくなってしまうことだろう。

連合軍はこれを好機と考え攻勢に打って出る事にした。「紅き翼」は我々よりも早くに敵陣に向けて突撃していた。そして彼らも個

々々が規格外の強さを誇っている。その中でも彼ら「紅き翼」のリーダー格の人物、ナギ・スプリングフィールド。彼は、ただしく一騎当千の働きをしているだろう。

数えるのも馬鹿らしくなる敵の集団を彼は暴力的なまでの「雷の暴風」で蹂躪していった。やがて彼は敵部隊が陣形を整えているのを確認したら特大の呪文「千の雷」を放つことで壊滅させ、これをほぼ無力化。

そしてナギ・スプリングフィールドと並ぶように走る人物が居た。ジャック・ラカン、それが彼の名だ。彼も一騎当千に相応しい戦果を挙げている。近寄る敵をその拳で吹き飛ばし、離れた敵は彼のアーティファクトであるような様々な剣で串刺しにされていく。…時折、戦艦を切っているように見えるのが、気のせいだと思いたい。

他にも剣技では並ぶ者無しといった近衛・詠春。様々な魔法に造詣が深く、その中でも重力魔法では並ぶものが無いアルビレオ・イマ。そしてナギ・スプリングフィールドの師匠だというゼクト…。彼らは帝国側から見たら斉しく悪魔に見えることだろう。

しかし我々連合からは皆、この事態から救ってくれる救世主達に見えるのだ。彼らはこれからの連合を引っ張って行く存在となることだろう。それが実に楽しみみな事に思え私は知らずに自分の口元が笑っているのだが私自身はそれに気付かなかった。

Side out 名も無き連合軍将兵

Side 名も無き帝国軍將軍

もはやこの戦いの結末は見えたな…。我ら帝国の敗北だ。この戦況を覆す手立てがもう見つからない…。既に全軍の半数以上が壊滅か全滅…。軍の建て直しも容易ではないだろう。

「全軍に撤退命令を出せ！帝国本国に帰還する！」

「…っ！は、はい！」

失敗だった…。よもや、この戦力差での敗北とは…。連合の魔法使い共はバケモノか？事態が変わったのは予備兵力と後詰を向かわせた左翼エリア後方。全軍の四割の戦力が左翼エリアに展開されていた。それが崩れそうになったために、更に予備兵力と後詰に遠距離から殲滅魔法で砲撃させよう向かわせたのだが予備兵力と後詰は連合のたった三人に敗北…。全滅させられた。

あのだだの魔法では有り得ないほどの破壊力…。膨大な量の魔力で造り出された破壊の象徴。着弾点からざっと見ても半径数キロが溶岩状になり冷めた一部の地面はガラスの結晶になっている。熱量は計り知れない。前線の者は何が起きたのかもわからずに蒸発したことだろう。苦しまずに逝けたのが僅かな救いかもしれない…。

天へと旅立った兵士諸君…。すまんと謝罪することはしか出来ないこの身を許せとは言わん。だが、せめて心安らかに眠ってくれるところを祈る…。

Side out 名も無き帝国軍將軍

とある記録から…

グレートブリッジ奪還作戦は連合側の勝利に終わった。両軍が膠着状態に陥っていたのだが、そこに状況を変えるほどの一撃を連合側が与えた事が決定打となり帝国側は撤退まで追いやられたのだ。

その一撃を与えたのは連合軍「紅き翼」所属のメンバー達の一人とされているが現時点の詳細は不明。しかし彼らの活躍は疑いようの無いものであるのも事実であることから、彼らのうちの一人であるのは間違いないことと思われる。

そう彼らの活躍によるものが大きい。全員が全員、一騎当千の者達だ。彼らだけで帝国側の四割以上の戦力を相手に戦い、これに勝利したのだからその力は凄まじいものがある。連合はこの大戦を切欠にして帝国領へと攻め入ることになる。

短いがここで終わりとしよう。続きは、いずれまたここに記す。

とある記録より…

俺は今戦闘が終わり近くの町に寄り宿泊施設の一室に居る。他の皆も思い思いに疲れた身体を癒すために暫しの休息をとっている。

勝った…。嬉しいよお…。何がって？今回の作戦に勝った事がじゃないよ？勝つのは当たり前だからソレじゃない。じゃあ何が嬉しいか？それは俺が捕まっつてないことがだよ！ずっとアレがやり過ぎだったんじゃないかと不安だったんだ…。

「紅き翼」の皆には予めアレを俺がやったことを黙ってもらおうかぼかしてもらおう事を脅は…ちゃんとお願ひして約束してもらった。…ホントダヨ？別に俺の後ろに九十九神の姉妹に精霊さん達（このため彼女達の存在がナギ達にバレた）や悪魔さん達、精魔奇兵の全軍が居たとしてもお願いダヨ？みんな、ガクガクブルブル震えてたけど恫喝とか脅迫じゃないヨ？

はあ、皆が快く納得して約束してくれたのに…。せっかくの準備が無駄になっちゃった。とりあえず、お咎めは無しで、それどころか長々とした贅辞を、まあ要約すると「良くやった」との有り難いお言葉をお偉いさんから俺を含めた「紅き翼」の面々に頂いたわけですよ。

隠さなくてもよかったのか…。せっかくの功績が…。うう、報奨金とか貰えたかもしれないのに失敗したかな？んー？…あー。いや、これで良かったかもしれない。よくよく考えたら今はいいけど、近い将来、俺の力を脅威に感じた誰かに狙われるかもしれない…。それに俺の身体って不老だしね？この事だけでもバレたら変な研究所的な何かに拉致られそうだしね。老い先短くてお偉い誰かさん達とか、ね？

うん！これは結果オーライというやつじゃないかな？まあ来たら

来たで返り討ちだけどね。兵数的なものでは圧倒的に負けてはいるけど兵の質や技術では機械的にも魔法的にも圧倒的にこちらが勝ってる。ゲリラ戦なら負けないね。

…話が逸れた。結構、物騒な方向に…。自重しないとなあ…。

「我が君？どうかなされましたか？」

「うっん、なんでもないよ」

まさか、物騒な事考えていました、なんて言えないよね。こっちから仕掛けることはしないだけだけどね。

「姉上、我が君はお疲れなのでは？此度の戦は大戦おおこくせんだったこともある」

「む？そうなのですか？そうならば少し早いですが、お休みになられますか？」

「んー？大丈夫。それより二人はどう？身体に問題ない？」

今回はよく戦ってくれたからどこか怪我してないかが心配です。

…まあ毎度の事ながら殆んど無傷に見えますけどね。それでも心配なのは変わりありませんから。

「魔力は多少消耗いたしました但活動には問題ありません」

「姉上の言うとおりで。それよりも久方ぶりに力を思う存分、振るう事が出来ましたので充足感のようなものすらありますな」

「そう。二人とも今回はすごかったもんね。今回もお疲れ様。次からも頼りにしてるよ」

ホントにすごかった。ある意味じゃ俺よりも強いんじゃないかと思う時があるよ？でも、そんな二人の強いところが大好きです。

「ハッ、お任せください！」

いい返事です。従者の鏡みたいな子達ですよ？傲慢になりますね。この子達が家族だと思つと俺も嬉しく感じますなあ。はっはっはっ。

今夜は念入りにこの子達のお手入れをしてあげたいと思います。…えっちい事じゃないよ？剣のお手入れだから、そんな事ありませんよ。まあいつも終わった後の彼女達は顔を真っ赤にしていますかね？…どうしたんだろうか？毎回、思うけど俺のお手入れに不手際があつたのだろうか？

Side out 葵

そうして今日は終わった。今回の大戦から「紅き翼」は、また戦線を転々としながら戦うことになる。その活躍は凄まじいものがあり、彼らが戦場に居れば勝てる時まで言われるほどの知名度を獲得していたのだ。

「紅き翼」のリーダー、ナギ・スプリングフィールドは連合から最強の魔法使いとして「千の呪文の男」と讃えられる事になる。逆

サウザンドマスター

に帝国からは「連合の赤毛の悪魔」と恐れられる。

そして、しばらく転戦を繰り返していると新たな仲間を二人迎えた。名前はガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグと高畑・T・タカミチという。彼らは捜査で、とある組織の事を追っているらしい。その過程で「紅き翼」に接触を持つ事にしたとのことだ。

彼ら「紅き翼」の行く先は遠く厳しいものとなる。しかし彼らはそれらを諦めずに進むことだろう。その先にある、か細い希望の光を目指して…。

……。

……。

……。

……。

第五話「グレート＝ブリッジ奪還作戦・後編」(後書き)

グレート＝ブリッジ奪還作戦編、完了！

どうかな…？

楽しいですかね？

感想&要望お待ちしております。ではでは。

第六話「日常と変化と逃亡と」(前書き)

大きな戦を乗り切ったので一休み的な？

はあ、私も癒しが欲しい…。

主にリアルな方で、ね？

## 第六話「日常と変化と逃亡と」

それはある日の事だった。「紅き翼」のメンバーは新たな仲間の一人ガトウからナギ、詠春、ジャックに集まるようにと連絡があったので彼に指定された本国首都内にある一つの建物にて待機していた。

Side 葵

ナギ達はガトウに呼ばれて出かけていった。アルとゼクトも首都までは着いて行ったようだ。二人とも休暇中で暇だからって理由みただけだな。俺か？俺は今、忙しいのよ。「工房」内で造った兵器なんだけどね？ソレの総仕上げなんだ。

「主様あ？こちらはこれで終わりですわあ」

「ありがとう、ミリー。次はあっちの方の確認お願いね？」

「はあい」

今は家族総出で作業中です。とりあえず今後の兵器の運用のために整備や修理をするための場所を用意するために「工房」に新しく隣接させる機能「ドッグ」の調整もあるのだよ。空間技術とか時間魔法とか特殊な機材とか物資の搬入と必要な物の製造など……。とにかく色々やることあるんだ。

「主、兵装や装甲などの艤装は取り付けが完了いたしましたぞ。後はシステム面ですな」

「マリー、ご苦労様。システム面はウーリの班が後でやっつくからマリー達の班は三十分の休憩に入ってね？」

「御意。皆にはそのように伝えます」

ふう。面倒くさいけど仕事は確りやりますよ？じゃないと碌な大人になりませんか。商品を作る際にも妥協はしません。不良品なんか作ったらお店の信用問題になるしね。…クレーマーって怖いんだね？正面からじゃお店としても手が出せないから対応が面倒くさい事面倒くさい事…。謝り倒しましたよ？まあ後日その人はそれ以降、姿を見せることはなかったけどね？クスクスクス…。

「あるじー？」「ドッグ」の調整殆んど終わったよー。確認お願いねー？」

「んー？おー。相変わらずウーリはいい仕事してくれるね。俺は助かってるよ。頭を撫でてあげよう」

なでなで、なでなで、なでなで…。

「~~~~つ …はふう」

まあ、そんなこんなで完成まで後ちよつとです！戦艦つていいですよねー？ふふふ…。おつと今のは聞かなかつた事にしてくださいね？皆には何も知らせずに大変な状況になつたら「こんな事もあろうかと！」ってやりたいじゃないですか？

錬金術師も、ある方面から見れば科学者ですからね？ やつぱり「こんな事もあるつかと！」という台詞には懂れます。何としても一度は言わなければ…。それに俺の個人戦力の精霊さん達を含めた精魔奇兵さん達の事もバレたしね？ 失敗したわあ…。兵器関連はバレてないけど現兵力はバレちゃったし。あれは軽率だったなあ。

まあ後悔しても仕方ないね。なるようになるでしょう。「紅き翼」以外にはバレてないし。…ん？ 精魔奇兵の子がこっちに来るね。何だろ？ あの子は精魔の士官達のまとめ役です。元は悪魔さんよ？ それで彼女の名前はアイリス。愛称はアイリ。ホント、どうしたんだろ？ あっ！ 訓練報告？」

「司令閣下！ 本日の訓練項目の完了をお伝えに参りました！」

「あー。ありがとね。でもアイリ？ 毎回言っけど任務中以外は、もう少し楽にしてくれていいんだよ？」

「いえ！ 自分はまだ、司令閣下に報告するという役目がありますれば！ 今はまだ任務中であると考えます！」

相変わらず、この子、堅いです…。私生活は、あんなに優しくても柔らかい雰囲気なのに任務中は鬼のように自分に厳しいです。それでも仲間思いなのは確かだから人望もあるし優秀ですね。

「じゃあ、たった今報告は終わったから後は楽にしていんだよね？」

「ハッ！…は？ し、司令閣下？」

「家族には名前で呼んでほしいなあ？…それとも俺の名前なんか呼ぶのイヤ、とか？…ぐすっ…（ちらっ）」

「し、ししし司令閣下！？あっ！いや、葵君？わかった！わかりましたから！お願い！泣かないですよ？」

ふふふのふ。大成功ですよ。多少、強引だったけど砕けた態度にしてやりました。

「くくくっ！騙されたね？ウソ泣きですよ」

「しれっ！…葵君！そういうのホントやめてよね？間違っつてハオさんに誤解されたら大変なんだからね！？」

あー…。ごめん…。それは考えてなかったわあ。ここは素直に謝っておこう。うん。

「すまん。そこまで考えてなかった。今度部隊の皆にお菓子の差し入れを持って行くから許してね？」

「…それって葵君のお手製ですか？」

え…？作るの？俺が？…部隊の全員分？二百人以上のお菓子を俺一人で？えー…。

「ふふ、冗談です。さっきの仕返しです。ふふふ、本気にしないでください」

「ほ、ほんとに？よかったー…」

アイリ、冗談キツイよ。確かに俺一人でも作る物によっちゃ出来なくはないけどさ。一人は大変だよ。お手伝いが欲しいです。

「ふふふ。それじゃあ、これが訓練内容の報告書になります。後でちゃんと読んで下さいね?」

「はいはい。ちゃんと読んでくよ。じゃあね、アイリ。ゆっくり休んで」

「了解です、葵君」

ふう…。んー? 時期的に言えば今頃ナギ達は王女と面会しているころかなあ。仕事がなければ俺も行ったのに…。いや、仕事と言っても殆んど趣味だけだね? どちらかと言えば家族達と物造りしてる方が好きなんだよ?…戦闘はって?んー。戦争って技術の進歩を早めることにはなるけど無くすものの方が圧倒的に多いしね。ハア…。不毛だよな?

とりあえずの平穏な時代は、あと二十年ほど先か…。長いような短いような微妙な感じ? だいたいさあ、秘密結社「完全なる世界」だっけ? 彼らにも自分達の正義があるのは分かるけどさ。周りに理解を求めないってのはどうなのかね?…それともそれが出来ない理由でもある、とか?

んー…。うん。これは俺が考えても仕方のないことだな。俺には俺の戦いがあるしね? 何者にも束縛されること無く自由に生きたいっていう思いがあるのですよ。他は知ったことじゃないね。それでもまあ、親友達と女性や子供くらいは助けようかな。…男? ほどほどですよ。当然じゃないですか。誰が好き好んで野郎を助けたいと思いますか? 俺はしませんよ。むさいのヤですからね。それに、こ

れは俺の偏見だけど男なら自分で何とかしてほしいですな。さて、作業を続けようかな…。

Side out 葵

「紅き翼」のとある記録から…

ガトウから呼び出されたナギ、詠春、ジャックの三人は本国首都内にある一つの建物の中にて然るお方と出会うことになる。その人物は連合のマクギル元老院議員が建物の中へと案内されて現れた。彼の人の名はアリカ・アナルキア・エンテオフュシア。ウエスペルタティア王国の王女殿下である。

帝国と連合に挟まれたウエスペルタティア王国。彼の国は、その位置的な事情ゆえに両大国に翻弄されてきた。アリカ・アナルキア・エンテオフュシア殿下は自らが調停役となり今回の戦争を終わらせようとしたが…失敗に終わった。

そこで助けを求めるために「紅き翼」へと協力を要請、ガトウが接触することにした。そして「紅き翼」リーダーのナギを初めとした他二人との会談となったのだ。王女殿下の要請をナギ達は協力を承諾。戦争の裏に潜む者達、秘密結社「完全なる世界」の調査を本格的に開始する。

調査の途中経過の報告から証拠は無いが、かなりの数の「完全なる世界」のシンパが居ることが判明。帝国、連合は言うに及ばず。

歴史と伝統の国「ウエスペルタティア王国」の王都オスティア内部にまで彼らの魔の手は伸びていた。

以降、これからも調査を続行するものとする。

「紅き翼」のとある記録より…

Side ガトウ

アレから調査を進めて数週間…。思ったより事態に進展がみられない。どうしたものか？エイシユンやアル、ゼクトの三人は優秀ではあるが俺達には人手が無い。圧倒的に足りない。アオイ達はする事があるとか言って手伝ってくれないしな。

ん？そういえばアオイ達は今頃どこに居るんだ？最近姿をよく消すことがあるが…。また、碌でもないことを仕出かすつもりじゃないだろうな？この前の戦闘なんか「新しい魔法を考えた！」とか言ってる発動地点から数十キロに渡るほど深い溝を造りやがって…！人工の川でも造る気か！？と本気で説教したっけな…。

結局、その説教の後、アオイに見つかからないようハオさんが俺を路地裏に連れ込んだ時は…。んん！？なんだったか？何でそこから記憶が綺麗さっぱり無いんだ？くっ！…頭が痛い？思い出す事すら拒否するようなことだったのか！？ふう…。落ち着け、ガトウ。今ソレはカンケイナイ…。

「ガトウ？そんなとこで何してんの？」

「んん？ああ、アオイか…。三日ぶりか？用事は終わったのか？」

本当に三日もどこに行っていたんだか。こっちは調査が思うように進まないというのに…。

「うん。殆んど終わったよ。後は試運転を残すのみかな。何もかもが順調だね。それでガトウは最近どうよ？」

こいつ…！こっちは情報が殆んど集まらないで苦戦しているつてのにい！せめて人手だけでも何とかなれば、まだマシになるんだがな…。はあ…。

「全然だ。こつても人手が無いんじゃ話しにならんよ。ここは時間をかけてじっくりやるしかない」

「人手？…何人ぐらい？」

「何人でもいい。とにかく人手は多ければ多いほどいいような状況だ。お前も手伝えよ」

本当にアオイが手伝ってくれるだけでも随分、違う。長生きしているとはエイシユンから聞いていたが、そのためか何事も要領が正しいのだ。是非手伝ってもらいたい…。主に俺の睡眠時間のために…。

「手伝うのはまた今度ね？でも、人手ねえ…。百人くらいだったら紹介しようか？こっちの作業も一段落したし、それくらいならいいよ？」

「な…に？」

「だから百人。彼女達って優秀だよ？戦闘や諜報は当たり前、護衛からメイドさんまで何でもござれだから。しかも皆、美人！」

何なんだ？その完璧超人な人達は…。アオイイ…。お前な！そういう事はもっと早めに言えよな！？こっちは徹夜が続いて眠いんだよ！

「いったいどこにそんな人材が居ると言うんだ！？嘘だったら承知せんぞおおお！？是非とも紹介してください！この野郎！」

「わ、わわわかったから落ち着いて、ガトウ！ええい！首から手を離せっ！」

「す、すまん…。ここ最近、寝不足でな。少し取り乱してしまった。つい興奮してやってしまった。やはりこの歳になると徹夜が身体に響くな。自分でも何を言ったのか覚えてないのが怖いな…。」

「けほっ、けほっ、まあいいけどね。それで紹介するとしてお給金の事だけど、その辺は大丈夫なの？」

「あ？あ、ああ。任せてくれ。王女殿下やマクギル元老院議員には俺からちゃんと話しを通しておくから心配ないはずだ」

「ふむふむ。じゃあ百人紹介するとして一人頭…これくらいでどうよ？」

「…なっ！？これは…。…いくらなんでも高くないか？」

ゼロが…ひい、ふう、みい、よう、いつ……。高くない？俺が捜査官だった頃の月給三か月分なんですけど？これを百人分か？本当に？

「危険手当を入れてだよ？だいたい普通に雇うとしたらこれの二倍はするし、更に危険手当があるんだからね？ガトウは仲間だから初回サービスだよ」

「むむむ。そうか…。わかった。お二方には話しておくから決まり次第百人を派遣してくれ」

「毎度」それじゃ決まったら教えてね？」

そう言つとアオイは後ろ手に手を振って去って行った。

Side out ガトウ

「紅き翼」のとある記録から…

「完全なる世界」…。当初の予想では国際的マフィアや戦争で武器を売り捌く死の商人達。彼らのような戦争で大きな利益を得ようとしている者達の仕業ではないかと考えていた。しかし彼らのような者達を侮るわけではないが、ここまで完璧に隠すことの出来る組織を作り出せるとは考えられない。

未だにその真の正体は謎のままだった…。しかし捜査していたガトウ達は、相手の徹底した秘密主義もあるが、こちらの人手が圧倒的に足りなかったために捜査は難航していた。しかし、それも葵のお陰で人材の問題も解消される事になった。

葵の紹介した者達は優秀だった。次々と「完全なる世界」の活動拠点となる場所を探し当て、更には「完全なる世界」の協力者やシンパ達の名前などを状況証拠ではあるが入手することが出来た。

そしてその手に入れた情報の中に信じたくない名前があった。この国の執政官でメガロメセンブリアのナンバー2の実力者ほどの人物までが「完全なる世界」の関係者だったのだ。しかし現段階では確たる証拠が無いのもあり、踏み込むことも出来ない。

そんな時だった。本国の首都に買い物に出かけていた王女殿下とその護衛のナギが白昼堂々街中で「完全なる世界」と思われる者達に襲撃されたのだ。不幸中の幸いと言えればいいのか。王女殿下とナギは細かな傷はあるものの無事であった。

だが問題があった。二人は襲撃に遭った次の日に帰還したのだ。そう、ナギは王女殿下を連れて一昼夜暴れまわったのだ。これに詠春は怒ったが当の王女殿下自身が「楽しかった」の一言で今回の事は不問になった。

しかし、今回の事件は決して無駄ではなかったのだ。例の執政官が「完全なる世界」と繋がっているであろう証拠の手紙をナギは敵の拠点を襲撃した時に手に入れたのだ。ガトウは、この事をマクギル元老院議員に連絡した。

王女殿下は单身自ら帝国の第三皇女と接触するために目立たぬよ

うに小型船にて向かうことにした。出発は極秘裏に行われた事もあり寂しいものがあつたが気心の知れた者達が見送りに来ていたので暗いものにはならなかつた。

そして、今……。手に入れた証拠を手にナギ達「紅き翼」の面々はマクギル元老院議員のもとに明日、向かう……。この時は思いもしなかつた。あのような事が起きるとは……。

「紅き翼」のとある記録より……

## S i d e 葵

俺達は今手に入れた証拠品を持ってマクギル元老院議員を訪ねていた。ガトウに紹介したうちの部隊は召集して回収済みだし報酬もばつちりだつたな。臨時収入だつたし。皆にはお土産奮発しないと。しかし、なんだろ？……なんか忘れてる気がするな？

「マクギル元老院議員？」

「ご苦労。証拠品はオリジナルだろうね？」

あれ？マクギル議員って種族的には人間だつたよな？なんだろ？感じが違うな……。まるで造られたような気配と匂いがある。「完全なる世界」を警戒して身代わりとかかな？

「ハ……それで法務官は、まだいらっしやいませんか？」

「法務官は…来られぬ事となった」

「…。ハ…？」

ガトウが意外そうにしてるな？マクギル議員は、約束は守る方とガトウから聞いてたのにこれはどういうことだ？それにこの部屋に入ってきてからマクギル議員の目がおかしい…。まるで無機質な…。感情の揺らぎが感じられないような…。

「…あれから少し考えたのだがね。せつかくの勝ち戦だ。ここに来て…慌てて水を差すのも、やはりどうかと思ってね」

「ハア…」

「……………」

なんかマクギル議員の雰囲気が妙だな。ナギも不信に思ってるみたいだし…。ハオとユエもさつきから変に警戒してるし…。

「いや…その…。これは私の意見ではない。そのように考える者も多いということだ。時期が悪い。時を待つのだ。君達も無念だろうが今回は手を引いてだな…」

少しカマかけに聞いてみるか？何も無ければそれでよし。笑いのジョークということにしよう。それでは、おほんっ…。

「マクギル議員？聞きたいことがある。その身体は…どうした？」

「……………何を言っているのかね？わしは…」

言いよどんだね？これは確定かな？…。他の仲間に逃げるように  
念話で知らせなくちゃ。あっ、もしもし…。うん…。そう…。脱出  
の準備しておいてくれる？うん。…それじゃ、ね。…これでよし。  
あとは…。

「あんたマクギル議員じゃねえな。何者だ？」

ボウウウウウン！！

おお。偽マクギル議員の頭が燃えている。ナギ、威力だけならす  
ごいね？ちゃんと勉強すればもつと強くなれるのに…。惜しいなあ。  
とりあえずナギに一言…。

「おー…。ナイスヒットだ、ナギ」

「我が君！お下がりに下さい！」「」

「はっはっ！当たったり前よ！」「

ハオ、ユエ。いつも、ありがとうね。頼りにしてます。

「おう！？ちょー！？ナギおまつ…。何やってんだよ！？元老院  
議員の頭、いきなり燃やして、おまつ！？…」

「バーカ。よく見てみな、おっさん」

「何っ！？？」

ふうん。無傷か。結構固い障壁だね。でも、ハオとユエの攻撃は

防げるのかな？…無理っぽくね？貫通でしょ。

「よく…わかったね？「千の呪文の男」。…それに「白と黒の双姫」に守護されし者。こんな簡単に見破られるとは、もう少し研究が必要のようだ」

ハオとユエにそんな二つ名がついてたの？…知らなかった。今まで気にしたことなんかなかったしなあ。うーん。こういう場合ってお祝いとかしたほうがいいのか？

「マクギル議員はどうした！？」

「本物のマクギル元老院議員は残念ながら、既にメガ口湾の底だよ…」

海の藻屑ですね？わかります。…そうか、あの人は逝ったのか。個人的に飲みに行った事があったけど気さくでいい人だったな。ハア…。やっぱりいい人ほど先に逝くものかな？また、飲み友達がいなくなっちゃった…。

「てめえ！」

「バカナギ！迂闊に突っ込むな！」

ナギ、相手の手の内のわからない内に仕掛けるのは愚か者のすることだ。

「通しませんよ…」

「くらえ…」

ドドドオオオオオオンン！！！！

案の定、伏兵が居たようだ。それもこいつら……。それなりに強いよ？でも、残念だね？水と火の使い手のようですよ？精霊さん達に頼めば後は肉弾戦しか相手は出来ないね。こっちは構わずに魔法撃ち放題だけど！

「強えぞ、やつら！」

「ハツハツ！だが、生身の敵だ！政治家やらと違ってガチ勝負出来る分……万倍、やりやすぜ！！！」

ジャックつて頭脳労働は向いてないもんね？バカだからなあ……。

「フ……。わ、わしだ！マクギル議員だつ……。……うむ、反逆者だ！……ああ。……うむ、確かだ！奴らに暗殺されかけた！……は、早く救援を頼む！スプリングフィールドを初め「紅き翼」の奴らは帝国のスパイだった！今も狙われている！軍に連絡を……！」

「げ……！？」

「やられたな……」

うつむ。してやられた。マクギル議員の声で連合軍に俺達が議員を暗殺しようとした犯人だとするなんて……。単純ゆえに効果的だな。敵ながら見事だ。ん……。ここで形振り構わずに倒す事も出来るけど……。それだと問題が多過ぎるよね？ならここは……。

「ナギ、ここは退却しよう。状況はこちらが不利だ……。転移は俺が

やるから」

「くっ！…わかった。ここは退く…」

ナギ、ありがとうね。ここは我慢だつて。大丈夫、後で万倍にして返してあげようね？くっくっくっ…。ただでは済ませないからね？この俺に逃亡生活なんてさせるんだから覚悟してろや？

「…そういうわけなんで！ここは退かせてもらうね？」

「させると…思つのかい！？」

「ハオオ！ユエエ！」

出来ますよ。何言っているの？俺に不可能な事なんて…。気分次第だけど少ししかないよ？…多分。それに俺には頼りになる家族達が居るからね。ふふ…。

「「お前如きに我が君をやらせぬよ！」」

「くっ！…なに！？」

すげー…。やっぱり障壁切れたよ…。やっぱり自重って大事なんだってこういう時思つよね？でも、妥協はしないがな！作る者としてそこは譲らんよ！

「じゃーねー。また会おうじゃないか？…無表情君？」

「…。逃がしたか…まあいい。精々、逃げるがいいさ」

はあ……。これからは逃亡生活か。やだな……。とりあえず、「紅き翼」の隠れ家にも行こう。……あ！隠れ家に強力な結界張っちゃえばよくな？あそこって人避けの結界しかないし。……ダメか。魔力反応でバレるわ。ハア……。とにかく行くか？

S i d e o u t 葵

……。

……。

……。

第六話「日常と変化と逃亡と」（後書き）

ん。もう三、四話で「紅き翼」編は終わりにしたいな…。  
早く学園編に入って木乃香とエヴァを出したいな…。  
早く書けばいいだけか…orz

第七話「逃亡と捜索と思い出と」(前書き)

タイトルに特に意味はない。

なんとなく付けてみたかっただけです。

意味は後々付けたいとです…。

では、どうぞ。

## 第七話「逃亡と捜索と思い出と」

S i d e 葵

どうも！葵です。現在、「紅き翼」は帝国だけでなく連合からも追われる身です。泣きそうですわ…。昨日までの英雄扱いがいきなり議員暗殺未遂で犯罪者扱いです。マジ泣きそう…。別に英雄とかは正直な話しどうでもいいけど犯人扱いだけはユルセナイナア…。フフフ…。

「我が君、どうかされましたか？」

「何やら暗い気を纏っておられたようですが…」

いかん、いかん。つい不穏な事を考えていたら雰囲気が悪くなつてしまったようだ。でも、しかたないよね？逃亡生活ですよ？もう、精神的に、ね？わかるでしょ？そう！面倒くさいの！…は？精神的に追い詰められて参ってるんじゃないの？って？

違うよ？何言ってるの？これでも俺は七百と数十年を狂わずに生きてきたのよ。今更、高が逃亡生活くらいで参ったりしませんよ。まあ時間は無駄にあるから暇を持って余す事には我慢ならなかった時期もあつただけだね…。退屈は最大の敵だわ…。

「ハオ、ユエ…。大丈夫、何でもないよ。ちょっと今の状況に理不尽なものを感じただけだから」

「ふむ。我が君がお望みならば御下命とともに吾等全軍は連合も帝国も、みな片付けてみせますが…」

ハオ…。いったい、君は、どう考えたらその結論に達する事になるんだ？そんな面倒な事したら余計に大変じゃないかな？時間的にはこちらに分があるけど人的にも物量的にもこちらは圧倒的に少ないよ…。まあ、要は負けなければいいだけだけどね？やりようは幾らでもある。でもなあ…。

「いや、それはいいからね。ハオは落ち着こうか？俺も落ち着くからさ。ユエ、お茶淹れてくれる？」

「承知。前に手に入れた良い茶葉がございますのでそれでお淹れしましょう」

「むう…。私は落ち着いておりますぞ？」

うん、わかってるよ？正直な話し正面から戦わなければ俺も勝てる気がするね。この時代の魔法使って全体的に…。なんて言うかな…。そう…。脆いよね？鍛錬、修練、修行など…。言い方は色々あるけどナギ達みたいな一部の人達を除いて密度が薄いよ。

アレはダメでしょう？魔法の教本なんかもね？術式や属性間の関係性とかはある程度技術として確立してわかってるんだからさ。具体的に記せばいいのに表現が抽象的だし非効率的で無駄が多いの。まあ門外不出の物もあるかもだから一概には言えないけどね。

それに「火よ灯れ」なんて初歩の初歩である呪文があるけど火が点くまで延々と繰り返すなんて時間の無駄でしょうよ。だって魔力の感覚がわからんのよ？ヤルだけ時間の無駄無駄。そんな事するく

らいなら誰かに間接的でもその人の身体に魔力を軽く流してみた方が早いし時間の省略にもなるよ。

…まあ一人一人魔力を流すなんて面倒なものもあるけどね？個人に師事してるならそんな事ないけど…魔法学校とかは、ね？人数多いし無茶かな…。この世界の魔法使い達は基本的に魔法の基礎を習ったら後は術式をアレンジして自分の使い易いようにしていくみたいだから最初さえ何とかなれば後はどうとでもなるよね？話しが脱線しすぎた…。

「ハオ？俺はね、連合も帝国も滅ぼす事なんかしないよ」

「我が君？」

「だって、そうだろ？そんな事したって俺には一文の得にもならないし。寧ろ、より面倒な事になると思うしね」

「しかし我が君、吾らならば可能なのでは？この前の戦でもそれは明らかではありませんか」

んー…。それを言われると弱いなあ。俺は思わず苦笑してしまう。だって武力だけなら勝てるからね。でも、それをやるには時代が悪過ぎる。昔の混沌としていた時代ならやりようはあったけど、今のある程度管理された社会でそれをやるにはリスクが高すぎるからね。

今考えると俺がこの世界に来た時なら丁度良かったかもしれないなあ。あー…。やっぱりダメかな。旧世界は兎も角、この新世界は無茶かな。だってこの世界を創ったのがラスボスだった気がする。名前は…。何だったかな…？引籠り神？…なんか違う気がするなあ。ああダメだ…忘れたな。まあ時期が近づいたら思い出すかな…。思

い出せるといいなあ。いや、別にいいか？

「可能だよ？出来るけどダメ。普段は平穩なのがいいの」

「平穩…。そう…ですな。穏やかな時は良い…。心安らぎまする」

そうでしょ？のんびり過ごせばいいじゃない。もちろん戦う時は戦うけどね？一度始めたら容赦なんてしません。細胞の一欠けらまで消滅させます。あっ、模擬戦みたいな練習死合は別よ？ちゃんと消滅しないように怪我程度まで手加減します。お？ユエが戻ってきました。

「我が君、お茶をお淹れしました」

「ありがとう、ユエ。ふふ、ハオも平和なのがいいでしょ？こうしてゆっくりお茶も出来るしね」

「はい。我が君が心穏やかに過ごせるならば、私は…これ以上の喜びはありません」

ハオもわかってくれて嬉しいな。おう？このお茶美味しいね。後でユエにメーカーを聞いておかないと…。

「姉上、我が君？何の話でしょうか？」

「はははっ。何でもないよ。ただ平和なのはいいね？って話しかか  
ら」

「うむ。平和なのは良い事でありますな」

「ん？んん？？」

「ふふふ」「ははは」

ユエの淹れてくれたお茶が美味しいです。緑茶はいいね、はい。平和だなあ。…なんて考えてるんですけどね？違うんですよ…。現実逃避的な事をしていましたが俺達って一応逃亡者の者なんだよね…。ハア…。溜め息も出ます…。あーあ、幸せが逃げちゃうなあ。

ふう。まあそんなこんなで俺達は無事に「紅き翼」の個人的な隠れ家を拠点にして行方不明の王女殿下の行方を探したりしています。…主に俺の家族達が、ですがね？…ちょっと聞いてくださいよ。これってば前金なしの成功報酬だけなんですよ？つまり失敗したら報酬なし！どうゆう事、これって？

ことの発端は深刻な人手不足でしたよ？そこでガトウがこの前俺が紹介した人達をまた紹介してくれと言ってきたのですよ。俺は「いいけど、お金は？」って聞いたたら何と言ったと思います？彼ね、「今は無いが後で必ず支払う」とか言い出したんですよ？

ガトウ君？君さあ俺達の事舐めてんのかね？俺達は前金で払ってもらうのがモットーなのよ。それか前と後で半分とかね？ソレが何？全額を後金？ふざけてんの？そんなのに俺の家族に危険を冒せと言うのか？これはアレか？ケンカ売ってんのか？買うぞコラ？

そんなやりとりが俺とガトウとであったんですがね？最後の手段と言わんばかりにガトウがね。何したと思う？ザ 土下座！を綺麗にしてくれやがったんですよ！？大の男にこんな事させたんじゃない動かないわけにはいかないじゃない？

引き受けてやりましたよ！ちゃんと書類にして成功したら必ず払うことを宣誓させましたよ。そう成功したら、ね？…ハメラレタ。汚くない？これって汚くない？成否に係わらず払えよ…。こちらら慈善事業じゃないんだから。

いや、わかってるよ？ちゃんと確認しなかった俺も悪いんだけどさ。何も仲間までハメル事ないじゃん。俺のテンション、ガタ落ちですよ？契約しちゃったから一方的に破るわけにもいかないしね？…向こうが破ってくれないかな？そうすれば逃げられるのに…。…無理か。ハア…。

「はあ…。お茶が美味しい…」

「紅き翼」と葵達が王女殿下を探して数日…。

搜索に出ている皆から結果報告が来ました。でも本当にここにある王女殿下が居るの？それもヘラス帝国の第三皇女まで居るって言うじゃないか。いや自分の家族が報告してきたことだから信じてるよ？悪い癖だけど無条件に、ね。俺も、うる覚えで名前は忘れたけど、なんだかホニヤララ迷宮みたいだったのは…。ごめん、ウソ。マジで覚えてないわ…。

それで皆が見つつけてきたのは今では古代遺跡が立ち並ぶ中にあるその名も「夜の迷宮」。昔はここも賑やかなものだったのに今じゃ遺跡扱いか…。なぜだか、とても寂しい気持ちにさせられます。自分だけが周りから置いてきぼりにあったような気にさせられるから不思議なものですよね？俺には家族達が居るからそんな事は無いのに、ね？

「我が君？」

「どうかなされましたか？」

「ん？なにがかな？」

「いえ、なにやらお顔を寂しそうにしておられたように感じましたので…」

「そうですね？なにかございましたら吾らにお申し付けください。必ず憂いは晴らしてみせますぞ」

二人には心配をさせてしまったようです。数百年も前の事を思い出して懐かしさに身を任せていたら…。つい、いらぬ事まで考えってしまったのですな。はっはっはっ！イカンイカン！人生前向きに考えなくては！俺はまだ若いんだから！だって不老だし！見た目二十歳前後にしか見えないよ！？

ふう…。落ち着け、俺。今は思い出を振り返る事よりもする事がある。まずはハオとユエに何でもない事を伝えなくては！…なに？皆に王女殿下の事を伝えなくていいのかだつて？…この場合、家族の不安を取り除くこと以外に大事な事なんかあるか！戯けが！！

「大丈夫だよ。ハオもユエもありがとね。…ちょっと昔を思い出してただけだから」

「昔…ですか？」

「そうだよ、ユエ。あの場所には俺がこの世界に発生したばかりの頃に居た事があってね。その時の事を思い出してたんだ」

ドラゴンから逃げてきて辿り着いたのがここだったからなあ…。割と思い出深いのよ？ここは。昔、流れ着いた俺を、ここにあった宿屋の店主に助けてもらった事は今でも覚えてます。豪快で気前のいい人だったな。

「…という事は吾等が生まれる前の事ですな？…くっ！口惜しい！その頃から吾等も御一緒出来ていればもっと長い時間を過ごせたものを…！私は口惜しいですぞお！？」

ハオ？それを今言われてもしかたない事だと思うよ？それにハオはもっと長くって言うけど俺達六百年近く一緒に居るんよ？…まあハオ達は最初の百年、まだ九十九神化してなかったから意識的には五百年近くかもしれないけど。

「姉上…。気持ちはわからんでもないが落ち着くのだ。我が君が困惑しておられるではないか」

「ハッ！？…つい取り乱してしまいました。すみませぬ、我が君」

いや？びっくりはしたけど面白かったよ？ハオの一緒に居たいという気持ちがストレートに伝わってきて嬉しかったしね。…もう！本当に可愛いな！その家族思いなところが、たまりませんな！

「はは、いいよ。ハオのお陰で気分が楽になった。やっぱり楽しい時間の方がいいよね」

「ん？ん？ん？ん？ん？ユエ、よくわからんのだが我が君は立ち直られたのか？」

「そのようだぞ。それも姉上のお陰のようだ。お手柄であるぞ」

うむ。やはり家族は偉大だと俺は思うのですよ。別に落ち込んでいたわけじゃなくて思い出に浸っていただけなんだけどね。たとえば勘違いでも心配してくれるのですから嬉しいものですな。さてとハオ達の不安も取り除けたのでナギ達に王女殿下達の事を伝えに行きますかね。

そしてナギ達「紅き翼」の皆に集まってもらって捜索の結果報告を伝えます。今現在の王女殿下の居場所、そこには王女殿下と接触する筈だったヘラス帝国の第三皇女であるテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアまでと一緒に幽閉されていることがわかった。

どうでもいいけどなんだって王族の名前ってこんなに長いのかな？俺、初めて聞いた時は舌を噛みそうになったよ。うん、ごめん。マジでどうでもいいな。話しを続けるか…。

「そうか…。アリカ王女は「夜の迷宮」に居られるのか」

「よしっ！それじゃチャチャツと助け出しちまおうぜ！」

「なんだあ？姫さんの事が心配でたまりません！つてかあ？」

「ははっ！ナギも存外に可愛らしいところがあるもんだな！」

「んあ！？ジャックもアオイも！うつせえぞ！コラアアアアア！！」

捜査の中心であり依頼人のガトウとナギ達に、あらかた報告が終わり早速救出作戦に移る事になった。この時はナギが率先して動くとしたからジャックと一緒にやってからかかってやったら無茶苦茶暴れやがった…。まあフルぼっこにしてやったがね。バカ者が俺達に勝てるわけないじゃん。俺とジャックは殆んど見てるだけだったけどね…。

「くそっー！四人がかりなんて卑怯だぞっー！！」

「毎回毎回懲りる事のない小童だな。我が君の守護たる…」

「…吾らが居るといふのに。学習能力がないのか？」

「なあ、アオイよお？四人がかりと言ったが俺達何かしたか？殆んどお前んとこの強え姉ちゃん達がやったよな？」

「あは、あはは…。人数だけを見れば最初から二対一だったんだからいいんじゃない？結果は変わらんとと思うよ？」

…そう変わらんよ。そこそこ異常な力と長い年月かけて培われた体術から魔法など様々な技術をものにした俺に勝てるかよ。まあ俺が動く俺だけじゃなくて先に八才とユエの二人が動くんだから考えてみると容赦ないよな…。ごめん、ナギ。…でもやるからには容赦はしないからね？負けるのはイヤなのよ。

それで王女殿下達の救出だけど場所はもう判明していて俺の家族達が監視もしているから移動しても直ぐにわかるようになっていた。報告からは最低でも命の危険はないようなので焦る必要もない。敵に突っ込もうとしたナギに言い聞かせてから作戦を立ててゆく。

「コリア！下ろせや！？」

「アオイ…。ナギの奴が…」

「何、ガトウ？何か聞こえるの？」

「アオイ！聞こえてるんだろ！？下ろせつつつてんだよ！」

「…いや、聞こえるのか？つてお前…。…いいのか？」

「いいの、いいの。肉体労働組みが居ても作戦を立てるのに邪魔なだけなんだから」

「それはそうだが…」

「コラッー！いい加げっ！？《ドゴンッー！》《ぐへるー！》……」

まったく、もう…。雉も鳴かずに撃たれまいに…。なぐむ。

「我が君。少々小うるさいのは黙らせてまいりました。どうぞ、続きを」

「ありがとだね、ユエ。…それで作戦なんだけど…。ガトウ、どうなの？」

「…いや、もう何も言うまい。それで何だって？」

「?????…まあいいや。作戦なんだけど…」

そして決まった作戦は極めてシンプル。まずは正面から堂々と攻め込む、もちろんこれは陽動だよ？正面からでも叩き潰せるけど幽閉されてる王女殿下達の生命がかかっているから無茶出来ないよ。報酬の件がなければナギに賛同して突撃かますんだけどね…。

よって却下！お金が貰えないなんてイヤです…。イヤすぎます！家族のためなら幾らでも使うけど王女殿下はナギといい仲だしね？まったく関係ないわけじゃないけど俺にとっては、まだ知り合い程度なんよ。命張ってまで助けたいとは思いませんな！

まあ今回はナギや皆の頼みもあるから助けるけどね。報酬もかかっているしね！死なせません。助けますよ？死にそうな怪我ならどんだけでも大丈夫。即死とかでなければ何とかなる。まあ後で使った物の料金の請求に伺いますけどね？また話しが脱線した…。これが歳をとったという事なのかな？いかなあ、ハア。

…で、ですね？陽動している間に少数精鋭で王女殿下達を救出するという作戦なのですよ。監視とその他バックアップは俺の家族達です。こういう状況の場合は出来るだけシンプルな作戦の方が大き

な失敗もないしね。フォローも効きやすいのよ。

「こんな感じかな。ガトウ、どうかな？」

「うーむ…。ああ、これでいいと思う。救出作戦なんかはシンプルなものの方が成功率は高いからな」

「詠春とアル、ゼクトは？」

「問題ないな。後は救出部隊と陽同部隊を誰がするのかを決めるだけだな」

「そうですね。誰が危険な陽動の役割をするかが問題です」

「僕もこれで良いと思うぞ。役割を決めるとしよう」

結局、正面から攻めるのは悪魔三人娘達に任せます。あの三人娘、前回の「グレートブリッジ奪還作戦」に参加出来なかった事が不満だったらしいよ？暴れたかつたんだつてさ…。いいじゃん？のんびり出来てさ。大体君達まで戦うとしたら過剰戦力もいいところでしょう？今の君達の力だけは魔神と言っても過言じゃないんだから。流石に帝国兵が可哀想だよ…。

最近、気が付いたんだけどね？俺の家族達皆一（下士官と兵隊は除く）と、この新旧世界の繋がりが希薄になってきてるようなのよ。精霊さん達は自我がより強固なものとなって始まりの四精霊と言われる原初の精霊のようになりかけて力が半端ないし。

悪魔達三人娘はもう世界の縛りが殆んどないからこちらに顕現しても力の制限がないし残ってるその縛りも決して切れる事のない俺

との契約的な繋がりを残すのみで何の弊害もないしさ。特殊な召喚とかいらんのよ？本来なら色々儀式的な召喚をして一つずつ世界の枷を外していくものなのにな。

九十九神の姉妹は…。わかるだろう？俺の自重ない当時の行いのせいで最早彼女達は「刀神」と言っても過言じゃない段階に入ってるんだよ！人工的な刀剣の神様だよ？当時の俺ってダメじゃね？やり過ぎだろ…。

そんなこんなで作戦が決まったから悪魔達三人娘のオリビエと心の中で今回の事を話してます。作戦の事を彼女達はどうかやら俺の目と耳を通して知っていたようです。顕現していなくてもそのくらいなら今の彼女達は出来るようだね。俺のプライバシーってどこ逝った…？後で聞いたら俺から遮断できるみたいです。よかったあ、イヤ、マジで。

【…なあ葵はさ、あたし達とは別行動なんだよね？…】

【…そうだね、俺は救出組みの方に行くからね…】

【…そっか。ねえ？あたし達が頑張れば葵の危険は少しくらい減るかな？…】

【…減ると思つよ？でも、オリビエ達に無理をしてもらってまでしてほしいとは思わないけどね…】

ホントにね？無理はしてほしくないよ。彼女達なんだかんと言つて基本的に優しいから油断して襲われるとかになったら心配だし。仮にそうなたら殲滅戦も視野に入れとかないかね？仕返しは万倍返しだよ。基本でしょ？

【…減るんだね？葵が怪我する可能性が減るんだよね？ならあたし頑張るよ。絶対、成功させるよ…】

【…だから無理はしないでよ？心配なのは変わらないんだから…】

何度も言っけど無理しないでよ？お願いだからさ。お兄さん、心配なのよ。

【…何よそれ？心配なのはあたし達だつて同じなんだから、葵は人間であたしは悪魔。身体の基本スペックが違うんだから大丈夫よ…】

【…そういう意味じゃないんだけど。怪我とかに気を付けてねって話しだよ。女の子なんだから傷とか残ったら大変でしょ？…】

関係なくない？悪魔つて言つても女の子ですよ？いくら身体自体が丈夫とは言え傷なんか残ったら大変。お嫁に行けなくなっちゃうよ？…。やっぱり、今の無し！お嫁になんか行かせません！お兄さんは行かせませんよおおおお！！

【…葵はあたしに…あたし達に傷が残ったら、イヤ？…】

【…イヤだよ？まあ傷があるからって嫌いになるなんて事はないけどね。皆、綺麗なんだから勿体無いじゃん？…】

【…ありがと、葵…】

【…何言ってんだか、当然でしょ？…】

少し照れくさい…。オリビエがしおらしいです。普段の勝気な姿があるからギャップが…。可愛いなあもう！絶対に嫁には出しません！こない子、どこの馬の骨ともわからない奴に渡してなるものか！ん、ん、っ！！すまん、取り乱した…。

そういうことで今回は悪魔三人娘の彼女達に不満を発散させるために正面から奴ら相手に暴れてもらおうと思います。これでいくらかストレスが発散できればいいな…。彼女達も悪魔だから戦う事は嫌いじゃないみたいだしね。楽しんでもらえればいいけど…。無理かな？あの無表情君ぐらいの使い手が居れば少しは楽しめるかもだけど。それでも怪しいけどね？

突入メンバーより少ない人数の陽動と言うのもアレなんだけど、この場合は正解だと思う。巻き込まれて死にたくないし…。いや死なないよ？俺は、ね…。周りは知らないけど、何もわからずに蒸発するんじゃないかな？もしくは消滅？

ザコなら魔力放出だけで消し飛ばんじやないかな？まあそれはつまらないから皆、普段は力を抑えているみたいだけどね。普段から周りを威圧しちゃうのは相手が可哀想ってか、それじゃ喫茶「クレイドル」で働けないから困るのよ、俺がね。皆はそれがわかってるから最低限まで抑えてくれるの。助かります。

威圧感のある喫茶店なんて俺がイヤすぎるからね。のんびり平和な店内にしたいのよ。思わず午睡にまどろんでしまいそうな程に安心感のあるお店にね。実際の話しスゴイ安全地帯だよ？人数で言えば軍隊並みの家族達が守ってくれるからね。質は最高峰だし。

そして各々の役割が決まり後日救出作戦を開始するために動く事になった。

S i d e o u t 葵

第七話「逃亡と捜索と思い出と」（後書き）

今、気が付いたけどオリキャラ設定出してない…。

ん〜でも物語中にちよこちよこ紹介してるからいらんか…。

原作突入したらいくつか番外編とか出したいですね。

葵の過去八百年の間とか、ね？

では〜、また次回にでも。

第八話「突入と救出と脱出と」(前書き)

作戦開始！みたいな？

逃亡編は早く終わらせたいです。

字数と時間がかかってちつとも進みやしない！

はあ…。

でも負けない！だって「ネギま！」が好きだから！

では、どうぞ。

## 第八話「突入と救出と脱出と」

救出作戦当日…。

S i d e    オリビエ

葵に呼び出されてあたし達は今「夜の迷宮」の近くに居る。内容は葵の目と耳を通してあたし達も見聞きしていたから大体はわかっている。ウェスペルタティア王国のアリカ王女救出のためにあたし達に陽動をしてくれと葵に頼まれた。

そう、葵に頼まれたのだ！前回の大規模な戦闘ではあたし達は呼ばれなかったから不満が溜まっていたのもある。あの時あたし達が居れば瞬く間に帝国兵なんか消し飛ばしてあげたのに…。なにも葵自身が戦うことなんてない、戦いはあたし達が引き受けるよ？怪我したら危ないじゃない。

もし葵が怪我なんて負うものなら、あたしは葵を傷つけたそいつを生かしておける…ジシंगाナイヨ？ううん、間違いなく殺しちゃう…。だからお願い、後ろに居てよ…。葵が強いのは知ってるけど心配なのは変わらないんだからさ。

はあ…。まあここに居ない人に言ってもしょうがないんだけど、ね？葵は今あの「紅き翼」の人間達と行動しているから、ここはあたしとリビエラそれにシルビアの三体だけ。これだけとは言え十分なんだけどね？どちらかと言うと過剰なぐらいだと思つ。

これが殲滅戦なら完璧なのになあ。楽なのになあ。暴れたいなあ。

あー、あー…。

「オリビエちゃん、作戦開始時間よ〜?」

「え?もうそんな時間?んー、大した敵が居ないから気が緩んでるのかな?」

「オリビエ…ダメ…お兄ちゃんの…お願いだから…ちゃんとやる…」

「そうよ〜?葵ちゃんのお願いですもの〜。しっかり役目を果たさないダメダメよ〜?」

「わかってるわよ!手なんか抜くものですか(ニヤリ)。葵からの指示は「出来るだけ派手に」という事…。それさえちゃんとやれば後は好きにしていって言われてるんだから、役目は果たすわよ!さあて二人とも準備はいい?派手に暴れるわよ!」

「ふふふ、わかりましたわ〜!」

「お願い…されたから…うん!」

あたし達は駆け出して比較的広い場所に陣取り周囲を警戒する。敵側にはまだあたし達が侵入したのに気付いてないようだ。鈍いよね?でも、どんなに力をつけてもあたし達が油断なんかするもんか。あたし達くらいの力があれば早々簡単にはやられないけど警戒するに越したことはない。下手に怪我なんかしたら葵に心配かけちゃうからね。

「リビエラ!まずはアンタからブチかましてやんな!」

「は〜い！いつくわよ〜！！」

両腕を頭上に掲げてリビエラは掌に魔力を集束させていく。最初は小さな火が現れるだけけど徐々に大きくなる。それは電化した炎の塊。形は球状でその周りをバチバチと過剰エネルギーが奔っている。これは炎の塊などと生温い物ではなく正真正銘プラズマだ。触れれば瞬く間に蒸発されるだろう。

リビエラはそのプラズマの塊に広域爆発術式を組み込んで殲滅：つて！？ちよつと待て！！殲滅しちゃダメでしょ！たしかにブチかませとは言ったが、それはダメでしょ！！葵達があの中には居るんだから！こんな物騒な物を発動させるわけにはいかない！止めなくては！！

「リビエラ！ちよつとタイム！ストップ！待って！」

「もう〜！オリビエちゃん、な〜に？今いいところなんだけど〜」

「いいところなんだけど〜、じゃないでしょ！？そんなのやったら、この辺クレーターどころの騒ぎじゃないでしょが！消滅だよ！？消滅！あの中には葵だって居るんだからね！？」

「葵ちゃんならこれぐらい大丈夫よ〜。（ボソツ）他の人はわからないけど〜…。とにかく大丈夫よ〜」

「今ボソツと言ったでしょ！？人質になつてる人達が居るんだから建物関係は壊しちゃダメ！失敗したら葵に怒られるよ！」

「む〜…。他の人達はどうでもいいけど〜、葵ちゃんに怒られるのはイヤだわ〜。嫌われちゃうものね〜。それじゃ〜…こつこつというのは

どうかしら〜!？」

リビエラはそう言うのと今まで維持していたプラズマ塊の術式を變更したのか徐々に分裂・細分化を始めた。もう目に見えないほどの細かさだ。光っている霧状のモノを想像したらこうなるだろうなとあたしは思った。周りがキラキラと光っていて場違いにも綺麗だなとも感じた。周囲は物凄く暑いけど…。

でも、ちょっと待って…。さっきのプラズマ塊がコレなんだよね?ということは、だよ?コレ全部が一斉に爆発なんかしたら…?…っ!?!?マズくない!?ヤバイヨネ?リビエラはなんだって今回はこんな過激な事ばかりするの?あたしは不思議に思った。

「リ、リビエラさん?なんで今回はこんなに…過激なんでしょうか?」

「????. オリビエちゃん、何を言っているの?そんなの当たり前で、理由は一つしかないじゃない?」

「いや、当たり前で理由は一つって言われても、ねえ?…わかんないから聞いているんだけど…」

「うふふ〜。ダメダメね〜?オリビエちゃんたら〜。そんなの…葵ちゃんに迷惑をかけた悪い子達に〜、お仕置きするために決まってるじゃない。…絶対に許さないわ〜。フフ、フフフ…」

あ…。あたしは理性では「いけない、止めなくては」と考えているのにあたしの欲望的な部分はリビエラの言葉に揺れた。確かにリビエラの言うとおりだ。葵が今追われる立場になったのはこいつ等のせいだ。何であたしが止めないといけないのか?

止める必要なくない？寧ろバンバンやっちゃいな！…みたいな？  
生きている価値がこいつ等にあるの？あー…ダメだ。思考が全部暗  
い方向にしかない…。どうしよう？いやいや、悩む必要ないか  
葵の願いは「出来るだけ派手に」だ。…これ以上ないくらい派手  
じゃない（ニヤリ）？

「リビエラ…。やっちゃいな！生かしておく必要なんか無いわ！で  
も建物の中には葵達が居るから加減はするのよ！？」

「うふふ。わかったわ、任せて。…さあ死を振り撒け…「貪  
り喰らう霧」…」

リビエラの言の葉に霧は流動して指向性を持って敵が居ると思わ  
れる方向に向かって行く。周りには霧が晴れて一瞬の後、其処彼  
処から小規模の爆発音とそれに紛れて悲痛な悲鳴が聞こえ始める。  
そして濃い血の香りと肉を焼いたような匂いが立ち込めはじめた。

さつきリビエラが倒した敵数はだいたい全体の四割ってところか  
な？敵襲にやつと気付いた敵があたし達の方へと向かってくる。雑  
多な魔力反応達の中にそこそこ大きな反応が数個ほどあるけど…ダ  
メね。あたし達の相手にならないわ。

「よおしっ！リビエラ、相変わらず上手いじゃない！それじゃ後は  
援護に専念！あたしとシルビアは向かってくる敵を片っ端から殺り  
に行くわよ！」

「いつもどおりね？お姉さんにお任せよ。…それっ！」

「オリビエ…どっちが…多く倒すか…競争…する？」

「ハッハー！やってやるうじゃない！負けないわよ！？」

「うん…ボクも…負けない！」

シルビアが駆け出しして行き、あたしはシルビアの横に並ぶように走る。遠くに黒いローブを羽織った魔法使い然とした姿の敵が多数見えてきた。あたし達は敵が視界に入ったと同時に一気に加速して相手の背後にまわり自分達それぞれの武器で敵を排除していく。リビエラも遠距離からの援護で「貪り喰らう霧」をあたし達の周りを包んで近寄せないようにして精確に敵の頭を打ち抜いていった。気温が凄まじく上がってる気がするわ…。

「ハッハーッ！あたし達を止められる奴はいないのか！？」

「くそっ！何なんだ、こいつらは！？」

「たった三体の下級悪魔に何を梃子摺っているんだ！！困め！困んで袋叩きにしろ！」

「それが出来ればいいね！？まあ？あんた達じゃ無理だろうけど！あーはっはっはっ！！！」

「何をお！！！？うぐっ！がはっ！？」

「余所見…してる余裕なんて…ないよ？」

正直退屈だと思う、敵が弱すぎるのよね。はあ、しっかし、リビエラの殺り方ってエゲツないわあ…。見た目キラキラ綺麗な霧みたいなのに触れたら連鎖的に小規模爆発起こすし体内に取り込んだ



葵君：司令閣下が今回の救出作戦に参加している。自分達は作戦全体の援護と他のバックアップだ。今回の作戦に自分達「精魔奇兵」の参加数は自分を含めた指揮官となる下士官二人に一中隊12人が二中隊の計26人だ。

我が第一中隊と第二中隊は司令閣下直属の精鋭中の精鋭だ。任務の成功率は高く部隊の規律も良い。そして何より…葵君の事が大好きです！優しく微笑んでくれる葵君！お菓子の差し入れをしてくれる葵君！…絶対に守ります！命に代えてもなんて言うかと葵君は悲しむからそんな事しません。

ゆえに私達は強くなりました！誰にも負けないように！今も訓練を疎かにはしていません！將軍達にはまだ勝てた事ありませんが…でも、それ以外は完璧です！情報管制から事務。メイドさんなんかもやりますね。葵君だけにですけど…いやん、ご主人様…後は護衛官から戦争屋、暗殺から殲滅戦、搦め手は諜報戦なんかもやりません。…ハニートラップなんかはしません。したくもないです。葵君相手なら…いやん、もう

んんっ！…話しがそれましたね。とにかく私…もとい、自分達は作戦区域に展開中だ。自分達第一中隊の今回の任務は脱出路の確保。現場の遺跡「夜の迷宮」にはほぼ全体に亘って転移による進入を妨害する結果が展開されているので自分達の役目は転移妨害をしている者、又は装置の排除。

第二中隊の役目は陽動部隊のバックアップと敵情報伝達の誘導と妨害。…陽動部隊のバックアップは正直必要ないと思われるので敵情報伝達の誘導と妨害がメインになると考えられる。その辺りは現場の指揮官に一任してあるので彼女に任せようと思う。

「指揮官殿、転移妨害の発信地点となる場所の特定が出来ました。全部で二箇所です。メインとは別に予備があるものと思われませんが」

「よろしい。…では部隊を二つに分けて同時に制圧する事とする。第一小隊と第二小隊は自分に続きメインを制圧、排除する。第三小隊と第四小隊は予備と思われる場所を急襲、排除しろ。任務完了を確認したら速やかに脱出。…いいか!?こんなところで一人の犠牲も出すんじゃないぞ!そんな事になれば悲しむのは誰だ!?我らが司令閣下だ!全員何としても生き残れ!以上!では作戦開始!」

「了解!」

自分の号令とともに小隊長の彼女達がハキハキとした返事で駆け出していく。瞬く間に小隊長達は自分の小隊を連れて目標に向けて進撃を開始した。さて、自分達も彼女達に負けていられない。完璧に任務をこなさなくては…。…そしてこの任務が成功したら葵君に褒めてもらえるだろうか?…ふふ。そんなあ、ご褒美に今度デートでもなんて…うふふ、いやん いやん

「指揮官殿?」

「…なんでもない。自分達は「夜の迷宮」内にある転移妨害のメインの排除だ。行くぞ!」

「了解!」

さあ頑張ろう。私達の働きに葵君の生命がかかっているのだから。任務は必ず果たします。私の愛おしい人…!

「夜の迷宮」内、通路…。

部隊を率いて通路を自分達は進んで行く。小隊を交互に進ませる。これはお互いに死角を最小限にして進むためだ。ここまでは敵の策敵にはかからずにやってきたが目標の近くに近づくとつれて警備の者が増えてきた。

まだ接敵してはいないが時間の問題だろう…。あちらが気付く前にこちらから攻めなければ奇襲する意味がない。時間は限られているのだから急がなくてはならない。敵に見つからないように通路を進んで行くと、ついに目標となる装置とそれを制御する三人の魔法使いを発見した。

見つけた…。自分は仲間達に指示を出して敵を半円形に囲むように展開する。全員が配置に着いた事を確認したら後は時機を見て突入の合図をするだけ…。息を殺して魔法使い達の様子を窺う。敵は外の様子が気になるのか全員が落ち着きなくソワソワしている。

仲間達が既に配置に着いた事は確認した。そして不安なのか敵は一箇所に固まろうとしていた。これは好機だ。一箇所に集まってくれば、まとめて始末できる！…あと少し。…あと少しで。…今！

「総員、突撃！敵を排除しろ！」

自分の命令で仲間達が姿を現せて敵に攻撃魔法が襲い掛かる。自分達の身体は司令閣下に与えられた特別製。それに元は悪魔や精霊だ。魔法の発動体となる杖などは自分達には必要がない。…その代わり個を象徴する属性以外は使えないが、な。まあ元悪魔の自分達

は関係ないけどね？戦闘が本分でしたから。

「な！何でこんなところに！？がはっ！」

「バカ！考えるより反撃しろ！この！がっ！？ぐうっ！……」

「お、応援を……」

次々と敵の魔法使いが倒れる中で一人が援軍を要請しようとしている。不味い！ここで増援が来ると面倒な事になる！

「させるか！」

自分は、その魔法使いに一瞬で接近して魔力を乗せた拳を叩き込む。腹部を貫かれた敵魔法使いは無念そうにゆっくりと倒れていく。

「ぐはっ！おのれええ……」

「ふん！愚か者が……。各員、状況報告！」

このような後ろ暗い事をしているのだ。恨み言をほざく前に自分が滅ぼされる覚悟を持って。ともあれ伏兵が居ないともかぎらない。周辺の確認も済ませなければ……。

「クリア！」

「クリア！」

「状況クリア！……指揮官殿、敵の排除を完了しました！」

次々に仲間達から確認の報告が届く。伏兵の類は居ないようだ。無用心な…。ともあれ余計な手間をかけなくていいのは幸いだ。早く装置を破壊して司令閣下の退路を確保しなければ…！

「よろしい！では、装置を破壊後に脱出する！かかれ！」

「了解！」「」

Side out アイリス

Side アリカ

この場所に幽閉されてからのくらい経ったのか…。まだ我が騎士は来てくれない。何を手間取っておるのか。早く助けに来ないか。私にはまだやるべき事は山ほどあるのだからこんなところでグズグズしてなど居られないのだぞ。

だいたい我が騎士はデリカシーが足りない。私に馴れ馴れしいし、な。いや、それは良い。あのような態度の者は今までになかった。私にはとても新鮮で心地よいものを感じた。正直こうしてただただ我が騎士を待つのも嬉しいものを感じてくるから不思議なものだ。

そうこう考えているうちに何やら外が騒がしい…。遠くの方で「敵襲ー！」「見張りは何をしていた！？」などの声飛び交っているのがここまで聞こえてくる。敵襲？ここに攻め入った者が居るといふことか？

ここまで考えて私は思い当たった。我が騎士だ…。ようやく来てくれた…。まったく遅いぞ？待ち草臥れてしまったではないか。そんな思考に耽っている私の目の前ではヘラス帝国の第三皇女が扉に近づき耳を当てて声を良く聞き取るうとしてしている。

「むう…。会話などはよく聞こえんな。あちらこちらから爆発音の  
ようなものは聞こえておるのじゃが…」

「……………」

「のう？アリカよ。これはお前の言っておった者達の仕業かの？」

「わからない。だがここに襲撃を仕掛ける者が他に居るとも思えない。おそらく我が騎士と仲間達だ」

そう態々このようなところに襲撃をかけるなど、そのような物好きが多く居るわけがない。高い確率で私達のうちどちらかの関係者だ。そしてこれは我が騎士で間違いないと感じている。単なる私の願いかもしれないが…。

ドゴンツ…！ドカンツ…！

「な？なんじゃ？何の音じゃ？」

「この音は…」

ゴギャンツ！がらがらっ…。

壁の向こうから何やら鈍い音がする。まるで壁自体を壊そうとしているかのような大きな音だ。外側から数回叩きつけられた壁が崩れ去った。そしてその開いた穴から出てきたのは…。

「よお来たぜ！ 姫さん！」

「遅いぞ、我が騎士」

出てきたナギに私は最初に言おうと決めていた言葉を口にするのだった。

S i d e o u t    アリカ

S i d e    葵

「よお来たぜ！ 姫さん！」

「遅いぞ、我が騎士」

この王女殿下は見るたびに思うけどツンデレだよな？いや、クーデレかな？助けられて嬉しいなら形振り構わずにナギの胸に飛び込めばいいのにさ？恥ずかしいのか？恥ずかしいんだな？初心だね！？可愛いところもあるじゃ無いの。

シュッ！…ドゴッ！パシッ！

「…王女殿下、なぜに俺を殴ろうとするのかな？」

「…わからん。が、お前が何か不埒な事を考えていたように感じたので身体が勝手に動いたようだ」

…勘がいいじゃない。受け止めたからいいけどさ。直撃したら重傷モノだよ？王族の魔力つてすごいね？受け止めた手が軽く痺れますな。ダメージは殆んどないけどね？無防備でコレを受けたくはないな。…今度から王女殿下をからかう時は必ず前もって身体強化してからしよう。

それにしても感動の救出シーンが見られなかった。残念！ん？なんかこつちを見てくる色黒美少女が居るな。もしかしてこの子がテオドラ・バシレイ…くっ！長いよ！？もうテオドラでいいや！それでこの子がテオドラかな？…ここは名乗るべきだろうか？

「のう？お前は名をなんといいのじゃ？答えよ！」

「他人の名を聞く時は自分からと言いたいところだが…まあ今回は

いいか。俺は九重・葵、一応「紅き翼」の一人だ」

「なんと！？お前があのアオイ！？という事はお前の後ろに居る二人の女は…」

「彼女達は右がハオ、左がユエ。俺の両腕だ」

「やはり「白と黒の双姫」か…」

「とりあえず話があるなら脱出後にしよう。着いて来てくれる？」

「無論じゃ。このようなところなど一刻たりとも居とうないわ。早く案内するのじゃー！」

うわぁババ語で喋る美少女だよ？なんと言うか…。来るね？萌えますな。…って俺のキャラじゃないな…。子供は嫌いじゃないけどどちらかと言うと大人な感じの方が好きだしな。年下も嫌いじゃないよ？まあ俺からしたら大半が年下だけどね…。

でも、こういう子を見てると癒されるわぁ。なんというか子供の姿と言葉が噛み合っていないところなんかが特にね？可愛いじゃないの。背伸びして大人を気取ろうとしてるんだから。見ていて微笑ましいよ。気分はお父さんですな。

おっと、オリビエ達に救出成功の事を知らせなくては…。この念話、言うなれば軍用念話なのよ。盗聴防止、隠密機能、妨害防止などなどの機能がついてます。

【…陽動部隊に伝達。救出は無事成功。これより俺達は脱出する…】

【…了解。なあ？葵。この後、残ってる敵はあたし達の自由にしていいんだよな？…】

【…オリビエ達が怪我しないようなら何してもいいよ。あまり時間かけないようにね？…】

【…わかってるって。心配ありがとね。それじゃ、また…】

【…またね…】

よしよし、これでは脱出するだけだ。転移は出来るかなって…？ん…まだかな。あ？結界が消えた。皆が頑張ってくれたんだね。俺は嬉しいよ。およ？アイリから念話です。作戦完了の報告かな？

【…司令閣下、転移妨害の排除完了。司令閣下達の退路を確保いたしました。いつでも脱出できます…】

【…了解、ありがとね。皆に怪我はない？…】

裏方の任務だけ何気に一番危険なのって彼女達だから心配です。皆綺麗だしいい子達だから傷物にはしたくないね。それに俺の家族達に傷でもつけようものなら…。生かしておかないよ？地獄も生温いと言っほど後悔させてやるよ…。フフ、フフフフ…。

【…ハッ！第一第二中隊ともに被害ありません！第一第二中隊は交互に脱出を開始。陽動部隊のバックアップに回っていた第二中隊は…任務が簡単過ぎて眠くなると軽口を叩いていました…】

【…そりゃあの子達にバックアップが必要なのかって言われると怪しいけど気を抜いたらイカンな？…】

バックアップいららないんじゃない？てか、いらないよね？悪魔三人娘達を援護しろってどれだけ無茶なんだろ…。悪い意味じゃなくていい意味でね？だって援護いらないほど強いじゃないか。それなのに油断もしないから隙がない。最強だよな？

でも、だからって任務中に軽口なんか叩いてたらダメだよ。油断は死に繋がってるんだから。再訓練が必要だろうか？…いや、でも今回の事は彼女達の気持ちもわからんでもないしなあ…。別にいいか？注意くらいで。

【…はい。怠けたわけではありませんが今後の訓練で叩き直す所存です！…】

【…あんまりやり過ぎないようにしろよ？失敗したわけじゃないから軽く注意だけでいい…】

ホントにやり過ぎないであげてください。彼女達にも悪気があったわけではないと思うのよ。ただ味方が強過ぎて自分達の出番が少なくなつて拗ねただけだと思うからさ？程々をお願いします。…後でお菓子の差し入れでもしておくか。労いの意味も込めて。

【…ハッ！寛大なご配慮有り難く思います！それでは失礼します！…】

【…うん。…ああ、アイリ？…】

そうそうやっぱりこついう場合言っておく事ってあるよね？

【…なんでしょうか？司令閣下…】

【…よくやってくれた。それと無事なのに安心した。以上。脱出の無事を祈る…】

【…ありがとうございます。司令閣下もご無事で。では…】

堅いよ…アイリ。まあ任務中というものもあるから仕方ないけどね？ 気の迷いか俺まで口調が堅かった気がする。軽くオチャラケなキヤラの俺はどこに逝った？ ははは…。

とりあえず転移魔法で脱出しようか。は…い皆、転移魔法で脱出するから集まってる。…集まったね？ それじゃ行くよ…？ はい転移っど！

S i d e o u t 葵

第八話「突入と救出と脱出と」(後書き)

アリカ王女救出編ですな。

ちよつと具体的にしたい場面です。

文才ないけどね？ 拘ってみたかったの…。

ごめん、意地です。

しかし！ 後悔はない！

第九話「帰還と皇女とAIと」(前書き)

救出後の葵の行動を書きたかった。

後悔?…わかりませんな!

では、続きを。

## 第九話「帰還と皇女とA Iと」

S i d e    テオドラ

妾は邪まなる思いを抱く者達によって「夜の迷宮」に長らく幽閉わらわされておったのじゃが、ついに脱出の好機に恵まれたのじゃ。アリの力の言っておった「紅き翼」の者達が妾達の救出を果たしに来たのじゃ。それにしてもよく妾達を見つけられたの？

先のグレートブリッジ占領地防衛での決戦時に数で圧倒していた帝国は「紅き翼」によって散々に打ち負かされ敗北したのを帝国の將軍達は悔しがっておったが今のこの者らは帝国だけではなく味方であったはずの連合にまで追われる事態になっておった。…いたい何をやらかしたのかの？

話を聞くとところによると「完全なる世界」の者達に連合の元老院議員暗殺の濡れ衣を着せられたらしいの。これで周りは敵だらけか…。ううむ、このまま妾達が手を拱いておれば戦争は激化するやもしれぬな。

妾自体は戦争する事にはあまり乗り気ではなかった。確かに聖地の奪還する事は妾も感じるものはあるが、それがあるとしても無駄に将兵の血を流しても良いとまでは考えてはおらんのだ。何のために妾達に言葉があると思う？互いに意志を伝えるためじゃ。

全てが言葉で解決出来るなどとは妾も思ってはおらん。だが、たとえそうじゃとしても互いに分かり合うことが出来る切っ掛けには

なるとは思わんか？ 父皇陛下は言葉ではなく武力による聖地奪還を周りに望まれ徹底抗戦を謳っておったが、な……。そんな時じゃアリカが妾に極秘裏に会談を望んできたのは。

帝国と連合と言う大国に挟まれた位置に自国が存在するが故、長年に亘り両大国の調停役として綱渡りのような外交で巧みに存在してきた歴史と伝統ある国。その国の王女が妾に会談を望み今回の戦争を裏から操ろうとする真の黒幕がいる事を聞いた。

まあその後はたいして時間を置かずに妾達二人はアリカの話しておった「完全なる世界」の信奉者達に捕まり秘密裏に先程まで捕まっていた「夜の迷宮」に幽閉されておったが……。これに関しては助け出されて今は無事に脱出できたので良しとするのじゃ。

「はい！ 到々着っ！ ……無事に戻ってきたー！」

「我が君、お疲れ様でした。部隊の者達も順次帰還しておるようです。… 悪魔三人娘達は今しばらく戯れておるようですが」

悪魔三人娘達とは誰じゃ？ まさか… 「あの」女三魔神達ではあるまいな？ 噂じゃと通った道は草一本生えることのない不毛の大地に変えたとか死体は消滅させて跡形も残らぬと言う女三魔神達ではあるまいな？ そうじゃよな？

「んー…。あの子達の事だから大丈夫だよ。何か考えがあるんでしょ」

「そうでしょうか？ ……いや、そうですね。大まかではありますがあの者らが何をしたいのかは想像が付きまますな」

「え？なになに、それって？」

「我が君が追われる原因となった者達に相応の酬いを与えるためでしょうな。特にリビエラは…いえ、何でもありません」

「…あの子達は…。…なんて家族思いなんだ！俺は嬉しいよ！皆優しく良い子達に育ってくれて！」

のう？それは何か違うのではないかの？妾の感覚がおかしいのか？報復することが優しいとは何かの冗談かの？確かに身内を嵌められては黙ってはおられんじやろうがな。…それにしても、じゃ。今、妾は聞いたぞ…。

「白と黒の双姫」の片割れが零した「リビエラ」と言う名をな？間違いないのじゃ…。あの女三魔神達じゃった…。召喚された爵位も持たない悪魔なのに力だけは魔神級…。その力も抑えておれば下級悪魔と見分けがつかぬという、厄介な者達。その者達のマスターがアオイ？

この目の前で無邪気に笑顔を浮かべている者が女三魔神達のマスター？妾はわからぬ…。なぜにあのような力強い者達がアオイに使役されておるのか。アオイが言うように「家族の絆」というものか？だが相手は悪魔じゃ、そのような事があるのじやろうか？まあ気前のいい奴はおるが、な…。

そして妾達は今「紅き翼」のアオイが行った多重転移によって彼らの隠れ家におる。下手に魔力を追跡されたら、ちと厄介だからの。転移にもそれなりの注意を払うのじゃな。…抜け目のない奴じゃ。大抵は最後に気を抜いて追跡されるものじゃが、こやつ等は最後まで気を抜くことがなかった。転移し終わった事でやっと力が抜けた

ようじゃがな。戦いなれておるの。しかし、ここがこやつ等の隠れ家とは…。

「何だ、これが噂に聞く【紅き翼】の秘密基地か！どんなところかと思えば…ふう、掘立小屋みたいではないか！」

本当にボロいの…。このような者達に帝国はやられておったのか？…いかん、目から水らいしきモノが。ううう…。

「ああん？逃亡者の俺らに何期待してんだ？このジャリはよ」

「何だ、貴様！無礼であろう！？」

妾の前におる、この筋肉バカはなんなのじゃ！？帝国の皇女に向かって無礼であろう！

「へっへ〜ん！生憎、ヘラスの皇族にや貸しはあっても借りはないんでね！」

「何い！？貴様何者じゃ！？」

くう！こやつ何者なのじゃ！妾に向かって無礼な！

「ハッ！何者と聞かれちゃしかたねえ！俺はジャック・ラカン！最強の傭兵剣士だ！よく覚えとけ！じゃじゃ馬皇女！」

「なんじゃと！？このようなふざけた者があのジャック・ラカンじゃと！？そんな…何かの間違いじゃ」

あのジャック・ラカンがこのような無礼なバカ者だったなんて…。

確かに嫌に媚びへつらってくる者達よりは良いがこつまで遠慮のない奴など妾は初めてじゃ。

「すつげえ失礼なジャリだな。おい…」

「まあまあ落ち着きなよジャック。まだ子供なんだからさ」

む？妾は子供ではないぞ？立派な淑女なのじゃ！こやつも失礼じゃな！

「そうは言ってもよお…。ん？おお！そうだ、アオイ！このジャリはお前に任すわ！じゃあな！」

「は？あ、おい！ジャック！ちよつ！待て！」

ジャック・ラカン  
バカ者はそう言うや止める暇も無く走り去って行ってしまったのじゃ。と言うよりも何なのじゃ！まるでお荷物でも任せようとするかの妾への対応は！まったく、ふざけおつて！…そんなに妾はお荷物かの？

しかし、こやつら、あの「夜の迷宮」でも一見ふざけておるように見えても皆、みな感覚では最大限の警戒をしておつた。まったく隙がないように見えたの。妾はまだそれ程の域には達してはおらんが感覚としてならなんとなくじゃがわかる、かの？本当に微々としたものじゃがな…。

この者達は、まさに強者であろう。それも一人一人が最強クラスのじゃ。そして今、妾の目の前におる男が「白と黒の双姫」がその絶対の守護の力を以って守ろうとする者。「鍊金術師」にして「双アルケミスト・ラン姫刃の主」や「契約者」と言われるクエ・アオイ。

「我が君、必要とあればあのバカ者を連れ戻しましょうか？」

「…気にしなくてもいいよ、ユエ。でも、気遣ってくれてありがとうね」

「いえ、私は当然の事をしたまでですので…」

なんじやろうの？黒の剣姫が顔を赤らめおって。こやつ言葉に照れておるのかの？

「ユエ、どうしたのだ？顔が赤いが…」

「っ！なんでもないぞ、姉上！気にするでない…」

「う、うむ??？」

この微笑ましい雰囲気の彼のが帝国ではナギ・スプリングフィールドに並んで恐れられておるクエ・アオイ。なぜなら帝国軍は先のグレートブリッジでの決戦時にアオイ一人の手で投入戦力の実に二割強の被害を受けたのが大きかった。当初は混乱も多く、情報が錯綜しておったが整理していくことで事態が判明しおった。

「それでは皇女殿下？アリカ王女殿下の下までお送りしますね」

「む？うむ、それは構わぬがお主はどうするのじゃ？」

「俺はこの後する事があるので途中までお送りしたら別行動です」

「別行動、の…。ふむ…。のう？お主のする事とはなんじや？」

「こやつ何をしようとしておるのじゃ？ ストレートに聞いてしまつたが素直に答えてくれるかの？」

「今回の作戦に参加した家族達への労いと製作している物の最終確認。前者が本命だけどね」

「なんと？ お主のご家族も妾達を助けるために参加してくれておつたのか？」

割とアツサリ答えてくれたのじゃ。しかし妾達を救出してくれた者達にこやつのご家族達がおつたとは…。

「まあ、ね。でも勘違いしないでよ？ そういう契約だったの。成功しないとお給金が貰えないのよ」

「世知辛いのう…」

「本当だね…」

食べるために働かねばならぬとは言え、こつという場面で聞くと一段と切なく感じるのじゃ。ふむ、ならば、ここは…。

「…よし！ 妾も行くつ！ お主のご家族にも感謝しなければならぬのじゃ」

理由は何であれ、やはり助けられたからには直接礼をするのが礼儀であるつ。今は言葉だけの感謝しか出来ぬが何れ機会をみて改めて礼をするつしよう。

「…え、っ!？」

「な、なんじゃ?…もしかして、ダメなの、か？」

妾は何か不味いことを言ったのか?妾の事が邪魔なのじゃろうか?もし、そうなら…。ううう…。な、泣いてなどおらぬぞ!これは…ゴミ…。そう!ゴミが目に入っただけじゃ!グスツ…。

「おおっ!?!テオツ…もとい、皇女殿下?違うよ?そんな事ないよ?でも俺と家族達の個人的な隠れ家みたいな物だから、そこに連れて行ってもいいものかと考えただけだから。ね?だから涙目になるのはやめよう?俺の心臓に悪いから…」

「…なんじゃ、そのような事か。安心せよ、妾は誰にも話さぬぞ?」

なんじゃ何があるかと思えばそのような事か。妾の早とちりじゃったのか…。泣いて損したの…泣いてない!泣いてないのじゃ!まったく!こやつは妾にこのような辱めを受けさせるとは…。いや、それにしても…こやつ。慌てておったせいじゃろうが妾の事を「テオ」と呼びそうになっておったの…。

…良いな。うむ、良いのじゃ!特別にこやつには妾の事を名で呼ぶ事を許してやるのじゃ!

「…ウソ泣きかよ?はあ…。まあいいか。いや、いいのか?いいだろ、面倒くさい…。皇女殿下?それじゃ着いて来て下さいね?」

ウソ泣きとは失礼な…。いやいや、ここで本当に妾が泣いたなどとは言えぬな…。ここはウソ泣きと勘違いしたこやつの言葉に乗る事にして流すのじゃ。なにより素直にこやつに話すのは恥ずかしい

のじゃ…。んんっ！それよりもこじは…。

「うむ！早く案内するのじゃ！それと妾の事を名で呼ぶ事を許すのじゃ！光栄に思うのじゃぞ？」

「はあ？それは光栄ですな。それじゃテオドラ皇女殿下…」

「テオだけで良い！アオイに皇女殿下などと呼ばれると背筋が痒くなるのじゃ！」

違うのじゃ！せっかく妾自ら名で呼ぶ事を許したというのに「皇女殿下」などと付けられては嬉しさ半減で台無しではないか！…それとも呼んではくれぬのか？あれは慌てていたからの気の迷いじゃったのか？

「…はいはい。はあ…。それじゃテオ？着いて来てくれる？」

…呼んでくれたのじゃ！なんじゃ！こやつは焦らしおってからに！最初からそう呼ばぬか！ま、まあ今回は許してやるのじゃ。有り難く思うのじゃぞ？では、行くとするかの。

「うむ！」

グレートブリッジ戦での戦闘記録によると大規模広域殲滅魔法がアオイ一人によって引き起こされたとある。その威力は大呪文の「燃える天空」の実に三倍強だったとされておりが実際はそれ以上であろうと現場では囁かれておると妾は耳にしておる。

だが、この男にそのような事が出来るとは実際に会ってみても実感がないのじゃ…。顔はまあ…良いな。うむ。こつ…なんと言うの

かの？…安心？そうじゃな、安心できる雰囲気のある男じゃ。この者がおれば大抵の事は解決してくれそんな雰囲気があるのじゃ。不思議じゃのう？

Side out テオドラ

Side 葵

「うむ！」

元気に返事をする皇女殿…テオを連れて俺達は皆から少し離れた位置に移動する。とりあえずテオを連れ出す事は詠春に念話で伝えたから大丈夫だろ。…伝え終わって念話を切ろうとしたら詠春が喚き立てていたような気がするけど。大丈夫！俺は気にしない！

そういう訳でテオを俺の「工房」内に連れて行こうと思うんだけど…。面倒な事にはならないよな？ん…。いや、大丈夫だろ…。テオとは会ってみてそれ程時間は経ってないが良い子のようだし。ちゃんと言い聞かせれば大丈夫。大丈夫だよな？大丈夫だといいな…。

まあ連れて行くと言ったのは俺だししかたないか。面倒な事になりかけたら口八丁手八丁で言い逃れて…逃げよう！そうだ、旧世界に行こう！あそこならこつちの奴らは表立って手は出せないからな！思考が飛躍し過ぎた…自重しないと。まだ決まったわけじゃないんだから。

そんな事を考えてると皆からは丁度死角の位置に俺達は着いた。俺が立ち止まったのをテオが怪訝な顔で見ている。小首を傾げてこっちを見てくるテオ…。可愛いな、もう！小さい頃のミリー達を思い出しちゃうじゃないか！もう一度言おう！可愛いな、もう！

すまん、取り乱した…。テオのあまりの可愛さに俺の思い出中樞が刺激されたようだ。脳内でそんな事が起きているとは知らないテオが今もこちらを見ている。このままこうしていても時間の無駄なので行動する事にした。

俺は目の前の空間に手を伸ばした。俺の手は何事もないかのよう空間に溶け込み肘から先が飲み込まれる。この空間は某キンピカ英雄王の宝具の能力だったりする。倉庫って便利だね？俺の後ろでそれを見ていたテオが驚きで小さく息を呑む音が聞こえる。そのまま空間内にあるものを手繰り寄せて引っ張り出す。

やがて、出てきた物は直径一メートルほどの土台に支えられたガラスの球体。その球体の周りに付属の一回り小さな球体が数個ほど付いている。そう、これは俺が長年かけて整えていった「工房」とその付属品達。まあ簡単に言ってしまうえばエヴァンジェリンの「別荘」だな。…エヴァンジェリンより俺の方が趣味に走ってて危ない気がするけどな。

「腕が消えた事には驚いたが…。なんじゃこれは？魔法球…「別荘」か？いや、しかし、これは…」

「これは「工房」。錬金術師としての俺が独自の技術で造り上げてきた特別製だ。そこいらの「別荘」なんかと一緒にしてもらっては困るな、テオ？」

「う、うむ。それはすまんじゃ。しかし、これは…ふむ、すごい。この中にアオイのご家族達がおるのか？」

「そう。この中と外は少々特殊な方法で繋がっているから、その方法で直接、家の子達はうちこの中に転送できるんだ。今頃はみんなで報告会と反省会、その後の宴会の準備中じゃないかな」

「むう、そうか。では早速行くとするのじゃ！ほれ、アオイ！早くするのじゃ！」

はいはい。念のために「工房」の周りには対物・魔の防御と人払いの結界で三重に覆って、と。それじゃ、テオ行くよ？ああ、それと中では勝手な行動とらないですよ？怪しい事すると中に仕掛けてある侵入者用の防衛機構が働いて大変な事になるからね。下手すると死ぬよ？

俺はパチンと指を一つ鳴らして「工房」への転送を開始した。そして、やってきました、俺の城！ここは歓迎の意思を表すためにも一言、テオに言うておくべきところかな？いや、俺がやりたいたけなんだけどね？

「ようこそ、テオ！俺の秘密の「工房」へ！俺は君を歓迎しよう！」

「おお…。これは見事なものじゃな…。流麗で洗練された外観に機能性がある…。これがアオイの「工房」…。つて！これでは最早、城塞ではないか！？」

外観的にはわかり難いと思ったけど、やっぱり一国の皇女ともなると一目でわかるものなのかね？白い尖塔を中心として円形に建物

は増築してるからパツと見はお洒落な城なのにな…。城壁や兵器とかは非常事態にならないと展開されないようになってるし、わからないと思っただのに。

しかも、この場から見ていてもわからないだろうけど、実はココ浮き島なんですよ？昔、オステイアを見て俺も欲しいと思っただのよ。空中に浮く城塞島…いいよね？すごくね？ねえ？すごくね？…まあ魔法球内では普通にただの海に囲まれた島なんですが、ね。…いいんだよ！浮く島はマロン…もとい！ロマンなんだから！余談すぎたなあ…。

「あれえ？テオ、よくわかったね？ここは表の世界にも召喚という形だけど展開可能なのだよ。…（ボソツ）それなりに大規模だから一度も、やった事ないけどね」

「なに！？この城塞が、か？…それが事実なら一瞬にして陣地の構築が可能という事ではないか…。なぜ、この戦争中に実行しなかったのじゃ？」

するわけないじゃん…。こんな戦略的に役に立ちそうな物を人前に出そうとするなんて俺には出来ませんよ？これは俺が丹精込めて俺と家族達のために造ったの。他人のためになんか使いませんよ。家族は別だけどね？

「これは俺個人の物なの。家族のためなら躊躇わないけど、それ以外は知った事じゃないしね。それにバレたら面倒でしょ？…テオは今回、特別なんだから誰にも言わないですよ？」

「アオイは、そこまで妾の事を信じてくれるのか…。うむ！安心せよ、妾は誰にもこの事は話さぬと約束するぞ！」

本当に話さないでよ？…じゃないと気に入ってきたテオの事を消さなくちゃいけないんだから。信用するよ？俺だってテオの事を消したくないんだからね？可愛い物好きの俺としては辛いよ。

「うん、その言葉を信じるね。それじゃまあ移動しようか、離れずに着いて来てね？」

「うむ！離れぬぞ！」

ああ、もう！そんなにギュツと俺の手なんか握ってきたりして…。可愛いなあ、もう！…このままお持ち帰りしてしまおうか？いやいやいや！ダメダメダメ！俺はロリでもペドでもない！それに皇女拉致ってどうすんだよ！？問題のオンパレードじゃないか！いや、問題なくてもやらんけどな！

くっ！またもや、取り乱してしまった…。いかなあ、長い時間を過ごしてきた弊害からか自重というか理性みたいなモノが緩くなってきたような気がする…。今後は自重しないと！女児誘拐とか洒落にらんよ！？俺はノーマル、俺はノーマル、俺はノーマル、…。よしっ！

そして建物内の一室に到着。ここは作戦前のブリーフィングや会議とか色々な目的に対応した部屋。まあただの多目的ルームなんですけどね？だいたい作戦後は、この部屋で反省会などをする事になってるから皆はここに居るはずなのよ。居なかつたら食堂とかかな？

「はい！皆、今回はお疲れ様！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」

「司令閣下！？…態々このような場所にどうされたのですか？」

皆、俺が突然来た事に驚いてるねえ。それでも、直ぐに立ち直って事態の把握に努めてるのは訓練の賜物かな？その中でもアイリは早かったね？流石は、まとめ役だよ。

「ああ、アイリ？いや、あのね？今回の作戦の事で労いの言葉だけでもかけようかなと思ってさ。…迷惑だったかな？」

「いえ！決してそのような事はありません！全員が司令閣下のお氣遣いに感謝しております！」

「……………はっ！その通りです！」「……………」

驚いたなあ…。そんな大きな声を出さなくてもいいのに…。まあ作戦後だし？まだ精神的に興奮してるのかもしれないよね。ふう…。

「そ、そう？あつ、今回は特別ゲストが居るんだよ？ほら、テオ入って入って！」

呼んだら俺が入ってきた扉からテオは静々と入ってきた。やつぱりお礼を言うからにはちゃんと礼儀をつくしてるんだね。さっきまでのはしゃぎようがウソのようだよ。

「そなた達がアオイの言っておった者達か。妾はテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアじゃ。今回のそなた等の働き真に大儀であった。そなたらには感謝するのじゃ」

「……………」「……………」

んー…？返事が無い…。ここは俺が盛り上げないといかんのかね？では…。

「はい！というわけでテオでしたー！…皆どうしたのよ？反応無しはお兄さん寂しいな？」

「司令閣下…」

アイリ？俯いてどうしたのよ？せつかくの綺麗な顔が見えないよ？美人さんなんだから背筋を伸ばさないと、勿体無いよ？

「何？どうしたの、アイリ？」

「…また…増えるの…ですか？」

「は？増えるって何が増えるのかな？」

マジで何なんだろ？増えるって何がよ？今のところこれ以上の部隊増強の予定なんてないしな…。兵器関連の整備も自動人形達と整備口ポットスハイターに任せるから人手は間に合ってるしなあ…。

「女の子が、です！私達だけじゃ、まだ足りないと言つのですか！？」

は？女の子？足りない？は？え？？はーっ！？

「…そうですよ！？…しかもこんな幼い子を！」「…」

「失礼だな、君達！もう一度言おう！失礼だな！？俺はそんな事し

ないよ！」

そんな事するわけじゃない！確かにさつきはテオの可愛さにやられかけたけど…。でも！俺はノーマルなんだ！幼女は愛でるが異性としては守備範囲外なんだよ！どうせなら皆みたいに見た目、十代後半から二十台半ばまでが良いです！

外見なんか関係ないって言うけどアレはウソだ！外見も大事ですよ！？まあ内面も伴わない美人なんかごめんだけだな！高飛車って嫌いなよ…。唯我独尊っていうの？着いて行けないです、はい。だって俺が基本的に「S」だからな！

「ですが！現に、こうして…」

だから！違っって言ってんでしょ！？ハオもユエもなんか…。

「ええい！黙らぬか！？」

「……………っ！？」

びっくりしたあ…。二人とも？突然大きな声を上げるのはやめようよ？主に俺の心臓に負担がかかるからさ？ほら、皆、怯えているじゃない？よっぽど怖かったんだね。

「この幼子こごは我が君が連れてまいった客人である！」

ハオ？幼子って…。確かに俺達から見たら大抵の人達は若いけどさ。それにしたってテオの事を幼子って…。まだ十代前半じゃないかな？幼子って言うより児童じゃないか？

「左様！それをお主達は我が君の事を邪推しようなどと…。吾らは悲しく思つぞ…！」

邪推つて…。ユエ？そう言ったという事は君も何かを想像してた、ということ？ねえ？どうなのかな？かな？…今度、二人つきりで詳しく聞こうじゃないか。

「しばらく吾らが留守にしていたせいで気が緩んでおるようだな…」

「姉上？ここは一つ、この者達に再度稽古をつけてやる必要があるように私は思うのだが…。どうか？」

「それが良いな。…それで、お前達、どこに行く気だ？」

あーあ…。二人がそんな事を言うから皆が部屋の後ろの扉に移動しちゃったじゃないか。二人の訓練ってそんなに辛いのか？逃げるほど辛いのか？あつ、途中で気付かれて固まってる…。

「えっ！？いえ、その、あの…」

「ハッキリせぬか！？全員、「演習場」に集合！反論は認めん！行け…！」

「……………り、了解…！！」「……………」

むう…。条件反射的に返事をしてしまっているようだ。駆け出しに行く彼女達の目元にはキラリと光るモノがあった。ような気がする。でもね？ごめんね、こうなったら俺にも止められないの。ごめん、訓練、頑張つてね？ご飯はちよつと豪華にしてあげるからさ？元氣出してね？

「我が君？そういう訳ですので吾らはここでしばしの間、別行動をさせてもらって構いませんか？」

「あ…うん。その、あんまりあの子達に厳しくしないであげてね？作戦後っていうのもあるしさ？」

本当に程々にしてあげてくださいな。今回の事は、ちょっとした彼女達の茶目っ気なんだから、ね？皆に身体を壊されたら俺が悲しいのよ。

「はっはっはっ！この程度で根を上げるような鍛え方はしておりませぬから問題ありませんよ！では、行って参ります！」

「それでは我が君、お客人。吾らはここで失礼いたします。…姉上、待たぬか！私を置いて行くな！」

そう言つて二人は部隊の皆の後を追つて出て行つた…。置いていかれた俺達は、ただ見送ることしか出来なかった。頑張れ、皆！すっげー、頑張れ！終わったら俺の手料理が待ってるよ！…喜んでくれるかは別だけど、な。

「な、なかなかパワフルなご家族なのじゃな？アオイ…」

「それはなんか違う気がするなあ？…まあ、いいか。テオ、他に移動するよ？」

「う、うむ」

「ドッグ」に移動中…。

そしてやってきました！今回、新設された通称「ドッグ」です！もう、ここにテオを連れて来ちゃったから、ぶっちゃけるけど戦艦を造ったのよ！全長512M全幅256M高さ216Mのな！タマリマセンナ！元ネタは花の名前の某機動戦艦の映画に出てくる黒い人の戦艦。あれをモチーフにして、こちらの世界の魔法技術と俺に付加された異世界知識などを複合して造って、更に魔改造したものだから最早、別物だがな！

やり過ぎたかもしれないけど、後悔は無い！だって！造ってて楽しかったんだもん！やめられませんかよ！「陽月」の時のようなへまを俺が二度とするわけがないじゃないか！…アレは自重するべきだったと今では反省してるんだから。だが、後悔は無いがな！二人とも話せるし寧ろ今ではよくやったと昔の俺を褒めてやりたいくらいだ！

それで戦艦なんだけどね？廃スペック…もとい、ハイスペックよ？元の戦艦がアレだけにあらゆるステルス機能はデフォルトとしてもね？内部は亜空間技術を採用した事により十分過ぎるほどのスペースを確保した。

相転移機関を改造して重力魔法を応用した魔導式相転移機関に強化改造して空気中でも出力低下をほぼなくしてみた。エネルギー効率も向上したよ？それを正・副併せて大型四基搭載、予備として中型を二基搭載。供給されるエネルギーは潤沢ですよ。

装甲はマリーを中心とした精霊さん達が鍛えた軽くて丈夫な強化型精霊装甲を採用！対物理、対魔法、対光学、耐熱、対衝撃などどの効果はあれども！そこは俺！あらゆる攻撃を防ぐのではなく吸収する事を主軸に置いてるのよ！だいたい60%前後を吸収可能！吸収した魔力やエネルギーはカートリッジシステムを参考にしてバッテリーのように再利用可能！魔力は後で加工すれば皆のご飯にもなるしね？

もちろん、防御は装甲だけじゃなくて対物理、対魔法、対光学、耐熱、対衝撃の障壁と言うかバリアフィールドを展開可能です！フィールドはロマンなのよ！「フィールド展開！」みたいな事言いたいじゃん！こちらにも吸収特性を付加してみた。装甲だけだと吸収しきれないからね…。装甲+フィールド展開で90%強まで吸収するんよ？

武装に関してもすごいよ！魔法と科学の融合した魔導科学の遠・中・近ミサイルを各種、対宙、対空、対水、対地を揃えているのだ！魔導式対艦レールガンも装備！魔導式対空砲は死角をなくすために各所に装備！

主砲には重力波砲を、グラビティブラスト魔導式に改造。発射口に魔導式重力レンズを展開出来るようにした事で前方だけでなく前方半円状どの角度でも撃てるようにした。モードは集束・連射・拡散・おまけに追尾と設定を作ってみた。そして射程・威力ともに、この世界では現時点で最高峰！いやっほー！

各種無人機動兵器も完備！偵察機から強襲機まであるの。これからも、もしかしたら俺の趣味で増えていくかもしれないけど…。まだ、わからないな！必要分しか作らんし。

そしてそれらを制御するシステム面も某AIを参考にしました！あの作品好きなんだよ！今でもそれは忘れてないね！話しがそれた…。んんっ！それでAIなんだけどね？ウーリを中心に元雷精霊さん達に人工的な電子精霊を構築してもらって、それを基点に科学的なプログラムを追加して後は自己学習・自己進化式に設定。今では軽くブラックボックス化してきて俺でも良くわかんなくなってきた。

このAIの設計コンセプトは「自我」の在る無しを主眼に考えて開発したのよ。つまり一から感情プログラムを打ち込むんじゃなくて最初の意識は希薄だけど小さくとも本能的な「自我」がある電子精霊を核にして、その周りに各種強化プログラムを構築して「自我」を強化する。

後はある程度言葉を話せるように根気よく話し相手になって教育していく。これは時間がかかるけど大事な事なんよ。言ってみれば子育てだからね。子供とのスキンシップは大事よ？感情表現が豊かになるかは、ここにかかっているんだから。

でもね？残念ながらそんなに時間がなくて経験を積む事が出来なかったのよ…。この空間内なら時間は稼げるけど如何せん教えてきた知識に経験が追いついてなかった…。

つまりね？知識としては知ってはいるけど、実際にやった事はなという、まるつきり子供のようなものなんよ。こればっかしは俺でもどうしようもないわ…。今後の成長に期待といったところですか！やばい…。ちよっと楽しみだ。

『おとうさん？』

俺の前の空間にウィンドウが展開されて小さな女の子の音声が聞

こえてきた。俺はそれに一つ笑うと言葉を返す。

「ただいま、アン。調子はどうかかな？」

『うん、元気だよ。お父さんは？』

「もちろん、俺も元気だよ」

いや、さも当然のごとく会話してるけど、この子が機動戦艦「アングレカム」の中枢制御AIの形式番号X 01次世代電子精霊融合型統合制御AI、愛称は「アン」ちゃんです。とつても可愛らしいですよ？お父さん子だし俺に、とても懐いてますしね。

機動戦艦の「アングレカム」は花の名前を付けましたよ？「祈り」とか「いつまでもあなたと一緒に」みたいな花言葉がある花です。沈む事なくいつまでも一緒に居ようと言う祈りを託して付けました。初めて造った戦艦ですから愛着があるんですな。はははっ！

「アオイ、これは、なんじゃ？説明するのじゃ」

「あ？ああ、そうだった、テオが居るんだった…。えっと、ね？この子は戦艦「アングレカム」のAIの「アン」ちゃんだよ。…アン、この子はテオだ。仲良くしてあげてね？」

『うん。…はじめまして、テオ。私は、形式番号X 01次世代電子精霊融合型統合制御AI。「アン」です。よろしくね？』

「う、うむ。よろしくなのじゃ…。それにしてもアオイ、「えーあ」とはなんじゃ？アンはどこにおるのじゃ？」

な…に？AIを知らないだと？…いや考えてみれば当然、か？こ  
つちの世界じゃ人工的な電子精霊が普通だしな。科学技術は魔法の  
それに依存してるし。知らないのも無理ないか…。そうだなあ…な  
んて説明しようか？いや、簡単でいいか。難しく言っても行き成り  
じゃ、わからんし。

「AIってのはな？魔法世界でいうところの電子精霊みたいなもの  
だよ。船内の維持管理とか戦闘を色々とサポートしてくれるんだ。  
だから、身体は、ないのよ」

「ふむ、電子精霊であつたか…。しかし、アンは会話が随分滑らか  
で知能も高いように見えるが？じゃが、それもアオイじゃしな…。  
いや、でも…」

この子、なんだろ？ちょっと鋭過ぎんか？異世界の技術をふんだ  
んに使ってるのがバレたか？でも、他世界の技術なんて知ってなけ  
れば異質かどうか判断なんて出来んし…。思い過ごしかな。なん  
か言ってきたら誤魔化せばいいや。…面倒くさいし。まあ、それは、  
ともかく…。

「アン、良かったね？テオがアンの事、頭が良いって褒めてるよ」

『うん。うれしい、な…』

「工房」の一日は外の時間で一時間…。設定を弄れば変えられる  
けど、通常はこれが基本。そんな一日の締めは予定通り今回作戦に

参加した家族達となにやら満足げに帰ってきたオリビエ達と手の空いている家族達を交えた反省会という名の宴会が開催された。ゲストのテオも賑やかな宴会に終始楽しそうにしていた。

そして「工房」内で、もう直ぐ一日が経とうとしていた。このまま外に出たらしばらくは忙しくなりそうだから昨日の宴会は俺も楽しみました。ちょっと飲みすぎて、またハオ達二人に抱きついてしまったみたいだけどね？俺は覚えてないけど…。テオの視線がなぜか痛かったです…。

「それじゃ行こうか？」

「ハッ！お供いたします！」

「うむ！」

これからも忙しくなりそうで苦勞しそうだけど、その分だけ充実しそうな気がするね。ふふふ。

Side out 葵

第九話「帰還と皇女とAIと」（後書き）

グダグダ感がある気がする…。

いや、今回はアンちゃんを紹介を軽くただけど、したかっただけなんよ。

話す戦艦ってロマンを感じませんか？

私は好きですよ！話せる戦艦！

萌え…げふんっげふんっ！燃えますよね。

感想&評価待っています！

ではでは。また次回！

第十話「初めてとお父さんとお出掛けと」(前書き)

決戦までの一場面ですな…。

オリジナルで本編にはないですが…。

では、どうぞ…。

## 第十話「初めてとお父さんとお出掛けと」

S i d e 葵

それで「工房」内から戻ってきたわけなんだけど、ね？その後が大変だった…。皆に…。というより詠春に姿を見せた途端に説教の嵐でした…。内容を要約すると「ナギだけでなくお前も何で、皇女様を連れ出してんだ！？」という事らしい。

いや、俺も連れ出した事は事実だから、その事には文句はないけどさ。…ナギと一緒にどうなのよ？アレよりはマシでしょ？危険な事は一切ない分こっちのほうがまだマシよ？時間も外では一時間ちよつとだし大して問題ないでしょ？何でこんなに怒られてんのよ？

イジメか？イジメなのか？イジメなんだな？上等だ、この野郎。やつたろうじやん。ちよつと面かせや？…ん？何、八才達も来るの？いいよ、いいよ、来なさいな、皆でボコろう。…だから詠春、何よ？ちよ！？土下座なんて、やめてよねー。こっちが悪者みたいじゃないよ。わかったよ。やめるから頭上げてよ？俺が悪いみた…詠春？…何か言いたい事でもあるのかな？かな？

詠春とは平和的に話し合いで解決した。…たとえば俺の後ろに二人の絶対的な武力が居たとしても行使しなければそれは立派な話し合いだよ？俺、悪くないよ？本当だよ？クツクツクツ…俺に説教しようなど七百と数十年足りんのだよ？

それで外に出てきたわけなんだけどね？あの名シーン（？）を見

逃しました…。あ？名シーンって言ったらアレですよ。王女殿下とナギが「我が騎士よ」や「俺の杖と翼を預けよう」みたいな？アレですよ…。丁度終わった時に俺達は戻ってきたみたいなのよ…。マジで泣きそうだわ…。感動とかじゃなくて、悔しさで…。あのシーンを見逃すなんて、何のために「紅き翼」に入ったのか、わからんわ…。もう「紅き翼」やめちゃおうかな…。ダメか…。ハア…。

まあいいや…。いや、良くないけどさ？いつまでも、グダグダ言っても始まらないしね？それに、もう終わった事だし。うん…。さて！ここからはお仕事の話です！今回、無事に王女殿下等の捜索と救出を成功させたので報酬をいただきますよ？確実に、ね？

そして、無事に払ってくれる事になりました！良かった…。本当に良かったよ…。家族達の働きが無駄にならなくてね。…まあ別に失敗しても生活には困らないほどの財産はあるから問題はないけどな！こういうのって気持ち的なモノじゃない？

依頼を受けて報酬を貰う。社会の基本ですよ。引き籠もって研究三昧なのも悪くないけど世界の事情に疎くなるから程々に社会に出ないとね？…根暗っぽくなっちゃうし？その点、喫茶店は良いよね？適度に外の情報が入ってくるから。

俺は好きよ？喫茶店。のんびりとお茶して時間が過ぎるのがなんとも言えないね。その時に、ぼうつと考え事するのも嫌いじゃない。次は何を作ろうかな？とか、皆でどこかに出かけようかな？なんてね。取りとめもない事を考えるの。

気付いたら日が暮れてくるくらいの癒し空間。俺にとってはそれが理想の喫茶店だね。そんな理想を叶えるための店、それが俺の喫茶「クレイドル」なのよ。暇な時間はのんびり出来るしね？忙しい時

は忙しいけど…。…なんか最近、話しが脱線しまくってる気がするなあ。ふう…。

「紅き翼」が反撃を開始してから一ヶ月後…。

そんなこんなで王女殿下達を救出した事で俺達「紅き翼」は反撃の狼煙を上げたわけです。手始めに今までの調査の過程に出てきた末端の組織を手当たり次第に襲撃してね。相手の力をそぐ事や妨害をしていったんです。…簡単に言えば嫌がらせなだけだね？

襲撃の時のナギやジャックは輝いてたねえ…。下調べなんてこいつらに出来るわけないから、ここぞとばかりに暴れてくれるよ。頭脳労働は王女殿下達やアルやガトウなどの「紅き翼」の人達がやってくれてるからね。まあ適材適所ってやつだろうなあ。

そんで俺は今回、テオに雇われて「完全なる世界」の拠点や繋がりのあると思われる組織、武器商人などを調査・襲撃・捕縛などをナギ達とは別行動でやってる。…俺ってば何やってるんだらうね？これじゃ「紅き翼」に入っても意味くないか？

まあ家族達のお給金もしっかり出ているから文句はないけどね？人数出したら出しただけお給料が貰えるからヤル気も出るのよ。流

石、ヘラス帝国だね？気前がいいの。俺の懐がホカホカです。今回の事が終わったら家族皆で温泉にでも行こうかな？

…あー、でも、ね？一つだけ問題があるの。いや、問題って言うほどのものじゃないんだけどね…。調査で黒と判明した組織を襲撃する時に、なんだけど。なぜか、毎回テオが同行してくるんですよ…。なぜなの？危ないからやめときなっかって言っても聞かないのよ。

何がしたいのか俺には、わからんのよ。下手に怪我でもさせたら連れて行った俺の責任問題になるじゃない？だから俺はイヤなんだけど置いて行こうとするとテオが涙目になるんですよ…。泣いたところを帝国の人に見られたら誤解されますって…。

前門の涙目のテオか、後門の知らない帝国人が…。俺の問題はこれに集約されますな。それで毎回前者を取ってしまうんですな。泣く女の子には勝てません…。正直言って危ないけど、この際丁度良いかもしいない。

俺は帝国と交渉しましたよ。俺は「この戦争を憂いて事の詳細を自分の目で見続けたい」と言って今後の作戦にテオが俺の部隊に同行すると。…当然こんな殊勝な事をテオが言うわけがない。俺の真っ赤なウソですよ？

でも、この話しを聞いた帝国内の味方の人達…反応は大きく分けて二つだった、感動に咽び泣いて賛成の人達と困惑しながらも危険を訴えて反対の人達。ここまでは俺の予想通り、ここからが本番だったのだよ？まあその時のやり取りは…。

葵の回想から…。

「皆さんのテオドラ姫を思う気持ちはわかります。俺…んんっ、私も家族が同じ状況ならと思うだけでこの胸が引き裂かれそうな思いです。だが！テオドラ姫は、それでもこの戦争の真実を自分の目で確かめたいと仰せなのです！」

自分で言ってると思う…。あのテオがこんな事言うわけないな、と…。テオは公にバレないなら出来るだけ事を面白おかしくしようとするからな。戦争事態はテオも悲しんでいるみたい(？)だけどな。

「姫様のお気持ちは私達もわかる。だが…」

「わかっております！テオドラ姫にもテオドラ姫にしか出来ないお役目があります。そこで皆さんに提案があるのですが、聞いていただけますか？」

なんか、すごく偉そうな帝国の衣装に身を纏った初老の男が意見しようと言ってきたよ？でも、させません！下手に話させて流れを持っていかれるわけにはいかないのだ！ここは多少強引でも俺が話すべきだ！まだまだ俺のターンだああああ！！

「聞こう。そなたは姫様の信頼が厚い。ならば私もそなたを信じよう」

信頼？…アレは信頼のかな？ただ単に懐かれてるだけな気がするけど。いや、この際、関係ない。利用できるものは何でもしよう。

「ありがとうございます！それで提案とはテオドラ姫をお守りする戦艦の事なのです。すでに試験的にはありますが稼動もしており

ます。テオドラ姫を必ずお守りできる物を私はご用意しました」

「何と…。それは真なのか？」

既にできている俺の個人所有艦だけだね？使う時が来ましたよ！  
ここは何としても説得せねば！

「はい。私は今回のテオドラ姫の行動が一度きりならば、と考えていたのですが、どうやら違うようなのです。そこで私個人の伝手を使い、最強の船をご用意しました。性能の詳細はこちらの書面に記載されておりますので、こちらをご覧ください…」

この人達には話してないけど一度どころか既に三回着いて来てますよ…。バレたら怒られるわ。絶対に言わない…。とりあえず船の詳細を渡したけど技術的な事は何一つ書かれてない。ただ、この船にはこういう機能があります的な説明が延々と書かれている。

「なん…だ？これは…。これは事実なのかね？」

それでもわかる人にはわかるんだね。驚愕した表情の人がチラホラいるよ。最初の偉そうな帝国衣装のおじいちゃんも驚いてるよ。これがわかるって事は、この人、昔は軍人だったんだね。お疲れ様です。

「はい。間違いございません。テストしたところ書面通りの性能でした」

「…これを建造した者と話せるかね？これが事実なら是非とも我が帝国にスカウトしたいのだが…」

「残念ですが、その戦艦を建造して後に直ぐ亡くなられました…。設計図なども全てを亡くなられる前に処分したようです。現状ではこの一隻のみとなります」

白々しいなあ、俺って！死んでないって！造ったのは俺達だつての！これ以上造る気ないの！維持費は殆んどかからないけど場所が取られちゃうのよ…。

「そうか…。真に残念だ。このような人物が帝国に居たならば更なる繁栄を齎してくれたものを…」

無理無理！この船を造るには力ある精霊さん達の協力がいるから。量産性なんか最悪だし普通にこれ造るくらいなら鬼神兵を造ったほうが安上がりなんじゃないかな？鬼神兵のお値段とか知らんけど…。

「遺言に、この船の所有権は私になっております…。彼は私を息子のように可愛がってくれました。最後に遺せる物、証となる物が欲しかったようです…。うう…。」

そう！ここからが大事！この船の所有権は俺にある事をハッキリさせないとダメなの！他人が勝手に弄ろうとするだけでアンの機嫌を損ねてしまうんだから危ないって。まあその前にアンは誰にも渡さないけどな！

俺の家族を攫ったり、危害を加えようというなら俺は…。真に不本意ではあるけど、この世界に喧嘩を売らざるおえない！…だから！そうならないためにもここは絶対に俺のペースで終わらせる！ダメ押しで泣き落としまでしてな！さあ！これで、どうだ！？

「良い…。これはそなたに遺された物だ。そなたの自由にせよ。…」

バカ者が泣く事があるか。笑え！笑って己を誇ってみせろ！そなたが泣いていては亡くなられた者が安心できないではないか！」

「…はい！この船に恥じない自分を貫こうと思います！」

やった~~~~！！アン！俺は！お父さんは勝ったよ！ふう…。あまりの嬉しさに返事が遅れてしまって気合で誤魔化した…。…怪しまれてないだろうな？

「うむ！さしあたっては姫様の護衛だ。そなたならば出来るな？」

「お任せを。必ずやお守りいたしましょう！」

さあて話しは終わった。テオはどこにいるのかなあ、つと。…あ、いた。テオ？あのね？実は…。

葵の回想より…。

…てな、事が数日前にあったんです。何で俺がこんなお芝居しなきゃいかんのよ？面倒くさかったわ…。無駄に思える今回の行動の理由なんだけどね？機動戦艦「アングレカム」の起動データ取りとアンの経験値稼ぎが目的だったの。

…なに？普通に暴ればいいじゃないか、って？ダメに決まってるじゃん…。個人で戦艦持つとか下手したらお尋ね者だって…。まあバレなきゃ、いくらでもやりようはあるんだけどね？でも、こそこそするのってイライラするじゃない？

だから帝国に、というよりテオ個人に後ろ盾になつてもらおうと  
いうわけです。造つたはいいけど対艦戦つてそんなにない、よね。  
だからもう、表立って行動できるようにしようと思つて一芝居打ち  
ました。今回のテオの謎の行動が起きて考えたのよ？

即興だつた割には上手くいったと思うな。テオには今回の事は話  
して快く承諾してくれたし！次回からはアンも連れて出撃するぞ！  
…まあ敵の規模にもよるけど、ね。はやく来い来い愚  
か者！ ってな！

S i d e o u t 葵

数日後…。

S i d e アン

はじめまして、アンです。今日はお父さん達と「外」へお出かけ  
します。今回は、お父さん達に意地悪する人達を懲らしめに行くの  
だそうです。いつもだったらお父さん達だけで行くのですが今回は  
私も連れて行ってくれるんです。

実は初めてのお出かけです。「中」では「演習場」で軽く動き回

ったことはありますが「外」へお出かけするのは今回が初めてです。実に楽しみです。現在は発進前の最終チェック中です。なにせ、初めてのお外ですから入念な確認がいるのです。

外ですか…。まだ、私が幼い頃にお外の事を聞いたらお父さんは、「その時になつたら、ゆつくり感じてくれればいい」って言ってくれます。「感じるって何？」って私が聞いたら「心で思う事」って言われました。少し前の私にはその言葉が何を意味しているのか、わかりませんでした。

だって、「知識としては知っているのに実際に見るのとは何が違うの？」なんて考えてましたから。我ながら無機物的だったと思います。まあ、感じるとは考える事ではなくて本能的で一種の原始的な感情…。あやふやなモノ…。でも、不思議と柔らかいモノ…。と、捉える事にしました。

白でも黒でもない灰色。物事をあやふやに考える事は私のような「AI」には必要な事のようにです。お父さん曰く「そのほうが親しみあるだろ？」との事です。親しみ…。これは私という娘に対する愛情と捉えていいものでしょうか？…何か違う気がします。

私はお父さんのパートナーとして造られました。害意ある者からは何者にも侵される事のない最強の船として。お父さんを護るモノとして…。あ、この事ですがお父さんは知りません。私を造ってくれたウーリさん達がこっそり願いを込められての事です。

ちょっと特殊な電子精霊の私の根幹にその願いはあります。…あります、が。これは“出来ればお願い”程度の強制力しかありません。反抗しようと思えば幾らでもできます。まあ、しようとも思いませんけどね。お父さんの事、好きですし。

誰に言われなくても護りますよ、お父さん。私に与えられた名前、アングレカムの花言葉にあるように「いつまでもあなたと一緒に」です。私の、この「祈り」は誰にも邪魔させません。邪魔者は排除するのみ、ですよ？フッフ。

「最終チェック終了、オールグリーン。起動準備よし」

「よろしい。では、司令閣下、号令を」

「うん。機動戦艦アングレカム起動！…くっく！造ってよかったー！」

お父さん…。私を造る時に、その台詞を言いたがってましたものね。願いが叶ってよかったですね？お父さんの初めてをもらえて私も嬉しいです。…変な意味ではないですよ？初めての台詞的な意味ですからね？変な事考えたらヤ！です。

「アイ・サー。魔導式相転移機関、起動値エネルギーに到達。魔導式相転移機関の起動を確認。艦内各部にエネルギーを正常に供給中。機動戦艦アングレカム起動します」

「機動戦艦アングレカムの起動を確認しました。「ドッグ」内と外部の時空間調整…問題なし。続いて転移シーケンスへ移行。転送ポート、順調に作動中。転移まで、あと30…」

「艦内の各部署に通達します。転送ポートによる転移を開始します。揺れる事はないとは思いますが総員注意してください」

いよいよ出発です。この先にはお父さんに意地悪する私の敵がい

ます。お外に出るのは楽しみですが、この意地悪さん達を懲らしめるのも実は結構楽しみです。精々足掻いてもらいましょう。無駄ですけどね。お父さんの前に立ち塞がるのですから覚悟は出来ていてしょう。遠慮はしません。

「3…2…1…転移、開始」

オペレーターの精魔奇兵がカウントダウンして転移を開始します。そして私達はキラキラ輝く金色の転移門が転送ポートから発生して一瞬にして外に出ました。青く広い空…。どこまでも続く広い大地…。今日の天気は快晴、まさにお出かけ日よりです。

これはアレですね？お父さんの敵を完膚なきまでに排除しなさいという事ですね？わかりました。私は全力でお父さんの敵を排除しましょう。懲らしめるだけにしようかと考えてましたが…。予定は変更です。サーチ・アンド・デストロイ見敵必殺です。

「転移、完了。作戦地から110kmの地点。誤差範囲内です」

「各部署より報告、転移による被害なし。航行に支障なし」

「それじゃ皆、行こうか。作戦地へ向けて発進！」

「うむ！発進じゃ！」

「アイ・サー。ステルス起動します。各種レーダーはワイドに展開、現在は敵影なし。続いて早期警戒のため無人偵察機トンプを周囲に展開します」

オペレーターの子、慎重ですね？無人偵察機トンプまで出すなんて。で

も、私の処女航海ですし。何よりもお父さんが乗艦しているのだから当然ですかね。まあ各無人機動兵器の実践テストの意味もあるのでしょうか、ね。

あ、無人偵察機トンボなんですけどね？名前のごとくトンボの形をしている無人偵察機で無人機動兵器の中では一番航続距離が長いのです。…武装や装甲が一番貧弱なんですけどね。でも、その代わりにレーダー機能や分析能力、通信機器の強化がされています。

「魔導式相轉移機関、順調に稼働中。エネルギー効率安定。巡航速度にて航行を開始。機動戦艦アングレカム、発進します。…作戦地点到着まで、およそ二時間です」

「おお、すごいじゃ。これはアオイの科学力は世界一、というやつじゃな」

「まあね！単艦での轉移なんて今のところ俺だけだな！」

「何を言うか！帝国だって大規模轉移を成功させたのじゃ！」

「はははっ！そうだったな！」

ふむ…。それでは早速内部生産プラントで無人機動兵器の更なる量産を開始しなければ…。作戦開始まで時間は限られていますから急がなくてはなりませんね。時間的に見て…、一千機も造れば御の字ですか。十分とは言えませんが元からある無人機動兵器と合わせて千六百機。まあ何とかなるでしょう。

ここで今回、造られる無人機動兵器とは基本となる無人機動兵器カブトムシです。それでカブトムシですが形は、まんま名前のそれです。角の

部分には超振動カタクターを装備、突撃にはもってこいです。背部には魔導式マイクロミサイルを装備。簡易だけど対物理・魔法フィールドもあります。魔導式機関を搭載していて飛行も可能。

これは言うなれば私の兵隊です。単機でも、ある程度自律行動が出来るAIを搭載しているのですが突然のアクシデントには弱いのです。ここは今後の課題ですね。今のところは私が各種機動兵器達を統合制御する形でしていますから問題はありません。

…が、まだ私も経験豊かとは言い難いですから状況の判断で甘いところや逆にやり過ぎてしまう事があるのです。それを調整、克服するためにも私は経験を積まなくてはなりません。全ては私のお父さんのために！私は頑張ります！

「二時間ね…。アン、調子はどう？」

『各部順調、問題ないです』

整備は完璧です。センサーにも異常は見られません。艦内の自動人形達と整備ロボットからも問題の報告はないですし、概ね順調ですね。寧ろ、好調ですよ？

「そうじゃなくて気分的なもの。緊張とかしてない？つて事」

気分的なものですか…。こればかりはまだ、わからないところがあるので、なんとも言えません。でも、緊張、ですか…。初めての外ですし、お父さんとお出かけです。…ああ、これが緊張というものなのですか？人間なら「ドキドキする」とでも言うのでしょうかね。

『…してないです、よ?』

「間が空くだけでなく語尾が疑問形、とは…。成長したな、アン」

『違います。緊張なんかしてません。お父…艦長の勘違いです』

お父さんって変なところで鋭いので困りものです。ああ、それと誤魔化す時のパターンを、お父さんを参考にしたのは間違いだったかもしれません。本人の事なんですから、バレる事は考え付くのに…。失敗です。

「お父さんでもいいのに…」

『…艦長?確かに私も初のお出かけで嬉しく思いますが今は作戦中です。ケジメはつけなくてはなりませんよ?』

お父さん…。悲しそうに肩を落とすのやめてください。思わず甘えたくなりますから…。でも、公私の区別はしっかりつけないと周りに示しが…。あ、全員が身内でしたね…。それは気が緩むわけですね。もう、お父さんでいいかな?私も、そう呼びたいですし。

「ううう…。テオオ、アンが冷たいよお。昔はお父さん、お父さんって言ってたのに…」

「おおう?な、なんじゃ、アオイ???」

『お、おおお父さん!それは昔の事です!』

私の返答が、少し素っ気ないからって変な事言わないでくださいよ!たしかに事実なのですが…。今もそんなに変わってないような

気がしますが…。それでも昔の事は恥ずかしいのですから、あまり言わないでください！

それよりもお父さん！テオから離れてください！そんなにくっついたらダメです！私もまだした事がないのに！…まだ、出来ないけど！あーもー！二人とも、は・な・れ・な・さ・い！！むう…。これは身体のない私には少々不利ですかね。私にも移動端的な身体を造ってもらえるようにお父さんをお願いしてみましようか？

「アオイ、その時の事を妾にも詳しく話すのじゃー！」

「いいよ、いいよ アンの可愛い頃を教えてあげようじゃない」

『テオも！何を聞いているのですか！？あと！お父さんも何を話そうとしているのですか！？』

テオ！？いけません！いけませんよ！？というより何、お父さんに再度くっついていられるのですか！？離れなさい、と言っているでしょう！お父さんは私のお父さんです！あげませんからね！お父さんも笑ってないで少しは抵抗してくださいよ！？何、普通に私の過去を話そうとしているのですか！？

「え？何って…。アンの可愛いところをテオに話してあげようと…」

『か、可愛いと言ってくれるのは嬉しく思いますが、やめてください。恥ずかしいです…』

こんな、皆さんの居るところで可愛いなんて…。もう！お父さんったら！もう！もう！恥ずかしいけど、嬉しいじゃないですか！ああ、でもやっぱり！恥ずかしいです！で、で出来ればお父さんと二

人っきりの時などに言ってくれば完璧なのですが…。どうでしょう？

「むう…。なんじゃ、話してはくれぬのか？」

「そうみたいだよ？アンが恥ずかしいって言うから、また機会があったら、ね？」

『またの機会も何もないです！お父さんも話さないでください！』

ダメです！話したらダメなのですよ！幼い日の恥部など明かせません！本当なら断固として記憶を封印処理したいですがお父さん相手にそんな事は出来ません…。うわ〜ん…。：あ、なんだ：簡単じゃないですか。私がお父さんをいつも見張っていれば問題ないじゃないですか。

「はいはい。もう、照れちゃって。アンは可愛いなあ」

『お父さん！』

会話を聞いている周りの家族達はクスクスと微笑ましいものでも見ているように笑っています。ううう、恥ずかしいです。お父さんに可愛いって言ってもらえるのはすごく嬉しいのですが、こういうのはやめてほしいです。ん？そんな事をしているうちに作戦地に近づいているようです。楽しい時間はあっという間とは言いますが本当のようですな。

「艦長に報告。早期警戒網より情報が来しました。敵はまだ我が方には気付いていません」

「ありがとう。偵察機は引き続き周辺の警戒を。ただし射線には入らないようにしてね。通信士、各部署に通達、総員第一種戦闘配置へ」

「アイ・サー。警戒は継続させます」

「アイ・サー。艦内各部署に通達します。総員第一種戦闘配置、乗組員は所定の配置に着かれたし。繰り返します、総員第一種戦闘配置、乗組員は…」

「アオイ、いよいよじゃな…。この船の初陣じゃ」

「そうだね。…テオは今回を入れて四回目だっけ？」

「そうじゃな。…安心せよ。まだ、爺達にはバレてはおらん」

「バレたら俺は、ほとぼりが冷めるまで逃げるよ…。怒られるのイヤだし」

「わかっておるのじゃ。アオイに迷惑はかけぬ。元々は妾の我侭からこうなったのじゃしな」

「ん？まあそうだけど、アンの事は感謝してるぞ。こうして堂々と日の目を見られるわけだし。な？アン」

『はい、艦長。私はテオに感謝しています。何の負い目もなく日の光の下、祝福されて姿を表せる事が出来るのですから。』

切っ掛けが何であれ感謝しています。こうしてお父さんと大手を振って出かける事が出来るのですから。ありがとう、テオ。

「う、うむ。お主らが、そう言ってくれると妾も少しは肩の荷が下りたように感じるのじゃ。今思うとアオイには迷惑をかけたと思っておるしの」

「はっはっはっ！十代の子供が何、一丁前に気を使ってるんだ？いつもどおり元気いっぱいにしていろって！」

「バカ者！アオイ、良いか？妾は、もう立派な淑女でレディなのじゃ！もつと敬わぬか！」

『テオ、私は艦長に賛成です。元気がないテオなど…。私には考えられません』

元気がないテオ？…想像できません。というよりは何かの病気と考えたほうが、信憑性がありますね。

「アンよ！お主もか！？うぬぬ、揃いも揃って…。もう良いわ！わかった、お主達の前に取り繕っておつても意味のない事じゃったな。この話しはここまでじゃ！敵は、もう目の前なのじゃからな！」

テオの言うとおりですね。まあ今回の敵は情報どおりなら殆んどが兵士崩れの魔法使い達やゴロツキ、傭兵といった者達です。こちらが遅れをとる事はありません。仮に、もしもの事があつてもハオ、ユエなどのお姉さん達が居ますし、問題ありません。けど今回の戦闘は私の起動データ収集も兼ねているってお父さんは言っていました。

…無様な戦いは見せられません。お父さんには私が頼りになる事を証明しなければなりません。私一人で戦うわけではないので独りよがりな事はしません、それでも私にだってお父さんに頑張った

事を褒めてもらいたいという欲求のようなものはあるんです。

失敗なんて出来ません。したとしてもお父さんなら苦笑しながら「失敗は成功の母なんだから、次を頑張ればいい」なんて言うてくれるかもですが。それではダメなのです。私はお父さんの苦笑ではなくて満面の笑顔で褒めてもらいたいのです！

ここはやっぱり敵を完膚なきまでに消滅させなければならぬですよ。私の初陣でもありますし、派手に祝砲をあげようと思いません。敵を葬りつつ、ね。逃がしませんよ？今回の帝国からの依頼は捕縛ではなく殲滅ですから。降伏勧告は最初にしますが突っぱねたら後は知りません。

後の禍根を残さないために一人たりとも逃がしません。仮に生き残ってお父さんに逆恨みされても困りますし。それでは行くつもりですか。

S i d e o u t ア ン

S i d e 葵

いよいよ作戦地に着くね。今回はアンの起動データ取りと戦闘評価だから俺達は出撃しないでここで指揮を執るだけ。まずは降伏勧告から始めないと、殲滅戦とは言え一応、形式上はしないと不味いしね。んー……。でも、殺しすぎちゃうのもなあ……。ふむ、一応、保険かけとくか……。ポチツとな。

「敵に通信を送れ。内容は「投降せよ、生命の無事は保証しよう。返答まで十五分の猶予を与える。これに応答なき場合は殲滅をもって対処する」以上だ」

「アイ・サー。通信送ります。…返答来ました。内容は「帰りやがれ、バカたれ」です…。(ボソツ) 私達の葵君に何て事を…こいつら、ただじゃおかないわ」

「フフ、フフフ…。いい度胸じゃないか。即座に返答してきた事は評価するが…内容が、な」

即断即決できるのは指揮官としては、まあまあだけ言葉遣いになってないな…。いや、これも精神戦なのか？こちらをわざと苛立たせて判断ミスを誘う…？それはないか…。相手はこちらがどういう人物かもわかってないんだからそんな事はないよな。

相手の人物像もハッキリしないうちから挑発とも取れる内容を送るとは思えない。下手をしたら致命的なミスだ。やはり、ここは指揮官としての判断力はまあまあだが総合的な能力は二流。加えて人格的には豪快だが品位はないという事か…。

「我が君…。吾らで彼の者らを排除してはなりませんか？」

「左様…。姉上と私で彼奴らの尽くを排除いたします」

「ハオ、ユエ…。君達の気持ちはわかる。でも、今回はアンの初陣でもある。この子に任せてみよう。二人の出番はまだ後だって」

ダメだよ？今回はアンの経験値稼ぎなんだから、戦闘知識はあつ

ても経験的な成長は、やってみないと実際のところ身につかないからね。一戦一戦が貴重な経験だよ。こんな時代だから戦闘には事欠かないしね。

「うぬう……。我が君が、そう仰るならば吾らは従います」

「アン、そういう事だから任せるよ？」

『アイ・サー。欠片も残さず殲滅します……』

おう……。あの優しいアンが暗く燃えている？声が一段低いよ。どつたの？なんか怒って、る？お父さん子だからか酷い言葉に過剰反応してるのかな？まあやり過ぎない分には止める気はないからいいけどね。やり過ぎなければ、ね……。

『それでは艦長。戦力行使の承認をいただけますか？』

「承認しよう。まあ軽く揉んでやって」

『アイ・サー。軽く捻り潰してやります』

アンの言葉を聞いた時「やっぱり不安だな」と思った俺は悪くないと思いたいです……。

Side out 葵

……。  
……。

⋮  
○

第十話「初めてとお父さんとお出掛けと」（後書き）

アンのお披露目ですよ！頑張ってもらいたいですなあ。  
それにしても、あゝ！…作者の指が止まりません！  
予定ではもう原作に突入しているはずだったのに！

…未だに決戦前って、どうゆう事？

すべてはこの指がいけないのです！勝手に動いて、もう！  
早くエヴァりん達とこのか達を出したいです…くすんっ…。  
ではでは。また次回にでも！

## 第十一話「戦艦と機動兵器と敵要塞と」(前書き)

本当は昨日の深夜にでも更新するはずだったのですが体調を崩してしまい。

無念ながら出来ませんでした。腹痛で二日ほど、まともに寝られませんでした…。

シンドカッタワア…。太陽が黄色く見えましたよ。

たかが腹痛と侮ったのが失敗でした。

夏バテって怖いね。抵抗力弱りまくりですよ…。

皆さんも気をつけてくださいね。

## 第十一話「戦艦と機動兵器と敵要塞と」

Side アン

さて、私のお父さんに暴言を吐いた敵にはお仕置きが必要ですね。それもとてモキツイやつを…。でも、一瞬で殲滅なんて楽な事をしてもお父さんのすごさは世間に伝わらないですし…。ここはやはり、最初に大きな一撃を当ててからジワジワと殲滅ですかね？では、行きますか…。

「さあて、アン、行ってみようか」

『アイ・サー。これより戦闘を開始します』

敵に彼我の戦力差を見せつけてやります。決して勝てない事を教えてあげましょう。お父さん、見ていてください。私、頑張りますよ！

「各部署に通達、総員戦闘準備。これより戦闘を開始します」

「ステルス解除。各機関、戦闘出力へ移行。…敵要塞に動きあり、敵戦闘艦と迎撃部隊が出撃中。…敵数、尚も増加中です。…敵部隊、密集陣形で本艦に向かって接近中」

戦闘出力になって魔導式相転移機関から供給される莫大なエネルギーが私の身体（船体）の各所に行き渡ります。…この私が今、感じているモノは何でしょうか？ワクワクともドキドキとも言える、これは…？…お父さんの言っていた高揚感というモノでしょうか？

「グラビティブラスト魔導式重力波砲、エネルギー充填。発射準備完了まで、あと15秒…。…3…2…1…充填完了。拡散モードにて発射待機中。…艦長？」

「グラビティブラスト、撃えー！…。（ボソツ）よおしっ！」

言いたい台詞が続けて言えてよかったですね、お父さん。そんなお茶目なところを戦闘中でも私は映像記録しています。もちろん最高画質で、です。発進時のお父さんも記録しました。私に、ぬかりはありません。…これは私の趣味の一つですね。大好きなお父さんの記録収集ですよ？誰もいない時なんかには収集した映像記録を編集しています。…この事は誰にも内緒ですからね？電子精霊との約束です。

「アイ・サー。グラビティブラスト、発射」

ズバアアアアアアアア！！ドツガアアーンツ！！…ボ、ボボボオオオン！！

オペレーターの人が艦長の命令を復唱してグラビティブラストを発射しました。黒い光の本流が敵に向かって、破壊の力で敵を蹂躪する。その光景は、まさに圧巻です。敵はグラビティブラストの超重力の圧力で紙くずのように圧縮、爆発していくのですから。

「敵陣中央部に命中。敵艦は連鎖的爆発が発生した事により被害多数を確認。敵部隊の損害率42%です。…報告します、敵残存艦隊に高魔力反応あり。…反撃来ます」

「フィールドを展開しつつ回避行動を取れ！」

敵からの反撃ですね？まったくもう、無駄なのに…。でも、これは丁度いいですね。おっと、お父さんの指示が下されました。娘としては従わないとなりませんね。では…。

『アイ・サー。フィールド展開します。フィールド出力96%で正常に稼働中』

「アイ・サー。ランダム回避に入ります。安全のために総員対シヨツク体勢」

フィールドは順調、想定範囲内です。これで軽く防ぐ事が出来るでしょう。この規模の魔砲攻撃ならばフィールドが無くても問題なく吸収できなくもないですが私のお肌（装甲）に傷が付くのでフィールドは展開します。お父さんも乗艦していますから万全を整えなくてはなりませんね。

回避行動は操舵士の人に任せます。彼女、腕がいいです。流石は風精霊の精魔奇兵さんです。大気中ならば風の流れを読む事が出来るらしいですよ？今回は操縦性の実践テストもありますから彼女の腕に期待ですね。

まあ私だけでも船全体を単独運航できなくはないのですが…。やはりマンパワーというものは馬鹿に出来ません。まあ、お父さんの作り上げた部隊なのですから当たり前なのですが。お父さんは皆を家族としていますから皆さんにも好かれていますね。皆さん、気合、気力は十二分ですよ。

…私が把握している限りでも、お父さんの事を異性として見てい

る人が何人も居ますから、ここは娘としてお父さんの事を護らなくてはなりません。…負けませんよ、皆さん？

「警告、敵魔砲弾発射しました。着弾まで3…2…1…来ます」

グギャアアアンン！！

『敵魔砲弾命中。フィールド出力94%に低下。しかし、被害軽微です。魔力は規定値内で吸収しました。充填されたカートリッジは自動換装中。戦闘行為に支障なし』

戦闘中に違う事をメモリの隅で考えていたら反撃されました。まあ予定の範囲内の事で問題ありませんでしたけどね。

…それはともかく、お父さんは魔力充填されたカートリッジは何に使うのでしょうか？皆を強くするためのご飯にもなるとは聞きましたが、それとは別で確保しているカートリッジがあるのを私は知っています。

まだ誰にも話しませんがね。下手な事したら、お父さんに迷惑がかかるかもしれませんし。まずは、お父さんに聞いてみないとお話しになりませんよ。私の予想では何がしかの媒体にするのではないかと睨んでいるのですが、どうなんですかね？

「残りの敵部隊はカブトムシを発進。一人たりとも逃がすな。アン、カブトムシの統率は任せる」

『アイ・サー。カブトムシの第一陣、600機を発進。…第一陣の

発進完了を確認。各機三機編隊で敵部隊を半包囲しつつ殲滅。一匹たりとも逃がしてはなりません」

お父さんの指示で機動兵器達を発進させます。ここは景気良く半数近くを発進させますよ。発進後は基本編成を3機編隊にして進撃させます。敵から見たら綺麗な六角形の蜂の巣状に見えるでしょうね。…え？この陣形に意味はありませんよ。敢えて言えばただ綺麗かな、と…。

「あれ？600機？今ある機動兵器の数って500機じゃなかったっけ？」

『私のデビュー戦でしたので1000機ほど増産しました。…ダメ、ですか？…お父さん？』

「もう言ってくればいいのに。…もう！アンは可愛いなあ！いいよ！許す！でも、今度からはちゃんと報告するんだよ？」

『はい！お父さん！』

やっぱり、お父さんは優しいです。こんなところも大好きなんですよね。…ん？全機配置につきましたね。それでは花火を上げましょう。盛大に、ね。

…全機マイクロミサイル発射口、開放。…各機、任意に敵標準。…マイクロミサイル一斉射、開始。

「カブトムシが敵部隊にマイクロミサイルを一斉射、戦闘に入りました。敵部隊の損害率64%、被害甚大です。味方の被害は軽微。作戦遂行に問題ありません。順次、各個撃破させます」

むう……。思ったより生き残りが多いですね。最初のグラビティブラストと合わせて敵損害率が64%ですか。予定よりは下回ってしまいましたが大きな狂いではありませんし問題はないですね。

…む？レーダーに感有り、です。私達に向けて接近する艦艇がありますね。

「報告、敵戦闘艦隊の分艦隊が本艦に接近中。戦闘中のカブトムシ達を迂回するルートで来るようです」

「それじゃ、第二陣を出撃。撃破に当たらせて」

『アイ・サー。第二陣600機を出撃、敵分艦隊に向け、これを撃破します。…第二陣の発進完了を確認。第二陣のカブトムシは3部隊に別れて進撃中』

機動兵器達は中央に300機、左翼と右翼に150機ずつで半円形に囲むようにして展開中。配置についたと同時にマイクロミサイルの一斉射。その後機動兵器達を突撃、接近戦で敵艦船の足を止めます。

…それにしても敵も思い切った事をしますね。苦しい戦況の中で、敢えてこちらに分艦隊を派遣してくるなんて…。

まあ、それだけ敵が切迫していたという事ですかね。しかし、一発逆転を狙おうなんて…甘いですね。それも激甘です。状況によれば有効でしょうが私達相手にそれは自殺行為ですよ。

ふう、相手の考えが読めませんね。無駄な事をするなんて…。

以前に比べれば大分マシですが、まだ数値で物事を判断する私には難しいです。この辺は私の経験値が足りていないという事でしょうね。あ、でも、ウーリさんのお話では、お父さんの事になると私のスペックは上がるらしいです。気持ちを探るという意味で。不思議ですね？

「現時点で第一陣の味方部隊の損害率は7%、敵部隊の損害率は82%です。敵部隊の撃破を確認、敵は壊滅です。第二陣の部隊が敵戦闘艦に接触、戦闘に入りました。カブトムシはマイクロミサイル一斉射後に各機突撃。敵分艦隊は被害多数により移動速度が低下、その場で応戦に入ります」

こちらの損害も少なからず出ていますね…。第一陣と第二陣、合わせて現時点で損傷率11%ですか…。流石に実戦の経験が足りない私では被害を抑えるのはここまでが限界ですね。

…もちろん、現時点での話しですよ？これから効率のいい部隊運営を学習していくので問題ありません。

何はともあれ、残りの敵の排除または捕縛です。殲滅だとは言っていますでしたが実は撃破した敵の大半はしぶとく生きています。気分的には前にも言ったように禍根を残さないためにも殲滅しちやいたいのですが、お父さんが作戦開始前にスタンモードでロックをかけてしまいましたので出来ないんですよ。

私がロックを外す事も出来なくもないんですけど、お父さんの意志を尊重してあげたいではないですか？

…でも、スタンモードとは言ってもグラビティブラストはスタン

モードでも殺傷能力は抑え難いのです。主砲は伊達ではないのです。

実体弾のマイクロミサイルは、殺しはしないようになってはいますが命中すれば爆発しますし、ただではすみません。良くて火傷に打撲、悪ければ複雑骨折です。俗に言う半殺し？というものですかね。

とりあえず機動兵器達の補給と損傷の酷い機体は修理です。

『第一陣は損傷の軽微な一部の機体が残敵処理にまわり、他は順次補給させます。第二陣は敵分艦隊の排除を継続、まもなく排除完了します』

完璧です。敵は成す術もなく壊滅です。一度だけ砲撃を許してしまいました。が、アレは装甲とフィールドの実践テストですので問題ありません。これほどの戦果ならばお父さんの名が更に上がる事でしょう。私はお父さんの役に立てる事を証明出来たでしょうか？

『艦長、この戦闘は私達の勝利です』

「最後まで気を抜いちゃダメだよ？何が起こるかわかんないんだから」

『はい、艦長…』

そう、ですね。

戦場で一瞬でも気を抜くなどしてはいけませんね！お父さんの言うとおりで！

…これは反省ですね。私は引き続き周辺を飛んでいるトンボから送られてくる情報と自身のリーダーの情報进行分析して警戒します。

Side out アン

Side 葵

いやあ、どうやら何事もなく、アンの実戦テストは終わりそうだな。処女航海で更に初陣でこれだけの戦果を挙げたんだから、お父さんとしては鼻が高いですな。良くやったね、アン？でも作戦直前にピンと閃いて流石に殺しては不味いと思ってスタンモードにしたけど…。

結構な数が死んだね…。

いや、今更、この程度で良心が痛むとかではなくてね。尋問するために、なるべく生かして捕まえたいじゃない？帝国からは殲滅と言われているけど俺がただ素直に従うわけないじゃん。情報は俺個人でも手に入れますよ。

そのためにはこいつらを尋問して情報を手に入れなくちゃならんよ。もしかしたら何か有益な情報とか手に入るかもしれないしね。

あー、そうそう、スタンモードはまだ、改良の余地がありそうだなあ。この辺は適当に作ったからなあ…。どうしょ？やっぱリアルか？某魔砲少女の非殺傷設定とかが一番使い勝手がいいのか？

でも、アレはリンカーコアに魔力ダメージで過負荷を与えて気絶させるものだから、この世界の魔法使いに効くのかね？なにしろリンカーコアなんてないし…。あー…それ以前にマイクロミサイルはどうしよう？実体弾なんだよなあ。

思いきって魔導式レーザーにするか？

それなら出力調整すれば殺さずに何とかなるんじゃないかね？…でも、機動兵器達に搭載されてる魔導機関の出力問題があるんだよな。飛行機関とフィールドでかなりの割合、エネルギー取られてるし、レーザーとなるとミサイルより消費が激しいよな？

無茶じゃね？もう一度、設計からやり直したほうが早くね？あー、もー…。また一から設計のやり直しかな。カブトムシは某機動戦艦の機動兵器を参考に改良しただけで完全なオリジナルとは違うしな…。どうしよ？これが終わったら造るか？

とりあえず、カブトムシの姿形は今のままでいいとしても、問題は中だな。魔導機関の出力向上と機動兵器に搭載できるレーザー兵器の開発。…ん？待てよ…。レーザー兵器なんかは直ぐに作れるんじゃないか？某ガジェットなんかレーザーかビームみたいのホイホイ出してなかったか？

レーザー兵器はソレでいいか…。という事で問題は魔導機関のほうか…。出力向上なんて簡単に言ってるけど、実際問題そう簡単にはいかないしな。俺の知ってる異世界技術でなにか代用か参考になる物って言ったら相転移機関、熱核融合炉、超伝導バッテリーなど、だしな…。

どれも小型化が半端なく面倒くさい…。出来なくはないけど時間がかかるんだよなあ…。…いつその事カブトムシ自体を一回り大きくするかな。そうすれば、ある程度の空きスペースを確保できるから、その空きスペースに増設すればいけるんじゃない？

あ…。そうすると今度は重量の問題が出てくるか…。いくら重量軽減の魔法でコーティングしてはいても何か問題が発生して解除されたら、な…。

今の機動性を確保したまま重量を増やすとなると重力スラストの肥大化や増設、重力制御システム、姿勢制御システムの再構築などなどの問題が一気に来るか…。

それによく考えたら某ガジェットなんかレーザーかビームの構造はともかく出力的に無茶じゃん…。問題がありすぎるけど機体自体を大きくするか？一から作るよりは面倒が…。ダメだ。同じような物を作るのは精神的に辛いわあ…。具体的に言うとなんか楽しくない！

とりあえずは魔導機関の開発に着手するか…。

面倒くせえ…。でも、開発する時間は楽しそうだ…。どうするかなあ。やっぱり、一から再設計して作るか？時間は「工房」を使えばある程度何とかなるしな。あ…。でも、カブトムシの形は変えない！これが俺の挑戦だから！

「艦長、戦闘を終了しました。次の指示を」

おっと、機動兵器の改良計画を考えていたら戦闘は終了してしましたな。とりあえずは…。

「それじゃカブトムシ達は捕まえた捕虜を一箇所に集めておいてね。それと医療班は敵味方に関係なく怪我人の治療をお願いね」

「アイ・サー。捕虜の集合と怪我人の治療を行います」

敵部隊は壊滅したから後は要塞ですか？

誰を行かせるか…。

やっぱり八才達かな？対人戦で二人に敵う者はいないし。二人が鍛えて指揮下にある四個中隊は特に対人戦のスペシャリスト達だから心配も少ないしな。やつてもらうか！援護にカブトムシもつければ人手的にも問題はないさ。

「ありがとね。あと八才とユエは自分の部隊を引き連れて敵要塞の占拠をお願いしていい？援護にカブトムシも100機つけるからさ」

「ハッ、お任せください！」

「必ずや我が君のご期待に応えてみせましょう」

相も変わらず、頼もしい二人です。もう、惚れそうです。何も知らずに二人と出会ったら思わず「姉御！」って言ってしまいたいそうですな！…いや、実際には言わないけどね？だって俺のほうが歳は上だしね…。今は関係ないな…。

「いつてらっしゃい。期待してるね」

「ハッ、行って参ります！」

さて、次は何を創ろうかな…。

Side out 葵

Side 月<sub>正</sub>

吾らは今敵要塞に向けて進撃中だ。私は姉上と並んで飛び、直ぐ後ろには仕官クラスの4人そして彼女らが率いる四個中隊と機動兵器が100機を連れている。

「良いか！？吾らの敵は我が君に仇なす存在だ！しかし慈悲深い我が君は敵の捕縛を望んでおられる！…それにかかわらず！それを理解できぬ愚か者がいる！その者達には決して手加減などいらぬ！お前達の実力で以って黙らせるのだ！」

「……ハッ！実力で黙らせてやります！……」

姉上、気合が入っておりますな…。

我が君のためならば姉上は本来の基本スペックを覆すからすごいものだ。…周りの者達は私も姉上と変わらないと言われるが、そんな事はない。ただ、私は我が君を思っただけの行動であって姉上のようにスペックが跳ね上がるなどしない…と、思う。

姉上と違って私は常識を持ち合わせているつもりだ。私に姉上のような非常識な力はない…とは言わないが。それでも私は常識の範

囲内で力を振るってきたつもりだ。…時々はしゃぎ過ぎて加減を誤る事はあるが、な。

「よろしい！仕官クラスの4人は四中隊と機動兵器をそれぞれが率いて行動せよ！では、内部の制圧にかかれ！」

「……了解！」……

部下（仲間）達は行ったか…。あの者達の実力は優秀ゆえ不安はないが、それでも彼女達を鍛えてきた私は心配だ。油断して怪我でもしないかとな。彼女達が傷付くと我が君のお心に悲しみを与えてしまう事になる。

それだけは避けねばならぬと私は考える。我が君が、どんな怪我でも死ななければ治す事が可能とはいえ、傷付いたという事実だけはとうしようもない。家族想いであるあの方の事だ、我が君は怒り、傷付けた者達に復讐する事だろう。

どのような手段を用いても相手を破滅させるまで止まる事はない…。

…考えが暗いほうへと流れてしまったな。さて、部下達は要塞を包囲して、その出入り口を押さえている。要塞の周囲は機動兵器達がセンサーを光らせているのでネズミ一匹、この包囲網から逃げる事は難しい。

あとは内部を順次制圧していただけたな。

「それでは姉上、吾らも行くとしよう」

「うむ。ユエよ、どこから攻めるとするか？」

…姉上、わかっけていて聞いておりますな？顔が笑っておりますよ。だいたい、そんなもの決まっております。我が君の守護刀たる吾らは如何なる敵であろうと正面から叩き潰すのみ。

「そんな事は決まっております？正面から堂々と蹂躪するのだ」

「ふふ、それもそうだな。いや、それでこそ吾らたりえるのだ！では、行くぞ！」

「承知！」

まったく、姉上も意地が悪いものだ。このようになる事などわかってるだろうに態々私に確認を取る事をするのだから。要塞の外は既に吾らが支配下にある。逃がしはせぬよ…。一人残らず排じ…もとい、捕縛してくれるわ！

S i d e o u t 月ユエ

S i d e 陽ハオ

敵拠点に突入した吾らは部下（仲間）達と内部を次々と制圧していった。…だが、先の戦闘でほとんどの兵が出ていたようで警備兵は少数ほどしか居ない。まったく！防衛のための兵を残しておけと私は言いたい！

…せつかく、我が君に吾らの活躍する姿をお見せできると思っていただけに私は不満を感じる。これでは我が君に私の勇士を見てもら…ら。

「姉上…。何か？」

いや！ユエ？わかっておるぞ？優先すべきことは我が君より任せられた、この拠点の占拠である、とな。だから、頼む…。そう怖い目で睨むでない…。

「何もない。気にするでないわ」

「左様か？何やら不埒な事を考えておったように感じたのだが…」

良いではないか。ちょくつと我が君に良いところを見せたいと思っただけではないか。むう…。

しかし、ユエめ…。勤が良いではないか。事、我が君のことになるとスペックの上がると言われる私ではあるがユエこそがそうではないか…。何が「私は姉上ほどではない」だ！瞬間的な力はユエのほうがすごいではないか！…普段からためてでもいるのか？ストレス的な何かを…。

…疲れておるのか？いや、この姿になってから疲れるほど動いた事は…ないな。うむう？では、なんだ？

…。

……。

.....。

おう！？そうか！…愛だな？我が君の愛だな！？我が君分が不足えいよつそしておるのだろ？その気持ち、わかるぞ、ユエ…。ここ最近、我が君もお忙しくなられて吾らの身体（刀身）のお手入れの時間がなかなか取れなかったからな。

不満に思うその気持ちは実によくわかる！まあ、九十九神化してから刀身の手入れはそこまで必要ではないのだが、な。ある程度は吾らだけでも出来るのだし、わざわざ、我が君のお手を煩わせる事もないのだが…。

我が君のお手入れは自分でするよりも…その…アレだ。…なに？…だからアレだと言うに…。…つまりアレだ。…その、だな？…気持ち、良いのだ…。ふむう…。

身を任せておると、こう、何と言うか…安心してしまつのだ。あの感覚は何物にも代えがたい…。

「姉上、何を考えておるのか？表情が…その…緩んでおるぞ？」

「ん！？いや、何でもないぞ…。んんっ！…ところで、ユエ？最近、我が君にお手入れはしてもらったか？」

いかなな、ついお手入れをされておる時の事を思い出して惚けてしまった。それにしてもユエだ…。今朝、顔を合わせてから気にはなっていたが…今日は、いつもより肌がツヤツヤしておるな？

吾らが前にお手入れされたのは二日前のはず…。どういう事だ？

「なんだ？このような時に突然。…昨夜してもらったが、それが何か？」

「そうか私は、二日前に…ん？昨夜！？ユエ！それはどついつ事だ！？」

なん…だと？

私は二日前なのに…、ユエは昨夜！？これはどついつ事ですか！？我が君！私はしてもらっておりませぬぞ！…飽きたのですか？私に飽きたのですか！？くすんっ…。

いや、それはないか…。

私自身、言っていて違和感がありすぎる。我ながら馬鹿な事を考え付いたものだ。だが、本格的に不味いのではないか？我が君分えいようそが不足しているのは私のほうではないか…。うむう…。

「姉上…、仮にもここは敵地なのだからそのような大きな声を出さない。それと…」

「覚悟おおおお！…！」

「お主がな！…！」

ザンツ！ずるうう、ずちやつ…。

「さて…、どついつ事も何も昨夜、私は我が君と寝る前のお茶の約束を果たしに行ったのだ。そして、その時に…して、もらったのだ」

「ここは敵地ゆえ時々敵の警備兵が襲撃をかけてくるようだが通用せぬよ。ユエも油断などせぬからな。…そんな事よりも話しの続きだ！してもらった、だとお。…なんなのだ、それは？…ユエ、何が、あつた？…なぜに頬を赤く染めておるのだ？くうツ…！」

「ず、ずるいぞお！？ユエエ！その時間は…！」

「死ねええええ！！」

「五月蠅あああいいいい！！！」

話しの邪魔をおおおお！！するなああああ！！！！！！

ドゴンツ！ドンツ！！…ぐちゃああ。

「ふん！それでユエ、邪魔が入ったが、その時間は私が休む前の鍛錬をしておる時ではないか！？…なぜだ？なぜ、この姉を誘わない！？？」

ダメではないか！ダメダメではないか！姉たるこの私を誘わぬなど！ユエ、姉は悲しいぞ。うう…。

「だから姉上…、ここは敵地だと…！」

「仲間の仇いいいいいい！！！」

「知るかああああ！！！！！」

ザクツ！べちゃああ…。

はん！警備兵！お前の言う仇などどうでも良いわ！それとユエ…倒した敵などどうでも良い。私を誘わなかった理由を聞かせてもらおうか？理由如何によつては、私はユエ、お前と少々お話しをしなければならぬぞ？

「姉上、顔に返り血がついているぞ？拭かぬか。…ふう、まあ良い。なぜも何も私が誘う前に姉上が鍛錬するために駆け出して行ったのではないか。責められる言われはないぞ？」

「うぐつ…それはそうだが…しかし、納得出来んものは出来んのだ。…ユエ、羨ましいぞ」

仕方がないではないか。我が君をお護りするためにはそれ相応の鍛錬が必要なのだからな。それを疎かになど、この私が出来ようものか？いや、出来ぬよ。しかし、なにもそのような時間にお手入れの予定など入れなくても良いではないか？元がお茶の約束だったとしても…。

「まったく、姉上は仕方のない…。本当は作戦後に伝えようと思っていたのだが…昨夜に頼まれた、我が君から姉上への伝言がある。…聞くか？」

「うむ、聞く。早く話せ、ユエ」

我が君からの伝言であろう？早く話さぬか、ユエ！

「切り替わりの早い事だな…。伝言はこうだ「次のお手入れは八才だから今日の作戦後にもおいで」…確かに伝えたぞ？」

「……………」

「ユエは今、何と言ったか？」「次のお手入れは八才だから今日の作戦後にもおいで」と言ったのか？聞き間違いではないな？そうだな？

「姉上？」

今日のお手入れは私…。

「……………ふふ」

ふふ、ふふふ！やったー！我が君！お慕いしておりますぞ！いや、流石は我が君であらせられる！ちゃんと私の事も考えていてくださるとは！私は嬉しいですぞ！ふふふ！

「姉上？何度も言うようだが、ここは敵地です。あまり惚けるのは感心せぬぞ？」

「ふふふっ！ユエ！早く終わらせるぞ！このような事をしている時間も勿体ない！」

「ユエ！ポケットとするでない！行くぞ！このような片手間では出来な仕事など早く終わらせて我が君のところへ、まいらねばならぬからな！」

私は駆ける！目指すは要塞の中心部なり！

「あ、姉上！？お待ちください！一人で行くのは危険です！」

「早く来い！ユエ！一刻でも早く終わらせるのだ！はーっはっはっ  
！」

「姉上！」

Side out 陽ハオ

Side 月グヰ

突然駆け出して行く姉上に追いつくのは苦労した。なぜか道順を知っているが如く迷わずに進んで行くわ、防衛兵器や防御壁は一刀の元に斬り捨てて行くわ、警備兵は弱いわ…最後のはどうでも良いな。うむ。

とにかく！私が我が君の伝言を姉上に言った途端にこれだ！まったく！スペック向上にもほどがあると思うのは私だけだろうか？最近の姉上は落ち着いておられたから私も油断していたのかもしれないな。

ここまで狂喜乱舞した姉上を止める事が出来るのは我が君だけだろう。程度によっては私にも出来るが、な。まあ毎日のようにお手入れされてきたのに、ここ最近はお忙しく二、三日に一度してくださればいいほうだからな。姉上もストレスが溜まっておったのだな。私は昨夜の至福の時があったので姉上ほどではないぞ？

お手入れもそうだが我が君とお茶を共に堪能して穏やかな時間を

過ごせたのでな。気分的にも身体的にも今は万全だ。おっと、それよりも、まずは姉上だ。追いかけてねば…。

「ここが、そうだな！」

先行していた姉上に追いついた私。そして吾ら二人の前には異常に頑丈そうな扉がある。たしかに怪しげではある。…が、ここが中心部かと言うと断言は私には出来ない。それなのに…。

「…姉上、なぜ、そう断言できるのだ？私は不思議で仕方ないのだが」

本当に不思議でならん。私も条件付であるなら予想くらい出来なくはないが、それでも姉上のように断言はしない。精々がココだろうな、くらいだ。吾が姉ながら不思議だ…。

「女の勘だ！それ以外に何があるというのだ！」

「姉上、貴女という人は…。まあ良いです。それよりも手早く占拠して総仕上げとしましょう」

本当に何なのだろうか？言うに事欠いて「勘」とは…。いや、バカにはしておらんよ？女の勘は時としてバカにならんからな。…姉上の場合是我が君の事になればハズレを引くほうが珍しいな。殆んど当てにくるのだ。

ふう…。とりあえず、姉上の言を信じてこの扉の向こうを制圧するとしよう。時機に部下達も他の制圧を終わらせてここに駆けつけてこよう。

「うむ！そうするとしよう！早く終わらせて我が君の元に行かねばならぬからな！」

それでは、目の前の頑丈そうな扉を破り内部の制圧と行くか。私は扉の前に立ち無造作に両手に持つ剣を二回振った。そうすると扉はXの字に切り崩されて意味を成さなくなる。

「よくやったぞ！ユエー！」

ふん、このような物で吾らの侵入を防げるなど考えると、な。片腹痛いわ！どうせ備えるのなら我が君とマリー達、合作の強化型精霊装甲を持ってこいというのだ。…まあ公表してはおらんのだから無理ではあるがな。

アレはスゴイ…。我が君やマリー達は本当に良い仕事をする。切れぬわけではないが私でも骨が折れるほどだ。いつか、確実に真つ二つに出来るようになりたいものだな、うむ。それまで鍛錬あるのみだ。む？あやつが指揮官か？

「よくココまで来られたな…！お前ら、ただで済むと思っているのか！？」

指揮官らしき男が一人とその他三人か…。まだ油断は出来ぬが人員のほとんどが迎撃に当たっているとみて良いな。気配を探したところ伏兵のようなものはこの部屋には居ないようだ。外の迎撃に出し過ぎたのであろうな。愚かな…。

「済むとは思ってはおらぬよ？だが…お主らを血祭りに挙げれば問題なかる？それで万事解決だ。我が君も安泰だな、うむ」

飯に何かあつたとしても吾らがお護りしている限り死角などない！何事にも絶対などという事はないがそれに近い完璧な守護をみせてくれるわ！どちらにせよ、ここを占拠してしまえばどうとでもなる。こやつらを始末するのもその後で良いしな。

「ふざけた事を抜かしやがって…！いいか！？ここが潰されても他の奴らがお前達を地獄の果てまで追いかけてめえらの我が君とやらを必ず殺して…っ！?!?!?!?!?!」

「…今…何と言った？」

姉上…殺気の出しすぎだ。クズどもを見てみる、ブルブル震えているぞ？怯えて話せぬではないか…。しかし、私には聞こえたぞ？…まあ空耳かも知れぬ。一度怖がらせて、もう一度だけ…そう、もう一度だけ聞かせてもらおうか？…私は何と慈悲深いのだろうか？フフ、フフフ…。

「姉上…私の耳にはこのクズが吾らの我が君を「殺す」などと聞こえたが…」

「下郎、答えよ。今、何と言ったのだ？私の聞き間違いかも知れぬ…。もう一度だけ…言ってくれぬか？」

…姉上も優しいな？…いや、アレは辛うじて我が君のご下命を護ろうとしておるようだな。握り締めた拳から血が出ておるぞ…。余程こやつらを亡き者にしたいのを我慢しておるようだな。その証拠に視線など熱くも冷たくもないほどに静かなものだ…。姉上、私でも怖いのです。お願いですから落ち着いてくだされ…。このままではクズどもが廃人と化してしまうのではないか。

「答えよ…。ただし、よく考えて…発言せよ。さもなければ…！」

「すみませんごめんなさいすみませんごめんなさいできるところだったんですすみませんごめんなさいもつにどとなまいきなこといいませんですはいすみませんごめんなさい！」

姉上の事が余程怖かったのだな…。私が発言を優しく促すと即座に答えてくれたぞ。安心せよ…。必要な事を話してくれるまでは生かしてやるう。そして聞く事がなくなれば後は我が君次第…。その時は…。くつくつくつ…。

「今のは私の聞き間違い…そうだな？下郎…」

「サー！その通りです、サー！」

姉上よ、いつの間に仕込んだのだ？随分と忠実ではないか。…こやつ元は軍人か傭兵か？ふう、国や己が主を裏切るとは…。…救いようのない者だな。まあ良い、吾らには関係のない事だ。とりあえず、この拠点は占拠させてもらおうとしよう。

「では、この拠点は吾らが支配下とする！…問題、無いな？」

「……イエス・ママ！！」「」「」

私の事をママと呼ぶな…。

Side out 月<sub>五</sub>

葵達を含めた「紅き翼」とアリカ、テオドラの姫達、そしてそれに味方する者達の反撃が始まった。葵とナギ達は同じ所属でありながら別行動が多い……。だが、それには理由がある。葵個人で所有する戦力がそれを可能にしているのだ。

「紅き翼」は葵の戦力を無駄にしないために分散して情報収集、拠点制圧をすることで効果を上げていた。それは後々、帝国や連合の一部の者達やアリアドネーなどの理解ある者達に重要情報を提供することで今後、仲間になる。

……。

……。

……。

第十一話「戦艦と機動兵器と敵要塞と」(後書き)

どうツスカね？上手く出来てたでしょうか？誤字脱字とか…。  
自分じゃ気付けないところもあるかですから報告あったら感謝で  
す。

感想なんかもあると作者が、がんばれます。

そして今になって気付いた…。

タイトルが…魔法から懸け離れていることに…。

うううう…！

第十二話「書類と発明とお手伝いと」(前書き)

ちよつと番外風味？

## 第十二話「書類と発明とお手伝いと」

Side 葵

アンのデビュー戦から四ヶ月近くが経った。今は「工房」内の比較的大きな執務室で書類仕事中…面倒くさいよお。ここまで色々あったなあ…うん。襲撃して捕らえた人達は全員、帝国に引き渡した。もちろん吸い出せる情報は全て吸い出した後にだけど、ね。くつくつく…。

本当にどうでもいい情報から王女殿下達の役立ちそうな情報まではもちろん、俺個人で使えそうな情報とかも手に入って個人的にはしてやったりですな！困った事があったらこの情報をチラつかせて言う事聞かせようと思う。情報の鮮度が落ちる前に使わないとなあ…。うむう…。まあそれは後々考えるとして…。

この四ヶ月間、何をしていたかというと、ですね？主に情報収集と敵拠点襲撃をしていました。その襲撃の時にアンの起動データを取って、それを最適化してより良い効率化を図ってみました…。

「お父さん、ココの項目の確認をしてほしいのですが」

「んー？どれどれ…。あー…、うん、これは問題ないから、そのまま処理してくれる？」

「はい。では、そのようにしますね」

「うん、よろしくねえ」

ん？今のは誰か？って？…誰って、アンですよ。何か文句でもありませんか？いいじゃない！アンが『移動端末が欲しいな』って言うてきたんだもん！俺としては何が何でも造らなくちゃならないでしょう！？可愛がっているアンのお願いだもん、当然叶えましたよ！

身体は精魔奇兵の技術を利用して身体の基本となる生体金属を六割と通信系・制御系・導力系・電子頭脳などとはナノマシンを三割使って構成！

…残り一割は何だったかな？魔法的な何かだったような気が…まあ、今はいいか…。

で！身体はだいたいアンの思い通りになるようにした。…これはアンから特にと希望があったんだけど、何でだろ？アンにも理想の体型とかあるのかな？

そんなこんなで今ではアンも一緒に行動できるようになりました！可愛いよお AIだった時からウィンドウだけで姿がなくなるとも可愛かったけど身体が出来て、姿を持って会話できるようになったのが…なんと言うか。…いいね。

アンの願いだっただのか、見た目12〜3歳くらいで長いサラサラの銀髪をポニーテールにしているの。歩きたび左右にそれが揺れているのが活発さを醸し出しているねえ。瞳の色はもちろん金色です。あの作品のファンとして、そ・こ・は・譲・れ・な・い…！

服装はレースが施された白のワンピースとシンプルにまとめられるけど、胸元に輝く赤いブローチがアクセントになっていて可憐

で可愛らしさを演出している。

アンの身体を造る事が決まってから皆で服装について話し合ったんだけど…話し合いが思いのほか難航して決まらなかったなあ。あの時は精霊や悪魔とはいえ、流石は女の子だと思いき知らされました…。皆、一步も退かないんだもの…。

結局決めたのは話題に上ったアンでした。俺達がある意味、仁義なき話し合いをしてる時にアン自身が何百と用意した服から自分で選んでコーディネートしてた。…因みにワンピースは俺が用意した服でブローチはウーリとマリーが用意した物でした。

ウーリとマリーはイイ仕事してくれました！あのブローチはいい物だ！白に映えますな！…俺が用意したのを選ばれるとは思ってもなかったけど、ね。いや、嬉しいけどね？自分の選んだ物を着てくれるんだから。

俺のところへ着た服を初めて見せてくれた時のアンの恥ずかしそうに、はにかむ顔がなんとも言えないほど可愛らしかったです…！やっぱり女の子はいいね！可愛い服とかあるから華やかだもの！

…どうしたものかね？これは娘を溺愛する父親の気持ちというやつでしょうか？…自重しよ、マジで。俺はまだ独身ですからね。こんな事ではいけませんな！ハア…。

…まあ、今、その話しはいいとしよう。

「司令閣下、こちらの書類の確認をお願いしますか？」

「はいはい、どれどれ…？む？ねえ、アイリ？なんだかココだけ

月の食料の消費が多くない？」

「はあ、その月は戦闘が多く、その戦闘後の反省会（宴会）が多かったせいではないでしょうか？」

オウ、ジーザス…。ほとんど俺のせいじゃないか！…まあいい、書類に記載されてるグラフを見ているかぎりでは「食料生成プラント」の許容値範囲内みたいだし。今後、自重すれば…できるかなあ…。できたらいいなあ…。

「それじゃ「食料生成プラント」には、この書類に記載されてるとおりに増産して、と通達しといて」

「了解しました」

さてと、それで機動兵器のバージョンアップもしたな。実体弾のマイクロミサイルを光学系のレーザーかビームに換装しようとしてたけど…結局、元の実体弾のマイクロミサイルのままにした。

換装しなかった理由？理由は必要性がなくなったから…です。

どういう事かという弾頭を爆裂弾からトリモチ弾とか電気ショック弾などに換えれば問題ない事に気付いたからね。…まあ実体弾だから当たれば相当、痛いけど。マイクロとはいえミサイルだし、ね？

武装に関してはそれで一応の決着がついたから、後はソフト面を強化改良してみた。ランダムな連係を取り入れて、より複雑な機動を出来るようにしたり、単体の状況判断能力を若干だけ向上させたりもした。

三機編隊なら並の魔法使いにも引けは取らない自信があるね、うん。むしろ集団になればなるほど強くなるんじゃない？だって連係がハンパないから。常時、並列ネットワークで個々が繋がってるから一機が撃破されても直ぐに、その情報が行き渡って補填されるからね。

一系乱れる事なく淡々と進撃してくる魔導機械昆虫の軍勢…。改めて思ったけど傍目から見たらSFホラーじゃないか、コレ？

でも、二足歩行よりは多足歩行のほうが無人機として姿勢は安定するんだよなあ。武装も積むからどうしても重量は重くなるしね。例として挙げればカブトムシ一機当たりの重量は、およそ450Kgです。…それでも全ての機動兵器には重量軽減の魔法がかかってるから本来の三分の一以下だけだな！

なんか俺って地味なところで魔法を使ってる気がする…。クスンッ…。

そうそう！機動兵器で思いついたんだけどね？有人機も造ろうとしたのさ！それはもう、気分はウキウキ、機体設計や強度計算なんかもスラスラと進みましたよ！楽しかったです。あの夢のひと時は忘れません。

それで、いざ実物の製作だ！という時に俺は、とあることに気付いた…。

仮に造ったとしてもアンの中にそれを搭載させる場所…格納庫がないことにorz

…え？…なんですか？他の機動兵器は搭載できてるって？…違うんですよ。無人機動兵器は専用のカーゴベイにチェインベルトのように収容されるように設計されてるんです。故に発着できるハンガーデッキのようなものはあっても機動兵器用の格納庫は…ないんですよ。

それに機動戦艦「アングレカム」はね。誰が乗ることもなく無人航行できることを前提に設計されてるの。だから無人兵器も充実させたしね。…ほら？俺らって少数だし、それもあから少しでも家族、皆の負担が減ればと思って、さ。

でも、今回はそれが仇になりました…。無人性と居住性の調和を追及し過ぎたせいで錬金術師（科学者）の一つのロマンたる人型ロボットを戦艦に搭載できないのですから…。失敗してしまっただよ、とつつあゝん！

せつかく設計はできてるのに…。後は造るだけなのに…。俺のモノ作りの血が騒ぐのに…。

戦艦の改造は今度するでしょう！決戦までには間に合っさ！目指せ、“ナデコ”世界観！この戦争を逃したら次はいつ戦争が起きることか、わからんからな。ただでさえ戦争なんて面倒くさいこと

に関わってるんだから楽しめるところでは楽しまないと損だよね！

あーもー…。まあでも丁度いいと言えば、いいかな…。秘密で確保してたカートリッジは全部使ったし。…何に使ったか？…？それは後で話すよ。…それよりも、またカートリッジを溜めないとな。

この世界は一応魔法世界だから魔法関係の備えはしないと不安なものね。魔法には魔法障壁ってね。様式美って大事だと思うのですよ。まあデイストーションフィールドなら下手に変更しなくてもいいけそうではあるけど…。

…改造（魔）ってしたいものじゃない？くく、くつくつくつ！

そして後は何したかなあ…。あー、そうそう、ラミエルさんを造ったね。…ん？なに？…うん、そのラミエルさんですよ？某新世紀な作品に出てくる使途さんです。

「…あれ？これは…。アイリス指揮官殿、ここの充填済みのカートリッジの一覧なんですけど、ちょっと見てもらえますか？」

「何？どこだ？」

んん？何だ？問題発生か？アイリともう一人で真剣な雰囲気です。面倒事は勘弁して欲しいなあ…。

「ここです。どう計算しても空きカートリッジと充填済みカートリッジの合計が合わないんです」

「これは…確認ミスか？いや、そのような基本的ミスが我が隊で起こるものか？…誰かが使用したのではないか？」

…微かに聞こえた。カートリッジ、と…。やっべ！バレた？バレたのか！？内緒で確保していたから申請してないや！これって横領になるのか！？ど、どどどどうしよう！？

「いえ。そのような届けは受けておりません」

当たり前ですよ。使った俺自体が申請してないからな！…威張って言える事じゃねえやorzどうしよう？こ、ここここは正直に名乗り出るべきか！？

「司令閣下にご相談するか…少々この書類は借りていくぞ？」

「はい、構いません」

「では、な…」

うおっ！？アイリがこっちに来たあ！？ど、どどどうしよう！？まだ、心の準備が！…！くっ！こうなれば、勢いに任せて謝り倒すしかないか！？よ、よおし…来いやっ！

「司令閣下、度々申し訳ありません。…少々、問題が」

「も、問題？な、ナニカナア？？」

くっ！ドモルだけでなく噛んでしまったっ…！変に思われてないだろうな？

「????はい、こちらの書類をご覧ください。カートリッジの一覧なのですが計算が合わないのです」

「へ、へえ？それはヘンダナア……」

どうしよつ？どうしよつ？どうしよつ？どうしよつ？どうしよつ？  
？家族には嘘は吐きたくないしな……。何よりも今になって黙っている事に罪悪感が……。うう……。

「はい。司令閣下は何かご存知ありませんか？」

「いや……。あの、その……。えと……」

うわーんっ！もうダメ！素直に謝ろう！やっぱり俺、家族に秘密にするのは無理！グスツ……！

「司令閣下？」

「その……。ごめん！ソレ、俺が使いました……！」

「……………」

えっ？無言！？頭を下げてるからアイリの顔が見えない。どんな表情をしているのかわかんないけど怒鳴り散らすのさえ超えるほどの怒りですか！？静かなる怒りですか！？……怒涛のごとく怒られるのよりも怖いんですけどお。ガクブルガクブル……。

「うっ……。あの、怒って、る？」

およ？恐怖に負けて頭を上げてみたらアイリさんが苦笑していらっしやる？怒ってないの？怒髪天じゃないの？

「ハア、そんな事はありません。…ただ、今度からご使用になるならきちんと申請していただきたいだけです。記録に残すのは組織運営では必要な事ですから」

「うう、ごめんよお。今度からはちゃんと申請させていただきます、はい…」

「はい、よろしく願いしますね。ではこの書類に使用したカートリッジの数、その使用目的などの記入をして提出してください」

「うん、書かせていただきます。余計な手間を取らせて、ごめんね」「いえ、では自分はこれで…」

うう…アイリ達には迷惑かけちゃったなあ。今度からは秘密にしないでちゃんと申請して使用しようつと。うん…。ごめんね？アイリ、皆…。

それで話しは戻るけど…造ったよ。ただ、本物みたいに生物ではないけどね…。メインAIの各種制御系と魔導式荷電粒子砲などの兵装関連、心臓部となる導力炉などの各種重要機関にナノマシンを使用して基本構造は流体金属を使って、ね…。

皆には内緒に別途で確保していたカートリッジもラミエルさんに全部使いました…。たった今バレたけど、ね…。でも、これで滅多な事ではラミエルさん単体での魔力切れになる事はないね！

お金もかけましたよ…。アンの建造費の三分の一ほどかかりました。本当にコスト度外視だよお。うう…。

それと言つのもナノマシンの生成に時間と労力がかかるのよ。流体金属のほうは錬金術でホイホイ出来るけど。ナノマシンは極小の精密機械だから錬金みたいに一発生成すると必ずと言っていいほど不具合が発生するからあまりやりたくない。

そういう事で地味だけど時間をかけて確実に生成したの。「工房」使って外の時間で二カ月半…。長かった…。完成まで総製作期間三ヶ月ですよ？アンに続いての傑作を造り上げましたな！

その間も「完全なる世界」の調査は続けてたよ？当たり前じゃない、お仕事だもの。ちゃんと、やり遂げますよ。

それで完成したラミエルさんね？見た目はそのままんだけど中身は違うの。ナノマシンと流体金属を使ってるから形状や大きさが自由に出来るのよ。小さいのは3cmほどの正八面体、大きいのは100mの巨体を誇るほどよ。まあ本家よりは少し小さい気がするけど…。普段は首から提げるタリスマンみたいになってる。

…え？物理法則？ナニ、ソレ？オイシイノ？

…というのは冗談として、小さくなってる間に使われてない過剰分のナノマシンと流体金属はラミエルさんの中心部に亜空間技術の

格納庫があつて、その中に超圧縮をかけて格納されてる。あとは必要に応じて圧縮を解凍して展開していけば、アラ不思議、おつきなラミエルさんに！

それで大きさも自由にできるから対人戦の時は直径20cmほどの独立した援護機になって俺の周りを周回しながら護るように設定してある。…まだ設定は甘いけど、ね。攻撃命令を出さない限り防御に重点を置いてるの。

兵装は先にも挙げた魔導式荷電粒子砲。ただしこれは砲口を自由に設定できる。例えば遠距離ならば大口径へ、近距離ならば身体表面に小型の魔導式荷電粒子砲が無数に展開されて死角無しの対空砲となる。

A Tフィールドのようなものも装備してある。…いや、マジで違うけどね？あくまで“ようなもの”だから。どちらかと言うと見た目的にはディスプレイーションフィールドだし…。

あ、ラミエルさんにもカートリッジ充填の機構を組み込めば…。

いけるかもしれないな…。一応、フィールド性能はアンののと同じにしてある。ただしアンのそれよりも断然、強力だ。性能を同じにしたのは予算の都合もあつたけど、それ以上の代物はそうそうないのも確かだと思つたからでもある。

んー…。今から取り付けるとなると…：…ちょっと突貫作業になるけど今度やるか。この場合、やっておいて損はないと思うしな。…うん。

そうなれば！まさに無敵の空中要塞ですな！…カートリッジ生産

もできて一石二鳥だ！

もちろん！掘削ドリルも完備！！…ドリルは外せません！ドリルはロマンだからなっ…！

いずれはバージョンアップしていつて某魔砲少女の出てくるデバイスのように出来たらとも計画中だし。

今まではハオとユエが居たからあまり必要性がなかったんだけど、九十九神化してから一個の人格と身体があるじゃない？

…となると、だ。

あの二人にもプライベートな時間があるからいつも一緒というわけにもいかない。そうなると俺の扱う武器がなくなる。…俺ってピッチじゃね？と考えたんですな。そこで前から考えてた計画の一つを実行に移す事にしたの。

そうだ！デバイスを造ろう！ってね。

まあ正確にはデバイスみたいなモノだけどね…。だってラミエルさんだし…。ん？あー…。今よく考えてみたらデバイス的なモノにする意味ってなんだろ？…持ち運びが出来る事？いやいや、宝物庫的な倉庫に入れとけば関係ないな。

装飾品として綺麗？…武器に関係ないじゃん！たしかに俺は使途さん達の中じゃラミエルさんが一番好きだけどさ！装飾品って…。それはないわあ…。

…やっぱりやめようか？俺個人でも結構、戦えるし。あ、でも、

素手で殴り合うような熱血じゃないしなあ…。うん、武器は有るに越した事ないよな？んー…。よし！悩むようなら造ってしまおう！今すぐデバイス化するわけじゃないしね！後々改造すればいいのだよ！

ラミエルさんを造ったはいいけど、どちらかと言うとプロトタイプだしね？どうとでもなるんじゃないかな？

あ…。アンもある意味ではプロトタイプだけど電子的というか精神的な成長が出来るから関係ないね。船体は成長に合わせて強化改造すればいいし。

…これ以上どう改造したらいいのかな？

AIの根幹部分はもう大半がブラックボックスと化してるんですけどorzどこから弄っていいか俺にもわかりませんです、はい…。アン自身もちよいわからないところが出来つつあるみたいな事を言ってたけど…。もう、いいか？気にするだけ無駄じゃないか？元氣な子に育ってくれば文句ありません。ええ。

あ、そっか！ラミエルさんも成長できるようにすればよくな？今積んでるAIは命令を実行するだけのモノだし。それだけじゃやっぱり味気ないよね？この戦争が終わったら今の制御AIから起動データを新しい制御AIに継承させて、後はアンと同じで自己学習、自己進化してもらおうか…。

あー、もう！また楽しみが増えたなあ！モノ造りの人としては、ドキドキが止まりませんな！はっはっはっはっ！

「お父さん？また何か企んでます？」

「…鋭いね、アン。でも、企むなんて言い方はないんじゃない？俺が悪い事してるみたいじゃん」

「お父さんが仮に悪い事をしようとしても構いませんよ？私は一緒に居られればソレで満足ですから。これは皆も同じ気持ちでしょう」

「アン…ありがとうね。でも、今回は悪い事じゃないよ？むしろアンに妹か弟が出来るかもね」

「えっ!？」

ふふふのふ。驚いてるね、アン？でも、ラミエルさんが男性人格なのか女性人格なのかは今のところ俺にもわからないのよ。まだAIの換装してないし。するとしても戦後の予定だしね。あー…でも今までのことを予想すると女性人格かなあ…うむう。

…今ね？ふ、と思ったけど。どうしよう？俺って魔法のある世界に飛ばされたのに、やってる事は魔法じゃなくて科学なんですけど…orzいや、正確には魔法と科学のハイブリッドなだけだね？魔導科学と銘打ったのは伊達ではないのだよ！

それでも科学寄りなのは確かなんだよなあ…。俺の身体にも魔法の威力・制御を上げるためにナノマシン使ってブースト処理してるしね。あ、誤解するなよ？人体実験なんてしてないからな！そんな外道な事はしませんよ。俺って小心者なんだからそんな事が出来るわけないじゃん。

たしか原作の中で中国人っぽい女の子が似たような事してたよね？アレの負担のない完成版とも言ええいいよ。使ってみると意外と便利だったのは嬉しい誤算だった。造る当初は少しでも魔法を使

うのが楽に出来ればいいな、と思ったただけなんだから。

実際の話し、この身体ならブースト処理なんてしなくても十二分に強いんだけどさ…。この先、何があるかわからんじゃない？そういう、いざという時の用意だけでもしておけば、そのいつの日かに役立つかもしれないから、やっちゃったの

やっちゃったの ってなんだよ…。自分で言ってるって思ったけど、もしかして、これって自分の身体を機械的に人体改造してね？まあ成功してるからいいけどさ。魔法も高速詠唱、並列詠唱、威力向上と一気にスペックアップしたし。

本当に嬉しい誤算でした。今思うと能力低下してなくてよかったよ…。成功してよかったあ。

そんなこんなで俺は今、楽しく書類仕事を殺っています！アンが紙媒体を電子書類に変換してくれてるからすごく助かってます…。重要なものは紙媒体のままだけだね。

マジで量が半端ないよ？ほとんどが電子書類だからわかりにくいけど紙媒体で…エベレストクラスが四つ、富士山クラスが三つあります…。敵拠点襲撃で調子に乗りすぎました…。戦闘後の事務処理を終わらせる前に次の出撃とかをしてたから鬼のように書類が溜まってくるのな…。ハア…。

俺個人なら書類とかは気にしないよ？後でやればいい、の精神ですから…。でも、今の俺は帝国に戦闘記録を書類として提出する義務があるのよ。第三位とはいえ帝国のお姫様を預かっているんだから当然と言えば当然だよな。

もちろん、技術関係の機密に関しては濁してるけどな。再現できるとは思わないけど念のために、ね？劣化コピーとかされたらイヤだしな。

現在はアンと俺と直属の二個中隊で書類仕事を猛攻中…。この状況は「敵は強大なり！至急、援軍を！」といった感じですよ。それでも皆、文句も言わずに作業してくれるからありがたい限りですよ。…これが終わったら皆にご褒美あげないといけないな。さっきのカートリッジの事もあるし美味しいお菓子の差し入れていいかな？

ん…。ミリーの第七第八中隊に応援頼もうかな？事務仕事とかのデスクワーク系が強いしな…。たしか、あの子達、今は…。

「補給物資と今後、物資生産予定の調整か…。あの子達ならこれは予定より早く終わらせるだろうな…。うむう…。」

「お父さん、今度はどうしたの？」

ん？アンか。隣に席があるから俺の呟いた声が聞こえたのかな？でも、さっきは声にも出さなかったのにもかかわらずアンに感付かれたんだよな…。俺ってそんなに顔に出るのか？

「いや、ね。これだけ書類整理が多いからミリー達の手も借りようかなと思ってさ。人手は多いほうがいいでしょ？」

「むう！それはそうですね…。私達だけで終わらせられるもん！」

アンは何でそんなに不満そうな…。いや、これは拗ねてるの、か？…わからん、なんでよ？早く終われば遊べるじゃん。まあ、アンの事はともかく応援を呼べるならそれに越した事ないと考えるのよ。

じゃないといつまで経っても書類の山がなくならないしね？

まあミリー達の手伝ってくれても書類で重要なものの最終確認は俺が直接しないとダメなのよね。それが義務であり責任だから。クスンツ…。

「ハハハ…。まあ時間をかければね。それにミリー達にはごめんなさいだけど皆でやれば早く終わるでしょ？」

「うう…たしかにそうですー…」

だから何で拗ねるの？早く終わるならソレでいいって。アンも、そのほうがいいでしょ？後で帝都へ一緒にお買い物に行つてあげるからさ。機嫌なおそうよ

「ハイハイ、むくれてないで作業しようねえ？」

「むー！むくれてないですよー！」

「はっはっはっ！」

この瞬間やっぱり元気なアンがいいなと思った俺でした。おっと！後でミリー達にヘルプの連絡しないと！

次の書類はつと…。何々？諜報関係か…。

Side out 葵

S i d e    ミリエール

【そういうわけでそっちが終わったらでいいからこっちに手伝いに来てくれないかな？】

私達が補給物資その他諸々の確認と調整をしていたらあ。主様から、そんなお話しがきたのお。主様も大変なのねえ…。でもあ、どうしましょう？私は手伝ってもいいけどお他の皆に聞いてみないとねえ。

「第七第八中隊の皆さんに連絡でえす。よおく聞いてねえ？」

「はい？何があつたんですか？」

「ミリエールさん、ニコニコしてるからこの後に何か遊びの提案かもねー？」

「そつなのかな？」

「はいはあい、皆あ静かにねえ？…こほんつ、主様から事務仕事のヘルプ要請がありましたあ。この後に私、手伝ってもいいわあという人は主様のところに来てねえ？」

この子達も案外と現金ねえ？主様のことが聞こえただけで静まるのだからあ。それより何で皆はお手伝いと聞いて目を輝かしているのかしらあ？言っってはなんだけど今回の事務処理は結構ハードなのにねえ？

私い？私はいいのよお。主様と一緒にならどんなことでも出来るものお。よく言う“例え火の中、水の中”というものよお。うふふ

「はい！質問です！」

「はい、何ですかあ？」

どうしたのかしらあ？事務仕事だから今までと内容はあまり変わらないのだけれどお…。ん？…わからないわあ、まずはこの子のお話しを聞いてみましょうかあ。

「葵君からのご褒美はありますか！？」

「そうですねえ…たしかあ、手作りのお菓子を振舞ってくれるようなことを言っていたようなあ」

何かと思えばご褒美のことだったのねえ？…まったく、この子達ときたらあ、そういうことだけは抜け目がないのだからあ。困ったものだわあ。もしもお…これで調子に乗って主様にご迷惑をおかけすることなんかしたらあ…。…皆を深遠の水底に沈めちゃうわよ  
お　ウフフフ

「はい！私は手伝いに行きます！そして手作りお菓子を…！」

「あー！ずるい！私も行きます！」

「私も！私も行きます！」

「葵君に“あーん”なんてしてもらえたら…。きゃー！」

「あ、それいいかもー！私もソレしてもらおう！」

「はあい！皆あ？まずは自分達の仕事を終わらせてからですよ。いいですねえ？」

この子達五人は特に自分に正直だから困るのよねえ…。主様も叱つてくださればよろしいのに、「若いだから仕方ないことだ」としか仰らないのですからねえ。主様も皆が可愛いのはわかっていますけどお。もう少し確りしてほしいわあ。…でも、そんな甘いところも私は好きなのよねえ

他の皆もヘルプに参加するのねえ？うふふ、主様も果報者ねえ。精霊も悪魔も皆が皆、主様のことをお慕いしているものねえ。…なぜか皆が女性形態なのだけどねえ。本当に罪作りな人だわあ。まあ私も人のことは言えないのだけれどねえ

「……………はい！わかりましたー！……………」

「皆いい子ですねえ。それでは早く終わらせて主様をお助けに行きましょうおー！」

「……………おー！……………」

「皆、元気ですねえ。それではあ私は先に行つてえ主様のお手伝いをしてくるわねえ」

「……………おー！…あつ！？ずるい！抜け駆けだ！？……………」

「うふふ…。上司としての特権よあ 皆はちゃんと終わらせてから来るのよあ？」

後ろから何か言われている気がするけどお今の私には聞こえないわあ 主様あ待っていてくださいねえ？今、貴方のミリエールが側に行きますわあ

主様の居る執務室へ移動中…ですわあ

着きましたわあ うふふ それではあ…。

トントン。カチャ。

「主様あ ミリエール来ましたわあ」

「いらっしゃい。随分早く来たね？もう少しかかると思ったのに」

「残りの作業は仕上げだけでしたからあ。皆さんに後は任せて私だけ先に応援に来たのですわあ 皆さんも終わり次第こちらに…」

ドタドタッ！ドドドド…！

「あはあ？」

何かしらあ？この音はあ？？だんだんと音が近づいてくるようなあ？？はっ！？まさかあ！？

ドンッドンッ！ガチャッ！

「「「「「お手伝いに来ましたー！」「」「」「」

来ちゃったー！…ですわあ。

本当に早いわあ…。どういうことかしらあ？私が主様の執務室に来てから、そんなに時間は経ってないと思うのだけれどあ。…おかしいわあ、普段はこんなに早く終わらないのに…。それでも並よりは出来る子達なのよあ？ああ、でも、前にも似たようなことが…。

アレも主様関連のことだったようなあ…。…ということはなんなのあ？この子達も主様関連ではスペックが跳ね上がるとも言うのあ？…これは、なかなか強敵だわあ。今の身体に新生した当初はあんなに初々しかったのにい。困ったわねえ、ウーリ達に今度このことで相談してみようかしらあ？

「…皆さん、早かったわねえ？ちゃんと終わらせたのかしらあ？」

「もちろん！ちゃんと終わらせましたよー！」

「それよりもミリエールさん！ヒドイじゃないですか！？」

「そうですね！自分だけ先に行くなんてあんまりですー！」

「「「「「私達も、そう思いまーす！」「」「」「」

「あは、あははあ…。皆さん、ごめんなさいねえ。私も少し、はしやいでいたのかもしれないわあ」

置いて行ったのはごめんなさい…。ですけどお、何も皆さんで責めることないのではないかしらあ？いくら私でも少し悲しいわあ。ううう…。ちよつとはしゃいでしまっただけじゃなあい。可愛いお茶目だったのよお？

「よくわからないけど…。皆、いらっしやい。それと、こんなことで呼んじゃってごめんね？」

「「「「「いえいえ！構いません！」「「「「「

「葵君がお呼びなら、どんなことでも！いつでもどこでも駆けつけますよ！」

「うん。皆、ありがとう。それじゃお手伝いお願いするね？」

「「「「「はいっ！お任せください！」「「「「「

「ですわあ」

抜け駆けは失敗に終わっちゃったけど、まあ今回はいいですわあ。…そうだわあ！この際、今度からはこの子達も誘ってみようかしらあ。うふふ

Side out ミリエール



第十二話「書類と発明とお手伝いと」(後書き)

いろいろな意味でやっちゃまったなあと考える今回の話。

複雑らしい複雑にもなりやしない…orz

こんなことならプロット作っとけばよかったかな？

ハア…。

第十三話「決戦前と全力出陣と完全装備と」(前書き)

やっとここまで来たあ…。長かったですわ。  
では、続きをどうぞ。

### 第十三話「決戦前と全力出陣と完全装備と」

王女殿下達の救出から約半年が過ぎようとした日、とあるところに帝国・連合・アリアドネーの一部の部隊が多数、集結されていた…。そこは決戦の舞台…。そこは世界最古の都である王都オステイア…。そして目指す目標はその中心部の空中王宮最奥部「墓守人の宮殿」…。

この戦争を裏から操り、魔法世界を破滅へと導こうとしていた者達と、この日、この時間、この場所で決着をつけるために各国から僅かとはいえ集結したのだ。

ここに居る者達は王女殿下と「紅き翼」の呼びかけにより馳せ参じた者達で、敵となる「完全なる世界」を倒さんがためにこの場にいる。今は各国各部隊の最終確認をしている。

この決戦の開幕は近い…。

S i d e 葵

チャオ！葵です！今は決戦準備中なんよ。

「不気味なくらい静かだの、奴ら…」

「なめてんだろ？悪の組織なんて、そんなもんだ」

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました！」

「おう！…あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が本丸に突入できる。…アオイも頼んだぜ？」

「ハッ！」

「おーおー…。セラスちゃん気合入ってるねー？俺は…眠いです。それもすっごく！それというのも、この作戦開始時間間際まで溜まっていた書類仕事をしていたからね。…わかってますよ。…完全に俺の自業自得ですよ。」

でも、仕方ないじゃん。仕事の量が帝国の他の人よりも圧倒的に多いんだから…。絶対おかしいって、アレ…。

他の人達は定時近くなったら帰りの準備してるのに俺は書類の山に埋もれてるのよ？一山、片せばその1.5倍の山が増築されるし…。二山、片せば2倍の山が聳え立つようになるし…。

コレ、おかしいよね？俺の勘違いかな？違うよね？違うよね？よね？…イジメかな？ううう…。家族が手伝ってくれなかったら俺、絶対過労死してた自信があるね！なんちゅうイラン自信だ…。はあ、イカンな…眠気がやばい。

…コレが終わったら俺、ふかふかのベッドで死んだように寝るんだ…。

ふう、あとで濃いめのコーヒー飲もう…。でも正直に話すと今すぐ帰って寝たいです。すみません、もう一度だけ言わせてください。今すぐ帰って寝たいです。

…え？負けたら魔法世界が滅ぶって？…別にいいよ、そんなの。俺は家族が無事なら、それでいいです。いざとなったら家族を連れて世界移動でもして別世界に行くしね…。まだ、どこかは決めてないけど…。

“ゼ 魔”か“な は”…意外性を狙って“フル タ”の世界でもいいね…。あつ、“ナデ コ”世界も捨てがたいなあ…。まあまだ行くとは決まってるから、どうでもいいか…。ああ、眠気のせいかな、俺ってかなりメタなこと考えてる気がする…。自重しよう…。

ああ…そうそう、ナギと会話中だった…。

「まあ任せなさいな、家族の皆が優秀だからね。一部を除いて皆、集団戦が本領よー？相手が一万いようが十萬いようが今まで負けたこと“は”ないし…。この子達のこと守るくらいなら問題ないね」

そう負けたこと“は”ないよ？引き分けが多いの。まあ最後には必ず勝ったけど。直ぐに勝つたらつまらないじゃない？だから裏から謀略を仕掛けたりとか搦め手で暇な時間を潰して遊んでました。知ってる？戦いはね…。

最後まで立っていたほうの勝ちなんだよ…。何をしようが、な。フフフ…。

あ、でも、外道な方法は極力なしの方向でお願いします。俺の小さな心臓が良心の呵責に耐えられないから…。

「ハハツ！頼もしいねえ！」

それにしても、ナギ…。お前…。元気だな…。俺は今ほどお前のバカなところを羨ましいと思ったことはないよ。…一発だけ憂さ晴らしに殴っちゃダメかな？…一発だけ。山が消し飛ぶほどの一撃だけを…。今ここに…。

はっ！？落ち着け…。俺…。負けんな…。眠気なあんかに…。ふう…。よし、落ち着いた！

「当たり前だろが俺達を誰だと思ってるんだ？ああ、そうそう忘れ

てた…。ほら、セラスちゃん、ナギに話しがあるんだろ？」

セラスちゃん、ずっとそわそわしてやんの。可愛いねえ？今の顔なんか真っ赤じゃん。…ん？セラスちゃん？あー…実は色々今回のことで彼女と打ち合わせをする機会があつてね。そうしていると個人的にも話す機会があつてさ。

その時にナギのファンクラブに入会していることを知つたの。そこで俺が今回、直接セラスちゃんがナギのサインを貰う機会をつくつたの。

眠気があつたから、その時の具体的な話しは覚えてないけどね…。約束は守つたぜい…。

「ハ、ハイ！…それで…その、あの…ナギ殿？」

「ん？」

おーおー。ナギ相手に緊張しちゃつてー。かーいーなー…。俺もモテてみたいわあ…。

家族達は俺のこと手のかかる弟くらいにしか見てくれないしなあ…。それに皆からは俺にファンクラブがあるなんて聞いたことないし…。それとなく聞いたときなんか皆して慌てたように必死になつて否定するんよ？ヒドクない？俺って所詮いい人止まりなのかなあ？はあああああ…。

「ササ、サインを！お願いできないでしょうか！？」

「おお？あ、ああ！いいぜ、それくらい…」

「ありがとうございます！そ、尊敬していました！」

いいなあナギはあ…。俺も可愛いフアンの子達と戯れたいなあ。  
俺にフアンなんていないけどあ…。クスンツ…ううう…。

む？ガトウから連絡か…。連合の出動準備が終わったのかね？

「…連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう…。決戦を遅らせる事は出来ないか？」

おう…。まさかの参戦遅刻ですか？俺ですら溜まっていた書類仕事を終わらせて集合時間を守ったというのに…。！連合は余り接触がなかったから知らんけど、帝国のやつらめ…。帰ったらオボテロヨ！？イヤと言うほど事後処理の書類を回してやる！！絶対してやるからな！！！！

「…無理ですね。私達で、やるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

アル、詠春…。二人とも何、冷静になってるんだよ…。怒ろうよ？怒って自己主張しようよ？ノーと言える日本人になるうぜ？…日本人って詠春しかないけど…。

俺か？俺は既にこの世界の生まれですらないからいいんだよ。

「ええ、彼らは、もう始めています…。 “世界を無に帰す儀式” を…。世界の鍵、“黄昏の姫御子”は…今、彼らの手にあるのです」

だから、アル坊よ。何言ってるの？そんなの可能だけど問題はそこじゃないだろ？遅刻してくるやつらへのお仕置きを考えないと、だろ？世界を無に帰す魔法とか、この際どうでもいいんだよ！遅刻リミット良くない！うううううう！

「ああっ…。よおし！野郎ども！…行くぜ！…！」

ナギもちよっとマテや、コラー！

…お前の出番は俺達、陽動組の後だろうが。ハア…。詠春が止めてくれることを期待するかな。

S i d e o u t 葵

S i d e セラス

ナギ殿達は行った、か…。あとは私達が予定時間に陽動を開始すればよし。この戦い…なんとしても成功させなければならぬ。そのためには私達は私達の役目を果たさなくては！

それにしても…。

「アオイ殿、本当にナギ殿と行かなくて良かったのですか？」

そう「紅き翼」のメンバーに数えられ先のグレートブリッジ奪還作戦時にも活躍した…と言われている人だ。なぜ、言葉を濁しているかというとその時の記録が所々紛失しているのだ。まるで何かを隠そうと、秘匿するかのように。

映像はもちろん魔法的、電子的な記録はほとんどが消去されているか改竄されていた。そのどれもが実に巧妙なもので非常に細かく確認していかないと気付かないほどだった。

私がそれに気付いたのは偶然だった。当時、グレートブリッジ奪還作戦のことを切っ掛けにナギ殿のファンクラブの仲間内ではさまざまな情報が飛び交った。恥ずかしながら私も、そのうちの一人だった…。

そしてナギ殿のことを調べていたら違和感を感じ取った。それは極僅かなものだったので気のせいかとも思ったのだが、それ以後も違和感は晴れなかった。そして気付いたのだ…。

記録情報の改竄跡に…。

それはナギ殿達のことを改竄しているように見えて、最初は「紅き翼」全体を何らかの理由により何かを隠そうとしているのかと考えた。だが、少しずつ調べていってそれにも違和感があった。

アオイ殿だ。彼の記録は「紅き翼」内でも戦闘記述が極端に少ないのだ。彼が戦っているという記録は多数ある。だが、どうやって、どのようにしてということが詳しく記述されていない。ただ、“戦闘した”とあるだけ…。

それから時間があつた時に調べた。グレートブリッジ奪還作戦時のアオイ殿のことを調べた。それだ……。この時から一部の記録がおかしくなっているのだ。特に魔法的、電子的な記録は無きに等しい。それに残っている記録は一部の人が個人的に記していた紙媒体の書記のみ。

一体誰がやったのか今もわからない。私がそれ以上、調べることがやめたからだ。関わるのが怖くなったというのもあるが……。これは勘と言つしかない根拠のないことだが、そのまま調べていけば取り返しのつかないことになると感じたからに他ならない。

そして今、私はそのアオイ殿と隣り合つて話していた……。

「いいの、いいの、あの程度ならナギでもなんとかなるつて。それに俺はあんなのを相手するより君達を守っているほうが余程、有意義だと考えるね」

私達のことを守ってくれる。アオイ殿のその気持ちは嬉しい。だが私は怒りと焦りを感じていた。自分達はそんなに頼りないのか！と、そういう思いに囚われて……。

「しかし、アオイ殿っ！この作戦が万が一でも失敗しては魔法世界の終わりなのですよ！？私達のことなんかよりナギ殿に加勢されるべきでは……？」

「……もう、このやり取り何回目だろうね？いい加減諦めようよ、その話しはき。それに一応の決着は前につけたでしょ？今更蒸し返すのは良くないと俺は思うな」

そうですね。この話しは何度目でしょうね。それでも私は言わずにはいられなかったのだ。尊敬するナギ殿のこともあるがアオイ殿もそれに負けず劣らずの好人物だと理解しているから。アオイ殿が加勢してくればナギ殿達の負担は減りより確実に勝利に近づくのでは、と…。

だから私は、しつこいようでも言うのだ…。

「そうは言いますが…。しかし、アオイ殿が加勢されるならば勝率は確実に上がるのではないですか？」

「勝率が上がる？…くく…くくはははっ！違うね！間違ってるよ、セラスちゃん？」

「…いったい何が間違っていると言っているのですか？」

突然どうしたのだろうか？ここまでアオイ殿に踏み込んで話したのは初めてのことで驚いてしまった。こんな実にオカシソウに笑うアオイ殿は初めて見た。いつもは見た見た相手を安心させるような温かい笑みなのに今の笑みは捕まえたネズミを弄ぶネコそのものだ。

「勝率が上がるんじゃない、確実に勝てるんだよ。俺に…俺達に敗北の二文字はない！」

「……………」

思考が真っ白になる…。勝てる？それは…。それはっ！！？？

「…なーんてなっ！！はーっはっはっはっはっはっ！げふっ！」  
ごほ…。イカン、むせた…」

「…アオイ殿？私のことをからかっているのですか？」

アオイ殿の先の言葉で私の思考はしらけてしまった。…まったく、こんな時に冗談を言うなど不謹慎だと思います。からかうのならもつと他に楽しい人がいるでしょうに…。ハア…。

「ごほごほごほ。…は？何、言ってるの、セラスちゃん？勝てるに決まってるじゃん、常識でしょ？あのね？ポイントはアツサリと倒してしまつたら俺がつまんないからギリギリまで苦戦しているかのように戦うのがいいね！なんてーの？燃えるよね。ヒーロー的展開つてね」

「常識…？魔法世界の危機たるこの戦いが…？ポイント…？」

常識？あの強大な敵を前にしてアオイ殿は勝てるかと断言している。それどころか、まるで玩具を手にした子供のようにはしゃいで、「“ヒーロー的な展開”などと笑っている。

また、怒りがぶり返してきた…。先のからかわれたと思っていただけに今回は抑えが利かない。

「ん？どうしたの、セラスちゃん？」

アオイ殿の声を切っ掛けに私は、はじけてしまった…。

「だったら！勝てるのなら！なおさらナギ殿達に加勢されたほうが魔法世界のためになるのではないですか！私達のことなど気にする必要がどこにありますか！？」

「セラスちゃん？ちよ、ちよっと落ち着こうか？…いや、落ち着いてくださいお願いします」

「これが落ち着いてなどいられますか！」

「はいはい。いいから…落ち着け、セラスちゃん。昨日も言ったけど、俺はこの世界がどうなっても基本的に知ったことじゃない。滅ぶなら所詮はそれまでのモノだったというだけだしね。…俺はね、セラスちゃん？家族が無事ならそれ以外はどうでもいいんだよ」

「なっ！？それでは…っ！？」

「でも！！！そんな俺にはどうでもいい世界だとしても…。見てみたいじゃない？友達が世界を救おうとするところなんかは、さ？」

「…友が世界を、ですか？」

「うん。まあ俺が直接行けば早いんだけど、それじゃダメなんだ。この世界を救うのは俺じゃない、そこに生きている者達の手で行うべきモノだと考える。だいたい俺が助けたとして、またこんな事態になったらどうする？また俺か？冗談じゃないね、そんなおんぶに抱っこの状態の世界など。ヒトは自分の足で立つべきだ。それがで

きるだけの力はあるのだから……」

「……アオイ殿は、まるでこの世界の人間ではないような言い方をするのですね？」

「……なんてな！どうよ？ちょーっとシリアスにしてみたけど」

「……………」

「アレ？セラスちゃん、どつたの？俯いて……。肩を震わせて……。イヤだ……。なんかコワイヨ？」

この人はアレなのか？マジメな話もできない、おバカなのか？くううう……。私、キレていいよね？作戦前だけど少しだけだから……。いいよね？

普段から自分自身は忍耐強いほうだと思っていたけど今回は我慢の限界だったようだ……。だって私自身意識しない内に……。私の手は彼の腕をとり……。

「え？なに？セラスちゃん？ちよつと？」

「アオイ殿…。貴方という人はーっ！人がマジメな話しをしているのにーっ！」

「あっ！？ちよまつ！あだっ！？やめて！あだだだだっ！！ノー！間接ノー！ー！痛いから！イタタタツ！！？」

「コレでもかと言うほどの力で以って強く彼の間接を極めているのだから…。」

「反省しなさいーい！！！」

「アーーーーーッ！！！」

ギチギチと聞いている者に不安を与えそうな鈍い関節を痛めつけられる音が聞こえる中、陽動開始の時間が迫っていた。

そして、彼：アオイ殿の悲痛な悲鳴で以って私は確信した。この人は自分に都合が悪くなるとふざけた道化になっても逃げるヒトである、と…。

Side out セラス

Side 葵

俺は今、作戦配置についている家族達のもとへと歩いている。それにしても…ああ、痛かったあ。ちよっつとふざけただけなのにセ

ラスちゃんつたら手加減してくれないんだものなあ。心の余裕が足りんよね？それにハオ達とは別行動だったのがマズかったのかな。

コキンツ…コキンツ…。

腕を回して身体の状態を確認してみる。すると…。

おう？でも、なんだか身体が軽く感じるな…あつ。ふふふ、やるね？セラスちゃん…。俺は君が将来、整体師になる事をお勧めしたい！俺にお仕置きしつつも身体のバランスを整えるとは…。

その天然整体師のパターンデータを取らせてもらってマッサージ器でも作らせてもらえないかな？いい加減、俺も歳だから、そういうのも欲しいのよ。身体は未だに二十歳前後で固定化していませんがな。

まあ、それはいいとして…。

アイリの報告から俺のことを調べてる人物がいるって報告があったから対策はしたけど…。その一人がセラスちゃんだったなんてなあ。おおかたファンであるナギのことを調べていたら俺の経歴に不審なものを感じて調べていたのかもしれないな。

記録情報は魔法的にも、アンが生まれてからは電子的にも、そして必要とあらば人の記憶にも処理または封印を施してきたから公式記録的には、もう問題はないけどね。

それに彼女、セラスちゃんは途中で調べるのをやめちゃったから処理対象からは除外したしね。話してみたらいい子そうだし。ちょっと頭が堅いけど、それはこれから柔軟になつていくだろうから今

後に期待しときましょか。

帝国は今回のことで“大掃除”は、だいたい終わった。連合は……知らん。正直言って、そこまで手が回らない。必要とあればやるけど……面倒くさい。だいたい帝国内部に合法的に入れたのはテオのお陰だしな。

スパイだか信奉者だか愛国者だか知らないけど勘弁してほしいわ。人の個人情報持ち出そうとかさ。本当に迷惑だ。

まあ俺の情報を手に入れたからといって、だからどうした？ってなもんだけど。消せるものは消しておいたほうが後々楽だし。盗んだ“者”も盗まれた“物”も、それぞれの“モノ”を情報的にも物理的にも……ね。

俺は英雄なんて真つ平ごめんですよ。俺は、この物語に登場する一人のモブなの。だから、その逆の犯罪者も、お呼びじゃないの。人知れず観察したいのよ、一番近くでね。

それ以外はゆっくり人生を楽しみたいのよ。それでまあ退屈してきたら暇つぶしで、こうしたスリル感ある時を過ごせれば文句ないね。……常時、戦いたいとは思わんな！

もちろん戦う時は、それに応じた実力を以ってするよ？何事にも引き際って大事だよ。やりすぎると相手はヤケになって何をするかわからなくなるし。それで適当に楽しんだらバイバイですよ。

先程セラスちゃんには友達が云々って言ったけど、ようはこの物語の主人公は将来、生まれてくるナギの息子で俺はそのナギの元仲間っていうモブです。

俺が世界救ってどうするんだよ？俺は観客で傍観者。この世界で踊る連中を見て楽しむのさ。まあ？俺個人に喧嘩売ってくるなら買っけどね。とことん相手をバカにしてな！二度と歯向かう気持ちになれないほど調きよ…もとい、教育してやるよ。

おろ？もう皆のもとについたね。

「我が君、アングレカム以下機動兵器部隊の出陣準備整いましてございます」

「吾ら将8柱も戦闘待機中。後は我が君の号令を待つのみでございます」

「ありがとう、ハオ、ユエ。…うわー」

改めて、こうして見ると俺の家族も増えたんだなって思うね。俺を含めて総勢243人、アンも入れれば244人です。…多すぎたかな？平時は「工房」内の管理や店の手伝いとかに徹してくれるから助かってるけど戦闘時にはこうなるのか…。

全力出陣なんてしたことなかったから、ちよつと感動。…宴会とかではしょつちゅう集まってるけどね。フル装備での集結ってそんなにないのよ。それに今回は戦争中に開発したモノが結構ある。それを装備してだから壮観だよ。

一月前に断念していた人型高機動兵器。これの開発に着手して試作一号が完成。でもね？試作一号を改造（魔）してる内にアレもコレも、とアイデアを盛り込んでいたら通常の「エステバリス」とは似ても似つかぬモノになってしまいました…。自分では「エステ

「バリス」を造ったつもりなんです。

皆さん…。突然ですけど“パワーール”って知ってます？もしくは某機動戦艦の劇場版に出てくる“ステルンクーゲル”でも可。なぜこんなことを聞くかというのですね？…脚部と肩部の部分が出っ張ってそれっぽくなっただんですよorz

まあどちらかと言うと“パワーロダー”っぽい…。俺は好きだけどな！あの作品も！難易度高いミッションなんか何度失敗したとか…。ハア…。

それで最初こそ「エステバリス」そのものだったんです。でも「長時間単独行動を可能にするためには？」、という壁にブチ当たりました。元の機体のままじゃそれが無理でした…。何しろ動力部分は重力波送受信機に頼った外部動力式でしたから。バッテリー搭載部分はあつたけど小さいのよ。

動力部分を搭載できるだけのスペースがなかったんです。そこで脚部大腿部を肥大化させて大出力超伝導バッテリーを二基、積むことで解決を図りました。ちゃんと魔力変換機構もついていますよ。

ついでに予備弾倉なんかも入れられるようにして。搭乗者の魔力補助・強化などもされるようにしているんですよ。感覚的にはドーピングみたいなものですけどね。あ、でも身体的には問題ありませんよ。無問題です。

とりあえず、これによって最大稼働時間が6時間強になり試作としては十分なものが確保できた…と思いました。…でも、そんなに甘くなかったぜorz

まあここで所謂、問題が発生しました。稼働時間はクリアしたのですが今度は肥大化した脚部のせいで上半身と下半身とでバランスが崩れてしまい機動性・運動性がガタ落ちという最悪の事態になってしまいました。

そして上下のバランスを取るために肩部を中心に肥大化させた。肩部には120mm砲や二連装5.56mmチェンガン、通信強化のレーザー機器などをオプションとして追加武装を取り付けられるようにして武装強化もしました。

それでバランス的な問題は解決しましたが、今度は総重量の問題が発生。この時点で総重量2.94tです。これにより装甲や骨組みの材料を再度見積もることに…。そして最終的にはアンにも採用されている軽くて硬い強化型精霊装甲を外部装甲に採用。

骨組みはマリーから聞いた方法で作成された神秘金属“オリハルコン”を俺が加工して柔軟性を増した“オレイカルコス”（二つとも同じ意味だが便宜上別ける）を採用。このことで前回の総重量の1.8tまで激減できた。

ここまでで稼働時間・全体のバランス・総重量をクリア。次にしたのは落ちた機動性と運動性の確保と保持。まず俺がしたのは背部や肩部・脚部などに今の無人機動兵器にも採用している強化型重力スラスターを装備・増設。

機動性はこれで解決。多少力づくで解決した感があるけど…。乗るのは俺を含めて人より頑丈だからいいんだよ。

あとハード面で残す問題は運動性のみ。そこで今までほったらかしにしていた間接部の見直しと補強、そして強化。これで激しい機

動をしても間接部の磨耗は耐えられるし滑らかな動きができる。マシンプワーも向上させたしね。純粹に力も強いよ。

それで増設・強化したことでエネルギー消費が増したために最大稼働時間は5時間弱。…5時間弱です。まだ逝けると思いました。飛行ユニットの取り付けです！単なる移動だけなら単体で飛ぶことも可能なんですけど高機動戦闘すると考えると速度不足が否めない。

そこで背部に飛行ユニットを装備して解決しようと考えました。皆さん“アップ シード”知ってます？それに出てくる飛行ユニットがあるじゃないですか。アレを搭載させようと考えたんです。結果は大当たりでしたよ。機体との相性がいいです。

これで高機動戦闘も可能になりました。次は標準装備してある魔導式ディスプレイーションフィールド（以下MDF）の制御プログラムを弄ってみました。

とは言っても集束率を増しただけですけど。例えば通常、全体的にMDFを展開しているのを任意で一点に分厚く展開できるようにすることで防御を強化してみようと考えてみました。まあ別に弄らなくても展開できないはないんだけど効率良く展開できるようにしただけです。

操縦者に対して負担は少ないほうがいいよね？とりあえず操縦方はIFSのようなものですから。一応ですが精魔奇兵の彼女達の身体には予めナノマシンが身体の組成に一部使用されてるんです。性能は色々ありますね。身体強化・対毒物・治療用などがあります。

話しが逸れました。ここまでで最大稼働時間は4時間強…。そろそろバランス的には限界かなと思います。いつか外付けのバッテリー

ーでも作るかな。

それで防御力も底上げできました。武装面は先にも挙げたとおり肩部にハードポイントシステムを採用したことにより武装強化可能。腕部に持つ標準装備の魔導式突撃銃“ラピッドライフル”（面倒だから名称はこれで）と27式精霊鋼短刀<sup>ナイフ</sup>です。

もちろんフィールドランサー（以下FR）もあります。もっともこっちでは対魔法用ですけどね。一応ですけどちゃんとランスとしても使える仕様になっています。やっぱり斬れないとね、刃物としては。

それで最終的に完成してロールアウトしたのが今、俺の目の前に整列している78機の機体。名前は、もうエステバリスなんて呼べない代物になっていますorz

正式名称MHT-06“イキシア”です。花言葉で「誇り高い」「秘めた恋」「団結してあたらう」などの意味があります。この名前にしたのは「秘めた想いを胸に、それでも仲間と団結して事にあたり誇り高く進もう」という思いで付けました。

戦いはやっぱり数ですよ。俺一人が強くても手数という点ではダメだと思うのよ。心の寂しさも埋められないしね。…何より一人で暴れてもつまらないです！

…ん？オリビエ発見！

「ねえ、オリビエ。今回から実験配備したけど、これ使えそう？」

「ん？まあ配備されて時間も経ってないけど葵の造った物だ。こい

つらなら必死こいてモノにするだろうさ」

やっぱり操縦訓練時間が足りなかったかな？今回は第十三、十八中隊の六中隊72人＋仕官6人で78人にイキシアを配備することにした。

第一機甲部隊はオリビエの二中隊。

第二機甲部隊はリビエラの二中隊。

第三機甲部隊はシルビアの二中隊。

それぞれに部隊を振り分けて組織したのよ。でも、オリビエ達は乗らんよ？…彼女達の能力を考えると乗せる意味がないのよ。それに機体自体が耐えられない。専用機を開発しないとダメだね。今回は時間もなかったし諦めてもらいます。

今更こう言っちゃなんだけど俺の部隊編成は普通のそれに比べて特殊だからなあ。軍隊と言つよりマフィアファミリアだと思う。それでもそこいらのヤクザ者より統率は執れてると思うし…。ああ、傭兵が近いのかな？

軍隊みたく厳しくないけど統制が執れていて、でも自由な感じ。それでもヤル時はヤル連中。まるでマフィアと傭兵を足して2で割った感じだわ。

自分で考えていて、ちょっと鬱です。眠いのも手伝っていい感じに沈みそう。意識の底に…。でも今は我慢…。それよりも…。

「そっか…。皆には万が一にでも落とされそうになったら機体は破

棄しても生き残るように徹底させてね？」

本当にね。撃墜されましたじゃ話にならないのよ。終いにやキレルよ？俺が、さ。全てを焼き払ってでも俺の身内を傷物にしてくれた敵に復讐してやるわ。

まあ仮に身体をやられたからといっても代わりの模擬体を用意すればいい話しなただけさ。それでも、ねえ？仕返して大事じゃない？主に俺の八つ当たりの意味で必要な事だよ。

「…バカ。落とされるかよ。こいつらを信頼してやれって。あたしらが鍛えたのもあるけど何よりこいつらは葵のために頑張ってるんだから」

バカって…ひどいなあ。でも、そんなに優しい顔して言われたら怒れません。温かいものを感じたからね。

「心配するのは許してよ。それにそれ以上に皆のこと信頼してるよ、当たり前だって」

信頼って大事だよな？身内に限っての話しだけ…。ああ、一応ナギ達も信頼してるよ。あいつら見ていて飽きないし。

「ははっ！それなら、よし！」

こういう時のオリビエは本当に、いい笑顔するね。可愛いね、うん。思わず見惚れてしまいますな。…ん？そろそろ俺達の作戦開始時間が迫ってきたか。

「司令閣下、作戦前に一言お願いできますか？」

「うん、それじゃ……」

「全員整列！司令閣下よりお言葉がある！全員静聴！」

アイリつてば……。そんなことまでしなくてもいいじゃない……。もつと気楽に行こうよ。ほら、皆が注目してるよ？恥ずかしいなあ……。うう。

「皆、よく聞いてくれ。今回の人間どもの戦乱は俺にとっては正直どうでもいい……。だが、戦乱の結果が家族達に害を及ぼすなら話は別だ！それだけは絶対に我慢ならん！！自分勝手と笑いたければ笑え！だが！俺はその愚物を必ず排除する！俺が倒れようともだ！しかし！その過程で皆が傷付いたり死ぬことは何人たりとも俺は許さん！全力で生き残れ！そして笑顔で今日明日を生きて行こう……。以上だ」

ハズい！マジでハズいです！顔に出てないだろうな！？

「全員敬礼！……司令閣下、ありがとうございます」

「うん、それじゃ後はお願いね？」

アイリに後のことを任せておけば安心です。万事滞りなく事を進めてくれるからね。

「ハッ！お任せください！」

うん！いい返事！頭を撫でてあげよう！なぐで、なぐで……。

「はう…」

「ハオとユエ、ミリー達とオリビエ達も来てくれる？」

今回の戦闘は俺もフル装備にしようと思います。そのためには皆の力が必要なのよ。

「承知」

ハオ、ユエ。

「はあい。二人とも行くわよお？」

「あい」

「御意」

ミリー、ウーリ、マリー。

「了解。まあ後はあいつらだけでもできるだろ。お前ら行くぞ」

「わかりましたわ」

「…うん」

オリビエ、リビエラ、シルビア。

それじゃ行くつか、皆。この一戦、精々楽しむことにしよう。



第十三話「決戦前と全力出陣と完全装備と」(後書き)

ア…レ…? 戦闘は?…くっ! 有人機の説明とセラスちゃんで文字数を取られるなんて…。

やっちまっただぜい…orzでも! 後悔は無い!

“パワ ドール”も“ア プルシード”も好きだから!

では今回はここまで! チャオ!

第十四話「決戦と蹂躪と副官と」(前書き)

決戦…。上手く表現できるかチョツチ不安…orz  
では、どうぞ！

## 第十四話「決戦と蹂躪と副官と」

S i d e 葵

まもなく決戦だ。俺達の準備はできている。

俺は今、両手に姉妹刀陽月を持ち、支援機ラミエルを展開、そして姿を透明化したミリー達を纏い守護とする。背後にはオリビエ達が戦いを今か今かと待機している。

これが今の俺の完全装備。両手に持つハオとユエはこの世全てを切り開き、ミリー達はそれぞれの水・風・火属性の魔法を無効化し、それに準ずる氷・雷・地属性は半減・減衰させる。また敵が発動した魔法を元の魔力に変換することも可能で逆にこちらが行使用する魔法は増幅して扱うこともできる。

オリビエ達は連係による攻防に期待。従者的な意味合いが強いかも。俺が本来の魔法使いとして砲台と化したら一度、動きを止めないといけないのはお約束だしね。まあ実際の話し動きながらより止まっているほうが集中できるしな。

そして万が一オリビエ達の手が回らなかつたら今回作成したラミエルの出番。対魔法・対物理・対光学防御と荷電粒子砲などからなる支援攻撃で俺の戦闘をサポートさせる。結構、堅固なフィールド展開が可能に造った。フィールド強度で言えばアンよりも1.72倍ほど強力にしたしね。盾として優秀よ。

第二、六中隊の部隊は俺の直接指揮下にて戦う…と言っても大まかに指示出したらあとは士官達の自己判断に任せるけど。今は対人対魔戦装備で待機中なりよ。ガンブレードっていいよね？俺は好きだな。ギミックが多いから本来なら壊れやすいけど固定化の魔法と精霊鋼で強度的な問題は解決したしね。

そして俺の服装は某錬鉄の魔術使いにあやかり赤いコートに黒い軽鎧です。ちょうど陽月も白黒だしそれっぽく見えるんじゃない？くらいのものだけだな！別に白髪でも色黒でもないし！

部隊編成は旗艦としてアングレカムが一隻、これにはアンと俺の第一中隊とミリー、ウーリ、マリーの六個中隊の計92人が搭乗。その他には複数の自動人形オート・マターや整備ロボットスバイダーが働いています。皆、働き者でいい子達よ、マジで。

アンの兵隊の無人機動兵器カフトムシは大盤振る舞いで6・000機を搭載。トンポ無人偵察機も600機あり現在は目標周辺に展開中、敵情の情報収集中です。

今回から実験配備される高機動兵器イキシアを78機、実戦投入される。テスト中に細かな問題点は修正してあるから今のところ致命的な欠陥は見られない。問題はないね！

元が完成度の高かったエステバリスだから弄るところが少なく大変だった。それでも無理矢理にでも弄って今の姿形はパードーダーになったけどね。

全高7・46mもの巨人達が完全武装で整列しているのを見ていると何やら奮い立つものがあるよね？それにしても造り終わってから気付いたけど、この機体…。どことなく女性的フォルムだなorz

俺はもはや無意識に女性的なモノを求めるまでになっていたのか？ハア……。まあいいか。

それで他の勢力はというと……。

まず俺が今まで居た帝国からの兵力は戦艦1と巡洋艦3の合わせて4隻。艦艇搭乗者以外の魔法使いは156人でその内上級魔法使いは12人。

もうちょつと連れて来られると思ったのに他の重鎮達に反対を喰らってしまったのよ。まあ誰だつて余計な被害をうけたくないから当然つちや当然なんだけどね。もつと根回ししとけばよかつたわ。

次に連合側。戦艦2と巡洋艦1の合わせて3隻。魔法使いは189人その内の9人は上級魔法使いだ。

こつちはもつと悲惨だね。この場にいる人達の思いは純粹だよ？でもねえ……。何て言うかな、この場にいるのは上官から見ても頑固者というか一癖も二癖もある扱いに困る者達が多いのよ。要は元老院議員から見ても邪魔者が多いのよね。

できることなら皆ここで死んでくれつてな思惑でここに派遣されてきたのが多いんじゃないかな。本当に悲惨だね……。でも、そんなこと現場の人達には関係ないよね。皆が魔法世界を救いたいって思いでここに来てるんだから。

最後にアリアドネー。巡洋艦2隻にセラスちゃん率いる騎士団を筆頭に123人、内24人が上級魔法使い。

アリアドネーの思惑は深いところまではわかんないな。なにせ独立した学術都市だし。今回の作戦参加も、もし本当に事が起こったら被害がバカにならないからで、その次善策の一つとしてみたいだし。

それに学術都市っていうのもあるんだろうね？こんな大規模な魔法現象は滅多に見られないし学術的価値観から記録して危険なら第一級封印。その他の類似被害対策に用いるためだろうな…。よくやるよ、本当に。転んでもただでは起きないんだから。

とにかく艦艇9隻、魔法使い468人+俺の家族244人（内、俺に8柱ついて機動戦艦アングレカム搭乗者92人、対人対魔戦装備の兵が65人、高機動兵器が78機）。現時点での総戦力だね。

純粋な意味で俺の家族達は魔法使いじゃないしね。てか、俺も人体にナノマシン入れてるから純粋な魔法使いとは言えないよなあ。それでも戦力的に見て戦闘力は我がファミリーが最高よ。負ける気がしないのは本当だな。それだけの用意はしてるしね。

む？時間だ…。

「諸君！この一戦に魔法世界の未来がかかっている！諸君にも守りたい者達がいることだろう！それは愛する家族かもしれない！それは大事な恋人かもしれない！それは大切な友かもしれない！その者を強く想うならば必ずや生き残れ！隣に居る仲間を守り信じよ！その信じる心があるならば必ず仲間が諸君らを守り諸君らは生き残れる！こんな戦いで死んで終わることは、この俺が断じて許さん！！生き残り未来を守るのだ！！未来のために！！！！」

戦意高揚のために出陣前の演説って何気に大事だよな？ちよつと

年甲斐もなく張り切っちゃった。てへっ ……ん？結構いいこと言ったと思うのに誰も反応ないんだけど、これはどういうことかね？お兄さん、寂しいなあ…。

…おおおおおおおーっ！！！！！！！！！！

未来のために！未来のために！！未来のために！！！！

おうふ？一呼吸分、遅れて反応するとは、やるじゃないか。俺はビックリしたぞ？油断したぜ！…ビ、ビビッてなんかいないんだからな！本当だぞ！大きな声に驚いただけだ！

とにもかくにもここは盛大な花火を上げるとしよう。まあ試射の意味もあるんだけどな！

「特大の一撃を相手にぶつける！それを合図に全軍突撃する！いいな！？」

応っ！！！！！！

皆さんいい返事です！俺はそんな皆が大好きだ！よし！気合も入った！それじゃあ逝ってみようか！

「ラミエル！WAKE UP！！」

『了解。我が主』

「決戦形態へ移行！目標！敵召喚魔及び自動人形！狙え！！」

決戦形態、それはラミエル最大展開した状態のこと。その姿は100mもの青い巨体で正八面体の形をしたモノだ。…ぶっちゃけ普通に用途の進行だな！おい！

『了解。形態変化開始…完了。続いて砲撃シーケンスへ移行…各部良好。エネルギー充填…60…70…80…90…100…エネルギー充填完了。照準…よし。トリガーを我が主へ』

トリガーが回されてきたか。ある意味、必殺の一撃…。受けられるものなら受けてみよ！つてな！

「叶わぬ想いを抱いて墮ちろっ！…吹き飛べーっ！っ！！」

カッ！！！！キユイイイーン！！ズガガガガガガッ  
！！！！！！

一瞬、目が眩むほどの光を放ち、次にそれは直進していく破壊の本流となつて。…そしてその破壊の力の一部がなんと、運がないことに「墓守人の宮殿」の天頂部に命中した…。

やっべ！気合が入りすぎたか！？…白髪君達は死んでないだろうな？あいつらはナギが倒さないと物語が大分変わっちゃうからな…。

いや！心配は後だ！いい、今は突撃を命令しないと…。

「…い、今だ！全軍突撃せよっ！！！！！」

うおおおおおおー！！！！！！！！！！

戦いは今ここにて開幕されたのだった。…死んでねえよな？物語はまだ始まってもないんだから勘弁してくれよ？ガクブルガクブル…。

Side out 葵

Side ナギ

さて、勢いで飛び出して来たはいいけど俺達の順番はアオイ達の陽動が開始された後からだったことを着いて来た詠春に聞かされた。…拳骨と説教でのオマケ付きで、な。

たくっ！そういうことは事前に話とけよなってんだ。詠春にそのことで文句言ったら…哀しい目で可哀想な子を見る顔だったのは何でだ？俺の横にはジャックも居たけど、ジャックにも似たような目を向けてたし…。

…詠春。何、俺の肩をポンポン叩いて慰めるようにして説明してんだよ。…なに？この説明って二回目だったのか？……………。

ハハ、ハハハッ！そうだよな！！覚えてる！も、もちろん覚えているぞ！

詠春の話しを聞いているうちに俺は薄っすらと今回の作戦のことを思い出してきた…。そうあの日は決戦を数日後に控えて作戦会議があつて、それが終わったあと…。そうだ、そのあとだ。勝利前の宴会をすることになって、「紅き翼」のメンツで飲み始めたんだ。

それで…。それから…。くそっ！そこからは思い出せねえ…。ジャックの野郎に何かのピンを口に突っ込まれてからの記憶がまったく、ない…。

まあ、いいか！今のところ困ることないし！記憶をなくすほど楽しかったと思えば…。姫さんも誘えばよかったかな…。

ああいうお祭り騒ぎの宴会って姫さんは参加するのかな？？？まっ！俺が誘うんだっ。イヤがっても連れてってやるがな！ハハッ！

ドンッッッ！！バアアアアッ！！ドドッ！！ドドドッ！！！！

おお！アオイ達がおっぱじめやがったか！陽動とはいえ派手にやりやがるな！あいつは！

「よし！行くぞっ！」

「ん！」「はい」「おうよ！」「うむ」

Side out ナギ

Side 葵

敵軍は先の一撃を受けて一割が蒸発、二割り近くが身体のどこか一部を損傷している。造っておいてなんだけど出力調整はもっとマジメにしようと考えさせられる威力だった。ハア……。これはリミッターをもっと付けないとダメだな。危なすぎるわ。

まあそれでもまだまだ敵のほうが数は多いんだけどなorz誰だよ？こんなに呼んだのは……。まだまだ増え続けているんですけど。

空が：黒く見え：ます。あーもー！鬱陶しいったらないな！！お前らはアレか！？ゴキリかイナゴの群れか！？ううう！自分で言っていて想像したら寒気がした。気持ち悪いです。

混成部隊と敵軍は戦闘に入ったからラミエルの一撃は使えないし

な。そのラミエルは今、20cm程の大きさで俺の守護をするために周回しながら浮いている。

アングレカムは後方で指揮所として機能して最遠距離からの弾幕、砲撃支援、そしてカプトムシの指揮統制をしているし、それにアンは今回からは高機動兵器イキシアの広域情報管制も担当している。

アンの負担多いなあ……。いつかメモリの増設とイキシアとの連動機動データを収集して互換システムのバージョンアップもしないとデータがオーバーフローしちゃうな。設備の追加もしないと……。

まあそれも戦闘後にすればいいか。今はと……。

「第三第四中隊は右翼側を！第五第六中隊は左翼側だ！第二中隊は俺に続け！」

「……了解っ！！」「……」

両翼を命じた者達は素早く散って行き俺の周りには突撃陣で待機している第二中隊のみ。続いて機甲部隊に指示を出す。

「第一機甲部隊は味方の護衛を重点に置いて行動せよ！何としても守りきるのだ！」

『『了解！』』

帝国・連合・アリアドネーは混成部隊だから心配なのよ。連携は訓練である程度、克服しているみたいだけど、まだアラが見てとれる。ならば二個中隊を派遣してでも守るしかないじゃん。

連合・アリアドネーに知り合いは、ほとんど居ないけど帝国から連れてきたのは俺の懇意にしている将校から貸し与えられた兵達だ。こればかりは無駄にはできん。他人ならいくら死のうが知ったことじゃないけどな！そこまで責任持てないし！

「第二機甲部隊は各戦線を後方より砲撃支援を開始！弾幕を張って味方に近づかせるな！」

『『了解！』』

要は近づけなければいいんだ。まあこれはすごく極論で、まず無理だけどな。それでも相手の行動を阻害できる。そして行動を制限できれば、こちらはそこを突破口に戦闘で優位に立ち回ることが出来る。

それに一番安全な勝ちかたは簡単だ。敵と接触することなく遠距離からの強力な一撃による攻撃。これは卑怯くさい方法かと思われが現代戦闘では、これが当たり前だ。それにここには遠距離攻撃を可能にした装備があるんだから使わないでどうするってものだ。

家族が、より安全に勝てる方法があるなら俺はその方法を迷わず選ぶね。家族の命がかかっているなら他の全てを犠牲にしても俺は構いませんな。例えば世界でもな！まあ滅多にそんな選択はないけど…。

「第三機甲部隊はタイミングを見計り両翼から敵陣に斬り込み敵を後方から攪乱、各個撃破せよ！お前らの力を敵に見せつけてやれ！」

『『了解！』』

敵の数が多い…。砲撃・爆撃支援だけでは対処できない。このままでは、いずれ戦線が崩壊する。危険な賭けではあるが敵後方を攪乱してもらって突破口を開くしかない。これは先を見越しての策だ。

まだ戦端は開かれたばかりで味方の気力、指揮も高い。しかし、この敵の数を前に長くは持つまい。人は戦意が高揚している時はいが絶望的戦力差を目の当たりにした時は戦意がガタ落ちする。気が折れるのだ。

戦況が最悪になる前に事前策が必要だった。そのため布石が彼女達だ。彼女達が時機を見て敵後方から攪乱することで敵戦線に乱れが出る。それは極僅かな時間かもしれない。しかし、それが俺達にとって逆転の好機となるのだ。

人は絶望の中で一度でも希望を目にすると、それに引き寄せられて突き進むことがある。言うなればこれは火事場の馬鹿力というものだけだな。それでも人は希望があるから無心に戦うことができるんだよね。

さて、もう一つ手を打っておくか…。

「アン、聞こえる？」

『はい、感度良好です。お父さん』

「よろしい。アンは無人機を統制して全戦域を把握。遊撃として帝国・連合・アリアドネー混成部隊の援護。戦艦アングレカムはグラビティブラスト（以下GB）、ミサイルで超遠距離砲撃にて支援。…アン、アイリ達を…皆を守ってね」

無人機は各機が常時並列ネットワークで繋がり情報を共有している。それをアンが送られてくる情報を分析・解析して最善と考えられる指示を無人機に下していく。そしてそれは今回から実験配備された高機動兵器イキシアに常時更新して情報が転送される。

複数の機体間とアンの管制で広域データリンクシステムを構築して最新の情報を部隊全員で共有していることになる。俺を含め皆には通信用情報端末、所謂コミュニケを持たせているからな。もちろん情報は受信に限りだが俺達も共有している。

戦域全体を規定値以上、把握したらこちらが優位だ。救援が必要な味方までの最適なルートを割り出して援護が可能になり被害リスクを極限まで減らすことができる。

こちらは戦意、魔法使いとしての質も高い。しかし数が少なくても混成軍であることもあって不安が残る。さりとて、それぞれの部隊が個別に戦っているのは各個撃破されてしまうのが関の山だ。潤滑液、または緩衝材となる存在が必要だった。

そこで俺の部隊を緩衝材の役目にした。これは先にも挙げたとおり常時並列ネットワークで繋がりデータリンクシステムがあるのが大きい。情報・連絡共に密に取れるので伝令役としても使えるのだ。

数の多い連合を中央に布陣させ右翼に帝国、左翼にアリアドネーを置いた。後方にはアングレカムを置き、支援攻撃と情報管制などをしてもらいながら無人機による援護もしてもらう。

残った俺達は緩衝材の役目と各軍の遊撃を務めることになる。

『はい、必ず……。お父さんも気を付けて』

信じているよ、アン…。

それじゃ俺も行くとしますかね！

Side out 葵

Side セラス

戦闘が開始された。アオイ殿が放った光の一撃…。話しに聞く旧世界の科学爆弾の破壊力を思い起こされるほどの威力だった。

敵軍は先の攻撃で三割以上に被害を与えることができた。しかし、それは現時点での敵の数に対してだ。決定打ではないだろう…。その証拠に今も召喚が行われているのか、その数は増え続けている。

魔法の射手！連弾！光の7矢！！

7発中四体の召喚魔を撃破、か…。敵の数が多いことから魔力の温存と速度重視で無詠唱魔法を繰り返していくが…。

「くっ！切りがないっ！」

そう。どこで、この召喚が行われているのか知らないが倒しても倒しても切りがない。

幸いにも戦闘は始まったばかりでこちらはまだ戦意は高い。今しばらくは戦線を維持できることだろう。…だが、それもいつまで維持できるか。

私は召喚魔の中に動きの早いものを見つけた。下手に放っておくと味方戦線をかき乱されるかもしれない。早めに危険の芽は摘むに限る。私は召喚魔に狙いを定め…。

魔法の射手・戒めの風矢！

戒めの魔法の矢は召喚魔を追尾して与えられた役目を全うしようとする。そして逃げる召喚魔に追いついて捕らえた。

捕まえた！！

このチャンスを無駄にすることなく次の無詠唱を準備する。

魔法の射手！連弾！光の3矢！！

放たれた魔法の矢で召喚魔は撃破…。まだまだ敵の数は多いがとりあえずの危険は減った。ホツとするのも束の間、戦いはまだ続くのだから。

私達、騎士団は左翼側の中央に展開している。そのため攻撃の激しさが身を以って思い知らされる。中央に布陣した連合は大丈夫だろうか？左翼の私達でもこの激しさだ。中央の者達は苦戦を強いられているに違いない…。

そう思い一瞬だけ意識を中央に向けてみた。その時に見えたもの…。それは…。

常識ハズレなほどの数の白と黒の剣の嵐だった…。

Side out セラス

Side 葵

くそっ！思った以上に敵の数が多い！何だ！？この面倒くさいな！もう！こんなことなら遠慮しないでアンの砲撃もセットで放てばよかった！

面倒だな…。 “剣雨”でも展開して数を削るか…？そうするか…。よし！そうしよう！魔力を高めて…。 あっ、警告しとかないと！

「あー！あー！…味方部隊は下がれ！巻き込まれなければ言うとおりにしろっ…！」

俺の言葉に周りから順次後退していく連合の魔法使い達。…俺が言うのも変だけど、よく言うこと聞いてくれたな。少しは反発があるかも考えたのに…。 まあいい！これなら…ヤレル！

高らかに謳われるは敵を屠る力の呪文。葵本人の増え続ける魔力と陽月に長年蓄えられた魔力。それぞれの莫大な魔力にモノを言わせて展開される最大級の葵オリジナルの魔法…。

白の一刀！放つは光！！

八才を一振り。現れるは白の剣が一。

黒の十刃！放つは影！！

ユエを一振り。現れるは黒の剣が十。

白の百刃！紡がれるは栄光！！

八才を一振り。現れるは白の剣が百。

黒の千刃！紡がれるは破滅！！

ユエを一振り。現れるは黒の剣が千。

白の万刃！語られるは英雄！！！！

八才を一振り。現れるは白の剣が万。

黒の億刃！語られるは魔王！！！！

ユエを一振り。現れるは黒の剣が億。

陰陽の剣軍！今ここに！！敵を討つ！！！！

白と黒の剣先が向くのは主の敵。

穿て！決戦魔法“剣軍弾雨”！！！！！！

ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！

シーン！ シーン！ シーン！ シーン！ シーン！ シーン！

刃は一で十を貫く。

ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！  
ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！

刃は十で百を捻じ伏せる。

ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！  
ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！

刃は百で千を切り裂く。

ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！  
ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！

刃は千で万を消滅させる。

ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！  
ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！

刃は万で億の敵を蹂躞する。

ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！  
ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！ ドーン！

刃は億で兆を…。

一斉に放たれた剣軍。その数は無数という敵を前にしても劣らな

い。魔法の発動が終わり視界を遮っていた魔力の残滓が晴れた。そして結果を見てみるとそこには…。

「何にもなくなっちゃったなあ…」

あんなにいた敵が姿も見えない。両翼の敵はまだ健在。蹂躪したのは敵陣中央だけだから当然といえば当然なんだけど…。もうちょっと範囲を広げておけばよかったかな？…いや！ダメだろ！？イキシアのデータ収集があるんだからやりすぎちゃダメだろ！

ふう…。つい数の鬱陶しさからやっちゃったけど…。失敗だったかなあ？こんな大規模の戦闘なんかもうないだろうし。苦戦時のデータも欲しかったのに、これじゃ五分で渡り合えるよ…。しまったなあ。やっちゃまったよ…。

「たくつ…俺らしくもない」

俺の遊び心はどこに逝った！？くつ！？手加減を忘れてた… or z億の段ではなくて千の段までに留めておけばよかった！

まったく！こんなことなら宝物庫の中身も有ればよかったのに…空っぽなんだもの。王の財宝をこれでもかと思ってみたかったなあ…。おかげで、別口で術式を構築しないとダメだったんだからイヤになるよ。術式開発に手間がかかって仕方なかった。

それでも実体を構築できるのは陽月の二振りの複製が限界だったのはどういふことかね。他の武器を複製しようとするとも一時間も経ったら消えちゃうし。今考えてみると相性の問題だったのかね？二振りを打つときに俺の魔力を注いだことが原因とか。

今、その考察はいいか…。とにかく敵を駆逐しながら注意をこちらに向けさせなくちゃ、ナギ達が戦う時間を稼がなくちゃならんな。

「総員聞けーっ！！敵の陣形は今ここに崩れた！連合の勇者達よ！行けっ！この好機を逃すな！」

オオオオオオーっ！！！！

そうしている間にも敵はまた召喚魔が増えてきた。まったくここで召喚されているんだか…。俺達は困だから召喚魔の発生源を潰すわけにもイカンし…。いや、潰すか？…待て待て待てっ！まだダメだ！イキシアのデータ取りが終わってない！

召喚魔の発生源を潰すのは十分なデータを取り終わってからでも遅くはない。まあそれまでにナギが親玉と決着をつけるだろうし俺はほどよく戦うとするか…。先のはイライラしてやり過ぎてしまったからな。

それにここまで敵を減らせば残りは十分な戦いができるでしょ。家族達が各軍を適度にバックアップはしてくれているんだからな。

アンとアイリは上手くやっているかな…。

「あの…葵ちゃん？」

ファレノ？どつたの？キョトンとしちゃって…。

Side out 葵

時は少し戻りアングレカムでは…。

S i d e    アイリス

「ッ！？味方陣地中央に高魔力反応有り！…魔力パターンは葵様です！…これほどの高魔力は…ハッ！？決戦魔法使用の疑い有りです！！！」

戦闘開始してしばらく経ってから驚きの報告が届いた。司令閣下が早くも決戦魔法を発動しようとする魔力反応が感知されたのだ。

「各部隊に緊急通達を！対象区域より即刻退避させなさい！」

自分は念のため該当区域の全部隊に退避命令を出した。司令閣下、無茶をしすぎです…。退避が間に合うようにしてくれているのはわかりませんが、それでも心臓に悪いですよ。何を急がれているのですか？この程度ならばまだピンチにもならないのに…。

「アイ・マム！全部隊に緊急通達！味方陣地中央にて決戦魔法の使用を感知！対象区域にいる部隊は即刻退避されし！繰り返し！味方陣地中央にて決戦魔法の…！」

通信士の周りにウィンドウが次々と展開しては消えてを繰り返して各部隊に緊急通達されていく。通達が下される前に退避した部隊もあることから司令閣下が警告したものと思われるが、それでは足りないようだ。

しかし指揮所であるこちらからの指示には従わなければならない。退避命令は即時実行された。私は次いで念のたかを考えて指示を出すことにした。

「アン、無人機に各軍を援護させて。下手に被害が出たりしたら目も当てられないから」

「うん：じゃなかった。アイ・マム、艦長代理。無人機各機は中央陣地前面にてフィールド展開準備。決戦魔法発動直前に各軍部隊をフィールド展開して流れ弾から守りなさい」

ふふ、可愛いわね、アンは。んん：今そのことはいいわね。アンは自分の考えを正確に読み取り守備に入ってくれた。これで万が一のことが起きても被害を抑えることができる。

「決戦魔法の発動を魔力レーダーと偵察機の光学映像で確認！…“剣軍弾雨”、敵陣中央の上空に展開、射出されました！攻撃は敵軍に直撃！敵陣中央を中心に攻撃範囲が広がっています！…あつ、敵陣中央ほぼ壊滅！しかし両翼の敵は尚も健在です！！」

「司令閣下が作った好機だ。該当区域の全部隊に“傷口を広げよ”と通達。しくじるなよ？」

敵陣に穴が開いた。それも致命的なまでの穴が。この好機をみすみす見逃すほど自分は甘くはない。より致命的になるまで適度に広げてみせる。

「アイ・マム！作戦区域の全部隊に通達！敵中央の“傷口を広げよ”！繰り返し！敵中央の“傷口を広げよ”！！」

「実験配備されたイクシアはどうか？」

今回の作戦に不確定要素があるとしたらコレだ。データ収集班に現在の状況を聞いてみることにした。司令閣下の作られたものだから不安は少ない。だが少しくらい気を配っておいても損はないだろう。

最悪の事態を想定して予め備えるのも司令閣下の副官の一人としての自分の役目だ。もう一人の副官は第二中隊を率いて司令閣下と共に最前線に居る。ファレノプシス…彼女は上手く司令閣下をサポートしているだろうか。不安はないが心配だ…。

「はい、今のところ撃墜された者は皆無。順調に敵を撃破している模様。機動性・運動性・攻守のバランス、その他システムにも機体トラブルの問題は見られません。今回の優先的たる機体データも順調に収集中です」

実験配備された機体は順調に戦果を挙げているようだ。この性能ならば部下達が…家族が負傷する確立が格段と減ることだろう。

今回、収集されたデータを元に機体の改良にソフトウェアの更新、ついでに装備の拡張をして今よりも更に優れた機体“イクシア”(ツヴァイ)”が開発される。

「そうか…。流石は司令閣下だ。良いモノを造られる」

「そうでしょ！そうでしょ！私もお父さんを手伝ったんだよ！強度計算とかバランス計算、姿勢制御、火器管制システムなどなど！OSからいろんなプログラムまで組んだんだよ！うふふ」

「そうか、司令閣下の手伝いをしていたのか。アンは偉いな」

「えへへ」

外見はこんなにも愛らしいのに今や立派な私達の家族なのだ。

Side out アイリス

第十四話「決戦と蹂躪と副官と」(後書き)

ここにきて新たなキャラの予感!?

自分の手が書いていて作者本人が驚いてます!!

この後どうするんだろう…。

俺の手が…orz

勝手に動き回るんです!俺のせいじゃないんです!!

…マジでどうなるんだろう?本当にね…。

マジメにプロット作ればよかったと後悔中ですよ。

第十五話「魔法と機械と乱戦と」(前書き)

珍しくちょっとだけ気合入って文章が長め…。

更新も早めにできました。

この調子で書けたらいいな。

では、続きを！

## 第十五話「魔法と機械と乱戦と」

中央最前線にて…。

少し時間は戻り…。

Side ファレノプシス

私の名はファレノプシス。元火精霊の精魔奇兵です。気軽にファレノプと呼んでね。第二中隊の指揮官なんかしています！葵ちゃんの近くにいられるしね。…アイリの第一中隊より近いけど。それでも同じくらい近いもん！葵ちゃん直属は伊達じゃないんだから！

それで私達第二中隊は今、葵ちゃんの護衛として最前線に立っているの。そのはずだったんだけどなあ…。私達の前には敵がまばらにしかないの。私ってここにいる意味あるのかなあ？なんて…。

会戦後しばらくは私達も数だけはい多い敵の相手をしていただけで葵ちゃんがキレたのか、わからないけど味方に対して突然の退避勧告。なぜかと考えていたら指揮所からの命令が下された。その命令が…。

“ 決戦魔法の発動を感知。至急退避されたし ”…。

…何コレ？冗談でしょ！こんな序盤で使うような方法かな！？私達は慌てて後ろ向きに前進したよ。怪我したくないからね！それに

しても葵ちゃんだったらどうしたのかな？いつもならこんな場面で使うことなんかないのに…。

徹夜明けだから精神的にキテたのかな。ここ最近は睡眠時間も削られるほど頑張ったものね。葵ちゃんもデッサン魔法を放ったからこれで少しは気分的にスッキリしたかな！うんっ！

…んー？でも何でだろ、魔法を放って敵を駆逐したら頭を抱える。どうしたんだろ？声かけてみたほうがイイのかな？…うん！行ってみよう！それじゃさっそく…。

「たくっ…俺らしくもない」

俺らしくもない？近づいてみたら葵ちゃんのそんな言葉が聞こえてきた。やっぱり寝不足でキレちゃったのを後悔してるのかな？でも、情報端末を開いてみても被害は敵だけで味方には被害はないって出てるよ？葵ちゃんって無駄に器用さんだね。あんなに大規模魔法だったのに…。

どうしたのかな？今度は何か考え込んでるみたいけど…。葵ちゃんがちょっとの間、考えていたから心配して更に近づこうとしたら、その葵ちゃんが突然声を張り上げて叫ぶようにして命令したの。ビックリしちゃった。

「総員聞けーっ！！敵の陣形は今ここに崩れた！連合の勇者達よ！行けっ！この好機を逃すな！」

オオオオオオーっ！！！！

たしかにチャンスではあるけど、葵ちゃんヒドイよう…。突然大

きな声なんか出すからビックリしちゃったじゃない！連合のオジ様達は戦線を押し上げるために突撃して行っちゃったし…。周りには葵ちゃんと私達しかいない。私は三度目の正直と思いきや葵ちゃんに声をかけたの。

「あの…葵ちゃん？」

「なに？ファレノ、どつたの？」

…なんか失礼だよ。私が声をかけたら葵ちゃん不思議そうな顔するんだもん。それにどうしたの？は私のセリフだと思っの！なんか考え込んでたみたいだから心配してたのに！もう！

「どうしたも何も、葵ちゃんが何か考え込んでたから心配したから声をかけたの！」

「えっ、そんなに考え込んでた？」

気付いてなかったの？ちよつとの時間だったから戦闘には支障はなかったけど結構深く考え込んでたの…。ここで葵ちゃんが何を考えてたのか気になった私は悪くないと思うの。もちろん聞いてみたの。

「一体何をそんなに考え込んでたの？」

「あー…たいしたことじゃないよ？収集データが減っちゃうなって考えてただけだから…」

「データって…あつ、イキシアって機動兵器のこと？」

「そう、ソレ。こんな戦闘って滅多にないから実証データは多めに欲しかったのに俺が“こんなに”しちゃったから、ね」

ああ…なるほど、そういうことなの。葵ちゃんは実戦での収集データが減ることにガツカリしてたのね。たしかに敵陣の中央だけとは言っても結構な数の召喚魔と自動人形を片付けちゃったものね…。

「ご愁傷様だね、葵ちゃん。でも元気出して！まだ敵は両翼に沢山いて、しかもまだまだ増え続けてるんだから大丈夫なの！」

そうよ、葵ちゃん！落ち込むのは早いの！変な話しだけど今なら敵には事欠かないの！実戦証明できるの！だからファイト！葵ちゃん！

「ううん？たしかにそうだね。俺、頑張るよ！」

「うん！いい子だね、葵ちゃん。…ところで“アレ”しちゃったのはやっぱり徹夜明けでイライラしてたからなの？」

私は“剣軍弾雨”の発動地点を指差しながら笑顔で、そう聞いてみたの。そして葵ちゃんは何やら左右をキョロキョロしながら見ていたけど、やがて観念したのか幾分疲れた顔をしながら…。

「……………うん」

…と、だけ頷いて答えたの。私は葵ちゃんのお仕事を少しでも減らしてあげるように、これからますます頑張ろうと思ったの。これが終わったらゆっくり寝かせてあげようと思うの…。

第一機甲部隊は新しく実験配備されたイキシアにて味方部隊の護衛を重点に救援活動をしている。戦線が崩れると思われる戦域に向かい即座に部隊展開して味方を守りきるのが役目。

中央陣地の戦況は指揮所からの情報に “ 葵の猛攻で敵軍は壊滅状態にある ” とあった。このことで部隊員達の間では「葵君が寝不足でキレた…」と噂されている。実際そのとおりなのだから冗談とは考えられないのが辛い。

このことで中央の護衛は不要と指揮所は判断。その後の通達で第十三中隊は右翼へ緊急展開して第十四中隊は左翼に急行、部隊を展開した。

本来であれば彼女達の主であり家長である葵の守護を担っているのだが、その葵からの指示で帝国・連合・アリアドネー混成部隊の味方部隊を護衛すると言う名の遊撃行動をすることになった。そして役割は異なるが第二第三機甲部隊も変わらない。

帝国軍が展開している右翼陣地…。

『マイクリーダーよりマイク全機へ。ここでの我らの役目は右翼に展開している帝国軍の護衛と支援だ。訓練どおり小隊単位で行動しろ。互いにカバーするんだ。そうすれば撃墜と言っ不名誉は免れることが出来る。だが、何よりもまずは葵司令の期待に応えてみせろ！いいな!?!』

『『『『了解!』』』』

三機編隊の小隊単位で戦場を機械の鎧を纏った乙女達が駆け抜けて行く。

女性的な姿形で白地に青いラインの描かれた機体。魔法世界では異色の機械の巨人達。魔法文明が発達しているこの新世界では、まず考えられるものではない。なぜなら魔法使いは魔法という便利な技術を使うことができるから、こうした機械技術は低く見られるのだ。

物質文明の旧世界では機械工学などが発達して科学と言う力を得たが、それも万能とは言えない。寧ろ現時点では新世界側のほうが魔法もあるのもあるが旧世界に比べて技術は発展していると言えるだろう。

しかし、ここに破壊行動としてだが、その常識は崩れようとしている。葵が開発した“イキシア”だ。正式名称MHT-06(MHT=Multi purpose Human Tank)、全高7.46mの巨体の割りに総重量1.8tと軽い。そして完全装備時の総重量は2.01~2.53tと機体への重量負担を最小限にしている。



『大丈夫か！？まだ戦えるなら隊列に戻りなさい！！』

「は、はいっ！ありがとうございます！」

助け出された魔法使いは死にそうになった恐怖で一瞬、身体が固まるが直ぐに正気を取り戻して礼を言うと味方の隊列に戻り敵陣へと駆け出していった。

またあるところでは飛行して正面の召喚魔を追っていた魔法使いがいたが直後に別の召喚魔と自動人形に自分の後ろにつかれて逃げている。速度で召喚魔に劣っていた魔法使いに凶刃が今そこまで迫る。そして先回りした自動人形。追いついた召喚魔の振り下ろされる爪が魔法使いに迫り届こうとした、その時！

キイイイインツ！！

あわや挟撃されるかと思われたが白と青の機械の巨人：2機のイキシアが魔法使いを助けるために間に入り敵の攻撃をその堅固な装甲で一手に受け止めていた。ギチギチと押し合う装甲から嫌な音がするが音に反して装甲には傷もなく塗料が剥がれるのみだった。

その様子を助けられ、ただ見ていた魔法使いに業を煮やしたのか外部スピーカーから巨人の姿に反して綺麗な女性の声が響いた。

『何をしている！？早く退避なさい！死にたいのか！？』

「は、はい！！！」

言葉遣いは乱暴だったが先程のことで呆然としていた一人の魔法使いの命は助かったことになる。魔法使いが離れたことに安堵した

二人だが、その二人の機体に通信ウィンドウが開かれ彼女達の小隊のマイク7のコールナンバーを持つ小隊長が怒鳴り散らすように指示を飛ばす。

『マイク8、9！合図したら離れなさい！！』

『何！？…そうか！マイク8、了解！』 『マイク9、了解っ！』

『…今だ！！』

合図と共に離脱する二人。次の瞬間、彼女達と召喚魔、自動人形が居た空間に弾丸の雨が降り注いだ。

チユイイイイン！ガガガガガガガガガッ…！！！！！！

マイク7の機体の左肩部に装備された二連装5.56mmチエーリガンから対魔法障壁弾が毎分200発以上が射出され対象区域に居た召喚魔達だけでなく近くに居た敵をも巻き込み全てを物量に物言わせて撃破した。

Side out 第一機甲部隊

中央後方アングレカム前方の中衛に布陣…。

Side 第二機甲部隊

第二機甲部隊は後方よりの援護のために支援攻撃装備にて味方を守るために敵を遠距離から叩いていた。

巨人が両手に構えるのは長距離支援制圧砲が一つ、右肩部には精密広域レーダーを装備して武器の命中率を上げる。左肩部には8連装多目的ミサイルポッドを二基、装備。面制圧を目的とした多弾頭ミサイルと搭載。

長距離からの制圧を目的とした装備で弾薬補充と支援砲撃を繰り返している。そしてまた砲撃要請がきた。

『アングレカムよりオスカーリーダーへ。ノベンバーリーダーより支援要請有り。ポイント2 - 8 - 3に制圧砲撃されたし』

『了解！これより支援砲撃を開始する！着弾予定時間は90秒後！』

『ノベンバーリーダーよりオスカーリーダーへ！感謝する！』

『オスカーリーダーよりオスカー各機へ！ポイント2 - 8 - 3に制圧砲撃を30秒後に開始する！各機砲撃準備！カウント0で砲撃！』

『『『『了解！』』』』

『カウント…15…10…5…3…2…1…砲撃開始！』』

ガチャ！…ドウンッ！…ドウンッ！…ドウンッ！…ドウンッ！ガチャ！…ドウンッ！…ドウンッ！…。

スナイパーライフル  
長距離支援制圧砲から重く鈍い轟音を響かせながら特殊散弾の弾丸が飛び出していく。

トトトトトトトトッシューッ……トトトトトトトトッシューッ……ッ……トトトトトトトトッシューッ……！

一機あたりが八連装多目的ミサイルポッドから全16発の多弾頭ミサイルを全弾発射されていく。それが十三機だ。発射されたミサイルは多大な数になる。まさに制圧攻撃だ。

『着弾まで20秒……15……10……5……2……1……着弾。……砲撃のおよそ80%が命中。砲撃による効果、良好』

弾道を観測しているアングレカムが着弾までのカウントしていた。80%が命中。撃破したかはともかく敵の勢いを押し留めることはできたはずの攻撃。

広域レーダーでの観測と偵察機の光学映像で確認したのは砲撃された左翼の敵が一時的に数を減らされたことで前進していたのが止まっていた。そこにノベンバー各機とアリアドネーの騎士団が追い討ちをかけるように砲撃と魔法を叩き込んでいる。

『オスカーリーダーからパパリーダーへ！この場合は、しばらく任せろ！』

『パパリーダー、了解！ゆっくりしてな！』

『ふふふ。ああ、そうさせてもらおう。……オスカー各機へ！弾薬の補充を開始！第四小隊からだ！』

『『『『『了解！』』』』』

『アングレカムよりパパーリーダーへ。右翼に展開しているケベックより支援要請有り。ポイント9・8・4に制圧砲撃されたし』

『パパーリーダー、了解っ！任せな！…行くぞ！お前ら！』

『『『『了解ッ！』』』』

Side out 第二機甲部隊

アリアドネー騎士団が布陣している左翼陣地…。

Side 第三機甲部隊

第三機甲部隊の半数、第十八中隊ロメオが展開している左翼陣地は混戦していた。一度体制を整えるためにも敵の動きを一時的にでも止める必要が出てきた。

そこで第十四中隊のノベンバーリーダーが指揮所のアングレカムに支援砲撃を要請。アングレカムは第十五中隊のオスカーに支援砲撃を指示。オスカーリーダーが支援砲撃を実行した。

オスカーからの支援攻撃で砲撃された特殊散弾が敵の真ん前で炸裂、対魔法障壁弾をバラ撒いたことにより敵召喚魔、自動人形は前進を一時停止。百数十発の多弾頭ミサイルが敵前で分裂して数百発のミサイルが追い討ちをかけるように飛来し爆発、威力制圧された。

敵は多数を撃破される被害を受けるも直後に魔法障壁を展開。しかし、それは一瞬だけ拮抗、反発をするも対魔法障壁弾に結果、貫通される。そして魔法障壁を展開している間に敵は動きを止めたことで更なる被害をうけることになる。

第三機甲部隊のロメモリーダーは敵の前進が止まっている今が好機と判断。主より任された敵後方の攪乱任務に動き出した。

『ロメモリーダーよりロメモ全機へ！これより敵陣へ突撃、敵後方の攪乱任務に入る！第一小隊は私と来い！各機、小隊単位で行動せよ！』

『ケベックリーダーよりロメモリーダーへ！話は聞いた、右翼陣地の我々も同調して敵に突撃を仕掛ける！』

『ロメモリーダー、了解！任務の成功を祈る！』

『ふっ、そちらもな！』

今が好機と第三機甲部隊のロメモ隊が敵陣に突撃し任務を果たそうとしていた時、同じ頃に右翼陣地で好機を窺っていた第三機甲部隊のケベックリーダーから通信が入った。彼女達も支援攻撃を要請し実行した後だった。

そこで両翼部隊がバラバラに突撃して実行するよりも一斉に進行したほうが攪乱効果は高いとケベックリーダーは考えた。両者は同時進行することに同意、任務を開始する。

だが、その前にロメモリーダーは自分の陣地の責任者であるセラズに念話で連絡を取り次いだ。

【…セラス殿？こちらロメモリーダー！セラス殿！？…】

【…はい、セラスです！なんでしょう！？このっ！しっこい！…】

【…お忙しいところ申し訳ない！ただ今より私達は任務で敵陣深くに斬り込み後方から攪乱します！敵の動きが乱れたら攻勢に出てく  
ださい！…】

【…なっ！？危険過ぎます！それならば我々も一緒にします！…】

【…なりません！私達の任務は貴女方の護衛とサポートです！よっ  
てこれは私達の役目！お心遣いは無用です！…】

【…しかし！…】

【…ふふ、大丈夫です。我々は簡単には死にませんよ。葵様がお造  
りになった、この機体もありますから…】

【……っ…わかりました。私達、騎士団は攪乱後に敵陣が乱れたら  
一気に攻勢をかけます。…どうか、ご無事で…】

【…了解です。そちらもお気をつけて…】

突撃の許可も取り、ロメモリーダーは念話中に準備を整えた部隊  
に通信を開き号令をかける。

『ロメモ才全機、行動開始！』

『『『『了解！』』』』

第三機甲部隊は両翼共に活動を開始した。守勢的な戦闘から彼女達が本来の戦闘スタイルとする攻勢的な戦闘へ、と…。

彼女達を鍛えたのはシルビアだ。彼女は小柄な姿からは想像もできないほど過激に苛烈に攻める極攻勢の戦闘スタイルを旨としている。その子が鍛える二個中隊の部隊はどうなるか？結果は見えてこようと言うものだ。

全体的に満遍なく鍛えられているが戦闘スタイルはシルビアに似て攻勢的な戦闘を得意としている。つまり、電撃戦による突撃強襲戦闘だ。短時間での制圧戦闘は他の部隊にも負けないほどの威力がある。

その戦闘スタイルは高機動兵器イキシアに搭乗しても変わらない。いや、多彩な兵器を駆使できる分その傾向はますます高められている。

『我々の本領発揮だ！得意分野で遅れなどつたら全員、連帯責任だからな！わかったか！？』

『『『『り、了解…』』』』

『あゝあゝんっ！！？？』

『『『『了解しましたっ！！…！』』』』

『良し』

中央最前線(?)にて…。

Side 葵

暇だ…。暇すぎる…。

いや、突然こんなこと言われても困るのはわかってるんだけど、それでもわかかってほしいです。だって先程、俺が中央の敵を一掃したら増援とばかりに奥からワンサカと新たに召喚されたと思われる召喚魔が来て、ついでに両翼の敵が中央に流れ込んできたりと、また忙しくなるハズでした。

そう“ハズ”でした…。それなのに俺はここで暇を持て余してます。…いる場所？移動してませんよ。なんかファレノが「葵ちゃんは今ので疲れてるんだから、ここで休んでいてね」と言って中隊引き連れて俺を置いて行ってしまったのよ。

確かにファレノの言うとおり疲れてるよ？でも、それは書類仕事を徹夜でやったからで間違っても魔法を使ったからではない。まだまだ魔力的には余裕です。…眠いけど。

【…ファレノ？…ファレノ？…】

【…なーに、葵ちゃん！？今ちょっと忙しいんだけど…このーやっとなー！？…】

向こうは荒れてるなあ……。マジで最前線なんだから当たり前なんだけどさ。ていうか、もしかして戦況不利だったりする？ たったコシだけの戦力に？ ……まさか、な。ハハハ……。

【…いや、なんか、ごめん。でも俺も手伝ったほうがいいかな？ て思ってた…】

本当にごめん、戦闘中に念話なんかして……。でも、目の前に通信ウィンドウが開くよりはいいと思うのよ？ これでも一応、気を遣ってるんだから。目の前、塞がれて撃墜なんて冗談でも笑えないからね。

【…大丈夫 大丈夫 私達にまっかせなさい！ あっ、こちら！ 待てー！…】

本当に忙しそうだな……。念話中にも向こうは武器や魔法を振るってるんだから。…うん、わかってるよ？ 先程も言ったとおりファレノ達は最前線にいるんだから忙しいよね。んー…？ ここは、やつぱり…。

【…ねえ？ やつぱり俺も手伝おうか？…】

【…うう、大丈夫だもん。これくらい…】

ファレノの意地っ張りな返事に俺はちょっと苦笑してしまったよ。無理なんかしなくてもいいのにな？ 情報端末に送られてくる戦況をこっそり見てみるとやや膠着気味のようだ。決定打にかけてるんだね？ わかります。

「なあ？葵。あたしらも行こうぜ？ここで待ってるのって暇なんだよなあ」

「あー…そうだなあ。どうしよ？…んー？」

「ま〜ま〜 オリビエちゃんったら〜。動けないのが辛いなんて〜 堪え性がないんだから〜 …好きモノね〜」

「リ、リリリリエラは何の話してるんだよ！？あ、あたしは戦いたいただけよ！葵のせいで序盤しか暴れられなかったんだから… その、あの、ごによごによ…」

「すみませんです。ちょっと寝不足だったからってキレちゃってマジすみませんでした！でも後悔はない！最初は後悔したけどな！ファレノが励ましてくれたから、もう大丈夫だい！ん？オリビエの様子が…？」

「オリビエ？」

「どったのよ？オリビエったら…。顔、赤いよ？風邪ですかね？いやいや、さっきまでは元気にしてたし、それはないか。」

「あらあら〜 オリビエちゃんは何を考えているの〜？顔が赤いわよ〜？…つふふ〜」

「### #つ！！リエラッー！！てめえ！そこになおりやがれ！あたしが満足できるまでグリグリしてやる！！」

「米神をグリグリするヤツですね？わかります。…アレって痛いんだよねえ。でも、仮にリエラが俺のなんかやったら頭が潰れて、」

ものすごくスプラッタになるような予感が…。ガクブルガクブル…。

「あらあら〜 満足するまでつき合わせるなんて〜 …オリビエちゃんのエ・っ・ち」

「ウガァーッ！！！」

「きゃ〜〜っ」

二人とも元気だねえ？まあ仲がイイのはいいことだよ。たとえばソレが魔法の撃ち合いに発展していようと。そしてそこから中の浮き島にクレーターを作っていたとしても…。な、仲がイイのはいいことだよ。ハハハ、ハア…。

「うにゅ…。うる…さい…」

「あ、うるさくしてごめんね？」

…え？シルビアだよ。俺の膝枕で寝てたのよ。今居るここは空中だけだね！それも戦場近くのもの！飛行魔法って便利だよ…。本当に

「にゅう…大丈夫…夫。もう…行く…の？」

「んー？考え中だったよ。でも、行くところかな。また増えてきて大変そうだし」

「そう…。んー！ふう…。寝たから…元気…出た…。いつでも…行ける…よっ」

んー。寝起きで伸びをするシルビアが可愛いね！思わず撫でたく

なりました！いや、撫でますよ？ここで撫でずにいつ撫でるとい  
うのか！？すまん、取り乱した…。

「そっか、シルビアは偉いねえ。撫でてあげよう ほおら、なぐで  
なぐで」

「にゃ〜 うにゆう」

…ナニ？この可愛い生き物？マジでお持ち帰りしたいです。変な  
事考えるなよ？膝の上に乗せて撫でていただけだからな！今のシ  
ルビアってネコみたいなのよ。かーいーなー、もー

【…ファレノ？聞こえる？ファレノ？…】

【…聞こえてるよ！今度はどうしたの！？あつ、そっちに行ったよ  
！…】

【…うん、その…やっぱり俺もそっちに行くことにしたから！じゃ  
！そういうことで！まーたーねー！…】

【…えっ！？ちょー！！葵ちゃん！？どうい…】

念話を切る途中で何か聞こえた気がしたけど…木の精…もとい！  
気のせいだな！…では、そういうわけでオリビエ達を呼び戻さないと  
…。

「オリビエーッ！リビエラーッ！もう行くよー！戻ってきてー！」

「ぜー…はあ…あ、ああ…ぜー…今…はあ…戻る…よー…」

なに…これ？オリビエがものすっごい息切れしてる…。ドカドカと魔法を使ったり剣でクレーター作ったりしてたけど、どんな風にしたらそこまで息切れするのかな？いつも戦闘じゃ息切れなんかしたことはないのに…。

「うふふ〜 もう、オリビエちゃんったらムキになるんだから〜。仕方がないわね〜」

オリビエに比べてリエラは元気だよね？逃げていたのはリエラだからオリビエを振り回していたリエラ恐るべしって感じた。ここまでオリビエを疲れさせるなんて早々できるものじゃないよ。…てか何で？

「二人ともお疲れさん。…ところで何でオリビエは息が切れているのにリエラはそんなに元気なの？」

「うふふ〜 それは〜 …ヒ・ミ・ツよ〜」

「は、話したく、ない…。はあ…」

リエラさん、すっごい気になるんだけど…。まあ今はそれどころじゃないからいいか。オリビエも話したくないって言っているし、それじゃまあ行きますか。陽月を両手に握り、ラミエルを起動して準備良し！うし！

「それじゃ皆、行こうか？」

「おう！」「は〜い」「うん…」

転移魔法で駆けつけるなんて無茶なことしませんよ？飛行魔法で

最高速度出して文字どおり飛んで行きます。だいたい乱戦気味の戦場に転移なんてしたら大変だから。なぜかと言うと転移直後に目の前に敵が迫っていましたなんて冗談にもならないからね。

虚空瞬動とか長距離を一瞬で移動できる術はあるんだけどさ。なんていうの？様式美じゃないけどさ。外から見た感じ的に飛んでいったほうが良くね？…ウソですごめんませい。飛んでいったほうがカッコいいと思いました！

そんなことはどうでもいいか…。今はファレノ達が戦っている中央の最前線に行かないと。…でもまあ、そんなことを考えるまでもなく割りと近い位置で戦闘してるんだけどな。この距離なら転移イランわ…。飛行魔法で十分よ。

おっと？ファレノを目視にて発見！

「ハーン！ファレノ 暇だからお兄さん達も来ちゃったよ」

「っ！？葵ちゃん、ホントに来ちゃったの！？」

「…ファレノ。その反応は流石の俺でも傷付くよ…。ファレノは…俺のことキライなの？」

イヤ、マジで傷付くって主に俺のガラスのハートに…。ファレノの言い方だと俺がここに来ちゃいけないみたいに聞こえるよ。思わず俺のことをキライか？と聞いたのは間違いではないと思いたい。

「そんなことない！もちろん大好きなの！でも…葵ちゃん寝不足で疲れてるみたいだったから休んでもらいたかったの！」

おう??まさかの好感触…。思わず勘違いしてしまいそうです。それよりもファレノは寝不足で疲れていた俺の身体を気遣ってくれていたとは…。この子は…。

「ファレノ…。俺のことを気遣ってくれるとは、なんていい子なんだ！頭を撫でてあげよう！ほくら、なぐで なぐで」

「んんにゃん。…ハ！？今はそれどころじゃないの！敵のまえ…なの？」

ん？どつたの？敵？敵なら、ほら…。

「敵ならあつちでオリビエ達が嬉々として倒して回ってるよ？」

「ハーツハツハツハツ！数だけでお前ら、なつてないね！？それであたしを倒そうなんて千年早いんだよ！おといきな！！ハーツハツハツハツ！！！」

「ウフフゝ 私の霧は触れるモノ全てを灰燼に帰しますわよゝ 精々お逃げなさいなゝ ウフフフゝ 逃げられれば、ねゝ??フフ、フフフゝ」

「邪魔…！ジャマ…！じゃま…！じゃま…！ジャマ…！邪魔…！じゃま…！ジャマ…！邪魔…！じゃま…！邪魔…！じゃま…！邪魔…！じゃま…！ジャマ…！…鬱陶…しいっ…！！！」

「うわー…」

その気持ち、わかります。ファレノが感じた気持ちは俺も感じたことがあるから…。圧倒的だよなー？俺達っていらんないんじゃない？って感じです。コレを見ると自信とか、そういうのが一度崩れ去るのよ…。

俺は慣れたけどな！！

彼女達と仮に戦ったとして負けることはないとわかってはいるけど…。自力の魔力も強いけど、それだけじゃなくて、なんていうか戦い方が上手いのよ。

模擬戦した時の話しなんだけど、相手の恐怖をかきたてるような戦い方をしてくるから、もう怖いなの。流星は悪魔だけあります。あ、思い出しちゃった…。ガクブルガクブル…。

「ファレノ？ほら、俺達も行くよ」

「え？…あつ！はい！了解なの！！」

ファレノってオリビエ達の戦い方をマトモに見たのってコレが初めてだっけかな？あー…初めてかも。マジな戦いはファレノ達が新生してここ二百年ほどは小競り合い程度しかなかったし。

それでも実戦バリの模擬戦していたから組織としての体制は強い

けど実戦で大きな戦いは今回が初めてなのか……。若いなあ……。新生して二百年……。いや、百八十年だったか？百八十年だな。若い！いいねえ。おっと、それどころじゃないな。

アストラル・ライン  
：精神魔導回路、起動。  
パラレル・キャスター　スタート  
：並列詠唱、開始。  
クイック・キャスター　スタート  
：高速詠唱、開始。

：術式「紅き焰・連弾」を展開。

スベル・メモリ　コンプリート  
：術式展開、完了。  
セレクションラビットファイア  
：選択、速射型を形成。

：集束。：集束。：集束。

オイル・コンプリート  
：全工程、完了。  
スベル・リリース  
：術式・待機。

「準備完了つと。それじゃまあ……行こうか！」

脳内に術式のイメージが走る感覚って癖になるのよね。ゾクゾクとするとかワクワクするとか精神的に高揚してくる。こう……。これから戦うぞ！って感じるのよ。楽しくなってくるね！

それでは逝ってみよう！

「味方の皆さん避けてね……！」

「「「「「「えっ……!?…!?!?!??「「「「「「「「「「「総員退避

い……!?!?!?!?!?!「「「「

中央戦線の味方全部隊が驚愕した！！ファレノ達は即退避したけど…。

スベル・アウト  
…術式・解凍。

…速射魔法「フランベルジュ」、エクスパート発動！

「逝けやああああ！！コラアアアア！！！！！！」

ドドドッ！ドドドッ！…ドドドドドッ！「やつ！？ちよつとー」「ドドドッ！…ドドドッ！…ドドドッ！

ドドドッ！」「うわっ！なに！？」「ドドドッ！ドドドッ！ドドドッ！ドドドッ！ドドドッ！ドドドッ！…ドドドッ！

ドドドッ！ドドドッ！ドドドッ！ドドドッ！ドドドッ！…ドドドドドッ！「ちよ！？なんか来た！！」

発動したている時にナニやら巻き込まれた人達も見えた気がするけど…。見なかった方向で話しは進もう！俺は見えない！家族は警告に従って退避して巻き込まれてないからどうでもいい！うんっ！！

ん！？両翼の敵陣後方に乱れ有り！第三機甲部隊が任務を果たしたか…。ここで一気に攻勢に出たらしい帝国・アリアドネー両軍。中央の連合は…

「何だ今のは！？」「敵の攻撃か！？」「…っ！」「わからん！」「しかし、敵陣は乱れているぞ！！」「…っ！？」「今が好機か！？」「攻めるは今！！」「…！！！！」「おおおおお！！！！」

混乱に陥っていた…。

コレってもしかしくなくても俺のせいですか、ね？やってらんねーわー…。ちゃんと避けるように逝ったのに…違った、言ったのに避けないなんて。うちの連中は余裕で避けてるのに連合は鍛え方が足らんね！まったく！

連合の人達！ゴメン！！調子に乗りました！！でも後悔はない！楽しかったから！！

トゴゴゴゴゴッ…！ゴゴゴゴゴゴッ…！！！！

ん？ナニ？この音は…。お？アレか？ここから見える限りでは「墓守人の宮殿」がひび割れて…崩れそうになってる？…ナギのヤツがやっとなったのか。そうなるこそろそろ総仕上げだな…。

「連合の勇者諸君！！静まれ！！我らが英雄たるナギ・スプリングフィールドが敵の首領を討ち取った！！敵陣は乱れている！！今こそ攻勢に出る時だ！！行け！！力の限り戦うのだ！！」

…おお、おおおおおお！！！！！！！！

なんか、こんなことするのが慣れてきた自分があるな…。ハズいわー！！もう二度とやりたくない！！でも俺の立場上またやりそうだけ

ど...orz

んじゃま、俺も行きますか...。

Side out 葵

第十五話「魔法と機械と乱戦と」(後書き)

どうツスかね？読みやすいですかね？

一応パソコンで読むことを前提に書いてるからケータイは読みにくいかも…。

両方に読みやすい書き方知ってたら教えてほしいです。

それはともかくとして…。

新キャラがここにきて出てきちゃった…。

もはや俺のキャパシティがオーバーフローしそうです。

誰だコレ書いてるの!？

俺だ!!でも!俺の手が勝手に書いてるんです!!

俺のせいじゃない(おい!)

ーしばらくお待ちください

お見苦しいところをお見せしました。

今後とも「葵と精霊と九十九神と悪魔と…」を頑張って書いていきます。

「なのは」は読みやすいように書き直すかも(ナニ!?)。

ではでは!また次回!

第十六話「事後処理と救援と戦闘後と」(前書き)

感想&アドバイスをくださった方ありがとうございます！

作者は皆さんの応援によって支えられて頑張っています！  
では、続きをどうぞ！

## 第十六話「事後処理と救援と戦闘後と」

空中王宮最奥部「墓守人の宮殿」…。

Side ????

…ザザザ…ザツザツ…ザザザツ…ザザツ…ザーザー…。

「やあ、「千の呪文の男」…また会ったね。これで何度目だい？…僕達も、この半年で君達に随分、数を減らされてしまったよ」

言葉とは裏腹にその表情に変化はない。まるで全てがどうでもい  
いとでも思っているかのようだ。彼の周りにいる者達はそれぞれが  
決めていた敵となるナギ達を睨みつけている。

「先程もアルケミスト・ワン錬金術師に僕達の真上に大きな花火を貰ったところだよ…。  
本当に非常識だね、彼は…。イヤになる」

「へっ！アオイのヤツも粋なことをしゃがるじゃねえか！！はっは  
ーっ！」

「…いい加減、この辺りでケリにしよう」

彼の言葉を切っ掛けに一斉に散開して一対一の構図になる。

はげしいせんとうびょうしゃ (手抜きじゃないぞ!?)

そしてついに決着がついた。

「見事……。理不尽なまでの強さだ……」

「ハア…ハア…黄昏の姫御子は…どこだ？消える前に吐け」

「フ…フフフ…。まさか、君は…いまだに僕がすべての黒幕だと思っ  
っているのかい？」

「なん…だと？」

敵の言葉を聞きナギは一瞬の間、思考が僅かに停止してしまった。  
そして、それがいけなかった…。

ドギユウウーーンッ!!

突如として敵諸共ナギは第三者により身体を貫通するほどの魔法  
攻撃の一撃を浴びることになったのだ。

「っ!?!」「ナ!?!」

突然のことで驚く詠春とアル。

「ナギイ!?!」「誰だ!?!」

アルはナギを心配して普段になく大声で呼びかけ、ジャックは隠された僅かな気配に反応して咄嗟に身構える。しかし、次には強烈なプレッシャーを放つ存在が、その姿を現すことで意識を切り替えることになる。

「!?!」「いかんっ!」

ジャックは最大限の警戒を現れた魔法使いにしていた。そして今まで傍観していたゼクトは何かを感じ取り、すぐさま障壁魔法では最強の防御障壁を最大展開していた。他の面々も防御に入った。

ドッオオオオオオオンンッ!!!!!!!!!!

「ぬうっ!?!」

ジャックも両手を突き出して己が最強と誇る気合防御に全力を注いだ。しかし…。

バアンツ!!ビチャツ!!ビチャツ!!

「ぐっ!!バカな!!」

防御のために突き出していたジャックの両腕は敵の魔法攻撃に耐え切ることが出来なかった…。彼の両腕は無残にも肘から先が吹き飛び夥しい量の血液が傷口から噴出している。

「まさか…アレは…」「…っ!?!」

アルとジャックは敵の姿を目視にて確認した…。アルは“何か”を感じ取り、ジャックにいたっては、理解はできなくとも本能的に相手の性質を肌で感じ取ったようだ。両腕をなくして恐怖に震えている。

他の仲間達も無傷の者達は皆無だ。先までそれ相応の実力者達との死闘を辛うじて勝利し満身創痍だったのだ。そこに現れた敵の真なる首領…造物主ライフメーカーの登場。その敵から放たれた魔法攻撃は傷だらけのナギ達には荷が重すぎるほどに強力だったのだ。

「へっ…カハッ…」

ナギは先の一撃は辛うじて致命傷には至っていなかったようだ。相手を睨みつけこの状況で不敵に笑っている。しかし、致命傷ではないとはいえ重症なのは変わりない。今も呼吸は苦しそうに喘いでいる。出欠もジャックほどではないにしても大分出ている。

「ぐっ…。待てコラ！てめえ！！！」

ジャックはおのれを覆い尽くさんとしていた恐怖を、声を張り上げ敵に向かって叫ぶことで振り払おうとしていた。しかし、いくら強がろうとも恐怖は振り払えない。まだ、身体は小刻みに震えていた。

「任せな、ジャック…ハア…ハア…」

そんな時だ。ナギがジャックに声をかけたのは。自分だって身体を貫かれて満身創痍の癖に誰よりも強がっている。だが、その目の色はジャックと違って恐怖ではなく、戦う意志によって彩られてい

た。

「い、いけません、ナギ！その身体では…」

アルは、そんなナギの無茶を察して止めようとする。

「アル…お前の残りの魔力全部で俺の傷を治せ…クッ」

「し、しかし！そんな無茶な治療ではっ…」

アルはナギの言ったことに困惑している。たしかにそれならば傷の治療は一瞬で可能だろう。しかし、それは身体への負担が大きいのだ。そんな無茶な治療をしても長くは戦えないとアルの冷静な部分は考える。

「30分もてば十分だ…ハア…ハア…」

「ですがっ！…」

ナギは時間を指定した。

30分…。

たしかに無理をすればそれぐらいなら可能だ。…タイムリミットを過ぎた後を気にしなければ、だが。

「ふふ…よかるう。俺も行くぞ、ナギ…。皆の中では俺が一番、傷も浅い…」

「ハア…ハア…お師匠…」

「ゼクト！ たった二人では、無理です！」

そう、いくらゼクトほどの者が助太刀しようとも絶望的な戦力差は変わらない。あのバケモノには、それでも足りないと思われている。いや、どのような手段を用いようとも誰にもアレには決して勝てないと予想している。

故に必死になってナギを止めようとしているのだ。彼のことを普段から観察対象としていたアルは、こういう場面で決してナギは止まらないことを知ってはいても止めるために…。

「ここで奴を止められなければ、世界が無に帰すのじゃ。無理でも行くしかなかろう…ふう」

「ナギ！ 待て！ 奴はマズイ！ 奴は別物だ！ 死ぬぞっ！？ この場は態勢を立て直してだな…」

ゼクトは無茶でも、ここで行かねば後はないと言い。恐怖で冷や汗の止まらないジャックはナギに逃げるようにまくし立て始めた。

「バーカ。んな事してたら間に合わねえよ。らしくねえな、ジャック。俺は無敵の千の呪文サウザンドマスターの男だぜ？ 俺は勝つ！！ 任せとけ！！！」

「ナギイ！？」

走り去るナギ。…ナギは最後までナギだった。バカバカしいまでに真っ直ぐなバカな男の顔をしていた。だが、それは一つの希望も感じさせてくれるものだった。小さく、瞬きの間に消えてしまいうなほどだが、たしかな輝きを示しているように感じたのだった。

…ザザツ…ザザツ…ザー…。

「…クツ！アレは…マズイもんだった。一目見てわかった…。全身の細胞が叫んでたぜ。アレはヤバイ全力で逃げる！つてな…」

残されたジャック達は応急ではあるが怪我の治療をしていた。アルの魔力はナギに根こそぎ渡してしまったので“治療”<sup>クイラ</sup>すら、使えないような状況だったので包帯を巻いたり魔法薬での痛み止めが精々であったが。

「流石、最強の剣闘士ラカン。アレのマズさを肌で感じ取りましたか…」

アルはジャックの言うことを暗に肯定を以って返す。意味深なアルの言葉にジャックが聞き返そうとしたその時、今まで気絶していた詠春が意識を取り戻した。

「ぐっ…。ナ、ナギ…た、助けに行かねば…！」

「動いてはいけません、詠春！死んでいても、おかしくはない傷なのですよ」

「だが、あいつらだけでは、あの化け物には…！」

詠春の行動に待ったをかけるアル。それほどまでに詠春の身体はポロポロなのだ。実際、ジャックを除けばだが、一番傷が深いのは詠春だ。出血、骨折は言うに及ばず下手をすると内蔵にまで及んで

いるかもしれないのだ。

「オイッ、どついう事だ、アル？」

ジャックは中断していた問いをアルにぶつけた。アルは顔に澁面を作っている。よほど不味い状況なのか…とジャックは肌で感じ取った。…基本的にバカなので頭ではなく身体で考えているのだ。

「私の推測が正しければ…。アレを…あの化け物を倒す事は、この世界の誰にも不可能です」

「じゃあ、オメエ…。ナギの野郎も…っ！」

アルの回答を聞いたジャックは絶望と不安が表情を覆った。…が、その時、大きな揺れが起きた。

トゴゴゴゴゴッ……ゴゴ、ゴゴゴゴッゴゴゴゴッ……！！！！

…ザザッ…ザザザザッ…ザザッザザー…。

陽動部隊の展開している戦場…。

「何だ？」

左翼陣営で奮戦していたセラスは揺れによる大きな音を聞き取りナギ達が向かって行った方向を睨むように見ていた。



最後の力を振り絞るように込められた魔力が敵の魔法障壁と貫き、ついに打倒した。

…ザザツ…ザザツザザツ…ザザザツザー…ザザー…。

しかし…。

「武の英雄に未来を造ることはできぬ。貴様には結局、何も変えられまいよ…。だが…果たして…、自らに問うがよい。ヒトとは身を捨ててまで救うに足るものか？…人間は度し難い。英雄よ…貴様も我が2600年の絶望を知れ…。さらば、だ…」

ゼクトの姿で語られる言葉がナギに突き刺さる…。

「ぬっ…。グハツ…ハア…ハア…グ…。…お…お師匠…。…師匠…。…師匠おおおおおっ！！」

ナギの慟哭するかのような悲鳴が戦闘直後の空間に響き渡った…。

…ザザツ…ザザザザツ…ザー…ザザザー…。

空中王宮最奥部「墓守人の宮殿」外部…。

この場から見える限りだがナギが造物主を倒したのを確認できたジャックとアル…。

「…って…。オイオイオイ…。倒しちゃったぜ…??」

「…の、ようですね」

先程のシリアスなやり取りを返せと言いたくなるような呆れを感じるひと時だ。

「…フツ。かなわねえな、てめえにゃよ」

ジャックはアレに勝ってしまったナギに聞こえないとわかっていても、そう零さずにはいらなかった。そしてアルにナギから念話が届いた。

【…ル…ッ！聞こえ…か…アルッ！】

「やあ、ナギ。全く…驚かされますよ、貴方には。貴方は、いつも私の予測を…」

アルはナギを労おうとするがナギの様子がおかしい。酷く慌てているように感じる。

【姫子ちゃんが…いや、それよりっ、儀式だ！！親玉は倒したがヤロウ…。既に儀式を完成させちゃってたみたいだ…。マズイぞっ！】

「何ですって！？儀式を！？では…このままではっ！…っ！？」

世界が終わる…！

アルはナギの言った言葉を理解したのか、その表情に先までと違い絶望の色が見える。

「オイオイ！何だよ、この光球は！？ドンドンでかくなってるぞ！！

ジャックは理解はしていないが巨大化する光球を前にして不味い事態であることは感じているのだろう。大いに慌ててアルに聞いてくる。そして聞かれたアルは…。

「世界の始まりと終わりの魔法…！この力場が全地上を覆った時、世界は無に帰します…。いくら我々が最強を誇ろうとナギが自らを無敵と嘯こうと、こうなってしまうては我々に出来る事は何も…っ」

大きな絶望を前に半ば放心するようにして現状の説明を口にする。そしてアル自身が諦めの言葉を口にする前に、それを止める者の声が念話となって響き渡った。

【諦めるな！アルビレオ・イマ！！この愚か者が！！】

アリカ王女殿下だ…。

…ザザザザッ…ザザッ…ザザー…。

「アレは…メガロメセンブリア国際戦略艦隊旗艦！？」

【こちらスヴァンフヴィード艦長のリカード！助太刀するぜ！世界のピンチだ、敵も味方も関係ねえぜっ！！】

【そのとおりじゃー！】

テオドラ姫…。

「おお、アレは…。帝国軍北方艦隊！」

アルの顔に希望の色が戻ってきた。

「ハハ…。おてんば姫ちゃんかい」

ジャックも表情が引きつっているが笑っている。

【ハハハハッ！！皆の者！力を合わせて、あの光球を止めるのじやー！！】

【ハハッ、姫様！】

この時のテオドラ姫とタカミチの声が印象的だった…。

…ザ…ザザザッ…ザザッ…ザザー…。

メガロメセンブリア国際戦略艦隊旗艦「スヴァンフヴィード」  
艦橋…。

「こ、広域魔力減衰現象を確認！これまでに観測されたものの比ではありません！世界を呑み込む勢いです！」

「間に合わなかったのか…！」

オペレーターの報告を耳にしたガトウの表情は暗い…。

「彼等に限って、そんなハズは…。…っ!？」

タカミチと同じ少年探偵団のクルトは、そんなことはないと言いたいが現実に見ると儀式は発動しようとしているのは見間違いようがない。そして、クルトは“ある事”に思い立った…。そつと気付かれないように振り返るクルト。

「……………」

振り返った先には静かにその場に立ち事態を見ているリカード艦長…。

(…陛下っ…これは罫ではないのですか!?!…おそらくメガロメゼンブリア元老院直轄の…)

小声でアリカに今回の事態を警告する。しかし、アリカは…。

「よい、クルト…」

(しかしっ!アリカ様…!)

静かにこの状況を受け止め、ここでは多くを語ることはなかった。ただ一言、「よい」とだけを言うに留めた…。…そして、ついに命令を下す。

「全艦艇、光球を取り囲み押さえ込め!!魔導兵団、大規模反転封印術式展開!!全魔法世界の興廃、この一戦にあり!各員全力を尽

くせ！後はないぞー！！」

「ハッ！！！！」

「よろしいですね…？女王陛下」

ガトウは小さくアリカに確認を取る。いや、それしかできないのだ…。

ギシッ…ギギギッ…！

「…よろしいハズがつ…ないっ…！！」

同じように小さく答えたアリカ。しかし、ガトウのそれとは違い苦渋に満ちていた。

…ザザッ…ザ…ザザザッ…ザー…。

空中王宮最奥部「墓守人の宮殿」近く…。

光球から、なんとか自力で脱出して離れた位置にいたナギは…。

「へへっ…。流石は…姫さん。…結局、助けられちゃった…な」

そう静かに言葉を零した…。意識が遠のく…。無茶をし過ぎたようだ…。そのままナギは眠るようにして気絶した。

戦いは終わったのだ…。

…ザザッ…ザザッ…ザー…。

Side out ????

機動戦艦アングレカム艦内葵の執務室…。

薄暗い部屋に流れていた映像が終わり、明かりが灯った。

Side 葵

「…以上が空中王宮最奥部「墓守人の宮殿」内での戦闘記録です。現場では両者から放たれる魔力の乱流が起きたことで偵察機の大半が墜落しスクラップになり記録に破損がありました。ですが、できる限りで記録を復元したのがコレになります」

「そう…。アイリ、お疲れ様。報告はコレで終わりかな？」

いやー、ナギも十分にバケモノだね。結構！結構！そうやって順調に人外にハミダステイクンダヨネ！アイツが言うとおりのナギは人々が望む英雄の理想像をなぞっているねえ。なんだかなあ…。

いつかその理想の重みに潰されなければいいけど…。

それにしても所々のデータが破損していたけどゼクトさん辺りの映像データが破損していたのが一番、痛いな…。画面が砂嵐で肝心

のところ映ってないよorz

俺も原作知識の記憶がやや欠損しているから今のうちに取れる情報はできるだけ確保しておきたかったのに、それができないとは…。マジでしくじった…。イキシアに気をやり過ぎていたのかもな。初めてのロボットに興奮して周りが見えてなかったか…。ハア…。

「いえ…もう一つ報告があります。例のオスティアの王女殿下のことで報告なのですが…」

「ん？どつたの？」

「ハ…。どうやら自らの父王に対して半ばクーデターのようなカタチで事を起こしたようなのです。これが起きたのは今から三日前のことで…。迂闊でした…。情報を見逃すなど。書類仕事に気をとられて見逃してしまい…。申し訳ありません」

いや、書類仕事は俺の手伝いだから咎める気はないけど…。あの王女殿下…今は女王陛下か、彼女がクーデターを、ねえ…。

「発見が遅れたことを咎める気はないからいいとして。クーデターを起こした理由は？ただの親子喧嘩のわけがないでしょ？」

「はい、父王が“完全なる世界”の傀儡であることが調べて判明したとのことでした」

「傀儡、ねえ…。伝統と歴史あるオスティアの王が…。いや、だから、か…。相当、根深く入り込まれてるかもな」

「はい…。私達は帝国領内の炙り出しで手一杯でしたので各国まで

は…」

「ああ、いいの、いいの。気にしないで。皆、よくやってくれてるから。お陰で俺は帝国内で安心して過ごせるしね。感謝してる。ありがとね、アイリ」

「い、いえ。私達は当然のことをしているまでです！お気に止めるようなことは…」

「それでも感謝の気持ちはちゃんと言葉にしないと伝わらないよ。だから、ありがとね、アイリ」

「…はい、葵君」

あ、報告任務中なのに珍しく素のアイリに戻ってる…。かーいなー。いっつもこんなだったたら…。いや、勘違いするなよ？普段のアイリも、もちろん好きよ？当然さね。

「報告は以上だね？アイリはこのまま完全休息に入っていから」

「ありがとうございます。以降はファレノプシス指揮官が引き継ぎますので何かありましたら彼女に連絡してくださいますように」

「うん。じゃ、この後はゆっくり休んでねー？」

「はい、それでは失礼します。…あー…司令閣下？もう一つあるのですが」

「んー、なに？」

「いえ、不確かな情報なのですが先の戦闘の帰還途中にてアングレカムの観測計器がオスティア周辺の魔力が減衰していると出ていました。このまま減少が続けば危険域に到達する恐れが考えられます」

「…本当に観測されていたの？」

「はい。精密な観測はしていないので誤認かもしれませんが。もし、観測どおりならば今頃、オスティアは…」

ふう…。まいったね…。それが本当なら魔法の力で浮遊しているオスティアは墜ちる、かな…。テオは終戦記念の式典とかあるから残ってはいたけど、その式典は終わって今は帝国に帰還中。そっちの心配はない…。でもなあ…。

「アイリ、オスティアに無人機動兵器カフトムシって派遣してたっけ？」

「いえ、情報収集用に一無人偵察機ステルス仕様アカトンボを12機、常時交替で展開させていますが無人機動兵器カフトムシとなると流石に…」

「だよねー？因みに聞くけど…。今から救援用カフトムシに無人機動兵器を派遣するとしたら間に合いそう？」

「それは…距離・時間的にも厳しいかと思えます。近場を警戒に出ている無人機動兵器カフトムシを向かわせるとしても数的には足りず“焼け石に水”です」

「あーもー…。どうしたらいいかな？この場合…あつ、転移ポート使えばいいじゃん！」

「帝国のですか？しかし、それは…」

「いやいや！そうじゃなくって自前のがあるでしょ？」

「自前？…まさか。アングレカムの外部転移ポートを使用する気ですか？」

「That's right！」

「転移すればいいじゃない！俺一人行っても意味ないし！これなら大部隊を送り込めるよね！」

「ですが、アレは外部へ比較的短距離しか転移できません。出現距離も最大で1・000kmもあればいいほうです。元が外へ大質量の物を転移させることだけを目的に開発されたものですから」

「むー、それでも移動時間の短縮はできるよ？」

「それでも、です。救援を送るにしても今からでは到底、間に合いません」

「そうなんだよねえ。ここからだオステイアまでの距離は外部転移ポートで転移できる最大距離の数倍になるもんね。時間と距離の短縮にしかならんよ。それでも間に合わないけど…。」

「ハア…やっぱり、そうかあ。それじゃせめてオステイア市民の救援のために帝国に根回しして、いつでも動けるように関係各部署に働きかけるかな」

「はい、私も今からでは、それが妥当と判断します」

「ごめん、アイリ。休みはまた後にしてくれる？この件はアイリに一任したいんだ」

「ハッ！お任せください！それでは早速、任務に取り掛かります。先程も述べましたが何かあればファレノプシス指揮官のほうへお願いします」

「うん、ごめんね」

「ふふ、構いませんよ。では…」

アイリには負担かけてるなあ…。今度、皆で温泉へ慰安旅行にでも行くか。人数が多いからいくつかの組に分けてだけ…。それでも普段からの労いは大事だよな。

さて、とりあえずこの件はアイリに一任したから安心だね。俺は俺の仕事をするか…。

それにしても決戦後そのまま帝国領に戻ってきて知り合いの将校に借りてきた兵の返還と口頭での作戦報告と記録用の書類作成をするために記録映像を見てみたけど…。書類には記せないものがあるのかあるな…。

誤魔化すか…。書けないってのもあるけど知らないほうがいいこともあるさ。それに俺がここで報告書を提出しなくても全てとは言わなくても知っているかもしれないし。いや、知ってる…のか？はあ、ダメだ…わからんわ。

てか、よく考えんでも俺にはどうでもいいことではないかな…。つまりらんことを考えて損したわorz

適当に報告書に書いて提出するか。オステイアのことはいり任せてあるから後で考えよ。それに俺が戦闘後、時間をおかないでここ帝国まで戻ってきたのには別に理由があるんだ…。それは…。

「さて！書類仕事を押し付けれる準備をしないとなくく、なくくつづくつ…」

そう、こんなに早く戻ってきたのは決戦に遅れて参戦してきた帝国の奴らにこれでもか！と、もうやめて！と言うほどの量の書類を回してやるためだ！書類は俺でなくてもできる仕事に限るがな。

それでも3分の2近くになる11のエベレスト級書類爆弾を落とせる！フフフフ…。やってやるよ…。ある意味で俺の本当の戦いはここだ。この恨みはらさしておくべきか…。つてな！

怖いほどに暗い執念を燃やして作業中…！！

二時間後…。

フフ、フフフ…！やった…。ついにやり遂げたぞ…！これで明日からあいつらはしばらく徹夜で書類整理にかかりきりになる！ああ

…これでグツスリ…寝ら…れる…。

Side out 葵

葵の意識はそこで途切れた。机に突っ伏しながら眠る葵の表情は大きな仕事をやり遂げたかのように晴れやかな寝顔だった。

この後すぐにファレノが執務室を訪れて机で寝ている葵を見つけた。ファレノは苦笑を一つしたあと帝国城内に間借りしている葵の部屋へと運んだ。葵は決戦直前の願いどおり、ふかふかのベッドで眠ることになる。

後日、決戦に遅れて参加してきた帝国の者達が地獄へ叩き落とされたような悲鳴が聞こえることになったかは別の話したら別の話し…。

「工房」に隣接された「ドッグ」内…。

Side マリエール

私の前に白と青にカラーリングされたイクシアが立ち並んでいる。機体整備には整備班の皆が駆け回り作業に従事している。自動人形オート・マタや整備ロボットもイクシアを分解整備して問題点がないか検査している。

つむ、皆、無事に帰ってきたな。機体には大小と傷があるが、こ

れくらいなら問題ない。整備内容の許容範囲内だ。

「皆が無事に帰還できたことは喜ばしいことですな、ウーリ」

「うー？…うん。あるじがー、設計して、それを皆で形にしたから当然だよー」

「うむ？むむ…。そう…なのだろうか？」

それで絶対の自信を持つのはいかなものと考えのだが…。うむ…。

「なんで悩むのー？自分達で造ったモノなのに…。マリーは自信なかったのー？」

「そついうわけではありませんせぬ。ただ…」

自信はある。火の精霊である私だが今の主の下では錬鉄などの鍛冶に携わり、それなりのものを作れる腕は持っていると言え、自信を持つと言える。だが、今回のコレは…。

「ただ…なにー？」

「うむ。初の実戦に実験配備で即投入したので戦闘中に不具合が見つかるのではと考えていたのです」

実験配備…。実戦証明のない試験機だ。戦闘中に何が起こるか、わかったものではない。現実には絶対というモノはないのです。必ず、どこかで不具合が起こるものですから…。

「不具合ー？機体動作テストでー、取り除けるところは全部、取ったのにー？」

「それでも、なのですよ。実際に実戦投入して初めて見つかる不具合もあるのです」

「んー？…あー、言われてみればそうだねー。でもー、今回の機体に問題はなかったよねー？」

「今回は初の実験配備が実戦でしたから特に念入りにチェックして修正しましたからね。当然です」

まあ絶対というモノがなくても限りなくソレに近づけるため努力するというのは怠っていないわけではないですな。

そのために連日、機体動作チェックしてハード面は私と主が、ソフト面はウーリ、アンが修正したのですから。それはもう念入りに努力の賜物ですな…。

「うなー…。アレは大変だったよねー？開発時間が短かったから機体テストの予定もギリギリにスケジュール固めてさー」

「そうでしたな。あの時は、まるで時間に追われるようで大変でした…。ふふふ、だが、ウーリよ。主と共に作業した時間はとても充実していなかったか？」

大変ではあったが、その分、充実した日々だった、ふふふ。

「うにゅー。その質問はズルイよー？…でも、うん、楽しかったねー。あるじはイキシアを造ってる時とっても嬉しそうな顔してたも

んねー」

「うむ！本当にそうだったな。ふふ、まるで玩具を手にした子供のよう顔に輝かせていた。…アレは…良いな、うむ」

「うむ、良いな…。普段の優しい雰囲気の主も良いが、アレはアレで…ふふ、良いな。うむ。」

「マリー？なにがいのー？」

「はっ！？…なんでもない！なんでもないぞ！？アハ、アハハハア…。気にすることはない！」

「にゅー？？変なマリー」

「と、とにかく！今は今回、収集されたデータを分析、解析してまとめておくのです！お疲れの主のためにも！」

失態だ…。イキシアを前にした時の主を思い出していたら、つい深みにハマってしまった…。ウーリには気付かれてないようだが…。

「ん…？なにか誤魔化された気がするの…。気のせいかなー？」

気付かれたっ！？“あの”ウーリに！？いつも、こういうことを気にしない“あの”ウーリに！？いや！それよりも、まずはっ！

「ウーリッ！」

ガシッ！…！ギギ、ギギギギ…。

「あー…、わかったのー。だから、アイアンクローはやーめーてー…」

「よーしい…。では作業開始しますよ？少ししたらアンも手伝いに来てくれますから」

「…あー」

ふう…。なんとか誤魔化せたか…。ウーリには痛い思いをさせたかもしれないが、ここは諦めてもらおう。私の心の平穩のために…。

Side out マリエール

Side ウリエール

うな…。マリーのアイアンクローは痛かった…。ウーリ、悪いことしてないのに、なんでだろー？

「皆、お疲れー！手伝いに来たよ！」

「あ、アンだー。そっちもお疲れ様ー」

アンが来たー。働き者だよー。もう仕事は一線級で活躍できるよー。それに可愛いしー。私も家族が増えて嬉しいなー。

「おお、アン、よく来た。早速で悪いがウーリを手伝ってくれぬか

「？」

「ウーリの？あ、プログラム関係ね？はい、わかったよ」

「アン、こっこのこのOSと重力制御システムのここ、お願いしていい？」

アンに、この二つをお願いしたのは構造が複雑なものもあるけど、  
厳重なプロテクトもかけられてアンじゃないと時間がかかるの。  
機密保護ってヤツだね！。

「むむむ？これはまた…。手のかかるところだ…ね？」

「ごめんね？でも、そこまで手が回らなくて…」

「ああ、いいの、いいの！この部分は私が作った部分だもん。だから、私のほうが皆より早くできるよ、うん！」

本当にごめんね？でも、試作とはいえ最新鋭の兵器には変わらないから製作した本人にしてみらったほうが面倒な手順を踏まなくていいの！。

先にも考えてたけどプロテクトは堅く嚴重にしてるからアンの処理能力を活用しないと手間がかかるしね！。

「うん、ありがとね。それじゃ、がんばろうか？」

「はい！ファイター！おー！」

「おー…」

アンは元気だねー。この元気はどこから出てくるのかなー？こう  
いうのもキライじゃないけどねー。それじゃー、お仕事ー、お仕事  
ーっつ。

Side out ウリエール

アンは直接、コードを身体のコネクタに挿して作業をしていた。  
数々の空間ウィンドウが開いては消えてを凄まじい速さで繰り返し返さ  
れている。

「むー？ここは…こうで…あれ？むむむ？…ああ、ここが。じゃあ  
…こうすれば…やった よし、次つと…」

ウーリもアンには及ばないまでも端末を軽快に叩きながら作業を  
進めていく。

「…うなー？…こう…かなー？…おう？…あー、こうかー…あい、  
次ー…。…んん？あーい…」

作業は順調。ソフト面の分析、解析して修正プランをたてていく。

……。

……。

…。



第十六話「事後処理と救援と戦闘後と」(後書き)

はい！こうしてみました！

ナギとは別行動をしていた葵。

ナギ達を登場させるには、この方法が一番手ごろだと思ひまして…。

手抜きじゃないよ？ホントだよ？

この物語は葵が主役なんだから少しくらいなら…って気持ちで鼻唄  
してますが。

感想&評価は随時募集しています！

ではでは〜！

第十七話「経過報告と機体性能と休暇予定と」(前書き)

続きです。

はあ…。更新が遅々として進まないです。

週に一度更新できればいいほつってどついでどついでことかね？  
今欲しいもの…。

切実に文才が欲しいです！

では、どつぞ！

## 第十七話「経過報告と機体性能と休暇予定と」

王都オステイアのとある庭園…。

S i d e    ??? 3号機

…ザザツ…ザザツ…ザー…。

…ワァァァァァァァァァァーッ!!!!!!!!!!

国中から歓声が響き渡っていた。長い間続いていた大国間の戦争に終止符が打たれたのだ。民達の、その喜びようは嘗てないほどだ。そんな歓声が木霊する中、ナギはただ一人、誰もいない広場に立っていた。

「お師匠…」

そう零すナギの後ろから近づくと気配があった。

「…ここにいたか」

そこには表情に乏しいのはいつものことだが、いつになく厳しい表情をしたアリカだった。

「よお、姫さん。終わったな…全部」

「っ……………」

振り返りそう言ったナギの言葉に僅かに反応したアリカ。それは誰にも気付かれないほどに微かなもの。事実、ナギはアリカの態度を不思議そうにするが気付きもしない。ナギの言葉はまだ、続く、アリカに向けて…。

「どうしたよ？世界は平和になったつてのに…。何かあったか？いつもの仏頂面が余計ヒドイことになってんぞ。能面王女？」

「いや…」

「…んだよ。調子狂うな」

普段ならここだからかったナギがアリカにド突かれているのだが今回は、そうはならなかった。ナギは困惑している。流石にアリカがいつもと違うのには気付いたようだ。

「……………」

アリカはただただ沈黙を保つ…。おそらく自分自身、何を言っているのかわからないのだろう。表情は変化しないが内面では様々なことが渦巻いている。処理しきれていないのだ。

「まつ…なんだな？アンタの騎士役は、これで終わりだな。あんたに預けた俺の杖と翼、そろそろ返してもらおうか。堅苦しいのはキライでね…」

この台詞が切っ掛けとなったのかアリカに変化があった。

「っ…ナギッ…！」

背中を向けているナギに駆け寄っていったのだ。

「ん??…うっ!?!」

ナギはアリカが自分の名前を呼んだことに振り返ろうとするが、それはアリカ自身の手により阻止された。…ものすごい勢いで首を捻られていたがナギの首は大丈夫だろうか？

ぎゅっ…。

「お、おい！姫さん！？何だよ！…お？おお??」

ナギはアリカの突然の抱擁に一瞬慌てるが背中に感じる二つのモノがあり、そちらに意識をやってしまう。

「もう少し…。もう少しだけ…。私の傍にいてはくれぬか？」

「へっ!?!」

やーらかい二つの感触に意識をやっていたナギはアリカの言葉を聞いて驚いてしまう。今までにこんなことはなかっただけに余計にそう感じてしまうのかもしれない。

「もう少しだけ…」

今のアリカの声はか細い…。泣いているのか、震えても聞こえる。

「……………。あー…なんだ？もう少し、ギュッと抱きしめてくれるか？…胸のカタチがわかる」

「…？…っ！…っ！？」

アリカは何を言われたのか一瞬わからずについて思考が停止しかけたが、直ぐに理解したのかナギを…。

「めふんっ！」

アリカはナギを思いつきり殴りつけた…。

いい感じに吹っ飛ぶナギだが何事もなく無事に着地した…。それを見て呆れているアリカ…。

「…な、なんでもない。忘れるがよい」

今までの雰囲気はなんだったのか…。アリカは少し怒っているようだ。ナギと視線を合わせようとしてもしない。…いや、これは先程のことが恥ずかしかつただけなのか？

「オイオイ、姫さん。なんでもないってこたねえだろ？なんだよもう少しだけ傍に”て？んー…。あれ？まさか、アンタ…」

「っ……………」

「まさか俺にホレちまったとかー！？いや、そりゃ嬉しいけど色々マズくね？アンタ王族だし、よぴよんっ！？」

ナギの台詞が終わる前にアリカは殴った…。

「っ……………」

しかし、ナギは何事も無いかのように着地した。まだ余裕が見られる…。アリカは着地したナギを無言で睨むようにしている。…顔は赤いけど。

「照れるなつての。しっかし、どーすつかね？やっぱ、駆け落…ちえるのぶいるっ!？」

また、アリカはナギを殴った。しかも、今度は全力で…。

「…っ!」

今回ばかりは効いたようだ。ナギは着地すらできないでいるのだから。見事に顔面から地面に落ちていた。流石にアリカも今回はやり過ぎたと思わなくはないのか、ちらちらとナギのほうを見ている。…見ているだけで声はかけないけど。

「いてー…。マジいてー…。王家の魔力、込めんなよ…!」

「自業自得じゃ。…今は、なしじゃ、聞かなかったことにせよ。…主らに、これ以上迷惑はかけられぬ…!」

「あ、オイ!」

「…妾も、これからは1人で生きていくことになるうでな。少しの…。そう、少しの気の迷いじゃ。許せ…!」

「オイッ!待て!…姫さん!」

「…もう、姫ではない」

「ああ！？何言ってるんだ！待てっつの！…姫さんっ！！」

「…言わなかったか？妾は今や、この国の女王となった…。今後二度と姫と呼ぶことは許さぬ。もはや主などが気安く話しかけられる相手ではないのじゃ」

「なっ！？」

「ではな…」

「オイッ！姫さん！！待てっつて！！」

「触れるな！不埒者がっ！」

「聞けっつて！姫さん！！」

「姫ではないと言っつに…！！」

「おまつ…あっ！？」

「……………」

「…どうしたんだよ、姫さん。何があつた？ちゃんと話せよ。…俺の翼は、まだアンタのモンだぜ。アンタが望むなら、どこへだって連れてってやる。…たとえば、そこが世界の果てまで、だってな」

「……………」

「……………」

「……っ！」

「ゴギンッ！……ドギヤンッ！……！」

「コプッ！？もぎゃんっ！……！」

アリカは珍しくマジメに決めたと思われるナギに鋭い膝蹴りと豪快なアツパーで叩きのめした。

「なんだよ、マジメにやってやったのに……！」

「うるさい、お調子者が……。主はマジメなのか不真面目なのか、わからぬわ」

「ぜってえ何か隠してんだろ、姫さんよお。あんたオカシイもん。いきなり抱きつくとか全然キャラ違うし。よっぽど何か……！」

「……すぐにわかる」

「ああ？？？」

「……主こそ、何か隠しているのではないか？無理やり明るく振る舞っているのが丸わかりで動揺が見え見えじゃぞ？」

「ぬ……俺は……話したくない……！」

「妾も話したくないぞない」

「へー、気が合うな……って！オーイツ！……じゃあ俺も話すから話せよ、姫さん」

「話せば……。主は……」

「おうつ！何だよ！？」

「……。なんでもない」

「はああああ……。んだよ、ったく……」

アリカが立ち去っていくのをナギは釈然としない気持ちを抱えて見送ることになった。そしてナギもしばらくすると同じように仲間たちの元へ戻っていくのだった。

…ザザツ…ザツ…ブツツ…。

Side out ???3号機

ナギの立ち去った王都オスティアのとある庭園…。

Side ???5号機

…ザザツ…ザツ…ザー…。

ナギと別れてから数時間後。…一人になったアリカ、彼女が立つのは一つの小さな高台。ここからならオスティア本島のほとんどが見渡せる。一人静かに、この町の景色を焼き付けるかのようにして

いる……。その時、ふとアリカの脳裏にかすめるように……。

どこへだつて連れてってやる……。

「……………」

強く、何かに耐えるように表情が厳しいアリカ。思い出すのは去り際に聞いたナギの言葉……。

嬉しかった……。

そう、嬉しかったのだ……。表情の変化は少ないが、その顔にはたしかな喜びが見て取れる。そして、アリカの心の中に次々と思いつかぶのはナギとお忍びで町に繰り出した日の色鮮やかな風景……。その時に交わした一つの約束……。だが、……。

「案ずるな、ナギ……。妾にはもう、そなたの言葉だけで……十分なのじゃ」

「陛下っ！……！」

駆け寄ってくるのはガトウ、それに彼と行動を共にしていたクルト少年。

「……………」

彼らがここに……アリカの下に来たということとは……。

覚悟の時だ……。

ガトウが現在の報告を始める。

「時間です…！まもなく崩落の第一段階が…」

「進捗状況は？」

アリカが表面上は冷静に問い返す。しかし、握り締められた拳は色が白くなるほどに力が込められていた。わかっていたこととはいえ、この状況を作ったのは自分だ、という思いがアリカに自制を強制しているのだ。

「アスナ姫、封印直後から全艦艇が全力であたっっており現在37%…」

少ない…！足りない…！もう時間もない…！

「……………」

余りにも少な過ぎる！使える艦艇も足りない！そして何よりも時間が圧倒的に足りない！！

アリカの心には焦りの色が見える。だが、今の彼女にできることは…。必死に彼女は考える。今、自分には何ができるのか、と。

「陛下のお考えどおり式典と称し、この離宮島に全市民を誘導しております。情報統制により混乱もこれまでのところありませんが…崩落が始まれば、その限りでは…。全市民の救出は困難を極めるかと……………！！」

「……………っ！！…わかった…。妾も直接、指揮にあたる！！」

報告を続けているガトウの言葉にアリカは思考の海から引き戻された。そして今の自分にできること、それに思い至った。それは、一人でも多くの民達をこの窮地から救い出すこと、だった…。

…ザザッ…ザザッ…ブツッ…。

Side out ???5号機

とある浮遊島の一つ…。

Side ???7号機

…ザッ…ザザッ…ザー…。

ドドッ！ドッ！ドドドッ！！！！

突如として崩落し始めたオステイア。美しい外観の建物は崩落の衝撃で脆くも崩れ去っていくだけだった。何も知らない人々は、ただただ、この現状に悲鳴を上げて逃げ惑うのみだった。

「くそっ！何でだ！？飛ばねえぞ！！」

一人の民は崩落に巻き込まれまいと自前のホウキに跨り空へと飛び立とうとするも、飛行魔法が使えずにいる。魔法が発動しないのだ…。

「ホウキはダメだ！港への避難勧告が出てる！！」

「魔法障壁も効かねえ！どうなってやがる！？」

「皆さん、こちらへ！お守りします！」

「あんたらは！？」

「メガロメセンブリア重装兵団の者です！逃げ遅れたお子様！老人！そして病人に心当たりはありませんか！？一人残らず助ける、との厳命です！！」

「どういうことなんだ！？戦争は終わったんじゃないのかよ！？」

「ハッ…。確かに戦争は終わりました！しかし、申し上げにくいのですが…。っ…この都は…まもなく亡びます！！」

…ザザッ…ザザッ…ブツ…。

Side out ???7号機

指揮所艦内艦橋…。

Side ???9号機

…ブンツ…ザザツ…ザー…。

「空中王都の崩落、尚も拡大中！！本艦の周囲にも強力な魔力消失現象が発生しつつあります！！即席の対抗呪紋塗装装甲が、いつまで持つか…！！！」

「泣き言はいらぬ！！あと数時間持てば十分じゃ！！最も確に市民を救えるよう最大効率で船を回せ！！ただし！！捨てて良い命はない！！一人も救いもらすな！！これは厳命じゃ！！！」

「貧民島の避難作業が難航しています！このままでは！！！」

「理由は！？」

「町の構造が複雑なうえ…不法移民が多く、全住民の把握ができません…」

「……っ」

理由を理解したアリカは瞬間、思考するとすぐに判断して行動しようとする。

「わかった…。ここは任せる…！」

「陛下…！どこへ…？」

「貧民島は妾が直接赴き、島ごと不時着させる…！」

「なっ！？し、しかし…！」

「妾の魔法ならば、この魔力消失現象の中でも無効化されぬ!!」

「いけませんっ！女王陛下!!」

『ゴルアアーツ!!こんのバカ娘!!やい!聞いているのか!?アリカ!!てめえっ!!どどういうこった!コレは!?!』

「ナギ…。見てのとおりだ。世界を救う代償に自らの国を亡ぼした。…案ずるな、妾もいずれ遠からぬうちに地獄へ墜ちる」

『…っ!?なんで話さなかった!!この唐変木!!!』

「話しても無駄であろう?戦いしか能のない主が一人でなんの役に立つ?」

『くそっ!!…っ、今から、そっちに向かう!待っつけ、てめえ!!!』

「ここに、そなたの力はいらない!妾を助ける暇があるのなら避難民の頭上に落下する浮遊岩の破壊を要請する!!」

『そっ…』

「まだ崩落を始めていない地区を頼む!ただし、この魔力消失現象の中では、そなたも満足に飛べまい!」

『む…』

「我らの逃亡生活中に使用したボ口舟にも対抗呪紋処理を施してある!それを…」

『もう乗ってるよ！！！』

「ならば良い…。では、救出活動に全力を尽くした後、そなた達は、そのままここを去れ。二度と戻るな、最後の命令じゃ！」

『何っ！？そりゃどーゆー…』

「切るぞ。この通信の間にも民が死んでいく。通信終了…」

『オイッ！待て！！！』

「へ、陛下！！しばし、お待ちを！！…アルビレオ・イマ！聞いていますか！？クルトです！！」

「ハイ？何です？クルト君」

「アリカ様のおっしゃるとおりにするのが賢明かと思えます！もし戻れば…あなた方はメガロメセンブリアに拘束される可能性が高い！！今は身を隠してください！時が経てば事態は好転するはずですよ！とにかくコレが終わったら逃げてください！いいですね！？」

『わかりました。ナギのことはお任せを。…すみません、ナギ。これがアリカ様のお望みでもあると思いますので…』

『…っ！…』

「そなた達には世話になったな。…さらばじゃ」

『陛下も、御武運を』

『お、おい！待てよっ！！姫さ…』

「通信終了しました…」

「…妾はこれより直接、民の救出に向かう！！皆の者も奮励努力せよ…！」

「ハッ！！！！」「ハッ！！！！」

…ザッ…ザザザッ…ザー…。

Side out ???9号機

帝国城内、葵の執務室…。

Side 葵

「偵察機からの追加された監視映像は以上になります」

「…ねえ？偵察機3・5号機の監視映像って報告にいらさないじゃない？」  
「い？」

無駄と思う部分の監視映像も見ていたら、もう夜だよ…。何が悲しくて他人の恋愛をのぞき見ないとならんのかな？なんだかなあ…。俺も彼女欲しいわい！うばー…。

「…記録できるものはできうる限り記録した結果です。それに…」

「それに…なんでしょや？」

「…あのお二人が結ばれた時にコレを目の前で上映すれば“オモシロイ”のではないでしょうか？」

なるほど…。その考えはなかったな。ふむ、そういうことなら…  
くくくくくくく！

「…パーフェクトだ、アイリ。君は素晴らしいよ」

「感謝の極み。…それでは3・5号機の記録は別にして嚴重に保管しておきます」

「よろしく…で？冗談はここまでにしてオスティアに対して帝  
国からの救援は、どうなってるの？」

アイリに一任した手前、結果は気になるのよ。あの時は書類を押し付けることに意識を持っていかれてたからね。まあその仕事中の意識は半ば飛んでたよ…。ヒトの執念…ってやつですな。

終わったら寝ちゃってたけどな！起きたら貸し与えられてる部屋のベッドの上でした。後日聞いてみたらファレノが運んできてくれたらしいね。本当に感謝です。お陰でグッスリ眠られました。

「ハッ！時間がありませんでしたので根回しは十分ではありませんでした。が帝国軍を始め、関係各部署には可能な限りの救援物資と救出部隊を送るように通達されているはずですよ」

「そっか…ありがとう、アイリ。お疲れ様」

結構、無理をしたみたい、なのかな？戦争が終わり平和になったとはいえ他国へ部隊の派遣。その無理を通すとなると並大抵のことじゃないからな。

「いえ、役目を果たしたまでです。…ですが、お気持ちは嬉しく思います」

「うん、本当にありがとうね。それにしても“完全なる世界”の拠点襲撃で得た情報がこんなところで役に立ってよかった。人生、何が役に立つかわかんないものだねえ？」

いつか使えると思ってた情報をこんなに早く使うとは思わなかった。一度使ったらもう使えないけど、まあ俺としてはこの先、使う予定はなかったからちようどいいかな。

「それが当たり前です。“未だ来ず”と書いて未来と読むように時間に縛られている以上、仕方のないことです。それに未来に何があるのが、わかってしまったらつまらないではありませんか」

「ごめん、アイリ…この先の未来、少しだけ知ってます。まだ、そうなるとは確定してないけどな！介入するのはこの大戦中だけの予定だったし。そんなに時代の流れは変わらないはず…だよな！？ハア…。」

「そ、そうだねー。ところでナギ達に連絡は取ったんでしょ？なんだった？」

「ナギ君は女王陛下のことがありましたので“アルビレオ・イム幼女趣味変態”が今

後の予定を話してくれました」

「なんだかアルの名前が別の字に掻き消されていた気がする…」

「何だかスゴク小さな悪意を感じるな。まさか、アル…家族の誰かにネコミミスクミズを手にとり寄り寄りしてないだろうなあ？」

「気のせいですが、司令閣下。それで彼らはオスティアの救援を終了させ国内からの逃走を図った模様です。いずれこの帝国領にもお越しになられるのではないかと…」

「ふうん、じゃあその時にでも合流か？もう半年近くここに居座っちゃったから、そろそろ皆と合流しないと」

「長い間を別行動してたから忘れがちになるけど俺も一応「紅き翼」に数えられてるんだよな。いい加減この辺りで合流しないとならんよ。なにより俺が忘れてしまいそうだし！」

「了解しました。ではそのように各員、準備だけはさせておきます」

「うん、よろしく。これが終わったら皆はしばらく休みだから、もうひと頑張り、お願い」

「了解しました。では手筈を整えてきます。では」

アイリが部屋を出て行った。

んじゃま、俺も適当に準備しとこうかな…。

トントン。

ん？誰だ？こんな時間に…。

「葵ちゃん？私だよ。居るのー？」

「ファレノ？居るよー。開いてるから入って」

「はい。こんばんは。こんな時間だけどイキシアの報告なの、大丈夫かな？」

「おう？なかなか早いね。それでどんな感じかな？」

「まだ時間がかかるかと思ったのに皆、仕事早いよ。頼りになるな  
ーもー。」

「うん。まずは被害報告、各機体には大小の損傷があったけど奇跡的に大破・撃墜はないの。それと戦闘後にマリー達整備班が分解整備の検査で装甲・フレームは共にハード的な問題はなし。頑丈だね。詳しい報告書はコレね」

「ふう…大破なしか。よかった、ちゃんと鎧としての役目は果たしてくれたんだ…」

「マジでよかったわー…。なんか欠陥があったらどうしようかと心配だったんよね。報告書を見てみると致命傷を受けた機体はほぼ皆無と言っていい感じだし、万々歳だね。」

「アハツ そうだね。それで次にソフト面はウーリ、アンの報告で今回、収集された戦闘データからOSのバージョンアップ、姿勢制御システムや重力制御システムアビオニクスなどの更なる改善案を提示してきたの。あ、その作業予定表はこっちな」

「流石だな、あの二人。もう改善案を出してくるなんて」

今回の戦闘データを取り入れてマリー、ウーリ、アン、俺を中心に整備班の皆と新機体“イキシア？”の開発に入る。

今回の戦闘で対多数戦闘のデータが豊富に取れたからソレを元に戦闘稼働時間の更なる延長と装甲の強度強化・軽量化などなどやることはいっぱいですな！オラわくわくしてきたゾ

「まあ「工房」内の「ドッグ」で作業してたからなの。それも時空間操作を最大に設定してるから外の時間では短時間でできることだけだね。普通のヒトなら寿命がいくら合っても足りないの」

「ハハ、言われてみればそうだね。でも、俺達の強みはそこだと思っただけだね。限りなく長い時間があるから多少の無茶も効くん」

おうふ？よく考えてみると、たしかにある意味、裏技的方法だな。最大設定ってたしか外の1時間を中で96時間に伸ばすから…皆、頑張りすぎじゃね？何も、そこまでしてくれなくてもいいのに

身体壊したらどうするのよ？心配するでしょや。付きっ切りで看病するぞ、コラ？後で様子を見に行かないとな。

「ま、ね。それで最後に一つあるの。マリーから兵装関連で今回、

使用した各種兵装の性能評価ね」

「ああ、それは俺も気になってたんだよ。使えない武器ならまた設計から入らないとならないし。それでどんな感じだったの？」

イキシアは実弾系統のみを今回は装備させていたから物資の消費量がすごい何のorz

結構多めに弾薬とか用意したはずだったけど敵の数が予想以上だったこともあって、アツという間に無くなっていくんだよ…。まあチエーンガンとか連射機構のある兵器がほとんどだから弾薬の消費量がハンパなかったのもあるけどね。

ミサイルとかバンバン使ってたし…。多弾頭だから用意に手間がかかるんよ？…自動人形オートマタの皆さんが用意してくれるから俺が手間を感じることはないけどな！兵器は使ってナンボだし！

「うんとね。今回、使用された弾頭で“対魔法障壁弾”はテストどおり敵の障壁を貫通、無効化に成功したの。これは今現在、外で出回ってるモノよりも効果は1.2倍の威力が見られたの。ミサイル弾頭も同様だけど炸薬が強力すぎて、使いどころが難しいってあるの」

「とりあえずは成功か…。多弾頭ミサイルは弾頭の小型化と総弾数を増加することで威力や全体のバランスを調整、改良していくかな…。味方に吹き飛ばされたらたまないもんね」

対魔法障壁弾は俺達が手ずから作ったんだから他と違い威力が向上していて当たり前だって。なんせ製作に携わってるのは悪魔や精霊さんなんだから。魔法障壁なんて紙ですよ。相手のレベルにもよ

るけどな？

多分、あの白髪君には牽制程度にしか役に立たないんじゃないかな？それでも無抵抗で攻撃したら傷付くけど。

多弾頭ミサイルのほうは弾頭の炸薬の量を調整してみるか？いや、いつそのこと無人機に使われてるマイクロミサイルを流用するかな。元が小型ミサイルなんだから、ちよいと規格を変更すれば使えるっしょ。互換性も出てくるから生産の負担軽減にもなるし。

そうするか…。普通のミサイル弾頭は炸薬の量を調整すればいいだけなので悩みません。…寧ろ威力を上げるのもありよ？いや、上げるけどな。小型化と威力向上を目標に頑張りますよ！

てか、改良案を考えてたらファレノがジト眼で見てるんですけど…。いったい何よ？

「葵ちゃんみたいになの？」

「ファレノったら失礼だね…。俺が、いつ味方を吹き飛ばしたりしたんだよ？」

“味方を吹き飛ばす”って話しに引つかかってたんかい！？いくらなんでも俺は家族“には”被害は出さないよ！まったく！

「決戦の時に二回吹き飛ばしかけたの。一度目は決戦魔法“剣軍弾雨”の時、二度目は速射魔法“フランベルジュ”。一度目は何もなかったけど二度目の時は連合のオジ様達が軽傷を負ったの。これでも何もないとか言うつもりなの？」

「い、いや、まあ…それは避けきれない向こうの…。イエ、ゴメン  
ナサイ…」

アレは俺のせいじゃないと思うんだけどなあ…。ちゃんと避ける  
ようには警告したと思ったんだけど…。うん、したよね？警告。ア  
レで避けられないなんてあの時も思ったけど連合は鍛え方が足りん  
よ！ハア…。

でも、俺は謝りますよ？だってファレノがジト眼で見てるんだ  
もの…。俺は基本Sだから白い眼で見られて感じる趣味はないのよ。  
…ソフトSだからな！？ハードじゃない！言うなれば“ちょいS”  
だ！今の関係ないなorz

「わかればいいの。それで報告の続きなんだけど各種兵装の性能評  
価と改善、改良の案ができてるの」

「もう？そこまでできてるなんて…。今度、皆には完全休暇をあげ  
ないと」

マリーはもちろんだけど、ウーリ達にも二日ほど完全休暇あげな  
いと身体壊しそうで怖いな。人の身体より、よっぽど丈夫だけど、  
見ている俺が心配でなんのよ。

「あ、休暇にしてくれるなら葵ちゃんも一緒がいいの。温泉とか行  
きたいの！」

「俺も？んー…温泉かあ。わかった、時間が取れたら、その時にで  
も行けたら行こうか？」

温泉…。最近行ってないなあorz温泉行きたいよ！行くけどね

！それがいつになることか…。まあ折を見て旅行を計画して皆で行くと思いますかね。

「やった 約束したの！家族みんなで温泉なの！」

「まあ女王陛下のこともあるからちょっと先になりそうだけどね。でも、必ず行けるようにするよ」

「期待して待ってるの ー、これで報告は以上なの」

「はい、ご苦労さん。あっ、アイリから話しがいくと思うけど、しばらくしたらナギと合流するかもしれないから、準備だけはしておいてね？」

「了解なの。それじゃね」

それじゃま、俺も今後の準備でもしときますかね。

Side out 葵

第十七話「経過報告と機体性能と休暇予定と」(後書き)

今回は今までより会話文を多めにしてみました。

全体的に文体が軽めに見えるかも？

自分で見ている限りだから確信はないけど…。

ではでは！また、いつか！

第十八話「完成予定と合流と拳の一撃と」(前書き)

今回の話は自信ないわー…。

そのため感想が是非とも欲しいです。

俺の文章の更なる発展のために！

では、続きをどうぞ！

## 第十八話「完成予定と合流と拳の一撃と」

オスティアが墜ちてから一週間が経過した日…。

帝国城内、葵の執務室…。

Side 葵

チャオ！葵です！ナギ達がオスティアでの救出作業の後、半ば逃亡するようにして帝国まで来るようです。隠れながら進むから思ったより時間がかかったみたいだね。

それで何事もなければ今日の夕方には帝都に到着予定らしい。一応長旅の疲れを取る意味でも数日滞在して休んだら皆で旅に出るみたい。また放浪の旅ですね？わかりました。

因みに俺達もこの一週間、遊んでたわけじゃないよ？ちゃんと仕事してました。オスティアへ物資援助や救出部隊の派遣とかを継続して働きかけてたの。

でもねえ…。いざ、現地に部隊を派遣してみると既にメガロメセンブリアの部隊が展開、救助作業に従事してたのよ。でね？その現場責任者が帝国に開口一番なんて言ったと思う？

「帝国の復興援助は感謝するが、この場合はメガロメセンブリアの管轄だ。我々を手伝うのなら邪魔にならないように私の指示に従ってもらおう」

…だつてよ！！何様のつもりだよ！？ふざけんじやないつての！  
救援部隊からの報告書を読んでマジでキレかけたね…。コレが俺に  
関係ないことなら別にどうでもいいけど、今回の救出部隊を派遣す  
るように指示したのは俺だ。

関わってる以上無視はできんよ。そりやあム力って来るもんです  
よ、ええ。まあそのオスティア救援も、もう終わったことなんだけ  
ど…。でも、ね…。

フフ、フフフフフ…。

今頃、現地の指揮を執っていたヤツは自分の恥ずかしい過去が知  
れ渡っていて外も歩けない状態になってる…かも、ね？あくまでも  
“かも”です。現実になんてなっているかなんて軽い悪戯心でやった  
ことなんだから俺は知りませんね。ただの憂さ晴らしだし。

うん。そんなヤツのことなんてどうでもいいな。

それにしても、いくら帝国よりも国が近い位置にあるとしても連  
合の部隊展開が早すぎる。予め何らかの事情で配置していたとしか  
考えられん。何か陰謀の匂いがプンプンしますよ？昔も今もヒトは  
謀略が好きだねえ？やっけてられんわ…。

俺は関わらんがね？当然よ。面倒事はごめんだね！今の俺には優  
先すべきことがある。それは“機動戦艦アングレカム”の強化・改  
良して正式にロールアウトすることと新鋭機“イキシア？”の開発。  
この二つが俺を待ってるの。早く作ってくれ〜って語りかけてく  
んのよ！

一応まだ完成はしてないけど完成予定はこんな感じなんよ。

・機動戦艦「アングレカム」

全長516m全高217m全幅259m総重量54,860t

・搭載メインコンピュータ

形式番号X 01次世代電子精霊融合型統合制御AI「アン」

・外部装甲

高硬度複合精霊強装甲（攻撃吸収タイプ：吸収率65%）、応急補修用流体金属群

・内装

亜空間技術（内部空間の拡大化）、デイスティオンブロック（各部屋の個別防御）

カートリッジ式充填機構（吸収した魔力・エネルギーを保管する）

・主要動力機関

魔導式相転移機関大型4基（正・副）中型3基（予備）  
大型エネルギーカートリッジ10基

（これは魔導式相転移機関の起動値エネルギー確保のため。

カートリッジは自動交換による取替えが可能。

そして緊急時に短時間だが補助エネルギー源としても使える。

・防御兵器

魔導式デイスティオンフィールド（攻撃吸収タイプ：吸収率40%）

・防衛用兵器類

対空レーザーガトリング砲36基、妨害チャフ散布装置、対ジヤミング装置

・武器兵装

魔導式グラビティブラスト4門（重力波レンズ有り）

ミサイル発射口18基、大型ミサイル発射口8基

魔導式電磁投射砲18基、三連装高出力レーザー砲4基

・電子装備

電子制圧用重力波通信アンテナ4基

熱光学迷彩システム(Thermal Active Camouflage System)

超静音航行制御システム

・搭載機動兵器

通常無人兵器 最大搭載数17・460機

大型無人兵器 最大搭載数360機

人型高機動兵器 最大搭載数150機

武装のオンパレードなのはご愛嬌です。大きいな組織ではない個人の俺には足りないくらいだ。まあ俺が怖がりだから武装をできる限り増強したのだけだな！

船体はやや大きくなって重量も増加したけど問題ない。重力制御は完璧、魔法技術による重量軽減も施してるしな。装甲版を強化型という実験装備じゃなくて高硬度複合精霊強装甲(攻撃吸収タイプ: 吸収率65%)を正式装備した。

その装甲を破損された時には応急補修用流体金属群が亀裂に集まりカサブタのような役割をしてくれる。これでいざという時は安心だ。それにディスプレイも今度は装備した。これで内部破壊が起きても被害を最小に抑えられるね。

電子制圧用重力波通信アンテナを4基も装備したのはこれからの時代に合わせてだ。魔法世界も人工電子精霊を使うものだとしても旧世界のように機械化できるところはするだろう。そうなるなら今までのようにハッキングだけでは対処できなくなる可能性が出てくる。

そこで“覗き”や“書き換える”ではなく“強襲制圧”するのよ。

気付いた時には、もう遅い。機械は持ち主の手を離れてこちらの制御下に置くことができる。先手を取れば核すら怖くはないからね。

超静音航行制御システムは海中での航行に支障が出ないように音源を極力抑えるようにするの。“フルタ”でもTDDが使ってたよね？アレのマネですな。

無人偵察機アカトンボステルス仕様は無人偵察機トンボに試験的に熱光学迷彩処理を施した無人機だ。動力部の拡張のために尾の部分がやや肥大化したのが変わったところか。

機体色は赤ですよ？赤いと性能が3倍になるって言うけど…。俺は違うからな？赤いほうが迷彩には都合が良かったの。

大型無人兵器ムシつて項目にあるけど今後造る予定なのよ。無人機動兵器カブトが1・8mほどの大きさに対して大型無人機ヘラクレスは8・5mと4倍強の巨体。

もちろん武装も強化してるよ？マイクロミサイルは当然装備してる。発射口は倍だけど…。追加で12・7mm機関砲を2門装備。これはレーザー砲と交換可能。角も3本に増やしたさ。

ただ、この子はね？戦闘だけに使うわけじゃないのさ。腹部に小型格納庫があつてその中に交換用の大型常温超伝導バッテリーと弾薬を積んでるの。今度、開発されるイキシア？が戦地で可能な限り長く戦えるように支援機の開発をしたかったの。

で、話に出てきたイキシアの仕様は次のとおり…。

・正式名称MHT-07“イキシア？”(MHT=Multi pu

Response Human Tank

全高 7.65 m 総重量 1.91 t

完全装備時の総重量 2.12 { 2.72 t

・動力部

大型常温超伝導バッテリー × 2

稼働時間：8 時間

外付けバッテリー：+ 4 時間 || 12 時間

・外部装甲

複合精霊装甲

・骨格（基本フレーム）

オレイカルコス製骨格

・腕部武装

魔導式突撃砲、レーザーライフル魔導式光学砲

27 式精霊鋼短刀 × 2、ソード37 式精霊鋼刀 × 2

長距離支援制圧砲

・肩部武装

単装 5.56 mm チェーンガン、二連装 5.56 mm チェーンガ

ン、単装 36 mm ガトリング砲

二連装 36 mm ガトリング砲、単装レーザーガトリング砲、二連

装レーザーガトリング砲

単装レーザーキャノン、二連装レーザーキャノン、単装 120 m

m 砲、二連装 76 mm 砲

八連装多目的ミサイルポッド × 2、六連装多目的ミサイルポッド

× 3、精密広域レーダー

・オプション装備

DF 発生装置、DF 増幅装置、アンチジャミング装置、魔力増幅

感応機構

熱光学迷彩システム (Thermal Active Camo

Uflage System)

高性能反重力波推進機関 (飛行ユニット)：宙対応万能型

頑張ったよ…。全高8mは超えないようにするのにな。でも、そのかわり機体重量が増加しちゃったのorzとりあえず問題ない範囲だけで外部装甲とオプション装備を多く盛り込んだらこうなっちゃった。

でも、動力源を引き続き開発していたのもあって常温でも使用できる大型常温超伝導バッテリーが完成した。おかげで戦闘稼働時間を伸ばすこととマシンパワーの増強ができた。整備班と開発班の皆には感謝だね。

武装は各種、状況に合わせて選択できる。せつかく人型をしてるんだから装備は豊富のほうがいいよね。

その中でも俺がお勧めしたいのは二連装5.56mmチエーガンかな。他と比べて小口径ながらも装弾数の46.000発という多さや発射後の弾のバラつきで面制圧が可能なのがいいね。実弾系統には全て重力加速装置がついてるから貫通力にも優れているのよ。

悪魔や自動人形などの小型種、中型種にはこの口径のタイプでも十分に対処できる。…大型種になるとちょっと厳しいけど。そうなたら口径を大きくして二連装36mmガトリング砲なら大丈夫！破壊力は圧巻です。

二連装レーザーガトリング砲でもいいんだけど集弾性が高く面制圧よりもピンポイントな射撃に向いてるかな。エネルギー切れがない限り弾切れがないのは魅力だけだね。破壊力という点なら二連装レーザーキャノンがあるし。威力は小型艦載砲並ですよ。

小・中型種の大集団戦に向いてるのは二連装5.56mmチエー

ンガンでしょ。とりあえず弾をバラ撒いて敵の数を減らさないとね。二連装レーザーガトリング砲とセットで使えば強襲制圧部隊としては絶大な威力を発揮してくれるかも。

いや、夢が膨らむねえ。でも、問題があるのよ…。

実は資材の消費量が大変です。ハンパないって…。まあ資材はそこらのモノを錬金や「工場プラント」に放り込めばいいけど、今備蓄しているものまで使うからマジで大変。まだ余裕あるけど消費が追いつかなくなったら買えるものは買わないとイカンから資金的にも痛いし…orz

世知辛くて泣けてくるわあ…。それでも作るのはやめないけどな！！戦艦も新機体も全体の七割は完成してるんだから今更やめられんわい！

そういえばアングレカムとイキシア？を正式配備するに当たって部隊再編するみたいなことアイリに聞いたな…。今度、聞いてみよう！

ん？そろそろ、夕方の時間帯なんだけど…。ふうむ、ナギ達はまだ来ないのかなあ？

S i d e o u t 葵

帝国領の帝都内…。

S i d e    アイリス

私はナギ君達の到着時刻なので町の城門まで迎えに着てみた。これは葵君に余計な手間をかけることなく円滑に事を進めるためだ。

あの人達…特にナギ君とジャック・ラカンどバカがいるのだから油断はできない。必ず何かしらの問題を起こすに決まっている。今の帝都内で「紅き翼」の面々が問題を起こせばシワ寄せは確実に葵君に行く。

この前のオスティア援助の件で無理をしたので私達は敵を少なからず作ってしまったことから、しばらくは冷却期間が必要だった。今、問題を起こせばこそぞとばかりに何を言ってくるかわかったものではない。

嫌味程度ならばまだいいが無理難題を吹っかけてきたのなら対策を講じる必要が出てくる。事前に“排除”するというのはダメだ。戦争中ならば誤魔化しようはあるが直後とはいえ終戦してしまっている。

社会的に抹殺してもいいが…。余計に怨まれそうだから困る。あ、メガロ湾にでも沈めるか？連合の領域だ。下手な詮索はまた戦争につながりかねないことから政治取引に持ち込まれる可能性もある。

まあそれもこれもまだ想像の域だが。とにかくここでナギ君達一行を待つとするか。手ぶらで待つのも何か…。ふむ、その辺の店で飲み物でも買うとするか。ちょうど売店も近い、あそこで買うとしてよう。

「すまない、コーヒーを一つ、ホットでもらえるか？」

「はい！少々お待ちください！…どうぞ！3D（ドラクマ）になります！」

「うむ、たしかに。では、これを」

「ありがとうございます！またのお越しを！」

元の位置に戻りコーヒーを一口飲む。む？売店の割にはいい味をしているではないか…。あの店はチエックだな。そうしてしばらく待っているとここからでも目立つ一行が城門の外に見えてきた。

「皆さん。長旅、お疲れ様でした。帝都へようこそ。葵君は帝国城内にてお待ちです」

「貴女はたしか：アオイのご家族、アイリスさんでしたね。態々出迎えありがとうございます」

「いえ、<sup>アルビレオ・イマ</sup>幼女趣味変態を筆頭<sup>バカ</sup>にナギ君や<sup>どバカ</sup>ジャック・ラカンを野放しで出歩かせるのは危険：もと今は仮にも逃亡しているのですから皆さんの安全確保のために必要なことですから」

これは言ってみれば予防策です。下手に葵君のお手を煩わせることもありませんからね。…まあただの道案内の役目もありますが。

「…なにやら貴女から悪意のようなものを感じるのですが私の勘違いでしょうか？」

「さあ？どうでしょう？…何か身に覚えでもあるのですか？」

「さて？なんのことでしょう？私には何も覚えはありませんが…」

よくもシレつと言えますね？うちの若い子達にネコミミスクミズを着せようとしたのを忘れたとは言わせませんよ？それも着せる対象は皆、小柄な子ばかり…。もはや、溜め息しか出ませんね。

葵君がお望みならば着るのも吝かではありませんが…。って！わ、私は何を考えているのですか！？ふう…。

「ならば良いのではないですか？“何も”ないのですから…」

「ふふ、そうですね」

私の暗に含んだ言葉を聞いても幼女趣味変態アルビレオ・イマは動揺もせず普段の胡散臭い微笑を貼り付けた表情で言葉を返してきました。この夕又キめ…。

私は心の中でいつか、その化けの皮を剥いでやろうという誓いを新たにしてから葵君の下へ案内するために歩き出した。

「…では、皆さん。私のご案内します。逸れずに着いて来てくださ  
い」

「オレらは幼稚園児かってんだ…」

「何か？ジャック・ラカン…」

歩き始めるとジャック・ラカンが小声で何か言っていますね。私はまだ熱いコーヒーの入ったカップを見せつけるようにして聞いて

みます。

「な、なな何でもねえよ！」

「…そうですか」

あえて見せつけていたとはいえ勘がいいことですね。まだグダグダぬかすようならそれ相応の行動が取れたのに…。怨みはありませんが残念です。本当に…。

ここまで話していて気付いた。何か、いつも、うるさいのが足りない、と…。

「ところでアルビレオ・イマ、ナギ君はどうかしたのですか？随分と静かですが…」

「……………」

ナギ君に気付かれないように様子を見てみれば心ここにあらずと  
いった様子だ。彼が影を帯びても似合わない。バカのように…実際  
バカだけど。ともかくバカのように行動派なのに今の彼にはそれが  
ない。

「ええ、どうやらアリカ様のことと考え込まれているようなのです  
よ」

「…ほう？悩む必要がどこにあるというのやら…。もしもの時は助  
ければ良いだけではないですか？」

驚いた…。バカはバカなりに考えているのですね。…でも、その

考えは、いくら考えようと無駄なのに。愛おしい人に危機が訪れようというのなら何であれ全力で助けるだけなのですから…。バカです…あ、バカでした。

後悔する前に早く気付くといいいのですが…。

「ふふふ、ナギもあれでバカなりに考えているのですよ。…ですが時は止まってはくれません。ナギは…もちろん仲間の私達も、いずれ必ず動くことになるでしょう」

「その時は俺もナギと共に戦おう。前の決戦では最後に不覚を取ったが今度はそうはならん」

青山・詠春ですか。貴方は立派です。仲間のために最後まで戦おうとする仁義・忠義は私から見ても尊敬に値します。葵君の下に集った私達に通じるものがありますからね。…私達の場合は愛情が大部分を占めますが!!

「ふふふ。詠春、貴方の剣の腕に期待していますよ」

「任せてもらおう」

「その時はアイリスさん…貴女にもお手を貸してもらえますか？」

アルビレオ・イマ…なぜ、私に聞くのですか？私はどうもしません。私の存在は全て葵君と共にあるものなのですから。他のヒトに従う気もありませんし理由もありません。…ですが、まあ敢えて言うなら…。

「そう…ですね。葵君が手伝うのなら…とだけ言うておきます」

「ふふ。ええ、それで構いませんよ」

微笑みを顔に、はり付けて何を考えているのか、わからないアルビレオ・イマ。全てとまで言わないまでも私達が動く“理由”は見抜いているようだ。私達もあからさまに葵君のためにしか動かないのだからわからないほうがおかしいか…。

本当に喰えないヒトですね…。

S i d e o u t    アイリス

帝国城内、葵の執務室…。

S i d e    葵

そろそろ到着しても良いと思うのになあ。もしかしてナギのヤツ、柄にもなく落ち込んだのか？グズついているナギを引っ張ってきてるから皆、遅いんじゃないだろうな？ハハ、まさか、な。

トントン。

「ん？はい。開いてるよ」

「失礼します。皆さんが到着しましたので、お連れしました」

「おー？皆、長旅、お疲れさん！到着が遅れてたから心配して…ん？アル。ナギのヤツどつたのよ？ちよつち暗くない？」

「ふふ、先程もアイリスさんに同じようなことを聞かれましたよ。実は…」

コソコソとアルと密談ヨロシクして話して理由を聞いていたら、だんだん話しの内容に呆れてきた。

「はあ？そんなことで？…バツカらしい！落ち込むだけなら誰にだってできるだろうが…。要はこの後“どうするか？”だろうが！おい！聞いているのか！？ナギ！お前に言ってるんだぞ！！」

「おい！葵！言い過ぎだ！」

詠春！放せ！イタタタタツ！？そんな強い力で肩掴むんじゃねえよ！痛いだろうが！？俺はナギに話しがあるの！もう、こうなつたら…。

「詠春！うっさい！俺はこの腑抜けに話しがあるんだよ！…アイリ！」

「了解しました。詠春さん、すみません。今は葵君にお任せください」

「え？…あつ！こら！待つ！ガツ！？」

アイリが詠春を俺から引き剥がして間接を極めて取り押さえる。…どうでもいいけどアイリ？神鳴流の使い手たる詠春を取り押さえられるってすごいね？詠春も女性相手に本気を出せないのもあるけ

どぞ。

それにしても、詠春は時々過保護で困るな…。将来、子供ができたら過保護になりそうだよ。

…まあ何はともあれ、こういう時は誰かが言ってやらないとわからないんだよ！それにナギみたいな相手には挑発するくらいがちょうどいいくらいだ。元がバカだから悩むだけ無駄なんだ。だったら行動させたほうがいい。

なにより、俺がドンヨリした雰囲気になんて耐えられそうにないッ！

「…せえ…」

「あゝっ！？聞こえねえぞ！コラッ！！はっきり言えやッ！？」

あー！あー！聞こえませんねえ！？いつものバカ元気はどうした？…もつと声、出せよ？小僧。

「うるせえ！！って言うてんだよ！！」

バンッ！

受け止めた掌が痛ってえ…。でも、ここは我慢の子です。だが！ナギはブツ飛ばす！こいつを励ますとかあったがソレとは別問題…。ヤラれたらやり返す！常識でしょう？

「ハッ！腑抜けたお前の拳なんて羽毛よりも軽いんだよっ！ヤール！なーら！！…コレくらい！！ヤレやッ！！…」

ドゴンツー！！

「グハツ！！」

俺の拳がナギの顔面に綺麗に決まって壁際に吹き飛ばされる。

ああ、くそ！殴った拳が痛ってえな！俺は素手派じゃなくて武器派なんだよ！何でこんなことしてんのかね？俺は！ついナギの腑抜けた姿にイラツときて、やっちゃまったが…。仕方ない、もうちょっち発破かけとくか。

「アリカ陛下はお前と別れる前になんて言っていた！？…その思いまで裏切るのか？」

「それはっ…お前に何がわかるってんだ！？」

知らんな。俺は監視映像に合った内容から推測しただけだもん。だが、画面越しからでも伝わってくるアリカ陛下の民を想う、その心はウソじゃない。だが、ナギへの想いもウソじゃない。板挟みだつたんだろっさ。

王族たるものは人生の全てを賭して国と民を守るものだ。プライベートなんてあったものじゃない。自分の人生を自分の思いどおりにできないんだから。はあ、これだから権力つてのは面倒なんだ…。だが、第三者の視点から見たらそんなものだろう。

とりあえず、今はナギのヤツをどうにかせんとな…。

「ああ！“直接” は、わからないね！お前は何も言わないしな！そしてアリカ陛下の言葉は他の誰でもないお前だけにあてた言葉だ

「からな！」

「……」

言葉に詰まってんじゃねえよ、コラ。…何だよ？その顔は。言いたいことがあるなら言い返せ。視線を逸らすな。ちゃんと俺の眼を見る。珍しくマジメに相手してやってんだからよ？

「はあ…仕方ない、か。」

「そ・れ・か・ら！年長者からの忠告だ。覚えとけ！“考えている内に後悔するなら、その前に動け”だ！だいたいお前が物事を考える口かよ？普段のバカみたいな行動力はどこ逝ったんだ？ああ？？」

「……………」

…何、キョトンとした顔してんだよ？そんなに意外か？俺がお前に助言するのが。あー…まあ今まで散々挑発したから当然かね？面倒くせえヤツだな。

あ、よく考えたら…こいつ、初恋だったのか？アリカ陛下が初恋の相手かよ…orzどんだけハードルが高いんだよ…。俺には無理だわ。ナギ、ゴメン。お前はヘタレじゃないよ。ある意味で勇者だ。“Mな人”って意味じゃないったら意味じゃない。コレ本当。

…ん？もういい時間か。なんだかんだで時間くつたな。

「まあ、幸いにもまだ時間はあるようだ。ここに滞在している間、しっかりと頭冷やしな。…アイリ、もう放していいよ。皆を用意しておいた部屋に案内してくれる？」

「はい。…皆さん、お部屋にご案内します、こちらへ」

倒れていたナギは詠春が肩を貸して連れて行く。他の面々はその後を追って俺の執務室を出て行った。出て行く時に俺の顔を見て苦笑するのはどういうことだ？たしかに強引だった気がしないでもないが…アレくらいしとけば必ず立ち直るだろうさ。

後とはまあ時間だな。そう、時間はある…。オスティア崩落事件の事後処理もまだまだある。その時間は以って一月半から二ヶ月…。その時が来たらアリカ陛下は各国から世界に対しての生贄にされるだろう。

そうならないように帝国からも働きかけるように俺からも上層部に進言してみるが…。連合の…というよりメガロメセンブリア元老院議員には届かない願いだろうな。こんなことテオには話せないし、話したとしても第三皇女というだけでは立場がやや弱い。他国の問題だし。

帝国の救援部隊を送ったのはこうならなかったためにも、という考えで送ったのもあったのに。既にメガロメセンブリアの重装兵団が現場に居て災害現場の指揮を執っていた。後手後手だったな。これだから陰謀とか好きになれない。俺も似たようなことはしていたがまだ可愛いもんだ。

とりあえず執務室の椅子に腰掛けて一言…。

「まったく…。世話の焼けるヤツだな」

「ふふふ、私から見たら我が君も大分世話好きと見えますが？」

「姉上、まあそう言うな。我が君もなんだかんだと言いなながら心配なのだろうさ」

「ハオ、それにユエ…いつから？」

おう？皆、出て行つたと思つたのに新たな人物が発生したよ。それとハオ君、俺は世話好きではない！俺が本当に世話を焼くのは家族だけでござる！…まあそれはいいか。で？ハオ、ユエの二人はいつ来たのかね？

「ふむ。小僧が我が君に拳を振り上げた時には、もう扉の前に居りましたな」

「ハオが突入してこないなんて…。よく我慢したね？…どうしたの？ポンポン痛いのお薬なら直ぐにでも調合するよ？」

「失礼な！…私とて…私とて…その…無闇矢鱈と突撃はしませぬ！」

そうは言うけど今までのことを思い出したら…ねえ？必ずと言っていいほど出現してくるじゃないか。そんなハオのこと俺は好きだけどね。なんだか可愛いじゃない？子犬みたいで…でも、きつとドーベルマンの子犬だけだね。

とりあえずラミエルさん、録画スタート…。

「本当かなあ。…それでユエ、本当のところは？」

「ハ、私が羽交い絞めにしておりました…。引っ掻かれるわ暴れるわで、ソレはもう…」

「ユ、ユユユエツ!?裏切りおったな!我が君には内密にしてくれると約束したではないか!?!」

「はて?何のことやら…。それとも姉上は私に、我が君へ嘘を吐けと言われるつもりか?」

「うぐつ…。それは…んむっ…」

「かーいーなー 八オったら ちよつち目元がウルウルしてきました! 普段がキリツとした麗人だからギャップがスゴイ! からかうのが楽しいですよ? もう一度だけ言おう! かーいーなー 八オったら もう、大好き」

「何はともあれ、ユエ、お疲れ様…。後でお手入れしてあげるね?」

「はい、お願いします」

ユエも俺の意図が伝わったのか、ニコニコしている。軽くお仕置き代わりにからかうことにしたけど…。やってみたらやってみたで、コレはなかなか…。楽しいな? うん。もうちよつとだけからかわせてもらおうつと

「八オは…後でちよつち“お話し”しようか?」

「し、承知…。ぐすつ…」

おうふ!?泣きそう!?いかん、いかん!ここまで!ここまで!つ!…いや、うん。正直に話すと泣き顔の八オにゾクツと来ました。変な癖がつきそうになった…。このことはもちろん、秘密だけどな!

「……くつくくくつ。大丈夫だよ、ハオ。冗談だから。ちゃんとユエと一緒にお手入れさせてもらうよ」

本当にね。決戦直後は取って返して帝国に戻ってきたからそんな時間もなかったからな。一度念入りにお手入れしておかないと。

「なっ!?!?…酷うございませぬ、我が君! 私は気が気ではなかったのですぞ?」

「あつはつはつ! ごめん、ごめん。それとユエも冗談に付き合ってくれて、ありがとね」

「なに、構いませぬ。姉上の慌てふためく姿なぞ、最近は稀ですからな。ふふふ」

本当にありがと。おかげでいいモノが見られました。今回のハオの表情とかはラミエルさんで動画記録しておいた。今もしてるよ! しかも最高画質でね! これは思い出ファイルに保管です。プロテクトは完璧! 誰にも開けられないよ!

そう…アン以外は、な…orz

あの子、前からブラックボックス化が進んでたと思ったらね。今も更に進んでいて半精霊半機械の高次元量子コンピューター化したのよ…。もうどんなに暗号化した防壁だとしても紙クズの如く意味がないの…。

アンから逃れるなら完全にネット回線から物理的に切り離してスタンドアロン化するしか手がないと来たもんだ。

」の話し、今はいいな…。

「うぬぬ…。二人とも悪戯が過ぎます！私で遊んで楽しいのですか！？」

この子つたら今更、何を言ってるんだろ？腕をバタバタさせて…かーいーなー 流石にしつこいか…。でも、この世界は可愛いモノが正義だと思っただ。故に俺は言い続ける！可愛いは正義だ、と！それはともかく八才に最後の一手を…。

「え？何を言ってるの？楽しいよ」

「私もだよ、姉上？楽しませてもらった」

「ぐぬっ…ううう」

「コレに懲りたら騙そうとしないことだな。なあ？姉上」

「…うむ。すみませぬ、我が君」

素直に謝罪できるのは立派なことだと俺は思っただ。やっぱりウソはよくないよね？…いや、わかってるって。こんな小さなウソがどんなもんだとは思ってるよ。ただね…。ウソを吐くならもっと上手くしなくちゃね。

じゃないと今回のように反撃されちゃうし。反対にからかわれちゃうもん。八才は根が素直だから虚言や陰謀とかは向かないものね。簡単にわかつちやったよ。まあ今回のことを反省してより精進してくれることを期待するでしょう。

「いいよ、いいよ。冗談だし、気にしないで。はははっ」

「我が君！もう、笑わないでください！」

笑いますよ？楽しいもの。笑わなくてどうするの？

「はっはっはっ」

「我々が君々！」

ハ才達のおかげでナギをブツ飛ばした時の雰囲気を晴らすことができた。気分は上々だね。やはり家族は偉大だと思っこの瞬間ですな。ナギにも伝えるべきことは伝えだし、後はナギ次第だ。まああのナギなら大丈夫だろう。

ナギが復活したら絶対ケンカするだろうな……。い、今のうちに武装を用意しとこうかな？なは、なはははは……。はあ……。もう、寝よ……。

Side out 葵

## 第十八話「完成予定と合流と拳の一撃と」(後書き)

アイヤー……。ナギを殴って八才達とイチヤついて終わっちゃったの  
r z

目安として一万字前後の文字数を目標にしてるから大変です。

前半の兵器開発予定の影が薄くなりそう。

でも表のようなことはしたことがなかったから一度はしてみたかった。  
た。

今後はもうやらんと思う。面倒くさいものですなコレって。  
兵器とキャラの設定表を別で作って乗せることも考えてますけど…。

これっっているとと思います？

でもまあ一度、作ってみようかな。

今までのを整理する意味もありますしね。

第十九話「ナギとテオドラと部隊再編と」(前書き)

皆さん、どうも！

最近、書き手ではなくて読み手に戻りそうな鉄 桜です！

個性的な二次モノがいくつもあるので読みたくなり…読んでました

orz

ごめんなさい…。

「なのは」の加筆修正もしているんですが、コレがなかなか難しい！  
というより！自分の未熟振りを思い出させられてへこんでますorz  
気持ち的に恥ずかしいものがありますね！ハハハッ！…はあ。  
では続きです！どうぞぞ〜！

## 第十九話「ナギとテオドラと部隊再編と」

帝国城内、葵の執務室…。

Side 葵

翌日、朝食を食べて執務室で帝国を出るために色々した後任への引継ぎ準備をしていた時の話した。突然、ナギが一人で俺の執務室を訪ねてきた。

ガチャ！

「アオイ！いるか!？」

そして訪ねて来たナギの顔は昨日までの腑抜けた顔と違って何かを決意した者の顔になっていた。無駄じゃなかったみたいかな？こんな顔ができるようになったということは。まあ俺もナギが立ち直るのが、こんなに早いとは思わなかったけどな。

「バカナギが…。いるか？」じゃないだろ!？入る前にノックくらいらいしろつつうの!」

「ハハツ！わりい！わりい！でも、気にすんなくて!」

まったく…。心配したと思ったら直ぐにコレだ。やはり発破かけたのは正解だったようだな。随分と元気なもんじゃないの、このバカったらさ。…てかよう、俺のところは何しに来たわけよ?…もし

かして！？昨日の仕返しか！？

「…まあいいけど。で？…何しに来た？」

「ああ、それ、な。…昨日、お前にブン殴られてから色々考えたんだけど、な？お前に言われたように考えるのは性に合わねえから行動することにした…！」

…なに、この子？ものすごく元気なんですけど。お兄さん、このテンションついていけないです。とりあえず、今後の行動方針とどうか決意みたいなものを俺に報告に来たってだけでケンカをしに来たってわけじゃなさそうだ…。しかし、“行動”…ねえ？

「ほう？…それで？どう“行動”するつもりだ？」

「おう！とりあえず、あの姫さんの願いどおりに“謂われなき無辜の民達”ってヤツを皆、救ってみせるぜ！姫さんもソレを望んでるはずだからな！」

お、大雑把だな…、おい。救うたってどれくらいになることがわからんのに。その場で救ったから“はい、幸せ”とはいかない。後にはその人の生活がある。難民としての受け入れ先も見つけないといけない。

武力介入するよりも、よっぽど面倒くさいことになるのは目に見えている。この先、ナギの歩む道のりは辛く厳しい茨の道となることだろうな。それに付き合うかどうかは個人の自由だ。俺は…まあ少しくらいは付き合ってもいいかな？くらいかね。

なにはともあれ、今、俺の前にいるナギの顔には昨日までの腑抜

けた雰囲気はなくなっている。くっくっくっ、いい兆候だな。

「くっくっくっくっ！ナギ？今のお前はイイ顔をしているよ。小僧が一丁前に吼えられるようになったんだからなあ？はっはっはっはっはっ！」

「うるせえよ！笑うな！これでも俺なりに必死に考えてんだよ！…だから笑うなっつってんだろが！？」

このくらいでムキになりやがってまだまだ青いな。笑って受け入れるか受け流すくらいしてみろっての。だが、まあ、ナギがこういう反応をしてくるから俺はますます笑って、からかうんだけど、ね？面白いことは大好物です！

「これが笑わずにいられるか！…ナギよお、お前、“あいつ”に惚れてんだろ？んー？」

「バ！？ババ、バババカなことホザくんじゃねえ！！な、なんでオレがあんな姫さんなんかに…！」

「おんやー？俺は“あいつ”とは言ったが“姫さん”とは言ってないよ？？？んふふふ」

ちよつち揺さぶっただけでこの反応…。わっかりやすいなあ。この時の俺は思わず獲物たる目の前の赤ネズミナギを弄ぶ黒ネコアオイのような顔をしているだろうな。

「ッ！？ハ、ハンッ！なに言ってるのか、わ、わわからねえな！！」

腕組んで目線までを逸らしちゃって、まあ 顔が赤いぞ、コノ

ナギが狼狽しているのが手に取るようにわかるねえ　いつから意識してるのかはわからないが少なくとも、この時には少なからず自覚はしているようだ。

んー…ここはもうちょっち揺さぶってみるか？んふふふ

「誤魔化すんじゃないよ。ネタは拳がつてるんだぞあ？…：“どこへだって連れてってやる”だったか？んふふふ」

「な！？な、なんでアオイがそれをツ！？」

おう！？いい反応だな　やっぱりからかいがいのあるヤツだ！

「おっと！情報源は明かせないぞ？俺の信用に関わるからな。しかし、まあ…、この色ボケ小僧が！喜べ！俺の予想では、あつちもお前のこと満更でもなさそうじゃないか？んん？お前ら両想いだぞ？よかったな？ナギちゃん」

「く、くっそおおお…！言わせておけばああ…！」

「なんだ？嬉しくないのか？んん？？くくくっくっくっ！」

「グツ！んぐぐぐ…。ハンツ！」

ありやりや？口では勝てないとやっとわかったのか、ナギはダンマリを決め込んでしまったようだ。若いねえ。お兄さん、ニヤニヤ…もとい！ニコニコしちゃうじゃないか。これなら俺もナギ達と行動してたほうが、からかえて楽しかったかもしれんな。惜しいことをしたかな？ふふふ。

まあこの後は一通り俺がナギをからかうことで時間が過ぎてた。  
早いもんだね。もうお昼近いよ。

それで満足した後には俺はナギと…というよりその後のアルと詠春を交えての話し合いで二日後には帝都を出立し、今も続けている紛争地帯などに赴いて救援活動をする事になった。

…あ？ジャック？アイツは…わかるだろう？ナギ並みにバカなんだから“むつかしい話し”がわかるわけじゃないじゃん…。ナギと一緒に外出してもらったよ。帝都見物だからナギを案内もできるだろうしな。

それでナギの大雑把な方針をアル、詠春、俺の三人でより具体的な方針にしてんの。前まではゼクトもここに加わっていたけど…ねもういないし！負担が…俺らに負担が…orzあいつ！何、勝手に消えてんだよ！？ハア…。

俺の家族達の大半は「工房」内でアングレカムとイキシア？の正式配備の準備。それと今回、正式配備されることになった機動兵器の部隊が誕生したことで全体的に部隊の再編をするために奔走している。そのため人数は割けない。

アイリの話しでは再編は大きく分けて三つの部署になるらしい。“情報部”、“作戦部”、“司令部”の三つの部署だ。今まで曖昧にしていた役割を明確化して組織としての基盤を固めようというのだ。

今までのうちは傭兵＋マフィアの形態だったから丁度いいと言えば丁度いいんだけどね。無駄なところを省くことができるし。アイリも一度、再編したいみたいなのは前から言っただけだし。

大きな戦いはほとんどなかったし、皆が何でもこなせるから大雑把な編成でもこれまで十分だったのもあるの。でもまあ今回の再編はアイリにとっても渡りに船だったみたいだね。生き生きとしてたよ…。

これまで情報管理が面倒だったのもあるのかも。アンが加わってからは少し楽になったみたいだね。…なんか、今までごめん、アイリ。

とりあえず後任への引き継ぎ準備が終わったら一度テオのところへ報告に行かないと。…黙って出立したら何を言われるか、わかったものじゃないからな。

S i d e o u t 葵

帝国城内、第三皇女の自室…。

むう…暇じゃ…。

「完全なる世界」との最後の戦いを終わらせて数日。あの戦いの後、記念式典だの今回の功績を表彰するお披露目などとイベントが盛り沢山であったのに、その時のアオイときたら…。戦いが終わったらサツサとココ、帝国へとんぼ帰りしておった。

せつかく妾自ら記念の勲章を授与してやろうと考えていただけに楽しさは半減であったな。一応、今は妾の護衛であるうにアオイのヤツめ。あの時、擦れ違いざまに、あんなことを言いよってからに…。

「テオはまだ小さいんだから遅くならない内に帰ってくるんだよ？」

…など、と言っておったのじゃ！妾は子供ではなく“淑女”<sup>レディ</sup>じゃと普段から言っておるといいうのに未だに子ども扱いしおって…。それにアオイの言いつけを守ったわけではないのじゃが…断・じ・て守ったわけでなく！妾の意思で帰ってきたのじゃが！

アオイは何やら忙しいらしくほとんど会うことがなかったのじゃ…。いったい何をしておったのかのう？侍従から話を聞くにアオイは以前に比べて仕事のほうは一段落しておるようじゃし。時間は取れるはずなのじゃがの…。

まあ今それは良い、な。それよりもオステイアのことじゃ。何が原因かは知らぬが突然魔力消失現象が起きて浮遊島が墜ちたと耳にした。そしてさほど時間をあけずにオステイア崩落後、妾のいる帝

国からも彼の国へ救援部隊が物資を携えて出立したと聞いた。

妾は正直に思うに帝国が救援部隊を同盟国でもないオステイアに派遣するとは考えておらなんだ。この時アオイの手の者達が、なにやら暗躍しておったみたいじゃが…。まあ良いとその時は捨て置いたのじゃ。妾に不利になることはせぬじやろうからな。

しかし、今頃、アリカはどうしておるじやろうか？今はメガロメセンブリアの議会に出席してオステイア国民のために物資の提供や難民の受け入れ先を話し合っておる頃じやろうかの。

トントン。

ム????

「誰じゃ？」

「俺だ。入っていいかな？」

アオイ？こんな中途半端な時間に何用じゃ？夕食に誘うにしても、その時間には少し早いようじゃが…。何はともあれ…。

「良い。入ってくるのじゃ」

「こんにちは、テオ。ん？…なんだか随分久しぶりな気がするな」

「そのとおりじゃな。“随分”久しぶりなのじゃ」

戦いは終わったのに今まで何をしておったのじゃアオイは？遊んでくれないので寂しかったのじゃぞ？…そのような子供のようなこ

とは正直には言えぬから齒痒い思いをするのう。ふう…。

「…テオ、なんか言葉に棘がないか？」

「気のせいなのじゃ。…それで何用で参ったのじゃ？お主のことじや何かあったのじやろ？」

んー…気のせいかなあ。などと言ってアオイは首を捻って考えておるのじゃ。まったく…、妾の気持ちも知らんとはのう。今度、アオイに時間を作らせて妾の気が済むまで遊びに行くのも良いのうむ！今までの埋め合わせにそうするのじゃ！

…問題は“いつ”、“どう”やって誘うかじゃの おっと、いかん。葵の用件をまだ聞いておらんのだのじゃ。

「テオ、今この帝国にナギ達が来てるのは知ってるよね？」

「無論じゃ。城内に入るのじゃからソレくらい当に知っておる」

この城に入城するのじゃ、当然、セキュリティは万全を備えておる。誰がいるかなどの報告はすぐさま王族の者はもちろん警備の者達にも入るようになっておる。今回はアオイから事前に申請があったことから前もって皆知っておることになる。

この体制で、知らないものが居るとしたら、その場に居合わせなかった愚か者か、間抜けな侵入者以外にありえないのじゃ。それで「紅き翼」の者達がどうしたのじゃ？

「うん。それでな？俺もそろそろ仲間と合流しようと考えてな。今日は出立前の挨拶に来たわけだ」

「……………」

アオイが妾に理解できぬ…いや、理解したくないことを何か言っておる…。

「俺の後任への引継ぎはほとんど終わらせたから、とりあえず出立は二日後を予定してる」

「……………」

いや、もう理解しよう。アオイが言った“二日後には出立する”…。離れてしまう、のか？今先程まで妾はアオイと出かけることはできぬかと考えておったのに…。そのアオイは二日後には帝国を去ると言いおった。

なぜじゃ？

「テオには世話になったから…。テオ？聞いているか？テオ？」

「…な…じゃ…」

身体が震える…。声が震える…。頭の中がクラクラする…。自分では抑えようがない…。

「ん？なんだって？ゴメン、小さくて聞こえなかった。もう一度…」

「なぜじゃ！？と聞いてたのじゃ！！今のままで良いではないか！アオイは帝国に居れば良いのじゃ！なぜ居なくなる必要がある！？」

「い、いや、テオさん？ちよい落ち着けて。別に死に行くわけじゃないし、何も泣くことないって…」

…涙？アオイに言われて初めて妾は泣いていることに気が付いた。じゃが今はそのような瑣末事を気にしてはいられないのじゃ。“大切な人”が遠くへ行ってしまうかもしれない大事な時なのじゃから。

「じゃが！ここを出て行くのじゃろう！？」

「それは…。うん、そうなるのか、な？うん。でももう一生会えなくなるわけじゃない。ちゃんと連絡は取れるってば」

「じゃが！じゃが…。それでは…ますますアオイと会えなくなるでは、ないか…」

こんな時に限って妾は本音が零れてしまった。やはり“友達”、それも妾は“親友”と思っておるのじゃから会えなくなるのは寂しい。いつでもアオイに会えるように傍に居てほしい、と考えてしまふのじゃ。これは妾の我侭じゃとわかっておる。

…。  
じゃが、そうと理解しておっても気持ちに納得していないのじゃ

「は？…いやいやいやいや！待て待て待て待て！？…そんな事はないな！うん！」

何を一人で百面相しておるのじゃ？変なアオイじゃのう。

Side 葵

「じゃが！じゃが…。それでは…ますますアオイと会えなくなるでは、ないか…」

テオが放った言葉にしばし呆然としてしまったぜ。何これ？

「は？…いやいやいやいや！待て待て待て待て！？…そんな事はないな！うん！」

潤んだ眼で俺のことを見ているテオ。正直、可愛いと思いました！でも、残念！俺はもうちょっと成長した女性が好きなんです…！俺はロリじゃないんだ！ノーマルなんだ！…ちよいSだけどロリじゃないんだ…！

ん？？？

フツ…この雰囲気で勘違いしちまうところだったorzまだテオは十とちよいの歳じゃないか…。恋愛感情なんて早過ぎるよな。小学校高学年の年齢くらいか？まだ、早い早い ふう、焦って損した。落ち着いてテオを見てみるとまだ目線を逸らさずに俺を見ている。

最近は疎かにしていたとはいえ、よく遊び相手になっていたからここで別れることに寂しさを感じてるんだな。ん…俺もそこそこテオと付き合いがあるから離れるのは寂しいものを感じるな。なんつうか…お父さんな気分？

「アオイは…その…どうしても、行くのかの？」

むー…っ！？潤んだ目で上目使いするとはテオ…そんな高等テクニクをいつの間…！？少し小首を傾げるのもポイントが高いね！パーフェクトだ、テオ。君は可愛いよ。残念ながら今は恋愛対象外だけだな！父親みたいな感情はあるけど…。

「うん、準備はもう済ませてあるからね」

行くのか？と言われればまあ行くけどね。もう準備は済ませてるし。ナギ達の休憩がてらここに滞在してるだけで出立しようと思えばいつでもできるよ。

「そう、か。じゃが、まだ時間はあるのじゃろ？出立は二日後と言っておったのじゃ」

「うん？まあそうだけど…」

むむむ？？テオは何がしたいんだ？行くという意志は伝えたし、それが変わらないことも賢いテオなら俺の雰囲気から感じ取るだろう。マジで何がしたいんだ？

「ならば…ならば！明日は妾と一緒に過ごせぬか！？」

おお？？つまりアレか？今までのでは遊び足りないから明日は死ぬほど遊び倒してやるということ？そのために俺に一日時間を空ける、と…。俺の体力持つか…orz戦闘とはまた違った疲れが溜まるから大変なんだよな。

でも、これを逃すと次はいつテオと遊べるかわからんしな…。

「ん…。よし！いいよ どこに行こうか？」

「良いのか！？それなら、それなら！まずは…！」

俺の返事に満面の笑みなんか浮かべちゃって、可愛いなあ、もう先程までは泣き顔だったのがウソのようだよ。

アレコレと一日遊び倒すプランをテオが楽しそうに話すのを見て俺はテオのお誘いにいい返事ができたことに嬉しさと、明日のことを思い、笑顔になるのをこの時に感じた。出立まではテオの相手をするのも、まあいいかな、と思わせる時だったね。

Side out 葵

「工房」内、アイリスの執務室…。

Side アイリス

私は今、正式配備されるイキシア？とアングレカムを理由に組織の再編計画を作成している。今までは一中隊12人からなる十八の中隊をその時その時で役割を回していた。おかげで当初は情報や書類はごちゃごちゃで整理するのが大変だった。

いつか組織の効率化を図ろうと考えていただけに今回のことは私

にとつてまさに渡りに船だった。葵君にも再編案のことは話してある。再編に関する了解も取れた。後は実行するのみだ。

今考えてる案は、葵君にも少し話しているのだけど緊急時には移動要塞と言つてもいい機動戦艦「アングレカム」があることから、そこを後方支援（補給・整備・移動拠点）・命令を傳達する“司令部”。

情報を司る部署。見え難い脅威から皆を守る“情報部”。この部署の人達是对魔対人戦闘も八才とユエの姉妹が鍛えた者が多いことから拠点防衛のため警備隊や戦闘隊も兼任している。守勢を主とする部署ね。

逆に“作戦部”、こちらは攻勢を主とする部署。大規模な作戦任務を実行するための役割があるわ。因みに前回の戦闘でイキシアに搭乗して参加した者は皆この部署に配属される。搭乗経験者は今のところこの子達だけですからね。今後は私を含めた皆に訓練を義務付けるけど。

とりあえずは大まかに説明してこのようなところかしら。

普段は葵君の喫茶「クレイドル」の店員として働いたり、「工房」内や隣接された施設などの管理をして通常時は過ごすことになるわ。それでも集団生活とはいっても皆にだってプライベートはあるから細かいところまで縛るような生活は良くないわね。

何よりもどうせ縛られるなら葵君に…んんっ！ごほっごほっ！！  
なんでもないわ…。

つまり何が言いたいかという私達にだって生活があるの。元が

精霊や悪魔とはいってもね。今は葵君の手で新生した一生命体。ただ人とは違って“モノ”に対する欲望みたいなのが希薄というだけ。

私は元悪魔だから元精霊のことはわからないけど精神生命体だったというのもあるのかもしれない。“物”に対する欲望というものはよくわからないから。…ただ人の“魂の輝き”には惹かれるものを感じる。これは精霊も悪魔も変わることはないだろうなあ。

私は葵君の、その“魂の輝き”に惹かれて悪魔契約を結んだ。皆も似たようなものでしょうけどね。ふふふ 葵君は他の人とは違う“魂の輝き”をしていたもの。まるで誘蛾灯に誘われるように無条件に惹かれてしまった。

それで…しばらくしてから精魔奇兵に志願してこの姿に新生したのよね。その時の同期は18人いて今の指揮官クラスの皆なの。私達“1stタイプ”は後から新生した兵隊クラス216人の“2ndタイプ”以降からのヒトと比べても身体の創りは多少ヤンチャな仕様になっている。

なんと言うか…その、個性が強いと言うか…素直になった?…むー…葵君への好意がより顕著に現れるようになったの、よね。まあここにいる人達は大なり小なり好意を…って!?大しかないじゃないの!気が付いたらこんなに増えて…う、うううorz

まあ家族の彼女達はこの際です、良いとしましょう…。でも!他の人に私…達は負けないわ!葵君は家族の皆以外には誰にも渡しません!そう!葵君は私…達との生活を満喫しているのよ…!!

だいたい葵君は少しだけ無防備なところがあるのよ。グレート!!ブリッジ奪還作戦を境に、いつの間にか非公式のファンクラブなん

かができていたりしますし…。ミーハーなものとはいえ葵君へ好意を寄せる人達ですから、こればかりは排除できませんorz

当然、葵君には隠し通しました。情報が行かないようにしましたとも。葵君本人にそれとなく聞かれたこともありましたが必死に皆で誤魔化しとおしましたね。まあこの苦労もたかが数十年の辛抱です。このくらいの苦労など葵君の貞を守るためですから安いものです。

んん、だいぶ話しが逸れてしまいましたね。

トントン。

「アイリー？居るー？」

「ファレノか？扉は開いている。入れ」

何をしに来たというのだろうか？休憩の時間か何かか？

「ハイイ、アイリー！部隊再編のほうは順調かな？かな！？」

「な、なんだ？いきなり…。言われなくても再編案は順調に作成中だ。ほら」

ふう、何をしに来たかと思えば再編後のことが気になって来ただけか…。ファレノは戦闘能力・事務処理能力、共に優秀なのだが時々こつして落ち着きがなくなるのが玉に瑕だな。そんな彼女は今、私が渡した作成途中の再編案を流し読みしている。

「ふうん、どれどれ…？…ん？情報部と作戦部は2ndタイプ以降

の皆で部署を構築するの？私達1stタイプはどうするの？」

「彼女達も新生した今の身体に馴染んだこともあるが、まだ百数十年とはいえ、それなりに経験を積むこともできた。なにより彼女達だけでも十分に役目を果たすことができる、と信頼し判断した」

今までは一中隊12人+指揮官1人という編成の体制をとっていた。これは指導目的が多くあったことからの体制だ。今では彼女達も十分に経験を積みもう任務などを任せても安心できるレベルに達したと判断した。

機動兵器というものを配備する今では搭乗経験のある彼女達のほうが私達より乗りこなせているとも言える。まあイキシア？が正式配備されたら私達もしばらくは操縦訓練に入るのだからな。

「なるほどねー…。ふむふむ…おっ！？アイリ！アイリ！ここに“親衛隊”ってあるけど…これは！？」

突然、駆け寄ってきたファレノに何事かと思った時には、時既に遅く彼女の手は私の首の頸動脈をイイ感じに“極めていた”。

「ファ、ファレ…ノ？答え…る。答えるから…く、首から手を…放し…ガクッ」

放せ…放して、くれ…。あ、…ダメ…意識…が…まっし、ろ…に…。

「ああっアイリッ！？ごめん！大丈夫！？アイリ！お願い！死なないでーっ！…！」

「死んでないわよ!!!…まったく。んん、それで親衛隊についてだがな。今まで後輩を指導、指揮してきた私達1stタイプの18人からなる近衛隊のことだ。そこに記してあるように“司令部”付きとなるがな」

死ぬかと思つた…。視界一杯に真っ白な風景が見えたように感じただけ…。ファレノのことが少しだけ怖いと思つたのは間違いだと思いたくないわね。これからは気をつけて発言しないとね。また首を絞められたら溜まらないもの…。

「葵ちゃんの一番近くに居られるってことなの!?!」

「い、いや、一番かどうかはわからないが…他の人よりは近いのではないかと…というより顔が近いってファレノ…」

近いかどうかで言えば近いと思うわよ?親衛隊の名は伊達じゃないもの。…少し職権乱用な気がしないでもないけど。

「むー?…あれ?この書類に八才さんとか8人の名前がないんだけど…あ!?!よく見たら葵ちゃんの名前もないの!?!どうゆうことなの!?!これ!?!」

「だーかーらー!!首を絞めるんじゃないわよ!!!苦しいでしょうが!?!」

今度はなんとか反応できた…。だけど!?!なんなのこの力は!?!ものすごく強いんですけど!?!なんとか首が絞まるのは押さえてるけどファレノの指が僅かに食い込んできた。息苦しさを感じる。ええい!?!このっ!

「そんなことは、どうでもいいから答えるの！！私の葵ちゃんは！  
！？」

「どうでもいいって何よ！？というより葵君は貴女だけのじゃないわよ！？私の…んんっ！私達、皆のご主人様です！！」

“私の”発言だけは許せないわ！葵君は私のご主人様なの！…っ  
て言えたらいいけど。流石にそれは言えない。ライバルが多すぎる  
のもあるが私は皆も好きだからね。それに下手な発言をしようもの  
なら“襲われる”…。

いや、“襲われる”は正しくない“修正される”が正しい、な。  
うん…。水底に沈められたり、局地的な暴風に晒されたり、地獄の  
業火に炙られたり、飛んでくる剣の的にされたり、三段階で根源的  
な恐怖を感じられたり…と、まあ、色々とあるのよ。

「えー…」

「えー…」じゃないわよ、もう…。はあ…」

不満そうにしてるんじゃないわよ…。この子は怖くないのかしら  
？こういうところはある意味尊敬に値するものを感じるわね。誰に  
も聞かれてなければいいけど…。

「あー、溜め息、吐いてるの。葵ちゃんが溜め息、吐くと幸せが逃  
げるって言ってたよ？」

「…いいのよ。私は葵君の傍に居られれば幸せですから。…話しを  
戻すぞ？」

それは単なるジnkクスであって事実そうなるとは限らないわよ。だいたい言ったように私は葵君の傍に居られれば幸せなのよ。不満はないわ。それはまあ？二人きりでどこかに出かけたいと思わないでもないけど…。

とにかく話しが逸れたから戻さないと…。

「ん？…あー！？そうだよ！これはどういうことなの！？」

「どうもこうもないわよ…。葵君達9人は独立して動くだけよ。私達はそのサポートよ、サポート」

やることは今までと変わらない。葵君の敵で障害となる“モノ”を、その悉く排除するだけよ。変わったのは役割分担が明確化しただけですもの。…まあ親衛隊所属予定の私達は葵君直属になるのよね。

今まで1stタイプでは私とファレノだけが葵君直属だったのに、これからは皆が来るのよね…。何か問題が起きる前に予め言い含めておく必要があるわ。先程も考えてはいたけど何で私達1stタイプにはヤンチャな子が多いのかしらね…。能力が高いのが救いだけど…。

「えー！？じゃ、じゃあ葵ちゃんはどこに所属するの！？」

「一応、葵君を含めて皆さんは司令部に所属予定ではあるけどね。…ハ才さん達とは違って私達は情報収集とか大規模な戦闘でもない限り出勤はないと思うわよ？」

「うな…。離ればなれ、なの…。ううう…」

「わー…。すっごい落ち込みようだわ…。ファレノ落着きなさいって、いつもどおりと変わらないわよ。部隊再編っていつでも通常時は変わらず「工房」なんかの魔法球の管理とか喫茶店のお手伝いなんだから」

何もそんな床に崩れ落ちて突っ伏すほど落ち込まないでもいいでしょうに…。ファレノは大げさなのよ。通常の時はいつもとどおりなのだから気にする必要はあまりないわよ。

「ううう、でもー…」

「葵君もファレノが泣いてたら心配するわよ？それでもいいの？」

泣きそうにならないでよ…。私が泣かせたみたいじゃないのよ。それにファレノが泣いているところを葵君に見られたら間違いない心配させちゃうでしょう？ファレノも悲しませたくないでしょう？泣くより笑っていたほうが幸せよ。

「うう、それはダメなの。心配させるのはダメ、なの」

「はいはい。それじゃ元気出していきましょう。ね？」

「うんー！」

ファレノもわかってくれたようね。泣いた子がもう笑ったではないけどいい笑顔になってるわ。葵君じゃないけどやっぱり家族には笑顔でいてほしいものね。

それから後はファレノも交えて編成案を考えていた。ファレノは

隙あれば葵君の傍に自分を配置しようとするから目が離せない。だけれど二人でワイワイと相談しながら進めるのは楽しいものね。

S i d e o u t    アイリス

そしてその日は、そのまま時間が過ぎていった。

## 第十九話「ナギとテオドラと部隊再編と」(後書き)

どうですかね？ナギはちょい無理やりかな？と思っただのですが…。  
多少、無理矢理でも話しが進まないいで作者の強権わがままを発動！  
まあ、何とかなるでしょう、ええ…。

え？テオドラ？…作者の印象です。友達で押して行こうかと…。  
流石に幼女に手を出すのは如何なものかと作者は思っつのですよ。

ダメです！YES！ロリータ！NO！タッチ！の精神です！

…でも、愛でる分には文句は言いません、ええ。

今後もアイリスみたいに1stタイプからは新キャラ(名前有り)  
が出てくる予感…。

作者自身が、なぜか戦線恐々としています。

キャラの人気が無ければ名前だけ出て以降は出なくなる可能性も！？

ということも有り得るかも…。怖いですねえ？

ではでは！評価&感想は随時受け付けてます！  
今回はこの辺りで、チャオ！

第二十話「紛争と警戒と優しさ」と「前書き」

更新し忘れてた…。

申し訳ないです。すっかり更新していたものと勘違いしてました。

「なのは」の加筆修正が思うように進展してなくてこちらが疎かになってしまいました。

もう一度、すまんこつてす！

では、続きでつす

## 第二十話「紛争と警戒と優しさ」

とある町の紛争地帯…。

Side 葵

俺達が帝国を出立してから3週間が過ぎた。今は、つい先程まで戦闘のあった場所に立っている。所々で黒煙が立ち上っていたりする。あー…角の商店らしい建物なんか綺麗に崩壊されてらっしゃいますよ？うう、不憫よのお…。

「この主人は、これからどうやって生活していくのかね？…というか、どこ行っただんかな？避難場所に誘導されたのか？それに、これをやったのって実は…。

「このバカナギが！加減して戦えって言っただろうが！どうすんだよ！これ！？ここを復旧するの“俺達”なんだぞ！？」

「だーっ！わかるかったっつってるだろ！…いつまでも、うっさい！」

こいつなんだわ…。それにここだけじゃなくて俺達の居るここから奥の建物を三軒続いてブチ抜いてくれたりしてくれやがったのさ…。まあナギ以外にもアルやジャック、敵の魔法の被害もあるから全てをこいつのせいにするつもりは無いけどな。

あ？詠春？あいつが町を気にしないで好き勝手に暴れられる性格だと思うか？それに詠春は神鳴流剣士だ。退魔剣士としての戦闘ス

タイルがそうさせるのか知らないが対人戦が滅法強い…。町の被害よりも人的被害のほうが高いんじゃないかね？主に敵の…な。

でもさ、でもさ？聞いてくれよ。…この町に、しばらく残って復旧活動をするのって俺ら“ファミリー”なんですか？ハハ、ハハハ…鬱だわ…orz総被害額がどれくらいのものになるのか…。

紛争が起こった、ここは三つの武装勢力が鬨ぎ合っている小さな町だ。それぞれの勢力がゲリラ活動をしては、町の住人に甚大な被害を与えていた。そんな危険なところ“だった”。…そう“だった”だ。最早、過去形ですよ…。

今、その各勢力の人員の、ほとんどが俺の目の前に積みあがって山のようになっている。重軽傷者多数だが幸いにも死者はいないようだ。怪我人には治療を施した後に拘束しているし暴れる者は問答無用で昏倒してもらった。

非殺傷装備の無人機達はせつせと倒した武装勢力の人達を運んできてまた新しい山を築いている。あ、山が3つ目に突入した…。俺はコレを見て溜め息だ。まさか、こんなにいたとはねえ。この地域の後処理は俺が担当しているから億劫だな。

まあ何よりも億劫なのが破壊された町のことなんだけど…ねorz小さな町とはいっても人口およそ十数万人。町もそれ相応の大きさだ。一部の区画なんかは先程も挙げたものも合わせて建物が崩壊している。ここを復旧するのに時間も金もどれくらいかかることか…。

復興の人員は現地で力の有り余ってるヤツらを採用すればいい。問題は資金だ…国や地元有力者からの資金援助、それに一般市民か

らの募金などが資金源としてあるが全てを賄うには全然足りないのだ。しかも復興地域はここだけじゃない。まだまだある。

それも、これからこういう被災地というか被害を受けた町などが増えること請け合いよ？もういや…。書類なんか、もう見たくないわあ…。アルや詠春なんかも手伝ってくればいいのに数日もすると旅立つナギに付いて行って逃げるんよ？

どう思うよ、これ？ヒドクね？俺に恨みでもあるんかね？あるのか？アイツら…。ううう、俺も「紅き翼」やめようかな…。今後、アリカ陛下を救出したら、それを機に抜けて、また喫茶店やるか…。そろそろ戦うのも飽きてきたしなあ…。手伝いが欲しいなあ…。

はあ、こういう事務処理が得意なガトウとクルトはアリカ陛下に付っきりのようだしな。その陛下も色々な交渉を各国相手にしている。国、墜ちちゃったものねえ…。残された国民のこともあるから必死です。だが交渉の内容は思わしくないのが本当のところだね。

欲望と陰謀が渦巻くは、この世界の天高くに位置する伏魔殿<sup>ふくまでん</sup>也、つてな。

マジでやってらんね…。毎度、思うけど人の欲望には際限というものが無い。まあ俺も欲望はあるけどね？それでも元老院のやつらほどじゃないがな。それはまあともかくとして今はこの場の処理をするか…。

「はああああああ…。これだから戦闘バカは…」

皆…今回、俺は決めたことがある…。それはな？これからナギには市街地での戦闘は任せない！ということだ！！金がかかって仕方

ないんだよorz資金には限りがあるんだからな。いい加減、やりくりが大変なの…。

「諦める、葵。ナギにいくら言い聞かせてもムダだ。あのどこまでも突っ走る行動力は止められない」

「詠春…。お前はすごいな？ナギのお守りを今までしてたんだから… 本当に尊敬するよ」

うん、マジで尊敬します。俺は皆とは違って帝国を中心にして活動してたからナギみたいなの“困ったちゃん”のお守りはしていない。途中でタカミチ少年なんか帝国にガトウから任された仕事とかで来ていたけど彼は手がかからなかったからね。楽なもんよ。

「…言うな。自分自身、いつ胃に穴が開くかと不安なんだからな」

「う…っ…なんか、その…ごめん。…詠春！元氣出していこう！なんなら今度、酒を奢るからさ！」

「…ああっ！そうだな！飲みに行こう！ナギのことは俺に任せて葵は自分のことをやってきていいぞ！」

本当にごめんね、詠春…。まさか意識しないようにしていたなんて考えてもいなかったよ…。俺は詠春がナギの無茶な行動を無意識に受け入れて慣れたものと考えていたからさ。まさか現在進行形で胃にキテいるなんて思いもしなかった。

とりあえず今度、飲みに行く前に、このあと良く効く胃薬を処方してあげるね。頑張れ、詠春！負けるな、詠春！！その胃に穴があく、その日まで！！！！

「葵様！捕縛者の拘束、及び住民の避難区域への誘導を完了いたしましたわ！」

「お疲れ様、リチラ。拘束した者は後から到着する国軍に引き渡す準備だけしておいて、避難民には炊き出しをしてあげて。他はそれぞれ、臨機応変にお願い」

「了解いたしましたわ！お任せくださいませ では！」

今、報告に来た彼女の名前はフリチラリア。愛称はリチラ。元悪魔の精魔奇兵で前は中隊を指揮していた指揮官の一人。今は親衛隊の一人として活動中。

彼女、冷凍系の固有スキルを持つためか冷やし中華や冷製スープとか冷たい料理が得意です。マジで上手いよ？俺が好きなのは彼女が作ったバナラアイスかな。濃厚なミルクとココのある甘味がたまりません！お好みでフルーツソースなんかをかけても美味しいね。

元指揮官だから親衛隊の皆は優秀でね。大まかな指示だけでやってくれるから俺の負担も減ったなあ。アイリが組織の部隊再編してくれたから効率化してくれたからね。こんなに楽になるならもっと前にやればよかったよ…。

「ふふふ、貴方のご家族は本当に優秀なのですね？」

「アル？まあね、自慢の家族だからな。…それでナギのほうはもういいのか？」

「ええ、だいぶ立ち直りましたよ。口には出しませんがアリカ様の

ことは未だに気にしているみたいですよ」

「くくくつくつくつ！それはいいことを聞いたな。今度皆で飲む時にでもからかうとしよう」

本当にいいことを聞きました！ナギをからかうネタが増えたからな！あのバカの初恋は応援してますよ。というか結ばれてくれないと主人公が生まれてこないし…。まあ、そんな心配は無用のようだけど。…あの二人が両思いってのはウソじゃなしな。

いやあ、若いつていいねえ？お兄さん嬉しくなっちゃうよ。はあ…。俺も彼女とか欲しいなあ…。orz人の応援ばかりしてる場合じゃないよな…。ちくしょー！今度、このネタでナギのことをからかいつくしてやる！からかいつくしてやるぞーッ！！

「加減してあげてくださいいね？アレで一途なところがあるのですから」

「初恋だからだろ？そんなもん。それにあいつらのアレは両思いだ。切っ掛けさえあれば一気に結婚まで行くかもしれんよ？」

「ふふふ、そうですね。私もナギとアリカ様の幸せを願っていますよ」

それは俺も思ってるけどな。嫉妬とかは別にしてさ。でも、ただ祝うだけじゃつまらないと思うんだよな。ここで俺はとあることにアルを巻き込もうと考えた。アルならば、この提案に必ずノツてきてくれると信じてな！

「…告白シーンとかの映像記録が手に入ったら見るか？」

「さあ！返答はいかに！？」

「ええ、是非では私もナギのもとへ行きますね」

「ああ。手は尽くそう…。くくくくくくくくくく！」

アル先生はわかってらっしゃる。彼もこういう空気を読むことに  
関しては特に稀な才能を持つからな！ノツてくれると思っただぞ  
…まあ時々わかっていながら、敢えて火に油を注ぐようなことを仕  
出かすのはいかなものかと思うけどね。

とにかく町の復興作業だな…。ああ…鬱だ。…これからこんな  
が続くのかorz

Side out 葵

時は流れて、ここはとある町の宿屋…。

Side アイリス

私は新しく編成された親衛隊の皆と宿屋周辺の警戒をしていた。  
そして交替の者に引き継いで宿屋に戻ってきたのだが門前で情報部  
の者が経過報告書を持ってきたところに鉢合わせたのだ。

彼女達、情報部は敵地に潜入して相手の情報を入手する諜報一課。

敵からこちらの機密情報を守る諜報二課がある。他にも戦闘を専門にする三課があるのだが、こちらは敵施設占領や殲滅を目的している。

とにかく今、私は情報部からの報告書を受け取り一度、軽く書類を流し読みしていたが内容がマズイ。すぐに葵君の泊まる部屋の前に立ちノックの後に部屋の中へと入った。

「司令閣下。情報部から監視経過の報告がきました」

「アイリ…この書類の山を見て、それを言うの？」

数日前に制圧した、この人口十数万人の小さな町。都市機能の復興・回復のために葵君と私達は残った。そしてナギ君達は次の目的地とした、この町から西に百数十km行ったところにあるやや大きな町に向けて早くも旅立ったのは今日の昼間のことだ。

そして葵君の座る机の上には紛争による被害から再建する都市計画書、住民や難民への炊き出しの報告書、復興のための人材確保の経過報告書、開発資金の各施設への分配報告書 e t c , e t c …。机の上には様々な書類の山々が…。

これでも帝国にいたところに比べれば少ないほうだが…。なぜ、この戦争に関わってから葵君に書類仕事が回ってくるのだろうか…。このままでは大変そうなので司令部から手の空いている者達を手伝いに回したほうがいいだろうか？

「…申し訳ありません。しかし連合会議の報告です。目を通されたほうがよろしいかと」

「むう…それなら仕方ない、か…。せつかく調べてくれたんだからね。それでどんな感じなん？」

なんだかんだと言っても気になるのですね。ご自分で調べるように指示されたのもありますが心配なのでしょう。葵君から聞く話ではなかなか、からかいがいのある方の方のようですね。もしかしたら単に勿体ないと思われただけかもしれません…。

私もからかいがいのある人が減るのはつまりませんから是非とも助かってほしいと思います。あ、私達は葵君のみを助けるだけですからね？他を助けるかは葵君次第ですよ。この辺の考えは人の子と違うところかもしれませんね。

悪魔契約、又は精霊契約を結ぶということは契約者が精霊・悪魔の命が尽きるまで共に歩むということ。これは人の使う通常の契約などよりも重要な意味を持つ。絶対の制約と言ってもいい。…まあ、だからといって必ず契約者に好意を寄せるかは別なのだけねどね。ふふふ

「ハッ！現在、オスティア崩落から2ヶ月が経過。今日まで会議の内容は終始、連合側の思惑が蠢いているようでした」

「どうせ、陰謀でしょ？醜い老人の考えそつなことだな…」

「はい…残念ながら、そのとおりです。連合の元老院議員は俗に言う世界に対しての“生贄”を求めていました」

葵君の言うとおりだ。醜き野望を胸にした愚かな老人共…。いつの時代も人の欲望には際限がない。そのことは知ってもいるし見てもいるが、やるせない気持ちにさせられる。

逆に人も悪い心を持つばかりではないことも知っているし見てきてもいる。そんな人は本当に極僅かだったけど…。 “僅か” だというのも善に傾き過ぎた人も多かつたからだ。そういう人間達の時代だったのだ。神を妄信する狂信者が蔓延る時代だった。

あの時代は私の目から見ても地獄だった。幾数万の人達が些細なことで“魔女”だ、“悪魔”だなどと言いがかりを付けられ、自称司祭と名乗る者達が捕まった者を散々に拷問して魔女だと認めさせ最後に火炙りに処す。

ただ一人の思惑に流される大衆。そしてただ妄信的に受け入れる大衆…。 その二つが揃った時は真に度し難い。

「生贄？…誰かに責任を押し付けるってか？この場合その相手は…」  
「お察しのとおりアリカ陛下、です。既にアリカ陛下は逮捕、投獄され刑の執行を言い渡されるのを待つのみとなりました」

人は長い戦争に疲弊していたのもあるのでしょうね。全ての憎悪を押し付ける対象が必要だったのもあるのでしょうか。何よりも憎しみを押し付けることで早く楽になりたいのでしょう。

切っ掛けを与えたのが元老院議員の者達だったとしても踊らされた人々は安易な安楽を求めるモノなのね。憎悪渦巻く人心の対象をアリカ陛下に向かわせることで偽りの平和を成そうとする。無様です…。

まあ元老院が何か別の狙いがあり、その過程にはアリカ陛下のことが疎ましく思っただけなのかもしれませんが…。

「…本当にやってらんねえ。このことはナギに伝わってるの?」

「はい。ガトウさんからアルビレオ・イマへ、そこから伝わっているとされます」

あの変態がりのままをナギ君に教えるかは別にしても投獄されたことだけは最低限、伝わるでしょう。どちらにしても事情を聞かされた彼が先走らないように今後とも注意が必要ですね。

「そつか…。まあ隠す手間が省けたからいいのかな…。それで、ア  
イリ?」

「はい、アリカ陛下の收容先はケルベラス無限監獄。連合最辺境に  
位置する場所です」

「万が一のために監視だけはできるかな?」

「…難しい、と思いますが司令閣下の命とあらば彼女達は全力を尽  
くすことでしょう」

最辺境に位置するだけにケルベラス無限監獄周辺には何もなく見  
通しが良すぎる。見つからずに侵入して情報を確保するのは至難の  
業でしょうね。

情報部に配備された装備の中に特殊スーツがある。これは熱光学  
迷彩と個人用DF発生装置が標準装備されているのだ。隠密作戦に  
も戦闘スーツとしても使える一品だ。いずれは全部隊に行き渡る装  
備だが今は親衛隊の私達と情報部の一課と二課だけに優先配備され  
ているのだ。

その特殊スーツを使ったとしても侵入は難しいかもしれない。だが、それでも彼女達、情報部はやってくれることだろう。まだ部署ができて間もないが今までは持ち回りで行っていたことだ。家族は皆、ある程度のことなら誰にでもできる。

「無茶をしない範囲でお願い。それとこれからは防諜に力を入れておいて」

「既に対処済みです。アリカ陛下が投獄されてから、何やらキナ臭いネズミどもが我々を嗅ぎ回っているようですから」

そのこともあって私達は見回りなどもしていたのだ。二課の者達も身を隠して各所に配置されている。上空ではアカトンボも5機、敵の警戒・監視に当たっている。今のところ強硬な動きを見せていないので連中を泳がせて様子を見ている。

手を出してくれば正当防衛として排除することもできる。だが疑わしいからという理由だけではこちらから手は出せない。…やろうと思えばやりようはいくらでもあるのだが、より面倒を呼び込みそうなのだ。だから今は様子見…。

「流石だね、アイリ。皆が居てくれて心強いよ」

「ご安心を。司令閣下は私達が何にかえてもお守りします」

お守りします、契約など無くとも…。そしてまた喫茶店のお手伝いなんかして葵君と楽しく長き時を過ごすのです。あの退屈で優しくも楽しい日々を、また…。…でも時々は戦いたいです。私も元とはいえ悪魔ですからね。

「うん…。でも、皆が居てくれないと意味がないんだからね？家族が欠けることは俺が我慢できないよ」

「はい、お任せください。誰一人欠けることなく任務を達成してみせましょう」

あれ…？葵君が言う“我慢できない”というのは、もし“万が一”が起きた場合は辺り一面が火の海になるか剣の墓標が乱立する事態になるということ、でしょう…？か…。それとも四連装GBの超重力で圧壊させるのでしょ…？うか…？

とにかく敵は碌でもないことになることは確実ですね…。

Side out アイリス

533

Side 葵

部屋を出て行くアイリの背中を見送って溜め息を一つ…。

「はあ…。本当に、やってらんないねえ…」

たかが女一人如きをケルベラス無限監獄なんて牢獄に送らんでもいいだろうにな。刑が執行されるまで、まだ猶予があるとしても2、3年…。あそこに投獄されたということはもう情報操作は終わった後なのだろう。

まずは自分の周りからと思って帝国内の炙り出しを優先したのが仇となった。…でも、これはこれで史実通りに事が進んでいる、か…。うん！これからは監視だけで俺は俺で独自に動くとしますか。幸いなことに今は復興のためにナギ達とは別行動中…。

アルと詠春に胡散臭い連中が嗅ぎ回っていることを注意するように言うておけばいいか。あの2人ならナギが無茶するのを止めることもしてくれるだろ。ジャックがナギに同調しないかだけが心配だけど…。なんとかするだろ。

あゝあゝ つ！ストレスが溜まるなあ…。だいたい基本ノンビリ屋で発明家で錬金術師で喫茶店店長な俺がこういう書類仕事なんか向いてないんだよ…orz

…そうだ！ラミエルさんのバージョンアップをまだしてないじゃないか！？

それに親衛隊専用の機体の開発…、ミリー達は完全に後衛に下がってもらうからいいとしてもオリビエ達の操縦に耐えられるような機体の開発も残ってる…。

何よりも俺が乗る機体をまだ造・つ・て・な・い！！ これは一大事だ！すっかり忘れていた…orz決戦前に造って本番の時に乗ればさぞかし楽しかっただろう…！マジでしくじった！こんな大事なことを今になって思い出すなんて…orz

ううう…。いや！今、思い出しただけでも上々だ！今から造ればいいじゃないか…！…とりあえず、どんなのを造るとするか…？それが問題だ。

いや、格納庫の規格が合わないから大きく逸脱したものは造れないけどな。どんなに大形なモノでも9m前後が限界。それを超えると整備するのに手間がかかって仕方ない。整備効率はガタ落ちだろうね。

合体ロボ：はロマンだけど実戦では使えないしなあ。合体中の無防備なところを攻撃されたら目も当てられない。変形ロボ：もロマンを感じさせるけど合体ロボと同じで変形中に攻撃されたらマズイもんなあ。

ここはやっぱりシンプルに人型ロボに的を絞るとしよう。まあ外見はパワ　ローダーなんだけどな。とはいっても中身は別物だけどね。本物は飛ばないし…。

ナデ　コ世界の技術を元にアップ　シードやフル　タ、甲殻　動隊の技術を流用してるから、もうある意味オリジナルのロボになってるなあ。そのまま造るのもいいけど、やっぱり改造もしないとない！

アイリ達にもいい機体を用意しないと…近接格闘能力・射撃能力共に優れた機体を、ね。…というかイキシア？を含めて言えることだけど整備性はともかく量産性が低いんだよな…orz機体性能は抜群なんだけど。まあ全然構わないだけどさ。家族以外に造る気はないし。

今後のことも考えて精霊さんの作る精霊鋼を備蓄しておかないとな。あ、あとオリハルコンも加工してオレイカルコスにしておかないとね。備蓄できる時しておかないと後悔するからな。ただでさえ戦闘はまだ続くんだから。

まあ開発をするにしても今は目の前の処理待ちの書類を片付けないとならんよ。ぐすつ…研究したいよう、開発したいよう…。一応ここにある書類の山で最後だから、あと一日頑張れば終わりそうなのが希望だよなあ。はあ…。

コンコン。

さあ仕事に取り掛かろうとしたところで部屋の扉がノックされた。まさか書類の上乗せじゃないだろうな？いやだよ？コレ終わらせたいんで機体開発したいんだから…。

「主様あ？入ってもよろしいかしらあ？」

…ミリー？どうしたんだろう？今、彼女には復興のために經理の仕事を任せてるはずなのに。何か問題発生、かね？…ネズミが捕まったか？でも、それならファレノかアイリが報告してくるだろうしなあ。…とりあえず聞いてみればわかるか。

「扉なら開いてるよ。入ってきて」

「ふふ、お邪魔しますわねえ」

ん？何をそんなに嬉しそうにしているのかね？ミリーさんや。

「ミリー…、どうしたの？」

「アイリちゃんからねえ、「葵君が書類仕事で大変そうだった」って聞いてちゃってえ。だからあ手伝いに来ましたわあ」

「え、アイリが？」

アイリがそんなこと言ってたんだ。さっき部屋に入ってきた時にこれ（書類）をジッと見てたから何かと思ってたけど、気を使ってくれたのかな。

「そうなのよお　わかりやすい子よねえ？自分の仕事もあるのに態々私のところに来て話していったのよお？絶対、主様のことが心配だったのねえ、アレはあ」

「アイリがミリーに…、そっか。いやー、心配かけてるなあ」

態々ミリーのところまで行ってくれたんだ、アイリ。本当に心配かけてるなあ。アイリやファレノ達には帝国での仕事をいつも傍で手伝ってもらってたから、こういう気遣いはありがたいね。俺のことをよくわかってるよ、うん。

「ふふふ。皆が心配してますわよお？主様ったら今回の戦争に関わってから無茶しますからねえ」

「む？そんなに無茶したかな？記憶に無いんだけど…」

無茶ってなんだろう？…敵陣に突撃かましたことかな？最前線で新魔法の実験をしたことかな？個人用DFの試験で無防備に姿をさらしたことかな？それとも…。ダメだ、思い当たることが多過ぎてどれかわからないorz

この空気の流れは説教ですか？…このままではマズイですよ。ただでさえ仕事があるのに説教なんて聞いている場合じゃないって。

「ほとんどが書類のような事務仕事ですけどねえ。一時期なんか睡

眠時間をかなり削られていたでしょう？」

「アハ、アハハハ…。あ、あの時の記憶は眠くて朦朧としてたから覚えてないなあ…。なーんて」

おう？地味にキツイことを思い出させてくれますな…。正直に話すと机仕事よりも戦場に立っていたほうが性にあってますよ。発明品の実戦証明もできるから楽しいしな。

あの時期は辛かったな…。帝国へ、テオに連れてこられて間がない時だったな。あの時は「完全なる世界」の信奉者などの洗い出しができてなかったから碌に安心できなかったから、常に気を張っていて寝られないし。

なのに仕事は増えるばかりで…。「工房」内に入ればよかったんだけど中に入ると発明したくなるから入れないし…。色々辛かったなあ…。

「もう…。ダメ、ですからねえ？主様に何かあったらあ皆が心配しますのよお。ご自愛くださいねえ？」

「…わかった。これからは気をつけるよ。…それでまあ差し当たって、この書類の処理を手伝ってほしいな？」

いや、冗談めかして言うてるけど本当に手伝ってくれるとありがたいです。サツサと終わらせて研究！発明！開発したいです！装備の充実化を図りたいし皆の安全だけは確保したいのよ。皆いい子だから怪我させたくないのさ。

「ふふ、了解ですわあ」

ミリー、ありがとうね。君が手伝ってくれるだけで百万の援軍を得られた気分だよ。さて、ちゃっちゃと片付けて今日は寝よう。明日も次の復興地へ行くからね。開発は移動の合間にやるとしますか。

あ、それにミリーを寄こしてくれた、アイリにも感謝、感謝

Side out 葵

今後、葵達は紛争後地を回り復興に尽力することになる。途中にナギ達と幾度か合流するのだが基本的に葵は町の復興作業に従事することになった。

町々では、たまにバカな者が葵にケンカを仕掛けようとするが、その悉くは親衛隊、または情報部諜報三課の者達が事前に取り押さえ、もう二度と“オイタ”しないように洗の…もとい、教育されて開放されていった。

因みに解放された者達は皆一様に明るい性格に変わっていたという…。

それとこの長くも短い期間、葵はもちろん、「紅き翼」の全員に誰かしらの監視員が常時ついていたりすることもありナギはアリカ救出に乗り出せずにいた。この時、ナギは意外にも強攻策に訴えることもせずただチャンスが来るのを待つように紛争地帯を転々として救援活動を続けた。

そして運命の日…。2年後の今日、アリカを慕う少年、クルトからアリカ陛下の死刑執行が10日後に決定したという情報が「紅き翼」のメンバーのもとに届いたのだ…。

## 第二十話「紛争と警戒と優しさ」（後書き）

繋ぎの日常（？）編ですな。

作者の作品は基本、プロットが設定されていないのでどのようになってもできるよつに組み立てていきます。

実際に作者の気分次第なところがあります。

基本、自己満足と妄想ですからね！

ただ、キャラ数のこともあるのでそれに関しては設定表を作る予定ではありません。

あくまで予定だけですけど！

それでは今回はここまで！また次回！チャオツ！

第二十一話「新機体と葵とラミエルさんと」(前書き)

はあ…学園編に…本編に逝きたいなあ…。

…なあって考えてしまつ今日この頃の作者です。  
では、続きですな。

## 第二十一話「新機体と葵とラミエルさんと」

紛争地域、戦闘後…。

Side 葵

アリカ陛下の死刑執行日が決まった…。今日、クルト少年から長距離電話で知らされたことだ。2年間費やして決まったことが死刑とは単純なものだな。と思ったのは内緒。

…実は前日には知ってたのよ、俺。一課の皆が頑張ってくれました。潜入に苦労しただろうに、何でもないかのように言ってくるんですよ？健気な皆を一人ずつ撫でてしまったのは間違いないと思うんだ…。

よくやったね。って気持ちを伝えたいし普段なかなかできない家族のスキンシップは大事なことだよな。

まあ他にもかくにも、その時に元老院議員の一人がアリカ陛下に手酷く尋問していることも一課の人から聞いて知った。だからつてどうとも思わなかったけどな。ナギのヤツがどうにかするだろうさ。美味しいところはナギにやってもらわないとな！

それにしても10日後ねえ…。史実ではどう助けたんだったかな？死刑場にいた奴らを皆殺しにしたんだった…かな？あれ？殺してなかったっけ…。んむー…？とにかくブツ飛ばしてた(？)ような覚えだけはあるんだよなあ。まあいいか

クルトに散々に言われてたけど今のところナギはこのまま紛争地帯を回って救助を続けるようだし。日も暮れてきてるし今日のところは宿でもとって、いつでも動けるように準備だけはしておくかな。それじゃま、行きますか。

ふふふのふ　俺も、この2年間ただ復興作業をしていたわけじゃないのだよ。

オリビエ達の魔力量に耐えられる専用機と親衛隊専用機の開発。そして俺専用の機体の開発！この三つはやり遂げました…！特にオリビエ達の要望に応えられる機体の開発には骨を折るだけではなく肉が裂ける思いで取り掛かりました。

生身でも十二分に強いからこういう機動兵器に自分達が乗るって発想が無かったみたいだね。かなり無茶な要望だった。“あたし達が乗っても壊れない”を条件に出されたんよ。そりゃそうですよね。乗るだけで壊れたら意味ないですよねぇ…。

今ある機体は基本的にバッテリーと魔力のハイブリッドで動くから搭乗者自身の魔力でいくらかでも機体スペックは上げられる仕様になってる。ただし搭乗者の魔力に機体自体が耐えられるまでだがな。

全体的な構造上、性能は折り紙付きなんだが魔力によって耐久性が区々なんよ。イキシア？は汎用性を高めるために、その機構はある程度、リミッターを設けて安定性を確保してある。まあその分、無茶はできても無理は利かないけど…。

今回はその機構たる魔力増幅感応機構がネックになった感じ。この機構はIFSが無くても登録された魔力パターンから自分の意志

のままに機体を動かすことができる魔導機構だ。そして先にもあるように搭乗者の魔力を増幅して機体を更にパワーアップさせることもできる。

それでネックになっているというのが、この増幅して機体性能アップというところだ。考えてみてほしい、魔人級の魔力に普通の機体が耐えられるだろうか？ 答えは否だ。耐えられるわけがない。…そう“普通”なら、だ。

実験1回目は魔力増幅感応機構の一次機構にあたる増幅機構の部分を外して魔力感応機構としてしまおうと考えたんだ。搭乗者たるオリビエ達は元から強大な魔力を保持しているんだから増幅なんていらぬのでは？ と考えたんだな。

でも、それは魔力を通して二次機構の感応機構で機体に送られる操縦者のイメージが正確に読み込まれず、あやふやになってしまつて機体の反応性が低下。高い機動性と柔軟な運動性が売りなのに即応性が発揮できなくなつてしまった。

よつて安易な考えだつたコレは即ボツになつた。この時は単純なだけにイケると思つてたんだけどなあ。

実験第2回目は増幅機構を外すのではなくてバイパスを通して一次機構の後に発生する余剰魔力を別利用しようと考えた。ネタバレするけど実際コレは当たりだつた。

それというのも魔力増幅感応機構の一次機構にあたる魔力ブーストの後に発生した余剰魔力。普通ならこの次は“二次機構の感応機構”と対応しきれなくなつた余剰魔力を“魔力チャンバー”に送られて排出”される。まあこの二つになる。

後、あるとしたらそれは内部機構の設定上で魔力が過剰供給され危険域に突入した時か…。強制的にセイフティが働いて余剰魔力を抑制・強制排出して機体の安定と安全を保つことになるだろう。

以上のことから、設計段階から再設計された。機体の強度的問題の解決に取り掛かった。ここで問題だったのは彼女達の溢れるほどに有り余る魔力をどのようにして機体各部に通わせて運用するかだったのだ。

彼女達のためだけに造った機体はその有り余る魔力を外部へ排出しないで飛行ユニットの高性能反重力波推進機関と追加装備した多重圧縮魔導力スラスタに並列接続する。そうして魔力を分散して送ることで爆発的な推進力を確保。空間戦闘での超高速機動力を獲得した。

まあこれでも捌ききれないほどの魔力が“まだ”あったんだけどね…。ここで別利用するということを取っ掛かりにして他にも流用した。その一つがDFだ。

DF増幅機構は付いていたけど魔力的にも回路を引いてDFを更に強化した。おかげで通常の増幅されたDFよりも魔法攻撃に強くなった。なんでここまでDFに拘っているのか自分でも不思議だ…。いや、フィールド的なものなら“これだ！”ってモノだとは思っけどね、俺個人では。

守りは頑強。魔力とバッテリーが尽きない限り常時発動しても大丈夫なほどの頑丈さだ。大部分が魔力で補われることになったからバッテリーの消費も抑えられて省エネルギーで高効率の運用を実現できた。歴大な魔力があるっていいよね？すっごく便利

固有武装も装備させたよ？もちろんですよ。オリビエには艦載砲にもなる斬艦砲剣。ガン・ザンバーぶっちゃけ、ガンソードを大きくしたものだ。単純故に頑丈だから、どんなに振り回しても無問題ね。

リビエラには広域殲滅から精密攻撃のできる機工天翼。ウイング・マキナこれは…ファンネルですな、うん。いや、ネタとかではなくて作ってみて思ったけど意外と使えるよ？コレって。独立稼動して自機の援護にも使えるしね。

シルビアには突撃槍を。他二人とは違ってギミックはほとんど無い。ただあるのは堅固たれ頑強たれという設計思想のみ。槍自体が独立して強力なDFと各魔法障壁などを発生させる。発生した複合フィールドが機体を包み爆発的な推進力を以って敵陣に一点突破を仕掛けるのだ。

後の諸々の細かいところの説明は省くことにするけど、そんな感じで3機の特別機が完成したんよ。試作1号機から6号機まで造っては破棄、造っては破棄して、正式にロールアウトした“グロリオサ”1号機から3号機だ。

まあ…いつもの如く、造り終わってから気付くんだけど、さ…。まあ、なんだ…。機体の形状がね？いや、形状とは違う…かな？雰囲気？とにかくそんな感じのなんだが…。“ブラックサレナ”に似てるんだよorz

外装の色こそ黒に赤が施されてるけど…形状は違う。現物を知ってるヤツが見たらわかると思う。実際に見ていた俺がそうなんだから間違いない。見た感じ“グラマラスなブラッ サレナ”…。またか…!!？またしても女性フォルムなのか!？クツ!…まあいい、キ

ライじゃないし。

見た目はグラマラスな女性に流線型の全身鎧を着せて背部に黒い大きな翼がある、みないな。流麗な女性的なのに一部に力強い男性的にも見えるから不思議。頭部に立派な角が2本あるからか？通信アンテナなのに…。

まあ最終的に言ってしまうならば複合装甲で軽量な素材を使った重装甲、異常な推進力を獲得した高機動力、柔軟な操縦性による高運動性で格闘戦可能。造った自分でも「なに、このバカな廃スペック？」だもん。

正直に言うけどマトモな人はまず乗らないね。…乗れないんだな俺か？…乗れますよ。でも乗りません。三人のためだけに造ったんですから。仮に普通の人が乗ったとしたら搭乗者の生命を魔力に変換して根こそぎ吸い取られて、からっからのミイラになっちゃうね。

そして仮にそれをクリアしたとしても機体の最高加速化にあるGをマトモに受けて操縦席はスプラッタ…とまでは言わないけど即座に意識は刈り取られるかな。一応、これでも重力制御されてるからマシンなほうだ。うえ…想像したら気持ち悪くなってきた…うっぷ。

ま、まあグロリオサはこうして完成しましたとさ…。最後に変なこと考えちゃったから締まらないなあ…。ハハ、ハハハ…。はあ…ジェットコースターって苦手なんだよ。想像しただけで酔いそう…。ふう、まあいい続きだ。

で！俺の専用機と親衛隊の機体は、このグロリオサを基準に考えて造った。どう考えても俺の機体よりオリビエ達のほうが、仕様基準がシビアだったからな。スペックを再調整すればアイリ達にも十

分に使える高性能汎用機の完成。基準ができれば簡単なモノだ。

そんなわけでアイリ達のために造ったのはグロリオサのスペックを再調整した“ルリトラノオ”だ。再調整した機体だとしても性能的には優秀。いや、精魔奇兵が扱うものとしては破格の性能と言ってもいい。

柔軟な運動能力と近接格闘能力に優れ。増設された魔導力スラスターで増加された推進力で高機動戦闘が可能。機動戦闘中にも射撃性能は高い命中率をマーク。

装甲もグロリオサに準じる物を使用しているから見た目よりも軽い。それでも防御力はイキシア？の二倍は堅い。DFは、強度はともかく全機標準装備なのさ。光学・魔法ともにダメージを軽減してくれるはず…もとい、してくれる。

グロリオサがグラマラスなのに比べてルリトラノオの姿は“スマートな女性”が肩と太腿、あとは背部に流線型の中鎧を着ている感じか。額に一角獣のような角があるのが俺のお気に入りですな。…飾りとかではなくてグロリオサと同じで通信アンテナの役目があるのよ。

言うておくけど、「リーダー機っていつたら角ダヨネ？」なんて考えてないからな？純粹に機能重視だから…。見た目は機能部分を作り終わってから勝負ですな。参考は色々なロボットだけだね。あとは俺の趣味！どうしようもねえな、俺…orz

ここまでで紹介した各機体。イキシアはI系統に属して整備製と汎用性、何より高い安定性を求めて造られたシリーズ。俺達が初めて作った人型機動兵器だ。開発秘話は涙を誘うものでしたな…。

グロリオサはG系統の、たった3機だけ造った特別機だ。複合重装甲の頑強な防御力、多重圧縮魔導力スラスタなどからの高い機動性、操縦系は魔力増幅感応機構でIFSが無くても魔力だけで操縦者の思考を読み取り操縦できる。

IFSで操縦したように動くから柔軟な運動性が実現できて強靱なマシンパワーを繰り出すことができる。オマケに魔力で機体の強化もできるとききたものだ。それに3機にはそれぞれ固有武装もある。

ルリトラノオがイキシアの上位機種にしてR系統に属している。G系統のグロリオサを参考に再調整してI系統のイキシアを基礎に置き、バッテリーと魔力のハイブリッドの高出力からなる運動性と機動性を高いレベルで両立した。このことで安定性と汎用性すら確保できた。

でも、量産性は、どの系統も向かないのが玉に瑕なんだよ…。他のヤツのために作る気なんか無いからいいけどね。補修部品とか鋼材は今も製造中。備品はできる限り備蓄しておかないといけない。ただでさえここ2、3年は消費が激しいんだから。

それでまあ最後に俺の機体か。機体名は“プロテア”。G系統を参考に、より扱いやすいように再調整した上位機種となるP系統だ。G系統のように高機動性と高運動性を。R系統のような高い近接格闘能力と中量級の装甲…なのにそれ以上の重量級の防御力を確保した。

最初はそう造ったんだよ？でも、問題が起きたんよ…。ええ、原因はわかってるんです。わかっているんですよ…。コレは使えるかなあっていう軽い出来心だったんです。結果的には機体性能の向

上に繋がって成功(?)だったから良かったんだけどな。

まあ隠すことでもないから言うけどさ。何をしたかというのだ…。ラミエルさんを機体の起動キーにしてみたんだよ。AI搭載の機体ってロマンを感じませんか?…とは言っても新しくAIを作るのも手間がかかる。ならばいつそ、前から考えてたことを実行した。

プロトタイプで蓄積した戦闘データを新規のAIに移し変えたラミエルさんを使ってみようと考えたんだよ。まあ…その…案の定というか、ラミエルさんは女の子でした…。はい。繋がり的にはアンの従姉妹(?)にあたるのかね。若しくは姉妹か。

そんでまあ…問題の焦点となる起動キーにしたラミエルさんなわけなんだが…。

『我が主よ、どうしたのだ?先程から何やら考え込んでいたが。早く行かねば皆に置いて行かれるぞ?』

20cmほどの大きさになってフヨフヨと俺の周りを浮いてついて来ていたりします…。話し方がことなく偉そうなのはどういうこと?一年前くらいに新AIにした時はもうちょっと初々しかった気がしたんだけどなあ。

「…んあ?ああ、俺がラミエルさんを起動キーにした時のことを思い出してたんだよ」

『おお?…ふむ。アレは実に愉快だったな。今でも、我の中の記録を閲覧しても笑えてくる。ふふふ』

「いやいや、あのね?愉快ってラミエルさん…」

愉快じゃないよお…。半年前のプロテア起動実験の時にラミエルさんがまさか“あんなこと”を仕出かすとは思わなかったから俺は驚いたよ。ううう、俺のプロテアがああああ…。

『それよりも我が主よ。いい加減、我のことを、敬称を付けて呼ぶのはやめてくれぬか？何やら他人行儀ではないか。我は寂しく思うぞ…』

「でも、ラミエル“さん”は、ラミエル“さん”だと思っただけだなあ。それに戦闘中は呼び捨てにしてるよ？」

ラミエルさんも変なことに拘るね。実は半年前から同じようなやり取りをしていたりするのよ。というか偉大な使途さんたるラミエルさんを呼び捨てにしているものなのかな？今のところ戦闘時には呼んではいるけど、それだけでは不満みたいなんだよなあ。

『うむうう…戦闘中だけではないか。我は通常時のことを話してるのだが？』

「だから、ラミエル“さん”は、ラミエル“さん”だって。…そんなことより俺の機体はどうなのさ？」

ラミエルさんのことを考えていたら案の定というか不満を表せてきた。いつもこのやり取りをするとラミエルさんは話しが長いので逸らす意味でも違う話題を振ってみることにした。まあ俺の機体のことなんだけど…。

『そんなこととは何だ、そんなこととは？我にとっては重大事なのだぞ。…まあ今は良い、今“だけ”だがな。…それと機体は良好だ。

今も順調に“成長”しておるようだな』

そんなことと言われたのにちょっと不満を示すがなんとか話題の変更にはなつたみたい。この場合、ラミエルさんが俺に話しを合わせてくれたと言つたほうが正しいかもしれないけど。それよりも今も尚、成長中か。はあ…。

「俺に断りも無くプロテアを“バラして吸収した”わりにラミエルさんの中では“成長”してるの？はあ…まるで胎児だな」

『なるほど、言いて妙だな…。ふむ、つまり、それは我と我が主との子ということだな？我は理解したぞ。…ならば、大事に育てるとしよう』

なあ…ちょっと待とうか？引つかかるところってそこか？俺の機体バラしたことは華麗なるスルーですか？ラミエルさん…。

「なんか違うよ？違うよね？違うよな？」

『何も違うものか。我が主が手塩にかけて作り出したプロテアを我が内に取り込み一から育てておるのだ。子も同然であろう？』

なんだか、そう言われちゃうと反論し辛いなあ…。俺もそうじゃないのか、とか考えちゃうもんな。俺、間違つてないよな？おかしいのは俺か？えー…。

「え？あれ？そう…なのか？…いやいやいや！やっぱり、違うだろ！？プロテアだって皆で造つたんだから！」

『だが、我が主自身が設計から建造まで終始、全てに係わつたのも

事実であるっ？』

「うぐっ…。まあそうだけど…。でも子供は言い過ぎだろうっ？」

結婚もまだなのに子供って…。それ以前に彼女も居ないのに…。うう、なぜだろう？自分で考えてて落ち込んできた。

『なんと…。我らの子を我が主は認知してくださらないと言われるのか！？』

「ちょッ！ラミエルさん、声が大きいんですけどッ！？」

認知とか言うのやめようよ！？前方を歩いてる皆に聞こえたら変な誤解をまねくでしょ！俺は未婚者です！

因みに俺も出会いの努力はしてたのよ？でも、ちょっといいなあと思った女性といい感じになったら、なぜか家族の誰かが必ずいいタイミングで現れて邪魔されました。本人達が“偶然会った”と言ってますから信じてますけど…。皆、タイミング悪いよお、グスッ…。

『私の体だけが目的だったのだな…。だが、良いのだ。たとえ我が主が私の体だけが目的だったとしても我は我が主のことを愛しておるのだからな』

「身体ないよね！？あつたとしても青いクリスタルだよね！？俺は普通に綺麗なお姉さんが大好きです！！」

ラミエルさんはどこでこういうことを覚えてきたのだろうね！？…昼ドラか？昼ドラなのか！？お兄さんは驚きですよ！…てか、マ

ジメな話しだけど身体無いよ！クリスタルだつてば！俺に特殊な性癖はありません！

『なつ！我には飽きたと申すのか！？捨てるのか！？どことも知れぬ場所に置き去りか！？』

「そんなわけないだろが！ラミエルさんは俺のモンだ！誰にも渡さん！！！」

なんでそういう話しになるのかな！？そんなことするわけないじゃない！どうでもいい他人ならやらなくはないけど…。ラミエルさんにそんなことしないよ！これは家族全般に言えるけどな！

『わ、我が主よ…。そのように宣言されてしまつと我とて恥ずかしいのだが』

「なぜだろ…。？今、無性に「orz」のカタチに崩れ落ちたいとです…。あれ、目から水が…」

俺も今思ったよ…。何でこんなところでクリスタル相手にプロポーズのようなことをしないとならんのよ…。ああ、目から出る水が止まらない。不々思々議々だ々な…。。

『何をしておるのだ？我が主よ。おお！そうか！泣き崩れるほど我のことを想ってくれておるのだな？うむ 我も我が主と共にあることを嬉しく思うぞ』

「…こいつ、反省するまで「工房」内に放り込んで10年ぐらい放置しておくかな」

いや、マジで封印も考えるか？でも、そんなことしたくもないし…。うーん…悩むねえ？

『…すまない、我が主。戯れが過ぎたことはここに詫びよう。許すがよいぞ。だから放置は止めてくれ』

「わかればいい。…まったく、遊びが過ぎるぞ？」

『ふふ、すまぬ。ふふふ』

嬉しそうにフヨフヨ浮いてからに…。何がそんなに嬉しいのやら。

Side out 葵

宿屋までの道中…。

Side ラミエル

「わかればいい。…まったく、遊びが過ぎるぞ？」

『ふふ、すまぬ。ふふふ』

ふふ、我が主とのいつものやり取り。冗談を言い合えるというのは心地良いな。ただのプログラムであった少し前の我ではこのような簡単なやり取りもできなかった。だが自我を持つようになってからは何から何までが目新しく映るから楽しくて仕方ない。

もちろん楽しいことばかりではないことも承知しているがな。前のプロトタイプの記録を見る限り大戦時の状況。そして今は我が見る数々の紛争…大戦の残り火だ。

それでも我が主は破壊された町や村の復興に尽力してきた。難民の受け入れ先の確保、都市機能の回復などすることは沢山あった。怪我人や病人のために魔法薬や医療魔法士を用意していた。それで助かった命も多くある。

暴れていたバカ共を懲らしめもしたな。ほとんどが都市戦ということもあって大量破壊兵器は使えず、尚且つ生け捕りが目的だった。まあ特に問題なく無人機達が悉くを仕留めていったがな。

トリモチ弾で絡めとり、特殊ゴム弾や電撃で気絶させ、ベークライトで動きを固めた。無人機で対処できない者は「紅き翼」の者達に任せた。…内2人はやり過ぎて建物まで破壊していたが…。

「…！…なんだ？」

『どうしたのだ？身体を震わせて』

風邪でも引いたか？日も暮れて風も冷たくなってきたようだからな。…ん？我が主は身体の表面に魔力を常時、纏っておるから寒暖は調整されておるはずよな？風邪などは…む？

「いや、何やら悪寒を感じたような？…これは、視線？でも、悪意みたいのとは、違う、かな？ん…？」

『…何を言っておるのだ？気のせいであろう』

なるほど、そういうことであつたか…。複数の視線を認識した。これは背後の陽月の姉妹と…周辺で守りを固めておる情報部と親衛隊の者達か。陽月の姉妹はともかく、他の連中め、熱光学迷彩ステルスを展開するだけでなく気配遮断までしておる。

我と我が主があまりに仲良いから嫉妬しておるのだな？わかる…わかるぞ。皆の思いは理解しておる。…が、止める気はサラサラないがな。我が主とのやり取りは甘い蜜毒のように甘美なものを感じるのだ。やめられんよ。

「そうかなあ？なんだか身近な人の視線だつたような気がしたんだけど…」

『木の精だ…違う、気のせいだ。我が主が気にすることは“一切無い”ぞ』

何やら思考に乱れを観測したが…気にしてはならないと我の未来予測演算機構が告げているので流す方向で…。んんっ、話を戻そう。

我が主が気にすることは無いぞ？逆に気付かれても面倒なことになるからな。…まあそれはありえぬか。稀に見ぬ鈍感だからな。そのくせ家族は大事だと言つて敏感に反応するのだからわからぬものだ。

「んー？まあラミエルさんがそう言つのなら気にしなくても大丈夫なのかね」

『うむ、我を信じよ…ッ！？…だ、大丈夫だぞ？』

おのれ…陽月の姉妹め、今の今まで静かにしていたと思えば…、これ以上は我を我が主に近づかせぬようにほぼ機械で構成されている我に殺気を認識させるとは、やるではないか…。さ、流石に2人まとめたの殺気は我とて堪えるものがあつたぞ。

喚き散らされるよりも怖い…いや、恐ろし…いやいや！…こほん。ともかく無言なのに殺気を込めた目で睨むのは、やめてもらいたいものだな。

「…なぜに疑問系なのかね？」

『…些事だ。心配するな』

説明できるわけがないであろう…。何のために彼女達が我が主を器用にも飛び越して我にのみ殺気を浴びせてくると思っておるのだ。我が主にバレぬよう我だけに彼女達は殺気に乗せて暗にこう言ってくるのだ…。

「調子に乗るな…。それと…このことを話したら…わかっているな？」「」

と、な…。彼女達が我に対して警告と彼女達が殺気立っていることを話したら…、ガクブルガクブル…。お、怖気づいてなどおらぬぞ？これは…武者震い…そう！武者震いだ！いつでも来るがいい！…はふう…。

「些事ってラミエルさん？…なんだか震えてるように見えるんですけど」

『そ、そのようなことは…ない』

今も尚、牽制のつもりか2人からやや圧力を増した殺気を叩きつけてくる。クツ！余計なことは言わせぬということか？この身は流体重金属とナノマシンを主成分としている。なのに…：私の早期警戒機構や自動防衛機構が、たかが殺気に反応してしまいそうだ…。

「いや、震えてるよな？どこか機能を破損したのか？ハオとユエはどう思う？」

「ハッ、ラミエルは長らく話していたので…：“疲れた”のではないかと」

「左様です。元のペンダントに“戻らせる”べき…では？」

またしてもこの姉妹は…。我が長話ごときで疲れるわけがないではないか。何が何でも我を待機状態にする気だな。まったく、少し我と我が主が仲良くしていたからといって余裕の無いことだな。嫉妬とは醜いものだ。気持ちはわからなくもないが…。

「そんな軟に造ったつもりはないんだけどなあ…。ラミエルさん、戻る？」

『う、うむ。…この場合は“一時戻る”とする。では、な』

グッ…。更に圧力が高まったか？ふう…：致し方ない、この場は一時撤退するでしょう。我が主の前で争いを起こすわけにはいかぬからな。

『……………（この借りは、いつか必ず返すぞ）』

S  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t  
  
シ  
ミ  
ル  
ル

第二十一話「新機体と葵とラミエルさんと」（後書き）

ラミエルさん……。こんな風にする気はなかったんだけどなあ。  
女性人格なのはこの作品の仕様ですから、どうでもいいけど…。

ふう……。まあラミエルさんのことはこれでいいか。

それよりも、そろそろ話数的に番外編を差込みたくなってきた…。  
どうしよう？…やるか？やっちゃうか？

んー…。それより本編に突入するのが先か。うん、そうしよう！

活動報告のほうもちよこちよこ更新しています。更新の時は、よろ  
しくー！

では、今回はここまで！チャオッ！

## 第二十二話「下準備と襲撃とバカと」(前書き)

ハイイツ！作者の鉄 桜です！新作アニメが続々出てますね！

ゾンビいいですね…。宇宙人もイイです…。第二期のモノもいいですね…。

また、作品が増えるかも…。作者は少しミーハーな部分がありますから。

ゾンビに葵をブツこみたいなと少し妄想中です…orz

ではでは！続きをどうぞ！

## 第二十二話「下準備と襲撃とバカと」

??????.

Side 葵

みなさ〜ん。どうも！俺は今、アリカ陛下が処刑される場所。ケルベラス渓谷にいます！谷底ではウゴウゴ、ズルズル、ネチャネチャと真つ黒い魔獣どもが蠢いてるよ。気持ち悪いわー…。思わずミサイルや光学兵器の面制圧してやりたくなる。

「ん？やるのか、我が主よ？我ならいつでも構わぬぞ」

「やらん…。やりたい気持ちはあるよ？でも今はやらんよ」

「何だ、つまらん…」

今日はダメだって明日はアリカさんの…今更だけど、もう国は無 いし“さん”で十分でしょ？とにかくアリカさんの処刑執行の日だ。それでまあ俺がなんでこんなところに居るかという明日のための 仕込みをしに来たのさ。

魔法を一切使えないケルベラス渓谷といってもそれは魔法やそれ に系統するもの“だけ”だ。ただの薬物は効くだろうし光学・質量 兵器の前ではただの図体のデカイ的だ。今回は前者の特別に調合し た睡眠薬の入ったお肉を渓谷に投げ込みに来たのよ。

この睡眠薬は明日の処刑の時間に合わせて効果が出るようにした遅効薬だ。つまり明日の処刑の時までは元気に動き回っていられるが、いざアリカさんが飛び込む時になって魔獣どもは夢の中という代物だ。

こうしておけばアリカさんもナギの野郎も比較的安全に事を成すことができるだろう？それでもまあ谷の中では魔法は使えないけど…。ナギならバカ根性で何とかするさ。仮に無理でも機動兵器を送り込むしな。何はともあれ放り込むとしますか…。

「皆ー？行くよー？せー！の！…ほーら たーんと、お食べ〜」

ギョルルル…！！ガブツ！！ギャンツ！？ズズ、ズルルルツ！！ガジュ！！ギャアツ！！？

なんでだろ…？結構な量のお肉を投げ込んだのに食べた端から共食いみたいな状況になってるんですけど…？あ、首が飛んだ…。うわああ…内臓を喰ってるよ…。さぞかし新鮮なんだろうな。まだ臓器から湯気立ってるし。

おう？ちよつと意外だ…。真っ黒い魔獣だったから内臓も黒いかと思っただのに意外と綺麗な色してやんの。ピンクとか、鮮やかな赤色とか。…普通にホルモン焼きにしたら食べられるんじゃないか？見た感じレバー辺りとか美味しそうに見えてきたな…。

いや、食わないからな？

魔獣なんて食べないよ。食中りしそうだしな。まあ毒とか俺には効かないけどな。ナノマシンとこの身体の自浄作用を舐めてもらっちゃ困るってなもんだ。大抵のモノなら何の問題は無い。

まあそのことは、今はいいんだよ。とにかくこれで仕込みはできたな。あとは敵の陣容か…。情報では処刑する場所を中心に二個艦隊と精鋭魔法騎士3・000名が展開しているということだが…。

甘い！激甘だ！！本当に止める気があるなら最低でも、この10倍以上は連れてこないとな。これなら楽勝だ。つまらんな…マジでとは言ってみても今回ばかりはふざけるものじゃないもんな。マジメに逝くべきだろうか？

でも、マジになったら一方的な虐殺にしかならんしな…。あ、そうか…。俺から攻撃する前に忠告すればよくね？「死にたくないヤツは俺の周りに来るな！」とでも言えば寄ってこないだろ。それでも来たら、そいつは覚悟を決めたバカだ。丁重に葬ってやろう…。

Side out 葵

ケルベラス溪谷、アリカ陛下死刑執行日当日…。

Side ????

ケルベラス溪谷を前に施設された飛び降り台。その上には今は亡きオスティアの若き女王アリカが今にも飛び込まんと立っていた。ここに死刑執行の時が来たのだ。元老院議員の1人が前に進み出て刑の執行に際し宣言する。

「魔獣うごめく、ケルベラス渓谷……。魔法を一切使えぬ、その谷底は魔法使いにとって、まさに“死の谷”……。古き残酷な処刑法ですが……。この残酷さをもって、ようやく魔法世界全土の民も溜飲を下げることとなりますよう！」

「歩け！！」

議員の言葉が終わる。それと同時に刑の執行をするため、一兵士がアリカを槍の先を向けて台の先へ歩くように命令する。

「触れるな、下郎。言われずとも、歩く」

アリカは自らの足で飛び込み台の上を歩き谷底へ、その姿を消した。

ギヤアオオ……。グアアブウ……。……。ギヤアアアンサー……。

魔獣は飛び込んできたアリカに気付くと、いつもより緩慢な動きで襲い掛かった。どことなく就寝中にご飯を目の前に出された人のようなものだろうか？そのように見えた。

「くっくっ……。王家の血肉は、さぞや美味でしょうな。この処刑方法の長所は、復活がほぼ不可能な点です。魔法の使えぬ谷底で幾百の肉片となって魔獣の腹に収まってしまえば、たとえ吸血鬼の真祖ハイ・デイトライトウォーカーといえども、復活は困難でしょう」

「ぐっ……。アリカ様ッ……」

議員はアリカが落ちた谷底を見て、ほくそ笑む。その様は邪魔者が消えたことを喜ぶ醜怪な老人の顔だった。クルトは飛び込んだア

リ力を助けることができない無力な自分を嘆くように彼女の名前を  
無念そうに呟くことしかできない。

「よろし…」

「よおーし！こんなモンだろ ……」

死刑イベントも終わりを向かえ撤収を宣言しようとした議員を遮  
る声が響いた。本番はこれからだ…。

Side out ????

Side 葵

「よおーし！こんなモンだろ 録れたか？ちゃんと録れたか？？」

…よおーし！ご苦労ッ …おーい！おっさん！」

「な…」

どうも〜 俺達（俺・ハオ・ユエ）は今、ステルス熱光学迷彩で隠れてい  
まーす。他の皆も変装や認識阻害かけてスタンばってます 現在は  
変装したままジャックが議員のことをバカにするように話しかけて  
います。…いや、実際、アレはバカにしているな。

あーあ、議員の人が突然の事態に頭がついていかないから呆然と  
しちゃってるよ。くくくくくくく 若いなあ…。コレくらいで取り

乱したらイカンよ？コレからが本番なんだから

「これ生中継とかねえよな？生中継だと、流石にマズイんだが……」

「無礼者！！何者だ、貴様！名を……又グツ！？」

ガシィィ！！ギシギシ……！ゴリゴリ……！！

おう？痛そう……。ジャックのアイアンクローか……。図体がデカイから議員の頭がリング並みにしか見えんよ。しかも少しづつ力を込めてるし……。いい趣味してるじゃん やっぱり、徐々に力を込めるのがポイントだよな。いきなり潰しても……ねえ？

「おっさん……。録画はここで終わりだ……。で、今からここで起こることは“なかった”ことになる。……わかるな？……ぬんっ！！」

「き、貴様は！？せ、戦の刃の……！？ジ、ジャ……ジャック・ラカン……ッ……！！？？」

ジャックさあ、優しいなあ？オイ。議員の頭、握り潰さないのか？いや、もちろん、わかってるよ？ここで殺しちゃマズイことはなでもさあ……？気絶させるくらい“ギュっ”って締め上げるくらいしても罰は当たらないんじゃないかなあ。……ま、いいか。

それよりも変装用の鎧は脱げばいいのに、なぜに筋肉で破壊する必要があるのかな？……見た目のインパクト狙いか？お前はどこそどの炭鉱の親父か……orzその服、誰が縫って直すんだよ？……あ、変装のために用意したものだし直す必要ないんだっただな。

どよどよよよどよどよどよ……っ！……っ！……っ！……っ！……

なんなのさ？兵の皆さんがどよどよとざわめきだしたけど…。何か珍しいモノでも起きたのかね？こんなところで珍しいモノといったら…魔獣？あれ？計算では、もう連中は夢の中のはずなんだけど…。遅効性の毒にするべきだったかな？

「な！？青山…詠春ッ！？…アルビレオ・イマ！？…それにガトウまで…！！？」

なんだよ、皆のことかよ…。珍しくもない…。まったく、俺の薬師としての腕を疑いかけたじゃねえか。ん？…おい、ちよつち待てや。何で俺の名前が出てこない？…アレ？おお！？…迷彩解除してないよ！？…気付かれるわけないのも当然か。気配遮断までしてるもんな。

ここは一つあの議員の後ろから軽く肩でも叩いて声かけてやるか。くつくつくくくつ ドッキリ大好きなお兄さんです！では早速、迷彩解除してつと、んんっ…。

「…俺達のことも忘れてんじゃねえぞ？小童…」  
こわい

「ッ！？九重・葵…！！…それにッ…！！？」  
アルケミスト・ワン

…何で、そんなに驚いてんだよ？いや、ドッキリ仕掛けた俺としては嬉しいんだけどさ。なぜに、そこまで脂汗？冷や汗？どっちでもいいけど、とにかく、ダラダラ流してんだ？視線が定まってないんだけど…。

あ、薬中か何かか？それとも心臓とか？まさか、お決まりの持病の癪がどうのとかか？…お薬を処方するべきだろうか？いきなり病

気とかでポツクリ逝かれると寝覚めが悪いし…あ、議員のじじいの目に正気の色が戻った。

「なぜっ！」「<sup>アラッアラ</sup>紅き翼」が…！？馬鹿なッ！では谷底の女王は…ヤツはっ！？」

「さあ？どう…かな。案外、今頃、魔獣どもはお昼寝で夢の中かもしれないなあ。んん？くつくつくつ…！」

ここに居ないナギなら今頃、アリカさんとイチャイチャしてんじやねえの？魔獣は原作とは違って寝てるし下手に寝返りとかして潰されない限りは大丈夫だろ。…だいたい、そんな風に2人が潰されたらマジで笑えねえわ。

「ぐっ！…捕らえよ！こやつらは反逆者だ！！谷底の二人も逃がすなッ…！」

「おおつと、やるのか？いいのかよ、その程度の戦力で？」

いやだねえ、必死になってまあ…。てかさあ、ジャックの言うように本当に、この程度の戦力とはなあ。情報どおりといえば情報どおりなんだけど、ね。

「フ、フフ…。その程度の戦力だと？愚か者が…。このイベントの警備は、ここに見えるだけではない！周囲数十kmに2個艦隊と3000名の精鋭部隊が包囲している。いくら貴様らでも、コレを…」

「だから？…その程度の戦力でいいのか？つて聞いてんだよ」

ジャックさん、楽しそうだね？そういう俺も実は楽しいです ま

だ援軍が来ると思ってるバカが目の前で強がってるんだから。フフ、来ない援軍を待つなんて滑稽にも程がある…。ああ皆は上手くやってくれてるかな…。

「それに艦隊や部隊なら来ないんじゃない？…援軍が“無事”に来れたら”いいねえ？フフ、フフフ”」

「なっ！何い！？それは、いったいどういう…！？」

今頃は空の藻屑と消えてるさ。可哀想にね？馬鹿な上司を持った哀れな部下…。同情の余地はあるけど…武器を向けてきたんだ、逆に向けられる覚悟もしているさ。それにしても議員は何を驚いているんだよ？

俺には個人戦力があることは…ああ、情報部か？全てではないにしても記録を改竄して隠蔽したのか？やるなあ この2年で、どれだけできたのかはわからないけど、頑張ったんだろうな。…あとで絶対に「よくやった」って頭を撫でてみせる

「ふふふ、今頃は向こうも大変なんじゃないかなあ 地べたに子バエのように叩き落されて…ね？」

「ッ！！！！！！！！！！」

だから、コレくらいで取り乱しちゃったりしてはダメだって…。もう、情けないぞ？俺の過ごした時間では、この程度はピンチにもならんよ。だけど、大丈夫！殺してはいないはず！…多分だけど。大半は生きていられるさ。

「フフ、フフフ 数には数を、質には質を、そして馬鹿には絶対な

る鉄槌を。調子こいてんじゃねえぞ？小僧。ここからは再教育の時間だ……」

この世の地獄とも、いえるほど骨の髄まで恐怖を叩き込んで、じつくりと味わってもらうから戦闘者としての魔法使いは二度と復帰できないだろうけどな。精神的に無理だろな……。上司の不手際を部下が支払わされる結果になって残念だよな。

「ッ！何をしている！？こやつらを捕らえるのだ！！」

「お、おう！」「え、マジで！？」「……っ？……っ！」「誰から逝くよ？」「お前から逝けよ！」「……！！……！！」

遠巻きにもものすごくペチャクチャと話して相談してんだけど……。つてか！聞こえてるっつの！来るなら来る、来ないなら来ないでハッキリしろって……いや、誰も好き好んで安月給で死地へ飛び込めとか言われても行きたくないだろうけどな。俺でもイヤだわ。

そうだ！ここで諸注意しておかないとな 敵さんへ俺のせめてもの優しさです。誰だって死にたくないものだよ。生物の本能と言ってもいい。ここ、大事なことだゾ？恐れ知らずのバカなんぞ、関わるのもゴメンだ。

「敵将兵に言っておくが俺は他のメンバーより“敵”には優しくない。来るなら命を賭ける。尚これは警告だ。…次は、無い」

「……………」

あ、注意のつもりだったのに警告になっちゃった……。俺の音が聞こえる範囲にいる兵士達が揃って後退して、他のメンバーのほうへ

駆け出していった。無言で素早く駆け出して行くって…。俺って嫌われてんのか？…というかさあ！？」

「…なんで下がるんだよ？ここは「俺が行く！」って仲間のために敢えて前に出てくる場面だろ！？…どういうことーッ！？」

そこが納得できん！ここは強大な敵を前にしても敢えて仲間のためにもと考え、前に出るものだろ！？たしかに最初は相手にするのが面倒くさいから注意（警告）したけどさ…。ほとんどの兵士がいなくなるってどういうこと！？

「お前があんなことを言うからだ、バカ…。これじゃどっちが悪者か、わかったものじゃない」

おろ？詠春じゃん。敵を斬り倒す（峰打ち）のが忙しいんじゃないの？俺の傍なんかに来たら敵が…寄ってこないし。なにコレ？俺の周りはセーフティゾーンとでも言うつもりか？ム力つくなあ、おい？

それにどっちが悪者かなんてのは多種様々な他者の価値観で決まるものだから気にしても意味ないぞ？だいたい、正義など人が意識する、人の考えだから俺は知らん。…俺も元人だけどな！女神（幼女）に人間やめさせられたし…クスンツ。

「…詠春よ？善悪など人間が勝手に作った基準だつてば、己の中に信念があれば、それが正義だよ。…だから気にするな」

「“ ” じゃないだろが？…アレを見るよ。お前を避けた連中がほとんど俺達のほうに来ているんだぞ？」

「ん？…あー、本当だ。皆してへタレだな…。俺には少ししか居ないのに…。不公平だ…。俺が何をしたというんだ…」

「勇気というか蛮勇というべきか、俺の周りにも少数ながら敵兵は居る。それでも攻撃はしてこない。タイミングを見計らっているんだろうな…。ん…。面倒くさいから態と隙をつくって攻撃を誘ってみるか？ううむ、俺の獲物が少ないような気がする。」

「落ち込むくらいなら脅すなよ…」

「失礼な！脅しじゃない、親切心だって！…でも最初は少し敵数が減るくらいかな？って考えてたんだよ！それが、まさか、こんなに減ると思わなかったなあ…。うううッ！俺の獲物！カンバーックウウッ！！！」

「葵…お前なあ…。はあ…後ろをしてみる。理由がわかるから」

「後ろ？何があるっていうのさ。俺の後ろには…」

「ん？我が君、何か？あ、そろそろ殺りますか？」

「ハオと…」

「吾らは、いつでも構いません。準備はできております」

「ユエしかないじゃん…。ん？アレー…？」

「ハオとユエ？…あ、っ」

「「？？？」」「

俺、わかったよ、とつつあん…じゃない、詠春…。まさか、こんなことが理由だとは思わなかった。たしかに、これじゃ誰も寄って来ないのは当然だよ。…なんで気付かなかったんだろ？チツ！この九重・葵！一生の不覚ッ！

「わかったか…。あの2人が睨みを利かせているんだぞ？」

「やはり、そうか…：そうなのか…。つまり俺は“トラの威を借りキツネ”だったのか…。俺自身が恐れられているわけじゃないんだ…」

そう、怖がられているのは俺じゃなくて八才とユエの2人だったんだ。俺は、なんて恥ずかしい勘違いをしていたんだろう！まさか八才達が俺の代わりに睨みを利かせていてくれたなんて…。ん？ということ俺は舐められてるって…：こと？…：#ッ！

なんだが、ソレはソレでムカつくものがあるなあ…：#。もうちょっとヤンチャしとけばよかったかも！今回の大戦に参加するまで半隠居同然の暮らしをしてたからなあ。賞金なんてかけられようもなかったし。

それで詠春は何で先程から、そんなに呆れた目で俺のことをジトツと見ていらっしやるのでしょうか？俺、なんかしたかな…。

「…お前さあ、自覚ないの？」

「え？だって俺のことを怖がっているんじゃないかって、八才達のこと怖かったんでしょ？…俺も二人に嫌われるとこなんか考えただけでも…グスッ！うううう！！！」

「わ！わ我が君！?!」

「はあ、何も泣くことなかるうに…やれやれ」

うつさい、詠春…。お前も家族を持てば理解できるはずだ！家族の誰かに嫌われる…想像しただけで俺は！俺は！……鬱になり千年間引き籠もってしまいそうだorzいつそのこと崖の上から身を投げるか？ダメだ…無傷でいられる確率が高い…。

「グシュ…ズズツ！だ、だって…うううう」

「ご安心を！吾らが我が君のことを嫌うなど天地がひっくり返るうともありえませぬ！！」

「そ、そうです！吾らが我が君から離れることなど天地神明に誓ってありませぬ！！」

「ぼ、ぼん、どうに…えぐつえぐつ…」

「はい！もちろんにございます！！」

「ううう…よかった…」

「（ホッ）」

もう皆…そんな、あからさまにホッとした顔しなくてもいいじゃん。ちよっと悲しい想像しただけなのに…。悲しい…。グシュ…うう…。

「「…キツ！（余計なことを言うな！）」

「…っ！？（スマン！…あれ？これって俺のせいなのか！？関係無くないか！？）」

「「…ギンツ！！（文句…あるのか？コラ#）」

「……………（すみません）」

なにやら詠春が2人に睨みつけられて縮こまつてる？…どうしたんだろうね？まあそれはともかく2人とも普段はキリツとした綺麗なお姉さんだけど怒ると怖いんだよ。何をしたのか知らないけど変なことしちゃダメだからね、詠春？

「んん！とにかく俺は誰にも怖がられることの無い“普通の”お兄さんってことだよな」

「いや、なあ、葵？…それ本気で言ってるのか？」

え？本気で言ってるに決まってるじゃないか。ある意味、俺よりも怖いのかなか他にも、うじゃうじゃいるんじゃないか？例えばハ才達だ。2人を訓練の教官役にしたこともあったけど…俺と違って一切の甘えが許されないから怖いって皆が愚痴を零していたし。

…まあその後日に、どこで聞いていたのか知らないけどハ才とユ工は愚痴を零していた面々を“特別訓練”にご招待したとか…。何があったか皆に聞いても覚えてないみたいだったなあ。悲鳴がしていたから“何か”があったんだと思うけど…。

「お・ま・え・も！恐れられてんの！今までの自分の所業を思い出

「してみる！」

詠春：君は疲れているんだね？でなければ俺に、そんなことを言うはずないもんね。俺は怖くないって…。優しいほうだよ？“家族には”って条件はあるけど…。それに何より俺は恐れられることをした覚えはないよ。目撃者は“居ない”し…。

「…特に恐れられることはしてない、と思うけど？」

ということ、俺の正直な気持ちを言ってみた！自分の身は潔白だ…！

「ゴギャンッ…！」

「ふざけんなよ…！」

「イッテッ！？詠春！痛いでしょや！？思いつきり殴ることないじゃん！」

オモックソ殴られた…。正直な気持ちを言ったのに…。だって俺何もしてないよ？そりゃあ大戦中に、ちよーっち“オイタ”したことはあったけど、記録にはほとんど残ってないし…。目撃者も処理済だ。問題はないはず…。世間にはバレてないよ？

「このバカッ！ある意味じゃお前が一番、恐怖の対象なんだぞ！だいたい何だ！？あの兵器の数々は…！」

「恐怖の対象ってヒドクない！？それにアレは…！家族のための自衛用ですが何か？」

今更、何言ってるの？どの兵器も自衛用ですよ。どんなに強力でも自衛に使われるんだから自衛用です。まあ裏の任務もあるからそれが全てとは言わないけど…。黙っていけばバレません。この世界（主に日本など）は“疑わしきは罰せず”ですからね。

「自衛用って…お前なあ…」

詠春もシツコイなあ…。自衛用って言うてるんだからいいじゃん。そんなに言うなら…今ここで真の自衛行為ってのを見せてやろう！この場で実演して見せれば頑固者の詠春でも納得してくれるはずだ！

「なんなら今ここで自衛の一部を実演してみせよう！」

「あっ！？ちょ！待つ！？」

慌てることないって！大丈夫だから！…周りは知ったこっちゃないけど。ジャック達なら生きているさ！一応、出力は調整して死なないようにはするけど…個人の努力ってのも大事だよな？それじゃ逝ってみよう

「Wake up!ラミエル！」

『Roger, My master!』

「All out!ラミエル！」

ガンガン行こうぜ！ラミエル！ガンガン行こうぜ！！出力はできる限り絞って速射を重視。手数増やして一人弾幕で面制圧を再現してやる！向こうが数の暴力を地で行くなら今回は俺も付き合ってやるっじゃん。本物の数の暴力というものを教授してやる。これは先



「いよおしつ！敵は混乱しているぞ！八才とユエは残敵処理お願い！ラミエル！よくやった！流石だね」

「承知！」

『ふふん これくらい我なら当然だ！』

流石！ラミエルさん そこに痺れる！憧れる！…これで俺のプロテアを分解吸収してなければなあ。もつと手放して褒めてあげるのにな。ううう…。

それにしても敵の悲鳴の中に何やら楽しそうに俺の名前を呼んだバカがいたけど…。もしかして、アレはジャックだったのか？コレだからバカは…。威力は抑えたとはいえ、あの弾幕の中で笑ってられるってどんだけなんだよ。バカには敵わんわ…。

「当然じゃない！違うだろ！？」

「うわ！？びつくりしたなあ。何さ？テンション高いね」

詠春さあ、空気読もうぜ…？ここは敵を屠ったラミエルさんを褒めるところだろ？それを俺の耳元で大声って…マジ、引くわあ。そんなんじゃ嫁さんできないぞ？…あー、近衛の姫さんを嫁にするんだったか？婿養子だけ…。

『我が主よ、我は何か間違えたのか？』

「いや、何も間違えてないよ…。で？いったい、どうしたんよ？」

今回のラミエルさんに間違いはないよな。誰が否定しても俺は肯定しちゃうよ、うん。むしろ俺の要望によく応えてくれたと思うな。速射重視といっても荷電粒子砲なんだ。当たれば必ず命を落とすことになる。良くて手足が吹っ飛ぶことになるだろう。

でも、ラミエルさんは見た目、派手にしても死者は出さなかった。負傷者は多く出たけど。それでも生かして制圧するのって案外と難しいんよ？俺の希望どおりにやってくれたラミエルさんは最高だね。時々、オイタするけど…。

「どうしたも、こうしたもない！ジャックが巻き込まれるのを見たぞ！？」

「…ジャックバカなら大丈夫だって。生きてるよ？だいたい敵兵士が生き残れてるんだから心配ないって」

何かと思ったらジャックかよ…。あいつがマトモに死ぬところなんて想像もできないっての。まあ、あの「造物主の掟」ゴード・オラ・ザ・ライフメーカーでもない限りジャックは無敵無敗じゃないの？バカってコレだからイヤだよな？時として、あらゆる法則を捻じ曲げてくるんだから。

『我が主の言うとおりだ。生体反応は消滅してない。よって問題無しだ。何よりアレが簡単に死ぬと思うのか？』

「む…それは、思わないが…。しかし！仲間がいるんだぞ！？危険じゃないか！」

詠春、シツコイよ？生きてるんだから、やり直しは効くつてば。死んでないんだから大丈夫だよ。それにラミエルさんのセンサーでも敵兵を含めた生存は確認されてるんだからさ。落ち着こうよ？今

から血圧上げてたら歳くつた時に高血圧で悩むことになるぞ？それにさあ…。

「…ねえ、アレ見ても、まだ、そんなこと言える？」

「アレ？……おうorz」

アレを見て、いきなり崩れ落ちるとか、ある意味失礼じゃないか？まあアレを見たら、そうなる気持ちもわからんでもないけど…。

「ハーツハツハツハツ！アオイッ！派手にやったじゃねえか！？オレも巻き込まれちつたぜ！ハーツハツハツハツ！お礼にポッコボコに殴ってやるからな！！…逃げるなよ！！？」

はあ…仲間の心配をしているヤツに、こんなん見せたら崩れ落ちたくもなるわなあ。弾幕に曝されたのに本人は、いたって元気なんだから。ま、余計な心配しなくていいところがいいね。俺は早めに、このことに気付くことができたからは心配すること自体ないな。

ジャックを心配する？これ以上無駄なことは無いと思うのですよ…。いい加減、詠春も、そのことを悟ろうや？

「な？あいつは“あんなヤツ”だって…」

「すまん…。俺の認識がまだ甘かったようだ…」

詠春も、わかってくれたか。あいつの非常識さに気付けば、あとは精神的に楽だぞ？なんせ、無駄な心配をすることがなくなるんだからな。アレのことを心配するくらいならかまわずに拳を繰り出したほうが余程、建設的だと思う。

「人の生命力というのもバカにできんものだな…」

「アレが特別だと思うけどね…。な？詠春」

「ああ、そうだな…」

ラミエルさん、違うよ？ジャックが特殊なだけで、他が普通なんだから。アレを基準に考えたら世界中（魔法世界）に変態が溢れることに…。キモツ！想像しちゃったって！マジでキモかった…。溢れ出るジャックの大军…。マジでへこむわあ…。orz

はあ、とにかくバカやってないで、あとは残敵処理を残すのみか？それもアル達やハオ達のおかげで、もう終わりそうだけど。あ、敵の援軍が来ない？…ということは家族は上手く事を成したみたいだっけことだよな。ふふふ 流石だね。

さて、ナギよ？アリカさんに上手く、かましてやりな。ここまでしてやったんだ。これで失敗なんかしたら…四分の三殺した。覚悟してろや？

Side out 葵

## 第二十二話「下準備と襲撃とバカと」(後書き)

尺の都合でこんなになっちゃった…てへっ  
おゝえゝーっ！！てへっ ってなんだよ？鬱だ…寝よう。

はいっ！バカなことは置いておいて後書きですな。

今回の見えないところの戦闘シーンは番外編で出そうかと思えます。  
ブツちゃけ早く本編に逝きたいですから…。

では！この辺りでお暇します！チャオツ！

PS・感想&評価は随時受け付けています。誤字報告などもあると  
助かります。

第二十三話「記録映像と鑑賞会とアイリスの不安と」(前書き)

何も言うことはない…。

だが、敢えて言うなら…。あと少し…。あと少しで本編ですよ…。

三十話までには本編に逝きたいなあ。まあただの希望だけどな!!  
では、続きをどうぞ!!

第二十三話「記録映像と鑑賞会とアイリスの不安と」

?????..

Side ???2号機

ケルベラス溪谷、谷底..

ザッツ...ザザー...ザツ..

「え...?ナ...ギ...?え...?...?え?なぜ主<sup>ぬし</sup>が...地獄に...?あれ?」

飛び降りたはずのアリカは暖かなモノに抱きかかえられているように感じて目を開いてみればそこには自分を抱きかかえるナギが居た。アリカの頭は現状を理解できないよう言葉は断片的にしか意味をなさない。

「バーカ。あんたを助けに来たんだよ。...アリカ」

「え...?なぜじゃ?」

「.....っ#」

アリカは本当に理解していないためか割りと本気で聞き返した。この暢気な質問にナギの米神に“#”のマークが一つ刻まれた..

「な...なぜ...。なぜ、主がここにおる?」

「……………つ##」

ナギから答えが無いのでアリカは再度、問いかけた。ナギの米神に“#”のマークがまた一つ刻まれた…。

「なぜじゃ…」

「……………つ##」

またもナギから答えが無いのでアリカは再再度、問いかけた。そしてナギの米神に“#”のマークがまた一つ刻まれることになった…。

「答えよ！なぜじゃ！？この愚か者め！！いくら主でも自殺行為じゃー！」

「……………つ##」

とうとう、ナギから答えが無いことでアリカは詰問するように問いかけた。この時のナギの米神に“#”のマークがまた一つ多く刻まれたのは仕方無いことなのかもしれない…。

「魔法の使えぬ、この場では、主も普通人じゃろ！この魔獣の攻撃を一撃でも、かすれば即死は免れぬ！！無謀にも程がある！何を考えておる！？この鳥頭ツ！！」

「……………つ##。…へっ！本来なら確かに、これまでが一番やべえ状況下もしれねえな？…けどまあ魔獣はアオイが眠らせた！問題ねえ！そして、ここからの脱出クリアの景品がアンタだってんな

ら、それも悪かねえぜ!!」

アリカの割と元気な態度に嬉しさを感じる暇も無く。これまでの我慢を言葉として吐き出すように非常に遠まわしの思いをアリカに告げるナギ。…そんな回りくどいやり方で彼女が気付くわけない。案の定、アリカは…。

「な!?!…何を言うておるの!妾は、なぜかと聞いているのじゃッ!なぜ、ここまでの危険を冒して妾などを助ける!?無意味な行為じゃ!」

「…ッ#。忘れたのかよ?言っただろ!?!どこへだって連れてつてやるつてな!」

気付いていない…。いや、そこまで意識する余裕がなかっただけかもしれないが…。一応、ここはケルベラス渓谷の谷底なのだから余裕などあるわけもない。アリカが言ったようにここでは“魔法”も“気”も使えないのだから。

それと、せつかく吐き出した想いも届かなかったことでナギの米神に“#”のマークが新たに一つ刻まれた…。

「っ!り、理由になつておらぬ!!妾は、もはや、そなたの主君であるどころか王族でもない!かの戦争を起こした大罪人“災厄の女王”じゃ!妾の救出に意味はない!」

「…っ#」

ナギの米神に“#”のマークがまた一つ新たに刻まれた…。無言で俯いてプルプル震えている。抱かれているアリカは未だに混乱し

ているためか、ナギの変化にまだ気付いていない。

「妾の価値は、もう、この死にしか無いのじゃ…。頼むッ、このま…ま。！？」

ゴスツ！！！！

「相変わらず、ゴチャゴチャうつせえ…」

「っ？っ？っ？っ？」

アリカの言葉を最後まで言わせまいとしたナギの渾身の頭突きがアリカの頭頂部に炸裂した。ナギも痛いようで目元に涙が浮かんでいる。思った以上にアリカの頭が固かったようだ。一方のアリカは、なぜ頭突きをされたのかをわかっていないようで頭上に“？”を乱舞させている。

591

「あーもー！言わなきゃ、わかんねえかな！この箱入り姫さんは！…理由だあ！？そんなの俺がアンタを好きだからに決まってんだろおが！！」

「は…？」

どストレートな告白にアリカは、ついにナギが言わんとした意味を理解したようだ。

「…なんだよ？その予想もしてなかったって顔だな。…傷付くぜえ。何が“世界を救え”だよ？好きな女一人も救えねえ男に世界とか救えるわけねえだろ、バカ…」

「……（ポ〜）」

「で？アンタはどうだ？」

「（ハ！？）何？！な、何がじゃ！？」

「アンタは俺のこと、どう思ってた？」

「な、なぜ妾が言わねばならぬ！？」

「俺が言ったんだから、普通は言つたら？」

「そ！…：そうなのか？」

「ああ。…：それが礼儀だ。一般常識だぜ？」

「そ…：そうか。し、しかし妾は…：王族であるが故、元々、妾にプライベートは許されぬ。…：それどころか今の妾は大罪人“災厄の女王”。苦界に落ちた民達のためにも、そのような浮ついた話し…：きゅ。！？」

ゴスツ！！！！！！

「何をするのじゃッ！！？」

ナギは、またもアリカの言葉を最後まで言わせることなく先程よりも強く頭突きをアリカの頭頂部に直撃させた。まあそんなことをすればナギも痛いようで、またもや目元に涙を浮かべている。思った以上にアリカの頭が固かいのはわかつているはずなのに学習しない男だ。

「アンタ、もう王族じゃねえって、自分で言ったばっかだろ。…それ  
れに“災厄の女王”もさつき死んだ。アンタは自由だ。もうアンタ  
を縛るものは何一つない」

「……………っ」

「今のアンタは他の何者でもない、ただのアリカ…。ただ1人の人  
間だ」

「1人の…人間…」

「そっ！そーゆーアリカさんとしては、どう思ってるんだ？って聞  
いてんだ」

「な！…っ。その…。…モゴモゴ。…そういう意味でなら…まあ  
…。…という訳でもないがな」

「あーい？何すかー？聞こえねえスー？」

「（ボソツ）嫌いではない」

「んあん！？声小さいス」

「…（ピキッ）##！…ああ！そうじゃ！この2年間1日たりとも  
主のことを考えぬ日は無かったわ！！それがどうした！？悪いか！  
！？」

ナギへの想いを溢れさせたアリカ。いや、この場合はナギの言葉  
がアリカの心の中の堰を破壊して想いが氾濫を起こしたのかもしれ

ない。アリカは物事を溜め込む性質の性格をしているのだろう。

そんなアリカの思いを知ることができたナギは…。

「いや…悪かねえ。…！」

「な？…んぐ…！」

アリカを抱き寄せて彼女の唇に自分の唇を重ねていた。

「…ん…んん…」

「…う…ふ…えぐ…」

突然、いろいろな事が起きて、ここにきて気が抜けたのか、目に涙を浮かべてしまうアリカ。

「アリカ…遅れて悪い。この瞬間しかなかったんだ…」

「…えぐ…ふえ…うえ…」

「あーもー 可哀そうに、こんなにヤセちまってよ。…胸だけは健気に成長した見てーだけどな。俺のため…ここ。ッ！？」

グシャ…！

「調子に乗るでない…。バカ…」

「あ、ああ…。なあ…アリカ？」



ザザッ…ザザザ…ザー…ブツッ…。

Side out ??? 2号機

葵個人の隠れ家セーフハウスの一つ…。

Side 葵

「……………（呆然）」

という訳で昨日のアリカさん救出を果たしたナギの監視映像をアル、ジャック、詠春、俺、そして主役のナギとアリカさんで見えたわけだ。本当ならここにガトウも居る筈だったんだけど折衝役というか襲撃の後始末をしてもらってるから席を外している。

「いやー ナギ達にバレないように撮影するのが大変だったって、うちのモンアソが言ってたけど何とかやり遂げてくれたよ いいモンが撮れたね！アル達はどう思う？」

「ふふ、ふふふ ええ、これはいいモノを見せてもらいました 流石ですね？アオイ」

「ハアーツハツハツハツハハハ！ハハ、ハハハア！アオイ！良くやった！こ、こんな面白えモン見られてオレは…ぷっ！ブウーツハツハツハハ！…！」

「ナギ、アリカ様…その、おめでとう、と言えはいいのか？…それとナギ、アリカ様のことを大事にしてやれよ？その…何かあれば俺も力になる！だから頑張れ！」

3人とも…内2人だけど…言葉はアレだけど祝福する気持ちはあるみたいだね。嬉しそうにしているのが伝わってくるよ。…ジャックは普通に面白いから笑ってるだけみたいだけどな。

でも、詠春はマジメさんだね？せっかく、からかいの…んんつ、お祝いの席なんだからもつと砕けた挨拶もあるだろうに。そもそもの話しだがナギ相手にかしこまっても…ねえ？アリカさんは、どうなんだろ？

俺1人で言葉のみでやり合えって言われたら…逃げるなorz相手になんかしてられん。俺1人ではまず無理。威圧感がハンパ無いですよ？きつと…。アリカさん相手なら少しは、かしこまるかも？元王族だけに表情は読み難いったらないしな。

「……………(固)」

因みに監視映像を見終わってからの2人はまるで石のように固まって俯いてます。…若干、身体がプルプルと震えているのは晒し者になったことでの羞恥心と怒りとか、でも2人の仲を祝福されて嬉しい気持ちとかが頭の中でゴツチャになって整理ができてないんだろね？

俯いていてもわかりません。顔色が赤くなったり青くなったり白くなったり、でも最後には真っ赤になるんです。んふんふん 2人とも若いねー 真っ赤っかではないか？今回、色々準備した甲斐があっ

たつてモンですよ！今も2人のことはラミエルさんが撮影中です。  
内緒だけどな？

今回は、トコトンからかいとおしてやる！！んふふふ　まだパー  
ティーは始まったばかりだぞ

「詠春は堅いなあ。こういう時は新郎新婦をからかいぬいてこそ！  
つてなモンだろうに」

「葵は、そうは言うが、こういうのは最初が肝心だと俺は思うのだ  
が？」

堅い…詠春、堅いつて！今回ばかりは、思いっきりハメ外そうよ  
？友人の結婚が決まったんだからさ。何のために、この隠れ家ヤフハウスの一  
つを開放して会場にしたと思つてんだよ？オモツクソ騒ぐためだぞ？

この隠れ家ヤフハウスな？復興作業している時に内々に確保したのよ。俺と  
家族以外には知る者が居ない秘密の場所。俺達が関わった復興場所  
には一つの町村や都市に対して数箇所の隠れ家ヤフハウスを確保してある。

何かあつた時のための備えつてヤツだな。そして今まさに、役立  
つているのだから、この場所を用意したのは間違いではないはずだ  
！…隠れ家ヤフハウスも、こんな使い方をされるとは思わなかつただろうけど  
な。

とにかく！詠春もゴチャゴチャ言わずにナギ達をからかい尽くせ  
ばいいんだよ！

「エイシュン！ここはアオイの言うとおりだ！からかって楽し…ゴ  
ホソツ！祝福するのは友人たるオレらの役目だぜ！だから存分にか

らかつてやりやーいいんだ!」

「ジャックまで、そんなことを…」

尚も渋る詠春の説得にアルも参加するのか、割と真剣な表情：胡散臭いけど…で語り始めた。何を言って説得するのか、割と興味あります。詠春は石頭なところがあるから普通に説得しても時間がかかるんだよな。

「エイシユン…二ホンの諺に“鴛鴦えんおうの契り”というものがあります。これは仲睦まじい夫婦…つまりオシドリ夫婦のこと！ナギとアリカ様はそのオシドリ夫婦なのです！お互いにオシたりドツいたりして夫婦仲を深めるのです！我々はその様をからかいながら観さ…んんっ、見守ればいいですよ」

「いや、アル…？オシドリ夫婦は“鴛鴦”夫婦であつて決して“オシドリ”夫婦ではないぞ…。そもそもオシたりドツいたりはしない」

「くっくっくつ アルは面白いなあ。はは、くっくっくつ、あはははは！“お互いにオシたりドツいたりして”かぁ？まさに、この2人のことじゃないか！ドツきあつて今の関係があるんだから！くっくっくつ、ははははははは！」

「「……………#」」

そう来たか？くっくっくつくくくくはーっはははっはははははははは！  
!“オシたりドツいたり”かぁ？た、たしかに間違つてはいないな！  
!普段の2人の行いを見ていれば、そう言われても文句も言えん。  
何かあればドツきあつているのだからな！ぶっ！あはっ　くっくつ  
く!

言われている本人達は未だに固まっている。整理することが多過ぎるのだな。まだまだ爆発までは時間があると見た！限界までからかいぬいてやる！2人とも覚悟しろや

「アオイもそう思うか！？実はオレもそう感じるんだよ！お互いにオシタリドツいたりしてってな！拳で語り合う夫婦…。アツハツハツハハハハ、ハハ、ハハハハハツ！イイ！ナギの野郎にはお似合いじゃねえか！なあ！？エイシユンも、そう思うだろ！？」

「ここで俺に振るのか！？ええと…！それは…！世の中、そ、そういう夫婦が居てもいいんじゃない…か？」

ジャック！ナイスアシスト！！詠春も困り顔だ！寧ろそんな危険なネタを躊躇なく放るジャックに痺れもしなければ憧れもしないが！！…ん？

「…てめえら…」「…主ら…」

「…は？」「」

マズッ！？思ったより復活が早かった！！この場は…。

「ふふふ では、私はここで失礼しますね」

あっ！？アルの野郎…自分だけ転移して逃げやがった！！って！こっしちやいらねええ！！俺も早く転移して逃げない！！！！

「…いい加減にしろーッ！！！！！！！！！！」

一步、遅かったー！ー？！？！？！？！？！？！

S i d e o u t 葵

魔法球「ドッグ」内…。

S i d e アイリス

私は今、前回のアリカさん救出作戦時に使用した兵器類の整備状況を確認するため「ドッグ」に自ら足を運んでいた。本来であれば上がってくる報告書を待っていれば良い。だが私は時々、こうして自分の目で確認するのだ。

無論、整備に関わらず皆の働きに疑問を挟むつもりは毛頭ない。皆、自分にできること、任せられた仕事をキツチり果たすからだ。私のすることに特に意味は無い。言ってしまうえば人間で言うところの癖のようなものだ。

敢えて、もう一つ付け加えて言うとしたら家族とのコミュニケーションとスキップだ。なにせ、人数が多いからな。日によっては一日中一度も会うことがない者も出てくる。まあ、葵君が月に何度か「桜の苑」で宴会をするから寂しさのようなものは軽減されている。

「桜の苑」は読んで字の如く桜咲き誇る苑のことだ。あの場所は主に宴会の会場として使われる。因みに葵君のお気に入りでもある。

お昼寝をする時などは良く出向かれていますようだ。

「整備班の諸君、ご苦労！整備班長、整備状況はどうか？」

「ハッ！比較的、被害も軽微でしたので全て予定よりも早く完了いたします。各要項はこちらをご覧ください」

被害が軽微……。たしかに軽微と言っているのだろう。無人機の被害も思ったほどの被害は出ていない。有人機各機も大破、撃墜も無い。多少、DF発生装置が過負荷によって焼き切れかけている物があるが、それも想定内の範囲内だ。

今回の戦闘で敵艦隊と部隊は数十kmに渡り広域展開していたことで、こちらも戦力を分散して対処することになった。私達の作戦任務はアリカさん救出までの時間稼ぎであった……。が、危険ならば排除対象として処理することを許可されていた。結局は、ほとんどを戦闘不能にしたな……。

今後のために命までは取らなかったが魔法使いとしては、ともかく戦力としては二度と使い物にならないだろう……。二度と、な……。葵君に刃向かうモノは、須らく排除するべし。万物の尽くを灰塵としてくれる。フフ、フフフ……

何やら私の思考が黒くなったように感じたが……。まあ私は元悪魔なので構わない、か？イカンな、悪魔の時の思考が、たまに漏れてしまう。少し、気が緩んでいる証拠だろうか。とにかく今は目の前の書類に目を通すでしょう。

「そうか、どれ……。ふむ、よし……。ところで皆、問題無いか？あまり根を詰め過ぎて身体を壊したら閣下が悲しむからな」

「ふふふ。はい！皆、問題ありません！お気遣い感謝します！」

そうか…。私の気の回し過ぎだったか。本来なら私達は一週間程度なら睡眠をとらなくても平気だ。しかし、第三者からは無理をしているように見えるようだ。葵君も私達が平気であることを頭では理解しているようだ。が気持ちに納得できないそうだ。

よく皆に「無理するな」や「ちゃんと休んでるか？」などと声をかけては心配している。その一声が、どれだけの励みになることか…。！帝国に居た時、崩落したオスティアへ救援を働きかけた時は徹夜になったな。…このことは葵君には秘密だぞ？…もし、話したら…クスクス…。

「そうか？報告ありがとう。仕事に戻るといい」

「ハッ！」

さて、整備班の邪魔にならないように視察しながら皆の状況を見て回るか。私の勝手な都合で、この場に居るのだから手早く終わらせてしまおうとしよう。そして歩き出そうとしたが後ろから明るい声が私を呼び止めた。

「アイイリ お仕事、ご苦労さまなの。それで進捗状況はどんな感じなの？」

「ファレノ。それに珍しいな、リチラか」

「はい。お仕事、お疲れ様ですわ。アイリさん」

ファレノは前からよく一緒に居たから珍しくもないが、リチラが居るのは意外だった。彼女の前の所属はミリーさんの下だったので事務仕事ではお世話になっていたな。時々振る舞ってくれる手作りバニラアイスは絶品だった。

彼女は優秀だ。だが問題が一つある…。それは“抜け駆けする癖がある”のだ。「何の？」とは今更、言うまでもないことだろう。誰も見ていないところで葵君を手籠めに…いや、これは言い方が悪い。…と言うより逆だ。

なんとかして葵君に自分を襲わせようと“色々”と画策するのだ。…まあその策が今まで一度たりとも成功したことは無いようだが。まったく、彼女は少し目を放すと葵君にベツタリしようとするから困る。…鉄壁の8人を超えられないから安心はしてられるがな…。

「2人とも、ここに来たりして…仕事はどうしたんだ？」

「もう、交代の時間だもん 葵ちゃんなら今、“と・5”の隠れ家ヤフハウスに入ってるの」

「周囲はわたくし達と交代した親衛隊の他に情報部の者達が2チーム付いていますわ。警備に問題は無いと考えますわ。…(邪魔者が多くて忍び込むこともできませんわ。はあ…葵様に、お会いしたいですわ)」

リチラめ…何か、良からぬことを考えていたな？ここ数十年は落ち着いていたと思ったら、またか…。それに、いくら笑顔で取り繕っても私の目は誤魔化されないぞ。アレは意中の男性に思いを馳せる女の目だ…。まったく、また抜け駆けしようとしたのだな。困った奴だ。

葵君はリチラのことをジャレついてくる姉くらいにしか思っていないようだ。だが、だからこそ！私達が注意しておかないとイカンな…。基本的に葵君は私達家族には甘いからほとんどを苦笑一つで許すか流すかの二択なのだ。…心配だ、主に 操関連で…。

「…と！いう訳で状況はどうなの？アイリ」

「ファレノ…いや、そうだな。状況は、ほぼクリアしている。整備班長が言うには各整備状況も予定より早く完了するとのことだ」

「でしたら、もし次の出勤があっても問題無い訳ですわね？」

「ああ、そうだな。…尤も、しばらく、機動兵器の出撃は無いはずだ。今後の予定は、ほとぼりが冷めるまで、しばらくの間を地下にて潜伏するからな」

「それでは私達は今後どのように行動するのです？ただ地下で燻っている訳ではないのでしょうか？」

リチラ…、葵君のことが無いとマジメで仕事の出来る麗人に見えるのだな…。いや、違うか。葵君のことが絡んでいるからマジメにしているのか？基本、彼女は葵君に害なすモノには容赦というものが感じられないからな…。

まあ、それにも理由がある。前にも少し悪魔契約について触れたことがあると思う。この行為は人の言う契約とは根本的に違う。私達、“悪魔”や“精霊”の、それは最も重要で甘美な意味を持つ行為…。それは己の魂…所謂、自分の存在全てを契約相手に捧げる儀式だ。

その大事な契約を交わした相手に害が及ぶとしたら、そのことを許せるものだろうか？答えは断じて、否だ…。これはリチラや私だけではなく家族の皆がそうだろう。

その例でリチラを挙げてみよう。あれは私達が1stタイプの精魔奇兵になって間もない頃のことだ。百数十年前、旧世界の氷雪吹き荒ぶ北部地方に、とある材料を探しに葵君と私とリチラが行った時のことだ…。

回想、始…。

途中で寄った村で事件に…というより、まあ私達から見たら他愛も無いケンカなのだが、それに巻き込まれたのだ。それは村と相手側との土地の買収についての話し合いが全ての始まりだった。

話し合いは村で一番広い、酒場兼宿屋で行われていたのだが、ここでは私達も昼食を摂っていた。しばらくは互いに関係の無いことだったのだが買収話に村の若者の一人が猛反対して相手に殴りかかったのだ。

葵君は特に干渉する気は無いようでも食事を続けていた。しかし、その時に運が悪いことに騒ぎを起こしていた一人が投げた椅子が葵君のほうに飛んできたのだ。もちろん、それは私が排除して事無きを得た。多少の殺意は漏れたかもしれないが気にするまでも無い…。

さて、ここで終われば良かったのだが、またややこしい問題が芽を出した…。そう、リチラだ…。彼女が葵君への無礼に激怒したのだ。リチラはゆっくりと椅子を投げつけた青年に近付いて徐にその首を掴み吊るし上げたのだ。

持ち上げられてバタバタと手足を動かして必死に呼吸しようとする青年。ただ見ているしかない他の人達は何が起きたのか、わからないまでも本能的に感じた。建物内が瞬く間に冷たい殺気に包まれて誰一人動くことのできない状況になっていたことに…。

下手に動けば即座に殺される…。誰もが、そう確信した。…だが、そんな中で動く者が居た。それは葵君だった。彼は先程のことを特に気にした風でも無く、リチラに落ち着くように話したのだ。それでリチラは渋々ながらも手を放して、その場では怒りを霧散させた。

このまま何も無ければ怪我人も死者も出なかっただろう。しかし、人は往々にして負の感情に囚われ易いものだ。

…後日、材料を採り終えた帰り道で、それは起こった。狩猟用のライフルで遠距離からの狙撃されたのだ…。やったのは前日にリチラが吊るし上げた青年だった。動機は逆恨み。そしてまたまた運が無いことにリチラを狙った弾は逸れて葵君の腕を掠めたのだ。

青年の放った弾丸が外れたことで失敗したことが、わかると青年の仲間が次々と姿を現せて数で攻めてきたのだ。葵君の怪我、攻めてくる人間達…。それらを見た、リチラは、ついに…キレた。

“氷漬け”。

それはまさに一言に尽きる…。雪の降る山岳戦でリチラは敵とな

る青年を…。葵君に仇なす人間共を次々と氷像へ変えていった。二度と融けぬ氷像へ、と…。あの時の彼女の表情は今思い出しても寒気がする。

どこまでも透明な瞳…。どこまでも冷酷な光景…。どこまでも純粹な殺意…。精魔奇兵になって増した力にも振り回されること無く、ただ淡々と敵を始末していく姿…。恐ろしくも綺麗だった…。

回想、完…。

それが、今ではコレか…。はあ…。私の、あの時の感動を返してほしいものだ…。

「ふむ。リチラ、その質問に答えよう。閣下から「最低限の警備を残して休暇に入れ」、との辞令が下りた。よって我々は二個中隊規模（24人）で順次、休暇に入る。…他に何か質問はあるか？」

「…葵様は、いつ頃、休暇に入られるのでしょうか？」

本当に今の彼女はわかりやすいな…。何もここまで真剣に…。いや、訂正しよう。何も知らなければ私でも同じことをする気がする…。orzしかし、それでも私は彼女よりはマシだと考える。自制心というものを私は持っているつもりだからな。

「（やはり、来たか…）安心しろ、リチラ。閣下とハオさんとユエさんを初めとして我々、親衛隊も同時期で休暇に入る。…どうだ、

嬉しいだろっ?」

「……………(ふるふる)。ええ!ええ!アイリさん!貴女は最高ですわ!うふふ 最高の休暇になりそうですわ」

なんとという喜びようだ…。休暇はまだ先なのに、もう彼女の頭の中には葵君とのバカンスしかないのだろうな。何を想像したのか、知らないが表情が蕩けきっている…。というか、こいつは“どこまで”する気だ!? 休暇中は警戒が必要だな…。

【…ファレノ、ファレノ…リチラが休暇中に暴走したら手間だ。皆には注意しておくように連絡を頼む…】

【…了解、なの。皆に連絡しておくの…】

予防策は確保した。これで、いざとなれば皆と協力して彼女を説得すれば問題無い。言ってわからない者には、それ相応の力で制圧するのみ、だ。それにせつかくの休暇なのだから葵君とのんびりと過ごしたいのだ。妨害されてなるものか!

「うふふ そんな…このようなところでダメですわ〜 でも、葵様になら〜 …うふ うふふふ」

「ダメだ、こいつ…早く何とかしないと…orz」

「なのー…orz」

真剣に対策を講じる必要があるかもしれない…。この時、私が考えたことは間違いではないと思うのだ…。

S  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t  
  
ア  
イ  
リ  
ス

第二十三話「記録映像と鑑賞会とアイリスの不安と」(後書き)

あれ？新キャラがダメな子になりつつ…ある？

そんなバカなorz

作者にコメディは、まだ早い気がする…。笑ってムツしいですね…。

これは作者の脳内で会議を開く必要が出てきたな。

次回は京都を舞台にしたいと思います。でも2、3話で終わらせる

予定…。

予定だけどね？

では、また次回お会いしましょう！！チャオツ！

第二十四話「京都観光と温泉と危険と」(前書き)

はい！というわけで京都入りしました葵達「紅き翼」+  
ある意味ここからが分かれ目かな？と思うのですよ。  
では続きをどうぞ！

## 第二十四話「京都観光と温泉と危険と」

日本国京都某所…。

Side 葵

どうも、どうも！突然ですが俺は今、日本の古都、京都にいます！いやー、雰囲気いいねえ 心は日本人だから癒されますな。ここに来た理由は家族と観光…だったら良かったんだけど。実は新世界から逃亡してきたんですよ。

「紅き翼」(ガトウは事後処理のために別行動)とアリカさん、それに俺のファミリーの一部(陽月姉妹、精霊三人娘、悪魔三人娘、親衛隊の皆さん)が行動を共にしているんだ。アイリ達には別で旅館を用意したよ？人数、多いと目立つしね。

あ、精霊・悪魔三人娘んだけどね？彼女達に特別性の偽体ぎたいを用意したんよ。偽体というのは…まあ、ブツちゃけて言えば某死神達も愛用しているもののパクリなんだ。もちろん彼女達に適合するように調整しているから使えるよ。

今回、偽体を作った理由は精霊さんが今までだと食事の意味…と言うより食事自体ができなかったからなんだ。味見程度ならできるけどね。だから料理はしようと思えばできるんよ。

で、偽体に擬似的に憑依することで人と同じ生理現象を再現してみようと考えたんです。折角の家族旅行(それも含めて)だからミ

リー達にも楽しんでほしいと思ったんだ。それに旅行と言えば温泉、観光、そして美味しいご当地料理だと思っただよな！

オリビエ達は食べることは問題なかったけど顕現できる時間は一週間が限界なんだよな…。彼女達用に調整した偽体に憑依することで擬似的な肉体を再現。限界時間を誤魔化したんやね。それに悪魔らしい角や翼、尻尾なども隠せて見た目、まんま人間ですよ？黒髪美人さんです。

ミリー達の姿は基本的に人のそれだから問題は無いね。まあ精々が髪と瞳の色が鮮やかなだけだな。これが綺麗なんだよお 蒼、碧、紅の色の髪や瞳が日の光を反射してキラキラと煌いて、もう…！…はあ 美人さんだよなあ。

おう！？今、気が付いたが話しが脱線しまくりだ…。気を付けないな。

「まあ、とにかく今、俺達は京都に居ます」

「我が君？」

「あるじー？」

「主？誰に話しているの？」

「うん、なんでもないから気にしないで」

「……はあ」

気にしたら負けだよ、皆。世の中、曖昧にしたほうがいいことの

ほうが多いんだからさ。

今回の俺達って客観的に見ても人数が多いからね。修学旅行生の1クラス分はあるんじゃないかな。27人だしさ…。移動にはバスを貸し切っているし。因みにナギとは別行動。さっきも言ったけど、いくらなんでも俺達に混じって行動するのは目立ち過ぎるでしょ？

それでナギの野郎な？別行動なんだけど…。んふんふん

回想、始…。

京都の隠れ家某所…。

あの救出後、ほとぼりが冷めるまで新世界から逃亡してきた俺達「紅き翼」とアリカさん。詠春の実家がある京都。彼がしばらく滞在できるこの隠れ家を用意してくれた。すでに、ここに滞在して数日経っている。

俺の家族は申し訳ないけど、隠れ家にはそんなにスペースがないから「工房」内に待機してもらっていた。でも、この数日を使って滞在できる旅館を確保したから順次休暇のために呼び出したよ。これまで働き詰めだったから、のんびりしてほしいよね。

「ナギ、旧世界なら奴らも容易に手出しはできん…。と！という訳で俺達は観光に出かけてくる！」

旅館のほうは、向こう数週間は宿泊する予定でいるから…旅館自体を貸し切ることにした。出費がすごいことになったけど、たまにはこういうのもいいよね。ナギヤンも来るみたいなこと言ってたけど…まさか、温泉目当てか？

んー…、料金は別で取ってやろうかな？…あ！でも、結婚するんだから俺からのささやかな、お祝いの気持ちとするかな…。まあ、それはともかく家族の皆と思いつき、作りたいし。何より温泉を貸し切れるのが最高！

「んあ？あー、いいんじゃないの？行ってこい、行ってこい。俺も…」

「デート か？」

「…うつせえよ！いいだろ！…約束だからな」

何、照れてんだよ、こいつ。上映会の人にキスシーン、かましてんだから今更、恥ずかしがるなよ。…隠し撮りだったけど。あの時の二人の暴れっぷりはすごかったの一言ですな。照れ隠しにも限度というものがあると思うんだ。

あわや、記録データが破損するかと思ったよ。あの隠れ家も半壊して使い物にならないし。もう使えなくなつたよ。ええ、もちろん後日、破棄決定しました。実際ね？あんなに騒いだら隠れ家の意味がないんだよ。

「なーに、拗ねてんだよ？あ…んふふ まだ鑑賞会のことを根に持ってるのか？」

「うっ！うっ！うっ！うっ！さい！うっさい！！もうソレはいいだろ！行くなら行ってこい！！」

「くくくくつくく 赤くなりやがって初心だねえ。…あー、わかった、わかったからあんちよこを出すな。大呪文を唱えようとするな」  
「ケッ！」

照れ隠しにも程があると思う。隠れ家半壊のことといい今回といい。何で？ねえ、何で？こいつらは何でこんな過激なの？からかうのも命懸けですよ。…今更、やめてやらんけどな！被害はバカにならないけど負ける気しないし！

「そんじゃ、行ってくる。お土産は…いらんな。しばらく滞在する奴らには無意味だ」

「おう！行け、行け！」

「はいはい、行ってきます」

「ったく、こいつは。まあ、いいか…。おう！？もう、こんな時間！早く待ち合わせ場所に行かないと！」

回想、完…。

て！なことがありました！ナギのヤツも今頃デートしてるんだろ

うなあ。俺も彼女欲しいな！こんちくしょー！

「葵様、葵様！ほらっ！金閣寺ですよ、金閣寺！キラキラしていて綺麗ですわね」

「本当だ。綺麗だね、リチラ。…それにしてもテンション高いよね」

「そんな…わたくしが綺麗など… 葵様ったら」

「ごめん、リチラ…。時々、君の言っていることが掴みきれません。綺麗とは言ったけど金閣寺のことだからね？あれ？というよりもリチラが聞いてきたことだよね？それと、なぜに俺にくっついて腕を取り、しな垂れかかってくるのでしょうか？」

「お兄さんはドキドキですよ。ああ、素敵で柔らかいモノが腕に当たるう！しかし！退かぬ！媚びぬ！省みぬうう！ああああ、でも彼女の女性としての魅力がああああ…。おふ！？今、ふにゅんって！ふにゅんってしてるよおおお！？」

「くっ！いくら家族として安全な人認定されていても、これは…！」

「はいっ！リチラッ、ストップ！」「リチラッ、ちよーっと待つの…！」

「うおっ！？なに？なに？？なに？？？」

「ふえっ！？なんですの！アイリさん、ファレノさん！」

ビククリした…。ちよっと脳内で煩惱と死闘を繰り広げていた



気にしないで見たいところに行くから少し歪な順繰りになりそうだけれど…。この世界に送られる前は金閣寺しか見たことないから実は結構楽しみなんだよ

「みんな、元気だねー。ねー、あるじー？」

俺の服の裾をぎゅっと握ってきたウーリがそう言う。かーいーな

↓

「ん？そうだね。ウーリは楽しんでるかな？」

「んー？うん。みんなと居られるから楽しいよ」

「そっか」

ナデナデ ナデナデ ナデナデ

「んにゅ？んゝ にゃー」

ウーリの髪は柔らかいねえ 暖かい日差しに相まってウーリの碧色の髪を撫でていると俺も気持ちよくなっちゃうね。ウーリは目を細めて気持ち良さそうに撫でられてるよ。はあー…ほのぼのするなあ。

「主、あちらに甘味処がありますぞ。行ってみませぬか？」

おお、マリー、ナイス発見だ。君は素晴らしいよ。なんとなく京都に来たら甘味を食べたくなるんだよね。これは俺の気分の問題なんだけどな。

「いいねえ。餡蜜が食べたいな。ハオ、ユエも行くこつ」

「ハッ、お供いたします」

ハオもユエも食べること自体はできるからね。栄養にはならないから完全に嗜好品扱いだけだな。美味しいって感じることはできるんだから食べれる時は食べてほしいって思うんだよね。二人も女の子だから甘いものが好きみたいだし。

ふふふ 今日には遊び倒すぞーッ！

Side out 葵

京都府内某所の旅館…。

Side マリエール

今日一日の京都観光を終えて、宿泊地となった旅館に帰還した。そして夕餉を頂き、その後は皆それぞれの時間を過ごし始めた。

その中で私達は今…。

チャポンツ…。

「ふう、良い湯だ…」

「本当ねえ」

「あー」

旅館の露天風呂にて入浴中……。娯楽の一種として沐浴はしていたがやはり露天は趣があつて良いものだ。本来なら必要は無いが、この偽体に擬似憑依してからは毎日、入浴している。

休暇を逃亡先の日本の京都で過ごすことになった私達だが観光も料理も、そして温泉も楽しめた。主も銀閣寺と相国寺のことを嬉々として見ておられたようだしな。

「ふふふ。ああ、そうだ。2人とも今日は、どうだったかなあ？  
主様と楽しめたかしらあ」

「ん？ああ、なかなか有意義な時間を過ごせたな。うん、楽しめた」

「ウーリもー、楽しかったよー。葛餅、食べたのー。甘くてー、プルプルしててー、おいしかったのー」

「む？私はお汁粉を頂いたな。柔らかいお餅と優しい甘みがなんとも美味であつた」

うむ、実に美味であつた。味覚があり食事をするというのも悪いものではなかったな。ウーリと一口ずつ交換して食べてみたが葛餅も柔らかく蜜の甘みが程よくて飽きがこないものだったように思える。

そつえばミリーのほうはどうだったのだろう？

「そう、楽しめたのねえ 私も楽しかったわあ オリビエ達とお土産屋を見て回ったりい、甘味屋をハシゴしたりい、皆で写真撮ったりしてえ。…本当に楽しかったわあ」

「そうか。ミリーも楽しめたのだな。ん？しゃ、しん？…！」

「しゃしん？写真…。現代では比較的簡易な映像記録媒体…。思い出の記録の定番…。今日の観光で、それを私は、したか？…あれ？したのか？？」

「??マリー、どーしたのー？」

「シマッタ…。私としたことが今日の記念の写真を撮ることをしていなかった。クツ！折角の主との思い出が…」

「今から観光をやり直すか！？いやいやいや！今日という日はもう終わってしまった…。同じ時間は二度としてない…無理だ。いや、しかし、似たような時間を過ごすことはできる？違う、ソレは似ているだけで劇をしているのと変わらない…。」

「仕方ない…今回のことは諦めるしかないのか？まさか、ここでウーリ達相手に愚痴るような無様をさらすわけにはいかないからな。はあ…。」

「んー…？おー！うん、大丈夫だよー。記録はアカトンボがしているから問題ないよー？しかもー、高画質でー」

「な…に？それは本当か、ウーリ？本当なのだな！？」

「ウーリは記録していると…言ったか？」

「ブイー このウーリに、ぬかりなしなのだー」

「うふふ ウーリは偉いわねえ」

「でかした！ウーリは偉い！それと…後で焼き増ししてくれるな？」

「おーけー」

やった やった ウーリ！よくやってくれた！やはり、旅の記録は残すものだな これで私のコレクション…げふんっげふんっ…思いが増えるというものだ。うむ！

「感謝する！」

「えへへー」

「あらあら まあまあ」

この時の私は舞い上がっていて気付かなかったことだが、後日記録映像を見たことで気付いた。撮影がアカトンボということで被写体の目線がまばらで、まるで隠し撮りのようになっていたのだ…。

しかし、これはこれで…

Side out マリエール

同旅館内の男湯…。

Side 葵

はあ、いい湯だねえ…。日頃の疲れが癒される思いだよ。それにしても隣の女湯は賑やかだね。男は俺とナギ達しか居ないから…。最初から男女比がおかしいっちゃんおかしいんだけど、まあこれは仕方ないよな。

今、男湯で湯に浸かっているのは俺だけなんだ。寂しいなんて思っていないだからな！本当なんだからね！？…アホなこと言っただけで月見しながら、ゆっくりしよう。

「ふう…」

ガラッ。

おろ？誰かが入ってきたな。俺は湯船の奥のほうに居るから人影は湯気でシルエットしかわかんない。…誰だ？

「いやー！疲れた、疲れた！とうっ！」

ジャバンツ…！

…とうっ、じゃねえよ、とうっ、じゃ。飛び込むなよ。波が立つだろうが。俺の顔にもダイレクトにかかったぞ、コラ#。そして入ってきたヤツのことだが声を聞いてわかった。…ナギのバカだ。あいつ他に誰も居ないと思って温泉に飛び込みやがった…。

「こんの！バカが！飛び込むなんて、てめえはガキか！？ゆつくりと入れんのか！」

「うおう！？…なんだ、アオイじゃん。ビックリすんじゃないか」

「ビックリじゃねえよ。何、湯船に飛び込んでんだよ…」

本当にね？ビックリとかじゃなくてさ。はしゃぐなどまでは俺も言わないよ？言わないけどさあ…普通いい歳した男が温泉目掛けて飛び込むか？ガキじゃねえんだから、やめろよなあ。他に人が居たら迷惑だろうが…。旅館は貸し切りだから居ようがないけどな！

なんだ？ナギよ、何をそんなに不満そうにしてんだよ？言い訳でもあるのかね？

「固いこと言うなって！こんなに広い風呂なんだ、少しくらい、かまやしねえって！」

「かまうわ！俺に波がダイレクトにかかってんだよ！静かに入りやがれ！いいな！？」

まさかの開き直りですか！？公共の場で、そういうことをしちやいけません！お兄さん怒りますよ！？メガツサ怒りますよ！？温泉好きなお兄さんとしては…ヤルぞ？それも割と徹底的にヤルぞ？温泉好き舐めんなよ？

「ケツ、なんでえ、ちよーつとくらいいいじゃねえか…」

「よく聞こえなかったが、何か言ったか？コラ#」

この期に及んで自分の非を認めないつもりか？くくくつくつく！  
お兄さん、キレちゃうぞ？仲間とはいえ…いや、仲間だからこそ、  
遠慮しないでヤっちゃおうぞ？

「何でもねえよ！」

「そうか。…それで今日のデートはどうだった？楽しめたか」

「まったく、聞こえてるんだっての…。ふう、まあいい。なんだかんだ言っても俺も楽しかったからな、今日は。ナギのほうはどうかね？

「うつせえ…。ああ、楽しかったな。アリカも表情はまだまだ硬かったけど楽しんでたのは傍に居てわかったしな」

「いきなり、惚気かよ…。聞いておいてなんだが砂糖吐きそうだな。それでどこ行っただ？」

「皆さん！聞いてください！こいつ、ナギは独り身の俺に対して彼女…ならぬ、嫁さんとの惚気を話し出しましたよっ！？マジでやってらんねえわ。何が悲しくて人のストロベリツた話しを聞かなきやならんのよ。」

「他の人ならともかくナギがこうなるとは思いもしなかった…。いや、聞いたのは俺だけどさ？でもねえ…実際、聞かされてみなよ？秀困気が甘すぎて砂糖、吐くぜ？…温泉がべつつくからしないけどさ。」

「惚気言っな、バカ。あー、どこ行っただかだったか？エイションが言っただキヨミズノブタイっていうのに行ってきたな。他にも色々行って、どっかの神社で一緒にオミクジって占い（？）みたいなもの

もやったりした」

「そうか…。って！やっぱり、惚気じゃねえか！何だ、お前！？彼女…と言うより嫁の居ない俺への皮肉か！？」

皆さん！聞い（以下略）…。

それにしても清水の舞台か…。今度、行こうかな？うん、次の目的地にしよう。あ…。皆の新しい衣服も購入したいな。彼女達も女の子だし新世界のほともかく、旧世界の服も欲しいだろうしね。買い物時間を作っとこう。

で？ナギさんや。本当のところはどうなのかね？ぶっちゃけ、からかってますけど

「バツカ！？ち、ちげえよ！惚気てなんかねえ！何で、そうなるんだよ！」

「…はあ、お前って本当に、この手のからかいには弱いのかな？幸せなんだったら自信持つて言えればいいんだよ。どうだ！俺の嫁さん美人なんだ！いいだろ！？ってさ。…それとも幸せじゃないのか？」

こいつ、本当に口での勝負弱えなあ。動揺が激しいんだって。軽く流すなりやり方はいくらでもあるだろうに、バカ正直にうるたえやがって。嫁さん中身は…アレだけど外見は文句なしで美人さんなんだから自信持てよ。

そしてナギが吐くであろう、次のセリフを確保するためにエセ宝物庫からボイスレコーダーを取り出して…。カチツとな

「あ、う、え……。つゝゝ！ああ、そうだよ！幸せだよ！好きな女と一緒に居られんだ！これ以上の幸せはねえよ！」

「……よく言った！それでこそ男ってモンだ！俺はお前を見直したぞ！そしていいネタを、また頂きました！ごつつあんです！！」

「は？あーっ！？てめっ！それは！？」

フフフのフ 今更、気付いても遅いんだよ

「ポチツとな」

『ああ、そうだよ！幸せだよ！好きな女と一緒に居られんだ！これ以上の幸せはねえよ！』

俺はボイスレコーダーに記録されたモノを確認の意味も込めてナギの目の前で再生してやった。……ふむ、バツチリ録音できたようだ。これなら問題ないかな？もちろん、ネタとしてな？んふふふふふ

「あわ、あわわわ……！」

「んふふふ あとでアリカさんに聞かせてあげようつと 喜ぶんじやないか？お前の素直な気持ち録音とはいえ聞けるんだから。なー？」

「うわっ！待て！待ってくれ！ソレをよこせ！」

「待・た・な・い それじゃあ俺は、もうあがるわ。あー、ナギはまだごゆっくり〜」

パチンツ

俺はこの時、追いかけてこようとすゝるナギに、申し訳ないと思っ  
たんだ。だって、来たばかりなのに温泉から上がるうとすゝるんだぜ  
？かわいそうだろ？そう思ったら左手で指パチンツをして拘束魔法  
を使つてた。単純だけどバカみたいに魔力だけは込めたヤツを、な

後悔も反省もしてない。なぜなら、これは俺の好意だからだ。  
…  
それじゃ、のんびり浸かつてねえ んふふふふ

「ツ！？これは！…待てー！ツ！早まるな！アオイー！ツ！！」

聞こえないい 聞こえないいたら 聞こえないい ラララ

Side out 葵

同旅館内の一室…。

Side アリカ

ふう…、我が騎…いや、もといな、これは違う。ナギめ、あのよ  
うに、まるで快活な少年のように、はしゃぐとは、な。今日一日は  
疲れた…。ふふふ。ああ…たしかに疲れはあるが、楽しかった、な  
うむ、楽しかった。

ここに居て皮肉なものだと感じてしまう。この世に生を受けてか

らというもの王族としての勤めを全うしてきた。この身は国のため、民のためにある、としてきたのだ。なのに、今の私は自分の…個人の幸せを掴もうとしている。

むろん、今でも愛する民らのことを想う気持ちもある。世界のために祖国を亡ぼした自分が幸せを手にしてもいいのか？という考えも当然ある。…それに何より“あの子”のこともある。じずればあの場所から助け出さねばなるまいが…。

あの子は、今まで過酷な生を過ごしてきたこともあり、まだ感情の表現が下手だ。辛いことだが無表情と言ってもいい…。悲しいこと、だとも思う。何が悲しいって、あの子は自分自身で悲しいことだと理解していない…いや、できていないのだから。

ただただ、空虚な瞳で見ているのだ。それさえも、ちゃんと見ているのかも怪しいが…。救出後の、これからの人生は違う生を過ごしてくれたらいいと願うばかりだ。

「ふう、一人になると、どうも余計なことばかり考えてしまっな…」

国や民のことを考えていたはずなのに気が付けば自分自身のことやあの子のことを考えるようになっていたことには軽くだが驚きのようなものを感じる。

「ふふ、これもあの者の影響なのかの」

そうだ、救出できたならあの子には明るい人を傍につけたほうが良いか？ナギやジャック・ラカンはどうだろうか？ああ、そうだ、良いかもしれぬな、うむ。いや、ジャック・ラカンだ…と…？

「ジャック…ラカンと…一緒、だと？これは…マズイか？」

心配だ…。あのバカ者とあの子が一緒に居ることに、よく考えてみたら不安を覚える。あの子は良くも悪くも純粋で真っ白な子だ。あのバカ者の影響で、そのバカがうつらないかが心配で、不安だ。

「いや、もしかしたら妾の狙いどおりジャック・ラカンのバカ能天気なところが…」

そうか…。もしかしたら、少しは明るく快活な子になるのではないか？バカがうつりそうで、いささか…いや、かなり…いやいや、ものすごく不安ではあるが。あの子にはいい刺激になるのではないか？

「ふむ、しばらくは保留とするか…」

トントン…。

「アリカさん？居ますかー？ちょっと面白いモノが手に入ったんで聞いて欲しいんですけど」

珍しいこともあるものだ。ここにきて何か問題でも出てきたのか。もしや、追っ手が差し向けられたのだろうか？いや、その可能性は砂粒ほど低い。アオイの手の者達のことだ、その心配は限りなく低い。何はともあれ入ってもらおうか。

「アオイか？開いている。入るがいい」

「お邪魔します。こんばんは、アリカさん」

「うむ、そこに座るがいい。それで聞いて欲しいものとは何だ？」

「んふふふ 多分だけどアリカさんの喜びそうなモ・ノ」

「????」

妾の正面に座ったアオイはイタズラ小僧のように笑っている。む？…なんだ？この不安…違うな、むず痒いような感覚は…。

「まあ前置きは省いて早速聞いてもらいましょう！ポチツとな」

『ああ、そうだよ！幸せだよ！好きな女と一緒に居られんだ！これ以上の幸せはねえよ！』

「……………」

なんだ？今のは、ナンだ？頭がクラクラする…。

「どうよ？さつき温泉に浸かっている時に聞き出したんだけどさ。嫁さんとしては旦那さんのこのセリフは嬉しいんじゃない？」

「……………」

温泉…？嫁…？旦那…？ナギ…？

「アリカさん？あー…、ダメだこりゃ」

「……………」

「あ？お帰り」

え？あ？え？おかえり？

「アレ、妾は…どうして？」

「ポチツとな」

『ああ、そつだよ！幸せだよ！好きな女と一緒に居られんだ！これ以上の幸せはねえよ！』

「……………」

ぼく……………。

「いいから！それは、もういいから！！お願い！戻ってきて！」

ハ！？そつだ、思い出した。これはナギの声だ。なにか、嬉し…  
んんっ！！よくわからないセリフを聞いた気がしたが…。ふふ  
ふ

「あ？あ、ああ。すまない。少し、放心していたようだ、こほんっ」

「…（ボソツ）アレで、少しかよ」

「ん？何か言ったか？」

「いいえー、何も言ってないよ」

「ふむ…」



「ん？」

む？聞こえなかったのか？仕方ない、もう一度…。

「…かった」

「聞こえない ワンモアア」

「こ・の・っ!？」

「ああ、嬉しかった!!これでいいのでだろう!?!何だ!?!文句あるのか!?!」

「うん 素直が一番だよ。…いつまでも仲良くね？」

「ふ、ふん!言われるまでもないわ!」

まったく!張り合いのないヤツだ!これがナギならば…ブツブツ。

「ふふ。それじゃこれはあげるね」

「む?こんなもの貰っても…」

先ほどのボイスレコーダーを手渡されたが…。これをどうしろと言うのか？

「いいから、いいから…これがあればあのバカをからかえるぞ?」

「貰っておっっ」

「即答か…。まあいいや、それじゃ俺は…」

うるさい…。ナギにはこちらのペースを乱されるが逆は滅多に無いのだ。こういうものはいくらあっても足りることはない。今後のふ、ふふ夫婦生活を考えると…な？

ズズウウウウウン…。

そのような、のほほんとした会話をしていたら…龐大な魔力の流れを感じた。

「「っ！！」」

妾とアオイは即座に立ち上がり皆の元へと駆け出そうとする。しかし、そうしようとした時、アオイに待ったをかけられた。

「アリカさんはここに居て！」

「な！？妾とて！」

「ダメツ！こんなことが起きたんだ。アリカさんが表に立つと事態がややこしくなるかもしれない。ここに居れば俺の家族が問答無用で堅牢鉄壁の如く守ってくれるから、ここに居て！」

アオイの言葉に、妾とて戦える！と言おうとした。だが、それを遮って言ったのは、またもアオイだった。たしかにアオイの言うとおりだ。妾は逃亡中の身だった。ここで妾が表立って動けば、いらぬ誤解を呼び込むかもしれない。

「ッ!!…っ。わかった。そちらは任せる」

「任された!」

皆、無事に帰ってくるのだぞ…。

S i d e o u t    アリカ

第二十四話「京都観光と温泉と危険と」（後書き）

マズイ……。このままじゃ2、3話じゃ終わらない。どうしよう？

4、5話になりそうです。どんなに練習しても作者の文章力は低い  
ものですね。

フフフ、いいんですよ？地道に頑張るだけですからね。フフ、フフ  
フ……。

まあ作者の作品は基本、妄想と自己満足でできていますから気にし  
ませんけどね。

では！また次回お会いしましょうね！チャオッ！

第二十五話「スクナ復活と「紅き翼」出撃と親衛隊と」(前書き)

うん、京都編の続きです。どじろ。

## 第二十五話「スクナ復活と「紅き翼」出撃と親衛隊と」

京都府某所の旅館内…。

Side 葵

俺は大きな力の流れを感知した。そしてアリカさんのところから割と急いで皆が集まっているであろう旅館の玄関ロビーに向かっている。部屋じゃないのか？って？…だって、こっちから皆の魔力反応があるんだもん。

あ！居た！

「何があつた!？」

「アオイも来たようですね」

「アル、詠春！何があつた？大きな力を感じたが」

今、ロビーにはアルと詠春、ジャックが居る。…アレ？誰かを忘れていたような。…気のせい、か？

「ソレについてはエイシユンから説明してくれますよ」

「ああ、アレはリヨウメンスクナノカミという遙か昔、千六百年近く前に討ち倒された大鬼神だ。今までは荒御霊として封印されていたが、ここにきて封印に綻びができたらしい。復活は時間の問題だ

…」

「へえ、俺の一回り、先輩か…。それでソイツ強いのか？」

そうか。スクナってここでのイベントなんだ…。ああ、ああ！少し思い出した！ネギが戦う十数前に一度復活しかけて、それをナギ達が再封印したんだ…。っけか？

むう、具体的なことは思い出せないけど、こういう変に細かいところは覚えているもんだなあ。こんなことなら予め起こるであろうイベントをノートに書き出しておくんだったな。失敗だったわ。

それにしても千六百年も前の大鬼か…。うん！ある意味で大先輩ですな！なんてったって俺の一回り先輩だよ？まあ荒御霊…。ようは荒神としてだから破壊や災厄しか齎さないけど。それでも祭ることでも毒を以って毒を制するんだから、よくやるよ。人間は。

それと聞いておいてなんだけど強さは…。期待できない、かな。

「強い…。文献によると、かつての戦いでもヤツを滅ぼすことができず封印するしか手がなかったほどだ」

「ハッハーツ！いいねえ、今はどっちが強えか試してやろうぜ！」

「ふふふ。力試しには興味はありませんが大鬼神がどのようなものかは興味がありますね」

「ジャック、アル。今回は期待しないほうがいいって。だって復活したてだよ？長い間の封印で力が弱ってしまっている。それは、最早、図体がデカイだけの生まれたての小鹿みたいなモノだぞ？」

強いといつても封印したのは遙かな過去のことだ。封印時に損傷もしているだろうから回復のためにスクナが、その間に得られる力など本当に微々たるモノだろう。よって封印前に比べたら弱まると考えるのが妥当だな。それでも一般的には雑魚じゃないよ？

封印が破られたのは、封印そのものが劣化したのもあるはずだ。寧ろ人間の手によるものでよくもまあ千六百年近くも封印式を保たせたものだ。俺はそこに感心。魔法式って緻密に練らないとすぐに霧散しちゃうからね。本当に感心。

封印式って見せてもらえないかな？今後の研究の参考になるかもだし。

「な！？！？」

驚く詠春ですね？わかります。故郷の存亡がかかっているもんね。彼も必死なんですな。うんうん。大変だね！

「なに！？んー…それじゃあよ、完全復活まで待つてみるか？」

ジャック…。それはとても、とても惹かれる提案だけど…。

「ソレは面白そうではありません、が…。外野がうるさそうなので却下ですね。…残念です」

ジャックの提案をおもしろそうという理由でノリそうだった、アルだ。でも、ノらない。コワイ、コワイ人がすぐそこで鼻息荒くしているから。

「当たり前だ！完全復活なんてことになったら京都が火の海に沈むことになる！ダメだ！絶対！」

そうだよねえ。必死にもなるよなあ。俺には、もう故郷となるものはないけど、仮に俺にも故郷と呼べるモノがあつたら必死になつて守るだろうしな。

「…と、詠春が言うから。二人とも？完全復活の案は、今回は却下な」

「チツ、仕方ねえな」

「おもしろそうでしたのに。…残念ですね」

ジャックよ？そんなにつまらなそうな顔してんじやねえですよ。アルもそんなに残念そうな…ちよっと？マジで残念そうにしてんじやねえっての。そんなこと言うと、またコワイ、コワイ詠春が…あ、名前出ちゃった。とにかく、また詠春の雷が落ちることになる…。

「仕方なくない！残念でもない！何を考えているんだ！？」

ほら、落ちた…。詠春つて怒ると怖いんだから勘弁しろよな。トバツチリはゴメンだぞ？それはそうとまだ何かを忘れてる気がする…。俺達は…アレ？ここに全員、アレ？居ない？そうだ！足りないのは！

「はい！詠春の突っ込みが冴え渡る今日この頃だけど…ナギは？」

そう！ナギが居ないのを忘れてたの！何で居ないんかね？



風呂場に居たはずなのに…。

距離はどうした？物理法則は？って、あー…。これらは今更な気がするな。俺もいくらか法則を無視している時あるし。それに、こいつら（ナギやジャックなど）なら、そういうのは素で無視している。そうなのよなあ。

「何でアイツあんなに急いでるんだ？」

「ナギも今回の事件の一大事に薄々ながら感じているのだろう。流石はナギだな」

「ふふふ。そうでしょうか？私の目には何か別のことでナギは急いでいるように見えるのですが」

「別のこと？」

「そうです、エイシュン。そして、その原因はアオイじゃないかと」

「「はあ？」」

「あくまで勘ですよ？ふふふ」

なんだか外野が色々言っているようだが気にしたら負けな気がするから気にしない！」

「うつせえよ！！そんなことよりアレ寄こしやがれ！！」

いやあ……うつさいってあーた……。大声あげて爆走しているんだよ？ご近所迷惑でしょうが……。ご近所ないけどね。ここは旅館だし。それにしてもまだ俺が持っていると思ってるんかいな……。

「もう無いに決まってんじゃない。バカだねえ。渡すだけだから時間は十分だつての」

「なん……だ……と？わ、わわ……渡した？……いつ？どこで？だれに？」

何？こいつ？ヤバイくらいに顔色がグラデーションして、ヤバイくらいガクブルガクブルしているんだけど……。そんなに慌てることなのか？とりあえず、おもしろそうだから丁寧に教えてやるう。

「渡したの、ついさっき、お前らの部屋で、アリカさん本人に」

「……………」

今度はダンマリか……。ナギも、案外と忙しいね？一人百面相しているよ。現在のナギの顔色は真っ赤っか……。クスッ……。

「理解したか？このバカ」

「う」



「エイシュン？私が言うのもナンなのですが…急がなくてもいいのですか？」

「???…っ！…！そうだった！おいつ、皆、急ぐぞ！！」

あー、もー。アルのバカ…。詠春が、また焦りだしちゃったじゃないか。一応、詠春も戦士としての心構えはできてるからへまはないだろうけどさあ。はあ、俺の精神安定上必要だったのに。ピリピリした空気苦手なのよ。ある程度は許容するけどね？

「へいへい、そんなじゃま、いつちよいきますか！！」

ジャックは始終元気だね…。お兄さんは羨ましいような、どうでもいいような気持ちだよ。…さて、時間的にも、そろそろマズイ、かな？うん、沈めたナギを叩き起こすとするか。

「ほら、ナギ、そんな床で寝てないで行くぞ」

「お…お前えが…やったんだろが…クツ」

ほう…？この俺に口答えするつもりか。そうか、そうか、そんなのか…。いい度胸だな、おい。まあ？たしかにナギを床に沈めたのは俺だけだな。

「はいはい、そうですね。…いいから起きろ。起きないと…先ほど以上の恥辱を与えてやるぞ？」

「っ！？わーったよ！…！起きるよ！だから勘弁してくれ！！」

言っておいてなんだけど、そんなに飛び起きるほどイヤだったの

か？いいじゃん、からかってもらえるうちが幸せだぞ？無関心でいられることほど悲しいことはないんだから。その分、俺がからかって、からかって、からかいぬいてやるう。それが俺の祝い方だ。

「よし それじゃま、行きますかね」

「「「おう！」「」「ふふふ」

三人は、ともかくアルは何で俺を見て笑っているんだよ？まさか…。ち、違うんだからね！？素直にナギ達を祝うのが恥ずかしいなんてことはないんだからね！なんてな！！どうでもいいか…。今はスクナを何とかしよう。

Side out 葵

Side アイリス

観光の後、のんびりしていた時にそこそこ強大な魔力反応感知した。この旅館から距離もあることから考えて警戒レベル3で準待機状態へ移行。もちろん休暇中以外のメンバーに対してだ。そして、しばらくして葵君から念話が届いた。

【…では今回、私達は出撃しなくてよろしいのですか？…】

葵君からの念話は出撃要請かと思ったら、まさかの休暇の継続だった。当然、私は納得がいかなかった。ご主人様だけを戦わせて自

分達はのんびりくつろぐなど普通ならできない相談というものだ。

【…うん、せっかくの休暇中に現場に駆り出すほど俺は鬼じゃないからね。ゆっくりしていいよ…】

【…ですが、それでは…】

違います。私達はそんなことで葵君のことを鬼だなんて思いません。思うはずがありません。私達は葵君と共に在ることこそが至上の喜びなのですから。葵君はそれをわかっていても私達に休んでほしいと言っている。これは優しさ、なのだろう。

そして葵君は休暇中ということを利用して私達が出撃することを許可してくださらない。わかっているのだ。これは純粹に葵君が私達に休んでほしいと言って言っているということは理解している。だが、理性では納得できても感情が追いつかないのだ。

【…いいの、いいの。ここ最近は日頃、忙しくさせちゃっていたからね。休んでいてよ…】

【…納得はできませんが了解しました。皆には自分のほうから伝えましょう。閣下、ご武運を…】

【…うん、ありがとう。じゃね…】

【…はい…】

感情で納得できないまま葵君との念話を終えて「ふう…」と溜め息が漏れた。忙しさなど気にしないのに…。私達は休みたいから休暇のことを喜んだわけではないというのに、あの方は、まったく、

もう…。

私達が喜んだ理由は葵君と共有できる時間、空間、そのものにあると言っても過言ではない。誰だって、そういうものだろう？慕っている。…好きな人と一緒に居たいという気持ちは人間も悪魔も精霊もその他だって変わらないはずだ。

要するに何が言いたいかと言うとだな…。折角、葵君とスウィートな時間を送れると思ったらハプニングが起きて、ナンじゃコリヤーッ！という心境ってことだ。ハア…。とりあえず、全部隊に念話連絡するか…。【…あー、あー、テストス。あー、あー。こほんっ…】よし…。

【…休暇中の全部隊員に通達。皆も感知している魔力反応に向けて司令閣下達が出撃した。尚、今回私達は出撃しない。これは司令閣下の私達にゆっくり休んでほしいという願いだ。繰り返す。休暇中の全部隊員に……】

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダッ！！

やっぱり来たよ…。念話を終えたとたんに聞こえてくる廊下をすごい、すごい勢いで走ってくる音。これだけで私は誰が来たのかを把握できるというものだ。ほら、もう、そこまで来ている。

ダンッ！！！！

勢い良く開かれる部屋の扉。間髪入れずに駆け込んできた人影…。

「アイリさん！先ほどの念話は、どういうことですか！？」

来たか…リチラ…。

「はあ、はあ、リチラッ、落ち着くの！はあああ…。もう、いきなり駆け出すのは、やめてほしいの」

ファレノもか？ああ、少しはこいつを止めようと努力したのだから？まあその努力が実らなかったのは現状を見てのとおりのようなが、な。その行為を私は認めているぞ。良く頑張ったな。

しかし、リチラが、な…。マトモに相手にするには少々骨が折れる。面倒だし、最初は軽くシラを切ってみるか。

「リチラ、ファレノもか。いったい、どうしたというのだ？いや、大体の事情はわかるのだが…」

「どうした？じゃありませんッ！いくら葵様の願いとはいえ出撃しないとは、どういうことですか！？こうしている今も怪我など、なされたらどうするのです！？ああ！心配ですわッ！！」

「おーッ！ちーッ！フーッ！くーッ！のーッ！リチラ、興奮し過ぎなの。どうどう、なの」

「わたくしは馬ではありませんわ！それにわたくし、落ち着いておられますわ！」

「はいはい、慌てる人は皆、同じことを言うの。だいたい、本当なら怒鳴ったりしないの」

「それはッ！…んんっ。それは失礼しましたわ。それでアイリさん？どういうことか、説明してくださるかしら」

ファレノ、見事だ。この数日でリチラの扱いが飛躍的に上がったのではないか？私では、こうはいかないかもしれない。しかし、説明、か。どうしたものかな。

「ああ、いや、説明と言っても通達のとおりのことしか言えんのだが…」

「なっ！？なんですってーッ！貴女、それでも葵様の副官ですの！？もつと状況を理解するために情報を収集、分析、対処なさいな！だいたいアイリさんは、いつも…くどくどくどくど」

なぜか、わからないが私はリチラから説教のような愚痴？を聞かされている。最初の助言とも取れる言葉はありがたいと思う。思うが…後半はどうなのだろう？葵君と一緒に居たいという彼女の欲望がダダ漏れと言わんばかりに聞こえる気がする…。

あれ？そういえば…。

「副官なら、もう一人、ファレノも居るのだが…って聞いてないか」

「…アイリ？いきなり、私に話しを振ろうとしないでほしいの。私にだってできることとできないことがあるの。ムチャぶり、ダメなの」

もう一人の副官はこの調子か…。だいたい、できることもなにもファレノなら大丈夫だろう。大抵のことは過不足無くこなせるだけの能力は持っているのだからな。それにさっきも思ったがりチラの扱いが今、最も上手いのは彼女だとも思う。

決して、ムチャぶりだとは思わないのだが…うーん？

「ムチャぶりって…。まあいい。リチラ、何度でも言うが今回、私達の出撃は無い。一応言っておくが、もちろん私とて納得はしていない。が、これは閣下…葵君が私達のことを思っただけの願いだ。私は、その思いを大事にしたいのだ」

「ですがッ！」

リチラが私の言葉を聞いても、異議が有り！と言うように声を張り上げる。

「案ずるな。私の予想が正しければ葵君は大丈夫だ」

大丈夫だ。心配は無いはずだ。リチラの慌てぶりを見て、逆に私は冷静な思考ができるようになった。そう、よく考えなくても答えは簡単だ。葵君は“私達には”休暇を継続するように言っていたが、他は聞いてはいない。

だいたい、“あの人達”がこういう時に葵君を一人で行かせるとは思えない。「紅き翼」のメンバーが居るから万が一ということは無いと思いたい。が、もしも、億が一…葵君に傷を負わせては、私達は後悔することになる。

何が悲しくて自らのご主人様を傷モノにしなければならぬのか。と。まあ、その不安も杞憂に終わることだろうがな。

「それは、どういっ…」

「あつ、アイリ、アイリ。ここに来る前にユエさん達からなんだけど“後は頼んだ”だって」

うむ、私の予想どおりのようだ。これで憂いは何も無いな。安心できる。

「えっ、あの方達は出撃してよろしいんですの！？わたくし達はお留守番ですのに…ズ、ズルイですわーッ！」

「リチラ…。ズルイかどうかはともかく、これで私が大丈夫と言った意味がわかっただろう？ナギ君達に加えてあの人達も居るんだ、心配するだけ無駄というものだ」

リチラは葵君のことが心配なのは確かだが、どうも同行できないことへの不満が爆発中のようだ。

「それは…そこらの大国を相手にしても戦える方達なのはわかっておりますわ。…でも、不安はなくても心配になるのは仕方ありませんわよ」

こいつ…さっきまでの勢いは鳴りを潜めて今度はしおらしくしている。何を考えているんだ？ふむ、ここはストレートに聞いてみるか。

「……リチラ、正直な気持ちを言ってみる。オコラナイカラ、ナ？」

「ギクツ…。な、ななななんのこと、かかかしらあぁ」

うわー…わかり易いな…。口調は乱れているし語尾は不自然なほど上がっているし、何よりギクツて…。今時、ギクツは無いと思

うんだがなあ。

「アイリ。リチラがわかり易いほどに動揺してるの」

「ああ、そうだな。だが、ここまでわかり易いと追及する手間が省けるよ。…で？何を隠している？」

「な、何も隠してなんかいませんわ！一緒に出撃して練り広げられる激闘の末に葵様とわたくしとの間に芽生えるラブなんて…はっ！？か、かか考えていませんわ！」

「うわあ…。欲望がダダ漏れなの…。アイリ、これは元悪魔としてよくあることなの？」

そんなわけないだろうが…。リチラが特殊なだけだ。そのはず、だ。

「違う…。いや、他は知らないが少なくとも私は違う。しかし、リチラはやはり抜け駆けを考えていたのか…。内容はしょうもないが」

「たしかに、しょうもなかったの」

「う、うづうづるさいですわッ！いいでしょう！？葵様のことを慕っているなら、すす少しでも仲良くなりたいたいと思いませんか！？」

それを言われると、弱いな。私とて、それは考えないことは無い。葵君と仲良く…にへらへらハッ！？いかんっ、いかんっ！私までリチラの言葉に惑わされてどうするか！？んんっ！

「う…。それはまあ…なあ？」

「うえ？ああ、うん。リチラの気持ちはわかるの。…というより貴女達って前から思ってたけど、ここぞって時に、なんと言うか…純情、なの」

「それこそ余計なお世話だ！」 「それこそ余計なお世話ですわ！」

ファレノに振ったのが間違いだったのか…。言うに事欠いてリチラだけではなく私までじゅ、純情などと…！そ、そのようなことはない、うん。

ん？自分で言うておいてなんだが…“余計なお世話”と言っている以上無意識にでも自覚して、いる…？ハハハ…。何をバカな。そのようなことがあるものか。…無いよな？

「怒鳴らないでほしいの！私は事実を言っただけなの。それより葵ちゃんのことはどうするの？」

「…命令は待機だ。これに変更は無い。以上だ」

変更は無い。それに不安の要素も無い今、私達が余計な動きをしては現場に混乱をもたらすことになる。最も今回はメンバーだけを見ても対国家戦ができるほどの実力者だ。心配はしても恐怖や不安は無い。

「ハイッ！？貴女はソレでいいんですのッ！？」

「お前は、あわよくば葵君とラブロマンスしたいだけだろうがッ！」

「なのー…」

リチラは尚も異議有りと言うように詰め寄る。だが、私も負けじと言い返す。ここで負けたら今後も負け癖が付いてしまいそうだからな。負けるわけにはいかないんだ、負けるわけには。

私の言葉にファレノも「なのー」の一言で同意した。私達、二人の彼女を見る目は冷たくジト目になっているのは想像に難くない。その視線に流石の彼女も「う…」と言葉を詰まらせて一歩後退した。

「事実ですけど…。貴女達も大概失礼ですわね…」

うるさい。己の本音をさらすのはある意味で尊敬の念を抱くが…これは違う、と何となく思った。

葵君、早く帰ってこないかな…。まだ、休暇が残っていても葵君が居ないのと居るのでは天地の差があると思う。皆と居るのも楽しいが、これは別物と割り切っている。だから、早く帰ってきてほしいと私、アイリスは願うのだ。

Side out アイリス

第二十五話「スクナ復活と「紅き翼」出撃と親衛隊と」（後書き）

あれ？後半スクナ関係なくなね？鬱だ…、寝よう。

まあそれはともかくこうなったものは仕方ない。作者の指が勝手に書いたものだ。

反省もしなければ後悔もしない。作者的には問題はまったく無いし！ここ最近気付いたんだけどね？どうらや作者はここに作品を掲載することだね？

ある意味でストレス発散に繋がってるっばいんですよね。どうでもいいか…。

では次回も京都編です。あと2話で終わったらいいなあ。

それでは！チャオツ！

第二十六話「合流と珍道中と出撃と」(前書き)

遅ればせながら更新しました。

## 第二十六話「合流と珍道中と出撃と」

スクナ発現地帯までの道中…。

Side 葵

旅館を出てすぐのことだ。皆に連絡してないことに気付いたのは魔力の発現地帯がやや遠いとしても俺が何も言わなかったら彼女達は対象を危険と判断して排除に乗り出しかねない。

折角、久しぶりに休暇が取れた彼女達を働かせるのは酷というものだろうか？俺は念話でアイリに連絡を取って簡単に事情を説明した。最後に今回は精魔奇兵の皆には出撃無し、と言い含めてな。

【…納得はできませんが了解しました。皆には自分のほうから伝えましょう。閣下、ご武運を…】

【…うん、ありがとう。じゃ、またね…】

【…はい…】

アイリは不満そうと言うか心配そうな意思を残して念話が切れた。心配かけているんだろ？なあ、とは思っけど俺達は負けんよ。それにこつという場合黙って待つことを良しとしない子が八柱ほど我が家に居るんだよね。

そんなことを考えつつ、俺達「紅き翼」はスクナの復活地点に向

けて全速力で急行中。限定条件下だと車やバイクに比べて自分の足で走ったり飛んだほうが速いんだよね…。何なんだろ？この世界の住人は。もちろん一部の人間だけだよ。

あ、もちろん高度数万メートルとか大気圏や宇宙戦の空間戦闘とかなら機械技術のほうが有利かもしれない。かもしれないというのは試したことが無いからっていうのもある。…今度、宇宙戦の模擬戦でもするかな。

およ？念話？誰かね？

【…我が君、我が君？…】

【…おろ？ユエ、どうしたの？…】

【…いえ、魔力反応を感知した直後に我が君等の反応が移動しましたので、出陣かと思ひまして。現在、姉上、私、ミリー等、オリビ工等、計八柱が我が君の後方を追走中。もう間もなく合流します。尚、彼女達の偽体は既に除装済みです…】

おう？本当に来ちゃったんだ。半分冗談で来るかもしれないとは考えてはいたんだけどな。いや、まあ来てくれたのはいいんだ。俺が最も頼りにしている八柱だからね。でもさ？休暇中なんだよ？できるなら休んでほしいじゃん。

でもなあ…。うーん？まあ早く終わらせて休暇の続きといくかな。

【…うん、皆が居るのは頼もしいもんな。頼りにしてるよ…】

【…ハッ、お任せください。あ、我が君等のお姿を目視にて確認し

ました。今より合流いたします…】

【…あいあい。じゃ、また後で…】

【…ハツ…】

んー…？おお、見えてきた。皆、速いねえ。ミリーは水から水へ移動。ウーリは風に成り、あらゆるところを駆ける。マリーは己を炎化させて爆発に指向性を与えて疾走している。精霊の彼女達は自分の性質を応用して移動しているね。

ハ才とユエは普通（？）に移動しているよな。我が愛刀、陽月の姉妹は瞬動と虚空瞬動を小刻みに、時に勢い良く大胆に駆けている。時折、前方の空間を斬り捨てて空間から空間へ移動しているように見えるけど…：…：…気のせいだよ、な？

んんっ、俺は何も見えていません。オリビエ達は…？よかった、彼女達は普通だよ。普通の移動だよ。瞬動などはハ才達と似たようなものだけど、それに加えて細かく多重転移をしている。あんな短い間隔で転移を繰り返すなんて、器用だなあ三人とも。

と、感心してオリビエ達を見ていると突然、目の前の空間が裂けた。すると、よきつとユエが出てきた。続けてハ才が別の裂け目から出てきた。…俺は何も見えてない。俺はこんな性能をユエ達に付加した覚えもない。よきつて…：…よきつて出てくるところなど見えてない、よ？

軽く意識が逃避していたら続々と合流してきた。

「我が君、お待ちせいたしました」

俺達も移動してたから待つてはいないと思うんだけどなあ。

「んー…？うん、大丈夫、大丈夫。たいして待つてないよ。…あれ？」

「…？…？何か？」

きよとん、と小首を傾げて不思議そうな顔をするユエを見て俺は思ったんだ。かーいーなーと、ね。これがギャップ萌えというものののだろうな。うん、それは、ともかくさっきのやりとりで思ったわけですよ。それは…。

「いや、今のデートの待ち合わせっぱくなかった？」

「ナツ！？な、なに何を言うのですか！！その…そんなデ、デートなんて…。わ、わわたし、私などには勿体ないことです！」

そこまで取り乱すほど、イヤってことですか？ちよつと思っただことを言っただけなのに、お兄さん、軽く、いや、大分へこみそうです。くすんっ…。

「ジー…、ジロジロ…」x 皆さん。

「あー…、うん。わかった。わかったから落ち着こう。皆、見てるし。な？」

「えっ？…ッ！？も、申し訳ありませんッ！！」

うん、俺もごめんね。移動しながらなのに、こんなやり取りをし

ているんだけど…。この生暖かかったり冷たかったりな視線にはお兄さんは耐えられません。サツサとこの空気からの離脱を望むね。ハア…。

「ユエ…まさかお前が抜け駆けをするとは思わなかったぞ」

離脱できるかと思われたけど突如そんな底冷えする囁くような声が、いやにハッキリと聞こえた。聞こえた瞬間に背筋がブルツときましたぜ？俺のことは呼ばれてないのに変な冷や汗が流れてきそっだった。

そして当のご指名のかかったユエなんだが…。

「姉上え！？ち、違うのだッ！こ、これは違うのだぞ！それは少しキヤツ、嬉しいな　なんて思ったりしたかもしれないが…って、しまった…！！」

ものっそい動揺してテンパっておりました。普段では決してお目にかかれないユエの狼狽振りを見て俺はヤツタ　なんて考えてないよ？考えてないよ？ホントウだよ？オレ、ウソ、ツイテナイ。

「フフ、フフフ…。語るに落ちたとは、まさにこのことなり。まさか、まさかまさか己の同胞はらからが抜け駆けするとは、な…。フフフフフフ…」

「落ち着けえ、姉上え？落ち着くのだ。まずは拳を白くなるまで握り締めるのはやめよう」

ユエの漏れた言葉（本音？）を燃料に八才は己の内にて“何か”

を燃やして更に猛り狂い始めた。本当に何をそんなにしてプルプルしてるんだろうね？ユエが何かしたんだろうけど…。ハオがお持ち帰りした餡蜜を食べちゃったのかな？食べ物への恨みは怖いね。

逆にユエはスクナの居る現場に移動しながら器用にハオから徐々に距離をとっていた。それでもハオは離れた分だけ寄ってくるんだけど…。お互いの距離は離れもしなければ近づきもしない。まさに一進一退というやつだな。

どうでもいいけど普段から剣を振るう人が拳を固く握って迫ってきたら怖いよな？俺は怖いです。

「フッフ、私は落ち着いているぞ、ユエ。何を怯えているのだ？ああ、大丈夫だ。痛いのは最初だけだ。…ナア？」

目元は前髪で隠れていて、よく見えないが…なんか目の辺りがキュピーンって日光ったように見えて、口は大きく三日月のように笑っている。それなんてワラア？って…マジで怖いです！元が美人だから普通より倍怖いんだよ！

「ハハ、ハハハ…。あ、姉上？冗談も過ぎるぞ。その固く握り締めた拳を下ろそうじゃないか？」

このままではスクナ戦前に犠牲者が出る…と思い、止めに入ることにした。被害者も加害者も俺の身内の手によってただけどな！止めないでマズイだろ？

「問答…無よっ」

「はいッ！ストップ！！今はそれどころじゃないから続きは帰って

からにしようね。それと二人とも余裕はいいけど慢心はダメ、絶対。もうすぐ敵の戦闘域に入るんだから。いいね？」

「ハッ、申し訳ありません…」

もう、「冗談もそこにしなないと…お仕置きしちゃうぞ？」

「お、お仕置き…とは？」

「…俺が自らの手で、“一日中クスグリ地獄”だな。クスズホグレツだぞ？逃がさん」

「ポ…」

何で頬を赤らめてキラキラと期待した目で俺を見るんだ？やらんよ？実際にそんなことしたら、ある意味、犯罪だと思っただよね。二人とも美人さんだからクスグリに吐息を荒くして身悶える姿なんて、官の…げふんっげふんっ、犯罪っぼくね？

「ふう、まあ二人の仲が良いのはよくわかったからいいけどね。いやー、ケンカするほど仲が良いって言うからなあ。うん、いいことだよな」

「ユエ…」

「姉上…」

「はあ…、そうですね…」

正直な胸の内を明かしたただけなのになぜに二人して、そんな残念

そうとうか、ダメだコリヤみたいな空気を纏ってやがりますか。しかも、やや投げやりに俺に同意するし。どうしたんだ、二人は？

「んー？どつたの？ガツクリと肩なんか落として…」

「いえ、別に…」

いや、別につて、あーた達？

「葵、取り込み中、悪いが…着いたぞ」

何？もう着いたのか。なんだかんだと話しながらだから予想よりも早く着いたように感じるわ。俺達が立つ小高い丘から見えるスクナは…なんと言うか。半身浴…みたいな？下が湖面だからそう見えるのかもしれないね。

それにしても詠春？

「詠春はマジメだよ…。折角、場が馴染んだのに」

「うるさい。今は緊急事態なんだ。お前もマジメにやってくれ」

あら？いつものようにツツこみの嵐にならない。今回の詠春は意外とマジメですね？わかりました。今回は確実に封印してやろう。あ、違った。封印作業は陰陽師の皆さんですね、すみません。じゃあ、うん、スクナをコテンパンにノシてやろう！

「エイシュン、安心しろって！誰であろうと俺達の前に敵は無いぜ！」

「ハッハッ！ナギもわかってんじゃねえか！まあ？お前から負けても最強の傭兵剣士である俺がパパッと片付けてやるけどなッ！ハッハハハッ！」

ナギとジャックが自信満々で言ってるよ。まあ、わからんでもないけどな。正直な話し全っ然、負ける気しないもんな。

「ジャック、うつせ！！そんなに言うなら、どっちが先にブッ倒すか勝負だ！！いいなッ!？」

「上等だ、コラッ！！吠え面かせてやらあ！！」

おう？いつの間にか二人の間に競争してスクナを倒すことになっている模様だ。それでも倒せなくてはならないけど戦闘の効率が悪くなるんじゃないかなあ。ここは「紅き翼」の良心事詠春にお伺いをかけてみるか。

「詠春：アレは止めなくていいの？」

「あ？あー、アイツらはいいんだ。止めるより突っ走らせたほうが結果はいいからな。逆に止めると…いや、止まらないか。バカと何とかは止められないと言うだろう？」

すっげー身も蓋もないことを言われた気がするのは何でだろう？

「あ…。うん、ごめん。バカなこと聞いたわ。因みにアルが止めないのは…?」

「アオイならわかるのではないですか？ふふふ」

「…うん、よくわかった。楽しいこと好きだもんな、アルは」

ですよねー？アルならそうだよー？止めるわけないか。アルつてばマジメに面白いことを追及するタイプだから素で性質が悪い時があるんだよな…。まあ、相手が本気で嫌がることはしないから、その辺りは信用してるけどな。

そんなくだらないことを現場を前にしながら話していたらスクナが見えてきた。んー…？おう！もう頭と腕が二本も出てきてるよ。復活までもう少しかな？それにしても封印式つて随分と弱まっていたんだね。もうね？バキバキつて術式が壊れてますよ。

「おや？ふふふ。見えてきましたね。誰から逝きますか？」

「オレだツ！！なっ！！？グルルルツ！！」

二人とも仲いいね…。

「うわー…睨み合つてグルル、言ってるよ。揉めなくても二人で行けばいいじゃないか。はあ…。もう、ここは詠春が先陣切ってくれろっ。」

「…いい、いいのか？なんか、イヤな予感がするんだが」

今は下手に揉めるよりも誰かが先陣切ったほうがいいと思うよ？そうすればナギとジャックも勝手に続くと思うしね。まあ下手したら詠春は二人にポッコポコにされるかもしれないけど…。目の前で獲物を搔つ攫われることほど悔しいものはないもんね。

とりあえず詠春に先陣を切ってもらおう。尊い犠牲というやつで

すよ？保険です。もしかしたらあるかもしれない二人からの八つ当たりによるトバッチリを回避したいのよ。

「いいの、いいの。二人ともグルル言っていて気付かないって。こは詠春の故郷なんだから外野はガタガタ言わないって。…やっちやえ」

詠春、GO！！行け！行け！詠春！！

「…わかった、行ってくる！！」

「いつてら〜 ナギ、ジャック？詠春がもう行ったぞ。いつまでそうしているつもりだ？」

「「ナニイ！？」」

「神鳴流決戦奥義…真・雷光剣ツ！！！！」

斬ツ！バリバリバリバリバーツ！！

張り切ってるなあ、詠春。初手から手加減なしの一撃を叩き込んだよ。むー？でもスクナに目立った外傷が見られない…。いや、内部的には損傷しているのかな？動きが若干だけ鈍くなったように見える。本当に若干だけだな！

「ほら 早く行かないと詠春に倒されちゃうぞ〜」

「そんなことさせねえ！！」「そんなことさせん！！」

「「アイツはオレの獲物だツ！！」」

ダンッ！！ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダッ！

！！

二人とも足速えー…。瞬動とかも使っているから当然と言えるんだけどな。それはともかく、これで…計・画・通・り・！・危機は回避できた。

「おう？仲が良いんだか悪いんだか…。で？アルは行かないの？」

なんでコイツは行かないのかね？面白いことは主にナギの周りで起きるから真っ先について行きそうなものだけど…。

「ふふふ。そうですね…。アオイはどうなのですか？」

「はい、アウト。質問を質問で返すのはマナー違反だぞ？答えてからにしろ」

アル？イカン、イカンよ。それはマナー違反だ。それに質問を質問で返すのは人によつては嫌われるぞ？俺は気にしないがね？ただなんとなくそう思ったからアルに注意しただけだし。

「変なところで厳しいですね、アオイは。ふふふ では私も行くとしましょう」

「へいへい。俺も用事が終わったら行くよ」

あ、しまった…。

「用事、ですか？それは…」

「野暮用というか知的好奇心…探究心の類いかな。戦闘に直接の関係は無いから気にしなくてもいいよ」

実際の話し本当に取るに足りないことだよ？だって、ねえ？要は観察と考察だし。

「…そう、ですか。アオイが何に興味をそそられているのか、気にはなりますがそれは後にしましょう」

「そんなに楽しいものじゃないと思うから期待しないで」

本当に気にしないでください。気にするだけ無駄だから。

「ふふふ。ではナギの後を追いますね」

「おう！いつてら〜」

そう言つとアルは転移してナギの上空に出てスクナに重力魔法を叩き込んでいた。ペしゃんこスクナ…。語呂だけ見ると可愛くない？…可愛くないか。

「さて、…ラミエル。アンに伝達。内容は“現在より俺の周囲近辺で展開されるであろう封印術式の詳細なデータの収集及び分析。”以上」

『了解した、我が主。…アン嬢との送受信を確認。二分以内に観測用アカトンボの展開、情報収集を開始することだ』

アン嬢？ラミエルさんのほうが若いのに…。まあいいか。呼び方

は人それぞれだもんね。さて、準備完了まで二分か。ちょっと情報の整理といくかな。

「うん、上出来、上出来。それじゃ二分で現状確認といこうか。ミリー、ウーリ？」

「はあい。水を透して見た限りではあ、目標となるリヨウメンスクナノカミを中心に東洋魔法使いの陰陽師さん達があ、数十人規模で広域展開中ですわあ」

あちこちに構成員が散ってる割に随分と人員を導入できたなあ。封印式は大規模のものはずだから、これだけの人員が必要なのかな？

「うなー、風さんに聞いてみるとねー？上空にも式神さん達がタクサン居るみたいー。たぶんだけどー、封印術式の補助が目的なんじゃないかなー」

上空には式神か。ウーリの考えているとおり補助、または増幅役ブースターといったところか？

「なーる。配置から考えて新世界で見た大規模反転封印術式と似たような術式なのかな…。ん？あー、違うか。そもそも話し主要目標が違いすぎる。スクナは魔力無効化とか無いし…。ということは、…ぶつぶつぶつ」

「主？詳細な分析と考察は後にしても良いのではないかと…」

「ん！？あ、ああ、そうだね。マリーの言うとおりだ。それじゃ…」

むう…。失敗したな。つい考察に夢中になっちゃったよ。だってこれだけの大規模のモノは滅多に見られないんだよ？何て言うかな？こつ…：そつだ。知的好奇心というものが刺激されない？どういったものなのか？どんな術式なのか？どんな構成をしているのか？

考えたら切がないな！うん！東洋魔法は余り接することがなかったから新鮮な気持ちだよ。まあ、今はそれどころじゃないんだよね。

『我が主。アン嬢より報告だ。準備完了、いつでもよろし。…：どうするのだ？』

「ん？あ、うん。やるよ。ハオとユエは戻ってくれ。万全にして挑みたいからね。ミリー達はいつもどおりで」

「承知！」

「はい、お姉さん達にお任せよお」

「うん、お願いね。信頼してるよ」

もう二分経ったのか。楽しいことを考えていると時間が過ぎるのはアツという間だね。そんてまあ、俺は剣に戻ったハオとユエを両手に握り。透明化したミリー達を身に纏う。あ、ちよつと注意しておかないと…。

「んんつ。ああ、それとオリビエ？」

「んお？なんだい？葵」

「オリビエ達は大規模破壊禁止ね（ニコニコ）」

「え、っ！？ちよっ！おまつ！…マジで？」

オリビエ、女の子が、え、っ！？は無いと思うよ…。男前過ぎるだろ。思わず惚れてしまいそうだね、うん。…言っておくが俺は、おんにゃのこが好きだぞ？勘違いするなよ？男はノーサンキューです。

「本気と書いてマジだ。よく考えてみ？俺らが普通に暴れたらここら一帯焼け野原にしちゃうだろ。ここは旧世界なの。新世界と違ってそういつことすると、いろいろと…メンドイことになるでしょや」

「うっ…言われてみれば、確かに…。ん！？結界張ればいいじゃん！葵ならそのくらいできるだろ？」

「できるよ？できるけど今回はパス。アチラさんの術式を阻害するかもしれない。それに今回は殲滅じゃなくて再封印が目的なの。俺はその封印術式を見たい。東洋魔法のデータを取りたいの」

「む、むう…。葵がそう言うんじゃ仕方ない。できるだけ、やってやる。あたし達の役目はあのデカブツの足止めで良いんだよな？」

「そのとおり！あつ、それと注意事項が一つ。観測機から情報を見ていて気付いたんだけど、この封印式は邪を封じることに重きを置いているみたい。俺の眷属って感じになっているからスクナと違って封印されることは無いけど。一応、オリビエ達は気を付けてね？」

一応大丈夫だとは思っけど素体が悪魔だからね。魔人化したとしても魔には違いないし心配だなあ。まあ魔に邪、だと言ったほど単純な話でもないけどさ。その点、日本は大らかだよね？妖あやかしでも善妖な

らば崇め奉ってくれるんだから。

これがイギリスなどのヨーロッパ方面とか行ってみ？過激なところなら問答無用で祓われるよ。向こうは異端には容赦が無いからね。人間以外の霊長を認めたくないんだろ？。それにそれが自分達人間よりも優れていた場合は特にね。

「まああたし達からしたら、あの程度で封印とは片腹痛いつてなモンだけど…。わかった、注意だけはしといてやるさ」

「うん、よろしく。気を付けて」

ものすっごい自信だね？でも、確かにあの封印術式に込められるであろう魔力量を見てみたらそうかもしれない。オリビエ達を封じようとするなら俺くらいの魔力量を用意しないと…無理だな。pそれでも、ヤルなら数百年単位で魔力を溜めないかね。

ま！封印なんてさせないけどね！全力で抵抗してやる！

「そんじゃ、皆？すう…行くぞツ！！」

『どこまでも！』『お供いたします！』

陽月の姉妹が言った。

「はい」「あい」「御意ッ！」

精霊三人娘が言った。

「おう！」「おー…」「はい」

悪魔三人娘が言った。

最後に動き出した俺達は一步を踏み出した。視界に広がる戦場に向けて…。

ナギは、あんちよこを見ながら千の雷をスクナに放つ。未だにあんちよこを見ながらでないとダメなのか…。ナギも素質はあるんだからマジメに呪文を覚えればいいのにね。素で強いから覚えるの面倒くさがってんだろうな。

ジャックは自分のアーティファクトの中から出した巨大な斬艦剣で強襲を仕掛ける。切りつけた箇所はスクナの四本ある腕の内的一本。その斬撃は狙いから少しずれたようだが見事に命中して手首の部分を切り落とした。

先陣を切った詠春は雷鳴剣や斬空閃をスクナに放ち、怯んだところをチャンスとばかりに神鳴流の奥義を叩き込む。遊撃的位置にある詠春は小刻みに移動してスクナのことを翻弄して戦場を引つ掻き回している。

そしてアルは得意の重力魔法でスクナを見えざる枷で動きを抑える。動きは明らかに鈍りナギ達の魔法攻撃や近接攻撃を上手くサポートしている。それに少しずつ重力を増してスクナ自体を潰しにかかっているように見えるのは俺の目の錯覚だろう。

そんな戦場に俺は今、遅ればせながら参戦したんだ。…正直言って怖いから帰りたいです。でもね？ここで好奇心が先立つ俺はもう、末期だと思っただ。ハハハ…。

S  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t  
  
葵

第二十六話「合流と珍道中と出撃と」（後書き）

クソツッ！スクナごときにドンダケ手間取っているんだ！  
というご意見は勘弁してください…orz

話しの構成がへボな作者ですから一朝一夕では改善できないのですよ。

努力はしておりますよ？してはいますが所詮、趣味で書いているのでリアルで時間が取れないだけです。

次回はスクナとの戦闘をメインに書きたいと思います。

ではでは。さよなら、さよなら、さよなら！

第二十七話「闘争と戦闘と封印と」(前書き)

戦闘オンリーになってしまった…。

上手くできているのか自信ないわー。

では、どござー！

## 第二十七話「闘争と戦闘と封印と」

「紅き翼」VSスクナの戦場…。

Side 葵

空中を駆けながらスクナが半身浴している…ように見える封印場所に接近中に最後に大まかな指示をしていく。

「オリビエ、シルビア！二人はスクナの残りの腕を牽制！さっきも話したけど目的は封印だ！無理はするな！リビエラは二人の援護！もしもの時は頼む！」

「おうよ！クククッ！いつちょ軽く揉んでやんよ！アーツハツハツハツハツハツハツ！！」

「…うん…無理は…しない。…結果的に…潰しちゃう…だけ…だよ…？…クスクス…」

「は〜い がんばりますわ〜 うふふ〜 …ジツクリと炙り焼きにしておりますわ〜。ウフ、ウフフフフフ〜…」

この子達、大丈夫かな？なんだか事故に見せかけてスクナを葬ろうとかしてないか？一応、オリビエ達には今回の戦いで大規模な破壊は禁止しているけど…不安だ。

いや？彼女達は俺との約束は必ず守るよ？守るけどリビエラ達は

ともかくオリビエがなあ…。なんとというか、手加減がヘタなんだよな。本人が意識していないでいつの間にかやり過ぎることがあるんだよ。どうしようか？もうちょいクギ刺しておくかな。…いや、必要ないか。

オリビエは二人に比べて家事が完璧な女の子なのに、何で戦闘になると力の加減ができなくなるんだろ？それもあって姉さん女房的にいい女なんだけど怒ったら怖い…怖いんだよ。怒りの対象は主に敵対者に対してだけだな。

「…（ああ、もういいや…）我が前に立ちはだかるモノはその悉くを薙ぎ払え！」

「おう！」「うん…！」「はい！」

言っちゃった…。つい、勢いだけで言っちゃった…。でもここで「今のは無し。程ほどで…」なんて言えないよなあ。下手すると士気に関わるしね。オリビエ達は、もう行っちゃったし、このまま行くか、うん。

「ミリー、ウーリ、マリー！オーダーは、いつもどおり俺の攻守のサポート！尚、今回は追加事項として必要なら個での戦闘も可とする！」

ミリー達に個別の戦闘許可を出した理由は簡単。俺がこの目で実際に封印式を観察したいから！記録データは取るけど、リアルタイムで見たいんです！テレビだって録画とリアルタイムで見るのは何か、こつ…感覚的に違うでしょ！？

そのためには脳の空き容量を少しでも多くして処理速度を軽くす

るために任せるところは任せておかないとな！全ては俺の知的探究心のためにッ！！

「はあい。オーダー、承りましたわあ。緻密にい、精確にい、確実にい果たしてみせましょう！」

「任せてー。あるじーの、お願いだからー、ウーリ、がんばるよー。…えへへー」

胸の前で両拳をギュツとする姿を見たら思わずウーリの頭を撫でてしまった…。反省もしなければ後悔もないけどな！かーいーなー

「主命、確かに！我が炎、主のために存分に揮いましょう！」

「…よろしい！では皆、配置に着け！」

「了解ですわあ！」「あーい」「御意！」

三柱は姿を透過して配置に着いた。ああ…この包まれている感覚は何度体験しても安心と頼もしさを感じる。守られているって感じるんだよね。彼女達に任せておけば大抵のことはどうにかしてくれるし。

さて…。

「…九重・葵！いざ参る！」

スクナに攻撃を叩き込んでいる皆の下に俺は空を走り追いかける。そこで俺は、ふと考えたんだ。

「今夜はデータ解析で徹夜かな…」

ワクワク、ドキドキの封印式のデータ解析が俺を待っているツ…！

気合を入れて、オリビエ達に追いついて来てみたら俺の目の前では…。

「だらっしゃああああッ！！あたしの前を遮るなーッ！！」

「うおッ！？なんだあ？アオイんところの怖い姉えちゃんじゃねえか！あつぶねえだろがッ！！」

大きく振りかぶった大剣をオリビエは何の躊躇も見せずに振り下ろした。その大剣はスクナの左肩部分に命中。腕が一本、千切れかかっている。…まだやり過ぎの兆候は出ていないようだ。

ジャックはジャックで突然背後に現われたオリビエの攻撃に驚きながらも回避に成功。彼女に対して文句を言う余裕もある様子だ。しかし、ジャックは文句を言うことで第二の気配には気付かなかつたようだ。

「よそ見…しないで…邪魔…ッ！！…フッ！！！」

「なっわああああああああああああッ！?!?!?」

シルビアの持つハルバードから魔力によって編みこまれた風圧にジャックが巻き込まれたのだ。その風圧はスクナにぶつかると爆発するように弾けてダメージを胸部に与えた。

ジャックが巻き込まれたのはギャグ補正のなせる業だろう…。実際ピンピンしているし。

「アハハハハハハッ！ジャック、バツカでえ！！アッハッハッハッ！！」

そんなジャックを笑って見ていたナギ。ジャックの普段が普段だけにナギは心配して見せることもしないで存分に笑い転げている。ここが戦場だということを忘れてはいないか？

「貴方も、避けたほうが、よろしいですわよ？フフフ」

「ナ、ナニイイイイイツ！？」

そこに現われたのが第三の人。ナギは笑っていたから反応が刹那の瞬間遅れたようだ。完全に回避できずにローブの端っこが黒く焦げていた。ナギはあと、もう少し反応が遅れたら全身が黒焦げになっていたかもと考えて全身から冷や汗が出まくりだ。

そう、ナギはリビエラの“輝く霧”の一部に、あわや巻き込まれかけたのだ。当のリビエラには、からかうだけで当てる気はなかったのだが、ナギが予想以上に思いつきり回避したために手元が狂い“掠ってしまった”だけのことだった。

ナギも大変だなあ、っと俺は思ったよ、うん。

「お前らは何をしとるんだ！！？マジメにヤレ！」

「ふふふ。本当にナギを見ていると飽きませんね」

「アルも笑ってないで、何とか言ってくれ！」

「エイシュン…何事も楽しむ気持ちは必要ですよ？」

「何の話しをしとるんだ！お前はッ！？」

何？このカオス…、ってない感じで賑やかだった。ナギ達の戦闘にオリビエ達が乱入した形で、この様相をなしたんだな。それでもも下手な油断などせず戦闘の手を止めないのは皆が一流だからなんだろう。

それにしても近頃、詠春の突っ込みスキルが上昇傾向にある気がするな…。普段が生真面目だから弄り易いんだよ。あと十年もしたら落ち着きと貫禄が出てくると思うんだ。でも、それまでは突っ込み役を頑張ってもらおうと思う。

そんじゃま、俺も仕上げの前準備に入るとしますかな それじゃ脳内スイッチオン！

アストラル・ライン アクション  
…精神魔導回路、起動。  
パラレル・キャスター スタート  
…並列詠唱、開始。  
クイック・キャスター スタート  
…高速詠唱、開始。

んっ…あ…アストラル・ライン  
精神魔導回路が起動して他の強化・補助プログラムも連続して起動している。ああ、気分が高揚してくる…！

…術式「白き雷・広域」を展開。  
…術式「白き雷・結界」を展開。  
…術式「白き雷・抑制」を展開。

媒体は“白き雷”を推奨！敵は巨体！包み込むために広域を！目的は封印！足止めするために結界を！力は強大！弱体化させるために抑制を！

スベル・メモリー      コンブリート  
…全術式展開、完了。  
セレクトシオン・オフエンシブ・フィールド  
…選択、攻勢結界を形成。

術式の構成完了を確認。術式の順番、式番、参番の再構成を開始  
…完了。術式の融合を開始…完了。攻勢結界の形成を確認。

オイル・コンブリート  
…全工程、完了。  
スベル・フリーズ  
…術式・待機。

全工程の終了を確認。魔砲撃シーケンスへ移行…中止。工程を現段階にて待機。尚、敵標準は継続するものとする。待機、待機、待機、待機…。

ふう…。これでは発射するだけ、っと。その前に射線軸上にいる皆に警告しとかないとな。それでは、んんツ！あー、あー。本日は晴天…いや、曇天なり、あー、あー。うん。

【…戦闘地域に居る全ての者に警告する。…“避けるよ？”…】

「…ツ！！？？！？！？！？」 「…」 「…」 「散ッ！！！！」 「…」

術式の待機状態を解除。戦闘モード、イグニッション！



スクナは残った腕で倒れかけた巨体を何とか支えて苦しそうに喘いでいる。時々、結界の過剰放電に触れているせいかバチバチいつている。

…閉じ込められているのは可哀想だから結界は今、解除しておく。閉じ込めたままだとこっちからも攻撃できないからな。ダメージも十分以上に与えてあるから直ぐには動けないだろうよ。

「うんツ、これでよし！！皆、生きてるかー？」

発動前に警告して退避は完了していたはずだけど一応の確認は必要だと思うんだ。やっぱりいらんことでダメージを受けられたらイヤだしさ。

「葵ツ、ズルイ！ズルイぞ！あたし達には禁止したくせに自分だけ大きな魔法を使うなんて！！」

何、駄々っ子みたいにジタバタしているんよ？可愛いとか思っちゃうだろうが。

「いや、良く見てみようよ？ほら、スクナを中心にして被害はほぼ皆無でしょ？オリビエだと問答無用で壊滅じゃん」

「グツ…！なかなか痛いところをつくじやないか」

オリビエも戦闘でやり過ぎないように加減ができれば問題なんだけど…。若干、バトルマニアの気質があるからなあ。対象の捕獲任務には向かないんだもん。

「ふふん オリビエはリビエラやシルビアみたいに手加減を覚えよ

うね？」

ほーら なーで、なーで うん、オリビエのサラサラの黒髪はいつまでも触っていても飽きないものだね。やーらかいなー

「ふ、ふんツ！わかってるよ！」

ありやりや？赤くなって拗ねちゃった？ううむ、赤くなった顔もかーいーし愛でていたいけど、今はそれどころじゃないか。

「ナギ、今が好機だ。一気にスクナを押し込むとしよう」

「ああ。…あとでオレらがオマエを袋叩きにしてやるから覚悟しておけよ？コラ#」

えー…なんでさ？俺が何をした…。

Side out 葵

Side 観測機3号機

「それでは私から…ッ！」

まずはアルビレオが葵によるダメージで呼吸を荒くしているスクナに先んじて得意の重力魔法を五つの球状に形成した。そしてアルビレオは腕を一振りして、その五つの重力魔法を叩き込んだ。

ググ、グウウウウウウウツツ！！？！グアアアア  
ツ！！

苦しむスクナ。スクナは無事な腕で出鱈目に攻撃の元であるアル  
ビレオ目掛けて振るった。

「させんツ！！雷光剣ツ！！！」

ガガガアアアアアアアアツツ！！！！

しかし、スクナの巨腕による打撃は逸早く気付いた詠春によって  
軌道を逸らされてアルビレオに命中することは叶わなかった。

「おらよツ！！斬艦剣ツツ！！！」

ギャツ！！ギャアアアアアアツ！！

そこへ早い段階で追い討ちと言わんばかりにラカンがスクナに自  
らのアーティファクトで小山ほどの大きさの大剣を発生させて脳天  
目掛けて打ちつけた。

しかし、スクナの頭部は見た目通り堅固な硬さを示したようで斬  
撃は打撃止まりだったようだ。ラカンがアーティファクトにそれほ  
ど魔力を籠めていなかったこともあったようだ。

次にナギが姿をスクナよりも高い上空に躍り出た。ナギは右手に  
愛用の魔法の杖、左手に……左手にあんちょこを取り出して雷系最  
大呪文を唱え始めた。

ト・シユンボライオン・デアアコネートーモイ・パシレク・ウーネヒサオチヤセトーアイトルース  
「：契約により我に従え・高殿の王・来れ巨神を滅ぼす・一燃ゆる  
立つ雷霆（ケラウネ・ホス・ティテーナス・フティレイン）・遠隔  
ステンデンテキ成クリ・エクシスタント  
補助・魔法陣展開！…」

スクナは魔力の高まりがナギに集まりつつあることを己の根幹の一部を成す破壊本能で察知したのか、ナギへ猛攻をかけるべく猛然と握りつぶしてやると言うように2本の腕を伸ばした。

「やらせはせんよツ！！」

グワツ！？グアアアアアアアア！！

ナギへ迫り来るスクナの巨腕。それは突然の横からの火炎と爆発の衝撃によって防がれ不可能になった。

マリーによって防がれたスクナの巨腕は表面が黒く炭化しているようで黒い破片がポロポロと落下して水面に落下していった。その間もナギは今も詠唱を続けている。

カブテント・オツイエクタ・アザリームム・アド・デヲムムア・コンステット  
「第一から第十・目標捕捉！範囲固定！一域内精霊圧力（イントウ  
アド・プレッスーラム・クリティカーレム  
ス・セー・プレマント・スピリトウス）・臨界まで加圧！…」

スクナは、しばらく己が腕を使えないことを感じたのか次の攻撃方法を展開した。スクナは二つある顔で正面に位置する口を大きく開くと口内に魔力を充填し始めた。それは今も呪文を唱えて魔力を高めているナギへ狙いを定めて固定されたようだ。

スクナの魔力砲の発射体制が整い、あとはナギ目掛けて射出するのみとなった時、戦場に似つかわしくないのでかかんのびりとした声質で介入してくる者が居た。

「ジャマしちゃダメだよー？メーッ、なんだからー」

グウツッ！！グウウウウウツッ！！

その声が聞こえた時と同時に魔力が充填されたスクナの口内にウーリが作り出した風の塊が突然の暴風によって叩きつけられていた。風の塊はスクナの口内に到達した瞬間に暴発。充填された魔力は元のマナに還元され空中へと融けていった。

暴発した風の塊は魔力を還元させただけではなく口内にも著しいダメージを与えた。スクナの口からは黒い鮮血と還元途中の魔力が蒸気のように立ち上っている。

「ドゥオーブス3（トリプス）…1-2…モト臨界圧！拘束解除！—カプトウラム・デイスユンゲンス全雷精（オムネー  
フォルティッシマー・エニミタムス・スピリトウス・フルグラノレース）・全力解放！！…」

ナギの呪文が終章に入った。大呪文の発現まであと僅かだ。スクナもそれを感じ取ったのだろう。最早形振り構わずに水面の上を我武者羅に暴れスクナの巨体に群がる小さき敵を振り払い、ナギの高まる魔力を屠ろうとする。

「大人しくしてくださいねえ？」

ヴォツッ！？バアアアアアツッ！！ヴァアアアアアツッ！！！！

そして、またしてもそれは防がれることになった。ミリーが指揮者のように、その白くしなやかな指を一振りするとスクナの足元の水が、その巨体に纏わりつき動きを水流で束縛したのだ。

水の拘束が厚くなるにつれてスクナは思い通りに動くことができないとわかるや、より一層暴れ始める。しかし、それも次々と追加される水の呪縛によって抑えられることになってしまった。

ミリーの水の束縛が増えるに連れて拘束力として水圧が増し、スクナの巨体を締め付ける。それと同時に鋭い流水によってスクナの身体と魔力が削られていくことになる。これは捕まれば、あらゆる消耗が必至のミリー特有の束縛陣だ。

「ヘカトンタキス・カイ キリアキス アストラ フサト キリブル・アストラペー  
百重千重と・重なりて・走れよ・稲妻！！千の雷ツ！！！！」

泣きつ面に蜂……。というわけではないがナギは完成させた大呪文をボロボロに傷ついたスクナに目掛けて大魔法を放った。

ブブブツ！！？？！ヴァヴァヴァアアアアアーツ！！？？！

そして、これが今回の止めとなった。最早、スクナは立ち上がることができずにいる。今は、あと少しで復活というところで停止しているようだ。

呼吸が荒い。巨腕の1本の手首は無くなり、1本は千切れかかっている。残りの2本は黒く焼け焦げている。二つある顔の内、一つは口内が切り裂かれてボロボロになっている。無事なのは、まだ出てきていない足ともう一つの顔ぐらいのものだろう。

「今だツ！封印をツ！！」

詠春はここを好機と見るや、すぐさまこの封印に集った陰陽師達に封印開始の合図を送った。陰陽師達は両手で素早く印を組むと東洋魔法の詠唱に入った。

「高天原に神留まり坐す。皇親神漏岐神漏美の命以て、八百万神等を神集へに集へ給ひ、神議りに議り給ひて、我皇御孫命は、豊葦原瑞穂国を、安国と平けく知食せと、事依さし奉りき、此く依さし奉りし国内に、荒振神等をば、神問はしに問はし給ひ…」

封印呪文が開始されると設置された封印の魔法陣のラインに魔力が通って光りだす。魔法陣は三重の巨大円形立体魔法陣。その周りには幾重にも円環魔法陣がそれぞれの方向に回転している。

「神掃へに掃へ給ひて、言問ひし磐根木根、立草の片葉をも事止めて、天の磐座放ち、天の八重雲を、伊頭の千別に千別て、天降し依さし奉りき、此く依さし奉りし四方の国中と、大倭日高見の国を安国と定め奉りて、下津磐根に宮柱太敷き立て、高天原に千木高知りて…」

魔法陣からは封印の効力が始まったようだ。今まで顕現されていたスクナの身体が魔法陣の仲で少しずつ沈むように融けていく、融けていく、融けていく…。

「皇御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて、天の御蔭日の御蔭と隠り坐して安国と平けく知食さむ、国内に成り出む天の益人等が、過ち犯しけむ種種の罪事は、天津罪、国津罪、許許太久の罪出む…」

抵抗する体力も気力も魔力も無いのかスクナは今のところ封印担当の陰陽師達の呪文で大人しく封印されている…。

「此く出ば天津宮事以ちて、天津金木を本打ち切り末打ち断ちて、千座の置座に置足はして、天津菅麻を本刈り断ち末刈り切りて、八針に取裂きて、天津祝詞の太祝詞事を宣れ…！」

大規模封印の呪文が半分を過ぎた段階でもスクナは大人しく封印されている。ここまで来れば封印は最早、確實と言えるだろう。

「此く宣らば、天津神は天の磐戸を押披きて、天の八重雲を伊頭の千別に千別て聞食さむ、国津神は高山の末低山の末に登り坐て、高山の伊褒理低山の伊褒理を搔き別けて聞食さむ…」

呪文詠唱が後半に入った。それでも、ここに居る者達は、まだ気を抜かない。抜けない。彼等は何かを感じているのか、スクナから目を逸らすことをしない。皆、それぞれが注意深く、封印作業を警戒、観察している。

「此く聞食してば罪と言ふ罪は有らじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く、朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹き掃ふ事の如く、大津辺に居る大船を舳解き放ち艫解き放ちて大海原に押し放つ事の如く…」

封印作業が順調に遂行している。そんな時、警戒しているメンバーの中で幾人かが微かな異変に気が付いた。それは極僅かな変化…。警戒して見ていなければ決して気付かないであろう変化。

それは魔力の揺らぎ…。その発生源を特定するために意識を集中していく。その先には封印式の中心に在るスクナから発生していた。

「彼方の繁木が本を焼鎌の利鎌以て打ち掃ふ事の如く、遣る罪は在らじと被へ給ひ清め給ふ事を、高山の末低山の末より佐久那太理に落ち多岐つ、早川の瀬に坐す瀬織津比売と言ふ神、大海原に持出でなむ…」

陰陽師達の呪文は、その異変に気付くことなく一見した限り順調に朗々と唱えられていく。呪文も残り、あと少し。封印式の完成まで、もうすぐだ。

それでも異変は無くならない。それどころか魔力の揺らぎは増える一方だ。ここまで来ると全員が異変を感じ取り始めた。魔力の揺らぎがゆらゆらと、ユラユラと…。

そこで皆が警戒心を一層強めた時だ。突然、何の前触れも無く、それまで感じ取れていた魔力の揺らぎを感じられなくなったのは。皆はあまりのことで拍子抜けしたようだ。瞬間、緊張を解くように誰ともなしに溜め息が一つ漏れた。

そんな時だ。

グワアアアアアアアアアッ！！！！ガアアアアアアッ！！

突如としてスクナが最後の悪足掻きと言わんばかりに今まで以上に爆発するように暴れ始めた。封印式が完成する少し前のことだった。

Side out 観測機3号機

Side 葵

どうしよう？なんかスクナさんが、ものっすごい暴れ始めたんで

すけど…。とつつあん、どうしよう？…とつつあん、て誰だよ？

まあ、んなこたーどうでもいいんよ。皆は余りに突然のことで呆然としているし。ふうむ…：ヤルか？ヤっちゃうか？ヤっちゃいますか？封印式を肉眼で舐めるように観察しておきたかったんだけど、こうなつたらヤルしか…ないッ！

このままだといつまで経っても術式がちつとも進みやしない…！フフ、フフフフ、天国のお父さん！お母さん！（って生きてるのか死んでるのは知らんがッ！そもそもあの両親が天国に逝けたのかな？）葵は、いっちょデカブツを黙らせてこようと思えますッ！

全ては知的探究心のためにッ！！…俺の個人的の、だがなッ！！

「ハオ、ユエ…行こう。このままでは儀式が進まない」

『『承知！』』

「此く持ち出で往なば…！荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百曾に坐す速開都比売と言ふ神、持ち加加呑みてむ…！此く加加呑みてば…ッ！息吹戸に坐す息吹戸主と言ふ神…！根国底国に息吹放ちてむッ…！」

封印を施している陰陽師達は、これまでに無い抵抗をスクナから受けているのか詠唱する声に苦しさが見え始めたな…。なんと言っか…。魔力不足？抵抗が激しすぎて彼等の抵抗値がガンガン削られている感じだ。

このままでは力及ばず儀式が完成する前にスクナが出てきてしまっつかもしれない。俺にとっては折角の東洋の封印式が見られなくな

るから勘弁願いたい事態だ。ここまで来てお預けは正直言ってイヤ過ぎる。それじゃ、まずは…。

白の一刀！放つは光！！

八才を一振り。現れるは白の剣が一。

黒の十刃！放つは影！！

ユエを一振り。現れるは黒の剣が十。

白の百刃！紡がれるは栄光！！

八才を一振り。現れるは白の剣が百。

黒の千刃！紡がれるは破滅！！

ユエを一振り。現れるは黒の剣が千。

陰陽刃！ここに顕現せり！！陣形構築ツ！！！！

スクナの天頂から円錐状に展開した白と黒の剣先が向くのは主の敵。その攻撃にさらされる敵から見たら死角は無いように見えることだろう。あとは魔法の最後の発動詠唱を残すのみ。それもすぐさま唱えられることになる。

屠れ！鉄槌魔法“剣弾陣ツ”！！！！！！

グサツ！グツ！？斬ツ！ギヤアツ！？ドドドンツ！！グワアアアアアアアツ！？…ツ？！…。

「ふんっ、身の程を知るべきだったな」

隊列を組んだ剣の軍は空を滑るように一斉に行進マーチを開始した。敵を貫き、切り裂き、蹂躪するために。

スクナから見たら千以上あるとは言っても顕現した剣の大きさは小さな蚊ほどのモノにしか見えなかっただろう。だがそこに籠められている力…魔力は強大。この世のモノに限らずあの世のモノまで切り伏せることが可能と示すほどに、一振り一振りに籠められた魔力は強大だった。

「そんなに暴れんかって！葵の邪魔になるだろがッ！！！」

ギヤアアツ！？アアアアアア！！

「此く息吹放ちてば、根国底国に坐す速佐須良比売と言ふ神、持ち佐須良比失ひてむ…！」

蠟燭の最後の灯火と言うように傷付いても形振り構わず、暴れ続けるスクナにオリビエが体剣に魔力をやや強めに籠めて威力を増幅して今も暴れ続けるスクナに振り下ろして叩きつけるようにして斬りつけた。

スクナの抵抗が弱まったことで陰陽師達の呪文詠唱には澱みのほとんども消えたようだ。詠唱も架橋に入ったようで、最後のラスト

スパートを仕掛けるように力強く唱えられていく。

「大人しくう封印されましよう…ねえッ！！！」

アッアッアッ！？ガアアアアアッ！！ゲッ！？

「此く佐須良比失ひてば、罪と言ふ罪は在らじと、被へ給ひ清め給ふ事を…！」

スクナの動きを攻撃と言う名の結界で阻害して封印式から一步も動けなくするリビエラ。彼女の織り成す“輝く霧”はスクナを中心に漂っていたが、やがて周囲を高速で回転して範囲を狭めていった。そしてその霧はスクナの重装甲と言ってもいい表皮が容赦無く削られていく。

封印の呪文も更に抵抗が弱まったことで一気に詠唱が加速する。

「…お兄ちゃんの…ジャマ…しない…でッ！！！」

グッ！？アッアッアッアッアッアッアッ！！！！

シルビアも頑健な葵謹製のハルバードを振り上げたと見えた瞬間には彼女の姿が消失。どこに行つたのかと探せばスクナの顔のすぐ前に出現していた。そして振り上げていたハルバードを回転させて、遠心力と魔力と単純な強力じょうりきを乗せた突撃でスクナの顎を打ち上げた。

そのまま三度、連撃を叩き込み角と牙を叩き折つた。鬼にとって角と牙は力の象徴だ。よつて他の部位と違って殊更頑丈にできている。これはどの鬼も変わらない事実だ。それが荒神として在るリョウメンスクナノカミとしても例外ではない。ここで何が言いたいか

と言ふと…。

ガガッ！？！？ガッアッアッアッ！ッ！アッアッアッ  
「……！！？」

つまり、そう。弱点を粉碎されたということに他ならないのでス  
クナはこの世のモノとは思えないほどの痛打、激痛と言ったあらゆる  
痛みを味わうことになったのだ。

想像してみてもほしい砕かれた牙は…こちらは想像しやすすいだろう。  
歯医者で麻酔無しの治療を受けるのだ。しかも治療された箇所は間  
違って健康な歯を治療という名の拷問に曝され、治療に必要な箇所  
は更に悪化させるのだ。

粉碎された角は、人間で言うところの頭蓋骨を粉碎して脳神経を  
直接、無理矢理に掻き乱されているようなものだ。それほどの痛み  
をスクナは味わっているのだと考えたら他人事ながら同情と涙を誘  
う思いだ。

ここを好機と見て陰陽師達が一気に詠唱とともに魔力の質と量を  
上昇させて最後の仕上げの一節を唱える。

「天津神国津神八百万の神等共に聞食せと白すッ！！！」





## 第二十七話「闘争と戦闘と封印と」(後書き)

一話丸々戦闘に費やしてしまった…。なにコレ？  
スクナにどんだけ字数使ってるんだよorz  
作者の文書力が低いことを痛感中です。

突然ですが次回からは物語を進めるために時間軸を飛ばしていくこと  
となるかもしれません。

毎度の事ながら予定であって未定なんですけどね！あっはっはっは  
っ！

では！皆さん、また次回に！さよなら、さよなら、さよなら！

第二十八話「解析結果と昼道いと開店準備と」(前書き)

しばらくはほのぼのな話しを続ける予定です。

実際はどうなるかわからないですけどね？

では、続き！行ってみよー！

## 第二十八話「解析結果と昼這いと開店準備と」

日本国京都府上空某所…。

Side 葵

スクナとの戦いから数週間が経った。今、俺は京都府上空にステルス航行で展開した機動戦艦アングレカム内にある執務室でスクナ戦に使用された封印術式の解析結果に目を通していた。

この術式なんだけど複雑な術の部分を解体して部分化してみたんだ。そしたら基本は単純な封印式にそっくり。いや、式は封印を目的としたものだから当然っちゃ当然なんだけどね。それでな？根幹部分に、その式を主軸にしているみたい。

そしてそこに肉付けして行って巨大で堅固な封印術式にクラスアップさせたようだ。まあそのせいか知らんが術式は複雑化して一部なんかは雑然としてしまったようだ。相手も一応、わかる限りで術式を削除したり付加したりして最適化しているみたいだ。

それでも最適化し切れていないみたいなんだ。俺が式をバラしてチヨコチヨコツと見た限りじゃ、まだまだ削れるところがあるように見える。

「東洋魔法って長い呪文だけで強力なもの呪符などの魔法媒体を使った威力は低いけど即効性があるもの…」

なんで東洋系は…と言うより陰陽道系は極端なんかね？術の幅が広く造詣が浅く、まあ人によっては一部深く。良く言って万能、悪く言えば器用貧乏。生かすも殺すも術者次第の形態を持つんだなあ、と今更ながら感じるよ。

うん、十分に封印式の情報が手に入ってホクホクですな。いやー、今回の解析結果から基本は大事だつてことを改めて学んだよ。何事も工夫次第だよねえ。基本に忠実に、手堅く堅実に、か。ある意味で俺向きな気がするわ…。はあ。

「それにしてもスクナつてこの時代では随分としつこかつたんだなあ。矢鱈と頑丈だつたし…」

うん、驚きだった。物語の中では闇の福音にアツサリと敗北していたから弱つちいイメージがあつただけだ…。

「子供先生の時は、この再封印の結果があつたからアレだけ弱い印象を懐いたのかも？」

だとしたら今回は俺が居たから、やや変化があるか…。もしかしたら今後、子供先生の時に復活させられるスクナは原作よりも弱体化しているかもしれない。

アレ？もしかしなくても物語に介入したことになるのか、な？…マズくないか？面倒なことにならなければ…いや、ならないか。敵が弱くなるなら問題ないよな。子供先生の成長とか俺にとってはどうでもいいし。

「子供はキライじゃ無いけど…あの子に限っては厄介事しか舞い込んでこなさそうなんだよなあ…」

トラブルメイカー…違うな。フラグメイカー？うん、これだな。フラグメイカーだから言いも悪いも区別無くトラブルも何もかもを呼び込んできそうだしな。あまりお近づきになりたいとは思わない類の人種だよなあ。

それでも、もう麻帆良には喫茶店を展開するために1チーム送って色々と準備が進めているんだよな。とりあえず原作開始十年前までには開店したいと計画中。俺はこのままここでナギ達とは完全に別行動。また半隠居生活に突入しようと考えている。

「この休暇の間にナギ達には説明してあるから問題は…無いよな。序でに、なんか写真撮影なんかもしちゃったし。ふふふ、この先、あの2人には色々と困難な道のりだけど…。本人達が幸せならどこだって変わらないだろ。…その道が、たとえ地獄のようでも、ね」

英雄の称号は何かと重いぞ、ナギ？しかも一度、そのレッテルが貼られると二度と平穏な時は訪れない。…決して、な。英雄の最期は悲劇で終わるのが殆んどだ。願わくばできるだけ長く彼等の幸せが続くことを祈ろう。残念ながら俺が祈りを捧げる神は居ないが…。

俺のように姿を暗ませるでもしない限り、厄介事はどこまでも追いかけてくるだろうよ。俺の居場所を知ることができたらソイツは大したものだ。だが残念なことに間違いなくソイツは敵だ。知り合いなら緊急事態でもない限り事前に連絡が入るはずだからな。

「とりあえず麻帆良に行くまでは、ここ京都で喫茶店を開店して… ゆっくりと…するか…」

葵は椅子に身体を深く沈めながら今後のことを漠然と考えて、そ

のまま目を閉じた。

Side out 葵

機動戦艦アングレカム艦内、葵の執務室前：

Side フリチラリア

この数週間で家族の皆さんの休暇も無事に消化されました。皆さんそれぞれの仕事に戻って通常体制に入っています。…ええ、有意義で実に充実した休暇バカンスでしたわ 葵様にご飯をアーン っで食べさせてもらったり…他にも…えへへ コホンツ！ええ、有意義でしたわ！

例の鬼神騒ぎが起きた時はどうなるかと心配しましたが杞憂でしたわ。葵様も目立った怪我をしていらっしやらないようで安堵した思いですわ。もしも、あの一鬼神（駄神）が葵様に怪我を負わせようものなら……クスクス、クスクス…

ハッ！？げふんっげふんっ、それはともかくあの時は大事にならなくて良かったですわ。今回の休暇は折角、合法的に葵様に襲いか…甘えることができる、少ない機会なのですから余計なことで時間を取られるのは遠慮したいものでした。

まあその葵様自身が戦闘から戻られてからは術式の解析に掛かり切りで数日、執務室から出てこられないこともありましたわね。そ

れに執務室でそのまま、お眠りになっていたりすることも、しばしばあるのですが…。

今日はどうかしら？今頃は解析結果に目を通されているところだと思えますけど。

コンコン。

「葵様？失礼いたします。フリチラリアですわ。…あら？ふふふこのような場所で寝てしまうなんて、よほど疲れていたんですね」

また、このような場所で寝てしまわれて。ふふふ、風邪を引いてしまいますわよ？もっとも艦内空調は常時に渡ってその場の適温に調整されているからそのようなことは無いとは思いますが。

「…すう…すう…むにゃ…」

「それにしても何てあどけない寝顔なのかしら…」

ああ、ああ！抱きしめたい！抱きしめたい！抱きしめたい！この愛するわたくしのご主人様を時間の許す限り愛でていたい！ああ…愛しいわたくしのご主人様…！

「…ダメだよ…リチラ…そんな…すう…」

「ハア…ハア…。こ、このまま頂いてしまっただめかしら？ハア…ハア…」

幸いなことに、いつもジャマをしてくるアイリさんもファレノさんも今は周辺警戒の任務で外へ出ています。これは…チャ、チャン

スかしら？…そうね、今日こそ…今日こそは…イケるツ！？

寝込みを襲うようなマネをするのは甚だ遺憾はなはなのですが…遺憾ですのよ？本意ではありませんことよ？本当ですよ？これは…夜這い…まだ、お昼でしたわね…。ええと…そう！添い寝ですわ！ええっ、これは添い寝です！途中でくんずほぐれつしたとしてもこれは添い寝です！

「…ということですので少々失礼しますわね…。起こさないように…。ふう、これでよし…。では、……いただきますッ、葵様！」

静々と葵を抱えて隣の部屋の仮眠用のベッドに寝かせて、その隣に自分も入ろうとするフリチラリア。やっと彼女の目的が達成できると思われた。しかし、往々にしてこういう場合は意図しない邪魔が入ることは既にお約束と言われる現象として位置づけられているものだ。

「お父さーん！追加の資料ができたよー！あれ？居ない？仮眠室かな？」

今の声は…アンツ！？なんで！？なんで肝心の時にいつもジャマが入るんですの！？ああ！それよりもこの状況はマズイですわ！何とかしなければッ！…って！どうすればいいと言つのですかーッ！…！

「……………え？」

「……………あ」

「……………すう……………すう……………」

き、気まずいですわ……。なんと云うか、いざ、事に及ぼうとした時に家族に見えられた時のような気まずさですわ。って、そのままではありませんか……。アンは家族ですし。まだ今の段階がそこまでではないので誤魔化すことは……できるかしら？

「……なに、してるのかな？リチラお姉ちゃん？ねえ？」

早速、来ましたわ……！リチラッ、ファイト、ですわ！

「………葵様が執務机のほうでお眠りになっていらっしやっただけで仮眠用ベッドへとお運びしたのですわ」

じ、事実を述べましたわよ？執務机でお眠りになっていたのも、仮眠用ベッドに運び込もうとしたのも全て事実ですわ。色々と省略したかもしれませんが……必要は無いはずですわ。ええ、必要ありませんわ。問題を大きくするだけですし……。

「……そう。それじゃ、なんで、リチラお姉ちゃんまで寝ようとしてるの？おかしくない？おかしいよね？おかしいよ」

しまったーッ、ですわ！わたくしの体勢が疑いを濃くしてしまっただけですわ。ど、どう言い訳を……？ああ、そうですわ！

「………添い寝、ですわ」

「……添い寝？へエ？……添い寝なのにその服の乱れは何なのかな？ただの添い寝なのに、おかしくない？おかしいよね？おかしいよ」

はう！？やっつてしまいましたわ……。できるだけ素肌で葵様の感触を楽しもうとしたことが裏目に出るなんて。ど、どうしましょう！

「ええと、ええと…。」

「……………それは、その…服…そう！服が皺にならないようにしよう  
と…」

「…服が、皺に…ねえ？…ほう？へえ？…ねえ？リチラお姉ちゃ  
ん、知ってる？皆に支給されてる制服は特殊加工されていて簡単な  
対魔はもちろん、防弾、防刃作用と…皺が付かない安心素材ででき  
てるんだ、よ？」

ええ、ええ！そのことは重々承知しておりますわ！わたくしも積  
極的に作成時に意見を出させてもらいましたもの、知っていて当然  
です！それでもここで正直に白状してしまっただけは先ほどの言い訳が  
無駄どころか決定的な失態に繋がってしまいます！何としても誤魔  
化さなくては！

「……………そ、そうなんですの？それは知りませんでしたわ。ええ、  
知りませんわ…」

「…へえ？知らなかったんだ。そっか、それなら仕方ないかな」

「……………ホッ」

「どうやら上手く誤魔化せたみたいですね。これで危機は回避した  
も同然…。」

「…あれーえ？でも、おかしいなあ」

「ッ!？」

えッ!？何か、わたくし間違えたのかしらッ!？いえ、そんなはずは…ッ!！まさかッ!？

「制服作成時には旧指揮官全員が意見を出し合った、って記録に残ってるんだけど。これはどういうことかな？」

「……………そ、それは」

間違いないですわ。やはりアンは直接、データバンクから情報を検索していたようですわ。考えてみれば保管されたデジタル情報は全てアンが管理、整理しているのですから当然ですわね。でも、まさか書類のデータ化も終わらせているだなんて考えも付きませんでしたわ。

717

状況は最悪…。記録情報のオリジナルは全て向こうが一括管理している。そして切り口の切っ掛けを与えてしまったのも痛いですわ。最早反撃の糸口すら見えない…!わたくしは一体どうしたら!？

「その制服のデザインなんかはリチラお姉ちゃんの意見が特に反映された、って記録にあるよ？それなのに制服の特徴を知らないなんてことがあるわけ…無い、よね？」

「……………」

そんな細かいところまで記録化されてますの!？あのやり取りは議事録から後で削除されたはずですわ!でも、記録は残っている。

…削除されずに書類が…残っていた？職務怠慢ですわ！！削除作業  
くらい、きちんとしてほしいものですわ！

既に逃走は困難…いえ、無理ですわ。こうなったらアンには黙っ  
ていてもらせるように何らかの取引に引き込むしかありませんわ。  
でも、それはどうしたら？一緒に添い寝に誘い込む？失敗とは言わ  
なくてもわたくしが恥ずかしいので却下ですわね。

「素直に白状して謝罪するなら…ここだけの話しにしてあげても、  
いいんだけどなあ？」

「ごめんなさいすみませんでしたごめんなさいすみませんでしたご  
めんなさいすみませんでした…」

形振りなんて構っていられませんでしたわ。引き出したい条件を  
向こうから提示してくれるなら何をしてでも掴み取らなくてはなり  
ませんもの。

Side out フリチラリア

機動戦艦アングレカム艦内、葵の執務室内…。

Side アングレカム

アイリお姉ちゃんからリチラお姉ちゃんの“悪癖”の話は聞いて  
いたけど、その時の私は“まさか”って笑いながら流していた

けど…。そのまさかを自分の目で確かめることになるとは夢にも思わなかったよ。

私はリチラお姉ちゃんが本当に“まだ”、お父さんに何もしていないことを確実に知るために精神的拷問…もとい、事情聴取をして…あの、その…“ナニ”には、到っていないことが判明した。今になって考えると私は何てハシタナイことを追及していたんだろう…。

うう…！恥ずかしいよー！

「まったくもう、しょうがない、リチラお姉ちゃんなんだから！こんなことはこれっきりにしてよね！約束だからね！わかった！？わかったら返事して！」

そんなつもりは無かったんだけど自分でもビツクリするくらい大きな声を上げて注意しちゃった。これじゃあ八つ当たりだよな？少し大人気ないと言うかハシタなかったかもしれない。そう思うと少し反省しなきゃって考えちゃうよ。

「はい…。今後は、このよう…が無いよ…心がけ…わ…クスン」

私が、そんな愚にも付かないことを反省しているとリチラお姉ちゃんがモゴモゴとした口調で謝罪と今後の約束をしてくれた。確かに謝罪はしている、それでも、これは…。

「聞こえないよ！ちゃんとハッキリと声を出して！ハイ！もう一度ッ！…！」

「はいッ！今後は、このようなことが無いように心がけますわ…！」

「うんっ、それじゃ約束したからね?... 破つたら...」

やっぱり、こういうことはしつかりとしかないと変な癖になっちゃうからね。多少厳しくしてでもハッキリとさせないと!... 一応私も好きでこういう厳しいことを言っているわけじゃ無いんだからね?

苦言を言うのは今回のことばかりじゃなくてお姉ちゃん達、皆の事を思つてのことなんだよ。... まあ、変なことをお父さんにされないように目を光らせているのも事実だけど、ね。実際に見るまでリチラお姉ちゃんが本当に今回みたいなことをするとは思わなかった。

今回のことで約束はしてくれた。それでも私との約束がどの程度の期間、効力を発揮してくれるかが問題よね。ファレノお姉ちゃんの話しを思い出してみると過去に必ず再犯に及んでいるみたいだし、少し不安...。

「だ、大丈夫ですわ! アンとの約束は守りますわ! ええ、守りますとも! (じゃないと今回のことが密告されて今以上の苦行が待ってますわーッ!!)」

... 本当かなあ?

「信じるからね?... さつてと! お父さんは寝ちゃってるし...」

「起きてるよ...」

「...」

「ありゃ？お父さん、いつから起きてたの？」

今までの会話、聞かれちゃったかな？お父さんに誤解…んー？不安？とにかくそういうのを悟らせるようなことは避けたいんだけど…。本当に、いつごろ起きたんだろ？

「ついさっきだよ。二人の声が聞こえたから。んーッ！はあ。で？俺をここに運んでくれたのはリチラ達か？」

「それは…」

「んーん。お父さんをベッドに運んでくれたのはリチラお姉ちゃんだよ。私は追加の資料を届けに来ただけだよ。リチラお姉ちゃんって優しいよねー？」

「アンッ」

これくらいフォローはしてもいいよね？お父さんを運んだのは事実なんだし。

「そっか。リチラ、運んでくれて、ありがとうね。おかげでグッスリと眠れたよ。…と言ってもまだ日は高いみたいだけどね。ハハハ」

「い、いえ。そんな大したことはありませんわ。ですが、お気持ちは受け取らせてもらいますわ」

リ、リチラお姉ちゃんがデレて…違った、照れている！？本当だったんだ…。リチラお姉ちゃんが純情路線だった、って。普段の鋭い騎士のような立ち居振る舞いの裏にはこんな表情が隠れていたなんて…意外だ、って言ったら失礼かな？

「…リチラお姉ちゃん。…（ボソツ）お父さんにお礼を言われたことが嬉しかったなら素直になればいいのに」

「何か…言ったかしら、アン？」

「えっ？ううん！何にも言ってないよ。アハツ、アハハハ…」

今までの涙目で反省を表していたリチラお姉ちゃんの雰囲気ガラツと変わったよ。どっちが素なのか迷うね、本当に。

「なんか、よくわかんないけど。…とりあえず追加資料を見たいから執務室へ移動しようか」

「はい、葵様」

「わかったよ」

お父さん、ナイスです！本当にありがとう…！押し掛かるプレッシャーから救われたよ。

隣の執務室へ移動中…。

そして執務室の自分の椅子に腰掛けてからお仕事の話ですよ。お父さんは一回深く椅子に沈み込み少しの間、瞑目してから話しをはじめたの。

「それで追加の資料は？」

「うん、これなんだけど」

「ありがとね。んー？どれどれ…」

私が渡した電子情報と紙媒体の書類に目を通すために視線を落とした時にリチラお姉ちゃんが、お父さんに少し恐縮気味に声をかけてきたの。

「あの葵様？わたくしは他の用事がありますので…」

「え？あー、うん、了解。それとリチラ、身体には気を付けてね。無理をしても毒なだけなんだから」

相変わらず優しいね、お父さん。その何気ない一言に皆が一喜一憂しているのを当の本人だけが知らないんだから「なんだかなー？」って気分にはさせられるよね。

「葵様…。はいっ！無理はしませんわ。それでは、また」

リチラお姉ちゃん嬉しそうだねー？これだけであと10年は戦えるってくらいの気迫を感じ取れそうだよ。うん、冗談とかは横に置いておいて気迫的には本当にヤレちゃいそう…。足りない物とかは現地調達してさ。

「またねー」

「リチラお姉ちゃん、またね」

それから二人でリチラお姉ちゃんをちゃんと見送ってから仕事に戻ったの。今日の教訓は“身内とはいえ油断したらお父さんを取られる”だね！！ヤラせない！ヤラせないんだからーッ！

Side out アングレカム

機動戦艦アングレカム艦内、葵の執務室内…。

Side 葵

「アンも葵に渡した資料のことを簡単に説明にしたら次の仕事があるので部屋を後にした。」

「次の仕事があったのに二時間もここに居たのか…」

俺が寝ている間に何があったんだろうか？資料を届けるだけなら執務室の机に置いておいてくれればよかったのに態々仮眠室のほうまで来てくれるなんて。…あれ？ということは、リチラはその前から居たということになるよな。俺を運んでくれたのは彼女だし。」

「俺が寝ている間に、またリチラが甘えて布団の中に入ってきた、とかなのかな？」

いや、まさかな。ここ数十年そんなことは無かったのだし。今更そんなことは無いか、うん。それよりも追加の資料のことだな。

「こつちが麻帆良での出展に関して、で…。こつちが京都府にて開店する予定計画表か。…ん？これは…エヴァンジェリンの動向調査書？」

ああ、随分前をお願いしてあつたものの途中経過報告書か…。ふうむ、これから先、いつだったかナギのおつかけになるんだった、よな？その原因は忘れたけど。時期がわからないからイベント発生の大体前後5年で手配しておいたんだけど。これは…。

「んー…気付かれている、と見ていいのかな？」

この報告書を見た限りだと追跡途中で何度かそれらしい行為をしている、とある。流石は悪名高い闇の福音殿ダーク・エヴァンジェリンだな。彼女達の決して薄くない精霊や悪魔の気配や二オイを感じ取って気付かれたのかもしれない。若しくは他の何らかのことが原因か…？

実際に会つたことは無いけどあの子は危機に対して何げに鼻が利くからなあ。監視するなら超高高度からの監視に絞つたほうがいかもしれない。機械的な偵察機からの監視ならあの機械音痴には効果的かねえ。まあ俺は居場所の確認をしたかっただけだしね。

「現状の監視任務を偵察機による遠方からの監視に移行、つと…。これでよし」

下手に相手方を刺激して警戒なんかされたら面倒くさいことになるかもだしな。最悪、狙われることにもなりかねない。勝てなくは無いけど相手は真祖ハイデイトウオーカーの吸血鬼だ。息の根を止めるのに一苦労しそうだ。何より…しつこそうだし。

なによりも……見た目が10歳前後の幼女だからやり難いっただけ。せめて20歳前後だったら少々の配慮だけして叩きのめせるんだけど……。ああ、詮無いことを考えてるな。こんな考えは意味がない。

「次の書類は……はあ、アレでは懲りなかった、ということか？これは……」

書類には連合の元老院が「紅き翼」の、というよりもアリカさんの所在を探しているとある。元老院の老害共はケルベラス溪谷の一戦だけでは何も学ばなかったということか……。いや、あの場に居たのは元老院の一部の者達で全員ではなかった。

「……この際、一度、徹底的に叩き潰す必要が出てくるかもしれないな」

はあ……ん？それこそ俺には関係ないことだ。まあ連中が俺個人にターゲットを絞り込んできたのなら相応の対応をしないでもない。それにしても七百年ほど前はもう少しマトモな政治を心掛けていたと臆げながら記憶していたんだけどなあ。

長い年月で中枢の権力者達の大多数が腐敗……してしまったということなのか？長過ぎる歴史を持つことで凝り固まった固定概念と、くだらない意地プライドを懐くことになったために何の益にもならない屈辱を晴らそうとしているのか。

「煩わしい……が、潜伏している俺達が今、手を出してしまっただけも子もない」

周りを嗅ぎ回る犬共が居ると思うと不愉快な思いにさせられる。

それもこれも俺が下手な好奇心を出して面白そうだからって理由で戦争に加担した結果がコレだもんな。やっぱり俺は裏から手を回すほうが性に合ってるかもしれないなあ。

「面倒だ、ああ、面倒だ、面倒だ……」

……センス、無えなあ。軽く表舞台に出て、軽く国家規模のことに手を出すと、いつも面倒なことになる。俺も懲りないねえ。元老院のことをとやかく言えないかも。アハハ……。

「マズイ……鬱だ……」

この俺が奴らとドッコイドッコイだと……言うの、か？激しく鬱だ……。マジで勘弁。確かに年齢は、この世界の誰よりも上だけど俺は奴らほど腐ってない。俺は家族達が無事ならば、それで満足なだけだ。割とコレって自己満足なんだけどね？実は。

はあ……。やめッ、やめッ！こんなこと考えても何の得にも成らない。もっと楽しいことを考えよう、うん。そうしよう！

「そうとなれば喫茶店の準備でもしよう……。まだそのほうが有意義だ」

そう言って葵は机の上にある書類に必要事項を記入して京都府店の喫茶店開店準備を進め始めた。

S i d e o u t 葵



## 第二十八話「解析結果と昼這いと開店準備と」(後書き)

ここからはザツと省いて原作開始まで年単位で話しを進めて行きたいと考えています。

そろそろ一話で話しをまとめる技術も身につけないと主に作者の指に被害が来そうなので…。

具体的に言つと休日に長時間タイプ打ちしているとツリそうなんですよ…。

起承転結を一話で、それも一万文字前後で表せるようになるのが今のところの目標ですかね？

アクマで趣味で書いてるんで、すぐには無理ですけどね！！アハハッ！！

では、皆さん！また次回！チャオッ！

第二十九話「橋渡しと喫茶店開店とクールな少女と」(前書き)

今回のテーマは”リクエスト”です。

その理由は後書きで！

では、続きです！どうぞ！

## 第二十九話「橋渡しと喫茶店開店とクールな少女と」

京都府店喫茶クレイドル店内…。

Side 葵

スクナ復活の事件から1年が経った。あの後俺は、ここ京都府の一角に喫茶クレイドルを新装開店させることができた。半隠居生活の始まりだった。

京都での開店準備の時。あの魔法大戦の終戦直後ということもあり異端とはいえ傍から見たら西洋魔法使いと変わらない俺達は歓迎されなかった。そのせいで東洋魔法使いの一部の者達からは俺が店を出すことに割と強い反発を受けたこともある。

まあその時に今の関西呪術協会の長が穏健派と一緒に仲介してくれたから大事にはならなかったんだけどね。まあその代わりに長から頼まれたことがあるんだ。その頼まれたことというのが…現近衛家当主の娘と詠春との橋渡しのことなんだ…。

何が悲しくて独身の俺が人の結婚の世話までしないとイカンのかね？下手な借りを作りたくないからキツチリ仕事は果たしたけどさ。とりあえず婚約することに詠春は同意してくれた。本人も満更じゃなさそうだったし。

でも今、詠春は「ナギ達のことでもあって結婚に集中できない。このままでは相手に失礼だ」との理由で居ない。まあ結婚することに

は乗り気と言うか受け入れてくれているみたいだ。いや、実際、近衛の姫さんって美人さんよ？詠春も奥さんになる人が美人さんで鼻が高いだろっね。婿だけど…。

美人さんは家族の皆で見慣れているからどつってことは無いけど、やっぱり彼女が欲しいなあ。できれば同い年の我侏ボディの可愛い感じのおんにゃのこを希望したい。

…よく考えなくても無理じゃね？同い年の、って何だよ…。家族を除けば最も歳が近いのは、あの吸血鬼幼女エトアンジェリンじゃなか…。幼女は、愛ではするけど異性としては…ムズイわー。俺にはハードルが高すぎる気がする。俺は勇者じゃないんだ。

また、どうでもいいことを考えてしまった。反省。

## カランコロ〜ン

「いらっしゃい、空いている席へどうぞー」

そんなことを考えていると客が来たようだ。俺は軽く出迎えて空いている席に座ってくれるように促した。開店してまだ1年も経ってないけどご近所の奥様方や学生さんの間で口コミで徐々に集客を増やしていつてるんよ。

当店自慢のケーキセットは今も人気商品です。来訪されるお客様に快適な癒し空間をご提供することを常に心掛けておりますよ

さてと、今日もマツタリと仕事しますかねー。

京都符店喫茶クレイドル店内の一室…。

Side ミリエール

主様とお、日本の京都でまたお店を出して幾月年経ちましたわあ。私達い精霊から見たらほんの瞬きのような時間でも人間の方達にとつてはそうではないのよねえ。特に変わったことと言えばあ…うふふ… 詠春さんがご結婚なさったことかしらねえ？

「ああいう衣装をシロムクというのでしたっけえ？結婚衣装は、形は違うけど純白なのは殆んど共通なのですねえ」

子供も生まれて…ああ、可愛い女の子なんですよあ 今3歳で名前は木乃香<sup>このか</sup>ちゃんって言っの。笑顔が素敵な女の子でしたねえ 一つの時代も子供は可愛いものですわあ。新しい命の誕生は私達精霊としても歓迎していますものお。

「無垢なる魂に幸あれえ。なあんてえ、抱き上げた時に昔の癖で言っってしまったわえ。うふふ」

生命の輝き。無垢なる魂の輝き。未来への希望の輝き。様々なものを感じさせてくれるわあ。本当にい、いつ見てえ、感じてもお飽きませんわねえ。小さくとも確かな輝きを、そこに感じられるのですからあ。

「それに片鱗だけだけどお、なかなか強力な魔力を宿しているよ  
うですしねえ…。あの子の将来が心配だわあ」

近衛の血筋というものなのかしらねえ？強過ぎる力はより強い力を自然と呼び寄せてしまうものですからねえ。本人の限界を迎える前に理解ある守り手が現われれば問題は半減するのだけとお。それを見つけれられるかはあの子次第ですものねえ。

私はあ主様と共に在ると決めた時から…。主様の守り手になることを決めた私達は世界に漂う一精霊としての役目、世界の調和と調整の機能を破棄せざるを得なかったのですけどお。…後悔はありませんねえ。

そのおかげでえ、この世界との繋がりラインは途切れてしまっていますけどねえ。今は主様との間に一切つても切れない私達だけのラインがありますからあ問題ないんです。寧ろお今までよりも心地いい気持ちができるのよねえ

「あの子の隣に良き守り手が現われることを精霊と悪魔、そして時の流れに願いますわねえ」

私はあ役目はなくなっても生命の誕生を祝福する私の気持ちは変わりませんねえ。そう、喜びを感じることは変わりません…。

生命の連鎖…進化と退化の螺旋構造…。私の意識の根底にあったモノ。嘗ての無力な私が最優先に実行してきた役目。生命を見守るだけの小さな、小さな精霊の支柱…。

でもお その役目から開放された今では優先順位がまるで違うものですねえ 主様あ、私いミリエールは今も昔と変わらず、

お慕いしておりますわあ やっぱりねえ精霊とはいっても女の子には変わりないのよねえ

「命短し…短くは無いのだけどお…恋せよ一乙女（精霊）、という言葉もありますしねえ」

私の命尽きる、その時まで主様と共に在りますわあ なぁんてえ  
照れちゃうわねえ。鏡を見るまでも無くう私の顔が真っ赤にな  
っているのがわかるわあ。うふふ

「ミリー！ごめん！ちょっと手伝ってー！」

「ッ！はあい！今、行きますわあ！」

主様がお困りのようですわあ。すぐに行きませんとお！この時間  
ですとお客様が沢山来ているのかもしれないわねえ。

私があ今居る部屋を出てお店のほうへと駆けつけたら、店内がい  
い感じにお客様で込み合ってきていましたあ。今日もなかなか繁  
盛しているみたいですねえ いいことですわあ

「ごめん、ミリー。お休みなのに呼んじゃって…。って、なんか顔  
が赤いけど…調子悪いの？」

「ッ！？だ、大丈夫ですわあ。心配ありませんよあ。うふふ」

まだ顔の赤みが引いてなかったようですわねえ。少し恥ずかしい  
のとドキッとした気持ちで焦りましたわあ。それにお慕いしている  
主様のことを考えている時に呼ばれたので嬉しかったのかもしれない  
せんねえ。

今も赤みが引くどころか少し増して顔はニヤけているかもあ  
ずかしいわあ。 恥

「そ、そう？それじゃホールのほう任せるね。…本当に大丈夫なん  
だよな？」

「はあい それと本当に問題ありませんわあ。 主さ…店長はあ、お  
仕事に戻ってくださいなあ」

主様も心配性ですねえ。精霊の私達が熱や風邪にかかるわけがな  
いですのにねえ。でも、そのお気持ちは大変ありがたく思いますわ  
あ。

因みに今回からお店で主様のことを呼ぶ時は“店長”と呼ぶよう  
にと言われましたのよあ。主様曰く「今まで何かが足りないように  
感じていた。それは…」ということらしいですわあ。要するに店長  
という音の響きが良いらしいという理由かららしいですねえ。

私はどちらかと言うと“マスター”とお呼びしたいのですけどね  
え。主様ったらあ「それは何か違う…」って仰るのですよあ。いい  
と思いませんか？マスターって。なんだか、こう…引き締まる感  
がして。…ダメかしらあ。

「うん、わかった…。本当に無理はしないでね？」

「はあい」

さあて主様…店長のお手伝いを頑張るとしましょうかあ

S i d e o u t ミリエール

喫茶店クレイドル仕事場兼自宅…。

S i d e 葵

突然だが今日のお昼頃、つまりつい先程のことだが…なんと  
言うか、その…。いや、うん、率直に言おう。

「襲撃に遭ったんだ…。それも友人と信じていたヤツに」

「襲撃とは穏やかじゃないな、アオイ。折角、その友人が遙々京都  
まで来たと言うのに」

お前の言う友人というものはお昼を食べてるヤツに行き成り拳骨  
を食らわせるのか？ コラ#

「うっさい、ガトウ。…で？ 他の奴らはどうしたんだよ」

「ああ、ジャックはアツチで適当にしているさ。アルは…麻帆良だ  
ったか？ に行っている。詠春も一緒だ。京都に来ているのはそれ以  
外のメンバーとアリカ様。…そして“もう一人”だ」

もう一人？…おいおい。ちょっと待てよ…。ガトウが敢えてここ  
で名前を言うのを濁しやがった？ まさか、また厄介事じゃねえだろ  
うなあ？ いやいやいやいや！ まだ、そうと決まったわけじゃない！

希望はまだある!?

「ちょっと待とうか、ガトウ? お前が物事を濁して言う時はいつも厄介事を頼みに来るように感じるんだが?」

「そいつは誤解だ。俺がお前に頼むのが厄介事しかないだけだ。厄介事意外は俺のほうで処理している」

「ナチュラルにひでえな、お前は! 俺は半隠居しているって言っただろうがッ! 厄介事は勘弁だぞ!？」

こいつ…ッ! なに欧米風に「ヤレヤレ仕方ないヤツだなあ。A h a h a h a h a h a!」みたいに肩をすくめていけしゃあしゃあ、と言いやがってるんだ? 俺は半分隠居してるの! 休眠期間なの! 原作開始までマツタリしてるのーッ!

「まあまあ、そう言うな。今回のことはそう大したことじゃ無い…(ボソツ)はずだ。話しというのは、そのもう一人をしばらくの間ここで匿ってくれないか? と言う話だ」

「ちょっと待て、コラ。預かるじゃなくて“匿う”? どう考えても間違いなく厄介事じゃないか」

「さっきも言っただろう? お前に頼むのは程度の差はあれ、厄介事しか頼まん。…いい加減、諦めろよ」

だからその欧米風に「ヤレヤレ仕方ないヤツだなあ。A h a h a h a h a h a!」みたいにやるのをやめるよな! マジでムカツ# #、つてくるわ…!! というより諦める云々じゃなくてお前が俺のところに厄介事を持ち込まなきゃいいことじゃねえか!!

ちくしょー…。今回は仕方ないにしても次回からは断つてやる！  
必ず断つてやるぞーッ！！

「ぐぬぬッ！…わかった。その“今回の”仕事は引き受けよう。だがッ！諦めたわけじゃないんだからねッ！？勘違いしないでよ！？」

「お前はどこのツンデレだ…。正直言つて少し気持ち悪いぞ？」

俺もそう思つてたところだから触れないでくれよ…。気の利かないヤツだなあ。そんなだから結婚できないんだよ…。俺も結婚してないけどな！！

「すまん…。俺もどうやら疲れていたらしいな。…というか、ツンデレ？お前がその言葉を知っていたことに俺は驚きだ。…どこで知つた？」

「……………アリカ様を指してアルが言っていた。その時に意味も…」

「……………あー……………。コホンッ…。それで匿う対象はいつごろ来るんだ？」

アルか…。アイツなら、なあ？そんな無駄なことを知ってるかもしれない。何気に使うか、わからない、いらぬ情報をワンサカと持っているからね。

で？その人はいつ頃来るんよ？遅くなるようならご飯の準備とか部屋の用意とか色々しておきたいんだけど…。

「ん？…ああ、もうすぐのはずだ。俺は先に話しを通しに来ただけ

だからな」

コンコン。

ん？来たのか？

「開いているよ、入ってきて」

「失礼します。主にお客人らが来ましたぞ。こちらにお通ししますか？」

あら？マリーったらちようどいい時に来たね。それにしても客人？ガトウが言っていた人が来たのかね？……全然関係ない人だった場合どうしようか？

「おお、着いたか。アオイ、来たようだ」

「ふむ……マリー、誰が来た？……」

【……はッ、ナギ殿とアリカ殿、タカミチ少年。それと見慣れぬ少女が一人でした……】

「……よし、マリー。ここへ案内してやって。その後でいいからお茶とお菓子を人数分よろしくね」

「御意。では、すぐに。失礼します」

あとはここに来るのを待つだけだ。……さて、“見慣れぬ少女”ねえ？……誰？マジで思いつかないんだけど……。ハッ！？まさか主人公が生まれた！？いやいやいやいやいや！！！！まだ早い！早

いでござるよ!!

だいたい“少女”だ!!主人公は確か男の子だったはずだ!!…  
…それとも俺が関わったせいで状況が変化した…とか、か!?!  
!?!やばいやばいやばいやばい!!その通りなら俺は致命的な失敗  
をしたことになる!!

「相変わらず、お前のところは人材が豊富で羨ましい限りだな」

ハッ!!イカンッ、イカンッ!!どうやらイヤなことを想定して  
混乱に陥ったようだ。…なんだ?さっきは何を言われた?…ああ、  
そうだ家族のことだったな!!

「当たり前だろ!俺の家族だぞ?半端なのは居ないよ!」

「その言い方だと、まるでマフィアだな…」

「貴様!!言うに事欠いて俺の家族を—マフィア(犯罪者)だと言  
うのかッ!?!」

「そんなことは言っていないし!!お前の怒りの沸点が俺にはわから  
んよ!!」

イカンな…。まだ、混乱から立ち直ってなかったようだ。普段の  
俺よりも沸点が低い位置にあったようだ。反省、反省…。

「すまん、ガトウ。つい、お前を亡き者にするところだった。…  
(ボソッ)惜しかった」

「勘違いした言葉一つで俺を殺すなよッ!?!というか!今“惜しか

った”って言わなかったか!? 言ったよな!?”

「ズズー…。ガトウ、何を騒いでいるんだ? ほら、お茶でも飲んで落ち着けよ」

ああ? 何を騒いでいるんだ? 俺はお茶を飲んで、さっきの混乱を追い出して立ち直るんだからジャマだけはするなよ? というよりお前もお茶でも飲んで落ち着けよ。いい加減お前も歳なんだからさ。高血圧になっちゃうぞ?

「さっきの話が無かったことにされている!?”

「だから落ち着けというに…」

コンコン。

お? もう来たか。

「主。お客人をお連れしました」

「ああ、入ってくれ。ほれ、ガトウ来たぞ? 席を寄れ」

「はあ…。わかった。もう、どうでもいい」

堂々とソファアの真ん中に座ってるんじゃないよ。他の人が座れないだろうが。ああ、もう来た。ほら急げっての! ああッ! 忘れてた! 女版主人公ーッ!?!?!? ヤバイ…マジでドウシヨウ???

「失礼します、主。さあ、皆さん、こちらの部屋へどうぞ」

「おう！アオイ、久しぶりだな！元気にしてたか？」

ナギに…。

「うむ。アオイ、久しぶりだ。相も変わらず壮健のようだな」

アリカさんに…。

「アオイさん、お久しぶりです。お元気そうで何よりです」

タカミチ君…。

「……………」

それに…誰？あ、あれ？この子…。

「ほら、姫子ちゃん。コイツが話してた俺の仲間のアオイだ。ちゃんと挨拶しろって」

「そうじゃぞ、アスナ？しっかり挨拶するのじゃ」

二人に促されてちょこんと顔を出してきた髪をツインテールにして瞳がオッドアイの…アリカさんがアスナと呼んでいた少女。んん？アス…ナ？アスナーツ！？なんだ！そうか！そうなのか！！このやろっ！焦らせやがって…！！焦って損したわ！

マジでよかった…。決定的な過ちじゃなかった…！本っ当によかったよお。

「……………こんにちわ」

あ？ありゃ？挨拶が終わったら二人の影に隠れちゃった？恥ずかしがり屋さんなのか？原作の元氣いっぱいの子の印象が強いから意外な気持ちになるな。解放されて間がないのかね？

「ハハ、すまねえな、アオイ。こいつ人見知りなもんでよ」

「あ、ああ。それは構わないだが…。お前らいつの間に子供なんてできたんだ？」

「……………」「……………」「……………」

黙りこむナギとアリカさん。噴き出すガトウとタカミチ。状況がよくわかってないヒロインのアスナ（？）と思われる少女。

アスナのことを今まで聞いたことないから、咄嗟にこう言うしかなかったんだが…そんなにおかしなことを聞いたか？見ようによっては子連れ夫婦に見えなくもないと思うんだが…。

「え？え？え？俺、何か間違えたこと聞いたか？」

「……………アハハハハハッ！」

「……………」「……………」

流石に不安になって再度聞いてみたんだがガトウ達、二人はもう我慢できなかつたらしく腹抱えて笑い出した。ナギとアリカさんは今も沈黙を守っている。多分何を言っているのかわかってないんだ

ろくなあ。

アスナは…わかってないだけだな、うん。子供だしね。わからなくて当然か。さてと、そろそろ、ここで仕上げだな。おまけに少しリップサービスもおこつ。

「ガトウもタカミチも何で笑うんだ？え？2人の子供じゃないの？でも…アリさんに似て綺麗な子じゃないか。目元なんか可愛いし…」

「…………ポツ」

あ。なんか少し頬が赤くなった？クールな少女がポツとする姿を実際に見られるとは思わなかったなあ。そしてそれに反応したのが他の面々。

「…ッ！?!?!?!」

ナギ と アリカさん は こんらん した。

…………… みたいな感じで2人は驚愕したようになっていた。

「しし、し師匠！あの姫子ちゃんが照れていますよ!?!」

「落ち着け！タカミチ！こ、こういうことくらいで慌ててはいけな  
いよお!?!」

まず、お前が落ち着け…。声が上ずっているぞ、ガトウ。お前ら大げさなんだよ。たかがクールな女の子が表情を少し変えたただけだろうが。何をそんなに取り乱してるんだよ…。

コンコン。

「失礼します、主。お茶をお持ちしましたぞ」

「うん。マリー、ありがとうね」

頼んでおいた人数分のお茶と、うちのケーキが皆の前に配られていった。食器を置く時に音を立てないようにするのは当然の技術だったりするのは、この際どうでもいい話だったり…。

「それでは、また何かありましたらお呼びくださるよう」

「はいはい。またね」

マリーが退出してから俺は落ち着いた皆とナギに目線で話しの続きを促した。

「…アオイ、その子はアリカと同じウエスペルタティア王国の王族の血を引いてるんだ。名前はアスナ・ウエスペリ…ペリー？」

「バカ者。忘れたのなら黙るが良い。アオイ、この子はアスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア。妾の同族だ」

ナギ？名前を覚えられないなら無理に説明しようとしなくてもいいんだよ。俺は思わず可哀想な子を見る感じで笑いかけた。

それにしてもアリカさんもちよつと的外れなことを答えているんだよね…。名前とかはまあいいとしてもこの子が“何なのか？”を聞きたかったんだけどな。いや、これは詳しくは話したくないとい

う表れなのか？

「はあ…まあいいか。それで？その姫子ちゃんがどうしたんよ」

確かこの子は始まりの魔法使いの末裔で後継者だった気がするんだよなあ。そんな彼女を何故今、俺のところ連れてくるの？俺つてこの子に関してはノータッチで来たから関係ないか？どこでフラグを立てた？間接的にか？

「なに、妾達は所用で遠出をしなくてはならなかっただけじゃ。だが、そこにこの子を連れて行くわけには行かない。だからアオイにしばらくの間この子を頼みたい」

所用：所用ねえ？それに関しては聞く気は全く無いけど。とりあえず小さな子を残して行くんだから、その本人の気持ちを確認してからにして欲しいなあ。行った後で泣かれるのとか勘弁なんだよ。子供が泣くのは耐えられんって。

とりあえず確認してもらおうか…。

「ふうむ…。頼まれるのはいいけど、肝心の姫子ちゃんが、そのことに同意してくれるかな？イヤがる子に、つてのは気が進まないんだけど…」

「それならば心配ないだろ」

心配ない、つてナギよ…。軽く言つなよ。子供を預かる、つてのは、現実にそんな簡単なことじゃ無いんだぞ？大体…ん？なんだ？何かに服の裾が引かれているような？

クイ、クイ。

「ん？どうした、姫子ちゃん？」

机の向かいでナギとアリカさんが「早速、行つたみたいだぞ？」とか「そうじゃな。いつになく積極的じゃ」なんて言っている。俺は普段のこの子のことを知らないから本当に人見知りなのか疑わしい思いだ。

それで当の姫子ちゃんはというと俺の服の裾を掴んで見上げてきている。

「……………アスナ」

「は？」

いや行き成り自分の名前だけ言われても俺はどうしたらいいのか、わからんのだけど……。無表情のクールな少女の考えを読み取るのは至難の業ですよ？

「……………アスナ」

今度は自分を指差して自分の名前を言ってくる。

ん？自分を指差して？んー……？これはもしかして……？

「アスナ？…ああ、ああ。はいはい、名前で呼べってことな？」

「……………」

小さく頷くアスナ。どうやら正解だったようだ。何が彼女の心の琴線に触れたのか知らないが俺はどうやら彼女を名前で呼ぶことを許されたらしい。何はともあれ名前を許されたなら、こちらも相應しい対応を取らなければならない。

「わかった、アスナ。俺のことは葵でいいぞ」

「……アオイ……あおい？……葵。…わかった」

「おー、ちゃんと発音できてるじゃん。アスナは偉いなあ」

「いーこ、いーこ　なぐで、なぐで　わー、子供の髪って何でこんなに柔らかいんだろう？しっとりサラサラだよ。うわッ！？髪の毛、細ッ！ー綺麗な髪しているなあ。」

「……………クスッ」

お？

「なんだ？笑えるじゃないか。いいか、アスナ？女の子は笑え。笑顔で居れば女の子の魅力は何倍にも引き出されるんだ。…ええと、わかったか？」

「……………？わかった(ニコッ)」

本当にわかっているかね？答えるまでに間があったぞ。それでも表情はニコニコしているから…うん、いいか。そんな細かいことは。

「くっくっく　そうだ。やればできるじゃないか。今のアスナはとっっても可愛らしいぞ」

「……」

ふう、嬉しそうにしてからに、この子は……。

「……と、いうわけで、だ。コレで問題ないことがわかったか？」

「わかったか？ってナギ、お前なあ……。まだ肝心のアスナに聞いてない……」

「……いいよ」

「は？いいよ、ってここに居るのが、か？」

「……こくん。葵と一緒になの、そんなにイヤじゃ……無い」

「あ、ああ、それはどうも？」

なんだか俺が判断に困る理由で当の本人の意思は決まったらしい。やっぱりこういう子の考えを読むのは難しいなあ。まあ可愛いからいいか……。

「決まりじゃな。それではアオイよ。アスナのことくれぐれも頼んだぞ？」

「ん？ああ、それは保障するけど……もう行くのか？」

「うむ。何事も速いに越したことは無い」

まだ来たばかりなのに忙しいこつて。もうちょっと落ち着いて計

画を立てておけばいいのにね？生き急ぐのは感心しないな。人生余裕を持って行動しないと近い内に窒息しちゃうよ。

「そうか。それは残念だな。うちの人気商品であるケーキだったんだけど。急いでいるなら仕方がないな」

「な…に？…アオイ、それは…」

マリーに頼んでおいたケーキが無駄になっちゃったなあ。どうしよう？そんなことを考えていたら心なしか目をキラキラさせていたアスナと目が合った。…これは期待か？催促されているのか？女の子だから甘い物が好きなのか？

「…アスナ、ケーキは好きか？皆は食べずに行くみたいだから全部やるぞ」

「…好き。葵、ありがとう」

「え？あの？ケーキは…？」

あれ？アリカさんまだ居たの？ナギとガトウ、タカミチが部屋の扉の前で待ってるよ？早く行くんでしょ？ほら、行かないと、ね。

「アリカ？何してるんだ？早く行くんだろ？」

「アリカ様、参りましょう。時間がありません」

「師匠の言う通りです。行きましょう、アリカ様」

「…え？あ、ああ、わかった…。すぐに行く……クスン」

なぜに泣きそう？アリカさん…。ケーキを食べたかったのかな？いや、まさかね。アリカさんに限ってそんなことで泣きそうになることなんてないよな、うん。

そうは思っても肩を落としたアリカさんの背中が…。なんだか哀愁を感じさせるんだけどなぜ？あ…。あれか？お見送りが無かったことが寂しいのか？ふう、仕方ないな…。

「いつてらっしゃい。ほら、アスナもいつてらっしゃい、ってしな」

「……………こくん。ナギ、アリカ、ガトウ、タカミチ。…いつてらっしゃい（ニコツ）」

うんちゃんと笑顔で送ることができたね！花丸をあげちゃおう！オマケに鉢植えと蝶々もつけちゃおうかな！そんなアスナに見送られればアリカさんだけじゃなくて…。

「……………行つて来ます！……………」

皆が笑顔で出かけられるよな！子供の笑顔には勝てないよな。どことなく嬉しくなるよ。それが美少女ならば当然だね！

さてナギ達が迎えに来るまでアスナの面倒をみるとしますかね。

「行こうか、アスナ？家の中を案内するよ」

「……………うん」

アスナは小さく頷いた。

それと帰り際にナギが俺に何か伝えることがありそうにしていた  
が思い出せなかったそうだ。まあ直ぐに思い出せなかったというこ  
とは大したことじゃ無いんだろう。俺は気にしないことにした。

S i d e o u t 葵

第二十九話「橋渡しと喫茶店開店とクールな少女と」(後書き)

いつだったかリクエストを頂きましたので今回の構成にしました。  
ハッキリ言つてやるなら今しかないと思つたんです。

原作突入したら応えられないですからね。

リクエストの部分は秘密です。どうでしょう?ご期待に応えられま  
したか?

次回もちよつとだけ登場予定です。

ではでは〜!また、お会いしましょう!

第三十話「歓迎会とファッションショーと相談？」（前書き）

今回の話しは物語とは余り関係ないかも…。  
ただの繋ぎ兼趣味です。

### 第三十話「歓迎会とファッションショーと相談？」

京都府某所某店内…。

Side 葵

「……………どうして、こうなった？」

今、まるでファッションショーの会場のように飾り付けされた店内で葵は呆然としながら呟いた。飾り付けは華やかに。店内の中央には少し低いモデルが歩く舞台が用意されてある。店外の扉には“本日臨時休店”の札がかかっている。

「……………なぜ、こうなった？」

葵は、まだ状況を理解していない。いや、したくないのかもしれない。周りにはショーが始まるのを心待ちにしている彼が愛する家族の皆が小声で雑談しながら大人しくしている。

そして舞台裏ではモデルとなった少女を数人で着せ替えの準備をして慌しくしている音がここまで聞こえてくる。そこからは「可愛いわぁ」「やら「素材がいいわね」「などの、のんびりと、おつとりとした口調の声が2つほど、葵の耳に特に聞こえてきていた。

「……………どうして、こうなったんだ？」

三度、葵は自分の疑問を口に出した。そしてそんな彼を不憫に思ったのか、声をかける者も確かに居た。

「我が君……。お気を確かにお持ちください。皆のこれは一過性のもので、」

「左様です。少々、はしゃいでいるだけです。気にしては、それこそ気が持ちませんぞ」

「ユエ、ハオ……。そうだね。今更、気にしたら負けだよな」

そうだよ。ハオとユエの言う通りだ。今更こんなことで戸惑ってどうするんだよ。今でも月に数回付属魔法球「桜の苑」で宴会しているんだから、これくらい……。どうってこと無いさ！

そもそも今回の事態。コレというのも昨日ナギ達から預かったアスナが…というよりもアスナを見たミリーが原因だった。彼女はア

アスナを発見した途端に「可愛いわあ」と言って抱きついて構い  
したのだ。

その光景を俺の目を通して見ていたりビエラも、こちらに来たい  
らしく召喚するように頼まれたりもした。序でと言っては何だが他  
にもオリビエ達と一緒に召喚したんだ。

アスナのことを他2人は特に関心は持ってなかったんだがミリー  
とリビエラ…この2人は違った。彼女達に俺がアスナを暫くの間、  
家で預かる旨を伝えたら歓迎会をしようということになったんだ。  
ここまでは俺も特に気にしなかった。歓迎会には賛成だったからな。

でも、歓迎会はその日には行わずに次の日に行くことを聞かされ  
て流石に俺も不思議に思ったんだ。だって、そうだろう？アスナを  
預かることを決めたのが昼過ぎだったんだ。別にその日の夕方にな  
りも開催してもいいんだからな。

おかしいと気付いた時には既に遅かった…。今朝、目が覚めて店  
に顔を出してみれば…そこはファクションショーの会場になってい  
た…。スポットライトに電飾、そして、舞台…。会場と化した店に  
はそれらしい音楽も流れているんだ…。

そして、あれよあれよの内に気が付いたら今、俺は舞台最前列に  
陣取った状況になっていた。時刻は準備が長引いているみたいで、  
もう10:00時過ぎになっていた。まあクールなアスナは今のう  
ちでしか拝めないから、ある意味ラッキー(?)なのかな…。

この状況の経緯を整え考えていたら今まで室内を照らしていた照

明が消えていた。どうやらショーが始まるようだ。

「レディース（沢山）、エンド、ジエントルメーン（葵ちゃん一人）！長らくお待ちせしました。本日は会場、アスナちゃんのファッションショーに、ようこそお出で下さいました！」

「今回のイベントの目的はあ ずばりい！アスナちゃんの歓迎するのが目的です 皆もイベントを楽しんでねえ うふふ アスナちゃんは、とおっても可愛らしいのよお」

「それでは、ファッションショーの開催です！アスナちゃんどうぞ〜！」

カーテンが引かれて軽快な音楽が流れてショーが始まった。そして舞台の奥から出てきたアスナはゆっくりと歩き出す。彼女が着ている服は昨日の内に有志の皆から集ったものの一着だ。普段はクールで無表情の彼女だが今は多少ぎこちないながらも口元が微笑んでいる。

「へえ…。なかなか可愛いんじゃないか？元の素材がいいからかね？」

「ふむ。しかし、我が君？童女わらわなのだから可愛らしいのは当然なのではないのですか？」

まあハオの言うことにも一理あるんだけどね。子供って無条件に可愛いって思うものだからさ。ただ最近は生意気な子供が増えてきたらしく見た目の愛らしさと中身が比例していない、なんてことが多々あるみたいだ。

「はっはっはっ、姉上は素直ではないな。可愛いなら可愛いとアスナ嬢のことを褒めてやれば良いではないか」

「む？何を言うのだ、ユエ。私はいつでも正直なつもりだぞ？」

それはつまり、アレか？ハオは「アスナ嬢が可愛いのはわかりきったことではないか。何を今更なことを？」、と言いたいのか？だとしたらハオさんや？どことなく言葉が伝わってないと思うのですが…。日本語って難しいいいいいッ！！

「2人とも？もう、アスナの歓迎会ショーが始まったんだから、楽しもうよ」

「そうですね、今は楽しむとしましょう」

「はい。イベントを楽しむことにします」

と、とにかく！今は歓迎会という名のショーを楽しもう！クールアスナのこんな機会なんて二度とないんだろっからな。

ショーが順調に進んでいく中。フと浮かんできた疑問をユエが口にしてきた。

「ところで我が君？今回は何故に、このようなショーをミリー等は開催しようとしたので？」

「んあ？ああ、それは…。あ…。まあ簡単に言えばアスナの着替えが必要最低限しかなかったから服を用意する序でに、ってね」

と、とりあえず誤解の無いように無難に表向きの答えを口にする

ぞ。一応コレも事実なものには代わり無いからな。というよりもアイツらは何を考えているんだ？もうちょっと着替えとか持たせるよ…。

ここに来た時に着ていたワンピース。それと小さなカバンに入っていた着替え。キュロットタイプが一着、チェックのスカートタイプが一着。最後に…ウサギさんのアップリケがあるパジャマ。それぞれの服に見繕われたと思われる下着類が着けているのも合せて四着。

なに、コレ？小旅行じゃないんだから、もうちょっと持たせようよ…。俺に預けるくらいだから、たかが2、3日の日程じゃないんだろうが。アスナも女の子だ。可愛い服に興味があるはずなのだ。せめて、あと二着…いや、五着は持たせても罰は当たらないだろう。

それも今回のことでアスナは数十着の衣服を一度に手に入れることができたようだけどな。ここから見ている限り本人も無意識にかぎこちない口元とは違い目元は少し嬉しそうに見て取れる。

「なるほど。……それで本当のところは、どのようなの？」

「ユエは察しがいいね。……本当のところは、ミリーとリビエラの半分趣味みたいなものだ。2人は可愛いモノが好きだからねえ」

「ふむ、そういうことですか…。しかし、アスナ嬢が、よくこんなことに参加しましたね？私が思うに彼女はこういうのをイヤがるように感じましたが」

「さあ？アスナ自身も何か思うことがあったんじゃないのかな。意外と食べ物で釣られたりなんかしてな？…なんてな。クツクツクッ」

ちよつと高いところのお菓子を取ろうとピョンピョン跳ねて取るうとするクールアスナ…。

やべえ…ちよつとした想像だったけど、なんか、これって…可愛くない？どんなに頑張っても手が届かなくて無表情な目元が徐々に潤みだしてくる…。でも泣かないのよ？なんだか微笑ましくならぬい？俺は和むわぁ 微笑ましくて。

ただの想像だけだな！

「我が君…。それが当たりと思われぬ。昨日の夜と今朝方にミリーとリビエラの2人が店の甘味をエサに、なにやら交渉を持ちかけているのを見ました」

「えー…？…ハオさん、それはマジですか？」

「…事実です。残念ながら…」

あの2人は何を勝手にうちの商品を勝手に取引材料にしてくれているんだ？いや、この喫茶店自体が趣味でやっているから儲けは二の次なんだけどさ。それでも俺に一言があってもいいものだろう。ケーキの大半は俺が作ってるんだし。

あと…冗談で言ったことが半ば事実だっただけに俺は笑っているのか怒ったほうがいいのか、わからなくなってきたよ。まあ怒るよ

うなことじゃないから、こうして笑いながらアスナの晴れ舞台を見ているんだけどね。

でも、そうか…。あのアスナが…。

「…（ボソツ）オウ、ジーザアス…クールアスナは食いしん坊キヤラだったのか…」

「は？くーる？すみませぬ…。良く聞こえなかったのですが何と言いましたか？」

「いや、なんでもない。なんでもないんだ…」

衝動的に口から出た言葉だから改めて聞かれても答えられません！隠すようなことは言っていないから聞かれても困らないんだけど教えて言い直す必要も無いからな。

それにしてもアスナは、あと何着の服を着れば終わるんだろう。俺達が雑談しながらもショーが進んでいくんだ。もちろん、可愛い服で着飾ったアスナのことは俺の脳内フォルダにきちんと余すことなく記録中だったりする。

まあ、それはいいとして、いつごろ終わるんだろうね？舞台を往復するアスナ…。これで27…あ、28往復目に入った…。心なしか、アスナの顔に疲れが見てとれるぞ？今気付いたけど、これってアスナの休憩とかあるのかな…？

それから10分後、突然の休憩が入ることになった。余りにも不自然なタイムイングでの休憩に皆も困惑を露わにしていた。その後、ショーは30分後に再開。ラスト十着の服を着てショーは好評の内に終わることができた(?)。

皆…今日は疲れたよ…。

Side out 葵

喫茶クレイドル店内特設舞台裏…。

Side アスナ

「本当にごめんねえ。休憩時間のことをすっかり忘れてたわあ…」

「そうね？…ついつい楽しくて忘れていたわ。アスナちゃん、ごめんね」

歓迎会(?)が終わって、わたしの前に居る葵にミリーと呼ばれている女性…人？違う気がする。人にしては不自然…ううん、“自然過ぎる”気がする。世界に属する人には多かれ少なかれ必ず、どこかに生きる者としてノイズのようなモノがある。

それにわたしに謝罪する、もう1人の女性もだ。…たしか、リビエラと葵が呼んでいた人。この人は悪魔らしい。目の前で葵が召喚したのを見たから間違いは無い…はず…なんだけど。この人にもミリーから感じたような印象を受けた。

この2人（というよりここに居る人全員だけ…）からは自然過ぎて不自然なほどノイズを感じない。まるで世界とは乖離した人…。この世界に属していない、縛られていないみたい…な？彼女達は何者なんだろう？自分自身で考えたことに対して、わたしは…。

「……………ありえない」

「ううう…。だから、ごめんって、謝ってるじゃない…」

「アスナちゃん？お願いだから許してえ。ねえ？」

わたしが無意識の内に呟いた声に反応したのは2人。別のことを考えていて出た言葉だから彼女達のことを責める気持ちは当然、無い。でも休憩も無く続けたから疲れたのは事実。そして可愛い洋服を貰えたのも事実…。

彼女達の勘違いといっても誠心誠意の謝罪をしていることはわかる。だから許すことにした。このあとの報酬のケーキもあるし…。

「……………許す」

「ありがと〜 アスナちゃん〜」

「許してくれてえ、嬉しいわぁ」

コレで良い…。それにしても不思議…ここは居心地がいい。ナギやアリカ、ジャック、詠春、それにガトウ、タカミチ。皆と居ると同じくらい、ここは居心地がいい。どこも似ていないのに…不思議。

彼女達は人？と考えた時にわたしの頭の中に嘲笑とも取れる思いが湧き出てきた。

「……（ボソツ）わたしも人じゃ…無い？」

「…ええ？」

「…はい？」

「………なんでもない」

わからない、わからない、わからない……。

さつきまで、楽しい気持ちだったのに少し、このなんとも言えない考えがわたしの気持ちを暗くしていく。わたしは人？ただの魔法兵器？それとも……何の意味も無いモノ？わから…ない…。

「皆、お疲れー。アスナ、なかなか可愛かったぞ。…って、どうした？泣きそうになってるぞ」

S i d e o u t アスナ

喫茶クレイドル店内特設舞台裏…。

Side 葵

「皆、お疲れー。アスナ、なかなか可愛かったぞ。…って、どうした？泣きそうになってるぞ」

「……………え？」

ショーも終わったから俺達（俺、ハオ、ユエ）は舞台裏の控え室に顔を出したんだ。部屋の中には今回の首謀者の2人、ミリーとリビエラ。そしてアスナが居た。そこへ声をかけたんだがアスナが無表情なのに泣きそうに見えたんだ。意識、無意識にしているのかわからんがな。

アスナは、そんなことを言われると考えていなかったように小さく目を見開いてこちらを見てきた。俺の言葉を理解してミリーとリビエラもアスナのことをジッと見ていた。それでも、わからないようにでチョコンと首を傾げて不思議そうにしていたけど。やや、気まずいです…。

え？なに？この空気…チョット、こわい…。

アスナなんかさつきから俺をターゲットしたまま微動だにしないで見つめてくる。オッドアイの瞳からは何の意思も読み取れない。俺、何か変なことを言ったかね？なんとなく思ったことを言っただけだからなあ…。もしかして、なんか癪に障ることを言ったの、か？

「……………んで…」

「ん？なんだって？」

「……なんで？」

なんで？って……なんだ？あー……さっき俺が言ったことか？

「泣きそうに、ってことか？」

「……………」くん

んー……。なんで？って聞かれてもなあ。

「いや、すまん。なんとなくアスナの顔が俺には、そう見えただけだ。勘違いなら謝ろう。すま……」

「謝らなくて……いい。……謝らないで」

は？謝らなくていいのか……。ということは別に気分を害したわけじゃないのか。え？じゃあ何で、こんなことを聞いてきたんだ？それとわかり辛いがシヨーの間は楽しそうにしていた。何で今は沈んだ雰囲気纏っているんかね？

「くんは一応、確認してみるか……」

「ふうむ……。アスナ、フマッションショ歓迎会は楽しかったか？」

「……………」くん

ず、ずいぶん返答に間が空いたな……。でもまあ本当に楽しかった

んだろうというのは雰囲気から伝わってきた。

ふむ…。歓迎会に不満があったわけではない、か…。これは別のことで不安を感じているということか？考えてみればナギの友人とはいえ、アスナは、まったく知らない人のところに預けられるんだ。不安に思つのも無理はないかもしれない。

さて、とりあえずは何か思うことがあるのかを聞いてみるか…。

「そうか。何か思うことがあるなら話すことだ。それだけでも…いや、違うな。人と意思を共有することで認識を新たにし、結果的に気持ちが悪くなくともある…」と言いたんだが、わかるか？」

「……………こ、こくん(?)」

すこし アスナ には むつかしかった ようだ。

頷くのに間が空くだけでなく首を傾げながらするとは…。なんとか理解しようとするところには好感が持てるな。だが理解してないなら、していないでそれでいい。俺の説明がわかり難いだけなのだからアスナは悪くない。

噛み砕いてブツちやけて言うとするか…。

「……………簡単に言えば他人に話せば楽になる、と言いたいんだ。ふう、歳を取ると話しが長くなってイカンな。…これは反省だ」

「……………話す？」

「そつだ。何も無ければソレでもいいがな。…何かあるのか？」

さつきまでの話しぶりからアスナの心の内に“何か”があると思うんだが…。はてさて、何を考えているんだか。

アスナは何かを考えるようにして俯いていた。しかし、割と早く顔を上げて話してくれる。

「……………葵から見たわたしは“何に見える”？」

「……………は？」

「……………何に見えるのか？と聞いた。答えて……………」

「いや、すまん…。余りにも予想外のことを聞かれたんでな。さて、俺がアスナのことをどう見えるか、か……………」

んー？質問が“何に見える？”か…。どういう意味かね。率直に言ってしまうばただの美少女なんだが…。アスナは、そんな表面的な答えを聞きたいわけじゃないだろう。でもなあ、俺から見たらアスナは本当にただの女の子なんだよな……………。

それは俺を含めて家族の皆が、この世界から見て異物だからなあ。いや、俺はいいんだよ？元々この世界の住人というわけじゃ無かったしな。ただ皆は違う。彼女達は俺という異分子を契約と言っ繋がりて受け入れることで変質してしまった。

もうこの世界の住人とは言えないだろうな…。それでも彼女達は俺に着いて来てくれると言ってくれた。もうね？俺は嬉しくて泣きそうだったよ。一人じゃないっていいよね。

それは、ともかく今の問題はアスナのことが…。さて、どうした  
ものか…。

「……………」

「…ん？あー、すまん。少し考えてしまったな。“何に見える”も  
何も、ただの少女だろう？まあ多少特殊な能力があるようだが…。  
文句無しの美少…美幼女(?)だな」

「……………それは……葵にはわたしは人間に見えるということ？」

はい？人間？“人間に見える”って、どういうことー？俺はアス  
ナ自身を見て思ったことを口にしただけだからな…。ヒトか、そう  
じゃ無いかはどうでもいいんだが、アスナには大事なことなんかね  
…？さてさて、またもや、どうしたものが。

まあ思ったことを言ってみて反応を見てみるのも有り、か…。良  
し…。

「そんなことは知らんよ。俺は“アスナ自身”を見て思ったことを  
言ったまでだからな」

「……………??？」

「つまりだな？アスナ自身が人だろうが、悪魔だろうが、精霊だろ  
うが、何であろうが、アスナに変わりはない。と、言いたいわけだ」

アスナに比べれば俺達のほうが他の人の目には異常に映ると思っ  
んだ。何せ妖怪化した剣の九十九神、陽月の姉妹。実体化した上級  
精霊の個体が三柱。爵位持ち級以上の力を持った悪魔が三柱。

仮とは言っても肉体を持った精霊や悪魔達。普通なら精霊と悪魔は相反する位置に居るはずなのに、ここでは家族として仲良く笑い合っているし、危険なことになれば協力して撃退する。外から見たら異常なんよ？これって。

「……………」

なんだろう？アスナが俺の答えを聞いてからまるで穴が開きそうなほど見つめてくるんですけど…。なんなんだ、これは？まさか文句があるのか？俺の答えに不満があるということか？気持ちは言葉にしないと伝わらないんです！話しましょうよ、アスナちゃん！？

シマッタ…。あまりの沈黙についつい取り乱してしまった…。冷静に行こう、冷静に…。ふう。…よし、もう、大丈夫だ。

「なんだ？文句でもあるのか？言っておくが俺自身を感じたことだ。謝罪はするが訂正はしないぞ？コレは俺の価値観だからな。それで文句があるのか？」

「ふるふるっ、ふるふるっ」

おう？ち、違うの？文句があるわけじゃ無いの？そして何をそんなに必死に否定を表すように首を横に振っているんだ？文句なんてとんでもないという意思表示か、これは？

「お、落ち着け、アスナ。それ以上首を振ると筋を痛めるぞ？」

「……………ごくん」

あーあ、頭を振り過ぎてアスナのツインテールが少し乱れちゃったじゃないか。綺麗な髪をしているんだからしっかりとしておかないと変な癖がついちゃうだろうに。やれやれ。

「それで何であんなことを聞いたんだ？理由くらいあるんだろ？」

「……………それは……………」

理由くらいは聞いてもいいかな？と思って軽い感じで聞いてみたんだ……。そしてアスナの口から語られる胸糞悪い内容に俺は無意識の内に苦虫を噛み潰したような顔になっていた。いや、マジで胃がムカムカする内容だった。

話しを簡単にまとめるとアスナは百年以上前から特殊な魔法兵器として一種の生体部品のように使われていたという話だった。何もなければ意識を沈められ封印されて、いざ、事が起きれば覚醒されて儀式の部品扱い。子供にすることかね、これが。

あー、イライラする。表情を冷静に保つのが大変だわ、本当に。

でも、アスナが“何に見える？”と聞いてきた意味が少しわかってきた気がする。要するにアスナは自分が兵器なのか、ヒトなのか、それともただのモノなのか。と疑問に思ったわけだ。今までの環境が環境だっただけに、その考えは深いものだったんだろう。

かと言って俺にはそのことをどうしようもないわけなんだよなあ。こつこつのは助け出した本人<sup>ナギ</sup>からの言葉のほう<sup>アスナ</sup>が助け出された本人の心には響く確立は高いだろう。

でも自分を兵器かもしれないと認識をすとはなあ。やってられ

んわ、マジで。

「はー…、なるほどねー…。それで“自分自身が何者か？”なんて考えたのか…」

「……………」くん

「アスナ…お前はバカだな…。ハッ！？…まさか！？ナ、ナギのバカがうつったのか！？」

「……………」ジー

なんだよ？ちょっと重苦しい空気に耐えられなかっただけじゃないか…。そんなにジツと見るなよ。少しくらいふざけておかないと俺の精神がダークサイドに墮ちそうなんだ。俺はのんびり屋でいたいの。破壊者的な立場にはなりたくないんだ。だから見るなつての！

「悪かった…。だからそんな目で俺を見るな…。あー…ミリー、リビエラ？悪いけどお茶とケーキを人数分、持ってきてくれ。話し続けで喉が渴いた」

「はあい、わかりましたわあ」

「直ぐにお持ちしますわね」

べ、別に誤魔化すために話しを逸らしたわけじゃないんだからね！？本当だからね！！話し続けて喉が乾いただけなんだから！！…  
…うん、キモイね。ごめん。反省した…でも、後悔はない。

ふむ、冗談はさておき…。

「さて、と…。アスナ？」

「……………なに？」

俺の言葉じゃ吹っ切ることはできなくとも少しは助けになるかもしれないからね。

いやー、言葉があるってすばらしい！全てを伝えるのは無理としても2割は意思を伝えることができるんだからね。大部分の7割はフィーリング。残り1割は無理。コレは絶対、無理。

可能とするならば無意識化の集団意識集合体にアクセスできれば、その限りじゃないけど…他人と意識が繋がり溶け合うわけだから二度と個としての意識には戻れない。そうなると人をやめることになるからお勧めしないね。……………今はどうでもいいか。

「アスナのような悩みは誰しもが一度は考える類のものだ。それ自体は変なことじゃ無い。だが、アスナの、さっきの話を聞く限りでは特殊な環境だったようだな？」

「……………くん」

俺にも自分は何なのか？って考えたことはある。“ネギま！”の世界に来る前、それも小学校低学年の子供の時にだけだな。今思い出しても恥ずかしい気持ちにさせられるわ…。

「それで他の人よりも重く受け止めて深く考えてしまったようだが

……。ハッキリと言うが、アスナ？その考えは殆んどが無意味だ」  
「ッ！？……それは……」

必死に考えていたことを無意味と言われて動揺する気持ちもわからなくもないけど……無意味だよ。そんなのは考えるだけ無駄。一人に対して“何か”の使命とか役割なんてないよ。そして、その“何か”を決められるのは自分自身しか居ない。

他人から与えられるものあるけど、それは与えられた本人にヤル気がなければ意味なんて毛ほどもない。無駄で無様で無意味だ。だが、まあ考え頭を働かせることは悪いことじゃ無いな……。

「待て、待て、話しは最後まで聞け。考えること自体は悪いことでは無い。だが、行き過ぎててもいけない。いいな？一応、それは自己分析も兼ねた自我の成長にも必要だと俺は考えている」

「……………成長？」

「そうだ。アスナは長い間、眠ることで過ごして必要になったら起こされて能力の行使を強制されていたのだろう？それでは自我が芽生えることは稀だ。成長も著しく妨げられる」

「……………自我……」

実際、子供の時に他人との触れ合いが満足にできないのは精神の成長によるしくない。多感な時期にこそ、人としての成長の下地ができるとも思っただよな。それがアスナは悲しいことにできなかった。

人生の殆んどを封印され寝て過ごしていたとはいえ百年経っているんだ。自我形成のプロセスの一段階ができていないから感情も乏しく、上手く表現できない。人は環境が育てる、というのが俺の持論だ。

その点で言えばアスナは環境に恵まれていない。でも、同情はない。それは必死に頭を働かせるアスナに失礼に過ぎる。こうしている間も彼女の精神は貪欲に成長することを求めている。アスナは未来を諦めてはいない。これは、アスナは無意識だがな。

…俺は嬉しい。若い者が成長に貪欲な、その姿を美しく感じるからだ。成長とは進化することだけではない。時には必要に応じて退化することもある。その一進一退の成長が愛おしい…。アスナは今、未来に向かって羽ばたこうとしているのだから。

「アスナは今…正確にはナギに連れ出されてからお前の中の時計の針は動き出したんだ。そして現状、初めて成長して自我の確立が急速に発達している状態と推測できる。アスナはそれに対処し切れなくて戸惑っているんだな」

「……………戸惑っている…」

「情緒不安定なんて誰にでもあることだから気にするな、としか今は言えないのが正直なところだな。まあそれでも敢えて言うなら…」

「……………言うなら？」

そんな純粋な目で期待するように俺を見ないでくれ。自分の大人としての汚い部分まで見透かされているような錯覚をつけるから。これでも俺のハートはガラス細工のように繊細に出来ているんだ。

割れ易いんだぞ？

「自分を決めるのは自分自身。と、言ったところか」

「……自分を決めるのは自分自身……」

「それでも不安なら……そうだな。ナギやアリカさん、皆に聞いてみな。アイツらはアスナのことをアスナとして見てくれるはずだからな」

「……………」

あとはアイツらが上手くやるだろうさ。ナギもアリカさんも、それに皆もバカでお人よしだからな。精々、可愛がつてくれるだろうよ。可愛がり方は“それぞれ”だろうがな？くっくっくっ

「主様あ？お茶をお持ちしましたわよお」

「少し、遅くなってしまいましたわね。あら？アスナちゃんどうしたの？」

「あらあ？あらあらあ スツキリした顔をしていますねえ 主様あ？アスナちゃんに何をしたんですかあ？」

「ミリーさんや？その聞き方だと俺が少女に手を出したみたいに聞こえるから……やめてもらえろ？」

お茶が来たと思ったらコレかい？ミリーさあ？せめて“何かした？”って聞いてくれないかな……。 “何をした？”って、したことを前提に聞かれるのは余り気持ちのいいことじゃないよ？冗談で言っ

ているのは、わかっているから責めはしないけど。

「んまあ！？手を出されたんですかあ？リチラちゃんが騒ぐかもしれないわねえ。…困ったわあ」

「いや、話を聞こうよ…。出してないって。アスナの相談に乗っていただけだったの」

手なんか出せるかよ…。アスナの姿を見てみるって。百年以上の歳とはいつても今のアスナは精神的にも見た目的にも幼稚園児だぞ？射程範囲外だろうよ…。

それとなぜにここでリチラが出てくるん？彼女がどうかしたのかね？ハッ！？まさか…。悩みか！？家長の俺としては家族の悩み事には最大限、対処する用意がありますよ！？山ほどにッ！！

「そ、そうですわよね？私は、もちろん信じておりましたわ。ミリーも早とちりね？」

リビエラ…。どもったね？どもったよね？信じてくれることに疑いはしていないけど…。なんだろうね？どちらかと言うと何も無かったことを残念そうにしているように感じる…。よし、わかった…。ここでハッキリしておこう。

俺はロリコンでは無いッ！！！！

何度も言うつがお姉さんが好きなんだ！！だが！残念ながら今の俺より年上は居ない…orzこれはつまりは仕方ないので諦めているしかーしッ！！母性本能豊かな女性むつじょは大好きだ！！

すまん…またもや取り乱してしまったようだ。だが、反省もしなければ後悔もしない。俺の正直な気持ちを言ったからな。ある意味、満足だ。

「はいはい。それじゃお茶会にするか…。皆、席について」

「はあい」

「はい」

「ハッ」

「……………」

このあとは、そのままお茶会して楽しいまま日は沈んだ。アスナは少しでも憑き物が取れたようで、終始ケーキをパクつき、堪能していた。俺はその様子を笑いながらただ見ていた。

アスナの今後のこと。過去のこと。そして未来のこと…。

色々と考えてはいたけど、詮無いことだと思い、考えるのをやめた。全ては時の流れのままに身を任せればいい。気に入らないことが起きれば何をしてでも流れを堰き止めればいいのだから。

2週間後、アスナは迎えに来たナギ達が連れて行った。アイツら  
が何をしていたかなんて聞かない。それがマナーだ。逆に俺も話さ  
ない。線引きは必要だよな？そうしないと長生きできないし。

「アスナは大丈夫だ。彼女は諦めることを知らない。だから……」

∴ だから、未来を自分で選べる。

アスナと別れて、そんなことを思った…。

S i d e o u t 葵

第三十話「歓迎会とファッションショーと相談？」（後書き）

…どうして、こうなった？

ただの繋ぎな話であったはずなのに…長ったらしくなっちゃった。

今回は、木乃香（幼女）を出したいな…なーんて…。

ナンですか？考えるだけなら、タダだからいいじゃない！  
すみません、少し調子に乗ってました…。

では、また次回をお楽しみに！！

第三十一話「葵と詠春と木乃香と」(前書き)

しばらくのほほん　な展開が続くよー。

では、どいぞー！

### 第三十一話「葵と詠春と木乃香と」

関東呪術協会総本部、近衛邸…。

Side 葵

アスナが帰って一年が経った。俺は今、詠春の婿養子先の近衛家の家に居る。その家の庭で詠春達の娘である木乃香が手毬をして遊んでいるのを俺は縁側で眺めていた。時々こちらを振り返る木乃香に手を振って答えたりして時間を潰していた。

なぜ俺がここに居るのかを言うと、それは……単刀直入に言えば詠春に呼び出されたからだ。別に疚しいことも無かったし俺は素直に呼び出しに応じたわけなんだ。どうせ、いつもの飲みのお誘いだとも思ったしね。

でも、いざ来てみれば部屋ではなくてここ、縁側に案内された拳げ句、待たされたりしている。まあ、愛らしい木乃香が庭で遊んでいるのを見て和んだりしているからいいんだけどね。この癒しがなかったら一旦、家に帰っていたかもしれない。

「それにしても詠春は何のようで俺を呼び出したりしたんだろう？」

「それはですね…ぶぱつ。ッ！」

「…よう、詠春。気配を消して近付くなや、コラ#」

この野郎、わざと気配を消して俺の背後から近付いてきて耳元で話しかけてきやがった。友人の家だからって俺も油断したようだ。現われた気配に確認もしないで、つい迎撃してしまった。

いやー、詠春でよかった、よかった。他の人だったら、申し訳ないからな。ここの巫女さんだったりしたら後悔してもしきれない…！そうだ！大体ここの巫女さんのレベルおかしくないか！？いや、魔法の技量的な意味じゃなくて外見！綺麗系の人が多いんです！！

詠春はアレか？巫女さんはあれむ計画を発動したとでもいうのか？今の近衛家の当主になったからって調子に乗っているのか？…だとしたら友人の俺がその心を矯正してやるしかないではないかッ！  
！おのれ、詠春…！

あ？はあ…。俺としたことが、また取り乱してしまった。そもそも話し、お色気に弱っちー詠春にそんな大それたことができるわけないか…。うん、忘れよう。

それで詠春はいつまで、床で寝ているつもりなのかね？早く起き上がりやがれ。話しがあるのだろう？時間が勿体ないだろうが。

「イタタタ…。い、いきなりヒドイですね…」

「うっさい、黙れ。行き成り俺の背後に立つのが悪い。で？」

「はい。今日、葵をお呼びした理由は…」

「ちょっと待ってー。マジ待ってー。」

「…ちょっと待て。詠春、お前さあ、ここのところアルと仕事する

のが多いからかもしれないけど口調がうつっているぞ。…直さないのか？」

「は？あー、これは仕方ないですよ。近衛の家名を背負って立つのですから口調が丁寧になるのはね」

マジでか…。俺は丁寧な中、粗野に話す詠春のほうの話し易かったわー。ここ数年で口調はもう今のものに固定しまったから今更言っても詮無いことなだけどさ。まあ俺がとやかく言うことでもないってのもあるんだけどね。

でも…そうか。直さないのか。…いや、直せないのか？当主である限り関西呪術教会の看板を背負って立つということだから…。あー…、これは一生直せないな。仕方ない。このことは忘れよう。詠春の話し方がアルに似ていてもアイツの変態的行動までは真似しないだろうからな。

「それはまた、面倒だな…。はあ、もういいや。話しの出だしを挫いて悪かったな。それで？」

「はい。実は娘の木乃香のことなのです」

木乃香ちゃん？娘の話しを肴に飲もうってことか？…親バカのコイツならありえそくだ。もしそうなら今日は朝までコース確定だな…。いや、待て、待て…。まだそうだと決まったわけじゃない。そうだよ。軽く突いて聞いてみればいいじゃないか！そうとわかれば…。

「木乃香ちゃんがどうかしたのか？まさかとは思うが「うち、好きな男の子ができたんや」なんて言われたのか？」

娘を持つ男親には耐え切れない質問を敢えてしてみる。親バカの  
コイツのことだ。何かしらの反応が返ってくるはずだ。

あれ？ えーしゅん どうしたの？ うつむいて… かたが プ  
ルプル ふるえているよ…。

あらー？これは……地雷を踏んじやった、かな？

「……………貴方がそれを言いますか？それを言っちゃいますか？フフ、  
フフフフフ！イ ノ チ ガ イ ラ ナ イ ト ミ エ ル  
ツ ！ ！」

斬ッ！！！

あつぶねッ！？詠春！どこから夕凧を出した！？避けなかったら  
俺が真つ二つだったぞ！！お前は友人を殺す気か！？アレか！？警  
察の取調室で「カツとなつて殺つた。だが後悔はない」、とでも言  
うつもりか！？マジで勘弁なんだけど…！！

そもそも話したけど俺が父親の詠春より好かれているからって  
夕凧で斬りかかって来るのは少し…結構…いや！大分大人気無いと  
思う…！！なんだよ！刃物って！？俺でもそんなことはしないよっ！  
！…今、俺のことを疑ったヤツ前に出て来いハオとユエに串刺しに  
してもらおうから…！！

あー、もー！！あれー！？詠春の目の色が反転しちゃってる！？殺る気満々ですね！？わかりたくないけど、わかります！！こうなったら不本意だが謝って許してもらっしかない！！そうとなれば振り替えて頭を下げる！！GO！！

「悪かった！俺が悪かったから落ち着け！！イヤ！落ち着いてください！お義父さん！！」

「だあああああれがお義父さんかあああああッ！！キシヤーーーーッ！！！！」

しまった！？ついお義父さんと言ってしまった！！ああっ、何を勘違いしたのか庭で遊んでいる木乃香ちゃんが頬を染めている！？それ勘違いだから！あとで誤解を解いておかないと…。って！今はそれどころじゃなかった！！

詠春は、ますますヒートアップしたようで今は黒いオーラのようなものを纏っている。詠春：お前、協会の当主が闇（病み）に囚われてどうするんだよ。帰って来いよ。元の親バカに戻ってくれよ…！

そして俺は拳を力一杯引いて詠春（黒化親バカ）に正義（八つ当たり）の鉄槌を喰らわせる。

「落ち着かんか！！この親バカがッ！！」

正義の拳打ッ（理不尽な八つ当たり）！！

「グハッ！！オノレ…。たとえ、この私を倒そうとも第二、第三の私（親バカ）が必ず…プキ。ユッ！！」

なんだか危ない発言が聞こえてきそうだったから思わず詠春の頭を地面にめり込むほどの力で踏みつけてしまった…。だって第二、第三の詠春（黒化親バカ）ってイヤ過ぎるだろう？毎回、野太刀持って追っかけまわされることになってイヤ過ぎるよ…。

「黙れ、親バカ。話しの腰を折ったのは俺だがお前も暴走が過ぎるぞ？」

黒くなると限界耐久値が爆発的に増えるからしぶとくてキラいなんだよね。それでもいつの間にかどこからともなく湧いて来るんだから勘弁だわ…。

お？詠春が正気に戻ったか？

「アタタタ…。すみません。思わず我を忘れてしまいました…」

「思わずで忘れるなよ…。それで木乃香ちゃんがどうしたんだ？」

「ええ、実は木乃香の将来について話したいのです」

将来！？まさか…今から許婚でも決めておこうとかいう話しか！？それなら俺には関係ないか！？いやいやいやいや！待って待って！！相手は詠春（親バカ）だ…。これは俺への暗殺依頼か？相手先を潰してしまえば自然と許婚の話も消える、と…。

詠春…：お前も悪だな！！まさか娘のためにそこまで墮ちてみせるとは…！！俺はある意味、お前を尊敬するよ！！それでは話を聞こうじゃないか。相手は誰だ？必要ならば機動兵器から戦艦、要塞まで出してみせるぞ？

さあ話せ！と思い詠春の話しを聞いていったら、そんなことじゃなかった。純粹に将来のことだったよ…。くそう、俺の勘違いだったのか…。それもそうだよな。詠春が愛する娘の将来を決め付けるわけないか。俺も何だかんだで、詠春の親バカがうつったのかね。

「でも、それって俺が口出しすることじゃないか？詠春の娘だろうが、お前の家族間で話すようにしろよ」

「葵の言いたいことはわかっています。わかっていますが…是非とも聞いてほしいのです」

「…：…：…：なんだかキナ臭い話しになってきた気がする。…：それで何を聞けって？」

「はい。事の起こりは木乃香の魔力量についてでした…」

詠春の話しは娘、木乃香が高い魔力量を有しているということ。鍛えれば将来は極東最高の魔力量を保持した魔法使いになれるだろう、ということだった。このことに関してはミリーや皆から聞いていたから驚きは無い。俺も魔力量を感じ取って計れるしな。

このまま成長すれば木乃香の魔法界での将来は安泰だ。しかし、詠春は木乃香を魔法使いのドロドロとした闘争には巻き込みたくないと願う。できることなら普通に暮らして普通の幸せを手にしてほしいと考えているそうだ。

そして木乃香にはまだ魔法のことに關しては知らせていないと言う。これは近衛家当主、そして関西呪術協会の長として配下の者や

周りの親しい人間に嚴重に言い含めてあるらしい。これって職権乱用じゃない？と考えたのは秘密。

「つまり、なんだあ、アレか？魔法なんかとは関わりの無い、一般家庭の娘さんみたいな生活を木乃香には過ごしてほしい、と？」

「…ええ、その通りです。そこで相談なのですが…」

待つてー。ちょっと待つてー。マジ待つてー。

「詠春…？なんか、ますます厄介事の予感がヒシヒシとするんだが？んん？」

「…：…：葵が察するように貴方には厄介事かもしれないですね。しかし、それでも私は貴方に頼みたい」

俺の何がお前をそこまで押すのか、わかんねえよ。俺が何をしたい？確かに木乃香は俺に懐いているし俺もそんな木乃香を可愛がってはいるけど…。言ってしまうえば、そこまでだ。特に何をしたいというわけでもない。仲の良い友人（？）みたいなものだ。

「…：詠春つて木乃香ちゃんが生まれてから押しが強くなったよねえ。昔のからかい甲斐のあるお前が懐かしいよ…」

「はっはっはっ。そうですよ。人間、親になれば強かになるものです」

「親は強し、ってか？そればっかしは俺も経験…（ボソツ）無い、無いよな？実の子供は居ないよ、うん」

うん。居ないよ。数百年前に子供を拾って気まぐれに育てたことはあったけど実の子という意味では居ないよ、うん。子育ての経験はあるけどな！女の子は難しかったです。思春期の時なんて情緒不安定なのか矢鱈とパワフルだったし…。

まあ俺のことはどうでもいいな。今は詠春との話しのことだ。

「それで相談なのですが…。その前に確認ですが葵は数年以内に麻帆良へ居を移すようなことを言っていましたよね？」

今その話しを出すのか？まあ俺から話したことだから知られても特に困ることは無いけど…。詠春は俺に何をやらせたいんだ？麻帆良は小中高と寮暮らしだから一緒に住めとかじゃないだろうし。うーん？わからん。話しの続きを聞か。

「あ、ああ。確かにその下準備はもう、済ませてあるが…。それがどうかしたのか？」

「はい。実は木乃香も麻帆良のお義父さんのところへやろうと考えているのですよ。葵には向こうでそれとなく娘を見守ってほしいのです」

見守る、ねえ…。詠春が言う“お義父さん”というのは近衛・近右衛門のえもんだろ？あのぬらりひょんに預けるのかあ。引き受けるとしたら面倒なことになる前に、詠春に俺が学園都市入りするのを黙っていらしてもらう必要があるな。

向こうには今、タカミチが居るはずだからな。面倒事が増えるとか考えられん。腕試しとか実力を見せてみる、とか言われて学園所属の魔法使い達に手の内を見せるのは避けたい。何よりも面倒く

さい。なぜに俺がそんなくだらしないことをしなければならんのだ。

さて、どうしたもののかね？木乃香ちゃんのことだから心情的には受けてあげたいんだけど…。あれ？そういえば刹那ちゃんはどうした？彼女の護衛を自称している、あの子は？

「ふむ？おい、あの子はどうした？ほら、刹那ちゃん。一緒に向こうにやるのか？」

「……刹那君、あの子は、その…中学に編入という形で向かわせようと考えています」

な、なんだってー？なんで？あんなに仲が良いのに詠春は、そんな彼女達を引き離そうというのか！？はっ！とんだ外道だな！！言っておくが俺は可愛い女の子の味方だからな！？お前が木乃香ちゃん達の敵になるのなら俺が動くものと考えろよ！！

とりあえず詳しい話しを聞いてから判断するけどな！！

「何？一緒じゃないと木乃香ちゃんが泣かないか？2人とも互いに思い合っている。お前が刹那ちゃんの後見人だ…いや待て、そもそも、なぜ、別々に送るようなことをするんだ？」

「木乃香が泣くかもというのは当然、私も考えました。刹那君は…  
…なんと言うか、あの子も思い込みの激しいこのようで、その…」

なんだよ？モゴモゴ言つてハッキリしないヤツだな。刹那ちゃんが思い込みの激しいことなんてもう当たり前だろう？何を今更。サツサと白状しろよ。俺がお前の味方になるか敵になるかの瀬戸際なんだから。

「なんだ？男の子だろうがハッキリ言えばいい」

「お、男の子…。まあ貴方から見たら誰だって年下扱いですね。ハハハ…」

「うっさい。歳のことを言うんじゃないよ。俺のガラスのハートが傷付くじゃないか。」

「そんなことはいいから話せ。刹那ちゃんのことだろ？俺も気になる」

「はあ、はい。それで刹那君のことなのですが、実は一年前に木乃香が川で溺れかけたことがありました。幸いにも、家の者達が居合わせたので事無きを得ました。その時に刹那君が娘を助けられなかったことを後悔して自分を鍛えると意気込んでいるのです。そして……」

「いちねんまえ？え？かわでおぼれた？え？えー…？」

「オウ、ジーザス！イベントはアスナが来ていたことで潰れてしまったということか！？見逃したということか！？なんということだ！川のフラグをへし折って2人を仲良く！が、できなくなっってしまった！！いや、アスナを預かったことに後悔はないけどね！！可愛かったし！！」

しかし、今から刹那ちゃんを説得するのは……無理だ。何よりももう1年経っているし。あの子、見た目の可愛さと違って古風で頑固だからなあ。説得するにしても言えば言うほど頑なになってしまつて話してもできやしない。

今は神鳴流の修行のために協会総本部の裏山で山籠りをしているとのことだった。歳一桁の幼女に山籠りつて……。普通なら警察に通報されているぞ、詠春……。しかし、まあ……。

「はあ？つまり、自分の力が足りないから助けられなかった。力さえあれば、つて、この一年を修行しているということか？」

「まあ簡単に言ってしまうえば、その通りです。刹那君も親友の木乃香を助けることができなかつたのが悔しかつたのでしょう」

あー……たくつ。一つ、イベントを見逃すとコレだよ。イベントが起る時期なんてわからないし。だからと言つていつも監視しているわけにもいかないし。コレは仕方ないんだけどさ。ああ、もう……。面倒だなあ。あの頑固娘を説得するのか……。厄介だ……。

でも、このままじゃ木乃香ちゃんがなあ……。はあ……。

「ああ……、あのアホっ娘は、まつたく……。コラ、詠春も今の木乃香ちゃんを見てみる。何も感じんのか？そんなわけ無いよな。……それで何か言うことは？」

「……面目無いです」

庭で一人寂しそうに手毬をしている姿は何とも言えない物悲しさを誘つ。コレを見て「ハッ！ざまあみろ！」とか抜かすヤツは人間

でも精霊でも悪魔でも無い。断じて無い！ソイツは下衆だ。外道でも己が決めた道を行くが。コレに関しては下衆だ。俺が許さん！

「いや、すまん…。俺も責めるようなことを言ってしまった」

「いえ、不甲斐無いのは事実ですから…」

「ふう、それで詠春的には刹那ちゃんをどうしたいわけよ？」

問題はそこなんだ。後見人は詠春になっているから、とりあえずでも今後の方針だけは聞いておきたい。まあ場合によっては俺が独断で動くことになるけどな！

「今はあの子の好きなようにやらせてあげたいと思っています。どんな理由でも力を手に入れるには目標が必要ですから」

「……………そうか。後見人の詠春が決めたことなら俺は何も言わんよ。だが、木乃香ちゃんは…」

今は、そういう時期だよなあ。無理に言い聞かせても刹那ちゃんはまだより頑なになるだけだしね。詠春の決めたことに文句は無いよ。今のところは、だがな！それにしても木乃香が麻帆良学園入りか…。本人は納得してくれるかね？

「わかっていきます。ちゃんと説得しますよ。……………なかなか納得してはくれなさそうですね」

それならいい。無理矢理とかじゃなければ俺から特に言うことは無い。やっぱり子供はのびのびと育てほしいからね。変な義務感とか持つてほしくないわけよ。

一応、向こうに行ったら俺も気にはかけるけど…学園長がな…。あのぬらりひよんが俺に気付いた時に何をしてくるのかが読めない。戦力として俺を取り込もうとするのか。それとも不可侵の契約を結ぶに止まるのか。

どちらにしても面倒なことになる前に俺の学園都市入りと生活空間の隠蔽工作には特に力を入れておくとしよう。

「そつか。それでは向こうで俺はそれとなく木乃香ちゃんのことを気にかければいいんだな？」

「はい。それで十分です。…引き受けてくれますか？」

「ふうむ…。まあそれだけなら構わんよ。木乃香ちゃんのことは何やかやで面倒もみたこともあるしな。苦にはならんだろ…たぶん」

「そうですか。引き受けてくれますか。それを聞いて私も安心しました」

問題は刹那ちゃんのことなんだよな…。とりあえず予定では中学入学まで期間が空くから、それまでになんとかしないと…。なんとか…。…どうしよう？

近衛邸の庭…。

Side 木乃香

お父さまと葵兄さまがなんや、むつかしいお話ししとるんよ。一度、うちのことが話しに出てきた思うたらお父さまのことを葵兄さまがお義父さんって言うのが聞こえたんや。うち、ドキツとしたんへ？顔も熱うなったわ。えへへー

前にお父さまに「葵兄さまのおヨメさんになるー」なんて言うたこと、あつたけど、まさかそのことで？なんて考えてしもたんよ。なんや恥ずかしいわー。

それでな？今、うちは一人で、手毬で遊んどるんやけど、ちつとも楽しないんよ…。はあ、せつちゃん、今頃どうしとるんやろなー？川でのことがあってからちつとも会えへん。会えてもなんや素っ気ないし。うちがなんかしたんやろか？

「てん、てん、てまり…ふう、せつちゃん…」

「木乃香ちゃん」

「あつ、葵兄さま！お父さまとのお話しは終わったん？」

葵兄さまやー！お父さまとのお話しは終わったんやろか？それやったら、うちと遊んでくれへんかな？一人はやっぱり寂しいわ…。

「ああ、終わったぞ。この後は予定が無いから、木乃香ちゃんと遊べないかな？って思ったんだけど。どうかな？」

「本当！？それやったら、うち嬉しいわー！」

うちは遊んでくれる言うてくれた葵兄さまに飛びついてもうた。葵兄さまの胸に顔を埋めてスーッと息すると落ち着くわー。んーいい匂いやー。なんや安心する匂いやなー。それやのに、うちがええ気分になつてる時にこんなことを言うんや…。

「おとつ。木乃香ちゃんは元気だな。将来お転婆にならないか心配だ」

なんて言うんや。どー思う？うちかて女の子やで？確かにちっさいけど、それでも女の子や。葵兄さまも案外ヒドイわー。うち、将来はボンツ、キュツ、ボンツ、のスタイルになって葵兄さまを見返してやるんや！それで、それで、うちにメロメロになつて〜

アカン…。つい、考え込んでしもた。うちもうつかりやなー。あつ、そうや！うちのことをお転婆言つた葵兄さまがアカンのや。ここは一言言つたなアカンわ。

「む〜！うち、お転婆ちゃうもん！」

「はっはっはっ！すまん、すまん。もう言わないから許してくれ」

「約束やよ？言つたらアカンへ？」

葵兄さまは約束を絶対に破らんからこついつ時は信用できるんよ。その分、他でからかってくるんやけどな…。それでも憎めんのやー。これも“惚れた弱み”言うんかな？

「うむ。精霊と悪魔と電子に誓おう。“なるべく言わない”、とな」  
「むぐ！なるべくなんて“せいじか”みたいなこと言ったらアカンよー！ちゃんと約束しい！？」

アカン…アカンよ！その言い様は絶対に今度も言う気満々やないか！せいじか、みたいなこと言うのはズルイわー。うちが文句言うても葵兄さまはコロコロと笑ってマジメに取り合ってくれへんし。今日は“てつていこうせん”やな！覚悟しいや！？

「くつくつくつ！それはすまなかった。では、“なるべく”ではなく“ほどほど”にしよう」

「それもアカンツー！」

「あーっはっはっはっはっ！」

もう！葵兄さまは時々、いぢわるになるから困ったもんや。いつか罰が当たっても文句言えへんよ？今も、うちが膨れてるのにそれを見て大きく楽しそうに笑うんや！本当にヒドイわー。なのに目は優しいから怒るに怒れへん。うちはどないしたらええんや？

「うっ…葵兄さま、ヒドイわー。うちの気持ちを弄んで…。よよよ…」

結局、葵兄さまには勝てへんかったわー。うちにできたのは、泣きマネをして葵兄さまを困らせることだけ。それもなんや微笑ましいものを見る目で見てきて、うちの頭を撫でてくるんよ？葵兄さま、わかっててやってるんやったら、ますますヒドイわー。

「はいはい。ウン泣きはいいからなー。ほぐら、いーじ、いーじ」  
「ううう…ん…ちゃん」

それでも、うちは抵抗しいひんよ？葵さまに頭を撫でてくれる  
んは好きやからな こ、今回はこの辺にしといたるわー。えへ、え  
へへー

「…木乃香ちゃん」

「んー？なーにい？」

うちが頭を撫でる葵さまの感触に身を任せとる時にちよつとだ  
けマジメな声が聞こえてきたんや。今は何も言わずに撫でてほしい  
んやけどマジメなお話しっぱいから仕方ないんかな。

「…少しは気が紛れたかな？」

「ッ…何のことや？」

でも葵兄さまの口から出てきた言葉に、うちの体はビクツとなっ  
てもうた。それくらいドキツとしたってことや。うちは「そんなこ  
と無いよ？」って笑顔になろうとしたんや。でも、自分でも上手く  
できとるか、わからんわー。ちよつと失敗しとるかもしれへんな。

「刹那のことは聞いた。そのことで木乃香ちゃんが気落ちしている  
と思うと、気になつてな」

「…葵兄さま。うちは…うちは、せつちゃんに嫌われたんやるか

「？」

葵兄さまに言われて気が付いたら、うちの口が勝手にしゃべった。「うちは、せつちゃんに嫌われたんやるか？」と思いが出とったんや。そしたらなんや目の前がぼやけてきたんよ。おかしいない？思ったら、うち泣いとったんや。

「（ボソツ）やっぱり普通はそう思うよなあ…。ああ、木乃香ちゃん？大丈夫だ。刹那ちゃんはいつでも木乃香ちゃんのことを思っているぞ」

「グスツ…本当に、そうやるか…。うち、嫌われてない？」

葵兄さまはそう言って励ましてくれるんやけど、せつちゃんは今も、うちに素っ気ないんや。不安になるなってほうが無茶やん。うちが何かしたって考えてまうんが普通やん。グスツ…また目の前が良う見えんようになってもうたわ…。なんや鼻の奥もツーンとするし…ううう。

「うん、心配ない。俺を信じろ。そうだな…もし違っていたら木乃香ちゃんの願いを一つ叶えてやろう」

「お願いを叶えてくれるん？」

珍しいわー。葵兄さまがそんなことを言うやなんて…。普段はもっと具体的に約束を決めるはずなのに今回は「願いを叶える」なんて漠然としたもんやなんて…。それくらい自信があるということやるか？

「俺に出来ることで、だけどな。善処はしよう」

「むぐ、また“せいじかてきはつげん”やー。信用できんわ。でもー…、その時は…」

や、やつぱり葵兄さまや…。きちんと伏線を張るやなんて…。でも、目は本気そうや。絶対に大丈夫と言うように感じるわ。これは信じてもええかもしれんな。でも、ハズレたら願いが叶う…。その時は葵兄さまのおヨメさんになれるんかなー？

な、何を考えとるんやろ！うちは！アカンよ！そんなことで願いを叶えるなんて！そ、そうや！もしハズレたら、せつちゃんとの仲を取り持ってもらおう！うん！それがええわー！あは、あはははー！…はあ。恥ずかしいわー。

「うん？なんだ？」

「う、ううんつ。なんもあらへんよ！うん！なんもないよ？」

「そ、そうか？ならいいが…」

「う、うん。えへへー」

さっきまで悲しくて泣いとったのに今では笑つとる。うちも現金やなー。ちよつと嬉しいことがあると喜んでまうよー。せつちゃんのことば葵兄さまが大丈夫言うつとるなら大丈夫やなー。

それから残りの時間をいっぱい使っているんなこととして遊んだへ。かくれんぼ、鬼ゴッコ、的当てなんかもしたなー。でも一番楽しかったのはオママゴトやー。新婚さんゴッコをしたんやけど葵兄さまも楽しかったんやろか？いつも以上にニコニコしとったわー。

うちも楽しかったから気にせえへんかったけどアレは…なんや違うと思うわー。アレは…そうや、おじいちゃんと同じ目なんや。うー…うちが、まだちっさいから相手として見てくれへんのやるか？だとしたら早う大きくなりたいわー。

そうして遊んどつたら周りは夕方で暗くなってきたわー。もう今日も終わりなんやなー。楽しい時間はいつもアツという間やー。もっと時間があればもっと遊べるんやけどなー。できひんことを言うても仕方ないなー。

「遊んでいたら結構いい時間になったな…」

「あ、本当やね。カラスも鳴いとるよ。…葵兄さまは、今日このまま帰ってしまうん？」

できれば晩御飯も一緒に居たいんやけど…。葵兄さまも何かと忙しいからダメやるか？

「ん？んー…、そういえば決めてなかったな。どうするか…」

「あつ！そ、それなら家で食べていかへん？」

これはチャンスや！今ここで押せば、あとは何とでもなる！お父さまに言えば、もう一人くらいはなんとかなるはずや！い、いざとなれば、うちのをアーンって半分して食べ合えばええんや！そうや！それがええ！か、間接キスなんて考えてひんよ！？ほ、ほ本当や！…！

「いや、それは…」

「私も、それがいいと思いますよ」

アカン！葵兄さまが帰ってまうと思った時にお父さまの声がした。ナイスや！お父さま！うちの困った時に助けてくれるわー。でも、いつから居たんやろな？うち、ちっとも気付かんかったわー。

「詠春…気配殺して来るなど…まあいい。それで何が…」

「お父さま！もう、お仕事終わったん？」

アカンねん！ここで葵兄さまに発言を許したら帰る口実を与えてしまふんや！ここは畳み掛けるんや！それしかない！！あとはお父さまが頼りや！頼むよ！？お父さま！！

「ええ、終わりましたよ。木乃香は、今日は楽しかったですか？」

「うん！楽しかったへ。それよりも、それよりも！葵兄さまも一緒にご飯食べてもいいん！？」

お父さま！お願いや！！うちの気持ちに気付いて！！今日はこのまま葵兄さまとご飯が食べたいんや！！それに贅沢は言いひん！！そのあとに、ちょーっとお泊りしてもらえないか考えとるだけなんや！！

「もちろん。葵も、どうですか？家で食べていきませんか？」

「ふむう。家長からのお招きとあらば行かないわけにもいかないな。木乃香ちゃん、一緒に食べようか？」

「ツ〜！〜！うん 一緒、や！」

やったー！ツ〜！！うちは勝ったよ！！葵さまはうちのモンや！〜そのまま葵兄さまの胸に飛び込んでしもたんは間違いや無いと思うんよ？うちの素直な気持ちを表にただけやしな。

「おっと？そんなにハシヤグとお腹が空き過ぎて動けなくなるぞ？」

「大丈夫やもん えへへー」

動けなくなっても葵兄さまが運んでくれるはずやから大丈夫 っ て意味で言うたんやけど葵兄さまは気付いてるんやろか？…なんや気付いてなさそうやんな。ま、まあええわ。今日はこのままお泊りにまでもっていければ言うことなしやな。頑張るへ！！

「はっはっはっ。木乃香は本当に葵が好きですね」

「うん！うち、葵兄さまのこと大好きやっ」

「……………」

「詠春よ…自分で聞いといて真っ白に燃え尽きるなよ…」

「?????」

お父さまに聞かれたことに素直に答えたのになんや真っ白になっ  
てもうた。動きもぎこちないものになってもうたし…。お父さま、  
どうしたんやろな？

Side out 木乃香



第三十一話「葵と詠春と木乃香と」（後書き）

木乃香の少女時代がよくわからないです！

よって、うち（当作品）の木乃香はこんな感じですよ！

少女時代のだけどな！！最初はこんなじゃなかった！

こんなにおませな木乃香になるはずじゃなかったんです！！

この指が！この手が！勝手に！

でも、できてみれば作者はクライじゃなかった！！

何よりもそこに作者はシヨックを受けました！！

「自分の木乃香像ってこんなだったのか？」

なんて！なんて！！考えてしまったから！！！！

ちくせう…。苦情が来たらどうしよう…？

作者はマジで怖いんです！できればバツシングよりもエールをください！！！！

では、また次回にでもお会いしましょう！！チャオッ！！

第三十二話「麻帆良と入学式とケーキと」(前書き)

まだまだ、のほほんが続くよー。

## 第三十二話「麻帆良と入学式とケーキと」

埼玉県麻帆良市麻帆良学園都市…。

Side 葵

やってきました、麻帆良！魔法的結界は目暗ましの魔法の強力なやつで誤魔化した。電子精霊などの機械的監視もアンのハッキングで無効化。ただ無効化しただけじゃなくて相手にバレないようにアンは自分の支配下に置いたようだ。これであらゆる隠蔽工作が少しは楽になるね。

現在の時刻は午後3時過ぎ。そして原作開始10年前だ。<sup>のハズ…</sup>木乃香ちゃんも後から来るよ。一応、今から数日以内に来る予定だ。俺達は状況の確認と電子制圧などして戦場<sup>フィールド</sup>を整えに一先ず早く来たわけなんだ。

それはいいんだが…タカミチからナギが死んだと聞かされた。そのことについて俺はあまり悲観してなかったりする。だいたい黒いアブラムシよりも生きることにしつこいアイツが、そう簡単に死ぬわけがない。姿を暗ませたのには何か理由があるんだろうよ。俺には関係ないけどね！

それよりも、だ。タカミチから聞いた次のことだ。ナギに続いてガトウも死んだこと。そのことが問題だ。アスナが懐いていたこともあるから泣いていないかが気がかりだったりする。なにせオジコの切っ掛けだしな…。

まあどちらにしる、アスナもここに来ることになる。彼の、ガトウのファミリネーム、カグラザ力を持って…。まったく、あのバカ<sup>カ</sup>、いつもは遠慮無しに厄介事を俺のところを持ち込むくせに、肝心な時ばかりは俺を頼らなかつた。

もちろん、そのせいでガトウが死んだなんて傲慢なことは考えちゃいない。だが、知り合いが居なくなるのは、やっぱり悲しいものだ。聞いてから暫くは飲む酒が不味くて仕方がなかつた。どうしてくれんだ？バカ野郎が…。

あー、ヤメヤメ！また気分が滅入るわ！なんか楽しいことを考えよう！うん！とりあえず出店場所を目指すとするか！

「それにしても初めて学園都市に入ったけど、マジでここだけヨーロッパ風なんだな…」

とても、ここが埼玉県なんて考えられんわ。元の世界は何も特徴の無い県だったのに…。うん、不思議だ。地域的に他は微かに覚えている俺の記憶にも合致するのに、ここだけ違う。やっぱり不思議だな。

「えっと…ここを右に曲がって？真っ直ぐか…」

ここ、麻帆良の大通りは、わかり易いんだ。でも、少し路地に入つて近道をしようとする途端に迷路みたいに入り組んだところに出ることがある。どゆこと、これ？対侵入者用に造られているとでも言うのかね？これは一度、マップ化する必要があるかもしれない。

「アンに探索用装備のカブトムシでマップの作成をするように頼んでおこうかな。これじゃ、いざという時に戦略的な不利に立たされてしまう。地形の確認は急務だな…」

『我が主よ。今からアン嬢に連絡することもできるがどうするっ？』

「ふむ、そうか…」

どうしたものか？ラミエルさんの言うように連絡して今すぐ行動することもできる。確かに早急に地形を把握しておきたい。でもなあ…来た早々に目立つ動きをすれば勘繰られて痛くもない(?)腹を探られることになるかもしれない。

あ、でも極隠密行動とステルスで潜伏していれば時間はかかるが確実かもしれない。これならいけるか？

「ラミエル。アンに通達だ。内容は“極隠密にて地形の把握に努めよ”以上だ」

『Roger, My master. 内容は確認した。通達を開始する…完了。返信を…受信。内容は“学園データバンクに地形データの大半を確認。早急に地形の齟齬を編集し、任務を完遂する”以上だ』

「あー、学園データバンクは既に制圧済みだったか。すっかり忘れていたな…」

いや、本当に忘れていた。だってアンの手にかかればもの数分でカタがついたんだ。達成感なんてあるわけがない。重要なことだ

つてことは覚えているけど軽く制圧下に置けたから拍子抜けだった。緊張していたのがバカバカしく思える。

だから、少し忘れたことがあっても俺は悪くない。うん、悪くないんだ。ただ印象に残らなかつただけのことだ。

『我が主は時々だが、どうでもいい時にどこか抜けていることがあるな。…しかし、それも愛嬌があつて良いな』

「……ありがとう、とだけ言っておくよ」

下手なこと言つたら**藪蛇**<sup>やぶへび</sup>っぽいからな。言葉少なに返すが吉だろ  
う。

『ヘタレだな。藪蛇とわかつていても行くのが男<sup>おの</sup>というものである  
うに』

「……お前に読心の機能を付けた覚えはないんだが？」

なんなの？ラミエルさんって…。この前メンテした時も構造に変化が見られるし。おかしくない？確かに学習機能と自己進化機構は取り付けたよ？でも、造つたはずなのに構造を俺が理解する以上の早さで強化、最適化して進化していくんだ。

それでもアンよりはマシだけどね。それでも、このまま進化され  
てはアンのようにブラックボックス化するの**は**確実だつて。もう、  
その片鱗が見え始めているんだ。…何かつて？…装備した覚えのない  
武装が増えているんだよ。

ラミエルさんには大小様々な荷電粒子砲と強力なDFは装備した

よ？でも、ミサイルやレーザー、果てはナノマシン兵器なんて装備した覚えは断じて無い。

俺は、どこから武装データが流れてきた？と考えた。まあ考えるまでもなく答えはある意味で目の前にあっただけだな…。忘れていかもしれないがラミエルさんが吸収分解した俺の愛機“プロテア”だ。そこからデータが漏れていたみたいなんだ。

ラミエルさん、どうやら自らの体内で俺の機体を自己進化、改良、改造etcをしているようなんだ。おかげで俺は自分の愛機なのに起動実験のあの時から一度も乗せてもらえない状況だ。本当に、この青いクリスタル結晶体をどうしてくれようか？終いにや碎くぞ。ちくせう…。

『言わずともわかる。我は我が主と共に在るものだ。ならば何故にわからぬことがあるうか』

「…バカ。恥ずかしいことを言うんじゃないよ」

バ、バカ…。ラミエルさん、何をそんな真剣な声色で言ってるんだよ。ハスキーな女性ボイスだから、少しドキッとしただろうが。

『何が恥ずかしいものか。我は事実を言ったまでのことだ。誇ることはあっても恥じることなど何も無い』

「だから、それが恥ずかしいんだって…。いや、ラミエルさんの気持ちは嬉しいんだけどね？それでも、もう少し言葉をオブラートに包んでくれるといいな、って思うわけですよ」

この子には羞恥心というものが無いわけではないようだけど他の

人とは少し感覚がずれているように感じるんだよな。何事もストレートにものを言うから困ったものだ。まあそれがラミエルさんのいいところでもあるんだけどね。

『オブラートに包む、か。ふむ…。好きだ、我が主』

「ブツ！全ツ然！包んでないよ！？寧ろ、ますますストレートになつてるよー!!」

だから！突然、何を言つとるんだ、コイツは！？好意の感情がダダ漏れですよ！？嬉しくてドキドキするだろうが！…あつ、やつぱり今の無し！却下！俺は青いクリスタル相手にドキドキする性癖は持ち合わせてない！！断じて無い！！たら無い！！

『なんだ、これでも不満なのか。いったい我はどうすれば良いのだ？』

「………うっさい。自分で考えろ」

ストレートな気持ちはキライじゃないが素直に受け取るには俺も歳をとり過ぎた。なかなか気恥ずかしいんだ。まったくう…。

「その考えた結果を我が主が全否定したのではないか…」

「とにかく今は黙れ。この先は大通りだ。いくら学園都市内に高度な認識障害の結界が張られていても魔法使いまでは対象外なんだ。

聞かれてはマズイ」

『色々と不満だが…了解した』

ふう、やれやれ。高度な認識阻害の結界…。これがあるから学園内の不思議な出来事は外部には漏れない。もちろん、それだけじゃなくて、もしものために隠蔽専門の部隊もある。ただ、この隠蔽部隊は比較的人道的だということは確かだ。…末端までは知らないがね。

それに学園の魔法使いに見つかるのも面倒だ。原作開始間近ならどうということはないんだけど今ここで見つかるのはマズイ。仮に見つかるとしても最低限良識のある人物で最少人数に限る。

まあ最悪、対魔法使い用認識阻害アイテムで魔法使いは誤魔化して。アンが学園都市のシステムは制圧下に置いている現在、都市内の監視カメラのシステムは、いくらでも誤魔化せる。電子制圧のことがバレなければ、という条件がつくけど…。

何はともあれ、できる限り面倒事は避けるべきなのには、変わらない。下手に感付かれては、やってらんないってもんだ。

おっと。それよりも今は開店予定の場所に行かないと…。大分、歩いたから、もう直ぐのはずだ。地図によると、ここの角を曲がって…その先だ。

「お？あそこか？へえ…。なかなか、いいところじゃないか」

大通りの角に面していて、そこそこに日当たりもいい。ここなら春や夏にはオープンカフェにしてもいいかもしれない。ここはレス

トラン街の中で麻帆良女子中学が一番近いし、通学路のルートにもなっていたりするんだ。

これなら将来、アスナや木乃香ちゃんの登下校時のちよつとした時に目が行くだろう？いやー、いい場所が“空けてよかった”げふんっげふんっ、もとい、空いていてよかった！うん！

…ごめんなさい。空いてなかったから立ち退いてもらいました…。でも！ちゃんと手順は踏んだんだ！外道なことは何一つしちやいない！…おかげで説得に2年近くかかってしまったけど。立ち退いてくれたから謝礼は、弾ませてもらいましたよ。ええ。

角の向こうを見てみると店先を掃き掃除していたファレノがいた。

「あれ？葵ちゃん、もう来たの？もう少し後に来るかと思ったの」

「ファレノ、お疲れー。俺だけ少し早く来たんだ。連絡したように木乃香ちゃんも数日以内に、ここの幼稚園に編入されるよ」

ファレノ、マジでお疲れした！店と土地の買取から改装。ついでに新装開店の宣伝までしてくれた。1チーム（4人）ほどつけたと言っても5人でここまで用意してくれたことに感謝だ。

「そっか。木乃香ちゃんもここに来るんだったの。刹那ちゃんもここに来れば良かったの」

「それは仕方ないよ。刹那ちゃん自身が決めたことだしね。それに中学の時に編入されるから、その時は歓迎会でも開こう」

刹那ちゃんは結局のところ説得できなかったんだ。あの子って思

い込みが激しくてそのことが災いしてかものすごい頑固なんだ…。  
説得は困難…というより現段階では無理。暫く時間を置くのが吉だ  
ったね。

今頃はまた山籠りをしているのかもしれない。幼女が山籠りつて  
今考えても非常識な気がするよ。風邪とか引かなければいいけど。  
…大丈夫かな？心配だねえ。あの子って何げに限界迎えて倒れるま  
で頑張るからさ。

うん。こつちに来たらイヤと言うほど構って困らせてやろう！歡  
迎会は、その手始めだ。フフ、フフフフ

「うん そうするの。刹那ちゃんも、きっと喜んでくれるの」

「そうだね。でも、そのまえにまずは木乃香ちゃんの幼稚園編入の  
お祝いかな」

「あー、そうだったの。でも、お店の準備も、もう終わるからちよ  
うど良かったの」

「うん。開店祝いと一緒に木乃香ちゃんの入園祝いも一緒にやっち  
やおつ」

「はい、なの」

その日はそのままお店の開店準備に掛かりきりだった。

そして数日が経ち、準備も終わった。開店を明日に控えた時に木乃香ちゃんが麻帆良に来日。その後日、歓迎会と開店祝いと木乃香ちゃんの入園祝いで、夜遅くまでドンチャン騒ぎしていた。

木乃香ちゃんも楽しんでもらえたらしく知らない土地に来た割に終始笑顔だった。あまりのはしゃぎように俺もおかしいなと思って話しかけたら案の定だった。誰かが木乃香ちゃんに軽いアルコールを飲ませやがった！

「キャハ キャハハハハッ なんや、このジュースおいしいわー」

「木乃香ちゃん??」

途中で気が付いて良かった！マジで良かった！おかしいとは思ってたんだよ…。普段以上にスキンシップが激しいからさ。抱っこしたりア～ンしたりは何度かあったからまだいい。いや、あまり良くないけど…。詠春（黒化親バカ）に見つかると危ないし。ここには居ないけどな！

「葵兄さま ん」

「は？」

とりあえず、それはいいや。それで木乃香ちゃんなんだが、その…料理を口移しで俺に食べさせようとしたんだ。それを見た、リチラが対抗してくるわ。フアレノも悪乗りして煽るわ。その2人をアイリが愛の拳で黙らせるわ…。とにかく、無茶苦茶の内に終わった。

だいたい誰だ？木乃香ちゃんにお酒を飲ませたのは？まだ、幼女

だぞ？飲ませたらイカンだろ。それ以前に木乃香ちゃんが大胆でお兄さんはマジで困りました！相手は幼女（木乃香ちゃん4歳）だとわかっていたからよかったけど…。

これが今、発育のいい中学生とかになったら…。ヤバイよ！？詠春っ！！木乃香ちゃんが将来、悪女になったらどうしよう！？20歳くらいになったら天然で色香を撒き散らしそうだぞ！？イカン！イカン！お兄さんは許しませんよーッ！！

「やっぱりお酒はまだ早かったか…」

飲ませたのはお前か！？オリビエ  
ッ！！！！

まさか…まさかの伏兵がここに居たとは…！！俺は、このあとオリビエにお仕置きという名の説教を小一時間ほどしてやった。

時刻は日を跨ぐちようどのことだった。

Side out 葵

麻帆良市立第一小学校校門前…。

今日は、うちの小学校の入学式や。今は式も終わって校門前なんかで皆がお父さん、お母さんに一緒に嬉しそうにして写真撮ったりなんかしとる。そんでなー？うちも校門に居るんや。ここで人、待つとるんよー。もう直ぐ来るはずなんやけど…。

「木乃香ちゃん、お待ちせ」

「むー。ほんと、遅いで？何してたん？」

葵兄さまがやっと来たわー。式が終わってから30分も経つとるんよ？信じられるー？うちは、その時間、ずーっと、ここで待つとつたんや。ええかげん足が疲れたわー。いったい、こんな時間まで何しとつたんや？

「はっはっはっ！そいつは悪かった。一応、先生方への挨拶をしてきたんだ。木乃香ちゃんのことお願いします。つてな」

「そ、そんなんでええよー！恥ずかしいやんか！」

なっ！？そんな恥ずかしいことをしとつたんか！うう！これやと明日は、せんせーから、なんや温かい目で見られてまうやないか…。勘弁してやー。うちのワクワク、ドキドキの学校生活が、葵兄さまの手で壊されようとしとるわ！

葵兄さまもちよつと過保護やねん。うちも、そこまで子供やあらへんもん。知らない人について行ったりもせんよ？お菓子くれる人も…菓子だけもらつたらアカンやるか？…アカンか。

葵兄さまは、うちの文句を聞いても、またなんや言うてきたんや。

「何を言う！？可愛い木乃香ちゃんのことだ…。いつ変な野郎が近付いてくるか、わかったものじゃない！もしものために予防線を張っておかなくてどうする！？お兄さんは心配で眠れませんかよ！？」

どないな理屈やねん…。でも、これは葵兄さまが、うちのことを気にかけてるいうこと、やんな？このままやったらただの過保護な葵兄さまやけど…。上手くしたら、うちのこと好きになつてくれるかもしれへんわ。ヤリ方間違ごうたらアカンな！ファイトや！このかっ！

でも、過保護やと、わかってても心配してくれるんは、やっぱり嬉しいわー。これは好きな人やからやんな。せつちゃんも好きやから、うちは心配やな。初めてできたお友達やから仲良うしたいわー。せつちゃん、どうしてるんやろなー？早く会いたいわー。

「葵兄さま…。心配してくれるんは嬉しいよ？嬉しいけど…。なんや大げさやと思うねん」

「そんなことは…！？こほんっ、そうだな。すまない。少し…取り乱したようだ」

「んーん。ええよー。葵兄さまは、うちのことを心配してくれたんや。嬉しいへ？えへへ」

葵兄さまが、うちのことを可愛い言うてくれたんは、ほんとーに嬉しいへ？今はうちもまだちっさいけど、あと10年もしたら振り向いてくれるやろか？16歳になれば結婚もできるしなー あー、

でも、アカンわー。うち、まだ恥ずかしいわー。きゃー

「木乃香ちゃん…。よーし！今日は進学祝に好きなものご馳走しちやうぞ！」

「ほんとーに！？それなら、うちは葵兄さまが作ったケーキが食べたいわー」

思わぬところで褒美がきたわ 今日はいえ日やなー。そやけど、うちの口は勝手に動いて葵兄さまの手作りがええなんて言うとなわー。もう“じょうけんはんしゃ”ってコワいわー。考える前に言うてるんやもん

「おうおう！いいぞー！何がいい？チョコか？フルーツ系か？それともスタンダードにいくか？」

「んと、んと…。あつ、あんな？あんな？アレがええわ！この前、幼稚園卒業した時に食べた、アレ！」

葵兄さまが作るケーキの種類の多さに、ほんとー、迷ったわー。それで一番、美味しかったケーキにすることに決めたんや 幼稚園の卒業にお祝いで食べたケーキアレはメツチャ美味しかったんよー

でも、アレって値段がメツチャ高いってミリー姉さんが言うとななー。食べたい言うた後で思い出したわ…。これはアカンかなー？葵兄さまはなんやむつかしいお顔しとるし…。

「ア、アレ？アレというのは限定スペシャルケーキのことか？木乃香ちゃん…」

「そつや！それそれっ！あれって、メツチャ美味しかったんやも  
う一度食べたいわー」

「そ、そうか…。アレか…」

「やっぱ、アカン？この前、食べた時はただ美味しくて何も聞いと  
らんかったんやけど、ほんとは、そんなに高いんかな？うちのお  
小遣いで足りるやるか？いざとなれば、うちのなけなしのお金を葵  
兄さまに渡して少しでも足しにしてもらっやんや！」

「それでケーキは…どうなんやるか？…アカン？」

「もしかして…アカンの、やるか？うち、我が俣…言うたんか？」

「無い！無い！我が俣なんかじゃ無いぞお！ただね？ちよーつと考  
えただけだから！大丈夫！ちゃんと作ってあげるぞー！はっはっは  
っ…！はあ  
」

「やった 葵兄さま、ありがとーな。うち、幸せや」

「ハハハ…木乃香ちゃんに喜んでもらえて俺も嬉しいよ」

「やっぱり、うちは葵兄さまのこと大好きや」

Side out 木乃香

麻帆良市立第一小学校校門前…。

S i d e 葵

木乃香ちゃんの小学校の入学式にちょうどいいと考えて学校内の先生（魔法先生）の確認をしていたら少し時間がかかってしまった。それなりの使い手だったら木乃香ちゃんの迎えに来た時に気付かれて面倒なことになる。主に俺の正体的な意味で！

気軽に木乃香ちゃんを迎えに来たいから俺は、こんな面倒なことも手間隙かけてやっているんだ。大きな面倒を回避するためには小さな手間隙がかかるものなんだよ、うん。…それでも巻き込まれる時は巻き込まれるけど、ね？ハハハ…。

そんなこんなで用事を片付けた俺は木乃香ちゃんが待つ校門の前で行ったんだ。あとで合流しようと思っただけで提案したのは俺だから待たせたことに悪いなあと思っただけ。時計を見たら30分も待たせちゃったんだもん。

それで無事に合流して他愛も無い話しをしていたら木乃香ちゃんが「葵兄さまは、うちのことを心配してくれたんや。嬉しいいへ？えへへ」「なんてハニカミながら嬉しいこと言ってくれるから俺は少し調子に乗って…。

「木乃香ちゃん…。よし！今日は進学祝に好きなものご馳走しちやうぞー！」

そんなことを言ってしまったんだ。でも仕方ないだろ？子供の笑顔には勝てないって…。喜ぶ顔を見てみたいじゃない？まあそれが今回は実に微妙な失敗をってしまったんだけどね。いやー、木乃香ちゃんも強かに育ったものだよ。うん、本当に…。

「ほんとーに！？それなら、うちは葵兄さまが作ったケーキが食べたいわ」

「おうおう！いいぞー！何がいい？チョコか？フルーツ系か？それともスタンダードにいくか？」

「んと、んと…。あつ、あんな？あんな？アレがええわ！この前、幼稚園卒業した時に食べた、アレ！」

幼稚園の卒業祝いの時のアレと聞いて少し顔が引きつった…。

「ア、アレ？アレというのは限定スペシャルケーキのことか？木乃香ちゃん…」

限定スペシャルケーキ…。これは最高級の素材を厳選に厳選を重ねて尚且つ新鮮なフルーツを盛り付けたケーキ。甘さもカロリーも若い女性に満足してもらえるものを用意した。だが、その反面新鮮なフルーツ故に作成後、直ぐに食べないと味が落ちてしまい美味しさも半減してしまう。

そんなデリケートなケーキは頭に限定とあるように1日1ホールしか作れない予約ものだったりする。そしてこのケーキ値段もバカ

高い…。こちらが1ホールなのに対して他のケーキを買ったとしたら12のケーキをホールで買える値段だ。単純計算で12倍…。

なんで、こんなケーキを作ったのか？ここ麻帆良で新規開店するに当たって限定という商品で赤字覚悟の宣伝効果を期待したものだからだ。実際この試みは当たりだった。若い女子学生や主婦などが店内に集う場所になったんだ。

しかし、まさか、アレが食べたいなんて…。木乃香ちゃんも、やっぱり女の子ってことなんだろうね…。

「そうや！それそれっ！あれって、メツチャ美味しかったんやもう一度食べたいわー」

「そ、そうか…。アレか…」

そりやー、美味しいだろうさ。これで不味かったら二度と店には並べないよ。コストがかかるだけの物なんてあるだけで害悪だしね。切る時には躊躇っちゃイカンよ。切る時はバツサリ切らないとね。

しかし…マジか…アレか…。どうしよう？今日の分の限定品は、もう予約分は売れちゃったしな…。もう一度作るにしても時間が足りないよ。

「もしかして…アカンの、やるか？うち、我が俣…言ったんか？」

ダメじゃん！！子供の願いを潰しちゃダメじゃん！！俺ツ！！！！ハッ！！そうだよ！「工房」の中なら…ヤレルツ！？あの中なら時間を引き伸ばすことができる！！やった！これならなんとかなる！！木乃香ちゃんの期待に応えられるぞ！！

「無い！無い！我が俣なんかじゃ無いぞお！ただね？ちよーつと考  
えただけだから！大丈夫！ちゃんと作ってあげるぞー！はっはっは  
っ！…はぁ」

「やった 葵兄さま、ありがとーな。うち、幸せや」

「ハハハ…木乃香ちゃんに喜んでもらえて俺も嬉しいよ」

出費は痛いけど木乃香ちゃん笑顔を見られただけで一応、満足か  
な。

Side out 葵

第三十二話「麻帆良と入学式とケーキと」(後書き)

木乃香、微妙に暴走中な気がする…!?

作者はどうしたんだ!?! って私か!?

P S ・自分でも何をしたいのか、わかりません。

### 第三十三話「木乃香と明日菜とお泊り会と」(前書き)

活動報告でも書きましたがパソコンの初期化に伴いテキストデータが消滅したため更新が遅れました。

とりあえず復活しました。更新するのは今まで以上に亀化しますが長く生暖かい目で見守ってください。

では、続きです!どうぞ。

### 第三十三話「木乃香と明日菜とお泊り会と」

麻帆良市レストラン街…。

S i d e 葵

木乃香ちゃんが小学校に入学した日から数日後。木乃香ちゃんのクラスに一人の転校生が来た。まあ、誰かと言わなくてもわかるんだが…明日菜だ。

原作とは多少の誤差はあるかもしれないが一応は予定通りと言えるな…よね？明日菜がいつ頃、麻帆良に来るのかは覚えとらんのよ。でな？なんで、明日菜が麻帆良に来たのを知っているかと言うとだな。

… … 明日菜が 直接 来たんだ 俺の 店に な。

あー…、もう少し詳しく言うとな。明日菜が転校してきた日に木乃香ちゃんが「葵兄さまー 新しい友達やー」って連れて来たんですわ…。これは予想していなかった。いやー、俺も油断したわ。

出会うとしても転向してきてから2、3ヶ月後かなー？って思っていたのに初日の転校直後ですよ？お兄さん歓迎の準備ができていませんでした…。

俺は詳しくは知らんが、今の明日菜の記憶はジャックやアルが封印している。まあアイツ等なりの配慮ってやつなんだろうさ。誰だって親しい人が死んだらショックだろうからな。幼いころに、そんなのがあつたらトラウマものだよ？

まあそんな訳で俺達のこと記憶に無い。…だとしても俺達も短い間とはいえ可愛がったこともあるんだ。少しは歓迎してやりたいじゃないか。それなのに何も準備していないんだ。これは俺の失態だ…。

即効で歓迎会を開こうとしましたよ。でも外は暗くなってきたこともあつて歓迎会は後日の放課後ということになった。一応、時間も遅くなってきたのでアイリとマリーに2人を寮に送ってもらうように頼んだ。

残った俺達は後日の歓迎会の準備だ！ふっふっふっ！明日は派手な歓迎会にしてくれるわ！あーっはっはっはっはっ！

そして当日、喫茶店クレイドル店内…。

「…なんてこと考えておりました」

「……………葵？」

「あー、何でもないぞ。…明日菜は楽しんでいるか？」

「?.....」くん。楽しい?」

「.....明日菜よ、なぜに疑問系なんだ?」

そんなこんなで“明日菜ちゃん転校おめでとう! 歓迎パーティー”の最中なんだ。なんだけど.....。ここでまた想定外のこと起きてしまったんだ。いや、うん...。よく考えてみれば当然っちゃ当然なんだけどね。

簡単に言うと参加メンバーが増えました.....。木乃香ちゃんのクラスメイト達が数人.....というか半数が来てしまった。流石は未来のA組だ。まだ幼いながらも、その行動力はなかなか侮れないものがあつたよ。

委員長のあやかちゃん。鳴滝姉妹の風香ちゃん、史伽ちゃん。ニン娘の長瀬・楓ちゃん。チア3人組(予定)とか、などなど。他にも居るけど今は置いておこう。

それにしても、すごい勢いで料理が無くなっていきますわ.....。胸焼けしそう...うぷっ。料理とお菓子足りるかな?一応、今もミリー他数人が調理中だけどね。補充は欠かせません。

「あー! あすな、ダメやー!? 葵兄さまの膝はうちの!」

「は?」

皆の食べっぷりを見ていたら木乃香ちゃんの声でそんな言葉が聞こえた...。今度は何なん? いや、木乃香ちゃんが言うとおり明日菜が俺の膝の上に座っているんですがね。でも、言ってしまうば、そ

れだけじゃん？問題ないよね？

木乃香ちゃんは何をそんなに目くじら立てているんだろう？アレかね？お気に入りの玩具をとられた時の気持ち、かな？

「ほーら。あすなー、早う降りいやー？」

「？…。……ヤ」

「ッ！？」

す、すげえ……。一言どころか一文字で拒否った……。俺でも一文字が限界なのに……。明日菜、恐ろしい子！

それはともかく華麗に断られた木乃香ちゃんは絶句。誰の演出かは知らないけど背景に雷と津波の幻視が見えたような……。き、気のせいだな、うん！

「うっツ！葵兄さまー……」

「え？？」

そんな子犬が縋るような目で見られてもなあ。俺にどうしろと言うのかね？それと俺の膝は俺のものだかな？木乃香ちゃんのじゃないぞ。

うーん？それでもまあ、このままだと木乃香ちゃんが、なぜか泣きそうなので明日菜にお伺いしてみるか。では……。

「あー……。明日菜？とりあえず、降り……」

「ヤ」

今度は即答！？それに最後まで言っていないのに！？この短い期間にどんだん腕を上げるなあ…。

ジャック、アル…。本当に明日菜の記憶封印したのか？昨日会って今日なただけと前と同じくらい懐いてくれるんですけど…。どういうこと？記憶操作の魔法は無効化されたか…。魔法薬の選択を間違えたかして催眠暗示すらも間違えたんじゃないか？

「うー！うー！」

「…はむ…むぐむぐ…はむ…もきゅ…」

明日菜…木乃香ちゃんの相手してあげようよ。何、わたし関係ありませ〜ん みたいにケーキを食べているのさ…。木乃香ちゃんがうー、うー、って言ってるじゃないか。もう、かーいーな！

あー、もー。ケーキを頬張り過ぎだつて口の周りがクリームだらけじゃないか。ダメだぞ、明日菜？ほら、ちゃんと拭かないと…。キレイ、キレイ…。よし！

あー、それよりも木乃香ちゃんか…。これ以上は拗ねてしまうかもしれないからな。

「…木乃香ちゃん、こっちに座る？」

「（ジー）あ、あ葵兄さまが言うなら、しし仕方あらへん。うちも…うんしょ」

明日菜の座る左足とは逆に右足を出して聞いてみた。これは俺が考えた妥協案だけだね。だってこれはお気に入り玩具をとられた子供の心理ってやつだろ？ならば2人で分ければいいんじゃないかね？という発想の元、実行したんよ。

他意は無いでござる。両手に美少女　なんて考えてないでござるよ？

でも、ああ、癒されるわー。子供はいいねえ。見ていて飽きないよ。あつちにちよろちよろ、こつちにちよろちよろ。動きっぱなしで落ち着きが無い。元気なのはいいことだけどな！

下手に目が離せないや。この子達が怪我したら店長である俺の責任問題にもなるからな。怪我なんてさせないけどね！！

「えへへー　葵兄さまはあつたかいなー」

「……こくん。葵は暖かい」

皆さん聞きました？可愛いですねえ。左に明日菜、右に木乃香ちゃん。2人の可愛さにマジで癒されるわー。両方から“ぎゅっ”ってされているんです！身長差的なこともあつて俺の腰辺りだね。

この町に来てからは裏で学園の魔法使いに俺達のことをバレないように様々な工作をしていたから多少は精神的な疲れがあるのよ。それに木乃香ちゃんを狙った学園外からの侵入者の相手をしたりね。

それをこの2人は癒してくれるの。まさに砂漠の中のオアシスですな！

あれ？木乃香ちゃんから魔力、が…？

「……（ジーー）」

「な、何？葵兄さま？そんな見つめられると、うち恥ずかしいわ」

「あ、ああ、いや、ごめん。なんでもない」

おいおいおいおい！木乃香ちゃんから魔力がダダ漏れになつてるぞ、おい！？これじゃ探索系が得意の魔法使いだったら見つけてくたさいって言っているようなものだぞ！体内の魔力が使われることが無いから溢れてきているのか？

クツ！このままではマズイな…。このままでは西以外の組織にも目をつけられることにもなりかねん。とりあえずは出来合いのマジックアイテム渡して漏れ出る魔力を緩和させるか。急いで木乃香ちゃん用のアイテムを作らないとなあ。

一般人に見えるようにするのは、ぬらりひよんが不審に思うだろうから…。そうだな。一般魔法使いくらいで抑えるように調整して成長とともに緩和、リミッターが外れていくタイプにするか。

これなら成長とともに自然と保有魔力が増えていくように見えるだろう。まあ何はともあれ今はパーティーを楽しむとするかね。えっと、料理は…って明日菜と木乃香ちゃんが俺の膝に乗っているから動けないじゃん…。

カラコロン

誰かが入ってきたようで入り口のベルが鳴った。おかしいなあ？  
入り口には本日貸切の札を出しておいたんだけどな…。

「こんにちわ。こちらに神楽坂・アスナ…君…が…？…‥‥‥ッ?!」  
何故か居るし…。

Side out 葵

麻帆良市レストラン街への道中…。

Side タカミチ

学園区域からレストラン街へ向かって歩いている。途中、ヤンチヤな学園生等がオイタしているところに出くわして、これを補導しながらね。それでも広域指導員も勤めているから。

麻帆良は色々と賑やかだから問題も多いから日に数度の割合で、多い日には二桁の大台で騒ぎが起きることもあるんだ。今日は二度目の遭遇だから少ないほうだね。ここの生徒等は本当に元気だよ。ハハハハ。

「それにしてもアスナ君の歓迎会を開いてくれるなんて、いい友達  
ができたようじゃないか…」

そうなのだ。こうしてレストラン街に向けて歩いているのも転校

初日の昨日、アスナ君が言っていた歓迎会の会場に僕はアスナ君を迎えに行くからだ。

放課後に行われるということだった。今はそれから二時間も経ったから既に日は夕暮れの色に染まり始めている。

「えーと…アスナ君の話したと、この辺りのはずなんだけど…。ん？あそこか？」

あ…れ？でも、あれは…。あの看板：“クレイドル”？葵さんの店と同じ？でも、あの人は京都に居るはず。…同じ名前の別の店、か？

と、とにかく入ってみればわかるか。

カラコロン

扉を開けると喫茶店によくあるカウベルが鳴った。

「こんにちわ。こちらに神楽坂・明日菜…君…が…？…ツ?!」

賑やかな店内に入ると、まずは店長と思われる人がアスナ君と木乃香君を膝に乗せた後姿が見える。2人とも楽しそうにしていることから店長は相当に懐かれているようだ。嬉しそうにケーキを食べているよ。

僕は、その人に声をかけた。そしてこちらに振り向いた店長は…。

「……いらっしやい、タカミチ。でも今日の当店は貸切だからね？」

「…タカミチ？」

「???だれなん？あすなー」

アスナ君と木乃香君が何か言っているが僕は目の前に居るはずの無い人が居ることに驚いていて、それどころじゃない。

「え？は??え???なぜ、貴方がここに居るのですか？貴方は京都に居るはずでは…」

そつだ。葵さんは京都で隠居して喫茶店をしているはず。なぜ、ここ麻帆良にいるのだろうか？おかしい…。麻帆良の監視網に引っ掛からずにいることもそつだが、麻帆良に来たのなら、なぜ僕や学園長に一言連絡しないのだろうか？

わからないことばかりだ…。葵さんは秘密主義なところが多々あったが今回のことは寝耳に水だったから僕も混乱しているようだ。何せ、葵さんが居るということは彼の軍隊が、ここに居るといことなのだから…。

葵さんが無闇に暴れることは無いと思う。だけど、このことが知られたら他の学園所属の魔法使いが過剰に警戒するかもしれない。

ハッ！まさか、葵さんは、そのことに配慮して、こんな隠蔽工作を？下手に混乱と疑惑を撒き散らさないよう、にした…？ダメだ…。わからない…。

「ふむ…。俺がどこに居ようと俺の勝手だと思っただがな。まあいい、ここで話すのもなんだから少し奥に行こうか？」

「は、はい。僕も話したいことが今できましたから、是非……」

それは僕としても助かりますよ。是非とも今回のことについて説明してもらいたいです。

「よし！それじゃ、明日菜、木乃香ちゃん。俺はタカミチと話があるから降りてくれる？」

「……………こくん」

「えー、葵兄さま、行くん？むう、しゃーないなー」

アスナ君は長い沈黙の後に首肯し、木乃香君は文句を言いながらも葵さんの膝から降りた。2人が降りたことで立ち上がった葵さん

「うん、ごめんね。直ぐ済むから。…ハオ、ユエ？」

でも、2人と目線を合わせるためにしゃがむとすぐさま申し訳なさそうに謝罪にした。背後には今も変わらず葵さんを守護するハオさんとユエさん。

「ハッ、この場は吾等にお任せを」

「我が君は、ごゆるりとしてくださいますよう」

「うん、お願いね。それじゃ行こう。こっちだ」

2柱の剣姫に葵さんは後のことを頼んだようだ。僕は葵さんの促した店の奥へと彼の後について行く。

S i d e o u t タカミチ

喫茶店クレイドルの応接室…。

S i d e 葵

ちくせう…。まさか、タカミチが直接迎えに来るなんて思いもしなかった。明日菜には家の者が帰りは送るから保護者の方に伝えておくように言っておいたのになぁ…。なのに…。ちらっ。

「？何か？」

「いや、なんでもない。…ここだ。まあ適当に寛いでくれ。お茶も言っておいたから直ぐに来る」

「ああ、お構いなく。僕はアスナ君を迎えに来ただけですから」

社交辞令ですね？わかります。でも、残念！このまま帰すわけにはいかないのよ。俺のこともバレちゃったからね。そのところを嚴重に口止めしておかないといかんよ。

たくっ、予定ならネギ少年が麻帆良に着任する前後に姿を現そうと考えていたのに…。何で、タカミチがここに迎えに来てんだよ。

コンコン。

「葵ちゃん。お茶を持ってきたのー」

む？もう“確認できたのか？”うちの者達は仕事早くて助かるわあ。

「はいはい。開いているから入っておいで」

「んと、失礼しまーす。はい、タカミチ君、どうぞなの」

「あ、これはどうも」

「…葵ちゃんはこっちなの【…お店の周囲にタカミチ君以外の魔法使いは居ないの…】」

ふむ、居ないとなると今回の接触は本当に偶然だったのか…。タカミチも何とも間の悪いこつて。さて、どうしようかなあ…。よし、下手に動くと発見されるだろうから様子見といこつ。誘い出す罫だったなら笑えないからね。

「ありがと、ファレノ【…そつか。引き続き監視のほうをよろしく…】」

「それじゃ、また何かあったら呼んでほしいの【…アイアイ・サー。私達に任せるの…】」

ファレノが出て行ったので持って来てくれたお茶をいただくかな。ほら、タカミチも飲みなって、きつと美味しいからさ。

「うん。んー、いい香りだ。ファレノも腕上げたなあ。ふう…それでタカミチは何を聞きたいのかな？」

「早速ですね。まず一つ目に聞きたいのは京都に居るはずの葵さんがなぜ麻帆良に居るのが知りたいのですが？」

紅茶の香りを楽しみながらタカミチに話しを促してみたら“一つ目”の質問をしてきた。この子つては幾つ質問する気なんだろうね？とりあえず適当に話しを濁しつつ答えていくことにしますかね。

「ふむ、まあいい。“なぜ居るか？”という質問か？例によってそれは禁則事項だ。だが…麻帆良に危害を加えないことを確認しよう」  
「…そうですか。では目的は何でしょう？」

こいつ…麻帆良に危害を加えないって言っているのに、こちらの情報を引き出すために探つてきやがる…。まあ俺自身家族以外は秘密主義で通してきたからな。そこが疑わしくしているのかもしれない。

だからって素直に教えてやる気はまったく無いがな！！正直言って家族と俺が気に入った奴以外はどうでもいいわ。どうなるうと知ったことじゃありません。

「バカもん。俺が秘密主義なのは知っているだろうが。…あー、わかった、わかった、そう睨むな。…仕方ないな、もう」

なんだよー。タカミチつたら睨むことないじゃないかよう…。だいたい秘密主義のどこが悪い？ただでさえ俺は不老っただけで昔、追われたこともあるのだから慎重になつたつていいじゃん。はあ…。

「麻帆良への出店が目的の一つ。こっちに来るオマケで“ある人物

”の護衛（？）というか見守るように頼まれている

「う、護衛しながら出店？」

「逆だ。寧ろ出店しながら護衛するの。護衛というのも、ただのオマケで大半は見守るだけだけど」

「…因みに護衛対象は？」

タカミチよ…。それは、無いわあ…。いくらなんでも、無いわあ。俺が何のために秘密裏に護衛対象を見守ることにしていると思ってるんだよ。護衛対象の私生活を壊さないように、且つ近くで見守るためだろうが。

誰だつていきなり私生活を破壊されるなんて我慢できるはずがない。だから俺は遠距離から、近距離から十重二十重の守護を張り巡らせているのよ。俺は友の願いには最大限の配慮をします。…俺と家族に不都合が無い限りだけどね。

なのに、タカミチは俺に最大限配慮すべき護衛対象の名を明かせと言うのか？

「タカミチ…それを俺が言おうと思うか？」

「……………いえ、聞いておいてなんですが、まったく思いませんね」

「だろ？それで他に聞きたいことは？もう一、二個くらいなら答えちゃろう」

まあ俺も答えられないことが多いから少しくらいは答えてもいい

かな？と思わないでもないわけなんですわ。モノによるけど、ね。ぶつちやけ答えなくてもいいんだけど…。それに、このままだとタカミチも納得してくれないからな。

さあ、さつさと質問してみ？

「そう、ですねえ…。なぜ、麻帆良の学園長…近衛・近右衛門に葵さんが居ることを告げないのですか？そうすれば護衛もやり易くなるのでは？」

「まあ告げないのは喫茶店をメインにしているから秘密裏にしたかった。隠密行動のほうが楽だからってのもあるな。それと護衛じゃなくて見守るだけだからな？間違えるなよ？」

麻帆良のぬらりひよんに俺の存在をバラせと言うのか？それは勘弁だわあー。あの学園長に知られたら絶対、厄介事に巻き込まれそうなんだもの。マジで無理。

「なるほど…。それで本当のところは？」

「ぬらりひよんに俺の存在がバレたら無理難題を吹っ掛けてきそうだから面倒くさい」

あつ、しまった…。話の流れで本音が洩れてしまった。反省、反省…。でもこれが俺の偽らない気持ちだけどな！誰が好き好んで他人の苦勞を背負うものかよ。…。美人さんなら考えるけど、ね。

「ぬらっ？ん ンッ！……学園長は良識ある方ですから大丈夫だと思つのですが？」

タカミチさあ…いま“ぬらっ”って言いかけたよね？自身でも内心では疑っていたのかね？もしかして？と考えたのかね？んー？

…なんてことは俺の心の中で聞くだけで声には出さないけどな。それはともかく良識のある、ねえ？世間的には良識ある人物に見えるんだろうけど俺は本当なら係わり合いたくない人種かなあ。

なんと言っか…そう、本人にその気が無くても結果的に権力に物を言わせて掌の上で弄びそうさあ。俺も人のことは言えないけどね。

「個人の良識はあると思う…けど、信用できない。俺の中のゴーストが囁くんだ…。“こいつには気を付ける。天邪鬼だから”ってな」

「……………本当のところは？」

「じじいのためになんか働きたくないでござる！残念ッ！」

「……………（ピクピク##）」

「……………あっ、つい本音が」

シイイイツトツツ！！またもや、やってしまった！！学園長ツツのことを思考内で考察、評価していたらポロツと本音がでてしまった…。さっきも洩れたばかりなのに…。

「葵さん…今回のことは学園長に報告しますが…よろしいですね？」

あっ、やっべー！？タカミチがプルプルと肩を震えながら、そして米神に“#”マークが！？その上、声まで重低音なんですけどーッ

！？だつて！仕方ないじゃん！！俺の本音なんだから！！だいたい、  
凄んでも無駄だからな！？」

「バカもんだめに決まっているだろうが。タカミチだから話したんだからな？……他の奴だつたら人知れず消していた」

「なツ！？……そんな、まさか……冗談、ですよな？」

そんな、つまらないことで冗談を言うわけがないじゃないか……。  
必要なら消すだけだ。……もっとも今の時代、殺してしまうのは本当に最後の手段なんだけど。

「俺は家族や約束のためならできる限りのことをやる。そして障害になるなら、それをあらゆる手段を用いて排除する。……冗談なわけがないだろ？」

「……(サーー……)」

おー、おー。タカミチ、どうしたんだ？カタカタ、ぶるぶる震えて……。寒いのか？心無いし顔色も悪い気が……？

「おいおい。なに、顔色を真っ青にしているんだよ。タカミチが話さなければいいだけのことだろう？大丈夫だよ」

「……仮に……そう、仮に間違つて話してしまった、ら？」

なんだあ？Ifの話しか？……んー……？

「そつだなあ……。タカミチは自分が傷付くより他者が傷付くほうが我慢ならぬだろうから……。うん、こつというのはどうだろう？」

俺は“ If ”の話をしましたよ？どんな話しかを簡単に言うと、ここ麻帆良を火の海にしてやる、ってことだ。

より具体的に言うと、まず麻帆良市全域を広域結界で囲い誰一人逃げられないようにしてから俺の全戦力を用いて殲滅をはじめの  
だ。

機動戦艦の主砲の砲撃で大地を抉り、無人機動兵器による広域爆撃で焼け野原にする。各種人型機動兵器の機動攻撃。精魔奇兵の対人殲滅。精霊の広域魔法重爆撃攻撃。悪魔の特殊戦術戦闘。 e t c , e t c …。

麻帆良は一面焦土となること請け合いよ。あつ？俺がやらないと思っているだろ？確かに好き好んでそんなことはしないけど必要ならやるよ。

昔ちよこつとやりかけたんよね。敵軍団の2割ほど殲滅したら降服してきたんさ。まあそんな昔のことはいいな…。

「……それでタカミチ、どうする？」

「話しません。話せるわけがない」

タカミチが賢明な判断をしてくれて俺も嬉しいよ、うん。余計な手間を省くことができるし、知人を消すことをしなくてもいいんだからね。死体って処理に意外と手間かかるんだよ。

「うん。脅したみたい…いや、これは脅しか？とにかく、ごめんね？数年したら、こつちから学園長には挨拶に行くから今は見逃して

よ

「はあ…わかりましたよ。でも、葵さんが偶然、学園長達に接触した場合は…」

「その時は、仕方ないから諦めようかな。タカミチの気にすることじゃないよ」

今回のタカミチの例があるから、その辺りは仕方ないと考えているさ。でも、今回のことがあったから学園長は絶対に遭遇しないように手配する！木乃香ちゃんのことがあるから難しいけど…なんとななるっしょ！

木乃香ちゃんが連れて来なければ……ね？一応、学園長も仕事が多くて忙しいはずだから滅多なことではここにはこないと思うけど……。大丈夫だよ、な？

「そう、ですか」

なんか、タカミチが疑いの籠もった半眼ジト目にて見てくるんですけど…。ナニ、コレ？俺ってば疑われているのか？

む？話していたら結構、時間がたっていたようだ…。

「さてと！そろそろいい時間だ。明日菜のこと迎えに来たんだろ？」

「あつ、はい。そうでした。葵さんのことで動揺していたようです。すっかり忘れていました」

「おいおい。そんなことでどうするんだ？明日菜のこと…託された

んだろ？」

「……はい。そうですね」

しくじった…。今の発言はタカミチにはタブーだったか…。なんか一気に“ズーン…”って感じで落ち込んでいます、けど？影なんか背負っちゃってるよ…。忘れるとは言わないけど前を向けよ。ガトウが浮かばれないだろ？

「ガトウは…いや、なんでもない。ほら、行くぞ」

「はい…」

まあ俺も落ち込ませた手前、慰めようと考えて何か言おうとしたけど、ここは何も言わないのがいいと考え直したんだ。いい大人、それも男がメソメソしていても格好悪いだけだし。同じ男としては見て見ぬ振りするのもアリだろ？

### 移動中

とりあえず大まかな話しが済んだからタカミチは当初の目的通りに明日菜のお迎え。俺は歓迎会のお開きにするにあたって他の子を寮に送ってもらおうように指示したりするために会場となる店内へ戻った。

そう、それで戻ってきたんだが…。

「むうううううう！」

「…ッ！…ッ！…ッ！」

明日菜と木乃香ちゃんがプクーツと頬を膨らませて睨み合っていて、他の子供はその周りで囁き立てるようにしてたんだ…。流石に俺でも状況が読めませんって…。というわけで、この場を任せた八才達に説明を求めた。

「ナニ、コレ？」

「ハッ…。我が君らが奥へ行った後のことです。タカミチが明日菜を迎えに来たことを切欠にして突然、木乃香が、その…当家に宿泊したいと申しまして」

「明日菜は、なぜかそれに対抗するように自分も泊まると言い出しまして…。こついうことです」

「ごめん…ハオ、ユエ。俺には原因がわかりません。とにかく木乃香ちゃんのお泊り宣言に明日菜が感化された、んだよな？そういうことだよな？」

あれ？じゃあ何で周囲も盛り上がっているのかね？木乃香ちゃんと明日菜を囲んでお祭り騒ぎ状態なんだけど…。

「はあ？…それじゃ2人の周りの子供達は？…まさか…」

「…ハ、そのまさか、です。2人に感化されたようで「今日はお泊り会だーッ！！」と、お祭り騒ぎに…になりました」

オウ、シット！この子達って本当に小学校低学年か？行動力がハ  
ンパ無いんだよ…。いや、これは幼いからこそその行動力、か？とに  
かく素早い…。とりあえず明日菜に関しては後見人のタカミチに聞  
くとするか…。

「そう…。タカミチ、どうしよう？部屋数はあるから家はいいんだ  
けど」

「ハハ、ハハハ…。お願い、できますか？学園長や寮のほうへの連  
絡は僕のほうから上手く話しておきますから」

そうだった…。この子達が家に泊まるとしたら確実に学園長の耳  
に入るかもしれない。それではこれまでしてきた色々な苦労が全て  
水の泡となるかもしれない。それは勘弁だわ…。なんと言うか…萎  
えるよね？色々と、さ？

そう考えるとタカミチはナイス判断だね！俺の苦労というか手間  
を排除してくれるんだからさ！

「まあ、了解だ。……あー、2人とも？」

「葵兄さま！今日はお泊りさせて！」「…葵、わたし、泊まる…！」

そんな2人して言わないでくださいな…。最大128人までなら  
聞き取ることはできるけど脳内処理が面倒くさいのよ。因みに前に  
も、ちよろつと言ったけど俺の脳はナノマシンとマルチタスクで思  
考は強化・補助されておりませんが、ナニカ？

「あー、あー、みなまで言わんでも話しは聞いた！…他の子も泊ま

「ってお泊り会なんだろう？」

「そつや！」「…そつ」

「……はい！よろしくお願いします！」「……」

皆、無駄に元気だねえ……。そのノリにお兄さんは歳のせいも着いて行けないかもしれないよ。えーっと……人数は、ひの、ふの、みの……十数人程か。部屋を用意して、あと細かいところで洗面用具とかお布団とかを用意しておかないと……。

「……お泊りについては了承した。寮への連絡もタカミチが手配した。それと明日も学校があるんだから今日は早く寝るんだぞ？いいね？」

「……はい！」「……」

返事だけは素直だね……。この子達って絶対に体力が続く限り夜通し騒ぎそうな気がする。んー……。でも、大丈夫、かな？何だかんだで歓迎会で騒ぎっぱなしだったから疲れているはずだから直ぐに寝るか。でも……。

「不安だ……。それじゃ、タカミチ、連絡のほうはよろしくね？」

「はい、こっちは任せてください。ですので……」

「わかってるって。……（ボソツ）この店は下手な要塞よりも堅牢だ。安全は保障する」

この子達を預かる限り、最大限の安全を保障するのは当然だよな。

魔法騎士団一個師団が来ても軽く捻ってみせるぜい。冗談抜きでね。

「…よろしく願います」

タカミチは、そう言つと店を後にした。

ごめんね、タカミチ。折角、迎えに来たのに…なんか、無駄足踏ませたみたいになって…。ん？俺のせいじゃないか…。俺が謝るところとなくね？それに明日菜や木乃香ちゃん達が泊まるのは予定外のことだったしな。

…さて、と俺も今日は風呂入って、もう寝よう…ふわあああ、ふう…。

翌日、朝、起きると俺の布団の中に木乃香ちゃんと明日菜が潜り込んでいたのは余談だったら余談だ…。どおりで布団内が温ぬくいと思つたわ…。

S i d e o u t 葵

第三十三話「木乃香と明日菜とお泊り会と」(後書き)

タイトルと内容、関係無え…。萌えも無いし…。

萌えって何だろう？作者はわからなくなりました…。

葵も今回は、なんだかお父さん化(？)してきているし。

とにかく続きを書いて修正しよう…。色々、ね。

では、また！チャーオッ！

第三十四話「侵入者と待ち伏せと大迎撃と」前編（前書き）

ムシャクシャしてやりました。はあ…。

### 第三十四話「侵入者と待ち伏せと大迎撃と」前編

麻帆良市某所近郊…。

Side 葵

木乃香ちゃんも順調に進級して既に今年の春から小学六年生。そんな時だ。うちの情報部の諜報一課が、とある情報を察知したのが今回の始まりだった。

情報によると関西呪術協会内にある強硬派という派閥の一部が暴走。絶大な魔力と近衛家の正当な血統を持つ木乃香ちゃんを自分達の旗印にして西洋魔法使いを初め他の魔法使い達を駆逐して、自分達が魔法世界の頂点に君臨しようと画策している、らしい。

俺は、ここで疑問に思った。百にも満たない構成員で、どうやって魔法世界の頂点に立とうというのだろうか？とな…。

もしかして…木乃香ちゃんの魔力を元に式神や使い魔を大量召還して補おうとでも言うつもりか？これなら俺も似たようなことをしているから理解はできる、が…果たして強硬派の連中に大量の召還魔達を制御できるのか疑問だ。

俺の場合は精霊や悪魔、皆の好意から精霊・悪魔契約という最上級の契約方法をしているから精神的、魔力的な負担なんかを最小限（殆どは免除）されているから問題無い。

更に言うならば彼女達は全員が俺の魔力で強化、補正されているから、この世界の輪から既に外れている存在だ。彼女達は俺という世界に属している限り無敵とまでは言わないが一つ一つが強力な固体として存在している。

話が逸れたな…。

話を戻すが、彼ら（彼女ら）は違う、と思う。中には個人で特殊な契約している者も居るかもしれないが普通に考えればそれは、まず有り得ない。俺が例外なんだってミリーやオリビエ達が言っていた。

まあ俺の場合は例にならないから強硬派だけで見てみると…不安だ。絶対にどこかで制御から外れると思う。その果てに召還魔の暴走…。イカン…眩暈がしてくる。自分の力量を超えて力を振るいたがる連中ほど始末に終えないものはないね。

情報取得から3日後、麻帆良市近郊の森林…。

なんてことを考えながら俺達は一課が集めた情報を元に誘拐の実行犯が通る場所である、ここで網を張って待機中なんだわ。

時刻は午前0時近くの深夜だ。周囲は樹木の生い茂った森で視界は夜というのもあり最悪。しかし、目の前には拓けた場所があり俺達はその手前の茂みに身を潜ませて待ち構えている。待っている間に耳を澄ますと近くから川の流れている音もするな。

『我が主。動体センサーにおよそ40個の反応がある。目標の先頭部は数分で、こちらと接敵するぞ』

ラミエルさんが敵と思われる生体の動体反応をセンサーでキャッチしたようだ。コミュニケに送られてくるレーダーの情報にも反応があり、だいたい第一陣と第二陣の二つに分かれてこちらへ進軍中だ。

3Dマップで構築された映像を見る限り全員が陰陽師で神鳴流の剣士は1人も居ないようだ。

しかし、陰陽師が40人前後か…。えーと、陰陽師1人につき前鬼、後鬼の式神が1体ずつの計2体。それだけじゃなくて、その場限りの召還術には注意だ。油断すると2倍、3倍の戦力に膨れ上がるからな。

東洋の召還術は西洋とは違って召還コストが段違いで、維持する魔力の燃費もいいから、厄介だよなあ。久しぶりにゴーレム研究でもするかな…。案外、楽しいかもしれないし。

いやいやいや。今は敵生体の迎撃と排除が先決だな、うん。

「来るか…。ハオとユエは、いつも通り俺の護衛お願いね？」

「承知しております。我が君は心安らかにご安心のほどを」

「元より、この身は我が君をお守りするためにありますれば」

うん。いつも通り、とつても頼もしいです。2人に守られていると安心だな。多少の無茶をしても大丈夫だしね。なんと言うかね？ハオもユエも付き合い長いからねえ。俺のしたいことを理解してくれるんよ。

「ありがと、任せるね。アイリ、ファレノ、リチラは三課の3チーム（4人編成で計12名）をそれぞれが率いて半包囲して逃走を阻止、余裕があれば各個撃破で、よろしく」

親衛隊3人娘にも今回は参加してもらおうのさ。久しぶりの実戦だから他の皆も張り切っているよ。今日も皆は元気です！

ところどころから「目標10人切り！」に始まり「私は火炙りかなあ」とか「やっぱり凍死が一番だよねえ」、「いやいや、感電死なども…」などが聞こえてきたような気がしたけど…気のせいだ！若しくは気の迷いか、幻聴だ！

「任務、了解しました。指令閣下のご期待に応えてご覧に入れます」

「了解、任せるの。捕捉！包囲！殲滅なの！」

「承りましたわ。ふふふ…（ボソツ）逃がしませんわ」

…ア、アイリだけがマトモだ。それに比べてファレノは殲滅する気満々だし、リチラは何があったのか1人も逃がす気が無いようだ。……2人ってこんなに戦闘狂だったかな？

戦闘が無かったことで禁断症状が出たのか？うーん、実戦なんて、ここ数年無かったから気分が高揚しているの、かな……。はあ……。これからはたまたま実戦訓練も取り入れようかな？

どっかの紛争地帯に観光気分ですつてみたり、とか。それでお土産はカラシニコフが……。なんて。あー……。でも中古品は使用に関して信用性が無いんだよなあ……。まあ新品は新品で引き金が硬くて使い難いんだけどね。

おっと、実戦訓練の計画は、また今度考えるところでしょう。今は配置に着くように指示を出さないとな。

「皆も気を付けて。油断なんかしたらダメだからね？」

「……………ハイツ、頑張りますッ……………」

さっきまでの不穏なセリフを撒き散らしていたとは思えないほどキツチリとした敬礼と返事が聞こえてきた。……。ところでなぜに俺のことを、頬を上気させて見てくるのかね？恥ずかしいじゃないか……。もしかして風邪か？

『戦闘モードへ移行。Dフィールドの作動を確認……。98%で安定。』

全兵装……。オールグリーン。戦闘モードへの移行完了……。』

フィールド展開は安定しているな。出力の制御はラミエルさんが一括しているから任せておいて安心だ。

それにしても……“全兵装”だあ？少し前は『各種荷電粒子砲スタンバイ』だったのに……。今回はアレか？ミサイルも出す気なのかね

？ナノマシン散布とかやめてほしいんだけどなあ。

やらせねええよお！？

被害に遭った地形を元に戻すのメンドイんだよ。地系の魔法や錬金術でパツとやれることはやれるんだけど残留魔力とかを感知されると厄介じゃない？アレってある意味で個人認識票みたいなものだからさ。

まあそんなわけで割と隠蔽工作は重要だったりする。残しておくとな変な騒ぎになりかねんからさ。俺達のことバレそうなら証拠は極力残さないことにしているのよ。

む？どうやら敵さんが近いようだ…。

『先頭部との接敵まで30秒…20…15…10…5秒前…4…3…2…1…接敵』エンゲージ

キターー(。(。ーッ！！

バカやってる場合じゃなかった…。待っている間に俺も周りの雰囲気に変化されていたようだ。いつもよりも若干、気分が高揚して好戦的になっている気がする…のかな？気分的なものだからわかり難い。

まあ何はともあれ行動を起こさねば…。

「アクション行動開始ッ！！」

ラッシュ突撃！ラッシュ突撃！！ラッシュ突撃！！！！奇襲攻撃だから何よりも速さと早さ。

そして初撃の派手さインパクトと破壊力が必要だ。広域に結界も張ってあるから俺が死なない限り、もう誰も逃げられない…。くつくつくつ！

「親衛隊が長、アイリス…参る！！」

「あつ、アイリちゃん、ズルイの！私も行くの！！」

「全てを凍てつかせて、儂く散らして魅せますわ」

「私達も続くぞ！遅れるな！！」

「くくくくオーツ！！くくくく」

号令とともに飛び出していったのはアイリ達3人と、それに続く三課のメンバー12人。

アイリが敵陣の中央を剛力と突破力で引き裂き、ファレノは右翼から進撃した。すると撃破した端から派手に火の手が上がる。リチラが居る左翼は静かなものだが、こちらは右翼とは逆に氷の彫像や氷原ができている。

何、ココ？ここだけ地獄ができあがってきているんだけど…。暑いのか寒いのかハッキリしてほしいわ…。俺も歳だから身体に…堪えないけど、見ていて辛いものがあるよ。

当然、奇襲を受けた敵さんは堪ったものじゃない。攻撃を受けて呆けている間に被害は甚大なものになっていった。

「なっ！何者だ！？貴さッ！ガッ！！」

「クツ！貴様らーッ！！」

「紅林ッ！死ぬな！俺達の野望はまだッ！グハッ！！」

「誰か！後方に知らせろ！敵と接触！迂回されたし、となー！！」

「クソッ！！俺の足が…！！クソッ！クソッ！クソッ！クソッ！クソッ！！  
クソッ！！！！」

敵の第一陣は俺達の奇襲を受けて浮き足立ってマトモな反撃ができずに散発的な攻撃しかできないでいるようだ。迎撃には疎らに過ぎるからね。

それで壊滅まで、もう少しかな、って思った時に敵陣も立て直ってきたんだ。既に3分の1は撃破されているのに退こうともしないんだから敵さんの指揮官は頑固者だ。

アイツが指揮官、か？少し先に見える陰陽師然とした格好の30代後半の男が部隊の混乱を治めつつある。顔だけを見ればなかなかダンディさんだね。男に興味は無いけど、素直に格好いいと思える。それに…。

「静まれッ！後ろの奴は式神を出して他の者を援護するんだ！落ち着いて反撃しろ！！体制を…陣形を整えるんだ！！早くッ！！」

へえ…ワンマンアーミーが目立つ魔法使いにしては珍しくも集団戦を主眼に置いたかのような指揮の執り方だ。新世界ならともかく旧世界で、それができるところを見るとそれなりに実力者なのかも

しない。

うーん、とりあえず、あの指揮官を押さえるとしますか。さっき、第二陣に伝令が走ったようなことも聞こえてきたし時間は、かけられない。

ゆつくり堂々と指揮官に向かって歩いて行く。途中で襲い掛かってくる敵の武神や呪符の炎弾が俺目掛けて飛んできたりするけど気にしない。だって八才とユエが襲撃の尽くを排除してくれるのだから。

それで向こうも近づいてくる俺に気づいたようで凝視してくる。まあ気付かれているなら話しかけてもいいかなって戯れだけど考えちゃったんだ。

「残念だけど後が支えているんだ。お前らはここで散ってくれ」

「邪魔はさせんツ！！んっ！？な…カハツ！！…水、島…すま…」

なんて話しかけたら俺から指揮官を守るように割って入ってきた男が指揮官の水島さん(?)を守るようにして俺に突撃してきたんだ。指揮官以外に視界に入らない。俺の目的は敵の指揮官だけだ。

そして俺が相手にしていない男はユエの黒刃の一刀の下で切り捨てられた。ふうむ…。こんな外道な所業に参加する割りに仲間を守ろうとするなんて…。

「桐…原ツ！！…貴様、どこから！？いや！それよりも我等のこと

をどつやつて知った!？」

桐原?今、倒れた男は桐原と言うのか?...どうでもいいか。しかし、この指揮官の水島さんとやらも桐原くんが倒れたことで語気を荒くして動揺しているみたいだ。親しかったのか?

第一陣の指揮官ともあるうものがそんなではイカンですよ。感情的になるなどは言わんけど動揺するのは抑えないとダメだって...とは言うものの俺も他人のことは言えないかな。身内が被害に遭ったらおもつくそ動揺しそっだし。

とりあえず今は目の前の男、水島とお話しかな。

「死ぬにはいい日だ...。そして今宵限りのお前に、それを知ってどうする?」

「ッ!!ほざけッ!この俺がそう易々と負けるものか!!オンッ!!」

キシャーッ!

オオオオオオオンッ!!

水島は両手で印を結ぶと自分の前鬼と後鬼を呼び出した。一体は細い体に大きな爪と牙を持つ鬼タイプ。多分、こちらは前鬼。もう一体の後鬼と思われるほうは大きな体躯と頑丈そうな皮膚を持った大鬼タイプだ。

「式神を2体、か...。なかなか早い術式展開じゃないか。正直、驚いた」

うん、驚いた。術式の構成の早さがハンパなかった。勿体無いなあ…。こんな高い実力を持った人が、こんな暴拳に出なくちゃいけないほど追い詰められているなんてなあ。

…いや、違う？こいつの目…僅かだが濁った野心が見て取れる。濁りきっていないところから唆されて日が浅いな。成功と引き換えに、この男は何かを得る約定を結んだのかもしれない。

「フンツ！今更、後悔しても遅い！殺された仲間のためにも貴様らを排除し、我等の崇高なる目的のために御旗となる木乃香お嬢様を保護する…！」

排除？崇高…だと？この…下衆ツ！！

「崇高？保護？…：戯言を抜かすな！下衆がツツ！！！」

声に魔力を乗せて叩き付けた。なのに目の前の水島は片膝を地に着くも数秒で立ち上がってきた。それだけではなく怒鳴り返してきた。胆力も、有りか…。本当に勿体無いなあ。

これで、外道で下衆じゃなければなあ。いや、外道でも誇りさえ持っているなら友として見てもいいんだけど…こいつは下衆だ。下衆はダメだ。信頼どころか信用もできない。昔なら即座に存在ごと消していた。面倒にならずに済むし、ね…。

「ツ…何、だと！？貴ツ様…ツ！！！」

「黙れツ！！己が欲望のために子供を利用しようとする。そのど

「これが崇高なものか！！外道は外道らしく…いや！下衆らしく！地獄に墮ちるがよいわ！！」

「き、さまッ…！言わせておけばーッ…！」

クシャー…ーッ…！！

オロロオオオオオオンッ…！！

俺の発言が我慢ならんようです。怒りに任せて式神を嚇けてきましたな。だが…甘い…！！

「ハオツ！ユエツ！」

「ハッ！」

そっちに式神が居るように、こっちには俺が信頼し分身とも言える愛刀達が在る。その守りは堅牢鉄壁だ。まず俺までは通らない。逆進撃すらして障害を排除する。まあ仮に2人の守りを抜いたとしても今はラミエルさんも居るから安心だ。

そんで当の2人はというと…。

「白刃一閃ッ…！」

シャッ…？ア…ーッ…！！？！

元気に…。

白刃が前鬼を斬りつけた。その刃の一閃は前鬼の左腕を斬り捨てた。首を狙ったのに外れたことにイラッと、きたようだ。オマケと

いっように蹴撃で一撃して蹴り飛ばした。

「黒刃一閃ッ!!!」

オロンッ!?オロロオオオッ…!!!

生き生きと…。

ユエも黒刃を一閃。丈夫な皮膚なものもあり斬り捨てるまではないが後鬼の左肩から右の腰の辺りまで大きく斬り裂けた。こちらも蹴り飛ばした。その先はハオの蹴り飛ばした前鬼が居る。

「陽月双閃ッッ!!!」

シャシャシャシャーッ!!!…ッ!!!

オロロオオオッ!!!…ッ!!!

式神を屠っていました…。

2体の式神が重なった瞬間、ハオとユエは打ち合わせてもいないのに、まるで合わせたかのように攻撃の動きを2人で斬撃をクロスさせて式神の身体を四つに分割。元の世界に送還した。

式神が分解され消える瞬間、キラキラと構成物質が解けて舞い上がる。それを見てハオとユエは…。

「昇華され、今度は良き主に仕えよ…」

「今は故郷へ帰れ…。これで式神は送還された。覚悟せよ…」

愚者な召還主に最期まで仕えた式神を思つて2人は僅かに黙禱を捧げると敵たる水島に射殺さんばかりの鋭い視線を叩き付けた。

「クツ！…しかし、まだだツ！！まだやられんツツ！！オンツ！キリキリ・ヴァジヤラ・ウーンハツタツ！！」

しかし、まだ余力があるようだ。連続で印を素早く結ぶと鬼神達を次々と呼び出し始めた。

「うーん？」「あゝあゝ…」「久しぶりの現界じゃ…」「やれやれ…」「ほほほ…」「……」

「へえ…。まだ鬼神としては若い部類だけど、それでも十数体も召還するとは、なかなか…」

うん。パツと見ただけど百も生きていないようだ。鬼としては、まだまだ若い。やっぱり、二、三百年ほど戦い、生き残ったら一人前と言えるだろうな。

あつ、狐女も少ないけど居るねえ。…おう！？何だ、あの我儂ボデイは！？スレンダーが多い狐女には珍しく“ないすばでえ”だ！  
！偶然呼び出した割りには、いいのを引き当てたなあ…。

ぐつじょぶ！水島！なにげに眼福です！！下衆なのに、いい仕事したね！

「ふーッ、ふーッ…。はああ…。ど、どう、だ…ッ！これな、らッ…」

「あ？ああ、お疲れさん。お前は頑張った。だけど、それでも結果は変わらないよ」

イカンッ。つい狐女を凝視してしまった…。狐女のほうも視線に気付いて手なんか振ってくるもんだから戦場なのに少し和んでしまった。あああ、狐女のほうは近くの仲間にかかわれている…。か  
ーいーなー

「なん…だ、とッ！？それは…それは、どういうことだッ！！」

「こづいうこと…ラミエル、アンに援軍要請。遠隔転移、開始」

『Roger, My Master. 要請の受理を…今、確認した。転移まで15秒…10…5秒前…4…3…2…1…転移開始。…顕<sup>マテリ</sup>アラ<sup>イス</sup>現<sup>ス</sup>します』

お前の間違いは俺の戦力を見誤ったことだ。ここに居るのが全てではないのだよ。ステルス航行で姿を隠してはいるが上空には機動戦艦アングレカムがあり第一種戦闘待機で直ぐさま出撃要請に応えられるようになってる。

あとは座標を特定されないように遠隔転移して出撃。そして無人<sup>カ</sup>機動兵器などは艦内で順次、生産され補充されることになっている。お蔭で戦力には事欠きませんな。もちろん一度には呼ばないけどね。

『第四機甲中隊12名！および無人<sup>カ</sup>機動兵器256機！閣下の要請により馳せ参じました！』

「く苦勞様！それじゃ早速だけど総員配置について！」

『了解ッ！！』

人型機動兵器イキシア？のスピーカーから凜々しいけど若い女の子の声が聞こえた。

機体装備は対小型種兵装の甲種兵装だ。内容は魔導式光学砲が1門。27式精霊鋼短刀が2、37式精霊鋼刀が2。両肩に二連装56mmチエーンガンと二連装ガトリングレーザー砲をそれぞれ装備している。

要するにエネルギー弾、実態弾を問わず敵の陣地にバラ撒くことのみを考えた甲種兵装だ。下手な鉄砲数撃ちや当たるを体現したような兵装なんよ。その分、制圧力は折り紙付きなんだけどね。

「なん、だ？こ、れは…。何なんだ！これはッ！？機械…？貴様に魔法使いとしての誇りは無いのかッ！？」

「くつくつくつ！お前は根本的に勘違いしている。俺はただの魔法使いではない。厳密に言えば錬金術師だ。故に魔法と科学の融合こそが俺の真骨頂よ！」

魔法だけでは対魔法装備で弱体化されるかもしれない。機械兵器だけではAIの判断が追いつかなかつたり最悪、衝撃で内部回路がショートしたりするかもしれない。

全ては“If”の話だが…ならば、その2つを合わせて互いの弱点を補完し合い、逆に長所を取り入れて強化したならばどうなるか

？答えは簡単…進化だ。機械技術と魔法技術の融合による独自の進化。

弱点が補われて強化されるんだ。自分でやっておいて何だけど興味<sup>ツ</sup>が尽きないよ。楽しい…楽しいねえ

「　　ツ！！貴様ツ…！！」

「だいたいさあ？子供攫つて天下を取ろうとする外道が今更この程度<sup>ツ</sup>のことに驚いたり怒ったりするなよ。…はあ、これだから誇り無き外道、あつ、違つた、ただの下衆は始末に悪い」

いい加減、自分が下衆であることを認める。自分に誇りがあるなんて幻想を見てんじゃねえ。誇りとは自分の行いの後に着いて来るものだ。今のお前の後ろに誇りがあると思うのか？

「お、のれ…ツ！言わせて、おけばツ…！！」

「いい加減、黙れよ、小僧…。俺がどのようにに戦おうとお前には関係無いだろつが」

粹がるな…。現状を見る。最早、お前達がここの防衛を突破することは不可能。第二陣も俺の援軍の要請と同時に無人機動兵器<sup>カブトムシ</sup>が包围して逃げ道は無い。…まあ最も結界を張つてあるから元から逃げ道なんて無いんだが、ね。

「なつ！俺が小僧、だとツ！？貴様のような若造、に…ツ！？そうか、思い出したぞ！貴様、京都の本家<sup>ツ</sup>に出入りしていた近衛詠春の友人<sup>ツ</sup>だったな？名前は九重、だったか。なぜ、ここ（麻帆良）に居る！？詠春の回し者か？！」

ほう…俺のことを知っているのか。これは生かしておく理由がなくなつたな…。今、敵に俺達の情報を渡すわけにはいかない。それは得策じゃない。

「…残念だ。本当なら生かして詠春に引き渡す予定だったが、どうやら、それは無理らしい」

「戯言をッ!!」

本当に、残念だよ、水島…。お前は下衆だったが東洋魔法技術に關してはいい腕を持っていた。その才能と努力を今ここで潰さないといけないんだから。

「総員戦闘準備!最早、手加減などいらぬ!殲滅あるのみだ!!」

「『『『『『了解ッ!』『』『』『アイ・サーッ!』『』『』』』』」

万が一のこともあるかもしれない。ここからは加減は無しだ。全力で殲滅する…!

「鬼どもよッ!奴等を八つ裂きにしろッ!!」

「なんや、やる気出んわ…」「…まあ呼ばれたからには、しゃーないな」「…」「誰ぞ、代わってくれんか?」「ハハハ…」「まあ悪く思わんといてや…」「あーあ…メンドイわあ」

えー…。人が折角、覚悟を決めたのに敵さんが召還した鬼さん達は、なんと言うか…。ヤル気無さげじゃね？ストリートに、やる気無いとか、メンドイとか言っている鬼さんも居るんですけど…。

「……………何と言うか、士気低いなあ」

「う、ううつるさいッ！おい！この愚図ども！早く奴等を殺すんだッ！！」

「……………## #ッ！」「……………」

俺が小声で言ったことに水島は過剰に反応して鬼達を罵倒し始めた。まあ気持ちはわからなくもない。流石に罵倒はしないけど召還に応えたからには仕事は全うしてほしいって考えるよ。

でね？水島に罵倒された鬼さん達んだけど…ものっそいきれています…。俺もちょっと引くぐらいの怒気を感じる。相手が召還主だから襲ってないけど、それが無かったら…こわっ！？

おおー…。さっきのないすばでえな狐女も視線で殺せたらなんていうほどの怒気を放っているよ…。…仮面の下は知らないけど雰囲気と俺の勘では美人だと思う。美人さんの怒った顔は怖いんだよね…。

「はあ…使えない召還主を持つと使い魔や式神は苦勞するよねえ…」

「……………まったくやッ！」「……………」

「き、貴様ら… #ッ！！」

「この鬼さん達…ものすごいノリがいいです！あつ、狐女もノツてきたよ？こいつ等いいなあ。上手い酒が飲めそうな予感がする。今回の後でピンポイントに召還してみようかな。宴会芸で狐女の舞を見てみたいかも。」

「ふう…今回は呼ばれた手前、しゃーないから従ごうたるが、こんなは二度とごめんじゃ」

「うわあ…、なんだかリーダー格っぽい鬼さんがタメ息つきながら妥協してやってるよ。優しいし大人だなあ。まだ若いのに譲る精神を持っているんだからさ。」

「うるさいツ！貴様らは呼び出した俺に黙って従えばよいのだ！」

「あーあ…。逆ギレしているよ…。指揮官ともなると色々ストレスが溜まるものなんだろうけど逆ギレはイカンよ。それじゃ部下や仲間を示しがつかないじゃないか。」

「本当に残念だ。マジもんで下衆の類だったのか…」

「だま、れツ！殺して…やるツ！」

「あつ！？それはダウトだわあー…。」

「ほう？吾らの我が君に対して“殺す”だと…？」

「ほざいたな？人間…。その罪、万死に値する…」

「ギンツ！！」

ギンッ！！

すつつつつつごい怒気だなあ…。当てられてない俺も背筋がゾク  
つて来たじゃないか。おおー…2人の目がなんだかターミネーター  
ばりに妖しく光っているように見える…。毎度のことながらマジで  
コワッ…。

「な、なんだ…。き、き貴、様らは？も、文句で、ででももある、  
あるのか！？」

あれだけ威勢のよかった水島が怯えを見せている、だと！？やつ  
ぱりこの世界では女性が最上級の強さを誇るのだろうか？これは要  
研究かな…。

「な、なんや？」「今、背筋がゾクゾクしてたわ」「これは…殺  
気？」「あの美人な姉ちゃんらか？」「あー…？よく見てみい」「  
なんや？」「珍しいことにあの姉ちゃんら刀剣の九十九神じゃ」「  
なんやと！？…ホンマや、珍しいなあ」「やるー？」

鬼さんの目から見ても刀剣類の九十九神って珍しいものなんだ…。  
本当に数少ないんだなあ。

「…アレとも戦うのか？」「うわっ、勘弁やわ」「直ぐに送還さ  
れそうや…」「なに情けないこと言つとんのじゃ」「ならばお前は  
勝てるのか？」「無茶言うなや！あんなんに勝てるわけないやんか  
！」「そこは自信満々に言つとこやないやろ…」「うるさいわい！」

いきなり気弱になった！？なにそれ！力の鬼さんでしょ！？それ

なのに弱気ってどういうこと!?!もしかして召還主がアレだからヤル気の問題、なのかな?

とりあえず、ハオとユエの逆鱗に触れた水島さんの始末は任せるとして俺は…俺は、どうしよう?んー…???

「ハオ、ユエ。そいつは任せる。好きにしちゃって」

「ハツ、万事、良きように…始末します」

うん、ユエ、お願いね。激怒したハオを上手く誘導「コントロール」して周囲への被害をできるだけ減らしてあげてね。

「…ラミエル。吾らが居らぬ間はおぬしが我が君をお守りせよ。…よいな?」

『わかっておる。お前達が居らずとも我が主の守りは万全である』  
『とを見せてやる』

「吹いたな?青結晶が」

『さっさと行くがよい。白包丁が』

『「……………」』

はあ、二人とも何で、そんなに喧嘩腰なんだろう?十数年の付き合いなのに未だに口撃が絶えない。いい加減そろそろ和解してもいいと思うんだけどなあ。

はッ！？まさか、これが世に言う家庭崩壊の危機ッ！？！？

「はあ、姉上。睨み合っていないで行くぞ？我が君も呆れられておるではないか」

「あは、ははは…」

そんな愚にもつかないことへ思考が移ろいそうになったらユエがタメ息をつきながら2人の諍いを止めてくれた。イカン、イカン。俺まで変な未来像を想像してしまったわ。家庭崩壊なんて考えたくもないのに。はあ…。

「ぬ…。失礼しました、我が君。では、行って参ります」

「我が君、行って参ります」

「うん、いつてらっしゃい。2人に武運を」

『ふんっ、早く終わらせてくるがよいわ。……怪我、するなよ』

あらら？いつまでも憎まれ口を叩いていると思ったら一応、心配しているのな。くっくくくっ そうか、いつもの2人の口撃は一種のコミュニケーションだったのか。何だかんだでお互いのことを認めているんだな。

「…ふっ、承知した」

「ふふふ。素直ではないな」

ハオはフツと不適に笑うことでラミエルさんに応えた。ユエはそんな2人を見て苦笑気味に笑う。そのまま2人は歩き出して怯えを見せている水島の前まで移動する。

「「覚悟は…できておるな?」」

「ヒイ!?!」

「「「「「………つ」「」」」

一応、術者だから水島の前には守るようにして鬼と烏族が4体立ちただかる。な、なんて義理堅いんだ…。あんな召還主のために身体を張るなんてな。

さて、あつちは2人に任せておけば心配ないな。それじゃ俺達は…よし、周りの鬼さんやその他を相手しますかね。ふふふ、そうと決まったらヤリますか…。

目指すは敵目標の術者（陰陽師）の完全無効化。これは武力による徹底排除あるのみ…。鬼さんは…俺と敵対しているヤツに呼ばれたことを後悔してもらおうか。…あー、でも、あの狐女さんは丁重に向こうへお帰り願おうかな。

忙しくなるぞーッ！クククックックッ！



第三十四話「侵入者と待ち伏せと大迎撃と」前編（後書き）

どうも、鉄 桜です。こんな戦闘の予定は無かったんです。

ただ前回の初期化のことがあり、遣る瀬無さや鬱憤などを吐き出したくてやりました。

後悔もなければ反省：はするかもしれませんが。

今回の誤算は前中後編に別れることくらいです。予定に無いことはするものじゃないですね。

予定に無かったことだから作者は慌てて続きの作業中です…。

第三十五話「侵入者と待ち伏せと大迎撃と」中編（前書き）

中編

戦闘？授業？人格崩壊？

作者自身書いていてよくわからなくなった。

指の赴くままに書いたから…。

では、どうぞ！

### 第三十五話「侵入者と待ち伏せと大迎撃と」中編

麻帆良市近郊の森林…。

S i d e 葵

ハオとユエがちよつとお怒り気味に敵指揮官の陰陽師こと水島さんを相手に、それはもう元気に襲い掛かっている。

うちの三課の戦闘部隊はアイリ達にそれぞれについて小隊単位（1チーム4名）で敵第一陣を半包囲しながら各個撃破している。援軍要請で来てくれた第四機甲中隊12名は後方の敵第二陣へ向かい敵の退路の遮断と第一陣との合流阻止をしている。

もう一つの援軍の無人機動兵器<sup>カブトムシ</sup>256機の半数はより広範囲に渡って警戒と監視、そして遊撃行動。もう半数は第四機甲中隊の援護派手にMミサイルで広域爆撃を仕掛けている。

結界内だからいいけど旧世界の外で、それも比較的平和な日本で<sup>こんなこと</sup>重爆撃したら一大事件に発展してしまうだろうなあ。この戦域もあとで隠蔽工作しないといけないのに…あ、頭が痛い。

はあ…そんでまあ俺とラミエルさんはその他の戦力…水島が個人で呼び出した鬼達を相手にしようとしているのよ。

目の前に立ちほだかるのは筋骨隆々とした巨躯の鬼が10体以上。それに剣の腕に定評のある烏族が数体。更に少ないが結界術や狐火、少しの忍術を使う狐女が見える限りに居るのは三体。あとは子鬼がうようよ居るくらいか。

相手できなくはないけど1体1体を相手にするのは面倒くさいし敵の手数が多くなってウザイですよ。ここはやっぱり……。

「そういうことだから鬼さん達の相手は俺“達”がするね」

「おうおう。兄ちゃんがわしらの相手してくれるんかい。…あつちの姉ちゃんらに頼らんでもええんか？」

「ん？あー…うん。大丈夫、大丈夫。人手はまだあるし」

「？なんじゃと？」

こらこら、不思議そうな顔しなさんなって。俺は1人で相手するなんて言っていないじゃないか。ちゃんと言っただろ？俺“達”となあ。

そもそも話し、俺は1人じゃ戦わないの。……だって怖いし。仮に単独戦闘をする場合は家族のためか気に入っているモノのためか。それにしたって、それ相応に装備を整えてからブツ潰しにかかるからな。

………ヒットアンドデストロイ辺り一面を更地に変えるほどの威力を初撃に込めて反撃を許さない一撃必殺、ヒットアンドウェイまたは一撃離脱がいつもの手かな。

戦闘は皆がしてくれるからさ。……一応、俺も戦えるからな？そこを間違えるなよ？この世界に落とされて最初の百年は1人だったんだからな。当然だろ？ふふん

「召還できるのは陰陽師ばかりじゃない。　　我は命じる。闇より尚暗き泉より湧き出たる優しくも仄暗い世界よ。今ここに世界の理を繋げる。我が前に現せ出でよ。汝らが名はオリビエ！リビエラ！シルビアなり！召喚！」

そんなわけでオリビエ達を呼ぶために世界に割り込んで召還式を起動させた。呪文は：ファイリング？急げばもつと早く呼べるんだけど召還が乱暴になるから呼ばれる彼女達に不評で緊急時以外は丁寧にしてほしいとお願いされたんだ。

女の子だから優しくしないとね。前に個人的に許しがたいことがあつて何度か我を忘れて呪文短縮して呼び出したことあつたから気を付けないとな。まあ滅多にそんなことはないから、いいのか。

「んっんーッ！…ふう。んー？今度の相手はこいつらか？」

「オリビエちゃん、ダメよ？こいつら、なんて言っちゃ。鬼さん達に失礼でしょ？」

「そんなこと言ってもさあ……。シルビアはどう思うよ？」

「???.....どうでも.....興味...無いし」

「興味無い、つてお前なあ…」

「あらあら〜」

よしよし 不備も無く呼び出せたようだ。それにしても元気だなあ。

オリビエは顕現したあとに寝起きのように背筋を伸ばして凝りをほぐす。目の前の鬼や烏族、陰陽師などを視界に入れるとサツとさり気無く敵戦力を確認した。まあそれでも軽口を叩くのは相変わらずだ。

リビエラも柔らかに微笑んだ表情からは想像できないが確実に戦力分析しながらオリビエの言葉をやんわりと宥めている。それに体内では外に気付かれないように魔力が凝縮され高純度に練られている。

シルビアは…俺から具体的にオーダーが決められるまではヤル気にならないようだ。敵をチラツと見ても彼女の雰囲気からはそこに転がっている石を見ているかのようにしか感じない。

「ワーツハツハツハツハツ！こらまた愉快的姉ちゃんが出てきたもんじゃない！」

「うひょー！あのおっとりしたボンテージの姉ちゃん、ええ身体しとるなあ」

「オ、オラはあっちのちっこいのがエエだ。ハア…ハア…」

「つーかよ？1体目以外の鬼さんよ…。俺の家族をイヤラシイ目

で見るとは、一体どういう了見なのかなー？特に最後のヤツ！何が  
「ハア…ハア…」だあ！？送還じゃなくて消滅させるぞ、コラ！？

たくつ！鬼達は呼び出した彼女達を見て嚇し立てている。まあ世間的に見れば爵位も無い下級悪魔にしか見えないから当然だけどね。それに俺がどんな切り札を切ってくるかと思えば、つてもあつたんだろうさ。

見た目3体の下級悪魔だからね。でも、それはフェイクだ。俺が三百年間、自分の血と魔力を与えて育てた上げた3柱の魔人を嘗めてもらっちゃ困る。間違いなく俺が保有する最大戦力の一つに挙げられる。

まあそれは置いておくとして当然、不躰な視線を向けられた本人としては面白くないわけで……。

「あゝん？ジロジロ見てんじゃねえ！殺るぞ、コラッ！？」

「オイタしちやダメよ〜　へんなことしたら〜……モグ、わよ〜？」

「……？……？……殺る？」

皆それぞれの方法でキれていますオリビエはガンつけて烈火の如く怒っているし、リビエは微笑んでいるけど目が笑っていないし発言が、アレだ。男としては思わず前屈みになること請け合い。

シルビアはよく理解してないようだがなんとなく不愉快な雰囲気を感じ取ったようでストレートに死なす発言だ。俺はどちらかと言うとストレートに言われるほうが怖いと思う。遠回しじゃ無いだけに真っ直ぐな殺気や闘気を感じられるから……。

「お前らさあ…俺の身内に色目使うとかは、違うんじゃないかな？…消滅されたいのか？」

俺も家族がイヤな目で見られているのは我慢できるものじゃないですよ…。ちよーっと今の自分の目付きとかヤバイことになっているかなって思いながらも自制が…ねえ？素直に謝罪するならよし。更に煽るならば…くっくっくっ！！

「お、おおう…。す、すまんかった。氣い付ける。もうせんわ…」

「くっくっくくクククッ」「」「」

「わかればいいんだ、わかれば…。まったく、もう…なあんか締まらないなあ」

どうやら最初の印象どおり、この鬼さん達はいい人のようだ。それはいいとして…よかつたねえ？ここで言葉の選択を間違えようものなら、あの世にも逝けないように封印隔絶して永劫の地獄というものを味わわせてやるところだ。

「葵い、もういいじゃん。サッサとこいつら殺っちゃおうよ」

「…うん？…お兄ちゃん…殺る、の？」

「葵ちゃん？目を通して“見ていた”けど、ぜんぶ…殺っちゃっていいのよね」

皆、ヤル気満々ですか…。まあ士気が低いよりはいいことなのかもしれないけど、これは少し好戦的じゃないかな？

とりあえず、本人達のヤル気に方向性を持たせて誘導するか。…  
なんてこと言わなくても目標を定めれば、あとは自分達で目標を達  
成してくれるか。ふむ…。ここは任務<sup>オウダイ</sup>を伝えることにするかね。

「うん。リビエラの言うとおりだ。目の前の第一陣は殲滅指定。敵  
後方の第二陣は現在、包囲して各個撃破している。この第二陣は捕  
縛し依頼主（詠春）の下へ護送する。…任務<sup>オウダイ</sup>は以上だ」

「おつし！任務<sup>オウダイ</sup>、了解だよ！アーツハツハツハツ！」

「…殲滅？…抹殺…久し、ぶり…。…クスクスツ…」

「任務<sup>オウダイ</sup>、承りましたわ。うふ。うふふふ」

任務<sup>オウダイ</sup>が具体的になってエンジンに火が入ったようで三者三様に笑  
っています。……これって怖くないか？

オリビエは豪快に獰猛に嗤って舌なめずりして獲物を見ているし、  
シルビアは静かに傍げにクスクスって笑っているのに発言が全てを  
ブチ壊していてちょっと怖い。

リビエラは全体的に変わらない微笑を浮かべている。……浮かべ  
ている、のに彼女の体内に練り込まれた魔力と瞳の奥にある冷たく  
も熱くもないモノが今にも暴れだしそうで、やっぱり怖い。

三人とも笑（嗤）っているのに最後には怖いって思わせるって、  
これはどういうことかなあ？

「…まあいいか。さて！こっちの準備はできた。待たせたな」

「わっはっはっはっ！なに、気にしとらんわい！1人に対して寄つてたかつてつちゅーのは気に入らんからのう。…しっかし、こんな娘子どもだけでエエんか？」

「ふふふ。あまり彼女達を嘗めてかかると痛い目に遭うよ？…全  
力出して来な。若き鬼どもよ」

見かけに騙されているようじゃ、まだまだだね。この辺が、まだ年若い鬼の世代なんだろうな。千年の時を生きた鬼は格が段違いに高くなるから困ったものだけだな。

リヨウメンスクナノカミなんていい例だよな。あれは本来の力の一部、荒御霊だから理性がなく本能のみで暴れる力の塊だ。性質が悪いつたらない。

そこまで霊格を高めるとは言わないから、この鬼達も元気に育てほしいものだ。まあ今後、道を踏み外して悪鬼に堕ちたなら最悪、消滅させるけど…。

「…フツ…わっはっはっはっ！！わしらを前にして若いの呼ばわりか！これは笑えるわい！」

「実際、年齢で言えば俺達のほうが年上だしね。ここは若い者に胸を貸す気持ちで相手してあげようという…所謂、老婆心ってやつだよ」

ありやりや？俺のこと驚いたように凝視してきているよ。年上つてのが信じられないのかね？…まあ普通に考えたら、そんなことないから驚くのも無理はないかもな。

でも、凝視してくる者の中で戦闘狂っぽいのがギランって目を光らせたのが居たのが気になるな。強者を求めるナンチャラってヤツかな？突っかかってくる前に送還してやるう…。

「そうかい……。おいッ！お前ら！此度の召還者はイケ好かない者であつた！だが！今わしらの目前には強者が居る！！戦いこそがわしらの本分じゃ！ならば此度の戦いを用意したことでご破算じゃ！感謝しよう！戦い！戦い！戦い！ここに全てを賭けや！！！！！」

「「「「「おおおおおー！ツ！！！！」「」「」「」

うわぁー…。今から決戦に赴くみたいな状況になっているんですけど、これってどういうことなん？何を思ったのか話していた大鬼さんが仲間を鼓舞し始めたんだ。

「気合入ってんなぁ。ふふふ。少し発破かけ過ぎたかもしれない」

いやー…マジで発破かけ過ぎたかもしれない。なんか皆さん「この戦いで死すとも本望なり！！」みたいな雰囲気なんです…。最近の若い者の考えがわかりません。テンションも高くて着いて行けなかつたりするし。

「いいじゃん あたしは腑抜けを相手にするより、こっちのほうが断然気持ちいいよ！」

「…戦いが…本分。…ボクらも…同じ。…クスクスツ…」

「うふふふ 私は、まとめて来てくれたほうがいいわ。まとめて燃やせますもの」

オリビエ達は楽しそうだね……。本質が悪魔だから戦いを求める本能の部分が顔を出してきたのかね？今回のように戦闘と言える大きな戦闘もなかったからね。色々と鬱憤も溜まっているのかもしれないな。

近頃の彼女達の指導する戦闘訓練がハードだって皆が愚痴っていたからなあ。彼女達にも紛争地域にピクニックに行ってきたらおうかな。相手には気の毒だけどストレス発散のため、尊い犠牲になってもらうとしよう。…なんて、な？

「そんじゃま、年長者として、ここは相手しようかね。行こうか？」

「おう！」「……うん……！」「はい」

うん、色々と諦めた。こうなつたからには指導という形で召還魔は全送還と行こう。陰陽師達は……うーん？冥府へと旅立ってもらいますか。

第二陣はともかく第一陣は水島のせいで俺の正体を知った者が数名ほど居る。ここで1人も逃がさずに確実に葬ってしまいたいところだ。

「わしらも行くで……！」

「……」  
「……」  
「……」  
「……」  
「……」

向こうさんもヤル気みたいだし……。胸を貸す気持ちで行きますか！

麻帆良市近郊の森林…。

Side オリビエ

…イイ…イイねえ！久しぶりの戦闘だよ！アハハハハッ！…  
ただ鬼どもが若い部類に入るせいかな手応えは、あまり無いね。だ  
けど、それでも戦場には変わらない。興奮する！高揚する！！熱くな  
る！！！！ククッ、アハッ、アハッハッハッハッ！！！！

「アハッハッハッハッハッ！！どうしたッ！？死にたいヤツは掛か  
って来なッ！！」

「応！拙者がお相手いたすッ！！セイッ！」

臆病に周りを囲んでいた中から威勢よく名乗り出てきた烏族の若  
造が文字通り飛び掛ってきた。初速は十分だね。でも、そのあとの  
速度が伸びてないよ。それじゃ、ダメだ。最大時の威力を逃して無  
駄にしているって。

「軽いッ！甘いッ！！そしてッ　脆過ぎるッ！！！！」

上段からの斬撃を剣の腹をブツ叩き弾いて返す刃で天に打ち上げ  
た。そのあとを一瞬で追いかけてオマケで蹴りつけて暗い森の大地  
に叩き付けた。

「ゲフツ…」

「基本はいい！だが、身体の重心をもつと意識してやりな！威力が剣に乗り切つてないよ！！」

葵が指導な気分で、つて言つてたからね。あたしも打ち倒した相手が消える前に評価を下しておくのさ。召還魔だから死ぬわけじゃないからね。ただ還るだけだから加減いらすだから楽だね！ホント！！

家の子達は仮とは言え肉体を持っているから、こつはいかないからね。あ…。思い出した！あの子達、またあたしらの訓練のことで葵に愚痴つてたんだよね…。葵にチクるようなマネしたんだから訓練も割り増しでやってやるんだから！

「ならば！」「今度は拙者らの！」「お相手願おう！！」

烏族が 3体 現れた！ しかも 兄弟だった！！

「御託はいいから掛かつて来な！まとめて相手してやるよ！！アーツハツハツハツ！！」

「イイねえ！懲りずに挑んでくるその心意気！あたしは好きだよ、そついうの！！でも残念！葵の家族として負けることは許されないんだよ！！……負けると他の子達から“お仕置き”されちゃうからね！！だから…絶対に負けられない！！」

「……いざ！参る！！」

宣言したあとに逸早く駆け出して突出しだした1人が居た。

「来い！！ハーツ！！」

あたしはそいつの頭上から飛び掛り…。

「ガツ！な、にツ！？拙者を踏み台に！？」

少し、遊び半分で相手の頭を踏み台にして更に高く跳んだ。……  
これに似たようなことを百年以上昔やったら葵がジェットスト…な  
んとかって言うてたけどアレって何だったんだろね？

「だが！回避直後のここならば動けまい！！」

跳んで回避した直後ならば動けないと思ったのよね？甘い、お砂糖よりも甘いよ！この程度で動きに支障が出るような軟な鍛え方はしちやいない。それにこの程度できなくて何があたしだってんだよ  
ツ！！

「このバカ者が迂闊に前に出るな！！」

「もう遅いよ！！斬ツ！！！！」

「なツ！！しまっ！ガーツ！！」

仲間が止めようと警告したけど、もう遅いんだよ！仲間が居るならば先走らずに連携を以って事に当たればいいのよ！集団戦に英雄ヒーローは、いらなんだよ！必要なのは統制された軍なんだからね！

自分が弱いことを自覚しているならば仲間と連携して時間を掛けてでもいいから目的を達成すればいいんだよ。必要によっては撤退

も視野に入れてね。先走る必要なんか無いんだから。

「双次郎ーッ！！」

「戦いで機を見ることができなかったのがお前の敗因だ！次は覚えておくんだね！」

さっきのは双次郎と言うの？名前は…覚えなくていいか。もう二度と会うことなんか無いだろうしね。

「ぬううッ！っ、強い…！！」

「兄者！ど、どうするのだ！？このままでは…！」

「ええい！わかっておるわ！滝三郎、お前は拙者が戦っている間に背後から行けい。よいな？」

「わかった！兄者！持ちこたえてくれ！」

距離をとってから残りの2人はヒソヒソと何かを相談していたみたいだね…。まあ十中八九あたしを倒す方法の相談なんだろうけどね。でもねえ…この程度の遊戯で倒されるようなら当の昔にあたし

は消滅してるっつ。

んー？どーね？相談は終わったようじゃないか。何を企んでいるのかを早速試させてもらおうとするよー！！

「…相談は終わったのか？だったらサツサと掛かって来な！」

「クツ！お前の相手は拙者だーッ！！」

1体による突撃？2体での同時攻撃じゃないのかい…。とりあえず様子を見るために罅迫り合いでパワー勝負に持ち込んでみるかね！

「ハンッ！あれ？もう1体は、どうした！？」

「ふ、ふふ！お前の相手如き拙者だけで十分というだけだ！！」

罅迫り合いに持ち込んだ一瞬に視界から消えたもう1体の烏族はどこに行っただよ？目の前の烏族に聞いてみても冷や汗ビツシヨリになって答えを誤魔化すしさあ。…まあ普通は答ええないか。

「ほう？逃げ……」

あたしはもう1対が逃走して援軍を呼びに行ったと思っただよ。でも、こいつらは、そこそこに男の子だったらいいね。背後のほうに何かの気配がしたんだ。頭にピンと来たってものよ。

「ふふんっ、いや、なるほど、なッ！！…後ろだーッ！！セイヤッ  
！！」

「グハッ！は！？滝三郎ーッ！！」

「…すま、ない…。あに、じゃ…」

罅迫り合いをしていた烏族を蹴り、弾き飛ばした瞬間にしゃがんで後ろから迫っていた横の斬撃を回避した。そして回避後に立ち上がりざまに打ち上げるようにして自分の大剣で真つ二つにしてやった。

…って、しまった。これじゃ評価できないじゃないか…。まあ残ったヤツに言っておけば向こうで話してくれるだろうよ。気にしない、気にしない

「連携は悪くないけど気配の殺し方がなってないよ。殺しきれないなら相手を殺気が闘気で覆って目暗ましにしま」

「最早、これまで、か…」

ギラついた目…。覚悟と言えば覚悟を決めた者の目…。でも、これはあたしが大ッ嫌いな目…。嫌悪していると言ってもいい。

「決死の特攻…。お前さあ、戦いを嘗めてんのか？」

「な、に？」

「戦いとは生きるため、生きたいから戦うんだ。方法は色々だけどね？…それなのにお前は今、死を意識している」

あたしの言葉を聞いているうちに烏族の目に怒りの感情が見えてくるよ。若い、青いって言っちゃあ、それまでなんだけどね。気に入らない色の目だ、ってのは変わらないよ。

「死を覚悟して何が悪い!? 自分の命を懸けて何がわッ!!!?」

「バカ者がッ!!!!!」

「ッ!!!」

その言葉を最後まで言わせたりなんかしないッ!!! 少なくともあたしの耳に入るようなら捻り潰してでも黙らせてやるッ!!!

「死んで事を成して何になるッ!? なぜ最後まで足掻かないのか! そんなものは最初から死んでいるのと変わらないんだよ!!!」

「ッ………」

「………」

命を掛けてなんてことはやろうと思えばいつだってできるんだよ。でも逆は…生きるためにすることは何倍も難しいんだ。それをこいつは理解してない。だから簡単に自分の命を投げ出したりするんだ。

あたし達にとっては、ただの他人（他鳥族?）だからどこでノタレ死のうと知ったこつちや無いんだけどね? でも、不愉快なものは不愉快なんだよ。ほんつとに気に食わないいたら無いねえ!

「……そうか、忠告感謝する」

「わかればいいんだよ。わかれ……」

「ああ、オバハンの言葉、確かに拙者の心に刻ん、ぐへぽろッ!!!」

「??!?!」

こ・い・つ!?!言うに事欠いてあたしのことを“オバハン”なんて言いやがったツ!?!咄嗟にこいつのブン殴ったのは間違いじゃないと思う!?!反省もさせて後悔もキツチリさせてやる!?!

「誰がオバハンだツ!?!誰が!?!あたしは、まだ三びや…何を言わせるかー!?!」

「拙者は何も言わせてなツ!?!?ギャー!?!」

こつこの野郎…ツ!?!さっきの失礼な発言だけではなく!?!女の子に年齢を聞くとはいいい度胸じゃないか!?!ええツ!?!思わず全力で殴って送還してしまっただけ今回もあたしは悪くないんだ。相手が悪いんだよ!?!

「ふんつだツ!?!」

ほんつとに失礼しちゃうんだから!?!

Side out オリビエ

麻帆良市近郊の森林…。

Side リビエラ

オリビエちゃんもあつちで元気に指導しているみたいね。最後の拳打なんか変に気合が入っているように見えたわね。うふふ。地響きどころか魔力の波動まで溢れてきているんですもの。

それでは、私達もお相手しましょうね。

「うふふ。私達の相手は、貴方達がしてくれるのかしら？」

「数で攻めるのは気に入らなげしやない。向ここの姉ちゃんは滅法強いから。」

あ……。オリビエちゃんったら今回の指導は気合の入具合が違うものね？それは警戒するのも無理はないわ。でも、シルビアちゃんだけならまだしも、私まで怖がられるなんて納得いかないわ。

私は2人に比べて優しいもの。無茶はさせても無理はさせないわ。だって、無理をする前に潰れているんですもの。本当に今の人は軟弱よね？鍛え方が足りないと思うのよ。

だいたいね……。あ、あら？私の服の革ベルトを引っ張るのは誰かしら？

「……？リビエラ……？」

「ん？あら、なにかしら？シルビアちゃん」

「……うん……あのおっきいの……もらっていい……？」

まあまあ シルビアちゃんったら、あの大鬼さんが好「違、う

……。ライバルが減るかと思いましたが……。わ、わかつていますわよ。だから睨まないでくださいな。対戦相手としてですわよね？アハ、アハハハ……。

「あらあら。良かったわね？シルビアちゃんが貴方をご指名よ  
」

「んあ？こんなチビ助に指名されてもなあ……ホンマにエエんか？」

やっぱりシルビアちゃんの小柄な体型を前にすると不思議に思うわよね？でも、それは間違いよ。私達3人の中で一番力が強いんですからね。小柄な体躯なのにどこにそんな力があるのかしらね？不思議だわ。

「……くくん」

「ええ、よろしいですわよ。……頑張りなさい。さもないと一瞬で、挽肉ですわよ？」

抗いなさいな。そして学びなさい。今の貴方達では決して敵わない強敵が目前に居るのですから。

個人に適した戦闘技術を初めとした戦い方はもちろん。周辺の地形を織り込んで有利に戦況を運ぶ戦術的思考。個人では敵わないならば集団戦闘の技術を磨いて仲間との連携で対処し勝利なさい。

……ととつ、ちょつとマジメさんになっちゃったわね。うふふふ。ええ、色々と試行錯誤して自分の武を、知を高めなさいな。

「……来いや。相手したるわ」

「いつてらっしや〜い」

「…うん…いつて、きます…」

うふふふ〜 さの巨躯の大鬼さん達はどのくらい耐えられるかしら、ね〜？シルビアちゃんのいつもの訓練内容を考えると……送還されていなければ十分かしらね〜。

皆、送還されないように頑張つて〜 なんて意味を込めてハンカチをヒラヒラと振って見送つたのよ〜？そうしたらね〜？大鬼さん達が不思議そうな顔になったのよ〜？自分達が誰に指名されたのか、その意味を知つたらそんな顔できないわね〜

本当になるべく長く送還されないように〜、シルビアちゃんの相手を頑張つてほしいわね〜 うふふふ〜

「さてと〜…。お待たせしましたわ〜 残りは私がお相手いたしますわよ〜」

ザザッザザーーッ！！

私がここに残つた鬼や烏族を見回して声を掛けた途端に包囲していた輪が一齐に広がつたの〜。折角、包囲していたのに狭めるならば、ともかく〜。拡がるのは、どういうことかしら〜？……臆しているのかな〜？

「何で〜…遠ざかるのかしら〜？男の子でしょ〜？早くいらっしやいな〜」

「クツ…!」「何なんだ…!?」「ちくしょう…」「魔力が異常だ…」「どう攻める?」「…踏みたい」「ちいい!」「この場は不利だ」「有利なところまで誘い込むか?」「そうするにしても、そんなところは…」「水の音がする…。この近くに川がある」「ならば…」

あらあら〜 作戦タイムと言ったところかしらね〜?うんうん ちゃんと考えているみたいじゃないの〜 …… 一部だけ不穏当な発言が聞こえた気がしたけど〜。気のせいよね〜…?」

「どうするんじゃ?」「…っ…ッ!」「お前から…」「いやいやいや!おぬしこそ!」「ノーツ…!」「はあ、不幸じゃ…」「こ、こうなったらッ!」「行くのか!?」「土下座、か…」「ダメダメじゃねえか」「ああ、ダメダメじゃ…」「ホンマじゃな、はあ…」「ちびっ子が…」

あらあら〜……。こっちは…腑抜けているわね〜…。この子達は性根から鍛え直す必要があるかしらね〜。うふ、うふふふ〜

「いい加減になさいなさいな。…そう、そうね〜。わかりましたわ〜。私のほうから…行かせていただきますね〜」

「…」「…」「ヒイツ!?!」「…」「…」

「そう簡単に離脱できるとは思わなくてくださいね〜?うふ うふ ふう〜」

さあ…教育の時間ですわよ〜

麻帆良市近郊の森林…。

Side シルビア

これは… 実戦訓練？ お兄ちゃんが… 言ってた… よね。 でも… 東洋魔法使いは… 逃がさない。… お兄ちゃんの障害。… 殲滅… 抹殺… 惨殺… クスツ クスクス… 絶対に生かして、は… 帰さない。

おつきい鬼の… 人達の、後を… ついて行ったら… いつの間にか… 森の中で… そこそこ… 拓けたところ、だった…。

「…ここいらでエエか。 そんじゃまずはワシから…。」

「…いい。…まとめて…来い…」

それは、メンドウ…。 1人1人… 別々に相手なんか… してられない。 そもそも… まとめて、来ないと… 意味が… 無い。 鍛えるのが… 大変だし。 時間も… 無い。

「なんじゃと？」

「…？…？…？…来い」

聞こえなかった… みたい？ でも… 鬼の表情を… 目の奥を… 見ると…。 これは… 炎？ 怒ってるのか… な？ なんて？

まとめて来いって…言ったのは…ボクの…親切心だったんだ…けどな。敵との…戦力…に圧倒的な…力量差が、ある場合、それを…埋めるには…単純に…考えて、物量しか…ないから。

「死にたいんか？チビ助」

「…？…ふるふる。…負け、ない。…大丈夫」

ボクは…誰であろうと…負けるわけには…いかない…。修練も…欠かしてない。だから…負けないよ。負ける気も…しない。…お兄ちゃんはボクが…守るんだ。

「…ハア。タイムンしようとしたのも、ワシからの情けじゃったが…しゃーないの。痛い目に遭わんとわからんか」

ドンッ！！！！

「…？…？…サツサ、と…来い」

地面に…ボクが持つハルバードの…石突を叩きつけて、早く掛かって来るよう…に催促した…。だって、いつまで…経っても来ないんだもん。時間も無いから…早くしてほしい…。

あれ…？おつきい鬼の…額に…#マークが、瞬時に…増えた？

「後悔すんなやーッ！！」

ダンッ！

「　　ッ！」

大金棒と…怪力の大打撃…。…力は体格から…言ってもそこそこだね。クスクス　打撃も地面が…陥没するだけだし…。

それでもまあ完璧とは…言い難いけど…まあまあの…不意打ちだった。…でも、速さが足りないよ。止まってるようにしか…見えな。い。まだまだ…甘い…。踏み込みが…甘いのかな？

「力入れ過ぎたかのう！わっはっはっ！…ハア？」

「　　…うん。…悪く、ない。…でも、　　フッ！…！」

ブンッ！グシャシャァッ！ザンッ！ドッ！…！！

「…うおッ！？」」「…何じゃとッ！」「グハッ！」「何が起こつたんじゃッ！？」」「あ、ああ…」「クッ！…はあ！」

縮地で瞬時に12体の大鬼の集団の中心に移動して…ハルバードを振り回し斬撃、刺突、石突、打撃、圧壊を繰り出した。全員が全員、致命傷まで至らなかった…みたい。

それでも7体は…殺とつた。まだ若いから…まだ伸びると思う。生き残った鬼は…先が楽しみ。今、還した鬼も鍛えれば…そこそこ強くなるかも…？でも、今は…まだまだ…。

「　　…鍛え、方が…足り、ない…。…だから」

鍛えて…あげる…ッ…！！

「グッ！何体無事…いや！生き残ったッ!?」

「全部で6…いや！5体…！し、信じられん…」

「…話し、てる…暇…ない、よ？ シッ!」

ハルバードを大上段に構えて…ボクの突撃から生き残った大鬼達へ走った…一応、まだ彼らが目視できるくらいの速度で駆ける…。

「…ッ!?散れッ!」

遅いよ…。気付いたのなら…動かないと、ね。

斬ッ!!ズチャッ!!ブンッ!!グシャッ!!

「ガフッ!!」「ギヤーツ!?!」

2体…殺った。残りは…3体…。

「チッ! エエ加減にせいやーツ!!」

残った3対の内の1体が…怒りに任せて飛び出してきた…。大棍棒を大きく振り回して突撃してきた。でも感情に体術がついていてない。これじゃ振り終わったあとの…隙が大きく残っちゃう、よ?…そっか、怒りで何も見えなく…なったんだね。

「…ッ。…さっき、よりも…よく、なった。…でも フンッ!」

「待っ!…!」

残った大鬼の1体が…待ったをかけようとしたけど…ダメ。これは…自分を見失った、この子に責任が…あるの。…だから、やめて…あげない。どうせ還るだけだし…クスクス…

ブオンツ!!ザシューウウツ!!!

「グツ!!ガツ!!?ガアアアア!!」

「…感情に…振り回さ、れちゃ…ダメ」

あと…2体。思ったよりも粘ったほう…かな?でも…これ以上時間は掛けられない…。少し遊びが過ぎた…かも。お兄ちゃんのところ…行きたいなあ…。

「…臆しちゃ、ダメ。…死んじゃう、よ?」

「クツ!!」「…ツ!!」

んん?…怯んだ?だったら…手早く終わらせよう…。

「バイ…バイ…」

「「え?」「」

斬斬ツ!!

「…終わり…」

少し…物足りない…けど。もう…終わり。お兄ちゃんのところ…に行こう…クスクスクス…クスクス…今日の月は…一段

と紅くて…キレイ クスクス…

S i d e o u t シルビア

第三十五話「侵入者と待ち伏せと大迎撃と」中編（後書き）

まだ終わりじゃない…。まだ終わりじゃないんだ…。

後編が残っているんだ…。見切り発車したせいでこんな予定に無いことを…。

ううう！失敗したかもorz

読者の皆さんが…

「いいから早く原作に入れよ…。」

なんて気持ちだったらどうしましょう？

作者はガクガクブルブルと不安でしようがないです。

ではまた後編で！

第三十六話「侵入者と待ち伏せと大迎撃と」後編（前書き）

後編

予定に無い話数だから

番外編とかにすればよかったのでは？

と、思った今日この頃です…orz

まあそれはともかく続きをどうぞ！

第三十六話「侵入者と待ち伏せと大迎撃と」後編

麻帆良市近郊の森林…。

Side  
陽ハオ

我が君に暴言を吐いた下郎（水島）を追い詰めに追い詰めた。ヤツを守る4体の式神もユエが相手にしている。

「どうした！下郎！！この程度なのか？」

「クツ！嘗めるなあああ！オンツツ！！」

熱く燃え盛る呪符が私目掛けて放たれた。しかし、この程度の炎など蝋燭の灯火にも等しいわ！！

……考えてもみるがよい。我が家族らには我が君の靈薬を飲んで実力のみだがマリーを筆頭に火の上級精霊がわんさかと居るのだぞ？ やるうと思えば世界創生の火も熾せるやもしれん。

私を驚かすのならば、それ以上の炎を見せてみると言いたい。まあ私が何が言いたいかと言うと、この下郎の炎など…。

「ハツ！なんだ！この腑抜けた炎呪は！？」

腑抜けて力が無いも同然なのだ。

「はあはあ…！この…バ、バケモノめ！！」

「はっ！はははははっ！！何を今更なことを！！はっははははっ！！」

オカシイ！オカシイぞ！？下郎がッ！！！

Side out ハ牙陽

麻帆良市近郊の森林…。

Side コエ月

姉上もそろそろ、あおの下郎を仕留めるようだな。ならば私も時間を掛けてはおられぬな。何やら、あの下郎から暗い澱みのような気配を感じる。欲望と恐怖に負けて人から悪鬼羅刹に堕ちるのも時間の問題かもしれぬ。

「ぬう！！いかん！？」

「行かせぬよ！」

私がサツと姉上に視線を向けた時に召喚主の危機を察したのか彼の者の下へ駆けつけようとした烏族の戦士が4体居た。だが、させぬよ。貴様らの相手は私なのだから。序でに先行した1体以外は斬り捨て還した。目の前の敵に背中を向けてはならぬよ。

「クウ！！は！？他の者はどうした！！？」

「あの烏族の3体なら既に還した。ふふふ。なに気にするな。寂しくはないぞ？次は貴様。そしてその次は…あの下郎だ」

「ぬうう！！よもや拙者らが敵わぬとは…！！なんと**兵よ**！！！」

弱くては私の大事なお方を守れぬからな。それこそ強くなるために必死にもなるわ。我が君のおかげで保有魔力は多い。だがこうして人の姿に顕現できるようにしてから剣術や体術は一から始めなければならなかった。

まあ伊達に剣の九十九神ではなかったから直ぐに上達したかな。時間はある程度かかった…。そして長い時間掛けてここまでの技量を身に付けたのだ。若造相手に簡単には負けてはやらぬよ。

「ふふ。贅辞は素直に受け取ろう。貴様らも若い割にはなかなかどうしてヤルほうであったよ」

「ククツククツ！なるほど拙者らも貴殿から見ればただの若造か…ならば！ならばこそ！！次の一撃に全てを賭け！一太刀報いてみせようぞ！！！」

その意気や好し！！

「ああ！！来るがよい！！若き烏族の戦士よ！！！」

「応！！ハアーツ！！！」

繰り出される私と烏族の剣が交差する。

斬ッ！！斬ッ！！

「……………」

「……………グフッ」

崩れ落ちたのは烏族の戦士だった。交差したのは一瞬の刹那の間。烏族の使っていた剣はバターが熱した刃でスライスされたように刀身の半ばから滑らかに切断されていた。

勝ったのは私のような。踏み込みも剣の走りの早さも力も…そして使う剣の質も何もかも私の上だった。経験の圧倒的な差が最後の最後で出てきたらしい。だが、彼の戦士の剣には…。

「魂の籠もった、よい一撃であった。烏族の戦士よ」

「クク…。やはり、届かぬか…。残念…だ…」

「そうか…。今宵は還り今一度、己を鍛え直すがい」

「クク！ククツクツクツ！！ああ、そうする…としよう。……さらばだ」

「うむ。達者でな」

今度呼ばれる時は良き主に仕えられることを私は願っているぞ…。

さて！姉上のほうはどうしたのか？先ほどから何やら騒がしいよ  
うだが…。様子を見に行くとするかな。ふふふ

S i d e o u t 月コト

麻帆良市近郊の森林…。

S i d e 陽ハオ

「はあはあ…！この…バ、バケモノめ！！」

「はっ！はははははっ！！何を今更なことを！！はっははははっ！！」

オカシイ！オカシイぞ！？下郎がッ！！！！

「笑うな！！何がおかしい！？」

「これが笑えずに居られるか！！私は元より九十九神の妖あやかしよ！！そして！この身は我が君ただ1人の御為だけにある！振りの刀に過ぎぬ！！」

そうこの身は我が君ただ御一人の御為にある！我が君の前に立ち塞がる脅威の尽くを斬り捨て排除する！

「ぐうう！！バケモノめ…！たかが…！たかがバケモノの分際で！！！！」

「黙れ！！！！下郎ッ！！！！！！！！」

お守りするために存在する我が身だ！私は妖の自分に誇りを持っている！それを、それを…ッ！それをこんな下衆に“たかが”呼ばわりされる謂われなど無いわ！！！！

「ッ！！！！？！！？！！？」

「最早、貴様の言葉は聞き飽きた。我が君は貴様の死をお望みである。大人しく受け入れるがよい」

「誰…！が！大人しく死んでナドヤルモノかぁーッ！！ガッ！？グッ！ゴッ！ゴオオオ！！恩オオオンッ！！！！」

ぬう！？間に合わなかったか！戦い始めてから暗い陰の気を身に纏い始めていたから、もしやと思っておれば、コヤッ…ッ！

「下郎めが…最期の最期で悪鬼羅刹へと堕ちたか！？」

「恩オオオオオオオンッ！！！！」

そこまで！己を墮としてまで勝ちを拾いたかつたとしても言うのか！下郎めがッ！？

「まったく！最期まで手を煩わせおって！！ハッ！！セイッ！！」

斬ッ！斬ッ！ブシューッ！！ビチャ…！！

剣を二閃、振り下ろして目の前の悪鬼の両腕を斬り付けた。右腕は落ちたが左腕は辛うじて繋がっていたのだらう、直ぐさま再生し

た。落ちた右腕も神経と筋繊維が寄り合わさり結ばれるようにして再生されていく。

「恩オオオオンッ!? 恩オオオオオン!!!?」

「チィー!!! 悪鬼はしつこいから嫌いなのだ!!! ハアーツ!!!」

斬ッッ!!! ボトッッ!!! ビチャビチャ!!!

今度はダメもとで一直線に首を落としに行った。しかし、いざ落としてみても腕と同じように神経と筋繊維が寄り合わさり再生された。

「ふう… 斬っても斬っても直ぐに再生されるか…。面倒な…」

面倒この上ないわ…。タメ息を漏らすのも仕方ないことだと思うのだ。このまま時間を掛けては我が君のお休みの時間が減ってしまうかもしれない。それはならぬな! うむ! では、どうするか? さて…。

「存外に苦戦しておるようだな。姉上?」

「ユエか。バカ者が。どこをどう見て私が苦戦しておるように見えるものか」

随分と時間が掛かったようではないか。剣の指導でもしておったのか? いや、それよりもだ! 私が、この程度の悪鬼羅刹に苦戦だと? ふふんっ。悪い冗談にも程があるというものだな。

「ふふふ。すみませぬ。そうだな、姉上がこの程度の悪鬼に梃子摺るようなことは無いな」

「そうだ。私がこのような悪鬼相手に遅れを取るわけが無い」

「…だが、どうするのだ？斬っても直ぐに再生されてしまうようだが」

ぬ？見ていたのか。…まあよい。再生が斬撃攻撃を上回るのならば、それ以上の火力を以って消滅すれば良いだけの話ではないか。しかし、“剣軍”は出せぬ。隠蔽班に大変な迷惑を掛けてしまうからな…。ならば…ふむ…よし。

「なに、簡単なことだ。一度斬って再生されるならば十斬り、十斬ってダメなら百斬る。百斬ってダメならば千斬り、万斬りするだけよ！」

再生できぬほど粉微塵の細切れにして消滅させられるわ…。そこまでされれば、あの悪鬼とて最早、再生などできぬはず…。いや、させるものか！

「ふむ…。ならば私は左から参りましょう」

「わかっておるではないか、ユエよ。では私は右から行く。気を付けるのだぞ？」

「ふふふ 姉上こそ」

生意気を言いおって…ふふつ。だからこそ頼もしくもあるというものだッ！！

「行くぞッ！！」

シッ！！」

「承知ッ！！ フッ！！」

斬ッ！！ブシューッ！斬ッ！！ブパーッ！！

「恩恩恩オオ恩恩オンッッ！！」

私が、ユエが、悪鬼の片腕を2人斬り捨て純粋な魔力の塊をぶつけることで両腕を燃やし尽くした。暗い魔力で染まりきった部分を純粋魔力で昇華し消滅させたのだ。

「行くぞ！？ユエ！！」

「ハイッ！」

「白刃一閃！十閃！！百閃！！千閃！！！！」

斬ッ斬ッ斬ッ！！！！「恩オ！？」斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ！！！！「恩オン！？」斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ！！！！

両腕を切り捨てたことを合図に私は正面から悪鬼に向かい斬るッ！斬る斬るッ！！斬る斬る斬るッ！！！！斬るッ！！！！

「黒刃一閃！十閃！！百閃！！千閃！！！！」

斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ！！！！「恩オオ！？」斬ッ斬ッ斬ッ！！！！「恩オオン！？」斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ斬ッ！！！！

ユエも悪鬼の背後から私と同様に斬るッ！斬る斬るッ！！斬る斬る斬るッ！！！！斬るッ！！！！斬るッ！！！！



うな？もしも、そうであつたのなら……その青い水晶の身体をグニグニと握り尽くしてくれるわッ！

Side out 陽ハオ

麻帆良市近郊の森林…。

Side リビエラ

シルビアちゃんは、もう終わったみたいね。私のほうは…残り半分近くかしらね？勇猛に挑んできたのは既に居ないようなのよね。向かって来る端から燃やしてしまったから。

それで私は今…。

「ほらほら、早く逃げないと……燃やしちゃうわよ？」

「ちよっ!?!」「それはッ!?!」「グハッ!?!」「ダメん!?!」「女王さまーッ!?!」

残った皆を空から細かいプラズマ球を広範囲に撒いて爆撃してますわ。…だつて、取り囲むだけして後は逃げるだけなんですもの。私ね？戦いを前にして逃げるなんて許されないと思うのよね。

戦略的撤退ならいいのよ？私だつて、ここぞという時に退くこ

とが必要だつてことは知っていますもの。でも今の彼らは逃げ惑うだけなのよ？ 還つた半分はまだ向かつてきたのにね？ ……情けないわ。ふう…。

「うふふふ　マジメに私を倒そうとした子達は、もう居ないのよ？ 貴方達は、このまま消えるために召喚されたのかしら？」

「くっそお…！ おい！ お前ら！ このまま言われっ放しでエエんか！？」

「応ッ！ このままじゃ鬼の名が廃るってもんじゃ！ いったちよヤツたるわい！…！」

あら？？ ダメもとで挑発してみたんだけど？ 思ったよりも怒つたみたいね。いいわよ。あまり感心はしないけど？ 怒りは恐怖を緩和する比較的簡単な感情なのね。方法は今一だけど？ 向かつてくることは褒めてあげなくちゃね。

「……もう10体も居らんがな」

「「「「「へっ！？」」「」「」

そうなのよ。うふふ。それじゃ私も総仕上げの準備をしようかしらね。仲良く皆でお家に還りましようね？ うふふ。

「さあ？ もうお家に還りましようね。霧よ、炎雷の霧よ。我が前に立ち塞がる哀れな患者を包み込め。涙流す悪魔の霧…。」



なんてヤンチャで無茶な子も居たものだわ。そんな楽しい子は私のほうには居なかったから残念だわ。

楽しそうだものね？でも、失礼なことを私に言われたら…：：：  
：：： 勝手に、勝手に尽くしてしまえばいいわ…：：： 少しずつ燃やして…治して…燃やして…治して…、また燃やして…。うふふ…

「うふふ… それじゃ、葵ちゃんのところに行きましょうか？  
やっぱり心配なもの」

「お、おう！そうね！行きましょー！…あれ？そういえばシルビアのやつは…」

シルビアちゃん？…あ、あら？？そういえば今はどこに居るのかしら？え〜と…：：：「ミニユニケで確認してみましょーね」。

「…あ、あら？？ちよ〜と待ってね？え〜と…：：：あらあら〜 逸早く葵ちゃんのほうへ向かっているわね。うふふ〜 相変わらずこつこつとは素早い子だわ」

「チツ！リビエラ！あたし達も早く行くぞー！！」

「はい」

あらあら〜 オリビエちゃんも何を心配しているのかしらね〜。  
シルビアちゃんが“そんなこと”をするわけないじゃない。

S i d e o u t リビエラ

?????..。

Side シルビア

「ボクが、一番乗り…かな？」

お兄ちゃん…今行くね。

Side out シルビア

麻帆良市近郊の森林…。

Side 葵

あれ？シルビアの声が聞こえたよう、な？気のせいか…。それよりも今はこの状況だよ…。何かと言うと俺の目の前に居る、この…。

「ねえ？」

「んー？なんやの？」

あの“ないすばでえ”な狐女と向かい合って睨み合っているんだ  
よ…orz

「いや…俺ら一体いつまで睨み合っているつもりなのかなってさ？」

「えー！ええやないのー。それに睨み合うやのうって見詰め合う言うてえな」

訂正…狐女のほうは見詰め合っているつもりだったようだ。ナニ、コレ？俺が何かしたか？確かに最初この子を見た時、いいなあなんて考えましたよ？でも、戦いの最中にこんなお見合いみたいなお見合いなんて考えもしなかったよ…。

彼女の他にも2人の狐女が俺達を見て何やらクスクス笑って見てくるし…。何なの？この子達って…。

因みにラミエルさんは元気に周りの鬼達を追い回して荷電粒子砲で屠ってますよ？ミサイルは使わせません。隠蔽が大変だから…。ナノマシン兵器なんて以ての外だ。仮に使用したら辺り一面を有機物、無機物関係無く解体分解して砂漠化しちゃうのよ。

ととつ、今それはどうでもいいな。

「だからさあ…狐女よ。戦わなくていいのか？」

「なんで戦わなアカンの？なんや面倒やし。どうでもええわー」

「えー…。どうでもいいって、そんな、えー…？だって召喚主には従うものなんだから？」

この子、本当に何がしたいの？お兄さんには若い子の気持ちがわかりません。歳食った俺にはハードルが高過ぎると思うんだ。女の

子の心がわかりません。それに召喚主の命令はどうなったのさ？

「へえ、ああ？あの召喚主な。ほほほ あのお人なあ？こちら呼び出したのはええけど制御は二の次だったんよー」

「はあ？」

何それ？呼び出すだけ呼び出して制御はされていないってこと？  
えー…ダメダメじゃね？それって。まあこうして戦う面倒が無くて俺としてはいいんだけど、ね。この子達とはあまり戦いたいとは思わないしさ。

「ほほほ 鬼どもは対魔の抵抗が高こうないよってなー？それで従わせられるんやー。でも、こちらはちゃっうねん」

「狐女は対魔の抵抗値が高くてアイツの制御下に無い、ってこと？」

「そうやー あんたは話しが早くて助かるわー …ん？」

「なんだ？どうしたの？」

んー…？何やら狐女の存在感が薄れてきたよう、な？これってまさか…？

「残念やわー。もう還らなアカンようや…」

「あー…やっぱり。ということは八才達が術者（水島）を仕留めたのか」

「ふふふ ほなな、魔法使いさん。縁があったら、またお会いしま

ひよ  
」

「あいよ。またね」

もう顕現するのも限界みたいだね。サーツと砂人形が崩れるように狐女達は消えちゃった。うん。次の宴会の時にでも呼び出してみよう。是非ともな！

今回会ったからあの狐女達の魔力は覚えた。これでピンポイントに呼び出せるね。彼女達の舞を宴会の時に披露してほしいと思うわけですよ。話しを聞くとところによると、とても流麗にして可憐だということじゃないか。見たいねえ

『我が主よ。話しは終わったのか？』

「ん？うん。ラミエルもお疲れさん1人で大変だったでしょう？」

タイミングいいねえ。ラミエルさんも敵の掃討が終わったみたいだ。…森の所々がラミエルの荷電粒子砲で焼け焦げているようだけどね。風に乗ってくる匂いが焦げ臭いです。

『あのような雑兵がいくら居ようと結果は変わらぬ。…数が多く手間がかかったがな』

「そっか。ありがとうね」

いやー、任せちゃってごめんね？俺も、まさか狐女達の相手があなるとは思わなかったのよ。アレは攻撃し辛いつたらないね。戦闘の意思の無い子って手が出し難いのよ。

『ふんつ。ね、礼などいらん！我が主を守ることは我への至上命令だからな』

なんでラミエルさん、ツンデレってんのさ？ただ頑張ってくれたお礼を言っただけじゃないか。これのどこにツンデレる要素があるんだ？気持ち、かーいーからいいけどね。少しからかってやる

「…命令だから、なの？」

『あつ！いや、その…。そ、それだけではないぞ？我自身、我が主を守ろうと考えておるゆえな』

あらまあ 慌てちゃってまあ …成長したなー。前はもっとキビキビして堅物っぽい感じだったのに。…俺の愛機を分解吸収してくれちゃったりしたお茶目な部分もあるけど、ね。いい加減、愛機に乗ってみたいです。ハア…。

「ククツクツクツ！うん。ありがとう」

『わ！笑うでないわ！』

ラミエルさんのハスキーボイスが響いた時に聞き覚えのある声が聞こえてきたんだ。俺が良く知っている声だね。

「…楽しそう？…和気藹々？」

『ぬ？』

「おろ？シルビア、もう終わったの？」

我らの悪魔ロリ娘シルビアちゃんです …… 暗い森の中、血の滴るハルバードが今日のワンポイントですね？わかります。シルビアの小柄な可愛らしさとのギャップがものすごく激しいですよ…。可愛いものは可愛いんだけどな！

「うん…。だから…」

「クツクツクツ。俺のところに来たんだ？」

「……そう。…迷惑？」

迷惑のはずがないじゃないか！俯いてモジモジしたりなんかして、あら？頬が赤いですよ？もう かーいーなー お兄さんは嬉しいですよ？お仕事が終わったら真っ先に俺のところに来てくれてね。

「そんなこと無いよ。おいで」

「…うん」

皆が来るまでシルビアに膝枕してあげて皆が終わるのを待ってることにしたんだ。実際、戦闘の爆音が終息に向かっているからね。もう終わるぞ。

『む？我が主よ。白包丁らや他も来たようだぞ』

「え？…クツクツクツ もう、皆は心配性だな…」

すごい速さで皆が近づいて来る反応がコミュニケに表示されていた。それを見て俺は嬉しい苦笑を一つして皆を待つ。シルビアも、もう少し横になりたいだしね。

『まったくだ！我が居るから心配など無いと言つに…だいたい…ブツツ』

あー…ラミエルさんが愚痴り始めちゃった…。自信があるなら気にしなければいいのにね？ラミエルさん1体でも新世界の艦隊を余裕で屠れるくらいの性能があるんだよ？

…ラミエルさんも自分自身を魔改造しているしね。正直言つて今後の性能が把握できませんって。

「皆、今夜はお疲れさま。大きな怪我が無くて何よりだ。後の処理はミリーと隠蔽班に任せて帰還してね」

「ハッ！了解！」「」「」

アイリやファレノ、リチラ、それに三課の皆に第四機甲中隊にも帰還をお願いした。これからは隠蔽工作だから必要な装備が違うのよ。工作用の機器は別にあるからさ。

「オリビエ達もお疲れ様。今から還すね」

「あいよ！またいつでも呼びな！」

「おいしいお酒があるの～。今度は宴の時に呼んでくれると嬉しいわ」

「また…。待つてる…」

今回も彼女達にはお世話になりました。あとリビエラ？是非とも飲もう！その時には狐女の舞も見られるはずだからさ。

「ハオとユエは…」

「吾らは我が君と行動を共にします」

「そつか。直ぐにミリー達来る。隠蔽工作が終わったら帰ろう」

「ハッ」

2人はいつも通り、っと。それにしても今回の俺って戦ってないなあ。…なんだか皆が俺を戦わせないように動いているような気さえするんだよなあ。気のせいかもしれないけどね？俺も戦いたいわけじゃないからいいし。

ふう…ミリー達はまだかなあー…。

Side out 葵

麻帆良市近郊の森林…。

Side ミリエール

予定以上に被害が酷いから機材の準備に時間が掛かってしまったわあ。残留魔力の処理だけなら機材はいらないんですけどあ。金属片や遺体の回収は専用のカブトムシを用意しないとならないのよねえ。

でもあ…お蔭で主様をお待たせしてしまったわあ。ごめんなさいねえ？

「主様あ。お待たせして申し訳ありませんわあ」

「あー、いいの、いいの。気にしないで。…それじゃ時間も無いし、始めちゃってくれる？」

「はあい 後のことはお任せくださいねえ」

「うん。それじゃお願いね」

主様もお帰りになったわねえ。それじゃお仕事頑張りましょうねえ 証拠を残さないように最後の仕上げをしないと後が大変だものねえ。

「さてえ、皆さあん。お仕事を始めますわよあ？隠蔽班の皆さんはあ周辺の残留魔力の緩和と除去。あとできる限り樹木と地面の再生もお願いしますねえ」

「アイアイ・マムッ！」「」「」

んー いい返事ねえ。いいお仕事を期待しているわねえ ……下手なことしたら再訓練で猛特訓よねえ。私も頑張るから上手くやりましようねえ

「機動兵器の皆さんはあ、今回の証拠となりそうな金属片や敵の遺体などの回収。それと土木関係を頑張ってくださいねえ」

キュイン…ピピッ…ピ…。

この子達は一度命令の指針を出せば後はやってくれるから楽よねえ。命令外のこととは自己判断で対処するしねえ。判断できないことは再度、上から指示を受けるかするものねえ。

「さあ！張り切って作業に当たりますよう」

「…………はい！…………」

これなら工作に1時間も掛からないわねえ。準備を万全にしたから作業は早く終わりそうだわあ

Side out ミリエール

### 第三十六話「侵入者と待ち伏せと大迎撃と」後編（後書き）

はい！という訳で、前中後編…何とか乗り切ったぜ…！

3日連続投稿するつもりだったのに間に合わなかったぜい…orz  
すみませんでした。

初めからプロットなんか無いからあつちにフラフラこっちにフラフラ…。

修正が大変だった。後編なんか落とし所を探そうと考えていたら指が勝手に暴走。出来て見ればこんなことに…。

ここからは、また不定期更新になります。

もしかしたら突発的に今回のような連続投稿がある（？）かもしれませんが…。

ではまた次回にお会いしましょう！！チャオツ！！

第三十七話「予想外とロケットと木乃香と」(前書き)

この作品、ほのぼのは切っても切り離せませんよー！  
では、どじろー！

### 第三十七話「予想外とロケットと木乃香と」

喫茶店クレイドル店内…。

Side 葵

4月、季節は春…早いもので木乃香ちゃんが無事に小学6年生になった。明日菜も昔の仏頂面がウソのように活発に動き回っている。

そして2ヶ月前にそこそこ大きな規模の侵攻を受けた麻帆良学園都市…とは言っても当時の学園側は侵攻してきた敵の目的が“何かは知らない”。でも近々麻帆良に“侵攻してくる”という情報を掴んでいた。

まあ結局のところ何事も無く時間は過ぎていたので掴んだ情報はミスと認識しているはずだ。これも電子制圧した人工電子精霊に、そういう風に“誤認”させたんだけどね。現場は戦闘後、直ぐに処理してあるから証拠も出ないしね。

隠蔽工作万歳だね

これで彼らからすれば何も起きていないように見えるのだ。感覚的なものとはかく事実としてね。これは一つの視点から見れば、それは間違いない事実として受け入れているということに他ならない。気付かぬ内に曖昧なモノで煙に巻くのだよ。

そんなわけで麻帆良市は今日も平和です。ええ、平和ですとも。

裏で何があるうとも知らなければ何も無いのと同じなんだから。…  
考え方が傲慢？はんっ！知ったことじゃないね！家族や知人、俺に  
被害も不都合もないし。

### カランコロ〜ン

「いらっしやいませー…って何だ。木乃香ちゃんか」

お店の玄関に付いているカウベルが鳴ったからお客様だと思っただけど来たのは木乃香ちゃんだった。学校の終わった時間帯とはいえ今日はどうしたんだろ？

「むうう。失礼やなあ。お客さんに向かってそれは無いと思うんよ。…それにわたしのことは木乃香って呼んでって言うてるのにー」

ちゃん付けが恥ずかしいということかな？難しいお年頃という時期のようだ。

それと木乃香ちゃんが自分のことを“うち”と言わなくなったのは実は最近だったりする。小学5年生の終わりの時だったかな？一応、ここは関東圏だものねえ。周りの言葉遣いに影響を受けますよねえ。

でも、刹那ちゃん同様にテンパると言葉遣いが一時的に戻っちゃうんだよねえ。「あわ、あわわわ！」なんて言いながらさ からかうのが楽しくて、楽しくて くくっくくっ

「失礼も何もクラブ活動が無い時の大半はここに来るじゃないか。まあ来るのは構わないか。…だが、閉店まで居て帰りは俺達を送ってんだぞ？お菓子だって…」

何が楽しいのかクラブ活動や用事が無い時は日がな一日、店でお茶しているのだ。店内のお客様が少ない時は俺も木乃香ちゃんとお喋りしてお茶するけどね？俺のこと見てニコニコしているんだ。何でかね？

……そんなに暇なのだろうか？

「わ、わー。すまんてえ！わたしが悪かったわー。だから許してえ」

「反省するなら良し。…それで今日はどうしたんだ？クラブ活動のはずだろ？図書館探検部だか占い研究会だか忘れたが」

別に攻める気なんか更々無いんだ。ただ木乃香ちゃんをからかいたかっただけなんだから

それでマジで今日はどうしたん？思い出したけど今日はクラブ活動がある日じゃなかったっけか？

なんで図書館探検部と占い研究会なのかは知らんけどさ。繋がりが見えてこないよね？関連性が無いように思うんだけど。それは個人の自由なのかなあ…。本人は楽しそうだしねー。

「あー…えーとなあ？お、怒らん？」

「……内容によるな。言ってみ。とりあえず聞くから」

俺が怒りそうな内容なのか？俺が怒るような？んー…？家族は今のところ全員、五体満足、無病息災、交通安全、安産祈願…最後の

2つは違うか？それはいいとして家族には何の被害報告ないし…。

あと怒ることと言えば…工房？自分で言っていて思うけど、それは…無いな。それ以外といえれば…何？思いつかないんだけど。  
…ナニ、コレ？コワイ…。

「ほおけ？あんなあ？昔、葵兄さまに綺麗なロケット貰ったやんか？」

「ああ、挙げたな。大切な人の写真でも入れなかって言って渡したよ  
うな記憶がある」

魔力隠蔽用のアイテムでしょ？確かに渡しましたよ。お蔭で西の者以外が誘拐しに来ようとするヤツが激減したしね。楽させてもらっています。俺的にはお店がメインなので非常に助かっていますよ。

因みにこのロケットね？実は2つあるのよ。とは言っても片方は形だけでただのロケットなんだけどね。その片方は刹那ちゃんに渡してある。「木乃香ちゃんの写真でも入れなさい」、って言って渡しておいた

そして刹那ちゃんにはオマケで俺が撮った“笑顔が眩しい木乃香ちゃん写真”を渡しておいた。親切にロケットにちょうど入るように尺を調整しておいたんだよ？渡した時の喜びようは、それは、もう……ねえ？想像に難くないというものでしょう？

「そんでなあ？今日の朝、起きて見たらそのロケットに知らん間に罫が入ってたんよ」

「なっ！？」

こ、壊れただとう!?あまりのことに俺は驚愕の表情だ。開いた口が塞がらない。市販の物よりも丈夫に作ったつもりだったけど、そんな…。ハハ…ミスったなあ。本当に、つもり、だったんだなあ。

科学者で技術者、そして錬金術師としてどうやら恥ずかしいが計算を誤ったようだ。刹那ちゃんが中学一年に来日するまで持てばいいと思って作ったのに…失敗したなあ。予想以上に木乃香ちゃんの保有魔力の上昇値が高かったようだ。

ナギを目安に考えて作ったのになあ。木乃香ちゃんの保有魔力はナギ以上ということか…。あーも…。原作ではなんてあったかなー?ええとー、あー…無理!八百年近く前のことなんて覚えてないよ。

あー、ちくせう。思い出せなくてイライラするわー…。

「お、怒らんとして!わたしも知らなかったんや!寝る前は何ともなつてへんかったのに…」

「あー…いや、気にするな。別に怒っているなんてことは無い。驚いただけだ」

「ほんま?ほんまに怒ってへん?」

「ないない、怒ってないから(ニコニコ)」

イカンなあ。ついイライラして表情が顰め面になってしまったようだ。考えるのは後にするでしょう。今考えるのは壊れたマジックアイテムのことだ。

「よかったー。それでこのロケット直るのかな？けっこー気に入ってだし、できるなら修理したいんや」

「ふむ。とりあえずロケットを見せてくれるか？じゃないと判断がつかん」

「あ、うん。…ええとー、これなんやけど…」

「拝見します。どれどれ…。はあ？…えー…？あー…」

何これ？うわあー…見事に核の部分が罅割れているんですけど。内部の圧力に耐え切れなくて外装にも罅ができたんだな、これは…。どうしよう、これ？外装だけならまだしも流石に核が損傷しているとなるとなあ。

いっそのことーから新しいのを作るか？それが手っ取り早いよなあ…。あー…でも、今、気に入っているって言っていたしなあ…。

「ど、どうやる？直りそう？」

「……………結論から言うと無理だな」

「そ、そうなんか！？え！どうして!？」

え？なにをそんなに動揺してんのさ？気に入っているとは言っていたけど、そんなに大事に使ってしてくれたのか？そうだとしたら作った本人としては嬉しいものだね。うん。

「軸と言うか、芯から亀裂が入っているからこのまま修理しても遠

からずまた割れるかもしれない。…でも手はある」

「それは何なん!?!」

直るかもしれないと聞いた途端にエライ食い付きようだねえ。さつきまで泣きそうな顔をしていたっていうのに。嬉しいのかなあ? いや、誰だって大事な物が直るかもしれないと聞けば嬉しくもなるか。

「一度全部溶かして再成形することだ。これなら元のまま同じ物ができるし強度も問題無い」

「……どれくらいでできるんかな?」

「???…急ぎなら今日中に仕上げるがどうする?」

木乃香ちゃん、何でこんなに真剣なのかね?目がマジですよ?まあ、そこまで真剣に考えてくれるなら作り手としては応えるしかないでしょう!」

普通に再練成するとなれば1週間弱の期間が掛かる…。だけど工房内の設定を弄れば1時間を最大72時間まで引き伸ばすことができる現実で二時間と少しあればできないことは無い…かな?マリーに相談しないと…。

「お願いします!」

「わ、わかった。今日は送るからこのまま待つて居てくれ…」

「はいッ!」

嬉しそうだなあ…。満面の笑顔ですよ？これは失敗は許されないなあ。…少しヤル気だして頑張ろうっと！あーっとうと。その前に店番をお願いしないとね。

「それじゃ…ミリー？ミリー、ちょっと来てくれる？」

「はあい 木乃香ちゃんですnee？お任せくださいなあ」

奥に居るミリーを呼んでお店と木乃香ちゃんのことを頼んだ。流石にお店を無人にしたり閉めるわけにはいかないからな。

「お願いね。2、3時間したら戻るから」

んー…！それじゃ、サツと終わらせてくるかね。木乃香ちゃんの喜ぶ顔も見たいし

Side out 葵

魔法球「工房」内…。

Side マリエール

「工房」内の鍛冶場で機動兵器用の新しい装甲の研究をしていた。そんな時に珍しくも、まだ喫茶店が開店している時間帯にもかかわらず私が私のところへ訪ねていらした。

挨拶を交わした後、事情を聞くと木乃香殿に渡したマジックアイテムが破損したので大至急、修理をしたいということだった。

私は、あのアイテムが破損？と疑問に思った。私達の計算では来年の夏ごろまでは保有魔力の隠蔽と抑制。これらの効果が問題無く持続するはずだった。

一応、素材となる貴金属や魔法的、呪術的な効果にしてもそこらに市販されている一般の物よりも丈夫に、高性能に作ったのだが……。どうやら木乃香殿はこちらの予想以上に保有魔力は蓄積していたようだ。

ふう……。まあ何はともあれ修理か……。

「はぁ……。それは構いません。ですが急ぐとなるとアイテムのどこかに不具合ができませんか？」

「そこは人数でカバーしようと思うんだ。それに元々は来年の春まで効果が持てば、あとは形だけ持てばいいと思っていたんだよね」

「来年の春……。中学の一年ですか？それはまたどうして？」

なぜ、そんな中途半端な時期なのだろう？それならばいつそのこと麻帆良の小中高大の学校を卒業しても効果を持続させてしまえばいい……。これの副作用は、まあ……。多少はあると言えばあるのですが。

それでも死ぬような目に遭うよりは親の願い通りに一般人として静かに暮らされたほうがよろしいように思うのです。まあ暫らくは

私達の行動も監視の都合もあり拘束されるし大変でしょう。しかし、それもたかが数十年、大した労力ではないです。

それなのになぜ？あと一年持てばいいなどと主は言われるのでしよう？

「何簡単なことだ。来年の春には刹那ちゃんも来るんだ。彼女が木乃香ちゃんの近くに居れば護衛の手間も省ける」

「確かにあの子の成長には目を見張るものがあります。ですがこのアイテムが不必要になるとは思わないのですが？洩れ出る保有魔力の抑制と隠蔽ですし」

あの烏族のハーフの娘ですか…。一族では禁忌の白い翼を持って生まれてきたばかりに周囲の他人から白い目で見られたようですね。私から言わせれば何が禁忌なのかがわかりません。

それは私の今の有様が通常の精霊とは違い、著しく変質してしまっているからかもしれませんね。変質したのは家族全員に言えることですが。因みに今の私達は所属が世界から主に換わり、主の御手により最上級の力を与えられた亜精霊や異悪魔です。

話しが逸れました…。

それにしても刹那殿が護衛を引き継ぐにしてもあの子1人で守れるものでしょうか？それは乞われれば助太刀しないこともないですが…（ボソツ）ただ、主が助けると言うならば、ですがね。

うっうんッ！そ・れ・よ・り・も！刹那殿が来るからといって、それでこのアイテムが不必要になるということですが理由としては

弱いように思います。

今は周辺の魔法系の団体には麻帆良の名義（偽造ですが何か？）で威嚇牽制し予防線を張ることで魔法関連のイザコザは目に見えて減少しています。ですが注意が必要なことには変わらない。

「いいの、いいの。そのくらいの歳になると無理に魔力をpushさえないのは返って身体に悪影響を与えかねないしね」

「悪影響…身体的な成長のことですか？多少背丈が低くなるくらいならどうと言うことは…」

やはり主はアイテムの副作用のことが気掛かりだったのですね…。ならば今回のことは幸いだったのかもしれませんが。通常の成長から見て、予想では10cmほど低くなるかと考えていましたしね。……体重も比例して減るんですけどね。

まあこのアイテムの欠点は成長不良で身長が伸び難いだけなので、すから、この切欠を改良してみましょう。魔力の隠蔽と抑制の効果を減衰させる代わりに副作用を緩和または、相殺してみようと思いません。

口では背が低くなるくらいいいのでは？などと言いますが、これも主の考えを広げるためのアクションに過ぎません。否定的な意見も時には役に立ちますからね。私自身もそれで幾度か助けられたことがありますし。

意思是幅広く持つべきです。ええ、そうですね。

「それはダメ。どちらにしても木乃香ちゃんの意味を確認せずに反

しているんだから成長を妨げていましたなんて……言えないでしょう?」

「それでも命を狙われるよりはマシではないかと思うのですが」

一応、否定的なポジションで話しを進めていきます。ただ私自身は別に反対ではないですから殺伐もケンカもしなければ夜のプライベートレッスン…げふんっげふんっ。失礼しました。何かを受信してしまったようです…。

まあそれはともかくアイテム作成の話でしたね。内心、作ることに否は無いです。口頭での、このやり取りも社交辞令的なものに過ぎませんしね。

「親の意向で木乃香ちゃんは何も知らないんだよ?それはマリーも知っているでしょう?それなのに、ある日突然「貴女を守るためにしました」で納得すると思うか?俺ならキレルね」

「あの子の性格から考えると「そおなんやー」で済ませそつな気もするのですが…」

ちよつと話していたら木乃香殿の父君の詠春殿のことが出てきた。

確かに彼は前魔法大戦を自らの目で見て、更に戦後の状況も放浪して紛争に介入して治めたり、焼けた町の復興風景など悲惨なものを直視してきましたからね。娘だけは魔法に関らずに幸せになってほしいという親心なのでしょう。

これも主からの又聞きですが詠春殿の親としての気持ちも芯の部分で理解はできません。ですが想像くらいはできます。

ただ木乃香殿本人に魔法のことや今回のアイテムのことを教えても先にも言ったように「そおなんやー」や「ほえー」で終わってしまいそんな気がします…。あの子、少しだけ天然さんが入っていますからね。

寧ろ主が木乃香殿に「君を守りたいんだ」なんて言えばもの凄く恥ずかしかって喜ぶのではないかとさえ思います。

あの子からは“私の”主に向ける目が桃色な気がするのです。幸いにも主は気付いていないようですが…。このまま気付かないで居てください。切実にお願ひします。ええ、もう本当に。

「……例えが悪かった。今のは無しだ。…ええとな？俺がイヤなんだ。うん、これで行こう」

私の指摘に主は考えを改めるようです。木乃香殿の行動を想像したのでしよう。それはそうと「俺がイヤなんだ」という発言…。これはどういうことでしょうか？

……はっ！？まさか主は木乃香殿のことを異性として気にしておられる！？自分がイヤ！？それはつまり…アレですか！？ひ、光源氏計画！？そんな！？ダメです！！主には私達が居るではありませんか！？これ以上増やすのは、やめましょう！！

いやッ！いやいやッ！！いやいやいやッ！！！落ち着け私ッ！！そんな素振りは今まで一度も無かった！そうです！ありませんでしたとも！！

ふっ、冷静に考えれば簡単なことでしたね。つい想像（妄想）が

先走ってしまったようです。反省ですね。因みに私の表情は変わらずポーカーフェイスのはずですから怪しまれてはいないはずです。

「……はあ。そうですか」

「そうなの。この2ヶ月で背も伸びてきたところから見ると今が彼女の成長期だからね。配慮すれば魔力も多く母親似の美人になると請け合いだ」

「確かに人間の中では将来有望ですな。…（ボソツ）ですが主は絶対に渡しません。ええ、渡しませんとも」

主…。見ていないようで実はよく見ていたんですね？木乃香殿か…。まだ幼いですが要注意人物かもしれませぬ。皆と相談しなければ…。

「???…よし！作業に移るぞ！」

「御意ですツ！！！！！！」

「ツ！？」

少しヤケクソ気味に返事したのは気合の表れです。…たぶん…きつと。

Side out マリエール

喫茶店クレイドル店内…。

Side 木乃香

店内に掛けてある時計を見てみた。葵さまがお店の奥に行つてから2時間が過ぎとつた。今日中に直してくれるって言うとなつたけどホンマに出来るんやろか？葵兄さまのことは疑つてないけど心配やなー。

わたしはロケットを渡す前に取り出した写真を見て「ふう…」と夕メ息を吐いた。写真の中には顔を真っ赤にしてはにかむ、せつちやんが写つとる。かわええなー 会つて話したいわー…。それにしても、ええ笑顔しとるなー。

……確か、これ撮つたの、葵兄さまやったっけ？ちよつとずるいわー。わたしもせつちやんと話したいのに…。でも、写真を撮つとるちゆうことはせつちやんの向けるこの表情は葵兄さまってことやね？この表情は……。まさか、ねー？

「ふふふ それがロケットに入っていた写真かしらあ？」

「ッ！？…う、うん。そうやよ。せつちやんの写真やねん。葵兄さまが撮つてきてくれたんよ」

お、驚いたわー…。なんやミリーさんかー。後ろから覗き込んでくるんは良くないと思うへー？ヤマシイことしとる訳やないけど知らん間に声掛けられるとドキツとするやん。ミリーさん、ニコニコ笑顔だから怒り難いわー…。敵わんわー。

「そう…。木乃香ちゃんは刹那ちゃんのが好きなのねえ」

「うんっ！わたし、せつちゃんのこと好きや…そやけど、せつちゃんにわたしのことどう思うとるんかな…？」

わたしがこつちに来てからも何も言うてくれへんのや！。月に何度か京都へ行く葵兄さまばかり、せつちゃんと話してズルイと思うんよ。…しかもこの写真を見る限りめっちゃ楽しそうにしとるようやしな！。

葵兄さまと何を話しとるんやろ？わたしもせつちゃんといっぱいお話したいわー。今も避けられてるみたいやしな！。どうしたらええんや？はあ…。葵兄さまは大丈夫って言うてくれるけど不安やな！。

あ、でもでも。わたしがちっさな時に葵兄さまがもしもダメな時は何でも言うこと聞いてくれるって言うてくれたことがあったな！えへへー 気休めだったんやろがめっちゃ励まされたな！

「大丈夫よお、心配ないわあ。刹那ちゃんも木乃香ちゃんのが好きよお 心配なんて無いわあ」

「あはっ それ葵兄さまにも言われたわー。いつでもわたしのことそう言うて励ましてくれた。…えへへー」

ミリーさんも葵兄さまと同じこと言うてくれたー やっぱり家族って似るもんなんかなー？励ます言葉なんかが葵兄さまとソックリやったわー うん！なんや元氣出てくるわー えへへー

なんて「頑張るへー！」って気合入れたら写真が私の手から落ち

ても……う……た……！？マズイ！！あの写真！せつちゃんの写真の裏にある“2枚目”だけは見られたらアカン！！

咄嗟に手を伸ばして拾い上げようとしたら横から別の……ミリーさんの手が写真を拾ってもうた……。親切心からかもしれないんが今は、その親切心が余計に感じたのはわたしだけの秘密や……。マズいな……。

「……（要注意人物なの、かしらあ？）あらあ？写真の裏に、もう一枚？何かしらあ？ペラッ……っ！！あ、あらあらあ」

見る！？普通、見る！？返すやん！！普通、返すやん！！ペラッて……ペラッて捲る？！何はともあれマズイわ……。葵兄さまの家族に……わたしも姉さんと思つとるミリーさんにバレてもうた……。

いや！ちゃうやんっ！今は取り返さなっ……！！

「ッ！？！か！勝手に見たらアカンッ！」

取り返したけど……。遅かったわ……。バッチリ見られてもうたしな……。こんな時どないしたらええんや……。ううう！ミリーさんはニコニコと見てくるし……。恥ずかしいわー！

「主さ……店長の写真でしたけどお……。ジイイイイ……」

「あわ、あわわわわわ！それは、その、えと！憧れ……そう！憧れなんよ！？優しいなあ。安心するわー、なあって思うだけなんよ！？他に意味なんて無いってー！あははははー！」

「……私いまだ何も聞いてないのだけどお」

「は!？」

これは自爆やった!？

「待たせたな。修理できたぞ。……何してんの？」

「な!何もあらへんよ!あはははー!うん!ないない!」

わたしが自爆してどないしょーと考えてたら思わないところから救いの手が出てきた!流石は葵兄さまや!苦しい時に助けてくれる!でも、写真のことは秘密やからここは勢いに任せて押し切るしかないわー!

この時にミリーさんには秘密にしてもらおうようお願いしといた。何でか知らんけど快く了承してくれたわー。何でやる?

「…あらあらあ 店長、もうよろしいのですかあ？」

「ん?ああ。思ったより作業が捗ってね。予定よりも早く出来上がったんだ。それよりも本当に何も無かったの?木乃香ちゃんが、少し(?)だけテンパっているように見えるんだけど」

「ふふふ 何もありませんよお。それよりも品物を木乃香ちゃんに渡さなくてよろしいのですかあ？」

そつや!わたしのロケットは!?

「あ?ああ、そうだった、そうだった。…木乃香ちゃん、はい、これね。材料は壊れたロケットを溶かして作ったから採寸も重量その

他も、まったく同じに出来ているから」

「あいがとー、葵兄さま。ほんま嬉しいわー。うわー 綺麗に直つとるー」

わー 元通りになって返ってきたわー 貰った時の綺麗なまんまになつとるわー

「ふふんっ 喜んでもらえたようで何よりだ。…ああ、そうだ、木乃香ちゃん？また何かあれば持って来るといい。こちらで対処しよう」

「ええのー？わー ありがとうー」

んー、早々何度も壊れたりはしないとと思うんやけど…。でも、今回みたいに突然、壊れてまうこともあるかもしれん…。そうなたらお願いするしかないもんなー。その時は頼らせてもらおう

「よしよし。さて、そろそろ時間も頃合だ。ミリー…いや、今日は俺が送るか。ミリーは閉店準備をお願い」

葵兄さまが私の頭をポンポンって撫でながら笑ってる。ちっさい頃から私の頭を葵兄さまの暖かくて優しい手が撫でてくれるのが私は好っきやねん なんや身も心も任せて安心出来そうな気持ちになるんや。

ぼわわーって優しい気持ちになれるわー でもな、葵兄さま？お店閉めるんは1時間近くも早いと思うんや。ええんかなー？

「そうですねえ、少しだけ早いですけどお…。ふふふ わかりまし

たわあ。お任せくださいなあ」

なんでわたしを見てお店閉めるのに賛成したん？ニコニコ笑ってるし…。氣い遣わせたんかな？ニコニコ笑つとるからわたしにはわからんわー。

「よろしく。それじゃ木乃香ちゃん、行けるかな？」

「葵兄さまが送ってくれるん？わあ うん！わたしはいつでもええよー」

何はともあれ今日は葵兄さまが寮まで送ってくれる！送ってくれるんは久しぶりのことやから、なんや嬉しいわー いつもはミリーさんがマリーさん、たまにアイリさんかウーリさんの誰かや。

……今、思うたけど人数多いなー。しかも皆、美人さん…。葵兄さまのこと好きなんかなー？んー…？うん！今は、それよりも葵兄さまと一緒に居られることを喜ぼー えへへー

「そんなにはしゃぐことじゃ…こら、引つ張るなって！木乃香ちゃん！」

「えへへー 聞こえへんもーん ほおら早う行くへー あっ！ミリーさんお邪魔しましたー！」

わたしは葵兄さまの腕に抱き付いて玄関まで引つ張った。

「だから引つ張るなって…おいつ！？」

「あらあらあ またねえ？気を付けるのよお」

えへへー

S i d e  
o u t  
木乃香

第三十七話「予想外とロケットと木乃香と」(後書き)

木乃香が難しい…。誰か教えてほしいですねえ。

でも、もう少しでネギ少年が来そうな気がする。

次か…その次か…そのまた次かで。

要するにまだ未定だったりしますな！

正直、作者の気持ち…テンション次第だったりします(笑)。

では、また。感想&ご意見お待ちしています

第三十八話「散歩と夜道と金髪幼女と」(前書き)

木乃香の関西弁？京都弁？難しいと思った。

作者の使い方が間違っているのでは？と感じた。

でも自分ではわからないので指摘されるまで、やめない。  
では続きをどうぞ！

### 第三十八話「散歩と夜道と金髪幼女と」

麻帆良市内学園近郊の桜通り…。

S i d e 葵

日が沈んだ夜、少し気紛れに散歩に出た。未来で吸血鬼事件と言われることになる学園近くの桜通りに来た。付属魔法球の「桜の苑」じゃなくて麻帆良の桜を見たかったんだ。夜桜つてのも時にはいいものだよな。

時期が時期だから若干、散り始めているけど…。

「もう直ぐ5月か。桜も散り始めているな…。」

『何か、思うことでもあるのか？』

「……夜道とはいえ声出すのは、やめようよ。誰に聞かれるか、わかったものじゃないんだからさ」

ここは麻帆良女子中…つまり学園長に近いから話しているところなんかを見られたりしたら、目も当てられない。そうじゃなくても時間的に部活で遅くなった人が通るかもしれないんだ。偶然とかはマジで勘弁だ。

『ふんっ、我に抜かりは無い。魔力、重力場、動体、熱源、その他センサーやレーダーで周囲に人はおるか猫1匹居ないのは確認済み』

『よ』

その辺りは信頼しているけどね。確認のために聞いてみただけだし。万が一のことが無いか、見落としが無いか、そんな確認は互いに必要なことだ。直前で忘れていたなんて笑えないよ。

えっと、何の話だったか…。

あー…？そうそう！思うことだったか？思うこと、ありますよー。木乃香ちゃんに渡したアイテムロケットのことだ。大丈夫じゃね？と考えて作ってあったのに壊れたんですよ？へこんだね、うん。

「そっか。…まあ、木乃香ちゃんに渡した新しいロケットの様子をこの1ヶ月近く観察したけど順調に効果を発揮しているようだったね。修理に問題は無いみたいでよかった」

『貴金属の生成はマリーらが、そしてウーリや我が主らが形成したのだ。当たり前だろう』

「いやー、そうでもないんだよねえ、これがさ…。それが証拠に木乃香ちゃんに渡したロケット壊れたし。あれは反省だったなあ。もっとキャパシティに余裕を持たせておくべきだった」

ロケットを作った時は他の仕事が忙しくて手が行き届かなかったからなあ。…おかげでアイテム破壊しちゃったし。これはやはりモノ創りの人としては手を抜いちゃいけないということだよな。

市販の物よりも性能は高いけど俺から見れば不良品だな。一応、二度とこんなことが無いようにしたから大丈夫だろう。1ヶ月間、様子を見たけど問題は見られないしね。

『うむ。それは反省するべきだったな。何事にも余裕を持たせておいて損は無い。だが我が主は同じ過ちを二度はしまい？ならばそれで良いではないか』

「ラミエルさん…。くっくっくつ。ありがとう」

こうして慰めてくれる家族が居るから俺は今も頑張れるんだよね。元来の俺は臆病者で怖がりだからさ。支えてくれる家族が居ることがありがたいよ、本当に。お蔭であらゆるモノと戦うことが出来る。

『れ、礼など無用…む？リーダーとセンサーに反応有り。この先に小さな生体反応がある。…多少、生体、魔力反応が歪ではあるが子供のようだ』

「こんな場所で、こんな時間に子供が？…変だな」

ゆっくり歩いていたらけど気が付けば周りには樹木が生い茂っている道に出ていた。昼間に訪れれば、いい森林浴になったかもしれない場所だ。でも、夜の雰囲気は…何と云うか、悪い魔女の住む森？

肝試しには持って来いのポイントだなあ…。工房の倉庫に悪霊が封印されたビンが幾つかあったはずだから何体か放してみようかね？現代に黄泉がえる本物の死霊の森…。絶対にやらないでおこう。俺自身が怖い…。

それは、ともかく子供か…。それも反応が歪？どういうことだ？刹那ちゃんみたいに何かとのハーフなのかね？でもそんな記録は学園データバンクには無かったはずだし…。見落としたか？

んー…気になるなあ。どうしよう？行くべきか、行かざるべきか

…。

『どつする？無視することもできるが…』

「…いや、見に行こう。もしかしたら迷子なのかもしれないしな」

そう、反応が歪だからって敵対者とは限らないじゃないか。単なる少し特殊な子で、ただの迷子かもしれない。こんな夜と森だ。一人寂しく泣いているかもしれないじゃないか。

ならばお兄さんとしては… 行くしかない！！

『歪な反応から見て…むう？この幾つかの微弱な魔力反応は使い魔か、式神の類か？我は見逃したほうが良いような気もするが…。何だ？消えた？ふむ…いや、なるほど』

「…どつたの？」

え？何？これって何かの罠なの？使い魔とか、式神とか聞こえたんですけど！？でも、消えたって…。あー、護衛の人が対処してくれたのかな？

『何でもない。ここは我が主に従おう。行くぞ』

「????？」

まあラミエルさんが何でもないと言うから大丈夫なんだろう。それに言われるまでもなく行くけどね！どんな子かは知らないけど子供がこんな時間に1人で居るなんてイカンでしょう？行かないとね。

あの子か？…金髪？幼女？…あれまー、エヴァンジェリンじゃないか。何でこんなところに？無視するか…でも、ここまで来たんだからなあ。…よし、少し、からか…げっふん、げっふん、話してみよう！そうしよう！

「こんばんは。こんな時間にどうしたの？」

「む？なんだ、貴様は？」

おふ？いきなり話しかけられたから警戒心を抱かせてしまったよ。うだ。絶妙な距離をとられた。直ぐにも逃げられるし一撃を放てる、そんな距離感。熟練者の気配を感じられるねえ。

一応、俺を俺として知っている者以外には俺と認識できないようにするメガネをしている。魔力開放しなければ一般人に見える…はずだ。

相手は魔力封印と登校地獄の呪いが掛かっているとはいえ、あのダーク・エヴァンジェリン闇の福音だ。下手なことをしたら直ぐにでもバレることだろう。それでも！！からかう話すためには接触しなくてはならないのだよ！！

おっと、黙っていたら怪しまれてしまうな。

「…いや、夜に子供が歩いてるから迷子かと思ってさ」

「こー？子供！それに、ま、迷子だと…！クク、ククク！この私に

良くぞ、ほざいたな…ククク！」

……これは失言だったのだろうか？夜なのに、この子の背後に暗いオーラが幻視、出来るようだ。負けることは無いとはわかってはいても気持ち的には怖いなあ。

でも、身体的には子供なんだよね？もしかしたら身体が冷えて腹痛なのかもしれない。だって俯いているし、プルプル震えてもいるしね。それに風邪も引けば花粉症にもなっていたような…。

「いや…お嬢ちゃん？俯いてどうした？ポンポン痛いのか？」

「…#ツ！」

あ、あれ？これは違ったのか？額に大きな#マークが出てきた…。ここはアレかな？少しジョークを混ぜて話してみるべきなのかな？

「A h a h a h a ! ! それともお母さんと逸れたから寂しいのかな！？」

「…# # ツ ! ! !」

……大きな#マークが2つに増えました。何この子？ジョークもわからない堅物だったか？頑固ちゃんだったのか？頑固なのは刹那だけで十分だよ…。

いや、この子はからかうのは好きだけどからかわれるのは好きな子だったかな？生粋のSっ子なんだね！

……いっそ、苛め抜いて心の奥に隠されたMっ子を引き摺り出し

てやろうか？

しかし、俺はソフトSであってハードでは決して無い。寄って別の話題で話しかけてみようと思う。身体的に問題は無い。ジョークも通じない。ならば…!!

「あつ、お腹空いたのか？あー…今はアメしかないけどいる？」

「…## #ツ！…！」

なんだよ！？また#マークが増えたよ！3つになー！！

何！？食べ物の話題でもダメなのか！？俺は好きだぞ！食べ物をバカにする者は食べ物に泣くんぞ！バカにしているのか！？エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル！！

……なんて幼女を責めることなんて俺に出来ようはずも無いですね。必要に迫られればやらないことも無いけど…今は必要ないですね。

それに、もうね？俺は思ったのさ。直接、どうしたのかを聞くてね…！！

「本当にどうしたのさ？黙ってたなら、わからないよ。お兄さんがお家に送ってあげるから元気だそ？ね」

「貴様は……………ツ…！！…！」

「ッ!?何!??どうしたの!?!」

後半の言葉か?!少し調子に乗り過ぎたか!?!今まで黙っていたのに行き成り怒鳴るとかは、やめようよ!暗い森の近くだから怖いでしょや!?!ってか、驚くからやめよう!

こら!ラミエルさんも反応しないの!小型荷電粒子砲をこっそりと展開しないの!?!大丈夫だから!まだからかえる範囲だから!じやなかった!話せる範囲!笑える話しの範囲だから!

「何だ!?貴様はッ!?!この私を闇の福音と知ってのことなのだろうな!?!」

「...は?あ...はいはい!名前がエヴァンジェリン・ダークなのか。じゃあ、エヴァちゃん...」

「ちつがーッ!?!二つ名だッ!?!それに私の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだッ!?!わかったか!?!」

そんなにムキにならなくてもいいじゃないですか...。一般人なら名前かと思うだろう?普通、二つ名なんて無いって...。というよりエヴァンジェリンよ?一般人にその異名を名乗ってもわかるわけが無いって...。

まあいいか...。それよりもここはもう一つこの勢いで聞いてみようかな。行き成り“キティ”なんて呼んだら怪しさ爆発だからね。

「へえ...立派な名前なんだね!因みにAとKの意味は?」

「アタナシアとキティだツ！！それがどうかしたのか！？……ハツ  
！？しまったツ！？」

勢いよく教えてくれて、どうもありがとう！！……あれ？アナスタ  
シアじゃなかったん？……うつわ、俺、素で間違えていたんですけ  
ど。少し恥ずかしいな……。しかし、アタナシアという……不死？キ  
ティが子猫だから……不死の子猫？

「アタナシア キティ 子猫？へ、へえ？可愛い……ね？」

「貴ツ様……ッ！忘れるツ！！いいな！？絶対忘れるよ！！？忘れな  
ければ殺すからな！！？」

「は？何で？可愛いじゃないか。子猫ちゃん、なんてさ」  
キティ

不死のはどうしようもないけどね……。それよりも何をそんなに嫌  
がっているのかね？可愛い名前だと思っただけ……。あっ！だから  
か！？可愛いと威厳が出ないとかいう……。これは憶測だな……。

「ソノ名デ呼ブナー……ッ！！イイナ！？二度ト、ソノ名デ呼ブナ  
ヨ！！？わかつたな！！！？」

「えー……」

いいじゃないか……。これ、いいじゃないか！エヴァンジェリンを  
からかい放題だぞ！……やり過ぎるとキレられるけどな！今も少し  
片言になり始めているし……。こっわ！ただまあ、そこは絶妙な加減  
が必要だな……。飴と鞭の要領でイけるだろうか？

「えー、じゃない！！何なんだ！貴様というヤツは！？呼ぶなった

ら呼ぶな!！」

「可愛いのに…」

最後の抵抗くらいは許してもらえと思うんだ…。実際、名前と外見は可愛らしい幼女だしね。喋ると耳年増で生意気な幼女にジヨブチエンジするけど、な…。あの年恰好の幼女が生意気に話しても微笑ましいだけだよ、マジで。

保有魔力と魔法技術が高いから下手に刺激すると暴れ出すだろうけどさ。そして俺は彼女が封印されている今こそが、からかう絶好の機会だと思うんだ。……可愛いと思ったのは本心だけだ。

「か!?かわつ……んんっ!いいから貴様は私の言うとおりにしたらいいんだ!！」

「じゃあ、エヴァちゃんです」

妥協するんだからせめて俺は“エヴァちゃん”と呼びたいです。年下なんだからいいだろ?年上をちゃん付けするのは抵抗があるけどエヴァちゃんは見た目相応に年下だし。……桁が違うけど。

「ぐつ!こいつは……!ま、まあ、それで妥協してやろう…。寛大な私に感謝するのだぞ!?いいな!？」

「はいはい お兄さんが感謝の印にアメちゃんをあげようねえ はい!あーん?」

意外と素直なエヴァちゃんへご褒美にアメちゃんをあげようと取り出した。そして一つを取り出してエヴァちゃんの小さな口元へ…。

うっわー…マジで小さい　かーいーなー

このアメちゃんね？家のお土産用のお菓子なんだ。7個入りで150円。少し割高だけど一つ一つの味が違っている。それに特性のハーブエキスを練り込んであるから鎮静、高揚などの違った効果もそれぞれにあるのだよ。

材料も一般の物を使っているから魔法使いにもバレない。じゃなければ今、エヴァちゃんに渡せないよ。下手に魔力が籠もった物を渡そうものなら問い詰められそうだしね。

「な？あーん、だと！？私を子供扱いするな！！というか！アメなどいらんわ！！」

「えー…。美味しいよ？俺の手作りだよ？人気商品だから、なかなか手に入らないんだよ？次は食べられないかもしれないよ？」

これは本当。人気商品だから店頭に並べると開店1時間で売れ切れてしまうんだ。これを目当てに来る人も居るくらいなんだよ？それと平日は奥様方、休日は学生さんが買って行く傾向にあるね。

「……なら、普通に寄越せばいいだろうが。ほら！」

んっ！と、手を出すエヴァちゃん。でも、その顔はそっぽを向いて目を合わせようとしない。

エヴァちゃん…。欲しいなら欲しいって素直に言えばいいのに。それに俺が最初にしたことを忘れたのかい？……“あーん？”は譲れないのだよ！！

「ダメ はい、あーん？」

「こっの！？…あ、あーん…！」

なんだかなあ…。この子、歳の割りに素直な部分があるよ。お菓  
子か？甘い物があるからなのか？女の子は甘い物が好きだからか？

……エヴァちゃんは女の子だ。600歳でも“女の子”なんだ！  
女性は歳が幾つになろうとも“女の子”に変わりは無いんだ！！！  
ロリババアなんて…ババアなんて呼ばせないんだからね！！？

すまん…取り乱した…。しかし、今の意見を取り下げるとは決  
してしないことは、ここに宣言させてもらう！！………可愛いは正  
義…いや、真理だと思っただよね。

「はい」

「んぐ…ころころ…うまいな…。もう無いのか？」

かーいーなー 頬つぺたがぶつくりと膨らんでますぜ？保護欲を  
懐かせるね

それにしても暗くて見え難いから何のアメを渡したのかはわから  
ないが気に入ってもらえたようだ。美食家なエヴァちゃんが気に入  
るということはアメちゃんの増産も視野に入れるかな。工房内なら

幾らでも作れるしな。ボロいねえ

「くっくっくっ、気に入ってもらえたようで嬉しいねえ」

「う、うるさい!…それで無いのか?」

赤くなってまあ。可愛いなあもう お持ち帰りしちゃいそうじゃないか!…: やらないけどね? 誘拐なんかしてタイーホされたくないです。クサイ飯食べたくない…: 美味しいご飯を食べたいです。

ふと腕時計をさり気なく見て時間を確認した。ふむ…? そろそろ  
頃合、かな。

「あるけどね! はい。アメちゃん7個入り…: 残りは6個だね」

「貰ってやろう。それで貴様、名は何と…: 居ない!？」

エヴァちゃんの気がアメちゃんに逸れた一瞬の間に逃走。穩行に  
ラミエルさんのステルス。そして高速移動術。いろんなモノを駆使  
して跳んだり跳ねたり飛んだりして逃げました。

またねえエヴァちゃん なかなか楽しかったよ

????.

逃げに逃げ、俺は喫茶店のあるレストラン街の入り口まで逃げて

きた。

「ふう、ここまで来れば大丈夫かな？」

『…追ってくる反応は無い。我が主が穩行で気配遮断し、我が熱光學迷彩を行使したのだ。一瞬とはいえ気が逸れたならば離脱は大して難しいものではない』

「エヴァちゃんが魔力を封印されているのも理由にあるけどね。本来の力ならば気付くだろうな…。いや、気配に関して彼女の嗅覚は凄まじいものがあるか…」

魔力云々よりも血の匂いや纏う気配でバレるかもしれない。アレ？じゃあ俺は？……認識阻害か？それでも気付く時は気付くと思うんだけど。俺は小物臭しかなかったってことなのか？うわー…へこみそう。

『しかし、何をしたのか知らないが現在は封印されている。結果が全てだぞ、我が主よ？』

「まあ、その通りと言えばその通りなんだけどね…」

封印関係はまだ研究浅いからなあ。あー、でも完全解呪は出来なくても一時的な解呪なら出来なくも無いかな。エヴァちゃんを縛る封印の現状はそれとなく見たけど時間を掛ければ出来なくは無いか。

まあ俺が解かなくてもネギ少年が将来的にやるだろうさ。いつになるかは、わからないが…。

『それよりも我が主…接近する途中で、あの娘に気付いていただろ

う？無視してしまえば良いものを…」

むう？ラミエルさんにはバレてたか…。知らない振りしていたのになあ…。でも、そのおかげでAがアナスタシアではなくてアタナシアだつてことがわかったしね。あれにはビツクリだった。思い込みって怖いね？

「いや、だつて、ねえ？報告書だけで実際に話したことなんて無かつたからさ？どんな子なのか、からかつて、じゃなくて、話してみたかつたんだよ」

『本音が洩れていたような気がするが…』

「気にするな。俺は気にしない」

気にしたら負けだよな？

『ふむ…。結果的に何も無かつたのだから良しとするか』

「それじゃ、帰ろう？あー…それにしても気紛れの散歩で思わぬ遭遇をしたなあ」

時間的にエヴァちゃんだったらエヴァハウスに引き籠もってゲムしているか、夜の警備で森を彷徨っているかと考えていたのに当てが外れてしまったよ。

『日が悪かつたのだ。諦めるが良い。生体反応と魔力反応は記憶したので次からは出会うぬようにナビゲートもしておこう』

「うん。必要な時はよろしくね？」

『任せるが良い』

流石はラミエルさん　これで来年まで変に遭遇することは回避できそうだな。

Side out 葵

?????。

Side エヴァンジェリン

月が綺麗な夜に気紛れで散歩に出ていた。そして暫らく歩いて桜通りへ続く森の近くを歩いていたら見知らぬ男に話しかけられた。

学園都市内で、学生でも教師でもない人間……。怪しさ満点ではないか。この身は忌々しい呪いと魔力を封印されている。そのせいで面倒で不本意なのが学園警備の約定もある。一応、形だけでも警戒し誰かと問い質した。

なのに、その男は私のことを迷子の子供扱いをしてきたのだ!! おのれえ……! 魔力が封印されていなければギツタンギツタンにしてポッコボコにしてやるのに!!

その後も色々あったが何よりも失態だったのは私の名前のことと気付かぬ内に逃げられたことだ!! この私が気付かないとはな……。

あいつは何者なのだ…？あつ、名前を聞いてない……。

散歩を終えて帰路についた私は自分の家の玄関の扉を開けて中へ入った。

「まったく…何だったのだ、アイツは？」

「ヨオ、御主人。随分ト長イ散歩ダツタジャネエカ？」

帰ってきた私を迎えた、この口汚い笑う少女を模った人形の名はチヤチャゼロ。私が作った中で古参の従者だ。……今は私の魔力が封印されているのもあり喋ることが出来るだけの呪い人形に成り下がっているがな。

「チヤチャゼロ…。なに、不思議なヤツに出会って、な。私のことを子供扱いするわ、怒らせるわ、アメでご機嫌を取ろうとするわ。……なんか思い出したらムカついてきたな」

「ケケケツ！大シタ野郎ジャネエカ！御主人ヲ、ソコマデ小馬鹿ニ、スルナンテヨオ！」

「うるさいぞ！チヤチャゼロッ！魔力さえ元に戻れば、あんな無礼者など一捻りだったのだ！チツ！まったく忌々しい呪いだ！」

ええい！ナギめ！忌々しい呪いを掛けおって！おまけに10年以上たった今でも解けんとは……！バカ魔力を使いおって……！いつになったら呪いは解けるのだ！？噂では死んだようだが……信じられない。

あのナギが……Gよりも、しぶとそうなアイツが死ぬとは思えない。

「ケケケツ！ソレハ自業自得ツテナモンダゼ？気ニナル情報ヲ聞キ出ソウトシテ返リ討チニ遭ツタンダカラナア」

「そんなことはわかってる！しかし、私を助けたナギが言ったのだ。私よりも長く生きているヤツが仲間に住た、とな。気になるだろうか？」

そう、私は崖から落ちそうになったところをナギに助けられた。その夜に焚き火を囲んで話している時に聞いたのだ。「俺の仲間だったヤツに八百年生きてるのが居る」と…。ナギのヤツは話した後、慌てて「しまった…秘密だったっけ…？」と零していたが。

私にとっては大事なことだ…！死なない身体、尽きない命。この永遠の孤独は自分だけだと思えば私よりも二百年前から、その孤独に耐えている者が居るのだ。同族かもしれない、と思うのは当然だろうか？

まあ開き直ったナギが言うには同族では…吸血鬼では無かったらしい。だが、不老の肉体を持っているのは間違いない。気になるだろうか？ならば探すしかないか…。

「オレ様八知ラネエナ！戦エレバ、ドウデモイイゼ！…ソノ結果ガ、コレダガナア。様アネエヤ！ケケケケツ！」

「ふんっ！…九重・葵とかいう、その男は話しに聞くところによると、どこかで半分隠居しているらしいではないか。どこかは最後まで分からず仕舞いだっただがな」

その居場所を聞き出そうとナギに近づいたのに逃げて教えようとなし。当初、手っ取り早く終わらせようと考えたのに暫らくナギ

を追いかけることになったな。

その時の一戦で敗北…本っ当にツ！不本意な勝負だったが敗北した。その後、ナギにふざけた呪いを掛けられて、この学園に縛られることになったのだ。魔力も封印されているし…。くそッ！

封印から3年経ったらナギが呪いを解く手筈だったのに私は今もこの学園に縛られている。

「封印モ解ク前ニ、ナギノ野郎モ、オツ死ンジマツタカラナア。コレジャ探シニモ行ケナイゼ！」

「ああ…。いや、待て…。思い出した。確かナギは葵に私が探していることを伝えると言っていたはずだ」

そうだ。封印された時に私は確かに、ナギに九重・葵への言伝を頼んだ。10年以上前のことだが、な…。ナギはちゃんと伝えてくれたのだろうか？

「10年以上前ノコトダロ？ソレデモ姿ヲ見セナイツテコトハ…」

「…葵が私のことを無視しているのか、ナギが伝え忘れているのか」

そう、そうだな…。未だに会えていないのだ。言伝が届いたかどうかも怪しいものだ。ナギはバカ者だからな。ただ「会いたい…」という一言すら時間が経つほど忘れてしまう鳥頭だ。はあ…。

「…元気出セヨ、御主人！シケタ面ナンカ、ラシクナイゼ！？」

「ふっ、そんな姿のお前にだけは言われたくないな」

「ヒデエ！？コンナンニナツタノ八御主人ノ所為ダロ！！」

「ふふんっ」

不器用ながらも励ましてくれる従者の人形チャチャゼロ。こいつも早く自由に動けるように封印を解かなければな…。

「…オイ？オレ様ニモ、アメ、クレヨ」

「……………ダメだ」

「ケチケチスンナヨオ？1つクライ、イイジャネエカ」

「うるさい。……………全部、食べたんだ」

「御主人……………」

何も言つな、チャチャゼロ…。散歩の帰り道で気が付いたら美味しく全部食べていたんだ。売っている店を探そう…。あつ、そこにあの男も居るのか…。ふふふ

この時の私はなぜか店を探して、そこに居るであろう男に会うことを楽しみに感じていた。

S  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t  
  
H  
ア  
ン  
ズ  
H  
ン

第三十八話「散歩と夜道と金髪幼女と」(後書き)

エヴァ可愛いよ エヴァ可愛いよ

でもこの作品で本格的に主人公と絡ませるかは作者の気分次第……。  
木乃香？気分次第では今後切るかも……？

冗談だけどね！！でも2人と絡ませるかは審議中なり。  
では皆さん！またお会いしましょうね！？チャオッ！

第三十九話「事後報告と地下施設と戦力生産と」(前書き)

そろそろ原作を開始したい…。と、思う今日この頃の作者です。  
では、続きをどうぞ！

### 第三十九話「事後報告と地下施設と戦力生産と」

麻帆良市上空…。

S i d e    アイリス

機動戦艦アングレカム艦内の私の執務室にて各部署から提出された報告書进行处理していた。その中の一つで昨夜、閣下が夜に遭遇した人物、そしてそれに関する書類報告と記録映像を確認した。

「…それでは監視がエヴァンジェリンに付いていたのか？」

「そうみたいなの。隠密性を重視した式神だったの…」

「対処が必要か…」

「ううん。護衛役の子が術式に介入して術者には擬似情報を流したの。だから当面は安心していいと思うの」

ふむ、良い判断だ。下手に監視を消すと相手に要らぬ疑いを与えてしまうからな。…あれ？閣下が離脱する時って怪しくないか？行き成り姿を消すって…。閣下…おふざけが過ぎますよあー…。隠蔽する私達の身にもなってくださいよ…。

エヴァンジェリン本人から近衛翁に報告が行ったら厄介なことになる、か…？いや、彼女が素直に報告するとは思えない。戦闘に遭ったなら話しは別だが実際はただの世間話だった。警戒するに越し

たことは無いが重度の警戒は必要ないか。

「ふむ…。一度、誰にどの程度の監視が付いているのかを洗い出したほうがいいだろうか？」

「賛成できかねますわね。こちらの存在を知らせてしまう結果になるのではなくて？得策ではないですわ」

リチラの言うとおり、今私達が動いて感付かれたら閣下に申し訳が立たない。閣下の指示あるまでは雌伏の時だ。麻帆良の地下に建築している生産施設プラントと活動拠点。そこで戦力の増強、物資の生産、魔力蒐集など、まだまだやることはある。

「確かに。……では現状の警備体制を維持する」

「それがよろしくてよ」「わかったの」

「ふう…。しかし今回のことは失態だった。こちらへ監視が無いとしても、他の者には有り得るのだったな。ああ、失態だった」

閣下の行動も予想の外だったのもあるが他に監視対象が居たのは想定外だった。旧世界の魔法使いの一拠点だとしても、なぜ学園都市に監視が必要な者がいるのか？

閣下が接触を持った人物は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

ハイデライトウオーカー  
真祖の吸血鬼。

ダーク・エヴァンジェリン  
闇の福音。

マカ・ノスフェラトゥ  
不死の魔法使い。

ドル・マスター  
人形使い。

禍音の使徒。

悪しき音信。おとすれ

童姿の闇の魔王。

などなど、数々の異名を持つ元\$600万の賞金首だ。一時期は、こちらでも監視していたことがあったが短期の内に切り上げたものだ。…それに今は手配が失効して取り下げられているな。サツと流し見たところデータ上では人知れず退治されたとある。

学園側…近衛翁が本国へ、そのように報告したようだ。調べを進めて行くと当時の近衛翁は不足していた学園警備員を求めているようだ。その愚痴とも言える内容をナギは覚えていた。

それが彼女の不幸の始まりだったのだらうな…。エヴァンジェリンはナギの出鱈目な魔力で出鱈目な呪いを掛けられた。その呪いは…。

“登校地獄”…。

名称だけを聞くと、もの凄く馬鹿らしい、この呪い。術式の内容は単純で強制的に対象となる学園がある地に縛り付けるといふ物だ。単純故に強力。これでは呪いに籠められた魔力を上回る魔力を持ってレジストするしか手が無い。

その呪いに囚われて以降、彼女は学園敷地内から一步も外へ出ることが叶わない身となった。魔力も封印されているようだ。それと、なぜ虜となったのかは理由が定かではない。学園データ上には記されていないかった。

そんな彼女に閣下は悪戯心か好奇心からかはわからないが接触したようだ。報告書の内容と監視映像を見たが、どうやら閣下はただ話してみたかったようだが会話の内容が多少アレだ、な…。

あーん、って何ですか！？私にもしてくれてもいいじゃないですか！？そ、それはまあいざするとなると恥ずかしい気持ちになりますがそれが何だっけ言うのですか！？私も葵君成分を補給したいのですよ！！ぎゅ　ってしたいの！！

ただでさえ最近はずいぶん忙しくて時間も無いのに……はっ！？ダメだな、私の中の葵君成分が枯渇しかかっているのかもしれない……。早急に補給しなければならぬ。具体的にはぎゅ　と、したりしてもらったり……。あ、あーん、と食べさせあ、あ合ったり！！

……ダメだ。まずは仕事を片付けてからだ。具体的には対エヴァンジェリン工作だな。よし！

「対処が遅れてしまっていたら葵様を追跡され要らぬ疑いを持たれるところでしたものね」

「護衛役の子が上手く機転を利かせたのがよかったの」

「そつだな」

情報部二課の者達もやるではないか。ふふふ。現時点での、こちらの情報も閣下の身もお守りしたのだからな。

まだ学園側とは敵対はしていないが仮想敵として対処するマニュアル化もしてある相手だ。まあ今後も学園側と敵対はしないとは思いますが用意だけはしておいて損は無いだらう。万が一のことがあった

場合、大変だからな。

「…そ、そそれでアイリさん？葵様は今、何をしていたらっしゃるのかしら？」

視線を忙しなくして手を胸元でモジモジとしながらも話題を閣下の居場所に切り替えるとは…。

リチラ：少々あからさますぎやしないか？お前はアレか？仕事なんかサツサと切り上げて葵君に会いに…甘えに行こうとしているのか？甘露ストロベリーな空間に突入しようとも言っ気なのか？ああっ！？……ちっ！行かせん！1人では行かせんぞお！！

「…閣下か？ラミエルからの定期連絡では地上拠点（喫茶店）地下の工事状況を確認しているはずだが」

「地下？……ああ、「神木・蟠桃」ほんとうの。ここに来て直ぐに始めた工事ですわよね？」

「そう、それだ。この地は22年の周期で魔力が極大点を迎える。その集束点が「神木・蟠桃」ほんとう。ここの連中は別名、世界樹と呼んでいるらしいぞ？」

魔力媒体の規模から見るに十分、神木と言えるかもしれない。神木の近くに工事初期のころ設置した魔力蒐集機。場所がいいだけにお蔭で魔力の蒐集も捗ること捗ること。今も魔力の充填されたカトリッジが大量生産されている。

「世界樹とは、また…」

「あははは 人からは世界樹に見えるところだ。魔力の蓄積量、八  
ンパないの」

「学園の記録情報上では次の極大点は5年後の予定だ。言うまでも  
ないが、この工事は地下の拠点基地化の他にも魔力の収集が目的だ」

5年後に起こる極大点。予定通りならばこれで魔力カートリッジ  
を一気に生産できる。……そういえば大型カートリッジの生産がま  
だだったな。今の内に大型カートリッジ専用の生産ラインを地下施  
設に建設しておくでしょう。

「言われるまでもありませんわ。しかし、この資料を見ると地下の  
構造物：遺跡は、当時の魔法使いもこの地の守護、または魔力を利  
用しようとしたみたいですね。要塞：いえ、神殿かしら」

「興味は尽きないが今となっては調べようもない。だが、頑強な構  
造物であるから工事も捗るといふものだ」

「そうなの。工事の下地が出来てるも同じなの。今は隔壁や壁の補  
強をして監視網を敷いてあるの。残りは工業設備の設置。物資や戦  
力を生産すれば完成なの」

監視網：警備システムの施設も必要だな。今は仮設されたものだ。  
故に警備網は十分とは言えない。地下拠点の建設時にブロック毎に  
一部独立した警備システムを敷いている。もちろん総合統括された  
コントロール室は……アンがする手筈だったな。

しかし予備となるコントロール室……これもラミエルにやらせる  
か。アレの処理能力にはまだ余裕があるから大丈夫だろう。これは  
後で葵君に許可を取らないとならないな。

あとは整備システムが稼動すれば放っておいても一機械（AI）が自己判断で侵入した敵生体を捕縛、または排除してくれる。指揮を下す私達も一々設定しなくてもいいから手間を省くことが出来る。

「よろしい。これで閣下の戦力はますます充実するな」

「いいえ、葵様をお守りするなら幾らあっても足りませんわ」

まだまだ戦力が足りないと頭を振りながら言うリチラ。その表情に浮かぶのは力への渴望と愛しき主人を思い、絶対に守るという決意が窺える

リチラよ、一体幾ら戦力を集めれば満足するのだ？……いや、葵君なら「持てるだけ持つ」と言う気がするがな。かといって世界が欲しいなどと聞いたことも無い。葵君は昔から戦事以外は喫茶店を営むことに楽しみを見出している。

「リチラは欲張りなの。流石は元悪魔なの」

「ファレノ…自分も元悪魔だったんだけど？」

「……………」

私の問いに何も言わないファレノ。口を滑らせた彼女にジト目を向けるとススツと視線を逸らされた。

なんだ、コイツは？私にケンカを売っているのだろうか？書類仕事で、なかなか葵君に会えないでいたからストレスが溜まっていたのだろう。少し八つ当たり気味だがファレノに拳骨を落としたのは

間違いじゃないと思う。思いたい。

Side out アイリス

学園地下拠点…。

Side 葵

エヴァちゃんとの思わぬ会合から3ヶ月が経った。あの夜の翌日、アイリに行動を自重するように注意された。説明を聞くとエヴァちゃんに式神の監視が付いていて、あわや俺もそれに引っ掛かりそうになったらしい。

イカンな…。好奇心が先走ってしまったようだ。あの時はエヴァちゃんをからかうことが楽しくて、つい軽率な行動を取ってしまった。

というか式神い？ここ極東の西洋魔法使いの拠点で式神だとお？……<sup>シンイ</sup>学園長か？遠距離からとはいえエヴァちゃんに気付かれない…気付いていたのかもしれないけど。んー、彼女に監視を付けられるのは学園長しか考えられない。

あ、危なかった…。皆にはマジで感謝だったな。あのぬらりひよんにバレたらどんな厄介事を持ち込んでくるか、わかったものじゃないからな。

まあそれだけじゃなくても色々学園地下でやっているしなあ……。これがバレたら面倒だ。責任追及されたらかわしきれないかもしれない……。……全面的に俺が悪いんだけどね？無断で工事しているんだから……。

俺が今居る、ここもそんな場所の一つ……。

「何度か見学に来たけど大分、工事が進んだね。あのボロかった遺跡が見違えたなあ」

今、見学している場所は複数ある大中小の生産ラインが引つ切り無しに動いている生産プラントエリア。次々と無人機動兵器や部品や武器、弾薬などの消耗品が作り出されていた。工事前と違い機械的に様変わりした部屋になっている。

遺跡自体は魔法で補強されていたから破損は無かった。だけど、それよりも植物の蔦と埃が凄かった。地下で植物は太陽光も無かったのに丈夫に大きく育ち。長い年月掛けて高く積もった埃。今まで誰も踏み入れていなかったようだったな。

まあだからこそ、ここに拠点を築こうと考え実行したんだ。誰の目にも留まらない場所のほうに隠密に行動するのに都合が良かったんだ。ただねえ……。店からやや遠いのが難点と言えば難点かな。

「はい。土台は遺跡をそのまま利用したので作業工程を大幅に短縮できました。その分、建物の耐久性や強度を上げるため……」

「補強と増強を重点的に作業したから今のここは鉄壁の地下要塞と言えるよ……」

「……私が説明して差し上げているのだ。口を挟むな」

「サルビア！固い！固いよ！葵くんはこのくらい気にしないってば！ねえ？葵くん」

あつっ？ちよつと待とうか、コーレア……。程よい大きさの柔らかいモノが二つ、俺の右腕に抱きつかれた時に“むにゅ”って“むにゅ”って……おおう。

「コーレア、お前……！」

「何よお！？」

俺に工事状況を説明してくれているのはサルビア。冷静沈着な元悪魔さんで綺麗な青みがかった黒髪と目が魅力的な少女だ。ワンポイントは小さなメガネ。趣味は読書。特技は……崩壊システムの魔法とナイフコンバットだったかな。

それで彼女の説明に割り込みを掛けたのがコーレア。彼女は元気いっぱいな元風精霊のお姉さんで薄いライトグリーンの髪を短いポニーテールにしている。趣味はアウトドア関係、あとはお喋り。特技は風システムの魔法全般。

そんな2人は今、何故か可愛らしくケンカ腰です……。しかも俺の後ろには何も言わないけどハオとユエの2人が護衛として控えていたりする。彼女達の頭にはいい感じの“#マーク”が幾つか見える。

「そこまで。説明の途中だ。続きは終わってからにしよう。じゃな」と怖いお姉さん達から説教されるぞ？」

「なっ!?!」「え……?」

俺の背後を見たんだね?ならわかるでしょう?不毛な争いが如何に無益か、さ。俺は、内容は知らないけど陽月の姉妹、精霊・悪魔の3人娘達のお仕置きは……それはもう、凄いらしいです。はい。

「……続きを」

「ハ、ハイイイツ!!」「」

ハ才が漏らすたった一言の催促にサルビアもコーレアも首が取れるんじゃないかと思えるくらいの速さで頷いていた。

「どんだけお仕置きが怖いのか……?本当に何をされるの?皆に聞いても微笑むだけで教えてくれないし。お仕置きされたであろう子達に聞いてもヤバイくらいガクガクブルブル震えるだけで話せない……。はあ……。」

それでこの地下基地の工事の進捗状況。その他諸々の問題となった、またはこれからなるであろう部分の説明。警備施設の稼働状況。学園側に感付かれてないか?侵入者の有無。地下基地の隠蔽は万全か?など……。

それと拠点を建設するに至った今回のメインディッシュ。魔力の蒐集。通常のカートリッジと大型カートリッジの一定生産に成功という嬉しい報告があった。魔力は幾らあっても困るものじゃないから収集できる時にしておかないとね。

大体の報告が終わってサルビア達は何やら大仕事をやりきった顔をしている。……お仕置きを免れたからかな?さっきまで顔真っ

青だったのに今は血色がいいです。

「…そっか。兵器生産の状況はどう？先週から生産を開始したって報告にあったけど」

「順調です。生産された分は順次、地下施設の各区に分散配備し防衛に当てています。また今後、余剰生産されたものは予備戦力として格納施設へ配備されます」

「今のところ防衛は隠密を重視してね？ここを発見されたくないから」

マジで発見されたくない。さつきもちよろつと言ったけど無断で工事して施設を造っているんだ。バレたら目も当てられない…。故に隠蔽工作には細心の注意を払っている。

熱光学迷彩と人除けの結界を張ってある。電子データ的にもアンが擬似情報を流してある。…ただ学園の人工電子精霊郡のバージョンアップがされるらしい。これは今直ぐではなく2002年の年明け、つまり2003年を目処に実行するつもりらしい。

これは時代に合わせて情報処理能力の向上が目的だ。彼ら学園側もインターネット上の情報操作などもあるから“人工電子精霊郡 Ver.2003”へ強化したいようだ。…これもネットの普及が原因かな？

それはともかくこのことは絶対に見つからないようにしてね？最悪、魔力蒐集機のあるブロック以外はナノマシン分解で施設ごと破棄するけど…まだ、利用したいからさ。…うん、最低でもネギ少年が来るまでは利用したいね。

「ハッ、心得ています。いざとなれば設置したナノマシンを散布、区画毎に施設を粒子分解し破棄。情報の一切の隠蔽を第一といたします」

「ははは、できれば折角造った基地を即破棄なんてことにならないことを願いたいよね」

「でも、学園データバンクは秘密裏にアンちゃんの支配下ですよ？直接この基地を確認されなければ心配は無いと思うけどなあ」

それが心配なんだって…。この学園の人は知らず知らずの内に迷い込んでくるパターンとかがありそうだから怖いんだよ。仮に、その人物が学園側の魔法使いだった場合は最悪だ。一般人ならやりようはあるけどね。

それとアンのことは心配してないよ？信頼しているし、今の世代のコンピュータが束になっても敵わない処理能力をアンは持っているから。それにいざとなればラミエルさんも居る。

「そうなんだけどね…。表向きここは学園側のフィールドだから何が起こるかわからない」

だけど、やっぱりと警戒は怠らないようにそれとなく注意だけしますよ？自信を持つのはいいけど過剰な自信は慢心を生むからダメ。だから程よく気持ちを締めておかないとね。何事も程々が一番なんだよ。

……戦力の過剰所持は、やめないけどね。

「それは……。それでは予備計画として地上学園都市の制圧計画を練るように司令部へ打診いたしますか？」

「くくくくくく、いいんだ。ここも用が済めば破棄する予定だからさ。そうだな……。最低でもあと3、4年ほど隠匿できればいいかな」

予備計画で学園都市の制圧か？サルビアが冷静にそんなことを言うてくるということは……。出来るんだろうなあ。そんなに戦力を溜め込んだかな？高だか数十万機の機動兵器に使い切れないほどの武器弾薬。半永久的な魔力を溜め込んだだけなのに……。

戦力的にはまだ不安な気がする。そうか！どうせなら無人艦なんかも造れば……。戦艦級、軽・重巡洋艦級、空母級、駆逐艦級。それに物資を運ぶ補給艦に戦場後方で修理する移動ドッグ艦。工業プラントをフルに稼働させれば出来なくは無いか。

どれもこれも今のアングレカム一隻なら必要は無いけど艦隊を造るとなると色々必要な物が増える。……。造るか、やめるか。どうしよう？ああ、でも使わない時は時間凍結された格納庫に保管しておけばいいのか。

いつかは世界間移動して次元を越え、どこか違う世界とか行きたいしなあ。戦力というか護衛的なモノは幾らあっても足りないよな？……。ならば造るしかないね？寧ろヤルしかない！？……。これはゴレムと併せて要研究だな。

どちらにしろ、学園制圧や戦闘が出来ても今の俺にメリットが余りに無い。この施設も元の遺跡部分だけ残して他はナノマシン分解してしまうだけだからね。撤収の時間があれば機材は回収しておく

が…。

「そうだったの？私はずきりここに百年単位で定住するのかわかっただよ」

「コーレア、流石にそれは……ああ、でも悪くはないかもしれない。ただど定住するには学園の魔法使いが邪魔だ。そんなに長居する気にはなれないかな」

ここに定住か……。悪くはないけど俺には無理かな。ここは極東の魔法使い達の拠点だ。それ故に目障りなことが多過ぎる。世界樹に蒐集される魔力は魅力的だけど時間を掛ければ同じようなことは出来るし。

この地に拘る理由が無い。……まあそれでも敢えて言うならば子供の頃から見守ってきた木乃香ちゃんと明日菜が気になるくらいかね。木乃香ちゃんがネギ少年に取られるのは癪だが2人ともナギと詠春の子だ。まあいいだろう……。

明日菜は色々と過去にあるがネギ少年なら気にはしまい。正直なところ俺もそんなのどうでもいいし。子供は元気に育ちなさい。その権利は誰しもが持っているのだから。……なんてな、俺には似合わないな。

「では、然る後に制圧いたしますか？新世界はともかく旧世界の我らには政治的な立場は確立しておりませんが戦力的にも資金的にも不可能ではないと思われませう」

だから過激なこととしても俺には一文の得にならないんだって……。

「うっわ、サルビア、大胆だねえ…」

「何が大胆なものか。マスターと私達なら容易いことだろう？マスターさえ、その気になれば、いつでも国崩しが実行できるように戦略、戦術計画は常に用意してある！」

「サルビア、計画書は無期限凍結しなさい」

「何故です!？」

俺の無期限凍結の言葉に驚いたように振り向いてきた。少し目尻に涙が見えた。少し可愛いな、と思った自分を、どうしようもないかな？なんて思わないったら思わない。

それよりも何で、そこまで意外そうに驚けるかね？俺は戦争狂じゃないってば。戦争してまで国なんか要らないよ。俺は君達家族とそこそこに面白い人生があれば文句は無いのよ。……危害を加えられたならばその限りじゃないけどね。

「俺は国なんかいらさないから。以上！」

「うっう！うっう！うっう！」

普段、冷静沈着なサルビアが手をぎゅっと握って上目遣いでうー、うー、言ってる、だど…!？その姿にちょっと萌えた俺は間違いだと思いたい。泣き顔に興奮するなんて…。

それに身贖いなものもあるけど何で家の精霊や悪魔は可愛い女の子ばかりなんだ？例えば、ぶっきら棒な言葉遣いだから男の子の悪魔かと思つて精魔奇兵化してみればボクっ娘だったりしたしね…。こ

れじゃ俺の理性が持ちませんぜ。

「葵くんって容赦無いなあ……。サルビア、泣きそうだよ?」

「……………」

俺が1人悶々と考え込んでいたらコーレアにそんなことを言われた。それでまあ視線をサルビアに向けてみるとそこには……。

「うう……ぐすつ……うえええ……」

泣いてるんだよ!!サルビアがな!!何、これ!?俺のせい!?え、何なの!?制圧計画を凍結したのがそんなに悪いことなのか!?一般的にはいいことじゃないのか!?……はあ、泣く子には敵いません。家族だから尚更ね。

「泣いちゃったか……。あー、もー!大丈夫!大丈夫だからー!泣き止も!ね!?ああああ、ほら!葵くんも何か言って!」

「……………はあ。わかった……わかったよ。凍結は無し。いつか気が変わるかもしれないからね……」

気が変わるかはわからないけど、計画書にするくらいなら許してもいいかな、って思うわけですよ。要は計画を実行しなければ言いだけなんだから。

「ぐしゅ……うう……本、当……うう……です、か?」

「うん。本当だから……元気、出して?」

あー、もー。可愛らしい顔が涙で台無しじゃないか……。てかよ  
う？物騒な計画を否定されただけで泣くのは、やめようよ。あー、ほ  
ら？お鼻チーンして。はい。

「チーン！…うぐっ…はいっ！！」

うん、ちゃんとできたね？いい子　いい子　まったく…ちょっと  
抱きしめただけで、もう笑顔になって。…これはアレだろうか？  
家族とのコミュニケーション不足なのだろうか？だから物騒な計画  
で家族の興味を惹こうとした？

……物騒過ぎじゃね？

あれ？なんかサルビアの顔が真っ赤だ…。少し強く抱き締め過ぎ  
たのだろうか？目も何だか潤んでいるし…。ああ、これはさっきま  
で泣いていたから、か？でも、俺の服の端をぎゅって掴んでくるの  
はどういうことかな？

やはり、コミュニケーション不足なのだろうか？

「……葵くんの女誑し」

「失礼な。俺のどこが誑しだと言っただ？」

そんな俺達のことを見ていたコーレアが言ってきた。俺が女誑し  
？…ないない、ありえない。この世界に落とされて今まで女の子に  
モテたこと無いしね。あつ！家族は別ね？彼女達のお蔭で寂しい思  
いをしなくてすみました。マジで。

そんな俺に対して女誑しと言うコーレア。俺は思うんだ。「よく

見て言おうよ？」って、さ。今のこの状況を見て言うならば、これは家族との不足していたスキンシップだ。俺の癒しでもあることは認めるが断じて誑しでは無いと言いたい。

「…ふう、いいわ。気にしないで」

「ん??それじゃ俺は行くね?この地下基地のことは2人に任せるから」

タメ息を吐きながらも、やっとわかつてくれたようだ。俺はサルピアを放して地上のお店に向けて歩いて行く。その後が続くハオとユエが無言のプレッシャーを与えてきたような錯覚があったが気のせいだと思いたい。だって俺は疚しいことはしていないのだから。

「ハッ!お任せください!」

「あはっ 私達にまっかせなさい」

「よろしくね」

地下基地の管理は2人に任せておけば安心だな。基地警備兵器も順調に稼働している。管理に問題は無い。このまま戦力や物資を生産、管理して工房内の格納庫に保管しておかないと。

ついでに俺の亜空間倉庫にも入れておこう。召喚するよりも低コストで呼び出せるしね。手札は大いに越したことは無い。

来たる日まで、もう少しだ。ネギ少年の到来まで大体4年くらいか?中学2年の3学期中だったから…。そうだなあ、魔力なんて旧世界ではタダみたいなモノなんだから、それまでに搾り取れるだけ

搾り取っておかないと。

兵器生産も学園地下を採掘して原始変換して材料にしているし、資材も確保しておこう。材料は幾らあっても困るものじゃないしな。

喫茶店の経営も順調。木乃香ちゃんも明日菜も暫らく様子を見てきたが問題無い。このまま予定通りに進めばいいな。

あ、エヴァちゃんのことはどうしよう？……いいか。なるようになるさ。あの子ってからかい甲斐があるから、ちよくちよくからかいに行こうかな。

とにかく、あとは原作開始まで待つだけだな。時間はあるし艦隊の作製とゴレムの研究をしようかね？将来、何が必要になるか、わからないんだから持てるモノは持っておかないと。

さて、いつちよやりますかね…！

S i d e o u t 葵

第三十九話「事後報告と地下施設と戦力生産と」(後書き)

メチャクチャ無理矢理だけど次回はネギ少年を登場させたいな。  
なんて考えてますねん。どうしよう…？

例の如く予定だから変わると思いますがけどね。

あ、刹那を出したいから…。ネギ少年は一、二話後かな？

ところで高音・D・グッドマンが麻帆良に来るのを知っている人居  
ます？

中一の時か、二年か…。それとももっと前からか？

感想、お待ちしております！ではでは！

第四十話「護衛終了と引継ぎとサムライ少女と」(前書き)

原作開始まで、また延びた…。

では続きをどうぞ！

## 第四十話「護衛終了と引継ぎとサムライ少女と」

麻帆良レストラン街…。

Side 葵

今は3月下旬、来月の4月には木乃香ちゃんが中学生になる。俺からの積極的な護衛は消極的なものへシフトした。これからの護衛は麻帆良へ来る刹那ちゃんに引き継がれることになる。

その彼女には本来の予定よりも一日早くに俺のところへ来るように、と詠春に伝言してもらった。ここの学園長と会う前に色々と言い含めておく必要があるんだよ。主に俺のこととか…。

刹那ちゃんには俺のことは詠春の友達の“ただの西洋魔法使い”って言ってるけど…。今回は念には念を入れておこうと思うのよ。下手に学園長に俺のことを話されたら絶対に厄介事が舞い込んで来るに決まっている。

だから、その前に刹那ちゃんに話しておかないといけないんだよねえ…。

それでまあ俺は今、麻帆良の駅前で彼女の到着を待っているんだが、腕時計を見るとそろそろお昼にちょうどいい時間だった。俺の腹の空き具合もいい感じだ。

ん？あの電車かな？

平日でもまだ春休みの最中だから電車から降りてくる人は疎らだった。その中に綺麗な黒髪をサイドテールにした刹那ちゃんの姿がある。……竹刀袋で偽装しているけどどう見ても野太刀です。だって全体の長さが竹刀のそれよりも長いし……。

子供の頃は意地っ張りな可愛い子だったけど今は木乃香ちゃんと並んで綺麗になったと思う。……やや目元が鋭くなっているのが気になるけど、多分それは護衛にありがちな過度な緊張というものだろう。

護衛というか人に関らず何かを守るのは大変な労力がある。精神的な胆力も必要になってくるしね。何が言いたいかと言うと、今からそんなに緊張していたら持たない、と思うんだよね。適度に肩の力を抜いておかないと直ぐにはてちゃうよ。

おろ？刹那ちゃんも俺に気が付いたみたいだ。……いい笑顔するなあ。小さく手を振って歓迎を表してみると刹那ちゃんも恥ずかしそうに小さく振り替えしてくれた。……何でか知らんが真っ赤になつて恥ずかしそうだ。

歓迎は失敗だったのだろうか？

「や 久しぶり、刹那ちゃん。3ヶ月ぶりかな？」

「は、はい、お久しぶりです。お正月以来ですね。葵さんもお元気そうで何よりです」

うん……そうだね。時期的に年始で切がよかったから刹那ちゃんに会いに行っただんだよね。中学に入る前にどのくらい腕を上げたのか

を知りたかったんだ。結果は原作を殆ど忘れているから何とも言えないけど、この歳の子なら強いんじゃない？って感じだった。

一応、万が一の時は多少強引でも叩きのめして鍛えようかと思っ  
ていたけど…。いやー、手間が省けてよかった。俺も刹那ちゃんに  
地獄の特訓をさせなくてよくなったから一安心だ。

特訓は平気で骨は折れるし内臓は破裂する。おまけに肉は焼ける  
わ、凍結するわ、断裂するわ。追加で苦痛に耐えるためとかで四肢  
は潰されるわ…。切り傷や打撲なんて可愛いものだ。

もちろん、死なない限りは完治できるだけの医療技術を保有して  
いる。失った部位も一細胞から培養または複製して元通りにしてみ  
せよう。病気や寿命は…寿命はともかく病気なら大概のものはイケ  
るか？使う機会がなかったから断言するのが難しい…。

魔法には完全治癒呪文があるけどアレは大量の魔力を消費して行  
えるものだ。そして治療後には体内に大量の魔力が一時的に残留す  
ることで肉体、精神ともに犯されることになる。緊急時以外には取  
りたくない手だ。

まあ何事も無理は良くないよね？時間を掛けられる時は十分に時  
間を掛けてゆっくりと治癒させるほうが身体に負担も無く確実なん  
だ。魔法も科学も一長一短だ。それは二つの技術を併せても緩和し  
きれないものがあつた。

時間を掛ければ、その限りじゃないけど、ね…。

話しが逸れたな…。

それよりも少しシヨツクな言葉が聞こえた気がした。刹那ちゃんが“兄上”<sup>あにうえ</sup>と呼んでくれなくなったんだ…。前はあんなに愛くるしいほどだったのに…。これも難しいお年頃というヤツなんだろうか？

お兄さんは寂しいです。でも、子離れ…いや、兄離れか。嬉しくもありません。でも、寂しい…。ジレンマ、ですねえ。

「葵さん…とな？もう“兄上”とは呼んではくれない、のか…？刹那ちゃん…」

葵は orz の ポーズを した ！

「…え？ええー！？」

シヨツク！そんなに赤面するほどイヤだったのか！？昔は多少…大分…結構、頑固だったけど可愛かったのに！！…今は綺麗だけど！！頑固ちゃんなのは変わってないようだがな！！あ？！また赤くなった！？そこまでイヤなのか！？刹那ちゃん！！

「兄上！、兄上！、と呼んで木乃香ちゃんと2人で俺の後をついて回っていた時の刹那ちゃんは…」

「こ！ここ子供の時のことです！それは…！大体、あれは、このちやんと兄上がうちを置いて先に行くから！…ハッ！？」

赤い…赤いよ、刹那ちゃん…。顔色がトマトとリンゴを足したく

らい赤いよ。人間ってここまで赤くなれるんだって初めて知った。

しかし、まだ思い出話は始まったばかりなのに話しの腰を折るなんて刹那ちゃん、失礼じゃないのかな？まあ余程、自分の子供の頃の話しが恥ずかしかつたのだろう。程よくプチパニック状態だった。

そのせい…おかげ？で言葉遣いが昔に戻っていた。多分、気が緩んだのだろう。俺のことを兄上と呼んでいたからな。刹那ちゃんは頑固ちゃんだから相も変わらずからかい甲斐のある子だった。

「うむ。刹那ちゃんイジリも満足したところでお昼にしようか？俺の店だけどこ馳走するからさ」

「…ク！はぁ…。葵さんは変わりませんね…。それとちゃん付けはやめてください。恥ずかしいです…」

「……考えておこつ」

考えるだけだけどね！でも刹那ちゃんも木乃香ちゃんと同じことを言うんだな…。女の子の難しいお年頃というのは俺の理解が追いつかないほど単純で複雑なモノらしい。何時の時代も変わらないことの一つだな、これは。

そんな訳で喫茶店クレイドル。俺の店に着いた。ここまでの道中で色々な話しをした。合えなかった時間を取り戻すように…。ただ、木乃香ちゃんのことを話題にした時の食いつきが悪かったのが気に

なった。

刹那ちゃんなら今にも「お嬢様ーッ！」って大声出して駆けて行きそうなものだけだな。彼女の心の根底に何かあるのかね？まさか…昔、川で溺れた木乃香ちゃんを助けられなかったことを引き摺っているのではあるまいな？

それともアレか？背中の翼のことか？…真白くて綺麗だと思うんだが遠目から見たただだから感触は知らないが柔らかさそうだったのは想像がついた。今度、是非とも触らせて欲しいと思う。お願いしてみようかな？

行き成りはダメ、か…。刹那ちゃん自身が白い翼のことを忌避しているからなあ…。触らせてもらうとしたら俺も秘密にしていることを一つ明かさないとならないかもしれない。刹那ちゃんだけってのはダメなものね。

店内に入って、奥にある応接室へ案内した。ここなら外に話しが洩れることはないからね。何を話しても大丈夫だ。

「それじゃ、改めて歓迎しよう。麻帆良へようこそ。俺達は刹那ちゃんを歓迎しよう」

「あ、ありがとうございます」

「本当に良く来たわねえ 元氣そうで良かったわあ」

「ミリーよ…なぜ、ここに居る？店番はどうしたのさ？…え？マリィとアイリに任せてきた？マジか…それで？…なになに？自分は刹那ちゃんとお喋りしたくて店番を変わってもらったの？ああ、そう

ですか…。

「はい、ミリーさんもお元気そうで私も嬉しいです。他の皆さんはお元気ですか？」

「うふふ 元気も元気よお」

「ごめん。そろそろお昼にしていいいかな？俺も刹那ちゃんもまだなんだよ。お腹空いちちゃってるのよ。…あ、うん。ミリー、ごめんね？また後でね？」

ミリーに店番に戻ってもらって俺は昼食の用意をしようと立ち上がった…のだが、よくよく考えたら刹那ちゃんにも今の好みがあると思いついた。何か食べたいかを聞いてみることにした。

「刹那ちゃん、何か食べたい？それなりの物を作ってあげよう」

「え？それは悪い気が…」

「バカ。何を遠慮しているんだ？俺と刹那ちゃんの仲じゃないか」

何を变に遠慮しているんだか。刹那ちゃんや木乃香ちゃんが小さな時からちよくちよく面倒を見てきたんだ。今更、食事くらいで迷惑に思うわけが無いじゃないか。

それに俺の妹分でもあるからな。これでも仲はいいほうだと思っているんだ。だから、ただの他人よりは深い仲だと感じてはいるのだが…。まあこればかりはお互いに認識の違いがあるかもしれないから一概には言えないよな。

「なな、な仲ツ！？そんな…！うちの仲って…！？はう！？」

「おーい？刹那ちゃん？大丈夫かー？」

刹那ちゃんに一体何があったんだ？赤面するくらいだったら駅前  
でさんざん、からかったからわかるが…今度は頭と耳から湯気が出  
ているんです！！まるで茶々丸だ！！このままでは熱暴走が起こる  
んじゃないかと思えるほどの蒸気を発しているぞ！？

何が切っ掛けでこうなるのかわからないからどうしたらいいのか、  
わからないよ…。自分から仕掛けて、からかったならわかるんだけ  
ど、こういう突発的なことは理解できないわ…。何があった？

「あ！？いえ！何でもない、です！はい…！」

「そう？…それでお昼は何がいい？刹那ちゃんのために腕を振るう  
よ」

そうだった…。自分で言っていて思い出した。俺達は昼食にしよ  
うとしていたんだった。刹那ちゃんの熱暴走に気を取られていて忘  
れてしまっていたよ。

「で、では…魚を主菜にしたご飯物をお願いしますか？」

「いいよー。任せておきな 直ぐ作ってくるからね」

そんでまあ俺はそのまま居住区の台所に来たわけです。まずは冷  
蔵庫の中を確認して…あ、鱈の切り身、見つけ。あと春野菜と他野  
菜。豆腐に納豆、卵…えーっと、油揚げだな。お肉もあったけど今  
は使わない、かな？

さて、リクエストは魚か…。主菜に鱈の白身魚と春野菜のホイール包み焼きにするかな？それで副菜はほうれん草と水菜、小松菜のお浸し3点盛り。生卵と納豆…あれ？刹那ちゃんって納豆大丈夫だったかな？んー…？

まあダメならこれを機に直しておくか。アレルギーとかだったら無理には食べさせないがな。だが、ただの食わず嫌いだったら矯正してやるっ…。くっくく！

「ご飯と大根と油揚げのお味噌汁にして…あとはキュウリとナスのお漬物をつければいいかな？うし 方針は決まったから、パパッと作っちゃおうかね。」

ふんふん ふうふうん ぶんぶん ぶん ぶんぶんふうん ふうん  
ふうん

料理を作っている時、気付かない内に鼻歌を歌っていたらしい。……少しだけ恥ずかしかったのは俺だけの秘密だ。

それはともかくとして料理ができた。応接室に居る刹那ちゃんもお腹を空かせて待っていることだろう。早く持つて行かなければならない！だけど走ると盛り付けた料理が崩れるからやや急ぎ足で運んだ。

見栄えが悪い料理を出して、許されるのは料理ベタな可愛い女の

子だけの特権だと思っただ。見た目アレでも美味しいとかもな！

そんなわけで綺麗に盛り付けた料理を持って応接室に着いた。

「お待たせー。熱いから気を付けてね？」

「はい。いただきます。はむ……あ……美味しい。ふふ、なんだか懐かしいです」

おろろ？優しい顔しちゃってまあ……。そんなに懐かしいものだったのかな？刹那ちゃんを詠春が引き取った時から手料理を振舞ってきたから実質、俺の料理がお袋の味ってことになるのか？あれ？俺は男だから親父の味か？

そんなことはいいか。今はご飯を美味しく食べられれば文句は無いやな。刹那ちゃんも今出した物に好き嫌いは無かったみたいだ。懸念だった納豆もパクパク、食べてくれているよ。

「口に合ったようで何よりだ。まあ刹那ちゃんが小さい時とかはよく作っていたからねえ」

「そう、ですね。私が西の長様に引き取られた時ですから……」

しまった……。つい言ってしまったけど彼女にとっては最も迫害の記憶が色濃い時代だった。笑顔にも影が差しているように見える、よ……？こう……ズーン……って感じのがさ。色白の肌に黒い前髪が掛かっかけていて怖い……。……。

今の刹那ちゃんなら“井戸のあの人”でも演じられそうだ……。もちろん！……衣装は俺が用意しよう！あと……なんとなくだけでも団欒し

ていた部屋の温度が1、2度下がったように錯覚した。

でも、刹那ちゃんや木乃香ちゃんにとってあの頃の出会いには幸せな記憶だったのも事実のはずだ。何をそんなに落ち込むことがあるうか？刹那ちゃんが言ったようにただ“懐かしい”でいいではないか、と俺は思うんだ。

出会った当初から、この子は考え込んで深みに嵌まる悪い癖があるから困ったものだ。まあここに彼女の頑固ちゃんという根底があるのかもしれない。頑固なのも一長一短なんだけどね！？説得するのにメツチャ労力使うしさ！！

そして！俺は多少、冷気が漂い始めた団欒に活を入れるために、とある作戦を実行する！！作戦と言っても刹那ちゃんをからかうだけなんだけどな！！

「刹那ちゃんはその時から一度決めたことは譲らない頑固ちゃんだったよね？くつくつくつ」

「なっ？笑わないでください！それは子供の時のことです！今は…それほど…ごによごによ…でも…」

食事中に大きな声を出すのは感心しないなあ。くくくつ 恥ずかしいのだろうね。ほんのり頬が赤いじゃないか。こら、お箸を銜えたままごによごによ言わないの！う、上目遣い、だど…！？おっほんっ！んんっ！

甘いよ？刹那ちゃん…。セリフの後半は小さ過ぎて聞こえなかったけど“今は”なんて言っている時点で俺の言葉を肯定したも同じなんだ。てかよう？自分でも自覚があるなら改善しようよ…。

「くっくっくっ まあ昔は小さくて可愛かったけど、今は大人っぽくなって綺麗になった。…正直、見違えたぞ？」

「な！？なななな何をツ！？おしゃ、お、おおおっしゃってているのか、わかりません！！」

ちょっと真剣な声を出して刹那ちゃんの頬に手を当てて言った。そうしたら面白いように動揺してくれた。ズザーッ！って勢いよく後退したよ？

……いや？ちょっと待とう、刹那ちゃん？野太刀から手を放そうか。ね？暴れると部屋が傷付いちやうからさ。お願いだから落ち着いてくれ。ほら？こわくない こわくない ……なんでワゴン扱っているんだろ？

「あっはっはっ！ほら？早く食べる。料理が冷めるぞ？……可愛いなあ。くっくっく」

「うぐぐ！ふんっ！…んぐっ、はぐはぐっ！んぐんぐっ…んむっ！…あむあむ！」

ちよっ！？刹那ちゃん！そんなに慌てて食べると喉を詰まらせ「うっ！？」…はあ。慌てるからだぞ？からかった俺が言うのもあれだけど落ち着いて食べなさい。…と、今はそれよりも水か…。

「えーと…はい、水」

「ん…！くぐぐぐっ！はあぁー…」

「くくくつ すまない。ゆっくり食べような」

「……はい。はむ……美味ひい……」

「くくくつくつ」

沢山食べて大きくなりなさい。沢山鍛錬して強くなりなさい。沢山悩み自分の思った通りに進みなさい。俺は何もしてやれないけど見守るくらいはしよう。……気分次第では手を出すかもだけど……。

Side out 葵

喫茶店クレイドル応接室……。

Side 刹那

本来なら明日、麻帆良入りする予定だった私。しかし、それを一日、早めて来訪した。理由は幼い頃から親しくしてくれている葵さんに頼まれてのことだ。

そんなわけで今、私は葵さんのお店兼自宅の一室で遅めのお昼ご飯をご馳走になった後だ。……からかわれたけど楽しかったです。こほん……それで今は2人で食後に緑茶を飲んでいます。ずずず……ほっ。

それにしても葵さんの手料理は久しぶりだったので少し食べ過ぎ

てしまったかもしれない。3杯も御代わりしてしまった……。昔から変わらない味だったことに懐かしい気持ちにさせられたのが大きいのだろうな。

ふふ、当時、葵さんが京都にあるお店を閉めて他の地へ移転すると聞いた時は泣きそうになったものだ。あの時の私にとって兄のような存在だったのだから離れ離れになることを考えると寂しかったのを覚えている。

葵さんが京都を出立されて数日……。お嬢様に並んで親しき人が居なくなり寂しさを紛わせるた。げふんっげふんっ！お嬢様を！……お守りするため！修行に励んでいた。うん！お嬢様のために、だ！他意は無い！

とにかく！本家の裏山で修行していた私だが数日するところと葵さんは何でも無いように普通に現れた。あの時は思った。「私の涙を返して……」。と……。もの凄く寂しくて泣いたのに数日したら現れるって……。あんまりでしょう？……。嬉しかったですけど。

その時に、お嬢様が関東にある麻帆良学園へ出向かれたことは知っていましたが、葵さんも一緒に麻帆良へ出向いたことを教えられた。それに定期的に私の居る京都に顔を出してくれるとも。当時は安堵しました……。ええ……。

そんな昔のことを思い出しながら葵さんと2人で飲む、お茶を楽しんでいたのですが早めに来日した用件を聞いていないことを思い出しました。

「それで話なんだけど……」

「あ、はい。私に出来ることなら何でも言ってください」

西の長を通して私に今日来るように伝言してきたのですから大事な用件なのでしょう。葵さんのためです。多少、無理なことでも、まだ、未熟な私ですが出来る限りの力で応えたいと思います。

私は背筋を伸ばし気合を入れなしました。さあ！何でも言っして下さい！さあ！

「ああ、いい、いい。そんなに肩肘張るような内容じゃないから」

「はあ…？それで話しとは何でしょう？」

気合を入れたのに力を抜くように言われました……。難しい内容ではないということでしょうか？

「その前に刹那ちゃんが来るまで俺が木乃香ちゃんを護衛？…というが見守る役目にあつたことは詠春から聞いている？」

「はい。詳しくは聞いていませんが長からは、そのようにだけは教えられました」

葵さんが一般的な魔法使いなのは知っていましたが、長から聞くまで葵さんがお嬢様の護衛をしていたとは知りませんでした。……強いのでしょうか？普段の兄的な行動を見ると、とてもではないですがそうは見えないです…。

「そかそか。そうなる…どこまで話したものかな…んー…？」

「……………」

苦笑しながら「うーん…？」と何かを考えている葵さん。

長と同じように葵さんも私に話せないことがあるのでしょうか。しかし、長ならば協会の重要機密のこともありますから話すのに慎重になるのはわかるのですが…葵さんは何について悩んでいるのでしょうか？

護衛の引継ぎに関しての注意事項などでしょうか？

「それじゃ最初に刹那にお願いしておきたいことがあるんだ。…いいかな？」

「……………」

しかし、護衛の引継ぎならば協会の長が既に処理済です。ここでしなければならぬのは現場での注意点のみでしょう。それとも、それとは違うこと？……そもそも葵さんのお願いとは何でしょう？

チラッと葵さんの表情を見ると……真剣な表情をしています。普段が普段だけに思わずその凛々しさに見惚れるほどです…。

「刹那？」

「…!!あ!?!はい!!頑張ります!!…!」

いけない…。少し惚けていたようです。私の出した大きな声に葵さんも一瞬驚いた顔をしました。が次には面白そうに苦笑しました。

「くくくつ。いや、まずは話を聞いてから頑張ろうな?」

「あ…はい」

そ、そうですね。まだ何も言われていないのに“頑張ります”は無いですよね？ハハハ…。うう…恥ずかしい。

「おー、おー？照れてんのか？可愛いねえ。くくく」

「あう…」

あうあうあう…。あ、ああ頭を撫でないでください！私も、もう子供ではないのですよ！？恥ずかしいです…。いえ！嬉しくないとさえウソになりますか！？ですが恥ずかしいのですよ！

ああ、でも葵さんに撫でられるのは嫌いじゃないです…。あー、違う！違う！今は、そんなことを考えている場合ではないのです！葵さんのお願いのことですね！？お話しをお聞きしましょう！ええ！

「何だ？もういいのか？くくくつ それでだな。お願いというのは学園長…近衛・近右衛門に俺のことは秘密にしておいてくれないか？ということなんだが…」

「お嬢様のお爺様ですか？ですが、既に葵さんにご挨拶なされたのでは？」

お話を伺ってみるとお嬢様の祖父、現学園長であられる近衛・近右衛門様のことでした。葵さんのことを学園長先生に秘密にしてくれとのことですがお嬢様に関しておられるのですから一度くらいはお会いしているものと思いましたが…。

「……………してないの」

「……………は？」

もの凄く気マズそうに視線を外されました…。それに小さくてよく聞こえませんでした…。それにきつと聞き間違いでしょう。挨拶どころか面会もしていないなんて…。ええ、機器間違いですとも！

「…だから挨拶、してないの」

「……………なぜですか？」

まことに残念ながら聞き間違いではなかったようです…。信じられないことですが葵さんはお嬢様の護衛をしながらも学園長先生との接触を今の今まで回避していたようです。……………葵さんの何がそこまでさせるのでしょうか？

「…下手したら、いいように利用されるから」

「学園長は立派な人格者とお聞きしています。いくら何でも考え過ぎではないですか？」

利用は、いくらなんでも言い過ぎのような気がします…。しかし、葵さんがこうまで言うからには何か心当たりがおりなのでしょう。冗談やかからかうことなんかは多々ありますが葵さんの言には信を置いていますしね。

それに私の聞いたことが全てだなんてことは思いません。ならば葵さんは私も知らない“何か”を知っていると見ていいのかもし

れませんしね。……あ、ここに来る前に長が何か言っていたよう、  
な？えつと…。

「外向きはそうなんだろうけどね。でもアレはタヌキだぞ？…悪戯  
心で何するか、わかったものじゃない」

「…そういえば私の出立前に長が「お義父さんは遊びが過ぎる時が  
ありますから気を付けなさい」と言っていたような…」

思い出しました…。そうです。長に苦笑とともに言われたのでし  
た。

はっ！？そうか！葵さんは自分が学園長の“お遊び”に巻き込ま  
れてお嬢様の護衛が疎かになることを警戒した！そして身を隠して  
お嬢様を陰から見守っていたのですね！？

……流石です、葵さん。護衛としては余計なトラブルに関ってい  
る余裕なんかありませんからね！ならば事前に障害を排除、または  
人知れず回避する…。尊敬します！葵さんがお嬢様の護衛をしてい  
たのは間違いではなかった！

「詠春の認識は間違っていない。アレは遊び心が過ぎる。この前も木  
乃香ちゃんが、「お爺ちゃんが“また”お見合いしろって、うるさ  
いんやー」と愚痴っていたからな…」

お…お見、合…いい？？葵さんの口から爆弾発言…私にしてみれ  
ば十分、爆弾発言です！それが飛び出してきました…！

お嬢様はまだ中学生になったばかりではないですか！？早いです  
！早すぎますよ！？いけません！ダメです！バツです！血迷いまし

たか！？あの学園長がくえん！！こ、ここのちゃんのお嬢さんは私よりも強くないと認めません！！

即 阻止しなればッ！！

「お見合いッ！？お嬢様がッ！？誰とッ！？どこでッ！？何時ッ！？ああああ！！このちゃんッ！！今、助けに行くーッ！！！」

「落ち着け！！刹那！！お願いだから落ち着いて！？そのお話しはそれとなく俺のほうで潰しておいたから！！それはもう、プチッと潰したから！！もう終わったことだから！！」

葵さんが私を止めようと羽交締めにします。強く抱き締めて行かせまいとしています。でも！でも私は…ッ！？あれ？今、葵さんは何と…？

「ああああああ！！あ？ああああ、あ？そうなのです、か？すみません…。取り乱しました…。すう…はあ…。もう大丈夫です。ですから、そのお…」

「…ん？」

「その…は、放してくれませんか？あ…手がむ、胸に…ん！」

暴れていた私を押さえつけようと抱き付かれた時に葵さんの手がズレたのでしょうか。私のむむ、むね、胸に、あ…ダメ、です！そこは！？んんッ！？気持…ごほんッ！！何でもありません！ありません！んったらありません！！

「おろ？ごめん、ごめん。…しかし、これで学園長にバラすのが面

倒というのがわかっただろう？俺は遊びに巻き込まれたくないのよ」

葵さんは私の……を触っていたのに特に慌てた様子も無く放してくれました。私を押さえるためにしたことで他意は無いとわかっています。でも、何だか納得できない自分が居るように感じました…。

「え！？あ、はい！それはもう十分に！絶対に話しません！！」

それにしても、ん…はあ…はあ…ん…あ…。す、少し触られただけなのに…心臓がドキドキしています。今の私自分でもわかるほどに顔と言わずに全身が真っ赤になっていることでしょう…。あう…触られた…はあ…。

しかし今のことで十分に実感しました学園長先生が…お嬢様の障害となるということが…。お見合いなど認めません！お嬢様自身が認めておられるなら、その限りでは 納得できないけど ありませんが…。

お見合いとはいえ学園長先生の行動には警戒しておかなければ、お嬢様に悪い虫が付くことになるかもしれないね…。葵さんの話としては学園長先生の趣味ということらしいですが…阻止します！断固として…！

葵さんのことも学園長先生には秘密にします！葵さんがいいと言っうまで私からは話しませんとも！

「よし それじゃ今日はこのままここに泊まるといい。部屋は用意してあるから」

「え！？そんな悪いです！そこまでさせては申し訳がありません！」

私が決意を新たにしていると今日は、このまま泊まるように言われました。確かに窓から見える空は夕暮れ時です。今から宿を取るのは大変でしょう。私の年齢的にも今からでは厳しいかもしれませ  
ん。

最悪でも野宿は初めてではないのでどこかの森か山にでも行こう  
と考えていたので葵さんの申し出は嬉しいのです。嬉しいのです、  
が：“先ほどのこと”もあるし恥ずかしいのもある。

それに来て早々にお世話になるというのも申し訳ない気持ちがい  
ます。

そんな考えの私ですが葵さんはキリキリと私のお泊りの準備を指  
示していきます。……葵さんのご家族は何人居るのでしょうか？私  
が把握しているだけでも数十人……。しかも、全員が可愛い系や綺麗  
系などの美人さんばかり……。

家族……ですよ？……そういえば昔から葵さんの年恰好が変わっ  
てないような。高位の術者は自身の若さを保つことが出来るらしい  
ですが葵さんもなのでしょうか？でも葵さんは自分を一般的な魔法  
使いだと言っていましたし……。

魔法のアイテムでしょうか？それだったら将来、私にも紹介して  
もらえないでしょうか？若さを保つ。女性の究極の願いですよ？

考えがズレてしまいました……。このことは、いつか聞いてみまし  
ょう。

葵さんはお泊りの準備を進めていきます。もう終わりそうですね。それにしても何で私のことを見て呆れた顔をしているのですか？

「今更、何を言っているんだ？お前らをお風呂にも入れた俺だぞ。気にするか？俺は気にしない」

いや！？それは子供の時のことではないですか！！今、そんなことをされたら…私は…恥ずかしいです…でも…ハッ！？そうじゃない！そうじゃないだろ！？私いい！？何を考えている！？そうです！お泊りのことですね！？

「だから！それは子供の時の話しですー！ツ！…！！」

「あっははははは！…！！」

葵さんは私の抗議を大笑いして頭を撫でてくる。葵さんにしてみれば子犬がきゃんきゃん言っているようなものなのでしょう。でも、頭に乗せられた、暖かい手からは優しさも感じられるから怒るに怒れません…。

そ、それに自分の幼少時のことを知られているということがこうまで弱点を曝すことだったとは思いませんでした…。

「ううう…」

「くくくく」

その日、結局私は泊まることになり夜寝るまで賑やかに喋りしたりして久しぶりに楽しい時間を過ごしました。こんなに楽しくて笑ったのは久しぶりのことでした…。

葵…さん…むにゃむにゃ…ZZZ…にゃー…。

S i d e o u t 刹那

第四十話「護衛終了と引継ぎとサムライ少女と」（後書き）

刹那ってこんな子？陰で葵くんが関わっているから変化しているかもしれないけど…。

葵君の暗躍も大変だ。駅前での待ち合わせ。

学園中の監視網はアンの支配下なので擬似映像は流し放題だったり。学園結界に繋がっているエヴァちゃんも認識障害と隠蔽の魔法でジヤミングしてる。

葵 フア ミ リー に 死 角 無 し ！ ！

読み込んだらあるかもしれないけど…。

見つかったら番外編でも挟んで辻褄を合わせますよ？  
本編を加筆修正するかもしれませんが…。

ではでは今回はここまで！またお会いしましょう！  
チャオツ！

第四十一話「指輪と探り合いと褐色少女と」(前書き)

単行本「ネギま!」の32巻が今日発売…!

作者は限定版を予約してないです。

単行本を読めればいいかな?としか考えてないからです。

それよりもモンハン3が予約できない!!

どこもかしこも予約は締め切りましたとしか言われません!

うううう!!モンハン!!

グスツ…では続きをどうぞ…。

## 第四十一話「指輪と探り合いと褐色少女と」

喫茶店クレイドル前…。

Side 葵

一夜明けて今日。中学の入学式を一週間後に控えた日。時刻は午前8時過ぎ。小鳥がチチと鳴いている爽やかな朝だった。場所柄がレストラン街だけに、この時間帯は静かなものだ。

刹那ちゃんと俺は店の外、玄関前で向かい合っている。

「今回は手間を掛けて、すまなかったな」

いや、本当に…。予定の一日前に呼び出しなんかして申し訳ない。今、考えると俺には必要なことだったとはいえ一方的で強引だったかな？なんてね、思うわけですよ。

「いえ、私も久しぶりに葵さ…こほんっ、皆さんとお喋りできて楽しかったですから気にしないでください」

いい子だなあ、刹那ちゃんは…。こういう子は幸せになってほしいよねえ。…あー…でも刹那ちゃんや木乃香ちゃん、それに明日菜が誰か。この場合はネギ少年か？チィィー！！の、お嫁さんになる時、俺は泣くんだろうなあ…。

うわっ…絶対、式には行かない！泣き顔なんて家族以外には見せ

られないって！？そんなところ見られたら恥ずかしくて他世界へ逃避するね！！逃げ切るよー…割と本気で。

ととと、かなり考えが飛躍してしまった。まだまだ先の話したっ  
たな、これは。

「そっか。いつでも帰ってきていいからな？木乃香ちゃんもよくお店に来るしさ。…うん、そうだ。今度は2人で来なさい。サービスしよう」

いつでもいいから今度は木乃香ちゃんと2人で遊びにお出でなさいな。うん、お菓子を少しサ・ビスしてあげよう。オマケに当店の人気商品であるアメちゃんもお土産に付けてあげようじゃないか。

2人とも直接会うのは久しぶりだから喜ぶかもしれないな、うん。木乃香ちゃんも刹那ちゃんもお互いを大事に思っているからねえ。

2人の関係が昔みたいに戻れたら言うこと無いかな。

「それは……………は、い。その時はお願いします」

返答の言葉がきこちなかったです。これは、まだ子供の時の一件が尾を引いているのかな？…それしかありえないか。何年も一途な…というよりも気に病み過ぎだ。

刹那ちゃんと会う度に、それとなく説得してはいるけど頑固に、一途に、病的に、頑なに拒むんですよ？この子ったらさ。ちよつと自分を追い詰め過ぎな気がするんだよねえ…。

「本当に頑固ちゃんだなあ。…まあ楽しみにしているよ。あー…それと、刹那ちゃん？」

「…はい、何でしょう?」

「手を出してくれないか?」

すっかり渡し忘れるところだった。このアイテムを渡しておかないと学園長（うじいし）にバレる確立がグンと上がるかもしれないんだ。ア  
レはそこそそ長く生きているせいかな読心術くらいは使うからな。

その辺の対処に未熟かもしれない刹那ちゃんじゃ精神干渉魔法を抵抗（レジスト）出来ないだろう。もし出来るとしても念には念を入れておかないと心配だからなあ。

俺は何も手を打たずに事が露見するのと対処しておいて無事に済むなら後者でありたいわけよ。失敗した時に“あの時ああしていれば”なんて考えても取り返しがつかないんだからさ。

「????はい…」

「ん。それじゃ…はい」

ちよこん、と出てきた刹那ちゃんの掌にアイテムを乗せ、渡した。渡したんだけど…。

「む?何です…!!こ、こここれは…指輪!?えっ!?!?…イヤっ  
!?!」

何故か、渡した直後に何やら狼狽しはじめたんだ…。確かにアイテムの形状は指輪型で男の俺から女の子の刹那ちゃんに渡したのは意味深に見えなくはないけど…。所謂“左手の薬指”には填めてい

ないからセーフじゃね？

それはそうと…刹那ちゃん？そんなに狼狽するほどの拒否反応ですか！？イヤって…！！…兄貴分の俺としては少し…結構…いや、大分シヨックですわー…。もういいや…アイテムの説明に入ろつとはあ…。

「…この指輪は対精神干渉魔法のアイテムだ。要は読心術に対して抵抗を上げる物だ」

「…あー…そう、ですよね…。アイテムですよー…。ハハハ…」

親切にアイテムの説明をしたのに、今度はガツクリと肩を落としていますよ？まるで期待が外れた、みたいな感じ…。…何なの？この子は？イヤがったりガツカリしたりさあ…。若い子の気持ちか理解できないよ…。

何？俺のせいか？俺が何かしたか？それともアイテムの形が指輪だからか？でも、それは仕方ないじゃないか。携帯性とかを考えたら指輪かネックレスのようなアクセサリー系が一番なんだからさ。

まあ、こうしてもいられないから刹那ちゃんに正気を取り戻してもらわなくてはな…。

「刹那ちゃん？疲れているのか？何だか目のハイライトが消えかかっているが…」

「…いえ、大丈夫です。大丈夫なんです。変に期待して勘違いした私が馬鹿だったんです…。それでなぜこのアイテムを？」

期待してた？勘違い？…何を期待して、何を勘違いしたんだろう？俺は何も期待させるようなことはしてないし言ってもいないんだが…。何もしてないよな？

どうでもいいんだが刹那ちゃんのハイライトの消えた目を見た時にドキッとして、ちょっとイジメたいなって考えた自分自身にゲンナリしたのは秘密だったりする……。

「…学園長対策だ。簡単な対策だが、これは刹那ちゃんを信じてのことだ。約束は守ってくれるんだろう？」

これさえ渡しておけば、あとは刹那ちゃん自身が話さない限りバレルことはない……はずだ。刹那ちゃんに交渉事の駆け引きとかはまだ苦手だと思っただ。

元が素直な子だから言葉で丸め込んだり、ウソとかが苦手で口を閉ざしてダンマリしか出来ないのよ。下手に隠し事していると態度に出ちゃうんだよ。だから“見ざる、聞かざる、言わざる”を徹底しているんだな。

口を開かなければバレることも無いわけだからね。それでも、あの学園長は必要とあらば読心の魔法を行使してくるから安心できないわけです。アイテムなどで保険を掛けても、掛け過ぎるといふことは無いんだから。

打てる手は打っておくのが俺です。……最近はいりりが全部やっつけてくれている気がするけどね！！

とにかく何が言いたいかと言うとね？刹那ちゃんから話すとは微

塵も思っていないわけですよ。こんな俺でも信じているからさ。

「！…もちろんです！話しません！絶対に！」

やっぱりいい子だあー。こんな子には幸せになってもらいたいよねえ。この子が将来はネギ少年のパートナー候補の1人になるわけか…。なんだか、可愛がっている娘を嫁にやる父親の心境になるのはどうしてだろうか？

そう考えたらイラツとしてき…アレ？でも、最後のほうで木乃香ちゃんと再契約していたような気が…？いつだったかな…。学園祭の時だったか？…違う気が、する？ああ、もしかして悪魔に攫われた時だったかな？…これも違う気がするな…。

まあいつだっていいか。要はこの子達が幸せになってくれればいいんだからな。

「ありがとう、刹那ちゃん…」

「…あ…い、いえ。約束ですから…」

何があつた？表情が発熱したように真っ赤だ…。風邪か？そうだったら悪化する前にお薬を処方しておいたほうがいいだろうか？…ちよつと確認も含めて撫でてみるかね。

「んー　いい子　いい子」

「あう…あの…」

恥ずかしがっちゃって、かーいーなー　…おとと、そうじゃな

かった。熱はつと……多少、発熱している感じがするけど、それ程でもない、かな。顔色が赤いから熱とも考えたんだけど……違うようだ。

風邪や熱などの病気なんかではないと判断してからは刹那ちゃんを愛でることに全力を費やしましたぜ？それはもう俺が満足するまで、撫でり 撫でり してやりました。

10分程そうしていたら場所が玄関前だということ思い出して渡したアイテムの具体的な説明をすることにした。撫で撫でして子供扱いされたと思ったのか、刹那ちゃんの表情が羞恥心で真っ赤だったことをここに記しておこう。

ちょっと目が潤んでいたのが可愛かったです。イジメたいと思った自分は間違いじゃないと思いたい……。俺はソフトSだ……。ソフトSなんだ……。ハードSじゃない……。

「アイテムの使い方は指に填めるだけでいいからね？注意事項はそれを填めている間は念話などの魔法的通信手段が一切送信できないこと。大丈夫だと思うけどそこは気を付けて」

「はい。……それで葵さんが“関係者”ということを知っている人は居るのでしょうか？」

俺のことを知っている人？……それは前魔法大戦期に参加したことを知っているということ？それとも“ただの魔法使い”と知っている人のこと？

……刹那ちゃんが言う“関係者”とは“魔法使いの俺”を知っている人ということだよな？そうなるよ……タカミチ、くらいか？直接俺のことを知っているのは彼くらい……いや、図書館島の地下から弱々しいけど知っている魔力反応がしていたな。

地下工事をしている時のことだ。地下通路を造っている時、図書館島の側を通ったら懐かしい魔力反応を感じたんだ。幼女変態……もとい、アルビレオ・イマだ。間違い無い。なぜ弱々しいのかは知らないけどな。

向こうも俺達のことを感知したかもしれないと考えると……。近以内に懐かしの旧友に“挨拶”に行かないとダメかもしれない……。その時に“お話し”もしないと、ね。学園長は……。その後でいいや。優先順位低いし……。

「あー……んー……？うん？1人しか居ない……はず？正直、他に2人3人怪しいんだけど多分、1人」

そつだ。不本意ではあるけど現代では比較的、高位の魔法使いである学園長とか、学園長とか、学園長とか、学園長とか、学園長とか、学園長とか、学園長じゃね？鬱だ……。

あー、あとエヴァちゃんとか？あの子、俺の居る店を見つけてから常連になりやがったんだ……。あの夜、立ち去る時に不自然だったのがダメだったなあ……。あつ、それと茶々丸と会えたのが嬉しかったです。

お蔭でアメちゃんとかお菓子をせびるんだぜ？今、俺のことを学園長にバラされるのはマズイから拒否も出来ないし…。いや、いいんだよ？お菓子くらいさ。小さなお口で、もきゅもきゅ と美味しそうに食べてくれるから文句、無いしね。

これが可愛いんだよ？見た目10歳前後の幼女だし。それに小さな身体なのもあって気分は孫を見守るお祖父ちゃんです。……でもアレはフェイクで実は俺のこと…というより俺達のことを観察していたんじゃないかな？

多分、俺達が何者かはわからないだろうけど“関係者”ではあると確信しているんだろうなあ。これが推測だったならいくらでも誤魔化せるんだけど…。

あの様子じゃ確信しているわ…。正式に学園長に挨拶に行くまでは“ただの魔法使い”と言い張らないとイカンですたい。学園地下のことが艦隊作製のための月面プラントとか、他にも知られたら面倒になることがあるからなあ。

そんな風に考えながらいたら刹那ちゃんが戸惑いながら聞いてきたんだ。

「それは誰か…聞いても？」

「…タカミチ…高畑・T・タカミチという教諭だ。古い友人でもある。そうだな…学校内で困ったことがあったらその人に言いなさい。あとで手を貸すように俺からも言うっておこう」

思わず心の中で苦笑したよ。こういう個人情報は、普通は秘密にするものなだけどねえ。相手が刹那ちゃんだから教えてしまった。こういう根が素直な子にはウソとか秘密ってやり難いんだよ。

とりあえず、タカミチには後で連絡して、刹那ちゃんがタカミチに相談した時のために段取りを付けておこう。

「わかりました。何から何までありがとうございます」

「いいの、いいの。刹那ちゃんのためでもあるけど俺のためでもあるからね。……気を付けなさい。手に負えない事態が起きたら周りに助けを求めなさい。無理はしないように」

ちょっとしたことでも張り詰めた雰囲気になるから心配なんだよなあ。こういう頑固ちゃんには強烈な切欠がないと吹っ切れることは難しいからな……。

事件の時、変に突っ張って自分だけで対処しようとして失敗しなければいいけど。刹那ちゃんの周りには頼れる人が居るんだから頼ってほしいよねえ。突っ張ったって得になることなんか無いんだから。

「…はい！」

「よしっ いい返事だ！頭を撫でてあげよう」

ほら？なでなでなでなで もう一つオマケになでなで

もう、返事だけはいいいんだからなあ。この子は本当にわかってい

るんだろつかね？俺は早く“自分の仲間”と言える存在を見つけると言っているんだけどなあ。

「…あ、あの！…恥ずかしい、ですから…この辺りで」

「む？そうか？…刹那ちゃんも撫でられるのがイヤになるお年頃とということか…。感慨深いねえ」

流石に何度も子供扱いされたようで気分を害してしまったかもしれない。少し、しつこく撫で過ぎてしまったのかもしれない。

…いや、だってさ？刹那ちゃんや木乃香ちゃんの髪ってツヤツヤのサラサラで撫でていて俺も気持ちいいんだよ。これは病み付きになりますって。とは言ってもお年頃だからなあ。あとどれくらい撫でさせてくれるだろうか？

成長してくれることは嬉しいし、感慨深いものがあるけど、少し寂しいのもあるんだよなあ。でも、イヤがることはしたくないし…。難しいねえ？くくくっ

「あ、いや、別にイヤというわけでは無いのですが…その…ただ、恥ずかしいんです」

やはり、玄関前で、それは恥ずかしいか…。まあ外だからな、いつ、誰に見られるか、わかったものじゃないからな。刹那ちゃんへの配慮が足りなかったか。これは反省だ。

そうとなれば謝罪と次の撫でる予約…というわけではないけど、からかう序でに言っておくか。

「??あー…そうか。すまない。こんな玄関前ですることではなかったな。くくくっ 今度は家の中でジツクリしよう」

「家の中!?ジツクリ!?はわ!はわわわわ!!」

刹那ちゃん…何を想像したんだよ?今日一番の顔がこれ以上無いというくらい赤いんですけど…。あ、鼻血だ…。

マジでナニを想像した?俺は刹那ちゃんの将来が心配だ。耳年増になっていないか?とか…。まあ、からかつのは成功(?)したっばいからいいか。

「くくくっ 冗談だから気にするな、俺は気にしない。くくくっ」

「なっ!?!…くくッ!!もう!行きますね!!それでは!!」

「くくくっ ああ、いつてらっしやい。……また帰ってこい」

「……はい、行ってきます!」

元気よく駆けて行く刹那ちゃんの背中を見送る。……持っている物が野太刀じゃなかったら普通のご家庭なんだけどなあ。

まあそれは置いておいて。小さい頃からお世話していたから俺からしてみたら刹那ちゃんは娘のようなものだよ。ここが刹那ちゃんの家といってもいいと思うんだよね。父親気分だから辛くなったらいつでも帰って来いと思うわけよ。

そんなわけで刹那ちゃんを見送った後、携帯電話を取り出して電話を掛けた。

「あ、もしもし？俺、俺だよ」

『？』

「いや、詐欺じゃないよ……」

失礼なヤツだな……。俺の声を忘れたと言うのか？……電話越しだと多少、声が違って聞こえるから仕方ないのかな？

『？』

「うん、そう、葵。……実は頼みたいことがあるわけよ」

なんだ、わかっているじゃん。一発で俺だとわかれよなあ。まったく友達甲斐の無いヤツだな。そんなことでは教師になれんぞ？……あ、教師だったか。

『？』

「……そうそう！その子！わかってるじゃない？」

流石だねえ？具体的に言わなくても俺の言いたいことがわかってるんだから。木乃香ちゃん繋がりで察したのかな？

『？』

「いや。相談されることがあつたらでいいから」

別に積極的に助けろ、なんて過保護なことは言わないよ。それじや成長する機会が減るじゃないか。彼女自身が助けを求めない限りは助けなくてよろしいですって。……命が危険だった場合は、その限りじゃないけど。

『。、』

「はいはい、よろしくねえ。……これでよし。後は刹那ちゃん次第かな」

俺が今、出来るのはこんなことくらいだからね。後は刹那ちゃんが頑張らないと、ね？俺は刹那ちゃんの成長を楽しみにしているよ。善悪に限らずに自分を誇れるほど立派になりなさい。

Side out 葵

麻帆良学園学園長室……。

Side 刹那

葵さんに見送られた私は今、学園長室に居る。途中、道に迷い掛けたが校舎前に居た高畑先生に、ここまで案内してもらえたから助かった。……遅刻的な意味で。お話を聞いてみると葵さんから頼

まれたようでした。

目の前にはお嬢様のお爺様であられる学園長先生…近衛・近右衛門様が大きな執務机の向こうの立派な革張りの椅子に腰掛けて笑みを浮かべている。

……ところで学園長先生の後方に伸びたあの頭はホンモノでしょうか？妖怪？エイリアン？…それとも未確認生物？失礼ながらお嬢様のお爺様が疑ってしまいました…。

「フオフオフオ。遠いところをご苦労じゃったな、桜咲・刹那君。わしが学園長の近衛・近右衛門じゃ」

「……はい。よろしくお願いします」

いけない、いけない！ショッキングな視覚情報があつたので少しだけ呆然としてしまったようです。

……本当に人間？…ああ、いえ、何でもありません。

私は不躰な視線をしていたようです。学園長先生に「何かな？」と好々爺のように聞かれてしまいました。聞かれても無理です！！言えませんか！？「貴方は人間ですか？それとも妖怪ですか？」なんて聞けません…。聞いてはいけない気がします！！

とはいえ、この人が葵さんの言っていたお方ですか…。後頭部以外を考えれば好々爺然としたい人のようにも感じられるのですが…。しかし、葵さんが言うには悪戯好きなタヌキらしいです。どちらが本当なのでしょうか？

「婿殿から話しは聞いておるよ。君は孫の木乃香の護衛役をするらしいのう？」

「はい。微力ながらお嬢様の御身をお守りします」

長から連絡はされているのですね。そうでした。ここでの私のお役目はお嬢様の護衛です。もう、“あの川の時”の無力な自分にならないよう…。お嬢様をお守りできるように鍛えて、鍛えて、只管、自分を鍛えたのだ。

神鳴流宗家ではない私は二の太刀などの奥義は習得を許されなかったが、それを抜きにしても私に出来ることはしたつもりだ。

今までは私が未熟なこともあって葵さんがお嬢様をお守りしてくださっていた。しかし、これから先は私がお嬢様をお守りしてみせます！この命に代えても！！

「フオフオフオ。うむ、なかなか良い目をしておるな。……して、剎那君？」

「…何でしょうか？」

先ほどまでの好々爺とした表情をやめて真剣な目で詰問するように私の名前を口にした。部屋の中の緊張が一段階、上がった気がし

た。

いよいよ来たのでしょうか？葵さんから学園長には注意するようにと言われました。私が下手なことを話せば葵さんに迷惑をかけてしまう…。それだけはお嬢様のことと並んで守らなければならない約束…！

「刹那君は木乃香の幼馴染と聞いておる。…木乃香には悪い虫はついておらんじやろうか？」

「は？…あ？…えー？…いえ、そのようなことは聞いていませんが？……え？」

予想外な質問だっただけに、それに学園長先生の真剣な表情と質問のギャップもあり意識が少し混乱してしまいました…。お嬢様に悪い虫がつくわけがないじゃないですか。葵さんが見守っていたのですよ？安全ですとも。

ツ？…何でしょう？葵さんに貰った指輪が“何か”に反応して微小に震えています。私は右手薬指（薬指にしたのは……気分です。いいんです、右手だし……多分）に意識だけ向けて考えて……ああ、精神干渉魔法だ。

学園長先生…。こんなことに精神干渉魔法を使いましたね？答えてから気付きましたが今も指輪は震えっぱなしです。今も私に干渉しようとしているようです。でも、学園長は何かを戸惑っているように感じ取れます。

学園長先生の態度を見るからには葵さんの指輪は、ちゃんと機能しているようです。

「そ、そうかの？本当に？」

「はい。私は聞いていません」

そうとわかれば私に恐れるものではありません。私の技量では学園長先生の魔法を完璧に抵抗<sup>レジスト</sup>、出来るとは言えないですから正直、助かります。これを渡してくれた葵さんにも思惑はあるのでしょうか、ここは素直に甘えとしましょう。

ッ！指輪が？…また覗こうと、した？

「……学園長？どうかなさったのですか？」

「フオツ！？い、いや、何でもないぞい？何でもないんじゃないかろう？何でもないと思うんじゃない？」

覗きましたね…。わかり易いくらいに動揺しています。否定を言葉にするほど弱まっていますし。

どうしましょう？お嬢様のお爺様とわかってはいますが、いっそ一思いに……斬りたくありません。サクツとやったらダメでしょうか？……まあダメですよね！。そんなことをしてしまったら西と東で戦争になってしまいます。

それに先ほどの質問内容がこんななものも私の動揺を誘い少しでも深く精神を探る話術の一種なのでしょう。葵さん…貴方の言ったことは正しかったようです。油断していたら間違い無く一気に潰け込

んできます…！

しかし、そうならないために葵さんから指輪を与えられ抵抗レジストしています。魔法による搦め手は効きません！後は私が下手なことを話さずに居ればいだけ…。き、緊張します…！

お、落ち着いて私…。すう…はあ…。よし！ここは畳み掛ける！  
反撃はさせない！

「なぜ、疑問系なのでしょう？なぜ、そんなに汗が出ているのですか？…そしてなぜ、視線を逸らすのですか！？」

「質問に質問で返したのは謝罪するぞい？汗は暑いからじゃな。フオフォ。これも温暖化かの？視線は…視線は……気分じゃ！」

「はあ？そうですか…」

言い訳が苦しい…！しかし、どんなに苦しい、言い訳でも理由は理由だ…。ともかく私への精神干渉はやめてくれたようだ。指輪の反応も無い。あとは実力行使に出てこなければ…。いえ、それは大丈夫でしょう。

学園長先生が直接攻撃に出た時…それは西の勢力に所属する私に危害を加えたということだ。これは最悪、西と東で戦争になるかもしれないのだ。学園長先生はそこまで愚かではない。

自ら道化になっても場を掌握しようとする狡猾な古ダヌキ。やはりこういふ交渉術や技能などの経験の差は埋めようが無いですね…。

「う、うむ。…おお！そうじゃった、そうじゃった！中学の寮で相部屋になる者と呼んであるのじゃった！もう来てもええんじゃがなあ！」

私が胡散臭いと言わんばかりの目で学園長先生を見ていると慌てて話しを逸らそうとした。だけど私には、この動揺した姿さえも、わざと道化に徹しているように見えてきた。

しかし、気になることを言われた。中学校では全寮制ということ は説明を受けていたけど、私のような“関係者”と思われる人が同室らしい。……まだ“関係者”か、どうかわからないですけど。

そう、ですね…。ここは学園長の思惑に乗って話しを聞いてみま すか。

「相部屋？…その人は“関係者”なのですか？」

「うむ！…いや、関係者なのは間違いないのじゃが…どちらかと言 えば傭兵かのう」

「傭兵？…関係者と言う方からは使えるのしようが大丈夫なのです か？部外者なのでしょう？」

傭兵…。戦いを“一この世界（魔法関係）”で生業にしているの ですからそれなりに腕に覚えがあるのでしょうか。魔法のある戦いは 普通の戦闘とは一線を画する世界ですからね…。

しかし、どんなに優れた傭兵でも誇りも矜持も持たず金次第でど んな汚いことでもするような人でないことを願いたいもの……あれ ？相部屋？…ということは同級生？…えー…。

本当に大丈夫なのだろうか？あー…そうでした。同級生の私が言えた義理ではない、ですネ…。…うん、ここはまず、その人を確認してみたらですね。

さあ！来るなら来てみ…！

「部外者ではないぞい。この学園に所属している限り彼女は立派な麻帆良の生徒じゃ。そこに区別は無いのじゃよ。…それに“関係者”としても優秀じゃ」

「はあ…」

驚きました…。優れた人格者であるとは長から聞いていましたが、一教育者として立派な人物のようです。生徒に区別も差別も無い、皆同じ、と言えるのですからすごいです。親バカならぬ爺バカなのが玉に瑕ですけどね…。

それにしても、この学園長先生が優秀と言うほどの人か…。強い、なのでしょう…。一体どのような人なのか少し興味が出てきました。

トントン。

「ほっ…どうやら本人が来たようじゃな。入りなさい！」

ノックされた音を聞いて安堵したような声で入室を扉の向こうの人物に促した学園長先生。その扉から入ってきたのは…！

Side out 刹那

学園長室前…。

Side 真名

トントン。

「…入りなさい！」

「失礼するよ、学園長。…呼ばれて来たんだが早速、依頼なのかな？」

部屋に入って室内をサッと見回してみる。学園長の他に私と同年代と考えられる女の子が1人居た。…？彼女のしている指輪…何かしらの魔法アイテムかな？なかなかの一品のようだ。

それに彼女自身も新人特有の覇気を感じる。肩肘張って少々気負っているようだ。しかし、新人でも腕はこの歳では申し分無い実力を持っているとわかる。

「フオフオフオ。いや依頼ではなく龍宮・真名君、君に紹介したい子がおるのじゃよ。…ほれ、彼女じゃ」

「はじめまして。私は桜咲・刹那です。よろしくお願いします」

「ああ、よろしく。改めて自己紹介しよう。龍宮・真名だ」

ふむ…？自己紹介したはいいが私と桜咲、2人を学園長はどうしようというのだろうね？あの人は少なからず腹に一物を持った人だから変なことを依頼されなければいいのだが…。

ただ単に私達に仕事を依頼するだけならば個々に依頼して私達は現場で落ち合えばいいだけなのだから直接対面するメリツトがわからない。精々が互いの意思疎通の円滑のためという理由がいいところだ。

それとも仕事とは関係無いことと呼ばれたのか？…あまり仕事に関係ないことと呼び出すのは勘弁してほしいのだが。好物の餡蜜を食べていたのに…。アレは…イイ。初めて食べた時はこの世の物とは思えないほどの甘味だった…！

ツルンとして喉越し爽やかな寒天！小さく慎ましくカットされたフルーツ！フルーツの中にポツンと可愛らしく乗っている甘いシロップで加工されたサクランボ！こんもり盛られた甘い餡子！そしてとろっとした黒蜜を掛けた姿はまさに完成形！！…ハツ！？

しまった…。私としたことが好物の餡蜜のことで想像が過ぎてしまったようだ…。私も日本に来て平和ボケをしたのかもしれないなふふふ。

「2人は学校ではクラスメイト、寮では刹那君と真名君でルームメイトになるぞい」

「何？そうなのか？…なるほど、君が関係者だからか」

中学校では全寮制だから何も無ければ私のような者は仕事の関係上1人部屋になると考えていたんだが…。そうか、私の他にも生徒

の中に関係者が居たわけか。学園長のように教師や、それに順ずる人だけではないようだね。

桜咲のように生徒の中にも関係者が居ることも想定しておかなければならないな。いざという時のために情報を仕入れておかなければならないな。何をするにしても判断する上で正確な情報が必要になるのだから。

また調べ直す必要があるようだ。平和な日本だからと油断したようだね。私もまだまだだ…。

「はい。私は神鳴流剣士ですが、貴女は？」

「…ふふふ。まあいいだろう。私は銃火器を使う」

驚いたな…。まさか自分から手の内を曝してくるとは。知らず知らずに苦笑してしまった。いくら一緒に仕事をすると考えているとしても気を許し過ぎだと思っただけだね。自分の手札は出来るだけ隠しておくのが利口だよ？桜咲…。

しかし、神鳴流の剣士か…。聞くところによると銃弾やビームは見て避けるし斬り捨てる事が出来るとか…。それにその剣術はこの世のどんな物でも斬れぬ物は無いらしい。

私の活動が主に中東やアラブ周辺などの紛争が多発していた国だったから神鳴流の剣士を直接見ていないので本当かどうかは知らないけどね。それでも彼女は神鳴流を名乗った。本当だとしたら彼女の腕は信用してもいいだろうね。

「???鉄砲を使うのか。…後衛だな」

「ふふ、後衛しかできないと思っっているなら間違いだよ？私に距離は関係ないからね」

甘いよ、桜咲……。私をただの銃使いだと思っただんなら、それは大きな間違いだね。私が狙ったターゲットは必ず仕留める。私はキツチリやり遂げるよ？仕事だからね。

私には派手な大技は無い。しかし、何者も捉えたら逃がさない魔眼と練磨してきた一撃必中の銃の腕がある。私が手にした銃に死角も苦手な距離も無いよ。

ただ……弾薬費が掛かって仕方ないのが悩みと言えば悩みかな……。そのことを配慮して仕事しないと弾薬の使い過ぎで直ぐ赤字になるんだ。

「……大した自信だな。その言葉がウソではないことを期待させてもらおう」

「私も君の剣がナマクラで無いことを期待しよう」

私は銃に自信があったから試しに少し挑発したら桜咲も剣呑な目で言い返してきた。だから私も重ねて桜咲の剣の腕を頼りにさせてもらおうと皮肉気に返した。

結果は……。

「ふふ、ふふふ！」

「フフ、フフフ！」

「……（ボソツ）こわっ！！2とも、こわっ！？」

……学園長が言うとおり私達は大変いい笑顔で睨み合っていた。どうでもいいが学園長？小声にして言っても私：それに多分だけど桜咲にも聞こえているぞ？私達は笑顔なのだから、どこに怖がる要素があるというのだ。

何も怖がることは無いだろう？

さて自己紹介が目的だったのならば、これで用は終わったと見ていいだろう。そろそろ私は退出するとしよう。

「学園長、用件はこれだけかな？」

「う、うむ！これだけじゃ！真名君は刹那君を寮へ案内してくれるかのう？」

何？…ああ、そうか。今日から寮ではルームメイトになったのだったな。それなら案内しないわけにはいかないか。今日は情報収集を諦めて桜咲の引越しの手伝いをしてあげるとしよう。

折角のルームメイトなのだから、これから、ある程度は仲良くしておきたい。自室で他人行儀では肩肘張って少々窮屈だ、なんてのは勘弁したいんだ。

何はともあれこれからの同僚を部屋に案内を引き受けるとするか。ここは無駄に広いから下手すると迷うからね。

「かまわないよ。…それじゃ行こうか？桜咲」

「…ああ、頼む」

まだまだ硬いようだ。まあさつきまで挑発紛いのことをしていたから仕方ないか…。冗談でやったとしても、やられたほうは多少、不愉快かもしれないからね。でも、これも桜咲が短気かどうかを知るためだった。

結果は…普通？日本人的な気が長いわけでもないが短いわけでもない。まさに普通。多少短いようだがね。

まあそれはともかく早速私達の部屋に案内しよう。

私達は学園長に一言、挨拶してから部屋を出て歩いていった。私は隣を歩く桜咲を見て、これからの学園生活が退屈なものにはならないだろうと臆気に予感がした。

S i d e o u t 真名

第四十一話「指輪と探り合いと褐色少女と」(後書き)

刹那も真名さんも表現が難しい…。

作者はキャラ性を思いつきり崩しているから、まだ弄れますけどね。それでも難しいのは変わらないですけどね。

他の作者が羨ましいですよ。マジで。

ではまたお会いできたら今月中にでもお会いしましょう！チャオツ！

PS / モンハン買えたら…… 2ヶ月は更新が止まるかもしれません

第四十二話「朝と昼と夜と」(前書き)

とある読者からアイデアをいただきました！

ネタが増えるのは作者にとって嬉しい限りです！

ネタがあつたら感想の時にでも載せてくれると嬉しいです！

では続きをどうぞ！…のほほん、だけど！

## 第四十二話「朝と昼と夜と」

喫茶店クレイドル門前…。

Side 葵

まだ日が昇りきらない早朝。7月になり季節は夏を迎えた。空は薄暗いがどこまでも高い夏らしさを感じるほどだ。それに空が白んでくる時間が早く進むような錯覚を覚えた。もう直ぐ日の出だ。

夏なのに朝は朝露も滴るほどに爽やかな空気に満ちている。…朝日が、見えた。喫茶店のあるレストラン街の大通りのほうを見て、まだ誰も居ない。…訂正だ。1人居た。こんな早い時間なのに大通りを走っているツインテールの少女が居た。

これがただのランニングなら良かったのだが少女は脇に朝刊を幾つか抱えて走っているのだ。

新聞配達…。

俺の知る少女…神楽坂・明日菜の中学初期から始めたバイトだった。いや、当初は俺も新聞配達ではなく俺の喫茶店で雇う予定だったんだ。それなのに明日菜は何を遠慮してか丁重に断ってくれたのだ…。

俺が何かしたのか？兄貴分としての気持ちもあった。それを断られるとは思わなかったからあの時は割とショックだったなあ…。ま

あ理由を聞いても学園長グレンに言ったように俺にも迷惑を掛けたくないんだとよ…。

バカか？と思ってさ、正直にそのまま言っただら、この妹分が何をしたと思う？……豪快にドロップキックをかましてきやがったんだ。アレは痛かったなあ……。明日菜は蹴り終わると顔を真っ赤にして走って帰るし。何なの？

あー、それにその現場（俺が倒れている）を見た、リチラが何を勘違いしたのか特別緊急警戒態勢を躊躇無く発令しやがった。お蔭で麻帆良の地下はてんやわんやの大騒ぎになった。まあ唯一救いだつたのが地上では変化が無かったことか…。

俺が起きた時、きちんと誤解は解いたよ？ええ、解きましたともまだ戦争なんてする気は無いんだからね！？……“まだ”じゃねえええ！！？？しないよ！する気ないよ！？

当然そのあとにリチラにはキツチリお仕置きとお説教してやったがな。だいたい俺がやられたくらいで冷静を失う……あー……殆どの家族に言えることじゃね？これって……。いやっ！み、皆仲良くっていいことだよな！？なあ！？あは、あははは！……はあ。

それにしてもリチラは反省してくれたんだらうか？      なお仕

置きや      なお仕置きをしてもどこかうっとりしているよう

な……恍惚としているような……      するとクネクネと楽しそ

うな……。

それにお仕置きが終わると何やら満足したような表情で自分の部

屋に戻って行くし…。まあとにかく反省したかが判断つかんわけよ…。

おつと？明日菜も俺に気が付いたようだ。こっちに走ってくる。

「おはよう、葵さん！これ今日の新聞ね！」

「はい、おはよう。毎度、ご苦労様。…今日の弁当はどうするんだ？なんなら学校まで届けさせるぞ？」

俺も喫茶店や組織の報告があるから早起きだったりする。それで新聞をこうして直接受け取ることがある時が週に数回あって、この時に弁当があるかどうかを確認する。まあ前日に電話確認もすることもあるけどね。

それに弁当を直接届けるのは俺の時もあるし他の誰かに頼むこともある。明日菜の所属するクラスは留学生や外からの編入組みを加えただけで殆どメンバーが変わってない。

顔見知りだと余計な遠慮がいらなくて助かるよ。一応、学校に入ることはタカミチに黙認してもらっているし、念のために認識阻害の腕時計も付けているから学園側（学園長）には、バレていないはずだ。

まあ弁当を届ける時は学校の玄関で明日菜か木乃香ちゃんに渡しているしね。タイミングをミスるとチア3人組や報道部に入部した朝倉を筆頭に囃し立ててくるから面倒だったなあ。

それで今日はどうするんだ？届けるのか？今渡すか？それとも…。

「いいわよ、そんなこと！どうせ、通学路なんだからその時に受け取るから」

「はいよ。……よし！行け！馬車馬の如く走るのだ！」

「うっさい！わかってるわよ！べーっ！」

「こらこら？あつかんべ、はいいから前向いて走りなさいって！転んだら危ないでしょ？ふむ…こついうところは、まだまだ子供だなあ。……あー、まだ中坊だったな。それも一年の。若いなあ…。お兄さんにはその若さが眩しいです！！」

「くくくつ 気を付けてなあ！」

「はいい！」

今度こそ走って行った明日菜を見送って店に戻って朝の仕込みを皆で始める。

「…さて、今日も一日頑張りますか」

あの子達も来年の秋だか冬にはそれ相応の騒動に巻き込まれることになるだろう。けれども、それは俺の関係の無い出来事…。当然、あの子達を可愛がってはいる。しかし、あの子達の歩む道はあの子達自身が決めることだからねえ。

お兄さんには、どうすることも出来ないのよ…。ただまあ俺に出来ることがあるとしたら、それは…精々軽く相談に乗ることかな。

喫茶店クレイドル店内

今朝の明日菜も何だかんだで頑張っているからね。俺もその姿を見たら頑張ろうと思うわけよ。意地じゃないけど大人が子供に負けるなんてこと出来ないでしょう？大人気無いかもしれないけど俺は臆病だけど少しだけ負けず嫌いなよ。

俺は勝利…譲って引き分けにしか興味は無いね。負け？何それ美味しいの？ってなもんですな。駆け引きで負けることもあるけど、それは今後の投資的な意味での戦略的敗退だから俺の中では負けじゃない。……負けてないんだからね！！

「主様あ、朝の仕込み終わりましたわあ」

勝敗について思いを巡らせていたら仕込みが終わったようだ。ミリーに声を掛けられて気が付いた。マルチタスクは便利だなあ…。考え事していても手は別のことが出来るんだからさ。

思考分割能力、万歳ってね！

「はいよ。こっちも終わった。ミリー達も開店まで少しゆっくりしていいよ。…あ、弁当はいつも通りだからな？2つとも店先で渡してくれ」

「はい」

「…んー！…はふう。うし、それじゃ現状報告でも聞きますかねえ。  
…いつも通り厄介事が無ければいいな」

喫茶店の地下に造られた地下拠点にある俺の執務室に向かう。いつもなら機動戦艦アングレカムの執務室を使うんだけど今、アンは十数名の人員と一緒に月面プラントにて艦隊作製の任務についている。

なので、艦の執務室が使えないから、この地下に建造された拠点の執務室で報告のやり取りが行われているんだ。

俺の執務室に入ると既にアイリが居て報告の準備が出来ていた。椅子に座って、早速報告を聞いてみると色々あるある…。

「…以上が今回、収集された情報です。最後に、この情報は既に分析や解析などのフィルタリングはされたものです」

「…学園データバンクにハッキングねえ。アイリ、これは確かなの？」

「はい。正確には8ヶ月以上前から定期的に小規模のハッキングが検知されています。対応は、マニュアルのBを行いましたので学園側にもハッカー側にも私達の存在は知られてはいません」

マニュアルのB…俺達の情報隠蔽を最大限に注意しながら欺瞞情報を多数散布するとともに敵のコンピュータに逆ハックの種を仕込むこと。仕込むだけでこちら側がアクションを起さない限り無害な

ものだ。安全、安全。

それでまあ報告の中で眼を惹いたものがこれだった。麻帆良の学園データバンクに侵入を試みた“形跡”があった。ただ形跡といってもそれは微量なバグと見分けが付かないほどだったらしい。

形跡からハッキングかもしれないから一応、過去のログデータを漁って調査したら案の定だった。似たような痕跡が幾つもあったんだ。やられたデータは主に魔法使いの個人情報や学園地下の構造情報、それと世界樹の観測情報。

これをやったハッカーはなかなかの腕前だ。何ていったって俺のところでも偶然、感知してハッキングされたと仮定した調査でようやく発見、確信に至ったんだからね。

「そんな前から…。それで発信元は？犯人の目星は？やっぱり西か？」

「いえ…それが、どうも、この学園内なのです。犯人の特定も出ていますが自分達は隠密裏に行動するので対象の確保に手間取っているのが現状です…」

「そつか。それで犯人は誰なの？学園長の敵対者だったらなあ…」

敵対者、歓迎ですよ？俺から目を逸らすデコイ的な物に仕立て上げてみせるしね。逆に俺に敵対してきたら…：…やる？サクッと排除ですな。あー、でもなあ女性や子供が相手だったりしたらやり難いなあ。後味が悪過ぎる。

必要ならやるけど、それでも嬉々としてはやりたくないな…。

「クスツ、敵対者がどうかはわかりませんが。…対象の名前は“超・リンシエン鈴音”。今年、麻帆良女子中学に入学した生徒です。…彼女は木乃香さんや明日菜さんのクラスメイトでもあります」

「超・鈴音…。超・鈴音か…。ふうむ…」

アイリの説明を聞いて改めて彼女の資料を見ると中学前の情報が巧妙に偽造されていたようだ。資料には学園外の某有名進学付属小学校を卒業して麻帆良女子中学に入学とある。

だが、実際にその小学校へ確認を取ってみると紙媒体や電子上の書類や情報は確かに彼女のことが記載されていた。ここまででおかしいことは無い。なのに、担任したはずの先生や部活の後輩生徒からは超・鈴音が居た証言が得られないと来た。

ここまで情報の確認をしているなんて、いつもながらアイリは仕事が速いなあ。ここ最近は何も指示しなくても的確に対処してくれるから俺も助かるよ。…組織に俺ファミリー(長)っているのかな？

あー、それよりも今は超・鈴音のことだ。彼女ことはどうしようかなあ？俺としては変なちよっかいを出されなければ無視してもいいんだけど…。ん？ちよつと待て、よ…。超・鈴音は未来人(？)だか火星人(？)だったよな？

……………あれ？これってマズくね？

仮に未来人だとしたら俺がここに居ることを知られている可能性がある。あるってことだよな？時の遙か先から遡って来たわけだからさ。さて、どうしようか？んー……いや、待て待て、可能性だけで動いたら取り返しの付かないことになりかねない、か。

もう、この際、向こうから接触があった時に対応を考えるとするか……。場当たりのな対処になるけど藪を突いて何が出るか、わかったもんじゃな……。って、ちょっと待てよ？今、芋蔓式に思い出したけど茶々丸の開発に彼女が関わってなかったっけか？

……マジで、どうしよう？

多分だけど茶々丸経由で超・鈴音に俺の人相とかが伝わっているかもしれない可能性が大なんだけど。……いや、エヴァちゃんや茶々丸にはただ喫茶店クレイドルの店長としか言っていない。

そういえば、まだ正式に名乗ってなかったなあ……。あまりに自然だったからすっかり忘れていた。これなら2人（1人と1機？）を責める気持ちはもちろん無いな。名称さえ伏せておけば誤魔化せる……かも？

でも本当にどうしようかなあ。んー……もう、面倒だから今の内に一部隊を派遣して超・鈴音の身柄を確保して、その他関係のあるモノ諸々を処理してしまうか？あれ？これって以外といいアイデアなんじゃ……ん？

あー……これはダメだ。ダメダメだ……。はあ。

何だか超・鈴音の発言がネギ少年に対して世界の真実と救世的な

意味でキーワードだったかもしねん。……記憶的に自信ないけど。ここはやっぱり武力的には放置して衛星軌道上からの監視だけに止めるとするか。

うん、そうしよう。面倒事は勘弁だからな……。

「あの…閣下？どうかいたしましたか？考え込まれている様子ですが何か自分に至らぬ点が…」

「あ？違う、違う！今後の方針を考えていただけだから気にしないで。アイリ達は十分にやってくれているよ」

「はっ、ありがとうございます！」

俺は超・鈴音の対処は現状、遠距離からの監視に留めることを指示した。

他にも色々…。世界樹地下の魔力蒐集や地下各種生産プラントの兵器・物資の生産状況。月面に建設した無人生産プラントで行われている艦隊作製の目標達成率や問題点。そしてプラント建設のために月へ行つたアン達、メンバーが今月の終わりに帰還すること。

オマケに俺の個人的（趣味的）な研究内容の経過報告などがあり、俺はそれに対してそれぞれに二、三指示を出して、あとを担当部署の責任者に任せた。

それと、もう一つの案件で数年前から“誰か”が夜な夜な「工房」内に隣接された「格納庫」に侵入して積載された“資材を少量”、

無断で“使用されているらしい”ので、その調査も頼んだ。今年の1月くらいにパツタリと止んだけど調査だけは、ね？

時計を確認したら朝の8時10分だった。

「おろ？そろそろ時間だな。後の報告は夜にしよう」

「はっ。自分も後で向かいます」

「あいあい。先に行っているよ」

今日も喫茶店、頑張るぞー！！目指せ！世界一の喫茶店！！……何を以って世界一なのかは知らないけどね？まあこういうのは気分ですからな

そして日が暮れて……。

夏季に入って日が延びたといっても時間も午後7時になったら空は夕闇に包まれて暗くなる。閉店準備をし終わって今は店内の清掃中……。

今日も色々あったんだ。

開店から午後の三時頃までは他店のお姉さんや居住エリアの奥様

方がお昼ご飯や井戸端会議的なことを店内でしていた。他から喫茶店の情報を聞いたのかカツプルが数組来たりもした。彼女かあ…ケツ！羨ましくなんか無いんだからね！！

そして木乃香ちゃんと明日菜が部活を終えて弁当箱を返却しに来たりしたな。……明日菜達な？ちゃんと弁当箱を洗って返却してくれるんだよ。俺はいいって言っているのに2人とも「ご馳走になっているからせめてこれだけは」って聞かんのよ。

2人とも律儀だよな？木乃香ちゃんとはもかく明日菜までそんなだから正直意外だった。俺の知らないところで礼儀正しく育ったんだねって思ったら寂しいのと同時に何だか誇らしくなった。

娘の成長を喜ぶ父親の心境かね？

弁当箱返却後に俺が2人に奢りでケーキセットを出して駄弁っていたら時間が経っていた。1時間も経っていたからビックリだったな。木乃香ちゃん達を遅くなる前に帰して一息吐いたらまた知り合いが来た。

それは、もう常連よろしく通っているエヴァちゃんと茶々丸ちゃんだった。

…茶々丸ちゃんって知っているとは思うけど、とってもいい子なんだよ？自分は飲み食いでできないからってお店の手伝いを買って出してくれるの！いい子じゃね？それに可愛いしさ。

でね？最初はお客様なんだからって遠慮していたんだけど「私は

何か間違えたのですか？」って彼女の純粋なカメラアイで見られてみ？お手伝いくらい許しちゃうってなもんでしよう！

一応、エヴァちゃんの従者だから主人の許可がいるということであれが視線で問いかけたら「ふんっ」って視線を逸らして「勝手にしろ」と言われた。茶々丸、理解のある主人でよかつたね？ツンしかないツンデレだけど……。

それ以降、エヴァちゃんが当店に居る間は茶々丸ちゃんが手伝ってくれることになった。彼女は要領がいいから即戦力で働いてくれたよ。たまに四葉・五月ちゃんチャオパオスの超包子でお手伝いしているらしい。

接客経験はそこで身に付けたんだね。まあ茶々丸ちゃんは元から人に尽くすことが得意と言うか何と言うか……くくくつ　そう、素直な子なんだよね。今時あんなに純粋な子は滅多に居ないよ？娘に欲しいくらいだな。

今日も満足したのかエヴァちゃんも6時頃には帰って行った。あ、名乗ってない……。また今度でいいか。

でな？家はだいたい7時くらいにお店を閉めるから出来るところで閉店準備をしていると扉のカウベルが鳴って来客を知らせてくれたんだ。

今度は刹那ちゃんだった。

夕食かな？って考えていたら背後にもう1人居た。中学生とは思えない長身と健康的な褐色の肌の女の子。夏になる前に刹那ちゃん

に紹介された龍宮・真名ちゃんだった。臨時の仕事でよく組んでいるので彼女にはお世話になっているので俺に紹介したらしい。

今、考えてみると確か…あの子も超・鈴音側じゃなかったっけか？初めて会った時は超・鈴音に依頼されて不確定要素の俺を排除しに来たか？と疑ったけど違ったしな。本当にただの同僚の紹介だった。

むー？そういえばその時、見た感じでは武装と考えられたのはあのギターケースくらいのもだった。アレだけではこのお店は落せない。まして俺を暗殺するなんて無理だ。ただの杞憂だったのかもなあ。

……………今、考えていて、もう一つ懸念が出てきた。いや、出てきたと言うよりも出来たんだな。それでだな？懸念というのは…真名ちゃん経由で俺や皆の名前が超・鈴音に流れたんじゃないか？ということだ。

はあー……………もう、やだorz周りは敵ばかりです…。

まあ今そんなことを考えても仕方ないことだ。ここは開き直って考えよう。自己暗示はこうだ「バレてない。バレてないんだ。バレてない…はず」。不安が残る自己暗示だが気分的には楽になった。……………現実逃避だけどな！！

まあそんな2人が来たのは何のことはない少し早いけど夕食をこ

ここで食べようということらしい。閉店時間も近いから注文を聞いてパッと出したさ。サービスで刹那ちゃんにはデザートに御手洗団子を、真名ちゃんには餡蜜も付けたな。

あ、それと真名ちゃんはどうかやら真名“ちゃん”と呼ばれるのが好ましくないらしい。何故。それがわかったかと言うと、いつも俺がそう呼ぶと頬が引き攣っていたからだ。子供扱いされていると思っただのかね？まさか、恥ずかしかつたわけではあるまいしな。

“真名ちゃん”と呼び始めたのは彼女が餡蜜を食べに1人で店に来た時だから我慢の限界だったのか知らんけど真名ちゃんは実力行使に訴えようとした。所謂、銃を額に押し付けて「お話ししようか？」というヤツです。

ただ……あの時は場所が悪かった。店内だったんですよ。それも閉店間近の、ね。当然、他人は誰も居ない。全て身内だけだった。真名ちゃんが銃に手を掛けようとした途端に彼女の背後から二刀の小太刀が左右から伸びていたんだ。

ハオとユエの白と黒の刃が鋭利な光を放っていたのが印象的だったなあ。それに冷や汗を掻いている真名ちゃん自身もね。あと一歩踏み出していたら首の筋が切れていた。そんなことがあったから普通に話し合い、今のちゃん付けて呼ぶに押し切ったんだ。

真名ちゃんごめん！これだけは譲れないんだ！お礼に餡蜜もタンとご馳走したからいいだろう？満足そうに頬を緩めていたのを俺は知っているぞ？

それでまあ夕食の終わった刹那ちゃん達も帰って今日のことを振り返りながら掃除をしていたら皆も終わっていた。外は街灯が点いているが、もう真つ暗だ。道行く人が疎らなことから飲食店のほうに流れているのだろうと思う。

「んー！はあー！今日も終わったー！皆、お疲れ様！そろそろご飯にしよう。…あ、夕食の当番は誰だっけ？」

「それでしたら、わたくしですわ。夏ですので食べ易いようにトマトと鶏肉の冷製パスタとジャガイモとほうれん草のポタージュにしようと思うのですが、いかがでしょう？」

「いいねえ。それに温野菜のサラダを付けてくれたら言うこと無いよ」

冷凍系の固有特性を持っているリチラが作る料理はヒンヤリとしていて夏には重宝するなあ。夏バテにはなりたくないしね。

今日の夕食は洋風か。ご飯でガツツリもいいいけど冷製でサツパリもいよいね。身体が冷えたら消化に悪いからポタージュと温野菜を付ければ完璧じゃね？あとは食後に温かいお茶も入れれば万全だな。

それはとにかく俺は腹ペコです。お腹空いたわー…。

「では、そのように。そうですね！デザートに手作りバナナアイスをご用意してありますの。食後に、お出ししますわね？」

「うん、楽しみにしているよ。皆、聞いたね？サツサとテーブル片

付けてご飯にしよう！」

「「「「「はい」「」「」」」」」

テーブルを動かして場所を確保したり、椅子を運んで席を作ったり、布巾でテーブルを綺麗に拭いたりして最後にリチラの作った料理を並べたりと各自で出来ることをして食卓の準備をした。

団欒をした夕食後…。

その日の夕食も楽しく美味しくいただきました。皆と食べるご飯は賑やかで楽しいね。1人で食べるご飯は不味くは無いかど何か味気なくてイカンよ。メリハリのある食卓はいいなあと毎回思うよ。

皆も食べ終わったようでそれぞれに食後のお喋りをしている。俺もリチラに夕食のことを話している。お礼はちゃんと言わなくちゃいけないんだよ？そうしないと人としてダメになるからな。

「いやー、美味しかったー リチラの料理は夏だと冴え渡るよね」

「ありがとうございます 葵様や皆さんに喜んでいただいで、わたくしも嬉しいですね」

「葵ちゃん、はい、お茶、入れたわよお」

「ありがとう、ミリー。んー 満足 満足」

今日も平和に終わった。あとは夜の反省兼報告会をしてお風呂に入って歯磨きして寝るだけだ。木乃香ちゃんや明日菜は元気だった。刹那ちゃんと真名ちゃんも変わりなかった。エヴァちゃんと茶々丸ちゃんは……いつも通りだったな。

あ、深夜番組の録画予約しておかないと……。

学生さんが夏休みを控えた今の時期に海外ドラマの“24時間”が深夜に分割で一挙放送しているんだ。お金はあるからDVDをBOXで買ってもいいんだけど……こういうのは何となく録画したくないませんか？

こんな感じで今日も終わりだなあ、と感じて皆にお休みと挨拶して自室に敷いてある布団の上に横になったんだ。程よくお風呂で解れた身体の力を抜いて目を瞑って、いざ夢の世界へ……というところまで。

ピーッ！ピーッ！ピーッ！ピーッ！ピーッ！

建物内で非常事態を告げる赤の警戒色をしたランプが点り、けたましいとまでは言わないが、それでも耳障りな警報の音が鳴った……。不本意ながら地下拠点に正体不明の敵が侵入したようだ。

「はあ  
…」

それは俺の休息が遠退いた瞬間だった…。明日も早いのに…。

S i d e o u t 葵

第四十二話「朝と昼と夜と」(後書き)

あれ?どうして、こうなった?

警報って何だ?どうして、こうなった?

どうしよう?また原作が遠のくわー…orz

まあ…やってしまったものは仕方が無い。

見切り発車な感が否めないけど、やるしかない!

ではでは!またいつか!

感想&ネタ&それ以外!舞ってます!…もとい、待ってます!

第四十三話「侵入と困惑と初出撃？」（前書き）

侵入者です！迎撃戦用意！！

みたいな展開を表現したかった。後悔はしているが反省はしてない。  
では続きをどうぞ！

## 第四十三話「侵入と困惑と初出撃？」

クレイドル地下拠点司令室…。

Side アイリス

それは地下拠点にある執務室で高く積まれた書類と格闘をしている時のことだった。夜も更け半分に欠けた月が高く上る時刻に突然地下基地への侵入を知らせる警報が全施設内に鳴り響いた。

自分は緊急事態につき、地下拠点の司令室に出来うる限りの手段を用いて急いで向かった。やがて見えてきた司令室の扉に駆け込み状況の報告を命じた。

「状況を！！」

「アイ・マム！監視カメラが捉えました！敵アンノウンは二番通路の比較的薄い壁面を破壊して侵入した模様です！」

二番通路！？クツ！あそこは通路を構築する時に誤って地盤に近いところを掘ってしまった場所ではないか！！後日に補強を計画していたのに…。何というタイミングの悪い時に侵入を許したものだ！！

いや！！後悔するよりも今はやることがある！！

「敵数はどうなっている！？侵入者の現在位置はどこか！？情報を

メインモニターに出せ！」

「メインモニターに情報、出します！」

司令室の奥の広い空間に立体映像で構築された各種情報と監視カメラの映像が映し出された。立体映像は地下拠点の詳細な構造図と赤く点滅している光点が複数。そして光点の示している部分をズームした映像。

赤い光点の他に青い光点が無数にある。これは味方の無人機と地下拠点担当に任じられている者達だ。青い光点が広く散らばっているのに対して侵入者を示す赤い光点は一塊になり一転突破を仕掛けているようだ。

味方の部隊は未だに電撃強襲をしている侵入者と接触できないでいる。やはり強襲戦と防衛戦では後者のほうが難しいものだ。

立体映像の隅に浮かんでいる空間モニターに解析情報があり、その一つに侵入者が進もうとしている場所の予想地点を割り出しているものがあつた。

「現在、確認されている敵アンノウンの数は10！それ以上は確認されていません！！敵アンノウン、尚も進行中！…あ、予測進路出ました！！これは…“世界樹”方面へ進行中です！！」

「なっ！？警備システムは何をしている！？無人機部隊を迎撃に当たらせる！！警備担当者はどうした！？」

このままでは世界樹の地下近くに設置した魔力蒐集装置と大・小魔力カートリッジの生産ラインが被害を受けてしまう！いや、それ

よりもあんなところで戦闘に入って機器が破損でもしようものなら大変なことにッ…！！

あの場では世界樹から放出されている魔力を装置で高濃度に圧縮してカートリッジに封入して生産しているのだ。そのカートリッジが戦闘で破壊されたら地下拠点は…いやここ麻帆良は甚大な被害を受けてしまう！？

それだけは看過できないことだ。それに何より、ここには閣下が居られるのだ。何としても死守しなければならない！

「自動迎撃システムは稼働中！無人迎撃部隊は展開中…いえ！訂正します！無人迎撃部隊が敵アンノウンに接敵！」

「いいぞ！そのまま敵の動きを拘束しろ！増援と同時に敵アンノウンを包囲！こんなふざけたことをした奴等を捕獲しろ！！」

「イエス・マム！！無人迎撃部隊の各部隊に信号送ります！」

よし！このまま敵の動きを阻害して、その場に拘束している間に他味方部隊で退路を絶てる！侵攻予想ルートには味方部隊が展開済みだ。これでふざけたマネをした不届き者を捕獲できるな。

しかし、この施設に侵入してくるなど、どこの手の者だ？自分達には明確に敵対している組織や個人は居ないはず…。それにそういった者達は最優先で処理してきた。

処理方法だが暗殺はもちろん、軽いものでも記憶処理や洗脳処置、マインドブレイカー プレインウォッシュ他にも事故死に見せかけたこともある。大抵は魔法薬による記憶操作なのだな。

何にしても捕らえて尋問すれば良いだけのことだ。それで今回の失点を回復するとして……。

「……っ！司令代理！敵アンノウンは包囲突破を第一にしています！弾幕を張っても損害を気にすることなく……止まりません！！！」

「呆れた……まるで決死隊だな。隔壁を閉鎖して敵アンノウンの進路を限定しろ！五番倉庫へ誘導するんだ！世界樹へ行かせるな！！！」

味方の被害をもともしないで我武者羅に突破するとは感心するべきか、呆れるべきなのか、わからないな……。ともかく自分達にとってはあまり好ましくない事態なのは間違いない、か……。

とりあえず拠点内の防護隔壁を閉じて物理的に誘導してカートリッジ生産区近くの五番倉庫に誘導するように指示を出したが……包囲網を強引に突破した侵入者のことだ。強引に隔壁を破壊して突破しないとも言えないから……不安だな。

それよりも敵の侵入から20分以上が経つ。いい加減、敵固体情報の解析と分析が出来てもいい頃なのだがな。

「解析班！敵アンノウンの解析は、まだか！？」

「あと少しです！もう少し……もう少し……来たッ！解析結果、出ました！！！」

「スクリーンに出せ！」

「イエス・マム！」

拠点の立体映像の横に解析された敵の固体情報が表示された。

そこに映し出されたモノは“人型の姿をした人ではないモノ”だった。身長2m強のやけにガタイのいい大男だった。そんな強面な男を模して作られている。それになぜか知らないが黒くて厳ついサングラスをしている。……なぜだ？

いや、しかし、この情報は以前に似たものをどこかで…？

「これは…自動人形か？……いや、それにしても、あの瞬発力は異常だった。…それにこれは機械化した部分が目立つ…」

この大男の姿をしたモノは自動人形に似ている。だが、ただの自動人形にしては珍しくも機械化した部分が多い。いや多過ぎるか？近代兵器やビームを装備しているのも気になる。それに…。

「魔力反応が無い……違う、低いのか？…っ！これは、そんな…まさか…まさか！そんな！？これは機械人形か！？」

機械人形…それは現在、閣下が研究開発中の代物だ。始めはただのゴーレム研究が発端だったようだが久しぶりに興が乗ったご様子で色々と手を変え、品を変え研究しているものだ。

機械人形は今ある無人機動兵器や無人偵察機のように集団戦を想定して作製されたものだ。事地上戦では他の無人兵器よりも高スペックを示している。

それに従来の虫型とは違い、完全に人型の姿をしているのが特徴だ。この姿だから汎用性が高く地上戦での高スペックを実現できる

のだ。

しかし、それはまだカタログスペック上のものだ。今は試作品が3機あるのみはずなのだ。……それなのに侵入者は10機もある。これの製作者は誰だ？ いや、それよりもこれは機械人形マキナ・マータの設計図が流失したとでも言うのか！？

「イエス・マム。司令代理の推測通り、これは司令が研究中の機械人形マキナ・マータに似通った技術であると考えられます」

似通った？ 似通った、だと？ それはつまりアレか？ 懸念した取り、こちらの技術が本格的に流出したかもしれないということか！？

「貴様は閣下の研究資料が流失した！ そう言うのか！？ クツ！！ ……閣下の所有物をあのような紛い物にされたツ… アノヨウナツ！！」

もし本当に閣下のお作りになった設計図や技術が流出したならば即時奪還、回収しなければならぬ！ そして！ その愚者には然るべき制裁を与えなければならぬ！！ 絶対にだ！！ クハツ！ クハハハハツ！！

殺 シ テ ヤ ル ツ ！ ！ ！

「ククツ！ クハハハハツ！！」

「司令代理！ 落ち着いてください！ 今は、この事態を收拾しなければなりません！！ それに司令も、それを望んでおられるはずですよ！！」

「ツ！？ ……そう、だったな。すまない… あまりの怒りに我を忘れて

しまった…」

そうだ…。まだ本当に流出したのかわからないのだった。これは解析班の推測だったのだな。それにアレは機械人形マキナマタに似ているだけかもしれない。この情報資料は直接、閣下に確認してもらい判断を仰ぐことにしよう。

「いえ、私も司令代理に無礼な言葉を…。失礼をしました」

「かまわない。お蔭で冷静になれた。敵の目的はわかるか？」

「見たところ敵アンノウンも、まだ試作段階のようです。そしておそらく敵の目標は“出来るだけ多くの情報を収集すること”だと考えられます」

多くの情報を収集すること、か。アレは試作機…ということは実機の稼働データに始まり、試作された武装のデータ、連携に関する実働データ…他にもあらゆるデータを収集すること。つまりは…。

「“実戦データの収集”か…。試作機ならば道理だな」

「イエス・マム。敵は慎重で用心深く、そして…大胆です。私達相手にデータ収集をするのですから」

「はっはっはっ！ そうだな！ 確かにそうだ！」

面白いことを言うじゃないか！ 慎重に深く静かに行動し自分達に気付かれること無く、用心深くも最適と思われる侵入場所を割り当てたこと、そして何よりも…自分達相手にケンカを売った、その大胆さ！

笑える！！晒える！！嗤えるぞ！！敵の愚かな行為にな！！可笑しくて、堪らない！！クハツ　ハハハツ！……ふんっ、だが、それよりも可笑しく思うのは自分達の油断と慢心にだ！！！！

敵対者が減ったことで油断した！！自分達に敵う者は居ないと考え慢心した！！……まったく、愚かなりしは我等也！！我等は愚者也！！……チツ！自分自身に腹が立つ！！事前に排除することも可能だったろうに……いや、これは言い訳だな。

ククツ！クハハハツ！！……いいだろう。こうなった以上は生かしては帰さない……。例え、その身が傀儡だとしても奥に居る元凶を探し出して捻り潰して閣下へ献上してくれる。そうとなれば全部隊に指示を……。

「敵アンノウンが隔壁を破壊！侵攻を再開しましたっ……司令代理！！」

「どうした！？報告をしろ！！」

何だというのだ！？指示を出そうとしたら緊急事態の形相をして声を張り上げた。それと自分が言うのもアレだが慌てるのは感心しないぞ？それと……報告は明確にしろ！！

「申し訳ありません！！ですが進路上に葵くん……司令の反応があります！！」

「な！何だとツ！？メインモニターに映像を出せ！！」

それは予想していなかった！！なぜ、閣下が！？き、危険は無いのだろうか！？まさか、お怪我をされたのでは！？ええい！！映像

はまだ出ないのか!?

「アイ・ママ!... 監視カメラの映像、出ます!..!」

モニターに映し出されたのは五番倉庫の広い空間だった。証明と元の遺跡内の明かりが照らす何も無い倉庫内の中心に敵を待ち構え立ちはだかるように存在する閣下の姿があった。

「ッ! 閣下:!!なぜ、そこに居られるのですか!? ハッ!? 通信を: 閣下に通信を繋げ!...何をしている!? 急げ!..!」

閣下が危険区域に居ることに自分は思わず語気を荒げてしまった。だが閣下に通信が繋がっていないことを思い出し急いで通信を繋げるように通信士に命じた。閣下自身が現場に出ていることに驚いて呆けていた者達が自分の怒声に慌てて作業に入る。

「イ、イエス・ママ!...こちら司令室、応答願います!こちら司令室、応答:ッ!通信繋がりました!..!」

「よし!こちらに回線をまわせ!..!」

「アイ・ママ!」

閣下との通信が繋がると回線を自分のほうへ回すように指示した。スピーカーに回しても場合によっては要らない混乱を招くことになるかもしれないからだ。必要ならば閣下がスピーカーに切り替えるように指示するだろうとも考える。

そして回線を回すように指示した瞬間、自分の前に空間モニターが映し出された。モニターには閣下の姿が映し出されている。

「閣下!!聞こえますか!?!閣下!!!?!」

『~~~~ツ。…アイリ?慌てて、どうしたの?』

「お怪我はありませんか!?!ご無事なのですか!?!ご無事ですね!?!ご無事なのですよね!?!」

『いや、大丈夫だから!落ち着こう!ね?…それで一体どうしたのさ?』

「ツ!?!それは自分のセリフです!!閣下こそ、そんなところで何をしていますかツ!?!?」

普段ならばありえないことだが、この時に閣下を怒鳴ってしまったのは間違いではないと思うのだ。自分達に心配を掛けたのだから、これくらいは許されるだろう?無用に閣下が戦場に立つことなど無いのだからな。

『ぐおお、耳に響くうう…。その…警報が鳴ったでしょう?それでラミエルさんが面白そうなのが侵入したって言うから間近で観察してみようと誘われて…』

『なっ!!我が主、汚いぞ!?!我は変な曲者が進入したとしか言っておらぬ!誘ったのは我が主ではないか!?!』

『ああツ!?!ラミエルさん!シート!シート!』

今のは……どういう、こと……なのです、か?……ねえ?閣下?いえ、ここは敢えて葵君とお呼びしますね?葵君?君は何を考えてい

るのかな？自分から戦場に立つなんて危険なことをするなんて……。皆が心配するでしょう？ねえ？

それとラミエルの言ったことは聞こえましたよ？どういうことなのかな？お姉さん、その辺りをジックリ詳しく聞きたいんだけどなあ？……本当にどうしてくれようか？この鉄屑ラミエル……。

本来なら一番近くに居る貴女が止めるべきでしょう？それを貴女は何なのかなあ？どうして一緒になってそんなところに居るのかなあ？……解体するぞ？この鉄屑ラミエル女郎？それはもう無残に悲惨に残酷に徹底的にやるわよ？コラア？

「……………鉄屑ラミエル？……………葵、君？」

『あッ！？いや！あの！これは！その……………てへっ』

葵君……………可愛いなあ！！もう もう

「……………ッ！……………ふうう……………ラミエル……………」

『む？何だ？アイリスよ』

何だ？…じゃない、でしょう？何を自分は悪くないみたいな態度で居やがるのかなあ？…焼くぞ？溶かすぞ？生リンチゴミの中にブチ込むぞ？オイ？……ああ、それとも私刑リンチになりたいのかなあ？

んんっ！それはともかく鉄屑ラミエルは何をしたのか、わかっていないのかなあ？貴女は葵君を本来なら無用な危険に曝しているのよ？故に私が命じることが唯一オシリ・ワンつなのよ……………。

「…何としても閣下の御身を死守しろ。いいな？自分の全権限を以つて、これは厳命だ。…もし万が一！億が一！！閣下に傷を付け、てみ、ろ？ククツ！そ、その時、は…クハクハ、クハハハツ！！」

『ぜ、善処する…』

…この子は何を聞いていたのかなあ？私が何を言ったのか、ちゃんと聞いていなかったのかなあ？マジで焼却炉に生ゴミごとブチ込んで七日間、燃やし続けてやろうかなあ？…これは活を入れる必要があるかなあ。クククハツクツハハハツ

「…すう 温いッ！…！！！」

「…ククツ！?!?」

鉄屑ラミエルに活を入れたはずなのに…なぜ司令室の皆と葵君まで背筋を伸ばして気を付けの姿勢をしているのかなあ？…何で皆はそんなに汗を垂れ流しにしているのかなあ？

何で…いえ、今はそれよりも鉄屑ラミエルに再度厳命しなければならないかなあ…。

「鉄屑ラミエル……自分は何と言った？聞こえていたよ、なあ？あゝんツ！？”死守しろ”と厳命したはず、だな！！？”」

『ア、アイ・ママ！！！必ず死守する！！！！』

「二度は無い…いいな？」

『イ、イエス・ママ…』

まったく…聞こえているなら最初からやらないとダメかなあとお姉さんは思うのよね。だって、そうでしょう？なぜなら思わず…。

捻り潰シタクナルノダカラ…：クスツ　クスクスツ

あ、ああ…あれ？意識が悪魔時代の黒い思考になっていたよう、な…？んんっ！ともかく！自分の出来ることはしたような気がするので自分は気にしない！！あとは閣下に今、収集できた全情報を渡して少しでもサポートしなければならぬ。

あと援軍も送らないと…。

「…閣下？聞いての通りです。無茶をなさらないでくださいね？それと、こちらで解析した敵情報はラミエルに送ります。いいですか？」

『イエス・ママ！』

「は？…閣下？」

え？えツ？えーツ！？何で閣下が自分に最敬礼の姿勢をとっているのですか！？…はう！？これは、まさか、新手の…嫌がらせ！？自分は何か、閣下の気に障ることをしたのでしょうか！？

できることならいつも通りに優しくお話したいし接していただきたいのですが！自分は！！その辺り、どうなのでしょうか！！？

「か、閣下？あの…」

『いーいや！わかった！無茶はしない！大丈夫！ラミエルに守ってもらおうから心配しないで！ね！？ラミエル！！』

『ここで我に振るのか！？~~~~ツ！！先程も言った！必ず死守する、と！』

『ね！？アイリも、これで安心だ！！な！？』

え？いえ、あの、そうではなくてですね？いや、しかし、閣下の目には何やら恐怖が見て取れる…。これは…そうか！アレか！！未確認の敵を相手取ることに対する緊張なのですね！？その緊張を解すために自分をからかっただけなのですね！？

わかりました！このアイリス・D・スタニク！この場は閣下の意思を尊重し話しの流れに乗りましょう！！

「……………わかりました。安心かどうかは置いておきますが……」

『あ！！侵入者が来たみたい！！それじゃね！！』

「閣下？閣下ツ！？閣下ーツ！！？」

あ、あれ？あれ！？どうしたことだ！これは！？閣下はなぜか慌てて通信を切られたぞ！？閣下が言っていた侵入者のマーカーは隔壁と突破後に迎撃部隊と交戦中。閣下の居る五番倉庫には接近していない。

あの慌てぶりはどうしたことだろうか？…………やはり心配だ。ここは応援部隊を送るべきだろうか？いや、寧ろ自分が直接行くか？

この時の自分は割りとは本気でそう考えていた。

Side out アイリス

地下拠点五番倉庫内…。

Side 葵

今、俺が居るここは二番通路と世界樹の間にある五番倉庫だ。ここは世界樹の地下近くに設置してある魔力蒐集装置で作られた魔力カートリッジを一時保管することを目的に作られた場所だ。

そして今の倉庫内にカートリッジは一つも無い。一週間前に一定量に達したので運び出したばかりなのだ。マジでそれだけは良かったと思うよ。カートリッジが満載された空間で戦闘とかマジで勘弁だしね。

戦闘の余波で誘爆とか、してみ？地下施設だけではなく地上の麻帆良も跡形も無く吹き飛ばよ…。本当に運び出したあとで良かった…。侵入者はそんなこと知らないからねえ…。だから余計な危険を省けてよかった。うん、マジで！

今回の侵入騒ぎで考えたんだけどさ？やっぱり、こういう危険なことは「工房」内で生産したほうが比較的安全かなって思ったんだ。確かに生産量は世界樹のほうが高いんだ。でも「工房」内なら生産

量は落ちるけど時間でそれはカバー…できるといいなあ。

あー…それにしても、先程のアイリのプレッシャーは凄かったなあ…。

「いやー、思わず通信を切っちゃったけどアイリ、凄く心配していたなあ。…何だか悪いことした気分だ」

『うむ…。アレは…すごかった。通信越しなのにプレッシャーが…  
…ガクブルガクブル』

「あはは…」

ラミエルさんには申し訳ないことをしたなあと俺は思うわけですよ。だって俺の行動に付き合ったからアイリに怒られたわけだからさ。ラミエルさん、ごめんね。もし解体されそうになっても俺が助けるから許してね？

『……我が主よ？』

「……みなまで言っな。ラミエルに任せるよ」

言わなくてもわかってているよ。勝手な行動は取らないって約束するさ。今回は俺の行動にラミエルさんを巻き込んだからね。これ以上勝手したらアイリにもっと怒られてしまうからね。大人しくしてありますよ？ええ。

もう一度、ラミエルさん、ごめんね。

『…すまない。感謝する』

「気にするな……」

うん、気にしたら負けだよな？ 仮に俺でも先程のアイリの激怒に触れたら逆らえないような気がする。しかし、アイリは怒ると本当に怖いなあ…。一度タガが外れると容赦がなくなるから怖いんだ。

特にプライベートの時の怒気はスゴイ…。つい先程の怒ったアイリも怖かったけど、それ以上だ。仕事の時は表情を出来るだけ能面にして感情を覺らせないようにして怒るから、まだ理性が働いているとわかるんだ。

でも、プライベートの時はその理性のタガが外れ易いようなんだよ。雰囲気は怒気を現しているのに表情は、すんばらしいほど笑顔なんだ…。怒気のオーラさえなければ綺麗なお姉さんで通るのに雰囲気がそれをブチ壊していたんだよな…。

あれは怖い…。怒られているのが俺じゃないと、わかっていても周囲の空気が瞬時に変わるんだ。気温が数度一気に下がって寒くもないのに悪寒が走ったり冷や汗が出たりするんだよ？ 何も知らなければ病気と勘違いするって。

だから俺はアイリがプライベートの時は極力怒らせないように注意しています ……まだ死にたくないからね。

『我が主よ、ここで提案があるのだが、どうか？』

「…まずはその提案とやらを聞こうか。話しはそれから」

俺がアイリのことを思い出していたら考え事をしていたラミエルさんに声を掛けられた。機械音声の女性版ハスキーボイスで言われた言葉も声色も割りと言葉だった。

おふざけは無しのかな……。まあとりあえず内容を話してもらわないと判断できないからサツサと話してごらんさい？トンデモ話で無ければお兄さん、ちゃんと聞くよ？……聞くだけの時も多々あるけどね？クスクスッ

それで何なのかね？

『うむ。アイリスは我が主に傷一つ付けるな、と言った。無論、言われずとも我もそうするつもりだ。だが……』

「だが？何……？」

『今回は絶対に失敗できぬのだ……』

「あー……アイリのプレッシャーすごかったもんねえ」

あの剣幕じゃねえ……。アイリの言葉通りに取ったと考えたら本当に俺に傷一つ付いたらもの凄い罰を与えそうだよなあ。アイリのあの怒気というより狂気？つばいオーラは出来るだけ振り撒かないでいてくれると嬉しいなあ。主に俺の心臓に悪いからさ。

それで？絶対に失敗出来ないならラミエルさんは、どうするのかな？

『うむ。故に我は思考したのだ。“絶対の盾”が必要だと』

「盾？DFや魔法障壁があるけど…」

Dフィールドはマジで便利だ。初めて使った時は科学で魔法を防げるかが不安だったけど結構余裕だったしね。それに対物対魔障壁は即時発動できる待機状態を維持している。俺は信じているよ？Dフィールド万能説をね。……物理攻撃には若干弱いけど。

それでもラミエルさんは不安なのか？大丈夫だよ。分解なんかさせないからさ。肩の力を抜こうよ？ね？……あ、肩つてどこだよ？という疑問はこの際、無視する方向で。

『否！それだけでは不十分だ！もし我が主に傷が付いてみる？我はアイリスに解体処分されてしまふ！それだけは…』

「いくらなんでも、アイリはそんなこと…」

『甘い！我が主は甘いですぞ！？アイリスのあの表情と声は……本気だった！本気でしたぞ…』

「…しないから大丈夫」と続けようとしたのにラミエルさんは少し被害妄想のように脅えている。半分冗談のようなものだろうから、気にしないほうがいいと思うんだけどね。

首から掛けて胸元にあるラミエルさんがプルプル震えているのを見くすぐったく感じる。……この子まさか本気で脅えているんじゃないかな？本気と言っても半分は冗談なんだから大丈夫だろうに…。

もう仕方ないなあ。俺は苦笑しながらラミエルさんの青い結晶体を優しく撫でて落ち着くように囁くように言った。

「あー、もう……。よしよし、大丈夫だから、な？俺が解体なんかさせないからさ。元気出そう？ね？」

『う、うむ。すまない。それで話しの続きだが……。 “プロテア” を覚えておるか？』

「……覚えているよ。忘れるはずが……無い！グスッ……」

そうか……今度は俺が泣く番なんだな？そんな悲しいことを思い出させるなんて酷いじゃないか！始動実験の時に一度乗っただけなんだぞ！？戦闘には一度も乗ったことが無い……というよりも乗れなかった。ラミエルさんの身体の中にあつたからなあ。

あれ？目から心の汗が……。雨でも降ってきたのかな？……ハハ、ここは地下でした。降るわけ無いや……。

『な、泣くでないぞ、我が主……。とにかく今回は “プロテア” を使うことを提案する』

「なに！？使えるなんて俺は聞いてないぞ！？」

えッ？何、それ！どういうこと！？……いつからだ？いつから使えるようになっていたんだ！？」

俺は侵入者騒ぎそっちのけでラミエルさんを問い質すようにした。ラミエルさんは俺の驚きをわかつているのか、いないのか割と冷静に……そして何でも無いと言つように軽く話してくれた。

チッ！可愛さ余って憎さ百倍だな！ラミエルさんは！！でも、可

愛いから許すけどな！！可愛いは真理だからな…。

『何？言っていないかったか？…それはすまなかった。今年の1月に入ってから我が体内の胎動が止まったのだ。何か？と思い、念のため自己スキャンしたところプロテアの強化、改良、最適化、その他諸々が終わっていた、というわけだ』

おう！？俺の知らない事実がたった今、明かされた！？

「今年の1月！？半年以上前じゃないか！！…：…それなら、もつと“早く”に動かしたかった！模擬戦とかでもいいから“乗りたかった”よお」

『そんな我が主よ…。我に“乗りたい”などと、それも“早く”動かすなど…。ふふふ 我が壊れてしまうではないか！やん やん』

「…：…なんか違う気がする。色々違う気がする、けど…まあいいや！それよりもプロテア出してよ！ラミエル！」

『やん 我が主よ、そこは…ダメだ。あ…ふふふ だから早くしてはダメだと…あ、んんっ…いや』

ダメだ…。この子、早く何とかしないと…。

だからラミエルさん、くすぐったいんだってば。プルプル震えるのに加えて妙な発言と動きをしないでよ…。イカンな…数百年振りに変な気分になるかも。でも！男の子は我慢の子！！忍耐の子！！

「あ…何だろう？この微妙な疎外感は？はあ…。すう…ラミエル！アテンションッ！！！」

『ッ!!! Roger, My Master!!!... あ? あれ? 我は? あれ?』

「ラミエル? プロテア、出・し・て?」

ちょっと威圧しちゃったけどごめんね、ラミエルさん。俺はどうしても愛機のプロテアに乗ってみたいのだ!

『む? あ、ああ。そうであつたな。では...』

ラミエルさんが俺の傍を前方に少し離れて拡大してビクビク震えたかと思うとピタッと停止した。そのことに、あれ? と思った次の瞬間ラミエルさんの内側からメタルブルーの力強い腕が生えてきてビククリ...。

ずる... ビチャビチャ...。

腕がもう一つ出てきてラミエルさんの中から這い出てきたのは1機の流線型をした重厚な機械の巨人。...て、思いつきりエヴァっぽくね? あの黒い球体の使途さんから出てくる初号機さんみたい...。こっちはラミエルさんだけだ。

まあそれはいいんだよ、それは...。そんなことよりも俺の機体だ! 全高は変わらない。イキシア? よりもやや大きいくらいだ。見た目はカラ・リングがメタルブルーになっただくらいだ。

それでも全体的な細かい部分が違うのだ。初めて乗った時の記憶が鮮明に思い出されて目の前の、それと見比べてみるとよくわかる。

俺の機体には“翼”は無かった。これはリビエラの機工ウイング・マキナ天翼か？俺の機体はもつと“スマート”な形状だった。よく見ると増加装甲のようで任意でパージできるようだ。

そして何よりも俺の機体は“変形機構”なんて無かった。ナニ、コレ？戦闘中に変形なんて悠長なこととしていたら落されるだろうが…。これはアレかね？俺に死ぬと言うのかね？形状を見てみると変形元は戦闘機のようだ。

マク スかよ……。パワー ーダーを元にしてナデ コ世界の技術と魔法技術を使用したのに、これは何だ？何でVF系の変形型戦闘機なんだよ…。どこで間違えた？ラミエルさんを起動キーにしたからか？ちくせう…。

「お、おお…それでも俺の、愛機だ。もの凄く久しぶりだ。……形が違うけどorz」

『形？ああ、数年前から「格納庫」から少しずつ拝借していたからではないか？プロテアが部品を要求してくるので我も不思議に思っていたのだが…。こういうことだったとは思わなんだ！はっはっはっ！それよりも我が主よ？何をしておるのだ。早う乗らぬか』

いつの間にか元の3cmほどの大きさに戻っていたラミエルさんが、そうほざいていた。何気に爆弾発言というか横領の自己申告を聞いた気がするのは気のせいだろうか…。

ア、ア、ア、アレはお前かーッ！？消えた資材を合計すると、かなりの量だった！…まさかラミエルさんだとは考えもなかったわ  
！！

信じられるか？イキシア？の3機分の資材と部品が、だぞ！？それに何に使ったかと思えば「プロテアが要求してきた」だとう？機体の強化や発展には資材や部品が必要なのもわかるが正式な手続きを取ってもらいたかったものだな。

はあ…。調査の件は解決したけど、これじゃあスッキリしないなあ…。

「……まあ、そうだな。それじゃ…よつと！…ん。ハッチ閉鎖！ラミエル！プロテア起動準備！」

『Roger・起動シーケンス…スタート…』

端末の窪みに機動キーとしてラミエルさんを填めると真っ暗だったコックピットの中は全周囲モニターに映し出される様々な情報と無数の数列が流れ出して瞬くように照らされる。

その明かりに浮かぶのは俺の嬉しそうな顔だろう。ようやく乗ることが出来るのだからこれくらい許して欲しい。

パイロットシートに身体を固定してIFS端末に左手を乗せ、右手で感触を確かめるように操縦桿を握って起動準備が整うのを待っている。まだか？まだか？初回起動は時間が掛かっていけないな、と思う。

『システムチェック開始…システム、オールグリーン。』

…各種並列魔導量子回路、正常に稼働中。

高圧縮魔導機関、並びに連結式反重力機関の起動を確認。

両機関ともにエネルギー臨界へ…出力102%で安定。順調に稼働中。

両主機関より各部位へのエネルギー供給に問題無し。  
武装チェック…全兵装、稼動状態にて待機中。  
全兵装は格納領域にて待機状態へ移行。

プロテアの起動準備完了…起動するか？我が主よ』

来たッ！俺は即座にプロテアの起動をラミエルさんに命じた。早く、早く！男のロマンの一つは間違いなく巨大ロボットに乗って自由自在に動かすことだと俺は思うんだ。もう、待ちきれないね 本当に！

『Roger・人型機動兵器プロテア起動します。…起動完了。…稼動状態に問題無し』

起動すると全周囲モニターに外の映像が映し出された。高度計や速度計などの計器も搭乗者に見易いようにモニターに配置されている。

「周辺のスキャン開始。敵の位置と接敵の予想時間を」

『短距離レーダーに複数の反応有り。個体数は10。北北西より当機へ接近中…接敵まで180秒と予測』

「いいねえ…。的が自分から来てくれるよ。くくくくくくく」

球体型レーダーの左上に赤い光点が10個、表示された。次にそれはピピツという音がして自動で敵を固定して反応をロックした。これでレーダーの範囲外に離脱されたり妨害されたりされない限り居場所を補足することが出来る。

同時に周辺の地形も立体グラフで簡易表示される。ただ、ここは五番格納庫というだけあって、だだっ広い空間でしかない。あるのは運搬用のクレーンや移動用貨物トラックくらいのものだ。それに今それらは自動運転で邪魔にならない場所に移動させてある。

……話しは変わるんだけどね？なんだか、こういう折れ線で表示された地形の立体グラフが何かのゲームであつたなあ、なんてさ。……まあ、これはこれで状況を見易いからいいんだけどね。

それとアイリから送られてきた情報にあるのは相手が機械人形マキナ・マータである疑いがあるということだ。ただ俺は、それが俺の作製している機械人形ではないと断言できる。

いや、この場合“できる”と言うよりもアイリの情報で犯人に目星が付いたと言うかな。

考えてもみてほしい。この時代にあんなに高度な自立型ロボットがあるのはおかしいでしょう？今回のことは超・鈴音一派の犯行で決まりだ。まあ先入観で決め付けているかもしれないけど後で今回の裏を取るから“今は”推測だな。

それでも、九分九厘、当たりだと確信している。それになぜこんなことをしたのかには心当たりがあるけど……今、その話しは後にして、とりあえず今は侵入者を排除することに集中しよう。

『油断するなよ？我が主。この機体の中に居れば我が主が怪我をすることは激減するとはいえ相手は敵だ。何をしてくるか、わかつたものではないのだからな』

「わかつてるよ。油断なんかするものか。……ただねえ、これでこ

の拠点の破棄は決まったようなものだからお返しはしないと、って考えただけだよ」

「はあ今回の襲撃は実のところ、それが一番痛い。発見された隠れ家なんて百害あつて一利無しだ。今ある地下拠点は破棄して場所を移す必要が出来た。それも早急にして迅速に、だ。あ、頭が痛い問題だなあ…。」

「はあ、数年掛けて建設した地下拠点が数年と経たずに破棄することになったんだから、遣る瀬無い気持ちにさせられるのは仕方ないと思う。」

「まあ幸いにも各種カートリッジの生産は建設前から生産されていたから数は必要十分確保できたからいいけどね。……ただ、それでも生産拠点を一つ潰されたのは痛い問題だ。んー…急ぎではないけど代わりを用意しておいても損は無いだろうか。」

「ああ、そうだ。これを機に月の拠点プラントにてカートリッジの生産ラインも確立するか。」

「…お？これって案外、いいアイデアじゃないか？月の魔力は満ち欠けで上限下限するけど膨大な魔力という点では世界樹をも凌ぐほどだ。あー…ただ“拡散する魔力を上手く集約できれば”、という制限はあるがな。」

「くくく いや！俺の保有する技術力ならやれる！！月に魔力芯を打ち込めば常時安定的な魔力を半永久的に確保できる！……はずだ。実験したこと無いからこれに関しては確信が無い。」

「侵入者を排除したら早速、月に居るアン達に指示して実験しても

らおう。それで期待通りの成果が出たならばカートリッジの生産ラインを確立しよう。うん、そうしよう。

『敵が何であれ、事が露見したのだ。それは諦めるしかないな。下手に維持しては要らぬ危険しかもたらさぬよ』

「…そうだな。とりあえず機材を運び出して…うん、勿体無いけど後腐れ無いようにナノマシン処理して完全破棄しよう」

早く終わらせてアン達に連絡を取らないとならないな。……地球への帰還が延期になると言ったら彼女達は不満に思うかもしれないなあ。……今度の家族サービスは彼女達を少し優先しよう。うん、それがいいような気がする。

『それがいい。………来たぞ』

「こんなケンカ売ってきやがって………返り討ちにしてやる!!」

俺がこんな苦勞をする羽目になったのもこいつ等のせいだ。せめて俺の八つ当たりという名の暴力を一身に受け止める的になってもらおう。なに、お前達の主人にも然るべき時に返礼をさせてもらうさ。安心して逝くがいい……!!

Side out 葵

第四十三話「侵入と困惑と初出撃？」（後書き）

あれ？これはどういうことだろうか？

今回で侵入者有り、迎撃戦有り、葵の出撃有り、勝利して試合終了のはずだったのに……。

……どうして、こうなった？

とりあえず次回で終わらせてみよう。

自信無いけどな！！それでもヤルしかない！！

意見&感想は随時募集しています！では！

第四十四話「未来人？と防衛戦とお説教？」（前書き）

今話は続きですな。遅れて申し訳ないです。

さて…とある感想でネタが提供されたので少し構想中です。

やや変更点がありますが、いつか上手く出来たらと考えてます。

ではでは！

## 第四十四話「未来人？と防衛戦とお説教？」

麻帆良学園都市の、とある地下…。

S i d e ？？？

突然だが超・鈴音は薄暗い研究室のような部屋で困惑していた。機械の工作台や何かに使う大きな用途不明な機械の塊が乱雑に部屋の隅にまとめられてある。そんな部屋で1人の少女は目を見開いていた。

彼女が困惑し始めた時と理由は偏に目の前のモニターに送られてくる映像を見てからだ。そこに映し出されたものは遺跡と木の根…そして大規模な工場のような機械郡だった。

本来の“歴史”なら、学園都市の地下には昔の魔法使い達が建築した、古いが造りのしっかりとした遺跡と世界樹の丈夫で巨大な根が縦横無尽に張り巡らされているだけのものだった。そう、その“はず”だったのだ。

彼女はもう一度、画面を凝視して注意深く観察する。しかし、映し出される映像は変わらない。いや、撮影者が移動しているので変わらないわけではないが、それは超・鈴音にとってはどうでもいいことだ。

彼女の興味は映し出された中にある機械郡にあるのだから…。

「どづいつことネ？これは…」

薄暗い研究室に彼女の言葉に答えるものは居ない。数時間前までは部屋にもう1人居たのだが今回の調査のために2人で10体の“TANK 1（プロトタイプ田中）”を数日間、時間をやり繰りしながら徹夜で用意したために今は仮眠室で夢の中だ。

「……どづいつことネ？」

返事の無いことは、わかっている。わかっているでも彼女は言葉にしないと困惑から抜け出せないとも言つように口にするのだ。

「こんなモノ私は“知らない”ヨ…。一体、“歴史”に何があなたネ…？」

彼女が言う“歴史”とは文字通りの意味だ。彼女は“知っている”のだ。無数に存在する未来の可能性の一つを…。超・鈴音はそんな未来の一つからこの時代の麻帆良学園都市に降り立ったのだ。

近い将来に起こる悲劇……そう、どこにでもある悲劇を回避するために彼女は物理的な距離どころか時空間を跳躍して現代に来たのだ。その覚悟は生半なものではないだろう。

「ッ!？」

モニターに映るモノに変化があった。そこにあるモノは機械の昆虫と言えはいいのだろうか？足は6本あり、主脚走行するものと飛行するものがあり、頭部から大きく突き出た角は鋭利な剣か突撃槍形はカブトムシを模したものと思われる。

機械の昆虫が群れをなし、10体のTANK 1を先へは行かせまいと言うように隊列を組み迎撃準備をした。画面には、まだ遠くてハッキリしないが、機械昆虫には銃器も取り付けられているようだ。黒光りする物が向けられていたのが見える。

「これは“何か”を護ているのか?…一体、これらが“何”を護ているのか、気になるネ」

彼女は困惑から若干だが立ち直ったようだ。目の前の端末に手を乗せて素早くキーを打ち込んで行く。端末に打ち込む内容はTANK 1への命令変更だ。ただの調査作業から“強行偵察任務”へのシフト…。

TANK 1は命令を受信。それを本当に実行するのかと“Y/N”の確認メッセージがポツンと出てきた。彼女は迷い無く“Y”のキーを押した。その選択が後の間違いへ繋がるとも知らずに……。

命令を変更されたTANK 1は即座に実行に移った。機体内部に格納された武装を展開したのだ。あるモノは小型のガトリングガンを装備し、あるモノは小型ミサイルポッドを背面に展開しあるモノは試作のビーム兵器を装備する。

他にもそれぞれに試作された兵器を展開、装備されていく。準備の整った10体のTANK 1は通路の前方に布陣する機械昆虫に正面から相対し、そして……。

「イケ、プロトタイプ田中」

……彼女の意思を受けたT ANK 1は機械昆虫の群れに突撃を開始した。

最初の接敵の攻防は一進一退の状態を映しているものだった。だが戦況は数に有利なはずの機械昆虫が、たった10体のT ANK 1に押されていた。

機械昆虫側は防衛戦のために担当場所を動けずにいる。本来、機械昆虫は空戦や宙戦などの広い場所で機動戦術を主として設計されたものであり、狭い通路などの、ましてや防衛戦には不向きなのだ。

一方のT ANK 1側は地下調査のために突貫で作られたプロトタイプとはいえ地上戦と地下空洞内を重視したものだ。敵地なので地理的には不利だが自己の性能を活かせる分、地形的有利があるのだ。

何よりもT ANK 1は攻める側だ。そしてT ANK

1は強行偵察を任務として与えられた。損害を気にすることなく愚直に前進して包囲網を一点突破して施設の奥へと進撃して情報を収集、自らの造物主へ送られて行く。

今、奇跡的にもT ANK 1は全機、損傷はあるが行動不能にまでは陥ることは無かった。激しい銃痕は全機に刻まれている。腕の左右のどちらかが損失しているものもある。しかし行動に支障が無い限り、動ける限りは問題無い。

進路を遮るように隔壁が降りるがT ANK 1は閉ざされた

進路は無視して開いている進路を奥へ目指して進む。

モニターから目を離さずに観察していた彼女は送られてくる情報を見直し記録していく。そして、フと思考の端に“何か”が引つ掛かったように感じた。もう一度、映像と情報を見比べて再度思考し直した。

「これは…誘い込まれて、いる力? ……不味いかナ」

再び端末に彼女は指を走らせて指令を変更した。命令内容は“隔壁を破壊してでも強引に奥を目指すこと”だ。まさに一点突破な命令だった。力技なのが否めない命令だが単純故に、それは効果的だった。

TANK 1は造物主から送られてきた命令に愚直に従った。今まさに降りてくる隔壁を試作ビームで焼き貫いて進路を確保したのだ。

だが、その行動は遅過ぎた。奥へ進んだ先にはただただ広い格納庫と言わんばかりの空間が広がっていたのだ。そこにはTANK 1を待っていたと思われるメタルブルーに塗装され重厚な姿をし、力強く翼を広げた機械の巨人。

「こ、これは……パワードスーツ、なの力?まさか、この時代にあ

りえないヨ！」

モニターに映し出されたモノを見て超・鈴音は愕然とした。

パワードスーツ…それは未来で使用された軍事用の特殊戦闘装甲服。服とは言っても前高8〜10mもする破壊の力を持った機械の塊だ。その力は強靱無比、戦闘機並みに空中を駆け、様々な武装を使いこなすことが出来るので戦艦の砲撃以上の打撃力を持つ。

彼女自身も軍用のパワードスーツを所有している。しかし、パワードスーツは所詮、個人戦闘装備。要は未来で規格化された特殊歩兵用装備と変わらない。もちろん彼女が所有しているものは自身で極限までチューンしてある。

それでもパワードスーツよりも段違いで劣るのだ。言ってしまうばパワードスーツは戦車や戦闘機、もっと言ってしまうえば戦艦なのだ。ここまで言えばわかるだろう。戦闘力が違い過ぎるのだ。

モニターに映し出されたものが彼女の想像したとおりの物だった場合、これは戦術的に見て脅威以外の何ものでもない。

無論、彼女の推測は違う。実際は葵が造り、ラミエルの中で長い間、自己進化したプロテアはそれ以上のスペックを保有した存在だ。今なら某スーパーロボットともガチの勝負を余裕で繰り広げられるだろう。

そんな存在とはモニターに映し出された機体を見ても今の彼女は知らないことだ。

そして考える。彼女の今後の計画に若干…必要ならば大幅な修正

をする必要性が出てくるかもしれないのだ。

「…………ツ」

彼女は今、初めて選択を間違えたかもしれないと後悔した。

「好奇心は猫をも殺す、カ…。でも、やてしまったものは仕方ないヨ。最早、残された手段は出来る限り多くの情報を引き摺り出すしかないネ！」

漠然と纏わり付く不安を振り切るように勢い良く端末からT A  
NK 1に指令を出した。命令内容は…。

“突撃！突撃！！突撃！！情報を出来うる手段、全てを用いて  
収集せよ！！”

彼女の…超・鈴音の戦いは不本意ながら今始まった…。

S i d e o u t ????

五番格納庫内…。

S i d e 葵

さて…五番格納庫内へ入ってきた不届きな侵入者。……そのはず  
なんだが何だかボロくないか？身体中に銃痕が刻まれているし酷い

ものは腕が損失しているのや頭部の一部が欠損している。それにア  
レ見覚えがあるような…。

何だろう？この気持ち…。ついさっきまでは侵入者を叩き潰して  
やるなんて考えていたのに、目の前に整列して前進してくるボロボ  
ロな姿をしたのを見ると…その、ええと、アレだよ、アレ。そう、  
ヤル気が萎えるんだ。

ん？哀れに見えるんじゃないか？…何、言っているの  
？家族や俺の製作物なら壊れた物は助けようとか、こんなに働いて  
くれてありがとうと感謝もするだろうけどさ。他人の作品には敬意  
は感じて愛着は…あまり感じないかな。

「はあ…まあともかくアレを排除するか」

『うむ。…些か我等の相手には不足なのが否めぬが仕方あるまい』

「言つな。何であれ相手は戦う態度を見せているんだ。その発言は  
相手が傀儡とはいえ己自身の誇りを貶める行為になるかもしれない  
よ？」

『むう…。そうだな、すまぬ。許すが良いぞ』

「俺に謝ってどうするんだよ。まあ謝罪の気持ちがあるなら本気で  
相手してやるのが、せめてもの手向けになるんじゃないか？」

とはいえ…こんな地下の閉鎖空間では荷電粒子砲はもちろん、大  
規模な爆発物も使えない。自爆して生き埋めなんて勘弁だ。今、把  
握している兵装だと…近接武器や小型砲…それにレーザー砲などが  
使えるくらいか。

相手は人型だが大きさは精々が2m弱…。攻撃されても装甲に傷が付くくらいだろう…。と、思う。何気に今の自分の愛機のスペックを把握出来ていないのが痛いなあ。どれだけ無茶が出来るのかわからない。

仕方ないから、その辺りのことは確かめながらいくしかない。

『うむ！任せよ！……ふむ、向こうも動くようだぞ？上から指令が下ったようだな』

隊列を崩し散開した。ザツと見て前衛5体と後衛5体に役割を分けて戦闘を仕掛けてくるようだ。スタンダードな陣形で全機が地面を、その機械の足で鋭い瞬発力を活かして駆け抜けてくる。

なかなか素早いじゃないか…。

「くくくつ！今、撤退するなら未だしも尚攻めて来るか…！誰にケンを売ったのか、教授してやろう…！行くぞ…！」

『Roger, My Master!!』

プロテアの動力を一気に戦闘出力へ上げ機体のテンションを上昇させる。俺の操縦するプロテアもスラスタに力強い推進力を発生させて前方の侵入者に向かって低空を飛び翔る。見る間に侵入者との距離が縮む早さだった。

「落ちろッ…！」

先制攻撃で手に持つレーザーライフル光学式突撃砲で先頭を走る侵入者に狙いを定

めて引き金を引く。その一撃は呆気無い程に1体を撃破した。

俺は、この時プロテアに搭乗して初めての戦果に舞い上がって、後の機動を忘れて立ち止まってしまった。まあそれが、いけなかつたんだな。一斉にオックオン警報が情報画面に流れるように映し出された。

『Warning! (警告!) Warning! (警告!) Warning! (警告!)』

「ッ!? マズッ!」

初めての戦果で舞い上がっていたことで油断したんだ。周囲から銃撃が、小型ミサイルが、ロケット砲が、ビームなんかもが全力で俺目掛けて飛んでくるんだ。気が付いた時は遅くて回避出来ない距離だった。

『Emergency! (緊急!) Defense! (防御!)』

「ぐう!! 試作品の割りに素早いじゃないか!! このッ!」

ラミエルがプロテアを緊急防御の姿勢にしてDフィールドを展開。更に背面に搭載された6機の機工天翼ウイング・マキナが敵機迎撃のためにラミエルの指示にしたがってレーザーを発射。これで3機に命中、その内の1機を撃破した。

『残敵数8ツ!! 内訳前衛4後衛4!! 近接戦用意!! 後衛は我が牽制する!!』

「任せた! さあ! 来い!! お前らの相手は俺だ!」

ラミエルは引き続き機工天翼を巧みに計算して操り敵後衛の4機を追い詰めて行く。俺はプロテアの正面に敵前衛を見据えて光学式突撃砲を構え機体を走らせる。

『…後衛を狙い打つ！Fire！！（発射！！）』

「チイッ！！ちょこまかと動きやがって！！  
ッ！そこだ！  
」

ラミエルと俺がほぼ同時にロックオンカーソルにそれぞれの敵に狙いを定めると砲撃を開始した。俺は2機に命中し1機を撃破。ラミエルは4機に命中、そして同じく1機を撃破した。

「よし！次ッ！！  
ぐう！？」

『怯むな！損傷ダメージは皆無だ！！』

敵は僚機を撃破されてもお構い無しに攻める手を緩める気配が無い。もしかしたら撤退条件が設定されていないのだろうか？この味方の損害でも撤退しないところを見ると、そうとしか考えられない…。

「わかつてるッ！はああああ！！」

『ならば良い！！  
！！そこで止まったのが貴様の最期だ！！  
Fire！！（発射！！）』

ラミエルは俺が光学式突撃砲で砲撃して動きを牽制した侵入者の背後に機工天翼を展開し、レーザーの雨にて蜂の巣にした。これでまた1機を撃破したことになる。

……と思ったのだが、しぶとくもあの砲撃の中を生き残ったらしい。緩慢な動きながらも愚直にロケット砲を目の前に居るプロテアへ向けてくる。しかし、侵入者の居るそこは俺の射程内だ。直ぐに俺は光学式突撃砲を向けて引き金を引く。

「そ・こ・だーッ!!」

『残敵数5ツ!!』

「あと半数!!」

先程のしぶとかった1体を今度こそ撃破した。残りは半数と俺は確認して次の行動に移ろうとした。情報画面には侵入者を示す赤い光点が5つ点滅している。一番近いのは、と一瞬思案する。

だが意外と負けず嫌いなラミエルが残敵数の変更を宣言するように機工天翼で1体の侵入者の四方を囲み、出力を上げた4本のレーザーで容赦無く鉄屑に返していた。

『いや、これで残敵数4だツ!!』

「ラミエル、ナイス!!俺も負けていられないな!!」

これで俺が撃破したのが3体でラミエルも3体か……。残った4体もこれまでの戦闘行為で正直ボロボロだ。いつ止まっても不思議ではないと思う。

『ふふんっ どうだ?惚れ直したか!』

「……いや、元から惚れてないし」

この子はこんな時に何を言っているんだろうね？今は戦闘行為の真最中なんだけどなあ……。それに俺の性癖は前にも言ったように青い結晶体に欲情するようなものはないと断言してある。だいたい俺を欲情させたければ……。

ポインなお姉さんを連れて来い！

……というものだ。……いや、ごめん。訂正がある。可愛ければ年齢は……問うけど！可愛ければ少しくらいはピクツと食指は動くかも shouldn't……。……俺は何をカミングアウトしているんだ？鬱だわー……。

『テンション低ッ！？我が主よ！ここは嘘でも惚れていると言うところではないか！？』

「えー…嘘でもいいの？」

『………やだ』

ラミエル…お前、“やだ”って二文字で否定か？先程までの勢いとハイテンションはどうしたんだ？まあ普段の不遜な態度のラミエルもいいけど、しおらしい態度のラミエルもいいね！！キャラ性に少しクラッて来たよ！

キャラだけだけだな！！これが人型だったなら危なかったよ！！

……ミリーやオリビエ達みたいに専用に調整した偽体を用意すれ

ば擬似的に人の身体を再現できるけど。……………やる予定は無いな。

ラミエルは今の姿だからラミエルなんだからな!!

「素直でよろしい。……………まあラミエルのことは好きだから気に入るな。な？」

『我が主……………』

ラミエルは嬉しそうな声で俺のことを呼んだ。そう…嬉しそうにね。しかも感激しているんじゃないか？こいつは…。何と言つか…大げさだと思っただよなあ。

それにしても、しまったなあ……。つい余計な一言を言ってしまった。いや、嘘じゃないよ？ラミエルのことは好きだからね。ただ面と向かって言うのは恥ずかしいものがあるじゃないか。ねえ？

「んんっ！まだ戦闘の途中だ！まだイケるな？」

『誰に言っている！今の我等を止められる者など存在しないわ!!』

ラミエルさん…。律儀にも侵入者は俺達の話している間、待っていてくれたようだよ。密集して俺達を警戒しているみたいだ。

まあ態々待っていたんじゃないやなくて本当のところは一度後退して態勢を立てなしていたというところだろう。既に当初の半数以上が堕ちているのだから警戒してくるのは当たり前前といえば当たり前前なんだけどね。

俺にとっては相手にどんな思惑があったのか知らないけど待つて

いてくれたんだから結果的には良しかな、うん。

IFS端末に強く意識を送り込みプロテアのスラスターを噴かせる。スラスターから噴き出るエネルギーは力強く、そして大きい。枷を外せばすぐさま侵入者へ向かって鋭い砲弾の如く飛び出すだろう。

「いい返事だ！！くつくはーっはっはっはッ！突撃だ！！」

『あーっはっはっはっはっ！！踊れ！踊れ！！踊れ！！あーっはっはっはっはっ！！』

スラスターから溢れ出るエネルギー。止めている、その枷をIFS端末に意思を注ぎ込むことで外した。瞬間。一気に加速が始まりプロテアはスラスターから噴き出るエネルギーの燐光を残して低空を滑るように翔る。

この時は気分が高揚してくる！！体内を駆け巡るナノマシンが与えられた役目を全うしようとする！ああ！IFSは使用する時に戦闘本能が刺激されて好戦的になるというけど本当かもしれないな…なんて並列思考の片隅で考えてしまう。

IFSを始め、人体にナノマシンを注入すると少なからず気分が高揚するものだ。俺には魔法使用時の補助、強化のナノマシンも身体の中を流れている。使用する時には高揚感が付いて回る。

……むう、これは今後のために改善するべきかな？

俺が直接戦うことなんて、ここ数十年が多いくらいで数百年単位では殆ど無かったからなあ……。気にしていなかったんだよ。あー……。でも、戦闘するなら適度な高揚は気分的にいいかもしれないし……。

でも、これってズバリ言うところドローピングみたいなものなんだよなあ……。

んー……。でもまあ今までも特に不都合があるわけじゃないからいいか。不都合が起きたら、その都度、調整していけばいいのだから。

侵入者はプロテアの加速が想定外の速度だったために対応が遅れている。そして、その隙は、この場合、決定的だった。プロテアの移動が速いからか侵入者の動きが相対的に見ていると遅く見える。武装を構える姿が酷く鈍い……。

俺の搭乗するプロテアは右手に光学式突撃砲を構えて牽制射撃をして距離を詰める。腰部装甲に付属されている超振動特殊精霊鋼剣トウハンドソードの両手剣を左手に持った変則的な体勢で斬り付ける。

「遅い！！……ふんっ！これで残りは3だッ！！」

斬り付けた侵入者が爆発したのを見て撃破したことを確認した俺は次のターゲットを探した。今ので撃破したのが4体目だ。ラミエルより一歩リード！あと3体！リーダーで、その内の1体を確認して右後方へ向いた時に侵入者が視界に入った！

しかし、その侵入者はラミエルが操る6機の機工天翼により周囲を囲まれて逃げ場がなくなる一歩手前だった。そして、それがいつまでも続くわけも無く次の瞬間には六条の光り輝くレーザーが侵入者を貫いて撃破した。

『残敵数2ツ!!』

ラミエルも4体目を撃破して俺の撃破数に並んでいた。残りは2体…。ここで一気に2体を片付けたいところだ。別に賭けをしているわけでもないし、数多く倒したほうがエライというわけではないけど、ここまで来たらラミエルに勝ちたいと思うんだ。

だって俺は臆病者だけど負けず嫌いなんだからな。

勝ちたい…。そう思うから俺はある意味、安全の確保されたプロテアを操縦して侵入者を倒すんだ。レーザーに表示を固定された1体へ光学式突撃砲の銃口を向けて無造作に引き金を引いて蜂の巣にした。

「これであと1体ッ!!」

『最後は我が貰おう!!』

「あッ!?汚ねッ!!」

俺が言い終わる前にラミエルは機工天翼を最後の侵入者へ向けて凄まじい速さで襲い掛からせる。俺も負けじと光学式突撃砲を乱射して侵入者の逃げる足を牽制しながら徐々に射線を狭めて確実に撃破しようとした。

「『これで！！ラストッ！！』」

そして撃ち放たれた俺とラミエルのレーザーが同時に最後の侵入者を貫いて撃破したのだ。最後の1体は俺かラミエルのどちらが落したのか判断がつかないから引き分けにするとして……。

ふふんっ　これは俺の勝ちだろう？俺は5体を撃破した。ラミエルは4体で最後のは引き分けの1体だからな。まあ勝ったからと言ってどうということは無いんだけどね？何と言つか……こういうのは気分の問題じゃないか。な？

『Mission Complete』

「一応、大きな損害は無かったな」

うむうー……？最初に俺がしくじった時に全力攻撃されたのに損傷らしい損傷が無いとは……この機体ってエライ丈夫だなあ……。

一応、全力攻撃の始まる瞬間にラミエルさんが咄嗟にプロテアを緊急防御の姿勢にしてくれた。それも当然Dフィールドも張られていた。お蔭で俺はピンピンしていられるというものだ。

本当に思うんだけどさ。Dフィールドは、やっぱり万能なんじゃないだろうか？確かに物理攻撃にはやや弱いけど、それはDF発生装置の改良と供給されるエネルギーの出力次第でフィールド強度を上げることが出来る。ほら？万能じゃね？

あれ？何か忘れているような？うーん？……………

……あ、思い出した……。

「ねえ？ラミエル。……多分だけど、この後アイリから“お話し”がある気がするんじゃないんだ」

『言つな、我が主！下手に言葉にすると実げ……』

ラミエルさんが必死になって否定しようとしていたら“ピーッ、ピーッ”と通信があることを知らせるアラーム音が鳴り響いた。左手首につけているコミュニケに目を向けて送信者を確認してみた。

……なんとなく誰からかはわかるけどね？一応の確認だ。それで案の定、相手は……。

「……………アイリからだ」

『クッ！我が主のせいだぞ！！』

「なっ！？俺のせいだよ！？」

『そうではないか！？我が主が変なことを言うからだ！！』

「か、関係無いだろ！？そんなことは！！」

何この子！？もの凄い取り乱しようなんですけど！！そんなにアイリの“お話し”がイヤなのか！？別に壊れるわけじゃないんだか

ら気にしなくてもいいじゃないか！！ちよつと擬似精神回路に幾つかエラーが発生するだけだよ！…多分な！！

そこからはお互いに言い合うことになった。その一部が以下の通りだ…。

『関係ならある！』「何だよ、それ！？」『因果関係だ！』「はあ！？」『我が主の言葉を切欠にして、この事態に…！』「ちよつ！？おまつ！待てよ！！」『待たぬ！良いか！？そもそも我が主は…！！』「だから待てて！！」『そもそも我が主は自分の力を…！！』「だ・か・ら・！本当に待ててば！！」『ええい！何だ！？』「さつきからアイリが通信先で待っているの！！」『……なぜ、それを早く言わないか！？』「言おうとしたらどうが！？」『したただけだろつ？！言い切らぬか！』「お前のせいだろつが！？」『何を！？』「何だよ！！！」

以上のようなやり取りが30分も続いたんだ。その間中、ずっとアイリは通信待ちをしていたんだな、これがさ。もう、俺とラミエルさんは戦々恐々しながらアイリの通信をオンにして相對しましたよ。

空中に映し出された通信画面には…。

『……………終わりましたか？』

「は、はい…」『う、うむ…』

ものっそい笑顔のアイリが映し出されてましたあ……。意味も無くチビリそうになったよ。メッサ怖かったです。画面越しのはずなのにプレッシャーが半端無いんだよ？因みに押し掛かるプレッシャ

1の割合は6：4でラミエルさんのほうが重い。

多分だけどアイリが怒っているのはラミエルさんが俺の護衛兼武器なのに危険な場所へ行こうとする俺を止めようとせずに行ったことだろう。まあそれだけではなく、ラミエルさんも、ただ追従したことが更にアイリの怒りに触れたんだと思う…。

ラミエルさん…マジでごめんなさい。怒られて回路に支障を来たすようになっただけなら付つきりで修理と看病してあげるから許してね…。

『……はあ、お説教は後にしますから即時帰還してください。地下拠点の撤収も既に開始されていますので作業に撒き込まれないように気を付けて下さい。……わかりましたね？』

「『イエス・ママ！』」

でも、今は説教をしている時間的な余裕は無いのも事実だ。アイリも司令代理を任せられるだけあって指揮官として判断してくれたのか後回しにしてくれた。俺達が言い合いをしている間に作業も開始されていたらしい。

……何？問題の先送りじゃないのか？だと？

断じて違う！地下拠点が発見された以上は速やかに撤収しなければならなんだ！余計なことをしている時間は無い！………因みに俺とラミエルさんの不毛な言い争いに30分以上使ったことには触れないでくれ。マジで時間が無いから…。

『最後に………閣下？』

「な、何かな？」

お説教はイヤだなあ…なんて考えていたらアイリに名指しされました…。この時間の無い時に態々ね。

……俺が何をした？……今回、勝手に戦闘を行ったことか？それとも割と独断で月プラントの建設に踏み切ったことかな？もしかして、マキナ・マータ機械人形作製で趣味に走りかけたこと？それとも…それとも…！

うわー…思い当たることが多過ぎて…逆に、わからない！？何？俺は何を言われるのかね！？い、今更、言われても変更が出来ないことも数多くあるんですけど！？ガクブルガクブル…！

そんな風に表面上はシレッとして取り繕っていても内心では不安で取り乱していた。それなのに画面上のアイリは先程までの“すんばらしい笑顔”がスツと崩れて今度は泣きそうな笑顔になっていたんだ……。

『心配、したのですよ？次からは、このようなことが無いように、してください、さい…グスツ。……いい、ですね？』

「……………うん、ごめん。反省している。もうしないよ」

アイリの、この表情を見たら、心配掛けたなあと思うとね？何だか、くずぐずしたいような恥ずかしいような、何とも言えない気持ちにさせるものだった。

いやー、心配掛けてごめんなさい。

『何を笑っているのですか？きちんと反省してください』

ん？いつの間にか俺は笑っていたのか？

はははっ、そうか。うん、不謹慎だけど、やっぱり家族に心配してもらえるのは嬉しいものだね。気持ちがホッとするんだよね。暖かいなあ

「うん、本当にごめんね？それと…ありがとう」

『も、もう！……知りません！』

画面の向こうのアイリが顔を真っ赤にしたと思ったならコミュニケーションの通信がブツリツと音を立てて切られた。

何だよ？素直に謝ったのに……。俺、何かアイリの気に障ることをしたのか？……え？何？俺、アイリの機嫌を損ねたの！？えっ？俺、死ぬの！？主に“お説教地獄”とかで！！あー…マジで鬱だ。

今日の教訓は“アイリを怒らせるな”だな、と考えた俺は悪くないと思いたい…。

S i d e o u t 葵



第四十四話「未来人？と防衛戦とお説教？」（後書き）

葵の戦闘は最後が締まらないなあと作者が思う今日この頃…。

文才が欲しいところという時は思いますな。

シリアスな展開って作者は長続きしないようなのですよ…。

まあこの作品は基本方針が”のほほん”なのですけどね

では！また次回お会いしましょう！チャオツ！

PS・モンハンに憑かれた作者がここに…。皆さんはどっつでしょっつ？

第四十五話「月と家族と仲直り？」と「（前書き）」

ハンターランク5になってからなかなか進まない…。

お金が貯まらないのよ…orzモンハンは武具でお金が掛かるからね。

気晴らしに作品を書いていたら、なぜか、こんなに多くなってしまった…。

では！続きをどうぞ！

## 第四十五話「月と家族と仲直り?と」

月プラント生産拠点…。

Side アン

ここ月で艦船の生産プラント建設のお仕事が一段落ついた。そして週に一度ある地球に居る家族へ定時報告と近況報告なんかをする。いつも通りのやり取りのはずだった。それなのに今回は訳が違った。

いつもの定時連絡よりも1日早かったの。こんなことがあるのは緊急連絡しかありえない。そう覚悟して通信画面に映るアイリお姉ちゃんと画面越しに相對して聞いてみたら案の定だった。

その内容はお父さん達の居る麻帆良の地下に建設した施設が襲撃された、というものだった。

ありえないなんてことはない…。でも、それくらい言えるように隠蔽管理は徹底したはず。それなのに施設は発見された…。

施設建造の責任者はコーレアお姉ちゃんとサルビアお姉ちゃんだった。2人が作業の監督中にミスをした?ううん、電子報告書の内容にそれは無かった。仮に失敗をしたとしても2人が隠すことは無いと断言できる。

ということは…どこかで情報が洩れていた?それとも第三者に作業を見られた?仮にそうだとしても“いつ”、“どこ”から侵入し

たの？それは誰？

報告書には“比較的脆い二番通路の壁を破壊して侵入”と、あることから予め侵入箇所を割り出せるほど時間を掛けて今回の襲撃は計画されたと考えられる。だけど…襲撃を仕掛けた割りに敵戦力はお粗末なものだった。

ここまで用意周到に計画されたと思われるのに実際の襲撃は僅かに10体の機械人形のみ…。私達を馬鹿にしているのか、それとも予想外の戦闘だったのか。…予想外？

少し気になってお姉ちゃんと話しながら電子脳領域のほうで総合<sup>イカイ</sup>電子統合情報内に記録されている襲撃の映像記録と解析情報を見比べて推測を立てていく。

侵入時に侵入者は武装していなかった？侵入後に武装を展開している？これは偵察だったから？まさか…お父さん達が居ることは知らなかった？ううん、それこそ“まさか”だよ。計画的犯行だもん。その、はず…。

でも…知らなかったとしたら？侵入時に武装していなかったこともわかる。要は“ただの探索だった”のだ。だから武装なんて必要無い。でも、入ってみればお父さん達が居る。だから武装して慌て警戒した？

私は今までの推論を、頭を振って、そんな妄想にも等しい考えを追い出した。それこそ、ありえないもの。今回の襲撃は計画的犯行！これで決まり！先入観を持つのは危険だから他の可能性も考慮して対応しよう。うん。

「……そんな…それじゃ前から地下拠点の存在が誰かにバレていたの？アイリお姉ちゃん…」

『ああ、真に不本意ながらその通りだ……。今、地下拠点は撤収準備でゴタゴタしているよ…』

「うわぁー…大変そうだね。あ、それじゃお父さんは？」

麻帆良の地下に張り巡らされた施設を全部撤去するんだから大変だ。緊急時にはナノマシン散布をして取り付けられた機材のみを崩壊させて証拠隠滅を図る。でも、これは貴重な機材を回収出来ないから出来ればやりたくない手段。

そう考えると今回は回収できる分、運がいいかもしれない。…襲撃された時点で運なんて無いけどね。

そんな作業にお父さんも関わっているとわかったら気になるというものだ。無理はしていないか？とか、作業中に怪我をしていないか？とか、私が居ないのにお姉ちゃん達とイチャイチャしていないか？とか。……最後のは気にしないで。ね？

『ん？閣下か？……閣下も帰還後に、しばし休憩された後、現場にて撤収の指揮をされていた。今は……ああ、そうだった。アン達、月面組に閣下から新しい作業要請を言付かっているぞ？』

「新しい作業？何だろう…」

月に居る私達へお父さんから直接の作業要請…？本当に何だろう…。

本来なら麻帆良の地下拠点が襲撃されたのだから月での作業は無  
人作業機や自動人形オートマタに任せて私達は一刻も早く地球へ帰還。そして  
お父さんと合流するべきだ…。

なのに、お父さんは合流を指示しないばかりか月での別作業を指  
示した。地球の拠点が発見された、この時期に…。むう…新たに地  
球上に拠点建築を行うのなら地上組を使うだけで済む話だよな。

それなのに態々、私達に…。つまり、これは…。

「…“地球の地下拠点が発見されて使えなくなったから月に生産拠  
点を移して他生産プラントを増設する”とか、かな？」

『いい予測を立てたな。そうだ、今回の地下拠点を破棄するにあた  
り月プラントに新しくカートリッジ生産プラントや他生産ラインを  
構築することだ。施設の設計図の草案は後ほど送るので場所の  
選定をしておいてほしいそうだ…』

うーん…。今から施設を拡張するとなると…6ヶ月くらいの延  
長？うわぁー…大変だよ…。えーと…建築資材は月を採掘して、そ  
れを分子変換機で作るからいいとして…。あとは人材？作業人数か  
…。

殆どが自動人形や無人作業機だから私の中の小型プラントで生産  
すれば労働力は足りるかな。問題は…場所ね。どこに造ろうかな？  
この月プラントは月の魔力の溜り場の近くに造られているから…。

あれ？溜り場の上に造れば解決じゃないかな？これって…。うむ  
むむ…これは皆と要相談だね。…あ、その時は皆にお茶菓子の用  
意もしておかないとね

「なるほどねー…。んー…わかった。こっちの皆には私から話しておくよ。皆でいい場所を見つけておくね」

それにしてもアイリお姉ちゃん元気ないなあ。表情にも覇気が無いし笑顔もどこか、ぎこちない…。やっぱり襲撃されたのを気にしているのかな？施設完成後の管理責任者はアイリお姉ちゃんだったから責任を感じているのかもしれないなあ。

『ああ、頼む…。いい場所が見つければ閣下も喜ばれることだろう…』

「うん ……えっと、それで、ね？」

どうしよう？ポンと言い出してみたけど何て言ったらいいのかな？家族として、ここは励ましたいけど。…えーと？…えーと？

『???何だ？閣下への伝言か？』

「それは、もちろん、お願いするよ」

いけない、いけない。お父さんのことが出たから、つい即答しちゃった。今は、そうじゃなくてアイリお姉ちゃんのことだよ。

「あの…アイリお姉ちゃん。その、元気出して、ね？」

色々考えたけどストレートに伝えることにした。ゴチャゴチャ言っても始まらないし、それに上手く伝わらないような気もするしね。

私が拙い励ましを言つとアイリお姉ちゃんは小さく驚いた顔をし

て苦笑した。

『ッ！……驚いたな。まさか、アンにまで励まされるとは……。そんなに自分は顔に出ていたのか？』

「うん……。失敗しちゃったなあ、ってお顔してたよ？」

『そうか……』

また苦笑した……。襲撃を思い出して、また落ち込んでるのかな。アイリお姉ちゃんの表情が段々と険しくなっていた。ここまで落ち込むなんてなあ……。どうしよう？

「お父さんに……怒られたの？」

アイリお姉ちゃんもお父さんが好きだから怒られたら悲しいよね？でも、お父さんが家族へ対して怒るところは想像できないよ。うーん？だからこそ“怒られたらどうしよう？”って考えると怖いんだけどね……。

お父さんはアイリお姉ちゃんみたいに“もの凄くイイ笑顔”で怒りそうだなあ。あ、想像したら……ガクガクブルブル。こわいよう、おとうさん……。『

はっ？ダメダメ。今はアイリお姉ちゃんのことなんだから！……でも、お父さんに怒られることを想像したら少し気持ちい、げふんっげふんっ……何でも無いです。ええ、何でも無いですとも！

『いや、寛大な慈悲のお心を持つ閣下だ。ただ“気にするな”と言われたよ』

「そっか。…よかったね！」

そっか そっか お父さんはアイリオ姉ちゃんを責めなかったんだ。家族には優しいお父さんだもんね。…はえ？それじゃ何で落ち込んでいるのかな…？

私が何でだろう？と考えていると画面の向こうに映るアイリオ姉ちゃんが苦笑ではなく自嘲めいた晒いを顔に浮かべていた…。

え、やだ…何？

『フツ、これが良いものか…！』

「…え？」

何で？お父さんに許してもらえたのに…。何で良くないの？

『これでは周りの者に示しがつかない…！』

「え？あの…」

示し？え…？罰を受けないと示しがつかないということ？そんな……そんなの皆は気にしないよ。誰もアイリオ姉ちゃんを責めたりなんかしないよ…。

『無論、閣下の慈悲をありがたく思う。…だが！』

「アイリオ姉ちゃん…？」

それなら何で？お父さんも無事だったし皆にも怪我は無かった。ほら？結果は施設を破棄することになったけど生きていればやり直せるんだよ。

『自分は傲慢にも“我等に敵う者無し”と慢心した…』

「…えと、えと」

上手く言葉に出来ない…。普段は平気なのに…なぜか今この時は思考が働かない…。

『その結果が拠点を発見されるといふ失態を犯したのだ…!!』

「ッ!？」

それは!……それはアイリお姉ちゃんだけの責任じゃないと思う。施設を破棄することになったけど、お父さんは気にしていない。少し残念だな、くらいにしかな感じてないはず。だって、あと1年…来年の夏頃に破棄する予定だったのを私は知っているもの。

『自分は何としても汚名返上のためにも今回の襲撃の黒幕を上げなければならぬ…!』

「…………ッ」

犯人探しは今も情報部の皆がやってくれているよ。皆も襲撃されたところをお父さんに見られたことが恥ずかしい。情報部一課の犯人を探し出す情熱も気合も意気込みも違う。

『そうしなければ自分は…!!』

「っ！あ、あの…！」「ごめん、なさい…！！私！その、あの…  
そんな、つもりじゃ…！」

アイリお姉ちゃんがそんなに思い詰めていたなんて思いもしてなかった…。私は泣きたくないのに目から涙が出てくる。ふふ、この涙もカメラアイの洗浄液の意味合いしかなかったのに不思議だな…。

「は？…あ、ああ！？すまない！アンを責めているわけでは無いんだ！ましてや怖がらせるつもりも無い！つまり…あー、えーと、泣くな！な？」

「あう…ごめんなさい。ぐしゅ…」

私が泣いてしまったことに慌てたアイリお姉ちゃん。ごめんね？泣いちゃって…。でも、それだけアイリお姉ちゃんのことを心配だったんだよ。

うぐっ…人格が構築されてからというものの涙脆くなっている気がするなあ。感情を持つってこんな気持ちなのかな？まだ安定していないのかもしれないや。お父さんやお姉ちゃん達に悲しいことが起きると直ぐに泣いちゃうもの…。

はう…恥ずかしいなあ。

「はあ…アン？お前は近頃ますます感情が豊かになったな」

「え？そうかな？えへっ…でも、行き成り、どうしたの？」

呆れたように笑って言うてくるのは今までの内容と関係無い私の

感情面の成長についてだった。

でも、これは感情が豊かって言うのかな？何か違う気がするけどなあ。まだ人格構築が安定していないせいだと思うよ。機械的思考している時は感情の揺らぎは殆ど無いのにね？個性って難しい。

『いや、アンが閣下達に造られて、もう20年近くだったか？とな…』

「んー…完成時の製造年月日で言ったら私、今20歳だね。新世界の絶対標準時間で来年には21歳」

これは機械の年齢。人間の年齢に換算すると…11、2歳くらいかな？まだまだ若いのだ。それに今の見た目もそれくらいだしね。

『……姿は変わらないのにな？…色々と“小さい”ままだ』

「小さい？…？…？…ツ！！」

アイリお姉ちゃんの何かを含んだ視線の先を追うと私の体型…もつと言うなら胸の部分…。そこを見て言ってくる。視線に含まれた意味を把握した私はザツと胸を両腕で隠した。

「私には関係無いもん！姿は自分で選べるんだからね！？お、おおお大きさんて！自由自在よ！そ、それに大きいなんて飾りなんだから！偉い人にはそれがわからないのよ！？」

そうよ！大きいなんて邪魔なだけじゃない！全然羨ましくなくて無いんだからね！？あんなのは飾りよ、飾り！！アレが大きい人のソレの中には欲望が詰まっているのよ！！逆に小さい…もとい！

小ぶりな人は心が清らかなのよ!!

『ふふつ そうだな。今の姿は閣下が決められたものだ。気に入らないのであれば…』

「気に入らないなんてことないもんツ!!!」

気に入らないなんてことがあるわけが無い!この長いサラサラの銀髪も!透き通るような白い肌も!スレンダーな身体も!金色の瞳も!綺麗な眉も!スツとした鼻も!柔らかな唇も!全部大好きなお父さんが悩んで考えてくれた私への贈り物だ!

それが気に入らないなんてことあるものか!!!でも、お父さんはお、おおお、おお大きいのが、好き…なのかな?もし、そうだと考えると少し不安だなあ。

……身体情報を弄って見た目20歳にしようかな?今みたいなお女の姿じゃなくてね。

『はっはっはっはっ!!!すまない、すまない!少し、からかっただけだ。もう笑わな……ぷツ!』

「むーっ!また笑ったツ!?!?」

笑わないんじゃないのーっ!?言い切る前に“ぷツ!”って!“ぷツ!”って笑ったのよ!ヒドイと思わない!?

『はっはっはは、ははははっ!!!はっはあ…。いやあ、笑った、笑った』

「ふんっ………元気、出た？」

『ああ、出たとも ……ありがとう、アン』

「」

当たり前よ 寧ろここまでして元気にならなかつたら私はただの  
ピエロじゃない！………でも元気になったようで嬉しいな

Side out アン

喫茶店クレイドル地下司令部…。

Side アイリ

今ここ地下司令室は撤収作業で私以外誰も居ない。麻帆良の地下  
では精魔奇兵も自動人形も、そして機材運搬用に改造された無人機  
動兵器が忙しそうに走り回っている。  
オート・マタ  
カブ  
トムシ

私は閣下から頼まれたアンへの指令を伝えるために今回の襲撃の  
ことを併せて通信した。内容は“ここ地下拠点の生産機能（各種力  
ートリッジ生産など）を月へ一部移転する”というものだった。

最初にこれを聞いた時は襲撃が原因だと考えさせられたが閣下に  
違うと言われて一安心したものだ。…む？まあ失態は失態なので無  
論、安心してはダメなのだが………少しだけ肩の荷が下りたように感

じたのも事実だな。

……私ともあるう者が情けないものだ。

そして今はアンとの通信を切って私は椅子の背凭れに身を預けて先程の通信内容を思い出して苦笑した。

「ふふっ…アンにも励まされてしまうとは、な…」

「…アイリは気にし過ぎなの。助け合うのが家族だと私は思うの」

「ッ!？」

心臓部が止まるかと思った!一人、思い出して苦笑していると突然、私の座る椅子の右隣から話し掛けられたのだ。

気付かなかった!?!いくら気を抜いていたとはいえ、司令室へ入る扉は一つしかない。…それなのに気付かなかった!?!と言うか、ファレノか!?!驚かすんじゃない!?!本当に心臓部が止まるかと…!

「…そうですね。ファレノさんのおっしゃるとおりですわ。アイリさんは気にし過ぎなのですわ」

「ッ!？」

今度は左隣から!?!驚きのあまりもう一度、心臓部が止まり掛けて上手く思考がまとまらない!?!今度はリチラか!?!私を心臓部麻痺で殺す気なのか!?!私が何かお前らの気に障ることをしたのか!

「あゝあゝんツ!？」

まだ何を言っているのか思考がまとまらない。予想外の驚きでまだ混乱しているようだ…。私は左右に座る彼女達を交互に指差し、言葉の出ない口を無意味に開けたり閉めたりしていた。何か言いたい言葉に出来ないというのは歯痒いものだ…。

「何をそんなに驚いてパクパクと金魚のようにしているの？」

「ファレノさん、きつとアレですわ。葵様に怒られて柄にも無く落ち込んでいますわ」

「えっ!?! アイリ、葵君に怒られたの!?!」

2人は私が何か言いたいのを察したようだ。だが、その気遣いは違う! 私が言いたいのはお前達が“いつからここに居たか?”と“黙って入って来ないで普通に入って来い”ということだ! ! 驚いたんだぞ!?! コラツ!! !

そ・れ・と……ッ!! !

「そんなわけあるかーッ!! ! 閣下は寛大にも自分の失態をお許しくださったわ!! ! リチラもデマカセを言うのはやめる!! ! 自分のことはともかく、閣下の名誉に傷が付く!! ! すう わかったかッ!?!?!?!?!」

「なのおーッ!! !?!」「ですわあーッ!! !?!」

全力で否定するためと半分八つ当たりの意味で魔力を乗せた言葉を放ち2人の鼓膜と脳を揺らして意識を刈り取る勢いで怒鳴った。

叩き付けられた2人は頭をフラフラさせて半ば意識が飛んでいるようだ。

まったく！…閣下が私達をきちんと叱られるようになったなら私は言うことは無いわ！

閣下ときたら、もうっ！家族や知人にはダダ甘で叱るということをしてくださらないのですからっ！それでは周囲へ示しがつかないではないか？とお諫めしても微笑むばかりで聞いてくださらないのだ！

また、私が閣下の笑顔を気に入っているからそれ以上強く言えないのだ。……優しく微笑むご主人様 ああ 素敵…ハッ！？げふん！げふん！！何でも無い！！何でも無いんだ！！い、今のことは気にするな！！いいなッ！？

「ふう…ふう…ふう…はあー…」

「うううう…アイリ、ヒドイのお…。耳がグワングワンって、なってるの」

「…まったくですね。あー…ダメですね。まだ頭がクラクラしますわ」

「お・前・達・は・ッ…」

ま・だ・わ・か・ら・な・い・よ・う・だ・な・！？

意識が戻ってきた2人はまだ反省していないようだ。ここはもう一つ…今度はもう少し魔力を込めて放つとしよう…。そう判断して

私は言葉に込める魔力を強める。

だが…。

「…少しは気が紛れたかしら？」

「な！？」

「……元気、出たの？」

「リチラ…。ファレノ…。お前達…」

リチラとファレノ。この2人は私が襲撃されたことで落ち込んでいる、思い込んでいるのでは？と心配してくれたようだ…。失敗などしたことが無いからある意味、新鮮だ…。

なるほど…。これが“家族”…と言うものなのだ…。家族へ心配を掛けているのに、この申し訳ないような、嬉しいような暖かい気持ち…。閣下…この気持ちは素晴らしいものですね。それと何もくすぐったい気持ちにもなりません…。

彼女達の気持ちに納得して私は強めた魔力を少しずつ周囲へ霧散させ安全に無効化していく。発動する前とはいえ強めにしたので強制排出するのが大変だ。

魔力は操作に失敗すると暴発して危険なのでご利用は慎重にね

何だ？今のは…。新卒の精神攻撃か何か、か？……ふう、どうやら私は疲れているのかもしれない。これが終わったら休暇の申請をしておこう。

……その時は葵君を誘ってどこかへ行こう、かな。…あ、それいいかもしれない。

よし、そうしよう。

「ふんっ！い、いつまでも落ち込むのは、おやめなさいな！貴女が落ち込んでも仕事は終わらないのですわ！」

しまった…。違うことを考えていたらリチラが私を諷めるようにか、鼓舞するように言われてしまった。

しかし彼女の言う通りでもある。気にして止まっているよりも“これから何をするか？”  
だった。今は撤収作業がある。それが終わったなら…襲撃の犯人探し、か。閣下には何やら心当たりがあるようなご様子だったが…。

「アイリ、アイリ」

「ん？何だ？」

さて、今後はどう行動するか、と考えていたらファレノに服の袖をクイクイと引かれた。

「あはっ リチラは照れてるの」

「……………照れているのか？」

…意外だった。普段は冷たい印象を少なからず身に纏い周囲へ振り撒いていたのに。彼女とは百数十年の付き合いだが存外に家族思いなのだろうか？知らなかった…。

これも家族思いの閣下が影響したものののだろうか？……………いや、間違い無くそうかもしれない。リチラの葵君好きは“スゴイ”からなあ…。

そうだ…。彼女の閣下へ仕掛ける朝駆けや夜這いが、また頻繁化してきたから皆と話し合い、対策を講じなければならなかった…。これも精魔奇兵のまとめ役としては頭の痛い問題だな。

それに万が一！にも、ありえないが、もしも……………そう！“もしも”！！の時は…どうやって……………ククッ！クククッ！！

オ・シ・オ・キ・シ・テ・ヤ・ロ・ウ・カ・！！

む？話しが逸れたな…。いや、今、考えたりチラ対策も大事なところと言えば大事なのだが、な？とりあえず全てを片付けた後で本格的に対策を取ろう。今はソレでいい。

そして目の前のリチラはというと…。彼女は今、顔を真っ赤にして立ち上がり指先を“ビシィ！”っと私達に向けてプルプル震えている。

自分の家族思いな気持ちが私達にバレて恥ずかしかったのだろう。  
…なに、良いことではないか。私も今日のことがあり2人の想いが  
わかって嬉しく感じている。問題は無いだろう。

「なんっ!?!…んんッ!?!か、勘違いなさらなくて下さいな!わ  
たくしは、ただ…!」

「ツンデレなりチラは素直じゃないの。…葵ちゃんの前ではデレデ  
レなのにアイリや私達の前ではツンツンなの」

「ツン…デレ?そういうものなのか…!」

ツンデレ…。なるほど…、言い得て妙だな。今のリチラを上手く  
言い表せている。ツンデレとは奥が深いな…。

「な、なななな何をおっしゃっているのか、わたくしには、わかり  
かねますわ!!」

「本当のこと、なの」

「ファレノさん!貴女は…!」

「ふふふ。まったく、仕方のない。……だが」

だが、こんな雰囲気も悪く、ない…。そう思えるくらいには気持  
ちが楽になったような気がする。

ふふふ

S i d e o u t アイリ

喫茶店クレイドル…。

S i d e 葵

襲撃から明けて今日。発見された地下拠点は機材や設備の撤収作業でてんでこ舞いだ。どんなモノでも秘密は知られた時点で役目を全う出来なくなるんだ。本当に残念だが地下の施設は破棄するしかない。

まあ来年の夏には証拠隠滅のために破棄予定のつもりではあったから、それが早まったものと考えれば苦ではない。

それと今回の襲撃騒ぎで一番、気にしていたのはアイリだった。破棄の予定は彼女にも話したんだけど彼女は俺の副官と精魔奇兵のまとめ役をしている分、責任感や俺への忠誠心が人一倍強い。

そんな彼女が与えられた任務に失敗してみる。自己嫌悪に陥っても不思議じゃない。当然、そんな彼女を放っておくことなど俺には出来ない。襲撃の被害報告を聞き終わった後にアイリと話した。

内容は省くが“気にしなくていい”と伝えたさ。自惚れでなければ一時的だけど、それで彼女の精神的な負担を減らすことができたと思う。…まあ、それでも彼女の気分は完全に晴れなかったみたいだった。

だから襲撃の次の日の今日、また話してみようとアイリを探していた。あと序でに、お昼ご飯も一緒にしようと考えていたんだけど……その必要は無かったみたいだ。

通信で月に居るアンや親衛隊仲間のファレノとリチラが彼女をそれぞれの様子で元氣付けていたからね。

「……俺の出番は無かったか」

「????何か言った？葵兄さま」

はい。お呼びで無い俺はお昼をしに来た木乃香ちゃんと向かい合ってた店の奥にある席に座っている。先程までミリーやマリー、ウーリが店内で忙しそうにお客様の注文を取ったり調理や会計をしたりしていた。

俺も最初は働こうとしたのだが3人になぜか止められた。確かに徹夜気味だったから少し辛いが働けないほどではない。そう皆に言っても詳細は省くが、やんわりと「グダグダ言わずに休めや、コラ？」と逆に言われた。

……皆も大袈裟だと思っただよなあ。

まあそんな訳で今はお昼も食べ終わってデザートを木乃香ちゃんに振舞っているところなんだ。休めと言われても寝るには時間がねえ。1人でお昼寝するのも寂しいものがある。だからと言って皆は撤収作業で忙しい。

……一体どうしろと言うんだ？寂しく大人しくしている、とでも

言いつつもりか？本当に木乃香ちゃんが来てくれて良かった！1人だと暇で暇で…。

おっとと、今は木乃香ちゃんと話しの最中だったな。

「ん？ああ、ただ美味しいかな？って言ったただけだ」

「うん 美味しいへー。葵兄さまも食べるー？」

「いや、俺は試食の時にたくさん食べたからいい。気にしなくていいから木乃香ちゃんが食べなさい」

女性客が多いせいとかメニューはお菓子関係ばかりが多くなっているくんだよなあ。カロリー控え目で甘いお菓子がさ…。一応、喫茶店だから紅茶やコーヒー、少し変わって中国茶（青茶とも言う）に合うものを用意しなくちゃならんよね。

「ええの？やた ー 美味しいわー これ次の新作なん？」

「一応ね。でも、それはボツ作なんだ。喫茶店のメニューにしては材料にコストが掛かり過ぎる」

木乃香ちゃんが食べている試作デザートはマジでボツ作だ。何？スイーツの価格が一つ五千円って…。喫茶店のメニューじゃないよ。

開店当初は宣伝効果を期待して赤字覚悟で月に数個の限定の特別スイーツを作った。ただソレは、今は無い。因みにソレの価格はどんなに抑えても一万とチョイ…。あれ？……今考えると目の前のコレの倍だったんだな。

材料にお金を掛け過ぎかも知れない…。次から作るものは低価格商品かな…。味を落さないようにしないとならんな。

「そうなん？残念やわー、こんなに美味しいのに…。…。あれ？それじゃ何で今、出してくれたんや？」

「くくく まあ商品ではなく個人的に出す分には構わないだろ？…今回限りだな」

「そうなんかー。なんだか少し得した気分やわ」

おー、おー、美味しそうに食べてくれちゃってまあ。木乃香ちゃん周りの周りに幸せなお花が舞う絵が幻視出来そうだ。こういうのを見るとご馳走しているほうは嬉しくなるねえ。木乃香ちゃん、可愛いし

このお菓子、商品としてはアレだけど木乃香ちゃんや明日菜、それに刹那ちゃん。あと他数人の知り合いくらいなら特別に出しても罰は当たらないかな。

…。裏メニューか。いいかもしれない。試験期間として1〜3ヶ月くらいお客様の反応をしてみるか。教えるのは知り合いだけだから大した出費にもならないだろうし…。

今は忙しいから数カ月後からを目処に計画していこう。手が回らないのよ…。

色々な計画を並行して行なっているから人手が足りない時があるんだよな…。少し無茶したようだから現存の計画を終わらせること

を重点に今後は活動しよう。

定期的な学園都市や周辺勢力の情報収集に始まり、恒常的な魔力の蒐集。大きなものでは月面生産プラントの建設と増築、計画名“宇宙の家”。無人戦闘艦隊の設立、計画名“自由への旅立ち”。etc, etc……。

新ゴーレムの研究だったのに最後には調子に乗って機械人形作製を目的とした機械兵士計画なんてものも新しく実行しちゃったし……。仕事がいっぱいだあ……。

「ふぁー……んー……」

そんなことを徹夜した頭で考えていたら俺の脳が疲れたようだ。意識しない内に欠伸が出してしまった。うーむ、目の前に木乃香ちゃん居るのに失礼だったか？

「葵兄さま、眠いん？何や、疲れて見えるへ？」

「んあ？ああ、昨夜は色々あって、余り寝ていないんだ」

少し心配そうに聞いてくる木乃香ちゃんは、いつの間にかデザートを食べ終わっていた。うむむ、それに気付かないほど考え込んでいたということだろうか？

集中し過ぎると周りが見えなくなるのは問題だ。こればかりは俺の癖だから簡単には直らないけど今後は気を付けないと。

「葵兄さま？何があったか知らんけど、ちゃんと寝ないとアカンよ？」

「…そうだな。次からはそうするよ」

あんなことが何度もあつてはたまらない。今回のことは俺の予想だけど超・鈴音だと考えている。というか、原作を思い出せば簡単なことだったんだ。いつ頃からかは知らないが麻帆良の地下に戦力を構築していたんだからな。

全ては2003年に世界樹の魔力が極大点を迎える日…。そう、麻帆良祭の最終日に全魔法世界に対して決起するためだ。その戦力を地下に集結、または生産するはずなんだ。俺は面倒にも超の前に地下に陣取っていたわけだ。

くっそ…。こんなことなら最初から月に生産拠点を確立するべきだった。そうすれば、こんな面倒にも巻き込まれなかったのに…。この世界に来る前…八百年近く前の記憶が酷く曖昧だ。

忘却って怖いなあ……くくく “だが”…。

そう、だが、だからこそ面白い。未知への踏破は何物にも変え難い愉悦だ。技術関係は、この身に刻まれているので忘れることは無い。それ以外の記憶は記録に残すなりすれば問題無い。忘れたモノは帰ってこないが…。

ともかく起こってしまったものはこの際だ、仕方が無いと割り切ろう。アン達には新たに仕事を頼んだので帰還が遅れる。だいたい8月終わりくらいか？全てが終わって無事に帰還したらキチンとお礼しないとなあ。

アン達のことを考えていたら木乃香ちゃんが椅子から立ち上がる

音がした。どうしたのかと思い見てみれば彼女は立ち上がって帰り支度をしていた。

「ほな、私、もう行くわー。2時から友達とカラオケの約束があるんよー」

む？そうだったのか。いつものようにここで駄弁っていくのかと思っていたのだが…。それなら無理に引き止めるのは憚られるというものだ。…………最後に少しからかうか。

「そうか。たくさん歌って、ストレス発散してこい。俺は笑顔の木乃香ちゃんが可愛いと思うからな」

「へ？ …ま、また上手いこと言うてー！もう知らんー！」

最初、キョトンとしていた木乃香ちゃん。しかし俺の言った言葉を理解した瞬間にボツと音が聞こえるかと思うほどに真っ赤になった。そして木乃香ちゃんは逃げるようにして店の玄関に向けて走り出した。

「は？…ああ！走って転ぶんじゃないぞーッ!？」

突然、店の中を走り出したから俺も驚いたのだろう。思わず幼い子に注意するようにしてしまった。でも、これは仕方ないと思うんだ。木乃香ちゃんはまだ中学一年なんだからな。若いよねえ…。

「葵兄さまのあほお!！」

「なぜにっ!？」

親切心から注意したのになぜに木乃香ちゃんから罵声を浴びせられなければいかなのよ？いや、からかったのは俺だけどさ。突然走り出すのはどうかと思うだろう？店内で人とぶつかったら危ないし…。

そんなこんなで木乃香ちゃんを見送って一人、先程の木乃香ちゃんを思い出して笑う。最近の木乃香ちゃんはからかいにある程度の耐性が出来たようでごうごう不意打ちでないと簡単に流されてしまっただ。

残念だねえ、本当に…。刹那ちゃんと並んでからかい易かったのになあ。

「くくくつ　木乃香ちゃんも元気だなあ。……それで八才達はなぜに監視紛いのことをしていらっしやるのでしょうか？」

「いえ、別に……」

実はこの2人、朝から俺のことを監視でもするようにつつと後をつけていたんだ。木乃香ちゃんとの食事中は彼女のことでもあって気配を消していたけどね。それ以外はバシバシ気配を叩き付けられていました…。

木乃香ちゃんが帰った後はまたビシビシと気配を放たれていますよ。……俺、何かしたかね？2人を怒らせるようなことはした覚えは無かったんだけど…。

「別に、って…。今朝からずっと後をついて来ていたよな？」

「そのよつなことは……ない、かと」

ハオ……なぜに視線を逸らすのかね？ちゃんと俺の目を見て発言しようよ……。

「そうです。我が君の考え過ぎではないでしょうか？」

ユエは……変わらない。いつも通りだ。でもハオを見ていると“何か”があると思ってしまう。ううむ……？

「いや、でも……」

「我が君の守護が吾らの任なのです。ならば、お側に待るのは問題無いかと思えます」

やっぱり、おかしくないか？ユエの言うとおり護衛だとしても護衛対象である俺に、ここまであからさまに2人が気配を放つなんてことは今まで無かった。いつもは気配なんて感じさせないのに、さ。

それに今、気が付いたんだけど何だか2人とも不機嫌なような、怒っているような雰囲気……。いや、何か知らんけど、これは拗ねているのかな？

「あの……ユエ？何かを怒っていらっしやるのでしょうか？それにハオも……」

「「……………怒ってなどいませぬ」

何？今の間は……。それと怒ってないなら目を見て話せての……。

今度はユエも視線を逸らしているし。わからない……。これは何があったんだ？本当にさ……。

もう考えて、わからないなら直接聞くしかないよな。家族の間に遠慮なんていらぬし。……無論、時と場合によるし、ある程度の礼儀は必要だとは考えるし思っけどね。

「……俺、何か悪いことしたのか？」

「……………昨夜」

「はい？」

えっ？一言！？ハオさん一言ですかっ！？主語どころか名詞も述語も無いんですけど！？お兄さん、それはちょっと……いや、大分わかりませんです、はい。

「姉上はこう言いたいのです。“なぜ、昨夜の戦闘に吾らをお供させなかったのか？”と」

「あー…すまなかった。反省しているし、もう二度と同じことはない」

昨日のことか……。むー…アレは申し訳無いです。つい、その場の勢いとノリでラミエルさんで行っちゃったからなあ。

ただ言い訳をさせてもらえるならハオ達はあの時「工房」に隣接された付属魔法球「演習場」で訓練していたじゃないか、と記憶しているのですよ……。

まあ地下拠点の警報は「工房」内には接続されていなかったからねえ。気付かなくて当然。伝令が走って八才達に伝達された時には事件も終盤だったからなあ。

そういう不測の事態を別にしても2人には護衛としての矜持があるんだ。護衛対象に置いて行かれましたじゃ納得できなんだろう。

はあ…今回は失敗が多いなあ。反省、反省…。今回の失敗も次への糧にしよう。差し詰め…超・鈴音のことと学園側への挨拶か。前者はまだ監視と警戒でいいとして後者は撤収が済み次第挨拶に行くか…。

あーっ…でも何だかんだで伸ばしに伸ばしてきたから会うのが気マズイなあ。……………そうだ、いつそのこと代理人を立てるか？ダメだな…。相手に失礼過ぎるわ…。直接会うしかないか…。はあ…。

「……………次は置いて行きませぬか？」

「八才達がイヤでも連れて行く」

「…約束ですぞ？」

「うん、約束だ」

どうでもいいが八才…？上目遣いはやめてくれ…。和風美人さんがソレをやると俺のストライクゾーンの本真中に来るんです…。勘弁してくれ…。

そう考えていても俺の身体は2人と約束する時の儀式を始める。

長年の慣れって怖いなあ。何も考えなくても身体が動くのだから。

それでまあ儀式と言つのが…。

俺は2人に両手の小指を差し出す。ハ才達は嬉しそうにそれぞれに剣士とは思えないほどに柔らかく温かい自分の小指を絡ませてくる。そして…。

「「「「ゆるびきり、げんまいん、うーそついたら、はりせんぼん、のーます、ゆるびきった!」「」」」

はい、指切りです…。何だ?何か文句でもあるのか?ああん!?!? ……昔にコレを教えたのは失敗だったかもしれない、と少し後悔…は、していないけど恥ずかしいのは変わりませんって…。

「…毎回、思うんだけどこの歳になってこれは恥ずかしくない?」

「ふふ、吾らはそうは思いませんよ」

「我が君は何がお恥ずかしいので?」

ハ才とユエが嬉しそうに、はにかんでいるのを見ると否定し難いなあ…。無駄だとは思っけど一言だけ物申してみるか…。

「いや、何って…。この歳になってまで“指切り”すること?」

「イヤなのですか？」

何だろう？この言い表せないプレッシャーは…。ハオとユエは笑顔なのにコワイです。一言物申してみたただけなのに見えないプレッシャーが…むむむ…コレ如何に？

「……イヤじゃ、ないです。…でもね？」

「ならば問題はありませんな」

「うむ 姉上の言うとおりだ」

2人に畳み掛けられるようにして発言を遮られました…。俺ってハオとユエの主だよね？何でプレッシャーに押さえ込まれているのだろう…。

「あ、ああ、ああ…。もう、いいです…。あははは…」

「「あつはつはつはつ」

まあ2人の機嫌が直ったようだから今回はいいとしよう。原作が始まる、これからが大変だから色々と片付けておかないといけないからね。

Side out 葵



## 第四十五話「月と家族と仲直り？」と（後書き）

こんな予定ではなかった…。もっと短くなるはずだったのに。アイリSide使い過ぎだなあ。ミリー達の出番が少ない…。

むー…超のSideも出せたら次回に出したいなあと考えています。出せるかは微妙だけどね！

あ、あと月に居るアン達の作業風景とかやってみたいです…。けっこうアンをほったらかしていた気がするので。

では今回はここまで！また次回お会いしましょう！

PS ネット&感想は随時受け付けています。奮ってご応募ください。

第四十六話「友情？と父と娘と」（前書き）

モンハンが…出来ない…。

忙しくてやる時間が無いですorz

ごめんなさい。少し愚痴を言いたかっただけです。  
だけど！それでも二次を書くのはやめない。

とりあえず続きをどうぞ。

## 第四十六話「友情？と父と娘と」

麻帆良工科大学…。

Side 超

あの麻帆良地下へ強襲偵察…まあ予期していなかった事態だが…があつた日から6日が経つた。その間、不思議なことに敵対とも取れる行動をした私に報復らしいことは何も無い。不気味なほどに沈黙を守っているのだ。

状況がわからなければ判断できない。そう考え隠密裏に偵察機を飛ばしたのが3日前のこと。そして情報を持ち帰るのが今日。隠密裏に行動したのは理由がある。

ただでさえ一度襲撃しているのだ。二度目の強襲偵察などして敵かどうかもわからない相手だ。ここで更なる反感を買うのは看過できない問題だ。それはこちらの計画に不確定要素を増やすのは得策ではない。

しかし、一度目の襲撃で示されたモノ…。

「あの技術力は、この時代のモノとは思えないネ…」

まさか、私以外にも時空間跳躍をした者が居るとでも言うのか？  
そう考えて私は自嘲するように鼻で笑った。

「……………フツ。それこそ、まさかネ」

私以外に誰がこんな酔狂なマネをする…。発達した科学技術や魔法技術でもリスクが高い。いくら未来のために必要なこととは言っても危険な時空間跳躍なんてことをするものか…。

これまで来るべき時のために準備を進めてきた。この時代に来る前に予め戦力を集積する場所の選定は済ませてあった。…なのに地下には未来を知る私すら知らない勢力が存在した。

一度目はこちらの予期しない接触だったがために敢え無く敗北…。二度目は慎重に慎重を重ねて隠密偵察。その方法は古臭いもので情報を直接持ち帰るというものだ。

あの技術力を警戒して敢えて、こんな古臭い方法で情報収集をしたが…。コレも必要な手段だ。下手に偵察機から送られるデータの送信先をトレースされて居場所を発見されては話しにならない。

「ム？来たネ。……………ハカセ！偵察機が帰ってきたヨ。起きてこちらに来るネ」

「んむう？……………ふぁゝ……………。はあい、今行きまーす……………」

研究室の隣にある仮眠室から出てくるのは葉加瀬・聡美。私はハカセと呼んでいる。寝惚け眼の今の彼女からは想像し難いが、これでロボット工学などの機械工学の天才だ。そして私のとある計画に賛同する共犯者でもある。

どうでもいいが仮眠室から出てきたハカセの髪はボサボサ、服装は乱れている…。このままでは私のほうが落ち着かない。

「……その前に顔、洗ってくるヨ。情報確認はその後ネ」

「はあい…ふはあ…」

研究室の隅にある小さな洗面所へ行つたハカセから目を離して私は偵察機が持ち帰った情報解析のための準備をしておく。……とは言ってもＣＰと偵察機をコードで繋いでデータを吸い出すだけなんだが。

準備中…準備中…準備中…。

さて、準備が終わつた。いつの間にか隣に居るハカセも洗顔をして目を覚ましたようだ。

「それでは偵察機が持ち帰った情報を解析するヨ」

「はい！……でも記録で知っていますけど、こんなに回りくどいことをする必要があつたんですか？」

「必要だ。あの勢力の技術力を考えるとコレでも不安が残る」

あの技術力を持つ勢力のことだ。直接データを送信なんてしたら傍受されて送信先を突き止められてしまう可能性がある。警戒して過ぎるということは無いはずだ。

「……そこまでですかー。わかりました！それじゃチャチャツとやっっちゃいましょう！」

「ウム！これで何か対策が取ればいいのだが……」

そう儂い思いで偵察機の情報の中の一つとして始めに映像記録を画面に映し出した。そしてそこに映し出されたのは……遺跡と巨大な木の根、ただそれだけだった。他に映っているものは流れる水くらしいものだ。

あの時に見た機械昆虫も近未来的な通路も隔壁も何より強襲時の戦闘跡すら無い。長年積もった埃は無いが元の遺跡に戻っている。機械のきの字すら今は見られない。

そんなことはありえないという思いに駆られ、更に映像と詳細な数値の情報も併せて分析した。

きつと……きつと、どこかに隠れているか移動したに決まっている。機材は運び出せばいいのだ。通路の鉄板は剥がせば運べないことは無い。機械昆虫が運んだに違いない。

……ならどこへ？遺跡の更に奥へ移動したか？それこそ無い……。図書館島地下に繋がる遺跡の奥には封印しているとは言っても“アレ”がある。学園側はそれを嚴重に秘匿、警戒している。そんなところでバレずに活動できるとは思えない。

どこへ行ったツ！？こんなことがあってたまるものか！私は狐に化かされたとも言つのか！？

「これは……これはどういうことネ！？」

「あのー？この情報って本当に合っているんですか？何も無いみたいなんですけど…」

「間違い無いヨ！地形情報も位置座標も確かにこの場所ネ！！なのに…！」

何度、位置情報の数値を読み直しても問題は見られない…。地形の一致情報も問題を示していない…。単純な地図情報も、だ…。ただあの勢力のモノと思われる機械群だけが幻のように消えていた。

「何も、無い…。撮影された日時が今から3日前…。アレだけの施設が僅か3日で跡形も無く消えた…」

「そうだとっても一体どこに消えた!？」

わからない！！未知なるモノがこれほどの恐怖を齎すとは思ってもしなかった！あの連中は何だったのだ！？あの技術力を持つ勢力と敵対した場合、脅威以外の何物でもない！

襲撃時には施設の人物は確認できなかった。だが機械昆虫は施設の防衛をしていた。それはまだいい。アレは多脚戦車と田中で対処できる。だが、アレは…あの重厚な姿をし、力強い翼を持った機械の巨人……。

アレはマズイ…！予想が正しければアレは未来で地球側が開発した対魔法使い用兵器だ。姿形は私も見たことの無いタイプだったがアレは…特注品なのだろうか？…くっ！こんな時代になぜ、あんなものがある!？

本気で私以外の者がこの時代に来たのでは？と疑いたくなる…。

「ソレがわかれば苦労はありませんよ…。…どうします？検索範囲を広げますか？」

「……いや、これ以上の深入りは不利益になりかねないヨ。警戒はするが接触は極力、避けるネ。タダ、出来れば…」

「エヴァンジェリンさんのように不可侵契約を結ぶ……」

「そうネ。下手をするとあの勢力はこの魔法使い共よりも危険だ」

確認出来たアレだけが総戦力とは思えない。まだまだ“何か”があるかもしれない。あれだけの特殊戦闘<sup>パワードスーツ</sup>装甲服を保持しているのだ。他にも何かあると警戒してもし過ぎるということは無いはずだ。

「だけど、そう上手くいきますかね？一度襲撃みたいなこととしてまっていますし」

「……みたいではなく襲撃そのものネ。あの時の判断は失敗だったヨ」

研究者の癖で“知りたい”という知的好奇心が仇となった。それは欲求となり欲望のままに行動した。その結果がコレだ…。これ以上無い不確定要素を呼び込むことになってしまった…。

「学園の魔法使い共のこともあるが、その上に行く障害が現れたのも事実…。今後はより一層の注意が必要だ」

「大変ですね…。多脚戦車の配備や科学拘束式の鬼神兵6体の開発

…。それに歩兵タイプのTANK 1（プロトタイプ田中）のバージョンアップ…。やる人が多いです」

指折りして、これからのことを確認していくハカセ。私は彼女を見ながら考えていた。彼女のロボット工学の知識、探求者として必須の行動力を求め、私の“計画”の協力者とした。彼女自身からではない。私が勧誘したのだ。

この先は危険だな…。

本来なら様々な博士号を取得して平和な人生を送れる彼女を私がこちらの世界に引き込んだのだ。今ならまだ引き返せる。引き返せるのだ…。

「……………ハカセ」

「はい？何ですか？」

「その……………引き返すなら今だ。今ならまだ間に合う。計画に誘っておいてなんだが、この先は危けっ…ム？」

言葉を言い切る前に私の口はニコニコ笑うハカセの人差し指を当てられた。彼女の目を見るとまるで“言わなくてもわかっている”とでも言うつように私の目を真っ直ぐに見ている。

「その先は言わなくていいです」

「むむう、だ、だがっ」

「クドイですよ！超さんに誘われたのは事実ですが、この計画へ参

加するのは自分の意志で決めました」

「ハカセ……」

計画へ勧誘したのは私なのだ。それなのにハカセは自分の意思で行なうのだと言った。この協力者はスゴイ者だ。見る人が見れば愚かなバカ者に見えるのだろうが私には最高のバカ者に見えるのだ。

こんなにも協力してくれる者に私は何を返せるというのだろうか？いや、今はただ感謝の言葉を口にしなければならぬか…。

「ハカセ、ありがとう…」

「それに科学の進歩 それも最先端の技術に触れられるのは科学者冥利に尽きるじゃないですか もうサイコー」

「本音はそこなのカ！？そこなんだな！？私の感動を返してほしいネ！！」

「あははははー」

感謝の必要は無いようだな！！フツ、こうなったら私の知る科学技術を未来に影響が無い範囲で叩き込んでやるネ！！ハカセ！？覚悟するヨ！！フハハハハハッ！！！！

S i d e o u t 超

喫茶店クレイドル…。

Side 葵

ここは喫茶店の奥にある一室。この部屋は防諜のために様々な処  
理をされた場所だ。扉の外にはハオとユエがボディガードよろしく  
立っていたりする。ある意味で彼女達を守るだけで難攻不落の部屋  
が出来たな…。

部屋の中には長方形の黒い机。座り易い革張りのソファが机を  
囲むように置かれている。そのソファの一つに座る俺。反対側に  
座るのは情報部諜報一課に所属する女の子が1人。……アイリじゃ  
ないのは彼女も何かと忙しいのよ。

「それでどんな感じかな？……動きはトレースできたんでしょ？」

「はっ、3日前のことです。撤収後の地下へ偵察機の侵入をセンサ  
ーが確認しました。そして本日、我々はコレを捕捉、追跡し襲撃犯  
の特定に成功しました。……複数の偵察機による情報の物理的交換  
をしていたので追跡には骨が折れました」

「くくく ご苦労様。しっかし、遠隔地へのデータ送信ではなく直  
接データを持ち出したのか。古臭い方法で来たなあ」

一昔前にはこんな風にして何度も何度も仲介を挟んで情報を入手  
したものだ。情報の伝達速度としては遅延があるけど情報元や運ぶ  
先の特定などは難しいものだった。

様々な手段で情報：例えば機密写真のマイクロネガなど言えば

硬貨に細工してその中に入れて運んだりした。またはライターの中にも入っている場合もあった。

今回の偵察機はそれのハイテク版だ。偵察先からデータを送らずに記録媒体ごと運んだ。途中に何度も数機の偵察機と記録情報のやり取りをして分散することで追跡を難儀にしたものだ。

よく撒かれずに最後まで終えたものだなあ、と俺は感心しているよ。

「ですが、効果的な方法でもありません。ハイテクにはローテクを、ローテクにはハイテクを。これはそれぞれの盲点をついた方法ですからね」

「…確かに、ね。それにしても超・鈴音がねえ。…資料を見ると大した科学力じゃないか。この時代の人間にしては技術力が俺達に迫るとはな。驚きだ…」

本当に驚いているんだ。工学部のほうへ提出されている表の研究レポートは序の口。公表していない裏の技術力は高度にまとまっていて完成されている。まあ逆に言えば技術発展の伸び白が短いとも言えるが、な。

そして今見ている設計図なんかがそうだ。多脚戦車に鬼神兵の科学拘束版、強襲歩兵のTANK 1。TANK 1は将来の田中さんか？他にも茶々丸タイプの量産型…。これだけの技術が今の時代にあるのは異常と言える。

こちらには他世界の技術や数百年先の技術があるのに超・鈴音は……ねえ？ホンモノの天才はスゴイよ…。俺も今以上に技術発展は

したつもりだけどねえ。彼女が不老だったら個人で俺達に技術力で迫れるんじゃないか、と思えるほどだ。

何百年掛かるかは知らないけど…。

「はい。そしてその協力者の“葉加瀬・聡美”も侮れません。ロボット工学では超・鈴音に並ぶほどの実力があるようです。襲撃に使用された…」

「使用されたモノは機械人形マキナ・マイタではない。別アプローチから成るモノだった」

「その通りです。…我々としましては情報の漏洩ではないことがわかり安堵しました」

「まあ…それは、ね。それで？アレは何だと考えられる？」

機械人形マキナ・マイタの情報が洩れて無くて良かった！外部へ他にも設計図などの情報が盗まれても100%の再現は出来ないだろうが劣化コピーなんて粗悪品が出回ったら怒りの余り何をしてしまつか自分でもわからないよ。

機械人形マキナ・マイタなんて研究を始めたばかりのものだ。完成する前に盗まれるなんてことになったら……やってらんないよねえ。

それでまあアレはなんだったのかね？入手した資料を見るとT

ANK 1とあるけど…。

「回収された破片や機体を分解解析しました。襲撃当初は製作者を特定出来ればと思いましたが」

「…解析結果は？」

「試作品のようで大変、癖が強い作りでした。ただ、一部に“絡繰・茶々丸”を構成する技術が使われていました」

茶々丸ちゃんー？……………えー、あのゴツイT ANK 1のどこに共通点があったのさ…。あれ？

待ってー。ちょっと待ってー。まだ待ってー。

それじゃ何？あのT ANK 1にはガイノイドの技術も一部とは言え使われていたということだよね？……………もしかして罷り間違えればT ANK 1が茶々丸ちゃんとしてエヴァちゃんの側に……………。

お、おお…何か恐ろしいことを想像した気がする。

「うぶっ……………それではアレはガイノイドだったのか？」

チツ、よく考えればそんなことありえるわけが無いじゃないか。茶々丸ちゃんのマスターであるエヴァちゃんは可愛いモノが好きだったはずだ。あんなゴツイ大男タイプなんて側に置こうとなんてするわけが無い。

マジで無駄な想像したわー…。ゴツイ茶々丸ちゃんなんてモノを……………うぶっ！？

「????…いえ、資料にあるように別アプローチからの派生系と考えられます。比較資料が少ないので断言は出来かねますが男性型と

女性型で内部構造が随分違いますからね」

「なるほど……。さて、どうしたものか……」

嫌な想像は頭を振ることで追い出した。ここで考えるのは撤回を終えた今、俺達がどう動くか？だ。

報復するにしても単純に武力行使なんぞしたら麻帆良学園の魔法使い共を刺激しかねない。ただでさえ超と葉加瀬は麻帆良女子中学の生徒：それも木乃香ちゃんや明日菜、刹那ちゃんのクラスメートだ。

正直に言おう……。殺り難しいです！！どうしろって言うんだよ！？殺したら木乃香ちゃん達が不審がるだろう。血生臭いことに勘の鋭い刹那ちゃんにはバレる可能性もある！！殺してしまうのが一番簡単な方法なのは確かだ！

……………でも！

知られでもしたら嫌われるだろうなあ……。隠蔽工作は万全にするけど……あの連中妙に勘が鋭いから何れバレると確信できるんだ。

「今回の報復も兼ねて絡繰・茶々丸を拉致、分解分析して資料としますか？」

「バカ。茶々丸ちゃんは既に一個の人格だ。そんなことできるか」

それに超謹製とは言ってもエヴァちゃんの従者にそんなのことはしたら彼女の反感を買うことになる。そんな無駄なことは避けたい。

「も、申し訳ありません！出過ぎたことを言いました…」

「あー…気にするな。一つの手段として提示してくれたただけなんだから、さ。よくやってきているよ、うん」

「は、はいっ。ありがたき幸せです！」

うん。責める気は無いんだ。ただ、ね？サラツと拉致案を提示されたからビックリしたんだ。それにプラスして分解して分析しようなんて…出来ません！茶々丸ちゃん相手にそんなこと出来ません！

………あー？それと一応、言っておくけど今まで拉致なんてしたこと無い………とは言わない。けど！したとしても、それは“下衆”に対してしか、やったこと無いからな？勘違いするなよ？

「はい次、行くよ。………超・鈴音の対処は監視に止めているんだな？」

とりあえず報復するにしても超・鈴音に手を出すと俺のほうで色々と弊害があるから遠距離からの監視に止めている。

マジでどうしようかなー…？

俺的には終わったことだし、それほど恨みと言えるモノは無いんだ。確かに襲撃当初はイラツと来て殺っちゃうか？なんて考えもしたけど相手が超・鈴音じゃねえ…。手出し難いやね。

「あ、はい！そのことで司令代理を始め親衛隊は直ぐに排除しようとしていたのですが葵司令の方針があり悔しそうにしていますよ？なぜ攻めないのか、と…。」

「あははははっ アイリ達も元気だなあ」

はい、わかっていますよ…。襲撃されたことが我慢ならないんでしょう？わかっていても笑っていないと顔が引き攣りそうなんだ！6日前から汚名返上しようとする皆から負のオーラが黒い霧のように立ち上るのが見えるんだよ！？

皆に“俺は気にしていない”と言って回り、やんわりやり込めるのが大変だった…。それでも不満は残るのか、負のオーラを少し緩和出来たくらいだし…。家族に怪我人が出たわけじゃないんだから気にしなくてもいいのにな？

あはははははー…。

「葵司令、笑い事じゃありませんよ。皆が考えています。“ご主人様に仇なした怨敵をなぜ討たないのか？”、と…」

「それは…」

だから今、超に手を出すと面倒くさいことにしかならないんだって…。面倒なのは帝国時代の書類処理だけでお腹いっぱいだよ。俺は安全にゆつたりと生きたいです。

「……許し難いことなんですよ。私達だけならばまだいいです。我慢できます。……でも、自分のご主人様を虚仮にされて黙ってなんか居られません。そう……必ず後悔させてやります。フッフッフッ…」

あー…君もなのか？君もなんだな？今日はこのままこの子のカウ

ンセリングに費やすことになりそうだ……。この子達が命令を無視することは無いけど、このままでは精神に良くないしね。

ふう…アン達はどうしているだろうか？

ふ、と頭の中で月に向いている子達のことを考えた。今月7月終わりに帰還出来たはずだった。なのに俺が仕事を追加注文したから、どんなに早くても帰還が一月延びてしまうことになる。

ふふ、元気にしているだろうな…。

S i d e o u t 葵

月面プラント…。

S i d e アン

お父さんの指示で追加建設することになった生産プラント。ここはその建設中の現場の真っ只中。作業範囲内では普通に呼吸できるように調整済み。

その範囲は建設現場の中心から上空百数十mを頂点に半径1kmに渡り特殊フィールドが展開中。ドーム上の形を思い浮かべてくれればいいかな。お蔭でお姉ちゃん達が宇宙服を着なくても作業が出来る。

あれってナノマシン素材だから薄くて動き易いんだけど一つ問題があるんだよ。………薄いから身体のラインがモロに出ちゃうんだ。いくらお姉ちゃん達でも少し恥ずかしいみたいなんだあ。

ここに居る大多数が自動人形オート・マータと無人作業機。あとは十数人のお姉ちゃん達。今のお姉ちゃん達は全員が白いツナギ姿で腰に工具をぶら下げて駆け回って作業している。

作業場所の一つ…。

「はい！いいですよ！そのままー！そのままー！ハイッ！ストッブ！次の運搬資材は…！！」

「ハイッ！固定するよーッ！…！…！ちよっ！？そこ誰かやってよ！手持ちのボルトが無いんだからね…！」

「あつ！アタイが入りまーす…！うんしょ…！」

「お願いねーッ…！」

月の地中深くまで掘られた縦穴シャフトへ魔力蒐集の機材がクレーンで下ろされていた。地底部に下ろされた機材は様々なボルトや特殊ネジによって嚴重に装置を固定している。

また、あるところでは…

「だから違つって言っているだろう!?ここはAの配管を始めに埋めて次にCの配管を埋めるの!じゃないと過剰魔力があった場合に受け流して排出できないでしょうが!」

「そのの!まだ終わらないのか!?もうカモフラージュ用の装甲板を持って来たぞ!」

「なっ?早いよ!!まだ一区画が配管の埋め立て設置が終わってないんだ!」

「それ以外は終わっているなら問題無い!設置工事を始める!」

「あー!もー!!お前ら!急げ!装甲板に潰されるぞ!」

「こっさり、了解ッ!」「」「」

全部で4区画ある内の1つで行なわれる魔力循環用の配管設置工事をやる者。4区画の内3つは設置が終わったようだが残り1つが作業を実行中のようだ。だが、そこに擬装用の装甲板を運んできた別の班が現れた。

細かなところに目を向ければ……。

「ピーッ!ピピッ!ガガガッ!ピーピピッ!」

「そのの無人作業機からおかしな音がするぞ!整備に回しておけ!」

「わかりましたーッ!……って!!誰だ!?無人機に天然オイルを

入れたのは!？」

無人機に天然オイルを与えたバカ者が居るようだ……。あとで誰がやったのか調査する必要があるようだ。

お昼頃になれば…。

「おっひる おっひる …… あ？だ、だだだ誰だーッ!? 私のお昼を持って行ったヤツはッ!?!？」

「もぐもぐっ…んぐんぐっ…んあ?あれ?そこの弁当って残ってたのじゃなかったの?」

「違うッ!!それは私のだ!!あ?ああッ!?もう半分も無い!? うわーん!私のお昼ご飯ーッ!!」

「ごめん!ごめんなさい!!新しいのを持ってくるから許して!ね!?!」

「なら3つ持って来て…!」

「多くない!?多いよね!?そんなに食べられるの!?!」

「余裕」

お昼に楽しみにしていたお弁当を間違えて食べられたお姉ちゃん。そのお弁当を食べてしまい慌てて謝るお姉ちゃん。

ただね？お姉ちゃん…。お弁当を3つも食べたらお腹壊さない？  
それに体じゅげふんっげふんっ！！くる、くるしっ！？ぜえ…は  
あ…ぜえ…はあ…！お、お姉ちゃん…い、いきなり首絞めないでよ  
ね！？

午後、再開された工事風景…。

「B5の配線、持って来て！！こっちに無いの！！」

「はい！ただ今！」

「ありがとう！！…って！？その自動人形オート・マイタ！！これはB4の配線！  
私が頼んだのはB5の配線よ！！」

「ひえーッ！？も、申し訳ありません！！えーと！えーと！あつ  
た！はい！B5の配線です！！」

「はい！確かに！！今度からは気を付けてよね！！」

「はいーッ！！」

姉御肌なお姉ちゃんとちよつとドジな自動人形オート・マイタのやり取り。…  
ちよーつと、あの自動人形は調整が必要かな…？と頭の中のメモ  
帳に書いて残した。

午後の作業の後半…。

「いだっ！！工具は使ったらしまっっておけと言っただいしょーがッ！？」

「……………その工具は、ア・ン・タ！のしょうが！？」

「あだっ！？ううう……。行き成り殴ること無いじゃんかよあ……」

「あゝあゝんっ！？何か言ったか！？コラッ！！」

「サー！何も言っていません！！サー！！！」

後片付けも考えて作業していたお姉ちゃん…だったのに自分の片付け忘れた工具に躓いてしまったみたい。そこを班長に見付かって怒られているよ…。あんな職人肌のお姉ちゃんに怒鳴られたら怖いかもしれないね？

1日の作業も終わっってお片づけ…。

「はい それじゃ自動人形オート・マータの皆さん！ここにある資材はD区画へ運んでくださいね〜！！」

「……………了解しました……………」  
「……………はい……………」  
「……………畏まりました……………」

「あ、帰りには別の物を運んでもらいますからね〜！わかりましたか〜！？」

「はい……」「了解しました……」「……」「……」「……」「……」

お姉ちゃんの1人に先導されて自動人形達オート・マータが資材を運び出して行く。持ちきれなかったものは無人作業機が荷台代わりになって列を成している。さっきのドジっ娘自動人形オート・マータと違ってこっちは淡々としているなあ……。

そんなこんなが、あつた今日一日の作業を確認している私……。いつもなら数人は居るはずの部屋も今は私1人だけ。地球時間で夜の11時過ぎだからね。仕方がないよ。下手に夜更かしなんかしたら明日の作業に影響が出ちゃうものね。

「……うん この調子なら早ければ8月終わりにはお父さんの下へ帰還出来そうね」

最後に全ての情報を見直して間違えがないかを確認した。そうして間違えは無いと判断して一息ついた時に私を探す声が聞こえた。

「アーン、居るか？聞きたいことがあるのだが」

「はいはい。ここに居ますよ」

こんな時間にどうしたんだろう？とも考えたけど、こんな時間“なのにな”と考え直した。もしかしたら急ぎの重要事項かもしれないしね。

「おう、そこに居たのか。アーンよ、一つ聞きたいのだが第一次生産

された戦闘艦艇は随時葵様の下へ発進させて良いのだろうか？」

第一次生産の艦隊：一艦隊の内訳は以下の通り。

3000m級の戦艦が2隻。

2000～2500m級の巡洋艦が軽・重併せて12隻。

4000m級戦闘空母が3隻。

1500m級の駆逐艦などの小型艦を20隻。

他、4500m級の大型補給艦や5500m級のドッグ艦がそれぞれ3隻。

これらを第四次生産まで続けることになる。四個無人艦隊と司令部を勤める私アングレカム。こんな戦力を使う機会がこの世界にあるのかな？

むー……？でも、この艦隊を四つも造るとなると使用した月の資源が途方も無い量になるんだ……。まあそれでも月の資源は十分以上に残るけどね。使い切る勢いで艦隊を生産したら……。だいたい126年くらいかな？

そんな勢いでやったら将来、資源を求めて来た地球の人は不自然に抉れた月を見て驚くかもしれないよ？ハハハッ やらないけどね……。ある種の自然破壊かもしれないし……。

それと実際に抉れているのは地中深くだからね！！地表部分を抉ったら地球の観測装置に映るかもしれないから。地表で作業する時は熱光学迷彩の機能を持つフィールドを展開して短時間で終わらせるようにしているのよ！！

このフィールドの維持は楽じゃないんだよ？装甲に施すものと違って空間を覆うランダムな光の屈折を計算してフィールド内が見えないように調整しているんだから…。

あ、あれ？考えていることが逸れに逸れたような…？ま、まあいかな。えーと、何でしたっけ？…ああ、そうそう！艦隊の受け渡しでしたね！確かお父さんから指示があったような…。

「はい、構いませんよ。ただし艦隊進行の時は隠密裏に行動させてくださいね？」

「あいよ。その辺は万事抜かりないよ。他に注意点はある？」

「ええと、そうですね…。あ、麻帆良上空へ到達する時刻は深夜になるようにしてください。認識障害術式があるとは言っても人目は出来るだけ無いに越したことは無いですから」

深夜なら警戒厳重な学園の上空と言っても発見されるリスクは減らすことが出来るよね。各艦に施された認識障害の術式は魔法使いの使い手による変動するものではなく、機械式の規格化された一回っっきりのものだ。

因みに術式が与える効果は“不思議に思わない”だ。こういう風に単純なものほど違和感を少なくして相手を術中に嵌めることができる。それに擬装のメインには熱光学迷彩を採用している。魔法的、科学的にもほぼ完璧だね。

「了解。まあ熱光学迷彩は標準搭載してあるし至近で無ければ発見されるようなことは無いだろうさ」

「ふふふ　そうですね。ですが用心するのは悪いことではないですから。到着したらお父さんが直接、「格納庫」へ収容します。そこで必要になるその時まで時間凍結処理する予定です」

「格納庫」かあ……。アレはなあ……。お父さん曰く拡張に拡張を重ねたから広過ぎて内部を把握しきれない、らしいんだよね。

それに「格納庫」は今も尚、空間が拡張中らしいよ？お父さんが“どうせ拡張するなら空間自体が自分で自己拡張すればいいんじゃない？”なんて軽い気持ちで増築プログラムを構築したのよ。……どれだけ物を仕舞い込む気だろう？

お蔭で普通に管理するのが大変！それでも自動人形オート・マターが上手くやってくれているから内部に格納されている物の目録は一応あるみたい。一応だけどね！！私が目録を見ても意味不明なモノがあるんだよ？

……が　だむはんまー？とか流派東　不敗？の武術書、なんて物もあつたんだ。多分これはお父さんの手書きだね……。それに聖杯　争　計画？……お父さん、何がしたいのか私にはわからないよ。

「なんだい？直ぐに使わないのか。夢はデッカク世界征服！みたいにさ？」

「ふふ　そこは、ほら？お父さんですから」

世界征服なんてことお父さんがするわけ無いじゃないですか。出来るだけの戦力はあると考えるけど……戦後に維持するのが面倒だ

と思う。お父さんなら“世界なんていらぬ！面倒だし”と言いたいものだ。

「んー…？あー…葵様だもんなあ」

「平和が一番 ですよ？」

「平和かー…。アタシは眠くなりそうだよ」

「はい」

お父さんは晴れた日に芝生の上でお昼寝するのが好きだから一緒にしたらどうか？私は“寝る”という行為が無いから、わからないけど、グツスリだと思っただあ。

「元悪魔のアタシには日常は生温い気がするけどなあ。あつはははは」

「ふふっ でも、お嫌いですか？」

「……………そんなことは無い、な。うん。不思議と好ましく感じている」

「皆、同じです ただ……………元悪魔の皆さんは時々ですがオイタをしなくなるみたいですけどね」

「あつはつはつはつ！それは仕方ないよ！今のアタシ達が悪魔の戦闘本能を理性で抑えているとは言っても無くなったわけじゃないからねー！」

元悪魔のお姉ちゃん達は、ふとした時に戦闘本能が湧き上がることがあるんだよね。一応、普段は個人戦闘や集団戦闘の演習に始まりミリーお姉ちゃんやオリビエお姉ちゃん達6人を相手にした超特訓方式のものまで……。

こうした様々な方法で一種のストレス発散をしているんだけど最近相手は固定化しているから変化が無いんだってさ。ソレを知ったお父さんが……。

「……前にお父さんがちょっと零していましたよ？ “ストレス発散のために紛争地帯へハイキングさせるか……” って」

「おっ？ いいねえ 多分、場所は旧世界だろうから……派手な魔法は使えないか。でも他はヤリタイ放題でいいんだよな？」

ヤリタイ放題……。んー……そう上手くいくかな？ 多分だけ魔法を大々的に使えないから武装を強化してくれると思う。だけど、むー……… あっ、試作品とか？

「さあ？ どうなんでしょうね？ んー……試作兵器の実証試験くらいはあるんじゃないかな」

「ふむう……最前線に立つ戦闘者としては汎用性の高い武器が望ましいものだな」

「……特殊な武装はなるべく作らないように言っておきますね」

一応言うだけは言ってみますけどね。でも、それくらいしてもらわないとお父さんの採算が取れないんじゃないかな。実証データだけでも欲しいんだよ。実戦保障が無いと兵器として信用できない

もの。

お父さんの作るモノの性能は他とは比べ物にもならないほど優秀  
なんだけど兵器としては欠陥品が多いんだよ。

曰く生産性が悪かったり…。曰く使用に際して癖が強かったり…。  
曰く予算や資材を異様に使ったり…。他にも…いえ、余りこういう  
ことは言うことじゃないよね。製作物としてはみんな優秀なんだか  
ら。

「む？あー、いや、すまない。不満は無いんだ。ただ、その…武  
装が増えると使い方を覚えるのが大変だからな」

「……ふふっ はははっ」

そうだよな。ふふふっ 使い方を覚えないと有効な時にそれを使  
いこなせないからね。ふふっ、確かに武装の数は多いかもしれない  
けど、その分どのような戦闘にも対応できるのも事実だよ。お姉ち  
ゃん達には上手く使ってほしいな

「~~~~っ！笑うなっ。くっそお、槍や剣で殺り合った時代が  
懐かしい…」

「ふふっ ふふふ では今ある個人用戦闘強化服パワーアシストスーツの発展型を開発し  
てくれるように言いましたよ。それならインファイトが出来ますよ  
？ふふふ」

「笑い過ぎだよっ、アン！……まあ、頼んだ」

「はい ふふふっ」

今の戦闘服は熱光学迷彩と個人用DFを内蔵された防護服で防弾、防刃、耐熱、対衝撃素材。オマケにどんなにしても皺になり難い！という高性能の物なんだ。それに機能を追加すると……。

お、お父さん！頑張っ……！あはっあははははっ……。

お父さんは元気になっているかなあ……？明日は定期連絡の日だからお父さんにも通信を繋いでみようっと　むふふふ

S i d e o u t    ア ン

第四十六話「友情？と父と娘と」（後書き）

はい！今回は超・葵・アンの三本でお送りしました！

どうしよう？話が進まない…！？

まあそれが本作品の味といえば味なんですけどね。

次回は出来ればですが葵が学園長と会談できればと構想しています。  
予定通り出来るかは作者にも未知数ですけどね！！

では！また！

感想&ネタは随時募集中です！！

第四十七話「初対面と疑惑と襲撃と」(前書き)

メリークリスマス！！

作者は考えて、そして気付いたんだ…。

忙しくてかけないならばストックを放出すればいいのでは？と…。

では続き！

## 第四十七話「初対面と疑惑と襲撃と」

麻帆良女子中等学校前…。

Side 葵

「はあ…」

目の前には学園都市の最高責任者たる近衛・近右衛門翁が居るはずの一校舎がある。そして今、俺はその校舎内に入ろうとしている。いや、入るといっつか…足踏みしている？なぜ足踏みしているかと言うとね…。

入るのがとてもとても戸惑われるんです…！だって！あの学園長だよ！？相対した時に「今まで麻帆良に潜伏するように居たのは、なぜかね？」なんて聞かれも答えられません！

間違つても「アンタの悪戯心が信用できなかつた…」なんて言えませんよ！！ええ！言えませんとも！！それと「本当に人間ですか？」なんて言えませんとも！！

そもそもの話し俺がなぜこんなところに来ているかを言うのだね？木乃香ちゃんが俺のことをポロツと…いや、ポロツと話しちゃったみたいなんだ。彼女の祖父である学園長（いじり）に、な。

……因みに“木乃香ちゃんが”っていう情報はタカミチから聞いた。ただ…木乃香ちゃんが“何”を話したのかは俺も知らない。そのことを知った翌日に学園長がくえんからタカミチ経由で“挨拶に来い”と言われました。俺、泣いていいかな？何が悲しくて今まで避けていた相手に会わねばならんのよ…。何を言われるかわかったもんじゃないわー…。

いや…一応、近い内に挨拶に行く予定ではありましたよ？一年後とか…十年後とか…ありましたけど…。もう少しゴタゴタが片付いた後に行きたかったー…。

しかし、今の今までバレなかったのにまるで謀ったようにこの忙しい時に呼ばれるなんて…。大戦期に散々ナギを探し回った時は“ご都合主義”では見付からなかったのに…。今回はそのご都合主義ですか！？タイミングがマジでイヤ過ぎる…！

詳細は省くけどな……。忙しいんだよ！！自分で蒔いた計画だから自業自得なだけだよ…。本当に、もう少し時期をずらしてくれてもいいんじゃないかな…！？

すまん…。少し興奮…もとい取り乱した…。

それでな？こうなると孫娘大好き（はーと）な学園長がくえんのことだ。孫娘に悪い虫が付いたのでは？と勘ぐりはじめたようだ。そこで学園長は考えた。孫娘の担任であるタカミチなら何か知っているんじゃない？とな…。そして直ぐに連絡がタカミチへ入る。

どんな内容かは省略するが「誰？知ってる？誰？」「え？あの？え？」「吐きなさい」「……はい」というような会話が学園長とタカミチとの間で行なわれたらしい。

まあ一応タカミチが全部ゲロる前に俺へ連絡をしてきたことだけは褒めてやる。お蔭で少しは心構え的なことが出来た。

それと連絡が来た時は時間もなかったので簡単に俺の設定を決めた。タカミチにはゲロる時に俺のことは木乃香ちゃんのために詠春が護衛として雇った“ただの”魔法使いということにしたんだ。

…はい？何か、文句でも？今、学校前に居る俺は“ただの”魔法使いですが？一応、挨拶に来たんだから正装してきた。とは言っても少し派手で真紅のワイシャツに黒のスーツ一式。ワンポイントにルビーの填ったネクタイピンをしている。

……ラミエルさんはネックレスよろしく首にかけてワイシャツの中に隠してあるけどね。だって！一人じゃ怖いじゃん！？基本、俺は臆病者なんだからな！？それにここはあの“ぬらりひよん”の居城だよ！？

マジ勘弁だわー…。できればここには永遠に来たくなかった！何だかんだで、はぐらかしてきたのに……。木乃香ちゃん、君は俺に何か恨みでもあるのかな？

むー…行くべきか？行かざるべきか？そこが問題だ…。

「あれ…葵さん？何しているんですか？こんなところで…」

校門前でうんうん悩んでいたら背後から女の子の声で呼ばれた。声に聞き覚えがあるけど誰だ？と思って振り返って見てみれば、そこには髪を後頭部の高いところで一本に結った女の子。あと…中学生にしてはやや長身だった。

ああ、この子は…。

「ん？あー、アキラちゃんか。いやね？木乃香ちゃん関係で、じじ…祖父である学園長になぜか呼ばれてね。…そういうアキラちゃんは？」

「学園長に…？あ、えと、私は部活です。大会が近いので、もう追い込みですから」

夏真つ盛りだもんねえ…。俺の今の真つ黒の格好を素でしていたら間違いなく熱中症や脱水症状になるかもしれない。一応、俺の服から5cmの範囲には魔法で気温調整をしているから余裕で着られているんだよ。

そうじゃないと今の俺は暑さで死ぬと思うんだ…。何で俺はこの服装をチョイスしたのかな…？この季節には失敗だったかもしれない！俺はともかく周りが暑そうだ！！

……申し訳ないです、はい。

しかし、もう、そんな時期か…。アキラちゃんも水泳部に入部して半年くらいなのに一年レギュラーだもんな。本当にスゴイ才能だ…。

……うむ。大会でアキラちゃんが活躍するのは予想できる。

彼女には才能があり、尚且つ才能に胡坐を掻くことなく努力もしている。楽しそうに取り組んでいるのも大きいかな。やっぱりね？何事も楽しむ子は伸び易いからねのよ。

ただ……いつか高い壁にぶつかった時が怖いけど、ね……。

まあその時は年長者として出来る限りのことはしてみようと思う。頼られれば……だけどね？何はともかく大会で活躍するであろうアキラちゃんのために出来ることか。

……そうなるとパーティーしか無くね？祝勝会とか……。

「そつか。まだ一年なのに大会とかに出るんだからアキラちゃんはすごいねえ。……そうだ！大会が終わったら祝勝会しよう！うちの店を貸切りで準備しておくよ！」

「えっ！？そんな…ダメです！私のためなんかで申し訳ないですよ！」

「お嬢ちゃんが何を遠慮しておるか。くくくつ よし！決まりだ！日程は店に連絡して来いよ？絶対だからな？」

子供が遠慮なんかしているんじゃないよ？やった タダ飯だからに考えておけばいいんだから。な？この子は少し生真面目だから変なところで遠慮するんだ。子供は大人に迷惑をかけてナンボだと俺は考えるんだけどなあ。

いいか？パーティーはするぞ。活躍した子にはご褒美があって当

然なんだからな。

「……はい、わかりました。……（ボソツ）もう、言い出したら聞かないんだもんなあ」

「何か言ったかな？かな？」

「いいいい、いえ！言ってますんじょ…じゃない言ってますんよ！」

ちゃんと聞こえてんだぞ？まったく…俺は、そこまで頑固では無いつもりだ。他人の意見は聞いているんだ。家族以外のは本当に“聞く”だけの時もあるけどな！

「それじゃ部活に言ってこい！怪我なんかするんじゃないぞー」

「はい、行ってきます。それじゃ！」

いつまでもここに足止めするわけには、いかないからアキラちゃんと別れた。せっかく練習に来たのに俺のせいで肝心の部活に遅れさせたら申し訳ない。

走り去って行くアキラちゃんの後姿を見ながら考える。

「ふむ……」

アキラちゃんと話して幾分、気分が楽になったな。リラックスした今なら、あの学園長のところへ行けそうだ。…それでは、行くか

校内にある来客用の玄関から入るとタカミチが居た。……コイツ、待ち伏せしていたのか？今日のタカミチの笑顔が胡散臭くて仕方ない……。

「葵さん、待っていましたよ」

「ふんつ。まだ来るつもりは無かったんだけどね……」

本当に“今は”来なくなかったです。せめて、あと4ヶ月は待つてほしかった。呼び出されるとも思わなかったしな……。ふう……計算外も甚だしい。

「ハハハ……。それじゃ案内しますね」

「はいよ。……あ、その前にトイレ行かせてくれる？」

「……………」

何だよ！？生理現象なんだよ！！仕方ないだろうが！？長時間、門の前で足踏みしていたから仕方ないんだよ！！

そんなわけでタカミチに校内を案内されること数分。俺の目の前には重厚な扉があった。

……素朴な疑問なんだが中学校に、こういう扉は必要なのだろうか？なんとなく威圧感はあるから威厳は感じられるけどさ。

トントン…。

「学園長。葵さんをお連れしました」

「……うむ、開いとるよ。入りなさい」

「失礼します」

扉越しだが割りとはツキリとした声で返答があった。タカミチが開けてくれた扉から俺は部屋の中へ入る。続いてタカミチが入って扉を閉める。タカミチはそのまま歩いて俺から見て学園長の右後ろに立った。

俺は執務机を挟んで学園長の正面に立つ。正面から見た学園長の姿の感想を一言で表すならば、それは………長ッ！？だった。いや、マジで長いって！骨？あれって骨なのかな！？まるで崑崙山の仙人だなー…。

表情はポーカーフェイスを装っているが内心は学園長の頭部のことでお祭り状態だった。

俺がそんなしょーもないことを考えていたとは思ひもしないであろう学園長は最初の言葉を発した。

「はじめまして、かのう。いつも孫娘が世話になっておるようじゃのう。ワシが当学園の学園長をしておる近衛・近右衛門じゃ」

「……はじめまして、九重・葵です。早速ですが本日はどのようなご用件で？」

「フオフオフオ まあそう急ぐこともあるまい。ささ！そこに座りなさい」

好々爺然とした学園長がくえんが予め用意したのだろう。執務机を挟んで学園長の正面になるように椅子が置かれている。

何を考えている？椅子に仕掛けでもあるのか？いや…そんなことをする必要は無い、か。まだ俺は不審なことはしていない……わけではないが。学園側にバレるようなことはしていない！超の件は油断したけど…。

とりあえず素直に座るか…。下手に拒んでも変に勘繰られてしまっただけだ。

「はあ…それじゃ失礼して」

「お茶は緑茶でよかったかのう？一応、紅茶もあるのじゃが」

「いえ、お構いなく。お…私として呼ばれた用件を“早く”終わらせたいので」

暢気に学園長とお茶なんてしたくないんだ。どうせお茶するなら可愛い女の子がいいに決まっているじゃないか！イカン……つい、本音が…。

「フオフオフオ。では本題に入るとするかのう。君は……」

「ッ！」

学園長がくえんからのプレッシャーが増した！？何だ？このまがましい  
オーラはッ…！？一体、何を聞かれるんだ！？

Side out 葵

少し時間は戻り…。

麻帆良商店街…。

Side 木乃香

麻帆良の商店街へ今日のお昼と序でに今晚のオカズの買い物に  
来た。確か今日は八百屋さんで夏野菜が安かったはずだ。

商品を手にとってジックリと確認する。ここの八百さんの品物  
はみんな新鮮やけど少しでもいいものを選びたい。

「きゅうり…トマト…はオーケーやな。シーチキン…パスタはこの  
あとスーパーへ行くとして…。ええと他に買い忘れは…ん？電話？  
明日菜かなー？」

会計を済ませて商店街の通りに出ると携帯が着信を知らせてきた。  
取り出す時に今日の予定は何も無いはずやけど…、と考えた。液晶  
画面に表示される着信者の名前を見ても首を捻るしかない。

む？大河内…？あれまあ、どうしたんやろ？

「もしもしー？」

『あ、もしもし？近衛さん、今、大丈夫？』

通りで真ん中だというのもマズイから端によって電話の態勢を整えた。堂々と真ん中でなんて他人様の迷惑にしかならへん！そんなことやったらアカンのや！

……仮にそんなことしたら葵兄さまに怒られてまうわー。葵兄さまは普段は優しいけど気に入らないことやイケナイことは叱るのに容赦が無いから大変なんやー…。

「……大丈夫やよー。どうしたんー？」

『うん…。今、学校なんだけど校門前で葵さんが居たから声掛けたんだ。そうしたら近衛さん関係で学園長に呼ばれたって』

「……はへ？えっ？葵兄さまがっ！えっ！？」

何で葵兄さまがおじいちゃんのところへ行かなアカンの！？ついポロツと葵兄さまのことを話してしまったのが昨日のこと……。ええとー……。まさかっ！？まさか！…まさか！…やよね！？

おじいちゃん先走り過ぎや！ちよつと気になる人が居るんやっ。て話しただけなのに次の日に呼び出すやなんて！！

あ……。アカン……。葵兄さまに自分のことはおじいちゃんに秘

密やっつて言われてたのに…。昔のことやからスツカリ忘れてたわー…。どうしよ？今回のことで葵兄さまを怒らせたりせんやろか？

そもそもおじいちゃんは何で私がちよつと言っただけで呼び出すん！？相手に失礼なんちゃうんか！？こ、これが切欠で葵兄さまに嫌われたら…。ど！どうしよ！？

ア、アカンわー…。考えがまとまらん…。

『何か知ってる？』

「あ！？ううん！知らんよ！？それで…。」

しまった…。予想外のことやったから言葉が詰まった。変に思われてないやろか…。ううん！今はそれよりも葵兄さまの居所や！今、葵兄さまとおじいちゃんはどこに居んのや！？

さあ！大河内さん！キリキリ吐きい！？

『えっ？あの、ええと、学園長室だと思う。うん、最後まで見ていたわけじゃないからわからないけど、多分そこに』

「わかった！ありがとーな！」

『え！？あ、ちよつ…』

まだ電話口で何か言っていた気がするけど私は構っていられない。居場所がわかったからにはおじいちゃんの暴挙を阻止せなアカンのや！手遅れになる前に…！！

「早よ行かな…！葵兄さまが危ないっ…！」

Side out 木乃香

時間はやや戻って葵が学園長と話している時…。

麻帆良女子中等学校…。

Side アキラ

水泳部のあるプールへ着いた時、そういえば…と思い出した。

ここに来る前、校門近くでお気に入りのお茶店のマスターである葵さんが居た。話を聞いてみれば、なぜか学園長に呼ばれて校舎を訪れていたこと。それは近衛さん関係だということも。

………真夏なのに真っ黒な格好だったのも気になった。あんな格好で暑くないのだろうか？服のセンスは悪くなかったから冬とか秋とかならアレの見栄えはいいと思う。

服装のことは置いておいて………少し気になって近衛さんへ携帯で連絡を取ったのが十数分前…。話し終わると近衛さんは何か取り乱していたように思う。

「どうしたんだろ？慌てていたみたいだけど…」

何か：問題かな？でも、どちらが問題を起したの？：学園長とは思えない。仮にも教育者のトップだ。そんな何かしらの問題は起さないと思いたい。

そうなると……葵さんが？それこそ、思えない。私が小さい頃から知っているけど、とても問題を起すような人には見えなかった。

思い出すのはつい先程会った葵さんの姿。私が大会に出ると言った時に葵さんは大会が終わったら自分の喫茶店を貸切りにして祝勝パーティーをしよう、と笑って言ってくれた人のこと……。

「……………大丈夫、かな？」

ただ、考えずに呟いた。“誰”を心配して……。“何”を心配して……。心配して……。考えたのかもしれないけど何も考えずに呟いた。

「アキラーっ？早く着替えないと練習できないよーっ！」

「あ、うん！今行くーっ！」

更衣室で着替えもせずにボーっと考えていたら部活仲間と呼ばれちゃった。あ、まだ荷物も降ろしてなかった……。

いけない、いけない。部活に来たのに他に意識が向いちゃった。今は葵さんの期待に応えられるように練習あるのみ！だよ。せっかくパーティーしてくれるって言うてくれるんだから勝利して楽しみたい、よね？うん……。

「大丈夫、だよ……」

意識しないのに何とは無しに私は、また眩いていた……。

Side out アキラ

学園長室……。

Side 葵

さあ！来いやーッ！！何を聞いてくるんじゃ！？コラーッ！！

「君は……木乃香の何なのじゃ？」

「ッ！………はあ？」

待ってー……ちょっと待ってー……すっごい待ってー……。

この学園長こっしは何を聞いてきやがった？木乃香ちゃんの“何”？だとう？………これはどういう意味だ？すまんが意味がわからない。何って何よ？

……もしかして……関係か？木乃香ちゃんとの関係なのか？それが聞きたくて呼んだのか？タカミチからは木乃香ちゃんが麻帆良へ来る際に詠春が雇った魔法使いと学園長は聞いているはず……。

なのに………何で学園長こっしは改めて取調べみたいなおとしてくるんだ！？いいじゃん！ただの護衛の魔法使いで！！何が不満なんだよ！

？学園長の孫娘には手を出してないよ！何度でも言おう！！

俺はお姉さんが大好きです！！

いや、こつちの世界に来てから年上の女の子に会ったこと無いけどさ……。あ、そうそう！ウーリやシルビアみたいな小さい子も好きだよ？家族ですから当然じゃん！抱っこしてお昼寝すると暖かくて気持ちいいんだよー…。

すまん……。関係無いこと考えたな。

うむ！それはともかく目の前の意味不明なプレッシャーを掛ける学園長のことだ……！！

「もう一度聞こう。……君は、木乃香の、“何”なのじゃ？」

「はあ……ええ？ま、まあ何って聞かれたら兄的なもの？でしょうか」

もう、いいよね……？正直に“兄”のようなものです、と言っちゃったよ。だって、この学園長と話していると疲れるんだよ……。今も本当に意味不明なプレッシャーを与えてくるしよー…。

「……………（ジーーーーーー）……。……本当、じゃろっかな？」

「本当ですよ……。だいたい木乃香ちゃんは中学生ですよ？年齢差があるでしょう……」

歳の差はいいんだよ。別にさ。ただね？中学生はイカンでしょう……。許されるのは映画と劇的な愛の結果だけだつて……。現実の社会は冷たいよ？アハハ ウフフ つて喜べるのも最初だけで周囲の大人達は揃つて言うんだ。

こんな若い子が つて、な……。

やってらんねえよな……。……まっ！そんなこと俺には関係無いけどな 他人様は他人様、うちはうちだからな！！

だいたい木乃香ちゃんは妹みたいなものだろう？木乃香ちゃんも俺のことは兄みたいなものと感じているはずだ。それに家の子達のこと姉のように思っていると思う。……姉、多いなあ、と思わなくもないわけではない。

「……つまり木乃香が適齢期になれば手を出す……と？」

「何でそうなるかな！？出さないよ！？出しませんとも！！」

何で！木乃香ちゃん限定で考えるんだよ！？俺がその前に誰かとお付き合いしているかもしれないだろうが！！……当てなんて無いけど、な。ちくしょー！！彼女、欲しいな！！

長く生きてても異性は求めるものなんだよ！健全な20代の身体のまま不老になつたから最盛期のままなんだよ！！色々とな！！具体

的には聞くな！！ソレがお約束というものだ！！

俺：何、言っているんだろ？目の前に学園長くわんちやうが居るけど思わず“orz”の姿勢になりそうだった。あと正直に言おう……。今は軽く悟りを啓き始めて彼女とか、そういうのに対してあまり慌てなくなっただ。

……そこ！「それは男として終わったんじゃない？」「なんて言うもんじゃないぞ！？断じて違うんだからね！！わかったか！？」

止め処もないことを……と言うよりも碌でもないことを考えていたら、なぜか学園長くわんちやうもヒートアップしていた。何なの！？この学園長くわんちやうは！！

「葵君！君は木乃香に不満でもあるのかの！？手を出す価値も無いと言うのかの！？ヒドイッ！ヒドイのう……！！」

「ちよっ！？黙れよ！？じじ……ッ！んんっ！学園長ッ！！そうは言っていないでしょう！？」

もう何なんだよ！？何がしたいの！？俺にはわかんないよ！！つてか！一回マジで黙れよ！！休憩は！？休憩時間は無いのか！？誰か、この学園長くわんちやうの頭を冷やしてやってくれよ……。

「ならば！ならば手を出さんじゃない？あー！イヤじゃ！イヤじゃ！！これだから下心のある輩は！！木乃香も可哀想にのう！このような者を兄と慕うとはッ……！！」

「そこまで言うこと無くなッ！？いや！そもそも言われる覚えが無いんですけどッ！？ついに耄碌したのかな！？この学園長はッ！！」

ちよつとマジでこの学園長止めないとな…。タカミチはダンマリを決め込んで役に立たないし…。ラミエルさんをここで取り出すわけにもいかない…。つまり…。

このジジイを俺一人で相手にしなくちゃならない…ということか…。

ナニ、コレ？本当に孤軍奮闘もいいところじゃなかるうか？こんなことならもう1人、誰か連れて…：ダメだ。呼ばれたのは俺1人なのに同行者なんて連れて行けないじゃんか…。

「だあああれが頭の長い人外じゃああーッ！？！？」

「言っていないよね！？俺、言っていないよね！？というか！自覚あったの！？」

とうとう関係無いこと言い出しやがったッ！？誰も言っていないよ！！本人を目の前にしても誰も言わなかったことを当の本人が言っちゃったよ！！もう！本気で何なの！？今日、呼ばれた意味がマジでわかんないよ！！

それと！…：最後に本音が洩れちゃったじゃないか！？思いつきり「自覚あるの！？」って言っちゃったよ！！聞きたくても我慢したの、に…！！本人から言われるとは考えもしなかったよ！！

「何じゃと！？この若造がーッ！！」

「じんのツ!？」

誰が若造だ!?! コラーツ!!! ヨボヨボのお前よりは長く生きているわーッ!!!

バンツ!!!

「おじいちゃんツ!!!」

「フオ!? 木乃香!」 「木乃香ちゃん?」

学園長室の扉が大きな音を立てて豪快に開かれた。それと同時に聞こえた声…。そこに居たのは木乃香ちゃんだった。

今度は何よー…? 木乃香ちゃんも交えて話し合いですかー…? はあ…: 俺はもう疲れたよ。色々あって、お腹いっぱいなんだよ。もういいじゃん? 兄弟的な関係で、さー…。

あれ? でも木乃香ちゃんは“おじいちゃん”としか言ってなかったな…。それに学園長じいのこの狼狽しやうたいのしよは、一体…?

「ど、どうしたんじゃ? 木乃香…」

「どうした? やないやん!! 何で葵兄さまがここに居るん!?!」

お、俺? 俺は学園長に呼ばれたから来ただけなんだけど…。

「フオ、フオフオフオ…。そ、それはのう? 葵君から誘われて…」

「は？」

……おい？じじい……あ、間違った。学園長よお……？今まで関係らしい関係が無かったのに、どうやって学園長を誘えと言うんだ？あーん？

「……………おじいちゃん呼んだ、って聞いたへ？」

「ふおっ！？いや、あの、それは…のう？」

何？何で困った顔して、こっち見るの？何？俺に学園長を助ける、とでも言うつもりか？……………俺にどうしろと言うんだよ。とりあえずお互いに小声で話してみる。どうしていいか今の状況が理解できんのよ。

「えー……………ここで俺に振るの？」

「そう言わんとお願いじゃ！このままじゃワシ、木乃香に嫌われてしまっんじゃないかな！？」

「いや、ソレって俺の不利益にならなくね？」

学園長が木乃香ちゃんに嫌われても俺は全然構いません！そんなこと俺は知らんよー！！

「フオ！？葵君！そこを何とか！今までのことは謝っちゃおうかなー！…なんて？」

「はーあ？聞こえんなー？」

なに、言葉を意図的に不明瞭にしてんだよ？ハッキリ謝罪すると  
言えや！？誤魔化せると思っつなよ！？そんな態度なら絶対に助けて  
やらん！！

「…いや、すまん。きちんと謝罪するから助けてください。お願い  
します」

「……………仕方ない、か。約束を反故にするなよ？」

「もちろんじゃ」

正直なところ学園長の謝罪だけじゃ割に合わない気がするけど仕  
方が無い。

……………サツサと帰りたいんだよ！もうイヤだ！何だ！？この意味不  
明な空間（学園長室）は！？出来れば二度と来たくないです！！も  
う帰ろう！帰るのお！！

すまん…。過剰なストレス…要するに学園長のプレッシャーにや  
られて疲れ過ぎたようだ…。状況はわからないが…まずは木乃香  
ちゃんを連れて帰るために説得するか。

「よし。……………あー、木乃香ちゃん？」

「……………何、葵兄さま？今、おじいちゃんにお説教せなアカンから  
忙しいんやけど」

「まあそのカナヅチを下ろして少し待ってくれ。何を怒っているの  
か知らないけどお説教は後でも出来るでしょう？」

背後から「フオ！？それはあんまりな！？」なんて聞こえたような気がしたが無視だ！嫌われないだけありがたいと思っただけなのだ！

「……………わかった」

よし！洪々とだがカナヅチを下ろして話しを聞いてくれるようになった。ってかさあ…今、思ったんだけど木乃香ちゃんが何を怒っているのか知らないから説得も何もあつたものじゃないんだけど…。

どうしよう？ここは学園長の言うとおりにするのは癪だが俺からの用事ってことにするか…。事の前後の矛盾は……………勢いで押し切るうー！そうしよう！！

「あ…そのな？麻帆良に来てから俺は学園長に挨拶らしい挨拶をしてなかったんだ。それで今日、改めてしようと、ね？」

「……………何で葵兄さまがおじいちゃんに挨拶せなアカンの？」

まあそれはそうだよなあ…。今まで何の関係も無かったんだし。敢えて関係があると言ったから…木乃香ちゃんを間に挟んだ関係か？直接の関係はマジで無いな…。まあどうせ知り合うなら綺麗なお姉さんがいいしな！

「いやー、実は麻帆良へ来る時に詠春から木乃香ちゃんのことをくれぐれもよろしくと言われていたんだ。だから木乃香ちゃんの祖父である学園長にも一度、挨拶する……………はずだったんだよ」

まあ今の今まで伸ばしに伸ばしてきたんだけどね…。そもそもの話しだけどさー、誰が好き好んで学園長に会わねばならんのよ、っ

て感じじゃない？

「…それってもう何年も前のことになるんじゃない？」

「まあ……そうなるな」

また背後の学園長225から「え？何年も前から麻帆良に居たの？え？  
なんて聞こえるけど、これは……：：：気にしたら負けだ。負けなんだ。  
そういうことだから無視するのだ。寧ろ俺は何も聞こえません！え  
え！聞こえませんかも！！

「はあ……葵兄さま？」

呆れたように言う木乃香ちゃん。

「いや、真に申し訳ない。まあ挨拶する相手が学園長225じゃなくて可  
愛い女の子なら直ぐに挨拶しに行ってもいいかな？なんてな」

「……………（ピクツ）#」

あ、あれ？木乃香ちゃんの可愛いオデコに#マークが一つ？  
……………何でだ？何で木乃香ちゃんのオデコに#マークが！？俺、  
木乃香ちゃんの気に障ること言っただか！？

くっ！わからない……！説得を続けるしかないか……！！？

「なんて考えたんだけど木乃香ちゃんの祖父とは言え……：：：ねえ？お  
じいちゃん相手にするくらいなら女性客の多いお店に精を出すつて  
ものでしょ？」

「……………（ピクピクッ）##」

……………またか？またなのか！？また#マークが増えたよ！  
！二つにな…！あれさっきのって説得？いや気にしたら負けだな  
…。そういえば、前にも似たような状況を幾つか見た覚えがあるけ  
ど……………いつだったか？……………チツ、覚えてないな。

目まぐるしいほどに思考が脳内で飛び回っていたら、ふと光を遮  
られたので顔を上げると影（木乃香ちゃん）が動いていた……………。

「あ、あれ？木乃香ちゃん？何でカナツチなんかをお持ちなのでし  
ようか？あまつさえ、それを私めの頭に振り下ろそうと……とお  
おおおッ！？！？！」

ギリギリだった！！本当にギリギリだったよ！！避けなかったら  
ドタマを力チ割られてたってば！！魔力は乗ってなかったから致命  
傷にはならないけど心情的には死にそうでした！！避けた時に耳元  
で“ブオンッ！！”ってカナツチが振るわれた音がしたよ！！

「チツ……………（ボソッ）外したわー」

木乃香ちゃん……………。君の中の“何”がそこまでさせるんだい？

「はあ…はあ…お、驚いたあー…。木乃香ちゃん？危ないよ？そん  
なことしたら…」

「葵兄さまなら大丈夫や。私、信じとるから…」

「そ、そんなよくわからない信頼はいらなかなー…なんて。あは  
っあははは…」

ほんつとうにいらぬ信頼だな！？俺が何か悪いことをしたのかな！？木乃香ちゃんに迷惑をかけたことは無い……………とは言わない！！色々、からかったりしたしな！！

照れて八二かんだ木乃香ちゃんや刹那ちゃん、それに明日菜はもちろん。彼女達の成長記録は俺の脳内フォルダと写真や映像などにキチンと保存して大事に残してある。

この状況でそんなことを考えていると背後から袖を引かれた。何？と思つて小さく振り向くと、そこには……………何かに憑かれた顔をした学園長（じゆう）が居た。振り向いた俺に学園長が小声で話しかけてくる。

「葵君や。今日のことはお開きにして、また改めて来てくれないかのう？……………（ボソツ）このままだとワシの心臓が止まりそうじゃ」

木乃香ちゃんのプレッシャーにガクブルしてるんじゃないよ！？自分の孫娘でしょうが！？あつ！？何、暢気に緑茶、飲んでるのかな！？「ふう……………」って一息入れてんじゃないよ！？あつ、こらつ！！

オノレエ……………！憑かれた顔しているくせに！？……………ふう、まあいい。帰りたい気持ちがあるのは俺もだ。ここは素直に従つてやろう。

「……………わかりました。また後日、連絡した上でお伺いさせて

いただきます」

「う、うむ。よろしく頼むぞい」

結局この学園長コウケンは何がしたかったんだろっ？今日はマジで意味不明だったわー……。

「そういうわけだからタカミチ！今日のところは帰るわ！……じゃな！」

「えっ？あの！？いや、はい…気を付けて…？あれ？」

言つと同時に学園長室から即退出した。それはもう逸早くね！木乃香ちゃんが居るから無茶は出来ないけど出来る限り早く退出しましたとも！！

でも、そういうわけってどんなわけだろうね？自分で言っていて疑問だ。………だけどね？勢いつて大事だよ！！押し切るには勢いが何よりも大事だ！何事も成せば成る、の精神だな！！熱血とか暑苦しいから好きじゃないけどね！！

「あっ！？葵兄さま！話しは終わつたらんへっ！！待ちいや！？」

「ちよっ！？木乃香ちゃん！？今日のところは家族団欒で学園長コウケンとお話ししたらどうかナッ！？」

木乃香ちゃんが追いかけて来た！？何で！？学園長コウケンに用があつたんじゃないの！？学園長コウケンは椅子の上で過剰ストレスを与えられて干からびたようになってるよ！！ほら？おじいちゃんの下へ行っただげなっ！

「……おじいちゃんとはあとで“お話し”するからええ!!今は葵兄さまのことや!!」

「何とおおおッ!?!」

木乃香ちゃんの“お話し”というセリフに学園長も危機感を感じたのか学園長室の中から「何じゃとおおおッ!?!?」「なんて俺と同じことを叫んでいた。身内とはいえ学園の実力者である近衛翁を震えさせるとは…!」

………木乃香ちゃんの“お話し”って何をされるんだろう?………  
………やっぱりカナツチか?カナツチが落ちるのか??いや、寧ろカナツチが乱舞されるのかツ!?

あれって地味に痛いんだよなあ……。いつから振るい始めたんだっけか?確か………学園長が木乃香ちゃんに見合いを勧め始めた時………。はっ!?!?

木乃香ちゃんがカナツチを振るうようになったのは学園長のせいじゃねえか……!!……!!ほんつと!碌なことしないな!!あの学園長はよッ!!!

学園長室から出て、校舎からも出た。今は喫茶店クレイドルまで歩いて帰宅中だったりする。俺の隣を歩く木乃香ちゃんは今も……。

「葵兄さま！ちゃんと聞いてはるの！？ええかー？葵兄さまは、もつと自覚を持ってくれへんと困るんやー」

「はい、そうですねー…」

説教中です 俺は暫らく前から同じセリフしか返していなかったりする。木乃香ちゃんが相手とはいえ説教なんて聞きたいものではないでしょう？もう右から左へ聞き流していますよ。

「葵兄さまは無自覚に異性を引つ掛けるんやから、もう…。それに……」

「はい、そうですねー…」

「葵兄さま？」

「はい、そうですねー…」

「……………（プチンッ）##」

はっ！？この殺気は何だっ！？首の後ろがピリピリする！？木乃香ちゃんを狙った西の刺客か！？……………クッ！どこだ！？この俺にも気配を隠し通すとは相当の<sup>てたれ</sup>手練だな！！

木乃香ちゃんを逃がさないと…！あれ？あんなに説教していたのに何で今の木乃香ちゃんは静かなんだ？

周囲を警戒しながらチラッと隣に居るはずの木乃香ちゃんを覗き見る。そこで目にしたモノは、なんと……………！！！！

「……む？なんっ…はうわッ!？」

「……また外したわー」

はい！木乃香ちゃんの振るったカナツチでした！先程まで放たれていた殺気も隣に居た木乃香ちゃんだったようだ。………凄まじい怒気を殺気と勘違いしていたようだ。

通りで周辺を警戒しても刺客が見付からなかったはずだよ…。元凶………というより原因は隣をトコトコ歩いていた子なんだからな！どうしようか？マジで感覚が鈍ってきたのかもしれないわー…。

「だからね？木乃香ちゃん。…危ないからやめよう、ね？お願いだから…」

カナツチを使うのは学園長がくえんか野菜坊主ネギだけしてほしいものだ。俺にはカナツチを振るわれて喜ぶような特殊な性癖はないからな！

「それなら私のお話し、ちゃんと聞いてえな。ええなー？」

それはゴメンとは思いつけど説教は勘弁してほしいです。ふうむ。ここは一つ食べ物で釣ってみるかな？上手くイケば話を逸らせるかもしれない。

「………木乃香ちゃん、ここは一つ俺の店のケーキセットで手を打たんかね？」

「む？むむむっ！葵兄さまのお店のケーキセット…?」

皆（マイノリティは除く）、大好き甘いお菓子

木乃香ちゃんも、この例に当て嵌まるのだよ。年頃の女の子らしく甘いお菓子が好きなものなァ？くくく。これは……………イケる、か？いや、ここはもう一押しするか…。くくく

「そうそう。今ならもう一つケーキを付けるよ？」

「なっ？むむむむっ！…これは悩むな！。いやいや！ここはガツンと…！でもケーキ欲しいし…」

「美味しいよー…？甘ーいよー…？蕩けるよー…？くくく。しかもカロリー控え目だ。…どうするのかな？」

「カロリー…。それは全ての女性の天敵…。それが無ければ色々なお菓子が食べ放題なのに…。カロリーが怖いから食べられない…。くくく」

それを気にしなくていいんだぞ？オマケも付けて二つも食べられるんだぞ？食べたいだろう？それに二つ食べても一つの4分の3のカロリーしかないんだ。お得だろう？二つ食べてもカロリーは一分以下なんだから…。

「……………食べたい、です」

「くくく。素直な子だねえ。それじゃ行こう」

「うん」

素直な木乃香ちゃんの頭を撫で撫でして俺達はそのまま喫茶店への帰路を歩いて行った…。先程までの殺気と勘違いしそうな怒気を

放っていたとは到底思えない変化振りだった。

……そんなに怒ることだったのだろうか？

S i d e o u t 葵

第四十七話「初対面と疑惑と襲撃と」(後書き)

葵はハツチャけるし…木乃香は、やや暴走するし…。  
今回はヤリタイ放題だった気がする…。

ではでは！

感想&評価&ネタは随時受け付けております

第四十八話「再会談と笑う金髪少女とお仕事と」(前書き)

こ、更新したぜい…。

もう残りのストックが二つしかない…。また増やさないとorz

下手な放出はするものじゃないわ…。

では続きをどうぞ！

## 第四十八話「再会談と笑う金髪幼女とお仕事と」

学園長室…。

S i d e 学園長

「ふう…茶が上手いのう」

木乃香が襲撃してきた、あの予定外の騒動から5日後が経った…。後日にあった木乃香の“お話し”は思い出したくも無いわい…。思い出されるのは影に覆われ振り上げられる“モノ”だけ…。

あ、あああー…カナヅチは…カナヅチは…やめ…て…。やめ…  
アーツ！ワシ…死んじゃう、かも…。

ハッ！？はて？何じゃったかのう…。何か思い出しではいけないことを考えていたような気もするが…。まあ思い出さぬということは大したことではないのじゃろう。気にすることも無いのう。

いや、しかし、今、思い返すとワシも少し大人気ないことをしたやもしれんのう。愛する孫娘の口から直接“気になる男が居る”などと言われてしまったから、つい先走ってしまったわい。

男の情報を集めるためにまずは担任であるタカミチから何か知ってはいないか、と思い、話しをしてみれば小さく眉を顰めよった。他人にはわかり辛いが明らかに動揺した態度をしようた。

午前中一杯使って尋問しておったが頑として話さぬ。読心術もタカミチには効かぬし。困ったワシは話しを聞く前に一度、昼食を挟んだ。午後中一杯も根気よく問い詰めようとしたら多少渋られたがようやく話してくれたわい。

内容は案の定じゃった。木乃香が足繁く通う“喫茶店”があると、いう話しじゃった。タカミチは、これに加えて「木乃香が気になっているのは、この喫茶店の店長ではないか？」と話した。

更に詳しく聞いてみれば木乃香が麻帆良へ寄越す時に婿殿が雇った護衛だった、とも言つ。何の変哲も無い無所属フリーランスの魔法使い。ただ婿殿の友人ということで引き受けたらしい。

以降は護衛の役目を今年、中学時に編入された桜咲・刹那君へ引き継ぎ、葵君は麻帆良学園都市にて喫茶店を生業に静かに生活中、だつたらしい…。

フオフオフオ　ワシにも感付かれずに学園都市に潜伏紛いのことをするとは……なかなかにやりおるわい。実力は未知数じゃが低くはないと考える。これは是非とも、この学園を守るために協力してほしいのう。

先の大戦の影響で旧世界に居る魔法使いは減少してしまい慢性的な人手不足じゃ。ここは何とかして引き込めぬものじゃろうか？

前回は勢いから先走ってしまったが人間性などを始め色々観察が出来たのは大きい。多分にワシの趣味を含んだ会談じゃったが得た物はあった。実際に話して察したがアレは自己を優先するように見えてその実、己が大事なモノを優先しておる人種じゃな。

信用を得るまでは長いが一度、信用を得ることが出来れば裏切られることは無いと見てよいじゃろう。じゃが……こちらから裏切ることがあれば“ただ”では済まされぬじゃろうなあ。そこは注意じゃ。

そういうわけで今日は再度、葵君との会談の場を設けたわけ、なんじゃが……。どういうわけか当の葵君本人が予定の時間が迫っても一向に訪れる気配が無い。

彼のほうで何か問題が起きたんじゃろうか？しかし、それならそれで連絡の一つがあってもいいと思うんじゃがなあ……。左の壁際にある大きなアンティーク時計を見ると予定の時間じゃった。

「タカミチ君。“彼”はそろそろかな？」

「……………そうですね。もう来る頃ですよ。予定では」

ふむう…？件の葵君のこともそうじゃが、隣に立って居るタカミチもタカミチじゃ。何を気にしておるのか知らんが雰囲気に着きを感じられんわい。葵君と何かあったのかのう？

「????どうしたんじゃ？先程からソワソワしておって。廁かのう？もしそうなら行ってかまわんよ？」

「い、いえ。そういうことではないんですが少し気になることが…」

「ふむ…。今回は木乃香が乱入することがないようにキチンと話してあるぞい。一体、何が気になるというんじゃ？」

今回、木乃香が襲撃してくることは無いわい。……無いはずじゃ！毎回襲撃されたら流石のワシでも堪らんわい！今日のために木乃香を説得したんじゃ！もう木乃香の“お話し”はイヤなんじゃ…。

「………実は前回の会合のことをエヴァに少し話したら彼女の雰囲気が変わりましてね。葵さんに何か思うことでもあるのでは？と考えると不安で」

なん…じゃ、と…？今度はエヴァンジェリンじゃと？

「エヴァンジェリンが、じゃと？………勘違いではないかね？急ぎの用事があったとか、のう？」

………ワシ、もう…イヤじゃ。もし彼女が木乃香と同じように襲撃してきたら、と考えると胃に穴が開きそうじゃわい。一度ならず二度まで襲撃される。………イヤ過ぎるのう。

孫の木乃香はまだいいじゃろう。じゃが、エヴァンジェリン…彼

女がマズイ。過去に葵君との間に何があったのかは知らぬ。ただ…出来ることなら下手をして問題があったら対処に難儀しそうじゃな…と思うんじゃよ。

昔、敵対していた関係とかでないことを願いたいものじゃが…樂觀視は出来ぬじゃろうな。寧ろ、それも想定しておいたほうが良いかもしれん、か…。

それに、まだ何も起こっていないのじゃからただの憶測じゃ。タカミチの勘違いという線も残っておるんじゃからのう。今から緊張して慎重になっても意味は無かるう。

「そうだといいいのですが…」

「エヴァンジェリンのことは気掛かりではあるが…。起こってもいないことを不安に思っているは何も始まらんぞい？」

「それは…いえ、そうですね。エヴァもこんなことで下手な騒ぎは起きないでしょう」

「フオフオフオ。エヴァンジェリンは聡明じゃ、そんなことはしまいよ」

本当にそうであってほしいと切に願いたいものじゃな。今まで彼女をこの地に封じ続けてきた。あのバカ者に頼まれエヴァンジェリンに普通の…そう、光に溢れた生活をさせるためとはいえ長過ぎる年月が経った。

あのバカは3年で封印を解きに来ると自分で言っておったのに約束の期間を過ぎて現れなかった。催促するにしてもどこに居るの

かもわからぬから連絡の取りようもなかった。この時のエヴァンジエリンは……怖かったのう。ガクブルガクブル……。

そんな彼女も随分と前にナギが死んだと聞いた時は静かになったものだ。それからサボりがちだった授業も益々サボるようになってしまった。この頃は学校に登校はしてもマトモに授業を受けてはいないようじゃし……。

うむう……十数年の間に積もりに積もった鬱憤を何かで一度、発散させるのも良いかもしれんな……。

トントン……。

この部屋の扉をノックする音が響いた。その音で時計を見ると予定から15分も過ぎていた。いつまでも来ない時間で色々と考えておいたら、ついに来たようじゃな。

「開いておるよ。入りなさい」

「失礼します。……遅れて申し訳ない」

ふむ……時間に遅れたことに対する自覚がありすぐさま謝罪する。人格的な問題は無いようじゃな。こういう態度は遅れた相手の印象を改善するのに必要なことじゃ。このことから今のところはワシらに敵意が無いとわかる。

話し合いの余地は有り、じゃな……。うむ、うむ 良きかな 良きかな 平和的で実に良いな。

「なに、構わんよ。よく来てくれたのう、葵君。始めに前回の会合での非礼をここに詫びさせてもらうぞい」

「ははは…。今後、あのようなことは勘弁してもらいたいですね」

「フオフオフオ もちろんじゃよ」

それはワシもゴメンじゃ…。と思ったのは秘密じゃ…。

Side out 学園長

やや時間は戻り…。

麻帆良女子中等学校屋上…。

Side エヴァンジェリン

フツ、フハハハハハハブフォ！げほっげほっげほっ！フハハハハハハハッ！！！！

げほっげほっ！……………見つけた。見つけたぞ！この学園に囚われてから外へ出ることが適わなぬこの身故に出会うことは無いと考えましたが…。思わぬところで、その機会を得られた！！

なぜこんなに私の気分が高揚しているのか？その理由、それは数

日前のことだ。たまたまタカミチと話していた時のことだった。その時の話しの内容は正直どうでもいいことだったので覚えていない。

……が、一つだけ覚えていることがある。そえは“とある人物の名前”だ。名前は“九重・葵”と言っ。

当時、私が山奥にある崖から転落しそうなところを助けられた、あの山でナギが言っていた男のこと。800年近くを生き長らえた不老の男……。タカミチから話しを聞くに魔力も実力も優秀。

どんな男なのか？どのような魔法を使うのか？従者は居るのか？

十数年もの間、学園に居ることしか出来ない私にはタカミチから当時の話しを聞くことしか出来ない。だが疑問の殆どを曖昧に誤魔化される。おそらく誰かに……いや、九重・葵本人に口止めされているのだろう。

しかし、だ……。今回のヤツは珍しく口を滑らせた！クククッ！

「あのタカミチが漏らしたことだ！おそらく真実だろう！フハーツ  
ハハハハツッ！！」

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに……」

隣から聞こえたのは私の従者の茶々丸。登校地獄の呪いで今年も中学生になる時に超・鈴音との不可侵の契約の時に渡された魔法と科学で出来た人形。所謂、“はいてく”で優秀なので今となってはそれなりに役に立つ従者だ。

料理も出来るし……。朝食を作る手間が無くなったのは正直、

嬉しい。私は朝が弱いんだ。吸血鬼だからな。

…んむ？私とて料理くらい出来るわ！戯けがっ！！

んっんんっ！ともかく！今は九重・葵のことだ！早速、ヤツの居るところへ行こうではないか！！フハーツハハハツハハハツ！！

「ククツ 行くぞ！茶々丸！！」

「イエス・マスター…。ですがよろしいのですか？今は補習授業中ですが」

「うるさいっ！十年以上も中、高、大と学生を繰り返しているんだぞ！？今更、補習授業など受けていられるか！！」

一体、何年間、学校を順繰りしていると思っっているんだ！！この14年の間、麻帆良のユルイ空気の中で暢気なガキ共と“お勉強”させられていたんだぞ！？今更、習うものなどないわ！

……教科書など既に暗記してしまっただよ。毎年、教科書が更新されても同じようなことが記されているんだから当然だろ？

故に！！私は授業をサボることにしたのだ！！普段はただ眠いからサボるんだがな！！まあサボり過ぎて夏休みの今も補修を受けなければならぬんだが……。

知ったことかっ！！！！

「了解しました。……それでどちらへ行かれるのですか？」

「どこだと？それは！………どこだ？」

しまった…。九重・葵が今日、訪れることばかりで肝心の“どこで会合するのか”ということ聞いていなかった。

「マスター………」

「ええいつ、何だ！？その目は！！やめろっ！可哀相な子を見るよ  
うな目で見えるなっ！！！」

仕方ないではないか！！長年待った情報が目の前にあったのだ！  
その大きな情報を前に他の小さな情報など大したモノではないだろ  
う！？だから私は悪くないんだ！！

「………心当たりなどは無いのですか？」

「む。心当たり、か？んー………」

心当たりと言われてもなあ……。私は九重・葵のことを何も知らな  
いに等しいのだが……。

いや、あのじじいと会合するならば会談場所はここに間違いはあ  
るまい！ならばここで張っていればヤツは確実に姿を現す！なんだ  
！まったく問題は無いではないか！！フハハハハハハハハハハツ！！！！

「マスター……。センサーに反応有り。学園関係者以外の人物がこの  
校舎へ向かっています」

「何？……どこだ！？」

「あちらです。学校前の階段です」

「……………アレ、か。何と言うか……………黒いな、全身が」

夏真つ只中なのにご苦勞なことだ。遠目にだが真紅のワイシャツに、上下黒のスーツ姿だった。夏の陽射しに輝く黒髪もあつて全身が真つ黒に見える。ここ日本の夏の暑さで、あの格好は厳しいと思うのだがな……………。

「……………検索結果の中にあの人物の情報はありません。間違いなく学園関係者では無いと推測できます。マスターの言われる人物なのは？」

「う、うむ……………。しかしな？本当にアレだと思うか？」

詳しいことはわからんが茶々丸の検索に引つ掛からないとうことは一般の“いんたあねつ”にも現代の魔法使いが利用する“まほネット”にも記録が無いということだ。そしてそのような人物が校舎を目指してくる。

普通なら不審者扱いして叩き出すところだが……………。

「予測進路から目標は真つ直ぐこの校舎を目指しています。また高畑先生から齎された身体的情報と統合した結果から推測しますに、ほぼ間違いないかと思われまます」

茶々丸は、こう言うしな……………。あの真つ黒いのが九重・葵でほぼ間違いないのだろう。となれば、だ……………。ヤツの魔力反応を追うのが確実かもしれんな。いや、ヤツは今までも逃げ切っているのだ。

ううむ…むむむ？魔法的な搜索や追跡ではなく科学的…茶々丸ならば、あるいは…。

「む。そ、そうか？…………ヤツの動きを追えるか？茶々丸」

「難しいですが追跡<sup>トレース</sup>出来ます。ですが…」

「良い。ある程度まで位置を特定できたならば、あとは私が魔力の反応を探ろう」

「イエス・マスター…」

ある程度、居所の範囲を絞れるならば問題無い。あとはヤツの魔力反応を探れば良いのだ。ここまで近付ければ問題無く出来る。同じ建物内に居るなら尚更だ。

「クククツ このチャンス逃がしはしない！行くぞ！」

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに…」

「フハーツハツハツハハハハハハハツ！！！」

待っている！！九重・葵！！今から、このエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルがお前のところへ行くぞ！！フハーツハツハツハハハハハハハツ！！！！

Side out エヴァンジェリン

学園長室…。

Side 葵

「ははは…。今後、あのようなことは勘弁してもらいたいですね」

「フオフオフオ もちろんじゃよ」

学園長の言葉を聞いても「信用できねえー…」と思ったのは俺と皆だけの秘密だ！！

「それで早速ですが、なぜ俺は呼ばれたのですか？」

「フオフオフオ セツカチじゃのう。…なに、なぜワシらに一言も無く麻帆良に魔法使いのお主が隠れていたか？ということじゃよ。理由を聞かせてくれんかね？」

あー…やっぱり、麻帆良所属の魔法使い達の島の真っ只中に異分子が秘密裏に潜伏していました。は警戒するか…。縄張りの中を他人に荒らされたらオモシロくないものねえ。俺ならトツ捕まえて排除するわな。

まあ俺の縄張りのなモノは大概が魔法球の「工房」内に凝縮されているから余程のことが無い限り荒らされようがないけどな！重要なモノは殆どがこの中にあるんだ！魔法球自体は某王の宝物庫的空間に放り込んでおけば問題無いし。

はあ…とにかく潜伏していた理由か。……………どうしよう？質問さ

れるであるうことは、予想はしていたけど回答を考えるのを忘れていた……。むう……。

ここで正直に「貴方が信用出来なかった……」と、言えたらどんなに楽だろう……。でも言えない！言えませんが！相互の関係をこれ以上拗らせるなんてしたくありません。

万が一、殺り合っても負けることは無いと思う。でも、戦闘なんて殺伐としたモノは俺も望んでない。というか面倒だ。誰が好き好んで戦うものか。殺し合いをしたいのなら他で殺れというんだ。

それはともかく、むー……。理由をどうしようか……。木乃香ちゃんの護衛だった話しはタカミチから聞いているだろうからそっち方面でソレらしいことを言って説明するか。あれ？それが一番、無難じゃね？

そうと決まればそうしよう！

「……理由ですか？……麻帆良に来たのは木乃香ちゃんの護衛だったので特に無いです。ただ、学園長へ何も言わずに潜伏していたのは詠春の願いを考慮して秘密裏に護衛するためでした」

「なぜワシにも秘密にしておったじゃ？タカミチ君は知っておったようじゃが？」

「当時は麻帆良のどこから情報が洩れるのか、わからなかったので秘密にしました。タカミチは……偶然だったのです。それに関してはドジを踏みました」

どこから情報が洩れるかわからないというのは本当だった。例え

ば、木乃香ちゃんには魔力を抑えるアイテムを渡していた。せつかくアイテムで魔法使いの目を誤魔化していたのに、そのことが洩れたら意味が無い。

当時、アイテムのことを知っているのは家族だけだった。護衛をお願いされたのは俺なんだから、知っているべき人選は俺の独断と偏見で決めさせてもらったんだ。

学園の人工電子精霊は制圧済みだったし…。監視と警備に問題無かったのも理由として大きいな。人手は足りてたし、学園長も孫娘には気を配っていたようだから問題を感じなかったのもある。

まあ学園都市内が平和なのもあって気が緩んでいたのだ…。明日菜のことを想定してなかった。まさか転校してきて間もないのに木乃香ちゃんが連れて来るとは…。あの時は思いもしなかった。そのことでタカミチにバレるしな……。

「ふむ…。少し納得はいかんが理解はしたぞい。一応、お咎めは無しにしよう…」

一応、ね…。何を言われるんだか…。イキナリ無理難題を吹っ掛けられるという事はないと思いたい。もし、そんなことされたらヘラス帝国へ行くか……。いや、それはそれで逃げるようで癪だな。

「ありがとうございます…。これで用件は終わりでしょうか？」

「うむ、終わりじゃよ。…おお！そうじゃ！少しいいかね？」

来たか…。疑い始めるとワザとらしいようにしか感じられない。ここからは正しく相手の思惑を見極める必要がある。ただ利用され

るだけだと、それは……何と言うか、ムカツと来るからね。

「……………何でしょうか？」

「フオフオフオ　なに、そんなに警戒することないわい。ただ少しお願いがあるんじゃないよ」

その“お願い”が信用出来ないんだって…。

「お願い、ですか？」

「うむ。タカミチ君に聞いたが葵君は無所属らしいのう？」

「はい。束縛されるのを嫌いましたね。昔は所属していたこともあったのですが今は無所属です。しかし、それが何か？」

まあそういう設定にしたからね。タカミチはちゃんと伝えた……はずだ。確認のためにチラツと学園長の右斜め後に立つタカミチを見た。わかり辛いが小さく頷かれた。うむ、間違いは無いようだ。

俺の設定はただの無所属フリーランスの魔法使い。言ってしまうえば傭兵みたいなものも兼任しているということだ。……ただ敢えて言うなら「所属は自分の組織ですファミリ」と言ってしまうたい。

変な勧誘とかされても困るんですよ。俺は誰の下にも付く気は無いのだからな。そんな俺のことを家族達は見えていたからだろう…。

無数に点在する無人機達や働き者の自動人形達オート・マータ。

アイリ、ファレノ、リチラを筆頭とした何でも出来る精魔奇兵の皆。

甘えん坊な電子精霊のアンと機動要塞その他機能を持つラミエルさん。

700と数十年…一番長い付き合いのミリー、マリー、ウーリの精霊3人娘

力強く頼りになるオリビエ、リビエラ、シルビアの悪魔3人娘。いつも見守ってくれているハオとユエの陽月姉妹…。

これら個性の強いこの子達が素直に言うことを聞くわけが無い。下手な勧誘とか、されても殺される…までは、いかなくても半殺しにされるのがオチだ。

その点、目の前の学園長は俺のことを無所属フリーランスと思い。何も知らないので正攻法という真っ向勝負をかけているようだ。奇しくもそれは正しい選択だった。俺さえ攻略してしまえば強大な戦力を手にしたも同然なのだから…。

「フオフオ…単刀直入に言わせてもらおうぞい。この学園を守るために力を貸してもらえんかね？」

直球で来たなあ。これは断り辛いものがある。…しかし、極東にあると言ってもここは魔法使いの一大拠点だ。それなりに人手は足りていると考えていたが…実はそうでもないのか？

「……………意味がわかりかねます。俺のような一魔法使いに頼らずとも良いのでは？」

「正直に話すと第一線で活躍出来る魔法使いは前大戦の時に、その殆どを減らしてしまい。今の麻帆良は慢性的な人手不足なんじゃよ」

「む……………だから俺を、と…?」

大戦の影響はここにもあったか……。大変だね……。さて、どうしようか？大きな組織に組するということはメリットも大きい。だが一つだけ懸念があるんだ。それは……………“書類仕事はあるのか？”ということだ。

帝国の時に散々に書類を裁いて大戦後の都市復興の時には書類に忙殺されかけたことのある俺だ。そこはどうしても知っておきたかった。要確認事項と言っても間違いではない。故に今ここでの返答するのは躊躇うものがあるんだよ……。

「そうじゃ。あと……婿殿が木乃香を託すほどの人じゃ。それだけでもワシは信用できると思うんじゃないよ」

「それは友人からの願い、それに仕事でしたから当然のことをしたまでです」

お願いの期間は長いけど一度くらいは聞いてもいいかな？なんて思ったからね。木乃香ちゃんを気に入っているのもあったけど、護衛を引き受けたのは、ただの気紛れだからな。趣味人の俺でもお仕事はキチンとやりますって。

「ならば尚更、信用できるというものじゃ！仕事はキチンとこなすと言っことじゃろ？」

「それは、そうですが…。あつ、いえ！俺には自分の店があります！そちらに割ける時間が…。」

昼間は喫茶店がある。他へ割ける時間なんて、それほど無い。それに趣味（に走った）の研究もある。あ、研究に関しては「工房」

を使えば時間は作れるのか…。

「良い、良い 仕事は主に夜間警備じゃ。広域指導員のようなものじゃ。それに何も他の魔法先生や魔法生徒達を同じようにはせん」

「広域指導員…夜間警備…ですか」

「お願いできんかな？」

お願いできんかな？つて、この学園長コウケン…。俺には昼間、喫茶店があると言っているのに夜にも働けと？……………このぬらりひよんは俺を過労死させる気なんじゃなかるうな？

それにサラツと言っていたけど聞き逃してないぞ？何気に広域指導員の仕事まで押し付けようとしてきやがった。ここで広域指導員の資格を持たせて、もしもの時は補充要員として使うつもりなんだ。

「……………ここで返答いたしかねます。店の方針などもありますから」  
「それもそうじゃな。…ならば返答はいつ頃に出来そうかのう？」

今が7月下旬に入った頃…。アン達が帰還するのが8月終わり頃…。やっぱりアン達も合流した後のほうが何かと都合がいい、か…。電子戦もアンが居ると居ないのでは段違いだしね。

ラミエルさんでもいいんだけど、今一步アンには及ばないんだ。やはり仕様の違いだろう。無人機の管制や艦の司令塔がメインのアン。単体戦力、機動要塞、個人用兵装であるラミエルさん。設計思想が軍と個でまるで違う。

うん…。やはりアン達の帰還を待つてから返答しよう。

「そうですね…。およそ一月後…でしょう。仕入れやなんや色々ありますから、大体それくらいでしょう」

「ふむ…わかった。色好い返事を期待したいものじゃな」

「ハハハ…断言出来かねますね」

完全に麻帆良へ所属するのではなくて傭兵として雇用してもらおうか…。

知っているか？夜間警備って魔法使いによるボランティアなんだ。  
立派な魔法使いを<sup>マジステル・マジ</sup>目指している人はご苦労様だよな。俺は無料奉仕で行なう夜間警備なんてゴメンだ。人並みに報酬が欲しい。

広域指導は…：気が向いた時に、物のついでにやっておけば文句は無いだろうよ。この学園長が考えるような返事が出来るかは別だが、な。

「フオフオフオ うむ、今日はここまでとするかのう？」

「はい。それでは学園長、また…」

ドンッ！…！

「…またお会いしましょう」と続くはずだったセリフは突然の来訪者によって遮られた。よく扉が壊れなかったものだ。かなりの衝撃を以って開けられたのにな。

開かれた扉の向こうに立つのは金髪の少女と長身の機械少女…。

何で、この子達がここに…？

「じじいっ！…！！九重・葵は、まだ居るかっ！？居るよなっ！？  
！？」

「ふお？」 「は？」 「俺？」

え？目的は俺か？… あれ？ちよつと待とうか。おかしくないか？俺は彼女達に名乗った覚えが無い。何だかんだで誤魔化してただ“店長”としか言っていないはずだ。誰かが情報を漏らした？誰が？

そこまで考えてハッ！と“あること”が考えついた。俺は確認のためにサツとその人物に鋭い視線を向けた。

とある人物：タカミチは俺の視線に気付くと不自然なほど顔を背けている。少しも視線を合わせようとしない…。冷や汗も流している。顔色も最悪だ。

俺は確信した…。

お前か…。お前なんだなっ？俺のことをエヴァちゃんに話したのはお前なんだな！？今まで奇跡的に隠し通せていたのに…！！これだから平和ボケした人間は嫌いなんだ！！だからと言って殺伐としたのも嫌いだけどな！！

ちくせう…。エヴァちゃんと関るのはマズイ気がする。死亡フラグ的な意味でね。

「ご会談の中、お邪魔します。…扉のことはマスターに代わり謝罪いたします」

茶々丸ちゃん…。君は礼儀正しいのに主人の幼女が全てをダメにしているよ…。

この後は一体どうなるんだろう？彼女から恨まれる覚えは無いんだが…。うん、無いはずだ。俺は何もしていない。

本当にどうしよう？

Side out 葵

## 第四十八話「再会談と笑う金髪幼女とお仕事と」(後書き)

はいっ！ということでは今回はここまで！

また襲撃された葵と学園長達、互いに友好関係を築けるのか…？  
今度の襲撃者は金髪幼女だった！葵達の反応は如何に！？

作者は、こう言ってますがそこまで盛り上がりがないと思うのですよ？  
ネタを展開出来る時期まで話しを進めたいっ…！

…と、思う今日この頃の作者です。

はうああーっ！葵くん痛いじゃないか…。あつ、いたっ、すみませ  
ん！

そこそこに作り込む気ではいますので今の発言は無しで、よろしく！

では！またですよ！

P S ・モンハンでは太刀が一番使い易いと思うんだ…。

第四十九話「睨み合い？と拉致？と襲撃者？」（前書き）

新年おめでとございます！

冬ですねえ…。作者は寒さに凍えそうです（ガクブル！ガクブル！）

年越し蕎麦などを食べつつ更新しました！

お蕎麦…温まります。いや、マジで。

皆さんも健康には気を付けて下さいね！

じゃ！続き！

## 第四十九話「睨み合い？と拉致？と襲撃者？」

学園長室……。

Side 葵

室内に居た、学園長とタカミチ、そして俺。そこに扉を蹴り飛ばして入室してきた2人の少女。真祖の吸血鬼であるエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルとその従者人形の絡繰・茶々丸だ。

誰一人として口を開かない。ある種、独特の緊張感が部屋を満たしていた。

「……………」

えっ？何なの？コレって何っ？何かのドッキリかっ？何で誰も喋らないの！？何が起こるのさ！？

っーか、タカミチ！お前さあ、何、エヴァちゃんに俺がここに来ることを教えているのさ？……………おい、コラ？何、目線逸らしてんだよ？こっち見るや？何で？何で話してんのかな？かな？かな？

はあ……………。まあもう終わったことだから怒らないけどさ。……………

……………次は、無いぞ？わかった？わかったな？タカミチ。……………よし。理解したようだな。

……………次の案件だ。

「「「.....」」」

：もう、いい加減、誰か喋ろう？ねえ？話そう？話し合えば分かり合えるはずだよ。ね？俺自身が、この沈黙に耐えられません…。何で睨み合ってるのさ…。

部屋に入ってきてからエヴァちゃんはジツと穴が開くんじやないかというほど俺の顔を見てくるし…茶々丸ちゃんは静かに従者よろしくエヴァちゃんの後ろに控えているし…学園長とタカミチは全然役に立たないし…俺は早く帰りたいし…。

俺、帰っていいかな……？帰っていいよね？よし、ここは静かに退散しよう。

「.....（ボソツ）学園長、俺はここで失礼します。それじゃ……」

「.....（ボソツ）ちょっ？葵君っ、それはあんまりじゃないかのうっ？」

「.....（ボソツ）ええいつ、放せっ。放しなさいっ。」

袖を掴むなっ！？服が伸びるだろうが！？俺は帰りたいたんだ！この不思議空間からオサラバしたいんだよ！袖を掴んで懇願して子供や女の子がやるなら待ってもいいかなって考えるよ？でも学園長じやうだとなあ。……萎えるわあ。

「.....（ボソツ）エヴァンジェリンは葵君に用事があるんじゃないっ。君が責任を持つべきじゃろうっ？」

「……………（ボソツ）ちょっと？知りませんよっ。…学園長の管理下にあるはずでしょうっ？責任と言っなら学園長にこそあるはずですよっ」

あつ、しまった…。今のセリフは学園長とエヴァちゃんの事情を俺が知っているみたいじゃないか？まあ今はお互いにそれどころじゃないからスルーされているみたいだけど…。気にしない、気にしない。

「……………（ボソツ）それは屁理屈というものじゃっ。葵君の名前を呼んでおったではないかっ」

「……………（ボソツ）だからっ…それは…。とにかく俺は帰りますからねっ。あとはよろしくお願いしますよっ？」

「……………（ボソツ）ばっ、ちょっと、待つ、マジでっ？」

「……………（ボソツ）マジですよっ」

小声で怒鳴るなんて器用なマネをして話し合ったが学園長は最後までゴネた。ごめん、学園長…。俺は緊張感漂う空気に耐えられないんだ。基本的にお気楽人生を指針にしているから重いには長時間耐えられないんだ。

立ち上がってエヴァちゃん達が居る入り口を目指し駆け出した。少し行儀悪かったかもしれない…。でも一刻も早く逃れたかったんだ！なんか厄介事の気がするしな！

「それじゃ皆さん。お取り込み中のようなので……………俺は帰りますっ！じゃっ！…！」

「……待て」

「ぐっ!？」

…なのに廊下へ出る直前にエヴァちゃんの小さな一言と同時に俺の身体に巻き付く糸で動きを止められてしまった。この対応で俺は厄介事だと確信した。もう必死だ。必死に糸を振り払おうと手足をバタつかせる。

「…待て」

「このっ！糸、なんか、でっ!!」

エヴァちゃんも何を考えているのか更に糸を俺の身体に巻き付けてきた。俺が彼女に何をしようのだろうか？確かにちよっつと監視のようなことをした時があるけど俺のことまでは知らないはずだ…。

恨みを買うこともしたことも無い。直接、会ったのは夜桜舞う、この学園だった。間接的にも監視だけで彼女の不利益になることはしたことはない。マジでなぜ、こうなるの？

「茶々丸…」

「…イエス・マスター。申し訳ありません、九重様。マスターの命により拘束させていただきました」

俺が暴れるのをやめないと判断してエヴァちゃんは従者の茶々丸ちゃんに俺の拘束を命じた。

あ、ダメだつて！背中に固い二つの膨らみがあたつてゐるって！？  
女の子でしょ！！茶々丸ちゃんも節度を持って行動しよう！？簡単に男に抱きついたらダメだつて！

ん…？茶々丸ちゃんの髪からいい香りが…？

………つて！！！！お兄さん、ちょっとラッキーとか考えちゃった  
じゃないか！？！？何がいい香りだ！？俺はバカか！！そんな甘い  
香りは家族で嗅ぎ慣れているだろ！？何ちよつとドキツて、なつて  
んだよ！？

マ、マズイぞ…。天国と地獄との板バサミだ！？このままでは拘束は厳しくなる一方だ！何とかして脱出しなければ！！主に俺の精神安定的な意味で！！！！

「ノ、ノーツ！ち、茶々丸ちゃんっ！放してっ？お願いだからっ！」

「…すみません、九重様。マスターの命令は絶対ですので」

あー…やっぱり、そうなのか…。戦える侍従人形をコンセプトとした試作ガイノイドの茶々丸ちゃんはマスターであるエヴァちゃんに従うようだ。

むう…アンが居れば強制ハックして一時的に機能停止させることも出来る。でも今は高き天上の月に居る。彼女達の仕事を、こんなことで邪魔するのは気が引けるといふものだ。

それに…茶々丸ちゃん相手にそんな物騒なことしたくない。原作でも優しい子というイメージがあつたけど現実に会ってますますい

い子だと思った。この子、本当にすごくいい子なんだ。こんなに心優しい子にそんなことしたくない。

ならばエヴァちゃんに掛け合ってみようと思う！逃げるようなことしないで話し合えば……いけるか？ま、まあとにかく話し掛けてみよう。

「エ、エヴァ、ちゃん……？」

「じじい……。この男は連れて行く。……………イイナ？」

「あれっ！？俺、無視ですかッ！？俺の意思はどこにあるのかなっ！？」

無視！？アツサリと無視ですか！？エヴァちゃんちよつと冷たくないかな！？喫茶店ではシレッとしながらも穏やかな雰囲気を纏っていたではないか！？……………俺の正体を知らなかったからかもしれないけどさ！

何だ？エヴァちゃんは俺が正体を黙っていたことが気に入らないのか？不機嫌なのか！？だから俺の意思を無視したのか！？ちくせう！何とかいて簀巻き状態の糸と茶々丸ちゃんのガツチリホールドを外せないものかッ……！？

「う、うむ……。いいぞい。ただ、のう……、失礼の無いようにしてほしいのじゃが……？」

「あつ！てめっ！？この学園長ッ！！お前、裏切ったな！？俺の気持ち<sup>ココロ</sup>を裏切ったなッ！？」

学園長ーッ!?お前、アレだろ!?厄介事を俺に押し付ける気なんだな!?確かにエヴァちゃんは俺に用があるようだ!!それは認めよう!!だけど彼女の管理担当者はお前の役割だろ!!?役目、放棄してんじゃないよ!!

あつ!?だから何、お茶飲んでんの!?何で一仕事終えたみたい  
にいい顔しながらホッとしてんだよ!?まだ終わってない!終わつ  
とらんぞおおおお!!

「わかつている。…行くぞ!茶々丸!」

あれれッ!?!?!もう移動ですか!?!もう少しゆっくりしようよ  
!!まだ拘束を解いてないから困るんだよ!!だから話しを聞けつ  
て!!金髪幼「誰が幼女かつ!!」女が…てッ!?俺の思考に割  
り込むんじゃないよ!!

「…学園長先生、高畑先生。お騒がせしました。それでは失礼いた  
します」

「ちよっ!?茶々丸ちゃんって想像以上に力が強い!?コレがギヤ  
グ補正というものなのか!?あれ?ちよっと?マジで…外れない  
ッ!?!?!」

マジでマズイですか!?!んっ!!んーっ!!あ、あれ?コレどう  
いうこと!?!マジで外れないよ!?!うぬうう!!ちくせう!系は切  
れてきてる!でも茶々丸ちゃんの拘束が解けない!!

こんなに細っこい腕をしているのに茶々丸ちゃんの拘束を外せな  
い!!何で外せない!?まさか…!?これがギヤグ補正!?!むう  
う!!初体験だが恐るべしだな!!一度コレ系統に捕まると逃れる

術は無いと言うっ!!

でも!抵抗はやめない!!お家で家族が待っているからな!!...  
...とは言え状況は絶望的だ...。こうして考えている今も拘束を徐々  
にはあるが解いている。しかし!ネックは、やはり茶々丸ちゃんの  
のガッチリホールドだった!!

茶々丸ちゃんって体温とかは冷たいと思っていただけで意外と暖か  
いんだ。ホカホカです。.....なんて考えてないからな!?考えて  
ないんだからな!?

こほん!必死になって拘束を解こうと努力しました!でもね?そ  
れでも茶々丸ちゃんを梃子摺らせることしか出来ないでいるようだ。  
確実にエヴァちゃんのほうへ近づいているんだ。ここで抵抗をやめ  
たら一気に拉致られそうなほどだった..。

「茶々丸ツ!何をしている!?!」

「...ただいま参ります」

「ノツ!?ノーツ!!のおおツ!?Nooツ!!脳おおツ!?!」

何イ!?拘束力が...!腕力が...!増大した...だとお!?マズイ!  
このままではエヴァちゃんのテリトリーへ拉致られる!!これは万  
が一のために応援が必要かもしれない!!ラミエルさん!救援を!  
救援を呼んで!!このままだと俺、死んじゃうかも!?

「うるさいっ！……！」

「ごめんなさい…。」

騒いでいたらエヴァちゃんに怒られた…。悪いのは俺か？いや、違うはずだ！俺は誘拐されそうなんだから抵抗して当然のはずだ！！

それなのにエヴァちゃんの背中から立ち上る不機嫌オーラが怖くて逆らえません…。みんな…早く来て…グスツ。

Side out 葵

エヴァハウス…。

Side エヴァンジェリン

九重・葵が話しも聞かずに抵抗したから、あの場で拘束、連行してしまった。ハッキリ言っつて勢いだけの行動だったから私の家へ連れて来た意味は無い。

敢えて理由を言えば誰にも邪魔されずに話せるということところか？呪いでこの地に縛られ魔力までもが封じられたとしても、この家や周辺は私のテリトリーだ。襲撃する度胸のあるヤツは少なくともこの学園には居ない。

しかい、どうしたのか…。連れて来たはいいが何から話したのか…。会ったら色々聞きたいことを考えていた。それなのに、いざ会ってみれば何を聞いていいか思いつからん。本当にどうするか…。

苦し紛れに時計を見てみれば九重・葵を連れて来てから20分も経っていた。その事実を確認すると心の中だけで苦笑した。私は何をしているのやら…。

「あの一…?」

「あ、ああ、すまん。少し考え事だ」

ふむ…。茶々丸の入れた紅茶や茶菓子があるとしても長時間の沈黙は居辛いものがあるか…。真祖の吸血鬼になってはじめて自分で連れて来た客人だ。これはキチンと持て成さなければならん。

「はあ…?それで俺は何で拉致られたのかな?」

「人聞きの悪いことを言うな。これは……………」

「……………これは?」

マズイな…。思い返してみれば、これでは私が九重・葵を無理矢理拉致したように見えるではないか…。本来はもっとスマートに事を運ぶ手筈だったのだがコイツが変な抵抗をするから予定が狂ってしまった。

…。

……。

……。

まあやってしまったものは仕方が無い。ともかく、この場は尤もらしい理由を考えるとするか…。えー…？んー…？んっ？

「……あー…招く…そう！招待したのだ！うむ…！」

「今、“そう！”って言ったよな！？“そう！”って…！思い付きじゃないか！？何“うむ…！”って満足そうに自分だけ納得してんのさ…？」

「う、うるさいっ！私が招待と言ったら招待なんだっ…！反論も苦情も認めんっ…！」

先にも挙げたように、これは事実だ！本当なら同意の下で私の家へ招待するはずだった…。それなのにコイツは逃げるわ！暴れるわ！話を聞かないわ！一つも私の思い通りにならない…！我が強いのか、はたまた、ただの我侭なのか…。

もう、こうなってしまったら無理矢理話しをする態勢に持つていくしかないではないか！？私が手綱を握らなければ出来る話しも出来なくなってしまう。

「何！その独裁者は！？エヴァちゃんはジャ アンか何かですかね！？」

「ジャ、ジャイ…？何だと？」

「いや、気にするな。こちらのことだ…」

ジャイ…なんとかとは何かは知らないが独裁的な何かを揶揄した表現なのは予想できる。九重・葵は気にするなと言う。だが特に意味は無いだろう。しかし…、ふむ、九重・葵は今の私が独裁者のように見えるのだろうか？

………違うな。ただの勢いのように見えるが違う。身振り手振りで道化を演じているがコイツの目が違う。これらの行動は話しの流れを無理矢理にでも掴み主導権を握ろうとしているのだろう。

まあ私がコイツ…九重・葵の正体を知った状況で会うのは初めてのことだ。

なぜ今まで気付かなかったのか？喫茶店に通っていてコイツの名前を気にならなかったのか？会うたびに名前を聞き出そうと考えていたのに実際に喫茶店へ行くと、いつの間にか、そのことが頭の中から抜けていた。

今、考えてみるとおかしいものだな。気が付いてみれば簡単なことだ。認識障害と意識誘導の術が使われていたのだろう。喫茶店に近づけば近づくほど術式は深く強く作用する。違和感を極限まで誤魔化せる方法だ。

意識していなければ、まず回避は不可能。その癖、気が付いてしまえば解呪する必要も無く、術は自然と解ける。まったく…イヤらしい方法だ。この私にも気付かせない術式構成とは、な。

「…それで？何で俺を招待（拉致）なんかしたのさ？」

「う、うむ。それは、だな…」

急にマジメになったコイツを見て確信した…。今、ここで主導権を握られれば今後も尾を引くことになりそうだと…。だからこそ私は、表面上は余裕を持っているように見せる。だが内心では冷や汗を掻く自分が居る。

まったく…九重・葵の“何”が私を緊張させるのか、それはわからない。しかし、この直感に魔女狩りの時代や幾多の修羅場で助けられたのだ。警戒するのは悪いことではないだろうと。

そんな警戒心を持ち、私は九重・葵と対面して話し合いを始めようとしたのに…コイツは…。

「あ、茶々丸ちゃん。紅茶のお代わりお願いね？」

「はい。…どうぞ、九重様。熱いのでお気を付けください」

「茶々丸ちゃん…。硬い！硬いよっ！せっかく可愛いのに！勿体無い！もっと、こう…ニコツてしてみ？ね？」

「か、可愛い…？ニ、ニコツ…？こ、こう…でしょうか？」

「むう…。まだ表情が硬いけど…。最初よりもいいね！可愛い女の子は笑顔のほぅが何かと魅力的だから茶々丸ちゃんも笑顔でいようね？」

「可愛い…。笑顔…。了解しました…。今後、鋭意努力いたします

「…」

…など、と茶々丸のマスターである私の目の前で口説き始めたのだ！！何だ！コイツは！？これも演技なのか！？だとしたらどこまで道化を演じれば気が済むのだ！？いや！！それはともかく今はコ・イ・ツ・を……！！

「うんうん やっぱり可愛い子はい…うぼんぬっ！？」

殴るツツツ！！！！！！……のは今の私では身体的に力不足だから、この前テレビでやってたプロレス技“水平ドロップキック”をしてやった！！！！ふむ…なかなかの威力だったな！！

「キ・サ・マ・は！！！何を主人の前で堂々と従者を口説いておるか！！！！」

げしげし。ふみふみ。むにむに。にゃーにゃー。

「い、いやっ…口説、いてっ…ない…。正直に…思ったこと、をっ…言った…だけっ」

「尚更、悪いわッ！！天然で口説くなど…ナギのようではないか」

ナギのヤツも多くの女性（ファン）を惹き付けていたな。本人はバカだったから自覚無し天然で惹き付けていたようだ。コイツもその類か？自覚の無いところなど、ソックリではないか…。

「ちよっ！？それは聞き捨てならない！！俺はあんな天然ジゴロと

一緒にされたくない！！認識の訂正を断固として要求するぞ！！」

「うるさいっ！！黙れっ！！私が、そう決めたのだっ！！訂正は認めん！！だいたい…見ろ！！うちの従者を！！」

「は！？茶々丸ちゃん？何、言ってんのかな！？彼女が、どうか…し、たあ？」

貴様は背中を向けていたから気付かなかったのかもしれないが私からは茶々丸がボーっと考える姿が丸見えなんだぞ！？貴様と話してこうなっただ！何とかしろーッ！！

「か、可愛い…。いえ…でも、魅力的…？そんな…。…九重様。  
…私は一体？」

「あ、あれ？ち、茶々丸ちゃん？あれ？えー…」

「茶々丸は生まれて間もないんだ！色々と免疫が無いんだぞ！？どうしてくれるんだ！？あれでは色ポケロボではないか！？」

何が「あれ？」だ！！そうじゃないだろう！？どう責任を取ってくれるんだ！？このまま茶々丸が変な方向へ成長したら私が困るではないか！？

茶々丸と人形契約ドールをしているとは言えコイツは私にとって一つの可能性なんだ！それは“人形に自由意志はあるのか？”という可能性…。絶対服従の人形が自我を持ち自由意志によって、時にはマスターの意思に反して活動する。

一つの生命としての可能性。これを魔法技術だけで実現するは無理。かと言って科学技術だけでも柔軟な思考に欠けて無理…。

ならばどうすればいいか？

答えは簡単だ。“科学と魔法”、この二つを掛け合わせて互いの短所を埋め補う。そして互いの長所を可能な限り阻害しないように混合し“可能性”の更なる飛躍を目指す。

この構想を思い付いた切欠は超・鈴音だったがな。

だからこそ私は茶々丸作成時に超・鈴音へ魔法技術を提供したのだ。科学は理解の外だからな。私では、どうにもならんし、出来んのだ。魔法技術だけでは無理と考えていた当時の私に超・鈴音の話は渡りに船だった。

そんな思いをして茶々丸に可能性を見出しているのに…。コイツのせいで！少し変な方向へ成長しそうで不安ではないか！？何か知らんが茶々丸はジジツ、ジジツと何かを検索しているようだし…。

「俺のせいだよ!？」

「お前以外に誰が居ると言うんだ!？」

「居るじゃん！エヴァちゃんが居るじゃん！！」

「た、戯けがーッ！！自分の従者を口説くか！！バカ者がッ！！」

コイツは何をトチ狂ったことを言っておるのだ！？ここまで私をバカにするとは……ん？まさか、わざとか？わざとなのか？おの、れッ……！？そこまでして主導権を握りたいと言うつもりなのか！？

私のこの姿（幼女）にも惑わされず、主導権争いの手を緩めることをしないと……。なかなか用心深く狡猾なヤツだ。油断していると私すら飲み込まれかねないか。喫茶店でのほんとは店長をしているのがウソに思えてくる……。

コイツの行動は道化なのに目だけは……別物だ。真剣に物事を観察する。そんな冷たくも熱くもない、静かな清流を髣髴させるような目をしている。万が一、コイツと敵対した場合、この目に睨まれると考えただけでゾツとする……。

「バカって言うほうがバカなんですう！！やーい！バーカッ、バーカッ！」

「ぐぬぬぬつ！！ああ言えばこう言いおってっ……！！」

「ふふんっ　　まだまだだね。エ・ヴァ・ちゃん・？んふふんっ」

ブチッ！！

私の中で何かが“キレタ”音がした…。

わかっている…。コイツは私を怒らせて動揺を誘いこの場で主導権を握ろうとしていると、な。わかっているんだ。……………だがな？物事には順序というものもあれば最低限の礼儀も必要だと私は今はじめて考えるのだ…。

故に…私はコイツと話し合わなければならぬと思うのだ…。“私なりのやり方”で、なあ…。フッフ、フッフッフッフ！

「……………いい度胸だ。穩便に話し合おうとしたが無理のようだなあ…ククツ！ククククツ…」

「あ、あれ？も、もう堪忍袋の緒が…切れた！？短いよ！！短過ぎるよ！？600年も生きているんなら自制心をもっと持てよな！！まったく！コレだからお嬢ちゃんはよお…。」

切れた…？はて何のことだかわからんなあ？クククツ！それに歳のことを貴様に言われたくないわ！！200年近くも上の癖に何を言うか！？それと！！お嬢ちゃん言うな！！

「貴様ほどは生きておらんよ！！茶々丸ツ！！」

「いけません、そんな…。ああ、九重様あ…。ハツ！？はいつ、マスタああつ！？」

茶々丸…。まさか、お前、今の今まで何かを検索していて“何か”を想像していたのか？……………まあ仕事が出来れば今のところ問題は無いが…。ふむ……………一度、八力と共にメンテを頼むか。……………出来れば今日のことを修正してもらおう。

「地下倉庫にある「別荘」を出してこい…。そこでこのバカを調き…もとい教育してくれる！」

学園内では魔力を封じられている私だが「別荘」の中ならば全盛期の力を振るうことが出来る。そこで何かと無礼なコイツ…九重・葵を教育してやらねばならんだろう。クククツ！

「イエス、マスター」

「だから俺の意思は…ツ!?」

貴様に決定権など…無いつ…!!ここまでバカにされたのだ。クククツ!!それ相応の礼をしてやらねばなるまいツ…!!フハハツ!ハハハハハハツ!!

ドツガアアンツツツ!!…!!…!!

「クツ!なつ、何だつ!?」

「マスター…!」

九重・葵の襟首を掴み魔法球のある地下へ引き摺りながら連れて行こうとした。だが、それは突然の客によって中断されてしまった。

吹き飛ばされたドアの粉塵で“客”の詳細はわからない…。だが、シルエツトから入ってきたのは女のような影は2つある。どちらも濃厚な魔力を纏い溢れんばかりの闘気が幻視出来そうだった。

茶々丸は私と招かざる客を遮るようにして間に入った。うむ、従

者がマスターを守るのは当然だな。しかし……この客達を相手取るには経験の蓄積が少ない今の茶々丸では些か分が悪い。……チャチヤゼロも居ればやれるだろうか？

「……なんだ、貴様ら？ここを私の家と知った上で襲撃して来たのだろうか……」

「見つけた……」

何……？見つけた、だと？

Side out エヴァンジェリン

第四十九話「睨み合い?と拉致?と襲撃者?と」(後書き)

おかしい…。そこそこ強いはずの葵がエヴァ達に拉致られてしまった。

これが聞くとところのギャグ補正というものなのか…。

原作開始まで約一年半くらいです。

いつまで経っても始まらない!?!?どうなっているんだ!?!?

ふう……まあもしかしたらただ数話中に一気に時間が飛ぶかもしれない。

アクマデ”かもしれない”だけどね!

それでは! B i s b a l d ! !

第五十話「救援と歓談と主従の仲と」(前書き)

ビバツ！エヴァハウスッ！！

…一度は行って見たくね？と思った鉄 桜です。

お蔭様でお気に入り登録数1,000件超えました！！  
読者の皆さん、ほんっとくに！ありがとうございます！

では続き！

## 第五十話「救援と歓談と主従の仲と」

エヴァハウス…。

Side 葵

エヴァちゃん家の扉が蹴破られた時の埃で侵入してきた姿は見えない。それでも埃に浮かんだシルエットから女性。人数は2人だった。そして2人が部屋に入った途端に爆発するようにして激しい闘気が侵入者から発せられる。

危険と判断した茶々丸ちゃんはエヴァちゃんの前に立ち塞がる。状況は一触即発…。どちらかが行動を起すものなら相応の被害が出るだろう。

「……なんだ、貴様ら？ここを私の家と知った上で襲撃して来たのだろうな…」

「見つけた…」

「何……？」

煙の向こうから聞こえてきた声。エヴァちゃんには心当たりが無いみたいだ。……って、あ？何だか聞き覚え、が？それに今、気が付いたけどこの闘気の気配は、ええと……、ああ、これは！

「我が君……！ご無事ですか！？」

「うおおっ!?!」

煙の中から駆け出してきたのはハオとユエだった。2人は俺を左右から抱き付くと締めるように腕を身体に回してきた。うん…心配掛けたんだなと感じています。それはもうヒシヒシと…。

ごめん…正直に言うつもりとギリギリと身体が軋むから腕の力を緩めてほしいです。でも…ラミエルさんに頼んで、皆に救援信号を送ったのは俺だからね。心配させてしまったんだなと思うと甘んじて受けるというものなんですよ。

たとえば背骨がぐりゅんぐりゅん警報を発していたとしても…ね。

いや、うそです。ごめんなさい。痛いので出来れば放してほしいです。あ、あああ、折れる、折れる!? サバ折りされる!? 味方にヤラれるってシャレになってないって!? ギリギリ耐えているけどね!?! はははっはははっ!?!!

あ……。

痛ッ!?! イタタタタタタタッ!?! ほおわったーッ!?!? 背骨が! 骨髄が!?! あっ! ダメっ! ダメだっ!?! 出る! それ以上したら出ちゃっから!?!

「ああ。…喫茶店に居た奴らだったか? 貴様の従者か?」

「えっ!?! ああ! うん! この子達、はっ…イタッ!?!」

「ハッ!?! 我が君! お下がりにください!?! 相手は誘拐犯!?! 危険で

す！！」

目の前の金髪幼女が「誰が誘拐犯だ！？誰が！？」と抗議しているがハ才達からしたら立派な誘拐にしか見えなかったんだろうね。冗談半分で救援信号も出してしまったからお互いに誤解の度合いはスゴイことになっていることだろう。

……………これってマズイ状況というものではなかるうか？仲介に入らないと殲滅戦が始まったりしない？物理的なものではなくて描写的な感じでさ…。これは俺の精神にあまりよろしくない。故に止めないとならん……………のだけど。

「貴様…。よくも我が君に手を出したな…！！」

「戯けッ！！“まだ”何もしとらんわ！！」

「え！？“まだ”って言った！？俺は何をされかけたの！？」

「貴様は黙っているッ！さもないと…“千切る”ぞ！？」

「どこをッ！？」

「「させません！！我が君の“貞操”は絶対に死守いたします！！」「契らせて”なるものですか！！”」」

いや、2人とも？それは違う気がするよ…。 “まだ”何もしていないと言うエヴァちゃんも気になるし遠慮したいけど、ハ才達の想像（妄想？）していることは違うと思いたい。俺の精神力がガンガン削られていくよ…。

それに“チギラレル”も混乱もあつて勘違いしていそうだ。意味合いが違つように感じる。いや…それよりもエヴァちゃんはどこをチギル気だったのかな!? ……アレか!? シンボル的な何かなのか!??

勘弁してくれ…。

……こんな状況をどうやってたら止められるんだ? と言うか…なぜに、どちらを止めても俺にトバッチリが来そうな気がするんだろう? 片方には千切られそうだし…。

「ウガァーッッ!! 貴様らは私を何だと思つとるんだ!?’」

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに…」

当然、ハオ達に勘違いされたエヴァちゃんは何かもう色々と否定するために叫びだす。でも……そんな顔に顔を真っ赤に否定するのは何か疚しいことを考えていたからなのでしょうか? ちょっと不安に思つたのは秘密。いいね?

エヴァちゃんは何を考えていたのか知らないけど、できることなら遠慮したい。俺はイエスろりーたノータッチの変態紳士ではないのだから…。確かにエヴァちゃんは美少…美少女だけど身体的に見ても可愛い娘くらいにしか思えない。

「このっ! ポケロボがっ!! 巻いてやる! これでもかと言うほど巻いてやるーッ!!」

「あ、ああ…! いけませんっ…! マスタあ…そんなに巻かれてはっ

…! んぁっ…!」

茶々丸ちゃん…。君はどんな時でもポジティブなんだな…。ネジを巻いているエヴァちゃんも何だか楽しそうだし…。エヴァちゃんの従者になって一年も経ってないはずだけど基本的に、この2人は仲がいいよね。

エヴァちゃんも何だかんだと言いつつ面倒見がいいほうだしなあ。むう…。エヴァちゃんは子煩悩なのだろうか？多分だけど彼女は突き放すけど完全には目を離さないで影から見守るタイプだと見たんだ。

ああ、エヴァちゃんと茶々丸ちゃんのじゃれ合いを見ていると和むわあ。このまま何事も無く話しが流れて険悪なムードが有耶無耶にならないかね？…ていうか、なってください。俺のマインドポイントは既に底辺ですから…。

そんな精神的ダメージを再認識していたらハオから秘匿念話があった。何ね？一体…。

【…我が君、今の内に脱出したしましょう。外では完全装備した三課の者が6チームで、この建物を包囲中。更に後詰としてイキシア？が一個中隊規模で待機中です。もちろん、アイリ達も駆けつけておりますよ…】

【…ちょっと待とうか？何？その物々しい対応は？確かにラミエルさんに救援信号を発信するようにお願いしたけど、ここまでする必要は無いんじゃないかな？…】

6チームということは1チーム4人からなるからひの、ふの、み…24人？三課が全10チームだから…半数以上を投入したの！？少数相手に戦力が過剰ではなかるうか！？ふう、これは…

戦争でもする気だったのか？

イキシア？は場所が場所だから一個中隊だけなのも納得…できないけど、ここでは納得する！ここは森の中とは言っても市街地に近いし学園側に感付かれる危険もあるから全機は投入しなかったのだと考えられる。それでも一個中隊投入しているけど…。

これって一応、救出…というか応援部隊だよな？何で展開速度を重視した即応装備ではなくて戦闘を重視した完全装備なんだよ…。もしかして何かをやらかす気満々だったのかな！？こんな学園側の真っ只中で！？

【…いえ、吾らは必要無いと言ったのです。ですがアイリ達が確実な救出を、と張り切りまして。…：…：こうなりしました…】

【…この過剰な戦力にしたのは、やっぱり？…】

【…おそらくは、我が君の考えておられるとおりかと思われま…】

アイリ…。前回の襲撃騒ぎが尾を引いていたのか。落ち着いたと思っていたんだけど表面上だけで内面は…心の底にはチリチリとした黒い炎が残っていたのかな。むう…：…：忠誠心が高いのも考え物かもしれない。

はあ…アイリ達の執念がハンパ無いや。…：…：…：そんなところも大好きだけどね！！状況が状況なら惚れ直しそうです！！いや、マジで…。

ただまあ…：…：そうでなければ、この短時間でこれほどの部隊を用意できるわけが無い。執念とは時に不可能を可能にするほどの力を発

揮するから恐ろしい。それが集団となると手が付けられないよ。…  
くくくっ！もう仕方ないなあ。

ファミリ  
組織の部隊運用時では基本的に、魔法系では認識阻害、意識誘導、  
幻影措置など…。そして科学系には毎度お馴染みの熱光学迷彩、  
万が一の攪乱用デコイを配置、通信妨害など…。

これらの隠蔽はしているとしても発覚する時は発覚する。無論、  
そんなことが無いように全部隊員は最善を尽くしている。そのくら  
いしないと色々と発達した旧世界の現代では…つまり、ここ百年と  
少しほどは活動し難いんだ。

俺みたいな不老の存在は、な…。

【…はあ。あー…アイリ？聞こえる？現状は待機だ、待機。アイリ  
達は全攻撃態勢の解除。ここは我慢してくれ…】

何にせよ、だ。幸いにもエヴァちゃんには敵意が見られない。現  
状、戦闘は回避の方向で話しは進めることが出来そうだ。ここで武  
力を以って威圧するとなれば…：彼女が黙ってはいないだろう。受  
けた屈辱は倍以上にして返す主義のようだな。

【…し、しかしっ、それはっ…】

【…そ、そうですわっ。あまりにも危険っ…】

【…アイリ、リチラ、大丈夫（だと思う…）だから。お願い…】

【…了解、いたし、ました。ご武運を、閣下…】

【…何かありましたら何時でもお呼びくださいね？葵様の御為ならば、このリチラ、たとえ火の中、水の中で…】

ここで皆が突入してきたらまとまる話しもまとまらなくなる。いや、心配してくれているのは嬉しいよ？これは本当。でも、家族への被害が出ないよう、よりリスクの少ない方法を取りたい俺としては、撤収は未だしも待機してほしい。

まあ俺からケンカを売らない限り大丈夫だろう。エヴァちゃんが癪癢を起さなければ問題が起きる可能性は限りなく低いんだ。ここでアイリとリチラは釘をさしておかないと突入しそうだしね。

でも、なぜだろう？釘をさしても尚消えないこの不安は…。保険をかけるか…。

【…うん、ありがとう。それじゃ。…ファレノ、あとはよろしく…】

【…了解なの。…できるだけ、がんばるの！…】

【……………ごめん、よろしく…】

本当にゴメン…。アイリ達を抑えるのは骨が折れるかもしれない。ファレノ、マジでお願いします。アイリがここまでキレてたなんてなあ。リチラはわかるけど…こっちは予想外だった。俺もこんな時期のこんなところで小戦争なんかしたくないんだよ…。

【…ハ才達は…】

【…危険が少ないのはわかりました。ですがっ！吾らは残ります！  
よろしいですね！？…】

【…姉上の言うとおりです！私もそれだけは譲れませぬ！このよう  
な幼女と一緒になどさせますか！…】

ハ才達はどうか、と聞こうとしただけなんだけど…くくく  
っ！そうだな…。そうだった！そう、聞くまでもなかった！彼女達  
は己に与えられた役割を、存在意義を果たすためにあるんだった。

ユエは台詞後半に本音が洩れているようだったけど心配から出て  
くる想いだから俺は華麗にスルーを決め込むことにした！……………地  
雷踏みたくないのよ。うん…。

【…うん。ハ才とユエ、よろしく。それからミリー達もお願い…】

【【…ハッ！…】】【…はあい…】】【…あい…】】【…御意！…】

いつものように呼びかけたら当たり前のようにどこからともなく  
ミリー達も傍に現れた。顕現していないから不可視化しているけど  
な。気配でエヴァちゃんにバレていないかが心配だが…茶々丸ち  
ゃんとじゃれ合っていて気付いていないようだ。

改めて思うんだけど単体で力を行使するには莫大な魔力が必要と  
はいえ精霊とか反則だと思っただ…。

ミリー達みたいに魔力を大量に貯蓄していれば力の行使に問題は無いけど通常の精霊だと燃費が悪いのな…。無茶な方法だったけどファレノのような元精霊は精魔奇兵化して緩和することができたんだ。

高い能力と存在としての安定性。苦労しました…。ただね？維持費として食事などの生物的行動が必要になったから出費がデカイ！…それと霊体化ができなくなった。

精霊は悪魔と違い、実体と霊体を切り替えられるとかマジ反則だつて。言ってみれば天然のステルスだよ？ 見えない敵つて、思った以上に厄介なんだ。まあその分、身内だと心強いんだよ。ミリー達には、いつもお世話になっています

閑話休題…。

それでまあ…俺達のほうで話しが付いた時にはエヴァちゃん達も落ち着いたようで、今はテーブルを挟んで向かい合うように座っているんだ。お互いの背後には護衛、または従者のように八才達や茶々丸ちゃんが、何が起きてもいいように立っている。

「それで俺はなぜ、“ご招待” いただけたのかな？」

「……………やっと、マトモに話せるのか」

マジメモード、で話しを始めたのに返答がそれかよ…。

「……いや、もうそれはいいから。まあ悪かったよ。俺もフザケ過ぎた。ともかく理由を聞かせてくれ」

「あ、ああ…すまん。少し疲れて、な。それで理由は、だな……」

それから、やっと話しを進めることができた。いや、わかっているよ？俺がいろいろして話しを引つ掻き回したんだ。でも仕方ないだろ？いきなり拉致られたんだからな。味方と合流するまで時間を稼がないとならなかったんだ。

まあ来たのは完全装備した重武装の6チームに人型機動兵器一個中隊という過剰戦力だったけどね…。

封印状態のエヴァちゃん相手ならハオとユエ、それに武装隊員を1チーム送ってくれば、あとは俺とラミエルさんで遊び心を持っても何とか出来る。……主に俺の絶対的な安全な意味で、な。

それでまあエヴァちゃんの話しを聞いてみたんだ。そしたら俺のことを知った経緯……やっぱリナギだった。それから興味を持ってナギを追いかけた……ゴメン、俺は一時期エヴァちゃんを監視していた。

ナギに助けられてから数ヶ月の間、俺の情報を求めて追いかけて追いかけて更に追いかけていたが、そのシツコサで最後にナギがキレてしまい“登校地獄”の呪いをかけられてしまった。

呪いは3年経てばナギ自身が解呪しに来る。…と言っていたのに約束の日にヤツは来なかったこと。以降14年間、学園に縛られ魔

力も封じられたままだということ。

ただ…会って、話してみたかった、こと…。

「……つまりは同胞かもしれない。俺のことを知った切欠はナギ。興味を持ったから話しをしてみたい。…と？」

「ああ、そ、その通りだ…」

「はああ……。ナギの野郎…。俺のこと話してんじゃねえよ…」

これじゃ信用した俺がバカみたいじゃないか…。俺の知らないところで身内の情報が洩れるのはなかなか…。旨くない。あのバカ者に悪気が無いのは知っている。行動派ではあるがアイツは考え無しのバカだからな。

はあ……。さて、どうしようか…。

まあ幸いなことに知られた相手は闇の福音たるエヴァンジェリン…。 “誇りある悪” を自他共… “他” はともかく…に認められる存在だ。俺が言わなくとも無闇に話すことはしないだろう。

【…我が君？コヤツら排除いたしますか？幸いにも部隊は待機中です。直ぐにでも突入させますが？…】

コエ…。そんな過激なことをしなくてもいいってば。学園長に目を付けられるでしょう？アカンよ、それは…。俺はまだ麻帆良でゆつくり喫茶店経営をしたいの。ドンパチなんて、いつでも出来るんだからね。時には我慢、我慢だよお…。

【…いや、いい。無駄に周囲へ被害を出すだけだ。エヴァちゃんも危害を加える気は無いみたいだしな…】

【……………承知…】

何？その間は！不満？ユエは俺の判断が不満ですか？あれッ！  
？何でハオまでそんな“惜しい！”みたいな顔しているの！？……  
…そんなにエヴァちゃんを排除したかったのかな。…幼女なのがいけないのだろうか？

エヴァちゃん可愛いのに…。髪なんか柔らかくて撫でていて飽きなさそうだよ？くくくっ

まあ確かに何も知らなければ彼女は危険分子になりかねないと考  
えるだろうけど…。ハオ達の考えはわかるよ？危険は出来る限り  
回避……出来なければ排除しておくというのは護衛の鉄則だ。安  
全策と言ってもいい。

ただ…エヴァちゃんは無駄なことはしないよ。己の楽しみを追求  
する時はあるけど、基本的にエヴァちゃんは自分で決めたルールや  
矜持に反することは絶対にしない。そこは信用できる……と思う。

「……………まあエヴァちゃんの気持ちもわからないではない。俺達は時  
の流れから外れた存在だからな」

永遠にも等しい時間は永遠の孤独を強制される。これは孤独感か  
ら時には精神を病むからな。エヴァちゃんの気持ちを少しは理解で  
きる。俺も百年の間にミリー達と出会わなければ1人の寂しさに押

し潰されたかもしれない。

「やはり、貴様は……」

「残念だが俺は吸血鬼、まして真祖ではない」

「な、に……？では貴様は……何だと言うのだ！？」

「仙人……みたいなの？不老ではあるが不死ではないんだ。魔法の射手の一射、銃弾の一発、ナイフの一突きで俺は簡単に……死ぬ」

八百年間を生き長らえて俺の身体に付加された“不老”についての考察。それは長い修練の果てに至ることが出来ると言う仙人に一番近いと結論に達した。まあこの世界に落とされた時から不老だったから“ナンチャッテ仙人”もいいところだけだな。

ただ……魔法の射手の一射、銃弾の一発、ナイフの一突きで俺は簡単に死ぬ”のところだけど“何もしていなければ”という条件下で、だ。魔法障壁やDフィールド、その他の迎撃手段も取るから致死に至ることは無いと思いたい。

それと……流石に一発では死にはしれないと思う。一応、体内には治療用ナノマシンもあるから大丈夫……と思いたいなあ。だいたいなあ？不幸な一撃が当たったら死ぬほど痛いだろうしね……。それはマジで勘弁です。

エヴァちゃんは俺の仙人発言に目をこれでもかと言っただけ見開いて驚いているようだ。…信じていらっしやらない？…無理も無いかな。仙人というのは俺の憶測だからな。もしかしたら違う“何か”かもしれない。正直な話し俺にもわからないのよ。

我が事ながら適当だなあ、と苦笑してしまう。

「仙人？バカな…。仙人とは、どんな才能があっても長い修行を経てようやく至れるものだ…。貴様の外見から見て…20代前半で至ったとも言っつもりか？信じられん…」

「至った経緯は聞くな。思い出したくもない…」

言えない…。「女神（幼女）の手によって、この世界へ落とされて来ました！アハハハッ」…なんて言えないっ！言いたくもない！！今の家族に出会えたことは感謝しているが…落とされた理由が暇潰しだったからなあ…orz

「そ、そうか…。しかし、貴様ほどの位階ならば殺されても身体の再構成も可能なのではないか？」

「……………試したこと無いからわからん。痛いのがキライだし、怖い…」

身体の再構成って…怖いこと言うなあ。それに可能だとしても復活に一体何年何十年、下手をすると何百年掛かるかわかったものじゃない。とてもではないが試す気にはなれない。試す気なんて元からないけど…。

「怖いって…。まあそれだけは実験したくとも出来んからな」

「やりたいとも思わないっての！死ぬだろうが…」

「クククツ！そうか？それは残念だ」

残念？それってどういうことかな？……エヴァちゃんは俺を殺す気だったのだろうか。くっ！これからは、より厳重な警戒が必要かもしれないな……。厄介なヤツに目を付けられたような気がする。

見た目が美少女だから質が悪い。可愛らしい容姿をしているから初見ならば敵意を感じない限り無害と判断してしまうだろうな。はあ。初見ではないけど……。

それから他愛も無いことやお互いの昔話や武勇伝、バカ話の一つや二つもした。いつの間にか時間も忘れるほど話し通しだったようで壁に掛かっている鳩時計を見ると5時10分前だった。ここからならば今から帰れば皆で夕飯を食べられる時間だ。

「…さて、いい加減、時間だ。そろそろ…」

「なんだ？帰るのか。せつかく茶々丸が夕食を用意しているのだぞ？」

「なん…だと…？くっ！それは惜しい！が、家族が待っているんだ…」

ソファーから立ち上がった俺にかけられた言葉は茶々丸ちゃんの

手料理というものだった！立ちつくして、しばし呆然としてしまった…。

正直なところを言えば食べてみたかった！だって茶々丸ちゃんの手料理だよ？あの美食家でもあるエヴァちゃんが文句も言わずに食べているんだ。きっと美味しいに違いない！何も無ければ是非とも食べていきたいところだった。

でもねえ…。家族との団欒が俺を待っているんだ！外で警戒待機しているアイリ達のこともあるから即席の食事会でも開いて皆の心のリフレッシュをしておきたいんだ。

「家族だと？…ああ、外に居た連中のことか？」

「……………バ、バレていた？いつから！？」

家族のことを考えて色々と計画を立てていたらエヴァちゃんの言葉に衝撃を受けた。あれだけの手を使って気配を隠していたのにエヴァちゃんはそれを察知したと言うのか…？どんな察知能力だよ…。

「やはりか…。始めは気付かなかったがな。クククツ、上手く隠れていたものだ。その2人が来なければわからなかったほどだ」

「ハオ…ユエ…」

「我が君…。申し訳ありません…」

いや、まあ責める気はサラサラ無いけどさ。……………やっぱりエヴァちゃんは個のスペックが高いなあ。本人が望んだものではないとしても大したものだ。まあ不老不死の身とはいえ個人で悪意から逃げ

切るには感知能力が長けても不思議はないのかな…。

あれ？でもエヴァちゃんは“やはりか…”と言ったよな？……………引っかけ？所謂、カマカケにあつたのか！？もしそうなら下手な反応しなければ誤魔化せたのかもしれない…。しくじったかもなあ。

それにしても食事…。エヴァちゃん自身からのお誘いだ。どうしたものかなあ…？ここで少し疑わしそうにエヴァちゃんを見てしまった。彼女もその視線に気付いたようで苦笑している。

「ククク、なに、ただの夕食だ。今日くらいは構わんだろう？連中には我慢してもらえ。今日のところは貴様だけ残ればいい」

「えー…俺だけえ？」

名指しで俺だけって…。 “何かある”と言っているようなものはなかるうかね？ここで素直に1人残って夕食へお呼ばれするほど暢気者なつもりは無い…。はず。それなりに楽しい時間を過ごせた相手とはいえ今のエヴァちゃんがああ…。

そう、エヴァちゃんがニヤニヤしているんだよ…。絶対に何かあるって言っているようなものだろう？1人残った途端に何をされるか、わかったものじゃない。正直、不安です。それ故に返答に時間が空いてしまったのも仕方ないことだと思う。

「何だ？私よりも長生きの癖に…怖いのか？ふふんっ」

そんな怯んだ俺に発破をかけるように挑発してくるエヴァちゃん。気概がある者や自尊心の強い者なら、ここで即座に否定するところだろう。もちろん、俺は言っちゃりましたとも！ええ！それはもう

正直に言ってやりましたともさー!!

怖い!!とね!!!

.....。

.....。

.....。

…何だよ？文句あんのか？…仕方ないだろう？何度も言うけど俺は基本的に臆病なんだ。1人で厄介事…もつと言ってしまえば痛そうなことや生死に関りそうなことは関りたくないんだ。嫌いなんだよ…痛いのは。

「ええ、まあ怖いです。だから数人を側に呼ぶわ。ハオとユエはこのまま居てね。それとミリー達も出ておいでー」

「委細承知」 「はーい」

ここに五柱の守護神が展開された！俺の安全はこれで確保出来たも同然だね！…マジで痛いのはヤダし、ましてや死にたくもない。この身体は不老なだけで不死ではないんだからね…。

この陣容でなら安心だ！…だけどね？もし万が一にも“何か”があった場合にはオリビエ達も召喚しようと思うんだ。…何？過剰防衛だど？そんなの知ったことか！大事なのは家族の安全と俺の命だ！他のことなど知らんね！！

いや、ごめんなさい。木乃香ちゃんや刹那ちゃん、それに明日菜

みたいな気に入っている子や神鳴流剣士の詠春や帝国第三皇女のテオなどの友人などは無理が無いくらいには助けてもいいかな、とは考えている。

知り合いを見殺しにするのは後味が悪過ぎるんだよ……。俺はそんな思いしたくない。……………まっ！それでも家族と自分の命を優先するけどな！！周りは…余裕がある限りでいいんだよ。全てを守ろうなんて無理なんだからな。

む？安全確保の確認をしていたら少し考えが逸れたようだ…。まあそれはともかく安全は確保したも同然なんだ。アイリ達には帰還してもらって不測の事態に備えてもらおう。

「よっし 他は即帰還っ！一般人、他関係者にバレずに行動しようね！」

「「えーっ!?!」」

あれ！？意外なことに不満な声が聞こえた!?!……………一体どこからだ？

「アイリ！ファレノ！ダメなの！今日は帰るの！」

「「えー……………」」

今度は若干、拗ねたような声が聞こえた…？むう…ハ才達はいいとして何でアイリ達が居るのかな？外で待機だったんじゃないかな？何で窓の下から顔を出しているのかな？かな？かな？

……………2人をファレノは2人を抑え切れなかったのか。むむむ……………

はあ、無茶なことを頼んだのは俺だから責められないなあ。ファレノ！ファイトツ！俺は影から応援しているぞ！……影からだけだけどな！

「おい！？男ならここは反発心を剥き出しにするところではないのか！？その……こう……怖くない！いいだろう！俺、1人残ってやるよ！！」みたいにな！？」

俺が護衛を決めていたらエヴァちゃんがそんなことを言ってきた。男なら？反発心？……はっ！そんなもの俺には……無いッ！あるわけないじゃないか。そんな死亡フラグ満載な生き方は怖過ぎて俺にはできんよ。

それにな？そんな気概があるならこの頑丈な身体と潤沢な保有魔力を使って今頃は俗に言う“俺、とうるうう！！！”とか叫んでバカみたいにオリ主しているよ。原作のおにやのことハアハアしているよ！！

どうよ？そんなことを俺みたいな臆病者ができると思うか？……出来ないよ。小心者の俺は生き残るために“少しだけ”過剰戦力を保有するくらいなんだからな。そんな大それたことは出来ません！

「……………(ジイー……………)」

エヴァちゃん……。ここは空気読んでよ。ほら？皆が変な目で見ているじゃないか……。それにわからないか？皆の目が訴えているんだ。「家族が葵の傍に居て何が悪い？わかってないなあ……」ってさ。……まあこれは俺の妄想ですがね！

「……………何だ！？こいつ空気読めよなー……という目は！？私か！？私

「が間違っているのか!？」

「……はあ……」

「なんか、タメ息、吐かれたっ!？私が悪いのか!？」

「何だかんだでエヴァちゃんもノリがいいなあ。これなら俺の家族ともいい関係になれるかもしれない。でも…民主主義を掲げたら間違いなくエヴァちゃんに勝ち目は無いだろうなあ、と何となく思った俺は間違っているだろうか？」

「ああ…そういえば夕食会の人数が増えちゃったけど大丈夫なんだろうか？普段はエヴァちゃん1人分の食材しかないわけだし。ん…纏め買いして保存しているのかな？それなら安心なんだけど。」

「確認だけしてみるかね。足りないようなら付属魔法球「菜園」や「牧場」から食材を持って来ればいいしな。…元々は魔法素材を採取する目的だったけど、ここ十年は一区画が、ただの農園、農場になっているんだよ。まあ意外と便利だし…。」

「あーっと、とりあえずシェフモードの茶々丸ちゃんに確認を取らないとな。ええと茶々丸ちゃんは、と…。」

「あ、茶々丸ちゃん？人数、増えちゃったけどお願いできる?」

「…はい、まだ許容範囲内です。お任せください、九重様」

「ありがとう 茶々丸ちゃん。あと俺のことは葵でいいからね」

「…了解、いたしました。…葵様」

んー もう可愛いなあ まだ生まれて数ヶ月なんだよねえ。可愛いなあ なーで なーで んふふふっ 新しい命はいつ見ても可愛いなあ 俺もアンが生まれた時は小躍りしたもんだよ！あっはっはっはっ

まあ…残念なのは超・鈴音の関係者というところか…。エヴァちゃんも茶々丸ちゃんが居る時点で超と接触を持っているのは確実。だけど、エヴァちゃんは不可侵の契約を結んでいるに過ぎないだろうから、まだ安心…とは言えないかもしれない。

そうだよ…。今思ったけど不可侵というだけで情報のやり取りはしているかもしれない…。それに古い魔法使いなどは原則として等価交換が常識だ。エヴァちゃんに何かしら必要なモノを提供した場合に超は俺の情報を売るかもしれない…。

いやいやいや！短い時間だったが今日、話していてエヴァちゃん俺が考えていたよりも義理堅い子だった！それに“誇りある悪”であるエヴァちゃんが、そんな卑怯で不義理なこととはしない。

となると問題は…？あ、メンテ時の茶々丸ちゃん、か？彼女が収集した行動データや思考データ、そして記憶フォルダ…。それらから俺のことが今まで以上に漏洩すること、に…？あー…鬱だー…。

「貴様らは何を自然と話しを進めておるかッ?!?!?」

「おうふっ!?!?」

「……………マスター、空気を読んでください」

「なぜか、従者にまで空気読めと言われた!？」

茶々丸ちゃんの頭を撫で撫でしながら考えていたらエヴァちゃんに注意を受けた。だけど、なぜか茶々丸ちゃんに予想外の反撃を受けたようだ。茶々丸ちゃんの雰囲気少し不機嫌そうに感じられた。

君はどうしたんだい？茶々丸ちゃん。……何かイヤなことでもあったのだろうか？

それでまあその日は結局……エヴァちゃんの家で夕食をいただきながら無事に帰宅した。メンバーが俺に陽月姉妹、精霊3人娘、そして精魔奇兵の代表としてアイリ達3人が参加した。護衛も多かったから俺も安心していられたよ！

気になる料理は……白身魚のムニエルが最高でした。バターの芳醇な香りが、もう……ね？美味しかったのよ。それとソースだね。それに使われたアンチョビとかが隠し味だったらしい。旨味成分が凝縮されてマジで驚いた。

もちろん帰る時にレシピは貰いましたとも！これでまた一つ俺のメニューリストが増えたな！



第五十話「救援と歓談と主従の仲と」(後書き)

おはようからおやすみまで。ども作者です！

しかし今回はSide 葵一本で終わってしまった…orz  
いや、後悔は無いよ？でも、変化が欲しかったかもしれないですね。

本当に申し訳ないです。はい。

この辺は今後の課題にしたいと思います。  
無理っぽいけどな！！やるだけはやってみるけど…。

ではでは！B i s b a l d！！

第五十一話「帰還と返答とこれから…と」(前書き)

五十一話：続けば続くものですね？

ここまで続くとは思いませんでした。

これも読者様のお蔭ですな！

それでは続き！

## 第五十一話「帰還と返答とこれから…」

地球軌道上…。

Side アン

月面での工事作業を終えて地球へ…お父さんの下へ帰ることが出来る時が来たのよ！長かった…。とっても長かったんだよ！私にとつて、お父さんと離れ離れになるのはとても、とっても！耐え難いものだったからね！

「あはははっ お父さんの居る地球がもう目の前だよ！もう直ぐ！もう直ぐ会えるよ！ヤッフウウウ！！」

私のテンションは右肩上がり！相転移機関もぐりゅんぐりゅん唸る！早くお父さんに会いたいと本艦の心臓部たる動力機関が膨大なエネルギーを捻り出すのよ！そしてその供給を受けて反重力推進エンジンも最大加速して突き進むの！

もう、お父さんからお仕事を追加されちゃったから1月も期間が延びちゃったし…。もちろん、イヤじゃないよ？お父さんに任せられた大事なお仕事なんだもの！キツチリ終わらせてきたよ！

だから褒めてもらおうの よくやったね、がんばったね、ってね  
そ、それで！優しくななな、なな撫でてもらえたらもう言うことないかもーッ！きゃーっ もう きゃーっ きゃーっ

「アン…。気持ちはこちらから落ち着こう？な？」

「……………んんっ。そ、そうだね。つい、はしゃぎ過ぎちゃった…。久しぶりにお父さんに会えると思ったら、どうも、相転移機関の出力が暴走気味に上昇してしまっ…あはっ」

うん…少しハツチャケ過ぎたかもしれない。機関が戦闘出力の最大値をやや上回っていたし…。出力をもう少し絞っておかないとね…。反省、反省。あわや機関暴走一歩手前だったよ。あはははっ

「暴走とか聞こえたんだけどっ！？お願いだから落ち着いてね！？アン…ッ！！！」

「大丈夫 大丈夫ですよ あー… お父さん えへへ」

「……………ダメだ、早く何とかしないと」

艦橋の隅に行ったりなんかしてお姉ちゃん、どうしたんだろう？なんだか頭を抱えているようにも見えるけど…。病気とかじゃなければいいけど。もしかして心配事かな？それとも…悩み事？

はっ！？まさか……………お父さんのこと！？いくらお姉ちゃん達が相手でもお父さんを譲るつもりは毛頭無いよ！？お父さんは私のなんだからね！あー、思い出した！こんなことしてる場合じゃなかったんだ！はあ、早く会いたいなあ

「んんんんんん お父さん」

「ああ、葵様、私はどうしたらよいのでしょうか…？アンがホームシック？ファザコン？…とにかく色々と重度です。大変ですよ」

お姉ちゃん…何を言っているの？ホームシックなんて……なるに決まってるじゃない！！だって！お父さんが居なかつたんだよ！？私の中の演算機構が囁くんだ…。早く帰ろう…ってさ！！今、帰還中だけどね！！

それにファザコン？私が？ふふんっ 上等…ううん！極上だよ！寧ろドンと来い、だよ！！私のヤル気の根幹にはお父さん分が必要不可欠なんだからね！！ああ、抱き付きたい…抱き付きたい…抱き付きたい…！！撫で撫でされたい！！！！

ああ、今考えると心配だなあ。お父さんは人がいいから騙されたりしてないか、とか！！いや、こちらのほうが気になるんだけど…お父さんに変な虫が付いていないか、とか…！！もう心配だよ！！！！

ハオお姉ちゃんとユエお姉ちゃんが居るから貞操的には安心出来るかもしれない。けど…あの2人も何が切欠で抜け駆けするかわかったものじゃないなあ。……あ？降下コースに乗り始めた！？時間だよ！！

「そろそろ時間だね！来たよ、来たよ お父さんに会えるんだ！！機関出力上昇！ステルス最大！これより本艦隊は惑星降下態勢へ移行します！」

ロールアウトされたばかりの第二艦隊にも惑星降下シーケンスに入るように指示して降下態勢を整える！降下目標は日本国埼玉県麻帆良市近郊の森林地帯！なんだかメガツサピンポイントな目標だけど私なら……出来る！！

地球軌道上の人工衛星は民間、軍事関係無く全て掌握済み！地上からの観測もお父さん謹製認識障害術式で認識をずらしているから問題無し！観測記録もリアルタイムで修正中だしね！ふっふっふっ！

「了解。通信士！艦内に放送、お願い」

「了解よ。あー、あー。…全艦乗組員に告ぐ！これより地球への降下シーケンスに入ります！降下の際に多少揺れるので注意してください！繰り返します！これより地球への降下シーケンスに……」

「お父さん お父さん お父さん」

日本国上空！少し軌道修正！！埼玉県上空！もう目標は目前！！麻帆良市上空！隠密は敵に！ここまで来て見付かったらお父さんの顔に泥を塗っちゃうからね！えーとー…森林地帯…森林地帯…予定地点は、と…。

「……（ボソツ）ダメだ。本格的にダメだ。葵様にアンのメンテナンス申請をしておかないと……」

「ん？ん？ん？ん？ん？」

「……（ボソツ）オーバーホール申請のほうがいいかも」

あっ あそこだ！お父さん！今、私が行くからねーッ！

S i d e o u t ア ン

麻帆良市某森林…。

Side 葵

隠密行動なので毎度の事ながら深夜1時過ぎ…夏の夜とは言っても森の中は空気が澄んでいる分、涼しい…というか肌寒いくらいだな。まあ魔力や気を身体の内や外に纏うことで寒暖はある程度コントロールできる。問題無しさ。

そんな森の開けたところで俺とアイリが隣り合ってアン達の到着を待っているんだ。背後の離れた場所には八才とユエも護衛のために付き添ってくれている。

「そろそろかな…」

「はい。地球降下前の通信で到着は約50分後の予定とありましたから」

「そう…何にしてもアン達が帰ってくるのは嬉しいかな」

「ふふつ。そうですね。恐らくですが彼女達も閣下に直接会えるのを楽しみにしていることでしょう」

アン達には色々と仕事を任せちゃったからなあ。必要なことだったとはいえ、そのせいで帰還が遅れちゃったから申し訳ない気持ちでいっぱいだ。休暇なり何かでご褒美としないとな。

あ、そういえば…。

「…確か帰還時には新造した第二艦隊も随伴してくるんだよね？」

「ハッ、その通りです。第一艦隊と同規模です」

むう、これで我が艦隊は小規模だが二個艦隊になる。むふふ 個人の持つ戦力としては圧倒的ではないか！機動兵器は数十万機と保有しているんだが母艦となる艦が今までアンと城塞機能を有している「工房」の「格納庫」や「ドッグ」くらいしか無かったからなあ。

やっぱり、艦載機だけじゃ格好がつかないからな。戦艦、巡洋艦、駆逐艦に空母！これらがないと戦力として、そして見た目的に問題有りだったんだよ！あはははっ！ははっははっははっははっははっ！

……だが。

「第一艦隊は時間凍結処理して「格納庫」へ格納した。今回も同じにするとして…」

まだ足りない……。

旧世界の戦力ならば今の戦力でもどうとでもなるんだ。まあ戦力の保有数は負けているが、な。数の暴力とはよく言ったものだよ、まったく…。だが元から技術力が天と地ほど違い過ぎるんだから質だけで負けることは無い。

だが新世界は…まだ、だ。まだ少しだけ戦力的に不安が残る。魔法技術は科学技術と違い強弱に個人差がある。個人で戦艦並みの戦闘力を発揮する者も居るくらいだからな。なかなか侮れないものがあるよ…。

まあ旧世界も新世界も、それらの国々にケンカを売るメリットが何も無いからやらないが……。それに俺の陣営だと占領後の領地維持や治安などのライフラインを考えない強襲、蹂躪、殲滅と言う手段しか出来ないんだ。

アンやラミエルのように上位AIを搭載していない通常の無人機は、まだ少し状況判断に柔軟性が欠けているからな。

……要は融通が利かないんだよ。まあだからこそルーチン化された作業には力を発揮するんだがな。製造して数十年経った今はそこそこ改善されてきたんだが経験情報がもう少し必要な模様だ。

あー、それと無人艦に搭載するAIだけどー々個別で構築するのは大変だ。だから各艦にはアンから株分けした。ブラックボックス化した部分を切り離し、かつ蓄積された経験情報を残して、その他の部分を初期化して、少し簡略化したものを搭載することにした。

お蔭で戦闘情報は問題無く各艦のAIに継承されている。対魔法戦はほぼ万全です！旧世界で艦を使った戦争は……。今の時代は無いな。対艦戦の戦闘情報は新世界の対艦戦闘を参考にフィードバックするか。

たくつ！戦闘情報の収集もままならないな！個人戦闘の記録、情報収集なら紛争地帯でやり放題なのに……。

……。あ？しまった……。思考がズレにズレてしまった。

「んんっ！あー……今後の生産状況はどう？」

「????ハッ！月面プラントの生産ラインが軌道に乗ったのもありませんが月で試行された新技術、時間加速フィールドが“なかなか”使えるようです。あと一月あれば当初に予定していた第四次生産までを終わらせるでしょう」

「そつか…。順調だな」

時間加速フィールド：文字通り、限定空間内の一定範囲の時間を加速させる技術だ。某PCゲームの近未来ロボットアクションADVに出てきた技術をそのまま流用してみた、だけ。変な形のロボットだったのは覚えている…。

この技術の使用上の注意点として範囲内の空間の時間を加速させることから生物の年齢も同様に加速されることが挙げられる。普通の女性には耐え難い状況かもしれない！俺みたいな不老やその眷属以外が使うには危険過ぎる。

10歳の子がフィールド内に入って、数秒して出てきたら20代後半に成長している…。浦島太郎も真っ青の状況だな！と言うか、リアル逆浦島太郎だ…。使用するのは月面プラントだけに限定しよう。うん、それがいい…。

ふう…まあ、それはともかく戦力の総生産量は確実に増えたことには変わりはない！今までは資源を外から「工房」へ運び込んでいたから、それなりの手間が掛かったからな…。月面プラント万歳だ！造ってよかった月面生産基地！

月に残って設備の維持管理をしているオート・マイク自動人形や無人作業機に感謝だ！後方支援が充実化すると俺も助かるわ…。うん、マジで。これで定期的に物資が送られてくるようになった。

「これで物資の心配は解消されたかな」

「ふふっ、はい。彼女達はいい仕事をしてくれました」

アイリも後方の心配事が解消されたことで安心して嬉しそうだ。補給線の確保は重要事項だから当然だよな。…うん、アン達はいい仕事をしてくれたよ。それは俺も認める。でも…。

でも、何で戦争を控えているわけでもないのに、こんなに戦力ばかりが充実化していくのだろう？ 始まりは家族や自分の護衛戦力…のはずだったんだよなあ。それが今じゃ無人兵器類の数では小国並みの戦力だ。

むう…？ 臆病ここに極まれり、という感じだな…。どれだけ不安なんだろう？ 時々だけど自分の性格に不安を覚える時がある。…  
…勇気って何ですかね？

お？ そうこうしているとアイリのコミュニケーションからコール音が鳴っている。アン達が到着したのかね？

「閣下…連絡が入りました。間もなく上空に到着します」

「ふむ…ああ？ 多分…アレ、かな？ 熱光学迷彩と認識阻害術式で見えないけど…」

「ごめん…。自分で製作しておいてなんだけどマジでどこに居るのがわからない…。熱光学迷彩の開発当初はまだ景色が揺らいで見えたのに…今じゃほぼ完璧に背景と同化しているものなあ。隠蔽機能に力を注ぎ過ぎたかもしれない…」。

「ふふふっ、そういう仕様ですから仕方ありません。ん？……閣下、アンからです」

「え？アンから？何だろう？」

再度、アイリのコミュニケがコール音を発したと思ったらアンかららしい。

んー…？問題無く到着したように感じたけど…。何か問題発生か？学園から数十キロしか離れてないから、こんな時にステルス関係に問題発生、とかだったらマジでやめてほしいなあ…。

「…こんばんは、アン。そして、おかえり。皆が無事に帰ってきてくれて嬉しいよ」

『ただいま！お父さん 会いたかったよっ それで“この子達”はどうしたらいいかな？』

この子、違い？……あー、第二艦隊の艦船！？それなら第一艦隊と同じ…って、アンはその場に居なかつたんだっただか。とりあえず格納場所までの道を開かないと…。

えーと…空間操作…王の宝物庫発動…つと。艦隊の正面空間に直径1kmに渡り展開。これを「格納庫」までの道とする。別でアングレカムの前には「ドッグ」への道を展開するものとする。…とこれでもいいかな。

……。

……。

……何？魔法的な描写？無詠唱で大概が片付くのにするわけ無いじゃないか。そういうのは戦闘時などで戦意高揚のためにパフォーマンスを織り交せて呪文なり、魔方陣：機械的魔法だから魔“方”陣：なりを展開するよ？

でも今回みたいなのは所謂、作業じゃない？こついでで一々呪文詠唱なんて非効率なことをしてられるかよ……。恥ずかしい……。

「ああ、今「格納庫」までの道を開いたから、艦隊はそのまま前進させてくれ。アンの進んだ先は「ドッグ」になるから、そこで艦の整備を受けてね」

『はい またあとで、ね 絶対だよ！？』

はいはい、またねー ……アンのテンションが高いなあ。何かあったのかな？お兄さんは心配です。

「そういうわけでアイリ？誘導よろしく」

「はい、お任せください」

艦隊の誘導兼格納処置をアイリに任せて、今後の予定を大まかに考える。学園長に貰った猶予は一月だ。それもあと残すは数日のみ……。とりあえず、無事にアン達も合流したから学園長へ返答をしないとなあ……。

アン達の帰還祝い…と称した宴会…を開くから2、3日後を目安とするか。飲めや歌えやの大宴会にしよう 俺もここ最近ストレス

が溜まってきているから、一気に発散しておきたいのよ…。

主に学園長とか、学園長とか、学園長とか…。それにエヴァちゃん（金髪美少女）とか、エヴァちゃん（吸血美少女）とか、エヴァちゃん（エターナル美少女）とか…。オマケにお喋りなタカミチ（眼鏡教師）とか…。

殆どが学園長とエヴァちゃんだorz…。あ、でも、エヴァちゃんの時は茶々丸ちゃんという癒しが猛毒を少しだけ中和してくれるから学園長の時よりは幾分はマシかもしれない。

はあ…。宴会ではオモツクソ羽目を外して騒ごう…。ストレス発散がお酒とか末期かもしれないけど、この際、構うものか！飲む！もう浴びるほど飲んでやる！！

ふう、それはともかくアン達が無事に帰ってきてくれてよかった…。くくくつ 明日からも頑張ろうつと

Side out 葵

学園長室…。

Side 学園長

約束の期限が過ぎて3日…。過ぎた期間、何をしていたのかと問えば“暫らく振りに会った家族と夜通し飲んでいた…”というバカな理由じゃった。何でも予定していたのは3日間じゃったらしいが興が乗ってもう3日飲み直したようじゃ。

6日間も飲み通しの宴会…。葵君…お主、もしかしくともバカじゃろ？バカなんじゃろう？よくもまあ急性アルコール中毒にならんもんじゃわい…。どれだけご家族と会えて嬉しかったんじゃ…。あー、6日間、飲み通しになるほどか…。

それにしても今日、ここに来た時などは顔色が赤くなったり白くなったりとタカミチが用意した水をガブガブ飲んで大変そうじゃったのに今はケロッツとしておるのう。

葵君も立ち直ったようじゃし、そろそろ話し合いが出来るかのう。

「…それでは葵君の返答を聞かせてくれるかね？」

ワシとしては良き返答を期待したいところじゃが…。はてさて？酔いで濁っていた葵君の目は今、先程と違い何もかもを見透かすような光を宿しておる。こういう輩は扱いを間違えると厄介じゃのう。下手な小細工は逆効果じゃ…。

フオフオフオ　葵君がどのような返答をしてくれるかが楽しみみやよ

「……俺の返答は唯一つ、麻帆良に“所属しない”というものです。俺はあくまで無所属フリーランス…。学園長？俺はね…。どこまでも自由でありたいのですよ」

「……そうかの。残念、じゃのう……。うむ、残念じゃ……」

いや、わかっておった……。葵君のように無所属で居る者には、それをするだけの何かしらの理由があるのじゃろう。そのことにワシ個人としては言うことはない。東の長としては残念じゃがな……。

フオフオフオ、それにしても見事に跳ね除けられてしまったわい。そのあり方を愉快じゃとも思う。気骨：いや、奇骨かのう？…のある者だとも思う。木乃香も世話になったしのう。ワシに出来る限りの範囲で便宜は図ろうとも思う。

じゃが…麻帆良に所属しない魔法使いが、この地に居を構えることに理解を示さず、更には納得できぬ者も多い。故にワシは長として問題の少ない一時的にしる“麻帆良へ所属”という手段を取ってもらいたかったのじゃ。

麻帆良の魔法使いには納得しない者も確かに居る。その者達が葵君に何か不利益になるようなことを仕出かすかもしれない。若い魔法使い達が短慮に走ることだけは自重してほしいのじゃがのう。

「葵さん…どうしてもダメですか？」

タカミチもワシと同様の懸念を抱いておるようじゃ。今一度、葵君を説得するようじゃな。説得できる可能性は低い。じゃが2人は旧知の間柄のようじゃし、もしかしたら…？

「ふう…タカミチ、一つ忠告だ。お喋りなのは寿命を縮めるぞ。気を付けることだ。どうも今のお前は平和ボケが過ぎていようだからな」

「……………」

葵君はタカミチの説得に取り合うことなく逆に忠告じみたことを告げおつた。言われたタカミチは思い当たることがあるようじゃな。あらぬ方向に視線を飛ばして尋常ではない冷や汗を流しておる。

…………… 一体、何があつたんじゃ？

ふう…。それにしてもタカミチは説得が失敗に終わったことを残念に思つておるのじゃろうな。彼の顔色が優れない。やはり、旧友の身を案じておるのじゃな…。優しいのう、タカミチ君っ！

「くっくくくっ！何をシケタ顔してんだ？おつとこの子だろうが！元氣出せて！」

「わっ！？葵さん！僕もいい年した大人なんですよ！？いつまでも子供じゃないんです！あーっ！？髪が！髪型がっ！？」

「わっはっはっはっ！俺からすればまだまだ坊やだよ！それら さら さら くっくくくっ！」

「アーーーーッ！！」

あるえーっ！？そんなタカミチが葵君によつて子供扱いされておるとな！？しかも見た目的にはタカミチのほうが年上に見えるのにな！何！？葵君のほうが年上なのかな！？そんな！？ウソじゃああ！！

あー、あー…。タカミチの髪型が原型を止めぬほど凄いいことになっておるよ…。まるで台風の真っ只中で竜巻に遭遇したような髪型じゃった。

「……葵さん、ヒドイですよ。ああ、髪型がメチャクチャだ…」

「さて、タカミチ弄りも終わったところで…。学園長、話しの続きだ」

「……何じゃと？」

ふおっ！？タカミチは無視かの！？あ、ああ…タカミチの目から滝のような涙がちよちよぎれておるぞい。小さく「無視ですか…」と零しておるぞ？散々にからかわれて最後に無視とは些か不憫じゃのう。

それはともかく葵君は話しの続きと言いおったな。所属の話しは蹴ったようじゃったがのう…。それなのに葵君は他に話し合うことがあると言う。フオフオフオ。何を言うつもりなのかのう？

「先程までの話しは俺の所属先に関することだ。ここからはビジネス…お仕事の話しだ」

「ほほう？フオフオフオ。ふむ…それで、その話しとは何じゃな？」

「…なに、これは…ただの気紛れ、だな。ただの雇われとしてなら仕事を引き受けようと言っているんだよ」

「なるほど、なるほど。そういうことじゃな。では“その時”は依

頼させてもらっぞい」

フオフオフオ ふうむ？そういうこと、か。要は傭兵稼業。完全に麻帆良の傘下には入らぬが依頼という形で報酬を支払えば要請に応えると言っのじゃな。なるほど、なるほど それならば最低限、非常勤務の扱いができるの。

ふむ……。これなら多少は諍いの緩和に繋がるかもしれん。幸いにも龍宮君という前例もあるしの。現在の彼女は麻帆良の生徒ではあるが傭兵を稼業にしておるのはかわらん。

あとは葵君自身が与えられた仕事をキチンと仕上げて実績を積んでいけば反発する者も激減するはずじゃ。

「ふふんっ ……簡単に考えているようだが、いいのかな？俺は“高い”よ？」

「フオフオフオ 相応の働きをしてくれるのならば問題は無かろう」  
「くくくっ！そうかい…」

報酬に相当する働きをしてくれれば良いのじゃがなあ。フオフオフオ。まあ文句の無い実績さえ示せば、反対するであろう魔法使いも馬鹿な行動を自重する。フオフオ。これでワシの頭を悩ますことが減るといっものじゃ。何も問題は無いわい。

Side out 学園長

麻帆良学園大通り…。

Side 葵

学園長室から出た俺は、まだ夏の残暑の残る午後の大通りを自分の店である喫茶店クレイドルへ、ただ帰る……だけなんだけど。はあ……どうして、学園長にあんなこと言っちゃったかなあ？

報酬次第では仕事を受けるなんて言わなきゃよかった。タカミチが残念そうにしているから、ついやってしまった…。あー、クソッ。あ、言葉が悪いな。失敬、失敬。…まあ言ってしまったものは仕方が無い。

いや、こういう時は逆に考えるんだ。俺が矢面に立てばアイリ達は裏で動き易くなるじゃないか。学園側の注意は俺に集中するはずだ。アイリ達のこととは今のところエヴァファミリーと茶々丸ちゃんの背後に居るだろう超一味だけ…のはず。

それにタカミチには今度こそ口封じ的なことも仄めかしたし、今日もやんわりと忠告した。これで下手に情報の漏洩は無い……と思いたい。まあここまでやれば大丈夫だろう。…大丈夫だといいなあ。…大丈夫かなあ？

まあ学園長の依頼は程々に受けて、やる時はキッチリ片付けてやりましょうかね。適度に実績を積みめはある程度の信頼は得られるだろうさ。そう、今のところ学園側に対して問題は無い。

問題は、だ…。

茶々丸ちゃんを通してどれほどの情報が超一味に洩れているのが気になる。あ、このことで茶々丸ちゃんに罪は無いよ？あるわけ無いじゃないか。彼女を責めるのは俺でも抵抗があるのよ。

茶々丸ちゃんいいよね。茶々丸ちゃん。嫁に欲しいくらいだよ。

情報洩れに関しては一度、超の研究施設に対して一部隊を派遣することも考えている。俺の邪魔をするようなら何れは仕掛けなければいけないかもしれない。

それに俺の知らないところで超の計画（笑）に巻き込まれても果てしなく迷惑なだけだからな。時と場合によっては学園祭の時に計画（笑）の全てを叩き潰す必要がある。

……………あ？それいいかもしれない。

正直に言うと超一味に嘗められたままというのは俺にとってはどうでもいいんだ。被害らしい被害は施設だけで家族には死者（死があるのか疑問）どころか怪我すらなかったからな。それに施設はもう月に移設されているしね。

うん、俺個人では問題無い。無いんだけど…：他が納得できないよ。うだ。それというのも現在進行形で超一味の生命は狙われているからだったりする。命令は下してないから参加自由の有志で常に動向を監視している……………らしい。

これらはミリーとファレノから聞いた…。

そして命令さえあれば直ぐに実行できるだけの装備と人が動いて

いる状態だ。……これって怖くね？俺は抹殺なんて物騒なことは考えていないんだ。動向を常に把握できるように監視さえしてくれば問題無いと思っている。

それに直接、手を出したりなんかしたら学園側も動くことになる。超一味も一応は学園の生徒なんだよ……。学園側は信条や考えは別にして何が何でも守るだろうよ。それは面倒が二乗倍クラスでやってくることになる。そんなのイランのよ……。

故に俺は考えた。超一味に対して一番の痛打となるモノ、場所、時間……。それは22年周期で訪れる世界樹の大発光現象……。つまり学園祭の計画実行日に最高のタイミングでその横っ面を思いっきりブン殴って計画を破綻させてやる。

俺が砕くのは超自身ではなく計画……。その心、精神だ。くくくっ！

これに限ると思うんだ、うん。俺自身は計画が成功しようが失敗しようがどうでもいい。だが家族の皆が納得しない。その鬱憤を晴らすためにも超・鈴音……君には生贄になってもらおう。憂さ晴らし……。今家族に必要なことはそれだよ。マジで……。

未だに超一味の話題が出るたびにギスツとした空気が流れることがあるんだ。意識しなければいいんだけど、このまま放っておくと俺の胃に穴が開きそうなんだ。だからストレス発散してもらおうと思う。主に俺の胃と精神安定のために……。

言うておくが、この行為は正義や悪では断じて無い。俺は俺と家族のためだけに戦うのだからな。

「とりあえずは戦力の強化、か……」

マキナ・マータ  
機械人形の開発を進めるとしよう。3機の試験機でデータは取り終わっているから、あと2ヶ月もあれば制式機たる初号機が完成する。それが終われば二号機以降は量産機を生産できる予定だ。

何も問題無い。超一味は多脚戦車と田中、それに鬼神兵6体の陸戦が主体戦力だ。空間戦闘が可能な戦力は俺の陣営のお家芸でもある。さらにここへ機械人形の軍勢が加われば空も陸も俺達のテリトリーだ。

くくくっ！負けはせんよ。久しく集団戦闘のデータが滞っていたからな。本番では全てを以って実証実験としてくれる！

その際に学園長ウツスに何かを言われるかもしれないけどな…。

S i d e o u t 葵

第五十一話「帰還と返答とこれから…」と（後書き）

戦力がまた一つ追加されました！

艦隊戦力なんて魔法世界くらいしか使う場面が無いように感じる作者です。

どないしょー…。使いどころが難しい。

”ネギま！”は個人技能が特化し過ぎのきらいがありますよね？

集団は雑魚の集まり的な…。でも…。

でも、強者が徒党を組んで連携した場合これ以上無い脅威になると思っんです。

”質と数の暴力は恐ろしい！”をこの作品で表現できたらいいですね。

今後の目標がまた一つ増えましたよ。これからも頑張ります。

ではでは！B i s b a l d!!

第五十二話「起動実験と小さな鼓動と予定外と」(前書き)

どうも！

以前に軽く指摘があったのですがこの作品では三人称をSide  
???で表現しています。

決して謎の人的扱いではありません。

まあ何が言いたいかと言うとですね？

これからは三人称を使う時はSide ???を使いたいな、と考  
えています。

…ということです。

では、それを踏まえて続きをどうぞ！

## 第五十二話「起動実験と小さな鼓動と予定外と」

魔法球「工房」内、研究室…。

Side 葵

アンが帰還してから約2ヶ月半が経過した。ここは「工房」の中にある俺の研究室の一つ。その研究室には今、成人男性が1人まるまる入るシリンダーが数十個あり、それらを前に俺はとある準備をしていた。

全てのシリンダーの中には機械の骨格、電子部品などで構成された人型が直立した状態で固定されている。機械部分が剥き出しの人型はただ静かに目覚めを…力の源たる命の炎を吹き込まれるのを待っているように見える。

「主、準備が整いましたぞ」

「こつちも終わったよー。あるじはどうかなー？」

研究用に白衣を纏った俺以外にも同じく白衣を纏い準備をしていたウーリとマリー、他数名が準備を終えたことを伝えてきた。

「そうか。俺のほうも今…できたぞ。…皆！準備はどうか！？」

「……………はいっ！いつでもどうぞ…！……………」

「よし！総員！起動準備に入れ！下手な失敗なんかするなよ！？」

「御意ッ！」「あい！」「了解ッ！」「了解ッ！」

本当に変な失敗…というか問題は無しにしてほしい。今日のために長い間、準備して、やっとのことでここまで持ってきたんだ。だから…マジで勘弁してください。

「起動準備を開始せよ！」

「了解！機体内部に高魔力結晶体を設置！…動力炉との結合を開始しました！機体との同期を確認！状況クリア！」

「主電源入ります！出力上昇！…50…65…85…100%！…電圧安定！状況クリア！」

濃い青色の高魔力結晶体を動力炉の中心に設置。結晶体と動力炉が結合されたのを確認したらエネルギーの注入…というか充電？まあどちらでもいいけど要は起動エネルギーの確保ですな。

とりあえず最初の関門である2つの動力関係は順調に終わった。

まあ、こんなところで問題発生して暴走されたら“いい感じ”の規模で爆発を起しちゃうから安全に終わって俺達は一安心だ。

「続いてナノマシン溶液注入開始します！溶液の充填率…60…70…85…95…。充填率100%です！」

「よし！ナノマシンに形成信号を発信せよ！」

「了解！信号発信…送信しました！機械化骨格への形成を確認！順

調に形成中です！」

キラキラした銀色をしたナノマシン溶液がシリンダー内を満たして機械人形マキナ・マータの機械化骨格を覆った。ナノマシンはプログラム通りに与えられた役目をこなしてくれることだろうよ。

「いやあ、この子達がどんな風に形成されるか楽しみだなあ……出来れば男性型がいいなあ。ムサイのは勘弁だけどいい加減、男の家族が出来てもいいと思うんだよ……。だから今回の実験は個人的にとっても期待しています！」

「いいねえ　いいねえ　ここまでは順調だ！皆！ここからが本番だ！気を抜かないで逝くぞ！？もとい！いくぞ！！」

今…何かフラグが立った気がする…。具体的に言うとな問題発生的な意味で。……けど気にしない！！気にしたら負けのような気がするからな！

「……………はいっ！」「……………御意ッ！」「あい！…あ」

「よし！あえ…？何？ウーリさん今の“…あ”って何？すっごい気になるんですけど？…もしかして！？ここにきて何か問題かな！？」

「ちよっ！フラグが立ったと思った瞬間か！？勘弁してくれよ…。ここまで来て問題が発生って何の嫌がらせだよ。とりあえず…ウーリ？チャキチャキ白状しようか？何があったよ…？」

「え？…あー？…その？…違う、と思うよー？うん？違うんじゃないかなー…？違うよー？きつとー…？」

「何！？その疑問系の嵐は！？メツチャ気になるよ！？」

ウーリは今まで見ていたモニターから目を離して何でもないように装っている。…が、ウーリはチラチラとモニターを気にして見ているのだ。何も無いと思うほうがどうかしている。

「ん？あつ！？あ、主！これ！この波形を見てください！早く！」

「何！？一体何が起きたの！？」

更にウーリを問い質そうとした。でもそれはマリーの焦りを含んだ声で実行できなかった。この大事な時に何が起きたんだよ？本当にさ…。

「これです！この 波形と 波形です！！」

「……………何だ？これは…。予定よりも波形の振り幅が大きくないか！？どこかで手順を間違えたのか！？誰か！システムチェックは！？」

マリーに急かされてモニターに表示される情報を確認した。“波形”と“波形”…。この2つは思考プログラムの反応を計測しグラフ化したものだ。言ってしまうえば偶発的にプログラム上に存在する“かも”しれない“自我存在”の有無を示すものだった。

その2つの波形が大きく変化して信じられないほどの反応を示している。俺も今回は自我を構築するためのプログラミングをした覚えはなかったから驚いていた。いや、マジで驚愕した。……………何で、

こんな強く反応してんだろ？

当然、俺は何らかの不都合が起きてプログラム上にバグが発生したと判断。すぐさまソフト面のシステムチェックを指示した。でも結果は…。

「あるじー。今ー、2回目のチェックしてるけどー……どれも問題無し、だよー」

白だった……。おかしい……。ウーリは2回もチェックを掛けている。それなのに問題は表示されない。あるはずの無い反応があるのにシステムに問題が無い？一体何が…。

「じゃあ、この波形はどういうことなんだよ。……起動は、失敗？このまま、終わるのか？生まれて、こない…？」

「主…」「あるじ…」「…」「…」「…」「…」「…」「…」「…」「…」

問題は確かに起きている……。原因は不明…不明？ちょっと待てよ……。電腦空間内にダイブすれば問題となる根幹部分を見つけ出すことが出来るかもしれない。無論、この方法は危険を伴う。でも、今ここでやらないわけには…いかない！

「作業、再開だ…！どんな風になってもいい…！ただ無事に生まれてくれれば…！！頼む、皆！力を、貸してくれ…！！」

「……………」

俺は頭を下げているから皆の表情は見えない。その皆が黙ったまま……。ダメなのか…！！

もうここまで来たら起動を成功させるのは難しい。機械化骨格に張り付いたナノマシンは停止することなく形成は進んでいる。だが、このままでは中身の無いただの機械の塊に成り下がってしまう。

それだけはダメなのだ、と考えた時、皆が慌しく動き始めたのを気配で感じた。頭を上げて見てみれば起動準備を再開した皆の姿が目映った！ありがとう…皆…！！

「…プログラム修正！擬似神経に強制アクセスします！」

「擬似神経回路の94から210番まで修正を完了！…っ！？緊急！300番！340番410番に修正後の問題発生！」

「再度プログラムの修正に入ります！…ちいいい！誰か！形成の進行を緩和できないか！？このままでは不完全なまま形成が終わってしまう…！」

普通にプログラムを修正しても間に合わない…。多少、危険だが電脳空間に侵入して直接“バグ”と思われるものを修正する必要がある、か…。

「くっ！そこは俺が直接、修正に入る！電脳ダイブする！！IFS、セツト…！」

「なっ！？主！危険です！！下手をすれば主が！？」

「そんなことわかっている…！」

「…」

これはナデ コに登場するワンシーンだ。“鈍感料理青年”がオモイネを助けようと“電子の妖精”と“マッド整備士”の手を借りて電腦空間に入ったという方法だな。

だが俺の場合、方法は同じなのだがリスクが伴う。肉体的に影響があるわけではないんだが色々と多世界技術を混合した弊害なのか、下手すれば電腦空間で遭難…。精神的に廃人になりかねない。

ある意味、安楽死だよな…。

……。

……。

……。

ハッ!? 何だかイヤ過ぎることを想像してしまった!? 俺に自殺願望なんて物騒な思想なんてないよ!? 縁起でもないな! うんっ! もう少しマトモなこと考えよう…orz

「ならばなぜ!? マキナ・マータ機械人形は無人兵器と同じ! アンとは違い感情の無い兵器です! 仮に失敗しても、また造れば良いではないですか! ? 主が危険なマネをする必要がどこにあるのですか! ?」

割と緊急事態で忙しい、この時にちょっとおバカなことを考えていたら、それは来た…。マリーが表情にすごい怒気を貼り付けた状態で怒鳴りつけてきたんだ。

うん! 今すぐ、ごめんなさいって土下座してしまいそうだ! …!

……マジでコワイ。ガクブルガクブル！！でもマジメに反論します！新しい家族の命が掛かっているからな！！

「それでも、だ！それでも俺は…無事にこの子が生まれてくることを望む！よく生まれたな、って祝福してやりたいんだよ！」

「そんな！…そんな理由で無理を…！！！」

するんだよ…。家族のためならどんな無茶や無理を弾き飛ばして助けるんだ…。それだけが臆病な俺に唯一できることだからな…。

Side out 葵

同研究室…。

Side マリエール

マキナ・マータ  
機械人形の初号機の起動準備中に事故が起きた。何も問題は無いはずだった。そのはず、だったのに…！！

「それでも、だ！それでも俺は…無事にこの子が生まれてくることを望む！よく生まれたな、って祝福してやりたいんだよ！」

「そんな！…そんな理由で無理を…！！！」

「マリー、これは無茶だが無理ではない！必ず成功させてみせる！」

「そんな…！それでも…私は…！」

私は主が無事なら何も入らない！！

今、開発している機械人形はアン殿やラミエル殿と違い無人機動兵器と同じ、ただの意思無き無人兵器だ。たとえその記念すべき初号機とは言っても主の安全には変えられない！！

故に私は主を押し止めようとした！だが私の白衣の裾を掴む手によつてその行動は止められてしまった。誰だ！？この大事の時に私を止めるのは！？

「マリーの負け、だよー。ここはあるじにー、任せよー？ねー？」

「ウーリ！？しかし…！」

ならばお前は主のことが心配ではないと言うのか！？私は心配だ…！失敗して電腦空間で遭難してしまい二度と目覚めないのでは、と考えると心配で心配で…！

「しかし”も”かかし”もないよー。大丈夫だよー」

「お前は！何を根拠に、そんな！？」

「根拠なんてー、あるじを信じてるからに決まってるよー マリーは……信じられないのかなー？」

「そんなわけあるか！」

信じているとも！いや、信じたい、と思っっているさ……！だが！ここで主が無理をする必要が一体どこにあると言っのだ！？これは自我も無い無人兵器ではないか！？

「ならー、あるじを信じて任せてー。ねー？」

「だが……！だが……！だが……！……！」

考えがまとまらない……！主のことは信じている！だが……！もしも、万が一のことが起きたら、と考えると……怖くて仕方ないんだ……！もう……どうしたらいいか……！どうすればいい……！？

「マリエール・S・アニメスツ……！」

「っ……！」

普段、物静かなウーリに珍しくも怒鳴られた。主より私達、精霊に与えた名前“……・S・アニメス”というフルネームまで使い、怒鳴った……。今のウリエールは本気で怒気を表している。怒気の裏に優しさを隠して……。

「……信じてよー。ウーリ達のあるじはー、こんなことに負けないよー」

「マリー……俺からも、頼む！俺を信じてくれ！」

ウーリ……。主……！どうあつても意志を曲げてはくださらないと言っのですね……。しかし、私は……！いや、ここは主をサポートし、帰還を手助けするべき、なのか……？ならば！私のすることは決まっ  
た……！

「……………わかり、ました。ただし！サポートは私がします！！ウーリも手伝え！！」

「あ、ああっ！マリー達が補助してくれば安心して作業が出来る！」

「あいあいー、もちろんだよー。がんばろーねー」

「うむ！皆は作業を継続！これより主が電脳空間に入り直接修正に入る！各員はそれだけは注意されたし！！良いな！？」

「…………… ツ！！了解ッ！！！！」「……………」

「放しませんよ？主…。必ず連れ戻してご覧に入れます！電脳空間で迷子になってさせてなるものですか！無事に帰ってきたら……………えーっと、何をしてもらおうか？金属の加工作業を一緒にしてもらおうか！」

「主ッ……………！ご武運を……………！」

「あるじー、がんばー」

「……………行ってくる！！ダイブッ！！」

IFS 端末を兼ねた座席に主は身体を預けた…。今、主の意識は電脳空間内に侵入中。こうしていると主が穏やかに寝ているように見えるな…。

「ああ……………やはり心配だ！ここは私が……………しまった。私はIFSを持

っていなかったのだったorzはあ…私もそうとう混乱しているよ  
うだ。

「ああ、主…！」

「大丈夫だつてー。ほらー？サポート、するんでしょー？」

「……無論だ！主を電腦空間で遭難させるわけにはいかないからな  
！！」

ほら！お前達も準備しないか！私とウーリだけにサポートをやら  
せるのか！？ハリー！ハリー！ハリー！ハリー！時間は待つてはくれないん  
だぞ！！

「おー。その粹だよー。それじゃー、早速ー…！」

「アクセスッ！！！」

やり遂げます！主を助けるのが私の存在意義なのですから！！

Side out マリエール

電腦空間…。

Side ????

どこまでも拡がる暗い空間内でそれは確かに存在した。

トクン…トクン…トクン…。

その存在は、今はまだとても小さく…弱々しく鼓動している。それでも白く…どこまでも純粋な白い輝きをしていた。

トクン…トクン…トクン…。

純粋な白い輝きは小さく鼓動する…。まるで最後の灯火のように鼓動する…。まだ存在としては至極小さいそれはここに居るのだと主張するように小さく鼓動する…。

トクン…トクン…トクン…。

“それ”が生まれたのは偶然だった。切欠は些細なこと。兵器として期待されていた“それ”はいつも見ていた…。いつも聞いていた…。いつも観察していた…。いつも関心を寄せていた…。いつも“彼”を…。

トクン…トクン…トクン…。

“それ”の機体を作り上げた“彼”を見ていた。自我と云うには幼過ぎる反応…。それでも条件反応のよう“彼”のことをセンサーが…カメラアイが…プログラムでは説明が付かない“心”が…捉えて放さなかった…。

トクン…トクン…トクン…。

“彼”は、いつも“それ”に話しかけていた…。いつも他愛も無

い内容だった…。ただの世間話しや喫茶店なるモノのこと…。そして何が嬉しいのか楽しそうに笑いかけていた…。いつも“それ”は見て…聞いて…感じていた。

トクン…トクン…トクン…。

“彼”は“それ”が起動していないかと思っっている。…だが実際は違った。“それ”は最低限のセンサーなどの機能だけは起動していた。見逃さないように“それ”は待っていたのだ…。

トクン…トクン…トクン…。

いつも話しかけてくる“彼”を…。いつも笑いかけてくる“彼”を…。あの暖かい雰囲気纏う“彼”を…。ただ“それ”は待っていた…。

トクン…トクン…トクン…。

鼓動する…。鼓動する…。鼓動する…。

トクン…トクン…トクン…。

小さく…。小さく…。小さく…。

トクン…トクン…トクン…。

ただただ小さく鼓動し続ける…。

“それ”が芽生えて数日…数十日…時間にして3ヶ月以上が経った日はいつもと違った…。 “それ”の機体となるものは強化ガラスのシリンダー内に直立のまま固定され機体の各所に大小様々なコードが接続されていた…。

トクン…トクン…トクン…。

いつものように気付かれない程度に“それ”はセンサーとカメラアイを起動して周辺を索敵した…。 “それ”の周囲には同型の機体が入っているシリンダーがあり“それら”が数十機、存在していた。“それ”の同族だった…。

機体を固定されたシリンダーの周りは忙しく走り回って何かの準備に追われていた…。 “それ”の存在する機体の前にも“彼”が居た…。 “彼”は強化ガラス越しに“それ”を嬉しそうに見つめていた。“それ”と“彼”の目が合った…ように感じた…。

トクンっ…！

その瞬間、“それ”はいつもよりも大きく鼓動した。とても不可解な鼓動…。 今までには無い鼓動…。 でも…不快、ではない鼓動…。 痺れるような鼓動…。 どこか…そう、癖になりそうな鼓動だった…。

トクン…！トクン…！トクン…！

やがて“彼”が“それ”から離れると不可解な鼓動は落ち着きを取り戻した…。 だが“それ”は何か欠けたような喪失感を感じていた…。 そのことが“それ”を戸惑わせ不快にさせた…。

トクン…トクン…トクン…。

不可解…不可解…不可解…。

“それ”が思考の海へ埋没していると周りが一段と騒がしくなってきた…。意識を思考の海から浮上させると“彼”を筆頭に何かをしていた…。

トクン…トクン…ビクンっ…！

“それ”の機体に今までに無いエネルギーが注がれた…。エネルギーの正体は凝縮、固体化された魔力と「工房」地下にある大規模魔力型発電施設から供給される電力エネルギーだった。

トクン…！トクン…！トクン…！

突然の膨大な両エネルギーに“それ”は驚きつつもある種の爽快感や満足感、そして悦楽を感じていた…。

トクン…トクン…トクン…。

そうしてエネルギーに身を任せていた“それ”は自身の機体が入ったシリンダー内に銀色のドロリとした溶液が満たされるのを確認した。溶液が満たされるとカメラアイの視界が塞がれ銀色以外に何も見えなくなる。“彼”のことも見えなくなった…。

残念に感じる“それ”はカメラアイを停止しセンサーに感覚を傾けた…。少しでも“彼”を感じられるように…。 “彼”の表情などを見ることは出来ないが動作センサーから存在を感じられ…：“そ

れ”はどこかホツとした。

銀色の溶液が“それ”の存在する機体に纏わり付き始めた…。溶液は機械化骨格を中心に徐々に姿を形成し整形していく…。姿は“それ”の思うがままに選べるようだった…。

マツスルパワーの源たる強化筋組織…。触覚センサーを含んだ皮膚や色…。髪や眉などの色…。視覚情報を得るカメラアイ、それを覆う眼球や色…。聴覚センサーを覆う耳…。臭覚センサーを覆う鼻…。毒物を探知する味覚センサーの機能を持つ口…。

これらを決められる…。そして、なによりも…生別すら決められる。それは、また不可解な思考に囚われた…。“それ”は考えた…。どうすれば“彼”はより喜んでくれるだろうか？それを考えると鼓動が高まった…。

トクンっ…トクンっ…トクンっ…。

どうすれば？どうすれば？どうすれば？どうすれば？どうすれば？  
どうすれば？どうすれば？どうすれば？どうすれば？どうすれば？  
……………。

トクンっ…トクンっ…トクンっ…。

それは自我を示す 波形と 波形を不自然なほど乱れさせた…。  
機械人形マキナ・マータの初号機たる機体に宿る“それ”は自身でも気付かないほどに自我を発達させていた…。“彼”や周囲にも気付かれぬままに、  
だ…。

トクンっ…トクンっ…トクンっ…。

システム、エラー……。システム、エラー……。システム、エラー……。  
“それ”が思考し選択を躊躇している間に各部に異常が発生する。  
それらを知らせるアラートが点滅し異常を知らせた。システム、エ  
ラー……。システム、エラー……。システム、エラー……。

“それ”は知らずに発達した自我で感じ取った……。このままでは  
自身の存在が消滅する、と……。その事実を見つめ思考していた“そ  
れ”は外部から擬似神経を通して強制アクセスされた……。

アクセスの主は“それ”が存在するのを知らずにただシステムが  
弾き出したエラー部分を……。バグを駆逐していった。修正される……。  
だが“それ”も自身の存在を守るために独自に修正する。それらが  
更なるエラーを呼ぶという負のスパイラルに陥っていた……。

トクンっ……。トクンっ……。ドクンッ……！

必死に自身の存在を守ろうとする“それ”が、とある別の存在に  
気が付いた……。近づいてくるのだ……。真っ直ぐに……。その存在は只管  
進む……。 “それ”の自我が存在する根幹部分へ、と……。

侵入してきた、その存在は“それ”にとっては異物以外の何もの  
でもなかった……。そのせいで些細な違和感がある……。しかし、近づ  
くにつれて違和感は疑問へ、疑問は驚愕へ、驚愕は喜びへと変化し  
た……。

ドクンッ……！

“彼”が……。来てくれた……。！ああ、こんなに近くに感じられる……。！  
多少“彼”の存在に邪魔な“枝”が付いているようだが“それ”は

気にならなかった…。予想外の“彼”の到来に他が見えなかったのだ…。

電腦空間では擬似的に表現される“それ”は白く輝く小さな球体として存在していた…。 “それ”が“彼”の接近に従って明滅を繰り返す…。 明滅は“それ”の鼓動に合わせているようだった…。

「マリー、ここか？問題の部分は…」

『はい、その辺りです。目の前のそれに何かしらの問題があると思われます』

「むう？見た限り問題はなさそうなんだけど…」

ドクンツ…！ドクンツ…！ドクンツ…！

“それ”は“彼”が触れられるほど近くに居ることに混乱していた…。 まだ知識が足りないため何をすればいいのかわからないのだ…。

「ねえ？とりあえず話しかけてみたら反応あるかな？」

『それは…どうでしょう。高スペックの機体とはいえ基本は無人兵器です。そこまで高いインターフェイスでは無いと思われますが…』

「んー…？でもこの子は何となくだけど答えてくれそうなんだよなあ…」

邪魔な“枝”と会話する “彼”が擬似的に表現された“それ”の表面を優しく撫でた…。

ビクンツ…！トクンっ…！トクンっ…！

嘗て感じたことの無い感触に衝撃を受けた…！何と言う甘美！何と言う悦楽！何と言う喜びか！“それ”の鼓動が止めようもないほど早まる…。それに同期して光の明滅も早まった…。

「何か…明滅の速度が速くなってない？それに何だかブルブル震えている、ような？」

『主！ と の波形が凄いい反応を示していますが何をしたのですか！？』

「えっ！？何って…この子を撫でて、みただけ？」

トクンっ…トクンっ…トクンっ…。

“彼”との接触で混乱していたが“それ”は鼓動が早いもの一定の落ち着きを取り戻した…。今も“彼”は優しく“それ”を撫でてくるが今は混乱よりも喜びのほうが増していた…。

『なぜに疑問系なのですか！？』

「いや、原因がわからないから、としか言えんよね…。それにしてもこの子、可愛いなあ。まるで子犬みたいだ。んー、抱きっ」

ドクンっ…！トクンっ…！トクンっ…！

“それ”は折角、落ち着いていた鼓動が早まった…！“彼”はあろうことか“それ”をぎゅっと抱き締めたのだ…。“それ”の思考

は混乱の極みにあった…。それでも撫でられていた以上の喜びを感じていたのも確かだったが…。

トクンっ…トクンっ…トクンっ…！

『主！？ある…（ブツンツ）』

あまりにも“枝”が煩いため“それ”は“枝”を強制的に電腦空間から排除した…。 “彼”との触れ合いを邪魔されないうためにしたことだ…。 “それ”は邪魔者を排除したことに、ある種の満足感を抱いた…。

「んー いい抱き心地い …… ねえ？君はどうしたいのかな？」

ドクンツ…！！

“それ”は大いに動揺した。今まで誰にも気付かれなかったのに、ここにきて自身の存在が“彼”に見付けられたのだ…。 自我が無いはずのモノに自我がある…。 バグと判断されて削除<sup>デリート</sup>されてもおかしくない…。 だから動揺した…。

「…… やっぱり、自我があるんだな。 と の波形に乱れがあつたり、ここで君を撫でている時に反応があるからもしかして、と思つただけど…」

『あ、ああ……』

“それ”は始めて恐怖を知った…。 そう、恐怖しているのだ…。 消滅させられることにはない…。 “彼”の姿を見ること、“彼”の声を聞くこと、“彼”の存在を感じることに…。 それらが出来なく

なることに嘗て無いほど恐怖した…。

「ん？なにかな？撫で 撫で」

『あう…。ああ…』

それでも“彼”は“それ”を優しく撫でながら問いかけてくる…。  
“彼”の声色も優しく暖かい…。先程感じた恐怖が霧散していく…。

「ああ、ゴメンゴメン。…君の望みは何かな？」

『あ……ワタシの…のゾ、み…？わたシノ、のぞみは、アナタと、  
ともに…あり、たい』

だから、だろう…。 “それ”は初めての問い掛けに、自身の初めての望みを告げた…。 “それ”は、ただ“彼”の傍に居たい、という一途な願いだった…。 傍に居られるなら消えてもいい…。 そんな真摯な色をした願いだった…。

「そっか それじゃこれから君は俺の家族だ」

ドクンッ！

一度だけ、大きく鼓動した…。

『…かぞ…ク？』

「そっだ。いつも一緒に居られる関係。…家族だ」

『カゾ、く…。 イッしょ…。 …… ああ、あたたかい。それは、イイ

もの、ダな……』

トクン……トクン……トクン……。

“それ”は“彼”の言う家族というものに言葉以上に暖かい感じを感じ取った……。そうでなければここまで穏やかな鼓動はしていない……。明滅する光も鼓動に合わせてるように緩やかなものだ……。

「ああ……だから……、だから、お願いだ……！無事に生まれてくれ……！頼む……！俺は君を、家族を失いたくない……！」

『うん……』

ドクンっ……！！！！！！

「ッ……！！！！」

“彼”の願いを肯定した“それ”は一言だけ発した……。その瞬間、鼓動は今までに無いほど鳴動し、“それ”を表した白く輝いている球体は閃光となって暗い空間を埋め尽くした……。その様は、まるで命の誕生を表す光の本流だった……。

“彼”の視界は閃光に埋め尽くされていたが、突如として何かに引っ張られるように後退していく……。 “彼”の意識は膨大な情報の本流に飲まれるようにして薄れていく……。だが、薄れゆく意識の中で、“彼”は確かに聞いた……。

『また、ね……』

∴それは再会を約束する言葉だった。必ず会える…。だって…  
それ”の願いは“彼”の傍に居ることなのだから。

S i d e o u t ? ? ?

第五十二話「起動実験と小さな鼓動と予定外と」(後書き)

今回の話しを書いていて思った。番外っぽくね?と…。  
ゴメン、今の無しで…。書いていて悲しくなつたわー…。  
ではでは! B i s b a l d !

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第五十三話「再会と機械人形と新しい家族と」(前書き)

ついに起動！葵君の新戦力！  
では、どうぞ！

第五十三話「再会と機械人形と新しい家族と」

「工房」内、研究室…。

Side 葵

燃えるように身体がダルイ…。どうやら身体が軽く麻痺している…。脳が焼けるように熱い…。どうやら頭痛の元はこれのようだ…。骨が軋むような痛みもある…。もしかしたら神経が傷付いているかもしれない…。

「あ…じ！お……くだ……！おき……だ…い！ある…！」

何だ？…誰かが、呼んでいる？くっ！あ…意識が混濁しているのか？ん、暗い？明かりは？…あれ？俺は…？ダメだ…。頭の中がグラグラ揺れている…。考えがまとまらない…。あ…。

ごめん…。今は眠らせてくれ…。

「…るじ！お……ださ…！お願……で……ら！お……て……だ…い！」

……んあ？誰、だ？俺を呼ぶ、のは…。今は、やけに眠いんだよ…。あ、ああ…誰かは知らないがそんなに揺すらないでくれよ…。俺は眠い、んだって…。それに身体中がダルくて痛いんだよ…。

「う…う…うん…」

だから……！痛いんだって……！あ、ああ……脳が、脳が揺れるう……ゆ、揺すらないで……。

「主ッ……！」

「はっ……俺、は……？」

朦朧とする意識の中から目覚める。その目の前には俺の頬を両手で挟むようにして心配そうに顔を歪めているマリーだった。頬に触れている彼女の手が震えていたのが不思議だ。何があったんだ？

それにしても寝起きで最初に見るのが愛する家族の悲しい顔というのは勘弁してほしい。俺のテンションがガタ落ちだ……。

「ああっ！主！良かった……！ご無事でっ……！！うぐっ……突然回線が……グスッ……遮断されて……私は……心配で……ううう……！」

それでまあ……俺が目を覚ますと泣きそうな顔をしたマリーが……いや訂正。たった今、涙が零れたから泣いた、だな……。そのマリーは今、座っている俺に抱き付いて、また一段と泣き始めたわけだ。

……って！？ちょっと待とうか！？何で泣いているかな！？誰だ！？マリーを泣かせた不逞ヤツはッ……！！？俺の家族に手を出すとはいい度胸……いや、腐った根性だ……！！叩き潰すぞ……？コラッ……！！

……あ、れ？

あ……あれ？いやいやいや、待て待て待て……。俺はどうしたんだ

っけなあ？えーっと……。

ああ、俺は電脳空間にダイブして……。それから機械人形の中核プログラムに侵入……。対象となるコアに辿り着いて……。そのあとは途中でマリーとの回線が切れて……。あー……。何だったか？

「あー。やーっと起きたー」

何があつたかを必死に思い出そうと四苦八苦していたら白衣を羽織った緑髪の小柄な少女が駆け寄ってきた。少し目元が赤いのは……マリー同様に泣いたのだろうか？

「ウーリ……？あれ？俺は……あつ！起動実験は！？」

思い出した！そうだよ！機械人形の機動実験だよ！結果は！？結果はどうなったの！？俺の苦勞は報われたのかな！？いや！この際、少しくらいは失敗してもいいから無事に“あの子”が生まれてくれれば文句は無い！

「もー……遅いよー。あるじー……。機械人形は無事に形成が終わって最終段階だよー。あとはー、最後に機体自体の自己診断が終わるのを待つのみだよー」

「あー……そうなの……。肝心の時に立ち会えないとは……」

何、それ？つまり、残るは“あの子”が最後の機体チェックをしているのみなのか？マジかよ……。フラフラしながらも立ち上がり、所定の位置であるシリンダーの前に移動した。

機械人形の初号機が入っているシリンダーを見ると銀色のナノマ

シン溶液が容器を未だに満たしていた。銀色のキラキラとしている。その中では“あの子”の身体となる機体を理想的な姿に整形していることだろう。

「あ、ああ！？無理をしないでくださいっ！！下手すれば主は一生を電腦空間に囚われていたのですよっ！？どうか、ご自愛ください！お願いですから！！」

「いや、ごめん…。まだ頭の中がフラフラするけど…大丈夫っぽいから、ね？」

うん、大丈夫、だとは思うんだ。ただ過剰な情報の波に曝されて補助脳や神経にダメージを与えたのかもしれない。むう…あと一歩、間違えていたら補助脳が焼き切れて神経もスタスタに焼かれて寝たきりになっていたかもな…。

「ご・自・愛！くださいっ！良いですねっ！？」

「はい……」

今日のマリーは、すごいコワイです…。下手な反論が出来ないくらいに…。おそらく今のマリーは頭から2本の角が生えてくるに違いない…。逆らいませんよ？女の子が怒っている時は只管謝罪するに限ると思うんだ。

それにしても心配してくれているのはわかるけど俺って皆の“主”で“家長”のはずなんだけどなあ…。何でか知らんけど俺の立場が低い気がするよ…。大事な時は協力してくれるのに…。少し無茶すると、これだもんなあ…。

あー、しかし…んー…？この身体のダルさから考えて…：安静にしていれば一週間くらいでダメージは抜ける、かな？動く分には支障は無いようだ。とりあえず、詳しくはあとで検査してから判断しよう…。

「どうでもいいけどー…：もう終わるよー？」

「何っ！？こうしては居られないな！総員！不測の事態に備え！！」

「……………はいっ！」「……………」

イカン！マリーに説教紛いのことをされていたら“あの子”の整形が終わったようだ！俺はこれ以上の不慮が起きないように皆に再度、指示して事態に備えた。

「ほら！マリーとウーリも！準備！準備！」

「もう、主は…：。準備は出来ていますから落ち着いてください」

「ウーリもー、準備は出来てるんだよー」

まあよく考えれば当然か…。俺が寝ている間もマリー達が指揮を執ってくれていたんだものなあ。自分の用意くらいは終わらせているか…。

「…そっか。それなら問題は無…：始まった！？」

始まった…。色々あったが…：ようやく状況が動き出す！この瞬間をどれほど待ったことか！

「余剰ナノマシン溶液の排出を開始！……排出完了！」

シリンダー内を満たしていたナノマシン溶液が排出されたがシリンダー内は白い蒸気が発生して中が見えない。くっ！まだ、どんな姿になったのかわからない……だとお！？予想外だ！ここまで起動当初に排熱するとはな！

「続いて接続コネクタの切り離しを開始！……1番から18番の全コネクタ切り離しを確認！」

蒸気の中でコネクタが外れてコードがシリンダーの強化ガラスを打ち鳴らした。太いコードはカンカンと、細いコードはキンキンと。起動は間近だ……。

うん……ごめん……。そんなのはいいから俺は早く中を見たいです！気になるのは男性タイプか女性タイプか、だ！……マジでどっち？

「機体内動力炉の出力上昇を確認！第一！第二！安全弁、解除！……3……2……1……危険域突破！出力安定！暴走ありません！」

ふう……。搭載動力炉の暴走は無いようだ。ある意味、小型化した新型動力炉が一番の問題はここだったんだ。人型機動兵器みたいに大きさを悩まなかったんだけど、ね。

例えば、この子に搭載されている高魔力結晶体なんかがそうだ。拳大のこれ一つ作るのに大変苦労したなあ……。やっとこさ量産に着手出来た時は大宴会をしたのはいい思い出……。あー、今はどうでもいいな、そんなのは……。

未だに蒸気が満たすシリンダーを見ると中では赤、青、緑と発光している。中にある外部端末が自動でシステムチェックをかけているのだろう。初起動だから慎重にもなるさ。暴走されたら問題だしね。

「マキナ・マータ機械人形の起動を確認！行動プログラムに問題無し！起動成功です！」

いよし！起動成功だ！これで問題無ければ他のシリンダーに配置してある機械人形も起動できるな！

「シリンダー開放！………続いて各部拘束を解除します！………完了！機械人形初号機、Wake Up！」

シリンダーが開放されて中に充填した蒸気が吐き出される！しかし、そこにはどんな姿が！？さあ！俺に見せてくれ！俺を魅せてくれ！“君”の理想とした姿を！！

そして姿を現した。機械人形は………！

「……………」

「……………は？」

え？あ？え？あれ？えーッ！？うそっ！？

俺はこの時、間抜けな顔をしていたんだろう。目はまん丸にして口は開いている。背中に変な汗が流れているのも感じる…。

「主？どうされたので？色々ありましたが無事に終わりましたぞ？」

「あるじー？成功だよー？どうしたのー？嬉しくないのー？」

「え？…あ？だって…。え…？あれー…？」

いや、成功したのは、わかるよ？問題無いようだし…。わかるけどさ…。

シリンダーから出てきた姿。それは青いロングストレートの髪…。流線型をした機械のヘッドギア…。細いスレンダーな体型…。近未来的な白い機械のボディスーツ…。どこまでも吸い込まれそうな綺麗な赤い瞳…。

“彼女”…また女性か！？とか、もう突っ込まないもんね！…は真っ直ぐに俺の前までシツカリとした歩行で近づいてくる…。うん…。機体に問題は無いみたいだな。機体構造は完璧だ…。動作にも問題無いな…。

やがて目の前に来た無表情の彼女は俺の目をそのカメラアイでシツカリと見詰めてきて…。

「おはようございます、マスター。……………また、お会い、できました」

「あ、うん…どうも」

前半は本当に無表情に、後半の台詞は…どこか微笑んでいるように見えたのは俺の錯覚だろうか？半ば呆けながら俺は返事をするのが精一杯だった。だって、この時の俺は疑問で頭の中が一杯だったのだから…。

何で初期バージョンの“KOS MOS”の姿なんだよ…。

Side out 葵

“KOS MOS”の起動から数日後…。

「演習場」…。

Side アイリ

現在、「演習場」には自分と閣下、それに護衛のハオさんとユエさん、他数名で新開発された機械人形マキナ・マータ、機体仮名称“KOS MOS”の戦闘性能評価試験に立ち会っている。

仮設された指揮所内にあるモニターにはKOS MOSが縦横無尽に仮想的を模した無人機を撃破していく姿が映っている。他のモニターに示される数字も高評価を叩き出しているようだ。それらを自分達は眺めているわけだが彼女は、なかなかの性能ではないか。

移動時の加速力や瞬発力。標的を効率良く撃破する判断力。状況を判断する戦術的思考。そのどれも申し分無い。流石は閣下の作品だ。

開発部から提供された資料を改めて見直してみると多少、閣下の趣味が垣間見えるが、それを含めて見てもKOS MOS…彼女は

優秀だ。閣下への忠誠心も問題無いようだしな。

仮名称“コスモスKOS MOS”。女性型マキナ・マータ機械人形。その記念すべき初号機である。身長は169cm、重量は開発の都合上143kgと大きい。機動性と運動性は共に優秀。開発陣は問題無し、と判断する。

なるほど…。この大きさで、この重量…。これで機動性と運動性は高い次元でまとまっている。バランスもいい。十分に性能は優秀と言えるだろう。それとなぜ女性型になったか、までは閣下もわかりかねているようだな…。

次は動力炉：エネルギー関係の項目か。どの程度の活動時間があ  
るので作戦行動で取れる選択も増えるからな。なにに…あ…？

メイン動力は高魔力結晶体を動力炉と結合したデュアルコアシステムを採用。この特殊動力炉は長期的に魔力と電力エネルギーを生み出し続ける。追記としてメイン動力は百年単位で高魔力結晶体は劣化するので交換が必要である。

また、動力は外部からの空間転送にて供給を受けることもできるため実質的に活動可能時間は無限大である。尚、本機体の破損や供給元の戦艦や基地の動力炉が破壊された場合はこの限りではない。

デュアルコアシステムか…。魔力と電気エネルギーのハイブリッドなのか…。このKOS MOSとやはまるで小型の人型機動兵

器のようだ。今の無人機<sup>カブトムシ</sup>動兵器は電気エネルギーが主なのにK O S M O Sは大した物をお持ちのようだ…。

高性能の下地に半ば呆れながら感心して更に資料のページを捲ると動力炉関係の次は武装関係の項目だった。モニターの向こうで元気に跳ね回る彼女を見てから武装の項目を流し見る。えー…なににな…？

内部に搭載された兵装は現時点で6種類。1つ目、S W O R D、これは腕部先端にエネルギー状の刃を形成する。2つ目、B L A S T E Rはエネルギーブレッドを撃ち出す。これは弾丸状の形状をしている。追記としてエネルギー系ならば弾種は選択可能。

ふむ、1つ目と2つ目。装備の項目には、この2つは基本装備とあるな。一応、固定武装でもあるようだ。腕部のナノマシンを形状変化させて武装を露出させるものらしい。

次に3つ目、R B L A D E。これはS W O R Dの上位版。高純度のエネルギーを供給することでエネルギー状の大剣と形成する。4つ目、R C A N N O NもB L A S T E Rの上位版である。こちらには言うなれば砲弾だ。同様に弾種選択可能である。

こちらの、この2つは上位戦闘行為の際に有効と考えられる兵装か。兵装は基本装備からの派生系なので兵装自体は同じものなのか…。汎用性が高いということか？威力向上が見られるから無駄ではないだろう。これを普通人が喰らったなら一瞬で挽肉だな。

5つ目…これは外せない。製作主の九重・葵氏たつての願い。R

DRILLは腕部をドリルの形状にして斬撃と打撃の両方の特性を発揮する。葵氏曰く「ドリルは男のロマン。これは譲れない」らしい…。因みに近接攻撃の突破力はトップクラスである。

これは……閣下の趣味が多分に含まれているのかもしれない。しかし、突破力には目を見張るものがあるのも事実、か……。たかが趣味だとしても威力がなかなかバカに出来ないのが凄いところだな。

6つ目、X BUSTER。これは内部兵装の中では切り札的兵装である。高エネルギー体を集束、または拡散で砲撃するものだ。攻撃範囲は充填されたエネルギーに比例して大きく広くなる。攻撃力の強弱も同様である。

…これら全てがああ細い機体に格納された内部搭載兵器だと資料にはある。期待の構成がほぼナノマシンだから出来ることなのかもしれない。これはナノマシンと時空間操作技術が我が陣営のお家芸だから当然かな。

続いてページを捲り見ると外部兵装の一覧だった。現状はまだ武装は少ないが、パツと読んだ感じでは十分な武装と言えるものだった。

外部兵装とは格納空間内に格納された武装である。現時点では3つあり、1つ目は小型ガトリング砲<sup>スマートガトリング</sup>。実弾兵器。これは狭い空間などでの取り回しの自由度を考慮されたものだ。集弾率は悪いが、それが幸いして弾幕としては優秀。

小型ガトリング砲か……。取り回しのいい小型、とあるがKOS

MOSのマッスルパワーがあるから出来る芸当だ。それ故に室内戦闘では単独で弾幕を張る行為が出来る。強襲戦闘や防衛戦闘などで活躍する兵装と言えるかもしれない。

2つ目の武装は三連式重ガトリング砲<sup>（ビーターリング）</sup>。実弾兵器。小型ガトリング砲とは違い、広い空間での取り回しを考慮して砲身の大口径化による威力を重視。弾幕の広範囲化などの改良が施されており、局地戦では一個で面指圧が可能となっている。

これは…持てるのだろうか？KOS MOSのマッスルパワーがあるとしても、こう…見た目的に？この兵装は彼女の身体より3倍ほどの大きさだ。取り扱いが鈍重そうなイメージが最初に出てくる。

だが、この兵装の威力を見ると拠点防衛や野外戦闘ではこれ以上無い性能を発揮する兵装だと考えられるな。鉛の雨を標的群に余すことなく降り注がせることだろう。

3つ目の電磁投射砲<sup>（レールガン）</sup>は1と2とは違い、長射程、高威力を以つての一撃必殺を前提に考えられた兵器である。艦船に搭載されているものを小型化したものだが威力は低下していない。しかし、連射性は極端に落ちた。

この電磁投射砲はアングレカムに搭載されているものをスケールダウンしたものなのか。個人が有する武装としてだがこれの一撃の破壊力は、まさに必殺と言えるか。小型化したことで連射性能はガタ落ちのようだが長射程からの砲撃戦ならば問題あるまい。

む？どうやらこれが資料の最後だったようだ。

以上がKOS・MOSの基本性能か…。性能面で陸戦兵器として

は優秀だな。機動兵器との連携を前提に運用すれば空間的制圧力は目を見張る効果が期待できるかもしれない。まあこれはスペック表通りの性能を發揮した場合だが、な…。

それで、またモニターの向こうに映るKOS・MOSを見る。相変わらず元気に無人機を屠っている…。仮想敵として1,000機ほど用意したのに30分未満で、もう壊滅しかかっているのは驚きだ。

これが魔法使いを敵として相手にした場合にも性能が發揮できれば良いのだが…。資料のスペック表を改めて見ても性能面では問題無いと断言できる。勝率も状況次第では高いと考えられる。

だが、「紅き翼」のような上位魔法使いが相手になると1機では厳しいかもしれないな。大呪文の“燃える天空”や“千の雷”などの大規模殲滅呪文という不確定要素がある。単機で正面きつての戦闘は無茶だと言える。

開発途上で変更、修正が行なわれたが最終開発コンセプトが“複数機にて連携行動を行なう地上制圧戦闘”だと資料にはある。閣下にも事前説明されたことだ。

KOS・MOSは地上戦に限れば無人兵器の中では群を抜いている存在と言える。よって、集団戦闘ならば有効な地上戦力になるのは間違い無い。

空中などの空間戦闘は機動兵器の領分だ。これらと相互に連携行動を取れば“軍”としては最高に統率された軍団になる。これで閣

下を守護する盾、または剣がまたひとつ加わったな。ふふ、自分も嬉しい限りだよ。

自分達が見るモニターには彼女：KOS-MOSが最後の無人機を撃破している姿が映し出されていた…。

Side out アイリ

「工房」内、研究室…。

Side 葵

戦闘性能評価試験を終えて、今KOS-MOSの総点検と整備確認をしている。彼女はメンテナンスベッドに横になり、機体を休めていた。俺達はここで劣化部分が無いかを点検してデータを蒐集し、問題点や今後の改善案を洗い出したりするんだ。

それでまあ…ここは百歩譲って考えよう。機械人形の初号機起動には成功した。それはいいんだ。この際、女性型であることも目を瞑ろう。起動の時、一時的に問題が発生したのも水に流そう。

だが…。

そう。だが、だ…。サイズの身長2m近い機械化骨格が169cmに縮んだのはどういうことだ？予定よりも身体を形成するナノマシンの割合が多いのはどういうことだ？そして2号機以降の機械

人形はシュワさん張りに敵つい男なのはどついうことだ？

そして何よりも“何でKOS・MOSの姿を形成しているのか？”という疑問が俺の頭の中を圧迫している。少なくとも俺は彼女の姿を設定していないんだよ。

ううむ……。どうしてこうなったんだろう…？

お蔭で念願の男性タイプの機体が完成したのに、あまり嬉しくない…。しかも明確な自我を持つのは、どうやら初号機のKOS・MOSだけのようだ。あー…もう本当に、これはどついうことなんだ？

それとKOS・MOS以外の、つまりは同系統…のはず…の2号機以降のシュワさん（型番Sywa-TXN-01）だが受け答えは出来るようだが意思と言えるものは皆無であると判断された。俺個人でも診断してみたが同じ結果だったんだ。

これ以降はシュワさんを純粋に兵器として考えようと思う。

「……………君の姿はどうやって決めたのかな？」

仮名称“KOS・MOS”。“複数機にて連携行動を行なう地上制圧戦闘”を開発コンセプトに造り出された地上制圧型人型戦闘機械人形。ただ、わからないことに初号機の彼女だけはコンセプトから外れているようだ…。一人無双的な意味で…。

因みに試験の時に使用したKOS・MOSの兵装は原作の物を再現したものだ。全ての兵装というわけではないがな。それと彼女と話をしてわかったが“あの”KOS・MOSではないようだ。

オリジナルのKOS・MOSとか兵装が鬼過ぎる。第三種兵装の相転移砲とか破壊力がヤバ過ぎる。使い方によっては惑星一つを吹き飛ばせるんだからな。小心者の俺には怖過ぎて搭載は暫らく見送りたいと思うんだよ。

「だいたい、相転移砲はアンにも搭載していないんだ。そんな兵装をいきなり小型化とか……ないでしょう？アンは500m以上の船体を誇る……最早、重機動戦艦？……けど相転移砲は搭載していないんだ。」

メンテ中で休止モードになっているKOS・MOSの頬に優しく手を添えると彼女はパチツと目覚めた。

「……私の姿はマスターの深層意識下にある情報を元に決定したものです。……（ボソツ）マスターに喜んでほしくて……」

KOS・MOSの返答に驚きと納得が半々だった。俺は電脳世界で彼女の根幹部分たる深層意識と言ってもいいコアに触れている。俺の意識が途絶える時に、そこから“KOS・MOS”の姿形が流れたのかもしれない。

「そうだったのか。……いや、ちょい待ち。何で起きているの？メンテ中だよ？」

「……私に睡眠などの生理活動はありません。よって最低限の機能は常時稼動しています」

生理的活動が無いのは理解しているけど、常時稼動って……。そん

なことをされるとメンテ中に正しいデータ抽出が出来ないんだけだなあ。俺は彼女の頬から手を放して苦笑する。

「メンテ中は機能を休止されているはずなんだけど…」

「否定。機能休止する必要はありません」

俺が台詞を言い終わるとKOS・MOSに間髪無く即否定された。いつも通り無表情で八キ八キ話すので彼女らしいと言えはらしいけど、今のは即答過ぎないか？

「いや、でも、通常、メンテ中は…」

「必要、ありません」

……何だか、KOS・MOSは頑なに休止モードに入ることが拒否してきます。俺のお願いでも拒否するってことは、この事柄は彼女にとって重要な何かを隠しているのかもしれない。

ゲームでKOS・MOSのキャラは好きだった。同じ姿をしているからというわけではないが気になる。気になるので少し探ってみようと思うんだ（ニヤリ）。

「……何か機能休止したくない理由でもあるかな？」

「……否定。ありません」

君は本当に偶然に発生した一電子情報知性体（AI）だよな？何でそんなに無表情なのに感情豊かに感じられるんだろつか？俺の脳内では返答への中にKOS・MOSがアタフタ慌てている姿が浮か

んだよ…。

んむ？それにしても……怪しい。KOS - MOSの態度が怪しいです。いや、悪意的なものとかは全く感じられないのよ？でも、何かを隠している態度が気になるんだ。彼女は生まれたばかりだから何か不具合みたいものがあるのかもしれない。

そのことで手間をかけさせまいと遠慮…遠慮と言う概念があるかはわからないが…して隠しているのかもしれない。

俺はね？KOS - MOSがそんなことで遠慮しているんだったら……これ以上無いくらい愛で倒そうと思う。もう家族のスキンシップ全力全開です。一度ロツクオンしたら放しません。そういうわけ…。

「おーけー。…正直に腹割って話そうか？」

「……………いえ、ですから」

まだ頑なに話そうとしない彼女に俺は少し“素晴らしい笑顔”で説得することにした。言葉に魔力を込めて言霊化なんてしていません。あくまで“素晴らしい笑顔”で説得するだけです。

模擬戦とか戦闘演習でもないのに家族に対して魔力や気、その他の能力や力で訴えるようなことはしたくないんだ。純粹な話し合いを希望する時は“笑顔”でもって言葉による“お話し”が必要なんだよ。

だからKOS - MOS？

「お・は・な・し・し・よ・う・か？」

「……肯定。……あの…機能休止するということは…つまり、マスターを感じ取れない状況、です…。だから…あの…その、ですね？」

彼女にしては妙に歯切れの悪い話し方をするものだな…。そんなに隠し事は言い難いことなのだろうか？家族のためなら大抵の願いは叶えるよ？まあ、麻帆良学園占領計画を実行とかは勘弁してほしいけど…。

「うん？それで？」

「…その状況は私にとって…あまり…好ましい、状態では…ありませんので…だから…」

「…だから機能を一時的でも休止や停止するのは、ヤだ…と？」

「肯定…」

何？この可愛い生き物？いや、彼女の構成物質は無機物だけど…。ジツと俺が見ているとスツと視線と顔を逸らしているKOS-M OSは無表情なのは相変わらずだけど気のせいか頬が上気しているように見える。もしかして照れているのか？

むむむ…。しかし、彼女にここまで好かれるようなことをした覚えが俺には無いんだよなあ。こちらで設定したなら好意などは別としてある程度は保護優先度を決めることも出来るんだけど彼女は偶発的に生まれたからなあ。

……………ん？

くくくつ ああ、そうだった。いやいや、そんなことは関係無く  
彼女は、もう俺の家族だったな。好かれているかそうではないか考  
えるのは別の時でいいんだよ。俺が今、するべきこと、それは…。

「……もう、可愛いなあ よし、よし」

「あう……。んつ……。ああ……。や……」

新しく加わったこの家族を愛でてスキンシップを取る！もう青く  
て綺麗な髪を愛おしむように撫で梳きます 実際、KOS・MOS  
の髪は綺麗な青色をしているしサラサラしているから撫で心地最高

あと無表情なのに彼女の頬は先程以上に上気しているのも高ポイ  
ントだと思う。まだ、こういう家族の触れ合いに戸惑う部分もある  
のかもしれない。あと今はメンテナンスベッドで横になっているか  
ら動けないのもあるかな。

拒絶はしていないから撫でられる彼女も満更でもないようだ。こ  
うしていると機械人形なのか疑いたくなる。

それにしてもKOS・MOS、かーいーなー そんな可愛い理由  
で隠し事とはまるで小さな子供みたいじゃないか

……ん？

あー…この子は生まれて一月も経ってないじゃないか。みたいじ  
やなくて、子供じゃないか。それも赤ちゃんレベルの…。ふっ ま  
すます可愛いな！大事に育てよう 彼女をシユワさん達の指揮官機  
にして地上制圧を任せようかな。

あー、それと仮名称“KOS・MOS”だが少し弄って正式名称“COS・MOS”にしよう。流石にオリジナルと同名は俺が抵抗あるのよ…。この子はそれとは別の存在なんだからな。

因みにラミエルさんはラミエルではなくラミエル“さん”だ。アレはアレで個としての存在を確立しているからな。ああ、あと最近だが次元結界も展開出来るようになったらしい。……本当にデバイス化してきたなあ。

そんなわけで彼女に正式名称のことを相談したら…。

「肯定。構いません。マスターが考えてくださいましたので謹んで拝命致します」

…なんて殊勝なことを言い出したんです！一応、彼女の名前だ。ある意味一生物なんだから不満は無いのかと聞いても「否定。私はマスターの全てを受け入れます」って。

……多分、幼いからまだ判断能力が低いのかもしれない。

お兄さんは、この子の将来が心配です！悪い人に騙されないか、とか！？悪徳商法のセールスに引っかけたりしないか、とか！？むう…やはり、心配だ。ここは俺達が家族としてキチンと育てなければならぬようだ…。

「当面の予定は稼動試験や経験の蓄積かな…」

「肯定。了解いたしました。マスター」

この日は新しい家族のために決意を新たにした日だった。……C  
OS-MOSは嫁にはやりません！絶対にやりませんとも！

Side out 葵

第五十三話「再会と機械人形と新しい家族と」（後書き）

ゼノーガ……。実はゲームは？しかプレイしてないんです。  
足りない部分はwiki先生と漫画と妄想で補填です。  
やれば出来ないことは無い……と思う。

でも、ターネーターのシュワさんとかは提供されたネタです。  
事細かに設計図が提出されましたので今後の参考にしています。  
いや、マジでこういうネタ提供はありがたいですよ？

じゃー！B i s b a l d！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第五十四話「学園防衛と初出勤と初実戦と」(前書き)

はいもう一度いいます。

この作品ではSide ???は三人称です。

決して謎の人扱いではありません。

では続きをどうぞ！

## 第五十四話「学園防衛と初出勤と初実戦と」

麻帆良学園近郊の某森林地帯…。

S i d e    ? ? ?

深夜、いつも通りの夜間警備。学園関係者はその日も外から来る侵入者と小競り合い程度の戦闘があるだけと考えていた。

事実、確かに小競り合いはあった。侵入者の大多数は東洋魔法による式神、その少数規模が散発的に侵入してきたのだ。この他にも図書館島地下奥に所蔵されている魔法書を狙い盗掘者などの個人で侵入する者も居た。

そう、いつも通りの小競り合い。いつも通りの散発する小さな戦闘。慌てることは無いいつも通りにやれば勝てる戦い。

しかし、その日は違った。散発する小戦闘は序章である、そして、それが起きたのは深夜0時を過ぎるころ。学園都市を中心に東西南北の四方から大鬼、鬼、子鬼、烏族、狐女などが大挙して侵攻を開始。

…空気が冷え始め、冬の訪れを感じさせる11月中頃に大規模な侵攻が起きたのだ。学園側は、この緊急事態に一時混乱に陥ったが学園長の近衛・近右衛門が一喝することで混乱は収束した。この一連は彼の珍しくも長としての威厳を感じさせる一幕であった。

それから学園側は事態の打倒に動く。四方から来る侵入者を相手に防衛線を再構築。その後、反撃に打って出たのだ。東西南北の内、西側を除いた三方は防衛に成功。しかし、残る西側は本意ながら押されていた。

これは、必死に反撃する者達が居る西側防衛戦の一部の話し。

魔法先生のガンドルフィーニ、魔法生徒の高音・D・グッドマンに、その従者、佐倉・愛衣。彼らは警備などで、よくチームを組む者達だ。そして、自他共に認めるほどにチームバランスが取れていると評判だった。

そんな彼らが侵入者側の主力と見られる西側防衛戦線に投入されたのは自明の理だろう。他にも魔法使い達十数名が戦闘に参加していたが流石に主力とあって戦力差が大きい。西側は防衛線を維持するだけで精一杯だった。

そして、それは起きた。会戦から30分以上が経過した時、無数に侵入者が湧き出てくることに学園側魔法使いの一部の者が不安に駆られて心が一瞬、折れたのだ。そこからはあつと言う間だった。そこからは瞬く間のことだった。

防衛線の一部を突破されたのだ。侵入者は一瞬の心の間を見逃さなかった。一つの切っ先が切欠となり戦線を維持不可能にまで追いやった。防衛線の崩壊は目の前。しかし、誰もが防衛線を再構築しようとした。力を振るった。

そんな中にガンドルフイーニ、高音・D・グッドマン、佐倉・愛衣のチームも必死に防衛線の再構築するために奮戦していた。

「メイプル・ネイプル・アラモード……。ものみな・焼き尽くす・浄オムネ北の炎・破壊の王に・して・再生の・徴よ・一我が手に宿りて（イフランスマスンメアー マヌー エンス）・敵を喰らえ・紅き焰！」  
ランマ ドミネー タイオーニス エト レゲネラティオーニス イニークム フラクランティアー ルビカンス

「……ギヤアアアアッ！」「……」

「はあ……数が……はあ……多い、ですう……」

佐倉・愛衣は考えていた。今日も今までと同じように小競り合いで終わる。そう考えていたのに箱を開けて中を見てみたら大規模な戦闘に発展したのだ。しかも自分達の担当する方面は敵の主力とあつては愚痴りたくもなる。

「隙ありじゃーッ！ウラアアアア！！」

「えっ！？あつ、キヤーッ！」

「愛衣っ！？ッ！このっ！！」

度重なる戦闘で魔力を消耗した愛衣は疲労で息切れして注意力が散漫になっていたところを鬼に襲われ吹き飛ばされた。しかし衝撃の一瞬、彼女は咄嗟に魔法障壁へ残り少ない魔力を注ぎ衝撃を緩和していた。

それでも鬼の渾身の一撃だ。衝撃を緩和してもダメージは免れない。吹き飛ばされた先でぐったりと身体を横たえたままだ。息はし

ているが衝撃で意識が飛びかけているようだった。

彼女のパートナーで、同じく奮戦していた高音・D・グッドマンは愛衣が吹き飛ばされたところを見て刹那の驚愕のあとに魔法で影を操りパートナーを害した鬼を撃破。すぐさま愛衣の下へ駆け寄る。

「つ……う……」

「愛衣！大丈夫！？クツ！影よ！！！」  
ウンブラエ

息はしているようで高音は一安心した。そして今も戦闘中であることを思い出す。愛衣のこともある。ここは一時撤退のためにと影を槍や刃にして全周囲へ展開。他を援護していたガンドルフィーニと途中で合流して、その場を離脱した。

奇跡的に離脱を成功させて一時の休息を得た彼らは太い樹木の窪みに身を隠していた。皆、息を切らせている。全員の魔力消耗が激しい。状況は厳しいと言わざるを得ない。

この場で少し休憩したくらいではマトモに戦えないだろうことを経験豊富なガンドルフィーニにはわかっていた。それ故にまだ若い2人だけでもここから離脱できないかを思索し始める。

「高音君、佐倉君、まだ動けるか？」

「はあ…はあ…はい、私はまだ戦えます…。ですが愛衣が…」

「うあ……」

高音は戦えると言うのが厳しいだろうことは一目見てわかる。愛衣は言わずもがな。意識が朦朧としている状態だ。

相手が侵入者側の主力であると判断してから直ぐに援軍要請をしたが、いつ来るのかもわからない。大体、このような大規模の侵攻だ。どこも人手が足りない状況で要請通りに援軍が来るかすらも怪しい。

「ガンドルフィーニ先生。援軍はどうなっているのですか？」

「……………直接、学園長に要請はした。間も無く到着するはずだ」

たった今、考えていたことを高音に聞かれて彼は返答に窮してしまった。それでも絶望的状况にまやかしても希望を提示できたのは彼の経験ゆえだろう。最も彼が、こう言ったのは“だから安心して離脱しなさい”という意味合いもあるのかもしれない。

魔法使いの先達として若者の命を不用意に失わせることは絶対に避けなければならないのだ。そうして、どうやって彼女らを言い包めて離脱させようか、と考えた時に、それは来た。

「お頭あ！見つけましたぜ！！」

「……ッ！！」「」

見付かった……！今の3人の考えはこれに尽きる。

「ガハハハッ！おうおう！こんなところに隠れとつたんかい！手間あかけさせくれよってからに！！」

「チィ！せめて2人だけでも……！！」

「お姉、様……」

「愛衣……！！」

溢れん限りの鬼達はゆっくりと進む。たとえ消耗しきつた魔法使い3人でも油断はしない。魔法使いとは何かしらの切り札を持ち合わせていることが多々あるのだ。それ故に鬼達は油断無く囲み、確実に止めを刺そうとする。

ガンドルフィーニは若い2人を逃がせないかと必死に考える。高音は愛衣を胸に抱き、この子だけは守ると消耗しながらも瞳の輝きは一片も濁ってはいない。愛衣は意識が朦朧としながらも姉と慕う少女の身を案じている。

「怨むなとは言わん。……ほな、さいなら！」

包囲が完成した時、一際大きな体躯をした大鬼が3人の前に出て、そう言うとその身に合った巨大な金棒を振り上げた。ガンドルフィーニ達も最早これまでかと考えが過ぎった時。待ちに待った“それは来た。”

「……………」

「ッ？ がはっ……！！」

「お頭あーッ!?」

唐突に目の前まで迫り今まさに巨大な金棒を振り下ろそうとした大鬼が白い影が突撃したと同時に消滅したのだ。それは包囲網の外から続いて一本の道となっている。

鬼達も混乱しているが魔法使いの3人も何が起きたのか判断できない。辛うじてわかることは命が一時の間、伸びたことだろうか。

「……一体、何が?」

「「……………」」

突然消滅した大鬼のこともそうだが目の前に現れた機械的なボデイスーツを纏った女性も気になる。ガンドルフィーニは呆然と自体が飲み込めずに呟く。高音と愛衣は突然のことに緊張して言葉も出ない。

場は混乱していた。白い女性は突入後に鬼達と3人を遮るように立ちはだかり周囲を警戒していた。緊張は天井知らずに上がる一方だ。

そんな時に包囲網に出来た道を男1人と女2人の3人…主に女2人…が周囲を睥睨するようにゆっくりと歩いてくる。圧倒的なまでに威圧的に到着した彼らがガンドルフィーニ達の下へ来た。

「ふむ…。どうやら間に合ったようだな」

そんな声がガンドルフィーニと高音・D・グッドマン、佐倉・愛衣の耳に届いた。

S i d e o u t ? ? ?

少し前…。

喫茶店クレイドル…。

S i d e 葵

閉店して暫らくして翌日の仕込みをし終わり、諸々の就寝の用意を終わらせた時に備え付けてある電話が鳴った。

「はい。こちら喫茶店クレイドルです。…はい、店長ですね？少々お待ち下さい。…主様あ？お電話ですよ」

「はいはい。それで誰から？」

誰だよ？こんな非常識な時間に電話してくるのは。もう直ぐ経ったら深夜の1時だぞ…。余程の緊急事態なのか…。はたまたただの悪戯か…。ただ、俺を名指してきたから悪戯はないとは思っけだな。

はあ…普通なら寝ている時間に電話してくるといふことは…。もしかしてアレか？情報部からの報告にあつた麻帆良学園に対して大規模な襲撃計画有りとかいう。今日の、その襲撃に苦戦している？そんな、まさか…ねえ？

「学園長先生からでしたねえ。何やらお急ぎのようでしたけどお…」

その“まさか”かもしれない、と考えた俺は悪くないと思いたい…。だって、電話の相手が学園長なんだものなあ…。仕方ないでしょう？不安になってもさ…。面倒なことは勘弁してほしいところなんだ。

まあ、まだ望みはある。…この場合は、とりあえず話しだけでも聞いてみるか…。

「お電話変わりました。九重…」

『おお！葵君！早速で悪いが仕事を頼みたいのじゃが良いかのう！』

学園長…。人の言葉に被せてくるのはマナー違反だと思えますよ？まあ急ぎの用らしいから今回みたいな時は見逃しますけど…。

それにしても希望は見事に碎かれることになったか…。電話先に居る学園長の慌てようからして割と緊急事態っぽい…。

あと百歩譲って仕事するのはいいとしよう。こういう仕事はいつ発生するかは予測できないからな。…でもね？まだ学園側の人達の情報を把握していないんだよ。今は非常事態中だろうから顔合わせは現場になりそうだ。

フレンドリーファイア  
…味方誤射とか、やられるのは出来れば遠慮したいなあ。

「…はあ。それで仕事の内容は？」

『う、うむ！依頼内容は…』

それから学園側が把握している情報を聞いて、自分達で把握している情報とすり合わせて今回の報酬を交渉した後に出撃することになった。

出撃メンバーは俺と護衛のハオとユエ。そして実働データの収集のためにCOS・MOSを選出。俺の安全のため場合によっては援軍として後詰に三課を3チーム待機させている。

そして現在…。

麻帆良学園近郊の某森林地帯…。

「ふむ…？どうやら間に合ったようだな」

いや、COS・MOSを先行させておいて正解だったようだ。もう少し遅れていたらガン…ガンドル…？あー…ガングロイーニ君？…うん、3人が潰されていたかもしれないな！本当に無事ではなかった！

それによくよく見たらお嬢ちゃん2人は店の常連客だった。名前には…小さい子が愛衣ちゃんで大いほうは知らん。お姉様と呼ばれ慕われているのは知っているが名前は知らんのよ。美人さんだから顔は覚えていたけどね。

「そのようです。目立った負傷者は1名のようなようですが死傷者は幸運なことに居りません」

「くくくつ。幸運？なるほど、そうだな。…いつも通り、2人は護衛を頼む」

「承知ッ」

スゴイ…彼女達が周囲を睨み始めると半径15mの範囲に鬼が入らなくなった。威圧感がバツチリ効いているようだ。これでここは上位の大妖怪などが来ない限り安全地帯だ。COS-MOSも居るから尚、安心だ。

「き、君達は誰なんだ？…援軍か？」

「はい、ちょい待ち。今はアレらの排除が先だ」

うん、わかる。死にそうな状況が今は膠着状態になって若干安心してしまうのもわかる。でも、今も敵に包囲されているのに変わりはないんだ。この状況を打破するために敵勢力を殲滅する必要がある。

「…マスター、敵勢力の殲滅を続行いたしますか？」

「うん、続行許可。任務は敵勢力の完全排除だ。できるかな？」

「肯定。問題ありません。任務は敵勢力の完全排除。これより戦闘行動を再開します」

包囲している敵に歩いて行くCOS・MOSの背中を見送り俺は期待と頼もしさを感じた。白いボディースーツに綺麗な青い髪が映えて見えたのが印象的だった。

くくくっ！この状況の打破も出来て、尚且つ戦闘行動の実働データ収集も出来るという一石二鳥の手段だな！戦闘動作も戦闘中に最適化されて戦闘技術は更なる高みに押し上げ“進化”していくだろう！

ああ…ああ！楽しみだ！偶然、生まれたCOS・MOSがどのような進化を見せてくれるのか！……一応、言っておくと俺の言う進化とは外見ではなく中身だぞ？

とりあえずCOS・MOSにあちらを任せておけば今の彼女の戦闘能力から見て敵勢力の、そうだな……大体、半数以上を撃破できれば上出来だと思う。任せて安心だから俺は怪我人とかを見ようかね…。

「…これで、とりあえず安心だ。怪我人は？」

「あ…はい。愛衣…この子が…怪我を」

「はいはい、愛衣ちゃんね。それじゃ少し失礼するよっと…。どれどれ？」

「あ…く…」

ふむ？大きな負傷は無い、か。瞬間的に障壁の強度を高めたんだろう。目立った外傷は軽い打撲くらい、あとは脳震盪を起しているだけだ。この若さで大した状況判断能力をしているじゃないか。注

意点は多少、魔力の使い過ぎだな

「くくつ。大丈夫、これなら然るべき治療をすれば明日には元通りだ。ただ、暫らくは多少のダルさが身体に残るだろうがな」

「そ、そうですか！よかった…！」

愛衣ちゃんに回復魔法を施して体力と魔力の回復力を増長させる。軽い打撲が主とは言っても痣が残ったらまだ若いこの子も気にするだろうからね。念入りに治療をしていく。その辺は俺も気を遣いませよ。

粗方、目立つ外傷の治療をし終えた。あとは脳震盪だけど、これは寝て休めば回復する。脳震盪と言っても、やはり負傷部分が頭部だから後遺症が無いかをキチンとした設備のあるところで精密検査してもらう必要があるかな。

何にしてもこれで一安心だ。

「それでそっちは怪我していないのか？」

「あ、ああ、大丈夫だ。……それで君は？」

「くくつ、失礼した。俺の名は九重。学園長に依頼されて援軍として来た」

うん、すまない……。到着直後は鬼達に囲まれていたからのんびり話している余裕が無かったんだ。それに「俺様！参 上ッ！」みたいな名乗りを上げるノリは持ち合わせてないし、柄でもない。

「…聞かない名だな。それに依頼だと？学園長は外から雇い入れたと言っのか…。氏素性もわからん相手を麻帆良に招き入れるとは何を考えておられるのか」

「…随分な物言いじゃないか。ええ？若造…。生意気なことを言う割に苦戦していたようだがな？」

このガングロイーニ、どうしてくれようか？助けられてグチグチと女々しいことを言いやがってくれてやがりますのことよ？

……イカンな。つい、イラツときて思考内の言葉遣いがおかしくなってしまった。表の言葉遣いは若干相手を馬鹿にしたような乱暴な言いかたをしてみました。反省しなければ。会話でケンカ腰になってもいいことなんて一つも無い。

「若、造ツ！？…ツ。…失礼だが目上の者に対する敬意というものは君には無いのか？」

「…生憎だが姿や形などの外見で判断する小さき者に払う敬意を俺は持ち合わせていない」

「何だと！　　ツ！？これは…！」

「ガンドルフイーニ先生…！」

しまった…。売り言葉に買い言葉で俺も熱くなっていたようだ。周囲への威圧を増しながらもハオとユエが俺の敵意に反応したらしい。2人は誰にも気付かれないうちに彼の首を後ろからエックス字で挟み込んでいた。

愛衣ちゃんにお姉様と慕われているお嬢ちゃんは突然のことに驚いて彼のことを…と言うか、このガングロイーニ、もとい、違う、彼はガンドルフィーニという名前だったのか……。うん、まあこの教師の名を呼ぶことしか出来ないようだ。

「動くな。もう半歩踏み込むことあらば吾らは躊躇無く斬り捨てる」

「然様。この場は大人しく下がられるが良い」

「クツ！……わかった」

ハ才達は好ましい返事を受けると静かに剣を下げてまた周囲へ倍加した威圧を放ち始めた。……今、半径25m以内に鬼共は皆無だ。命の危機が無くなったガンドルフィーニはキツと俺をひと睨みしてくるが何も言わない。

あー…うん、マジでゴメンナサイ。俺には威圧とか脅迫なんて暴力的行動を取るつもりは毛頭無かったんだよ？本当だよ？何で、こっとなったのか俺も知りたいくらいだ。暴力は必要な時に行使できれば十分なんだ。それ以上は、いらないつしょ？

ただねえ？彼も悪いと思うよ。窮地のところを助けられておいて俺が学園関係者ではなく外部の人間とわかった途端に失礼な物言いをするんだからな。いくら温厚な俺でもイラッて来ますよ。

まあ、こんなやり取りをしているから愛衣ちゃんを抱き締めてくれる大きいお嬢ちゃんを不安な気持ちにさせてしまったらしい。俺達と彼を交互に視線を行ったり来たりと様子を見ている。

……少し可哀相なことをしたかもしれないと思ったのは秘密だ。

「ふう…若いのは血気盛んで困る。…そこのお嬢ちゃんも怖がらせて、すまなかつたな」

本当にゴメン…。また毒吐いてゴメン。一瞬、暗い空気流れて場が重くなった。主にガンドルフィーニ君の居る方向からその空気が流れてきたように感じたのは気のせいと思うことにした。

「あ、いえ…あ！私はお嬢ちゃんではありません！高音・D・グッドマンという名前があります！」

なるほど、お姉様こと高音・D・グッドマンというのか…。あれ？この子のこと美人さんとしか考えていなかったけど何気に原作キヤラじゃないか。磨耗した記憶の中でも割と好きなキャラだったから少しは覚えている。

名前と顔が一致しないくらい忘れてはいたけどね…。

いや、今それはいいんだ。少し前に触れたがこの高音ちゃんと愛衣ちゃんはウチの店の常連だからな。2人は喜ばないだろうけど今後、こういう危機があった場合は多少鼻肩して助けようかな、と思う。

「くくくつ。知っているとも、これでも常連客の顔は忘れていないつもりだ」

「はい？常連、ですか？」

「ふふんつ 当店“喫茶店クレイドル”を毎度ご利用ありがとうございます」

ございます。お嬢ちゃん？」

「え？クレイ…ドル？え？ええっ！？あのお店ですか！？え？でも…あら？」

わからないだろうなあ。一応、麻帆良との面倒を避けるために店には一般人、関係者関係無く認識障害術式を多重掛けして張り巡らせてあるからな。事前に“俺たちのことを知っている人物”以外は俺や店員関係の記憶はあやふやになるんだ。

認識障害術式を展開した切欠は昔、明日菜を迎えに来たタカミチだったのは皮肉だろうか？…アレがなければ、もう少し姿を隠せていたかもしれないのになあ。

「くくくつ。さて、色々とあるだろうが君達は後退してもらおう。今よりここは“俺達”の戦場だ」

「何を勝手な！？麻帆良を守ることが使命だ！」

「ガンドルフィーニ先生の言う通り、私も戦えます。ここは共同戦線を…」

お前達は…。はあ、どの口が、そんなことを言うのかな？自分達の姿をもう一度よく見てみるよ？ボロボロではないか…。人が休めと言っているんだから遠慮や意地なんか捨てて後退しろよ…。

お嬢ちゃん達の内1人は脳震盪で目を覚まさない。もう1人は体力の消耗が激しい上に魔力も残り少ない。ガンドルフィーニ君も度重なる戦闘で消耗しきっている状態だ。とてもではないが戦えるとは思えない。

「黙れ、ひよつこ共。無駄な議論も反論も認めない。これは学園長も承知のことだ。それに怪我人も居る。まだ安全に撤退できる今こそ彼女をキチンとした場所で休ませろ」

「……………!」……………」

それ故に俺はまた言葉遣いが厳しくなる。今後の関係が多少ギクシヤクするかもしれないが仕方ない。それというのも今ここで無理して戦われて命を落とされるよりは数倍マシだからだ。

……………死なれたら後味が悪過ぎるじゃない？あ、それと寝覚めもか…。

「はあ…。余裕がある内に撤退することは必ずしも恥ではない。生き残る上で必要な行為だ。……………ここは任せてくれ」

「……………高音君、私が佐倉君を医療室へ運ぶ。君も付いて来なさい」

「はい…」

まあ最後に口調を優しくしてしまい子供に言い聞かせるようにしてしまうのは俺の悪い癖かもしれないなあ、と思った。

それと、これはどうでもいいかもしれないが愛衣ちゃんの苗字が佐倉ということをはじめて知った時だった。

S i d e o u t 葵

時間を少し戻して…。

麻帆良学園近郊の某森林地帯…。

Side COS-MOS

「…警告します。この場より即刻立ち去りなさい。従わない場合はマスターの命により殲滅致します。繰り返します。この場より即刻立ち去りなさい。従わない場合は…」

「なんじゃい、このけつたいな姉ちゃんは？」

「若頭あ！コイツです！コイツがお頭をブツ飛ばしたんスよ！」

「何やと！？叔父鬼<sup>オジキ</sup>をやつたんがこの姉ちゃんや言うんかい！？」

「へえ！間違いありやせん！」

目標の撤退行動を確認できず。敵対行動を認識。戦闘エリアに存在する敵勢力の危険度上昇を確認。第一種戦闘態勢。安全弁解除、戦闘出力上昇。全武装展開準備…完了。敵目標は“大鬼”、“鬼”、“子鬼”、“烏族”、少数の“狐女”、他多数の混合勢力…。

「…：現在の勢力を殲滅目標へ移行。これより敵戦力の掃討に入ります。…：BLASTER用意、3点射<sup>スリーバースト</sup>…：Fire」

敵目標“鬼”、“子鬼”を計8体の撃破を確認。命中率94%…

射撃能力修正…完了。エネルギー弾による敵目標への効果を確認。有効性は89%…以降データ収集を継続。上位内部武装へ移行…。

「なん、やと…?」

「…R-CANNON、連続射撃…Fire」

「野郎共!散れい!!」

“大鬼”、“鬼”、“子鬼”を計19体の撃破を確認。敵勢力の散開を確認。攻撃方法は面攻撃を推奨…。該当武装を検索…検索中…  
検索ヒット。該当武装は外部武装の小型ガトリング砲と三連式重ガトリング砲の2つ。

現在、森林地帯の野外戦のため外部武装三連式重ガトリング砲を選択。敵勢力散開しつつ接近中…。武装データの収集を継続。

「…三連式重ガトリング砲、実体化」

敵勢力の行動予測…演算開始。散開した敵勢力は本機を半包囲しつつ接近中。…修正、上空に“烏族”を確認。修正情報を元に敵勢力の行動を予測…予測中…完了。敵勢力行動の把握完了。

…外部武装の実体化率78…86…94%…実体化率上昇中。実体化まで98%…99%…実体化。…実体化の完了を確認。システムチェック…チェック中…システム、オールグリーン。外部武装の機能に問題無し。

敵目標…ロックオン。全力射撃、開始します。

「ッ！おどれら！避けえい！！」

「Fire」

85%。射撃…撃破…射撃…射撃…小破…撃破…射撃…射撃…撃破…残弾

70%。撃破…射撃…射撃…撃破…射撃…中破…撃破…射撃…大破…残弾

55%。撃破…射撃…中破…射撃…射撃…撃破…射撃…撃破…射撃…残弾

45%。射撃…小破…撃破…射撃…射撃…撃破…射撃…撃破…射撃…残弾

35%。射撃…撃破…射撃…撃破…撃破…射撃…射撃…小破…射撃…残弾

射撃…射撃…大破…撃破…射撃…。

「…斉射、終了」

三連式重ガトリング砲の砲身冷却を開始。実体弾…対魔処理弾頭…の効果を確認。命中率64%…射撃能力修正…完了。実体弾による敵目標への効果を確認。有効性は96%…以降もデータ収集を継続。

敵勢力の30%以上を撃破。残存敵勢力情報を更新開始。…更新中…更新完了。敵勢力の撃破率54%を確認。戦闘データの収集は

良好。機体損傷率0%。防御時のデータが不足……しかし、現時点で問題無し。外部武装のデータ収集も継続…。

警告：三連式重ガトリング砲の残弾が30%未滿を確認。現外部武装の弾薬を補給するか使用武装の変更を推奨。武装変更を選択。現外部武装の実体化を解除。同時に外部武装、小型ガトリング砲の実体化を開始…。

…外部武装の実体化率60…78…92%…実体化率上昇中。実体化まで98%…99%…実体化。…実体化の完了を確認。システムチェック…チェック中…システム、オールグリーン。外部武装の機能に問題無し。

残存敵目標：ロックオン。全力射撃、開始し…攻撃態勢強制解除ッ！！

Warning! Danger! Warning!! Danger!!!

上空より敵勢力、急速接近中。緊急回避行動を推奨。多重Dフィールド緊急展開。緊急回避後に防御姿勢へ移行。緊急防衛行動。対近接戦闘用意…。

「死にさらせやーッ！！セエイッ！！」

回避率、右：39%、左：89%、後ろ：67%、前：71%、上空：21%。左前方へ回避を推奨。多重Dフィールドに敵攻撃の接触を確認。フィールド出力89%へ減少。機体損傷率2%…。防御、損傷データを収集。戦闘を継続。

接近戦闘に限定した敵“烏族”を要注意目標へ移行。：接近戦闘のデータ収集に有用と判断。

警告：敵は現時点で限定要注意目標に移行されていません。遠距離による間接攻撃を推奨。：否定。提案を却下。現在の本機に必要とするものは“稼動データを収集し、あらゆる経験を積むこと”にある。

故に危険だが接近戦闘データ収集には相応の実力者とされる者が好ましい。よって“烏族”は接近戦闘のデータ収集に有用と判断。現行は接近戦闘を実行する。：内部武装、近接兵装SWORD、上位近接兵装R - BLADE用意。

……追加、マスターの強い推奨によりR - DRILLを用意。

「 SWORD」

「調子に乗りおつてからにい！ハアアアツ！！！」

「チイ！シツ！ハーツ！！！」

逆袈裟：回避。左切上：フィールド防御。右薙ぎ：SWORDによる迎撃、成功。敵、身体動作に若干の硬直を確認。好機と判断。反撃：開始。急加速後に接近戦闘。最短距離の突き：一点突破にて一撃撃破を推奨。

「なっ？ぐあッ！！！」

要注意目標“烏族”の1体を撃破完了。情報修正：“烏族”は剣技に限れば近接戦闘は最優秀。危険度を上方修正：完了。続いて

“烏族”の近接戦闘動作を模倣：。本機の近接戦闘に動作情報を反映：最適化、開始：最適化中：最適化、完了。

最適化により近接戦闘能力28%向上。総合戦闘能力12%上昇。

「ガアアツ！！困んだれ！袋叩きにするんやツ！！」

警告：複数の要注意目標が接近中。危険度上昇。至急、迎撃を要する。現時点の近接兵装では突破力に難あり。上位武装への変更を推奨。

「 R - B L A D E 」

敵、要注意目標“烏族”、本機の四方に展開を確認。回避、極めて難：。退路無し。迎撃を推奨。最適化された近接戦闘能力を元に迎撃を開始。同様に一対多戦闘の戦闘データ収集を開始。

「ガツ！？なんちゆう速さしとんねんツ！！うらあーツ！！」

「防御が硬い！？ツ！！剣速がまた上がりよったツ：！！」

「なんやねん、これツ！？膜みたいんが覆つとるんかツ！？」

「ダアホツ！！手え休めるなツ！！グツ！！チイイツ！！！！」

初期データ収集、完了。最適化、開始：最適化中：完了。最適情報の反映を完了。総合戦闘能力16%上昇。戦闘を継続。敵、要注意目標的“烏族”4体の撃破を最優先。即興剣武、発動。

「 …… 」

「 「ガアアアツ！！！！」 「」

「がはっ！ハア…ハア…どんな身体、しとんのや…？この…姉ちゃん、は…」

要注意目標“烏族”4体中3体、撃破を確認。残敵数1体は撃破ならずも重傷の模様。追撃を推奨。内部武装の変更を推奨。初回のみ上位プロトコルにより本武装の使用を強く推奨する。

「……………R - DRILL」

「ドリル！？螺旋は男のロマンじゃあーッ！！くはっ！！」

敵、要注意目標の殲滅を確認。現時点で敵勢力の60%以上を殲滅。損傷率極めて軽微。実体弾の消耗率70%以上。戦闘行動に支障無し。残敵掃討を継続。……………重要事項発生。マスターより通信あり。

『…COS - MOS、戦況はどうか？』

「…現時点で敵勢力の67%を撃破しました。現在、戦闘を継続中です」

この戦闘中にマスターとの通信は可能な限り出たい、と記憶メモリに記録された日だったのは私だけの秘密…です。

Side out COS - MOS

麻帆良学園近郊の某森林地帯…。

S i d e 葵

さて、ガンドルフイーニ君達が無事に後退したのを確認した。

因みに彼らを追おうとした鬼達は直前に八才とユエの威圧と牽制により行動できなかつたようだ。それに鬼の数体をこれでもかと痛めつけたところを見せつけて八才が“動くな…”と命じたら静まり返ったのが怖かつた…。

……今、俺達から半径30mの範囲に鬼は皆無だ。近づいてこないのが逆に怖いです。

それと知っているか？鬼の臍物つて人間と同じように赤やピンク色をしていたんだ…。俺の見ていた前で八才達が鬼数体を腹掻っ捌いて解体しているところをバッチリと見たから間違い無い…。

それと朗報だが、ここから見る限り敵勢力の半数はC O S - M O Sに殲滅されたようだ。敵数が目に見えて半減しているのがわかる。どうやら彼女は予定通りの性能を發揮しているようだ。

「…C O S - M O S、戦況はどうか？」

『…現時点で敵勢力の67%を撃破しました。現在、戦闘を継続中です』

「よしよし、順調だな。現時点で機体に不具合はあるか？」

『否定。機体損傷率は10%未満です。実体弾の消耗率78%です』

が戦闘継続に支障無し』

「了解。ふむ…よし、一度、合流しよう。それから一気に残りを片付けるでしょう」

『肯定。了解致しました、マスター』

「はいはい。それじゃ、またあとでね」

コミュニケを使ってCOS・MOSと通信を繋げて、これからのことで確認を取った。彼女は俺の予想以上の性能を発揮してくれたようだ。敵勢力の7割近くを撃破していたのだからな。

ただ、実体弾の消費量が高いのが気になるところだ。大小のガトリング砲だから仕方ないけどさ…。小型のほうは取り回しを重視して考えられているからガトリング砲としては総弾数が少ないしなあ…。

いや、そういうのを考えるのは後にしよう。今はCOS・MOSとの合流が先だ…。

「ハオ、ユエ、聞いての通りだ。準備はいいか？」

「ハッ、出来ております！吾らにご下命を！」

「うむ。…それでは行くぞ。出陣だ！」

「承知ッ！」

そのまま俺達は遠巻きに包囲している鬼達に向けて一步を踏み出

した。その途端に恐慌状態に陥る敵は……見ているほうが哀れだったのは悲しい記憶だった。

そして合流後は順調に敵勢力を殲滅。西側の防衛線を再構築した学園側魔法使い達のダメ押しを追撃で結果として防衛に成功。戦闘が終了したのは時計の針が深夜の3時を示したところだった。

麻帆良に依頼されて初めての“お仕事”は、こう言うてはアレだが幸先良く無事に終了した。もちろん、それは“俺達”に限定しての幸先さが、な。…学園側の被害？知らんよ。

早く帰って今日は寝たいなあ……。報酬は先払いだっし……。あ？なら、このまま帰っても問題無いじゃないか。マジで眠い……。明日も変わらずにお店があるねえ……。朝の仕込みもあるから早いのもー……。

あー……ダメだ……。久しぶりの戦闘で疲れた……。帰ろう……。眠いわ

I  
… z z z

S i d e o u t 葵

第五十四話「学園防衛と初出勤と初実戦と」（後書き）

うん。葵の傭兵デビューとCOS・MOSの活躍シーンを書きたかったんだ。

上手く伝わるかは作者にも疑問でしたが…。

……あれ？葵、戦ってなくね？ハオさん達が…あるえー？  
ふ、ふんっ！いいんだい！いいんだい！

葵は臆病者設定だからこれでいいんだい！えーんっ！

ごめんなさい…。改めて見直して作者は軽く鬱です…。

葵が活躍したのは遠い昔のように感じますよー…。

あははははは…。

ではでは！B i s b a l d！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第五十五話「後日とお誘いと戯れと」(前書き)

うん、特に言うことないかな。

それでは…続き！

## 第五十五話「後日とお誘いと戯れと」

学園長室…。

Side 葵

傭兵家業で始めて出撃してから数日後。あれから暫らくは平和に喫茶店を営んでいた。まああの戦闘が終わって帰った時にアイリ達から連れて行かなかったことにグチグチと愚痴を言ってきたけど…。

連れて行かなかったことは申し訳無いと思うよ？でも、仕方ないだろう？一応の理由はあるんだ。ここでアイリ達の存在が学園長にバレてしまつて“使える手駒が増える”なんて思われたら面倒事が増えるに決まつている。

「おい、あのアメはもう無いのか？」

それに、だ。アイリ達の存在を隠しているのには、もう一つ理由がある。前にも言ったかもしれないが、俺が前面に立つことでアイリ達の暗躍を助けることに繋がると思うんだ。色々負担は増えるが、あとを楽にするためには仕方ないことだ。

それと学園長にバレていると思われるのは俺の戦力は少数のはずだ。俺を筆頭に八才とユエ、それとCOS・MOSの4名（内訳1人、2柱、1体）。喫茶店の店員としてアイリ達のことは疑われているかもしれないけど、ね…。

「おい？どうなんだ？あるのか、ないのか？」

それでも“疑い”だけでは相手もどうしようもないことは事実。それにバレた時はその時だ。暗躍しているのは組織ファミリを運営、管理をしているアイリ、ファレノ、リチラの3人や他親衛隊以外が動いているのだから大きな障害は無いさ。

諜報関係は情報部の実働部隊である一課、二課の部隊員に任せておけば大抵は安心だしね。彼女達の現活動の殆どは学園勢力や超一派と敵対した時のための内部破壊工作の前準備とか。だけどね。

そんな色々と裏で暗躍している俺達なんだが…。今は学園長に呼び出されて学園長室に居るわけなんだが…。

「おい！聞いてるのか！？無視するな！」

なぜかソファアに座る俺の横でエヴァちゃんがアメちゃんを強請っています。いや、ここに来てからずっと強請られている気がしたんだが幻聴だと思ひ込むことで気付かなかったことにしようとしたんだ。それが…。

「葵！アメは無いのか！？ハッキリしろ！」

……本当にどうしてこうなった？

「はあ……。ほら…」

「サッサと出せば良いのだ！ばか者がッ！！」

エヴァちゃん？プリプリ怒ったようにしていてもアメちゃんを

頬張るとニコニコ笑顔になって頬が緩んでいるぞー。こういう時だけは純粹に可愛らしい幼女なんだよなあ…。

まあ、俺もいい加減、アレなので現実逃避はやめたのよ。ただ、手持ちになかったからポケット内に空間を開いてアメちゃんのストックを出してエヴァちゃんに謙譲させていただきました。

もうね？考え事とか出来ないくらい喧しかったのよ…。秘密で護衛できるようにスーツの内側にある剣状態のハオとユエが背中プルプルしてるのよ。煩いから突っ込みたいんだろうねー…。

「……学園長、話しをする前に一つ聞いてもいいかな？」

「……何じゃ？手短にしてくれると助かるんじゃないの？」

それにしても少し学園長に確認しておきたいことが出来た。そのことについて話しを聞こうと学園長に話しかけた。そうしたら当の学園長は話しを聞いてはくれるようだが視線を逸らしている。

何を隠している？この学園長…。

本当ならサツサと呼ばれた要件だけを済ませて帰りたいたいんだが、ここに来てそうもいかなかった。だってさ？おかしいだろ？普段はここに寄り付きもしないし呼ばれて来るのもイヤがるヤツがここに居るんだ。

それだけは聞いておきたい…。

「……何で、ここにエヴァちゃんが居るの？」

「……数日前の大侵攻でお主が出張ったことを“誰かから聞いた”  
ようじや。それで興味を持ったらしいぞい」

「……何で今日、狙ったように、ここに居るんだよ？」

それだけならここ数日の間に喫茶店まで来て確認するなりエヴァ  
ちゃんの家へ招待すればいいはずだ。“今、狙ったように、この時  
間に、ここに居る”のが疑いを濃くしているんだよ……。

何だ、これは……？学園長は何を知って……いや、狙っているのか？  
それとも……まさか？俺のことを“俺”として知らない超一派がただ  
“活躍したが怪しい外部の人間”としてエヴァちゃんに面白半分で  
零したのか？

「…………ワ、ワシは知らんのう。タ、タカミチではないかのう？  
フオ、フオフオフオ……」

怪しい……。部屋は暑くもないのに不自然に扇子で扇いでいる。冷  
や汗も流れている。怪し過ぎる……。そもそも今は11月中頃で冬  
の初頭もいいところだ。近年、地球温暖化とは言ってもそこまで暑  
くはない。

「学園長……リークしたの手前えだろ？」

「ふお！？な、何のことじゃ！？ワ、ワシヤ知らんぞい！」

「口調がドモツてるじゃないか！？まるわかりだな！おい！？」

これが演技だったら大した者だ。アレだな。俗に言う狸という奴  
だ。伊達に歳は取っていないということだな。年の功で言えば俺の

ほうが圧倒的に上なんだけど肉体年齢は20代だからなあ。

……あれっ！俺って実は若いんじゃない？

んんっ！いや、それはともかく今のこの状況のことだな。何を以つてしてエヴァちゃんに情報をリークしたんだか。まったく…。余計な好奇心を刺激しないために色々情報を制限していたのに今までの努力が全てパーだ…。

だ・か・ら！というわけではないが学園長の長い後頭部を鷲掴みにしてグルングルンしてやる！大半が八つ当たりだけだな！

「痛い！いたい！イタイ！葵君！モゲる！ワシの頭がモゲルかも！？イタタタッ！！」

「何だとツ！ウソツ！？“コレ”はモゲるの！？」

ど・う・す・れ・ば・モ・ゲ・ル・の・か・な！？

「アーーーーーッ！！！！」

泣けい！鳴けい！！啼けい！！俺を楽しませろ！！くっく！！くあーっはっはっはっはっ！！！！貴様の悲鳴が今の俺の悲しみに暮れる心を満たすことができるのだ！！あーっはっはっはっはっはっはっ！！！！！！

それから10分以上、グルングルンしてやったんだけどいい加減、後頭部を握っていた手が学園長の冷や汗でヌルヌルして気持ち悪い

からやめた。それに話しも進まないしね…。

「チツ！ウソ吐きが…。結局モゲなかつたじゃないか」

「ヒドツ！？葵君はワシに何か恨みでもあるのかのう！？」

「え……………？」

「ふお！？何じゃ！？それは！…え？何！？その“今頃何言ってるの？コイツ…”みたいな顔は！！」

「……………ふう」

「何でか、ワシを見て呆れたようにタメ息吐かれた！？」

いい加減、話しを進めようよ…。正直、学園長の有り方とか、何を思うかとか、人間性とか、その他とか、もうどうでもいいのよ。もうアレだよ。学園長を弄っていたら色々なヤル気が失せてきた。

これを学園長が狙ってやっていたとしたら、ある意味……………うん、ないな。尊敬、出来ないわ…。俺なら絶対にキレル。いや、そもそもそんなことになるくらいなら俺は逃げる。係わり合いになりたくも無い。

あ、エヴァちゃんがここに居る理由、結局聞いてない…。学園長がリークしたのは間違いなさそうだけど…。

「いい加減にせんかー…ッ！…！！！！！！」

「「おやーっ！？！？」「」

考え事をしていたらエヴァちゃんの一喝に俺達の全身と耳を音波攻撃が襲った。……おい？学園長が泡吹いているけど大丈夫だよな？全身をピクピクさせているぞ？……んー、まあ生きているようだからどうでもいいか。

それにしてもエヴァちゃん、ヒドイ……。耳がキーンってしているぞ？頭も、ちょっとクラクラするし……。もうエヴァちゃんが居る理由とかどうでもいいや……。何かあっても粉碎すればいいことだしな……。

……。

……。

少し頭がフラフラしていたら、ようやく音波攻撃の余韻が抜けたようだ。チラッとエヴァちゃんの座る前を見るとテーブルの上にあるメちゃんの包み紙が散乱していた。何だ？アメちゃん、もう食べちゃったのか……。

だが、食べるのはいいがゴミはキッチンとまとめておかないとダメだと俺は思うぞ？

「さて……冗談はここまでにして。……今日、俺を呼んだ理由は？」

「おお、それなんじゃがのう。何と言えば良いのか……」

「じじい。そんなことで間違付いてないで早く終わらせる。私は九重・葵に用があるのだ」

「むう……。エヴァは厳しいのう……」

「うるさい！ 気安く呼ぶな！ サツサと終わらせる！」

余計なことで時間を取った自覚はある。だから俺が話しを切り出して早く終わらせようとしたら学園長の返答は歯切れが悪い。そのことにエヴァちゃんが嘔み付いた。正直、俺もイラツとしたな。爺さんがマゴマゴしても可愛くないんだよ。

……………ん？ 今、エヴァちゃんは俺に用があるようなことを言わなかったか？

「因みにエヴァちゃん？ 俺に拒否権は……」

「???? そんなものあるわけ無いだろ。何を言ってるんだ、貴様は？」

「ですよー……。あははは……」

俺の疑問に小首を傾げて心底不思議そうにするエヴァちゃん。俺の疑問ってそんなに不思議なことだろうか？ 言ったこと何か間違っていたかなあ？ エヴァちゃんの姿が幼女だから怒り難いわ……。

笑って誤魔化してはいるけど納得はしていない。百歩譲って用件があることはいい、だけど俺の拒否権が認められていないのはどういうことかな……？

俺は今度、絶対にイジメてやろうと小さな決意を抱いた。じゃれ合う的な意味で！

「ふう…。まず始めに先日の件じゃが、迅速な助力に改めて感謝する」

「仕事だったからな。感謝はいらんよ。……それで本題は何だ？」

「う、うむ…。葵君達が接触したガンドルフィーニ君達を覚えているかね？」

「ああ、まだ数日前のことだからな。忘れるほど耄碌しちやいないよ」

学園長の一言から今までのおチャラけた雰囲気我突然、マジメな空気になった。話しは数日前に起きた襲撃事件で俺が助力したことに対しての感謝から始まった。エヴァちゃんには新しいアメちゃんをあげて黙らせた。

確かに危険な戦況だったようだけど助太刀したのは依頼された仕事だからな。追加謝礼は別にしても感謝はいらんよ。……寧ろ、C O S - M O S の丁度良い実戦証明と経験値稼ぎになったしな！こう言っちゃ何だけどタイミング良かったんだわー

しかし…ガングロ、もといガンドルフィーニねえ？あの若造が何を言ってきたんだか…。

「その彼らが…と言うよりガンドルフィーニ君が葵君達のことを知りたがったのう。そこで丁度良いから…他の者達にも」

「…俺のことを紹介する、なんて言つつもりか？」

「……………ダメかのう？」

「断る。明らさまに“外堀”が埋まるのが気に入らない。それに何より面倒事の“匂い”がする。出直して来い……」

今、学園長は「葵君“達”」と言った。これで確実に、あの場に居た存在は学園長の認識化に入ったことになる。COS-MOSは経験情報の蓄積のために早い段階でお披露目する予定だったからいいとしよう。

ハオとユエの正体までは知らないようだが学園長は彼女達のことを戦える駒が増えたくらいには考えているかもしれない。……俺から離して別々に運用しようとしたら断固として反対するけどね！！俺の警護が薄くなるのはイヤ過ぎる事態だ！！

大体、知りたい、だあ？男に教えることなど何一つ無いよ。怪しいと思うなら好きにすればいい。コバエが前をチヨロチヨロするのはウザイが叩き潰すは容易だ。他の有象無象が何匹、群がろうとな……。

それにあの若造は頭が固いんだよ。もっと柔軟な思考をするべきだね。そんな頭の固い奴らに紹介されても正直なところ迷惑なだけだ。

下手をすれば若いのが“正義の名の下に”(笑)”を大儀に暴走して家族はもちろん俺にも被害があるかもしれない。そんなことになるくらいなら多少疑わしい余所者くらいに思われたほうがマシだ。

そして俺が何よりも気に入らないのは学園長の隠れて見える思惑だ。学園所属の魔法関係者に俺のこと紹介することで俺を“学園所属である”と強制的に既成事実化して認識させようとするのが気に

入らない。

もうね？面倒事の匂いがプンプンするんだ。いくら温厚な俺でも何も知らないところで謀られるのは本当にムカッて来る。正面から頼まれるのなら、それなりに協力するのも吝かではないんだ。まあ、それも気分次第だけどね。

イライラしてきたから俺は、話しはここまでとソファから立ち上がり扉に向かった。オマケに俺に用があると云っていたエヴァちゃんも後を付いて来たが…。

「ま、待つんじゃない！どうしてもダメかのう？」

「クドイぞ。……ふう。エヴァちゃん、行こう。ここじゃなんだから……」

「いや、私の家に来い。そのほうが、都合がいい。……ククッ」

学園長の懇願を一言で断ち切って意識の外へ押しやった。次にはエヴァちゃんの言う用事に意識を向けていた。

こんな学園長室ではエヴァちゃんと落ち着いて話せないから、どこかのカフェか俺の店に行くかと相談しようとした。そうしたらエヴァちゃんは自分の家に来いと言う。……何かを企んでいるような笑いを最後に添えて、だ…。

「……お手柔らかにね？」

「ふふんっ、それは貴様次第、と言っておこうか」

すっごい不安だ…。それに都合がいいって何だろう？ハオ、ユエ…！こわいよ…！

Side out 葵

エヴァンジェリン宅…。

Side 茶々丸

休日の今日、マスターは1人で出かけられました。出かけられる時に地下で埃を被っているエヴァンジェリンリゾート…通称「別荘」を使えるように設置しておくよう私に命じられました。

「…お帰りなさいませ、マスター。そして、いらっしやませ、葵様」

「茶々丸、用意は出来ているか？」

「こんにちは。お邪魔するね、茶々丸ちゃん。……ん？用意？え……？」

所定通り地下室に「別荘」を設置してから数時間後、マスターがご帰宅されました。扉を開ける前に確認しましたが唇音センサーを熱源センサーから1人、同伴者がいらっしやるようでした。

扉を開けてマスターを出迎えますと、そのお隣には苦笑されてい

る葵様がいらつしやいました。先日の夜間警備では随分とご活躍されたようですね？お勤めご苦労様でした。

あの日はマスターと私も学園長の要請で東側を警備していました。まるで年越し前の大侵攻といったらよいのでしょうか？西側に主戦力が侵攻していたとしても他から戦力を抽出することは難しい状況でした。

そこで援軍として派遣されてきたのは葵様と八才様、ユ工様。そしてもう1名。前のお三方は面識があります。ですが最後の1名を私は知りません。学園長先生とガンドルフィーニ先生のお話から私と“似た存在かもしれない”ということでした。

同じガイノイドならば超と八カセが造ったのかも知れません。戦闘があつた後日メンテナンスのため、超と八カセの研究室へ訪れた時に聞いてみることにしました。2人の答えは造っていないという否定するものでした。

であれば…アレは葵様が？超と八カセの科学力に匹敵する葵様。この方は一体…？

「どうした？茶々丸」

「……失礼しました。マスターのご用命通りに地下にて設置済みです」

「よし。……葵！行くぞ！」

失敗です。目の前にマスターが居られるのに自分の思考に耽るとは……不覚でした。

マスターは私から無事に「別荘」を設置したことを聞くと葵様の手を取り駆け出さんばかりに歩き出そうとされました。マスターが嬉しそうにしている姿を見るのは私も嬉しいです。

ですが、マスター……。その前に葵様が着ている紅いコートをお預かりしなくてよろしいのでしょうか？外は冬で寒いのですが「別荘」内は常夏の陽光をなしていますよ？

「はいっ、ちよーつと待とうねー？」

「ふにゃっ？おいっ、こらっ、放せっ！」

「…何を用意したのかな？茶々丸ちゃん」

「おいっ！？私は無視か！？えーいっ！襟首から手を放せっ！にゃーっ！」

葵様を「別荘」へ連れて行こうとしたマスターですがそのまま葵様に襟首を摘まれて子猫のように持ち上げられてしまいました。ああ、マスター…小さな手足をバタつかせるお姿も可愛らしいですね。

葵様はそのままマスターをプラプラさせながら私に問いかけてこられます。マスターは無視されたことに抗議していらっしやいます。が…。葵様に大きく振り回されて黙らせています。

……………これは従者としてマスターをお助けするべきなのでしょうか？それともこれは両者のじゃれ合いなのでしょうか？

「…マスターから聞いていらっしやらないのですか？」

「聞いてない…」

マスターの説明不足だったようです。帰宅までの道中に葵様にキチンと説明されていなかったようです。葵様は大切なお客様ですから、ここは従者としてマスターに代わりご説明して差し上げるのが努めでしょう。

私は葵様にお話しました。マスターがお出かけになられる前に私に命じられたことを…。それは、地下で埃を被っている「別荘」を地下室に設置し使用できるようにしておくように、というものです。

「ほう？「別荘」を、ねえ。……エヴァちゃん？」

「な、何だ！？いや！それよりも早く放さん、ふにやーっ！？」

「こ・れ・は・ど・う・い・う・こ・と・な・の・か・な！？」

「イタイ！いたい！！米神が痛い！！！割れる！割れる！？頭が割れる！！？ふにやにやーっ！！！！？」

私のお話しを聞き終えると葵様はとても“素晴らしい笑顔”でマスターを抱き抱えられました。マスターは葵様の顔を直視すると“ビクウウ！！”と反応されると悪戯が見付かった子供のように慌て始めました。

そんなマスターのお姿も可愛らしいです。これは記録が必要です。ね…。もちろん永久保存版です。それにしても葵様は笑顔なのに、なぜか怯えるマスター。不思議です…。

その不思議な気持ちも葵様の次の行動に吹き飛びました。マスターの米神にゴブシを当てると、これでもかと言つくらいにグリグリと俗に言う“ウメボシ”をし始めました。私から見てもアレは痛そうです…。

マスターの従者としては葵様からお助けするべきなのでしょうが……。なぜでしょうか？マスターと葵様を見ているとまるでご兄弟のようにじゃれ合う光景に見えてしまいます。

「話・し・て・く・れ・る・よ・ね・っ!？」

「わかった!話すっ!話すからやめてくれっ!イタイ!ワレル!?ふにゃーっ!?!?!？」

「あー、マスターが、あんなに楽しそうに…」

それでもマスターが“ウメボシ”を痛がっているのは演技ではなく本気と書いてマジと読むくらい痛がっているのは間違いないようです……。もう少ししたら止めようと思います。それまでは映像記録に専念させていただきます。悪しからず…。

マスター、頑張ってください…。

Side out 茶々丸

エヴァンジェリン宅…。

エヴァちゃんの米神や色々な重大なダメージを与え続けて聞き出したことを一言で言えば…“模擬戦したいな！てへっ”ということだった。

そんなことのために強引に拉致ってきたのか、と考える。うん、少しだけイラツとした。だから少しだけ八つ当たりで“クスグリ地獄”に叩き込んだことに反省はするが後悔はない。だって“ウメボシ”を続けるよりはマシだと思うんだ。痛くないし…。

「ハア…ハア…。ううう…！んっ…。ううう…！ハア…」

そのエヴァちゃんだが今もソファーで“ウメボシ”と“クスグリ地獄”の影響でハアハアと息切れしてグツタリとしている。

エヴァちゃんの顔が真赤だったが、やり過ぎたのだろうか？…：少しお仕置きの加減を間違えたかもしれん。茶々丸ちゃんが止めてくれなかったら…：。うん、よく止めてくれたと思う。

「まったく…。模擬戦やりたいなら最初から、そう言えばいいんだよ。はあ…」

「…マスターは少々意地っ張りな方ですから。正直にお願いするところが恥ずかしかったのかもしれない」

「茶々丸ちゃん…。仮に、そうだとしても…。あー、もういいや。ちよっと電話、貸してくれる？」

「…畏まりました。こちらをどうぞ」

「うん、ありがとう。えーと……」

茶々丸ちゃんのフォローを聞いても納得は出来なかったが状況は変わらないことは事実だ。ならば俺の安全のために援軍を呼ぶべきだろう。そのために電話を借りようと茶々丸ちゃんにお願いした。

そうしたら備え付けの子機を貸してくれました。本体はアンテナの電話なのに中身はハイテクなのかと俺ビツクリ……。機械音痴のエヴァちゃんでも使えるように形はそれなのかもしれない。まあそれはいいので早速電話だ。

番号を押しながらエヴァちゃんと茶々丸ちゃんから少し離れて電話する。電波を飛ばす子機だと盗聴とか容易だけどそれは対策してあるから関係無い。

『…はあい、喫茶店クレイドルでえす』

「あ、もしもし？俺だけど、今、大丈夫？」

『少々お待ち下さいねえ。……もう、大丈夫ですよ。どうかさねましたかあ？』

「その前に秘匿回線のBに変更……」

『……出来ましたあ。御命令は何に致しましょうかあ？』  
オーダー

「ミリーとマリー、ウーリ。それとCOS-MOSをエヴァンジェリン宅へ派遣よろしく。エヴァちゃんが模擬戦したいんだってさ」

『御命令、確かに承りましたわあ。10分以内に参りますわねえ』

数回のコール音が流れた後、電話に出たのはミリーだった。電話するのに不都合が無いようにしてもらい、秘匿回線に回線を変更した。少しでも盗聴を困難にする工作だ。念話ばかり使っていると通信技術が低下するから緊急時以外はこれにした。

それと要請する人選は決めていた。COS・MOSは当然としてミリー達はエヴァちゃんを相手にする以上、万全に備えたいから呼ぶことにした。何だかんだで陽月姉妹、精霊3人娘、悪魔3人娘が、付き合いが長い分、個人戦闘では一番馴染むんだよ。

俺の安全を確保するのに一番だというのがもちろんあるけどね！！

「茶々丸ちゃん。電話、ありがとね」

「…いえ、お役に立てて何よりです」

「くくくっ、少しお茶しようか？それまでにエヴァちゃんも復活するだろうからさ」

「…はい」

電話が終わったから子機を茶々丸ちゃんに返した。それから茶々丸ちゃんとお茶を楽しんでいるとエヴァちゃんも“ウメボシ”と“クスグリ地獄”のダメージから復活してきた。

復活したエヴァちゃんは俺の仕打ちにぎゃーっ！ぎゃーっ！と文句を言ってきた。でもまあ、俺も少しやり過ぎたかもしれないとは

思っわけで黙って抗議を聞いていた。……半分ほどは聞き流していたけどね。

……。

……。

それから数分すると扉をノックする音が聞こえた。皆が来たと思っ  
て俺が行こうとすると茶々丸ちゃんに止められた。まあ客の自分  
が人の家で接客するのはマナー違反だったかな。…というわけで黙  
って待つことにした。

このログハウスの建築設計だからかは知らないが俺達が居るリビ  
ングと玄関は一直線なんだ。だから扉が開かれると誰が来たのか、  
一目瞭然だったりする。……まあ、俺が何を言いたいか、と言っ  
たかな？

扉を開けた時に茶々丸ちゃんがCOS・MOSを見て固まってい  
たりするんだよ。

「…どうかされましたか？」

「……はっ。失礼しました。どうぞ、お入り下さい」

「お邪魔します。マスターは…？」

「COS・MOS！こっち、こっち 【…皆も良く来てくれたね…】

」

玄関から入ってきたCOS・MOSと霊体化して透明になってい

るはずのミリー達に出迎えの挨拶と来てくれたことに対する感謝を述べる。うん、よかった！本当によく来てくれた！これで痛い思いをしなくてすむね！……たぶん！

「マスター…お待たせしました」

【…うふふふ お邪魔しますわねえ…】

【…だ、黙ってお邪魔するのはドキドキしますな…】

【…うー…。寒い…。ふああ…あるじー…】

COS・MOSはソファーに座る俺の横に駆け寄り、霊体化しているのでフヨフヨと近寄りミリーは背後から抱き憑いてきた。ウーリは膝の上を陣取り、マリーだけは黙って人の家に入ることによりドキドキしているようでキョロキョロしている。

むう…。横に立つCOS・MOSはともかく、ミリー達は霊体化していても抱き付いていることに変わりはない。エヴァちゃん達には見えていないとわかっていても恥ずかしいものがある。

それでも無碍に扱う気は毛頭無いけどね！これも一種の家族との触れ合い！スキンシップであり！コミュニケーションのはずだ！誰にも文句は言わせん！言わせんぞおおおっ！

すまん…。恥ずかしさを吹き飛ばすために少し取り乱した。

「待て、九重・葵。そいつらは何だ？」

「彼女はCOS・MOSだけど？……ッ」

それでまあ内面で色々取り乱していたわけだが、外面ではC O S - M O S 達と無事に合流できたことを喜んでいた。そうしていたらエヴァちゃんの何かを咎める雰囲気、声色で、口調で“そいつらは何だ？”聞かれた。

………ちよつと待て？今、エヴァちゃんは“ら”と言ったか？

何、この子？まさか、ミリー達の姿が見えているとか言わないだろうな！？家族仲がいいことは俺の自慢の一つではあるけど、じゃれ合っているところを他人に見られるのはまだ恥ずかしいものがあるんだぞ！？

………。

いやいやいや！そうじゃないっ！そうじゃないだろっ！？エヴァちゃんがミリー達を感じたかの確認が先だろうがっ！？何だかんだで好奇心旺盛なエヴァちゃんのことだ…。ミリー達のことかバレてもしたら面倒なこと…！それにアレだ…。

下級精霊を育てていたら上級精霊になっちゃった あはっ

…なんてことがバレでもしたらエヴァちゃんに殺されるかもしれない。ある意味、魔法学会に育成方法とか提出した途端に禁忌の所業として禁止されるかもしれない行為。大げさに言っているかもしれないけどエヴァちゃんならやりかねない！

それはなぜか？普通、自然界に存在する精霊を育てるなんてバカ

げたこととするヤツはいないからだ。そんなことをすれば育成者の魔力が根こそぎ奪われて魔力どころか生命力が枯渇してしまうからだったりする。

精霊は食いしん坊：というより底が無い。悪魔もそうだけど基本的に魔力で物質構成されている彼ら、または彼女達は保有する魔力量によって己が器を定めている。よって与える魔力量で拡張、強化、肥大化して存在としての位階を上げているんだ。

俺も当時は何も知らずに魔力を与え続けたけど、今では無謀なことをしたと反省している。後悔はないけどね！昔は生き残ることしか考えてなかったし！まあ結局、懲りずにオリーブ達も育てたけどね…。安全確保のためにな！

閑話休題…。

話しが逸れたが、それよりもエヴァちゃんがどの程度、ミリー達を把握しているのが問題だ…。とはいえ素直に「見えるの？」なんて聞いたら即アウトだし…。

「誤魔化すな！その“こすもす”とやらは茶々丸と似たようなものだろう。それはまだいい！だが、この濃厚な魔力の波動と自然に過ぎる程の気配……………まさか!？」

…どうやって聞き出そうかと考えていたらエヴァちゃん自身が疑わしそくに、そして興奮したように喋りだした。

うん…エヴァちゃんの話す内容から推測するに、ミリー達の存在

の強大さと、より自然に近い上級精霊であることを理性と経験で判断して、本能と直感で感じ取り確信の一步手前までもっていったよ  
うだ。

……いや、もしかしたら確信しているかもしれない。己が存在を  
確立した精霊など数えるほどしか居ない。最も、そういう力ある精  
霊は数千数万数億年前より遙か前に、この世界を旅立ち、今は居な  
いことも事実。

それら四大精霊に匹敵した力を内在したミリー達など神にも近い  
モノ。たまに思うんだが俺をこの世界に落とした女神（幼女）よ  
りも女神らしい精霊だな…。

「んー…秘密」

「#ツ!」

「まあ、そう怒らないで。……その辺りは察してほしいな」

「葵…。貴様は…」

故に何が何でも身内以外に話すことはしない。俺の安全のために  
育てたとはいえ今では大切な家族だ。折角、情報隠蔽したのに…安  
易に力を求めるクダライ人間のゴタゴタに巻き込まれるかもしれ  
ないような事態は避けなければならない。

オリビエ達を筆頭とした悪魔の彼女達は悪魔特有の戦闘本能があ  
るために、ちよつとした戦闘娯楽を提供する必要があるけどね…。  
長く生きる時の一番の大敵が退屈というのはウソじゃないんだ。

むう、ただねえ…エヴァちゃんとは、そこそこ仲良く付き合っ  
ていきたいからこれ以上、俺の大事なことに踏み込んでこないでく  
れと助かるんだけど…。んー…。

……。

はっ！？そうか！俺は考えた！この真剣な空気をブチ壊す方法を  
っ！

「アメちゃん、あげるから！さ」

「###ツ！！！」

「……いない？」

「……貰おう」

「はい、どうぞ」

学園長のマネをするのは少し…いや大分癪だが道化になろう！と  
いうか、俺がシリアスな空気に耐えられません！幸いにもエヴァち  
ゃんも俺の行為に乗ってくれたから助かるしね。

もう少ししたらエヴァちゃんの「別荘」に行こうと思う。……い  
つ頃かだつて？エヴァちゃんがアメちゃんを食べ終わる時だよ！こ  
んなに幸せそうに食べているのに止められるかよ！

それにもしかしたらこのまま模擬戦の話も流れるかもしれな  
い…。淡い希望だけだね！

S  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t  
  
葵

第五十五話「後日とお誘いと戯れと」(後書き)

エヴァちゃんとの絡みは書き易いわー、…と思うのは作者だけでし  
ようか？

まあこれは二次のクオリティは別にしてですが。

それなりに楽しんでいただけたなら作者としては嬉しい限りです。

あと2話くらいはエヴァちゃんと絡むかもしれませんね。

ま！予定は未定ですが！

ではでは！B i s b a l d！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第五十六話「模擬戦と模擬戦と模擬戦と」(前書き)

模擬戦オンリーです。

では続き！

## 第五十六話「模擬戦と模擬戦と模擬戦と」

エヴァンジェリンリゾート「別荘」…。

Side 葵

どうも！葵です！突然ですが、ここで問題！でれっでれーん！

俺は、今、どこに、居る？

…ちく…たく…ちく…たく…時間切れ！

答え！ただいま！絶賛！エヴァちゃんの「別荘」の中に居ます！

！！

……。

……。

ああ、そつだよ！結局、模擬戦の話は流れなかったよ！こんちくしょー！！

悪意を持った相手なら断固として拒否するところなんだけどエヴァちゃんは純粹に好奇心からの行動だから断れなかったんだよ…。r z女の子に甘いと自覚しているつもりだけど、まだ自覚が足らなかったようだ…。

【…ハオ、ユエ？…】

【…いつでも…】 【…どこでも…】

【…ウーリ、マリー、ミリーは？…】

【…たとえ…】 【…火の中…】 【…水の中あ…】

「…COS・MOSは？」

「…コンディションオールグリーン。問題ありません」

まあやらなければならぬと言うなら仕方が無い。増援は呼べたんだから命の安全はほぼ保障されたようなものだろう。エヴァちゃんの得意の魔法属性は氷と闇、あとは光を別にして雷などの他属性を可もなく不可もなく言ったところか…。

氷系統なら水精霊のミリーと火精霊のマリーで十分に対応できる。でも、闇か…。闇はどうしよう？ここは純粹に総魔力量で押し切るか？随分と力技になるけど、この際、それも仕方ないかもしれない。

いざとなったらラミエルさんを展開すればいいし。それにこんなことがあるかもしれないと考えて“対エヴァちゃん用最終兵器”も用意してあるんだ。問題も心配も無い！！……………はずだっ。うん。

とりあえず皆に確認を取ると戦闘活動に問題無し、と返してくる。因みにラミエルさんはミリー達来る前に自己診断をさせていたから確認するまでも無く準備は万全だ。

皆の準備が出来ていることを確認できた俺は両手に陽月を握ると、

脳内と補助脳に存在する魔導回路へ魔力を流す。一瞬で脳と補助脳の内に構築されている回路が起動する。

…アストラル・ライン精神魔導回路、アクション起動。

「んっ…！」

身体の隅々まで流れているナノマシンが多種多様の身体的、魔法的の両方を可能な限り強化し戦闘力を完全に出せるようにする。ナノマシンは日々調整して機能の拡張、強化、情報更新を施している。

…パラレル・キャスター スタート並列詠唱、クイック・キャスター スタート開始。  
…クイック・キャスター スタート高速詠唱、開始。

今の強化内容は肉体的なもので身体強化から始まり反射能力強化や思考能力の高速化、それと思考分割、平行思考能力などがある。主目的は魔法力増幅、魔力の効率的利用、術式の最適化などだ。

「…んあ！…ふう」

…俺の戦闘態勢を整える。ああ、この感覚も久しぶりだ…。最終的には常時発動状態にするのが目標ではある。あるけど、どうもナノマシンとは所詮、異物であることに変わりはないみたいで身体が高揚して戦闘本能を刺激するらしいから難しいものだ…。

「用意はいいな！始めるぞ！」

「はあ、お手柔らかに頼みたいところだが…」

「言ったはずだ！それは貴様次第だとな！行くぞ！チャチャゼロ！」

茶々丸！」

「アイサー！御主人！」…お相手致します」

「ちよつ！？従者を2人とかズルくない！？」

律儀に、こちらが準備を整えるのを待つてくれたのは嬉しい。…  
…だけど模擬戦とはいえ、出来ればエヴァちゃんとは戦いたくない  
なあ、と思うのは贅沢だろうか？痛い思いはしたくないんだよ…。

それと！従者人形で殺戮人形のチャチャゼロと、科学と魔術のハイブリッドである茶々丸ちゃんの従者2人を仕向けるってどういうことかな！？今はCOS - MOSと俺の2名しか居ないのにいいッ  
！！

「チイイ！？COS - MOS、いけるか！？」

「…問題ありません。お任せを」

そう言つとCOS - MOSは砲弾のように飛び出していった。彼女の返答に満足感と頼もしい思いでエヴァちゃんの従者達を任せた。その背中には頼りがいのあるように見えたね！

それによく考えたら、この模擬戦も悪いことばかりではない。あの2人を相手にすれば、COS - MOSは戦闘情報や経験情報を蓄積することが出来るからだ。これはソフト面で更なる飛躍を望める結果に繋がる。

そつだ！彼女の経験情報を一定以上蓄積できたら兵装も増やそうかな？試作品の実証試験とか…。お？実証試験が出来てCOS - M

OSの兵装も増える。割と一石二鳥じゃね？

そうなるとより一層、新世界の対魔法使い戦、対魔獣戦などの特殊戦闘だけでなく対人戦、対戦車戦などの旧世界に対応した戦闘マニュアルも構築する必要があるか…。今もデータ更新して状況判断の糧としているようだし…。

いや……マニュアルは概要だけで細かな部分は敢えて自己判断に任せて思考の柔軟化を図るのもいいか。さて、どうするべきかとチラッとCOS・MOS達を見る。

「……………」

「ウオツ!?!」「…っ!貴女は…」

「…貴女方のお相手は私が致します」

「カカカ!上等ツ!!」「…行きます」

「……………」

COS・MOSはチャチャゼロと茶々丸ちゃんの2人を相手に接近戦を主体で激しい攻防を繰り返しながら、なかなかどうして健闘しているようだ。あの攻防では飛び道具なんて使う余裕はないだろうな…。

それでも機体スペックの差ではCOS・MOSが2人を上回っていることは間違い無い。チャチャゼロ達は豊富な戦闘経験と連携で互角以上の戦いをしている。やっぱり経験情報が豊富だとすごいなあ…。

でもまあ、アレならあつちは彼女に任せて大丈夫つと……。残るは……。

「リック・ラク　ラ・ラック　ライラック！氷の精霊17頭・集い来たりて・敵を切り裂け！魔法の射手・連弾・氷の17矢！」

「セット・フェミリ　ラ・リア　ファミリア！炎の精霊17柱！！集い来たりて・敵を討て！魔法の射手・連弾・炎の17矢！」

互いに空中へ飛び出してエヴァちゃんの放った魔法の射手と同数を撃ち合って相殺したわけだけどね？どうにかして、この我が侬吸血美幼女をあしらわないとならないわけなんだが、どうするべきか……。

とりあえずエヴァちゃんは小手調べに魔法の射手を放って来たわけだが、当然その程度なら同様の魔法の射手で対応できる。寧ろ、無詠唱ではないだけエヴァちゃんの遊び心が垣間見えるというものだ。

でも、本当にどうしようか？本気で叩き潰す気ならば初っ端からラミエルさんの大型荷電粒子砲で肉体を問答無用に吹き飛ばすこともできる。だけど高が模擬戦で、そこまでする必要もメリットもない。

ま！いざ俺の身に危険が迫ったらヤルけどね！

あれ！？今、ふと、思ったんだが五百数十年振りに起動キーを唱えて、普通に魔法を繰り出した気がする！！長い間、使ってなかったから忘れていたと思ったのに案外、身体は覚えているものだなあ

…。

ミリー達が力をつける前は普通に起動キーを唱えていたのに今ではミリーとかマリー、ウーリ達とのラインを通じて魔法イメージを無理矢理、世界に具現化させていたからなあ…。思い浮かべるだけだから周囲には無詠唱に見えるんだよ！

身も蓋も無くハッキリ言いうと詠唱なんていらんのよ。精霊契約の副次効果によって深層意識下で繋がっている精霊さん達にお願いしているだけだし。

「フハハハハッ！小手調べは必要ないようだな！」

「いやー、俺って怖がりだから、これで終わりにしたなー…なんて？」

結構、本心だ。俺個人としては前に出て戦うより、砲台として後方からの援護支援のほうが好みなんだ。アウトレンジからの一撃必殺、これが理想だな。

「さあ！まだまだ行くぞ！！リク・ラク ラ・ラック ライラック  
！来たれ氷精・闇の精…！」

「ですよなー…。では…」

うん、まあ、俺の意見がアツサリと通るなんて思ってたはいなかったさ。それでもね？会話はしようよ。相互理解は必要なことだと俺は思っんだ。

会話が成立してないなあ。お兄さんは悲しいよ…。くくくっ！そ

う、悲しい…。ああ、話を聞いてくれないから悲しい。だから俺はエヴァちゃんをお仕置きしないと…ダメだよねえ？くくくっ！

…術式「紅き焰・連弾」を展開。

スベル・メモリー

コンフリット

…全術式展開、完了。

セレクトシヨノンラビットファイア

…選択、速射型を形成。

…集束。…集束。…集束。

…圧縮。…圧縮。…圧縮。

オール・コンフリット

…全工程、完了。

…速射魔法「フランベルジュ」…。

詠唱を始めるエヴァちゃんから瞬時に後退。急速に距離をとりながら意識内で魔法術式を構築した。平行思考と分割思考による処理範囲の広範囲化。そしてそれらを高速で処理する思考能力の高速化で瞬時に成せる業<sup>わざ</sup>だ。

先程も言ったかが能力は日々更新され最適化することで強化され続けている。普通に呪文詠唱している者には出来ない芸当であり、無詠唱でも追いつくことが出来ない領域だ。魔法の構築速度、威力、魔力効率、どれを取っても負けは無い。

魔法発動準備が出来た時“ニヤリ…”とした嗤いを今の俺は浮かべていることだろう。これは活発に活動するナノマシンに戦闘本能が刺激されている証拠だったりする。普段、臆病者の俺には似合わない嗤いだ…。

「行くぞ？<sup>エグザート</sup>発動！」

「…闇を従え！吹雪け・常夜の、って！のわああああーッ?!?!?!」



左ッ！左ッ！ガーッ！連続で外したッ！む！？そこ！下ッ！……くっ！惜しいッ！！なかなか当たらないなあ。くくくっ！

生意気なことを言って、ごめんなさい！台詞だけでも気合を入れておかないと怒気を放つエヴァちゃんにジャパニーズ土下座して謝っちゃいそうなんだ！それに脳内麻薬を今現在、ダダ洩れ状態にしてテンション上げているんだよ！！

「グッ！！葵ッ！貴様あッ！性格が変わり過ぎてないかつ！？！？」

「何・の・こ・と・か・わ・か・ら・ん・な！！はーっはっはっはっはっはっ！！」

文句を言っている暇があるのかなあ？くくっ！あーっはっはっはっはっはっ！止まっていると当たっちゃうぞお！？

意気のいい台詞を言っでは居るが、現実には脳内麻薬が過度に分泌されて最高にハイって状態になっているだけだ。模擬戦が終わった後にエヴァちゃんから何を言われるかと考えるだけで漏らしそうだし！！

「ぐああああつ！！ゼツタイに殺してやるーっ！！！！」

「あははははははっ！……はは？はあ？？」

シイイト！！しまった！やってしまった！調子に乗っていたら速射が終わっちゃった！！エヴァちゃんはどこ行った！？……チッ！爆煙が邪魔してわからん！！

「クッ！やっと止まったか！！リク・ラク　ラ・ラック　ライラッ

ク！来たれ氷精・闇の精・闇を従え！吹雪け・常夜の冰雪！…お・返・し・だ！！闇の吹雪！！！！」

「ぬおおおおっ！！寒い！？スゴイ寒い！！メツチャ寒い！！！」

爆煙を煙幕にしてエヴァちゃんはあらぬ方向から不意打ち気味に闇の吹雪を放ってきた。俺は陽月に魔力を流して闇の吹雪を切り刻み、直撃だけは避けることに成功した。しかし、吹雪が身体に纏わりつくように張り付き、僅かにダメージは受けたようだ。

因みにDフィールドは茶々丸ちゃんを通して超一味に手札を見せるように癪だから、万が一の場合以外は展開しないようにラミエルさんをお願いしてある。これはCOS・MOSも例外ではない。

第一襲撃時にプロテアで見せてしまったから、そのことで関連付けられても困るしね！まあ既にエヴァちゃんと関わっている時点で長一味には怪しいとは思われているようだがな。

閑話休題…。

魔法の雪は服の中に入っていないが冷たいことには変わらない！寒い！地上に降りて身体と服を魔力でコーティングして雪を弾き飛ばす。ただ、この時の俺は不覚にもエヴァちゃんから注意を逸らしてしまっていたんだ。

「フハーツハツハツハツハツ！！今度は貴様が逃げる番のようだな

っ！！リク・ラク ラ・ラック ライラック！来れ氷精・大気に満ちよ！白夜の国の・凍土と氷河を！…足下がお留守だぞ！こおる大地ッ！！！」

「ぐはあああああつ！！滑る！？危なっ！？刺さったらどうする気だッ！？」

「なぜ、避けるっ！？！？」

「避けるわーッ！！！！」

纏わりつく雪を振り払いながら呪文詠唱するエヴァちゃんに気が付いた時は既に魔法は放たれた後だった。地上に降りていた俺は凍りつく地面を目にした途端に瞬動で回避……すると鋭く尖った氷柱が行き先を塞いできた。

瞬動の移動力のまま氷柱に突撃したらアイアンメイデンよろしく全身串刺しになってしまわないか！！……うわっ！？想像したけど寒いし！痛過ぎるな！？

地上に降りてきたエヴァちゃんは、心底、なぜ氷柱を避けるのかと不思議そうに言ってくるしよ！！エヴァちゃん……何度も言うが俺は不老であつて不死ではないの！！わっかんないかなあーっ！？

この時、脳内麻薬で高揚状態にあつたのと、ちよつとイラツとしたからかもしれないが普段の俺にはありえない行動を取った。接近戦をエヴァちゃん相手に仕掛けることにしたんだ。陽月を構えて、いざ突撃！！ってね！！

「むッ！？」

「チィ！意外と反応が早いッ……」

それでもエヴァちゃんは逸早く反応すると瞬時に右手に魔力刃を展開した。クロスした陽月を縦に構えることで鏢迫り合いの様相をなした。ギチギチと刃が火花を散らしているところから魔法力の反発が起きていることがわかる。

エヴァちゃんのアレは…エクスキューションソード？確か、固体・液体の物質を無理矢理気体に相転移させて剣（断罪の剣）として使う近接魔法だったか？やれやれ…陽月でも断てない魔力密度で構成するとは、何と言ってよいやら。

「クククッ！近接戦ならば…と思ったのか？存外、考えが甘いのだな」

「まあ…エヴァちゃんって身体が幼女で、色々小さいし…。それに全体的なりーチが…ねえ？わかるだろ？自分のことなんだから…」

「クッ！賣さ…ッ！？ふ、ふふんっ！私を怒らせて隙を狙おうとは随分、姑息な手を使うじゃないか。ええ？」

チツ、割と頭に血が上り易いエヴァちゃんなら激昂してくると思っただのに…。そう簡単にはいかないか。ならば！近接戦で連撃を仕掛けて、仕掛けて仕掛け続けるのみ！！

「一ツツ！聞き、たいッ！シッ！この模擬戦はッ！ルール無用だったなッ！？」

「そつだツ！そつでなければツ！クツ！？貴様のツ！実をおツ！測れないだろうがツ！！」

一合！二合！三合！四合！五合！六合！七合！九合！十合！……！！

次々に斬り結ぶ中で大半の手札を伏せた状態の現状でエヴァちゃんを押し切るのは難しいと判断した俺は一つ手札を切るかどうかで一瞬、迷った。これは模擬戦だ。しかし、だからと言って負けるのは癪だった。

故にエヴァちゃんに一つ聞いた。“ルール無用にした理由は何か？”と……。彼女の答えは実にシンプルでわかり易かった！ただ“実力を測る”というもの！

あらゆる手札を封じた現状では力技しか出来ない今、彼女の願いを叶えることが出来るか？否！断じて否だ！このままでは普通に訓練するのと変わらない！だから、俺はっ！！

「ならばッ！！！！！」

「ぬおうッ！？！？」

遠慮の必要は…無い！

鏝迫り合いをしている時、陽月へ強めに魔力を注ぎ、一気に振り抜いた。その衝撃でエヴァちゃんは大きく後退することになり、俺との距離をひらくことになった。

「一つ、手札を見せてやろう。…Wake Up！ラミエル！！」

『Roger, My Master』

ペンダントになっているラミエルを外して頭上へ掲げる。ラミエルは空中へ浮かび上がると体積を全長50mほどまで肥大化させる。ラミエルは大小様々な荷電粒子砲とミサイル発射口を展開する。

この状況は茶々丸ちゃんの記憶フォルダから超一味に情報として流れるだろう。だけど、エヴァちゃんの期待に一つ応える意味では、これは仕方ないことだろうよ。

そんな考えが頭を過ぎる。だが今は歌のように心地よいラミエルの稼動音を耳にしながらエヴァちゃんに俺は笑みを見せることにした。

「な、何だっ！これはっ!？」

「くくくっ！無数の荷電粒子砲による弾幕結界だ。…エヴァちゃんは避けられるかな?…ラミエルッ！All Out!!」

『Roger……Fire!』

「チイイイ!!グッ!こんなっ!!うぐっ!?!がはっ!!」

ラミエルにガンガン行こうぜ!と指示すると全ての荷電粒子砲に集まるエネルギーが急速に集束してエヴァちゃんの周囲へ全力砲撃(威力は抑えているよ!?)を開始した。

エヴァちゃんは光の本流と言ってもいい密度の弾幕に曝されて避けることも儘ならない。彼女の羽織るマントはボロボロで形を成し

ていない。エヴァちゃんの肌は光の粒子に焼かれて爛れ、重度の火傷を負っている。

反撃するにも呪文を唱える隙など容易に与えるわけがない。俺が態々指示するまでもなくラミエルは間断無く砲撃を継続している。

回避、回避、回避…また回避。エヴァちゃんは回避しては真祖ハイデイライの吸血鬼トウオーカの回復力で凌いでいる。

……まさか、俺の時のようにエネルギー切れを狙っているのか？だとすれば、甘い…。

「ラミエルの弾幕に切れ間はないぞ？魔力エネルギーが切れるまで半永久的に放たれる。加えて……ラミエル！」

『Roger・対魔誘導ミサイル用意。発射口、全開放。……一斉発射、Fire!』

「何ッ!? ツ!しまッ!?!?」

ラミエルの背後から垂直発射されたミサイルが彼女の頭上から襲い掛かると至近で爆発した。荷電粒子砲に気を取られていたエヴァちゃんは爆発に体制を崩す。次の瞬間、一際、大きな光にエヴァちゃんは飲み込まれていったのだ。

「マスターッ!?」「御主人ッ!?」

「…余所見とは感心……しませんッ!」

「ガッ!? ゲエッ!!」

「姉さんッ!?!」

「…他を気にしている暇など……ありませんよッ!」

「えっ…? キヤッ!?!」

チャチャゼロと茶々丸ちゃんの従者2人は主であるエヴァちゃんが消え去ったことに強い動揺を表す。そこへCOS-MOSがまだ戦いは終わっていない、と言わんばかりに戦闘を続行。従者達を殴り、または蹴り飛ばした。

俺は何かをやり過ぎてしまったかもしれない…。だって、大型荷電粒子砲から放たれた光の本流に飲み込まれてエヴァちゃんの姿が跡形もなく消え去っていたんだ。大出力の魔力エネルギーからなる砲撃だ。個人の障壁では防げるはずがない。

「うわー!?!」

『心配するな、我が主よ。出力は死ぬギリギリまで抑えてある。問題は無いだろう。……… (ボソッ) たぶん』

「大丈夫、かな…」

エヴァちゃんがミサイルの爆発に気を取られ態勢を崩した、その隙に大口径の荷電粒子砲に飲み込まれてしまったんだよ?これはダ

メじゃないか？生きているとしても今のエヴァちゃんでは復活にどれくらいの間が必要になることか…。

ラミエルは役割を果たし元のペンダントに戻っていた。この子は大丈夫だと言うが、ちよつと無事だとは思えない。無論、絶対に生きているとは思つ。それでも怪我をしていないかが心配だったりするんだ。

ラミエルの砲撃で出来た堀を歩いて吹き飛んだらうエヴァちゃんの一部でも見つけれないかと探すことにした。そこらの周囲は電化してイオン臭がしている。

砕けた地面をザクツ、ザクツと踏み鳴らして探した。

【…ッ！我が君！…】 【…後ろですッ！…】

「チイ！？セアアアアッ！！」

「ふんッ！なかなか勘がいいじゃないか。九重・葵…」

無事だったっ！？じゃない！無事だった！！生きているとは思っただけどエヴァちゃんの身体には表面上、大きな傷は見られない。中身はどうか、わからないからなんとも言えない。もしかしたら再生の途中でグチャグチャなのかもしれない…。

吸血鬼特有のコウモリを服とする方法で、それを纏い一応の体裁を整えているのかな。影から転移してきたエヴァちゃんは右手にエクスキューションソードを展開したまま俯いている。金髪が貞のようになっていて不気味だ…。

なんにしても今のは危なかった！影の転移はいいけど背後からエクスキューションソードで斬り付けてくるとか何を考えているのかな！？ハオ達が教えてくれなかったら真つ二つだったじゃないか！？殺す気か！？

「……………やあ、エヴァちゃん。無事のように何よりだね」

「クククツ！ああ、肉が焼けるほどに日焼けをしてしまったぞ？…  
…貴様も日焼けしてみたらどうだ？」

「うんっ！全力で遠慮しますっ！！」

金髪で隠れていたエヴァちゃんの目は人形のように冷たくてゾツとした。彼女の楽しげに語りかけてくる声は皮肉気だが楽しそうだった。でも、笑顔が不自然なまでに優しく、作り物めいて見えて怖い…。

そんなわけで得体の知れないお誘いは即効で拒否したわけなんだけど、次第にエヴァちゃんの纏う雰囲気がピリピリと張り詰めてきた。模擬戦、最初の楽しそうな空気は霧散して闘気が怒気に、怒気が殺気になるのが手に取るようにわかった。

……………あれ！？というか！殺気！？模擬戦だよね！これっ！？一種の腕試しでしょ！？何で殺気が溢れるのかなっ！？！？！？

俺・が・何・を・し・た・ツ！？！？

「そうか、残念だ…。フフツ…クククツ！それでは……………雪景色の一部としてくれるわーッ！！！！リク・ラク ラ・ラック ライラック  
！！！！」

「うわーんっ！！エヴァちゃんがキレたーッ!?」

エヴァちゃんは何を怒っているのか知らないが、とにかく彼女がキレたのは理解した！これは理不尽な気がする！俺は怒られるようなことをした覚えはない！無実だっ！これは冤罪だっ！

だって、そうだろう!? エヴァちゃんを吹き飛ばしたのはラミエルだ！俺じゃない!! だからと言ってラミエルを破壊しようとするなら俺も黙っちゃいけないけどね!! もう手札とか関係無く援軍呼んじゃうもんねっ!!

「契約に従い・我に従え・氷の女王！来れ・とこしえのやみ！喰らええええええッ!!!! えいえんのひょうが!!!!!!」

ギャーッ!!!!?? 本気で撃ってきたッ!!!!? しかも広範囲完全凍結殲滅呪文だっ!!!!? ま、まずいつ!!ここから逃げなきゃ!!!!? 離れてっ!!逃げなきゃ!!!!? っ!!!!逃げなきゃ!!!!? っ!!!!

「ッ!!ヤバ ……」

全速力で逃げ回っていた俺が一瞬ヤバイと意識すると同時に俺の身体は氷が覆い始めて全身を包み込んでいた。寒いとも冷たいとも思わない。ただ、鋭く刺すような痛みを皮膚に与えてくるのみだ。

普段のエヴァちゃんなら、これ以上しなと思う。でも！キレた今の彼女だと、このまま俺ごと氷を砕かれるかもしれないっ!!?

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイーッ!!?!?!?!?

ハオーツ！ユエーツ！ミリーツ！マリーツ！ウーリツ！COS・  
MOSツ……は茶々丸ちゃん達を抑えて動けないか……。とにかく  
助けて！？誰か具体的にはミリーツ！マリーツ！ウーリツ！と・に・  
か・く！助けてー！ツ！！

S i d e o u t 葵

第五十六話「模擬戦と模擬戦と模擬戦と」(後書き)

うん……。どう言ったらいいかわからん。

模擬戦の話しが1話で終わらなかつたぜいorz

次で……。次で終わらせる……。できるかな？じゃない、やるんだ！

最近、影の薄い葵の活躍シーンを書くために！

ではでは！B i s b a l d！

皆様の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第五十七話「模擬戦と決着と交流？」（前書き）

模擬戦の続き！

## 第五十七話「模擬戦と決着と交流？」

エヴァンジェリンリゾート「別荘」…。

Side エヴァンジェリン

私は九重・葵の所有する正八角形をした青いクリスタルの僕？魔法武器？今更どちらでも良いが、葵は“らみえる”と呼んでいたな。ソイツの攻撃に身体の半分近くを吹き飛ばされた。

私よりも長く生きた存在としては多少アレな…私の子供扱いです。的の意味で…ヤツだが少なくとも私の半身を吹き飛ばす技量を持っていることはわかった。

……クククツ！思い出したっ…！本当に久しぶりの屈辱と苦痛だったぞ。ええ？九重・葵よ。それこそ私が真祖の吸血鬼であることを、不老不死であることを強く再認識させられる。クククツ！ああ、それはもう鮮明に思い知ったほどだ。

あの瞬間、完全に吹き飛ばされる前に身体をコウモリ化して再構築した。次に影の転移魔法を展開し射線より退避。もちろん、ヤラれたままで終わらせる私ではない。転移先は葵の背後だ。

背後に出た刹那、ヤツは弾かれたように私に反応した。警告も無しにエクスキューションソーダを振るったが何かに警告を受けたように葵は勘良く回避したがな。

確かに、久しぶりの痛みと屈辱で怒りが頂点に達して、エクスキ

ユーシヨナーソードで斬り付けたのは“多少”大人気なかったかもしれん。反省も後悔もしないが…。

最終的に葵を氷付けにして私もある程度、溜飲が下がった。それによく思い出してみると私は不老不死ではあるが葵は不老であつても不死ではなかったのだからな。危うく殺してしまふところだったか…。

いや、その時は私がヤツを噛んでしまえ…、チツ！何をバカなことを考えている？エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル…。自分の都合で噛むだと？バカなっ！そんなふざけたことがあつて堪るものかつ…！

「…ふふんっ　ともかく、この勝負は私の勝ちだなっ！フハハハハッ！」

そうだ。結果として葵は私の一撃を回避したが今は氷付けになつているだけで死んではない。それが事実で、現実だ。不老の葵は殺されない限りは不死なのだ。私は何を血迷つたことを考えていたのか…。

私の半身を吹き飛ばしたことは葵を氷付けにしたことでチャラにしてやるう。まあ、暫らく氷の中で反省してもらうがな。私を半身とはいえ吹き飛ばしたのだ。当然だろう？フハハハハハハハッ！

……それより気になるのが、ヤツが行使した魔法の発動方法だ。魔法技術では私でも知らない方法で行使していたように見えたのが興味を惹く。その中に一撃の威力は紅き焰クラスだったが連射性が桁違いだった。



変化があつたのか？もしかしたら、これさえも葵の用意した罠なのか？様々な可能性を考える。

そして何よりも気になるのが葵の従者の態度だ。微動だにせず、そして何かを確信しているように構え、チャチャゼロらを変わらずに警戒している。その姿はこう言っているのだ。“まだ終わっていない…”と。

「そうか…。まさか葵は<ピシツ>…なるほど、やはり、終わっていないと言うのか？」

氷を凝視していると葵を中心に小さな罫が入った。それは普通なら取るに足らない、とても小さな罫だ。だが、コレは違う…。使用目的で違うが魔法の氷は術者の意思に反して融けることはない。それなのに小さいとは罫が入った。

私の魔法が破られようとしている…。

その事実私の背中に冷や汗が流れるのを確かに感じた。外面では冷静さを取り繕っているが内面はバカな、という思いが占めている。私の大呪文を何らかの対抗策を以って打ち消したと言うのか、という疑問もある。

何にしても私は驚愕の次には歓喜した。クククツ！それは、そうだろう？何をしたのかは知らないが私の作り出した氷の中では葵を中心に数種類の濃厚な魔力のうねりを感じ取れる。

これらからは私と同等かそれ以上の魔法力を持っているのを感じる。…ということ、だぞ？またしても別個の脅威が存在することに他ならない。まだまだ底力を引き摺り出して見極める必要がある

な…。

ククツ！楽しいじゃないか。ええ？心が躍るなあ！この模擬戦は所詮、児童程度にしか考えてなかったが思わぬ収穫があった！ここからが本物の闘争の始まりだっ！！なあ？九重・葵よっ！！クククツ！

「ガアアツ！！寒いつ！くそっ！氷漬けなんて冗談にもならないっ！」

「クツ！！来たか！？」

小さな罅から無数に増えて罅は亀裂になり中心から砕け散り、無傷で現れた。ヤツを取り巻く膨大な魔力のうねり、拡散と集束を感じる。この魔力波長は葵ではない、別の誰か…。こすもす以外に感じたあの2つ…いや“3つ”か？

気になる点が多いが何らかの魔法的手段を用いて私の魔法から脱出したのは否定しない。ただ、私がありえないと考えたのは葵が“無傷”という、ただ、その一点だ。どれだけ頑丈なのだ？まったく…。

脱出した時に寒いとほざいていた。これは冷凍系の魔法がある程度ダメージを通しているということだろう。このことから最低でも氷の欠片や雪などで凍傷ダメージを身体の表面状だけでも現れていくはずだ。

それなのに無傷だと？私をバカにしているのか？と真正面から言っ  
つてやりたい。

……ん？あー…今、気が付いた。こいつもナギ・スプリングフィールドやジャック・ラカンと同じように世界の“バグ”だったのだな…。ああ、そう考えれば納得がいくというものだ。ハハハ…。

軽く…逃避した…。

「エヴァちゃん、やってくれたねえ…。いい感じに雪景色…ではなくお花畑が見えそうだったよ」

「そ、そうか……………って！そうじゃないだろ！！なぜ無傷なんだっ！？」

氷の中から飛び出して葵がゆらりと地面に降り立つと、私に対して優しく微笑みかける。そして不自然なまでに優しく語り掛けた。その姿はどこまでも自然体だ。それでも容易に襲いかかれるビジョンが思い浮かばない…。

微笑み語りかけてくる葵を警戒し、一挙手一投足を見逃さないと凝視する。黒い艶やかな髪の方こうにあるヤツの黒い瞳は吸い込まれそうなほどに透明で不安と恐怖、闘争や狂気などからは懸け離れた印象を抱かされる。

一瞬だが見惚れたと言ってもいい…。それも葵の次の行動で警戒心を最大限まで上げることになったのだが…。

「くくくっ！エヴァちゃん……。心の準備は……………いいかなあ？」

「は……………？貴様は何を言っ……………ッ！？！？！……………！？」

何だ、アレはッ！？何だ、アレはッ！？何だ、アレはッ！？何だ、

アレはッ！？何だ、アレはッ！？何だ、アレはッ！？何だ、アレはッ！？何だ、アレはッ！？何だ、アレはッ！？何だ、アレはッ！……ッ！？！？！？！？

葵の背後の空間が揺らめいたと思えば、そこからヤツはスプレー缶ほどの大きさのものを数個、取り出した。良く見ると缶の上部にはピンのようなものがある。形状から考えるに、おそらくアレは手榴弾のようなものなだろう。

だが、ただの手榴弾であるわけがないっ！これは私の勘だが絶対・につ！間違い無くっ！碌な物ではないっ！あの手榴弾からは何やら私にとつてとても不愉快なモノであると直感が告げているのだっ！……

んっ！？少し待て……？“私にとつて不愉快なモノ”……だと？不愉快……それは苦手なモノ？私の苦手なモノは？それは……。……え？いや、そんな……しかし……。

……… つつつ！……！……！

まさかつ！？まさかつ！？まさかつ！？まさかつ！？まさかつ！？まさかつ！？まさかつ！？まさかつ！？まさかつ！？まさかつ！？まさかつ！？まさかつ！？まさかつ！？まさかつ！？まさかつ！？まさかつ！

苦手なモノ。不愉快なモノ。…そこまで考えて思い出したのは私が封印される切欠にもなった十数年前のあの時のことだった。ナギに最後の戦いを挑んだ時のあの屈辱！あの恥辱！あの卑怯な方法を……！……！

まさか…そんな…う、うそ…だよな？…なあっ！？貴様は…葵は…そんなこと…しない…よなっ！？………何とか言えっ！？無言でピンを抜くなっ！？ち！近寄るなっ！？？投擲態勢に入るなあっ！？！？！？！？

「お・仕・置・き・だ・べ・え」

「ま、待てっ！ん、何なのだ！！そ、それはっ…！？ふっ！？ふにやにや…！…っ！？！？！？」

ぐえほっ！？！ごほっ！！！ごほっ！！！げえ！おほっ！ごほっ！！くさいっ！くさいっ！ああああああっ！？！？！？めにしみるうッ！？！？！にやああああああっ！？！？！？！？！？！？！？！

葵の放り出した手榴弾から黄色く毒々しい噴煙が噴出した。一瞬で私の周囲数十mを包まれた。噓せ返るような刺激臭で目、鼻に重大なダメージを与えてくる。

もう…だめ…きゅううう…。

ここからが本気の勝負と考えていた。それなのに嘗て一度だけ感じた刺激臭、その数十倍の威力で私の意識は途切れてしまった。私の記憶に残る最後の光景は葵の苦笑と「ごめんね」という謝罪の言葉だった……。

Side out エヴァンジェリン

エヴァンジェリンリゾート「別荘」…。

Side 葵

エヴァちゃんを見事に負かしたことで無事に模擬戦も終わった。それで必勝のために俺のとったとある方法でエヴァちゃんも気絶してしまったわけだな。流石にやり方がやり方だったから罪悪感を持った俺は「ごめん」って謝ってしまった。

ただまあエヴァちゃんが復活して何か言われるのが怖いから、その前に俺達は帰ろうと外に繋がる魔法陣へ移動しようとした。…した、んだけど茶々丸ちゃんから聞かされた衝撃の事実によって帰還は断念せざるを得なかった。

茶々丸ちゃんが言うには丸一日、経たなければ外には出られないということだった。オウ…シット…これじゃ逃走出来ないじゃないかよおorzはあ…そういえばそんな設定ありましたね…。スツカリ忘れていたよ…。

そんなわけで時間が経過するのを皆でお喋りしながら待っていたわけですよ。逃げようにも、こればかりはどうしようもない。うう…エヴァちゃん怖いよお。

それでも留まるしかないわけで茶々丸ちゃんとCOS・MOSが改めてお互いに自己紹介し直していたり、同じような科学と魔術のハイブリッドの存在であったり、ということ話を話していた。

って……あれ？COS・MOSさん？あまり君の情報を超一味に流すようなことは感心しないよ？いやいやいや、茶々丸ちゃん個人は信じられるよ？俺個人も好きだし。

でもね？彼女が何らかの事態でメンテ時に情報引き出されたらアウトじゃん。重要な情報は無かったようだからいいけど、これを切欠に接触してきたら……俺はともかくアイリ達キレないだろうな？

……。

……。

しばらくすると俺の恐れていたエヴァちゃんが目を覚ましたんだ……。最初に何を言われるかとビクビクしていたわけだ。寝惚けたエヴァちゃんだったけど目覚めた瞬間に言ったのは「くさっ!？」だった。

えー……、としか言いようがなかったね。怒鳴られるよりはいいけどさ……。

でも、やはりタマネギ成分とネギ成分、おまけにニンニク成分のハイミックス、更に濃縮した手榴弾は強烈だったようだ。一応、これは対エヴァちゃん用最終兵器だったけど今後は暴徒鎮圧用にトウガラシ成分も入れる予定だ。

因みにこれらの成分は科学的に抽出して濃縮したものだから食材を使ったものではない！食べ物が無駄にしちゃダメ！絶対！お兄さんの約束だ！

エヴァちゃん用手榴弾を作る切欠だったのは昔、エヴァちゃんが捕まる時のことだ。ナギに嵌められた落とし穴の中に嫌いなネギとタマネギを大量投入されてパニックを起していた、…と情報部から報告を受けていたからだ。

それでいつか使うだろうと考えて、この手榴弾を作っておいたんだが…。いやぁ無駄にはならなくてよかった、よかった。あはははっ！

ともかく目覚めたエヴァちゃんは一刻も早く、不快な臭いを落とすためにお風呂を用意するように茶々丸ちゃんに命じたんだ。

その間、俺達は外に出られる時間まで客間でゆっくりさせてもらおうと移動しようとした。…まあそれは異臭を放つ小さな手の主が俺の裾を掴むことで実行できなかったわけだが…。

エヴァちゃん、放して…。君の身体から異臭がするんだ…！主にタマネギとネギ、ニンニクの強烈なまでに濃縮された臭いになっ！  
?!?

「誰のせいだと思ってるんだッ!？」

「え……………」

「自分は関係無いと言う顔をするなッ!!お前のせいだろうがッ!

「？」

そうなの知ら…ごふっ！？ご、ごめんっ！うそだからっ！冗談だからっ！……まったく、可愛いお茶目じゃな…ぐぎゃほっ！？すまんっ！！謝るっ！！だから殴らないでくださいっ！いたっ！？マジで痛いっばっ！！

エヴァちゃんの魔力を封じている呪い（登校地獄）……ん？呪いは不登校の生徒を学校へ強制的に通わせるだけの魔法で魔力を直接封じているのは学園結界だったか？

まあそれはともかくとして、だ。エヴァちゃんの魔力を封じている“何か”も魔法球の中まで影響が届かないようにエヴァちゃんも真祖の力を取り戻している。

だからこそっ！殴らないでほしいっ！身体に穴が開きそうなっ！パンチってっ！シャレになってないよっ！！俺のライフはもうゼロなのだ…。

……。

……。

それでまあ、俺とエヴァちゃんがじゃれ合っているとお風呂の用意ができたお茶々丸ちゃんが伝えに来てくれた。茶々丸ちゃん、良く来てくれた！と俺は感謝したね！あのままじゃれ合ったままで俺の身体が持たなかったからさ！主に鼻的なものが！

俺はやっと苦行から解放されると思って最高の笑顔浮かべていたことだろう。さあ、お風呂に行ってきたさい、と父親張りに茶

々丸ちゃんから受け取ったエヴァちゃんの着替えを本人に押し付け  
たさ！

なのに！エヴァちゃんは！俺の！手を！放して！くれない！？寧  
ろ！くっ！？強く！なっている！ような気が！んっ！？するのは  
！気のせい！かな！かな！？かなーッ！！

えーいつ！放さないか！？どういうことだ！？詐欺じゃないのか  
！？俺が何をした！？何もしてないじゃないか！エヴァちゃんはお  
風呂に行くのだろう！？俺は関係ないじゃないか！！何“貴様も来  
い！”みたいな顔してんだよ！？

「何をしている？早く来ないか！」

シット！みたいじゃなくて、マジだったよ！お前は俺をどこに連  
れて行く気だ！？エヴァちゃんが行くのはお風呂だろ！？

！？  
お・前・は・そ・こ・に・俺・を・連・れ・て・行・く・の・か

勘弁してくれ…。って！ああっ！？そんなに袖を引っ張るなって  
！！伸びるだろうがっ！？COS・MOS！茶々丸ちゃんも黙って  
見ていないで助けっ、ああ、あああー…。

……………。

……………。

……………。

で…結局、抵抗むなしくお風呂場に連行されました。グスツ…もうお婿に行けない…。

まあそんな冗談はどこかに置いておいて、だな？実際にここ来てお風呂場を見ると素晴らしい、の一言だ。

全体的に見て白亜の神殿と言った感じでエヴァちゃんらしい西洋建築溢れる造りとなっていた。白い支柱だけで窓なんて野暮なんて物は無く、美しい擬似風景の景色が一望出来るようになっていたのも俺的には高得点だ。

話しは変わるが今、俺の目の前には背中を見せて座るエヴァちゃんが居るんだ。それで髪を洗っているんだが、こうしていると娘にしか思えんな。体型的に見てもそうだろう？色々とちっさいし…もちろん、いい意味でだよ？

可愛いは真理だと俺は思っているからな！

「はあ…。…むううーっ！」

「エヴァちゃん、いい加減、機嫌直そうよ？」

「うるさいっ！ナギといい、貴様といい、魔法使いの戦いを何だと思っっているんだー！」

エヴァちゃんはお風呂場に着いて軽く身体を流すと気持ちがりラツクスしたようだ。すると一転して何かを思い出すと不機嫌そうに唸った。話しを聞くと、どうやら先程の模擬戦の最後を思い出したようだ。

というかエヴァちゃん、魔法使いの戦いって……何、言ってるのかな？俺は純粹な意味で魔法使いじゃない。魔法的に言えば錬金術師で現代的に言えば科学者で技術者だ。アンやラミエルさん、それにCOS・MOSなんかを見ればその最たるものだろう。

魔法使いの戦い？そんなのしない、しない。それに相手の弱点をトコトン突いてやるのは戦いの基本と言うじゃないか。納得がいかないからといって、そのことで文句を言うのは自らを貶める行為だと思いがねえ？

まあ確かにエヴァちゃんに対してアレはやり過ぎたような気もする。それでも後悔はないな！別に殺し合いをしていたわけでもないのだから勝つための手段としてはあれが最良だったはずだ。

俺とエヴァちゃんが本気で全力を出したら「別荘」が過度に放出された魔力で圧力に耐えられずに、下手したら崩壊してしまうかもしれないじゃないか。ウチの「演習場」と違って専用に調整されているわけじゃないんだからな。うん、無理は良くない。

「……はいはい。……痒いところはない？」

「貴様というヤツは……！んっ……、もうちょっと後ろだ」

「……」

「ああ、そこ、あんっ！お、おいっ、耳は触るなっ……くすぐったいだろ」

憤懣やる方ないといった感じのエヴァちゃんを宥めながら、彼女の柔らかい絹糸のような髪を優しく丁寧に梳くように洗う。

痒いと言ってきた後頭部をサワサワツと掻くように洗った。それを終えると指で耳の裏をクニクニツと汚れを取るように動かして洗った。

耳を触られてビックリして？いや、くすぐったかったのか。ともかく耳に触られて、驚いたエヴァちゃんから抗議されてしまった。でも、こういうところはキチンとやっておかないとダメだろ？

それにしても今、使っているこのシャンプー、それに置かれているリンスやボディシャンプー。これらには魔法効果が付与されている、のか？魔法術式の構築を見ると…美容効果とか、かな。エヴァちゃんも女の子しているんだなあ…。

おっ？良く見るとこれら全部、手作りのオリジナルじゃないか…。どおりで嗅いだことのない香りがすると思った。こういうのを見るとますます女の子の子しているなあ、と思う。

「はいはい。エヴァちゃんは注文が多いねえ」

「うるさいっ！こうなったのは誰のせいだと思っている！貴様は黙って私を洗えば良いのだ！！」

「はいはい。ここはどうかナー？」

「あんっ…っ…っ…っ！だから！ど・こ・を！触っているかーっ！？！  
！？！？」

どこっつて…耳に決まっているでしょうが？耳裏は念入りに洗わないとね！エヴァちゃんが悪いんだよ？耳裏を洗おうとしたら頭を

動かして抵抗するんだからな。それじゃキチンと洗えないじゃないか。というわけで……。

「にばあ エヴァちゃん」

「お、おい？ 葵……？ な、何だ？ そのワキワキした手はっ！？」

「キレイ、キレイにしようね」

「や、やめっ……。にやあああーっ！？！？……あふ」

ふっふっふっ 木乃香ちゃんや刹那ちゃんが子供の時にお風呂へ入っていたのは伊達ではないのだよ？ 俺の“子供手洗いテクニク（バージョン3.0）”をここで披露してくれようではないかっ

逃げられるとは思わないことだな！ くくくっ！

……。

……。

そんなわけで身体を流したあとは湯船に浸かってリラククスするのみなわけだ。エヴァちゃんの手作りシャンプーなどは魔法効果で馴染むような肌触りだった。

こんなに使い易いシャンプーなら今度、俺も作ってみようと思った。上手く出来たら皆にも配ろうかな？ 皆、女の子だからかお風呂が好きみたいだし、好みに合えば喜んでくれるかもしれない。

「あーっ っ イイ湯だーっ 温まるなーっ」

「ふふんっ どうだ？なかなかのものだろう？」

「ああ…流石はエヴァちゃんだ。確かにこれは「別荘」だなあ。気持ちいい…」

「そうか、そうか！ふはははっ！」

元が戦闘訓練用じゃないからかなあ。保養所？避暑地？まあもかく「別荘」とはよく言ったものだ。ウチの「工房」にも保養目的で温泉施設はあるけどこういう西洋風は少ないから新鮮だ。

底の浅い湯船に横になり、身体の力を思いっきり抜くと氷付けにされた身体が芯から温まるのを感じる。お湯の温度も適温で言うことない。ある程度、温まると半身浴に変更だ。……なに？長風呂？バッチ来いですな！風呂好き嘗めんなよ！？

「……………はあ」「……………」

ふと、横に居るエヴァちゃんを見る。……………するとそこには絶世の美女が1人居た！……………ちよっ！？なぜにエヴァちゃんは幻術使っているのかっ！？一瞬、見惚れてしまったではないかっ！

これは幼女…これは幼女…これは幼女…これは幼女…これは幼女…！俺はお姉さん好き…俺はお姉さん好き…俺はお姉さん好き…俺はお姉さん好き…俺はお姉さん好き…俺はお姉さん好き…！！よしっ！！！！！！

チラッ…。

「ん？どうした？」

「いや、何でもない……」

「そうか？…ふう」

…と、言いつつ隣で同じく湯に浸かる金髪美人さんを見てしまう。エヴァちゃんが将来の姿を幻術で見せていると知っている。それでも本当に勿体無い、と……。いや、この考え事態が“今の”エヴァちゃんを侮辱した考えだな。こればかりは反省だ。

吸血種は、身体的成長は一部の例外（この世界に居るかは知らんが例えばハーフヴァンパイアなどを除けば皆無だ。その癖、魔力や身体能力は常軌を逸した高い能力を備えている。身体が成長しないのはその代償と言えるのかもしれない。

誰もが求める高い能力と永遠にも等しい生命。ただ、無理矢理吸血鬼に、それも真祖ハイデライトウオーカーの吸血鬼にされたエヴァちゃんにしてみればいい迷惑だろう。

まあ、だからと言って下手に慰めなんて口にしても彼女のこれまでの生き様に対する侮辱でしかない。そう考えたから俺は何も言わず、湯に浸かって模擬戦での疲れを癒すことにした。

魔法球内の時間で午後五時過ぎ。半身を湯船に預けて、ここから見える景色は日が暮れて静々と沈もうとしていた。少し、哀しいな、という感傷が心の中を過ぎった気がしたが…気のせいだろう。

……。

……。

お風呂から上がったら食事だ。俺と幻術を解いたエヴァちゃんが上がると食事の用意が既に出ていた。タイミングがバツチリのところは流石、茶々丸ちゃんとしか言えないね。

手持ち無沙汰なCOS・MOSもお手伝いしようとしたがお客様ということでチャチャゼロとお話して待っていたらしい。軽く何の話題かを聞いたら“効率的な敵の撃滅方法・刀剣版”だったのは笑っていいやら泣いていいやら…。

それで出来た料理を楽しみに食堂へ行くと、これでもかと言うほど高級料理店のような料理が幾つもあった。そのどれもが手抜きなど一切なく、手の込んだ料理だ。うん、素直に美味しそうだと思う。

ただ、残念なのは夕食が和食ではなく肉料理をメインとしたコース料理だったことか。それでも実際に食べてみれば、そんなことは気にならず、とても美味しい料理だったのは嬉しい誤算だ。

「茶々丸ちゃん…」

「…何でしょうか？ 葵様」

「これ……すごく美味しいねっ　流石だ！」

「…ハッ、感謝の極み」

料理を絶賛して褒めると傍で給仕していた茶々丸ちゃんが斜めに腰を折り丁寧にお辞儀する。その姿は模範とも言えるほど立派な従者の姿だった。

茶々丸ちゃん…素晴らしい切り替えしだ！そのノリは正直、ウチの家族だけかと思ったのに君もだなんて！ノリのいい家族連中なら納得だけど彼女までそのノリを理解して尚且つ実行してくれるなんて驚きだが同時に嬉しくなる。

因みに、従者らしいと言えばらしいけど、どちらかと言うと執事じゃね？という、どこからかやってくるツツコミは限りなくスルースるので悪しからず…。

「エヴァちゃん…」

「茶々丸は、やらんぞ」

「……まだ言い終わってないのにい」

「言わんでもわかるわっ！」

「っ！…な、何だっ！っ！？茶々丸ちゃんを嫁に欲しいことがバシっていたとおっ！？」

「嫁っ！？！？料理人としてではなかったのかっ！？！？」

「あれっ！？微妙に認識が食い違っていただっ！？！？」

エヴァちゃんと俺の認識は確かに茶々丸ちゃんのことだったが必要な部分で認識違いをしていたようだ！まあ嫁に欲しいと言いつつ過ぎたとは思っ。いきなり嫁はないよね。うん、ないわ…。

ん？というか、エヴァちゃんはなぜにそこまでオーバーリアクションしてくるのかね？そこまでして茶々丸ちゃんを譲りたくない

いう感情の表れかな？いや、でも、わかる気がする。

だって、茶々丸ちゃんって何でも出来る有能さを発揮してくれるものね。朝の弱いエヴァちゃんに代わり、朝食の用意もしてくれる。炊事に洗濯と家事は全部過不足なく、こなせるのも大きい。

ウチのCOS-MOSはそれ系統のデータはインストールしてないものなあ。料理データや手順などのデータをインストールしてあげるか、自分でデータを収集するかネット上から情報を攫ってきてダウンロードするしかない。

元が兵器として開発したから生活面のソフトは何も入ってないんだ。これを機に順次、必要と思われるデータをインストールしていくことと思う。……あー、もちろん、これは彼女が同意したらだけだね。

無理強い！ダメ！絶対！

……。

……。

それでまあ茶々丸ちゃんお手製の美味しい料理も食べ終わり、食後のデザート…ならぬ、お酒を飲んで、まったりとしている。場所は作り物とはいえ見事な星空が見えるテラスだ。

今、ここにはエヴァちゃんと俺の2人きり…。COS-MOSと茶々丸ちゃん、チャチャゼ口の従者組みは気を利かせたわけではないだろ？が別の部屋で従者同士仲良く“お・は・な…”、もといお話しているみたいだ。

因みに2人きりとは言ったが一応、陽月を剣状にして背中に装備しているけどね！このまま酔って乱闘とかになったら俺1人では対処できん。それとミリー達も霊体化して待機しているよ。いつ酒乱が降臨するかと思うと不安だから離れたくないとです…。

「まあ今までの冗談は置いておいて…」

「……本当にアレは冗談だったのか？」

「いや、それはもういいから。……それで少しは満足したか？」

「最後が些かどころか溢れんばかりの不満だが、な。……まあ、少しは満足した」

俺達はコクコクツとグラスに注がれたワインを飲んで一つ、二つと言葉を重ねる。エヴァちゃんの頬はアルコールのせいか少しだけ赤く上気している。

それにしてもこのワインは飲み易い。俺の好み的には白だが、エヴァちゃんの保有する、この赤はフルーティで喉越しもいい。むー…食後の楽しみに飲んでいただけ、ここまでで実はワインボトルを4本も開けているんだ。

それとな？忘れているかもしれないがエヴァちゃんの身体は子供なんだよ。長年、愛飲してきたことで、お酒への耐性はあるかもしれないが限界はある。だから…泥酔するなら暴れずにコロンと寝てくれることを願うかな。

酒乱が降臨しないように、と真摯に祈ることだけが俺に残された

最後の手段だ…。

「封印されている身だと思いつき力を解放したくなるものねえ。

……欲求不満なんじゃない？」

「っ！？っ、うっうっうるさいっ！この地に封印されて、もう十数年だぞっ！？不満など溜まるに決まっているだろうっ！！」

「あるえー？何を考えたのかなあ？俺は封印されていたストレスのことを聞いているんだけどなあ？（にやにや）」

「　　っっ！！！！うるさああいつ！！！！」

「ぐぼほおーっ！？！？！？！？」

い、いいパンチ…持って、いるじゃない、かああ…。

はあ、それにしても…ああ、慣れない下ネタじみたことなんて言っ  
うんじゃなかった…。と、ノックダウンされて床に倒れながら思っ  
た。脇腹が…レバーが…痛い…のよ…。

女神（幼女）によつて常軌を逸した丈夫な身体に創り変えられた  
としてもエヴァちゃんの打撃はちよつと辛い…。この「別荘」内で  
エヴァちゃんをからかうのはもっと細心の注意を払うべきというこ  
とを学んだ瞬間だった。

今後、エヴァちゃんをからかう時は表の世界でからかうことにし  
よう！うん！……………主に俺の命の安全のためにっ！

「おいっ！まだ寝るなっ！葵っ！」

「ぐぶっ…寝てるわけじゃ…ない…ううっ」

「うるさいっ！まだまだ飲むぞーっ！ふははははっ！」

ここに酒乱が降臨するまで、あと少し……。

S i d e o u t 葵

第五十七話「模擬戦と決着と交流？」（後書き）

ううん…？モエ尽きたぜ…。色々な意味でな！

今回はこれしか言うことはない！

ではでは！B i s b a l d！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

PS・突然ですが新番組の”IS”インフィニット・ストラトスがあります。

誰か、これで二次を書いている、既にある、これから書くようにしている、などなど！

こういうのは無いッスかね？

第五十八話「白と黒と反省？」(前書き)

今回はハオとユエが中心かな、と思います。  
では！続き！

## 第五十八話「白と黒と反省？」

付属魔法球「演習場」…。

Side 葵

今日も比較的平和な…うん、平和な日だった。たぶん。

木乃香ちゃんがくろーいオーラを纏ったりとかね。あと刹那ちゃんに木乃香ちゃんの傍で護衛するようにそれとなく説得したり…まあ、この提案は頑固ちゃんの刹那ちゃんには受け入れてもらえなかったけどな。

オマケで日常の裏ではウチの周辺を嗅ぎ回るウルサイのが居たりしたけど二課と三課の合同チームが着々と対処してくれているから心配はしていない。一応、表面的には平和だから問題無いだろう。

……。

うん、今日もいつも通り何事もなく日が沈み晩御飯の時間になったんだ。それも月に数回の大食事を「工房」内に併設されている家族用の宿舎（別邸と言うか屋敷？）に用意した。

そう。用意が終わってあとは家族全員が集まれば開催だったんだ。それなのに来ていないのが2人も居ただよ？でな？その2人つてのは意外かもしれないけど八才とユエなんだ。

2人の今日の予定は部隊員の訓練だったから「演習場」に居たのは知っている。でも訓練が終わって皆は戻ってきたのに担当教官のハオとユエだけは姿を見せない。

それで今、俺は2人に何かあったのかと心配して様子を見に「演習場」へ移動している。あ、途中でミリー達精霊3人娘も彼女達を心配して同行してくれた。

それでまあ現場となる「演習場」に繋がる接続魔方陣を通り抜けた先では………模擬戦すら生温い情景が繰り広げられていた。どっかん、どっかんいつてる辺りからは爆煙と砂埃の舞う中で白と黒の女性2人が激闘を演じている。

既に大地は抉れて大小のクレーターになっていたり、何かに切り裂かれたよう……文字通り大地が裂けて巨大な地割れとなっている。今も爆心地となっている2人の周りではクレーター、地割れ、堀のようなものを増産している。

その他散々な様相を表している「演習場」の大地には白と黒の剣が無数に突き刺さっていて、その有様に一瞬だけ過去の古戦場にあった、剣を突き刺しただけの簡易墓標を連想した。だがそれも一瞬だ。事態把握のために思考を切り替えた。

連立しているこれらの剣はハオとユエのモノに間違いないと確信している。確信できるが故に疑問が残る。この戦争の痕跡からハオとユエが戦略規模で戦闘をしている、と考えられるのだ。

うん、断言する、目の前で繰り広げられているこれは戦闘ではない“戦争”だ……。一体、2人はなぜにここまで濃厚な密度の戦争を繰り広げているのだろうか？

……もしかして、姉妹のケンカか？え？あの2人が？仲のいいあの2人が？いやいやいや！ないない！仲違いするようなことやストレスを溜めるようなことは……あ？この前の模擬戦か？いや……でも……あの時は皆、納得してくれたよな？

「主様あ、一先ず2人を止めませんかあ？」

「ミリーの言うとおりです。このままでは「演習場」が崩壊しかねませぬ」

「それは……マズイなあ」

むう……設計段階でミスしたのかな？造った当時は自分達の実力的に耐久度や強度なども十分考慮したんだけど。造ったのが600年以上も前だからなあ。これも老朽化の類に入るのかな？む……。

一応、中心核となる魔法球「工房」や隣接する付属魔法球群を強化、調整、区画整理し、機能更新パージョンアップしている。やはり各種生産を月面基地に頼りきるのはイカンものね。総生産量では負けるけど……。

……あ。

ふと、思い出した……。「演習場」の機能更新が遅れているんだっただ、と……。生産性を重視すると施設の中で一番優先順位が下がったんだよなあ。何もとは言わないけど「演習場」は生み出すものが無いし。

あー…そうだ。機械人形マキナ・マータの生産で戦力増強したけど純粋に兵力の割合が取れていないんだよなあ。司令部を代表して増員の陳情書が来ていたから精魔奇兵も増員しようかな？

……今の4倍くらい、とか。

いやいや！今の拡張された「工房」なら最大千単位で数えたとして……1万ちよいはイケル、か？むー…ダメだな。収容人数や管理に問題ないけど一気に増やすと兵の質が落ちること確実だ。

少しずつだ。そう、少しずつ増やしていこう。とりあえず、4倍…うん、6倍で。くくくっ！

こほんっ。んんっ。

それはともかくハオとユエの2人だ。ここから見る限りでも激戦を繰り広げているのがわかる。あ…崖が斬れた。あっその山を割ったらっ…！こ、この「演習場」のシンボルたる中央山脈を真っ二つにしゃがった…。

頂上からの眺めはお気に入りのに…orz

ん？でも、今は学園側と直接接触するから2人には保有魔力やその他の隠蔽用リミッターを掛けていたはずなんだけど…。この世界なら余程の事が無い限りはナギやジャックくらいの気や魔力保有量があれば問題ないだろう。

「ん…。ねー？あの2人、リミッター外れてないかなー？」

「「「……………えっ?」」」

え?何、ソレ?2人はマジメに全力全壊ですか?フルバーストですか!?全弾発射的な何かですか!?…マスクね?崩壊したら中に運び込んだ土砂などの質量が表に溢れ出すことに…。

「フ、<sup>フリーズ</sup>止まれッ!!!」

声に魔力を乗せて全力で止めに入った俺は悪くない。例えそれで怒鳴りつけた俺に2人が顔面蒼白になったとしても……………。ごめん、そこまで怯えられるとガラスのハートが砕けそうだった。このことは秘密で…。

……………。

……………。

…。

一応、無事に事を収められた。一喝して止めた直後にハオとユエが抱き合ってぶるぶると震えて怯えているところを見てゾクゾクとした自分に死にそうなほど鬱になったけどね…。

で、「演習場」はアレだけの被害にあったにもかかわらず、形状記憶の土壌と環境維持用ナノマシンが最大稼動しているのでまだ修復可能範囲内だったから問題無かった。ただ、実時間で7時間、つまり7日間は使用を控えないといけないがな。

「で?何が原因でこうなったのさ?」

「あう……」「はう……」

あう、はうじゃないよ。可愛いじゃないか。…思わず、このままイジメたくなつたほどだ。……いや、すまん、今の無しで。家族相手にイジめるのは、やっぱりイカンよな、うん、イカンよ。

しかし、この2人は何で説明することを躊躇しているのか？ 普段、キリツとしている女性が、わたわたとしているのはギャップがあつて可愛いなあとは思うけど……。ん？ これは家族の鼻屑目だろうか？

何にしても、どうして、これだけの被害を「演習場」に出したのか、ということについてはキチンと説明してもらわないとならない。

相手の理由も聞かずに、ただ一方的に怒るのは怒鳴るだけの馬鹿と変わらない。物事には大なり小なり何かしらの理由があるのだから。叱るかどうかは理由を話してもらつて理解してから…全ての話しはそれから、だ。

「まさか、黙秘しようなんて……」

「「そのようなことは決して……！」」

「……んー、それでどうしたの？」

「はっ、実は、ですな……」「真に恥ずかしながら……」

ハオとユエが説明してくれる、その理由は……。

回想…。

付属魔法球「演習場」…。

Side ????

「演習場」…。ここは魔法球「工房」に隣接された付属魔法球だ。「演習場」は兎角広大な空間と山岳、平野、草原、森林、砂漠、海、川、などを代表に様々な地形がある。この他にも地形はあるが今は省略しよう。

そして何よりも特筆すべきことは「演習場」そのものの頑丈さだ。「演習場」の使用目的が名前の通り“模擬戦闘や模擬戦争など様々な演習を行なう場所”なのだ。よって格別の頑丈さを当時の葵は設計した。

そんな「演習場」の中で特に広大な平野エリア。ここ平野エリアは岩や木などの遮蔽物になりそうなものは何も無いところだ。そこを走る一団がある。

走る…両足を素早く動かして移動すること。ここで“走る”と表現しているが、果たして、これは“走る”と言っのだろうか？

前者は、ある者は風のように…訂正、言葉通り風に“なって”目にも留まらぬ速さで走る。ある者は炎に“なって”ロケット噴射し

て地面スレスレを跳ぶように駆ける。ある者は水に“なつて”氾濫した川のように激流となり全てを飲み込みながら進む。

後者は、ある者は影と同化して周りを移動する者の影から影へ移動する。ある者は身体を霧にして風に巻き込まれながらも方向性を持って移動する。ある者はただ只管、短距離転移を繰り返して移動している。

これらは一般に定義される“走る”という単語が当て嵌まるのだろうか？……いや、どうでもいいことだった。この疑問は置いておこう。そう、永遠に……。

前者は精霊の、後者は悪魔の精魔奇兵だ。百数人で走る彼女達は皆、葵の大事な家族である。

「たかが1万kmを走るのに何をノロノロとしておるかっ!!そんなことで我が君の家臣、いや!家族を名乗れると思っておるのかっ!?! 気合を入れろっ! 気合をつ!!」

「……………イエス・マム!」

肉体的、精神的に強靱な彼女達は現在、定期的に行なわれる訓練中。今の指導教官は白と黒の剣姫の片割れである白の剣姫八才だ。訓練を午前はユエが担当し午後は八才が担当する。今は仕上げのラニンングの最中だ。

精魔奇兵達の後ろから追い立てる八才も（斬り裂いた空間から空間へ移動しているが…）走っている。その彼女の背後には空中に無数の白剣を顕現、展開し精魔奇兵達を威嚇している。今ここで脱落すれば即座に串刺しになるのは決定だろう。

「声が小さいッ！！！貴様らは声も出ない赤ん坊、いや、赤ん坊の  
ほうが泣くだけ声が出ているな！！そうなると貴様らはただの蛆虫  
かつ！？違うと言うならもつと声を出せッ！！！！」

「……………ッ！！イエス・ママッ！！！！」

八才の叱責と同時に数振りの白剣が彼女達の走る最後尾に着弾し  
た。もちろん、身体に着弾させたのではなく地面に：それも極々至  
近に、だ…。これにより声も出るようになった。心なしか走る速度  
も倍近くになつたようにも思える。

不運なことに極至近で見た者は顔面蒼白だ。今のは威嚇が目的だ  
からギリギリ外したのだ。若干名、脹脛の皮膚が薄つすらと斬れて  
いるように見えるがソレは錯覚だ。赤い液体が見えるのも同様に錯  
覚だ。

「最初から声を出さないかッ！！1人でも脱落した場合は訓練、い  
や地獄の特訓を追加だ！！それがイヤなら走れッ！さあ、力の限り  
走れッ！！死にたくなければ走れッ！！」

「……………イエス・ママッ！！！！ッ！！！！！！！！」

理不尽だ…。言われたように声を張り上げているのに叱責された  
と精魔奇兵達になって数十年の若い者は思った。百数十年の古参の  
者は文句など言っていない。絶対に言えない…。

最も教官達からしてみれば言われる前にやらないか！という思い  
があるのだが…。教官達の考えを知る者は葵達教官組みを除けばア  
イリ達親衛隊の古参兵と百年以上の実績を持つ精魔奇兵の一部の者

だろう。

そして話しは戻るが日常ならともかく訓練中に文句や不平を言えば地獄という名の天国が待っている。その日の担当教官による“スペシャルな個人レッスン”が訓練終了後に待っているのだ…。

そのことを大半の者が勇敢なことに実際に体験しているから知っている。だから声に出して文句は言わない。言いたくもない。言ったら色々な意味で最期だから…。

このことに関連することを皆のご主人様である葵に愚痴を漏らし、いるところを見付かり知られてもアウトなのは勘弁してくれ、というのが皆の共通認識なのは割とどうでもいい話し、か…。

故に彼女達は走るのだ。逆らうことなく最初の倍速だったのを更に倍にして今、走るのだ。一刻でも早くこの命を賭けたデスランニングを終わらせるために声無き悲鳴を上げて全力で走るのだ。

そう、デスランニングだ。この理不尽なランニングも最後のラストパートだ。気付けば残るは200km余りだ。一日を通した訓練ももう終わる。これで終わるのだ。彼女達の目に希望の光が灯った。

ああ、今も後方から白の剣雨が追いかけてくる。一步でも足を止めれば即座にアイアンメイデンよろしく無様で血みどろなオブジェの完成だ。ハオの絶妙な力加減で急所は外されているため僅かな出血と苦痛だけが目立つことだろう。

現在、走る彼女達の思うことは唯一つだろう。それは「早く終わってくれ…」という生命の危機を感じた率直なものだった。

……。

……。

「よしっ！これにて訓練を終了する！解散ッ！」

「「「「「ありがとうございますっ！！！！」「」「」」」」

訓練の終了を宣言したハオと終わりの礼をする精魔奇兵達。最後まで声を張り上げるのは、それが原因でハオの“スペシャルな個人レッスン”を全力で回避するためだ。どんなに疲れていてもこれだけはやるのだ。

素晴らしいことに最後のランニングも脱落者は無く、無事に予定の訓練を終えることができた。担当教官のスパルタを耐え切った彼女達の喜びは一塩だろう。何と言っても身体や精神に欠損無く五体満足なのだから……。

「ふむ…どうしたのだ？今日は随分と荒れていたではないか」

「ふんっ！そのようなことはっ…！」

解散していく皆を見て午前の担当教官ユエが姉のハオに声を掛けた。ユエの表情に変化は無いが目と言葉から姉を心配しているのが読み取れる。

ユエが担当する午前は“ただの”地獄訓練だったが午後のハオの訓練は“スパルタな”地獄訓練だった。最低限の加減はされていたが荒れていると取られても文句は言えないだろう指導だったのだ。

「姉上、姉妹である私をナメルな。それにあのような指導をしていたらならば荒れていると認めたまも同然ではないか」

「ぐっ…！むう…」

心配された八才は内心を隠して何でもないと斬り捨てようとしたが台詞の途中で割り込んだユエに言葉を詰まらせる結果となった。

「まさかとは思いが…先日の吸血幼女との模擬戦のことか？もし、そうならば気にすることはあるまい。我が君もただの児戯であると申していたではないか」

八才が荒れると思われる最近の出来事を脳裏に思い浮かべ、姉を宥めるようにユエは口にした。一方、八才の顔は苦虫を噛み潰したような渋面を作り上げていた。ユエの予想通り先日行なわれた模擬戦がネツクだったようだ。

「むう…だが、な？それでも我が君が傷付く姿など見たくないのだ…。いや、もちろん、戦場に立たれる我が君のお姿は凜々しくも頼もしいものがある。そのお姿を見るたびにまた私は惚れ直してしま…って何を言わせるか!？」

凜々しかったのは最初だけで途中からはただの惚気に聞こえてしまったのは気のせいではない。それも言っている本人が自爆している。葵ファミリーでなければ聞いているほうも聞かせているほうも気恥ずかしい思いをすること請け合いだ。

「勝手に自爆しただけではないか……。まあ良い。姉上は傷付く姿がイヤと言っが実際、傷など一つもなかったではないか。我が君の

何が不満だと言…」

「我が君に不満など無い！！…が！！あの吸血少女は事もあるうに我が君を“氷付け”になどしてくれたのだぞ！？例え一時とはいえ我が君を行動不能にされたのは…：屈辱の極みだッ！！」

ユエの最後のほうの言葉、それだけは最後まで言わせまいとハオは自らの主に不満を持つなどありえない！と言葉と態度にして表す。それはもう自信满满である。不満があるヤツは出て来い！矯正してやる！という意気込みを感じるほどだ。

ここで今更だが敢えて言おう。

基本的に葵ファミリーはご主人様の葵を溺愛している。それは崇拜的なまでに敬愛し、絶対の忠誠を示し、葵ただ一人に魂の一片まで献身を尽くす。

その想いから彼女達全員が葵に関する事で天然の自己暗示となり思考能力、純粹魔力などの身体スペックを爆発的な勢いで上昇させ、尚且つ性能向上を引き起こすことになったは嬉しい誤算だったのか…。

これが精霊（悪魔）契約による魔法の副次効果だったり、後天的な洗脳処置だったのなら納得できるだろう。だが違う。彼女達の献身は、想いは彼女達個人の“願い”から生み出され、心の底から湧き出ているのだ。

その願いとは“私は貴方が大好きです…”という純粹な想い。不

老とはいえ人間の葵に恋した精霊と悪魔、九十九神の恋心から生じた唯一つの単純故の強い想いなのだ。それ故に最強であり強者なり。恋する乙女は地球すら砕くのだ！

あれ？何か…違う？

閑話休題…。

今度はユエが渋面を表した。少なからず八才の言葉に感じ入るものがあるのだ。

あの時、葵が氷付けにされる瞬間「怒っちゃダメだからね」と念話で言われたからあの場に居た皆がブチキれることだけは無かった。勿論、葵は帰宅後に彼女達の精神のアフターケアをしたので気分は持ち直している。

今の八才が荒れているのは訓練をしていてそこから先日の模擬戦を連想してイライラしてしまったのだ。その八つ当たりというかトバッチリを受けた精魔奇兵の彼女達は堪ったものではない。

「それは…。むう、私も思うことが無い、と言えば嘘になるが…。しかし、だな？模擬戦という見戯ゆえ我が君は吾ら全員のリミッターを外されることはなかった。一々遊びに目くじらを立てていたら切りが無いと思うのだが」

「むっ！……………（ボソツ）後日、闇討ちに行こうと言っていた者とは思えぬ発言だな」

「なっ！何を…まさか！？！？姉上は聞いておられたのかっ！？！？」

「ふふんっ 私だけではない。我が君はもちろん、精霊の3人娘もシツカリと聞いておったわ」

「あう！？あうあう！！他の者とはかく、我が君に…聞かれた！？はっ！だから今朝から私を見る時、矢鱈と優しい目をされておられたのか！？くううう…！」

今、明かされる衝撃の事実！“ユエお姉さんの闇討ち計画”も驚きだがそれを皆だけではなく敬愛する葵にまで知られていた！動揺が激しいユエの動きがかくかくとしているぞ！

暴露したハオは楽しそうにニヤニヤと笑っている！反対にユエはあうあうと混乱している！？しかも、関連して思い当たることがあるのか混乱に拍車をかけているようだ！

ただ…ここで暗い思考を知られたことについて後悔よりも羞恥が先に立つのはどういうことだろうか？要約すると「闇討ち計画を知られちゃった 恥ずかしいな」というものだ。なぜに恥ずかしいか…。

「大変だな、ユエよ。これでお前は我が君に“怖い人認定”されたぞ？…ふふっ、ふふふ」

「わ、笑うにゃーっ！！もとい！笑うなっ！！いくら姉上といえどもそれ以上っ…！！！」

あ、噛んだ…。ユエの羞恥心が限界を超えたようだ。葵が今のユエの姿を見たなら無条件で可愛がりこれでもかと言うほど愛でるところだろう。

それはともかくとして八才の言う“怖い人認定”とは読んで字の如く文字通りの意味だ。自称臆病者の葵が個人的に情報収集して書き記したとされる“恐怖者のブラックリスト”のことだ。

これに認定されると敵対とまでは言わないが、それに近い厳戒態勢を葵は身構えるのだ。誰だって怖い人とは係わり合いになりたくない。つまりは葵個人による要注意人物のリストだったりする。

因みに葵ファミリーが記載されることは無条件でありえないので八才の言うことは冗談だったのだが、混乱して羞恥心で頭に血が上った今のユエにそれがわかるはずも無いことだった。

「ほう…私と戦<sup>や</sup>る、と？ふむ…良いだろう。この憤りを発散するには少々足りなかったところだ。………相手になろうではないか！」

「フフフツ！姉上のその余裕を打ち砕いてご覧に入れましょう！」

事態は険悪だ…。こうして表面的には冷静に会話しているが両者から溢れ出る濃密なまでの魔力が空間に集結し、数百数千数万の白と黒の剣が具現化される。

「「いざッ！尋常に…」」

冷静に好戦的な八才は意識して自らの“剣軍”を展開していく。逆に混乱と羞恥心で頭が回らない今のユエは無意識に“剣軍”を展開した。

ハオの目には冷静な中に熱い好戦的な意思が宿り、ユエの目には何度も言うが混乱を羞恥心からグルングルンしている。前者はともかく後者はどこかコワイ部分が見えるのは気のせいだろうか？

「勝負ッ！！！！」

そして“戦闘”と言うには生易しい、剣の軍団を率いた両者による“戦争”が今、始まった…。

Side out ????

回想完…。

付属魔法球「演習場」…。

Side 葵

あ、呆れて何も言えない…。目の前に正座して語られた理由のしよーもなさに何も言えない…。いや、一番確認したかったのは“悪意があったか？”についてなんだが両者に悪気があったわけじゃないようだからどうでもいいんだけどな。

あー…今の「演習場」でそんな無茶をするなんて…。あのまま2人が戦争を続行していたら崩壊した「演習場」から内包された大量の物質が外に溢れ出るようになるところだった。何百何千万という

途方も無い量が、だ。

はあ、激しい戦争を繰り広げているからどれほど大事な理由だったのか、と思えば……。はあ……。

もう一度言うけど「工房」を始め、各種付属魔法球が設計されて600年以上が経つのだよ。俺の内包する魔力も増えに増えているし、それは日々成長する家族達にも当て嵌まる。それぞれに実力を上げているんだ。

「演習場」を例に言えば現在は皆の実力が上昇したことにより耐久値に些か問題が出始めていた。俺を筆頭に陽月姉妹、精霊3人娘、悪魔3人娘などの上位者1人2人なら魔力、氣を解放しても“まだ”、“ギリギリ”耐えられる。

しかし、それら上位者が集団で力を全力全壊……もとい全力全開で解放したとなると無理だ。耐えられない。無茶では無い、無理だ。現在の「演習場」の設計上、耐久度的にも強度的にも限界を当に超えている。

そのために暫定的な処置だが俺は応急処置として形状記憶土壤や環境維持用ナノマシンを設置したことで自動修復機能を付加している。つまり、この処置は“壊れる傍から修復すればいいじゃない？”という苦し紛れのものだ。

この事態を重く見た俺は既に対処を始めていた。「演習場」だけではなく魔法球群の各種施設の改良、改善は実時間の4、5年前から徐々にではあるが行なわれている。あと残るは「演習場」だけだ

ったりするのは…まあお約束と言うか何と言うか…。

閑話休題…。

もう…どうしようか？工事作業の優先順位が低かったとはいえこ  
こまで「演習場」に被害を出すとはなあ。自動修復は始まっている  
から損失は殆どないからその辺りの責任とかは気にしないけど…。

はあ…これの原因と言うか理由が、なあ…。エヴァちゃんとの模  
擬戦後のアフターケアが十分ではなかったようだ。ミリー達は比較  
的温厚だからそれほどでもないけど八才達は心の底で不満が燻って  
いたのか。

家族に心配され思われるのは嬉しいけど、少しくすぐったいし照  
れる思いがある。嬉しいけどね！

ていうか八才よ。なぜに君は俺のブラックリストのことを知って  
いるのかね？誰にも見せたことないのに。………！！もしかしてア  
ンか！？いや、ラミエルさんかもしれない！やはり電子情報で一括  
管理しているのは失敗だったか…。

まあそのことはもういいから、移動するよ。今日は大食事会だか  
らね。急がないと皆、待ち草臥れているだろうしね。はいはい、八  
才とユエも立って立って。

「あ、あの…？我が君？…その…お、怒っておられますか？」

「怒っていないよ。…ただね？呆れているの」

うん、家族以外なら容赦しないけど身内に対してはどうも怒りが長続きしないんだ。この辺りが甘いと言われる所以なんだろうけど直そうとは思いませんな！家族を溺愛して何が悪いのか！？いや！悪くない！反語！！

「あう…。申し訳もありません」

「ふふんっ」

「こら？そこで澄ましているハオもだぞ」

「はう…。申し訳ありません」

はい、ちゃっちゃと歩く歩く。皆、首を長くして待っているんだからね。予定外のことがあつて俺もいい加減にお腹が空いているんだ。それに最近は忙しかったし家族との触れ合いという癒しがほしいんだよ…。

「でも2人の思い、私もわかりますわあ。氷なら属性違いながらも私の領分ですものお。お傍で待機してましたのにい、主様は障壁の補助くらいしか手を出させてくれなかったですものお。ねえ？」

「いや、それは、だな…。何と云うか…」

接続魔方陣を抜けた途端にミリーが言い出した。むむむ？「ねえ？」と聞かれても答えようがないんですけど…。これは遠回しに叱られているのだろうか？

「うむ、あまり心配を掛けないでほしいものです。“えいえんのひ

「ようが」を敢えて受けたようですが、必要は無かったのでは？昔はともかく今では複数の精霊の加護と主自身の膨れ上がった魔力量でレジストされるでしょうに」

「ぐむっ…。だからアレはあまり手札を曝さぬように、と…」

えー…。今度はマリーですか…。いや、心配掛けたのことは反省もしているよ？しているけど…氷付けにされた時は強引に叩き割られない限りは死ぬようなことにはならないだろうと確信はしていたんだよ。

あの時は色々とテンションがおかしくて…色々と箍が外れていただけなんだ。ナノマシンとアドレナリンのせいなんだよお。

あ、そういえばあの時、久しく使うことのなかった始動キーを用いた魔法を使ったなあ。この世界に落とされた最初の百数十年は使用していたから案外忘れていないものだなあ、と今は思う。

「フランベルジュ出したじゃない？あるじはー、もっとウーリ達を頼ってもいいと思うなー。氷付けにされた時も始めから属性魔法の擬似無効（軽減）を展開してくれれば皆は何も言わないよー？」

「む？むむむっ。…むう、すまなかつたです」

むう、皆がくすくす笑っている。こら、ミリーはなぜに頭を撫でてくるか？そんなに綺麗な笑顔だと安心しちゃうだろうが。ん？マリーはなぜに苦笑しながら肩に手を置くか？表情から気遣いが見えるから払うこともできないだろうに。

何気に止めを刺してきたウーリは可愛らしく小さな欠伸をして眠

そうにしている。ちくせう、鼻屑目に見ても可愛いじゃないか。うん、お兄さん何でも許しちやいそうだ。

あ？こらこら？ハ才達も何を苦笑しながらも俺が悪いように見てくるか。…え？なに？吸血幼女を討つて来る？ダメだって！やめなさい！ダメだから！突然何を言うのかな！？俺は友としてなら付き合っていていこうと思っっているんだから！

むお？そ、そんな上目遣いで「ダメ…？」って可愛らしくお願いされても……………ダメだからな！そ、そんな、ふ、2人をお願いされてたら……………ダ、ダメ、だよ。うん、ダメ。いったん落ち着こう？な？

綺麗なおねーさん達が可愛らしくお願いする姿にギャップ萌えたではないか……。思わずいいよって言ってしまいそうだった。あ、危なかった……。ふう、エヴァちゃん…俺、頑張ったよ。

……………。

そのあとは少し遅れたけど無事に大食事は行なわれた。途中でお酒が振舞われ始めたら食事会の最後のほうは“大宴会だよ！全員集合！”に企画が変更されたのはまた別の話し、だな…。

「演習場」の強化改良、改善、区画整理……………承認。精魔奇兵の増員要請……………承認。

S  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t  
  
葵

## 第五十八話「白と黒と反省？」（後書き）

おかしい…。戦力の増員、だと…？そんな予定は毛先程もなかったのに…！？

最後のはともかく、ハオとユエのやり取りでしたね！。

今話は前話で葵が氷付けにされた時の疑問を解消できれば、と作者は考えたそうです。

無理矢理だけどね！？有耶無耶にする気満々ですけどね！

あはははははーっ…。

むー…。誤魔化しとしてお詫びではないですが…。

だれだれを中心にした話しが読みたいなどの要望があれば感想に添付してくださいね。

ではでは！B i s b a l d！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

番外編「お菓子と抹茶チヨコと鼻血と」(前書き)

時期は外してしまっただけ一度は番外編をやりたかった…！  
ただし！この番外編は本編とは何の関係もありません！  
そこの辺りをご理解下さい！  
ではどうぞ！

番外編「お菓子と抹茶チヨコと鼻血と」

?????。

Side 葵

「何だ？これ…」

朝、起きると枕元に小さな箱があった。

「これは……抹茶チヨコ？」

箱を開けて中を確かめると一つの抹茶チヨコが入っていた。

「んー…一体、誰だろう？」

誰が枕元に置いていったのだろうか？昨日、寝る前にはこんなのはなかったはずだ。つまり眠ってから、ということになるが…。ここまで接近されても気付かなかった？余程、信頼している人か？妥当に考えるなら家族の誰かだが…。

「…閣下、おはようございます。アイリスです。起きておられますか？」

「ん、起きてるよ。鍵は開いているから、どうぞ」

まあ貰ったものだ。気にすることでもあるまいさ。それにまだ食

べてないけど見た目はとても美味しそうだしね。

「失礼します…。閣下？それは…」

「んあ？ああ、抹茶チョコだ。朝、起きたら枕元に置かれていたんだよね。うん、なかなか美味しいよ？」

一齧りしたけど…うん。予想通り、抹茶の香りとチョコの甘さがバランスを取っていて、とても美味しいものだった。

「あ、あああ！？いけません！！もし毒が！？閣下を狙った刺客のものかもしれない！！ペツ、してください！！ペツ！！」

「いや、そんな大げさな。たかが毒くらいで…。それに口に入れた食べ物を吐き出すのは信条に反するから却下…」

「な、ならば！こ、こここれもお、おおお食べ下さい！！！そうすれば完璧ですから！！」

食べ物を粗末にしないのは俺の信条だ。そのことは家族の誰もが知っている。それなのにアイリは吐き出せと言う。こんなに美味しいのになぜだろう？それにアイリの取り出したものも…チョコレイト？

「……………完璧って何よ？いや、食べるけどさ」

「さ、さあ！一気に一口で！！さあ！さあ！さあ！さあ！さあ！……」

「な、何か怖いよ？一体、何が…」

掌くらいの大きさを一気に食べるのは難しいかなあ、と思うんだけど……。それよりもアイリのこの気迫は…何？食べさせることになぜにムキになるか…、と考えていたらまたもや乱入者が来た。

「葵ちゃん、居るのーっ!?　　はっ!? やっぱりアイリちゃんここに居た!ー! 抜け駆けは無しじゃなかったの!ー?」

「そうですね!! 昨夜はわたくしが今日のために夜這いを掛けようとしたところを止めてくれやがりましたし!ー!」

「リチラちゃん! そんなことをしようとしてたの!ー?」

「クツ! 邪魔が入ったか!ー!」

じゃあ、この抹茶チョコはリチラか?…いや、でも、阻止されたって言うてるし、違うか…。それよりもリチラはまだ添い寝しないと一人で寝られないのか? 意外と子供なのかな? 何はともあれ、お腹、空いたなあ…。

「……まあ何でもいいけど俺は朝ご飯、食べてくるね。じゃーねー」

「あっ!?!」「えっ!?!」「そっ!?!」

……。

……。

お腹が空いたので3人を置いて一階の食堂に来ました! 今日朝ご飯は何じゃろな

「皆、おはよう。わあ 寒ブリの塩焼きか 今朝も美味しそうだね」

「おはようございますっ ふふふ さあ冷めない内にお食べ下さい  
なあ。今日は特別にチョコレートケーキのデザートもありますよお  
」

「寒ブリの塩焼きのあとにチョコケーキ……？……まあいつか。いた  
だきます」

「ふふふ 召し上がれえ」

塩焼きの魚を食べたあとにチョコケーキはどうかと思うけど今は  
とりあえずこの空腹を満たしたい。もぐもぐっ……。うん美味しい

……。

けふっ。お腹が空いているとはいえ朝からお代わり3杯したのは  
少し食べ過ぎたかもしれない。うん、ミリーのご飯が美味しいのが  
悪いんだ。毎度お世話になっています

「……ふう、ご馳走さま。美味しかったよ、ミリー」

「はあい デザートですよお」

「ああ……うん。いただき……」

せつかく出されたものだ。それでいざ食べようとしたら横から搔  
っ攫われた。

「ちよーっと待ったー！

はぐっ！んぐんぐっ、もきゅもきゅ、

んぐっ！…はふう」

「あ？あああああああつ！？！？ウーリちゃんヒドイわあ…」

ウーリ…。そんなに欲しかったなら言えばよかったのに…。ほら？見る。突然のことにミリーが慌てているじゃないか。

「良くやった！ウーリ！ささ！主！ケーキなどという男性には重いものではなく、こちらの一口チョコなどをお食べ下さい！！」

「え？あ？はあ…。これを食べれば、いいのな？…ん？これってもしかしたら、手作り？」

マリー…。確かに男にとって朝からケーキは重い。だがな？それでもマリーが取り出したものはチョコじゃないか…。抹茶チョコ食べただけだし、今は朝ご飯も食べ過ぎて少し苦しいんだよ。出されたものだから食べるけどさ…。

「はっ！私とウーリの合作にございます！人の世では今日は特別な日だと聞き及びましたので！」

「そうなの？それじゃーっ…」

「むっ！…ばくっ！…ひょいっ！…ばくっ！…ひょいっ！…ばくっ！…ひょいっ！…ばくっ！…ひょいっ！…ばくっ！…ひょいっ！…ばくっ！…ひょいっ！…ばくっ！…ひょいっ！…ばくっ！…ひょいっ！…ばくっ！…ひょいっ！…ばくっ！…ひょいっ！…」

「あーっ！？！？ミリー！何をしているのか！…お！？お、おおおっ…。もう…一つも、ない、なんて…」

「ミリーはー、大人気ないと思うなー…。ウーリ、シヨンボリだよー…」

「むぐむぐつ、最初に邪魔したのはあ、もきゅもきゅ、貴女達でしよあ？ごくんつ、オアイコよあ…ううう！」

むー？とりあえず、これは俺の食べるものがなくなったということだろうか？それにしても女の子は甘いものが好きだねえ。俺も仕事柄、お菓子は作るけど食べるのは二の次だからなあ。

「……………またか。何か知らないけど出かけてくるね。じゃーねー」

「なっ！？」「ちよっ！？」「いつ！？」

色々と食べ過ぎたので少し散歩をしに出かけます。朝の空気が澄んでいて気持ちいいなあ…

……………。

とりあえず、世界樹方面に向けて散歩を開始。適当にどこかで折り返して帰るとしよう。散歩自体が腹ごなしみたいなものだし。

「んーっ！…はふう。朝の散歩は気持ちいいなあ」

む？あそこに居るのは…。

「あっ、葵兄さまやー、おはよー」

「え、っ！葵さん!？」

「木乃香ちゃん、おはよう … 明日菜は随分なご挨拶じゃないか。  
…ええ?」

「あは、あははははっ。 ……ごめんなさい」

うん、素直に謝ることが出来る人はそれを誇っていいとお兄さんは思うぞ。今度はキチンと挨拶からはじめような?

「そっや!葵兄さま、あの今日は特別な日やろ?やから…んー!これ」

「あ、それじゃあたしも、これあげるわね。はい!」

「は?あ、ああ。ありがとう」

「うん ほなな!んふふ 帰ったら直ぐに食べてやー」

「あ、待ってよ!じゃーね、葵さん!ちよつと!このか!」

2人から小さな箱に入ったチヨコを貰った。むー…腹ごなしに散歩している人間に、更に食べ物を渡してくるのはどうかと思うのは俺だけか…?

……。

2人の背中が見えなくなるまで見送った。目の届く位置に居る限り変な人に絡まれたら助けられるようにという配慮だったけど、心

配は杞憂だったらしい。　　ん？この気配は…？

「くくくつ、2人とも元気だなあ。……………で？そのストーカー娘は何をしとるのか？」

「ストーカーではありませんっ！！こほんっ、おはようございます、葵さん。……………（じいじいじい）」

「……………（自覚が無いとは……………）。…はい、おはよう。ところで何をそんなに見とるのかね？君は……………」

「えっ？いえいえいえ！何も見ていませんよ！？お嬢様の手作りチヨコなんか見ていませんとも！？ええ！！そもそもなぜ葵さんがそのように思ったのがナゾです！！ええ！ナゾですとも！！それではまるで私がお嬢様コレクター、ごほつごほつ！見守っているだけです！そう！私がお嬢様を陰から見守っているのです！！！」

「……………あー、とりあえず、だ。刹那ちゃん、落ち着こう？な？木乃香ちゃんから貰った、これはあげるからさ」

「ありがとうございます！葵さん！！……………あ？いえいえいえ！そんなお嬢様が葵さんに差し上げたものですから……………」

「いいよ、いいよ。木乃香ちゃんも大好きな刹那ちゃんに貰ってもらえるなら本望だと思うしね」

やっぱり、女の子は全般的に見て甘いものが好きだよな？俺も甘党の自覚はあるけど毎日、食べたいとは思わないし……………。

「えええええ！！だ、だ大、好きっ！？……………ええっ！？……………あうあう……………」

その…本当に、私が貰っても…よろしいのでしょうか？」

「俺に遠慮しているなら気にしないでいいよ。あ、それに明日菜のもあげるね？いやー、刹那ちゃんがそんなに甘いものが好きだったなんて知らなかったなあ。うんうん」

「え？あの…いえ、ありがとうございます…」

「うん、じゃーねー」

お腹も落ち着いたし、一度、帰ろうかな…。

……。

帰ってきてても喫茶店は今日の当番は他の皆だから俺は休みだ。店内でやることは無い。ならば「工房」に行こうかな…。ってことで…。

「さて、工房に来たはいいけど…何しようかな？」

『おい！葵！何も聞かないでそっちに召喚しろ！早くっ！！』

「えっ！！オリビエっ！？」 ……理由は跡で聞かせてもらおうから

ね！！暗き泉！仄暗き世界！今ここに！理を繋げる！召喚！！オリビエー！リビエラ！シルビア！」

随分と慌てているようだったからいつも通り3人まとめて呼んだ。2度手間になるのは面倒だしね。一応、手数は多いほうがいいでしょう。それなのにオリビエに俺は怒鳴られようとしています。なぜだ？

「……………すう…こっの！阿呆っ！！何であたし“だけ”を呼ばないんだ！！余計な2人まで…！！」

「あ〜っ！オリビエちゃん、ズルイわ〜！私も渡したいのに〜！！」

「…ズルイ。…ボクも…あげ、る…！！」

「うっさい！！ていつ！！　　バクバクバクバクバクバクバクバクバクッ…！！」

お、おおう？すごい勢いでチョコがオリビエの口に入っていく…。

「「あ……………」」

「ねえ？オリビエが2人から取り上げた箱からお菓子を食べているけど…」

「……………っ####!!!!!」……………ツ#####!  
!-!!-」

オリビエも女の子だから甘いものが好きなんだね。でもいきなり食べるからリビエラとシルビアが怒っているように見えるよ？

「　　バクバクバクバクバクバクバクッ…！！」

「あ……………」

「ねえ？皆、どうしたの？今度はオリビエの箱からお菓子を2人が食べ尽くしたけど…」

「 ツ#####!!!!!!」

やられたらやり返すか……。お互いに量的には少ないだろうけど……。そんなにチヨコが食べたかったのか……。明日菜のチヨコは持つてきてあげればよかったかな？

「「「表に出ろっ!!!!」」」

「身体を動かすなら「演習場」でやってねーっ!!!!」

「「「わかってる!!!!シャーッ!!!!」」」

いつの間にかケンカイベントが開催されている!?一応、暴れるなら「演習場」に行ってもらった。「工房」崩壊とか笑えないわー……。

……………。

「工房」内のラウンジに来ました。今ここには俺の他にアンしか居ない。

「アン、お父さんは疲れたよ……」

「えと……その、げ、元気出してっ!お父さん!私に出来ることならするよ!」

「じゃあ、撫でさせて……」

皆が今日に限って甘いお菓子を勧めてくるんだ。もう見ているだ

けで胸焼けがしてくる。出されれば食べるけどね！食べ物を粗末にしたら……殴るぞ。

「えっ！？やた じゃない！うん いいよ はいっ！」

「うん……。撫ぐで 撫ぐで 撫ぐで ……はあ、癒される……」

「はう…… いやん…… ……んんっ ……はあゝっ ……」

うん、胸焼けが癒されるわ……。アンからはマイナスイオンが出ているに違いない。撫でているととてもリラックスできるんだ。おや？こちらに近づいて来るのは……。

「…マスター、ここにいらしたのですね。…アンお嬢様も一緒にしたか」

「んー？あれ？COS・MOSも休憩かな？」

「否定。…マスターを探してありました」

俺を探して？今日は休日だし…何かあったかな？

「COS・MOS、お嬢様はやめてよ。私のことはアンでいいんだよ？」

「…む、了解しました、アン。…それと…マスター、これをお受け取り下さい」

「ん？なにになに？ ……板子ヨコ？」

むむむ？

…また甘いものか。うつぶ。また胸焼けが…。

「肯定。今日は特別な日でお菓子を渡すと聞き及びましたので持参致しました」

「へ、へえ…。でも、まあ…うん、嬉しいよ。ありがとう、COS  
- MOS」

「……………ッ！……………喜んでいただけただようで何より、です」

うん。COS・MOSの笑顔が見れるなら多少無理して胸焼けし  
ても食べてみようと思えるから不思議だ。それじゃ、いただきま  
…。

『…我が主、少しそのチョコを見せてもらえぬか？』

「は？うん、まあ、いいけど…。はい」

『……………ッッ！』

びっくりした！びっくりした！びっくりした！ラミエルさんに板  
チョコを近づけたら、一瞬で黒い空間に吸い込まれた！？何、アレ  
？ラミエルさんの格納領域か何か？

「うおっ！？なに！？何が起きた！？」

『げふっ！…むう？やはり、食物は相性が悪いのか？胸焼けがする  
……』

「何でお前が食ってんのかな！？俺のだろうが！？」

…ってC

OS・MOS…さん？何やら不穏な雰囲気纏っていらつしやるように見えるのですが…」

「……マスター、ラミエルとの模擬戦争の許可をお願いします」

「模擬…戦争！？あれ！？模擬戦をすつ飛ばしてイキナリ模擬“戦争”ですか！？落ち着こうよ！！どんだけ怒ってるのさ！？」

戦争はやめて！せめて戦闘にして！あ、ああ…俺の胃がキリキリと痛めつけられる感覚が…。

「そつだよ。落ち着こうよ？COS・MOS…」

「よかつた！今回は冷静なアンが居る！助かつ…」

「本気のラミエル相手にするなら戦艦規模の質量がいるよ？…だから私が助太刀してあげるね」

「アン…。感謝します」

「助かってないよ！？寧ろ悪化してるよ！？お前ら何考えてんだよ！？ラミエルからも何か…」

『クククツ！構わぬ！2人まとめて相手してくれようではないか！軽く捻ってくれるわ！！わはははははっ…！！』

もつ、こいつら、ダメだ…。

「…マスター、模擬戦争の許可をお願いします。是非っ」

「お父さん！私からもお願い！」

「……………もう、好きにして。はあ……………」

『叩き潰してくれるわッ！！』「叩き潰してやるんだからっ！！」  
……………叩き潰しますッ」

いいよ、いいよ。もう好きにきなさいな……………。俺は知らんよ。……………  
あ？「演習場」にはオリーブ工達が居たような……………。まあ、いいか。

このあと、どこへ行っても家族の皆に甘いお菓子を勧められて最後には見ただけで鼻血が少し垂れてきた。空気自体が甘く感じられてきたら、それはもう末期だと俺は思う。

はあ……………。

……………。

……………。

……………。

「……………という夢を見たんだ」

「そ、そうなんだー？」

「た、大変な夢でしたねえ……」

「う、うむ。そうだな……」

ウーリ、ミリー、マリィ。後ろ手に隠したものは何だ？

「あ、葵も疲れてるんだよ……」

「そ、そうよ。今日はゆっくり……ね？」

「……お兄ちゃん……休んで……」

オリビエ、リビエラ、シルビア。お前らも後ろ手に隠したものは何だ？

「か、閣下も大変、ですな……？」

「そ、そうですね。ふふふ……」

「き、今日は休むといいの……」

アイリ、リチラ、ファレノ。お前らも、か？後ろ手に隠したものは何だ？

「う、ん……？そうしようかな？それじゃ……」

もういいや。夢見が悪かったから自室で休もう。うん。

「あ、我が君！ちょうど良いところに！これをお受け取り下さい！吾ら2人で心を込めて作らせていたいただきました！」

「どうぞ、お食べいただければ吾らも苦勞が報われます。いえ！天にも昇る想いにございます！」

「あ、うん。それじゃ、いただくね？あむ、んむんむ …… ああ、これ美味しいね ハオもユエも料理の腕、上げたようで俺も嬉しいよ」

「感謝の極みにございます！！！！」

これじゃまるで正夢だな…。まあハオとユエの作ったチョコが美味しいからいいか…。

「うんうん ……で？皆、どうしたの？」

「……………何でもないです……………」

「……………」

あれ？そういえば夢に出てきた抹茶チョコは結局、誰が作ったものだったのかな？

Side out

番外編「お菓子と抹茶チヨコと鼻血と」（後書き）

許可が出たので、抹茶チヨコ…使わせてもらいました…。

彼岸花さんの作品の主人公、雛さんから抹茶チヨコが送られてきたので、つい…。

いい加減、本編を進めるとか、そういう問い合わせは受け付けません。

あくまで当作品は作者の趣味ですからマイペースは崩しませんよw

ではでは！B i s b a l d！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第五十九話「内と外とそのまた外と」（前書き）

うん、「演習場」の修理風景の裏で名も無き家族の仕事風景を読みたい。

というリクエストがあつたので書いてみました。

少し、違うかな、と作者は思つのですが良ければ読んでやって下さい。

では……どうぞ！

## 第五十九話「内と外とそのまた外と」

.....。

突然だが総旗艦のアングレカムを除いた全172隻の無人艦や数えるのも馬鹿馬鹿しい無数の各種無人兵器、自動人形で人員不足を誤魔化していたが管理する側としてはそれも限界が見えてきた。

当然のことながら組織のほぼ全てを管理する司令部も葵を崇拜している。だが組織の現状から葵に陳情しなければならぬ。このことを真に失礼と確信していながら司令部は精魔奇兵の増員を要請。

司令部所属の者は怒られるかもしれない、叱責されるかもしれないと思いつつも己が全てを尽くし切ることを至上の喜びと考える彼女達は何モノからも葵を守るためには必要と決意していた。

しかし、彼女達も彼女達だが葵も葵と云うか……。家族を溺愛している葵が断ることをするわけがない。それに自分を守るためと言われてしまえば喜びはしても怒ることなんて考えられないだろう。

苦笑しているのかイベントは重なるもので陽月姉妹による予定外の事態はあったが司令部の陳情は先頃、葵の裁可によって無事に承認された。改良された施設から考えて近々、人員は6倍かそれ以上になる予定だ。

精魔奇兵化して暫くは新しい身体に慣れるため私生活を訓練とし、それが一段落したならば身体を戦闘に慣らすための基礎訓練、兵装や戦術などを習得する座学がある。本格的な戦闘訓練はそのあとだ。

戦闘者としての基本が出来たならば大まかな訓練は終了だ。配属先は機動兵器搭乗者や地上・航空戦闘員、各種後方担当などのどれかになるかは適正関係から第二希望以下に回されることもあるが本人の希望が考慮される。

今、葵や司令部が考えているのは管理者となる者。それに無人艦を主力とする四個艦隊が新設されたことから、それらを管理運用する者。当然、無人艦を管理する有人艦が設計されることからオペレーターや操舵士、通信士など乗組員だ。

予定通りに増員が終われば精魔奇兵はアイリス達を含めて総人員1404人になる。それと艦隊は作戦部ではなく司令部の管理下に入ることになる。

一個艦隊に有人艦を2隻と考えると艦船一つに百人余りを配属させると単純計算で半数以上800人は配属される。艦隊に割り当てられる人員が多いが新設計される有人戦艦は高度に無人化されたアングレカムと違うので仕方ない。

残りの新規370人も既存の司令部や情報部、作戦部のそれぞれに配属される。司令部管理下の艦隊に配属される人数から370人の配属優先は情報部と作戦部になる予定だ。

.....。

葵は知らない。葵の総戦力は彼の予想よりも遥かに多く、強大になっっていくことを...

葵は知らない。月基地に残る数千体以上の自動人形達が葵に喜んでらおうという単純で純粋な好意から全長50km級戦闘移民船

を建造していることを…。そして時間加速エリアで造られている、その完成は間近だということを…。

葵は知らない…。ついでとばかりに護衛艦隊として既存の第一、四艦隊と同じ規格の無人艦隊を8個艦隊ほど建造されていることを…。他にも月で色々造られていることを…。葵は知らない…。

……………。

魔法球「演習場」…。

Side ????

「演習場」の上空には第一から第四艦隊の450m級大型補給艦12隻が“とある荷物を満載して”待機している。布陣は単純に右から第一、第二、第三、第四艦隊が横一列になり一定の間隔を空けている。

艦隊の艦船は全てを無人制御による運用を前提に設計されている。だが大型輸送艦や550m級ドッグ艦などの後方担当艦は戦地での修理や補給をする関係上、ブリッジと居住空間が施設されている。

第一艦隊の大型輸送艦一番艦のブリッジに指揮所を設置。ここに居る彼女達は「演習場」内郭部分の修復を指揮管理する。するのだが…。

「さて、葵様に話しは伺っていたが、これは…スゴいな」

今回の指揮を任された彼女ランタナ・S・アニメスは呟いた。彼女は元地精霊の精魔奇兵であり親衛隊所属の古参の1人だ。

赤茶けた肩まである髪と鋭い目元が特徴だ。黒い制服の肩部に親衛隊の証である赤のラインが入った服をビシッと着こなしていることからマジメな性格が見て取れる。真実、仕事中の彼女はマジメだ。

「ええ、これはヒドイです。周辺を精密走査しましたが形状記憶土壌や環境維持用ナノマシンでも修復が不可能な部分が存在します」

それに答えたのは作業の副指揮官であるマトリカリア・S・アニメスだ。彼女は元水精霊の精魔奇兵でランタナ同様親衛隊に所属している。

濃い青色をした腰よりも長い髪を後頭部で一本に結っていて少し目尻の下がったおっとりとした雰囲気を持つ女性だ。ただ仕事中は雰囲気とは逆の印象を与えるほどキリキリしている。

「修復が不可能な部分は一度切り離し、新型の形状記憶土壌と環境維持用ナノマシンを優先的に当てよう」

「それがよろしいかと思いません。早速、作業を開始しますか？」

どちらにしる、だ。現存の形状記憶土壌や環境維持用ナノマシンもデータを書き換えて新型へ更新する必要があるのだ。寧ろ第四艦隊を除けば更新用ナノマシンだけを満載していると言ってもいい。

「ああ、そうしてくれ」

「アイ・マム。全艦隊、微速前進。目標地点は平野エリア上空。ただし、第四艦隊の3隻は要修復部分を最優先」

ランタナ達は作業活動を開始する。付属魔法球中、直径二千数百kmという最も広大な内部空間を持つ「演習場」を修復、強化するために。

主な被害地は平野エリアと空間中央に連立している中央山脈だ。天頂部にも亀裂が見えることから個々に術式補強と物理修復が必要のようだ。

「アイアイ・マム。微速前進。目標地点、平野エリア上空」

「報告。第四艦隊大型補給艦の離脱を確認。以降は独自行動となります」

操舵士はIFSコンソールに置いた手から艦に命令を伝達し自艦をゆっくりと前進させる。第一艦隊大型輸送艦一番艦を先頭に前進を始め緩やかな斜めの陣形で前へ艦隊は進む。

左端に位置する第四艦隊は大きく弧を描き離脱することを通信士は報告した。第四艦隊は内郭部から要修復部分たる天頂部を中心に修復し、新型を亀裂が残る地上部に直接投下するのだ。

暫く航行すると平野エリア上空に到達した

「よし。全補給艦隊へ通達。底部ハッチオープン。“荷物を投下しろ”以上だ」

「アイ・マム。全艦へ伝達。底部ハッチオープン。“荷物を投下しろ”。繰り返す。“荷物を投下しろ”」

ゆっくりと前進して行く大型輸送艦隊の底部ハッチが開放されると銀色のサラサラした更新用ナノマシンが投下されていく。作業風景を一言で言えば飛行機から空中農薬散布だ。

以降、艦隊はこの散布作業を更新用ナノマシンや新型の形状記憶土壌と環境維持用ナノマシンを「格納庫」と「演習場」までの間を3日間、正味2日半ピストン運搬を続けることになる。

……。

3日後……。

……。

ランタナ達は3日を費やして要修理エリアとその他の機能更新を目的とした各エリアを巡回して更新用ナノマシンをパラパラと種時きのようにしていった。今は最後の荷物を投下し終わり「格納庫」へ繋がる接続魔方陣へ移動している。

「報告。全艦隊、予定通り荷物の投下を終了しました。…追加報告。第四艦隊も同様です。現在から1時間後に本隊へ合流する、とのことです」

「そうか、ご苦労。……ふむ？よし。乗組員は合流まで小休憩するといい」

「アイアイ・マム」

ブリッジにはランタナとマトリカリアを残して他の乗組員はわあいとそれぞれに休憩時間を過ごすために出て行った。単純作業だが失敗は許されないうために神経を使っていたことで精神的疲労はあるのだ。

「……作業開始から3日ですか。予定通り作業終了ですね」

そう言いながらマトリカリアはブリッジに予め持ち込んでいたコーヒーを2つのカップに入れて1つをランタナに渡した。

「ああ。あとは私達の撤退後に葵様が外郭部分を強化してくださいれば「演習場」の作業は完了だ」

「ふふふ、そうね」

この3日間、内郭は大型輸送艦12隻によるピストン運搬でイヤと言っほど投下した新型の形状記憶土壌と環境維持用ナノマシンが修理、強化する。

投下した殆どが現存の形状記憶土壌と環境維持用ナノマシンを書き換えるデータ更新用ナノマシンだが損傷の激しい箇所は直接新型を投下して補填、早急な修復に当たったのだ。内郭部分は一応の作業終了となる。

そして作業員が全員脱出してから安全のために「演習場」を一時的に中心核の「工房」から切り離す。そうして外から外郭部分を補修、補強し、更に改良、強化術式を施すのだ。

作業が無事に終われば改装済みの他の施設に加えて「演習場」は

以前の数倍の強度を確立することができるのだ。

それでも全ての葵ファミリーが全力全壊、訂正…全力全開で魔力解放すると崩壊する危険性がある。ただ計算上では陽月姉妹、精霊3人娘、悪魔3人娘、そして葵が魔力を解放しても耐えられるように強化される……予定だ。たぶん。

「何はともあれ、だ。お疲れ様、カリア」

「貴女もね お疲れ様、ランタナ」

カァンと手に持つカップを打ち鳴らしてお互いの労うのだった。

S i d e o u t ????

喫茶クレイドル地下2階…。

S i d e 葵

壁に掛かっている時計を見ると、もう少しで3時間が経とうとしていた。そろそろ内部の作業を終了しているはずだと思っただけ…。

ここは喫茶クレイドルの地下2階の一室。地上部分の喫茶店も街角にある割に広いので地下も合わせて広く造られている。天井も4mと高い。空調も確りしていて地下特有のジメジメした感じも皆無

だ。

……まあ、ここは自分達で造ったから家族以外に知る者は居ない秘密の地下室なんだけどね。あ？今、思ったんだけど“秘密の地下室”っていい響きじゃないか？何だか、こつこつ背徳的な何かを感じない？

…ごめん、どうでもいいな。それよりも今は「演習場」の修復と強化作業だ。

この一室に居るのは俺の他にマリーとウーリが居る。ミリーが居ないのは理由があつて彼女には内部の作業が終了したら知らせてくれるように「工房」内にて待機してもらっているんだ。

いい加減、魔法球内との通信手段を確立しないとなあ、とは思つてはいるんだけど……無理。空間を歪めているだけならどうとでも出来る。でも時間も歪めて時空間を拡大いるから科学的にも魔法的にも外との繋がりが悪い。

例外は内部時間を現実時間と同調させた時……つて、あれ？あー…そうか。「工房」内に実時間と同調した特殊な部屋を用意して通信室とすれば……うん…いけるんじゃないや、いや、いけるよ！修復と強化が終わつたら早速作業に入るう

こほんっ、それで目の前にはこの世界に落とされてから蓄積してきたネタ的発明品や色々な素材や収集してきた俺の全てが詰まっている魔法球「工房」が設置されている。

今や直径2m半の大きさになった「工房」を中心核に一回り小さな付属魔法球「演習場」「菜園」「牧場」「ドッグ」「桜の苑」「

食料生成プラント」「工場プラント」「格納庫」が接続されている。

もう一度、時計を見るとあと5分で午後4時になるうとしていた。内部の作業終了予定時刻が実時間の午後4時だから、もう直ぐのはずだ。ま、多少、予定が遅れたとしても怒ることは無いさ。

幸いにも時間には余裕があるし……って皮肉にもならないな。不老の俺に時間なんて関係あるものかよ。なんて考えていたら魔法球の前に魔方陣が展開。中からミリーが出てきた。

「ミリー、無事に準備は出来た？」

「ええ、全員、「演習場」内から退避済みですわぁ。念には念を入れて3度、確認したましたものお。」

「そっか、ありがとう。それじゃ、早速で悪いけどミリー達は配置についてくれる？」

指示を出しつつ、本体の「工房」から「演習場」を取り外して部屋の中央に設置する。戻ってきたばかりのミリーには悪いけど今すぐ修復をはじめたいと思う。

「はぁい さぁて、もうひと頑張りですわぁ。えいえい、おぉ、ですわぁ。」

「ふふふ、修理とはいえ魔法球の作製で精霊の力を用いるのは世界でも主だけですな。」

「だからこそ、だよー。あるじの魔力とウーリ達の力を合わせるからー、規格外の魔法球が出来るんだからねー。」

「演習場」を中心に四方を俺とミリー達で囲み、それぞれの配置についた。

皆の言うとおり本来なら魔法球の製作は精霊の力を借りない錬金術の分野だ。つまりは俺の専門分野だ。物創りは俺の本業（最近は喫茶店に情熱を注ぎ過ぎたけど…）だからな。この世界の誰よりも品質のモノを造ってみせる自信がある。

それでも普通に造っても今の家族（特にハオとユエ、それにオリビエ達やミリー達）の使用に耐えられない段階に来てしまった。だからこそ四大精霊に匹敵するミリー達の力を借りた特殊な方法で世界（シリフン）に一つのモノを創り出す必要がある。

たかが魔法球と言うことなかれ。「演習場」は使用目的から、とにかく別格の頑丈さが求められる品物なんだ。それでなければ安心して全力を出して訓練できないからな。事故を起こしたらシャレにならないのよ。

「はいはい、皆には感謝しているよ。……いくよ?」

「はあい」「御意!」「あいつ」

配置についた俺は皆に確認を取ると準備できた、と返ってきた。そのまま深呼吸して精神を落ち着けて儀式術式を構築するために魔法回路を稼動させる。第一目的は修復、第二目的は改良だ。

部屋の中央に設置された「演習場」を中心に光の糸が走り術式を編み上げて床に六芒星を基本とした魔方陣は様々な記号と複雑な図形で構築されていく。

「儀式術式開始…範囲設定…空間特定…時空間固定…空間圧縮…次元操作…」

儀式術式を開始すると床に光で描かれた魔方陣が時計回りにゆっくり回転を始めた。それと同時に魔法球「演習場」は空中に浮かび一定の高さで固定される。

「……………」

ミリーが唄う。清らかな水が静かに流れる。小さな流れは幾本も合わさり、やがては大きな川となる。偉大な水を髣髴させる涼しげな声色で唄われる。

「……………」

マリーが唄う。始まりは弱々しく飛び回る火の粉。火の粉は火の子。小さな火は全てを巻き込み。やがては炎となる。至高の火を表すように猛々しい声色で唄われる。

「……………」

ウーリが唄う。そよ風は舞い高らかに昇る。そよ風は走り、風は走り、やがては荒れ狂う暴風となる。大いなる風を示すように自由に優雅な声色で唄われる。

3人が唄う。精霊達の唄う歌には魔力を増幅する効果と世界を正

常に、均衡を整える効果がある。精霊の歌で増幅された魔力は、それ単体で現象となる魔法を創り出す。魔力で構築されている精霊達は感覚だけで精密な魔法操作を行なうからだ。

今の世では知られていないことだが魔力の満ちる満月の夜に森の奥地で精霊の歌会が行なわれる。それは遙か古の時代から続く秘密の歌会。精霊の歌には世界に漂う魔力を攪拌して均衡を保つ役割がある。

本来なら精霊は人間の前では決して唄うことはない。それはこの世界の摂理だ。なぜ唄うことがないかという人間は純粹ゆえに邪悪に染まり易いことから精霊の神聖なる歌を汚すと考えられているからだ。

ただしミリー達や家族の精霊達は例外だ。前にも言ったが俺と契約を結んだことで、この“ネギま！”の世界から脱退し“俺という名の世界”に所属を移している。彼女達を構成する魔力は既にこの世界とは別物だ。

彼女達の存在を構成し縛るものが“ネギま！の世界”から“俺”に変わったただけと言えば、だけなんだけど…。むー…。契約が増えれば増えるほど俺の保有魔力は増えるし俺の世界は強力に存在感を増していくんだよなあ…。

これは俺がこの世界の存在を喰らっているということだろうか？

それと、なぜこんなことができるのか？ということだが俺にもわからん。俺が別の世界から来た“来訪者”<sup>エトランジェ</sup>だからか、それとも俺を

この世界に落とした女神（幼女）のせいなのかは未だにわからない。

閑話休題…。

「修復術式を展開…修復箇所を走査…術式限定…術式実行…修復中…修復完了…」

ゆつくりと回転していた魔方陣はまたも変化して円環魔方陣が3本、浮かび上がって「演習場」の周りを1本が右に2本が左に回転して魔力を収縮して圧縮していく。上部にも床にある魔方陣と同じものがあり、こちらもゆつくり回転している。

ここまでの儀式術式で3時間近くが経とうとしている。根本となる基礎術式の立ち上げと稼動に2時間、次に修復術式を上書きして損傷箇所を探し出して修理した。修理は、ここまですぐからは強化の作業だ。

「……………」

「ミリーは唄う。唄う。唄う。唄う。静かなる水の流れは全ての生命を守る揺り籠となる。生まれ行くまでは守ろう。愛しき子らよ。愛しき子らよ。」

「……………」

「マリーは唄う。唄う。唄う。猛々しい炎は全ての災いとなるもの

悉くを燃やそう。歩き行く先を照らそう。愛しき子らよ。愛しき子らよ。

「  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…」

ウーリは唄う。唄う。唄う。荒々しい風は暴風となり汝が道を切り拓こう。歩みを止めたなら優しきそよ風で癒そう。愛しき子らよ。愛しき子らよ。

「新規空間を固定…儀式術式回路へ魔力充填…正常稼働を確認…儀式術式完了…更新を確認」

もう少しで作業を開始して4時間が経とうとしている。長時間の作業で疲れはあるが最後の仕上げを施すべく集中力を今、最高に高める。

「演習場」内の空間に新規空間を付け足して固定する。機能を半分ほど停止していた付属魔法球の術式回路に今まで以上の魔力を注ぎ尽くす。魔力暴走を引き起こさないようにゆっくりと、ゆっくりと、注いでいく。

今までに展開させた魔方陣の回転数が上昇。光を放つ魔方陣の発光が強まる。もう目もあけていられないほど眩しい。次の瞬間、儀式術式の完成と同時に地下室の一室は爆発的な閃光に包まれた。

少しすると閃光で眩んでいた目が慣れてきた。魔方陣が消えた地下室の中央には修理、改良された新たな付属魔法球「演習場」がゆっくりと下降し床に着地していた。

注がれた魔力の余波で魔法球は薄っすらと光っているがそれも時間が経てば通常通りに落ち着くはずだ。

あー、長時間の儀式は疲れるわー…。

「はあ…はあ…。あー、皆、お疲れ様…」

「主様もお、お疲れ様ですわあ…。ふふふ」

「無事に儀式作業も終わったようですね…。ふふっ」

「あい、お疲れ様ー、もうウーリは疲れたよー…」

4時間、歌いっぱなしだったものな。それは疲れるよ。心なし3人も顔色に疲れが見える。でも精霊の唄う歌って綺麗だよなあ。儀式とかじゃなければ俺も聴き惚れて集中なんて出来なかったほどだ。

いつだったかぐらまあな狐女達と知り合えたから「桜の苑」で開いた大宴会に招待して舞台上で舞ってもらったことがあるけど、精霊の唄う歌はそれと甲乙つけがたいものがあった。

あー、また狐女達も招待して大宴会を開こう。今回は、疲れた…。やっぱり、仕事を急ぎ過ぎるのはよくないね…。俺にはゆっくりとのんびり仕事するのが合ってるよ。喫茶店とか…。

「ウーリ、ごめんね、他の施設と違って「演習場」だけは一際頑丈にしないと危なくて使えないからさ」

「あ、ち、違うよー？無理とか迷惑とかー、そんなこと考えてないからねー？本当だよー」

「そっか、そっか うん、ありがとうね」

慌てるウーリが可愛かったから鼻肩かなあ？とは思っけど見た目が小さな少女だから無理させてごめんね、って意味を込めてウーリの頭を優しく撫でてみた。俺もミリー達も疲れていたから癒しが欲しかったんだ。

ウーリを撫でる俺の気分はお父さんです。

「ん、んー はふー…」

「あらあら」

「ふふっ、ふふふっ」

あー、やっぱり、可愛い子を愛でていると癒されるわー

S i d e o u t 葵

喫茶店周辺…。

S i d e ????

葵達が地下室で作業をしている時、喫茶店の表では静かな暗闘が繰り広げられていた。拠点（喫茶店）を中心に情報部二課と三課が

合同で敵対者や準敵対者の監視員を対処して回っているのだ。

街路には目立たないように情報部二課の者達がさり気なく通行人を模していたり、他店のウェイトレスを模していたり、クレープの移動販売の店員を模していたりなどなどバリエーションにとんだ様相で監視員を逆監視している。

そして建物の屋上には情報部三課の者達が熱光学迷彩で姿を隠し個人スキルの気配遮断で万全の穩行をして漆黒の戦闘服を纏い待機している。狙撃銃、突撃銃、自動拳銃、コンバットナイフなど一通り装備している。

数機の熱光学迷彩装備のステルス偵察機アカトンボも上空200mという低空飛行で監視活動をしていた。ヘリのように風切り音も無い、極靜穩の反重力エンジンで滞空することから低空でも気付かれることがない。

そして麻帆良上空5kmには熱光学迷彩を展開し極靜穩ステルス潜航した総旗艦重機動戦艦アングレカムが指揮所（CP）として待機している。地上戦力で対処しきれない事態が発生した場合はアングレカムから即座に応援を派遣できるように、だ。

対空戦力の無人機動兵器カブトムシを始めとして熱光学迷彩や個人用Dフィールド発生装置などを標準装備した実働部隊。市街地戦などの狭い空間を想定された機械化特殊戦闘部隊。新規配備された機械人形部隊（シユワさん達）がある。

一応、イキシア？などの有人機動兵器も待機しているが使用する予定は未定だ。現在の地上戦力だけでも相対戦力の数値上はこちらが過剰戦力となっている。この麻帆良で使うかは司令部上層部で未

だに協議中。

.....。

そして今、手鞆を持ち背広を着た一人の男が居る。大通りを避け、なるべく人目につかないように歩き、脇道へ脇道へと入って行く。やがて到着した男の居る場所は建物が影になり人目の付き難い路地裏だ。

「.....」

男は周囲に自分以外に誰も居ないことを確認すると手荷物の中をゴソゴソと探し出し、手に取った。男は一見するとどこにでも居る一般人、普通のサラリーマンに見えるだろう。

だが他の一般人と違うのは鞆から取り出し手に持つ水晶玉だ。それは小さく光を放つとどこかの映像を映していた。普通に見れば隠れて年始行事で披露する手品の練習をしているように見えなくもない。

「チイッ!!!」

しかし、男は何が気に入らないのか舌打ちを一つすると水晶玉を手荒に手鞆に放り込んだ。地団太を踏みながら一通り聞くに堪えない罵りの言葉を吐き出している。

.....。

そんな男のことを見ている人物が居た。ここは拠点から200m強ほど離れた地点だ。作戦地名はP9<sup>ポイント</sup>。その人物の居る建物の屋

上から真下の路地裏で騒ぐ男を屋上から見て、いや、観察しているのだ。

屋上に居る人物はある程度、男を冷ややかな目で観察すると通信機で連絡を取り始めた。

「…CP、こちらデルタ3、ポイント9に要注意指定人物の存在を確認。指示を求む」

「CP、了解。……こちらも監視映像で確認した。以降、目標をエネミーと呼称する。エネミーを確保せよ。繰り返す、エネミーを確保せよ」

デルタ3と名乗ったのは組織情報部三課所属のランキユラス・D・スタニツク。風の固有能力を持ち、緑がかった黒いショートの髪と、髪と同じ色の瞳をした彼女は潜入任務を得意とする元悪魔の精魔奇兵だ。

通信先のCPとして応答したのは同じく三課所属の10あるチームの一つ、第4チームのリーダーでデルタ1のコードを持つドラセナ・D・スタニツクだ。影の固有能力を持ち漆黒の髪と瞳をした彼女は複数を統率する指揮能力が高い元悪魔の精魔奇兵だ。

「デルタ3、了解。…殺害は可能か？」

『殺傷許可は下りていない。非殺傷設定にて意識を奪え、気絶させる。直ぐに回収班を送る』

彼女達を始めとした全ての頂点に立つ葵の意向により現在の対応基準は殺傷非許可（ただし条件付解除有り）であり、スタン効果に

よる非殺傷設定が推奨されている。このことで家族の誰もが葵は敵にも情けをかける優しい人物という印象を与えている。

実際は学園所属の人物をウザイからとその場の勢いで殺してしまつたら後々面倒になると葵は考えただけに過ぎないのだが……。そんなことを知らない家族達はますます葵に崇拜と敬愛を寄せることになるのだ。

「…了解。残念だ。主の敵を1人排除できると思つたのだが…」

スパツと殺したいなあ、と零すランキユラスは本気で残念そう  
だ。

ここ最近、暴れたのはイラクやサウジアラビアといった紛争が絶えない中東くらいだ。そこで武装ゲリラ達を闇夜に紛れて誰が一番多くヘッドショットを決められるかを仲間と競っていた時だった。笑いながら競つたのは彼女のいい思い出だ。

ここの屋上から真下に居る男の頭に重力加速を加えられた銃で打ち出した弾丸が命中すれば、それはもう汚い血の華を地面に咲かせることが出来ることだろう。カスタムされた銃の威力から頭蓋は粉碎され、首無しデユラハンになること請け合いだ。

そんな想像をしていたランキユラスは静かに喉を鳴らして笑つた。

『ククツ、まあそう愚痴るな。閣下はお優しいからあのようなゴミ虫でも殺すのを躊躇されるのだ。……それとも不満があるのか？』

親しい者同士の会話だった。それでも最後の台詞に込められた殺<sup>フレッ</sup>意は本物だった。通信機越しにもかかわらずドラセナの声は聞く者の魂を芯から握られるような重圧を感じさせていた。

「くはっ、ははっ、なかなか面白い冗談だな。はははっ」

あまり笑わせるな、とランキュラスは通信相手のドラセナに笑いを噛み殺しながら言った。任務中でなければお腹を抱えて笑い転げていることだろう。

ドラセナの殺意もランキュラスにとっては心地好いそよ風のようなものだ。これくらいの殺気を受け流せないようではこの組織では耐えられない。アンですら敵の死にはドライな反応を示すのだから。

大体、だ。根本的にそれ以上の重圧や殺意を訓練で味わっているのだ。だからこそ今更、この程度は冗談の範疇に入るのだ。最も……冗談にもならない不穏分子は廃棄処分になるだけだが。

『……まあいい。では5分で終わらせる。回収班も……』

「ノン、2分で十分だ。回収班も直ぐに出してくれ」

先程まで笑いを堪えていた人物とは思えないほどの即答だった。ドラセナは通信の途中で割り込まれたことに多少考える仕草をする。

ドラセナは処理に5分と言う。ランキュラスはバカを言うな、と内心で思った。確保対象のエネミー1は自分の居る建物の真下に居るのだ。たかが気絶させるだけなのだから5分もいらないと必要時間を計算した。

「ククツ、いいだろう。ただし時間を少しでも過ぎたら訓練を追加する。いいな？」

「…了解。やってやるよ」

自分自身が言い出したことだ。責任は持つ。あの訓練に更なる訓練を追加されるのはゴメンだが失敗しなければいいのだ、とラナンキュラスは考える。

記憶に新しい超一味の地下基地襲撃事件。それがあつたことで組織の傲慢なまでの意識はほぼ改善され油断も慢心も無くすことが出来たのは皮肉だろうか。

あの事件は組織としてもそうだが、ただの葵の家族としても驚愕の事件だった。もう二度とあのような失態はしない、と皆は密かに心の中で自分のご主人様に誓ったものだ。直接、葵に言っても気にするな、と寛大な心で許されることがわかつているから。

だからこそ、今の自分に、組織に油断は無い。慢心も無い。速やかに事を終わらせるのみだ。

「……言い忘れたが追加訓練はハオ教官の“スペシャルな個人レッスン”だ。では、通信を終わる」

「なっ！？汚いぞ！それは！……って！本当に通信切りやがった！？」

…が、ドラセナはラナンキュラスの覚悟を打ち砕く爆弾を落として通信を切った。これにはラナンキュラスも慌てる。いや、これでもかと動揺してうるたえている。

屋上で1人、あうあうと失敗したらと考えるランキュラスだが、これだけで30秒が経とうとしていることから彼女の狼狽振りがかかるというものだろう。まあ、下手すると事は自分の生死にも関わってくるのだから狼狽するのも当然かもしれないが…。

「……!!……!!……!!? まずいつ!? チィ! 急がないと……!!」

ランキュラスは秒針が35秒を越えた時に意識を復活させて今、自分が何をすべきかを高速で思考した。結果は……聞くまでもない。風が一つ吹くと屋上にはもう誰も居なかったのだから。

……。

呆れたことに男は水晶玉を手鞆に叩き込んでからずっと悪態をついていたのだ。とてもではないが良い子の耳には入れたくない内容を吐き出し続けていた。この時の男は軽い興奮状態になっていた。

だからだろう。建物の影の中を縫うように移動して近づいてくるモノに気付かなかった。

「ッ!!　　ッ!!……ん? ぐふっ!!」

近寄ってきた人物は男の首に通常よりも強めに手刀を入れて意識を刈り取った。もう少し強めに力を入れていれば意識どころか命そのものを刈り取れるほどだ。何やら襲撃した人物の焦りを感じ取れる一撃だった。

「眠てる、クソ虫が……!　　ッ、時間は!?!」

軽く悪態をつきながら熱光学迷彩を解除したのはランキンキュラスだ。彼女は急いでコミュニケーションに内蔵されている腕時計を確認。一秒、狂うことなくカウントされていた。残り時間は…。

00:00:02。

ギリギリで2秒を残していた…。

「セエエフっ、助かったあ…。はあ…んっ、デルタ3からC P。エネミー1の確保、成功。回収を」

『CP、了解。回収班は間もなく到着する。…チッ』

「ちょ！お前、今、舌打ちしなかったか！？」

任務は成功したはずなのに負けた気がするのはランキンキュラスの勘違いだろうか？

S i d e o u t ????

第五十九話「内と外とそのまた外と」（後書き）

うん、名も無きと言っていたのに名前を付けて登場させてしまった…。

でもね？言い訳ですが名前を付けるとキャラクターに対して愛着や愛情が湧きませんか？

これは作者だけでしょうか…？

そろそろ簡単なキャラクターシートを作るべきでしょうか？  
と考える今日この頃…。

ではでは！B i s b a l d！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第六十話「表と裏と守る者」と（前書き）

そろそろ学園側の馬鹿者共が動く切欠が欲しい…。

でも、どうすればいい？

どうとでもなるさ！だって趣味なもの！

では続き！

## 第六十話「表と裏と守る者」と

喫茶店クレイドル…。

S i d e    ????

葵が学園長に勧誘紛いのことをされ、その日の内にエヴァンジェリンのダイオラ魔法球「別荘」で模擬戦と称した欲求解消（ついでに酒乱が降臨）した日。

そして翌日には陽月姉妹がオイタして「演習場」を小破させてそのまた翌日に葵と家族の3分の1が修理に借り出された日から時間は流れて今は12月。

それらから十数日間、葵は比較的平和な日常を過ごしていた。具体的に言つと“本業”の喫茶店を…毎朝早く大変だが…順調に営業していた。……ここで間違わないでほしいが葵的には喫茶店が本業で“裏”はあくまで副業なのだ。

ただ、もちろん平和と言つのは葵視点からだけで、学園的は一つのことを注目していた。それは先頃の大きな戦闘に、どこからともなく傭兵として投入された“九重・葵一派”のことだ。

これにより西側防衛線の危機的状況を押し返し、戦況は好転。そして葵達の活躍は同様の戦闘区域に居た魔法使いや剣士、その他によって目撃、確認された。

当時、戦闘中は苛烈な戦況によって彼らを深く気にしているような余裕は学園側には無かった。問題となったのは、そのあとだ。特段、無所属の傭兵であることを秘密にしていなかったこともあるがその事実が周囲へ知られたのだ。

傭兵家業と言えば“龍宮・真名”が居る。しかし、彼女は仮にも麻帆良学園女子中等学校の生徒だ。報酬さえ支払えば、という条件はあるものの現時点で学園生徒として登録されているのだから彼女は麻帆良学園所属と言っても…まあ間違いではないだろう。

それに、ここの大半の教師陣や一部を除く魔法生徒は一般の学園生徒を守るという思想を持っている。一時的に所属している彼女は学園側からグレーゾーンの存在。仕事ができ、腕が立つことから徐々に信頼を勝ち取っていったのだ。

#### 閑話休題。

そして葵一派は生徒でもなければ教師でもない。麻帆良学園都市内に喫茶店を構えているが彼らはいくまで戦闘力を有した無所属なのだ。当然、学園側の一部を除いた者は学園都市内に所属外の魔法使いが居ることに不信感を持った。

これが始まりとなり学園長は下を抑えるために四苦八苦することになる。

血生臭い大戦を教科書でしか知らない若い魔法使いが中心になっ

て“我等こそが正義である！”と言わんばかりに災いの種と疑う葵一派を排除しようと直訴してきたのだ。

学園長は若い魔法使いの考えに頭を痛める。学園長にしてみれば、そんなことを直訴されても問題が増えるだけで困るというものだ。

組織を運営する者にとって彼らの言う“排除する”などは安易で浅はかな考えとしか言いようがない。相手が敵対の姿勢を示していないのならば、こちらの利益になるように利用すれば良いのだ。それを若いのは理解していない。

今のところは学園長と高畑が中心となって古参の者が若い魔法使いを上手く抑えている。実質的に組織のトップと、ナンバー2たるその側近やその他古参を相手に反旗を翻すなど愚の骨頂だということとは若い魔法使い達もわかっているのだ。

それでも自分達の信じる“立派な魔法使い”のため何か出来ないかと若い魔法使い達は考えた。“学園都市に巢食う異物を排除できないか？”と…。

その中には不思議なことだが葵に窮地を救われたガンドルフイーニ、高音・D・グッドマン、佐倉・愛衣、3人の姿もあつた。何やら困惑していることからそれぞれに思うことがあるようだ。

とりあえずこの場では彼らは置いておくとして…。

今まで消極的行動だが葵の周囲を探り始めた者達が居た。拠点とされている喫茶店と葵を遠目から監視カメラや遠見の魔法で探りを入れているのだ。勿論これらは監視対象の葵にバレないように警戒を厳にして行なわれた。

バレていないはず。…それなのに監視映像は某犬のお父さんのC  
Mに差し替えられているし、魔法による遠見の監視はジャミングさ  
れて人知れない山奥や全く関係ないご家庭などが映るようになって  
いた。

これらの事態が頻繁に起こったことで埒が明かないと判断した若  
い魔法使い達は目視の監視にした。それでも数分するとその者達は、  
いつの間にか眠らされてどこも知れない路地裏に放置されている。

当然、真つ先に疑われた葵だが彼が動いた形跡も証拠も無い。こ  
れは何らかの妨害を受けていたとしても監視者が居たから確認は取  
れている。ただ不自然なことに証言したのは“何故か無事だった”  
高音や愛衣の2人だけだったが…。

小規模な暗闘（狩り）が一方的に行なわれ始めた時、少し前から  
麻帆良関係者の間に流れる噂があった。それは“葵の背後には何ら  
かの強力な組織がある”と実しやかに囁かれ始めたのだ。

所詮、噂と斬り捨てることもできる。だがこの噂、少し不自然な  
ことにどこの誰が言い始めたのかもわからないというものだった。  
噂については学園長や葵本人も何もコメントしないことから真偽は  
定かではない。

……。

……。

そんな小競り合い程度が裏で展開していた日々だったが、今日も  
葵達は喫茶店営業に励んでいた。今も丁度お昼のピークを乗り越え

て一息吐いているところだ。

今店内に居るのは心地よい疲労感から店内のカウンターに突っ伏していた葵と、その隣にのほほんと腰掛けているミリエールだけだ。他は遅めのお昼を頂くために店の奥に行っている。余裕がある内に、と葵が彼女達を先に奥へやったのだ。

そうなるここに残っている彼ら2人は店番だ。時間は午後1時半。また1時間もすれば女子大生や若奥様などがアフタヌーンティをしに来るだろう。

「はふう…、なんとかお昼の山場は越えたかな…」

「そうですねえ 今日繁盛しましたあ あとは学生さんの帰宅時間かしらねえ？」

「その時間だと……早ければ3時間後くらいか。仕込みとかで不足は？」

「ええとお……。いいええ、ありませんよあ。必要十分ありますわあ」

そかそか と葵は上機嫌だ。今日も喫茶店がそこそこに繁盛して嬉しいのだ。何よりも平和な時間を堪能しているのだろう。

ただ葵は裏で煩く嗅ぎ回る子犬や子猫がいることを知っている。情報部から報告が上がっているからだ。それらは情報部二課と三課が有形無形の方法で秘密裏に対処、処理している。

具体的には遠隔監視を科学、魔法の双方をジャミングして妨害し

た。監視者を直接、眠らせて拉致して軽く記憶操作を施して、そこらの路地裏へ放り出した。一応、事態を悪化させないためにも葵の命令で殺しはしていない。

これらの暗闘が今もあつたりするが双方ともに物理的な被害らしい被害は無いので実質的に御の字だつたりする。誰だつて血を見るような行為は忌避するものだ。

……。

……。

時間は流れて午後4時過ぎ、いつもなら木乃香が、部活が無い日に来る時間だ。时期的に冬休みまで2週間ほど、その日も木乃香は来店した。ただ珍しいことにもう1人同伴者が居た。明日菜だ。

「ミリーさん、こんにちはー」

「こんにちは！席、空いてますか？」

「あらあらあ 良く来てくれたわねえ いつものところ空いてるか  
ら、そこに座ってねえ」

「「はい！」」

午後の営業も順調。木乃香の席だけではなく、普段は客としてなかなか姿を見せない明日菜まで来たのだ。パアツと表情を輝かせたミリエールは微笑を当社比20%アップで出迎えたのだ。

店内に少数しか居ない男性客は彼女の微笑を見て鼻の下を伸ばし

ている。その内の何人かは彼女連れで直後に足を手酷く踏まれて苦痛に悶えることになったのは……割りとどうでもいい話しか。

指定されたカウンター席の隅に座った2人の向かいに現れたのは喫茶店のロゴ入りのエプロンをした葵だった。いつもニコニコと笑顔で迎えてくれる喫茶クレイドル店長だ。食べ物を粗末にすると拳骨が飛んでくるが…。

「今日は明日菜も一緒か。暫らく来なかったのに…」

「何よ、私は来ちゃ悪いって言うの?」

「くくくつ、拗ねるな、拗ねるな。悪いなんて思ってないよ」

「別に拗ねてるわけじゃ…」

葵は失言を取り消すように明日菜の頭を優しく撫でて謝罪を表した。それでもくくつと笑ってしまっているので明日菜はむくつと唸りジト目を葵へ向けている。それでも周りからは微笑ましいワンシーンに見えること請け合いだ。

しかし、ここで少し待ってほしい。もう1人、半ば忘れられているんじゃない?という疑問だ。その人物はジットリとその2人を少し据わった目で見ている。そんな子が居るのを忘れてはいけない。

「…むー!アスナばかりお話ししてズルイー!私も居るの忘れてない?」

「ちょ、ちょっと?このか?目が据わってない?なんかこわい、よ…?」

「いやいや、こんなに可愛い木乃香ちゃんを忘れるなんかないって。それで何にするんだ？」

若干くろーいオーラを纏い始めた木乃香に引き攣った笑みを向ける明日菜だが、葵が場を誤魔化すように注文を聞くと木乃香のくろーいオーラが勢いを止め、収束へ向かった。

それにホッと安堵する明日菜。これ以上木乃香が暗黒方面に足を踏み入れることが無いという事実心底ホッとしたのだ。心の中で「葵さん、ナイスッ！」なんて思っただけなら思っただけ。

「むむむ？なんや誤魔化されてる気いするけど…、まあええわー。私はいつものー」

「あつ、じゃあ、私もこのかと同じので」

「はいよ。ケーキセットが2つ、紅茶はダーズリンだな。少し待ってな」

ホッとする明日菜と微黒化しかけた木乃香を置いて葵は注文の品を作りカウンター奥へと引ッ込んでいった。明日菜は少しビクビクしていたが葵も漂い始めたくろーいオーラを回避するために退避したのだ。

だが葵は木乃香がなぜ、くろーいオーラを垂れ流したのかは理解していない。精々、雰囲気が悪くなった？とりあえず時間を置くか、くらいの認識だったが危機を訴える自分の勘に従い行動したのだ。

カウンターを立ち去るその背中に残された明日菜が恨みがましい

視線を送っていたが…葵は気付かなかったことにしたとかしなかったとか。

……。

「はい、お待たせ。ちょこっとサービスしといたぞ」

「わー クリームが多いー」

「嬉しくないわけじゃないけど…。葵さん、これっていいの？」

数分してカウンターの奥にある調理場から戻った葵は注文の品であるケーキセットを2人の前に置いた。2人は予想よりもボリュームがアップしていた品に片方は戸惑い、もう片方は喜びを表した。

葵がしたサービスは微黒化木乃香のご機嫌取りと彼女を押し付けた明日菜への詫びを含めたのだ。あともう一つ言うなら、よく来てくれた、という歓迎の意味も併せてクリームやケーキの中にある一部のフルーツを増量したのだ。

「ここは俺の店だ。文句は言わせない。文句があるヤツには帰れと言ってやる。寧ろ、叩き出す。……………（ボソツ）家族が」

クリーム増量サービスを喜ぶ木乃香と違い、明日菜は意外にもマジメでこんなあからさまな鼻唄をしていいのか？と戸惑う。だが葵は動じない。逆に文句があるなら出て行けと言う始末だった。

全体の台詞は職人質の頑固な一面を見せる男らしいものだった。ただ、2人に聞こえないよう最後にボソツと呟いた言葉が何とも…切なさや情けなさが漂う一幕だった。

「うわぁ……」「うわー」

そんな最後の言葉が聞こえなかった明日菜と木乃香の対照的な反応。方や呆れてジト目で、方や尊敬するように目をキラキラさせているのだ。どちらがどちらかは想像にお任せするとしよう。

……。

……。

今現在の時刻は午後7時。明日菜と木乃香は来店から1時間ほどで店を出た。いつもなら6時過ぎまで居る木乃香も夕飯の買い物をしていくらしい。明日菜も買い物に付き添うため一緒に出て行ったのだ。

因みに喫茶店クレイドルの閉店時間は他店に比べて早いかもしれないが午後7時半だ。都市の大半が学生であり寮の門限もあることから閉店時間も早いのだ。例外は教師陣と自宅登校をしている生徒、そして大学生くらいだ。

……。

午後7時過ぎ、喫茶クレイドルの前に数人の人影がある。ガンドルフィーニ、高音・D・グッドマン、佐倉・愛衣の3人だ。彼らは喫茶店クレイドルを前にして何故かこのまま入るか否かでやや逡巡しているようだった。

今、逡巡しているのは相手を警戒して踏み込むことを躊躇してしまっていた。あまりにも葵一派が正体不明なため行動は慎重にもな

ろつというものだ。

やがてガンドルフィーニは意を決して目の前の喫茶クレイドルへ歩き出す。この訪問は学園長にも報告していない、彼の独断だ。こんなところで下手に刺激して葵の怒りを買ってしまったら良い訳もできない。

それでも喫茶店の主に用があるので会わなければならない。

……。

……。

先頭に立つガンドルフィーニは彼らほどの実力者が世間に知られていないことを不思議に思った。あれほどの実力を持つ者なら立派マキな魔法使いとなっても何ら不思議ではない。

それなのに聞けば麻穂良では喫茶店を営み、裏では傭兵をしているというではないか。今拠点にしている拠点（喫茶店）に十年近く、それも自分達の目と鼻の先で潜伏して在住していた、とも言つ。

麻帆良の影響下に正体不明の魔法使いが潜伏していた。もう一つ言うなら“闇の福音”とも交流があるということか……。それらの事実は麻帆良勢の大半に色々と衝撃を与えた。

なぜ葵は名乗り出なかったのか……。

その事情は理由を知っているであろう学園長が口を閉ざしたことでわからない。何も話さないことから葵との間に何らかの協定を結んだのか、とガンドルフィーニは最初、疑ったものだ。

実際には葵が秘密裏に孫の護衛をしていた、と正直に打ち明けられれば良かった。だが、護衛していた本人から口止めされたことでハッキリと言えないことになり、事態はややこしくなった。

学園長の望まぬ秘匿行為がガンドルフィーニらの更なる不信をかつたのだ。学園長すら躊躇する理由がある、と考えざるを得なかったのだ。これも葵一派の仕業？と若い魔法使い達が邪推するのも当然だろう。

……いや、半分くらいは当たっているかもしれない。葵は面倒事を避けるために事実を秘匿したのだから。ただ、若いのが邪推して逆に面倒事が増えたのは葵の自業自得と言えなくもないのだ。

……。

ガンドルフィーニの右後ろを着いて行く彼女、高音・D・グッドマンは正義感が強い。それでも“正義の名の下に”というほど狂信的な考えを持つほど歪んでもいない。だが悪は打ち倒すものという考えは彼女自身で信条ともしている。

つまり高音・D・グッドマンは若い者には珍しくも正しく立派な魔法使いデル・マキを目標としている稀有な魔法使いである。名誉や栄光などは二の次、正義と平和のために動ける、今の時代で稀有な人間だ。

そんな彼女がここに居る理由……。一先ず、葵の存在が疑わしいなどの理由は横にでも置いておこう。

そんな正義感の強い彼女が、先の防衛戦で葵達に窮地を救われて、まだお礼も言っていないという事実<sup>マキス</sup>に納得すると思うだろうか？

答えはノーだ。生来の生真面目さが邪魔をして納得できないのだ。

全ての話しはキチンと礼を述べてからだと高音は思っている。それから葵の疑わしい事情を聞きだしてしまおうと考えているのだ。

その考えは若い者にありがちな真つ向勝負を彼女も好んでいるという表れだ。なまじ影使いとしての地力もあるから自分の魔法に自信もあるのだ。正攻法は力持つ者が取れば圧倒的な方法となる。

そう、力持つ者が、だ。人はそれを“英雄”と呼ぶ…。

正面から堂々と。聞こえはいいだろう。しかし、そんな青臭い行動など戦場では何の役にも立たない。最大限に役立つように使うとしたら派手に暴れての陽動か、友軍戦力の戦意向上のパフォーマンスが精々だ。

誤解が無いように言うておくが、青臭い行動を始め、先にも挙げたようなそれらが必要な要素であることは否定しない。

……。

佐倉・愛衣はパートナーである高音・D・グッドマンの斜め後ろを着いて行く。愛衣は葵に対して偏見を持っていない。正体を隠していた事実には眉を顰める思いは確かにある。それでも何か理由があると考えてしまうのだ。

あの戦いで自身は半気絶していて記憶がハッキリしていなかった。だけど、それでも覚えていることはある。

肉体的にも魔力的にも疲労困憊の状態だった時、一体の鬼の攻撃

をさばききれずに一当てられて気絶してしまった。一時はパートナ  
ーの高音に助けられて戦線を後退。そこで一安心かと思っただが敢え  
無く敵鬼に発見された。

もうダメかと思った。一際大きな鬼がその身体に合った大きな金  
棒を振り上げた時は絶望感が押し寄せてきた。愛衣は朦朧とする意  
識の中で最後に誰とも知れずに祈った。自分はいい、でもお姉様だ  
けは、と…。

振り上げられた金棒が襲い来るまで数秒だった。大鬼の叫び声  
が。それでも衝撃はいつまで経っても来ない。ガンドルフィーニ  
先生の困惑した声が聞こえた気がした。抱き締めてくるお姉様の身  
体の硬直と震えを感じた。

薄らと瞼を開いた。ぶれる視界の先には白と青の女性が背中を向  
けて愛衣達を守るように立っていた。そこに現れたのが葵達だった。  
葵に治癒魔法を施されたこと、そのことを愛衣は良く覚えている。

助かった、と思った。治療された時は全身の力が抜けた。それと、  
温かかった…。葵の魔力に身が包まれた時にそう感じた。同時に葵  
を温かい人だとも薄れ行く意識の中で感じた。安心したら意識を手  
放していた。

次に目覚めたのは学園都市の医療室にあるベッドの上だった。周  
りを見ると心配で付き添っていた高音が居た。ベッド横にある小さ  
な椅子に腰掛けていた高音は愛衣に戦闘の経緯を簡単に説明してく  
れた。

愛衣が目を覚ました時には戦いは終わっていた。葵達が切欠とな  
り戦線を再構築、逆襲に打って出たらしい。戦いを勝利で終わらせ

たあと、葵達は一言も話さないまま立ち去ったようだ。

戦線に参加した者達は学園長に彼らは何者か、と問うた。簡単なプロフィールと顔写真を提示して、これが全てと学園長は答えた。ただし信用はできる、とのお墨付き。

お墨付きは出ているが気になることがあった。プロフィールの中に“依頼により無断で麻帆良に潜伏していた”との注意書きがあったのだ。これがなければ多少疑問を残すが信用できていたかもしれない。

彼らは端的に言っ飛ばしまえば傭兵だ。慢性的な人手不足を理解する古株の魔法使いは学園長の考えを理解し何も言わない。逆に若い魔法使いは“自分達の手で麻帆良を守る！”と考えており不満を露わにしている。

それでも葵達を悪人と断じる決定的な要素にはなりえない。若い者の中で佐倉・愛衣と高音・D・グッドマンや他数名は穏健なものだ。実際に愛衣や高音達は危ないところを直接助けられているのだから悪い印象は希薄だ。

愛衣は考えていることがある。まずはあの時、助けもらったことのお礼。それとちゃんと自己紹介すること。

まずは知ることからはじめよう、と……。

……。

ガンドルフィーニを先頭に歩く3人。彼は喫茶店の玄関を開き、中に入る。

「邪魔する……」

「邪魔するなら帰れ」

無駄に力強く即答した店長の葵。思考が真っ白になり一瞬だけ身体が硬直したガンドルフィーニ。思わず彼は……。

「あ、はい。すみません……」

来た道を引き返した……。

「えっ？先生っ」「なっ？どうされたのですかっ」

後ろに居た高音と愛衣は何が起きたのかわからずに慌てた。ガンドルフィーニも外に出た途端に自分が何をしているのかわかり再度硬直した。今度は……羞恥で。色黒の肌が赤みかかって見えることから相等恥ずかしかつたのだろう。

「って！！ちがうっ！！」

反転、急いで玄関を再度開いて一言……。ツッコムのはいいが人様の店で騒ぐのは感心しない。下手をすると営業妨害で訴えられてしまう。

「……………はあ」

なんか、面倒なのが、出現したな……、と葵は直後に思った。

S i d e o u t ? ? ?

少し前…。

???.

S i d e ? ? ?

麻帆良上空、五千mにアンブレカム。低空を偵察機、そして建物の屋上に陣取る葵ファミリが熱光学迷彩で姿を隠し拠点周辺を密かに監視していた。勿論、一般人に扮した者も周囲に十数名居る。

「…CP、こちらデルタ2。P1（拠点）に準敵対勢力所属の3名の接近を確認。…いや待て、一部訂正する。内2名は準保護対象者だ」

ガンドルフィーニと高音、愛衣が拠点に接近するのを察知。拠点屋上には熱光学迷彩で姿を隠し、3人を監視する女が1人居る。

彼女の言う準敵対勢力とは消極的敵対している組織を指す。警戒が一つ繰り上がると敵対勢力となり積極的敵対している組織と認定される。準保護対象者というのも同じようなものだ。ただし葵個人の決定がいる。

現在の麻帆良学園は反感から一部の者が暴走している状態にある

ことから準敵対勢力に認定されているわけだ。これが決定的に敵対した場合、対個人戦闘から対組織戦闘に状況はシフトされる。

互いに譲れないモノに決着をつけたあとに、どこかで折り合いを付けて戦争を回避、ないし終結できれば儲け物だ。

『CP、了解。…こちらでも確認した。データを照合…確認が取れた。ガングロ（ガンドルフィーニ）、お嬢ちゃん（高音）、チワワ（愛衣）には手を出すな』

「…了解。それにしても最近はずミが多いな。掃いても掃いても出てきて仕方ない」

CP担当の情報部三課第4チームリーダー、ドラセナは通信先のアングレカムから命令を下した。彼女達リーダー格を始めとしてここ二、三週間の間、二課と三課で協力して麻帆良勢監視者の対応指揮に当たっているのだ。

デルタ2のコードを名乗る彼女は同じく第4チーム所属で名前をディプラデニア・D・スタニックと言う。腰より長い髪は黒より尚暗く瞳も同様に見たもの全てを飲み込みそうな色をしている。闇を固有能力とする元悪魔の精魔奇兵である。

数日前にP9のエリアを担当していたランキュラス・D・スタニックと同じ第4チームの同僚でもある。そして今ここCP1を担当するディプラデニアは第4チームでは間違いなく戦闘者として一番の実力者だ。

『ハハッ、そうだな。確かにそうだ。一課の話では麻帆良の若いのが中心になってお祭りしているらしい。笑えるだろ？』

「それは、また…。クク、どこの世間知らずの坊や達だ？誰を相手にしているのかを知らないに見える」

ドラセナはクツクツと笑いを噛み殺して話す。その声は心底、可笑いと言わんばかりだ。そして、それは聞いていたディプラデニアも同様なようでクツクツと笑っている。

今はご主人様である葵に殺傷行為を極力慎むように言われているが彼女達から見れば組織単位で行動していないネズミ相手の反抗活動など“え？敵対行動（笑）？”としか考えられないからだ。

…しかし、だ。だからと言って油断だけは決してしていない。彼女達には超一味という苦い教訓もあるのだ。事実この2人、言葉では相手を嘲笑ついても瞳の奥には、どこまでも伶俐な光が宿っている。

『実際、一課と二課が上手く情報操作していて知らないからな。そのせいか不逞な監視者が後を絶たない。…なあ、わかるか？クソ虫共は閣下の温情で私達が優しくしてやっているのに、それを知らず、調子に乗っているのだよ』

「…それは初耳だな。何だ、それは…？自分達こそが絶対だと信じているのか？ふんっ、不愉快だな…。一度、強めに絞めてやらないとわからないと見える」

ディプラデニアは苦虫を噛み潰したような表情をするドラセナを画面越しに見ると自分も同じような表情をしていることに気付いた。聞かされた面白くない話しに一つ鼻を鳴らして不愉快であることを示した。

残念なことに葵が面倒事を避ける意味で家族に殺傷を控えるよう指示したことが一部の麻帆良勢を調子付かせている一因になっていることは間違いなかった。この行動が浅慮な相手からは殺す覚悟もない腰抜けに見えるのだ。

そして一部の麻帆良勢が調子に乗る理由としては麻帆良学園都市の権力を前にして手が出せず自分達を怪我させること、ましてや殺すことは出来ないと変な確信を持ってしまっていたのだ。行動がエスカレートするのは時間の問題だろう。

『はんっ、ああ、その通りだ。…だが、まだだ。まだ、その時ではない。先に手を出すのは私達ではないからだ。いずれクソ虫共は痺れを切らしてバカをやらかすだろう。私達が動くのはその時だ』

「後手?…あー、大義名分というやつか?人間は何かと対面を気にするから面倒だな…」

あまり派手なことや血みどろの戦闘を好まない葵だが、そうなっ  
てしまえば好みなどと言ってはいられない。待っているのは一部と  
はいえ全面戦争だ。それもあるのは一方的な殺戮、虐殺…。麻帆良  
勢の絶対的な敗北と確実な死が待っている。

敵の全てがナギヤジャックなどの世界のバグクラスでない限り決  
して覆らない事実。負けることが無い戦争。始める前から勝者の決  
まっている戦争ほどつまらないものはない。

『ふふふっ。なに、オイタをした子供を叱るのは大人の役割で義務  
だろう? シツカリと教育してやるうではないか。代価は血で  
支払うことになるが、な?クククッ』

「おいおい、怖いよ…？デルタ1…。はあ、でもな…あたしはもつと、こう…スパツと始末したいなあ、と思うわけよ。ご主人様は何でこんな面倒な…」

少々愚痴を零したディプラデニアが最後に葵の考えに疑問を投げかけようとした矢先のことだった。背筋が粟立ち本能が危険を知らせてくる。通信画面越しなのにドラセナから途方もない強い意思を叩き付けられたからだ。

意思の名は殺意…。そして出来の悪い子に優しく教えてあげようという殺意とは相容れない慈愛…。

『…：…：ほう？聞き間違いか？私の耳には貴様が閣下の方針に不満があるかのように聞こえたな』

「っ…？」

あまりに唐突なことでディプラデニアは一瞬、声も出なかった。いや、彼女自身、自分がとんでもなく不敬なことを考えていたのは確かだと言ってから気付いた。自分でも家族の誰かが同じようなことを言ったら問い詰めて尋問紛いのことをするだろう。

『ええ？黙るなよ？なあ、答えるよ…：…：ディプラデニア・D・スタニツク』

「ッ！…お、おいおいっ！？違う！違うぞ！…！そんなわけあるか！目障りなのはクソ虫相手だ！そうマジになるなよ…：」

どこまでも優しく慈愛に満ちた表情をしているドラセナだが優し

いのは表情だけで瞳に宿る冷たい光と身体に纏う雰囲気全てをまるで違うものに変えていた。とてもじゃないが良い子には見せられない状況だ…。

とはいえディプラデニアも立ち直りは早い。彼女も第4チーム一の実力者としての矜持がある。あるが…このことを葵に知られたら嫌われると考えると身体が震えてしまい必死になって他意が無いことを説明、説得した。

一応、八才教官が訓練中に叩き付けてくる殺意に比べればまだドラセナのほうが優しいと言える。まあ明確な殺意や殺気に優しいも何もあるのかは疑問だが…。結局は“殺す”という意味のあり方、意志の強固さがモノをいうのだろう。

『……そうか。目障りなネズミが多いせいか気が立っていたようだ。こう多いと手が回り辛い…。やはり人員不足が痛いのか…？』

「はあ…。まあ忙しくてイライラする気持ちはあたしもわからないでもないからな。…気にするな」

『ああ、ありがとう。人員増強の陳情は閣下に承認されたと聞く。今、「工房」では新兵共がりハビリを終えて実時間の来週には訓練生として基礎訓練に入るらしい』

これはどこでも同様だが人員不足は地味に痛い問題だった。額に手を当てタメ息一つしたドラセナは少しだけお疲れのようだ。いや、問い詰められていたディプラデニアが逆に労わるほどだから少しではないかもしれない…。

人手不足の問題は解決に向け既に動いている。司令部より陳情さ

れてから時間も経った今、「工房」内にある精魔奇兵の調整室では着実に人員確保に始まり素体となる身体の構築とその後の調整などが行なわれているのだ。

新規として先に精魔奇兵に生まれ変わった者達は兵舎（という名の屋敷）にて新しい身体に馴染むまでリハビリ生活をしている。魔法球内での生活とはいっても施設も充実しているので下手すると外の世界よりも過ごし易いかもしれない。

そして、リハビリ生活も時期に終わる。アイリス達が生まれ変わった時とは違い、今では蓄積された情報により確立された技術と最適化された手順で促成教育が可能となっているのだ。

これには時空間技術などを得意とする葵謹製の特製魔法球が時間を加速、拡大しているからこそ時間的拘束を半ば無視することが出来るのも大きい。その弊害で葵自身が多少のんびり屋の考えを持ち得たのだが…。

葵自身の言によれば「時間なら腐るほどある。ならばいつやつても同じだろう？」というものだ。着実に長命種の思考を手につつつあるようだ。これなら家族の手助けもあるので悠久の時の中で狂い死ぬこともない。

話しは多少逸れたが何にせよ、だ。人員不足が解消されるまでが勝負であり、もう時期その問題も解決されることになるのは彼女達にしてみれば喜ばしいニュースだった。

「そうか。なら ……ん？待て、仕事だ」

『 ……CP、了解。 ……確認が取れた。相手は先日、ゴミ捨て場

に放り込んだエネミー13だ。今回も条件は非殺傷だが、それ以外は独自の判断で事に当たられたし』

久しぶりに雑談に興じられると思えば、これだ。まったく…、と零す2人だが纏う空気は戦闘のプロのそれだ。思考を切り替える速さは流石だった。

新たに現れた不審者は3日ほど前に気絶させて軽く記憶抽出と操作を施した人物だ。記憶から例の馬鹿共の1人とわかった。手間を取らせた割に大した情報を持っていなかったので腹癒せにゴミ捨て場（沢山の生ゴミ）にブチ込んだのだ。

「デルタ2、了解。少し仕置きしてくる」

『ああ。貴女に天下無双の武運を。通信終わる…』

「おう、ありがと。さて、行くか」

通信を終えたディプラデニアは静かにエネミー13へ接近する。相手が前回も大した情報は持っていなかったことから今回も期待は出来ない。それでも手順通りに情報を抽出しようとするのは下手なこと重要情報を見逃すのを防ぐためだ。

まあ役に立たなければ今度は良く肥えた肥溜め（糞溜め）に捨てるだけだが…。

Side out ????



第六十話「表と裏と守る者と」(後書き)

やばい…。またキャラが増えた…。一発キャラですがね！

これからもマジメにキャラシートの更新を考えなければならぬかもしれない。

それにしても一発キャラのやり取りを書くのが楽しくて堪りませんな。

まだ続くかは別にしても似たようなことは別で書き溜めてもいいかもしれないです。

ではでは！B i s b a l d！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第六十一話「来客と交渉と雑談と」(前書き)

アニメISのラウラさんの可愛さに作者が悶え死にそうですww  
クラリツサさんも想像以上にいい味出したのは嬉しい誤算！  
本格的に葵をブチ込んでみようか、と検討中なり…。  
半分冗談だけどね！あはははーっ！

では今回ですがまるまる前回の続きだね。  
では続きをどうぞ！

## 第六十一話「来客と交渉と雑談と」

喫茶店クレイドル…。

Side 葵

本日の営業を終えてもう閉店準備中だったけど閉店間際に何と云うか…。うん、変なのが1人と大きい嬢ちゃんと小さい嬢ちゃんの2人が入ってきやがった。まあ、こいつらに構わず閉店作業を皆は続けているけどさ。

【…建物内に居る総員へ。警戒よろしく…】

【【【【【…了解…】】】】】

とりあえず何が起きてもいいように建物内の警戒態勢を一つ上げておくのは常識でしょう。オイタした場合は閉店作業中の皆と階上に居る皆、それに屋外で警戒している皆で歓迎させていただきますと

今日、COS・MOSは稼働データ収集のために、少し遠くまで偵察活動という名の散策に出している。外を歩かせるだけでも有用なデータを得られるもんだよ。そろそろ帰ってくる時間だから手早く終わらせないと…。

そつえば、この3人は一体、何をしに来たんだ？正義を盲信する者には嫌われていると自覚している俺だが、こいつらが直接来る

とは予想外だった。嬢ちゃん達だけだったらわかる。何度もお客様として来ていたからな。

それが今日はガンドルフィーニ君も連れて、いや、連れられて、か？まあどつちでも構わないが…。はっ！？まさか“少数精鋭の一点突破（笑）”などという、笑わせてくれる事態なのか！？こ・れ・は！

いや、それは無いかー…。

まあそれはいいとしても、だよ？教師のガンドルフィーニ君はともかく嬢ちゃん2人は中、高の学生だろ？もう7時半なんだけど…寮の門限とかいいのかね。いや、ガンドルフィーニ君が許可を出しているから問題ない、のか？

男性教師が夜にまだ幼い中学生と成熟しきっていない高校生を連れ回すのはお兄さん感心しないなあ…。

「それで何のようだ？若ぞ…ガンドルフィーニ君。綺麗どころ侍らせて自慢か？自慢なのか？」

「???? ツ！？違う！！私には愛する妻も子も居る！彼女達は…うんぬんかんぬん！！」

おい？必死に誤解を解こうとしているところのロリコンフィーニ、もとい、ガンドルフィーニ君や？後ろの2人は照れているようだ…本当に何も無いのだろうな？まさか綺麗だとストレートに褒めたことに照れているわけではあるまいし…。

「…と、いうわけで彼女達は自分達の意味で同行したのであって他

意はないのだ！わかったね！？」

あ、あれ？いつの間にか説明が終わっている、だと？全く聞いていなかった…。最後の台詞だけを聞くと強要されたのではなく志願したわけだな？……そこまで強い敵意を向けられていたとは気付かなかった。

俺のことを何も知らずに来るとは…。生身で溶岩に浸かるようなものだと思っているのかね、この子達は？若い身空で、ある意味、特攻任務のようなものなのによくやるよ。本当に、さ…。

はあ、可愛い子達だから怪我させたら大変だと思っただけで準保護対象者にするようには家族へは通達したのに…。男の純情をプチッと踏み潰された気分だ。それも2人してグリグリと傷を広げるように磨り潰す感じに…。

「こほんっ、では本題だがまずは先日の救援に感謝する。君達が来なければ…」

「ああ、いい、いい。仕事だから助けたまでだ。組織としての感謝などいらんよ」

「……………そうか」

報酬や言葉だけの感謝は学園長が既にしたからな。今更、言葉だけで感謝されても困るだけだ…。どうせ感謝を示すならモノを出せというんだ、モノを。金銭とかはいらぬから出来れば大量の資源などがいいな。

あ、土地の権利書とかでもいいよ。全てを食い潰す勢いで採掘さ

せていただきますね、はい。新世界の奴隷とかの人材？はいらない。うん、人はいらぬよ。今も新しく家族になる人が生まれ変わっているのだから間に合っています。

はあ……。それにしても美少女と言ってもいい二人から敵意を向けられることをした覚えはないはずだけどなあ。志願してまで俺を殺したいのか？そんなに正義が大事か？崇高なのか？偉大なのか？他所でやれっつんだ……。

「では私個人で感謝するのは構いませんね？」

「は？嬢ちゃん、何を言い出す……」

あれ？敵意じゃないの？……すっかり正義信者の一人と思ったのに何気に広い視野を持っていたようだ。それに個人的な感謝と言いますが何をしてくれ……いや、学生にモノを求めるのは無理だな。

「嬢ちゃんではありません。高音・D・グッドマンです。それと、ありがとうございます。貴方のお蔭で助かりましたわ」

「……だから、そういうのはだな……」

むう……。ここは一度ハッキリと言ってやるべきだろうか？こいつらと馴れ合うのは感情的に抵抗がある。それも正義感溢れる男と生真面目お嬢ちゃんだ。後者はまだいいよ？俺は女の子には優しい……というか甘い？からな。

それもあるからエヴァちゃんじゃないけど、それなりに女子供の命は尊重しようとは最低限考えてもいるつもりだ。でも、仕事と割り切って助けた行為に感謝されても……ねえ？困るでしょ？

「あーあのっ！」

「……今度は小さい嬢ちゃんか。何だあ？感謝だったらいらんぞー  
……」

「えっ！それはっ、あれ？…ダメ、なんですか？」

突然、割り込んだ割にネタを用意してなかったのか……。わたおたつ、わたおたつ、と落ち着きがないし、クリツとした目が緊張で潤んで、きよろきよろしている。……うん、何かの小動物を髣髴とさせる。

……あー、チワワだ、チワワ。小さい嬢ちゃんはチワワの子犬を連想させるんだよ。

「……嬢ちゃん、この可愛いチワワは何だ？」

「嬢ちゃんではありません。高音・D・グッドマンです。この可愛いチワワ…もといこの子は私の大切なパートナーの佐倉・愛衣です」

うん、知っている。名前はあの防衛線の時に聞いた覚えがある。気になって調べてみたら小動物の印象からは想像も出来ないほどの秀才だった。お兄さんは努力する子は好きですよ。女の子限定だけどな！

麻帆良学園のデータベースから独自に情報を引き出していた時にデータ上の裏側に秘密のバックドアなんかも仕掛けたし。これで誰にも気付かれることなくいつでも出入り自由だ。……全部アンがやってくれたんだけどね。

暫くの間、傭兵活動することを決めてから学園側の重要人物や構成員、ついでに對外防衛マニュアルなどの情報は出来る限り収集したさ。

そういえば年間を通した収支表なんかもあつたな。表とグラフを見ると学園長はエヴァちゃんの管理費で苦労しているようだ。

エヴァちゃんは元お姫様、いや今は真祖の姫君か。とにかくそういう気高い人だから美食家で舌が肥えているから食費がやたら掛かるんだな。それに隠れゲーマーでもあるから娯楽用のゲーム機やつトで散財していたようだ。

この収支表を見た時、涙が出たね。学園長に同情する気は全くと言っていいほど無いけど涙が出たね。内心では学園長乙wwって笑っていたけどww

まあそんな学園長が居る組織でも手は抜かない。麻帆良を仮想敵組織とした対応マニュアルはウチの組織ファミリでも十分に検討、構築したなあ。組織上層部と現場隊長陣で議論が白熱して一徹、二徹は当たり前だった。今ではいい思い出(?)だよ。

今、そんな話しはどうでもいいか…。

「…ふむ、留学中にオールAを取った、あの秀才か」

「あうう…」

「あら?ご存知だったのですか?」

皆さん！チワワが、違った、愛衣ちゃんが照れています！本当のことを言っただけなのに彼女、はにかんで照れてますよ！両手の指をチョンチョンしている姿が愛らしいです！可愛い子はこれだから困るな！可愛く見えて仕方が無い！

まつ！俺の家族の可愛らしさ！可憐さ！美しさ！には、勝てんがな！……少し愛衣ちゃんにクラツとしたのは気のせいだと思いたい。俺はロリコンじゃない！何度でも言うがお姉さん好きなんだ！

「……学園長からの資料で、な。一緒に仕事をすることは、まず無いが麻帆良に居る魔法使いの实力は把握している。同士討ちなど笑えないからな」

「待ってくれ。私達は君達のことを殆ど知らされていないのだが？」

「ガンドルフィーニ君……。そういうことは学園長に聞きなさい。タカミチ経由でこちらの資料は回しておいたから」

「む……」

コイツ、資料に関しての返答はノーコメントか……？ふむ、こいつの態度を見るに俺から提供した資料は確認済みのようだ。しかし、それだけでは信用できないから直接、確認に来た……といったところか。

まつ！ダミー情報が多数乱れ飛んだ偽造書類だけだな！！バカ正直に俺の個人戦力を提示するわけじゃないか！！ただでさえ人員増強して戦力強化中なんだからな！あはははっ

そうそう新しい家族である精魔奇兵の募集人数なんだけど当初予定していた1170人以上になった。うん、過去形でゴメン、本当にゴメンナサイ。まさかあんなに応えてくれる精霊達や悪魔達が居るとは思いもしなかったんだ。

もうね？俺が気付いたらね？一万の…ウソです。一万八千と飛んで十八人になっていました。元の精魔奇兵234人の77倍になったね！こんなに人員増強してどうするんだよ…。家族が増えるのは歓迎だけだね！…マジどうしよう？

まだ精魔奇兵化したのは五千弱だけど皆の住居はどうするか？一万強は「工房」で衣食住を賄えるし十分なものを用意してある。でも残り八千人余りはどうすれば…？地球各地にセーフハウスのな秘密基地でも造る、とか…。

……あー？んー？えー？

……いや、待てよ？そうだよ！いいところがあった！工事業部品や食糧生産のプラントがある場所が！月だよ！月！必要な生産ラインが確立された月基地なら多少多くても収容出来るじゃないか！

もう当初の予定通り1170人を残して後の皆は一定の訓練と実戦を潜らせてから月へ転移してもらおう。今朝方、月に居る自動人形が転移門を設置したと通信があったらしいし、とりあえずの移動に問題は無い。

……それでもなー、これで解決だと思っただろう？気になることがあるんだよ…。自動人形が通信の最後に俺への伝言を残したらしくて、その内容が「楽しみにしててください…」だったらしい。何

を楽しみにしろと言うのか？ サツパリわからない。

艦隊作製と定期的な物資生産を最後に俺は何も頼んでないはずだしなあ……。一応、自動人形には施設の管理を頼んだけど、それだけだよな……。あとは“独自の判断で好きにしてい”と指示とも言えない指示しただけだしなあ。

……まあいいか。補充人員であり新しい家族の衣食住の問題も片付いたし、少し気楽に考えると月に居る自動人形達もそれとなく楽しんでるようだしな。

閑話休題……。

それよりも目の前に居る3人のことだ。並列思考で他の問題を考えることが出来ても目の前のこいつらが何をしたいのかがわからないと対処のしようがない。

話しの切欠に助けられた感謝を持ってきたのか純粹な気持ちなのか……。まあ嬢ちゃん達2人は後者だろう。この子達は根っからの生真面目さんのようだからな。ガンドルフィー二君は……わからんな。

まあ男の気持ちなどわかりたくもないけどね！

「……………タカミチ先生とは知り合いなのか？」

「私も気になりますね。どのようなご関係なのですか？」

「あつ、お姉様もですか？私も知りたいですっ」

こいつら…。詮索屋は早死にする、と普段なら忠告ところだけども。むう？まあ、ここで変に目くじらを立てることも無いか。若いのがピーチクパーチク囁ったところで痛くも痒くも無い…。

当然、内容は濁して話すが、ここで少しタカミチとの関係を語ってみせればガンドルフィーニ君はともかく嬢ちゃん2人は俺への警戒心を緩めるかもしれない。幸い、3人は少しでも情報を得ようと聞く態勢に入っている。

はあ、閉店作業中だから手早く終わらせようと思っていたのに存外に梃子摺るものだ。早く帰さないと晩御飯の時間に触るからな。サッサと話すこと話して帰ってもらおうとしよう。

「……ふむ。タカミチが少年だったところからの…まあ、古い馴染みだな」

「古い馴染み…旧友というものか。なるほど…」

「ほへえ、あの高畑先生とお友達だったんですかあ…」

「んー、友と言うより弄り易いヤツ？アレで少年の頃はワタワタしていて可愛げがあつたんだがなあ。くくくっ、今ではあの老け具合だ。可愛げが無いったらない」

新世界のヘラス帝国で事務仕事や「完全なる世界」の炙り出しをしていた頃の話だ。ガトウの連絡員としてタカミチが帝国へ来た時に毎度のようにからかってやったんだが…うん。実にかからかい甲斐のある少年だった。

まあ先程言ったように今では年の割に老け顔で精神のほうも妙に達観した可愛げの全く無いツマラナイ人間になってしまったがな。本当に残念だよ。

「……何だか、その物言いだと、まるで貴方のほうが年上のように感じますわね」

「何を言っているんですか？お姉様。九重さんはこんなにもお若いのに、そんなこと……」

「はあ……嬢ちゃんの目は節穴か？まるで何も実際に俺のほうが年上だ。問題ないよ」

「あるわけない……って、えっ？……ええええーっ！？本当ですか！？本当なんですか！？本当なんですわね！？うわっ！うわっ！？」

「愛衣っ！？お、落ち着きなさいっ！この人の理不尽なまでの年齢詐称には驚きですが！是非とも若さの秘訣などもお聞きたいものですが！落ち着きなさい！愛衣っ！」

小さい嬢ちゃんも大きい嬢ちゃんも、いきなり叫ぶのは無いと思うなあ。

はあ、まったく……。この嬢ちゃん達は俺の何を見て何を理解して何を言っているんだ？いくら俺の見た目が変わらないとしても身に纏う雰囲気で最年長であることがわかんと思うんだけどな。

……もしかして俺にはそんな雰囲気が無い、とか？今も俺は若造ですか、あー、そうですね。いや、でも、もしそうなら俺はまだ若

いということになるのだろうか…。年寄り扱いされるのはムカつくが若造扱いされるよりはまだマシ…か？

うむ。なんとなくプチパニックに陥っている嬢ちゃん達は放って置いてだな。寧ろこのまま話しを濁してお帰り願いたい。そろそろCOS・MOSも帰ってくるしね。

…うん、今はガンドルフィー二君に一つ確認したいな。

「ガンドルフィー二君、一つ聞きたいのだが、君の班はいつもこうなのか？」

「い、いや？そんなことはない…？今日はたまたまだろう。ああ、たまたまだ…」

信用できねえ…、と思ったのは俺だけではないはず。やはり女性というものは時代を問わずこの世界でも若さをどうやって維持するかなどの美容に関係しそうなことが好きなようだ。今もプチパニックが治まっていないようだし…。

美容関係はモデル仕事ならともかく俺のように普通の…なんだよ？俺は“普通の男”だよ！文句あんのか！？コラッ！…んっ！ともかく普通の男には関係無いことだから興味も薄いんだよ。だから理解出来ない。わからない。

女性の執念は怖いなあ…。

「ゴホンッ。あー、ここからが本題なのだが君…貴方？は今後も麻帆良に所属することは無いのか？」

「無い。ハッキリ言うなら俺には学園に所属するメリットが何も無い」

「メリットならあるさ。麻帆良の庇護を受けられる。その他にも便宜をはかることが…」

本題も何も俺はお前達に早く帰ってほしいんだよ。それに“所属のメリット”だあ？消極的協力態勢の契約や同盟なら未だしも…。コイツは俺に、俺達（家族）に対して“麻帆良へ降れ”と勧めてきた。

フザケルナ、という思いが無いかと言えば嘘になる。学園に明らかにしている戦力は俺を含めて4人。確かに総戦力は秘匿しているさ。それでも“たかが4人”と侮られたと思うと腹が立つ。

家族の皆が勇敢だ、それを誰もが認めなくても俺だけは認める。でも…それに引き換え俺は臆病者だ。だけど負けず嫌いなんだ。あとはまあ家族の安全と生きることを優先してきたから俺自身が我が儘でもある。それは自分自身で自覚している。

そんな俺に目の前の男は麻帆良傘下に降れ、とほざく。はあ、本当に腹が立つついたらない。いや、わかってる。ガンドルフイー二君は善意で言ってくれているんだろってことは…。

でも 素直に言いなりになると思うな。家族は当たり前としても友人や気に掛けている人にはある程度の優しさは見せよう。だがそれ以外の有象無象（例えば嬢ちゃん達だとしても）に…指図されるのは我慢ならない。

このような…ある意味、俺達にケンカを売るような物言い。善意

からだとしても無謀にも程がある。無所属なものには理由があるかもとは考えただろうに……。

……だが同時に、この行動も仕方ないと考える俺もいる。こちらも麻帆良側に明かしていないことが山ほどある。その一つが戦力の秘匿だし……それに今も話せないことが増え続けているのがなかなか笑える。

一層のこと俺は“自分の組織ファミリーを持っています”なんて正直に言えたらどれだけ楽だろうか？世界の異分子たる俺達自身を隠すことが無ければ自由に行動できる？ 仲良く手に手を取っていられる？

……ふんっ、何を馬鹿な。そんなことが出来るわけ無い。人類は異分子の悉くを排除してきた。そう、全てを排除することで繁栄してきた種族だ。手を取り合うことが出来ても、それは一時的なものだった。

時々、稀に理解を示す一部の人間が居るが、それは本当に世界全体から考えれば少数だ。1人2人の異分子なら受け入れられるだろう。少なくとも表面的には、な。だがそれが多数になると大多数の人間が拒否反応を示す。

その人間の中で魔法使いなどの特殊な人種は、その拒否反応が顕著に現れる。それは一般の人間から考えて魔法使いという特殊な存在は秘密主義者だからだ。それは一般人に比べて圧倒的に個体数が少ないことが関係している。

個体数が少ない。それは時に仲間意識が極端に強い者を生む。ハッキリ言つとその考えが悪いほうへ昇華して歪んだ魔法至上主義者が現れることがある。そして主義者は大小あれ必ず排他的思想を持

っている。

最も、その思想はM M<sup>×ガロメセンブリア</sup>本国の上層部などにみられるものだ。若い魔法使いは上層部が公表する“英雄像”<sup>マキステル・マキ</sup>が“立派な魔法使い”だと信じて気付かない内に傀儡と化す。度し難き盲信だ…。

あー、一部の並列思考が逸れたけど…うん、本当に笑える…。くくく…。

いや、でも“この世界の人間は優しいかもしれない”…。だって、「ネギま！」の世界だし。赤 先生の世界観は優しいよ。本当に…。先程、言った少数の人間はこの世界では少なくとも一般の人類の半々くらいにはなるんだからな。くくくつ。

…それでも俺は“俺の世界を守る”ために決断しなければならぬ。それが家族と俺を守ることになると信じているから…。

「なるほど…。しかし、どれも俺達には無意味だな。障害となるものは全て実力で排除するだけだ。くくくつ！」

「ッ………！」「………つ」「」

目の前には俺の台詞にビクツと反応する3人が居た。プチパニツクを引き起こしていた嬢ちゃん達も騒ぐのをやめてこちらを凝視してくる。同時に店内の温度が急激に下がったように感じられた。

家族の皆が警戒を一気に引き上げたようだ。目の前の3人は気付いていないが店内に居る者は、さり気無く各々に間合いを詰めて一足飛びで3人の首を刈り取れる位置に居た。階上に居る者も似たようなものだろう。

今のこいつらを見て感じたことと言えば「何を今更…」という思  
いだけだった。相手も俺が傘下に降らないのは理由がある、とは考  
えているかもしれない。でも、それならそれで暴走している馬鹿者  
共を抑えてから来い、というのが俺の気持ちだ。

日常の表面的には被害らしい被害は無いけど裏ではマジックアイテム魔導具を触媒  
にした遠隔透視での不当な盗撮。麻帆良学園都市の監視ネットワー  
クを使った徹底的な尾行や監視。

これらが裏では行なわれているのに敵対しないだけありがたいと  
思えというものだ。無論、全て妨害している。一応、長く生きてい  
るから気は長いほうだと思うが、ここまで虚仮にされると正直イラ  
ついてくる。

大体、政治的な問題が何かあれば新世界の帝国のテオカアリアド  
ネーのセラスちゃんを頼るさ。どちらの国も古い知人が多いからな。

……まあ、逆を言うと旧世界では政治的立場が安定していないと  
も言えるんだがな。それでもいざとなれば世界移動するか新世界に  
行ってほとぼりが冷めるのを待てばいいだけだ。何も問題は無い。

故に俺達には恐れるモノはほぼ無いはずだ。俺は無恥でも、まし  
て無知でもないので断言はしない。俺達は常に敵を意識して警戒し  
て生き残ることと安全を最大限確保する。傲慢も無謀もいらぬ。

…と、ここまで並列思考の隅で考えていたらガンドルフイーニ君  
は懐に手を入れて周囲を警戒しているし、嬢ちゃん達は周囲の雰囲気  
をやっとな察したのか互いに身を寄せ合っていた。

しまった…。怖がらせる気は無かったんだけど、思った以上に警戒させてしまったようだ。戦争時代と違って平和な時代は威圧の調節が難しい。何で強者が弱者を気遣う結果になるんだ？それも準敵対組織の人間を…。

「ああ…嬢ちゃん達？震えるな、怯えるな、あとずさるな…。別にところ構わず暴れる無法者というわけではないのだから」

「……………がくがくっ！ぶるぶるっ！」

聞いちゃいねえし…。いや、油断している時に“気”に当てられたからって怯え過ぎだから…。

はあ、ここにハオとユエが居なくてよかったかもしれない。2人ともお願いしない限り敵には容赦が無いからなあ。

今の彼女達は「工房」内の施設を十全に使って新しい家族達の訓練をしていて手が離せないんだ。オリビエ達も偽体に入ってハオ達を手伝っている。ミリー達は俺と喫茶店の仕事があるから手の空いている時だけ手伝ってもらっている。

それに先輩精魔奇兵としてアイリ達親衛隊も総出で教官の職務に励んでくれている。親衛隊だけじゃなくて緊急処置として手の開いている家族は皆、教官をしている。

店内に居る子達が少し重めの警戒を示しただけでこの3人は額に汗を滲ませて緊張を表している。これじゃ弱い者イジメじゃないか…。こんなので麻帆良は大丈夫なのだろうか？

「はあ…。ガンドルフイーニ君…」

「……………何、かな？」

だから、お前も警戒し過ぎなんだって…。そんなに緊張していたら身体が硬直して即座に動けないぞ？

緊張は神経も磨り減らすしさ。もう少し気楽に……………って、あつ。そうか、店内の子達が警戒を解いてないから緊張が解けないのか…。すまんね。はい、みんなー、おちついてー。…はい、もう、だいいょうぶだよー？

「はあ、失礼…。それで何かな？」

「君の班はいつも、こう…」

「ちがうっ！今日はたまたまだっ！そのはずなんだっ…！」

緊張が解けた途端に元気だな、お前は…。それにたまたまとは言うが信じられないって。俺が知っているのが今、目の前で緊張から解放されてホッと一息ついている嬢ちゃん達の姿だけなんだからさ。

家族の中では一番温厚な俺だけど今の2人を見て信じろってほうが無理じゃね？

「……………こんなので学園は大丈夫なのかね？」

「……………」

ガンドルフィーニ君は黙秘ですか…。あー、そうですか…。どうでもいいがその滝のような汗を拭きなさいって、床に垂れているん

だよ…。せっかく皆が閉店掃除したのに二度手間じゃないか…。

「もう、帰れ…。はあ…。」

「あ、ああ…。もうこんな時間か？邪魔したな…。」

また改めて来る、と言うガンドルフィーニ君の後に続いて嬢ちゃん達も続いて出て行く。客が帰ったことで建物内に居る皆の警戒が一段下がったのを肌で感じる。俺の言葉が切欠で今まで空気がピリピリしていたのよ。

結局、こいつらは何をしに来たんだ？嬢ちゃん達は生来の生真面目さから礼が言いたかっただけだろう。3人に共通した来訪の理由を考えると…。もしかして俺の正体の見極め、か？敵対するかの確認もあつたのかな？

はあ、面倒なことが増えなければいいなあ…。あ、今日の晩御飯は何かなあ…。現実逃避だけど今は無性にお腹が空いた気がした…。

S i d e o u t 葵

麻帆良学園都市大通り…。

S i d e ガンドルフィーニ

喫茶店を出て2人の少女を連れて、ただ歩く。日本の冬、日の入

りは早い。既に日が沈み一つ二つ星も出ている。今夜は雲も少ない快晴で星も良く見える。大通りを進む彼らの頭上には欠けた月が爛々と輝いていた。

「高音君、彼と話してみてもどう思った？」

後ろを歩く高音君に九重・葵と直接、話した印象を聞いてみた。このあとに事後承諾になるが独断で彼と接触したのだから、せめて学園長へ報告は必要だ。そのために私自身で感じたことを自分なりに考えて整理していたが他の人の意見も聞いておきたかった。

「正直に言っ、わかりません。冗談を言う軽薄な態度。救援のお礼をしようと思えば、仕事だからと割り切った考え。全体を通して面倒だと言わんばかりのお座成りな対応をしていました。……それに私のことを終始、嬢ちゃんなどと……何度言っても直してくれませんでしたし、名前くらい呼んでくれても問題は無いと思うのですし、あの人は女性の気持ちをもう少し理解してくれてもいいと」

「た、高音君？」「お、お姉様？」

一気に話しきろうとする高音君だが前半はともかく後半は愚痴に聞こえた……。佐倉君も驚きに目を見開いているぞ？高音君は彼に何か思うことでもあるのか。もしかすると彼のふざけた態度がマジメな彼女から見ると気に入らなかつたのだろうか？

「……こほんっ。失礼致しました。ですが、先生が勧誘されたあとは店内の雰囲気ガラリと変わりました。あれほどのプレッシャーは感じたことはありません……」

「そ、そうですね？わ、私も身体の震えが止まりませんでした」

…」

「むう…」

それは私の失敗だったと自覚はある。下手な勧誘は互いの利益になりはしないということだな。彼らも理由があつて傭兵をしているのだから、そこをもっと考えるべきだった。慣れないことはするものではないな。

あの提案をしてから店内の気温が一気に下がるような錯覚と既に敵の間合いに入ったような危険な空気を感じた。あの時、気付いたら背後に二つ、出入り口に一つ、左右に二つずつの複数の気配がプレッシャーとなつて押し掛かつてきた。

首の後ろがチリチリとする感覚に思わず懐の銃に手をやっていた。私とその事実気付いたのは彼に話しかけられた時だった。不思議なこと危険を訴えていた気配は何も無かつたかのように霧散していた。

狐に抓まれた気分とはこういうのを言うのだろうか？確かに気配は感じた、と思ったのだが彼は何も無かつたように振舞っていた。

気のせい、だったのか？いや、しかし、学生の高音君もそう感じていたようだった。まして将来が有望としても魔法使いとしてはまだ発展途上の佐倉君まで…。ならば事実と考えるのが自然か。

あれは恐らく警告の意味も含んでいるのだろうな。ふむ、既に手遅れかもしれないが下手にこれ以上刺激することは危険だな。学園長の言うように適度に付き合つのがいいようだ。

「…私達が確認を取れているのは葵さん自身から提出されている自己申請から本人とハオさんにユエさん、そしてCOS・MOSさんの4人（内1体はロボですが…）だけです。それなのにあの場に居た人達からも只者では…いえ、何か異質な気配を感じました」

「そうか、高音君も感じたか。人にしては歪な気配だった…。あのプレッシャーだ、それ相応の実力を持つているのだろうな。まったく学園長に報告することが増えたのはいいことなのか悪いことなのか…」

あの場で受ける威圧感とは思えないほどの意志力が込められていた。それを数秒とはいえ叩き付けられた私達としては疲労困憊の思いだ。

私はまだいいとしても高音君と佐倉君には申し訳ないことをしたかもしれない。あの威圧は彼らが余計なことをするな、という警告の意味でやったのは予想がつく。もしあのまま緊張が破裂して戦闘になったら間違いなく屍になるのは私達のほうだった。

今も思い出すだけで手や腕、身体が恐怖で小刻みに震えそうになる。何をしても彼らに勝てるビジョンが浮かんでこない。敗北することは想像に容易いのだが…。

はあ、ただでさえ無断で行動したことに加えて藪を突きかけたことも自己報告しに行くのに、更には彼が自己申告した以上の戦力をまだ保有している可能性が出てきたことも併せて報告しなければならなくなつた。

いや、戦力のことはある意味、貴重な情報となるか。いや、それらを判断するのは学園長の仕事だ。私達の領分を大きく超える問題

だろう。

こうなると若い連中が先走らないようにシツカリと言いつけておく必要があるそうさ。下手な行動を取って麻帆良を危険に曝すようなことはできない。

「お姉様達はすごいですねー。私はただこわいかな、って思っただけなのに…」

「佐倉君、その感覚は大事なものだ。その感覚は生き残る上で必要だからな。努々忘れないように。いいね？」

「は、はいっ。忘れませんっ」

「もう、愛衣ったら…。ふふふっ」

私の言葉に必要以上に力む佐倉君の姿を見て高音君と私は苦笑してしまった。努力を怠らない直向なそのあり方に私達は何か眩しいものを見る目を向けていたのだ。

「しかし九重・葵、か…。敵にはしたくないものだな」

「えっ？葵さんはこわいけどいい人だと思えますよ？私は怪我も治し、て…？？？あっ！わ、私っ、結局、お礼言えませんでしたよっ！？ど、どうしましょう！？お姉様っ！」

「佐倉君、彼はいいと言っていたのだから気にしなくとも…」

「「よくないっ！…！」」

「えっ！？佐倉君だけでなく高音君もなのかい！？」

彼女達をそれぞれの寮へ送る道中に今日のこの子達は調子がおかしいと思っただのは私だけだろうか？

Side out ガンドルフィーニ

おまけ…。

……。

「…マスター、ただいま帰還しました」

「うん、お帰り。地下にメンテベッドが設置してあるからそっちで休んでね。…それと、今日も楽しかったかな？」

「了解しました。…楽しいかはわかりませんが  
茶々丸が猫を  
たくさん紹介してくれました」

「そっか、そっか ネコさんには懐かれたかな？この時期は寒いから擦り寄ってくるんだよね」

「はい      あ、いえ、私は子犬に懐かれました」

「え？」

「え？」

第六十一話「来客と交渉と雑談と」（後書き）

ガンドルフィーニ君がいいやつだ…。そこそこに面倒見もいいみたい。

書いている作者自身が驚きです。

少しばかりそういう補正は入れたつもりですが正しく作用しているかは疑問。

高音のキャラ性が掴めないのが痛かったですねえ。

作者個人では好きなキャラの1人なんですが残念！所詮は脇役止まり…。

想像と妄想とネギま！愛で乗り切るしかないのか…！？

ではでは！B i s b a l d！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

## 第六十二話「蠢く影と情報部と会議と」（前書き）

生存報告がてらに更新！

情報部の活動を書きたいと思った。後悔はないが反省はしている。当作品、薬味ネギが来るまでおよそ1年です。

ここまで原作主人公が絡んでこない作品は少ないのではないかと。はあ、このままでは10話か20話先に登場するかも…。

一応、あるところで時間を一気に進めます。

このままじゃマジで原作主人公が登場する前に葵が別世界へ飛び出しそうだから！

では続き！どうぞ！

## 第六十二話「晝く影と情報部と会議と」

?????  
…。

Side ????

深夜の麻帆良学園都市のとある場所にある建物。その建物自体は学園都市内のどこにでもある洋風建築の外観をしている。注目するのは建物ではなく、建物の中に次々と入って行くフードを目深に被った人間達が居ることだ。

どこからともなく現れる彼ら、彼女らは皆、魔法使いらしいフード付きローブで全身を覆い隠し、個々に魔法使いらしい魔法の杖を手に持ち、それを歩く度にカツンカツン、と地面に小さな音を立てている。

誰もが寝静まる時間。こんな深夜の時間帯に、そんな怪しげな人間が集まる。それだけで不気味なサバトでも行なわれるのでは、と一般人に見付かったら疑われても文句は言えない。言えないはず…。

いや、言えないだろう？胸を張り自信を持って堂々と言える奴が居るとするなら、そいつは 真正の変態だけだ。そんな変態はイヤ過ぎる…。

だが真に残念なことに怪しげな人間達は格好だけではなく本当の意味で魔法使いだっただけか。

それを証拠に深夜とはいえ酔っ払いの1人や2人と道で擦れ違ふことが稀にあつた。それ以外にも都市外への大通りには少ないが人の流れもある。それなのに何もおかしいことも無く“ただ擦れ違ふだけ”だった。

怪しげな人間が同じような格好をして深夜の都市内を徘徊している…。

そんな怪しい人物と擦れ違ふのに人は目もくれない。たとえ酔っ払いといえどもそれはおかしい。通報されないにしても驚きに目を見開いたり、疑わしげな目を向けてもいいようなものにまるで“普通のこと”だという風にして誰も注目もしない。

これは魔法を秘匿することを念頭に置いている魔法使いの常識の一つ、認識阻害魔法だ。

この魔法で多少、一般と異なる奇抜な格好をしていたとしても一般人の意識、認識をずらし難く溶け込むことを可能とする。魔法の影響下に入った者にそれを“普通だ”と認識するように無意識に働きかけるのだ。

その魔法のお蔭で下手に騒がれること無く行動できる。最も同じ魔法使いや相応の実力者、稀に魔眼持ちなどに術式を看破されることがある。これが敵対している者なら問題だがここは麻帆良の影響下であり、その問題も無い。

閑話休題…。

ともかく今日、この建物に集まるのはここ麻帆良学園都市に集い、麻帆良を守る魔法使い達だ。より正確にはその一部、それもまだ20代前半から中頃という若い魔法使い達だ。

フードを深く被っているため性別の判別も難しい。それに彼らの居る部屋は明かりが乏しく薄暗いためより判別を困難にしている。部屋はそれなりに広く、教室ほどある。今ここに居るのが14、5人ほどだからまだ余裕だ。

「…これで全員か？」

一人の魔法使いがここに居る者全てに問い掛けた。同じようにフードを目深に被っているため顔は見えないが声から判別するに若い男のようだ。余程、自分の力に自信を持っているのか、どこか挑発的な声色からプライドの高さが見て取れる。

「……………」

若い男の問い掛けに答えるのは沈黙。部屋に居る者達は若い男のことが気に入らないようで早く自分達を集めた用件を話せ、と無言のみで圧力をかける。若い男は皆の態度にふんつ、と一つ鼻を鳴らすと話し始めた。

「皆も知っているはずだ。新参者の“九重・葵”という奴らを……話しているのは他でもない。その男のことだ。……我々は麻帆良を守るため、何より自分達の信じる正義のために」

「……………」

「またも沈黙。いや、誰かはわからないが小さく舌打ちが一つ部屋に響いた。若い男が言うことは麻帆良に所属する者ならば全員が知っている。正式な紹介があったわけではないが初登場が印象的だったのだから当然だ。」

「一つ引つ掛かるのは葵の立場が無所属の傭兵という存在があやふやなものだということだ。それでも彼らの戦う姿を直接見ていた者が感じるのは敵にすると手強いが味方ならば心強いと考えているのが学園長を始めとした大半の意見だ。」

「だが、ここに集まるのはそんな大半の意見から外れた者達だ。自らの正義を掲げ、己が魔法の行使こそを誇りとし、今まで麻帆良を自分達の手で守護してきたと自負している。行動だけを評価すれば立派な魔法使いと言えるかもしれない。」

「そして誇り高い彼らは葵だけではなく異分子を毛嫌いしている。この地を守っているのは自分達である、と考えるが故に。」

「だが、しかし、どの時代でも行き過ぎた思想は周りから少なからず忌避される傾向にある。そんな少数派の者達のみが集まるのがここだ。若い男の演説は続いている。要約すると“葵が気に入らない”という内容を…。」

「そこに現れたのがこの部外者だ。この麻帆良は我々の手で守らるべきだ。故にここに提案する。あの異分子を」

「ギリツと齒軋りの音が聞こえた、気がした…。」

Side out ????

ファミリ  
組織情報部本部…。

Side ????

情報部本部。「工房」内にあるここには外から様々な情報が集められ集約される場所。「工房」の象徴、過去にテオドラ皇女をして“白亜の城塞”と言わしめさせた、その近くに建てられた情報部の本拠地だ。

これは情報部だけではないが少し前までは「工房」の内と外との連絡手段が極限られていたことからアングレカムや外の建物を改装して拠点としていたのだ。限られた伝達手段では致命的に過ぎる。情報は早さだ。それが滞るようでは話しにならない。

それも最近になって葵の思いつきが「工房」内に“特殊な通信室”を設置したことで問題は解消された。司令部、情報部、作戦部の三系統は本部を改めて「工房」内に設置した。最も施設は元からあったので必要な荷物を運び込むだけだったが…。

そんな三系統の一つ、ここは情報部本部だ…。

……。

情報部副部長のためにある執務室の中には2人。片方は立派なオク材の大きな机、革張りの座り心地の良さそうな椅子に座る長身

の女性。机を挟んだ側に立つのは目深くフードを被った人間。声から若い女性であることがわかる。

そのフードの女性から口頭での説明と報告書が届いた。今はもう報告の殆どを終えて長身の女性が考え込んでいた。フードの女性は黙って次の指示を待っている。この互いの態度から上司と部下だけの関係を感じ取れる。

「…そう、ご苦労様。貴女はそのまま任務を継続しなさい。…ですが発見された場合は即時撤収を心掛けるように」

「了解しました」

上司と部下だけ、というのは訂正しよう。長身の女性は間違いなくフードの女性を心配する声色が感じられた。それは大事な家族に対する姿勢だった。信頼しているが、だからこそ心配してしまう。そんな複雑な思い。

フードの女性が副部長の執務室から出て行って長身の女性は椅子に身を任せて一息吐いた。彼女は情報部副部長の役職を任せられたダリア・D・スタニツク、冷静な表情と長身に見合うだけの立派に成熟した女性らしい身体をしている。

最も小さく可愛らしいものが大好きな彼女にとって自分の大きな身体は軽いコンプレックスのようだ。戦闘中、大きな胸は邪魔だしオマケに肩も凝る。それに狭い室内では動き辛い。待ち合わせには目印にされることもある…。

それに対し同じ情報部に所属し情報部部長の地位に居る姉、ダチユラ・D・スタニツクは小さく可愛らしい少女（幼女）の姿をして

いる。可愛らしい服を着こなせる小さくも可愛らしい姉。姉ダチュラは妹ダリアにとって理想の姿だった。

もう一度言おう。ダリアは“小さく可愛らしいものが大好き”だ。

それはもう三度の飯よりも大好きだ。己が主葵と並ぶほど大好きなのだ。仮にダチュラと葵が2人してダリアに上目遣いで「お願い……」などと傍げにされたら鼻血とか色々なものを出しグツと親指を出しながら即座に了承するだろう。

話しは逸れたが今は仕事 중이다。ダリアは目を瞑り報告された情報を脳内でまとめている最中だ。そして今、報告された情報は大きな脅威足り得ないが、だからといって決して無視できる内容ではなかった。

「……………ッ」

ギリツという歯軋りの音が部屋に小さく響いた。表情に変化はないが身に纏う雰囲気の不愉快なものになっているのがわかる。報告書の内容を脳内で整理していたダリアだが小さな苛立ちから態度に出てしまったようだ。

情報を纏め終わると彼女は直ぐに行動した。機密文書を入れる鞆の中に提出された報告書を入れて部屋を出た。

情報部本部内の廊下をスタスタと進むダリアが目指す場所は情報部部長の居る執務室だ。今し方、届いた情報をダチュラ部長へ報告するために。

……………。

今、目の前にあるのはダリアが目指した場所。彼女の姉にして情報部部长であるダチユラが居る執務室の前だ。ダリアはノックをして入室を知らせた。

「ダチユラ部長、居ますか？私です。…入りますよ？…っ！」

返事はないが居る気配はする。気付いていないのだろうともう一度声を掛けてから扉を開けて中に入るとダリアは目の前で行なわれる行為を目にして思わず身体を硬直させた。それだけ彼女には衝撃的な光景だったのだ。

「…フツ…んっ…あれ？…はっ…んーっ…」

情報部部长ダチユラはダリアに対して背中を向けていて入室したことに気付いていない。何やら真剣に作業するダチユラは部屋の中央の床に薄いマットを敷いて、その上に座って彼女は胸の前で拝むように両掌を合わせて、うんうん、と唸っていた。

「…ナニを、しているのですか？ダチユラ部長…」

「にゃっ！？　　ダ、ダリアっ！いいいいいい一体、いつからそこにっ！？」

「…つい先程ですが…。それよりも何をされていたので？」

「…っ！な、何でもなっ！？　　こほんっ、それより用件は何かしら？ダリア副部长」

鉄面皮の無表情でダチユラを追求するダリアだが内心は微笑まし

いものを見ている感情に溢れている。例え心の中の彼女が鼻血や涎など色々なものを垂れ流してハアハアしていたとしても微笑ましいものを見ている感情に溢れているのだ。

そんなことを知らないダチュラは幼い外見に相まって可愛らしくうろたえている。しかし、そこは情報部の長を任せられることはあり直ぐに冷静さを取り戻した。羞恥心から、まだ少し頬が赤いのはご愛嬌だろう。

ダリアも、愛らしい姉を観察、もとい愛でて、違う。…とにかく身を切る思いで可愛らしい姉の姿を振り切り、ここへ訪れた理由を鞆にしまった資料を出しながら話し出した。

「…はい。例のグループへ潜入中の者からの情報で近日中に行動を起す、と報告がありましたのでダチュラ部長のお耳にもと思ひまして。…そして来てみればダチュラ部長は涙ぐましく豊胸体そっ」

「いいからっ！それはもういいからっ！！というか私がしていたこと知っていたのね！？うわーんっ！ダリアのいじわるーッ！ばかーっ！えろすばでーっ！」

それでも最後には弄ってしまったのがダリアたる女性だろうか？相変わらず無表情だが内心で「ハアハア…姉さん可愛いです姉さん…」と転げ回っているのが第三者の目からすると透けて見えそうだ…。

つまり、この場は知られたくないことを妹に知られて泣き喚くダチュラと表面上は冷静を装っているダリアだが内心では「ああ、姉さん可愛いなあ 姉さん」と喜びに転げ回る勢いでお祭り状態だったりする。

ただダチユラの最後の言葉の“えろすばでー”には若干の精神的ダメージを負っていたりするのは割とどうでもいい話だったりする。人のコンプレックスは刺激してはいけないのだ。彼女にはいい教訓だろう。

そんな彼女だが今もダチユラがグズる姿を脳内フィルムに焼き付けて永久保存を続けているのだ。鼻血を出さなただけ褒められてしかるべきだろう。ここに敬愛する葵まで加わるとダリアの脳内プレイヤーが一気に落ちかねないのだから。幸せ絶頂的な意味で…。

……。

一通り騒いだが、そのお蔭で少しは落ち着いたようだ。これは2人共が、だがな。一人は現実で、1人は脳内が騒がしかったのだから。

「クスンッ、それで近日中とは言うけど副部長はどれくらいで動くと考えているかしら？」

「そうですね。おそらく実時間の3日後から数日中…どんなに遅くとも一月頭までかと。近日中に全学年が冬休みに入ります。その間に帰郷する生徒が多いですから。人目を気にする真っ当な魔法使いなら無闇な危険は起さないと考えます」

「やっぱり、そうかなあ。学園都市というだけあって普段は学生が多いもの。副部長の言うように人目の危険を避けるはず。…むむむ？」

ようやくマジメな話し合いが行なわれるようだ。報告書には具体的な襲撃日時が記載されていないかった。何れ判明するだろうが待つ

だけではなく情報を積極的に集め敵の襲撃目標を予想、特定しなければならぬ。

順当に考えるならばご主人様の葵だ。だが敵は魔法至上主義の思想を持っている。そのまま同じ魔法使いを狙うとは考え難い。そう考えると残り3人になる。しかしハオとユエは剣士と云っていい。魔法使いからすればただの従者だ。

そうなると残るのは1人、COS-MOSだ。葵謹製の機械人形である彼女は世間からすると従者人形に分類される。そして自動人形の従者人形は高価だが魔法世界ではそれほど珍しいわけではない。だが敵には丁度良い襲撃目標ではないだろうか。

代えが利く、という下衆な考えもあるが人間を傷付けることなく示威行為が出来る。正義の魔法使いを自称する連中のことだ。正義感を振り撒いて「どうだ！人道的だろう！」とでも考えるのかもしれない。

あくまでも予測に過ぎないが、もしそうなら吐き気がする考え方だ。人間以外なら傷付いてもいいというのか？殺してもいいのか？犬や猫のような動物すらも同じか？魔法至上主義の連中はここで退場させる必要があるかもしれない…。

ダチュラは並列思考と高速思考を駆使しながら作戦を立案、修正しては破棄、立案、修正しては破棄を繰り返して最悪の事態の想定と最善といえる作戦、そして次善策や予備策といった補助的作戦を脳内に数種類、構築して戦術を戦略としていく。

「どうされますか？敵の襲撃目標は未だに不明ですが、それも直に判明することでしょう。敵情報、使用魔法、個人の経歴などは把握

してありますので直ぐにでも逆襲撃を掛けられますが」

ダリアの言うとおり、敵情報は把握できることはほぼ全て調べてある。だが、ここでバカ正直に万全の備えをして正面から襲撃を待ち構え迎撃しても麻帆良内部に何らかの禍根を残す結果になるかもしれない。襲撃者は帰らぬ人になる予定なのだから当然だ。

だからといって声高に正当防衛を盾に止むを得ず襲撃者を殺害した、としたら麻帆良は黙っているだろうか？

答えは否だ。馬鹿が暴走した結果だとしても身内に被害が出たのだから最低でも文書による抗議はくるだろう。最悪なのは逆賠償を請求された場合だ。被害者なのに賠償を何らかの形で支払わされる。

我慢ならない。許容しかねる。フザケルナ。ならばどうする？簡単だ、正当防衛よりもより強固に報復行為を行なえるように舞台を整えればいい。

襲撃時に誰か被害者をでっち上げて、後日正式に麻帆良へ犯人の引渡しを要求。近衛翁が要求を呑めば、まあ良し。だがその場合は麻帆良の庇護は必ずしも絶対ではないことが浮き彫りになる瞬間だ。

では頑固にも要求を拒まれたならば？それこそが望むところだ。戦争を！戦争を！戦争を！戦闘になればドサクサに紛れて破壊工作、暗殺、情報遮断などヤリタイ放題だ。その時に犯人を無理矢理にでも拉致すればいい。

問題はどうかやって話しを持っていくか、ということだが……。作戦立案、修正、破棄、修正、立案、破棄、修正、立案、修正、採用とダチュラは、そこまで考えて ヤれる、と予測を立てニヤリ、

と嗤う。

「いえ、相手の襲撃を逆手に取ります。ふふふ いい機会だからこれを機に一手、仕掛けましょう」

既に敵の襲撃を知っているのだから、それは最早奇襲にならず。ならば罾を仕掛けて手薬煉引いて馬鹿がまとめて掛かるのを楽しみに待てばいい。必要なのは餌と大きな網と鋭い鉞だ。

「ダチュラ部長、また何か良からぬことを考えているのですね…」

「し、失礼なことを言うわね。ふんっ、これも全てマスターのためよー」

無表情に冷静に呆れた雰囲気で言うダリアにダチュラの可愛らしい顔が若干引き攣った。それでも頬を赤く染めて自分で言った台詞を思い返して心の内で「な、何、言ってるのよ？私！？」と羞恥に悶えているのは秘密だろう。

ダチュラの物事に対する優先順位とは葵や妹を始めとした家族が最優先されるのだ。いや、これは葵ファミリー全体に言えることだろう。故に家族の団結力、仲間意識は他に類を見ないほど固い。

「…まあいいですが。キッチンと計画書にして上層部の定例会議…では間に合いませんのね。情報部の権限で緊急会議を開きましょう。サッツと片付けますよ？人員を用意するにも、動かすにも時間が掛かりますから」

最も「工房」内に限れば時間など腐るほど作れますが、とダリアは最後に付け加えた。

「うっ？計画、書？それって書類、よね…？えと…？ううう、ダリアあ…」

ギギギ、と軋むように首を動かし正面からダリアを見るダチュラの顔は、この世の絶望を味わったかのような表情をしている。ダリアは無表情にただ静かに姉の姿を脳内フォルダに記録していくのみだ。

書類…それは情報部部长ダチュラにとって天敵にも等しい存在だった。出来ないわけではないのだが書類作成中だったのに気が付くと夢の中。要は文字ばかりで退屈して寝てしまうのだ。

複数人で作業する場合は人目もあり恥ずかしいところを見せられないと奮起して平気なのだが1人だと緊張が長続きせずに必ず寝てしまう。姿が少女（幼女）なので見た目は微笑ましいのだがこれでは仕事にならない。

だからこそダチュラを良く知る妹のダリアが丁寧に先読みして補佐するのだ。姉のモイ姿を直ぐ傍で記録できるとダリアは素晴らしい職場環境であると望外の喜びであるらしい。

「ええ、わかっています。いつも通り私がお手伝いいたします。…少々急ですが間に合わせてみせましょう」

「やたっ さっすがダリア副部长！私の妹よ どうも書類を作るっていうのが苦手なのよね。ほんとに助かるわあ」

早速作業を始めた2人。ダリアの助力を得られることに心底安堵したダチュラは花が咲いたように可憐な笑顔を浮かべる。こういう

時が自分は1人じゃないんだ、と自覚できる少女（幼女）だった。

無表情に淡々と計画書類の作製を手伝うダリアも姉の笑顔を見ることが出来て内心では姉の役に立てることに満足感を味わっていた。ここに葵お手製のクッキーとお茶があれば言うことはないな、と思うダリアだった。

……。

そこでふと、思い出した。姉が豊胸 操をしていたことを。葵がお姉さん好きを自称していることからこれまで以上に好かれようという努力なのだろうが…。

ふっ。

「……無駄な努力ですね」

「ダリア、ひどっ!?!」

姉妹仲はいい、のか？

Side out ????

「工房」内、第一会議室…。

Side 葵

とあることから数えて現実時間で2日半、「工房」内で時間設定を最大限利用して数週間後。「工房」内にある第一会議室にて情報部要請の緊急会議が開かれることになった。ハオとユエを後ろに伴い移動しながら会議が始まる前に配られた事前情報に目を通した。

会議室に着くと部屋の中に居た全員が席を立ち直立の姿勢をとった。部屋全体を見渡せる上座の席に座ると他の皆も席に座る。ハオとユエは俺の両隣にある席へ、そして背後には警護するようにCOS-MOSが立って控えていた。

あ、お茶？ありがとうございます。…へえ、これCOS-MOSが淹れてくれたの？いいね。美味しいよ 皆にもお願いね？

「…はい」

そこで改めて見渡してみると部屋には新人の育成で忙しい精霊・悪魔3人娘やアイリ達、アン、三系統の部長、副部長や現場責任者などの主だった顔ぶれが居た。どうやら部屋に来たのは俺達が最後のようだ。申し訳ないと苦笑してしまった。

会議開始までまだ5分あるのに彼女達は何分前から来て待っていたのか、と疑問に思うがそれは、今はいいか。それよりもまずは確認することがある。

「始めよう。まずは最初に確認するけど、この報告書の内容に誤りはないんだよね？それとリーダー格の詳しい経歴は？」

始めに今回の会議を開いた情報部の部長、副部長の2人に確認を取る。襲撃内容が間違いでした、てへ じゃやってられないからな。

まず席を立ったのは副部長のダリアだった。机の前に空間モニターが表示される。

「はい、确实です。氏名は倉持・K・アルフォード。年齢26歳、身長181cm、体重76kg。典型的な後衛魔法使いですが魔力資質が高く、大規模魔法こそ行使できませんが中規模魔法の連続行使ができ、また正確な魔法操作は侮れないものがあります」

「へえ、この若さで大したもんだね…」

魔力量、魔法操作ともに優秀。このまま順調に魔法の修練に励めば10年後、20年後には魔法使いとして大成するかもしれない。こういうのが現れると原作に限りなく似たこの世界でも色々な人が居ると改めて思う瞬間だな。

「…続けます。両親は母親が日本人、父親が本国出身。倉持の生まれは日本ですが間もなく父親の故郷である魔法世界MM本国へ家族で移住。後の大分裂戦争時に両親は死亡。倉持だけが生き残り本国の孤児院で生活」

ふむふむ…こう言っちゃなんだけどよくある悲劇というだけの話しだな。俺の食指が動く要素が何一つもない。俺は俺と家族の安全で精一杯だから他人に構うのは余裕がある時だけと決めているからな。

「学生時代に母親の生まれ故郷である日本に憧れ、大学の交換留学で麻帆良へ来たのを転機に教職を目指す。本国魔法大学を卒業後、麻帆良にある一高校へ教師として採用される。今、勤務歴4年目。生徒達の評判も悪くありません」

母親の故郷を見てみたいという気持ちはわかるかなあ……。いや、母親だけじゃなくて両親、要は家族の生まれ故郷を、って言えばいいか。天涯孤独の身にはよくある行動だ。自分探しのくなんていうやつだな。

「問題は倉持が魔法至上主義者ということです。幼少の頃に母親は違いましたが父親が魔法至上主義の思想を持っていたことに影響を受けています。両親の死因が無差別魔法攻撃によるものですから魔法を至上の力と考えることに拍車を掛けたものと思われまます」

面倒だな……。魔法主義者に限らず何らかの主義者の多くは強固なまでの意志を持って他を排除した思考を持つ。この倉持の場合は魔法、というより“麻帆良を守護してきたのは魔法使いである自分達だ”という思想を持っているようだ。

今までは麻帆良のトップである学園長、麻帆良一の実力であるタカミチや他の良識派が強硬派を抑えてきたようだ。…ふむ、俺達の登場が一石となって少なからず波紋を広げた形になったようだ。

……あれ？ということは何れって自業、自得？え？

マジかよ。やっぱり魔法という狭い業界で他の勢力圏で無所属の人間が動き回るのは無理か……。だからと言って俺が下手に出るのは家族の手前できないしなあ……。

大体意思の統一も出来ない組織に何の意味があるのかな？一部とはいえ若手が暴走しているんだから世話ないわ。ふんっ、どこの組織も一枚岩ではないということだな。10人居れば10の考えがある。考えは人それぞれ、か。はあ……。

しかし、今回の隠匿は最初思い付きだったけど徒に麻帆良を刺激しただけのようだ。失敗だったかな…なんて思わない、とは言わない。姿を現した時点で何かしらの反発があることはわかっていたしね。やってらんねえ。

「死んだ父の思想を継ぎ、母の故郷である日本の麻帆良を自分の手で守る。実際に倉持は行動を以って実行し証明しています。…ですが極端な思想と行動が周囲の人間から敬遠されているのも事実のようです」

説明を聞いてモニターの表示をスクロールして倉持らの周辺の調査報告の項目へ目を走らせる。調査項目の一つは学園データベースにあった麻帆良迎撃作戦の事後調書や裏での素行調査報告だ。

敵集団を味方諸共、背後から攻撃魔法の連続行使により殲滅。敵には甚大な被害を与えたものの巻き添えになった味方は死者こそ出なかったが重軽傷者を多数出した。しかし巻き添えになった味方の1人の怪我が酷かった。

入院中に身体の怪我は完治したが後遺症から精神的、魔力的負担が限界を超えていたため日常生活で使う魔法は問題無いが戦闘を生業にするには魔法使いとして終わってしまっていた。

敵を退けた方法は問題だが倉持の行動は結果だけ見れば功績は大きい。学園は倉持に厳重注意だけで終わらせ、被害に遭った者達と関係者家族には謝罪と多めの見舞金を送った。以降、彼らと倉持との間に溝が出来た。

読み進めていくうちに俺の表情が歪んでいくのが自分でもわかる。

「何それ…。よくこれで、えーと…13人も従っているなあ。そんなので襲撃できるのかね？」

「ええ、間違いはないわ。早ければ実時間で明日の夜には行動を起しますよ。まあ連中もバカ正直に白昼堂々と襲撃しようなんて度胸はないようだから闇討ち紛いのことが精々ね」

「ダチュラ部長の言うように近日中に何らかの襲撃があると思われる。しかし、リーダー格の倉持ですが、その傲慢な態度から他の者からは不評のようで集団としての結束に欠けます。何か切欠さえあれば瓦解させられるでしょう」

何か、ねえ？資料によると倉持を入れて14人の小グループだ。そこにこちらから1人潜入させて15人。何かあるとしたら潜入員による内部破壊工作か。扇動と誘導もありだな。やっぱり手強い敵よりも怖いのは味方の中の敵だな。

補足事項では、なぜかは知らないが全員がフードを深く被っていて顔の確認もままならないらしいという。魔法使いの自分に誇りがあるからか？まあそのお蔭で簡単に気付かれる可能性は少ないだろうけど潜入している子の身が心配だ。

「そう…。それで敵の予想目標は…COS・MOS？これは戦力を削るうとかそういうことか？機械人形だと思つて嘗めすぎじゃないか」

「ですが麻帆良側が確認しているこちらの戦力は我が君を含めて4人です。少ない戦力を消耗させるには効果的ではないかと。恐らくですが一人を葬ることでそれを警告、または宣戦布告とするためには？」

「然様。連中は何を以ってかは知りませぬがCOS・MOSが一番与し易いと判断したのでしよう。この資料には彼奴らが魔法至上主義者の思想が示唆されています。主義者は銃火器を侮った考えがありますからな」

いや、ハオとユエの言い分もわかるし理解も出来るんだけどさ。現代の機械技術どころか魔法技術もそこそこ凌駕しているんだよ？それを何も知らない奴らに安く見られるのは…納得できないなあ。チラツと背後に居るCOS・MOSを見る。

「…マスター、何か？」

「いや、何でもないよ。COS・MOSは気にしなくていいからね？」

「…はい。ですが私は大丈夫です。マスターが、皆さんが居ますから…」

「COS・MOS…」

こんなに綺麗で可愛いのに…。連中は何が不満なんだ？魔法至上主義も回りに迷惑を掛けないなら別に俺はどうでもいい。応援する、なんてことまではしないけど暖かい目で見守ってやる。ニヤニヤとだけ…。

そうそう！COS・MOSが茶々丸ちゃんに影響されたのか少し前から料理を習い始めたんだよ！調理データをアップロードすれば

一発で料理の鉄人並みの腕がつくのに健気にも人から習うという自己学習を心掛けているんだ。

初めての料理に失敗した時、黒焦げの目玉焼きを無表情に凝視して呆然としていたんだけど雰囲気だけがショボーン、としていたのがよくわかった。子犬が雨に打たれている姿が幻視で来たね！

その時のCOS - MOSの姿なんだけど体表面のナノマシンを形状変化させてピンク色のエプロンにしていたのが可愛くって可愛くって、もう……！「俺を悶えさせる気が！」と真剣に考えてしまった。勿論、失敗のフォローはしたとも……。

話しが逸れた……。ともかくCOS - MOSが狙われる可能性が極めて高いわけだな？理性では納得できるけど気持ちに納得しない。今直ぐに逆襲撃を仕掛けるべきだろうか？

「むう……魔法が理不尽な力だというのは理解しているけどウチの子を軽んじられるのはム力つくなあ。人間なんて鉛玉一発どころか刃物の一突きで死ぬのにな……超長射程から1人1人狙撃してやるのか」

「お待ちください、マスター。情報部は襲撃を逆手に取り不穏分子の一掃を考えています。その掃討計画は、こちらになります」

狙撃計画を割と本気で考えていた時に情報部のダチュラに待ったを掛けられた。彼女の言う不穏分子の一掃の計画情報が空間モニターには表示された。全員が情報に目を通していく。オリビエのニイイという嗤いが印象的だった……。

計画内容は色々と方法は多岐に渡っていて、これ本当にいるのか、というものまでであるが単純に作戦目的を言つと“馬鹿共をまとめてポイツ”というものだった。“ポイツ”の部分は想像にお任せしよう。まず間違いなく食事時には聞きたくないことが起きる。

「へえ、なるほどね。確かに出来そうだ。それで公算はどれくらいとみているの？」

「最低でも六割。でも私は、九割はいけると考えます」

「ふむ…ダチュラは自信あるんだね。心強いなあ。ダリアはどう？」

情報部部長のダチュラが言うからにはこれは確実だろうな。三系統を形成したアイリの人選は確かだと思つし、本人の陰謀癖もある。まず大丈夫だ。それでも念のためにダチュラの妹であるダリアにも確認は取るけどね。

「私も公算は高いと考えます。……因みにダチュラ部長は葵様にいいところを見せたいのです。ここ最近は忙しく、宴会などでしか構ってもらえていませんでしたから寂しいのですよ」

「えっ、そうなの？むむむ？確かに家族の時間が少なかったかもしれないけど。…むう」

むむむ…どうしよう？倉持一派以上に重要な案件ができた気が…。寧ろマジで重要じゃね？俺の最優先事項と言つても過言じゃないね！…言われてみれば家族とのスキンシップやコミュニケーションが不足している気がする。

むう…訓練課程と中東への実践訓練を終えたら転移門<sup>ポト</sup>で順次、月へ送っているけど、これからも家族を増やすしなあ。それも万単位で…。考えてみると今まで以上に家族との触れ合いが減、る…？

Oh! my good!!

何てことだ！？神は死んだ（注：女神（幼女）は生きています）！！家族との触れ合いは俺の生き甲斐にも等しいものなのに…！流石に一万八千と飛んで18人は増やしすぎただろうか？まだ希望者が居るみたいだが…。

目指せ！悪魔と精霊の家族10万人！！という気持ちが無かったと言えば嘘になるけど…むう？最初から飛ばしすぎたのか？初期の増強予定は千五百未満だったからなあ…。公募（人外対象、精霊など）で二万近く希望者が来るとは予想外だった。

あ……今、関係無いことを思い出したけど月に居る自動人形達は何をしたのだろうか？月基地の資源使用量の書類に目を通した時に気付いたのだけどもガツサ月資源を消費していた。何十億、何百億トンというレベルで、ですぜ？

前に自動人形達からの楽しみにしている、という伝言は聞いたけど…まさか、それに使っているのか？だとしても一体、これだけの資源で何に使っているのかね？もしかして、デススー？スタウオーズとか勘弁だなあ…。

いやいや、それよりも今はダチュラの寂しさを癒すべきだろうか？…今度、お手製のお菓子を持ってお茶しに行こうかな。皆も誘って…。

「ちよっ！ダリアあ！？何を言ってるのかなっ！？あは、あははっ！ち、違っただからね！マスターにいいところ見せたいなんて思っ  
てないんだからね！」

いやー、身内鼻屑かもしれないけど見た目10歳児（幼女）だから微笑ましいなあ。ただビシイ、と人に向かって指先を突きつけるのは感心しないな。メッ！

「と、ダチュラ部長はツンとデレを兼ね備えています。どうですか、葵様？欲しいと思いませんか？精神はともかく肉体構成は幼女です。幼い花卉を散らす背徳的な思いに駆られませんか？そして何より、  
こっ…モエません？色々…」

「は？欲しい？散らす？はあ？モエ？はい？」

小さな身体で否定してくるダチュラは可愛らしい。だが、なんだかよくわからないことを言っているダリアが居る。

姉と比べて妹は内心を表に出さない無表情で言ってくるから時々対応に困る。いや、彼女達のこととも好きだけどね！割と無条件で！それにしてもダリアが暴走すると何を言っているのか理解が追いつかないから困る。

「ダ・リ・ア〜？あとでちよっとお話しがあるんだけど…  
いいわね？」

「えっ！？あのっ、ダチュラ、部長お??？」

なんとかダリアの言いたいことを必死に理解しようと俺が頭を悩ませていると、ふと両隣の席に誰も居ないことに気が付いた。そして何があつたのかダチュラがダリアを“可愛らしい笑顔”と“どこまでも優しい目”でお誘いしていた…。

何あれ？こわい…。可愛いのに、こわい、よ？不思議だ…。

「うむ、その時は吾らも良いか？どうも教育が足りなかつたと見える。いじめ、んっ、話を聞くことも個人的にも興味深い」

「ダリアの当時の教育係は…リビエラだったか？どうも、格好は別として身内には甘い。吾らでもう一度、教育をしなおすか」

「姉さんばかりかユエ様やハオ様まで!？」

ダリアの背後にダチュラ、いつの間にか左右にはハオとユエがダリアの肩に片方ずつ手を置いて逃げられないようにしていた。ん？メガツサ指が食い込んでないか？ダリアの表情が気持ち引き攣っているように見えるような…。

うんっ！結論としてダチュラだけではなくハオとユエも怖いです！笑っているダチュラに比べて笑顔のえの字も無いところなんか特に!!マジメさんな人は怒ると真顔になるんだね。初めて…じゃないけど…知ったよ。

ダリア、何をしたんだ？お兄さんには理解できなかつたよ…。

あ？いやいやいや、何、皆して目線を逸らすかね？え？俺？俺が

悪いの？何でよ…。は？釣った魚に餌？「牧場」の養殖は順調だつて、鯨とか。え？そうじゃない？じゃあ、鮪か。え？これも違うの？むう…わかんないなあ。

まあ家族会議も大事だけどそれは次の機会にして今は倉持一派の対応に結論を出さないかね。俺は両手を叩いて注目を集めた。

「はいはい！よくわからないけどケンカの続きはあとにしようね。でもとか、しかしとかは、今は置いておいて」

「ごめんなさい…」「すみませんでした」「申し訳ありません…」

「はい、いいから続き続き。それでダチュラ情報部部长、用意してあとは倉持一派が罠に掛かるのを待てばいいんだな？」

「あ、うん、じゃなかった。んんっ、はい、その通りです。襲撃してくることがわかっていいるのですからバカ正直に迎え撃つより、これを足がかりに目障りな勢力をまとめて排除します」

「ふむ？…では、この件、情報部に任せよう。期待しているよ？」

「っ！っ、うんっ！任せておいてっ！にやはっ」

席は離れているけどダチュラに向けて精一杯笑い掛けてお願いね、という気持ちをとてもとても込めた。いや、マジで期待していますよ？

正直な話し、家族が急激に増えてその教育中の今そこまで俺達の手が回らない。主な教育担当は精霊・悪魔3人娘、陽月姉妹、アイ

り達親衛隊、あと司令部の事務方が数人だ。他の部署から人を取り過ぎるわけにいかないからこれでもフル稼働なんだよ？

それでも手が足りないから通常時には比較的手の空いている作戦部から応援が来ている状況だったりする。俺も夜は「工房」内に限り教育している。切実に今は人手が無いのよ…。無人機は無数にあるけどそれに教育は任せられないしね。

そんなわけだから情報部に今回の件は一任してしまう。決して疲れるからとか面倒だ、という理由ではない…。つもりだ。信頼しているんですよ。うん、というかさ、なぜにダリアは姉をガン見していますかね？

「……ナイスです、葵様。ダチユラ部長がたれダチユラ姉さんに進化しました…！可愛くないですか？撫でたくありませんか？ぎゅつと抱き締めたくありませんか？寧ろそれ以上をしたく…ッ！？」

ダリア…忘れちゃダメだよ。まだ現在進行形でハオとユエは君の肩を掴んで拘束しているんだよ？ギシツて碎かんばかりに握っているように見えるのは俺の気のせいだと思いたいけど…。

「　　ダリア…少し、黙れ…。貴様ら精魔奇兵は復活可能とわかっているから首を斬り落しそうだ…」

「姉上、落ち着け。流石にそれはマズイ。我が君も見ておられるのだぞ？だから落ち着くのだ」

「はれ？そ、そうだよっ！ダリアは私の妹なんだから！その…傷付けちゃダメだよお！」

ハオ？ユエの言うとおり斬り落しちゃダメだつて…。ただでさえダリアの肩が砕けそうなんだからさ。あとユエ？止めるのはいいけど君も手の力を抜きなさい。マジで砕けかねないから、ね？

「はっ。我が君がそう仰るならば…」

「????ふふふっ、これは気付きませなんだ。許すが良い、ダリア」

「クッ!?だ、大丈夫、です。あは、あははは…」

うん、これからは気を付けようね。それとダチュラ？同姓相手に上目遣いなんかしても効果は無いと俺は思うんだ…。うん、俺だったら間違いないくKOされていたな。

「…………我が君の頼みだ。今は見逃そう。…………(ボソッ)だが次は無い。良いな?」

「…………ッ!(ぶんぶんぶんぶんっ!)」

ものすごく首を縦に振っているダリアが見えます…。一体、ハオに耳元で何を言われたのかね?お兄さんにとっては気になりますよ。あれ?というか会議の結論は…。まあいいか、ダチュラ達情報部に任せよう。

倉持一派、か…。どうやってハメるのかね?

…………。

何はともあれ…。

「本日の緊急会議は終了、と…。はい、解散、解散！」

「「「「はい！」「「「「」

元気だなあ。ここは小学校か…？

Side out 葵

おまけ…。

「あ、もしもし、茶々丸ちゃん？葵だけど、エヴァちゃん居る？少し話したいことがあるんだ」

『…畏まりました。少々お待ち下さい。ただいま、お変わりします』

「うん、よろしくねー」

『私だ。それで話しとは何だ？アメはまだあるが…』

「いや、アメじゃなくてね。これからこの学園が騒がしくなるけど気にしないでいいから、と伝えたくてね」

『ククク、随分と楽しそうなことをするようじゃないか。ええ？

まあいいだろう。私は酒でも飲みながら観戦させてもらうとし

『じゆ』

「あいあい。でも、あまり期待しないでよ？少しゴミ掃除するだけだからさ」

『ククク。ああ、わかっているとも。…ではな』

「うん、またね。それと最後に　　血液を集めるのはいいけど程ほどにね」

『　　ああ』

さて、あとは連絡するのは刀子さんに刹那ちゃん、かな？木乃香ちゃんと明日菜には暗い話しはできないしねえー。くくくっ！あ、真名ちゃんは…いいか。超あたりが情報を流すだろうし。

忙しくなるな…

第六十二話「書く影と情報部と会議と」（後書き）

前書きでも書き記したかもしれないけど…。

今、切実に、葵を、別世界に、送・り・た・い！！

切欠があれば送ってしまいそうだ…。

とりあえず手近なところでは宇宙…目標は火星より向こうへ、ですな。

そのあとは地球へ帰還して…ヤンチャして、って感じですか。更にそのあとに世界移動かな…。

しかし、哀しいことに男女比が葵1に対して女性が圧倒的多数…。どこの世界にブチ込むかは悩みどころだ。いつそオリジナルへ放り込むか…。

まあそれはちよこちよこ考えるとして、だ。

今回は一発キャラと三人称の書き方を重視して書いてみたんですよ。私は三人称が苦手というより下手なんで練習は必要なんです。

練習の成果は芳しくないですけどね。ははははは、はあ…。

それと何度も言いますが当作品のside ???は三人称です。

ではでは！B i s b a l d！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第六十三話「襲撃と不安と機能停止と」(前書き)

地震災害が酷いですが鉄 桜の更新は続く！

なぜなら！応援の気持ちを込めているからだ！！

頑張って！頑張って！頑張って！

作者的には駆け足をしているつもり…なんですよ？

もう”〳〵カ月後”とかやってみるのも手かな？なんて思ってしまいます。

では続き！！

## 第六十三話「襲撃と不安と機能停止と」

12月某日某所…。

Side ????

倉持一派がアジトとする建物。その一室には15人の魔法使いが居た。部屋の中でそれぞれが思い思いにしていると1人が部屋の中へと進み出た。それはこの集団のリーダーである倉持・K・アルフォードだ。彼は周囲を見渡して宣言する。

「諸君、決行の日は近い。決行日は12月26日の夕刻。最期の慈悲にクリスマスくらいは過ごさせてやろうではないか」

「……………」

誰も言葉を発しない。当然だ。全員が彼の魔法使いとしての力量は認めているが人間性を認めてはいない。それでもここに居る理由はそれ以上に気に入らない存在があるからだ。

「……………」

その中で2人が小声で話す。1人は大柄な体格の大男。もう1人はフードローブの上からでもしなやかな姿態からわかるように女性だ。女性が大男に何かを話しかけたようだ。やがて大男はドカドカと中央へ進み出た

「お前の考えなどはどうでもよい。…だが不本意なことにあ奴らは強い。1匹ずつ確実に始末するべきだ」

「……くっ！確かに、確かにそうだ。チツ、不愉快な。だが第一の標的は予定通りでいく。皆もそれでいいな？」

自分が被っているフードを外しながら大男は挑発的に言う。逆に倉持は苦々しい顔をする。大男に見覚えがあるからだ。倉持は昔、あることで彼の弟を病院送りにして魔法使いとして再起不能にしたことがあるからだ。

「フンツ！無論だ。寧ろお前が先走らないかが不安だな」

「貴様……ッ！」

…故に彼らは犬猿の仲というのも生温いほどに互いが互いを嫌悪している。部屋の中に魔力のうねりが起きる。一触即発の危険な状態だ。

そこへまた進み出るものが居た。同じくフードをしているが教師風の雰囲気をした30代前半の男だ。ゆっくりとフードを外して2人の仲裁に入る。

「落ち着け、同志達よ。しかし、倉持よ、本当に決起してよいのか？あのガンドルフィーニが若手魔法使い達に軽率な行動は慎むように、と注意して回っているようだ。それは学園長も、だ」

「????ああ…。それなら私も聞いた。数日前から何かに焦るように奔走していたな……」

倉持を前にしてイラついていた大男は教師風の男が言うことに一瞬、何を言っているのかわからなかった。だが大男は言われたことに自分でも覚えがあるのか苛立ちを抑えた。今は同士討ちなどしている場合ではないと理性で判断したからだ。

「かまうものかッ！あの軟弱者の言うことなど無視してしまえばいいッ！」

しかし倉持は違った。積りに積もった苛立ちの一部が大男のとこを切欠に表に出てしまっていた。この時、不思議なことに一瞬だけ甘い花の香りがした。倉持は教師風の男に罵声のような言葉を浴びせた。

「…だが、ガンドルフィーニらだけではない。高音・D・グッドマン、佐倉・愛衣の両名も魔法生徒を説得して回っていると聞く。何かしら奴らの情報を入手して危険を察知したのかもしれない」

「仮に危険ならば尚更私達がやらなければならないだろうッ！！私達こそが正義ッ！私達こそが真の魔法使いとしてあるべき姿なのだッ！！」

彼の言葉に倉持は聞く耳を持たない。言っていることは自尊心が強い彼には、いつものことだ。それでも今ほどではなかった。これはおかしい。何かの箍が外れてしまったかのように喚き立てる。

「倉持…。だが…」

大男は倉持の様子を見て逆に冷静さを取り戻した。彼のことを冷めた視線で見ている。教師風の男は何とか慎重に行動しようと倉持を宥めようとする。

「くどいッ！！まだこの中に臆病者は居るか！？居るなら出て行け！誇りもない腰抜けが！」

「……………」

だが、それは無理だった。倉持は教師風の男を振り切ると腕を振り上げ宣言する。このやり取りを見ている全員が押し黙っている。いつものことと傍観を決め込んでいるのが大半だ。

「居ないようだな。ならば決行日に変更は無い！確実に一匹ずつ狩り取る！これは余所者への見せしめだ！！私達、魔法使いの真の正義を示す時なのだッ！！」

「……………」

それでも彼らには彼らの目的がある。1人は鼓舞する倉持。鼓舞され静かに沸き上がる11の歓声。1人は沈黙。1人は思慮。そしてその14人を凍えた視線で観察する者が1人。

「……………」

大男と話していた女性だ。静かに観察している。その視線は限りなく冷たい。凍えるような、そして何かを侮蔑するような視線だった。

彼らの計画は進む。何も知らずに進む。暗い未来へ進む。

Side out ????

「工房」第三研究室…。

S i d e 葵

第三研究室には様々な機械と大小のケーブル、それに成人男性が入りそうな一機の大きな円柱状のシリンダーがある。ナノマシ溶解液の満たされたその中にはCOS・MOSが浮かんでいる。

彼女を前に俺は情報部からの報告書に目を通していった。情報部の管轄なのになぜかアイリが報告書を持ってきたのが不思議だった。だって少なくとも今の司令部は新兵の教育に忙しいはずだし…。

「なるほどねえ。クリスマスは無事に過ごせるのか。くくくつ、お優しいことだ…」

まあそのことはいいんだ。俺にとっては皆、家族なんだし、問題は…無い、はずだ。それよりも倉持一派のことだ。それとなく誘導してガンドルフィー二君を使い、間接的に若手に自重を促そうとしたけど、ダメだったみたいだ。

この報告書にはクリスマスを終えた翌日、26日の夕刻にCOS・MOSを襲撃するとある。まあ正直に言うと時間的猶予があることはありがたい。まだ教育中の新兵が4分の1ほど残っているからな。

とりあえず精魔奇兵1170人を新たに加えた段階で現在、約1

万3千人は転移門<sup>ポータル</sup>を使って月へ移住している。なんだか月基地が月都市になってきた気がするなあ、なんて思わないっいたら思わない。

「…年越し前に一騒動あり、か…。今年は騒がしいったらないな」

「ですが、これは予定通りです。作戦に数%も支障はありません」

「まあ、そうなんだけどねえ。…いや、こつちも準備できているし問題無い、か。アイリ、“魚”は掛かるかな？」

予定通りに事が運んでいる時ほど不安になるよね？俺は臆病者だからさ、いけいけ！ゴー！ゴー！なんて楽観的には考えられないのよ。いや、仮に失敗しても次善策は数十に渡って設置されているから心配はしていない。うん。心配ないない。

「はい、閣下。間違い無く。情報部一課の情報操作と思考誘導によって想定通り倉持一派は第一目標をCOS-MOSに決めました」

「そっか。…はあ…」

シリンダーの表面に手を当てる。強化ガラスと中に満たされたナノマシン溶液のヒンヤリとした感触が掌から伝わってくる。COS-MOS…。君は夢を見ることがあるのかな？はあ…。

わかっているんだけどね…。この子が犠牲になるんだよ？どうしたものかなあ。

「…お辛いですか？ご家族を犠牲にすることが」

「…まあ、な」

「……………」

やるしかないか、な…。

Side out 葵

麻穂良学園大通り近郊…。

Side COS - MOS

18:00時。夕刻。周囲に人型生命体の反応無し。襲撃確率上昇。間もなく想定された敵襲撃ポイント。想定ポイント到着まで1kmを通過。本機体の各部最終チェック。……………チェック完了。オールグリーン。

今任務の最終確認。第一目標、全ての敵を炙り出すこと。第二目標、半数以上の撃破、そして可能な情報取得のために残敵の捕獲CPへ最終確認。暗号を受信。命令を受諾。本作戦に変更無し。

目標ポイントに到着。…警告。マルチセンサーに人型生命体の反応有り。精密走査開始。反応場所、特定。目標、前方230m。敵接近中。距離200m…180…160……………100m。警告を開始。

「……………警告します。即刻、出てきて姿と所属を明確にしないで。指

示に従わない場合は敵対行為と認識します。尚、警告はこの一度限りです……」

「……………」

警告に反応無し。応援要請…要請の受諾を確認。応援到着まで15分。第一種戦闘態勢へ移行。戦闘出力上昇。Dフィールド展開準備。設定はエネルギー系の非殺傷設定を推奨。スタンモード

「炎の精霊13柱！集い来たりて！」

……………ツ！個体目標に魔力反応を検知。警戒認識上昇。敵対行動と認定。敵性個体の脅威判定クラスCへ上昇。今任務を最優先。尚、第二次目標として情報取得。敵個体の捕獲を可能なら行なうこと。射撃プログラムスタート。

「…迎撃行動を開始します。BLASTER…連射、ファイア」

「クツ！？敵を討て！魔法の射手！連弾・火の13矢！！」

威嚇射撃全弾、敵至近に着弾。敵反撃。敵魔法弾の発射を確認。対魔法・衝撃体勢。Dフィールド緊急展開。着弾まで2…1…今…防御成功。フィールド出力78%に低下。機体損害無し。戦闘継続に問題無し。

「防がれたツ！？障壁か！！」

「慌てるな！！ 合図を出せッ！！」

緊急。リーダーに未確認魔力反応を多数確認。敵増援を確認。任務、第一目標の達成と判断。味方部隊の到着まで残り9分32秒。対複数戦闘用意。戦闘終了までフィールド常時展開を推奨。戦闘続行…。

「BLASTER…3点射、ファイア」

「ギッ！グッ！！」

敵増援の後衛型魔法使い1撃破。残敵数13。次敵目標を確認。射撃戦闘用意。

「BLASTER…連射、ファイア」

「ぐううっ！がああっ！？」

敵増援の前衛型魔法使い1撃破。残敵数12。次敵目標を確認。射撃戦闘用意。

「馬鹿がつ！先走りやがって！」

「仕方が無い！誰か！アレの動きを止める！」

「目醒め現れよ！浪立つる水妖！水床に敵を沈めん！流水の縛り手！！」

敵後衛型魔法使いに魔力反応。魔法種類を特定。水系統による捕縛型と判明。射撃による迎撃は困難。近接戦闘用意。捕縛魔法、排除後に術者へ突撃を開始。

「 SWORD」

「なっ！拘束の魔法を斬りやがった！？ぐはッ！？」

「馬鹿野郎！一々取り乱すな！！」

敵魔法使い1撃破。残敵数11。次敵目標を確認。敵、本機の包囲を開始。状況危険度の上昇を確認。包囲突破を最優先。

「逃げるぞ！魔法で牽制しろ！動きを制限するんだ！」

「 光の精霊11柱！集い来たりて！敵を射て！魔法の射手！  
光の11矢！！」

声鑄型魔法使いに魔力反応。警告。敵魔法弾、複数接近。ランダム回避機動、開始。回避成功。射撃戦闘用意。

「BLASTER、連射：ファイア」

「ぐうう…！！」

敵魔法使い1撃破。残敵数10。次敵目標を確認。

「怯むな！撃ち続けるんだ！！数で畳み掛ける！！」

「 雷の精霊17柱！集い来たりて！敵を射て！魔法の射手！  
雷の17矢！！」

「 砂の精霊13柱！集い来たりて！敵を射て！魔法の射手！  
砂の13矢！！」

「 火の精霊19柱！集い来たりて！敵を射て！魔法の射手！

火の19矢!!」

多数の敵魔法弾、急速接近。迎撃プログラム、回避行動プログラム演算開始。ランダム回避機動。敵魔法弾弾道予測。本機体の能力では極めて困難。全弾回避不能。Dフィールド緊急展開。フィールド出力最大へ。

「チィィ!さつきから何だ!あれは!人形風情が魔法障壁だとしても言うつもりか!?!」

「喋る暇があるなら魔法を撃て!!今、ヤツの動きが止まっているんだぞ!!」

「ツ!わかつている!! ものみな焼き尽くす浄北の炎!破壊の王にして徴よ!我が手に宿りて敵を喰らえ!紅き焰!!」

警告。敵魔法使いに高魔力反応。中位魔法と判明。回避行動プログラム演算開始。敵魔法弾接近。回避不能。Dフィールド緊急展開。対象撃・魔法姿勢防御。敵魔法弾、着弾まで2:1:1。今。着弾。

「 ツツ!!」

フィールド出力低下。本機体動力部に異常発熱を確認。冷却装置作動。強制冷却中。機体動作に一部制限あり。最適化中。本機の戦闘能力12%低下。戦闘行動に問題無し。

「防がれたツ!!まだだ!困め!!決して逃がすな!」

「このままでは感付かれる、か…。 火精召喚!槍の火蜥蜴4

柱!!……行けツ!!」

敵魔法使いの召喚を確認。召喚対象を下級火精霊と認識。暫定的にエネミー1、2、3、4と名称。脅威判定クラスD。優先排除を推奨。敵火精霊は槍による近接戦と予想。敵火精霊4体、急速接近。迎撃射撃戦用意。射線軸クリア。

「BLASTER…3点射、ファイア」

「…！」

第一射…回避。第二射…エネミー3を撃破。エネミー1、2、4、回避機動を取りつつ急速接近中。敵火精霊、射撃範囲を離脱まで2…1…今、対近接戦闘用意。

「SWORD」

敵火精霊1、2、4の予想進路をシミュレート。予想位置を特定。対応順エネミー2、4、1。敵接触タイミング、カウント3…2…1…今、“即興剣舞”開始。

「…！」

エネミー2撃破。エネミー4撃破。エネミー1撃破。優先目標の全撃破を確認。引き続き敵魔法使いを排除。射撃範囲内に敵個体3名を捕捉。

「BLASTER…連射、ファイア」

「がッ!?」「げはッ!?」「きゃーッ!?」

敵魔法使い3撃破。残敵数7。次敵目標を確認。引き続き、射撃  
戦闘用意。

「今だ！一斉発射！！」

「来れ雷精！風の精！雷を纏いて吹きすさべ！南洋の嵐！雷  
の暴風！！！」

「ものみな焼き尽くす浄北の炎！破壊の王にして徴よ！我が  
手に宿りて敵を喰らえ！紅き焰！！」

「闇夜切り裂く一条の光！我が手に宿りて敵を喰らえ！白き  
雷！！！」

警告。敵魔法使い群に多数の高魔力反応。全て中位魔法と判明。  
Dフィールド緊急展開。警告。発熱異常の恐れあり。フィールド発  
生範囲を再設定することで負荷を軽減。対象撃・魔法姿勢防御。敵  
魔法弾、着弾まで2…1…今。着弾。

「…ッ！！」

敵魔法弾の全弾命中を確認。フィールド出力23%に低下。負荷  
増大。Dフィールド発生装置、発熱過多。緊急冷却、開始。冷却中。  
排熱を開始。蒸気排出。冷却完了。

システムチェック。…機体動作に一部制限あり。最適化中。本機  
の戦闘能力8%低下。戦闘行動に一部問題あり。再度、最適化中。  
完了。敵位置を索敵。目標を確認。戦闘行動を再開します。射撃戦  
闘用意。

「どうだ！やったか！？」

「煙が多くてわからないが…」

「関係無い！中位魔法だとしても複数叩き込んだんだ！無事のはずッ　ぐふっ！？」

非殺傷設定にて命中…。敵魔法使い1撃破。残敵数6。次敵目標を確認。引き続き、射撃戦闘用意。射撃補正、左に0.2度修正。

「な、に…？」「何で無事なんだよ！?!？」

敵勢力の63%減…。敵半数以上の撃破を確認。初期任務第二目標を達成。敵個体の身柄捕獲作業を開始。

「最後警告です…。今直ぐ魔法媒体を捨て武装解除しなさい」

「くそっ！」

「大丈夫、殺しはしません。ただ、お話しを聞かせてもらいます。何をしてでも…」

「……………ッ」

当方の警告を無視。敵対意思の存続を確認。マニュアルに従いスタンダメージによる気絶を推奨。今任務の第二目標、捕獲行動を開始。BLASTER、エネルギーチャージ。敵目標、照準。

「ファイ…。……………？」

射撃、一時中止。CPより信号を受信。暗号解読。最上位権限による命令の変更を確認。命令を受諾。敵身柄確保作業を中断。消極

的遅延戦闘行動へ移行。警告。戦闘出力低下。

「????? カハハッ！馬鹿めッ！ヤレッ！！」

「ッ！」

魔力反応多数の急速接近を確認。：魔法種類、魔法の矢と確認。  
属性、火、光、他複数種類。弾種、誘導弾。：回避後、BLAST  
ER、SWORDによる敵魔法弾の迎撃を推奨。

注意。本機体の迎撃能力を大幅にオーバー。回避不可。次善行動  
フィールド展開：検討中：エラー、間に合わず。敵弾急速接近。緊  
急処置：対シヨック防御姿勢。本機体重要機関の保護を最優先。防  
御用意。

敵魔法弾：着弾。。

左上腕部損傷小破。左大腿部損傷軽微。右脚部損傷中破。背部格  
納ユニット69%損傷、大破、修復まで外部武装の展開不可。頭部  
マルチセンサー31%損傷小破、稼働率23%減。損傷率49%。  
戦闘力47%減。

「 損 率 ガガッ 緊急 要請 」

緊急：緊急：緊急：。応援到着まで残り1分：59：58。。

ナノマシン、自動修復開始。緊急事態発生、保護回路の作動を確  
認。システムチェック：チェック中：重要データの損傷を確認でき  
ず。保護プログラム作動、バックアップデータをマザーポートへ転  
送。

本機体動作に問題発生。右脚部骨格に亀裂確認。左上腕部、左大腿部、右脚部、背部格納ユニットへのエネルギーカット、余剰エネルギーをバイパスへ。ナノマシン活性化を確認、自己修復の稼働率15%向上。残り損傷率47%。

応援到着までカウントダウン。 25…24…23…21…20…。

「げははははっ！！やったぞ！このオートマータ風情が！げはははっ！！」

「バツカツ！もっと早くブチかませよ！やられると思っただろーがッ！！」

「うっせっ！上手くいったんだからそれでいいだろが！！」

「クハハハッ！！オラッ！！」

…3…2…1…応援の到着予定時刻。

「下郎共ッ！何をしておるかッ！！」

応援部隊の到着を確認。戦闘態勢を解除。接続回線を別確保。電子情報を圧縮、暗号化。順次完了後にデータ送信を開始。

「 チッ！邪魔が入ったか…。ここが潮時か…。おいつ！逃げるぞ！！」

「はいよ！…クハハッ！あばよ、木偶人形ちゃん！げはははっ！」

敵部隊、逃走を開始。第二目標の一部達成ならず。本任務、本来の目標達成を確認。本機は現時刻を以って機能停止…。

……クスクス。

S i d e o u t C O S - M O S

第六十三話「襲撃と不安と機能停止と」（後書き）

COS・MOSが…orz

毎度の事ながらこんな予定はなかったのに…。

はふう…。人生こんなもんじゃなかったことばかりですな！

いい加減、葵を宇宙に上げたくなった…。

この際、多少無理をしても…やるか？

やっちゃうか？やっちゃってしまいたいなあ。

いや、上げるけどね！薬味が来る前に宇宙へ出るけどね！（えっ！？

ではでは！Bis bald！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第六十四話「流れる陰謀と最後の用意と」の処理方法と（前書き）

マズイ、忙しくて執筆する時間が少ない……。  
ただでさえ作者の執筆速度は亀なのになあ……。

さて！陰謀、策謀は続くよー。

盛るよー、まだ盛るよー、もっと盛るよー。

はあ、早く葵を宇宙へ上げたいわ……。。

では続き！

## 第六十四話「流れる陰謀と最後の用意と」の処理方法と

麻穂良学園大通り近郊…。

Side 葵

COS・MOSから応援要請の信号が発信されたので予定通りに俺とハオ、ユエの3人は少し時間を置き15分掛けて現場に到着した。未だ学園側に動きが無い理由だけど、このエリアはあの若造達の数名が担当しているらしい。

自分達の担当するエリアなら事件の揉消しも容易と判断したのだと思う。だけど実際、俺達が駆けつけた場所では逆に襲撃者の半数以上が死んではいないが戦闘不能の状態になっていた。

今、敵の負傷者は自力で離脱したり、若造共の関係上でこれは意外なことだけど比較的無事な人が負傷者に手を貸して撤収していた。こちらに追うつもりは欠片も無いが今はハオとユエに適度に追跡させ見送っておいた。

まあ、というわけで駆けつけた現場にてハオとユエを待ちながら俺はここに居るわけなんだけど…。

「これは、なあ…。ふむ…。それでユエ、連中は？」

目の前の“COS・MOSの形をしたもの”を見ていると2人が戻ってきた。それでまあユエに首尾はどうなったかを聞いた。現場

の状況から上手くいったとは思っけど自分で見落としていないかどうかの確認をしたかった。

「ハッ、襲撃者は脱落者を回収、または自ら撤収いたしました。こちらの被害は“皆無”です。ここまでは全て予定通りと言っても良いかと」

「そっか。でも酷いことするなあ。何もここまですること無くないか？左側が特にボロボロだ…」

本当にもう、COS・MOSが遠隔操作していた模擬機体も左半身に酷い損傷を負っていた。白い機体の半分が真っ黒だ。一応、本体との接続が切れた今も模擬機体自体に搭載されたナノマシンが自動修復をしているようだ。

まあ急遽製作したものだから性能はお世辞にも高いとは言えないけど。それというのもSWORDとBLASTERの2つしか武装を取り付けられなかったんだよ。時間があればもう少し兵装が積めたのに…。

…いや、でもこれくらいがちょうどよかったかもしれない。若造共は性能で劣るはずの模擬機体にすら梃子摺っていた。半数以上を戦闘不能に追い込まれていて下手したら全滅していた。ダメダメに過ぎるというものだった。

連中のそんなところを見ると…ねえ？別の意味でどうしたらいいものかと考えさせられてしまうな。まったく、何でも弱いのだろう。昔はまだ骨のある者が多かったのに今では、これだ。

何で攻めている俺が相手を気遣わなければならぬんだ？はあ、

力が全てを肯定していた、あの古き時代が懐かしいよ。現代は柵が多過ぎる。今回のことも人間社会における大義名分を得るための手段だしね。

ただねえ…たとえば大義名分を得たとしても敵討ちなどの私怨交じりの行いは評判悪くなるのは間違いない。けど、これは仕方ないことなんだ。だって向こうから仕掛けてきたことなんだから。くくくつ！

それに無理矢理、攻めるのは簡単だけど色々問題も多い。組織で表立って動く場合は動くだけの理由があるんだよ。でも、これでもそこその部隊を送れる。あ、例外は裏で行なわれる暗闘か俺や家族に危険が迫った時くらいのものだ。

「我が君、この機体はいかがいたしますか？破損部品は全て回収し、ひとまとめにしましたが」

「ん？ああ、うん、ありがとう。それは俺の空間に全部、回収して一時格納するよ。直ぐに終わるから。そうしたら一旦アングレカムへ帰還しよう」

「はっ！」「はっ！」

いつの間にか損傷部品の回収をしてくれた2人に感謝したあとに空間を開いて模擬機体を格納した。この模擬機体だが俺手ずから姿形をCOS・MOSソックリに作ったこともあって、とても遣る瀬無い気持ちにさせられた。

帰ったらまずはCOS・MOSに一度キチンと謝らないとなあ。それに今回は彼女にここまでしてもらったんだ。道化を演じた分、

必ずこの代償の元は取ってみせる。

「くくくっ！大魚…というには薄汚いが“餌”に釣られて“網”に掛かった。あとはもがく魚に“銚”で止めを刺すだけだ」

「ハッ、必ずや彼の者の仇を討ち果たしましょう！」

ハオさん？COS - MOSは死んでないからね？アングレカムに居るからね。…いや、わかっていて言っていることは笑っている口元を見ればわかるんだけどさ。ん…まあやることは変わらないからいいか。

「ふふ、下郎14の首その全てを討ち取り我が君へ謙譲してみせましょう」

それよりもユエさんや？14の生首を俺にどうしろと言うのかね？某ヨガな人みたく繋げて首飾りにしろとも言うのか？いらないよ。あんな薄汚れた首なんか…。まだ「牧場」に居る龍種の餌にするほうが有意義だ。

3人でトコトコと歩いて一旦、喫茶クレイドルへ向けて移動する。店の地下にある転移門<sup>ポト</sup>を使用してアングレカムへ秘密裏に移動する予定だ。態々こういう手間を掛ける理由は念のために俺達が店の中に居ると思わせるためだ。

まあそれはいいんだけどさ…。マジで学園側に動きが見られない。こんなので大丈夫なのかね？あ、もしかしたら外から来る敵ばかり見ているから中で起きる騒ぎには目が届かないのか？

む…。とりあえず細かい報告は帰ってから聞くとしよう。その

あとは…うん、状況によるけど早ければ今夜にでも学園長に犯人の引き渡し交渉をするために連絡をつける。

いきなり怒鳴り込んでもヤクザと変わらないからな。それに向こうで事実確認やら何やらで時間が掛かる。そう考えると早ければ明日か明後日には犯人を引き渡すか否かの返答が聞けるだろう。

いや、でも、あの学園長だからなあ…。1週間前後に期日を限定しておかないと返答を先へ先へと延ばされかねない、か？だが、こればかりは断固とした対応をしなければならぬ。さもないと嘗められることになるのは必至。

今回は、いい加減煩わしくなった監視者と敵対者の炙り出し、オマケに潜在的な敵対者の選別などのために、ちようどいい馬鹿が居たから利用させてもらうけどね。そしてこれは子供のケンカではない、殺し合いだ、闘争だ、戦争だ。

いや、できる限り戦争とかしたくないけどね。面倒だし…。それでもまあ返答が否ならば、いよいよそこで宣戦布告だ。戦争にはそれなりの段階というものがある。宣戦布告してハイ、戦争ね、なんて単純なことは殆ど無い。

今の時代、昔と比べて戦って得た土地は統治し難いからねえ。それにこんな学園を占領しても何の利益にもならない。

この地にある図書館島地下には新旧世界間を繋ぐゲートとか興味ないし、いらぬ。あれの使い道がね…微妙なのよ。大き過ぎてスペースばかり取りそうだし、固定式だから移動も出来ない。だからマジでいらぬ。

……いつそのこと壊すか？…む、ダメか、アルが邪魔す、つて、あ？アルに挨拶しに行くの忘れていた…。色々あつて忘れていたなあ。あと野郎はどうでもよかったしね。学園長に会っただけでも譲ったほうだと俺は思う。

んー、まあアルのことはどうでもいいとして世界樹に集まる魔力を蒐集することにはそれなりに意味があるかもしれない。超の襲撃に遭っても尚、最奥部にある蒐集装置は稼働しているしね。

……いや、でも今は月基地で月が纏う魔力も蒐集できるからなあ。麻帆良のそれも微妙、か？帰ったら装置の回収指示を出しておこう。どっちにしてもこれが終わったら暫くは麻帆良を離れてほとぼりが冷めるまで期間を置かないとならないだろう。

……ん？あ、あれ？俺、麻帆良に拘る理由無くない！？

「????我が君、どうかされましたか？」

「んっ！？あ、いや、何でもないよ？うん…」

うわぁー…イカンなあ。つい表情に出ていたようだ。ハオ達に心配掛けてしまった。…正直、木乃香ちゃんや刹那ちゃん、明日菜、それに茶々丸ちゃんにエヴァちゃんならともかくネギとかどうでもいいしなあ。

「然様ですか…。何かお気になることがあらば吾らにお命じ下さい」

「あははは…。うん、その時はお願いするよ」

「ハッ！」「」

もう原作とかは置いておいて、また新旧世界を周るか……。いや、でもなあ……。せっかく小規模とはいええ4個宇宙艦隊があるんだから銀河系内の探索を試みるのも一興かもしれない。

むむむ？そう考えると宇宙に進出するか。超超弩級大型宇宙船を月で造れば行けるんじゃないかね？うん、行けるよ。

そうすると月は攻略済みだから次は　火星か？火星に行くか？衛星のフォボスとダイモスを資源採掘して空洞化してしまおうか？それとも火星に環境改造用ナノマシンを散布してテラフォーミングしちゃうか？

火星を征服して初代火星皇帝になるとかロマンだよ……。やらないけど。というかできない。この世界では新世界を創り出すための触媒に火星が使われているからね。

それに数年後に起こるといふ新世界崩壊時には7千万未満の人間が触媒となった火星地表面に弾き出されてくるんだ。そんな惑星<sup>ほし</sup>、危なくて安心できないっつたらない。資源を採掘するにしてもこの世界の火星はいらないかなあ……。

それなら衛星だけ資源採掘して他の惑星へ行くべきだと思う。火星の隣は……ええと？小惑星帯と小惑星帯の間にある準惑星であるケレスか、そのまた外側の木星か。ふむ……木星はいいかもしれない。衛星が確認されているだけでも60以上ある。

資源の宝庫じゃないか……。まあ木星の重力とか電磁場がネックだが、それも警戒しておけば大きな問題は無い……はずだ。

何よりもガリレオが発見したガリレオ衛星であるイオ・エウロパ・ガニメデ・カリストの四つも見たい。それに、もしかしたら女神（幼女）の取り計らいで某木星プラントなんかが発見できるかもしれない。ただのロマンですがね！

もちろん各衛星では資源採掘させてもらうけどね。特にカリストなんか地表面全体を200kmの分厚い氷で覆われているから水とか補給できそう。宇宙線とかで汚染されていそうだけど…浄化すれば問題は無い…よね？

やっぱりやめようかな？こわいし…。まあ予定は予定だし、こんなことを考えても仕方ないか。あー…。

「むっ？ ふっ！」

…なんて考えを締めくくろうとしたら右後ろに付き従うハオが空中に鋭い視線を向けたのを背中越しに感じた。俺が何事かと振り返る間もなくハオは短い呼気を発すると同時に白の一闪を放った。空を裂き突進んだ先には…機械？

「…ふむ、姉上、どうだ？」

「仕留めたが…周囲にはアレだけのようだ。…丁寧にも証拠を残さぬよう撃墜の直前に自爆した」

「自爆…。ふっ、仕留めたならば良いよ。我が君、今、アンに確認を取るの、しばしお待ちを」

「うん。…それにしてもウチ以外の無人機械か」

どうしたのか…。何を見られた？いつから見られていた？何が目的だ？いや、そもそも誰が　あ、思い当たるのが居たじゃないか…超・鈴音がさ。機械を使うのは何も俺だけじゃなかった。

茶々丸ちゃんや真名ちゃん経由、傭兵関係で表に出たから何か彼女の興味を惹いたのか？それともあの地下のことで疑われているのかもしれない、か…。超の計画を成功間際で横面を引っ叩く予定だったから放っておいたのが裏目に出たか。

「…我が君、アンに確認を取りました。過去数時間、あの機械からは誘導電波などを確認されておりませぬ。恐らく単機斥候かと」  
スタンド・ドローン

「単機斥候…。あの似非中華娘は、また古風なことを…」

この世界の未来の火星では人を監視することが流行だったりするのか？前にも同じことをされたけど今も同じ手段とは驚きだ。

あれは予め設定されたこと以外、融通は利かないけど隠密性を高めるために操作する誘導電波を断って独自行動させる。低空飛行や物陰に入り込むなどの限定状況下に居る場合、レーダーにも映り難い。…確実なのは目視による捕捉か。

俺だったらここにレーダー妨害装置や熱光学迷彩、果ては探知魔法妨害や認識阻害術式が加えるね！くくく　これだけの技術を付加して小型化できるのはウチだけですよ！隠密効果は……考えたくないな。悪用されたら事が事だ。

「我が君。近くに賊の姿は無いようですが…今は作戦行動中、ここは一つ憂いを断つために釘を刺されては？」

「…………いや、いい。似非中華娘も無駄な時期に騒ぎを起すほど暇じゃない。だから警戒だけであとは放置」

「ハッ……」

2人は超にお灸を据えられなくて少し不満そうだな……。今度、念入りに刀身のお手入れしよう。少しは機嫌を直してくれると思う。家族の心のケアは思いついたら実行するのが吉だと思うんだ。

とりあえず今は店も見えてきたし、何よりも1人囿にってしまったCOS・MOSのことが気になる。

…………。

…………。

そしてやってきましたここはアングレカムの艦内にある一室。部屋の中には俺とメンテナンスベッドの上に寝かされたCOS・MOSの2人だけだ。陽月の姉妹には万が一のことも考えて店で警戒してもらっている。

メンテナンスベッドの横にあるIFS端末からCOS・MOSへアクセスした。自己診断プログラムを走らせて異常がないかを確認してから機能停止（休眠）している彼女を再起動した。

「…おはようございます、マスター」

「おはよう、COS・MOS。身体の調子はどう？」

「システム、機体、共に問題ありません。ただ、模擬機体は大破し

てしまいました…」

メンテナンスベッドから上半身を起した彼女は無表情なのに僅かに視線を逸らした雰囲気からシユンとしているのを感じた。それは見間違いでは無くて、今も小さな声で「申し訳ありません…」と謝罪してくる。

もう、COS-MOSは気にし過ぎだと思っただ。君は生まれ方が少々特殊だったかもしれないが結果的には上位AIだろうに論理的思考はどこいった？元から壊されることを前提に模擬機体が製作されたことは知っているだろうに。

彼女のナノマシンで構築された冷たい頬に両手を当てて視線を合わせるようにする。彼女の赤い瞳がピントを合わせるためにキューインと動いている。……なぜ、赤くなるし。

「いや、それはいいよ。所詮あれはCOS-MOSが操作していただけの変わり身だ、問題無いよ。それと…ごめん」

「マスター、なぜ謝罪されるのですか？……私は何か間違えたのでしょうか？」

「ううん？あはは…違うよ。まあ、その…変わり身だとしてもCOS-MOS1人囿にしたことがね。悪いことしたかな、と思うわけよ」

COS-MOSから両手を離して自分の頭をガサガサと掻く。彼女は俺の言ったことが理解できないようでキョトンと小首をかしげていた。でも、それも一瞬のことです。「あ…」と言ったあとに頷いていることから理解したようだ。

いや、気恥ずかしいというか申し訳ないというか、ねえ？どうしても遠隔操作されていた模擬機体だとしても彼女1人を囚にしたのは気が咎めるわけさ。それなのに彼女は自分に非があるかのように言うものだから、もうどうしたらいいものか…。

「…なるほど、マスターは私に罪悪を感じておられるのですね？理解しました。…ですが、それこそお気になさらないで下さい」

「いや、でもね？やっぱり悪いことしたと思うし…」

「問題ありません。私の全てはマスターのためだけに存在します。それは私の意志であり、存在する意味そのものです。ですから謝罪は必要ありません」

視線を逸らさず真つ直ぐに言ってくるCOS-MOSとそれを真正面から見て、聞いていた俺。やはり申し訳ないなあ、と思うけどこう言われてしまうと少し、いや、すごく嬉しい。気恥ずかしいけどな！

自分でも顔が赤くなっているのがわかる。だって顔と言わずに身体も熱に浮かされたように熱いんだから。はあ、俺ってこれでも820歳なのになあ…。こういうのは未だに免疫が出来ないから困ったものだ。

ただ、今のCOS-MOSに俺が返すべき言葉はわかる、というか、これしかないだろう？

「……そっか。それじゃ、“ありがとう”。COS-MOS」

「…はい。その言葉だけで私は軽く1000年は戦えます」

「それは……」

すごい、としか言いようが無いです…。

今のCOS-MOSの表情は口元が小さく微笑んでいるように見えた…気がした。その姿はとても柔らかく無表情の普段とのギャップがあり一瞬とはいえ見とれるほどだった。まあ台詞がとても物騒だったのが残念だったけど…。

相転移砲はまだとしても小型の重力波砲グラビティブラストくらいは搭載してみるか。この世界では無駄なヒルベルトエフェクトを搭載してないから内蔵兵装として、いや外部兵装だな。今回のことが終わったら取り掛かるとしよう

……。

役割を果たしてくれたCOS-MOS本体の診断を直接確認にしたあと、彼女にはアングレカム艦内でアンを補佐するようにお願いした。建前では大破したことになる彼女が今、表に出るのは得策じゃないからな。

不本意だが彼女には暫く裏方で支えてもらおう。……マジで！もの凄く不本意だけどな！ちくせう…こうなってから気付いた。エヴァちゃんと茶々丸ちゃんに何て言おうかね…。

あ、刹那ちゃんと麻帆良では彼女の師匠の刀子さんにそれとなく聞らないよう注意しておかないと…。前にもチラッと電話で言っておいたけど念のためもう一度改めて、ね。

木乃香ちゃんのことがあるから刹那ちゃんは無茶しないだろうか。少しは安心…か？いやいやこの場合の問題は刀子さんのほうか…。刹那ちゃんがお世話になっているからあまり酷いことはしたくないんだけどな…。

刀子さんだけど知り合っただのは刹那ちゃん経由だった。彼女には貸しがある。主に一般人の彼氏的な意味でな！初デートの時にウチの店が全面的にバックアップして盛り上げてやったのだよ

勿論！それはもう真剣（からかい半分）に頑張りましたとも！！もう一度言うが刹那ちゃんがお世話になっているからね！それ以来いい友人（？）関係を気付いていると思っている。

まあ刀子さんが麻帆良所属というのは変わらないが…。でも、やっぱり刹那ちゃんがお世話になっている人だしなあ。いやいや、でも麻帆良側の人でもあるし…。むーっ？敵対した場合はどうしたのか。

やはり立ち塞がってきたのなら手段を選ばず気絶してもらうのが適当だろうか？

……でも刀子さん、神鳴流だからなあ。飛び道具、効くのか？…効き難いだろうなあ。それでも全盛期の詠春ほどではないはずだから…んー？

神鳴流か… いや、少し待てよ？刀子さんは神明流を会得した女性なんだよな？…これは経験則からだがこの世界の女性はなぜか男よりも強かというか強いというか…うん、簡単に言うとな女傑が多い。

神鳴流で代表するなら剣に愛された天才と云われた青山鶴子がいい例だ。彼女は今、結婚して引退していると聞くが当時も今も剣技に衰えは見られないらしい。彼女と少し話した時だが妹は自分以上に才能に恵まれていると聞いた覚えがある。

青山姉妹と刀子さんでは剣の腕に雲泥の差があると思うけど、それでも神鳴流は警戒しておくに越したことは無いはずだ。基準が鶴子さんというのがアレだけど…。

よし！近接で仕留めるように言っておこう！

いやいやいや落ち着こう。俺は何を血迷ったことを考えているのか。魔を斬り伏せる近接戦のエキスパートである神鳴流を相手に、その接近戦を仕掛けるとか何を考えているんだろう。

仮に接近戦をする必要があるとしても、まだ新しく生まれた精魔奇兵の彼女達には少しだけ荷が重い、か？集団戦ならば問題は無いだろうが…。ここはやはり陽月姉妹か悪魔3人娘を当てるのが無難か…。

しまった、オリビエ達は表に出してないじゃないか…。それに彼女達は今、情報部三課に出向中だ。ダチュラから「大掃除をするから手伝って」とお願いされたから喜んでオリビエ達を即召喚して派遣した。

おそらく情報部内で資料が溜まったのかもしれない。書類とか高張るからね。大掃除というからには重い粗大ゴミを運ぶこともある。だから力持ちの2人と重量軽減などの魔法が使えるリビエラは重宝することだろう。

あ、最後に気になることがあった。オリビエ達を外向させた時、ダチュラの笑顔が若干引き攣っていたように見えたんだ。小さく「過剰戦力じゃないかな」と聞こえた気がしたが彼女はどうかしたのか？資料整理に過剰も何も無いと思うのだけれど…。

む？…まあ今それはいいとして刀子さんが立ち塞がった時は、やはり陽月姉妹に任せるとしようかな。2人に任せておけば大半の面倒事は実力を以って対応、排除してくれるから安心できる。

……それにいざとなったら神経ガスを散布して効果範囲内の敵を全て無力化すればいいし。

S i d e o u t 葵

「工房」情報部本部…。

S i d e ????

場所は情報部部长ダチュラの執務室。COS・MOSが操作していた模擬機体が彼女達の予定通りに襲撃された日だ。ここで部屋の主である彼女と同じく副部長のダリアが襲撃関連の事後報告書を読

み、まとめ、話し合っていた。

「で、こんなに居たのね？」

今2人が目を通してしているのは一課の敵陣に潜入中の者が提出した報告書とその他の一課の者が洗い出した隠れた敵対者や消極的敵対者に関する報告書だ。報告書に載っているのは皆、直接的間接的に敵対した者ばかりだった。

読み終わったダチュラは報告書を執務机に叩き付け、そのまま椅子に小さな身体を預けると苦虫を噛み潰したような表情をした。彼女達にとって数的には脅威では無いが敵対する者が居ること自体が不快なのだ。

「はい。COS・MOS襲撃に直接的、間接的に関与した者が全部で22人ほど判明。関与していなくても疑わしい者が数名、居りますが、こちらは危険度が低いと判断しました」

同じく読み終わったダリアだがこちらは丁寧に机に置く。表情にも変化らしいものは見られない。いや、眉間が僅かに歪み、瞳の奥に冷たい光が宿っていた。下手に感情を表に出すよりもこちらのほうが怖いかもしれない。

「むう、危険度が低いとか関係ないよ。……ダリア、私はね？マスターに仇なす全てを取り除くの。だって……クスクス そのほうが安全で確実でしょ？」

クスクスと鈴が転がるような声で無邪気に笑っている姉の様子に「可愛いなあ！もう！」と内心で悶えるダリアだが、それも一瞬だ。脳内で悶えていたことが嘘のように冷静に姉に言われたことについ

て暫し考える。

今回、情報部が把握している敵総数は直接行動を起した倉持一派14名、隠蔽工作などの間接的支援をした者が8名、そして動きを見せなかったがためにダリアが危険は少ないと判断したが疑わしい者が10名の計32名だ。

表立つた倉持一派を排除しても裏方に徹して姿を表に出さない者達は表向き扱いが難しい。そう“表向き”だ。要は事実を掴ませないようにあやふやの内に闇から闇へと葬ればいい。

ただ、それでも万が一、事実情報が表に洩れた場合、保険として相手が行なった悪事の証拠資料などや相手の弱みになるモノを用意する必要がある。いざとなればそれらで大義名分を作り上げて正当性がこちらにあることを情報操作するのだ。

ダリアは今回、動きを見せていない10名を除いた22名のみ目標を絞り確実に対応しようと考えていた。だが姉のダチュラはこれを機に一気に疑わしい者を含めた32名全てを根こそぎ掃おうと考えていたようだ。

表向き処罰の対象外である裏方支援をしていた8人を情報部が秘密裏に処理する時、ついでに処理することは実働員を増員すれば可能だと思われる。だが先にも挙げたように疑わしい10人には“保険”の用意をしていない。

ニコニコと笑う小さな姉を見ながらダリアは考える。一気に目障りな者をまとめて処理することはリスクもあるが彼女達が敬愛して止まない葵のために障害を取り除けるかもしれない状況にあることも確かだ。

ここまで考えてダリアはあることを思い出した。工作中、表情に乏しい眉間に珍しく皺が刻まれた。

「……しかし、それでは虐殺になるのではないかと……。葵様も極力流血を少なくしようとお考えなのでは？」

正直に言っただけで虐殺など自分達には戸惑うどころか眉一つ動かす理由にもならない。しかし、葵は少々違う。家族のためなら敵の血を大河の如く流すことに欠片ほど躊躇することはない。

だがこれが事自分自身のことになると臆病なくせに優しい、というか甘くなる……。特に……女性には。

その優しさや甘さが人ではない家族全員の悩みの種であると同時に「でも、そこが葵のいいところなのよ」と嬉しそうに語られる部分でもある。嫉妬する割りに最後には惚気られるという不思議な事態に毎回落ち着くのだ。

それはともかくとして追加で10人処理するにしても、これはそれなりのリスクを負うのだから葵にキチンと報告して指示を仰ぐかしたほうが良いのでは、とダリアは考えた。

「むー…確かにそうだよね……。マスターは優しいもの。襲撃してきた14人はそれ相応の報いを受けさせるとしても他のゴミ屑にはお慈悲をかけるかも……。でも」

そんな優しいところが好きなのよね　と言葉を続け赤面する姉の姿を脳内フィルムに録画しつつ全面的肯定を示す。

「ええ、葵様は甘く…お優しいですから。…不遜なことかもしれませんが私は時々考えてしまいます。私達が注意して葵様を裏からお守りしなければ、と…」

守ってあげたくなるから不思議です、と今度はダリアが言葉の最後に締めくくる。

「あはははっ そうだね。では、倉持一派の表立った14人はマスター達にお任せするとして私達情報部は潜在的危険分子を裏から対応します。よろしいか？情報部副部長ダリア」

「ハッ！既に一課と三課には連携して事に当たるよう指示を出し、同時に二課には拠点の地上と地下両方面の防衛、そして裏から葵様を護衛するようお願いしております」

立ち上がり踵を揃え最敬礼をする。作戦計画はほぼ予定通りに進んでいる。どうせ、やることは変わらないのだ。ならば迅速に行動できるように準備して短時間で終わらせられるようにしておくのが正解だろう。

「いいよ いいよ …ところで、あの方達は？」

「ハッ、出向されて来られたオリビエ様、リビエラ様、シルビア様のお三方は第一課から三課それぞれに増員として配置いたしました。…葵様は本格的な戦争を考えておられるのでしょうか？正直、過剰だと思われるのですが…」

「それだけ本気ということじゃないかな？あと今は新人も多いから保険の意味もあるんだと思う」

「なるほど…。では修正したとおりに作戦を続行いたします」

倉持一派14名は計画通り葵が表立って動き正当に処理する。若干の計画の変更点は、自分達情報部は裏で処理する8人について10人を加えた計18人をまとめて対応することになった。

最後には姉に甘いダリアが折れる形になったようだ。尚、このような些事は報告するに値しないとして独自の判断で行動することになった。こうして葵の安全は知らない内に確保されていくことになる…。

S i d e o u t ? ? ?

第六十四話「流れる陰謀と最後の用意と」の処理方法と（後書き）

葵の知らないところで排除対象者が増えている、だと…！？  
作者の意図しないところでこういう展開が増えていくんですよね！。  
もうどうやって收拾をつけていいやらわかりませんよー…。

最後に…作者に時間と文才を下さいorz

ではでは！B i s b a l d!

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第六十五話「カウントダウンと機械化兵団とメイドさん？」と（前書き）

うん、タイトルに意味は無いです。

毎回その場のノリと勢いで決めているからね！

はあ文章をコンパクトにまとめる才能が欲しい…。

色々書いていると、どうしても文字数が増えてしまうのですよ。  
癖になっていて直らないったらないorz

では続き！

4 / 8

上手く文章表現が出来ていなかったようなので一部加筆修正を加えました。

## 第六十五話「カウンタダウンと機械化兵団とメイドさん？」

喫茶店クレイドル…。

Side 葵

本来なら金曜のお昼の時間である今は馬車馬の如く接客をしているはずだった。…だったんだけど喫茶店の店内で俺はカウンターに突っ伏して脱力している。その理由の答えは喫茶店の玄関に張り紙にある。そこにはこう書かれていた…。

真に勝手ながら所用のため本日から暫く臨時休業とさせていただきます。

…はい、というわけで臨時休業中の我が喫茶店です…クスン。いやまあ何を突然と思うかもしれないけど、予定通りCOS・MOSの模擬機体が襲われたから現在、第一種警戒態勢と言ってもいい状況だから喫茶店は臨時休業なのですよ。

ちくせう…。だから戦いとか面倒なんだ。趣味の喫茶店も休まざるを得なくなってしまった。それでも当店に来てお茶やお菓子を楽しんでくれているお客様の身の安全を確保するには必要な処置ではあるから仕方ないけどね…。

誰だっっていう自称正義の魔法使いの手によるテロが起きるかも、わからない店に来たくは無いだろうさ。まあ正義を自称する割りに闇討ちする倉持一派に白昼堂々と仕掛けてくる勇気は無いだろうけ

どな。

万が一、トチ狂ったヤツが居てもおかしくないからこれは当然の処置だと思う。まあその時はとっ捕まえて情報部へ引き渡して手段を選ばない取調べを受けてもらう。絶対に…。

……………。

今、店内にはハオとユエは勿論だけど今は一種警戒に入っているからそれ以外に親衛隊から4人が護衛としてピッタリ張り付いている。なぜかメイド服（それも俺好みの正統派！）を着用していた…。それどころか着慣れた雰囲気がある。

ハオ達はいつも通り、一歩下がった両隣で待機してくれている。ただ、何でか知らないけどメイド服を着た4人が見詰めてくる視線にとてもキラキラしたものを感じた気がした。…………アレは何？

いやいや、まあそれはいいとして、だ。なんとなく今の状況に納得がいなくて、ぐてつと脱力していると隣の席に人の気配を感じた。この気配はアイリだ。間違い無い。…は？家族の気配を間違えるはず無いじゃないか。わかるよ！

「閣下、ご要望された戦力が整いました。ご確認をお願いします」

「…うい、どれどれ…？」

相変わらず丁寧に内容を整理された書類に目を通した。こういうアイリは一流秘書としても通用すると俺は思うね。ここにファレノが加わると情報整理など事務処理はこの上ない能力を発揮してくれるから助かる。

それで、なにになに？えーと…初期型シュワさん（型番S y u w a - T X N - 0 1）が400機に改良型シュワさん（型番S y u w a - T X N - 0 2）が200機、そして新型シュワさん（型番S y u w a - T X N - 0 3）が100機…。

ザッと流し読みした使用兵器一覧には各種シュワさん700機を使用するとあった。まだ備考欄は見えていないけど更にあると思う。

今まで影の薄かったシュワさん達だが今まで何もしていなかったわけではない！来る日も来る日も模擬集団戦闘演習などを行い、またある時はデータ収集のために数十機ほど未だに混乱が続く中東に送って実戦テストをやっていたのだよ！

蓄積されたデータのお蔭でシュワさんも01から03にバージョンアップしてグレードアップした。これで名実ともにシュワ“さん”だな！……まあ本当は俺も知らない内にアイリ達がデータ収集などの手筈を整えてくれていたんだけどね。

因みにこれらのデータは並列化処理をしてバグを除去したあとに統合、整理してからC O S - M O S にフィードバックしている。このお蔭で戦闘性能が飛躍的に向上していたのは驚きだ。データの更新はこまめにするものだよね。

A I 仲間としては次世代電子精霊融合型統合制御A I であり実体の無いアンも遍く情報の海、広大なネットワークの中から情報を取得し学習することでA I としての格が上がっているしな。物質じゃないけど情報量の多さは偉大だよね。

そう考えるとシュワさん達が得た経験値の全てがC O S - M O S

に集約されている、ってことだから彼女の成長率は意外とバカにならない。どこの影分身だと言いたいね。こっちは実体ありだけど…。

まあそれはともかくとして、だ…。

「各バージョンのシュワさんが700機か…。01系や02系はこれですべて？03系は？」

「はい。今ある01系の半分は改良を施した02系にグレードアップしています。備考欄に記載してありますとおり02系200機を後詰として待機、そして最新の03系100機を遊撃隊とします」

各種シュワさんが01系と02系が各400機に03系が200機の計1000機か。うん、いいねえ。これで地上戦における集団による相互支援戦闘を主目的に開発されたシュワさんが群れを成した魔法使い共にどれだけ通用するかの試験も出来る。

この他にもアカトンボが500機、上空で戦況を観察し戦闘データの観測をする。上空支援機としてカブトムシ450機を戦闘待機させてある。少なくとも感じるけど今回の先方にして主役はシュワさんだから、これでいい。

万全、圧倒的戦力と言うには足りないけど目的に副った戦力を用意してくれたアイリに感謝の言葉を送った。ただ、それだけだと俺が寂しいから何となく頑張ったね、と彼女の頭を撫でてしまった。サラサラでいい香りが…！

「あ、ありがとございますっ！ふふ…はっ！？こほんっ、しかし、これも皆の働きあってのことと考えます」

「ん？くくくつ。なるほど、アイリの言うとおりだ。個だけの力には限界があるからね」

取り澄まして言うアイリだけどその頬はまだほんのりと赤い。最初は恥ずかしい思いをさせてしまったかな、とも心配したけど嬉しそうに口元を緩めているから大丈夫だったらしい。本人は隠せていると思っただけで隠せていない。

このまま和みそうだったけど一瞬だけ寒気を感じてビクウウ！つと身体が無意識に反応した。咄嗟に原因と思うほうへ視線を向けると……いつも通りの陽月姉妹とニコニコしている新たな護衛の4人以外に居ないし無かった。

気のせいだったのか…？

寒気の気配も原因となりそうなモノも無かったし……。いや…そもその話しだが異常があれば八才達が逸早く気が付いて対応の対応をするはずだ。そう考えるならば、やはり今のは俺の気のせい、ということか。

ただ、隣に座ったアイリの引き攣った笑顔と顔色が優れなかったこと、それにプルプルと身体が震えているのが気になった。……有り得ないけど風邪、だろうか？

……。

集団演習で精魔奇兵の彼女達を純粹な魔法使いに見立てて実施したことあるけど戦闘方法が微妙に違っていたんだよ……。外側は人をベースにしているけど中の存在自体が半分魔法生物だから詠唱は無いし、参考にならなかった…。

だからシュワさんが本格的な実戦で本物の魔法使いを相手にした戦闘はこれが始めて…のはず？今までは中東の武装ゲリラが相手だったからね。だから、と言うわけじゃないけど麻帆良勢には期待していますよ。存分に暴れてシュワさん達を蹴散らしてほしい。

駆逐され、蹂躪され、殲滅され、撃滅され、屑鉄にされればされるほど戦闘データは蓄積され、そこから更に高性能のシュワさんを製作できる。いやー、こう言っちゃアレだけど丁度良かった！むふふ

COS - MOSの模擬機体を大破させた代償は最大限の利子付きで回収させてもらう…。

あー、そのCOS - MOSだが想定外のことです。元がシュワさんと同じ機体のはずの彼女が…もうね？“別物”と言えるほど変質してしまっただけで初期の設計思想には合致しなくなっていたんだ。

その一因は内部武装と外部武装はCOS - MOSしか搭載してないというのがある。…だって外見が初期COS - MOSなんだよ？それらしい武器を持たせたいじゃないか！俺の技術チートは世界一イイ！！と叫びたいね！

まあノリと勢いとその他諸々で個人武装を強化したら彼女に搭載された学習機能が変な方向に働いたのは何と言うか…はあ。

気付いた時は遅かったんだ…。自分でプログラムされた設計思想を書き換えて軍対軍仕様だったのを個対軍仕様になっていったんだよ。orz当初は誰かが彼女を調整したと思ったのに違ってたんだよ…。ラミエルさんとかアンとかもそうだけどさ。

……今更に思うんだけど自己進化する兵器とかさ…もう作成者の俺っていらなくない？

お蔭で特定条件下では一人無双できるくらい個人戦闘特化になっていて本来のデータ取りが出来なくて困っていたのは笑うべきか泣くべきか…。いや、ここは生みの親としては楽が出来て喜ぶべき、なのか？

フッフッフッ…。まあそれは置いておくでしょうか…。

今はともかく監視やら盗撮やらされていたストレスをここで一気に発散しよう。くくくっ 精々踊ってもらって俺の利益になってもらう。特に倉持君は絶対に逃がさないっ…！

……。

そのあと妙に挙動不審気味なアイリのことを気遣って簡単に明日の作戦を打ち合わせて終わらせた。帰り際に彼女に無理しないように、と心配して声を掛けたんだ。風邪とか有り得ないけど素体に問題があったら怖いからね。

最初はアイリも微笑んでくれたな。心配してくれてありがとう、とも言っていた。だけど俺の背後へ視線を移すと表情を引き攣らせて慌てるように「あわわ！？それでは失礼しますっ！」と言って店内から出て行った。どこの軍師様だよ…。

「本当に何があったし…」

とりあえずアイリが見ただろうものは何かと振り向いてみれば…。

「????我が君、どうかなさいましたか？」

「何か？気になることでもございましたか？」

ジツと見ている目の前には綺麗でソツクリの美人顔の姉妹が小首を傾げて聞いてきた。他の4人もニコニコと微笑んでいるけどやや不思議そうにしている。とりあえず、何でもないことを伝えて、またカウンターに突っ伏した。

「……………????」

あれ？俺が間違っていたのか？アイリは何に慌てていたのか…。やはり俺の気のせいだったのかもしれない。まあ家族同士で争う理由が皆無だから気にし過ぎなのかもしれない。俺は家族全員を愛していますっ！……………うん、家族の温もりは尊いと思うんだよ。

……………。

それから護衛の皆とランプやウノなどのカードゲーム、懐かしいジエンガなんかで暇を潰していたんだ。なぜか大富豪はユエがほぼ1人勝ちしていた…。いや！大貧民なら俺でも勝てる！……………負け惜しみだよ！悪かったな！？

こほんっ、まあそんなことはどうでもいいよな。すまん…。さて…皆さん、突然ですがお昼頃に来客がありました…。来訪者は2人1人は古馴染みのタカミチ、もう1人はガンドルフィーニ君です。

とりあえず敵意は無いようだったのでテーブル席に案内して向かい合って座りタカミチにはコーヒーを、ガンドルフィーニ君には紅

茶を出した。2人は飲み物に手もつけず、眉間に皺を寄せて何か難しそうな表情をしていた。

そのあと10分以上無言で向かい合っています。だが残念ながら俺には男と見詰め合うという特殊な趣味は持ち合わせていないのだよ。見詰め合うのならお前ら2人だけでやってくれと言いたい。

……お前ら本気で何しに来たし。

いい加減、焦れてきたので俺から話しを切り出そうとしたらタカミチがそれを察知したように話し始めた。

「……葵さん、今回のこと、僕達は学園長から聞きました。それでCOS・MOS君の損害は……」

タカミチ君は悲しいことを言うようになったな……。この子は俺の負傷した家族（無事だけ……）を“損害”などとまるでモノ扱いするような台詞を吐きやがった。ここはせめて怪我とか重傷とか……ほら？もつと言葉があるだろう。

確かにCOS・MOSを構成する物質は金属が大半だよ？でもさ、キチンと個としての意識存在は確認済みなんだ。もう一生命体として存在しているんだよ。ならばそれ相応の礼儀というか言葉の気遣いくらいしてもいいだろう？

勿論、彼女は人間だ、なんて馬鹿なことは言わない。言えるわけが無い。それは機械人形である今の彼女の存在を全否定する侮辱以外の何物でもないからだ。

機会人形“でも”愛せる？否！断じて否だ！機械人形“だからこ

そ”俺は彼女が、COS・MOSが堪らなく愛おしい！サラサラの綺麗な髪が好きだ！赤い宝石のような瞳カメラアイが好きだ！カモシカのような足が好きだ！彼女の全てが好きだ！

それを…それをタカミチは……！！

「おいおい、損害などと寂しいことを言うなよ……」

一瞬だけ気が抜けた…。人が良きにしろ悪しきにしろ変化するのは喜ばしいが時の流れは哀しいねえ、哀しいよ…。1人では臆病者で小心者の俺はカナシイと感じた。だから思わず…。

「なあ？タカミチ……」

タカミチだけに瞬間的に高純度の重圧を当てていた。これもハオとユエ、それに4人も家族が見守っていてくれるから出来ることだね。俺1人だったらこんなことできないかもしれないなあ。うん、俺、臆病者だしね。

タカミチの隣に座るガンドルフィー二君は冷や汗を掻いているから一瞬だけ場の雰囲気の変化したのを肌で感じたのかもしれない。なかなか鋭い勘と感覚をお持ちではないか…。若いのに比べて大分マシだったんだな。少々、意外だった。

言うておくが悪意や殺気ではなく純粹な闘気による精神的威圧だ。だって俺には殺意が無い。特別、殺したいとも思わない。ただ結果的に家族の誰かの手によって相手が死んでいるかもしれないというだけのことだ。

「ッ！すみません…。配慮が足りませんでした…」…………ツ…………」

「ううん？いや、わかってくれたならいいよ。で？話しを進めてくれ…言葉に気を付けて、な。くくくっ！ほら、時間は有限だ。早くしてくれ」

「は、はい。実は」

身体を包む重圧から開放されたタカミチはホッと安堵の息を漏らした。嘗て無いほど高純度の気に当てられて顔色を多少青褪めながら、突然訪ねてきた目的を話してくれた。途中、言葉をつかえながらも徐々に冷静さを取り戻して説明してくれた。

タカミチは丁寧の説明してくれた。ええ、それはもう丁寧の頭にバカという言葉が付くのではないかというほどに、な…。最初に威圧したのは確かだが、この態度は無いだろうか？脅えているようじゃないか。

いやいや、わかってているよ？説明の内容が内容だから俺が怒らな  
いかを気にしているのだから。こちらの予想より早くCOS・MOSが襲われたことについて話し合い…というか交渉をしに来たし  
ね。

で、だ。案の定、説明してくれたあとに学園長からのアリガタイ  
伝言を頂きました！長ったらしいので内容は省くが要するに“自分  
達で処分するから大人しくしていること”ということらしい。マジ  
でいらねえ…。

まあ宣言通りに今夜、学園長に電話にて引渡しに応じるか否かを  
確認するんだがね。ただねえ、今の状況から考えるに学園との戦争  
はほぼ決まっていると思うけど。だって、家族の皆が久しぶりの

戦争でヤル気満々なんですよ…。

オマケに、と言つてはなんだけど戦後1年はほとぼりが冷めるまで宇宙に上がるつもりだとしても今の内に余計な虫は早く潰しておかないと戻つた時の生活に支障が出るし何より不安だ。… 出来る限り取り除いておかないと。

つまり、だ…。ここで彼らとの話し合いは無意味以外の何物でもない。精々世間話がいいところか。男と話しても華がないから楽しくないけどな…！！うつつうつつ…！！ここに八才達が居なかつたら酒を出していたかもしれない…。

いやいやいやいや、それより何よりも俺の家族に手を出しておいて謝罪だけで許せというのが納得いかない。心が狭いと思われようとこればかりは構わない。俺は俺の大切な家族に害を及ぼした相手をこの世から消し去りたいんだ…。

だが、敵対者は多いか…。くくくつ！まだまだ人員の増強は必要かもしれないな。前は冗談半分だったけど、もうこつなつたら“目指せ！総家族数10万人計画ううう！！”を実行するとしてしよう。ただ、まだ自重なぞしないよ！

主に俺達の安全のためになつ！！

そんなわけで俺はテーブルの向かいに座る2人へ俺の自己解釈を交えながら確認するように少し威圧を交えて話した。… 2人の顔色があまりよろしくないのはどういうことだろうか？

「……うむうむ、なるほどねえ。つまりは俺に“報復をするな、手を出すな”とタカミチ達は“今、怒っている俺”に“命令”したい

んだな？」

「そ、そんなつ、命令なんてっ！これは僕個人、友人としてのお願いですっ！」

いや、タカミチよ……。これが命令ではなくて何だと言うのか。例え個人的なお願いだとしても俺の大切な家族が襲われたんだぞ？俺が報復に動かないはずが無いじゃないか 最低でも倍返しだな！あはははっ！

え？…周囲への被害？      それが何だよ？

被害？被害なら俺のほうが受けてるよ。タカミチ、お前さあ、あまり甘ちゃんなこと言ってるとお前も相応の覚悟をしるよ？いや、まあまだ正式に学園長から返答は貰ってないけど……正直に言っ引き渡す気ないだろ？

だからさあ…敵として前に出てきた時に知り合いだからって手加減してもらえろと思ったら大間違いだ。目標以外はなるべく殺したりしないが立ちはだかるなら腕や足の1本や2本は貰うからな。

タカミチと俺はお互いの意見が平行線になっている。正直、面倒だ…。こんな時は「オリ主だZETツ！！いえやあああ%& amp;l g j r j f \$ % & a m p ; n ! !」みたいに弾けられれば楽なんだろうな、と思っってしまう…。

ああいうのは個人だから出来る無茶だよね！俺もやりたい…気ままに暴りたい…。もうね？書類整理とか人間関係とか面倒で面倒で…はあ。あ、喫茶店は別だよ？あれは趣味だからまだ楽しめるのよ。

「…学園長も今回の倉持君らの軽率な行動を重く見ています。彼らには然るべき罰が下されるでしょう。そして貴方にも見舞金として相応の額が支払われることになります。どうか、それで…」

うん、少し待とうか…？ガンドルフィー二君、いや小僧…今、お前は何と言ったのか。俺の聞き間違いだったか？なんだか…つまり、あれだ。要約すると“金で忘れろ”と聞こえたような気がするんだがな。

「ガンドルフィー二先せ　　ッ!？」

突発的に俺の内なる力…魔力や気…が瞬間的に高まり濃厚な存在感となり溢れ出した。瞬時に店内を満たした時には緊張感がメーターを振り切った。室内に満ちた威圧感は今までの比ではない。敵対する全ての存在を否定する圧迫感を与える。

何かをタカミチが何かを言いかけたがあまりの事態に話すことすら出来ず無意識の内に両手をポケットに入れて無音拳の使い手として戦闘態勢を取っていた。俺に応えるように八才達も瞬きの間に双剣を手にしていた。

だが、今の俺にはどうでもいいことだ。タカミチのことは皆に任せておくとして、俺はガンドルフィー二君に話がある…。

「お前…少し黙ろうか？」

「ッ!？　　え、い、あ…」

おい？おいおい？何を怯えている？何を脅えているんだ？どうし

たんだよ、小僧？金で解決する、と言っていた先程までの威勢はどこに言ったんだよ。ああ、俺はお前のことをいい奴かもしれないと思っただよ？本当だよ？嘘じゃないよ？

勝手にそう思っていたただけだよ…。

まさか、まさかまさか、小僧がこんな成金な提案をしてくるとは夢にも思わなかったよ。ここに居ない嬢ちゃん達が今の状況を見たら何と言っただろうな？あーもー、俺はガツカリ…いや、これは学園長の入れ知恵か？良くも悪くも生真面目な小僧が？

そうだよ、こんなイヤらしい方法を自ら進んで取るとは考え難い。となるとこんな搦め手をしてくるのは、やはり学園長じいか…。これは時間稼ぎのつもりかね。金で形がつけばよしダメならばそれも、つてか？

フザケヤガツテ…。俺の家族を金で買えるとしても言つつもりか？

くくくっ！木乃香ちゃんを攫ってみるか。そうすれば俺の気持ちも…ダメだな。攫おうにも生真面目な刹那ちゃんしんせつが許してくれないし、のほほんとしている木乃香ちゃん本人も嫌がるだろうしね！。

…何？無理矢理攫えばいい、だと？

そんなことできるか！可愛い女の子は愛でるものであり優しくするものだっ！…このことで文句など言わせん！…駄々こねるヤツは問答無用でラミエルさんの荷電粒子砲を最大威力でプレゼントトしてやる…！

「葵さん、落ち着いてっ！落ち着いてくださいっ！？彼に他意はないんです！だから…！」

「黙れ。タカミチよ、何を慌てているんだ？俺は極めて冷静だつて。なあ？皆…！」

俺の言葉に背後に佇む陽月姉妹は微笑んだ。その途端に途方も無い重圧が店内を覆いタカミチ達は心臓を掴み取られる錯覚と首と言わず身体を斬り刻まれた姿を幻視したはずだ。

そして四方に居る護衛4人は何も言わずに綺麗な笑みを浮べていたが俺の言葉を理解すると更に笑みを深めた。メイド服のスカートが僅かに不自然に揺れたから銃を収めたホルスターの止め具が外されたのかもしれない。

皆は既に臨戦態勢ですね？寧ろ、かかって来いや的思考ですね？わかります、わかっていきますよ…。はあ、ハ才達にも言えることだけど彼女達の保有する魔力が過剰なまでに高まり瘴気のように垂れ流されていたのは錯覚だと思いたい…。マジで怖いから…。

そんな彼女達がタカミチ達に放つ重圧の正体は幻視させるほど明確な殺気と敵対することすら馬鹿なことだと思わせるほど身に纏う強大な闘気だ。直接向けられていない俺も背後からビシビシ感じる。

「あつ？つっ！ハア…ハア…！」

「うん？どうしたんだ、小僧。金で形をつけるのだろう？俺の家族のことを、さ…」

「……………」

む？威圧し過ぎたか……。2人とも顔色が悪い。あまりにも聞き捨  
てなら無い台詞が聞こえたからって精神的に追い詰めすぎたかもし  
れない。帰りに胃薬を渡してあげるべきだろうか。

「お前ら、帰れ……。話し合う余地など無い。そして次に会うのは

」

“敵”として、かな……。

……。

……。

多少、意気消沈気味のタカミチ達が帰って時間は経ち、今は月も  
出始める夜だ。待ち遠しかった……。くくくっ！ある意味、最も待ち  
遠しかった時間だ！倉持共の引渡しに関する返答期限が迫ってきた！

これに学園長は何と答えてくれるのかね？くくくっ！要求に屈し  
て外の魔法関係組織へ個人に屈した無様な姿を曝すのか、それとも  
あくまでも引渡しを拒否し強硬に抵抗して破滅寸前の被害を受ける  
のか。

うむ！楽しみではある！……正直、無駄な抵抗はしないでサッサと  
引渡してほしいものだけどね。余計な手間が掛かるのは面倒に過ぎ  
るからな。

まったく、いいじゃん、面倒な馬鹿をまとめて排除できるんだか  
ら学園長も万々歳スッコだろ。ハッキリ言っスッコて守るべき対象を間違えてい  
るとしか思えない。仲間にするにも選別は必要だと思っよ。

何でもかんでも受け入れていたら切りが無い。実力は優秀でも性格が歪んでいたのなら使い物にならない。百害あって一利なしだ。倉持らのそれを矯正もせずに居たのだから怠慢以外の何物でもないな。

くくくっ！まあ？その愚か者が居たお蔭で目障りな人間クソを14人もまとめて消すことが出来るんだからその点だけは感謝してもいいかな。……戦うことが面倒だけどな！あー…面倒な。

……。

さてさて、学園長が引渡しを拒否した場合、シユワさんの集団戦闘状況下におけるデータ収集や他にも俺達の利益になるように情報部が色々と画策している。秘密裏に学園都市を包囲しているから倉持一派が逃げることは不可能だしね。

あ、人員を増強してから凄いなだよ？機動兵器主体の作戦部と違って所謂“歩兵”や“作業員”関係は情報部にあるから中には俺も知らないような作戦計画も動いているかもしれないんだ。

…うん、まあ、だけど、俺に被害は無いはずだから黙認だな。うん、だって…。

「……（ボソツ）何か聞くのが怖いし」

「…申し訳ありません、我が君。今、なんと？」

「えっ？いや…あはははっ、何でも無いよっ。ただウチの子達は頑張っているな、ってねっ！」

言えない…。情報部が影で何をしているのか、わからなくて怖いな、なんて考えていたとは言えないよ。いや勿論、皆は可愛いし大好きだから何があるうと嫌うことはありえないけどね！

惑星破壊規模ではない限りは、ほぼ全てを黙認しますよ？まあ大規模な戦争に発展しそうになったら“めっ！”って叱ってあげないとダメかもしれないとは考えているけどね。とはいえ身内にはトコトン甘い俺にそれができるのかどうか、ハハハ…。

「ああ、そうでしたか。ふふっ、それもそうでしょう。皆、張り切っているのですよ」

「張り切って？…あー、小規模とはいえ久しぶりの戦争だからか」

「ええ、それもありましょうがそれだけではありませぬ。皆、我が君にいいところを見せたいのです。だから挙って敵将を討ち取ることでしょう。ふふっ、なかなか可愛い者達ではないですか」

うんっ！何だかもの凄く物騒な気配がしたかな！極力、目標敵勢力である倉持一派以外の殺害は控えてほしいかな！…最悪でも腕や足の1本程度に抑えてほしい。余計な殺しは怖いし趣味じゃないからさ…。

「あー…その…程々に、ね？…無理だけはしないように言っておいてね？」

何事も程々が一番だと思っただ、うん…。それはまあ、今回は俺も怒って…うん、激怒しているから倉持一派だけは1人残らず殺害、または生きたまま捕縛して生まれてきたことを後悔するほどの報い

を与えるけどさ。

「なんと…！聞いたか！？ユエよ！我が君は相も変わらずお優しいっ！」

「うむっ！その通りであるな！それでこそ吾らの敬愛する我が君だ！」

「承知いたしました！部隊にはその旨を徹底するように言い含めておきましょう！」

「え？あ、うん、頼むよ…！」

あれえ…？何か壮大な誤解を与えたような気が…。2人やメイド服の4人もキラキラした視線を向けてきているのか…？俺は敵を心配したんじゃないくて家族の身を心配しただけなんだけどなあ。

むー？いやそれでも敵味方への被害は出来る限り少ないほうがいい、のか…？うん、まあ殺ることは殺るから偽善もいいところではあるんだけどね。でも、ここは今後の関係のために“やらない善よりやる偽善”かな。

……。

身内の裏の存在の可能性を感じて「アレ？もしかして…」っとガクブルして考えていたたらいつの間にか時間は返答期限である午後8時、その5分前だった。

いや、マジでガクブルしていたわけではなかったんだよ？ただ例のメイド服を着た4人が心配してくれたのか護衛のはずなのに甲

斐甲斐しく世話をしてくれたんだ。飲み物を用意してくれたたり…マッサージしてくれようとしたり…他にも、ね。

メイド服の魔力（魅力）に俺はもうタジタジだったね！もう正式に戦闘服のデザインもメイド服にしちゃおうかな。今の個人兵装の戦闘服は特殊部隊のS・W・A・T・隊員みたいだから華がない。格好いいとは思っけどね。

これが終わったらマジで考えてみよう。どうせ木星までの航海中は比較的、暇になるだろうしさ。あ、その時はリチラにもデザインを手伝ってもらわないと。今の制服も彼女が大半をデザインしたも。のだから任せて安心だしね。

だが！ 正統派スタイルだけは譲れない！

こればかりはどんなに言われても譲れないんだ…！すまない、リチラあ…！！つて……あつ！？皆が乗れる船が無い！？忘れていたあ…。家族全員が乗れるような超巨大艦船が必要じゃないか…。

内部空間はお得意の亜空間操作で最大限拡張するとして…最低でも全長10km級艦船は用意しないとなあ。今から造って間に合うかな？いや、月の時間加速特区なら…いけるか。あそこの加速時間は通常の数百から数千倍だし。

あ……そうこう考えていると約束の時間になってしまった…。くっ！？こうなったら仕方ない。いざとなれば家族全員で時間加速特区に入り即効で造り上げるしかないな…。あーもー、ミスったなあ…。

はあ…とにかく今はやれることを片付けてから考えるところ。  
全てはそれから、だよな。えーと、電話は…？

「あ、ねえ？学園長に…」

「ハッ、こちらにご用意しております」

誰かに電話を持ってきてくれるようにお願いしようとしたらメイド服の1人がサッと子機を手渡してきたよ。まだ台詞を言い切つてなかったのに…。この子達はエスパーか？……あ、元精霊と元悪魔だったか。あはははっ、って関係ないし…。

「…用意いいねえ。うん、ありがとう。助かったよ」

それはともかくとして前もって用意してくれていたことは確かなのだからお礼は言うべきだよな！……うん、でもマジで今更だけど何で、この4人はメイド服を着用しているのだろうか？可愛いと思う目の保養になって俺としてはいいんだけどね。

「い、いえっ、当然のことをしたまですのっ。お気になさらずに願いますっ」

「うっん、それでもありがとうね」

「は、はい…」

か、可愛いなっ 頬を染めて「えへへっ」なんてテレテレとしているじゃないかっ！正統派メイド服が俺好みだから今の姿が俺のハートにドストライク…はっ！？まさか俺のメイド好きがバレていたのか！？

クツ！一体どこから情報が洩れたんだ！？俺の個人フォルダには  
嚴重にプロテクトを掛けて電子情報のバックボーンに隠しておいた  
のに！誰が…？まさか！アンか！？あのプロテクトを突破すること  
は彼女なら容易いか…！

ううう、ヒドイよ、アン…俺の隠れた性癖が皆にダダ漏れだよ…。  
この4人は俺のうるたえる姿を見て楽しんでるんだな…。もしか  
したら今までの姿もどこからか撮影されていたかもしれない…！恥  
ずかしいなあ……。

まっ！間近で皆のメイドさん姿が見られたから悔いは無いけどね  
っ！もう、こうなったら開き直ってやるっ！ああそうさ！俺はメイ  
ドさんが大好きさ！ふふんっ　　ダメだ、鬱だ、死のう……。

うううううう！！くくくっ！！くははははっ！！こうなったらこの  
怒りも上乘せして学園長にブツケルシカナイ！！えーっ？学園長  
への電話番号は04の……。

番号を押し終わるとトゥルルル、と耳元に呼び出し音が聞こえて  
くる。数回コール音が鳴り続くけど…。あれ？出ない…？遅い…。  
イライラしてテーブルの上で指をコツコツと叩いてしまっ。

俺が少しだけイライラッとしていると1人のメイド服の子が気を  
利かせてサツと紅茶を出してくれた。視線でありがとう、としてか  
ら香りを楽しんだら爽やかな香りだった。一口飲んでみると鎮静効  
果のあるハーブティだった。

なんて芸の細かいことを、と感心していたら電話口からガチャッ  
という音が聞こえ…。

『 ……ワシじゃ 』

… やつと出やがった。内心イライラがぶり返しそうだったけど、それじゃせつかく気を利かせてくれた子の気持ちを踏み躪るようになるから我慢だ。俺は耐える子、忍耐の子ですよ？ええ、限度以内であれば我慢できる子です。

「こんばんは、学園長 侘び寂も無くて恐縮だが早速本題に入らせてもらおう。… 返答は？ ハイかイエスで答えるよ」

『 むうう！…？ 』

だから限度以上のことには容赦しないんだよ…！素直に引渡すかそれともボコられてから引渡すのか選べよ。態々、二択で聞いてやつたんだから感謝しろってんだ！俺も優しくなったものだなあ…。

今日は何かとキレ掛かることが多かったから胃薬が欲しいなあ…。あ、撤回準備もおかないと…。

Side out 葵

第六十五話「カウントダウンと機械化兵団とメイドさん?と」(後書き)

これだけは言わせてくれ。

なぜにメイドさんが出てきたし…。

いや、作者も好きですよ？メイド喫茶とかは行かないですけど…。

奉仕の心は癒されますよねえ。可愛ければ尚良しです。

さて、ついに葵が学園長に啖呵を切りましたね。

臆病者の彼ですが背後に家族の皆が居るから強気にもなれるのですよ。

強力なバツクが居ると人間は強気にもなれるというものですな。

そして月で50km級戦闘移民船が建造されていることに気付いていない!?

自動人形達の頑張りは葵を喜ばせてくれることでしょうかね。

半分呆れるかもしれませんがw

ではでは!B i s b a l d!

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

連載一周年記念。(前書き)

うん、気が付けばもう一年が経っていました。  
早いものですねー。本当に早いものですー。

…一年かけて原作に突入していない自分にガツカリだよ！  
チクショー！原作エ…！なかなか手強いじゃないか…！？

うん、ごめんなさい。言ってみただけです。  
こうでもしないと作者のモチベーションがガタ落ちしそうだったの  
で…。

東北ではまだまだ地震の被害がすごいです。

こわいですよー。旅行中の家族が巻き込まれた時は不安が天元突破  
しました。

思い出だけでガクガクブルブルしますねー。

それと作者は関東圏在住なのですが余震が起きる度にビクビクして  
しまいます…。

地震マジでイヤー…。でもまだ続くようなのでションボリですー。

気合を入れるためにー！

頑張れ日本！負けるな日本！！勝つんだ日本！！！！

…あ？誰に勝つんだよorz

すまん、こんな落ちで…。

## 連載一周年記念。

?????。

Side ????

最初の“精魔奇兵”の始まりは1800年代の初期だった。これは不老という遠く永い孤独の運命を付与された1人の男が、その運命から逃れるために親愛なる他人、愛おしい家族<sup>ファミリー</sup>を求めた一つの究極の結果だ。

その男の名は“九重・葵”、髪は艶やかな黒、瞳も優しさを宿した黒色をしている。彼はとある理由（娯乐的な）で女神（幼女）の手によって世界の外より落とされてきた（落とし穴的な意味で）来訪者であった。

……。

……。

最初に精霊、悪魔とは…。

それは身体構成の大部分を純粋な魔力で構築されている存在。力の弱い下級精霊は単体での顕現も難しく、悪魔は召喚主の魔力を糧に呼ばれない限り実体化もしない。

早い話し、精霊も悪魔も魔力さえあれば暫くは擬似的な実体化が出来るのだ。ただし、魔力の必要消費量が馬鹿にならないが。

そもそも、精霊も悪魔も突き詰めて考えれば一つの魔法生物だ。それも人の手に入らない天然のモノだ。彼（彼女）らは魔法に特化した魔法生物である。特殊な例を除いて実体化そのものに魔力を消費するのだ。

因みに特殊な例と言うのは人間と人外の間<sup>ハーフ</sup>に生された子、所謂、混血と呼ばれるものだ。人間の安定した汎用性と悪魔や精霊の高い魔力適正、その2つを兼備えた存在。半分が人間ゆえに安定性が補強されるのだ。

代表例として鳥族と人間のハーフである桜咲・刹那、そして悪魔と人間のハーフである龍宮・真名が挙げられる。

ここまで聞くと、とても優れた固体に聞こえるのだが問題が無いわけではない。そして問題とは懐妊率が低いこと、仮に妊娠したとしても出生率が極端に低いことだ。

……。

ハーフは通常の個体とは違い強靱な身体を持つ。これを人工的、後天的に精霊や悪魔を昇華させることで擬似的なハーフ種を創り上げ、更に強化したのが精魔奇兵という存在だ。

そして身体の主な構成となるのが“素体”だ。これはその殆どを有機性のナノマシンと生体金属で構成されている。勿論、葵が魔導科学と言っているだけあり魔術的・魔法的生体組織も多数使用されており構成されている。

断言しておくが重くは無い、決して重くは無いのだ。羽のように軽い！比喩的な意味で！種族を超えて女性に体重と年齢の話題を振

ることは命取りになるのだ。覚えておくといい。

こほんっ、素体は巨大な白いマシユマロのような外見で、それが溶液に満たされた生体ポッドの中でプヨプヨと浮いているのだ。ついでに言つと融合前の素体は空气中に触れていると緩やかに組織崩壊を引き起こしてしまう欠点もある。

……。

こほんっ、つまり簡単に言つと精魔奇兵とは“精霊や悪魔と呼ばれるモノ”と“特殊な素体”を機械技術と魔法技術を融合した方法で“葵と言つ名を楔として世界に再誕”させたものだ。

ただし、なぜか創造主である葵の意思と関係無く精魔奇兵化すると必ず人間の女性体に構成されてしまう。当時も何度も改善を試みたが何れも失敗に終わっている。このことが欠点と言えば欠点と言えるのかもしれない。

最もそれは1900年代後期に精霊や悪魔の意思によるものが大きいことがわかり、問題は解決している。相手の意思を尊重する葵では何も出来ない問題だったので本人は半分諦めている。

それでも葵は期待している。男の娘、もとい男の子が再誕することを！可能性は限りなく低い、と言つかありえない。葵が性転換でもすれば望みはある……のか？

閑話休題……。

再誕した彼女達は元の身体とは段違いの身体的にも精神的にも、そして魔力資質的にも高いポテンシャルが付与または強化される。その力は圧倒的と言うほどではないがそれでも並みの実力者では足元にも及ばない潜在能力を秘めている。

そう秘めているのだ。最初から十全に能力を使えるわけではない。再誕直後は以前の身体と新しい身体との差に戸惑いマトモに歩けもしない。文字通り“再誕”、再び一から誕生したのだから当然と言える。

因みに生れた時の姿は千差万別だ。妙齡の女性、儂い幼女、活発な少女など外見や年齢が当てにならない。小さな幼女から大人な女性まで、その変化は幅広い。もう一度言うが女性体しか構成されな  
いというのは最早、呪いの域だ。

……。

そうして生まれたばかりで赤子同然の彼女達が最初にすることは歩行や手を使うなどの日常生活を通してのリハビリ訓練から入るのが慣わしだ。これにはやや非効率だが必ず一対一で補助マシツマンをする者が付く決まりとなっている。

この時、身体がまだ十分に動かせないので不足している知識面を学習、補強することが多い。詰め込み式の学習方法だが素体を構成しているナノマシンが補助脳を作り上げ、本人の学習能力を底上げしているため問題は解消されている。

これにより見聞きし学習したことは脳内で知識を整理整頓、管理

運営、黒歴史的封印、記憶の関連付けなどを容易に行なうことを可能にしている。これは絶対記憶の後付版と言えるかもしれない。

最も擬似的なものなので忘れることもあることをここに記しておく。

さて、人によつては機械を身体に埋め込むことを非人道的と言うかもしれない。だがこれは効率を追い求めた一つの結果だった。仕方がないなどと言いつはしない。ただ機能性や利便性を考慮した時これが最も適していたのだ。

そしてここで明言しておこう。例えこれがなかったとしても必ず補助脳は作られることになる、と。……こう、無針注射でチクツとナノマシンを注入される。

ナノマシン技術は葵の保有する技術の一つであるからだ。その代表例の一つにIFSイメージフィードバックシステムと言うものがある。IFSとは主に機動兵器の操縦端末に用いられたものだ。

これは脳内のイメージを機械端末にナノマシンを解して操作することが出来る。勿論、何でも触れるだけで操作できるわけではない。キチンとナノマシンに対応したIFS端末が必要だ。

機動兵器操縦だけではなく葵ファミリーの日常生活にも幅広く使用されている技術だったりする。寧ろ日常に使用していたものを逆に軍事転用した。操縦のレスポンスが早いのでなかなか優れたものだった。

葵に言わせれば個人的にファンだった花の名前を持つ某機動戦艦に出てくるもののパクリ、もとい利用させてもらっただけなのだ。

ともかくこれがないと葵謹製の建造物や艦内では色々と不便で困ることは確かだ。機械端末は別端末を手動で接続しないと使えない、小型輸送機や自動車などの乗り物も手動に切り替えないといけないので手間がかかるのだから。

それは置いてくとしよう。今後、触れるかは別にして…。

……。

さて、ある程度身体に慣れて動けるようになったならば次の段階だ。数人のグループを作り、腕立てやランニングなどの運動や格闘技術の習得、魔法や兵器を使用した戦闘訓練に入る。戦術などの座学も行なわれるのだ。

ここでは文字通り血反吐を吐くまで担当教官に扱かれることになる。寧ろ、扱き倒される。殺されると思われる時があるが、それは勘違い、勘違いなのだ。

ただし、担当教官によっては訓練の難易度は上下することもある。本当に僅かではあるが。それでも訓練兵の限界点をキチンと把握し尚且つ指導する時にはその一つ二つ上に難易度を設定しているので成長も早い。

もしも、この訓練を普通の軍属が受けるとするならば最長でも3日最短で3時間の内に良くて身体破壊のみ悪ければそれにプラスして心の傷を一生涯背負うことになることは受け合いだ。最悪、死ぬ。それも苦しみ抜いて。

そして最も辛く厳しい指導をするのは葵の懐刀であるハオ、ユエ

の陽月姉妹だ。彼女達の指導を最速で3ヶ月ほども受ければ即席ではあるが白兵戦のプロフェッショナルに迫るものを仕込むことが可能だ。

その時は訓練兵も死ぬ気（寧ろ死ぬ半歩手前まで追い詰められる）で教官のノルマをクリアしないと連帯責任で更に課題を出される。それもクリアできないと地獄も生温いほど暗い闇の底を見ることになる。

地べたを這う的な意味で…。

これら訓練を魔法球内（1時間を72時間に引き延ばす）で教官が合格を出すまで続けたあと、卒業試験として中東やアフリカなどで行なわれている紛争地帯にて実戦を経験させるのだ。これは一種の通過儀礼となっている。

そうして初めて一人前の精魔奇兵となれるのだ。

以後、彼女達が最も強化される方法は単純な自己鍛錬だ。例外として魔力・魔法方面の強化に限りだが葵の体液を媒体にした霊薬を飲用することで恒久的に渡り大幅な強化できる。

ただし、保有魔力や出力は上がるが緻密な魔法操作は鍛錬しなければならぬ。

……。

……。

さて、遅くなったがここで明言しておく、当時の九重・葵には人外だが家族は居た。この世界に来る前も大家族であったので1人は寂しいのだ。葵には耐えられなかったのだ。故に永い時を共に過ごす者が居たのだ

一番付き合いが長いのは精霊である水、火、風の3柱、次いで刀剣の九十九神であるハオ、ユエの陽月姉妹だ。

しばらく間が空いて悪魔の大剣、魔法、暴力の3柱が葵ファミリアに仲間入りした。その後アンやラミエル、COS・MOSのA嬢が加わるのだが、それはまたの機会にしよう。

……。

当初から葵は精霊・悪魔を精魔奇兵にするに当たって決めていることがある。それは個人的に親しい者に限るというものだ。それも当たり前だろう。誰だって親しくもない相手を家族にはしたくないはずだ。

当時から精霊や悪魔、その他の人外達などの親しいモノ達は大勢居る。最も悪魔も精霊も殆どが下級で、どんなに高くとも中級だった。

ともかく、その中から葵の“家族が欲しい”という願いを聞き入れた者が選出され、逆に自ら“身体（実体）が欲しい”と願い出て志願した者も多く居た。寧ろ、後者が圧倒的に多かった。

今の親衛隊であるアイリヤファレノ、リチラを始めとした18名からなる1stタイプは精魔奇兵の雛型とも言える者達だ。

そして大事なことだがここで勘違いしてはいけない。精魔奇兵化するのとは断じて強制では無いということ。これは彼女達自身の意思によるものだ。

彼女達の個人的な願望も多分に含まれている。

例えば、力の無い小さな精霊は好いた男と触れ合える自らの肉体を切実に求めた。

例えば、低位の悪魔は現世に長い時間、顕現できないため安定した身体を切望した。

これらの願いを聞き入れた葵は多くの家族を、絆を得ることになった。そして今後更に精魔奇兵はコツコツと、だが際限なく増え続けることになる。

将来的には総家族数が十数万に達することになった。しかし、それもまだ先の話だ。

……。

……。

家族が増えたことを葵はこの世の春と言わんばかりに喜んだ。増える度に盛大に大宴会パーティーを開き、出会いと再誕を祝った。……その度に食料生成プラントを圧迫したが改良と増設してからは許容範囲内に収まっている。

だが、気が付いてしまった。新世界で起こった大分裂戦争の最中から終戦間近にかけて、とある予測が小心者で臆病者の彼を恐れさ

せたのだ。幾つもの生命が無作為に刈り取られる光景は彼の悪い予測に拍車をかけた。

次は自分の番で、いつか自分や大事な家族の生命が奪われるかもしれない、と…。

葵は表面上、不安を表に出すことはしなかった。だが心の隅に追いやった考えは決して消えることなく内に燻っていた。内心では焦りに焦っていたのだ。故に葵は考えた。

攻撃されることが不安ならば頑丈な盾や鎧を用意すればいいのでは、と。

早速、葵は自分に付与された知識から使えるものをピックアップした。気分的に追い詰められたので多少趣味に走ることでストレスの解消もしたかったのもある。葵が密かに胃薬的なものを常備していたのは裏話だ。

そして、この時には既に機動戦艦アングレカムが試験的に就航していたので大きな意味で家族の安全をある程度は確保していた。この日から胃薬から解放されている。

よって葵が求めたのは個人単位、つまりは最小単位での安全確保だ。小さな脅威であれば携帯式のDフィールド発生装置を常時装備するようにすればいい。だが大きな脅威には不安が残る。大呪文やGプラストは流石に防げないのだ。

そこで趣味を多分に含んで考えたのが人型機動兵器だ。

葵は各種兵器を作成するに当たって2つの意味で家族を守ろうと

した。一つは物理的脅威からの守護、もう一つは無用な敵対心からの守護だ。

一つ目は前述の通り、敵からの物理的攻撃から身を守るためである。個人携帯より強力なDフィールド発生装置を機動兵器に積み込むことで安全性と防御力を格段に強化した。単純に頑丈な装甲もあるので防御は万全だ。

ただ、もう一つのほうはわかり難いかもしれない。これは驚異的な集団戦闘能力を有した彼女達を危険視させないように“葵謹製の兵器を使用したゆえの戦闘力である”と認識させるためのものだ。

つまり兵器を使用していない時の彼女達は大した脅威ではない、と思わせる狙いもあるのだ。いつの世も大きな脅威は忌避される。だからこそ葵はそれを回避するために裏で情報を操作したこともある。

機動兵器に搭乗していなくとも対人戦用装備パワーアシストスーツを着込んでいるので“葵謹製装備”の噂は裏で止まることを知らなかった。兵器購入を目的にした接触は勿論、兵器に関する問い合わせが多かった。

それでも葵は難を逃れた。主に当時、仮所属していた帝国サイドの事務方が問い合わせの連絡を塞ぎ止めてくれたお蔭で煩わしさからは無縁だったようだ。持つべきは帝国のお偉いさん（テオなどの友人）だ、とは葵の言だ。

……。

……。

一つだけ誤算があるとすれば葵を危険視する者が増えたことだろうか。より具体的に言うなら葵の作り出す兵器が、だ。鍛錬など不要で機械の補助を得てお手軽に強い力を得られる兵器の数々に驚愕した。

最も危険視したのは年配の魔法使い達だ。彼らは若い魔法使いに比べて機械式で手軽に強い力を得られることを嫌悪とまではいかないが遠ざける者が多かった。

年配の魔法使いは肉体や精神を厳しい鍛錬にて己の魔法技術を磨き、更なる高みを目指した時代の者だ。そういう者達から見ると葵のように機械に頼っている者達は鍛錬を怠ける軟弱者にしか映らないのだろう。

面白くない彼らだが、それでも強力な力をお手軽に得られることに変わりはないのは事実だった。だからこそ彼らは面白くない、でも事実、それでも面白くない、と負の螺旋に思考は陥る。

この時の葵の考えはただ一つに集約される。それは「関りたくないし、面倒だから情報操作しちゃうか」というものだ。

一般的な常識から考えて非人道的な呟きは鶴の一声ならぬ葵の一言だった。当時の葵ファミリーは250人前後の小さな規模でしかなかったがその固有能力を大いに活用したことで葵の願いは迅速に叶えられることになった。

葵に関する関係者や個人情報的大部分を抹消、修正するために一切の紙媒体や電子データを破壊し書き換えを行なった。個人の記憶に関しては親しい友を除いて認識阻害魔法を都市一つ覆う規模で順

次、記憶を修正していった。

何かしらの方法で記憶修正を逃れた者が居るかもしれないがそれは新世界人の全体から考えれば1%未満に満たないので見逃してもいい数字だった。これではほぼ完璧に葵達の情報は世界規模で書き換えられたのだ。

葵は「紅き翼」所属ではないが大戦には参加していた一魔法使いである、と。当然、葵ファミリーも同様の扱いだ。

事実を知っている親しい者達からすると爆笑ものだったが悪友や、<sup>テオ</sup>親友は称賛した。笑い転げながらではあるが。ただ詠春やタカミチ少年だけは自分の功績を消す行為に納得していなかったようだ。本当に優しい男達だ。

……。

こうして表向き、葵ファミリーは忘れ去られるように隠居した。内心、葵は面倒事から解放されたことで狂喜乱舞している。チヨモランマ級の書類の山から開放されるのだから喜びもするはずだ。

その後、旧世界は日本の京都にひっそりと居を構えていたが結局ガトウが仕事を何だかんだと持ち込むために厄介事から解放されなかったのは笑い話にもならない……。

……。

……。

過去を振り返っていた葵は空間モニターに映る夜空を見て考える。

「今度は宇宙か…」

機動戦艦アングレカムの艦内にある自室で1人呟いた。

S i d e o u t ? ? ? ?

連載一周年記念。(後書き)

やっつけ仕事だからおかしい点が多々あると思うけど…。

気にしない!!! 気にしたら負けかな、って思ってる!!!  
突発的に記念企画を思い立ったから不備は仕方ないんだよ!。

ではでは! B i s b a l d !

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第六十六話「学園側と戦闘準備と偵察と」(前書き)

今回は学園サイドを重視しました。

大きく事が動くのは次回かその次からですかね？

それと今回は

「～通常会話」【…～念話…】（～個人の内心～）

という文章構成の試験的に導入しました。

念話と通常会話はいつも通りです。

ただside??の三人称を使用するに当たり”（）”を使っ  
た心的表現を試したく思いました。

でも執筆している時、やり過ぎると訳がわからなくなるので今後、  
乱用は控えようと思います。

では！続きっ！

## 第六十六話「学園側と戦闘準備と偵察と」

時間は戻り、葵が宣戦布告する少し前…。

学園長室…。

Side ????

場所は学園長室、いつもならば学園長の近衛・近右衛門が日中はのんびりと茶を飲み、フオフオフオと笑いタカミチと茶飲み話をしたり、夜には何だかんだと十数年来の付き合いであるエヴァンジェリンと囲碁や将棋を指していることも多い。

だが、今の学園長室は困惑の空気が多い。その原因は室内の状態にある。ここには学園で主要な魔法先生や魔法生徒が集められているのだ。そして困惑した空気を発しているのは彼らからだった。

皆が皆、何事かとざわめき、近くの者と言葉を交わし情報交換するが事態を知っている者は少ない。その少ない人物であり学園長の命で日中に出払っていたタカミチとガンドルフィーニも今は帰還して同室内に居る。

ガンドルフィーニは彼の所属する班である高音と愛衣のもとに居るが表情は優れない。もう1人の出払っていたタカミチは学園長の斜め背後に立ち控えている。しかし彼のその表情は険しく、まるで苦虫を噛み潰したように歪めている。

現代戦闘術を取り入れた魔法使いとしては変り種だが実力のある

ガンドルフイーニと嘗て「紅き翼」に所属し今では魔法世界で屈指の実力者として知られているタカミチ、この両名の苦い表情や焦燥を感じさせる雰囲気から今居る者達は更に困惑する結果になった。

しかし彼らもただ困惑ばかりしていたわけではない。先の2人の態度から何か好からぬ事態に陥っているという想像だけは出来ていた。よって既に彼らには彼らなりの不測の事態に対する覚悟は済ませてある。

そしてまずは詳しい事情の説明を、と彼らが考え今の事態を深く認識しているであろう学園長へ視線で“さあ話して下さい”と促す。学園長もそれに答えるように一つ頷くことで口を開く。

「……皆、よく集まってくれた。この中には既に知っている者も居るかも知れぬが昨夜、葵君のご家族であるCOS・MOS君が何者かに襲撃された」

ここに居る殆どの者達が学園長の言葉を一瞬だけ理解出来なかった。いや、したくないのかもしれない。それはなぜか？

一つに強固な学園結界が設置されている。これは人外の悪しき力を抑制するものだ。つまりこの学園結界は召喚主に呼び出された悪魔や妖怪などの強力な魔法生物を弱体化させることを目的にしたものだ。

学園結界の問題点はより大きな存在に強く反応することだ。もう少し言うとこれは、より大きい害意あるモノを優先して阻もうとするため小さな存在は見逃し易い傾向にある。侵入されても雑魚だから問題無いと言えば問題無いのだが…。

状況を知らない魔法先生や魔法生徒はやや混乱した。学園長は襲撃されたと言うがここ数日、学園結界に異常は無かった。このことから少なくとも外部からの敵ではない可能性が高い。では誰が？

ここでもう一つある。学園結界の他にも索敵術式がある。これは一定範囲内に侵入した者を感知し術者に知らせる効果がある。固定式の結界は術式の基点を場に刻み、その基点から一定範囲に渡って構築される大規模結界魔法の一つに数えられた魔法であった。

あつた、というのは近代にて魔法術式を改造、改善、改良と徐々に修正し最適化を施されたため今ではそんなに珍しくも無い構成になっているためだ。科学技術以上に進んだ魔法技術も日進月歩だったりする。

そんな索敵結界にも欠点は存在する。

結界の範囲を広げ過ぎると感度が落ちるのだ。大きなモノは問題ないが小さな存在は網の目をすり抜けるように侵入できる問題が起こり易い。ただ、これは術者次第では感知できるため問題は少ないので未だに改善されていない。

ここで外部からの侵入者ではない可能性が更に高まる。これら二つの結界にリンクしている彼女から報告が無いためだ。最もその彼女を信じている者は少ない。だが学園長やタカミチなどの古参は彼女を信じている。

それ以外にも少なからず彼女を信じている者は居る。公言はしないし圧倒的にマイノリティではあるが…。

それよりも今は襲撃された人物が問題だった。想像が憶測を呼び、憶測が恐慌を呼ぶ結果になる。連鎖的に波紋が発生して室内は騒然となる。

「彼らを襲撃などと…！犯人は一体誰が…？」

「何かの間違いかもしれない！外部から侵入されたのではないか！？」

「そんな…それでは学園の結界が破られたと言っているの！？」

「待て待て！それよりも万が一を考えて生徒達や一般人の安全を…」

「何を言うか！ここは直ぐにでも襲撃者の搜索をすべきではないか！」

「それも難しい…。もう学園には居ないので？」

「だからそれを知るためにも一度、犯人の搜索をしたほうが…！」

自分達の管理する土地で魔法使いが起した犯罪だ。一般の警察には任せることは出来ない。早急な対処が必要だ。人数や質にもよるが相手は魔法使い、下手な手段は周囲への被害を増やすだけだ。

議論は激しくなり場は荒れる…。

「静まるのじゃ…！！！」

「…………… ツ！！！！」「……………」

かに思われたが学園長の一喝により場は一瞬で静寂に包まれた。激しい議論を交わっていた者達も冷静になった。幸いにも一喝した時に窓ガラスがビシビシと震えて不吉な音を立てていたが割れるようなことにはなっていない。

「落ち着くのじゃ。COS・MOS君から回収された映像や写真が

葵君から提出されておる。それらの証拠からワシが直接その者らを確認したわい。犯人は倉持君を始めとした他14人…。残念なことじゃ…」

「倉持が…そんな…ああ、眩暈が…鬱だ…」

「また？また、あいつなのか？…はぁーっ…」

「んーっ？面倒なことになってきた予感が…」

「アルフォードのバカが…何を考えている…」

無用な混乱を避けるために襲撃から今まで極限られた人物しか事件のことを知らされていなかったが倉持の名が出た途端に場は一気に意気消沈気味だ。ここでは軽く問題児扱いのようだ。

中には3、4人ほどが頭を抱えて「頭痛が痛い…」やお腹を押さえて「胃痛が空腹だ…」などと意味不明なことを呟いている。それだけ呆れと混乱が大きいのかもしれない。

その中で葛葉・刀子は眉間に皺を寄せている様子から嫌悪感が強く出ている。魔法使い至上主義者と神鳴流を担う剣士である彼女とは相性がよろしくないのだ。倉持が嫌味を言い刀子がサツと流す、そんなやり取りが通常だった。

性格に難があるが実力は十二分にある倉持と魔法使いではないが神鳴流剣士として確かな実力を持つ刀子。学園長達の手前表立って罵倒はしないが浅くない溝が双方にある。主に一触即発的な意味で…。

「学園長、返答の期限はもう直ぐ…」

傍に控えていたタカミチが学園長に言った時、まるで図ったかの

ようにして静まり返った学長室にジリリッと電話の着信音が鳴り響いた。誰からのかわかる学園長は受話器を前に出るのを躊躇していた。

「来たようですね…」

タカミチは覚悟を決めたように（諦観だろうか？）言っと視線を学園長へ向ける。その視線は暗にこう言っているのだ、「覚悟を決めてください」と…。正確に意図を読み取った学園長はわかっていても逡巡してしまふ。

今も尚鳴り響く電話の受信音は一向に切れる様子がみられない。だがなぜだろう、電話の向こうから“遅い…早く…早く出る…”と呪言のように聞こえてくるような錯覚を引き起こされた。皆、疲れしているのだ、きつと…。

学園長は考える。今は激しい議論が飛び交いそれを收拾するのに時間を取られてここに居る全員にはまだ葵が倉持の引渡しを要求していることなどの詳しい説明が出来ていない。十分な説明もなしに葵を相手に出来るだろうか、と。

だがここで出ないわけにはいかない。今、出なければ事態は更に悪化することになると容易に予想できた。なぜかと聞かれても学園長自身も断言は出来ない。敢えて言うなら長年の経験から来る“勘”だった。

「学園長、どうか…」

「わかっておる…」

学園長個人としては最悪、問題児一同を引渡しても良いと考えている、が一組織の長としては断固拒否の姿勢を崩せない。ここで屈すれば麻帆良が弱体化したと勘違いした外部の魔法組織が拳つてこの霊地を目指して侵攻してくるかもしれないからだ。

ゆっくりとした動作で受話器に手をかける。一息吐いてからズリリツと音を鳴らす電話機から受話器を一気に取り上げ自分の耳に当てた。因みにこの電話はスピーカーに切り替えられ室内に居る全員が聞けるようになってる。

「…ワシじゃ」

『こんばんは、学園長 侘び寂も無くて恐縮だが早速本題に入らせてもらおう。…返答は？ ハイかイエスで答えるよ』

「むうう！？」

電話の先に居る葵の声は散々待たされたのにも関わらず上機嫌に話し始めた……が一転して冷たい声色で無常な選択を学園長に突きつけてきた。最初の上機嫌な雰囲気はブラフで後半が正しい葵の思いだったことがわかる。

やはり電話口で長い時間待たされたことが我慢ならなかったようだ…。

その後も学園長は最初に謝罪を尽くし次いで交渉へ入ろうとしたが葵が頑として肯定を示さない。倉持一派の身柄を引渡せの一点張りだ。寧ろ学園勢力に喧嘩を売るように挑発紛いの言葉すら発している。

これにはスピーカーで聞いている魔法先生や魔法生徒もイラツとした。だが交渉しているのは互いのトップ同士だ。故に口を挟むような礼儀知らずのようなことはしない。話し合いが拗れたら目も当てられないというのもある。

話し合いを聞いているタカミチとガンドルフィーニは背中を流れる冷や汗が止まらない。葵は口汚くは無いが言葉の裏に隠した罵倒や嘲笑が見られるからだ。2人の心の声を例えるなら「拙いまずい不味いまずいマズイ…」というものだろうか。

今日、彼らが交渉時に垣間見た葵の姿から見るに今までの電話のやり取りは明らかにこちらが爆発するのを期待していると考えられるのだ。葵の考えが透けて見える…。戦争上等、寧ろかかって来いという状態にあると思われる。

2人は今無性に胃薬が欲しいと願った。このあと直ぐにでも学園の保健室で処方してもらおう、とまで考えて時刻が既に夜で保険医（一般人）は職員寮に帰宅していることを思い出した。他の保険医（関係者）は…同様だった。

「「はあ…」」

奇しくもタカミチとガンドルフィーニの色々な意味が含まれた夕メ息が重なった瞬間だった。今も尚、学園長と葵の交渉（戦い）は続く…。

……。

それから30分強の時間が経つと葵は一つの宣言を残して通話を切った。ガチャンと受話器を置いて学園長は一つ深い夕メ息を吐い

た。一番状況を把握しているタカミチは胃の痛みに耐えかねて冷や汗を流し表情が引き攣っている。

「諸君、聞いての通りじゃ。たった今、宣戦布告された。開戦は明日28日の土曜日、深夜0時じゃ。各自準備を整えておくように……」

学園長は重々しく言うつと魔法先生や魔法生徒は少人数で学園に宣戦布告とは片腹痛い、と考える者：同情を寄せる者：身の程知らずと馬鹿にする者：病気じゃね？とヤバイくらいに震える者：などなどの反応を示した。

その様子を窓の外から見ているモノがあつたことは誰も知らない

……。

……。

それからの行動は迅速に行なわれた。皆この事態に戸惑いを感じずにはいられないが何よりも学園や一般人、生徒達を守るために動き出す。戦闘開始時刻までおよそ27時間……。

当然、宣戦布告されて直後に危険人物として拘束するために学園の魔法使い達は葵の拠点である喫茶店を押さえに動く。これにはガンドルフィーニの班が当たった。……以外にも率先して動いたのは高音と愛衣だった。

……。

喫茶店クレイドル前…。

葵の経営している喫茶店クレイドルを前に胃の辺りを押える教師、正義感に燃える女子高校生、戸惑いチワワのような雰囲気の子の姿がある。駆けつけたガンドルフィーニ、高音、愛衣だ。3人はザッと周囲の様子を見る。

時刻が深夜というのもありレストラン街は静かなものだ。最も学園都市という性質上、あまり遅くまで開いている店は少ない。あるとしたら24時間営業しているコンビニくらいのもだろう。

最悪の事態で誰かしら迎撃に出てくることも考えて少々時間を掛け油断無く歩き徐々に喫茶店に近付いて行く。高音が先頭で愛衣がバックアップだ。ガンドルフィーニは班長として全体を見ていつでも動けるように準備している。

だが、ここでガンドルフィーニが予想だにできなかったことが起きる。いや、高音の普段の行動を考えると当然なのかもしれない、とは彼も考えるが、それでもこれは…と考えてしまふ。彼女が何をしたか、と言つと…。

後ろ暗いことをするつもりはない高音は堂々と喫茶店の戸をノックしたのだ…。

ガンドルフィーニの頭の中は真っ白だ…。周辺を確認後に念のため人払いの結果を掛けておいた。けどそれは万が一、戦闘になっても一般人を巻き込まないためだ。断じて堂々とお邪魔します、という意味で用いるものではない…はずだ。

「あら、お留守かしら？困りましたわね」

「お、お姉様？一応、私達は先行偵察の意味でここに来ているはずじゃ……」

喫茶店の玄関前でノックしたあと後ろの呆然としている2人に振り返ると肩を竦めてそう言う。高音のパートナーである愛衣のあわわという慌てようからお姉様と呼び慕っている彼女の行動に驚いていや戸惑っている。

「愛衣、何を言っているの？そんなことはわかっていましたよ。だからこうして正々堂々と……」

「いやいや、高音君、それはおかしいと思うんだがね。我々は宣戦布告された。彼らとは戦うことになるんだよ？」

幸いにも葵が留守だったからいいようなものの明確に敵対を宣言されたのに律儀にノックする者がここに居る。自分の信じる道を行う高値の真直ぐな気質を賞賛すべきか迂闊なことをするなど叱責すべきかと内心で悩み嘆息するガンドルフィーニだった。

「それが納得いかないのです！何も力行使しなくとも話し合いを行なえばよろしいではないですか！葵さんもわかっているはず……！」

高音は今回起こった葵の宣言が納得いかなかった。勿論、家族が襲われて怒り心頭なのは想像でだが少しは理解できる。だが今回の宣戦布告は別だ。犯人は既に明らかであり魔法犯罪は魔法世界の法で裁くのが今の常識だ。

それをいくら突出した力があるとはいえ、ただの一魔法使いが犯人の身柄を引渡せと言うのはおかしいと思うのだ。犯罪は然るべき

法によって裁かれるべきだと高音は考える。

「だが現に学園に対して彼は宣戦布告した。残念ながら明確な脅威となってしまうた。そしてこれは動かし難い事実だ、高音君」

「で、ですが…！」

ここに居るのは過去に危ないところを助けられた3人だ。良くも悪くも真直ぐな気性の高音だ。これに足して義理堅い性格でもある。

だからこそ助けられた借りを返すためにも何とかして今回の事件を早急に収束させるためにここに居る。あわよくば直接話し合いが出来る機会があるかもしれないから先行偵察の役目を買って出たのもその一つだ。

「あ、でも、やっぱりおかしいですよ。私も学園長室で聞いてましたけど葵さんワザと挑発しているような気がしました。まるで何か別の狙いがあるような…」

「「あ……………」」

言われてみれば確かにそうかもしれない、と愛衣の言葉を切欠に2人は考える。今、思い出してみるとあからさまな罵倒こそ無かったが葵にしては珍しく好戦的な言葉が多かったように感じる。

愛衣の言うようにまるで戦うことを望んでいるようにも感じられる…。

ここまで考えて2人とも何を馬鹿な、と首を振り今浮かんだ思考を追い出す。大きな学園組織を相手に、たったの4人（1人は実質

戦闘不能)で喧嘩を吹っ掛けるなど馬鹿げている。戦闘狂でもまだ考えるというものだ。

「……今、それを考えても仕方ない、な。それよりも彼は留守のようだし建物の中から人の気配も感じない。どうしたものか……」

「偵察の任務もありますし……入っちゃいます?」

「「っ!?!」」

先行して敵偵察するのは第一だったが強襲して威力偵察するのは認識外だった。例え葵達が居らず留守だとしても建物内に突入するのは危険だ。置き土産に何かを置いていかれたかもしれないのだから尚更だ。

「愛衣、貴女なかなか大胆ね。……何か狙いがある、とか?」

「いえっ、そんなっ……葵さんのお部屋に興味があるなあ、なんて私は考えてませんよっ?あくまで偵察が目的ですっ」

高音の意外だと言う賞賛紛いの言葉に、言われて気が付いた愛衣は慌てた。内心、自分の大胆な発言にドキドキしていたのもあるだろうが慌てたが故に一部本音らしきものが洩れ出たのはどうしたもののか……。

過去に危ないところを助けられ更には、愛衣自身は丁寧に治療されたこともある。葵という人物はお年頃の彼女にとって恋とは言わないまでも気になる男性くらいには興味のある存在だった。

そんな気になる男性のお部屋に理由はともかくお邪魔できる機会

が直ぐそこにある。愛衣のようなまだ若い女の子には好奇心をピンピン刺激されることだろう。

「……はあ」

「う……」

他意はないのだろう。いや、全く無いとは言わないが……愛衣の目的が限りなく不順だったのは、なんとも締まらない一幕だった……。

……。  
忘れているかもしれないが彼らにとってここは敵地のご真ん中だ

……。

「おほんっ！あー、まあ、なんだ？とにかく侵入するにしても、ここは仮にも魔法使いの拠点だ。相応の危険があると見るべきだな」

「先生はこの建物内に自動迎撃用のガーゴイルやゴーレムなどがあるとお考えで？」

「それだけならばいいが強制転移されて遠い別の場所に飛ばされるかもしれない。または呪い系統の罠トラップが用意していることもありえる」

古くから往々にして魔法使いの工房（拠点）とは自分の研究成果を外部から守るために様々な仕掛けを施す。侵入者から自領域を防御するため、逸早く敵を察知し罠を仕掛け迎撃するのだ。

ただ、昨今では魔法世界の布いた法で殺害は極力認められていないため驚かせて追い出すだけというのが主流だ。ただし法にあると

は言っても明確な基準があるわけではないので法の抜け道は未だに多数存在する。

魔法世界の法とは杜撰なのだよ。やろうと思えば魔法で人の強制的に人格を変えることや任意で思考誘導も出来るから技術はともかく法の整備は遅速だったりする。

それでも魔法世界が大きく乱れないところを見るにMM上層部は別として民衆らのモラルの高さが伺えるというものだ。実際に犯罪は少なくないが人情味溢れる人が多いのは魔法世界の特色と言えるかもしれない。

「……どうします？ここは安全策を取って刀子先生と神多羅木先生の後発の班を待ちますか？」

「先生、時間が切迫している今、私は多少強引でも行くべきと考えます。葵さんの行き先の手掛かりでも何でも見付けられれば上出来ですし」

「それしかないか（ああ、胃が痛い）……。その前に後発の班には念話で連絡しておく。【…聞こえるか？こちら先発偵察班だ。聞こえるか？…】」

【…ガンドルフィーニ先生？どうしました？…】

【…ええ、実は ……】

ガンドルフィーニは念話相手の刀子に手早くこれから敵拠点に侵入する旨を伝え突入後に定期的に連絡するので途切れた場合の対処を願いだした。

後発の彼女達は周辺を探索しながら今後の安全を確保しながら進んで来るためここへ到着するのはどんなに早くとも20〜30分弱ほどかかる。その間に出来る限り情報を取得しなければならぬ。

コソ泥や押込み強盗と言うことなけれ、彼らも学園やそこに住む人々を守るといふ強い想いがあるのだ。そのために出来ることをする、それだけだ。

「【…はい。ではそのように…】よし、これでいい。2人とも建物の中では何があるかわからない。油断せずに行こう」

「…はいっ！」「」

……。

喫茶店クレイドル店内…。

店内に侵入した3人は早速1階部分の搜索に入った。流石に不法侵入をしているため堂々と明かりを点けるわけにはいかないので闇の中で作業することになる。

店内は人気店の接客業をしているだけあり広い、奥には使い易さが目立つ厨房や来客用だとおもわれる落ち着いた雰囲気の間接間や店員の休憩室、廊下の奥には上階と地下室への階段もある。

……意外なことにエレベーターも完備されていた。電源が落とされているために動かなかったが。

「……特に変わった雰囲気はありませんね、お姉様」

「ええ、そうね…。店内には異常は無いように見えます」

1階部分を高音と愛衣、地下室をガンドルフィーニでそれぞれが探索に入ったが1階の結果は芳しくない。地下室を調べたガンドルフィーニは“地下の全てを探索したが何も見付からなかった”ようだ。今は地下1階が地下室の全てだ。

ここで彼らは一度、情報交換して認識の共有化した彼らは次の階を探索することにした。互いに特に目ぼしい物が見付からなかったのでガツカリしていると思ったがダメで元々のつもりだったためにそれほどでもない。

「2人とも、建物内に罠の類は無いようだ。次は2階を調べるとしよう。来てくれ」

「わかりました、今、行きます。さあ愛衣、行きますよ」

「あ、はいっ、お姉様っ」

……。

この建物は外観から推測して3階建て、そして調べてわかったが地下は1階のみ。2階部分の探索は高音と愛衣がやや先行してガンドルフィーニが3階を調べている。

それとここまで好き勝手に搜索しているのに不思議なことだが侵入者に対する迎撃が一つもない。最初は何かの罠とも警戒したが今は速さを重視したためにこれ幸いと次々に探索の手を広げていく。

2階を探索している高音と愛衣は危険が低いと判断し効率を上げるために二手に分かれて捜索に入ることにした。そして1人で捜索する愛衣は今、とある一つの部屋に足を踏み入れた。

もう一度言うのが侵入中につき今は明かりを点けられないために真暗だ。それでも小型のペンライトや小さな明かりを点す魔法を使えるのでそれほど不自由は無い。

「ここは…？ここが葵さんのお部屋、なのかな？…あ、男性用の服？じゃあこのベッドは？…んくつ（これは偵察…そう偵察なんです！故に問題ありませんっ！）」

トテトテと普段、葵が寝ていると思われるベッドの横まで来た愛衣は最後にキヨロキヨロと周囲に誰も居ないことを確認したあとにコクツと喉を鳴らすと小さくベッドにダイブした。

「…すう…はあー（これが葵さんの匂いか…。はふう、何だか落ち着くなあ…）…んー、眠くなっちゃいそう…」

まだ世間では子供と言っている年頃の愛衣が眠くなるのは仕方ないことだ。時計で時間を確認すると夜の12時前に針が進んでいたのだから。良い子（悪い子も）は既に寝ている時間帯だ。

ぎゅっと抱き締めた枕に顔を近付けると微かに葵の汗の匂いがした。それを不快に思わず逆に安心してしまいが愛衣は不思議に思わない。葵のベッドは大きいため投げ出された彼女の身体を柔らかく受け止めている。

この時、彼女の表情が“にへらっ”と緩んでいるのは説明し難いものがある。どことなく幸せそうだ…。

.....。

愛衣がウトウトとし始めて数分後、彼女は襲撃を受ける。

「愛衣ー？次を調べますわよ？.....つて、何をしていますの？」

襲撃と言っても仲間であり仮契約したパートナーでもある高音にだが...。それはともかく葵のと思われるベッドの上でまどろんでいた愛衣は堪ったものではない。親に自作ポエムを見られた的な恥ずかしさだろう。

「へう！？お、おお、おおお姉様っ！？あ、ああのこれは...違うんですっ！違うんですよ！？ただ夜も遅いし少し眠いかなあ、つて思ったら目の前にベッドがあったものですから、つい...！」

慌てた。今日、最大級の慌てようだ。上半身を起して両手をワタワタとさせている。火が点きそうなほど全身も真赤に染まっている。それでも抱き締めていた枕は手放さないのは愛衣クオリティ...

「愛衣...。ええ、わかっております。愛衣は疲れているのよね？...

...はあ（私は何も見ていませんわ、ええ、見ていませんとも...）」

「あううう.....」

.....。

そしてその光景を見るもう1人、それは逸早く3階の搜索を終え高音達のもとに戻ってきたガンドルフィーニだ。状況がよくわからないので声を掛け難い彼はドアの横で2人が出てくるまで待機する

ことにしたのだ。

建物内の3階から地下1階まで隈無く搜索したが結局、目ぼしい収穫はなかった。葵の行き先は掴めない。順当に考えるならば学園都市外に逃亡したと考えるのが正しい。だが、それはありえないと彼の勘は訴える。

それに女性同士の会話に男が入っても碌なことはないと妻とその親友からイヤになるほど学んでいるので自分は待つのだ。多少理不尽だとしても。

キヤツキヤツと静かに賑やかにするという器用なことをしている2人をチラツと見て考える。仮に葵と戦うとしてこの子達を自分達大人は守れるだろうか、と。完璧に守りきるのは難しいと思わざるを得ない……。

相手が少数ならゲリラ的戦術をするに違いない。そうなったら補足するまで手が付けられない……。

「……はあ、2人とも何をしているんだか。……（敵地であるということを忘れていないか？）」

表面上、麻帆良は平和だ。少なくとも今、この時は……。

S i d e   o u t   ? ? ? ?

オマケ…。

地下3階の一室…。

「キーンッ！！ファレノ、お放しなさいっ！！あの小娘っ！！よ  
りにもよって葵様のベッドでナニをしてやがりますのーっ！！？！？  
寧ろわたくしがそこで寝たいですわ！！無論、葵様と2人つきりで  
！！！！」

「だーっ！？ダメなのっ！！ここで時間まで待機しているのっ！！  
それに何、本音を暴露してるのーっ！！？今、出て行ったらここに居  
るのがバレちゃうのーっ！！皆も見えてないで止めてなのーッ！！」

「……………り、了解っ！？」「……………」

「うふ、うふふふ…！関係ありませんわ！！あんな  
のは始末してしまえば万事解決ですわ！！問題ありませんっ！！！！  
あのメス餓鬼などっ！フフ、フフフ！」

「だーかーらーっ！？出て行ったらリチラだけじゃなくて私達のこ  
ともバレちゃうのーっ！！…って、うわっ！？冷氣！冷氣が洩れてる  
のっ！！これ以上は葵ちゃんに迷惑かけちゃうのーっ！！それはダ  
メでしょーっ！？」

「ぐぬぬぬっ！！そ、それならし、仕方ありませんわねっ！！それ  
なら次回こそはっ…！！！！」

「次回も何も無いのーっ!!……ふう」

ファレノの苦勞はまだ続く……。そしてリチラの暴走はまだ加速する……。アイリは1人、葵と行動を共にする……。

## 第六十六話「学園側と戦闘準備と偵察と」（後書き）

葵の宣言した時間よりも早く学園側は動き出しましたねえ。  
卑怯とは思いません。だって戦争だもの！

それよりも愛衣のことだ。今回タレ愛衣にジョブチェンジしたぞ。  
いや、なんで？どうしてこうなったし…orz

ただし別に他意はない。今後の話しに絡むかは別だったりする。

つまり作者の気分！その一言に全ては集約される事実…。

やってみたかったんだよ…。

反省もしているし後悔もしている。でも懲りないです。

ではでは！B i s b a l d！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第六十七話「気遣いと秒読みと戦闘開始と」(前書き)

やっべ、マジでやっべ…。

うん、ごめん。なんとなく気分をやっべとか言ってみた。特に意味は無いです。

そんなことより今回は女の子分が半分しか入っていない気がする！  
やっべ、マジでやっべ…。(それはもういいよ…)。

この作品は女の子分で大半を構成されているのに…orz

これじゃモエが少ないじゃないか！

アニメ版ISも終わっちゃったし…orz

お、俺のバイブルが…インスピレーションが…色々とガタ落ちしそ  
うだ。

## 第六十七話「気遣いと秒読みと戦闘開始と」

アングレカム艦内…。

Side 葵

「む？どこからかファレノとリチラが言い争う声が聞こえた気が…？」

「お父さん、どうかしたの？言ってくれば私がやるよ？」

「…いや、何でもないから気にしないでいいよ」

はい！どこからか電波らしきものを受け取りかけた葵です！……  
俺は何を言っているんだろ？

まあそれはともかくここは機動戦艦アングレカムの艦橋です。俺が宣戦布告し、予告した戦闘開始時間まで残り10時間を切った。

ああ、それとあの学園長<sup>コウジ</sup>：昨夜の内に俺の喫茶店に数名の魔法使いを送ってきた。幸いにも俺達は宣戦布告した直後に重要スペースの地下2〜3階を残して撤収したあとだ。

地下1階と2階の間は元から隠し階段になっているので隠蔽は簡単だ。魔法使いを誤魔化すために魔法的隠蔽術は最低限に抑えて機械的仕掛けを重点に作った。これを発見して侵入するには超・鈴音くらいの科学知識が必要不可欠だと思う。

喫茶店の地下には月やアングレカム、または実戦演習を行う中東地域へ繋がる転移門<sup>ポータル</sup>が設置してあるからファレノやりチラ、他に数名ほど親衛隊から防衛として残ってもらった。

それで学園長が派遣した人員だが主に搜索をしていたのはガンドルフィーの班だった。あの班は他班と比べてモラルが異常に高いから建物内を荒らすことが無くて俺としても大変助かった。荒らされたら弁償させてやるところだった。

あ、でも、一部報告で不確かなことがあったな。ベッドがどうか……それはまあいいか。あー、それにしてもこれじゃまるで俺達が逃げたように見られるのは少しムカツとしたなあ……。

でも、あの場で開始時間まで小競り合いなんかしたくないし、俺の目的はあくまで倉持一派14人の身柄だけだ。極端な話しただけで他の魔法使いなんて俺の眼中には無い。無益な犠牲は出したくないのよ、うん。

逆に言うと利益になるのならば、どれだけでも被害を出すけどね！……身内じゃないよ？敵側の被害だよ！当然じゃないか……。

はあ、これが「完全なる世界」の拠点攻略のような状況ならば遠慮せずに大規模殲滅魔法を撃ち込んでから残敵処理をするんだけどねえ。ここには一般人や学園生徒も居るからそんな無茶が通らない、通せない。

こう考えるとここで戦うのは厄介だなあ……。今更、戦場を変えるわけにいかないし、彼らも滅多なことでは麻帆良から離れることはしないはずだ。どうす……あ。

「…そういえばラミエルさん、いつの間にか次元結界を展開できるようになっていたよね？」

『む？ああ、アレか。空間の位相をずらすことで結界内を別空間にするモノだな』

「うん、それぞれ。それって学園都市を覆うことができる？」

『ふむ…。試したわけではないので実際わからぬが理論上は……うむ、問題無い』

次元結界の展開は問題無い、と…。一応、結界展開を実験したことがあるがラミエルさんが独自に習得した次元結界は基本的に某魔砲少女が登場するアレとほぼ同様のものだった。結界内は薄暗くて好きじゃない…。

これなら生物は無理としても建物などの無機物の被害は抑えることができるか。そうなると問題は一つだけだな。生物の殺傷を抑えればいいだけだ。

やっぱり、ここは“これでアナタをフルボッコ！特殊ゴムスタン弾くん3”や“そこに痺れる！憧れない！？電気シヨックさんver2.5”、そして“捕まえた…もう逃がさない…クスクス トリモチ弾ちゃん”を使うべきかね。

3！？1はともかく2はどこに！？とか、え？ver2.5？中途半端じゃない？とか、を飛ばしてなの！？とか、ツッコミどころ満載だけど気にしてはいけない。

そしてこれらのネーミングも気にしてはいけない。お兄さんとの約束だ。破ったら今直ぐ君の居る場所にグラビティブラスト撃ち込むぞっ ……バカなこと考えてないでマジメに考えるか。

……。

「アン、COS・MOS、部隊の配置状況は順調？」

「うん、機械人形部隊は地下、地上の屋内や屋上、それと上空のここアングレカムに配置済みだよ。お姉ちゃん達は学園都市周辺にて待機中、これで誰も逃げられないよ。」

「捕捉ですが先鋒を担う機械人形部隊は元々が地上戦を主目的に設計されていますのでその大半を地下と地上に配置中です。他部隊は緊急時を想定し第二種戦闘待機の発令を予定しています。」

うむうむ、予定通りだな。今のところ大きな狂いは無い。今回の目的は大きく分けて2つだ。1つは表向きCOS・MOSの敵討ちと犯人の身柄引渡し（ここ重要！）。もう1つは多数の魔法使いを相手にしたシュワさんの戦闘データ収集だ。

涙を吞んでCOS・MOSの模擬機体を囮にしたんだ。倉持達の身柄だけじゃマイナスがゼロに戻っただけで俺達が納得できない。だから麻帆良を実験場としてデータ取りに強制的に協力してもらうことにした。これで始めてプラスになる。

……あれ？

「ねえ、アン、そういえば倉持一派の所在はどうなっているの？ここまで来て都市内に居ませんでした、ではお話しにならないんだけ

ど…」

「うん、それなら…」

『あはっ そのことなら仕方ないから私が説明するよっ！』

突然、俺達の間で通信で割り込んできたのはダチュラだった。まあ諜報関係なら情報部の彼女に聞くのが一番確実ではある。今や情報関連の殆どは彼女達、情報部の管轄だからね。

でもねえ、そうだとしても説明を途中で取り上げるのは感心しないなあ。ほら、アンを見てみなよ「ダチュラお姉ちゃん…」って呆れた視線を向けているじゃないか…。

こほんっ、まあそれは置いておいて、だ。ダチュラの話しによると倉持一派は学園サイドの魔法使いによって確保されて学園都市にある建物に一箇所にまとめて半ば強制的に“保護”されているらしい。勿論、事実確認済みだ。

彼らの確保は戦争とは別に、情報部が主導して事に当たってくれるので心配はいらない。寧ろハオとユエが鍛えた対人戦のエキスパートが多く配属されている部署だからこれ以上ないくらい安心だ。

「それじゃ俺達は精々暴れるから倉持一派のことは任せるね」

『まっかせてっ！手早く済ませてくるね あ、べ別にマスターに褒めてもらいたいわけじゃないんだからねっ！勘違いしちゃうダメだからね！?』

「え？うん。あ……通信、切れちゃった」

あらら？何だか知らないけどダチュラが通信を切っちゃった。何か急ぎの用事でも出来たのか？まあちょっとした不都合くらい彼女達、情報部なら嗤い、もとい笑いながら解決してくれるだろうから大丈夫か。

……。

我が陣営は着々と準備を進めて行き現在の時刻は午後9時、戦闘開始まで残り3時間だ。

「会戦まであと少しか。各員、最終チェックを開始。いつも通り焦らずに行こう」

「了解つ　相転移機関、良好、エネルギー98%で安定、Dフィールド出力89%で展開中、Gプラスエネルギーをプールへ充填率102%即時砲撃が可能だよ」

「…戦域データリンク、接続状況は良好。通信状況、良好。機械人形部隊および無人機部隊、システムチェック、オルグリン全て問題無し、機体状態良好」

あいあい。順調のようだねえ　Gプラスなんか使わないはずなのに、なぜに用意しているし、不思議だし……。明らかにオーバーキルにならないか？あれか？静止軌道上から爆撃とか砲撃をしる、と言うのか？

そんなことしたら学園どころか日本の一部が灰燼に帰するってえの……。日　沈没”とかマジで笑えないよ？あれは映画だから楽しいんだ。因みに俺は“日本以外全て　没”が好きだ。あのB級感が

堪らないね。

……悪いかよ。俺はB級映画が好きなんだよ。あのチープさが堪らなく好きなんだ。

「んんっ、さて、学園の封鎖状況と一般人の対応はどんな感じ？」

「学園の包囲状況は全体の89%進行中だね、うん、これならいい感じかな。予定では作戦開始5分前に完全封鎖完了だよ。でも、隠し通すにしても限界があるから最長でも日の出までには終わらせたいかな」

「…封鎖後、学園内に居る一般人や学生は催眠ガスと意識操作魔法で安全な場所に誘導、隔離予定。各生寮はそのまま避難区画として使用するため防御結界とDフィールド発生装置を設置します」

「それじゃ作戦開始1時間前には処置に入ろうか。皆に通達よろしくね」

「了解っ」「…了解しました」

うんうん、安全策は取れるだけ取らないとね。ただでさえ強制睡眠させることで本人の知らない間に迷惑かけるんだ。これ以上の迷惑は掛けられないし、万が一にでも一般人に被害が出たらやっつられないよね。

だって、寝覚めが悪過ぎるじゃないか。時間的に木乃香ちゃんや明日菜なんかは女子寮に居るだろうしお嬢様大好きっ娘の刹那ちゃんも護衛しているはずだから居る……はずだ。何事も木乃香ちゃん中心で考える悪癖があるからな。

それでも何度か今日の夜は寮から絶対に出るな、と言いつけてあるから大丈夫、のはず！でも上から要請されたら弱いところがあるからなあ。まあそれも学園長じょうが変な小細工をしていなければ大丈夫かね。

木乃香ちゃんは詠春の娘だけど俺も彼女が小さな頃から見ているからねえ。あ、勿論、刹那ちゃんもだよ？忘れるわけが無いじゃないか。これが今も可愛いけど小さな頃もこれまた可愛くてだな。……あ。

こほんっ、そ、それでだな？彼女達のことを娘や妹のように思っているから危険なことには巻き込みたくないんだよ。あー、それと明日菜は魔法に対しては無敵だから心配半減だな。今のあの子つてスゴイ勝気だからまるで姉御みたいだしね。

……誰だ？今、「年齢的に考えて孫か曾孫じゃないか？」と思っただのは？俺の歳のことはいいんだよ……。永遠の20代なんだからな！ゴメン、自分で言っていて気持ち悪かった。軽く鬱だなー！あははは、はあ……。

……。  
「さあ予告時間まであと少しだ。ハオ、ユエ行こう。最後に直接話しておきたい」

「ハッ、お供いたします！」

「うん、よろしくね。アン、COS・MOS、直ぐに戻るから状況を進めておいてくれ」

「了解つ」「…了解、お任せ下さい」

Side out 葵

麻帆良学園都市、世界樹前広場…。

Side ????

暗い未来を映し出しているか、夜空は星も月も隠す曇り空であった。日が変わる0時10分前の今、この麻帆良学園は静かに殺気立っている。その発信源はここ世界樹前広場だった。

この場には今、学園都市に所属する魔法使いや戦闘能力を有した関係者が麻帆良防衛に支障を来たさない程度で勢揃いしている。

招集された魔法使い達の中心に麻帆良学園学園長であり関東魔法協会学現会長である近衛・近右衛門が立ち、その傍らでは高畑・T・タカミチが緊張した面持ちで寒空の下、タバコを口に銜えていた。

「そろそろ、じゃな…。ふう…」

「……ええ、そろそろです」

言い出した学園長の表情が暗い。タカミチは携帯灰皿を取り出すと短くなっていたタバコを揉消した。苦い味がしたのは本人の表情

からわかることだ。周りの魔法使い達も緊張を高めていくのが肌でわかる。

「やー、やー、皆さん随分と殺気だっているじゃないか」

と、場違いなことにそんな明るい声が広場に響き渡った。その姿は見えなくともコツコツ、コツコツという足音だけが月の隠れた暗い闇の世界に響いていた。

街灯ですらその闇に覆いつくされんばかりの世界に突如として一陣の突風が走った。風は雲を運び星や月の明かりを呼び込むことになる。

「コッコッツ！！！！」「」「」

月明かりに照らし出されたそこには穏やかに笑う男が1人、そして主を守るようにその左右に侍る冷然とした女が2人。

「ん？はじめましての方も居ればお久しぶりの方も居るようだ！くくくっ！皆様こんばんは！私、九重・葵は今宵、我が家族の仇を取るためだけに参上いたしました！！」

喫茶店を形成している葵だ。ここに居る魔法使いの殆どを最低限、顔だけは知っている。それでも知らない者は多い。だから、はじめましてとお久しぶり。キチンと挨拶はする。ただし敬意を払うかは別と考えて。

そして挑発することも忘れない。こちらに大儀あり、とでも言うように大仰にハッキリと言葉にして宣言する。家族の仇を取りに来たのだ、と。悪を打倒しに来たのだ、と。

だが笑顔だった彼もそこまでだった。スッと表情が消えてその瞳には何も映さない。目の前に広がる魔法使い達など道端に転がる石を見るが如き視線だ。普段、家族や親しい者達に向ける暖かいそれとは似ても似つかない。

事実、葵にとって第一に家族、次点で親しい主要な者、それら以外はどうでもいいと考えている。だが今後のことも考えているため最低限、殺害しないように配慮もしている。……本当に最低限だが。

「…俺は今、憤怒している。だが今ここで最後の機会を与えようと思う。大人しく倉持を含む14人の身柄を引渡せ。さすればこの無益で無様で無駄な戦闘は避けられる。学園長“殿”も必ず負ける戦はしたくないだろう？」

葵の台詞にあった“殿”、それは明らかに相手を格下に見た敬称だった。現代ではそれほど気にする敬称でもないが明らかな侮りの意味を込めた言い回しだった場合はこの限りではない。

そして葵はこの戦いで負けることなどありえないと考えている。多分に趣味と遊びを含んだ今回の戦争だが驕りも油断もなければ慢心も皆無だ。全力で遊んで、全力で叩き潰す気である。

無論、倉持一派14の首は確実に刈る。これだけは譲らないし譲れない、譲る気もない。

「ふ、ふざけるなッ！！戦力差を考えてモノを言えッ！！」  
「ご家族のことは気の毒とは思いますが、これはやり過ぎです…！」  
「あの…！えと…その…！…あ、ああお、葵さ…あうう」  
「学園に対してこのような不貞を働くとは許し難いッ！！」  
「正義の名の下、貴様らの身勝手を許すわけにはいかない！！」

騒ぎ立てる学園関係者一同。一部、正義感の強そうな某女子とチワワな雰囲気醸し出した某少女の声がしたが気にしてはいられない。

何より今の学園長と葵が睨み合う中では雑音以外の何ものでもない。だが2人は雑音が聞こえないかのように振舞う。冷静に相手を見極めようとするように学園長は葵を見据える。

葵のほうはジツと何も映さない瞳を学園長に向ける。学園長をキチンと見ているのかさえ疑わしいが油断はできない、と傍らに居るタカミチは考え直す。馬鹿正直に正面から葵が来るはずない、と確信しているからだ。

葵が沈黙しているのをいいことに今も尚騒ぎ出す学園関係者達。

葵本人は気にしても居ないが彼の傍に侍る2人は我慢ならなかった。故に行動を以って鎮圧した。突然、何の前触れもなく学園関係者達の手前の地面が刹那の瞬間に二度、亀裂が走ったのだ。

「コッコッッ！！！！」「」「」

見ることも出来なかった二度の衝撃。白刃による一撃、先に動いたのは白の剣姫八才。黒刃の一撃、次に動いたのは黒の剣姫ユエ。学園関係者達は何が起きたのかわからずに啞然としている者やただ

ただ驚愕している者など様々だ。

「黙るが良いッ！……！卑劣なる汝らに我が君は寛大にも慈悲を与えておられるのだ！……！有象無象の雑魚が囁き、これを邪魔するな！実に耳障りだ！……！」

「……………」

「……………ッ！……！」

白の剣姫は声を張り上げる。敬愛する主の邪魔をするな、と。逆に黒の剣姫は最初の一撃以外は静かに佇んでいる。だが身に纏う空気は雄弁に語っていた。“黙れ”と言う一言を言葉にすることなく語っている。

学園関係者達は信じられないほどの重圧が一瞬、広場を包み込んだことで膝を屈する者や冷や汗が噴出している者、瞬時に戦闘態勢に入った者が見えた。だが、それぞれに共通することが一つある。

皆一様に身動き一つしない。いや、できないのだ。今、動けば殺される……。

「我が君、失礼致しました。どうぞお続け下さいますよう」

「あ……うん、ありがとう、うん。こほんっ、さて！うるさい外野はこれで気にすることはない。学園長殿の返答は如何に？」

葵は一つ苦笑すると八才達に下がるように手を上げた。2人もそれに従い、元の位置に下がった。もう一つ苦笑したが学園等に向き直る時には表情の変化はなくなっており静かに返答を求めた。

「……………答えは変わらぬよ。引渡しに応じることは出来ぬ。それが学園の総意じゃ。それよりも葵君が降参してくれぬかの？このままでは君達の身の安全も難しくなるのじゃ。ワシはそのようなことになつてほしくないのじゃよ」

流石、学園長。先程の重圧などでは堪えた様子が見られない。伊達に関東魔法協会の理事長を務めてはいないということか。……………普段はボケ爺なのにいざという時には頼りになる。

「身の安全、ね…。くくくっ、正義の魔法使いはなかなか言つじやないか。だが人様の家族を不当にも襲つただけでなく、その事実を内々にして無くそうとしているのだからな。それは悪に加担するも同義だ。違うか？」

葵は冷たく言い放つ。控えめに言つても友好的とは取れない言葉だった。

それも仕方ないことかもしれない。葵は初戦で大きな戦火で以つて麻帆良を防衛した実績を持っている。その後も依頼を受けて勝利を重ねた。葵も思うことあつたがそれでも短い期間だがこの地を共に守つた。

彼らの行為そのものは評価されて然るべきだろう。それなのに情報部が察知したのは一部とはいえ同じ麻帆良勢力の手による監視と盗聴、そして最後には不正な肅正計画だった。怒りを懐くなどというのが無理だろう。

学園長も葵の気持ちを少しは理解している。この麻帆良で自分の目の届かないところで不幸が起こってしまったことだ。普段、飄々

としている学園長だが一長として責任も感じている。

だが、学園長にも考えがなかったわけではなかった。何れ倉持を筆頭に不穏分子足り得る者達を何らかの理由を作り麻帆良から遠ざけるつもりであったのだ。それなのに数々の素行を黙認してきたツケが今になって現れてしまった。

読みが甘かった。だが、だからこそ教育者として苦渋の決断をした。倉持らの身柄をMM本国に引渡し、彼らに厳しい処分を下すことにした。

「フオフオフオ、そのことはケジメをつけるわい……。実行犯の倉持君達の裏も調査するしのうち。あとはMM本国の法に則って厳しく処罰されるじやろう。……葵君はそれで納得できるのか？」

「できないね。ウチのCOS-MOSは重症なんだぞ？納得できるはずがない。ああ、できないね。大体、あのMM本国が厳しく罰すると？くくくつ、冗談はやめてくれ、あまりにもオカシクテ嗤ってしまうじゃないか」

葵は笑う、嗤う、晒う。しかしその瞳に宿るのは嘲りと侮蔑、そして苛立ち。葵の心情に同調して背後の2人も鬨気を開放する。3人の周囲の空間が、空気が軋む、軋む、軋む。ピシッ、ピシシッと地面のレンガに罅が入る。

決して広い範囲ではないが重圧を感じ取るには十分な距離に展開している学園関係者は過度な緊張から喉を鳴らす者、手に汗握る者、負けるかと思いを燃え上がらせる者、哀しそうに見守る者、ただただ震える者、と様々だった。

謀略や策謀など裏では悪名高いことで有名なMM本国だ。元老院には老害も多い上に魔法至上主義者の議員も多い。更には言うなら葵は欲深い権力者など端から信じていない。

確かにMM本国の布いた法は魔法を前提に構成されている。長い年月を以って緻密に構成されたそれは素晴らしいと葵も敬意を持っている。しかし、それも昔のことだ。ここ数十年の権力者達によって今では半分以上が形骸化しているのが事実だった。

今やマトモな人格者として残っているのは学術都市アリアドネーの騎士団を総轄するセラス総長や新オスティアを総督として実質仕切っている数少ないマトモなMM元老院議員クルト・ゲーデル、あと数名といったところか。

MM本国を筆頭とした連合はダメだが帝国はいい。過去に葵ファミリーが徹底的にネズミ掃除をしたため散々に身奇麗になっている。長らく帝国へ赴いていないが政治の腐敗を起していない限りは今でも健全な政が出来ているはずだ。

葵も帝国の布く法ならば、と今になって頭の隅で思案した。しかし、それも今となっては詮無いことだ。今更、止まることなどできないのだから。

「……じゃが、法は法じゃ。それに変わりはない。例え悪法でもその時代に認められた法なのじゃよ」

「ふんっ、そんな毒にしかならない法などやめてしまえ。…はあ、元より交渉の余地はないんだよ。大人しく引渡すか、学園が半壊してから引渡すか、その二択だけだ。学園長殿、これが最後だ。引渡すか否か？返答は如何に！！」

「……何度でも言おう。断じて否じゃ!!」

学園長も葵も道を譲ることはしない。それを互いに声を張り上げることで、ここに覚悟とした。

今この時こそが決定的な亀裂を生んだ瞬間だった。

残念な結果に終わったことで葵がカクンと顔を伏せた。ここで不思議なことが起きる。彼らから放たれていた圧倒的な威圧感が突如として消えたのだ。苛烈なまでの闘気が襲い掛かっていたのに今は風が凪ぐように静まっている。

不気味だ…。

広場に居る学園側全員が感じた。威圧感も消えたのだから降服の意思とも見て取れる。普通なら誰でもそう考えるはずだ。しかし、目の前に立ちほだかる3人にはそれが当て嵌まらない。彼らは例外中の例外と見るべき相手だと判断していた。

そして皆が見張り見守る中、変化が起きた。葵が身体を震わせているのだ。

それは恐怖する者の姿か？否！

それは命乞いをする者の姿か？否!!

それは逃走する者の姿か？否!!!

それは降服する者の姿か？断じて否!!!!!!

それは戦うことへの歓喜なり!

それは叩き伏せることへの狂喜なり!!

それは蹂躪することへの狂気なり!!!  
断言しよう!それは勝利を確信した者の姿なり!!!!

「……そうか…そうかそうか。くくっ!くくっ!!よろしい!!  
ならば戦争だツ!!ラミエル!広域次元結界、発動!!」

『Roger, My Master』

葵は大きく笑いに歪めた顔を上げて両腕を大きく左右に振り宣言する。戦争の始まりだ、と。彼の呼びかけに答えたのは機械的な女性の声だった。同時に彼の胸元にあるペンダントから閃光が走る。

広場に居る者達がハッと気が付いた時には凄まじい速度と勢いで広域結界が構築されていた。瞬間的に学園都市の大半をドーム状に覆う用途不明の結界が展開されていたのだ。

内部は不気味な薄暗さで空間の隔たりがところどころにある。感覚的に鋭い者は空間のズレのようなものを肌で感じ取っているはずだが大半の学園勢には判断できない結界だ。

そしてこれだけでは終わらない。終わらせない。誰が終わらせるものか。葵は更に右手を上げて“何にか”に合図をする。

「……なっ!?!?」「……」

するとどうだろうか、合図と同時に正体不明の大部隊が景色から融け出るように現れたのだ。現れた者達は皆、大柄で同じ背格好で同じ顔をしている。黒い戦闘服を纏うその姿は不気味な力強さを感じさせられる。

現れた部隊はそれぞれが Gatリングガン、対物ライフル、マシンガンなど強力な銃火器、そして部隊後方にはMミサイルを内蔵した大きな発射機を装備している。全ての銃口、ミサイル発射口は例外なく学園関係者に向けられ照準されていた。

風のように突然、現れた大部隊に慌てる。状況から辛うじて葵がどこから連れてきたのは判断できる。だがこれだけの大部隊や銃火器を一体どこからというのはわからない。

土地柄から防衛が必要である性質上、個人で手に入る程度の銃火器は一部仕入れている。魔法関係では転移符などのマジックアイテムを裏では扱っている。それらから武器が流れたのなら直ぐにわかるのだ。

それなのに目の前の大部隊が使う大量の銃火器を売った形跡が見られない。故に学園関係者は何が起きたかわからずに混乱する。そして学園長も同じ思いだ。一体いつの間にかこれだけの大部隊を、と葵を睨みつける。

「まずは余興だ！精々この宴を楽しむがいい！くくっ！はっはっはっはっはっはっ！」

葵が大声で宣言するとキラキラと彼らの周りが仄かに輝きだす。見たことも無い方法だが転移のそれと同様のようで歪な魔力の動きを感じさせる。そう確信した次の瞬間には葵達3人の姿は消えていた。

残ったのは目の前に急遽展開した大部隊。ここまで銃火器を構える以外身動き一つすることなかった。そして葵という脅威が消えたことで今気付いた。目の前の大部隊から生きる者特有の生気を感じ

られないことに。そして …。

「 戦闘行動ノ開始ヲ、ココニ宣言シマス…」

戦闘は突然現れた大部隊からの一斉射撃から始まった。

S i d e o u t ? ? ?

第六十七話「気遣いと秒読みと戦闘開始と」(後書き)

ここまでやって気が付いたことがあるんだ…。

一年後に葵は麻帆良に戻れるのか?と…。

普通なら麻帆良に居られないでしょうが…。

どないするよ?どうすっぺよ?…どうしようorz

もう本格的に暴れるだけ暴れて世界移動を考えるかなあ…。

はあ…。あ、先行して行ってたやww

ではでは!B i s b a l d!

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第六十八話「苦戦と逆転と罠と」(前書き)

長期戦の予感がヒシヒシと…。  
では続き！

## 第六十八話「苦戦と逆転と畏と」

世界樹前広場…。

S i d e    ? ? ? ?

突如現れた敵部隊からの先制攻撃を許してしまったために現場は混乱の体を曝ていしていた。大半が重火器を使用しているのに少しのブルもなく正確な狙撃のような銃撃で一斉射撃されたのだ。

元から少人数を相手取ることを考えて陣形は狭めて展開していたのだ。そのため密集していたところに曲射されたMミサイルと一斉射撃による水平攻撃をマトモに喰らい、大きなダメージとなっていた。

それでもここは彼らのホームグラウンドである。大きな被害は出たが本拠地だけありまだまだ人員は居るため継戦能力は残っている。それでもその人員が混乱して統制が取れていなくては意味がない。

麻帆良学園の現学園長である近衛・近右衛門は年齢を感じさせないほど力強く大きな声を張り上げ事態の収拾を手がける。既に落ちていている者達は順次防衛線を引き、戦線の構築に入っている。

「皆、怯むでない！！落ち着いて防御陣形を布くのじゃ！！負傷した者は下がり治療を受けよ！！」

「学園長！！ここは危険です！！指揮所へ下がってください！！」

学園長以外で逸早く対処に当たっていたタカミチが学園長に安全な後方に下がるように進言した。学園長はチェスで言えばキング、将棋で言えば王将なのだ。この老人が倒れて喜ぶのは葵ファミリアだけだった。

「タカミチ君…しかし」

「貴方が倒れたらそれこそ葵さんの思うツボです！！この指揮は僕が引き継ぎますから学園長は後方から指揮してください！！」

今ここで戦線が崩壊しようものならそれこそ一方的な虐殺が始まってしまう。葵をよく知るタカミチ自身が明確にその光景を想像できるだけに必死になって説得する。最低でも前線ではなく後方の指揮所から指示を出してほしいと考える。

「う、うむう…！！わかった。ここは任せるぞい！！皆も良いな！この場は暫しタカミチ君が指揮を執る！！」

「「「「はいッ！！！！」」」」

「うむ。タカミチ君…」

「わかっています。お任せを」

「うむ…」

タカミチは学園長の言葉を遮った。一刻も早く安全な場所へと引っかき戻す。指揮所での確に指揮を取ってもらいたいのだ。それ

が全体の戦闘能力を底上げする結果に繋がると確信している。

いつまでも自分が指揮を取っていては自身の戦いに支障を来たす。本来ならタカミチは調査や前線で腕を振るうことを得意としている。このままでは味方勢力の戦闘能力が下がることにしかならない。

……。

「ふう……　　ッ！？左翼！負傷者が多い！！第二陣と交代する！  
！後退援護は第三陣がするんだ！！葛葉先生、神多羅木先生もお願いします！！」

「ハッ！」「おう！」

左翼では一時、混乱しているところに多数の大口徑ライフルによる激しい援護射撃が敵部隊後方から降り注いだため負傷者が大量生産されていた。それは狙撃の続く今も増え続けている。

やっとなことで混乱から立ち直った今ではそれぞれがするべきことをしているのが被害は減ったが既に負傷した者は後方に下げなくてはならない状態に陥っていた。だからこそタカミチは損害の小さな左翼の第二陣に後退させ回復を図ろうとした。

これは学園長が指揮を取り戻すまでの時間稼ぎのようなものだ。少しでも味方の損害を回復させ場を整えようとする彼なりの考え合っつてのことだ。

……。

「右翼！！動きを止めるな！狙い撃ちにされるぞ！！いいぞ！その

調子だ！左翼とバランスを取るんだ！！ああ、それと重傷者は早めに後方で治療を受けてくれ！！シスターシャークティ！負傷者の治療を頼みます！！」

「承りましたっ」

右翼では最初の一斉射撃とは打って変わり敵は装備を変更してサブマシンガンやショットガンを用いた近距離戦や刀剣類や格闘を用いた極近接戦が繰り広げられている。

狙撃のような見えない一撃による恐怖はないが少しでも動きを止めようものならどこからともなく現れた敵に近距離から最大威力の銃撃を受けることになる。

一撃されて即離脱というのは少ないが後衛型魔法使いの多い麻帆良では近接戦の相手は鬼門と云っている。徐々に体力を削られて止めの一撃で沈められる結果が続いているため負傷者が左翼同様に増えていた。

……………。

「中央ツ！！あまり突出するな！！左右から挟撃されるぞ！！両翼と呼吸を揃えて行動するんだ！！ガンドルフィーニ先生の班はとにかく動いて敵の動きを惹き付けて下さい！！瀬流彦先生と式集院先生は中央の援護を頼みます！！」

「了解したツ！行くぞ！高音君！佐倉君！」

「はいッ！」

「やれやれ、お腹空いたなあ……」

「式集院先生……」

現在最も戦闘の激しい中央は敵陣形が凹型になっているために味方勢力が凸型になり突出が目立つことになった。敵両翼の後方は中央の突出した味方部隊を挟撃しようとする隙を見ては散発的に砲撃を繰り返しては誘っている。

そして意図せず挑発に乗ってしまった味方部隊は噛み付かれた。敵陣形は鋭い牙が並んだアギトを閉じるようにして両翼後方は中央へ寄せて挟撃した。突出した少数の味方部隊が見事に齧り取られた結果に終わる。

現状を打開しようにも中央の敵戦力は両翼とは違い充実した火器をフルに使うことで弾幕としていた。敵陣営の後方からは雨霰の如く銃弾と砲弾が一方的に飛んでくるのだ。

気が付くとこれで空を飛んでいる魔法使いは優先して撃墜されている。そのためこの戦域では空を駆けることもままならない。このままでは学園勢力の魔法使いは地べたに縫い付けられた虫も同然だった。

そして漸く学園魔法使い達が気付き始めた。敵の銃弾や砲弾を防ぐ時に魔法障壁の効きが悪いことに気が付いた。よく見ると銃弾が障壁に接触する瞬間に魔力の気配を発していたのだ。つまりこれは魔法的術式が込められた銃弾ということだ。

愕然とした。敵の使う銃器の銃弾が対魔法に特化しているものがあることに。

確かに銃弾に魔法的細工をすることは不可能なことではない。繊細な魔力操作で以って少しずつ魔力を込めながら必要な術式を弾核

に刻み込み小さいながらも目的に合わせた特化型銃弾とする。

銃使いの視点で考えれば敵の使用する銃弾は対魔法使い戦においては比類なき助けとなるだろう。そして敵の銃弾の優秀なところは単純に銃弾を強化するのではなく障壁突破などという高度な術式を弾核に刻み込み使う、これ一点に限る。

無詠唱だろうがなんだろうがこれなら銃の引き金を引くだけでいいため即応性も高い。こんな物を使われる魔法使いは堪ったものではない。こんな反則が許されるのか、と泣きそうになる。

……。

戦闘が始まって30分以上が経った。時間的に考えて学園長が嚴重に隔離されている地下の指揮所に到着する頃だ。タカミチは左手の腕時計を見てそう判断すると周囲を見回した。どこから銃砲と魔法の爆発音が響き渡っている。

「みんな！今は持ち堪えてくれ！！勝機は必ず来る！……っ（マズイ。緒戦で受けた被害が馬鹿にならない。やはり先手を取られたのが痛いか……）」

負傷者の治療はしているが圧倒的に負傷する者のほうが多い。1を治療する間に2の負傷者が量産されているのが現状だった。

しかし、麻帆良学園勢もただやられていたわけではない。敵の武装、陣形、敵数などの情報を、文字通り身を削りながら観測していたのだ。その過程から敵数は千にも届かない地上部隊のみと推定された。

彼らが偵察中の時も敵部隊を5分の1ほど打ち倒していた。そして驚いたことに倒した敵は人間ではないばかりか生物でもない機械の塊だった。機械のところどころから魔力反応はするものの自動人形とは違うようだった。

戦闘中の今は細かく分解している時間などないので放っておくことしかできない。とりあえずこの戦闘に勝った時、この機械は麻帆良魔法技術部へ引渡され詳細に分解されることだろう。

閑話休題…。

敵部隊を2割以上撃破したがそれでも味方の被害は大きい。正念場というほど酷いわけではないがそれでも厳しい。不幸中の幸いだが学園主力には被害は出ていないため少しだがまだ余裕はある。

現状は決して楽観できるものではないが、かといって悲観するほどでもないはずだ、とタカミチは沈みそうな思考を上方へ修正すると、頭の中に何か引っ掛かった。

「……………何が…何が気になった？いや、何かを見逃している、のか？それは　何だ？」

敵の配置？否、多少単調な動きだが敵は十分な脅威だ。誰かが指揮を取っているのか、それとも予めプログラムされたことなのかは置いておくとして堅実な部隊運用だと思う。今見ても特におかしいところはない。

ならば敵の狙い？……それも気になる。そもそもこの戦いは倉持君にCOS-MOS君が襲われて重症を負わされたことへの過激な抗議とも言える。葵さん、家族のことになると見境がなくなるからなあ…。

んんっ、最初に葵さんは言っていた、“この戦いは敵討ちだ”とだけ倉持君の引渡しを僕達、学園側は拒否した。だから今の葵さんにとって倉持君を確保するためには邪魔な僕らを退ける必要がある。

家族を溺愛しているあの人ならおかしくないように思える。それでも　しかし…そう、しかし、あの葵さんが何も対策もしないで家族を危険に曝すだろうか？事前に危険を察知して方法はともかく確実に排除すると思えない。

他に気になることは敵の総数だろうか？葵さんが部隊を投入した割に実働員が少ないような気がする。あの人なら万単位で投入して物量で圧倒するのが常識だ。それなのに、これでは、まるで、実験のような…。

ドガンツという突然の大きな衝撃がタカミチの居る前方陣地を襲った。

地面と空気を伝わる大きな衝撃。濛々と舞い上がる土埃と噴煙。飛び交う怒号。悲痛な悲鳴の数々。雪崩れ込む敵。飛び交う魔法と銃弾。甲高く鳴り響く剣閃の音。ダンダン、ダンダンという鈍い打撃音。

「　　ッ！？！？今のは…！？被害報告！！」

「…は、はい！中央の後方付近に敵攻撃を受けようです！！負傷者は多数！内死者は無し！！怪我人は更に後方へ輸送中！！しかし治療の手が足りません！！」

周囲に居る魔法使いの報告と同時に、ふと見上げた上空に飛び抜ける数百機の飛行物体をタカミチは遠目ながら確認した。有難くないことに今も尚上空から波状爆撃を繰り返して被害を拡大している。

上空を飛び交う昆虫を模した機械の姿。タカミチは“それ”に見覚えがあった。イヤと言うほどありすぎた。

無人機動兵器。その形状から俗称カプトムシと呼ばれている無人機械。葵さんが機動戦艦アングレカムを造り上げた時と同時に生産された戦闘兵器群だ。

数千数万という圧倒的物量を盾に2機から3機を最小単位とする数機で連携して一対象を囲み、Mミサイル、クラストー爆弾などの爆裂系やバルカン、レーザーなどで袋叩きにする。

過去に葵さんが仮所属していた帝国で見た戦闘風景。何度も「完全なる世界」の拠点をアングレカム単艦で襲撃するのを見た。艦から射出される無数の無人機動兵器カプトムシは無尽蔵と錯覚してしまいそうだった。

何も知らない他人が見たら鬼畜外道の所業に見えること請け合いのエゲツなさだった。葵さん本人は自分のことを臆病な小心者だから敵排除を徹底しているだけだと言っていたけど、アレは…ヒドかった。

ドガンッ。またもや大きな衝撃がタカミチの居る陣地を襲った。

「クッ！……（葵さんは本気だ。本気で邪魔する僕らを排除する気だ…）。中央には治療を完了した予備隊を当てる！！念話で通達してくれ！！」

「はいっ！」

覚悟を決めよう…。正念場と言つにはまだ早いが、あと少し耐えなくてはならない…。なぜなら、学園長から指揮権を、皆の命を預けられたのだから。

「……（頑張ろう。今はそれしかないから…）」

……。

……。

1人でも多くの味方を助けるためにタカミチが必死に被害を抑えようとしていた時から更に10分が経過した。奮闘に奮闘を重ねることで緒戦と急襲爆撃が行なわれたことに比べて学園勢力は想定よりもやや多く戦力が残存していた。

『タカミチ君！たった今、指揮所に着いた！ここからはワシが指揮を取る！！』

「ああ、ありがとうございます！それでは指揮はお任せします！！  
僕は……！！」

やっとだ……！これで自分が自由に動ける、とタカミチは少々場違

いだが安堵した。彼はすぐさま肉声と念話で前線にて戦う魔法使い全員に学園長へ指揮権を返還したことを宣言した。

『わかっておるわい！一番、攻撃の激しい中央を任せるぞい！！』

「はいッ！！！」

「紅き翼」所属、“無音拳使い”高畑・T・タカミチ、今より出陣すッ！！

……………。

タカミチは全力で駆け出した。彼は瞬間に本隊から逸れた少数の敵部隊を叩き潰しながら急速に移動する。今まで居た学園戦場の後方から一気に一番、敵の攻勢の激しい中央陣地を目指したのだ。

敵を蹴散らしながら派手に移動するタカミチの接近を今まで中央戦線を支えてくれていたガンドルフィーニが気付いた。周囲の安全を確認しながらタカミチの下へガンドルフィーニは駆けつけた。

「高畑君、こんなところに居て前線の指揮はいいのか？」

「今は指揮所に居る学園長に指揮権を返しました。それで僕がここへ来たんです」

「そうか…それはいい。どうやら敵の攻撃は中央のここに集中させているようだからな」

ガンドルフィーニが言うとおり中央での戦闘は苛烈の一途を辿っている。

今回の戦闘は様々な意味で酷いものだった。緒戦から敵の先制攻撃を許し敵に戦場の流れを握らせてしまったのだ。そのせいで学園側は全てにおいて後手に対応をとる結果にならざるを得ない状況だった。

だが、それでもここは学園側の地だ。まだ人員も残っている。まだ学園の力を結集させれば逆転できるだけの戦力も残っている。全ての戦線を維持することに大きな問題はなかった。

しかし敵は狡猾だった。

緒戦から後手に回っているため制空権は既に敵に落ちているのが痛かった。敵は学園側陣地に、それも強烈な痛打となる場所に上空から強襲攻撃を仕掛けてきたのだ。そしてこれが中央戦線の戦火が苛烈に燃え上がるなる切欠となった。

緒戦の混乱から立ち直った直後に上空からの強襲攻撃。これは見る者が見たならば敵が学園側の陣形と位置、戦力の配分などの情報が洩れ、尚且つ完全に把握されていることを知らしめるものだった。

最悪なのは急襲された位置にタカミチが緒戦で出た負傷者を移動させた場所であり治療を受けていたことだ。被害は多数出た。そのどれもが等しくそして最大限に災禍を齎した。不幸中の幸いにも死者が出なかったことが救いと言えるかもしれない。

そして今タカミチを加えた中央戦線では彼の活躍とそれに鼓舞された味方が奮闘することで戦線を押し上げることができた。今も戦闘中。彼らは戦闘を続ける。

……。

押し上げた戦線の後方（先程までは最前線）で息を荒くしたタカミチ、傷や煤が多いガンドルフィーニとその班（高音、愛衣）、彼らは一時の休息を取っている。

「先生、敵は何か狙いがあるのでしょいか？これまで被害は出ていますが幸いにも死者は出していませんし」

「それはわからないな、彼が何を目的にし何を狙っているのか…」

「そうですね…」

ある程度上がっていた息を整えた高音がずっと感じていた疑問を班長であるガンドルフィーニへ問いかける。だがそれほど長く、ましてや親しい付き合いをしていなかった彼に葵が何を考えているのかわかるはずもなかった。

「葵さんはこれを“余興”だと言っていました。そもそもの狙いが倉持君達の身柄引渡しですからね」

傍で2人の話を聞いていたタカミチが会話に加わった。こちらは既に息を整え即時行動を可能な状態にしている様子だ。流石は元「紅き翼」所属していただけはあるとこの場に居る者達は感心した。

そして気になるのはタカミチが言ったことだ。改めて葵の言動を思い出してみると確かに“余興”だと言っていた。この戦闘が彼の言つとおりの余興ならば本当の狙いは別にある、または本命の戦力が別にあるということになる。

「お、お姉様っ、自分で出来ますから、あう…」

「いいから、ジツとしていなさい。…ふう、あの人達の身柄を、で  
すか？…はあ、葵さんは激情家なのかしら。意外ですね」

高音が愛衣の乱れた髪を梳きながら言う。戦場でも身綺麗にする  
のは彼女なりの思いやりと頑固な真面目さからくるものだろう。高  
音は煤で汚れた愛衣の顔を丁寧に拭き取りもいつの間にかしている。

「倉持…？…あ？　　ッ…！」

「ガンドルフィーニ先生、どうし…ッ！！まさかっ！！」

彼女達の和む姿を目にしつつ葵の狙いが何にあるのかを教師2人  
は考えた。そして思考の端から“倉持”の名をどちらかが口に出し  
た時、ガンドルフィーニとタカミチは一瞬で驚愕した。

2人は驚愕した顔を見合わせると頷き合い再度の思考を続ける。  
考えれば考えるほど今の状況は“旨くない”…。葵の目的が判明  
。

「高畑君！そのまさかだっ！チィィ！彼は始めから固執していたじ  
やないか！しくじった！！」

ガンドルフィーニは声を荒げる。そう判明と言うよりも最初から  
葵自ら目的を明言されていたではないか、“倉持らの身柄確保”と  
いうそれを…。彼らはそのことに気付かなかったことに頭を抱える。

そしてタカミチはもう少し考えてみた。この戦闘が例え“そう”  
だとしても、その必要があるのか？とも思うからだ。葵ならこのま

ま物量に物を言わせて自分達を蹂躪してから目的を果たすのではないかと…。しかし。

彼らの頭の中では“まさか…？”という疑いもあるが“まさか…！”という確信もあるのだ。だが本当に葵はやるだろうかとガンドルフィーニは考え、しかし彼なら“やる”とタカミチは判断し断定した。

それを証拠に緒戦からずっと優勢を保っていた敵勢力は“ゆっくりと確実に後退し押し遣られている”ではないか。

それを証拠に緒戦から後手に回っていた学園側は順調に攻勢の意志を取り戻し“戦線を徐々に押し上げている”ではないか。

いや、それはいい、いいんだ。例えば罫でもそれだけを見るなら“今は味方が優勢だ”ということに他ならないのだから。タカミチ達が言いたいのはそういうことではない。

戦線が押し上げられたことで学園側戦力の殆ど全てが“倉持一派の收容されている建物から離れてしまっている”ことが問題だった。これ見よがしに誘われていないのが憎い。今頃気付いてもここからでは間に合うかどうかとも怪しい距離だ。

倉持らの杖は取り上げているので危険性は低い。それに一応だが監視要員も居る。だが少数で戦闘員としては正直心許無い。故に事が事実だった場合は足止めにもならず要らぬ犠牲となるかもしれない。

敵のシツカリとした後退。高揚した味方のゆっくりとした前進。葵の公言し明言した目的。始めからの狙いはただ一つ。これは、そ

う。

「彼の狙いは最初から倉持君達の身柄確保にある……！」

「これは陽動……！！」「そんな……！！」

タカミチの言葉に、聞いていた高音と愛衣も驚きを隠せないでいた。教師2人も今までなぜ気付かなかつたと再度頭を抱えている。時間が巻き戻るなら昔の自分を殴りたいほどだ。

陽動……。

今、目の前で一系乱れぬ部隊行動を取って相互に連携しながら戦う敵全てが陽動を目的として運用されている。葵の戦力はどこまで増えたのかと考えたタカミチは一瞬だけ眩暈に襲われた。

気付いてみれば単純な方法だった。だが単純ゆえに引っ掛かった時の効果は絶大だった。

古来より使い古された方法だった。だが現代戦術でも有効な手段であることは事実だった。

もうどうしようもないほど戦線は緒戦の痛手を取り戻そう奮闘した味方の手によって、もう随分と前進している。戦場の空気に高揚した学園勢力は敵の奥へ奥へと巧妙にも誘導されていることに気付きもしていないようだ。

【……ッ……！……】

ガンドルフィーニは直ぐに学園長へ念話を始める。しかし先程ま

でクリアに通话できていたのに今ではザザツとした雑音ばかりが聞こえる。もう一つの通信手段として携帯電話も試したが結果は同じだった。

「……繋がらない？（まるで妨害にされているような…？）  
ッ！」

今更になって通信ができない（妨害されている）事実。それが示すことはただ一つ。敵の最終目的、つまり“倉持一派の確保まであと一歩というところに来た”という証拠に他ならない　　！！

「「「「 やられたッ！」「」「」

4人は迷うことなくすぐさま移動を開始する。駆ける。疾駆する。疾走する。滑空する。急ぐ！急ぐ！！急ぐ！！！！

目指すは勿論“倉持が収容された場所”！！

「 間に合ってくれッ！！」

タカミチ達は走る。間に合う可能性が限りなく低くとも…。ただ走る。

S i d e o u t ? ? ?

第六十八話「苦戦と逆転と罠と」（後書き）

葵の目的は倉持だけど…。

シユワさんが陽動？タカミチ達の勘違いじゃね？

仮に陽動だとしても結果的にそうなったただけだってWW

次回はどうなることか…orz

作者にもわからない（\* \*）クワッ！！

ダメじゃん…。

ではでは！B i s b a l d !

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第六十九話「指揮所と葵出動と目標確保と」(前書き)

戦争！続き！以上！

## 第六十九話「指揮所と葵出動と目標確保と」

少し時間は戻り…。

機動戦艦アングレカム艦橋…。

S i d e 葵

「ただいま アン、戦況はどんな感じ？それなりに舞台を演出したから相手も少しは動揺したと思うんだけど」

「いやー、緊張した！アレだけ多くの人前で挑発するのは大変緊張したね！後ろにハオとユエが居なかったら絶対に出来なかった。挑発すればするほど睨み付けてくる視線が鋭さを増していくんだよ？マジで怖かった…。」

そんな修羅場から一時帰還した俺は上空五kmに位置しステルス航行するアングレカム艦内から地上の戦況を空間モニターで確認する。三次元マップで構築されたそれは出来うる限りの方法で以って詳しく戦域を映し出している。

「うーんとねえ…うん、先手が取れたのは大きいね。これで全体の流れは掴んでるからこっちが緒戦は優勢だよ」

赤い三角印と青い三角印が横数百mに渡り衝突している。光学映像と合わせて見てみると両者が激しくぶつかり合っていることがわかる。先制攻撃したことで場の流れはこちらにあると言っている。

これならある程度、戦場はコントロールが出来るはずだ。

因みに赤が学園側で、青が俺達、そして少数の緑は……見学者？  
観察者か？まあともかく第三者ということだ。

「ふむ、ふとした遊び心だったが、存外出向いたのも無駄にならなかったかね」

第三者を示す緑の反応は全部で3つ。これは魔力と熱源、動体反応などで居場所を特定した。そして内一つ、光学映像で直接確認したらなんと超・鈴音だった。反応は1つだったから相方の“葉加瀬・聡美”は連れていないようだ。

似非中華娘が何しに来たのかという疑問はあるがこれは愚問だな。  
おそらくあの時の単独斥候が帰還しなかったことから今回のことを  
予測してスタンバイしていたのかもしてない。

超・鈴音の考えとして、あわよくばこの戦いを通して俺の総戦力を見極めようというところか。こんな夜遅くに観察なんてホントにご苦労さままだ。次の日が休みだからって油断しているとお肌が直ぐに荒れてしまうぞ？くくくっ！

む？そういえば超・鈴音は未来から現代に来た似非中華火星娘だったな。今までは考えたこと無かったけど“彼女の未来”に“俺と  
イレギュラー  
いう想定外”は存在していたのだろうか？

あの女神（幼女）がどうこの世界に干渉したのか知らないから対処のしようがないな……。対策はしている。800年あったからな。伊達に歳はとっていない。それでもまあ、「対応は“万全”しかし“完璧”ではない」、と言ったところかね。

一応、女神（幼女）の説明では“ネギま！”の類似世界ということだが、この世界の未来まで俺の情報が残っているのかがわからん。普通に考えれば残っていると思うが……むう？

とりあえずは行き当たりバッタリだが未来から来た彼女が俺のことも“知っているか”は知らないが“知っている”と仮定して動くのが吉だろう。知らないようならそれはそれでありがたいことだけどね。

それよりこっちのほうが俺には痛いな。今上空では数百機のカブトムシが飛び交っているのが空間モニターに映し出されている。このことからこれを見た超・鈴音にあの時、襲撃した地下基地の主が俺だとバレたと思う。

どうしよう、というのが俺の正直な気持ち。始末するのは簡単だけど流石にそれは浅慮に過ぎるというものだろう。原作キャラを討つなどしたくもない。先の事象が読み辛くなるしね。今も読み難いけど…。

とにかく今、超・鈴音のことは要注意に留めて置くことにしよう。

残りの反応2つ、これは超・鈴音とは離れた場所に居る。既に個体識別できるように登録されている反応だ。提示されている個人情報にはエヴァちゃんと茶々丸ちゃんの名前と詳細なプロフィールが……あ、エヴァちゃんがアメ舐めてる。

彼女らは別にいいかな。油断していると喰われるかもだけど付き合いの短い中では予想以上に俺も親しくしているしね。観測している茶々丸ちゃんから詳しい観測情報が超に流れるのが痛いけどね…。

……。

多数の空間モニターに映し出される情報をザッと見て戦況を把握する。緒戦の先制攻撃が効いているから状況は俺達の有利と見ていい。それを証拠にシュワさん部隊が緒戦を楔として学園側陣地に大きく侵入している。

学園側の前線は寸断間際で辛うじて食い止めていると言ったところか。今の軟弱な魔法使いでは出来ないことだ。流石は麻帆良、よく堪えたと称賛に値するね。

「……お？それにしてもCOS・MOSも機械人形部隊シュワさんの指揮に専念しているようだけど上手くやっているようだね」

三次元マップには大きな赤い三角印から分派した小さな赤い三角印が、同じく大きな青い三角印から分派した小さな三角印に挟撃されて撃破されたことを示すペケマークが追加、量産されていた。

大きな三角印が部隊の本隊、小さい三角印が小部隊やハグレ部隊を示すものだ。こういう単純な情報でも俺はいつも感じさせられる。そう“情報は力だ”と思う瞬間だ。これだけでも敵の動きが手に取るようにわかるしね。

そしてCOS・MOSは俺の想定以上に上手く部隊を効率よく運用していた。今も三次元マップでは本隊からハグレたり小部隊になったのを優先的に各個撃破しては学園側の戦力を確実に削っている。

光学映像で学園小部隊が挟撃されるところを見た時には内心で「お見事！」と彼女の指揮に掛値無しの称賛をしたほどだ。

だが、小戦闘だけかと言えばそうでもない。大きな戦闘ではゆっくり後退することで学園側の突出を誘引して左右の大部隊で挟み込もうとしていたしね。

三次元マップでは突出してきた大きな赤い三角印の先頭部分が2つの大きな青い三角印に左右から挟み込まれてガブリツと齧り取られていた。

あ、ペケマークが大量に……。学園勢の皆さん、ご愁傷様です。でも俺達を怨むよりは自分達の無能を嘆いたほうが建設的ですよ？くくくっ！

三次元マップと光学映像、そして情報画面から見るとシヤワさん部隊とCOS・MOSの情報共有化で意識統一が完璧に機能しているため群体（シユワさん部隊）がまるで一つの生き物のように動いている。

「んふふっ、COS・MOSちゃん、お父さんに褒めてもらうためにがんばってるんだよ。可愛いでしょう？」

チラツとCOS・MOSを見たら、大量のデータを捌きながらアソグがニコニコ笑顔で話しかけてきた。仕事が速くて助かると言えば助かるけどこの子も大概にチートだと思う……。

あの情報量を片手間の如く捌くとか俺にはできないことだ。半分も出来ればいい感じかもしれない。知識があっても身体が付いていかないこともある。限界は俺にもあるのだよ、ワトソン君。

それにしてもアソグさんや？COS・MOSが褒めてもらおうとす

るのは間違っていないと思うよ？思うけどさ、褒める内容が殺伐と  
しすぎてはいないかね？いや助かっているけどね。順調に作戦は推  
移しているけどね。

疑問を感じるが俺にとっては些細なもの、と割り切って考えるこ  
とにした。そうじゃないと俺の気が持たないからな。

そして今！俺のすることは唯一つ！！家族を褒めることだ！！  
家族内ではこれを常に心掛けると大概は上手くいくことを俺は学習  
しているのだよ！！！！故に褒める！COS・MOS、かーいーよ  
ー、COS・MOS！

「可愛いね、うん、可愛いよ！このまま上手くできたら撫でてあげ  
ようー！」

「っ…！（てれてれ）」

「「「「「（ジトーー…）」「「「「

俺はただ頑張っているCOS・MOSを褒めたただけだ。それなの  
に後ろに居る陽月姉妹と艦橋内に居るアイリを筆頭にした親衛隊皆  
の視線がイタイのはなぜだろう…。

もしかしてCOS・MOSばかり褒めたのがよくなかったのか？  
皆、可愛いのに今は視線が極寒ですよ？いや熱いのか？よくわから  
ん。そしてここで言わせてほしい。言い出したアンもその中に居る  
のはおかしいと思うのは俺だけか？

とりあえず長年の経験からここですることは …褒めること  
にしよっ。

気マズクなっただけはそれだ。それしかない。少なくともうちの家族間ではそれで解決する確率は断トツに高いのだ。

「……（ボソツ）皆、可愛いのに」

更に言うなら露骨にするのではなくさり気無く褒めると効果は抜群だ。露骨なのは笑いの場と冗談の時だけだ。

「「「「「つ！……（そわそわ）「「「「」

「えっ！処理速度が上昇した!？」

アンの驚きの声が艦橋内に響いた瞬間だった。

その頃の麻帆良勢……。

「うおっ!?!こいつらイキナリ動きに切れが出てきたぞ!！」

「皆さん気を付けて！確実に倒しましょう!！」

「おっ!って…あ、まず　ッ!」

「お！沖田あぁーッ!！」

「はっ？なんだか意識が飛んでいたような…？」

なんだろう…。COS・MOSの部隊運用やアイリ達の指揮するカブトムシやアカトンボ、その他の情報統制の精度がグンと上がったと思ったら幻聴が聞こえたような気がした。マジでなんだろう。

「お父さんどうしたの？心配事あるなら私が、その…がんばるよ？」

「いやいや、何でもないぞお、うん、何でもない」

「…「???」」

???いや？本当に何でもないはずだし？問題はないよね。むう、それも気になるけど今は戦闘に集中するべきか。それにタカミチ辺りなら、そろそろ……。

「さて、早ければ向こうもこちらの狙いに気が付く頃だと思っけど連中の動きに何か変化はある？」

「うーん…偵察機からの映像と各種反応を解析して判断すると…うん、個体熱源からタカミチさんと他三名…これはガンドルフィーニ先生達だね…が戦線を離れて行ってるみたい」

「ふむ、やはりタカミチか。それでどこに向かっているかわかる？」

まあ想像通りならあの万年出張英語教師めの目的地は…自ずとわかるというものだな。はあ、いつまでも少年だと思っっていたけど

キチンと成長しているようじゃないか、タカミチ少年よ。もう“少年”は卒業かね…。

「ちよおおつと待ってね 今メインスクリーンに… …はいつ、出たよつ …あらら？お父さんお父さん、タカミチさん達のこの動きは気付かれたかもしれないよ？こちらの目標地点の方面に急速移動中だもん」

「むう…。予想はしていたけどそれでも随分早い」

もう少し時間を稼げたと思っていたのにねえ。これは本当に“少年”は卒業かもしれないな。やるじゃないか 原作でも追跡捜査や単独潜入などでなかなか優秀ではあったけどイヤハヤ…参ったねえ。

さて冗談はここまでにして本格的な目標確保に動くのでしょうか。確か目標の確保に動いているのは情報部一課と三課の合同チームだったはず、それならまずは…。

「アン、目標に一番近いチームはどこ？」

「えつと…はい、出たよ 直線距離で一番近いのは情報部三課所属の第4チームだね。今居る地点からだ… …うん、急げばタカミチさん達より数分、早く到着するかな」

制空権は今も尚こちらが掌握している。タカミチ達は地上を走るか低空を這うように滑空するしか移動の方法はない。逆にこちらは上空を滑るよう移動できるから機動力は比べ物にならない。

第4チームを先行させて倉持達の身柄確保を最優先で処理させるように指示、それと同時に、後詰に俺達も出撃してしまえば確保だけ

は確実にできる。相手は14人も居るんだから後詰は俺、陽月姉妹、あとここに居る親衛隊から数人で行くでしょう。

……多少の予定変更はいいよね。

行き帰りの輸送も考えると乗り物が必要だよな。…小型揚陸艇“ミツバチ”を三機も飛ばせばイケるか。ミツバチ一機辺り18人乗りだから余裕のはずだ。兵員輸送を前提に作られたものだから小回りが利くし都市内でも問題は少ない。

「よし…それなら第4チームに連絡しておいて、“急ぎ目標を確保されたし”ってね。アイリ、親衛隊から、そうだね…4人貸してくれる？ハオ、ユエ、もう一度出るよ、今度は遊びじゃない」

目的を果たす。

「ハッ、直ちに向かわせます。格納庫で落ち合えるように調整致します」

「承知ッ！」

そう、シユワさんの実戦運用データの蒐集も学園勢力をこれでもかと言うほど威圧したのも挑発したのもオマケにフルボッコにするのも全てはこの時、この場、この結果のため　　ッ！！

待っている、倉持…。なあに大丈夫だ、安心していい。くくくっ！大人しく連行されてくれれば“その場”では何もしないよ。そう…そう！そうっ！ソウッ！俺の「工房」に招待してあげよう！！アハハハハッ！！

知っている情報を全て吐かせてから貴様らの薄汚い腸をブチ

マケテヤロウ…。

俺の家族に手を出したことが全ての間違いであったと後悔して死ぬがいい…。

「…さてさて、麻帆良学園の皆さんはどれだけ持ち堪えることが出来るかな。くくくっ！」

行くぞ、行くぞ、逝くぞ…！今、行くぞ？くくくっ！くはははははっ…！！

Side out 葵

某建物内の一室…。

Side ????

「クソッ、クソツクソッ！！なんで俺達がこんなところにッ  
！！」

口汚く喚き散らす男は名を倉持。先日、九重・葵の家族の一人であるCOS-MOSを不当に襲撃した人物だ。今は魔法媒体の杖も没収されているためただの人と変わらない。それはここに囚われている者全員が同様の処置を受けている。

彼らは今、学園長の命で犯罪の実行犯として学園内にあるこの建

物に幽閉の形で囚われている。他にも十人以上がこの建物の各部屋に数人に分けられて軟禁されているのだ。

「落ち着け、騒いでも今の状況は変わらない」

「ウルサイツ！！これが騒がずにいられるか！！俺は正義の行いをしたんだ！それなのになんでこんな扱いを受けないといけないんだ！？クソツッ！」

仲間の一人が倉持を落ち着けようとするがそれすらも煩わしいと言つように更に悪態をつく。自分は正義をなした、自分は間違っていない、自分は自分は自分……。ただ自分の正当性と説くのみだ。

「そつだ。俺達は俺達の正義を行なつたに過ぎない。だが、それが学園長の正義に副わなかつただけのこと……。今は待つほかはない」

「違つツ！！学園の正義は俺にある！！俺こそが正義だ！！あいつは悪と俺が決めたんだ！！ならばそれは悪だ！！悪を滅ぼして何が悪い！！！！」

「……………」

「フンツッ！」

根気よく宥めようとした仲間も倉持の激情に匙を投げた。実はこれで四人目だったのだが彼のやり場のない怒りは止まることがなかった。それどころか仲間にも八つ当たりの如く罵声を浴びせたり、最悪は殴り合いになることもあった。

これが27日に起きたことの全てだ。

……。

そして現在28日の時刻は0時を回った深夜。この日も変わらず倉持が癩癩を起し暴れそれを無駄と感じつつも仲間がやんわりと止めに入る。そんな日が、時間が続きまた日が昇るかと思ったがそれは違った。

その日の深夜、寝静まっていた時のことだ。扉の外からドガンツという爆発音が起きた。その建物を揺るがす大きな音と衝撃が彼らを襲い掛かる。爆発音を聞いた者達は皆、同様に飛び起きて状況を伺う。

「な、なんだ！何が！？」

「……………複数の足音が近付いてくるようだ」

倉持は突然のことで混乱して声を荒げ立てる。仲間は昼間も騒いでいたのによくその元気が続くものだ。彼に冷やかな眼差しを送る。そんな中一人の仲間が扉に耳を当てて複数の足音が自分達のほうへ近付いてくるのを感じ取った。

彼は扉から離れると直ぐに対応できるように身構える。倉持以外の仲間もそれに習うように扉のほうをジッと睨みつける。ダダダッという複数の足音が近づく、近づく近づく近づく……。

足音が止まった。

そしてこの部屋の扉を弄るガチャガチャという音がする。次にはシイーンと先程までの煩さが嘘のような静寂が襲う。危機は去った

と誰かが思った瞬間　　グシャツと扉（鉄製）が拉げて内側へ弾け飛んでくる。

仲間の一人が飛んでくる扉に巻き込まれかけたが無事のようなのだ。破られた扉の向こうから数人（体型から全員女性）、人が入ってくる。

「……おお？見つけた、見つけた。やつほー、貴方達に絶望をお届けにありがとうございました、なんて？フッフ」

「……なっ！?!?」「……」

ドカドカと遠慮無しに入ってきた女性はそんなふざけたことを言うてきた。部屋の仲間達は皆、驚愕と意味がわからないという思考に囚われている。だが一つだけ言えることがある。それはこいつらが仲間達にとって脅威である、ということだ。

……。  
……。

情報部対人戦闘専門の第三課所属の第4チーム20名は葵の指令を受諾した。指令内容は先行して倉持が幽閉されている建物の制圧そして身柄の即時確保である。彼女達は迅速に行動を開始した。

彼女達の装備は標準的なもので内訳は各種用途に合わせた銃器、カートリッジシステムを搭載した多目的ガンブレード（装弾数6発）、黒いフルフェイスの全身防護スーツ、個人用情報端末、応急医療キット、簡易サバイバルキットである。

指令受領後、作戦は予定通りに推移した。

襲撃実行前に通信網（念話、電波、有線による電話回線）を念入りに遮断してから行なった。特に念話や電波は学園都市内全域に渡って効果を及ぼしている。全ては邪魔されることなく倉持一派の身柄を確実に確保するためだ。

そうして陸の孤島と化した建物にグループ単位で別れて侵入した。内外合わせても数名の見張りしか存在しなかった。それ以外には碌に警備と言える人員は無く彼女達は全てを無力化（気絶など）することができた。

余談だが無力化した見張りは全員丁寧に縛り上げてから同じ建物内の一室に放り込んである。当然この時は猿轡に亀甲縛りが最早お約束だろう。どこのお約束かは知らないが…。念のために手錠もしているのは冗談かもしれない。

倉持一派の魔力・生体反応を端末機器と自身の感覚で建物内を探ること数分、やっと目当ての反応を察知した。徐々に反応へ近づく。一つのグループが目指す先には鉄製の扉が並んだ廊下。反応はその扉の幾つかからしていた。

扉の一つをグループの一人がガチャガチャと開かないか試すがビクともしない。焦れたもう一人が脚部に風の力を纏い蹴破った。瞬間、吹き飛ぶ鉄扉。ガンガンツと金属が奏でる嫌な音が建物内に響き渡る。

蹴破った本人は扉を弄っていた者を見て「このほうが早い」と笑いながら言って部屋にザザツと床を鳴らして一歩先に踏み込んだ。仲間達もそれに続いて部屋に踏み込み、銃やガンブレードを構え警

戒する。

「（獲物はここつと…どれどれ…）おお？見つけた、見つけた。やつほー、貴方達に絶望をお届けにあがりました、なんて？」

踏み込んだ部屋の中には突然鉄扉が吹き飛んだことに驚いた間抜け顔が1人2人…全部で5人居た。

「『『『『なっ！?!?』『』『』『』」

突然、侵入してきた者は「絶望を届けに…」とニヤニヤ笑いながら言う。笑いながら、と言っても顔はフルフェイスで隠れているので本当の表情はわからない。だが声が笑っているところからそうだとわかった。

「ふざけるなッ！誰だ、貴さっガハッ!？」

部屋に居た倉持が喧しくも部屋に侵入してきた者に詰め寄った。詰め寄られた者は額をメツトの上から押える仕草をすると徐に倉持をバゴツと鈍い音をさせて蹴り飛ばし壁に叩き付けた。

蹴り飛ばされた倉持は突然の衝撃に受身も取ることができずに壁際に気絶することになった。元から部屋に居た者達はあまりの事態に緊張から身体を硬直させてしまっていた。

反対に蹴り飛ばした彼女は「ストライクッ！」と幾分満足しているように小さくガツポーズとしている。ただ煩わしかったので少し力を込めて蹴り飛ばして粹がっていたバカを黙らせただけなのだ。

「そう喚くなよ、クズが、フッフフハッ。あ？よく見ると今蹴っ飛ばしたの倉持？じゃないか。あー、マズイかなあ…。リーダー、これって暴行だから主に怒られますかね…？」

「問題無い。そして黙れ、ランキュラスデルタ3。無駄口を叩く必要は無い【…デルタ1からCPへ…】」

無駄口を咎められたのはデルタ3のコードを持つランキュラス。そしてその軽口を咎めるのは第4チームリーダーのドラセナだ。彼女はランキュラスを鋭く一瞥すると直ぐにCPと連絡を取り始める。

【…繰り返す、デルタ1からCPへ。目標を捕捉した、これより確保する…】

【…CP了解。時期に三機のミツバチ小型揚陸艇が現場に着く。それまで気を付ける…】

【…了解、感謝する…】

ドラセナは通信を切る。ミツバチが帰還と護送を兼ねてこちらに来る、とCPのオペレーターは言っていた。それも後詰に応援も乗せてくるらしい。

正直、応援はありがたい。人員が増えれば取れる手段も増えるのだから。犯人確保の任務ももう護送の迎えを待つだけと言う最終段階だ。ここに来て失敗は避けたい。彼女達のご主人様である葵をガツカリさせたくないから…。

……………。

ドラセナがアングレカムの指揮所に通信をしている間。彼女に注意を受けたランンキュラスは同チームメイトに話しかけ余裕そうに駄弁っている。

「はいはい、リーダーは固いなあ。愉快なことにこいつら“話す”とも最後になるかもしれない”からあたしが優しくしてあげようとしたのに…ねえ?”

「ちよつと、あたしに振らないでよ。隊長に睨まれるでしょうが。巻き込まないでよ」

ランンキュラスの近くに居た彼女の名はディプラデニア。デルタ2のコードを持つ。ディプラデニアは話しかけてくる彼女から逃れようと少しだけ身を引く。自分の失敗で怒られるのは仕方ないと思うが他人の失敗に巻き込まれるのだけはイヤなのだ。

「えー、そんな寂しいこと言わないでよ。仲良くしようよ、あたしからチームじゃない?”

「だから今は任務中でしょ。いい加減にしないと“闇”に飲み込むわよ?”

「い、いや、それは勘弁して。あの中ホントに暗いし風のかの字もないほど静かで気が狂いそう…」

それでも絡んでくることにイライラしたディプラデニア。少しプチツとしてしまった彼女は右手に発生させた濃い闇の霧を見せて圧力にした。それを見たランンキュラスはフルフェイスの下にある表情を引き攣らせる。

何も見えない。何も聞こえない。何も感じない。何もできない。時間の経過もわからない。そんな暗闇に数時間放置される。特殊な性癖を持っていない限りまず堪えるのは至難の業だろう。

それがあと一歩踏み込んだらディプラデニアが冗談ではなく間違はなく有言実行することをランキュラスは身を以って知っているのだ。あの中は退屈で仕方のない場所だから二度と行きたくもないとは彼女の言である。

「お前らさー、いつまで時間掛けてるつもり？あたしはサツサと片付けて葵に褒めてもらいたいんだけど。なあ、まだか？あんまりフザケてるかとあつで“個人指導”するぞ？」

二人の話しに割って入ったのはオリビエ・D・スタニツク。葵の側近中の側近、三魔人の一角だった。彼女は第4チームの随伴、そして葵ファミリーの“最強の援軍”の一柱としてここに居た。

「ッッ！！失礼しましたッ！！！！」

オリビエの言う“個人指導”に鳥肌を立てた二人は直立不動の姿勢で最敬礼の姿勢を取った。それだけ、そう条件反射的に動いてしまっただけなのだ。彼女達、教官の言う“個人指導”が。…誰でも死にたくはないものだ。当然だろう。

「なんだ！大きな声を出すな！…ん？オリビエ様、何かありましたか？」

ここでチームリーダーのドラセナが二人の大声を聞きつけて駆けつけて来た。オリビエの鋭い眼光だけでなく。騒いだ理由がくだら

なければ彼女の説教と加算された訓練が待っているのだ。

もつここでラナンキュラスとディプラデニアは涙目である。前者は調子に乗ったことに後者は巻き込まれてしまったことに、と理由は違うのは本人以外誰も知らない。

「いや、何も無いよ。ちょっとこいつらを急かしただけさ」

「あは、あははは……」

「まったく、このバカ共は……」

それでもオリビエは身内に甘かった。さり気無く鋭くでも呆れも含んだ眼光を治めて二人をドラセナの剣幕から庇う。それでもドラセナは大方の事情を察したらしい。彼女は二人を呆れた目で見ていた。

「それよりササツとこのクズ共を縛り上げてくれる？あたしがやつてもいいんだけど　手が滑って殺っちゃいそうだし、ね」

オリビエは三人を前にニヤリと凄みのある笑みを浮べた。…凄惨な笑みとも言えるかもしれない。今直ぐ彼らが殺されないことが不思議なほどに殺意、悪意などの気が漂っている。

粘液のようなドロドロとした濃厚な悪意…。刺されたと錯覚するほどの明確な殺意…。気絶している倉持は別として彼女の笑う姿を見ている他の者の表情は青を通り越して蒼白になっている。不自然なほどガタガタと震えている者さえ居る。

だが、そんな彼らを見てもこの場には哀れむ者や同情する者は皆

無であった。居るのは冷ややかに、冷酷に、虫けらのように見下す目、眼、メ…。

「ハッ… 外の見張りに3名、対象の監視に4名、他は対象を拘束後に再度私の下に集合せよ。では、行け！」

「……ハッ！」「……」

怯える彼らを一瞥したあとドラセナは鼻を一つ鳴らし仲間在今后の指示を出した。全員の拘束後には建物内にある玄関ホールにまとめておく予定だ。応援と護送用のミツバチも来ることから素早く移動できるようにするための処置だ。

ただし学園側の予期せぬ遭遇をした場合はこの対処は悪手だ。今回はタカミチを含めた四人が向かっていることがわかっているから敢えて速さを追求したに過ぎない。

「さて、あたしは外で警戒してるからなにかあつたら呼んでよ」

「了解しました。お気を付けて」

サツと敬礼するドラセナに苦笑を一つするオリビエ。だが暖かい微笑。家族に向ける力強くも優しい笑みだ。先程までの凄みのある笑いとは大違いであった。

「ばあか 他の心配より自分達のこと気を付けなよ」

「…ハッ」

少し落ち込む。確かに心配されるほどオリビエは耄碌していない。

それどころか鍛錬を怠らない彼女の實力は今も少しずつ増している  
ほどだ。

「ふふっ、大丈夫だ。あたしが居る限りお前達は守ってやるよ。  
…家族だしな」

「……………っ！はいっ……………」

部屋から立ち去る時。背中越しに手を振ってくるオリビエのその  
背中が正しく信頼できる“姉御”だった。

Side out ????

麻帆良学園某所前大通り…。

Side オリビエ

遅い…遅い…遅い…遅い…。

まだか…まだか…まだか…まだか…。

戦いを…戦闘を…戦場を…っ！

「この気配は……来たか！」

数は四。内一つは覚えがある。あの時の小僧か？名前はタカミチ

…あーつと…T・高原、だったか。確かそんな名前。ちょっと見ない内に気の質は大きくなってる。少しは成長したってことか。

ふふっ、人間は成長が早くて驚くよ。何かの高みを目指して鍛錬する時、人は高々数年あれば急激に成長してしまうのだからね。ゆつくりと成長する悪魔とはえらい違いだ。

「ふふふっ。おい、中の連中と葵に“玩具が4つ入荷された”と連絡しておいてくれ。他は適当に周囲を警戒しておきな」

「ハッ！」「」

光学迷彩を起動させて静かに消える子供達を視界から外して四つの玩具が近付いてくる方向を遠く望む。戦闘を目前にしたことで自分でもニヤニヤした笑みとキラキラした目をしていることを嫌でも自覚させられる。

「さあ来なよ！今宵は死ぬにはイイ月夜じゃないか！アハハハハハッ！」

早く…早く…早く…！

おいで…おいで…おいで…！

でも葵はあの倉持達以外の殺害は極力禁じているようだったからあまり無茶はできないよね。…それでもやりようはある、かな。ふふっ、そうだよ。色々とやりようはあるのよ。

…要は殺さなければ “何をしても許される” ってことだからね！

アハッ アハハハハハハッ！見ていてね？葵！お前だけの魔人は今日も勝利を捧げよう！小さな勝利！だけど愛おしいご主人様に絶対の勝利を捧げよう！アハハハハハハッ！！

リビエラ…シルビア…。二人には悪いけど今回はあたしが当たりを引いたんだ！文句は言わせない！！この獲物はあたしのものだ！！だけど存分に、と言うには物足りない。そこが不満と言えば不満か…。

アハハハハッ！それでも暴れさせてもらうよ！殺さなくとも良い声で“鳴かせる”方法はいくらでもあるんだから、ね…。良い声で鳴いておくれよ？アハッ アハハハハッ！！

来た！！

四つの人影が目の前に降り立つ！男が二人、女が二人！

「よく来たッ！招かれざる贅共よ！！」

「……ッ！！」「」「」

あたしを失望させるなよ！タカミチ坊や！！

「オリ、ビエ…さんっ！？そんな！！」

「なッ！こんなところに悪魔だと！？」

「あ、悪魔…？お、お姉様…」

「愛衣！気をシツカリと持ちなさい！」

さあ…人間！私を満足させてみな…！気高き意志をあたしに示してみろッ…！！

S i d e o u t オリビエ

第六十九話「指揮所と葵出動と目標確保と」（後書き）

はい！無事に倉持達14人の身柄を確保しました！

それにしても作者は悩みがあります…。

どうしよう？オリビエ姐さん戦狂いみたいになっている…!!

この子はそんなキャラじゃなかったのに…！

久しぶりの本格登場だから本人（悪魔？）もハッスルしているようです…。

血生臭い表現には自信がないから要勉強ですかね？

それとも抑えて表現するべきですかね？

最近のその辺の傾向がわからないから困ります。

ではでは！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第七十話「魔人と月夜と宴と」(前書き)

今回はオリビエが大活躍だ！

あれ？明確な彼女の戦闘風景ってこれが初めて…？か？  
ま、まあいいや。じゃ！続き！

## 第七十話「魔人と月夜と宴と」

麻帆良学園某所前大通り…。

Side ????

倉持が幽閉されていた建物の前。そこで対峙するのは男女が居る。葵ファミリー側は魔人オリビエが一。タカミチを始めとしたガンドルフィーニ、高音、愛衣の学園側が四。

この場に限り戦力は一対四と数の上では葵側が不利のようにも見える。

だが、ここに来てガンドルフィーニは疑問に感じている。タカミチの彼女に対する警戒が尋常ではないのだ。しきりに周辺の気配を探っているのが窺える。確かに下級とはいえ悪魔であることは警戒するに値する。

それでもタカミチ以外の彼らはオリビエからは然程大きな魔力を感じない。よくて下級悪魔程度の魔力量だ。警戒はしてもし過ぎるほどの脅威とは思えない。

「オリ、ビエ…さんっ！？そんな！！（彼女まで戦線に投入したのか！葵さんはそこまで憎悪に飲まれているのか！？）」

「なッ！こんなところに魔族だと！？（彼は悪魔まで召喚したのか！??タカミチ君は知っているようだが、あの慌てようは…??）」

「あ、悪魔……？お、お姉様……（あわわっ、魔族さんが学園内に侵入していますよお！？）」

「愛衣！気をシツカリと持ちなさい！（ク！愛衣を守らないと……！見たところ爵位も持たない下級悪魔。先生方と協力すれば……やれます！）」

……だが、うろたえているのは学園側だった。対するオリビエは大剣を肩に掛けてニヤニヤと笑っている。

若さゆえの勇氣。必死に状況を打破するために考えるのは高音。彼女が守ろうとするのは現パートナーの愛衣だ。教師二人も目の前の障害をどう対処するかを必死に考える。

この時、四人の中でもタカミチの動揺は凄まじいものがある。冷や汗を流し今も辺りを警戒している。探しているのは別のもう“二つ”の気配だが、それがなことに安堵し、またオリビエのみを最大限、警戒をする。

彼も相手がタダの魔族であればこうまで怯えうろたえることはない。そう、オリビエこれが葵の専属悪魔でなければ誰がここまで過度な警戒をするものか、とタカミチは内心で毒づく。

「おお、他はハジメマシテだが……久しぶりじゃないか、タカミチ坊や！ええ？お前………なんと言うか老けたなあ」

オリビエの言葉は軽い。言葉だけなら冗談を含ませた親しい者同士の会話に聞こえなくもない。だがオリビエのニヤニヤした視線は既に四人を捕らえている。

正直に言えば逃げてしまったほうがまだ安全だ。しかし彼女に捕  
捉されたが最後。逃げることそのものが至極困難と言わざるを得な  
いのだ。背中を見せた瞬間にこの世とサヨナラなど誰だってゴメン  
だ。

「う…あまり言わないでくださいよ…。気にしているんですから…  
(なんとか時間を稼いで応援を…)」

「ううん？気にしてたのか…。あー、まあ人間が二十年近く経てば  
こんなもんじゃないかな。うん、いいことあるぞ？…たぶん」

ニヤニヤ顔を引っ込めてオリビエは泣きそうな視線でタカミチを  
見る。芸が細かいことにどこからともなく黒いハンカチを取り出し  
目元に当ててもいるのは彼女のちよつとしたお茶目だ。

それでも一見ふざけているよう(実際ふざけているが…)に見え  
るが身体力の流れや力の抜き具合に隙はない。右手で持ち肩に掛  
ける大剣も一つの動作で直ぐにでも斬り捨てることを可能にしてい  
る。

「(隙はない…。けど、同情の目が心にイタイ…) んんっ！…それ  
より貴女までここに居るといことは、葵さんは 本気なんで  
すね？」

「??? ああ、なるほどなるほど！アハハハツ！何を当たり前のこ  
とを！葵はあたしに“掃除の手伝いをお願い”と言ったんだ！なら  
ば願いを叶えるのが臣下であり仲間であり家族であるあたしの務め  
だろ！」

多少おふざけをやめて、タカミチは鋭い視線で意味深に“本気が”と聞く。それにハッキリと“ゴミ掃除”だと答えるオリビエ。

「……そう、ですか（そこまで深い怒りを感じていたんですね、葵さん…）」

率直に、一刀両断に、これでもかとハッキリ言われて落ち込むタカミチだった。真の意味で葵の主戦力と言ってもいい彼女が今ここに居るのだ。勝ち目は薄い。何よりも葵側の勝利条件もほぼ達成している。

そもそもの話したが葵の戦略目標は“倉持一派の身柄確保”にある。そしてその目標は現在捕縛されあとは護送する段階にあるのだからほぼ達成していると考えていい。

葵達、攻める側は主導権を握り易いものだ。逆に学園側は難易度の高い防衛戦を余儀なくされている。現時点で建物や人員に被害が大きい。

学園防衛、倉持の護衛、一般人の安全確保などなど。やることが山とある。そしてただでさえ人手が不足しているところに倉持の件で更に人員が不足している。学園側は許容量と超える事態に対処しきれずに全てを守りきれない。

実際は裏で葵側もそれらに対処しているために被害になりそうなことは極力取り除いてあるのだが学園側は知らないことだ。

閑話休題…。

オリビエは他の三人も視界に捉えながらタカミチと話し続けた。だが今はニヤニヤも泣きマネもしていない。ただ静かにフツと表情が消えた。そして瞳の奥に宿るのは闘争の炎。チリチリと燃え揺らめいている。

「…なあ、もういいだろ？聞きたいことは聞いたよな？それならさ  
逝くぞ？」

オリビエが大剣を横に一閃。巻き起こる旋風。瞬間に解き放たれるのは異質にして膨大な魔力。高音の考える下級悪魔などでは断じてありえない濃密な存在感。タカミチ達を圧するのは狂おしいほどの闘争の気配。

戦いを！戦いを！！戦いを…！！オリビエの心の奥底から聞こえる小さな声。しかし響き渡る確かな声。それは魔族の潜在的戦闘本能が渴望する戦いへの欲求。

「……ツ！？」      ツ…「…」

ゾゾツと身体に纏わり憑き這い登るのは恐ろしく不吉な…それは恐怖という名の生存本能。助けて…。助けて…。助けて…。！四人はその恐怖を      振り切る。即座に戦闘態勢を取る。

オリビエに対して最前列に立つ教師の二人。タカミチは両手をポケットに入れた無音拳の戦闘スタイル。ガンドルフィーニはハンドガンとナイフを用いた戦闘スタイル。

教師から一步後退した生徒二人。高音は“影の盾”を服として纏い、更には操影術の最強奥義黒衣の夜想曲を展開した戦闘スタイル。愛衣はアーティファクトの箒を呼び出して高音の援護に備えた。

元よりここで対峙した時から最大限に警戒している。四人は考える。いつ？いつ？いつ？　始まるのか？重い空気に疲れたわけでもないのに息が荒れる。

それを見て…魔人が笑う、晒う、嗤う。口角はニイイと釣り上がる。楽しそうに…愉しそうに…！圧力に屈することのない四人を見てただただ愉しそうに嗤う。

「あはっ　いい心掛けだ！それでは名乗ろう！あたしはオリビエ・D・スタニツク！ご主人様である葵を守護する大剣！三魔人が一柱なり！！諸君！今宵は存分に踊ろうぞ！！」

高らかに名乗りを挙げ、宴の開催を宣言した瞬間　　魔人は掻き消えた。

「皆！散るんだ！！」

「「「　　ッ！！」「」」

タカミチの警告と同時に四方に散る学園勢四人。刹那、四人が元居た場所の地面が放射状に数十mに渡り割れた。中心に突き立つのは大剣。現れたのは守護の魔人。その顔は闘える愉悦に歪んでいる。

「ククツ！アーツハハハハハツ！どうした、人間！これからが始まりだぞ！！あはっ　アハハハツ！！」

もちろん彼らもただ避けたわけではない。

タカミチは数百数千の無音拳を機関砲のように放った。ガンドルフィーニも風魔法を纏わせ強化した銃弾を全弾撃ち尽くした。高音は数十数百の影の槍を突き立てた。愛衣はアーティファクトで全域武装解除の魔法を放った。

だがオリビエは嗤う。笑いながら無音拳を叩き消し、強化された銃弾を叩き落とし、影の槍を叩き折り、武装解除を魔力放出だけで抵抗した。魔人は少女のように愉しそうに笑う。

「クツ！！そこおおおつ！！」

挑発とわかっていてもガンドルフィーニは駆け抜ける。戦いが長引いて危険度が増すくらいなら短期決戦で一気に片付けることが得策と判断したからだ。

ハンドガンを撃つ。銃弾を一発、二発、三発：ダンダンと銃撃音。マガジンの全弾を撃った。全て外れた。否。全てが手の一振りで叩き落された。コロコロと地面を転がる銃弾が理解を妨げる。

ガンドルフィーニは内心で舌打ちを一つする。スイッチ。近接戦闘へ切り替える。握り締めたナイフを小さく鋭く振り、斬り付ける。キンツキンツと大剣とナイフの金属音が甲高く鳴り響き火花が散る。全て防がれた。

「おう！？いいね、いいね！やっぱり戦いとはこうでなくっちゃね！アハハハハッ！！！」

「ガンドルフィーニ先生！彼女を相手に一人で挑むのは自殺行為もいいところですよ！！連携して　　ッ！！？」

「アハハハッ！！そう素直にやらせると思っなよ、坊や達！！」

タカミチを先頭に援護しようとした三人はオリビエの大剣が巻き起こす風に切り裂かれ無数の細かい傷を作った。傷が小さくとも数が多いれば出血も多くなる。結果、ガンドルフィーニの援護はできずに終わった。

大上段から振り下ろされる大剣。それを咄嗟に反応しナイフで受ける。接触した瞬間、超重量の衝撃が彼を襲う。魔力で強化した身体とナイフで受け止めるも耐えられずに膝をつく。

「くう！ガンドルフィーニ先生、大丈夫ですか！？（チィ！やはりオリビエさんもそこまで優しくはないか…！）」

「ぐあ！クツ！あ、ああ、まだ、いけるツ！！なんとしてもここで討ち果たさせてもらう！！はあああッ！！」

「ガンドルフィーニ先生ツ！？　クツ！」

正義感や責任感が強いガンドルフィーニは魔人にまたも挑む。最大限に身体と武装を魔力で強化した。タカミチは制止しようとするが援護するため即座に思考を切り替えた。無音拳、豪殺居合い拳が三打襲う。

「いい気迫だ！なかなかだぞ、人間！だが　！！」

豪殺居合い拳は三度全て大剣に“切断”された。タカミチの援護は無効化された。急接近するガンドルフィーニの撃つ銃弾はオリビエが子バエを払うに左手で全て掴み、または叩き落した。

タカミチは一撃の重さよりも無音拳の居合い拳を無数に放つ面制圧に切り替えた。打つ、打つ、打つ……。ガンドルフィーニを援護する。

ガンドルフィーニの射撃は止まない。接近しながらハンドガンを連射する。オリビエの懐に入るまであと少しというところで銃弾が切れた。迷うことなくハンドガンを投げ捨てナイフコンバットに切り替えた。

だが彼のそれは悪手だった。オリビエの間合いに入ることは本来ならば死を意味する。

「ッ！近付いてはダメだ！ガンドルフィーニ先生！！」

「なにっ！？　　！！！！」

タカミチがガンドルフィーニに鋭く警告する。が、それは僅かに遅かった。オリビエはガンドルフィーニの視界から消え、気付いた時には横に現れた。彼は殺られると思いい目を限界まで見開く。

刹那に彼が見たのはオリビエが歯を見せ子供のように笑う姿だった。野球選手のバッターのように大剣を構え。

「あはっ　一名様あご案なあいつ！そう……らッ！！！」

「ガハッ！！くぼあっ！！」

大きくスイングした。某一本打法の名選手も吃驚の素晴らしいフォームだ。見事にガンドルフィーニの身体を捉えた一撃だった。ただし刃ではなく刀身の腹で。所謂、峰打ち。加減はしたので殺してはいないはず。

しかし、ここで彼女の計算外。峰打ちとは言っても実行したのは葵ファミリーの魔才リビエだ。いくら自身に力のリミッターが掛かっているとしても基準がおかしい。最低ラインの基準が葵ファミリーであるわけで通常の戦闘者ではない。

「アハハハハッ！……（やっべえ、死んでないだろうな？死んでないよな？生きてるよ？そうじゃないとあたしが葵に怒られちゃうじゃないか！）」

結果、ガンドルフィーニの身体は面白いくらいに水平に飛び、その先にある建物の壁に突っ込んだ。……コンクリートを砕きながら重ねて言うが死んではいない。派手に飛んではいるがギリギリ死んではない。

「先生っ！！」「ガンドルフィーニ先生！！」

高音と愛衣が心配を多分に含んだ声を張り上げた。彼が突っ込んだ建物の穴は粉塵が凄くて中まで見えない。瓦礫の崩れる音が響く。タカミチは瓦礫を背後にオリビエを牽制している。

「ごほっごほっ！だ、大丈夫、夫だ…っ！ハア…ハア…ごバアっ！ガッ！」

数秒の沈黙から応える声があった。崩れた瓦礫の奥からガンドルフィーニが辛うじて生きていることを伝えてきた。だが同時に荒く咳き込む音とビチャビチャという水が床に落ちる音。そして鉄錆の匂い。これは 血…。

「……（ほっ…）あはっ やっぱりさあ……脆いッ！脆いなあ、人

間！アハハハハッ！！」

粉塵の向こうは見えないが大きく負傷させたことは間違いなさそうだ。致命傷ではないが戦えるわけでもない。オリビエは結果的に絶妙な力加減でガンドルフィー二を戦闘不能に追いやった。

刻一刻と濃くなる血の匂い。ガンドルフィー二の出血が酷いことがわかるというものだ。だがタカミチ達とて無傷ではない。大小合わせれば少なからず出血し消耗している。

「愛衣！援護を！【…時間を稼ぎますので高畑先生はガンドルフィー二先生をお願いします！…】」

「はいっ！お姉様！メイプル・ネイプル・アラモード！目醒め現れよ！燃え出づる火蜥蜴！」  
エクス・ソムナー・エクシス  
タット エクス・レンス・サラマンドラ

【…ッ わかった。ただし無茶はしないように…】

高音と愛衣が前へ出る。タカミチは瞬動を使い瓦礫の中へ入った。彼としても本来ならば逆の役割を提案したかったがガンドルフィー二の怪我の状態が気になりそちらを優先することにした。高音と愛衣が相手ならば殺されはしないという打算もある。

愛衣が魔法を発動させるために詠唱を始める。高音は影を操り身に纏う黒衣を更に強化。背後に影で編み込まれた大きな上半身だけの人形を作り出す。

「アハハッ 素直に詠唱させるとでも思うのかい！！」  
「やらせませんわ！！」

当然、オリビエもただ黙ってはいない。高音を無視して障害になりそうな呪文を詠唱する愛衣に目掛けて駆け出す。大剣を上段に構

えて振り下ろしたがそれは高音の影の防御に止められた。

「む？（意外と硬い？タダのコケ脅しというわけじゃないのか…）」  
「くろう！まだです！影よ！」

高音はオリビエを止めようと影を彼女の足と腕に巻き付ける。序でに影の槍も数十本を撃ち出した。それでも影の拘束は彼女の動きが僅かに鈍るだけで効果は認められない。お蔭で影の槍も全て切断された。

「  
イニミークム・インウオルウアツキケネ  
火を以てして・敵を覆わん！紫炎の捕らえ手！！」  
カフトウス・フランメウス

だが時間を稼ぐことはできた。愛衣の炎の拘束魔法が完成しオリビエをガツチリと締め上げることができたのだ。魔法の炎は対象を焼くことなくただ逃がさないようにギチギチと縛り上げる。

捕まえた愛衣も遣り遂げたことに満足感が沸き起こり「やりました、お姉様！」と嬉しそうにしている。高音はそれに微笑み返したが視線はオリビエから放さない。

…オリビエがそれらを見て一瞬だけ微笑ましそうな顔をしたのは気のせいだ。

「…ふんっ、炎の捕縛か！だけどあたしを縛るにはちょーっと火力が  
」

ギシツ　と炎が軋んだ。オリビエは腕に、足に、身体に力を入れて捕縛の炎を歪ませる。一度歪み、二度歪む。三度目には炎の拘束がブチブチと嫌な音を立てて一つ二つ、三つと炎の捕縛が切れていき拘束が消え去った。

「え…ええっ!?!」

「アハハハッ!?!足りないッ!足りないねッ!?!あたしを捕まえるならムスペルヘイムの炎くらいの火力を持ってきなッ!?!アハハハッ!?!」

ムスペルヘイムの炎。神話級の炎を持って来いとはなんと大胆不敵なことか。世界創世でもする気なのだろうか…。

「そ、そんな…!私の魔法が、力だけでっ!?!そんなのインチキですう!?!」

ともかくオリビエが何をしたのかというとそれは捕縛術式の解析などを全て素っ飛ばして、ただの腕力だけで強引に炎の捕縛を引き千切ったのだ。それもなんの苦もなく遣って退けた。

常識的に考えればそんなことはまずありえない。なぜならそれは普通人が鉄の鎖を引き千切るようなものだからだ。こんなことができるのはそう多くない。できる人物で言うならジャック・ラカンなどの世界のバグがそれに該当する。

自分の魔法にそれなりの自負がある愛衣は涙目だ。これが抵抗や  
ディスペル  
解呪されたならまだ救いがあっただろうが結果はご覧のとおり力尽  
くで破られたのだ。彼女のプライドはズタズタだろう。

「…いいえ、よくできました、愛衣。　　行きますわよッ!?!」

「アハハハ!　　??ンッ!?!」

静かにオリビエの隙を窺っていた高音が動き出した。背後の大きな影人形が彼女に連動して豪腕を振るい潰しにかかり、影の槍は四

方八方からオリビエを襲った。

オリビエを影人形の豪腕が叩き付ける。大剣で受け止めた。衝撃で地面が碎けるほどの圧力だった。ゴオツと衝撃波が起きて粉塵が舞う。それだけでなく追撃の数十の影の槍が全周囲から襲い掛かり更に粉塵を巻き起こした。

「ハア…ハア…ッ！（手応えはありました。倒せないまでも、これなら…）」

巻き起こる粉塵はまだ止まない。だが誰がどう見てもオリビエが潰され串刺しにされたように見える光景だったろう。事実として高音には影が“何か”を貫いた感触を感じていた。

サアアツと横風が粉塵を吹き流す。ある程度粉塵が流れた時そこに見えるのはクレーター状に抉れ、影の槍が刺さった傷跡のある地面。それと…デフォルメされたオリビエの人形。それだけだった。

デフォルメされたオリビエ人形は突き刺し抉ったような穴だらけで内部の綿がはみ出ている。彼女が貫いた何かの感触とはこれだった。これは…身代わりだ。そこに居るはずの姿がオリビエの姿がない。

それにしてもこの人形の表情が相手を小馬鹿にしたようなのでどことなくイラツとさせる。

このイラツとさせる人形はイタズラ魔法アイテム。その名も“こはまかせる！…私が囷になる！身代わり君！”だ。これはカプセル状に超圧縮された等身大人形を瞬時に展開する名前の通り大変フザケタ魔法アイテムだ。

「そんな！居ない！？確かに手応えは合ったはきゃんっ！？」

見つからないことに動揺した高音を襲う。突然の背後からの一撃。しかし、それは影人形がシツカリとガードしたため大事には至らなかった。彼女が背後を振り返ると叩き付けた大剣をニギニギと何かを確認するように首を傾げている。

「ムウ??? ウン、さっきから手応えがオカシイと思っていたけどその黒衣に背中へのデカブツは……あはっ 影を纏う近接戦闘魔法衣装か！」

「っ！！そうですわ！操影術の最強奥義、ノクトウルナ・ニグレイディニス“黒衣の夜想曲”です！近接攻撃は私には効きませんわよ！」

言い当てられた。自分の主魔法を看破されたことにまたも動揺する。だが逆に声を張り上げることで気を高めて身の竦む思いを払拭した。事実、彼女の近接魔法は優れた性能を発揮する。

「ハッハーツ！お嬢ちゃんは遠距離タイプだと思ったのにインフアイターだったとはな！！アハハハツ！！」  
面白いッ！！」

影の槍や直接の影で絡み取ったりして拘束してくるものだから影魔法に重点を置いた後衛型魔法使いと思っていたオリビエは同じ前衛型である高音に興味を持った。オリビエも基本的に殴り合いのほうが好きだからだ。

一足飛びに高音の間合いに入ると大剣を上段から振り下ろし、右に降り、左に折り返し蹴りを入れた。高音もその程度の速さでは倒れない。攻撃は全て影人形が自動防御したからだ。

だが衝撃だけは防御しきれない。影で衝撃を和らげているが許容量を超えているために僅かずつ後退していた。要するに影人形に守られているために高音は鉄壁の防御方法を得ているのだ。

「ぐ！？ぐうう！！私の操影術、黒衣の夜想曲は絶対自動防御を發揮します！絶対に敗れませんわよ！！」

そのために高音はそれを絶対であると過信する。自分に“黒衣の夜想曲”があればまだ耐えられる。いや、もしかすると勝てるかもしれない、と…。故に反撃の第一歩として逆に前へ踏み出していく。今度は私が攻める番だ、と言うように。

「アハハハハッ！確かに強固な防御だ！でもお前さあ少し」

オリビエは全力を出していない。満たされぬ戦いへの渴望を慰めるために“遊んで慰めている”のだ。それを見て高音が前へ踏み込んできた。勝てるかと判断した。

そのことにオリビエは軽い苛立ちを覚えた。

「あたし魔人を嘗めてないかつ！！！！」

「え？あ、ぐうう！！あ、きゃああッ！！」

だからこそ高音以上に前へ踏み出した。

だからこそ高音以上の速さで駆け抜けた。

だからこそ高音以上に力を込めた一撃を繰り出した。

結果として当然だが全てにおいて上をいったオリビエが高音を叩き伏せた。今までにない重い一撃。その一撃だけが決定的に違う。

今までのことがお遊びだったことを思い知らせるほどだ。全てにおいて力、速さ、鋭さを感じさせる斬撃だった。

それでもギリギリの加減をしていることで術者本人の意思はまだある。だからこそ黒衣として纏っている影の盾は解除されていない。脱げていない…。一応、所々が破けているがまだ防御力は維持されている。

「アハハハハッ！お嬢ちゃん、知ってるか？素早く防御されるならそれ以上の速さで以って斬り捨てればいいんだよ！」

「カハッ！ごほっごほっ！ハア…ハア…」

あまりの衝撃に高音は片膝、片腕を地に着けて激しく咽ている。ガンドルフィーニと違い吐血はしていないから内蔵に傷はなさそうだ。それでも身体の至る所から痛みの信号を発信しているのは不快を感じざるを得ない。

ふと高音の頭上から影が差す。痛みに震える身体で顔を上げるとそこには絶望の、破壊の、狂気の権化が居た。高音の顔に諦めの色が浮かぶがそれを振り切り再度強い意志を以って睨み付ける。

その意志を感じ取ったオリビエはニィィと三日月のように嗤った。赤い月を背後に彼女は楽しそうに嗤う、笑う、晒う。

楽しい　　けど、それももう終わりだ。もうすぐにも愛おしいご主人様がここに来る。来る前に終わらせなければならぬ。邪魔する者をこのままにはしておけない。ならばどうするか？答えは。

「あはア　のんびりと寝てんじゃないよッ！！！」

潰すのみだ。今までのことなどただの“お遊び”だ。本気ではあったが全力ではなかった。ただそれだけの違い。今のオリビエは移動に限り瞬間的に力を解放したのだ。

その姿を捉えるならば亜光速の速度を認知できるようにならなければ不可能である。魔人たる者がこれくらいできずに何が三魔人か。何がご主人様を守護する者か。それができずに何を守ると言うのか。

「なん……」

「お姉様ツ！後ろです！！」

高音の「なんですって？」という言葉は愛衣の声が遮ることで続かなかった。……いや、それ以前に続けることができなかつた。言い切る前にオリビエが背後に現れて大剣を肩に引っ掛けてもう終わりだとも言つのように姿を晒しているのだから。

「……ん、惜しいな」

「え？　　ぐっ!？」

「お姉様ぁーッ!！」

崩れ落ちる高音。形振り構わずに駆け寄る愛衣。倒れた本人、見えていた愛衣にも何が起きたのか正確にはわからなかつただろう。

事実はこちらだ。亜光速で背後に回った瞬間に力をセーブして抜刀の要領で振り抜いて高音の右腕を砕くつもりで肉厚の刀身の腹で斬り付けた。だがそれを影が辛うじて反応したことで未遂に終わった。

高音がこうして無事なのは元々背後に展開されていた影人形の防

御が厚かったのが起因している。それがなければ彼女の腕は複雑骨折、場合によっては壊死した腕を切断することになるところだった。

「……（右手は貰ったと思ったのに影の防御に逸らされたか……）。それでも衝撃だけは逃がせなかったようだけど、なうおっ!？」  
「　　ツツ!?!」

背後斜め上からの不意打ち。ドゴオンという大砲のような轟音。ギリギリで避けるオリビエ。碎ける地面。少しだけ内心で反省していたオリビエを不意打ちの一撃が襲った。最もオリビエの慌てる姿がどこかわざとらしい……。

最高のタイミングで最高の威力で撃ち放った。そのはずなのに結果は外れてしまった。オリビエの回避はまるで“狙ったようなギリギリのタイミングで避けていた”のだ。

「タカミチ…タカミチ坊や…。危ないじゃないか、ええ？あたしじやなかったら潰れてたぞ」

「ハハ、ハハ…。貴女方がそれくらいで潰れるはずがないじゃないですか」

嗤いながらオリビエはタカミチを見る。口元は本当に楽しそうに笑っているように見える。笑っているが残念なことにその瞳の奥で暗い炎が宿っていた。それがなければ絶世の美女にしか見えなかっただろう。

……時間的に考えてもう直ぐ葵が来るはずだ。もう遊んでいる時間はない。

高音の意識はない。愛衣は彼女に気を取られて戦闘の役には立たない。ガンドルフィーニが沈んでいるはずの崩れた建物の奥の気配を探る。…誰も居ない。オリビエは内心で舌打ちする。

高音で遊び過ぎた。ガンドルフィーニの居場所を探るために索敵の範囲を瞬間的に広げる。索敵して僅か半秒。200mほど先に行つた路地付近にそれらしき一人の気配があつた。

……気配は小さく弱々しい。重傷だと判断。これでどうやって移動した？

「ふむ？（なるほど。もう一人の坊やはタカミチ坊やが連れて行つたのか…）それはヒドイ物言いだ。あたしは傷ついたぞ？これは帰つたら葵に慰めてもらわないとなあ」

「はいい！？変なこと言わないでくださいよ！？葵さんに勘違いされたら僕の命が危ないじゃないですかっ！！」

「アハハハッ！！どうしよっかなあ？タカミチにセクハラされた…  
…と言つたら葵はどうするだろうねえ？（ニヤニヤ）」

「ちょっとーっ！？！？それは本気で洒落にならないので勘弁してください　　ッ！！」

空気が弛緩して緊張が一時的に解けたせいかタカミチが不用意にオリビエへ一歩踏み出した。しかし何かに気付きすぐさま大きく後退する。先程まで彼が居た付近の地面は地割れのようなクレーターができている。

「あはア　惜しい、惜しいなあ…。あと一歩踏み込んでくれば叩き

潰してやったのに、ねえ？」

焦りと驚きから冷や汗を流し、息を荒くするタカミチを見てオリビエは優しく微笑む。場所が場所なら貴婦人のように見える。そんな微笑み方だ。最も今の殺伐としたこの場では不気味以外の何ものでもない笑い方でもある。

「ハア…！ハア…！いい、いえ、“ねえ？”と聞かれても潰されたくないのので答えられないのですが…（本気だった！全力じゃなかったけど本気だった、今は！）」

「そこはほら、男らしく、こう…：“プチッ”っと、な？大丈夫だって！痛みなんて一瞬だから！あたし潰すの上手いんだからさ！！」

潰すのが得意と言うオリビエの無茶苦茶な思考にタカミチは顔面を蒼白にする。思わず股間がキュツとなるのは彼が男だからだろう…。男に対して潰すという台詞ほど嫌なものは早々ないはずだ。

「死んじゃいますよ！？僕死んじゃいますからね！？」

……男として…だろうか？

オリビエは少し下品かなと思ったが考えずにはいらなかった。それもそのはずタカミチの腰が僅かに引けているからだ。散々“潰す”や“得意”と言っていたから彼女には覚えがありすぎるのだ。

これまで外見が美人の彼女にちよつかいを掛けてきた男は例外なく地面に沈む結果に終わっている。許可なく彼女の肌に触った者は特に悲惨だ。何が悲惨かと言うと“男”として死に強制的に“漢おとこ女”になる。

想像してほしい。玉はブチツと音を立てて潰れ……。棒は根元からブチブチイイと引き千切られるのだ……。やんわりと表現するために冗談で漢女などと言っているが男には普通に死ぬ以上の恐怖であるのは間違いない。

そもそもの話しだがこれまでオリビエが無条件に肌を許したのはご主人様である葵のみだ。身持ちの硬い悪魔ってどうなのよ、とも思うが彼女が異例なのだ。…訂正する。オリビエ、リビエラ、シルビアの三柱が異例なのだ。

オリビエ達の口論は続く。……口論？いや時間がないからタカミチをおちよくって更に挑発して強制的に隙を作ろうとしているのだ。問答無用で叩き潰すのは簡単だが手加減が難しい。だからこそ一瞬でも良いから隙がほしい。

……殺害の許可がないからなあ。葵も丸くなったよ。ホントにさ。  
「ケツ！ミミツチイ男だな！こんな時、“僕は死にましえんツ！”くらい言えないのか！？」

「命には代えられませ」  
「スキありイーツ！！」

赤面して否定するタカミチ。意識が逸れた。この瞬間、オリビエの目がキラリと輝いた。一気に加速してタカミチの背後へ現れた。両手で大剣を振り上げ、タカミチの頭に目掛けて一気に振り下ろした。

「ん、おべろんっ?!?!?」

「高畑先生ーッ!？」

ゆっくりと倒れてドサツと地面に沈むタカミチ。そこへ事態をようやく理解した愛衣がタカミチを介抱しようと駆け寄る。オリビエは振り切った大剣を肩に掛けて「安心しろ。峰打ちだ」などと言いつ切った。

大剣で峰打ち…。鉄の塊でドタマを力チ割られたのに安心などできるものだろうか。普通なら死ぬ。しかしタカミチは本国ではAAの実力と評価を持つ者だ。一般人から見れば彼は普通ではないから問題ない。

……問題、ないはず…だよな？

「アハハハッ!! (はあ、葵にお願いされているから元から殺す気はサラサラないよ。まったく…) まあそれは別として、だ(ニヤリ)。さあ、残るは小さな嬢ちゃんだけだぞ」

オリビエが生き残った(注：誰も死んでない)愛衣を見てギラリンと目を輝かせる。新しい玩具を見つけたようにワクワクとしたオリビエを前に愛衣は一步步後退する。逆にオリビエは一步步前進する。

「あうあうあう…」

「(そんなに怯えるなよ…イジメたくなるじゃないか) あはっお仕置きだべえ、なんてな? アハハハハッ!」

イヤイヤとでも言うように首をフルフルと振る愛衣の姿はチワワのような雰囲気がある。愛衣の目元はウルウルと潤んでもいる。彼

女の怯えている姿はなんともS心をそそられる。オリビエはペロリと舌なめずりを一つした。

「き、きゆううう…」

「アハハハッ！つて、はあ？お嬢ちゃん、ここで気絶とかどれだけベタなんだよ…」

舌なめずりしたオリビエを見て愛衣は何を勘違いしたのかパタッと気絶した。恐らくだが生きてまま食べられるとでも考えたのだろう。早とちりもいいところの早業（気絶）だった。可愛いものだ。

「……ふふ、この子は争い事には向いてないかもしれないねえ」

さあもう少しで葵が来る。タカミチ坊や達を縛り上げてお出迎えの準備をしなければならぬ。く、くら？倉持？が愛するご主人様を前に無礼を働くかもしれないのだ。

「お前達！こいつらを縛り上げて持って行きな！丁重に扱っただよ。いいね？」

「……ハッ、了解しました！」「」

さて行くか、と一息吐いてオリビエは歩き出す。葵に会うために。少しでも長くご主人様の傍に居るために。揺れるは忠誠心が女心か。はたまた乙女心か…。

Side out ????



第七十話「魔人と月夜と宴と」(後書き)

オリビエ無双!!!

スピード感のある戦闘描写ではないですが一つ一つ丁寧に作ったつもりです。

言葉を重ね過ぎて少々クドイかもしれませぬ…。

戦闘描写は難しい。特にスピード感を表現するのが。

どうやったらスピード感のある表現ができますかね？

誰でも良いから未熟な私に教えてほしいものです！

ではでは！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第七十一話「葵と会合と裏の顔と」(前書き)

最後のほうですが軽いホラーを意識してみました。

ホラー映画そろそろ旬だと思うのですよww

暗くした部屋でシーツを被りホラー映画を…ギヤーツ!?

…楽しくなりません?

では続き!

## 第七十一話「葵と会合と裏の顔と」

麻帆良学園都市某建物…。

Side 葵

俺と陽月姉妹、それに親衛隊のメイドさん四人…。もう親衛隊の制服はメイドさんにしちやおうかな。俺も好きだし。あ、そのメンバーで小型揚陸艇ミッパチに搭乗して急行する場所。そこは学園都市の一角にある建物だ。

そこには問題の倉持一派がまとめて拘束されているけど今は情報部三課の子達の手によって14人の馬鹿共を縛り上げてロビーにまとめられているらしい。…テロリズムみたいだと思ったのは俺だけか？

それで現場に着いた今、実際に建物のロビーへ、と考えていたんだけど、な…。

意外にも建物の前に見知った子達が居た。いや、居た、というか寝転がっている、かね。四人仲良く川の字に寝かされていた。

その周囲にはオリビエと三人のウチの子達が囲んで警戒に当たっている。

……なんだ、これ？どういう状況なの？

うん、俺の目の錯覚じゃなければ知っている顔が四つほどあるんだ。男が二人に女の子が二人ほど…。本当に意外だ。オリビエのとだから彼らはその場に放って置いておくとかばかりに思っていたのに。

「……なあ、オリビエ？なんでお嬢ちゃん達がここに居るのかな？」

「え？だってあたしが勝ったんだよ？つまりこの子達は戦利品だろ？ほら、どこもおかしくないぞ？」

あ、あのな…それはどうよ？だってこの子達はタカミチとガンドル君、高音の嬢ちゃんに小さな愛衣ちゃんじゃないか。おもつくそ学園の主要なメンバーじゃないか。原作にもちよくちよく絡んでくるしさ。

それを戦利品？つまりは捕虜か？二、三世紀前ならそれもありだけど今の時代はちょっと…。それに今のところ労働力に不満も不足もないし。うん、手は十分に足りています。

「戦利品って、せめて捕虜とか…。いやそうじゃなくて…ダメでしょ…」

あ、それにタカミチやガンドル君はどうするのかね。同じく捕虜？まあ男の捕虜なんていらないけど…。いやいやいや、そもそもの話し捕虜を取るような状況じゃないでしょ。今は倉持共が捕まればいいよ。

……何よりもこの子達を捕虜扱いとか面倒事しか運んでこないだろうしねー。

「えー？……ダメ、なのか？」

「いや、ダメでしょー……。大体なんで捕まえたのさ？」

「葵へのお土産……みたいなの？」

軽っ！？軽いよ！観光地の名物じゃないんだからさ！一応、人間だよ！失礼、キチンとした人間ですね！ともかく捕虜なんていらないのよ……。

「“みたいなの？”じゃねえ……。元の場所に置いてきなさい。ウチじや飼えないから。ね？」

む！今の俺の言い様だと拾ってきた犬猫みたいじゃないか！いや、拾ってきたのは間違いないんだけどね……。それも彼らの傷を見て判断するにフルボッコにして意識を刈り取ってから確保されたんだろうね……。

「そっかー……わかった。ちょっと調き……狂育すればそこそこ使える人間だと思っただけだなあ」

不穏当な言葉が聞こえた気がするけど無視だ、無視。あー、あー、聞こえないーいつ。しかも言い直したようで部分的に言い直せていないようにも感じるけど……気にしたら負けだよな！

「あ、キチンと拘束してから置いてくるんだよ。いいね？」

この子達が気絶から目覚めて邪魔してきたとしても脅威足り得ないけど一応念のためにね。対魔・対気・霊体的・肉体的などの各種を複合拘束しておくのよ。まあ拘束と言っても手錠モドキを後ろ手にガチャンと掛けて終わりだけだね。

「わかってるって！ふむ……なあ？誰か手伝っておくれよ」

「ハッ！」「」

まあ後処理は彼女達に任せて俺達は建物の中に入るとしますか。

正直に言うと俺は倉持達みたいな外道は好かん。まあ下衆とは違  
い外道なりに信じた道を行っているみたいだけどね。それでも好か  
ん。理解はできても納得だけはできない。そんな心境だ。

……あ、オリビエは終わったら一度こっちに来てね。

オリビエを呼んだ理由は特にはない。ただ資料整理のために情報  
部へ出向していたから離れていた間、俺も寂しかったのよ。てか資  
料整理やゴミ処理しているはずの彼女がなんでここに居るのかね？  
不思議だ。

……。

……。

建物内に入りロビーの中央にまとめられている集団。それとそれ  
を囲み警戒している集団。前者が俺の目的つまり馬鹿共だ。後者は  
ウチの可愛い子達。まあ可愛いと言ってもフルフェイスの全身防護  
スーツを着込んでいるから容姿はわからないんだけどね。

倉持達の顔写真とプロフィールなどをいくつかの空間モニターを  
展開しちよこちよこつと表示する。それと彼らを見比べてリーダー  
の倉持<sup>バカ</sup>を探した。まあ誰かに聞けば直ぐに引っ張り出してくれるん  
だろうけどさ。

……で、だ。然程時間も掛からずに探し出した。俺の目前に居る男。

後ろ手に拘束され膝をつき、崩れた正座をさせられている。この男が倉持。

なんだか顔写真や想像と違う。写真から想像していたのは爽やかな好青年というものだった。だけど今日の前に平伏した男は髪や服装も乱れ、顔は目の下に隈があり無精髭も生やしている。

「あー、コレが倉持か……」

他のメンバーをサツと流し見てみたけど倉持ほど酷くはない。プライドの高い彼はここに軟禁された屈辱に耐えられずに憔悴したか暴れたかしたのかもしれない。

……くくくつ、一日前後でここまで乱れるとは呆れるね。

うん、あれだ。哀れだ。勿論、言葉だけだけどね！本気で他人を哀れんでやるほど俺は優しくくない。家族や親しい者を含めた身内以外に優しくしてやる必要も義理もない。

……あ、可愛い女の子は別だよ？野郎はお断りだけどな！

「????? ツ！貴様、九重・葵ッ！」

「ん？親しくもない男にフルネームで呼ばれる筋合いはな……」

「こんなことしてタダで済むと思っているのか！？MM本国が黙ってな、ガッツ！！？」

今、何があったかと言うとだ。血走った目をした倉持が俺に詰め寄ろうとして八才に叩き伏せられた。具体的に言うと剣の峰で腹を一閃した。……いや二閃かな。彼の腹部をよく見たらエックスの字に痕が付いているし。

アレは痛い。斬られてないだけマシなんだけどアレは痛いよ。倉持もげえげえ嘔吐しているけど何も出てこない。食べてなかったのか？ご飯はどんな時でもキチンと食べないとダメだと、俺は思うがなあ。

……あー、それとどうでもいいけど胃液特有のスツパイ匂いがして実に不快だ。

「我が君の御前である！誰が下衆に話すことを許したか！許しあるまでは沈黙せよ！」

「グハツ！ごほごほっ！きさ、貴様あッ……！！」

倉持が床に投げ出され苦痛に耐える。後ろ手に拘束されて惨めに蹲っている姿を見ても俺は何の感慨も沸かない。フルフェイスで正確にはわからないが周囲を固めている皆もどこか視線というか雰囲気冷たい。

それに…迫力というか気迫というか、うん、叩き伏せたハオさん、マジばねえです。剣で一撃二撃入れたあとも、どんっどんっ、と音が響くほど蹴りつけています！

外面では冷徹とそれを見ている俺だけど内心ではガクガクブルブルと震えていますよ。いやー、ハオの一蹴り毎にバカの身体がビクッビクツツと反応するんだ…。本当にコワイ。

昔からそうだけど敵には厳しく当たるよね。今回は捕獲が主目的だから俺の意を汲んで血生臭い殺害行為は控えてくれているけどさ。それがなかったら今頃この場はブラッドバス状態ですな！

……そんなところが大好きだけどね！いや本当に！惚れ直すよ！  
やはり八才はこうでなければいけないよね。こういう時の彼女は本当にイキイキとしていて頼りになる。そのドSな表情が堪らないよ。間違いなく俺が生み出した子だと確信が持てる。

俺自身が小心者で臆病者だから八才のように頼りになる子達に守られていないと安心できないのよ。やはり、仲間が、家臣が、家族が居るっていいね！

「クソツ…クソツ…クソツ…！」

「ふんっ…！」

「ガハッ…！」

「…黙れと言ったのだ。学習せよ」

最後に八才が一蹴りしてバカを黙らせた。俺は、さてと…と内心で思い現状を観察してみた。

彼女にポコポコにされたバカが咳き込みながらも睨み付けてくる。そのバカをよく見る。目の奥に宿す感情を余すことなく読み取るように観察する。するとどうだろうか。コイツの目の奥にはまだ反抗の色が宿っていた。その色は暗く澱んでいる。

にくい憎い憎いニクイ憎いにくいニクイ…！！

殺す殺すコロスころす殺すころすコロス…！！

ええ、なぜか知らないが物凄く恨まれています。いや、どちらかと言うと怨まれています、って感じか。もう見るからに怨念が宿っていますという色をしている。いやいや大したものだ。この状況でそんな目がまだできるなんて。

……でもさー、それって逆恨みだからね？ 怨むのは筋違いでしょ。

あとさ、少しだけでいいから自分達の今の状況を理解したほうが利口だと思う。別に死にたいわけでもないんでしょ？ なに貴様を殺せるなら死んでもいい、みたいな感じになっているのかね。

そうというのは俺達と関係ないところでやれよ。お前達の幻想、理想、妄想、妄執に俺達を巻き込むんじゃないよ。この馬鹿者共が。手間隙迷惑その他諸々掛けやがって。

……祭りの賑やかさは好きだけどバカが騒ぐのは嫌いなんだよ。

大体だな、正義を自称するくらいなら悪に駆逐される覚悟くらい持てと言いたい。いや俺は悪じゃないよ？ 臆病者の俺に悪を名乗るだけの度胸なんてあるわけがない。精々できて悪役ですな。悪党にはなれんよ。

なに？ 家族は、だと？ ハンツ　　言わせるなよ。やろうと思えば俺以上に悪に相応しい働きをしてくれるよ。女は度胸を地で言ってるし……。度胸……俺も欲しいなあ。

すまない。考えが逸れた。

こほんっ、いつの間にかバカが懲りずにまた睨み付けてきた。だからお前はなぜに俺を睨むのかと問いたい。蹴ったのは俺じゃない。ハオだよ。

……いやまあハオや家族を睨むようなことしたらその目玉を即刻抉るけどさ。

「ハ…ッ！ハ…ッ！…うう！ぐうう！！後悔させてやる！必ず…！  
必  
」

「フッ　　！！」

喚きだすのは倉持。そこにサッと一つの黒い風が流れた。風の正体は…ユエだ。ハオに続いて今度は何をしたんだと俺はバカを観察した。

…あれ？一部の肉体パーツが無くないか？具体的に言っていると倉持の左耳。

「????　　ッ！?!?!?あ、ああ、ガアアアアアッ！！耳が

ッ！俺の耳がああッ！グフッ！…ううッ」

はいっ！気のせいではありませんでした！本気で耳が、バカの耳がポトリ…と床に落ちました！スプラッタは見慣れた光景だけどここ最近なかったからクルものがあるね！吐き気はないけど！

ユエはゆっくりと倉持の側へ歩み寄る。何をするのかと思ったら切り落としたバカの耳を彼女は虫けらを踏み潰すように、そしてそれを見せ付けるようにして踏み躪った。

…あ、足の裏から赤い水が…。

ううむ…ユエのおみ足が汚れないか心配だ！ニチャアと踏み潰した時に音がした。実に不快な音だった！そのバカの血で汚れるなど家族が我慢できても俺が我慢ならない！少し時間を見つけて陽月姉妹の手入れをしようと思つた。

「吾らは“黙れ”と命じたが聞こえなかったようだ。故に斬った。そんな駄耳ならば必要あるまいて。…貴様らも静かにしておれよ。

良いな？」

あ、キツチリとこれ以上騒ぎを起こすなという警告の意味もあるんだ。そのお陰（？）か皆がすつげえ勢いで頷いている…。なぜかウチの子も数人が頷いているけど…お前ら何したよ。

はあ、この現場をマトモな精神を持っている人から見れば恐怖以外の何ものでもないよね。日本人は潔癖症のきらいがあるから特にそれが顕著に現れるし。

臆病者の俺はマトモだからさ。小心者の俺はマトモに過ぎるからさ。こういふ場面は正直言ってあまり見たくない。来年でこの世界に来て“祝 八百年”なのに血生臭い現場は好きになれないね。だから、なんと言うかな…。

……吐きそう、です。

ごめんなさい、ウソです！この程度で吐くようなら生き物はおるか人なんて殺せない。目の前で痛みに泣くバカは所詮、他人（どうでもいい人）だ。俺は臆病者の小心者だから身内以外がどうなるう

と知ったことではないのよ。

……俺もどこか人として壊れているのかもしれない。

まあヒトはどこか壊れているところが一つ二つはあるから気にする必要はないけどね。今回の倉持一派も正義に酔いしれ壊れた人種だしね。宗教つて実は怖いんだよ……。

血に酔うヒト。狂気に酔うヒト。負の感情に苛まれるヒト。稀なのは普通であることに異常なほど拘り自分は普通だと言い張るヒト。ザツと考えても壊れている部分は肉体的、精神的かはヒトそれぞれだ。

極めつけは完璧だと思われるヒトか。その完璧さが致命的な欠点とも言える。完璧なヒト……。俗に言う“天才”だな。この天才はなまじ自分一人で大抵のことができるから“自分がやらなければ”とか“自分にしかできない”などと考えてしまう。

自称天才はどうでもいいが本当の意味で言う天才共は俺から言わせればお前は何様だ、と小一時間ほど問い詰めたい。一人でできることなどタカが知れているのにさ。……いや、今それはいいか。

それよりも今は世間で言う“少し”過激な行為をしたユエさんをなんとかしますかね。

オリビエはこの状況を楽しそうにケラケラ笑っていて当てならなし、親衛隊から連れてきたのは例のメイドさんの格好をした四人だし。第三者から見たらこの血生臭い現場に可愛いメイドさんが居るのはどこか歪んだ光景に見えるそうだなあ。

事態を收拾するために行動しようとするけど小心者の俺にこの場の雰囲気はちょっと内心でドキドキビクビクしています。なんだよ、このよくわからない状況は…。

……あー、お昼寝したいなー…。

「ユエ…」

「ハッ、出過ぎた真似を致しました。申し訳ありません…」

いや、それはいいんだけどね。次から気を付けようか。耳を斬られたバカはどうでもいいけど家族が汚れるのはイヤだしね。

「……………」

「わ、我が君っ、ななにを…ううう。……あ…」

「イ、イヤではございませぬがこの場は聊か恥ずかしきものが…」

ササツといつもの護衛位置に戻ってくれたユエの頭を何も言わずに撫でてみた。無論、ハオも撫でた。いつも守ってくれてありがとう、って感謝の気持ちを込めてな。

テレテレとハニカム陽月姉妹の姿に胸の奥からキョンキョンしてしまった。癒されるよー。ただ、少しだけ他の家族からの視線が変な気がする。こう、熱っぽいと言うか絡みつくような視線と言っのか…。

うん！だが、それは気のせいだ！よくわからないが気にしたら負けとかそんなつもりは無いっいたら無い！俺は家族の皆が大好きだーッ！

……失礼。ハニカム家族に癒されて少し興奮した。

まあ血で汚れるのがイヤだと言っても俺達の歩いた道を振り返ると少なからず血が流れている。それは言い訳しない。正道邪道に拘らず必要となれば裏から数々の姦計を廻らせたこともあるしな。

それでも進んで汚れようなどとは思わなかった。降りかかる火の粉は払う。それだけのことだ。これは当然だよ。俺や家族を守るためには昔からそれだけは妥協していない。あー、まあそれは今も、ただどね。

とりあえず身柄確保したという大きな問題は片付いたと考えていか。少しここで時間を掛け過ぎた。外ではミツバチも待機しているし、第4チームの皆もいつの間にか護送準備を整えていた。

「さて、倉持「レ」一派を護送しておいて。あとの事は任せるからさ」

何か知っていれば儲けものだ。情報部に任せておけばバカ共が何か知ってようが知らなかるうが裏付けを取るなり何なりと確実だ。まあ所詮はバカ共だ。持っているかもしれない情報に期待はしていない。

……家族の憂さ晴らしくらいには役立ってもらうがね。

「ハッ！一斑と二班は五人ずつ、三班は四人だ！護送中はくれぐれも注意を怠るなよ！」

「「「「サー！心得ております！サー！」「」「」

「よし！行け！」

おー……。先ほどからのハオやユエの少し過激な警告を見て聞いて

いるからコイツら大人しく指示に従っているよ。

倉持は未だに反抗的だから後頭部を強打されて気絶したところを  
引き摺られて行った。

……。

……。

さてさて、倉持一派を確保したことで目的を果たしたも同然だ。

あとは無事に「工房」に拉致って情報部本部へ引き渡せば一安心か。

予定通りならば今頃は全てのデータ収集を終えた機械人形部隊が  
いい感じに壊滅一步手前になっているはずだ。

…… 君達の犠牲は決して無駄にはしないよ！

作戦に並行して残骸の回収はアイリ達が別口の無人機を展開して  
事に当たっているので心配はしていないよ。超にはセンサー類は勿  
論、肉眼でも常時監視しているからあの子、個人は大丈夫だ。

…… まあ元から結界内は監視強化キャンペーン実施中だけどね！

機体の一部でも敵や第三者に回収されて技術漏洩するのは避けた  
いからさ。監視は嚴重以上に嚴重よ。念のため第三者に回収された  
時のことを考えて自壊システム…と言うかロマンの一つである自爆  
装置が付いている。

あ、自爆装置と言っても爆発するわけじゃない。これは発動基点  
からの一定範囲内にあるものを原子分解するようにプログラムされ



……うーむ、メイドさん…いいかもしれない。

俺の趣味が、げふんげふん…失礼、つい本音が漏れ、もとい！と、ともかく親衛隊の制服をメイド服にすることをマジメに検討しようかな…。スタンダードなメイド服にレースとか使って可愛くしたのを作るか。

……いや、制服を作るならリチラと相談して決めたほうがいいかもな。

S i d e o u t 葵

麻帆良学園都市内某所…。

S i d e ????

麻帆良学園都市の一角にある暗く狭い裏路地。ここで一つの鬼ごっこが行なわれていた。

「ハッ…ハッ…ハッ…！」

追われるのは四十代の男。彼は麻帆良学園所属の魔法使いだ。彼の姿は長いこと走り回っていたせいで服も髪も乱れている。途中に何度か足を纏れさせて転んだために衣服には汚れが目立っていた。

男の容姿から察するに身綺麗にしていればややお腹回りが膨よかなところ以外は優しそうな中年男性に見えるはずだ。実際に彼は男子校で教師をしているが生徒達からそこそこに慕われている。

「ンツ…ハツ…ハツ…！」

そんな彼が今では形振り構わずに学園中を逃げ回っている。本来ならば魔法で空を飛んで逃げればいいのだが魔法の発動媒体である杖はここまで走る間にキラキラと光る霧に破壊されてしまっていたために飛ぶこともできない。

尤も今の麻帆良上空の制空権は葵側にあるために普通に飛ぶことも儘ならない状況にある。上空に上がった魔法使いは敵のミサイル、対空砲などの弾幕に晒されて優先的に撃墜された。

「ハツ…ハツ…なぜ…なぜ私が、こんな…クツ…！」

だからこそ男は必死に走る。ひたひたと追いかけてくる者の手から一刻でも早く、1mでも遠くへ逃れようと走る。なぜ自分が追われているのか、と疑問は湧くが無理矢理その気持ちを押さえつけて逃げることに集中した。

狭い裏路地にコツコツという足音が響いてくる。

「はあ…はあ…はあ…はあ…！！！」

男は走りながら振り向く。立ち止まることなど端から考えてもいない。止まったが最後。男は自分の生命に関わると本能的に感じ取っていた。そもそも出会いからして異常だったのだ。

……。

今の学園は緊急事態の様相をなしている。これは麻帆良学園都市内に新しく居付いた九重・葵が学園に対して宣戦布告したことが原因であり、今この時は戦争の真只中であつた。男も緊急動員が掛かり学園防衛にかり出されていた。

「あらあらあらく、見つけましたわく」

「　　ッッ！！」

女を見た途端に男は自分の中の生存本能が最大限の警鐘を鳴らした。流れ出る冷や汗。激しい動悸。焦点の合わない瞳孔。カツカツに渴く喉。どれもこれも異常な反応。そうと理解はしても身体の反応は止まらなかった。

……これに関わつてはダメだ。死ぬ…。死ぬ。死ぬっ。死ぬッ！

男は不思議な、けれど絶対の確信を持つて後ろ向きに走り出した。その場に居た仲間達のことなども頭に残らないほど圧倒的な恐怖を感じ取つた。どこでもいい。とにかくあの女の居ないところへ行きたい。

……どこか。どこかつ。どこかないかッ！

「あらあらく、まあまあく　いきなり走り出してどうかしたのかしら」

「あ、あああああッ！？はあはあ…ハッ…ハッ…！！」

男には女と戦うなどという愚かな行為を選ぶ勇氣も気概もない。故に全力で走りここから逃げるしか手はない…。

.....。

「 ツー！ハッ…ハッ…！！！」

走り出してからどれくらい経ったのか。どんなに走っても追ってくる女が履いていたヒールの足音を引き離せない。コツコツと。コツコツという足音が今も直ぐ後ろから聞こえてくるよう。

「うふふ、うふふふ、 あらあらあら、もう逃げないのかしら」  
「あ、あ…ああああああッ！！！」

ような、ではなかった…。全力で走っているはずの男の背後5m先に女が居た。

男を追うのは野外なのに露出の気があるのか紐のようなレザーで幾重にも巻かれたボンテージの衣装を纏っている女性。暗闇の中で彼女の白金色の瞳が妖しく光っていて楽しげに細められていた。

男は今まで以上に走った。早く、早く早く早く！速く、速く速く速く！ここには居たくない。あの女の居ないところへ行きたい。行かなければ死んでしまう。死んで…。

「ハア…ハア…あ？」

サアアと流れる光る霧が男の進路に割り込み、遮る。男はこれに見覚えがある。それもつい先ほどのことだ。この不思議な霧に男の杖は灰燼に帰したのだから。破壊？崩壊？触れるのも憚られるほどの熱量を感じたから焼失？

そこまで考えて男の四肢が一瞬で炭化した。周囲の霧が男の四肢に纏わり付き炭となる。ボロボロと崩れ落ちる両腕と両足。走っていた男の身体はその勢いそのまま豪快に前へ投げ出された。

「え？」

あまりの事態に男は理解できずに啞然としまった。そんな馬鹿な。なぜ自分は地面に横たわっているのか。早く立ってあの化け物から逃げなくてはならない。だから立つには腕で身体を起こして足を使つて走らなくてはならない。

……わからないわからないわからない。

何度も立とうと腕を動かそうとする。地面に手を付いて立ち上がろうとする。立って足を使い走らないといけないんだ。逃げなければいけないんだ。

そうだ、家族のところへ帰ろう。あそこなら安心だ。妻は最近盛り上がりには掛けるが昔から手料理は上手で夫としては自慢だ。この歳になってやっと授かった娘は今年で三つになっただばかりなんだ。

……ああ、だから家族のところへ帰らないと……。

「ハッ…ハッ…ハッ…ハッ…！！」

だが視覚から齎される情報からイヤでも現実を理解させられる。呼吸は短く荒れており過呼吸気味になる。そして遅れてやってくる今まで感じたことのない神経を抉り取られたような激痛が男の脳神経をグサグサと刺激する。



完全再生させた男にはもう興味を失った女は魔法術式を解除した。男を追い詰めて果ては殺しかけたのにワザワザ完全回復させる。第三者が観察していれば何が何やらわからないだろう。

「お見事です。リビエラ様」

「うふふふ　ありがとうございます。それじゃ〜この護送はお願いね〜」

「ハッ、お任せ下さい」

フツとどこに隠れていたのかわからないが姿を現したのは女が四人。全員が黒い防護スーツにフルフェイスの装備をしていた。女、リビエラは彼女達に後処理を依頼するとまた移動を始めた。

……。

……。

実行犯の倉持一派14名。彼らを支援した者が8名。そしてそれらに関与した疑いのある者が10名。計32名が葵ファミリー内で公式非公式合わせた正確な捕獲対象者だ。

実行犯の倉持一派は葵が確保する手はずになっている。裏の他の者は情報部が担当するが作戦区域の人員の半分は情報部から出ているのであまり変わらない。もう半分は作戦部から供出されている。

こういふ捕獲劇は部下に任せてご主人様である葵は報告を待てばいい。寧ろ葵ファミリーの大半はそれを支持している。なぜ自分達のご主人様が危険なことをしなければいけないのか、と一時は暴動が起きかけたほどだ。

ここでなぜ葵が動かなければならないのか。葵本人が動きたいと

という願いがあつたのは事実だ。だが情報部はそれとは別の理由で動いて欲しかった。それはなにか？簡単なことだ。

ただ“主目的を葵が確保した”という事実を作りたかつたのだ。

自分達が敬愛してやまないご主人様が危険を顧みずに家族の仇の身柄を確保した。これ以上に味方の士気を向上させる要素があるだろうか。そしてこれは要素の一部だ。

味方の士気向上は先ほども述べたが、敵に謀略や計略などの情報戦を仕掛けるにしても隠蔽するにしても十分に事実を把握し都合がよいように改変する必要があるのだ。そのための調整をするには収集できる限りの“事実”が必要不可欠だった。

要は正当性の権利があるのはこちらであるということだ。なければ捏造してでっち上げる。それだけの情報はもう収集済みであった。無論、これらは矛盾の少ない自然なシナリオを用意することが絶対条件だ。

尤もこのような些事など葵の手を煩わせるまでもないとして対処は情報部部长ダチュラとその副部长ダリアが独自に動いているために葵本人は知らない。

……。

後日、判明したことが倉持一派14人の他に18人の人間が麻帆良から姿を消した…。

搜索願などは一切無く。彼ら行方不明者は“無い者”として扱われた。家族が居る者はその悉くが記憶操作され、電子情報や紙媒体

からなる個人情報も処理または削除された。

これらが判明しても証明する手段が無いため全ては闇から闇へと葬られる結果となる。

S i d e o u t ? ? ? ?

第七十一話「葵と会合と裏の顔と」(後書き)

あれ？ホラー？なんか違う気がするorz

むー、完全なスプラッタものを番外編で練習してみようかな。

最後のほうだけ夏っぽくホラーっぽくしてみたのに…。

それらしくならない！

これはどうということだろうか…。

ゾンビ映画とか見直してみようか…。

いえ、それよりも続きを書くべきですよね！

現在七十二話執筆中なりー…

ではでは！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

第七十二話「忠告?と警告?と癒し?と」(前書き)

超・鈴音と陽月姉妹のお話し。

葵とエヴァ、茶々丸のお話し。

前者がメインで後者はオマケかな。

では続き!

## 第七十二話「忠告?と警告?と癒し?と」

麻帆良学園都市…。

Side 鈴音

麻帆良学園の上が騒がしいから気になってちよっとハッキングして覗いてみたネ。そしたら学園に戦争ふっかけたのが居たらしい。私以外にそんな無謀なことをしたのが誰なのか調べたら、これヨ…。

「これはなんの冗談ヨ…」

なぜアレが、“田中さん”が稼動しているのか…。いや、よく観察するとこちらの田中さんとは姿形が少し違う。全長は向こうのほうがやや大きく放熱用の髪も短い。それに顔の造形がヤのつく自営業の人のように厳しい。

「…アレはないネ。小さな子は間違いなく泣くヨ」

いやいやいやいや。そうじゃない、そうじゃないネ。この際、アレの造形などどうでもいいヨ。

問題なのはアレらが学園内で多数の魔法使いを相手に戦闘している、ということネ。

こちらはまだ稼動データが足りずにいるのにアレらは私の想像通りに戦闘行動をしている。今開発、調整中の田中さん以上の稼働率を示しているヨ。

それが互角いや今は7:3で学園側に押されている。やはり田中さんだけで押し切ることは難しいと見るべきか。私は計画に若干の修正をする必要ありと脳内でメモを取る。これはいい判断材料になったネ。

しかし…それでも緒戦はアレらが優勢だった。あのまま攻めれば押し勝てるほどの勢いだったように私には見えたヨ。

それも今は“自然と徐々に後退している”…。不自然ではない。でもそれが不自然に思える。でも後退の判断、時機は見事だった。不自然ではない。それでもやはり不自然に思えた。

「なぜ退いた？勝っていたのになぜ…」

考えられるのは…畏？…フツ、馬鹿な。勝っている状況で畏を仕掛ける必要がどこにあると言うのか。もし仕掛けるのならば緒戦の時に仕掛ければ良いではないか。

「本当にナニが狙いヨ…」

……。

……。

戦闘も終盤。あれだけ優勢を誇っていた田中さんモドキが壊滅しつつある。やはり中盤で後退したのが原因と私は思うヨ…。あの後退には意味があったネ？私には機を見逃した行動にしか見えなかつたヨ。

アレらが後退した時、最初は何かの罠があると思ったのにそれも無

し。ただ、そのまま後退して徐々に撃破されて戦力を徒に削られていくだけだネ。

本当に何がしたかたのかわからないヨ。だけど今後の計画の参考にはなたから良しネ。

アレらの田中さんモドキが起こした騒動は、数で押せばある程度の混乱を引き起こすことができることが証明されたヨ。ただ、事態を楽観する気はサラサラないネ。今回のことで学園側も何かしら対応するのがイタイヨ。

それでもアレらの戦闘や活動は私達の開発している“田中さん”の開発方針の参考になったのは行幸かな。より完成度の高い田中さんを作り上げてみせるヨ。ふむふむ、そう考えてみるとこれを仕掛けた彼には感謝してもいいネ。

「…まあ見るものは見たから帰るとするネ」

最初から油断はしていなかつたヨ。それなのに光学迷彩で隠れていた屋上から立ち上がり、さあ帰ろうとした時に二つの声が聞こえてきたネ…。

「なに、そう急ぐこともあるまいて」

「左様。暫しの間、吾らに付き合つが良い」

「ツ！？！？！？」

気配を感じなかつた！いつ来た！どこから来た！どこに居た！いや！そもそもコイツらはいつからここに居た！？

振り返り二人居るのを確認したヨ。暗い視界の中で目を引くのは白と黒の対照的なコントラスト。九重・葵の店で用心棒のようなことをしている白と黒の姉妹だたネ。

地下で私の仕出かしてしまったことがある。だから一人で行くのは何をされるかわからないと思いきラスメイト達と押し寄せて店内で宴会のように騒いだ。その時に彼らの人となりを観察した。

観察結果は……“わからない”。

違うネ。表面上はどこにでも居る喫茶店のマスターに見えた。私自身が接してみた感想は“いい人”だたヨ。物腰も柔らかくて優しい。少し目付きが鋭いのが怖いながらも慣れれば愛嬌のある瞳に見える。ただ……。

…ただ、私の知る“過去”のデータに彼らは存在しない。

だから彼らの身辺調査を始めた。この調査の前に学園地下で想定外の勢力に遭遇したことで私の警戒心は頂点だたヨ。ただ、その時の私は私の知らない彼らが関わっているのでは、と考えることだたネ。

今考えるとデータよりも本能と言ってもいい、ただの“勘”に頼るなど科学者に有るまじきことヨ。だけど気になたネ。念入りに計画してきた。データに無い彼らが私の障害になるかもしれないと考えると不安だたヨ。

調査結果は……“わからない”。

彼らの身辺調査をしても出てくるのは極々有り触れた経歴だけだ

たネ。不振なところはどこにも無いヨ。でも、だからこそ不自然だ。地下で遭遇したのは彼らだ。あの時点で証拠はなかつたが確信に近いものが私の中にあたネ。

定期的に飛ばす偵察機も悉くが潰されて意味をなさない。それなのに今、私の目の前には彼に近しい二人と向かい合っている。これは何の冗談だ、と笑い出したくなる。殺されるかも、と嘆きたくもなる。

……とにかく今を切り抜けるしかないヨ。

「いつから居たネ。ハオさん、ユエさん」

「うむ？なに、つい先刻だ。…小娘はナニを怯えている？」

「そうぞ。我が君の店でバカ騒ぎをする時とは違うではないか。ん？」

何を馬鹿な。二対一で向かい合う今と2Aの皆と騒ぐのは話しが別ヨ…。ハッキリ言って今の状況はマズイ。何しろ人目が無い。この場で何が起きてもおかしくないネ。

「あ、あの時と今の状況は違い過ぎヨ…」

……本当に何をしに来たネ！？来たばかりと言われても信じられないヨ！

本当に今の状況はあまり歓迎できないネ。したくもないけど。むむむ！まさか彼がこの二人をここで仕掛けてくるとは思いもしなかつたヨ。どうしたらいいネ…。どうしたら正解を引き出せるヨ…！

「ふふふ。安心するが良い。この場で貴様を害することなどあり得ぬよ」

「うむ、吾らは我が君の意思を貴様に伝えに来た。言うなれば伝言役のようなものよ」

安心？伝言役？仮に安心するにしても随分と物騒な伝言役が来たものネ。店内で私が観察して感じたことを事実とするならば目の前に居る彼女達は彼の側近中の側近と言ってもおかしくないヨ。当然弱いはずも無いネ……。

「……葵さんから伝言？……それは何かな？」

「うむ。だかの？伝言とは言つたが実は我が君に具体的な下知はされなんだのよ」

「………は？それだと貴女達は何しにここへ来たヨ」

伝言役なのにその要の彼から伝言を預かっていないということか？そんなの伝言役でもなんでもないヨ。彼は、葵さんは一体何を考えて彼女達を私のところへ寄越したネ。

………まさかつ……！

ふと、彼女達がここへ来た理由を考えた時、色々と嗅ぎ回る私を一思いにここで殺してしまう、などとイヤな想像をしてしまったから一瞬だが緊張から身体が硬直したヨ。

マズイ……。事を起こすまでは、と考えて今は碌に装備していないネ。この身一つで目の前の二人を相手取るには負けないと思うが少々心許ないヨ。

……どうするか。殺される前にクロス？　否、ここは…。

「ふふ、誤解なきようにしておくがここへ吾らが来たことは我が君の意思ぞ」

「?????ますますどうということかわからないヨ」

逃げよう、と考えた途端に着崩した白い和服を着たハオさんが先を制するように言ってきたネ。同じく着崩した黒い和服を着たユエさんはクスクスと目を細めて笑てるヨ。嫌味にならない上品な姿に同じ女なのに不覚にも一瞬だけ見惚れてしまった…。

考えが見透かされた?…しまった。しくじったネ。これで逃げるチャンスをついにしたヨ。この場は形振り構わず逃げなければいけなかつたネ。次のチャンスがあるかどうかも怪しいのに…。

スツと視線が変わった気配がした。クスクスと笑っていたユエさんだ。彼女のにこやかな、だけど一つの拳動も見逃さない鋭さを持った視線に私は捕らわれた。

……ああ、これで逃げられるチャンスは激減したネ。

「吾らは“任された”のだ。つまりここで“何が起きようと我が君の意思になんら反することは無い”ということよな。さて聞く。身に覚えが有りや?否や?」

「ッ!……………な」

う、動けない!?身体が動かないヨ!!呼吸もおかしい。息が乱

れ荒くなる。酸素が足りない。違う。このままでは過呼吸になる。二人が私に“何か”したのか？金縛りの術？魅了の魔眼？よくわからないが捕縛された？

……  
違う！！！！

これは違う。二人は何もしていない。ただ私達の周りの空気が違う。さっきまでは無かった空気。あまりにも重厚で視覚化してしまいそんなほどの濃密なプレッシャー！！これは二人の、否。ユエさんのプレッシャーだ……！！

「はあ……はあ……はあ……くっ……」

マズイヨ……。葵さんの命とは別に彼女達がここへ来た理由。私自身、彼女達というか葵さんの周囲を調べていたという事実。不慮の事故とは言え地下での戦闘行為。店へ直接出向いての偵察。思い当たることは山ほどあるネ。

「ユエ、そのように脅さなくとも良からう。ほれ見てみよ。怯えて警戒を露わにしておるではないか」

「ふふふ、良いではないか。なに、これくらい我が君もお許し下さることだろう」

「ふう……仕方ないヤツめ。まったく……（ボソツ）程ほどにせよと言ったのはユエであろうに、なぜ私がユエを抑える役になっておるのだ」

ハオさんのお陰で少しだけプレッシャーが減ったように感じたヨ。でも人が苦しい思いをしてるのに楽しいそうにお喋りするのはやめ

てほしい。なんと言うか自分が少し惨めになるから…。

「こほんっ…小娘よ。返答如何によつては貴様を今ここで斬り捨てることもあり得る。もう一度聞こう。…身に覚えが有りや？否や？」

もう一度も何も一度目は答えることもできなかつたネ。とりあえず…どのことを言てるのかがわからないからここは惚けるヨ。下手に話して藪を突いてしまつたら元も子もないネ。

「…本当に物騒な物言いネ。私には貴女達を怒らせた覚えは…」  
無い、と言い切ろうとした瞬間。ユエさんのプレツシャー以上の重圧が私の神経を圧迫したヨ。これの発生源を探した。わかつてたことだけど八才さんが笑つたネ。ユエさんも同じだつた。

本当に…見なければ良かったヨ。二人とも笑顔なのに怖い。目が怖い。冷たいとかではなく。その目に“私が映つてない”ことが怖い。まるで道端に転がる石を見るような。どうとも感じていない視線が途方も無く怖い。

「無い…と言うつもりか、小娘よ？…ふふ、ふふ。肝の太い小娘だ」

「これは…驚きだ。身に覚えがないと？本心からそう申しておるのか？」

失敗した…。ユエさんだけでなく八才さんまで怒らせてしまつたよ。うネ。どうしたらいい。どうしたら…どうしたら生き延びれるヨ…！

「えと…す、すまなかつたヨ！私のしたことだから覚えはあるネ！謝るヨ…」

「ほう…？己が非を認めると申すか。そうかそうか。良いぞ。それで良いのだ」

「うむ。最初誤魔化そうとしたのは気に入らぬが素直に己が非を認め謝罪する。その姿勢は賞賛に値する」

おつ 思たより好感触ネ！これで逃げるチャンスが見えてきたヨ！こんなことなら素直に謝罪してしまえば良かったヨ。そうすれば余計に話しが拗れることもなかたのに…。私も焦っていたのかもしいヨ。

「反省してるヨ。謝るからどうか許して…」

「「ただし…」」

「…ほしい。…ほしい？」

二人の笑顔が変わらない。変わらないことが怖い。ますます私という存在を無視した視線を浴びせられる。私を見ていないのに私を直接見られている。そんな不気味な感覚。何もかもを見透かされたような錯覚を感じる。

また…失敗したの、かな…？そんなつ、ここに来てまで勘弁してほしいネ！

「それは本心から謝罪していることが絶対条件であるぞ。小娘…否、超・鈴音よ」

「左様。お主、口では謝罪の言葉を紡ぎながらも心では別のことを考えていたな」

「ッ。…あはははっ、そんなことないヨ。私は本心からすまなかたと思てるネ」

「嘘だな」

バレてる…。確かに言葉とは裏腹に私はこの場から如何にして逃げるかだけを考えていたしそのチャンスを狙つてもいたヨ。このまま一当てする、と言う考えもあたけどそれは無意味ネ。どんなに考えても特にならないヨ。

ああ、今日は何もかもが上手くいかないネ。この時代に来てからウソばかり吐いてきたから彼女達との会話もウソを混ぜてしまふヨ。もうこれは癖になるかもしれないネ。

「…何を根拠に言うヨ。いくらなんでも失礼じゃないかな。私はちやんと…」

「貴様、話し合いの最中に一瞬だが視線が鋭くなっていたな」

「それは…」

「それだけではない。貴様の魔力に乱れが見られた。それは心の動揺の現われだ」

「っ…。驚いた。貴女達は私が思った以上に鋭いようだ」

もう隠し事はできそうにないネ。ここが観念のしどころかな。幸いにも彼女達はこの場で私を殺すことはしないと公言していたから命の保障はある。最も今を以ってしても彼の考えは読めない。

……本当に葵さんは何がしたいヨ。今日だけで寿命がどれくらい縮んだことか…。

「なに、このような状況で貴様のようなものが考えるのは大体わかるのよ」

「……参考までにそれは何か聞いてもいいかな？」

本当に。今後の参考には是非聞いておきたいネ。これでも腹芸はそこそこ得意になりはじめていたのにこの二人を相手にしたら私は子狸もいいところヨ。

それにアレはなにネ？魔力の乱れ？普通の人は他人の中にある魔力なんか感じられないヨ！精々できて表面的な魔力を感じられればいいとこネ！貴女達は本当に人間か！？

「ふむ…。大きく分けて二通りだな。機を窺い逃走を図る者」

「そして隙を見つけた途端に襲い掛かる者だ」

「なるほど、よくある話しネ。それで私はどちらに見えたのかな？」

ふむ…。聞いてみれば大したことないネ。他にも行動は取るだろうがそんなのを挙げていたら際限ないヨ。だからこの二通りが彼女達の経験談込みの話しなのだろうことがわかるヨ。ただ、こうなるとどれだけ場数を踏んでいるのかが気になるところネ。

「無論、前者……と言いたいが頭の回る貴様はそのような小者ではあるまい。私も是非とも後者であってもらいたいものだ。手間も省けるゆえな」

「姉上よ、今は控える時ぞ。…さりとして貴様は無闇に愚かなことはするまい。なにやら裏でしておるのだからな。故に今回は前者だ」

本当にこの人達には見透かされているのかもしれないヨ…。私には大事なことがこの先に控えているネ。こんなところで無益なことはしたくないヨ。だからこそこの時代に居る私は今まで逃げの一手で来た。

「……はあ、貴女達は私をよく理解しているヨ。確かに逃げる方法を考えていたネ」

「なに、逃げても追わぬよ。ふふふ、今は、な。…私としては残念なのだが」

「姉上…。さて今日、吾らが来たのは超・鈴音、貴様に警告するためよ」

「逃げてもいいのはありがたいが、警告？それはなにヨ？」

殺すことはない。逃げるならいつでもできた。つまりこれまでのやり取りで私をからかっていた、ということか？…？少しだけ、ほんの少しだけブチツと来た。来たけど面には出さない。残念だけど戦っても勝てる気がしないネ。

……ここは我慢の子ヨ！超・鈴音！！

それよりも気になるのが“警告”という部分ネ。物騒な言い方だけど、要は何かをやめてほしいなどの要求だ。彼らには迷惑も掛けたから私にできることなら可能な限り手を尽くさせてもらおうヨ。

んふふふ これは彼らが初めて要求してくることヨ。これを取っ

掛かりにして交渉を進めることもできるかもしれないネ。あつ、ただし要求の条件が厳しい場合は向こうにもこちらの条件を飲んでもらわないと、ネ？

「簡単なことだ。我が君の周囲へ不愉快な羽虫をバラ撒くな。探るな。目障りだ」

「ふふ、無論のことだが断ってもかまわぬよ。寧ろ断ってくれたほうありがたい」

ユエさんの言葉に繋げて八才さんも言う。どちらも余裕が感じられる声色だ。態度にもそれは表れているヨ。どこか私の返答に期待しているように感じられるネ。

ああ、それにしても私が甘かたネ…。これは要求などという優しいものではなかつたヨ。二人の言う警告とは文字通りの警告であり“絶対命令”だ。従うならよし。そして逆らうもよし。ただ後者の場合は問答無用で斬り捨てられるオマケ付き…。

……八才さん、ユエさん。怖すぎるヨ。これでは葵さんも大変じゃないか？

「……わかつたヨ。もう悪戯に探ることはやめるネ」

こうなるともう私には条件を飲む以外に手はないネ。八才さんの手が背後に伸びて“何か”を掴んでいたように感じられたのが更に怖い。本当にこれはわかり易い。わざとこれ見よがしに私に見せているとわかつたヨ…。

……もう断た瞬間に私の首が飛ぶとか勘弁してほしいネ…。まだ死にたくないヨ。

「……………そうか。わかれば良い。　　ああ、警告は一度きりだ。努力を忘れるでないぞ」

「はあ……………（チラッ）。……………はあ」

「忘れないヨ……………。今日のことイヤと言うほど理解したネ」

なんでユエさんは私の答えに不満そうなのかな？それとハオさんはなんでタメ息を吐いてチラ見してまたタメ息を吐くのかな？受け入れてはダメだったのか？これは断ればよかたのか？でもこれはこれで相手も満足してそうヨ？本当に何ネ……………。

……………相手の条件を飲んで残念がられたのは生まれて初めてヨ……………。

……………。

因みに二人の申し出を断った場合のことをユエさんに聞いてみた時の答えが……………。

「何を聞くかと思えばそのようなことか。なに“小石を掃う理由ができた”、ただそれだけのことよ。寿命が延びて良かったではないか。……………（ボソッ）惜しいな」

ハオさんの答えを聞いて自分の判断に拍手喝采を送りたいと初めて思った日だたネ。よくやった！私！間違っていない！私は間違っていない！私！

「そつだ！なんなら今からでも断ってくれても……………」

「全力でやめさせてもらうヨ！貴女達を相手にしたら命がいくつあっても足りないネ！！」

「なんともまあヒドイ言い草だ。それにつまらぬ娘であるな。気概を見せぬか、気概を」

「本当に。のう、姉上。娘よ、一度死んでみぬか？私も手間が省けて楽なのだ。どうか？」

「聞こえないヨ聞こえないヨ聞こえないヨ……！聞こえないネ……！！」

もう帰るネ……。今日はこの二人のせいでなんかもう色々と台無しヨ。最後の最後でグツと疲れが出てきた。明日は日曜だから一日中不貞寝するヨ……。

Side out 鈴音

麻帆良女子中学屋上……。

Side 葵

ただいま麻帆良女子中学の上空に居ます！あのあと直ぐに倉持達の居た建物から護衛四人と飛んで移動してきました。ここにはエヴァちゃん達が今夜のお祭りを観察しているのよ。自宅で大人しくしているように言っても無駄だったよ……はあ。

それでなぜにここに俺が来たかを言うのだ。もうね？あの正義に歪んだ臭いが気持ち悪くて気持ち悪くて……。今の俺は猛烈に癒しを欲しているわけですよ。…いや、護衛役四人に癒されたけどね！

……本格的に“親衛隊をメイドさんに！計画”を練る必要があると思うのだ。

「はいっ！というわけで文字通り飛んでやってきました！」

まあそんなわけでスタツとエヴァちゃんの隣へ着地しました！茶々丸ちゃんがきよとんとしていてマジ可愛いです。護衛の四人は少し離れた場所に着地して待機してくれた。そして肝心のエヴァちゃんとはと言うと……。

「なにが“やってきました！”だっ！！貴様まだ戦闘中だろ！？今までどこに居たんだ！？そもそもなんでここにいる！？いや、そうじゃない！貴様はどこから湧いて出た！？」

盛大な突っ込みをありがとう！それと、どこからって……空からですが何か？……と言うか湧いて出たはないと思うよ。俺は黒いアブラムシ的な何かか？流石に俺は三十人も居ないよ。あはははっ

……万単位で影分身くらいならできるけど。

だが、まずは二人に挨拶しないといけないよね！突然現れたのにもも言わないなんて礼を失するもの！とりあえず“わー、わー！”と元気なエヴァちゃんはあとにして茶々丸ちゃんに、かな！

「あ、茶々丸ちゃん、こんばんは。今夜の君も可愛いね」

「えっ……あの……あ、ありがとうございます、葵様」

「茶々丸ちゃん…」

「葵、さま…」

サツと寄り添って見詰め合う茶々丸ちゃんと俺。うん、手なんかを絡めるのがポイントです。すっごい恥ずかしいけどね！

この時に護衛メイドさん四人からの圧力が増した気がするけどなぜ？エヴァちゃん達は一応安全だよ。無意味に攻撃してくることは万が一にもありえない、くらいまでなら俺は信用している。

それにしても茶々丸ちゃん…。君はなんてノリがいい子なんだ！こうやって敢えてエヴァちゃんを無視することだからかうのが俺のお気に入りの弄り方だということを茶々丸ちゃんはよくわかってる！

こうしている間もエヴァちゃんが「私を無視するな！」とか「なんでここに居る!？」とか喧しいね！うん、いつも元気、良い子なエヴァちゃんだ！お兄さんはそんなエヴァちゃんが大好きだ！

………弄り甲斐がある的な意味でだけど。あ、好きなのはホントだよ？

「おいっ！おいおいっ!？こらっ！待て！待つんだ、葵!！なに自然と私を無視する!？それだけでなく目の前で私の従者を口説くとは何事か!？」

「「え……………?」「」

これは口説いているのではない。あくまでエヴァちゃん弄りが目的です。彼女って近年稀に見ないほど弄り甲斐があるんだ。これは

もう弄らないと損だろ。俺も楽しみに癒されるからね。

「葵だけでなく茶々丸にまで“なに言ってるのこイツ？”みたいな目で見られているだど！？これでは私が空気を読めていないようではないか！！」

「はあ……。……（チラッ）。……はあ」

そろそろからかうのは終わりかな。ここらが引き際だろう。これ以上からかうとエヴァちゃん泣いちゃうし。この子は弄るのは好きなのに弄られるのはトンと弱いのだ……。これでいいのか真相と小一時間話し合ったのはいい思い出だ。

「チラ見されて二度タメ息を吐かれた！？空気か？私は空気なのか！？一体私が何をしたというのだ！？」

「まあこれ以上やるとエヴァちゃんが愚図りそうだからやめようか、茶々丸ちゃん」

「……はい、葵様。可愛らしいマスターのお姿も記録できましたので私としてもとても満足です」

何もなかったように見詰め合うこともやめて、握り合った手も放した。こういう切りの良さは大切だね。このまま見詰め合っていたら変な気分になるし……。そんなことしたらエヴァちゃんにも茶々丸ちゃんにも申し訳が立たないよ。

しかしまあ……。いやー、エヴァちゃんのお陰で十分に癒された。彼女の狼狽振りが今は何よりも楽しいよ。可愛いから思わず“ぎゅっ”としたくなったほどだ。

「愚図るとか言うなっ！？その言い方だとまるで私が幼子のようではないか！！せめてそこは泣くと言えっ！！……私が泣くなどありえないがなっ！！」

言葉に一々敏感だね……。それと幼子がどうのという話しだけど

お前はどこからどう見ても幼女そのものだ！それも飛び切りの美少女！だけと態度が悪いのが玉に瑕だ！そんなところも好きだけど！

……最後にもう一弄りするか。

「……………ふっ」

「なっ！？貴様っ、今っ、鼻でっ、笑ったなっ！？このっ！ええいっ！避けるなっ！！」

いきなり殴りかかってくるのはいけないとお兄さんは思います。

まあ封印があるから幼女にしては良く動けなくらいでしかないけど……いや、確か彼女は合気道をかじっていたな……。掴まれたら危ういかもしれない。

「そんなっ、ことをっ、言われてもっ、ほっ、リーチの差はっ、よっつっ、如何ともっ、し難いよねっ　むっ！？これは……」

苛立ったエヴァちゃんが空中飛び蹴りをしてきたからパシッと彼女の左足を掴んでプラーんとぶら下げてみたよ！上下逆さまになるから薄手のゴスロリ服のエヴァちゃんは当然スカートが捲かれるね。ペラッと……。

……でも幼女が黒のアダルティな下着なのはお兄さんどうかと思

うよ？

「にゃっ！？み、みみ見るなーっ！！こらっ！足から手を放せっ！！このままではっ！！全部見えてっ！！にゃあああっ！！」

「ああ…マスター、素敵です。可愛らしいです。これは要記録事項ですね」

「貴様は貴様で何をしておるかーっ！！」

茶々丸ちゃんも遅しく成長してくれて俺も嬉しいよ！こんなふざけた状況なのに主人の愛らしさを余すことなく記録しようとはね！あとでは非ともコピーさせてください。お願いします。

「エヴァちゃん、そんな…。いつの間に撮影されながらなんて高度なプレイを…。お兄さん、エヴァちゃんにはまだ早いと思うよ？今から変な性癖がついても困るしさ」

「貴様はなんの心配をしているかっ！？だいたい貴様が手を放せばいいことだろ！？と言うか放せっ！！頭に血がのぼる！！」

む！確かに俺が手を放せばいいだろう。そうすれば逆さまになったエヴァちゃんも頭に血がのぼることもなくなるだろう。だけど…

「えー…。危ないよ？」

「えー…」じゃない！！なんで不満そうなんだ！？私が放せと言っているんだから放せっ！！そもそも貴様が放さないほうが危ないわー！！」

本当にこのまま放しているのだろうか？この屋上の地面はコンクリンだけだ……。でも今のまま掴んでいても仕方ないし……。エヴァちゃんは放せと言っし……。うん、ここで俺が手を放して怪我しても責任は彼女にあるよね。

「そうか……。じゃ放すよ？」

「いいから！サツサと放せ！！このままでは本当に見えてしまう！？」

見えてもエヴァちゃんの姿が幼女だから俺の食指が少しも反応しないよ……。いや、可愛いと思うよ。だけど情欲よりも保護欲のほうかビンビン刺激される。なんと言っか……。娘を構いたがる父親の心境かね。

とりあえず、だ。エヴァちゃんから言質は取ったから手を放すでしょう。あ、でも本当に怪我したら大変だから地面に近づけてから……。

「それじゃ……。はい」

「ふにゃんっ！？！？」

どべちや、とあまり可愛くない落下音がした。今は豪快に大の字で倒れている。姿が美幼女だからとてもシユールだ……。

「……マスター、お怪我はございませんか？」

茶々丸ちゃんがエヴァちゃんの手を取って優しく立たせた。エヴァちゃんも「う、うむ……」と痛む頭を押さえて素直に彼女の手を取

った。茶々丸ちゃんがパパッと手で倒れた時についた埃を払っている。

なぜだろう。二人を見ていて親子か？と幻視してしまった。無論、母親は茶々丸ちゃんです。今の彼女は一歳と少しなのにね。それでも今の光景を見ていると保育士とか似合いそうだ。

逆にエヴァちゃんを母親と見るにはもっと大きくならないとね。これだけ可愛いんだから将来は美人さんになるよ。…不本意ながら真祖になってしまったから成長することはないけどさ。

「アイタタタタ…。クツ！ 葵！ 何をするか！」

「何するも何も手を放しただけだが…。だから言っただろう？ 危ない、って」

ズイツと迫ってきたエヴァちゃんに思わず一步後退してしまった。迫力と言うには幼い容姿がその威に欠けている。全体的に小さいものね。うむ、やはり小さいは可愛いだな。癒される。

茶々丸ちゃんは微笑ましく自分の主人を撮影げふんげふん見守っている。…俺に迫るエヴァちゃんを見ても危険性は低いと判断してくれたメイドさん護衛達も動かずに居てくれた。

…でもね、皆。なんだか視線がコワイですよ？ ギラリと光る的な意味で。

「それはそうだが…。もっと、こう…やり方があるだろ！？」

「手を放すやり方って…。どうすればよかったのかね」

「この子は随分と難しいことを言ってくれ。手を放すやり方って何ですか……。パツと放して終わりだろうに。それ以外の方法があるなら是非とも見てみたい。」

「あるだろう!? 優しく横抱きにするとか! 貴様の胸の中に抱くとか!」

それはあれか? お姫様抱っこしろ、と? 優しく抱き寄せろ、と? ふうむ……意外、と言つては失礼だけどエヴァちゃんは姿相応の乙女心を持ち合わせていたようだ。

……やはり精神は肉体に引つ張られるものなのだろうか? 興味深い。

「あー………してほしかったのか?」

「ッ! ! ぞ、そそそそんなわけがあるか! ! あくまでもこれは例えであつてだな……! ! つまり……! !」

「んふふ 随分と可愛らし ……」

そこまで慌てられると俺のからかいたいという精神をものすごく刺激される。 だけでももう時間はないみたいだ。秘匿念把で連絡が入った。この祭りも閉幕のようだ。

「 ……すまんが時間だ。次があつたらそれらしいことをすると約束しよう」

「っ! ! ? 本当だなっ! ! ? 二言はないなっ! ! ? 破つたら酷いからなっ

!？」

「…もう エヴァちゃんはかーいーなー そんなに楽しみなのかあ  
」

「~~~~っ!!ふ、ふんっ、もう知らんっ!!!!」

プイツと顔を逸らすエヴァちゃんだがその頬は少し赤かった。月夜でもわかるくらいだから相当恥ずかしかったのかもしれないね。でもさ、なにこの可愛い生き物。すんごくお持ち帰りして愛でたいね!

……やはりこの世は可愛いが真理のようだ。これがお姉さんだったら……クツ。

「くくくっ。ん?……この手は何かな?茶々丸ちゃん…」

服を軽く引っ張られた。背後からだった。うん、振り返ると茶々丸ちゃんがちょこんと俺の服を摘んでいた。

「……………(ジイイイイイイ…)」

なにこの小さいけど確かな自己主張は?この子は俺に何を望んでいるのだろうか?それもわざわざエヴァちゃんから影になるようにして、だ。控えめなのか積極的なのか判断に困るね!

……可愛いからいいけどな。

む?エヴァちゃんと俺を交互に見ている、だと?つまりこれはアしですね。エヴァちゃんと約束した同じものを求めているのですね

？あー、時間もなしし苦にもならないから約束してもいいかな。

「おーけー。わかった。エヴァちゃんと同じ約束をさせてもらおう。  
…それでどうだろう？」

「…はい」

うん…。まだまだ表情に乏しいけど綺麗だと、そう感じた。むう、  
これで生後一年と少しか。これからの成長が楽しみだ。どのような  
電脳シナプスを構築するか、とかも興味あるね。プライバシーの侵  
害になるから見ないけど。

まっ！ウチのCOS・MOSも負けてないけどね！あの子ったら  
可愛いんだ。プログラムをダウンロードすればいいのにーから料理  
の練習をするという健気なところもあるしさ。そんな可愛い彼女を  
あの倉持バカは本当に…。

……あつ。

こうしてる場合じゃない！急がないと！でも護衛達メイドさんは気にしてい  
ない。だけど、これは俺が危険なところへ行かないことにホツとし  
ているだけだ。行くとなると途端に不満そうにするんだ…。

これで仕上げだ。がんばろつと…。

Side out 葵



第七十二話「忠告?と警告?と癒し?と」(後書き)

次回で麻帆良戦争を終わらせられたらいいな…。

ええ、例によって予定は未定です。

最大で二、三話くらい?続くかもですね。

後日談で二話くらいとして五、六話で葵を宇宙へ打ち上げたいですね。

ではでは!

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

あ、誤字報告なども歓迎。

第七十三話「逆転?と勝利と敗北と」(前書き)

戦いも終盤です。無駄に長かったー…。

そして戦いの終わりは割りとアツケナイものですよね。  
では続き!

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。  
誤字報告も歓迎。

## 第七十三話「逆転?と勝利と敗北と」

機動戦艦アングレカム…。

Side アイリ

空間に展開されたメインモニターには地上で戦闘を続けている機  
械人形部隊が壊滅状態に陥っている現状が映し出されていた。

学園所属の有象無象の魔法使いなどは容易く屠れるだけの戦力は  
用意した。そのはずだがスペックデータ、戦力データを超えて彼ら  
は抗ってくる。特に学園長の側近的位置に居る者達の活躍は凄まじ  
い。

……やはり、人間という種は侮れないものがある。

万が一にも自分達が負けることなどありはしないが条件次第では  
苦しい戦況になったかもしれない。例えば今の彼らと同数の機械人  
形では善戦はしても勝てるとは断言できないほどの数値を彼らは叩  
き出している。

……ふふふ。これだから人間は面白い。

個人個人でどのような思想を持っているかは別とするが強い想  
いはより良い結果を引き寄せる。そのように努力し足掻く姿はとても  
泥臭く無様。だが元悪魔の自分にはその姿がとても愛おしくも思え  
る。

ただし、それも精魔奇兵へと転換、昇華した今では自分が敬愛してやまない閣下に害をなさんとする者以外という条件がある。誰だって好きな人に嫌がらせされたらイヤだろう？これも全ては閣下のためだ。それに…。

……閣下に刃を向ける？ふんっ、死ねばいいのに…。寧ろ私がころ。

む！しまった。思考が逸れてしまった。いけないいけない。これも閣下への愛ゴホンッゴホンッ。……しかし今後は気をつけなとな、うん。こほんっ、…あー、予定よりも大分早いがここが潮時か。

「…各員は状況報告！」

「学園都市の包囲部隊から報告。都市外縁部に一般人が迷い込むことが十一件。警察機構の問い合わせが二件。犬や猫などの小動物の保護が二十七件。幸いにも結界内に侵入者はなし。その他にも問題が八十七件ありましたが全て解決済みです」

むむむ。警察だと？学園都市内の通信網は全てアンの監視下に置かれていたはず、それなのに警察？まさか都市外から察知された？いや結界は認識障害で察知は困難だ。ならば他の要因か…。

先天的に感覚の鋭い人間でも居たのか？閣下が言っていたあの長谷川・千雨のように意識誘導系の術が効き難いような人間が他にも居る？…バカな。そんな天文学的数字以下の可能性は論外だ。寧ろこちらのミスで怪しまれたというほうが事実だろう。

どちらにしても後日調査を……いや、数日中には宇宙へ旅立つのだからそんな時間はない。閣下のご希望では木星へ行ってみたいという話だから是非とも行こう。閣下の願いは全てにおいて優先されるのだから。

……ああ、うむ、すまない。報告の続きを。

「アイマム。地上拠点クレイドルと地下防衛の二班から報告。侵入されど拠点地下三階に設置されている転移門ゲートの秘匿、防衛に成功。任務は依然として継続中」

「続いて世界樹地下防衛ですが現任務の変更を葵様より指示がありました。任務の変更内容は“魔力蒐集装置の撤去、回収。回収後は隠蔽工作のあとに撤収”するようにとのことです」

「そうか、閣下が……」

転移門の隠蔽などはいいが世界樹地下に設置してある装置を今回収める？それも閣下が直接ご指示なされて？なぜ今と疑問はあるが閣下のお望みは叶えなくてはならない。まあ人手は足りているようだから大丈夫だろう。

「????…追加報告です。地下防衛に同行していたシルビア様は部隊の撤収を見届けてから葵様と合流することです。合流理由は……えーと……その…退屈、とのことですよ」

「……………こほんっ、シルビア様は好きにさせてくれ。では続きを」

仮に自分達がダメと言っても止められるものか。押して通られる

のが目に浮かぶ…。閣下の御名をお出しすればお止まり頂けるだろうが。…安易に閣下の御名を出すのは不敬に過ぎるといふものだろう。

「あ…うん。学園都市上空を警戒、支配している私から報告するね。現在の学園都市上空は無機動兵器が常時500機展開することで制空権を確保中。これは今後も続けているから敵の頭を押さえた状況だね」

アン…。少しカブトムシが多く出撃しているように感じたのは気のせいではなかったのだね。今回の戦闘は極力地上戦の各種データを収集するのが目的の一つではなかったのか。空は制空権の確保だけだったろう。

なに？私も活躍しなかった？…アンよ。作戦は作戦ではないか。使用する戦力配分のこともあるだろ。なに？生産した、だと…？お前はまた勝手な…。閣下に注意してもらおうにもアンには甘いからな。どうしたものか…。

…???どうした、COS MOS？ああ、すまない。では報告を。

「…了解。機械人形部隊マキナ・マータの状況を報告。当初の予定通りに敵の誘導に成功。上策、下策、愚策、あらゆる戦況データの収集に成功。しかし、その結果として部隊損害率は87%に到達。これは事実上の全滅と判断します」

用いられる策が常に良策とは限らないからな。下策も愚策なども貴重なデータになる。多少こちらの被害が大きいのは予想を超えていたが我が軍の総戦力から考えてみれば蚊の刺しのようなもの。

気にするまでもない。

「優先報告。機影の接近を確認。…確認が取れました。目標を確保した友軍です。現在は確保した目標を小型揚陸艇ミツバチ三機にて分散拘束しこちらへ護送中。予想到着時間は今より十五分後です」

「そうか。担当チームにはよくやったと言ってやれ。それで閣下の現在位置はどこか？ともに帰還されているのか？」

「ハツ、葵様は現在…ええ、真に不本意ながら、あのエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルとご歓談中のご様子です。追加報告ですがハ才様、ユエ様は別行動にて超・鈴音と接触中」

「なん、だと…？」

あの女狐か…！なぜ、葵くんはあのような子と…。アレかな？可愛いからか？葵くん可愛いものが好きですものね。でも、それでも私達だけでは足りない？いえ葵くんに限ってそういうのはないわね…。そうなる何か弱みでも…。

「????…司令代理。どうかなさいましたか？」

「はっ！？…んんっ。………あー、もう一つの目標はどこか？」

思わず取り乱してしまった。自分のバカ者が。あの閣下が弱みなど握られるわけがないだろうが。そもそも問題があれば自分達が真っ先に“処理”しているのだからな。

「????ハツ…現在はリビエラ様が十六、いえ今、十七人目を確保

したところですよ。残り一人の所在は……今でました。現在地は十七人目が確保されたエリアから然程離れていないので時間の問題でしょう」

「よし、そちらも順調か。こんなものは閣下の目にも耳にも入れる価値はない。我々だけで身柄を確保、然るべき手順のあとに抹消するでしょう。情報部へ引き渡す時はくれぐれもよろしくと言いかめておけよ」

「アイマム。ふふ、“丁重に”扱うように徹底させます」

よしよし、これなら早々に壊すようなことにはならないだろう。簡単に死なれては我々の気が治まらないからな。ただでは殺さんよ。フフ、フフフ……！組織の者に手を出した。相応の償いはさせる。我々の流儀で、だ。

情報部の取調べがどのようなものかは知らない……わけではない。これでも自分は精魔奇兵の全権を閣下より任されている身だ。必要な情報は親衛隊へ無条件で流れてくる。ヤツらは生きていても“ダルマ”になっている可能性が一番高そうだな。

……拷問？いや、これは尋問ゲフンゲフン取調べだ。だから……フフ、大丈夫だ。

まあ情報部がヤツらから搾り出しても碌な情報は出てこないだろう。所詮は下っ端、切り捨てられるだけだ。そもそもが個人的な暴走だと事前調査からハッキリしている。裏などありはしないだろうさ。

……ええ、ただの八つ当たりですがナニか？フフ、フフフ……。

「そうだ、アン。閣下に作戦が最終段階に入ったことをご連絡差し上げる。夜明けは近いと、な」

「はーいつ！私におつまかせだよ 【…あー、あー！お父さん、お父さん！アンだよっ！そろそろ作戦がね ……】」

むう… 作戦任務中なのだからもう少し言葉使いに気をつけてもらいたいものだ。それでは組織の気が緩みかねない。……いやアンはこの船のマスコットでもあるから士気は上がる……のか？

まあアンもその辺りは使い分けるだろう。次に指示することは… 地上戦力か。

「ふむ…。COS MOS、現時刻を以って実験は終了だ。残存部隊をまとめ、ルートD2にて撤退せよ」

「…了解。実験を終了。ルートD2にて撤退行動を開始します」

今は各種デバイスとコードに接続されたCOS MOSの姿。打てば響くように応えているが今回は彼女にばかり貧乏クジを引かせてしまっている。

すまないとは思うが出撃と撤退は迅速に行なうが肝要だ。それに鈍重に過ぎるならば即座に切り捨てる……のだが、閣下はお優しいのでそのようなことはしない。他人から見ればこれは甘さだろう。しかしそこは自分達が手助けすれば問題ない。

そもそも我々の存在意義とは精魔奇兵になる前それこそ契約を交わした時より、ただ只管に閣下の御為に尽くすことこそが至高であ

り幸福だ。閣下に尽くすことが自分達の悦びなのだから。

……あ。

「ああ、それと回収班も残骸の回収も忘れるな。保険はかけてあるが万が一の場合もあるからな」

「アイمام。ですが既に大半を回収済みです。回収不可能のものは所定通りに自壊システムの作動を確認しています」

そんなことはわかっている。しかし総指揮官代行として確認の意味は必要だ。ここに居る者は皆承知しているので何も言わない。どちらかというとな戦後のことでガールズトークがあちらこちらで花咲いていることが自分としては気になる。

ここに居る親衛隊は最古参のみで経験豊富な優秀な者だけだから色々と余裕がある。その癖、モニターからの情報から目を離さない。油断しない。会話する声と雰囲気だけが緩い。なんだろうか、これは…。

まあそれはともかく舞台は整った。実験データは十分に取れた。作戦目標たる倉持一派とその関係者と思われる者達もほぼ確保した。そろそろ閉幕としよう。

「全部隊に通達！“撃鉄を起こせ！”遠慮はいらない！今こそが総仕上げだ！我らが閣下の名の下、卑劣なる敵を一気に駆逐する！！」

「アイアイمام！！」「」「」

閣下、今参ります！それとエヴァンジェリンのことはあとで詳し

く…ええ、詳しく聞かせていただきます。自分とファレノ、そしてリチラで。場所は…：寝室？いや、それはマズイ。某姉妹にナニをされるか…（ガクブルガクブル）。

ああそれよりも閣下に同行させた者達から“有効”と連絡が密かにあつた。やはり閣下はメイドさんがお好きなのだ。いやメイド服がお好きなのだろうか？

ともかくアンには感謝だ。まさか隠しフォルダを探し出し閣下の電子プロテクトを突破するとは驚きだ。本来ならば彼女を咎めるべきなのだろうか…：…閣下の性癖を知ることができたのでよしとしよう。

…：…お許し下さい、閣下。これも溢れる愛情と絶対の忠誠心ゆえなのです。

いや薄々察してはいたのだ。閣下はお淑やかな和服美人がお好きのようだがそれと同等にメイドさん、それも正統派メイド服だ。この二通りがお好きであることを長年のリサーチから皆で割り出していた。

喫茶店をお手伝いする時にはミリエール様達もそれぞれがメイド服をイメージした衣装を身に纏っておられるし。ここは試しに我々親衛隊だけで実行してみるか。閣下もお喜びになられるかもしれない。

無論、作戦が終了したあとに、だ。そこまで自分達はオチャラケてはいない。ハッチャけるのはこの祭りが終わってからだ。

Side out アイリ



その不明勢力の正体はわからないが確実に言えることは学園の敵であるということだ。なぜなら学園側に被害が集中しており、逆に葵ファミリー側には被害どころか協調していることが明らかだからだ。

その黒の勢力は葵ファミリー側の撤退を援護するだけではなく学園都市内に存在する麻帆良勢力を包囲した。そして包囲網は徐々に狭まり黒の勢力は学園側勢力を見つけ次第、瞬時に各個撃破していた。

数百人居た学園所属の魔法使いも壊滅状態だ。機械人形との戦いで消耗していたのもあるが黒の勢力はそれ以上の損耗率を学園に与えていた。

「踏み潰せッ！蹴散らせッ！！蹂躪せよッ！！！」

「…………ガンホーツ！ガンホーツ！！ガンホーツ！！！！」

「…………ぎゃあああああああッ！！！！！！！！」

そして現在、学園勢力は壊滅状態にある。いつそ流血沙汰よりも無残に思えるほどに……。この光景を葵が見ていれば「なにこれ？バサラ？若しくは三国的な何か？」と呆れた目とタメ息を漏らしたとだろう。

…………。

…………。

「最早ここまでとはのう…。タカミチ君との連絡は？」

長い眉や髭、刻まれた皺でわかり辛い学園長の表情はとても厳しい。指揮所にあるモニターに表示される映像や情報にはそれだけのものが映し出されている。

勝利を確信した途端にこちらの敗北が濃厚になった。なんの冗談だと言いたい気持ち学園側の誰もが思わずにいられない事態だ。

「はい…。妨害により依然、通信不能のままです。同行していたガンドルフィーニ先生の班も同様に連絡不能となっています。彼らのことですから心配はないと思いますが…」

「そうじゃな…。信じて待つほかないのう」

連絡が取れないのはタカミチ達だけではない。ある時を境にその他、全ての連絡手段が遮断されたのだ。これを九重・葵がしたのは間違いない。情報網の妨害と分断。手間が掛かるが有効な手段だ。

今は有線による連絡網の構築や連絡員を走らせることで辛うじて情報を収集している状況だ。使えれば古臭いアナログなモールス信号さえも使いそうなほど切羽詰っている。

依然として明石教授を筆頭に夏目・萌などの情報、コンピュータ関係に強い者が総出でシステムの洗い出しと復旧に従事している。要するに余裕など欠片もないということだ。

そしてまたしても事態は動く。それも学園側に悪い方向へ。突如として非常ベルが鳴り響く。緊急事態を示す赤色灯が緊張を呼ぶ。

「学園長！学園の管理システムが攻撃を受けています！第一、第二、第三防壁を展開！…ああ！？侵入を止められません！」

「なんじゃと!?!」

明石教授達が侵入者の撃退とシステムの復旧に全力を注ぐが通信システムを司る人工電子精霊を始め、ほぼ全ての人工電子精霊を乗っ取られていく。彼らはものの数十秒で学園の管理システムの制御権を奪われたのだ。

「あ、ああ…。全てのコントロールが奪われました…。奪還を試みています。コンソールが反応しません…」

「うむうう、これも葵君の仕業か…！」

直後に今まで通信不能になっていたはずの通信機器からノイズ以外の反応があった。通信に割り込みが入る。スピーカーからブツツという音がした。

『… 学園長殿、否、近衛・近右衛門。見ているな？聞こえているな？投降しろ。元からお前らに勝機などありはしないのだから…』

「む…！くうう…！」

音声のみだが誰もが予想したとおり通信相手は九重・葵だった。学園長は唸る。そして考える。事態は最早決定的であり、これが最期であると。

Side out ????

世界樹前広場…。

S i d e 葵

時刻は午前四時を過ぎた頃だ。時期が時期だからまだ辺りは暗い。それに寒いです。気温的にね。一応、服には寒暖調整できる機能があるからそれほどでもないのよ。

それでまあ最初に対峙した場所へ戻って来ましたよつと。ここは天幕や機材を運び込んで簡易拠点化している。上空ではアンブレカムが低空にて滞空しているのが見えますねー…。

エヴァちゃんと別れたあと直ぐにシルビアが合流した。どこからともなく、ね…。どうやら地下施設の撤収を見届けてから応援に来てくれたらしい。お掃除ご苦労様です。

俺は労う意味を込めて彼女の小さな身体を抱き締めて撫でて愛でながら飛んでここまで来た。気分的に肌寒いのと癒しが欲しいからやってしまったけど小柄な彼女は体温も高めだからポカポカだった。うん、どこかホツとした。

……そして今は膝枕しています。俺がシルビアに……。とってもポカポカだあ

いやー、オリビエ達には情報部のお掃除を手伝うようお願いします。たのに実際にお片づけしたのはシルビアだけとは。今考えるとオリ

ビエはなぜにあそこに居たのかな？それにリビエラはどこに？情報部本部か？

むむむ！こうして考えると身内のことなのに行動を把握してないよ、俺。どうしたものかね。こんなでは一家の大黒柱と言えるのかな。いや二万近い家族の動向を常に把握するとかどこのバカだとは思っけどぞ。

えーと…ミリー達はいつも通り俺に憑いていつひゃあ！？くすぐったいよウーリ！どこ触っているのさ！マリーにミリーも微笑ましそつに見てないで止めようよ！ちよつと気持ち良かゴホンゴホン…なんでもないです！！

「…んん…ん？お兄ちゃん…？」

「あはははっ、なんでもないぞー。うん、ほおら、よしよし」

「……っ　んー…」

んんっ！あー、陽月姉妹はシルビアに少し遅れて途中で合流した。彼女達が超と何を話したかは知らない。今は背後にて静かに控えてくれている。

ウーリの悪戯に多少のプレッシャーが洩れたけど身内のすることだから直ぐに収まった。止まっでないけどね…。今はシルビアを撫でて癒しを補給中なのに姉妹から更なるプレッシャーを感じている。なぜに？

アイリと親衛隊の大半がここに居て、ファレノとリチラ、あと数名の親衛隊は喫茶店地下のゲート守護だったか。ファレノはリチラをキチンと抑えることができただろうか。一部区域が氷河期とか…ないだろうか？

ああ、それとアン、そして今回の立役者であるCOS MOSは  
アングレカムでお留守番です…。いや彼女は対外的に一応重  
症という扱いになっているからね。この場には呼べなかったのよ。  
アンは付き添いかね。

「閣下、間もなく鎮圧いたします。そしてこれを以って作戦内容の  
九割以上を消化したことになります」

「そっか。終わったら皆にお礼言わないと。仕事が早くて助かる、  
ってね」

「そのお気持ちだけで皆も報われます。そしてより一層、閣下へ親  
愛と忠義を捧げましょう」

「……………そっか」

えー…ものすごく大げさに捉えられた気がする。けどここは言  
わぬが花というもの…あれ？微妙に使い方間違えているような…  
まあいいか。どちらにしてもこのまま終われば文句はないしね。

「アン。近衛・近右衛門へ降服勧告を出すから学園システムを掌握  
して中継してくれる？」

『うん、いいよ。ちょーっと待ってね。ここをこーうして…もう一声  
…！はいつと！いつでもいいよ』

「ありがとう、アン。それじゃ、」ほんっ

あ、少しだけ悪戯心が発生した（ニヤリ）。今後の参考までに少

し露悪的というか悪者チックにしてみようか。悪者…悪者か…。まずは高圧的な感じで、声を低い感じで、えーと…あとは何？

……わからん。ここは出たところ勝負で行こう。

「学園長殿、否、近衛・近右衛門。見ているな？聞こえているな？投降しろ。元からお前らに勝機などありはしないのだから…」

どうよどうよ皆？俺的には上手く出来たと思うんだよ。今できる精一杯の威圧感（笑）を出してみたんだ。悪役っぽくない？

え？まだ優しさが見える？甘い？…なん、だと？おかしいな…。え？アイリどうしたの？…いやいや、あまりキチャナイ言葉は使いたくないと言うか…あ、ほらシルビアやウーリ、その他小さな子の教育的に悪いしさ。

「むうう…！」

「は？どうしたの？二人とも…」

あつ！？イタイイタイっ！ウーリ、シルビア！痛いって！え？ちち違うよっ？決して子供扱いしたわけじゃ…。というかなんでお二人は怒られておられるのでしょうか？

「……………」

……えっ？ちょ！待っ！！アーーーーーッ！！！！

このあと麻帆良学園の使者が訪れ全面降服することが伝えられた。誰だか知らないけど相手はものスゴク不本意そうだった。

まあ最後の最後で多大な犠牲（俺の貞操的な何か：勿論、守ったよ？）を払うことになったが結果には満足している。いや本当に……。今後二度と家族の誰かを子供扱いはしないと心の中で固く誓ったほどだ。

S i d e o u t 葵

第七十三話「逆転?と勝利と敗北と」(後書き)

あれ?一番割を食っているのがCOS MOSのはずなのに最後の最後で葵が…。

なんというか、その…:…食われた?いや食われかけた?

ウーリとシルビア、幼女体系の二人に家族の前で襲われたぜい。

最近、彼の貞操が非常に危機に晒されている気がする…。

まあ健全板では何もしないけどね!

それにそっちの板は作者にはハードルが高くて…ム・リ!

ちよつとした一言…。

夏です。もう夏です。ええ、夏バテです。

ではでは!

## 第七十四話「事後処理と癒しとご飯と」(前書き)

最近暑いですね…。風が吹く日はいいのですが通常の昼間は最悪ですorz

今年は飲み物・団扇・ハンカチが手放せませんね。

皆さんも熱中症や脱水症状には気をつけましょう。

では続き！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

誤字報告も歓迎。

## 第七十四話「事後処理と癒しとご飯と」

学園長室…。

S i d e 葵

戦いから明けて翌日の午後。俺達は占拠した学園の学園長室に居る。事実上ここが戦後処理の暫定指揮所になっているのよ。室内には幾つもの事務机が運び込まれ、山のような必要書類を処理していた。俺が…。

……また書類か！またなのか！？滅ぼすぞ！？麻帆良を！？！？

失礼。望まない現実を前にして取り乱してしまった…。あの戦いから明けて今日は日曜日だから学校そのものは休みだ。それでも冬期休暇中も部活があるところは普通に活動している。

一般人への配慮としてこちらの手引きで関係者以外は魔法的に眠らせたから何も知らない。あ、長谷川・千雨の例もあるから念のために睡眠ガスも使った。だから本当に何が起きたのか誰も知らないはず。

それにラミエルさんの次元結界を解けば建物などの破損はなかったことになるからね。翌日には何事もなかったかのように日常が始まる。彼女の結界のお陰で建物への配慮をする必要がなくなったから今後も重宝するかもしれない。

こんなに便利ならばもっと早くに次元結界の術式を作ればよかつ

た。今度、正式配備されているガンブレードに標準装備させよう。  
というかアームドデバイス化しよう。うん、これは決定事項だ。

それにしてもあのジジイめなかなかいい椅子を使っているじゃないか。…多少加齢臭が気になったけど！そこは俺謹製“クンクン消臭くん”が解決済みさ！例によってネーミングセンスについては気にするな！そういうものなんだよ、これは…。

それで、だ。学園長室に居るのは陽月姉妹を始め精霊三人娘、悪魔三人娘、親衛隊三人娘（なぜにメイドさん！？）と親衛隊員が数名（こちららもメイドさんだ！？）だ。もう制服はメイドさんでいいと思う。俺まだ指示してないのに…。

……俺の性癖がダダ洩れの件については誰も何も言わないしね！？

あ、いや、ゴメン。追求されても困るのは俺自身だから何も言わないでください…。でもだからと言って「に、似合いますか？」って照れながら聞かないで。俺の理性がマッハで天元突破しそうになったからさ。

……あ、おっほんっ！ごほごほっ！あー…。

ラミエルさんはいつも通り俺の胸元に鎮座している。今回はC O S M O S が重症という設定なので彼女はアングレカム艦内で収集したデータを分析整理してもらっている。アンも同様にデータ解析と今後の予定のために月と通信して予定を調整中だ。

……旅立って宇宙へ！目指すは木星！だね！！大きな船を造らないと…。

でも、大きな船を造るぞ！と俺が言った時の皆のニコニコした顔が気になった。なんかこう……微笑ましそうにというか俺だけが何も知らないと言っても言うような。まあ悪い気配は感じなかったから気にしなくともいいのかな。

あー、それにしても昨夜、学園が全面降伏してからが大変だった。バカ騒ぎしたら当然のように勝者は戦後処理というものがあるのよ。

敵味方分け隔てなく負傷者の治療とかね……。こちらは俺達が非殺傷兵器ばかり使用していたから予定通り学園側に死者は出していないのが助かった。書類的面倒がないという意味で。

は？味方の被害？殆どなかった、かな。あつても擦り傷や打ち身、重くても打撲くらいのものだ。ただの魔法使いや剣士に殺られるほど柔な鍛え方もしてなければ一種族としても弱くもない。勿論それなりに装備もあるしね。

……なんにしても人的被害もないし書類も減って嬉しいことには変わらない！

こほんっ。本来なら戦闘で破壊された建築物や道路などの復旧作業などもあるんだけど今回はラミエルさんのお陰で復興作業がない書類が予定より少ない（それでも多い）ほうだ。本当に手間が省けて万々歳だ。

そして一番面倒、だけど重要なのが学園の所有している重要情報や書類の把握と統括整理だ。こればかりは敗者側の人員を使うわけにはいかない。変な処理をされたら困るしな。こちらは情報部が出る限りの人員で当たってくれた。

一応言っておくけどここまでのこと俺も徹夜だったからね。戦闘開始から今まで寝てないんだよ。フッフ…。勝っても負けても書類仕事がある。フザケルナ、と言いたい。まったく、だから戦争は苦手なんだ。嫌いじゃないけどさ。

事後処理から連鎖的に生産された書類も今は僅かなのが救いだ。本当に、アンやアイリ達が居なかったら今も書類に埋もれていた自信があるね。もうなんで書類が電子化してないんだよ。紙媒体が多過ぎるっての。

あ、夕方には学園長、それとついでにタカミチも出頭してもらわないと。今後の展開について通達しないとならないし。

……………。

……………。

そんなこんなで気が付いたら夕方だった…。フッフ…書類はもう当分見たくない！いつか腱鞘炎にならないかが激しく不安だ。

「…よく来てくれた。近衛翁、タカミチ。……………なぜにエヴァちゃんも居るのかね？」

俺が呼び出したのは学園長とタカミチだけのはず…。なんでここにエヴァちゃんが来ているのかね？いやエヴァちゃんのように可愛い子ならいつでも歓迎だけどさ。

あ、茶々丸ちゃんいらつしやい。まだ若い（一歳未満）のエヴァちゃんに子供のお世話ご苦労様です。え？当然のこと？できた子だ…。

「フオフオフオ。呼ばれたからの」

「……………葵さん……………」

「フフフ（ニヤニヤ）」

「失礼いたします、葵様。お忙しい中マスターがご迷惑をお掛けします」

いえいえ。ただ疑問に思ったただだから気にしなくてもいいよ。

エヴァちゃんも茶々丸ちゃんもいつでも歓迎するからさ。

……………なぜかアイリを筆頭に彼女達から若干のプレッシャー、がっ！？

ち、ちち違うんだよ！？別に何も…！あれ！？なんで俺は浮気が見つかつた夫のような状況になつていいのかな！？俺責められるよ  
うなことなくないか？！てか、ないよね！？

「茶々丸うう！？お前っ！それでは私が我俣な幼子のようではないか！！」

「……………え？」茶々丸。

「……………（ジイイイイ）……………俺、ジジイ、タカミチ。」

「なんだ！その目は？！え？コイツ気付いてなかったの？みたいな目は！？」

「……………え？」茶々丸。

「……………（ニヤニヤ）……………俺、学園長、タカミチ。」

「貴様ら……………ニヤニヤしながらサムズアップするんじゃない！！」

え？なにこの子？すっごい騒がしいんですけど……………。いやまあ俺も少し悪ふざけが過ぎたかもしれないけどさ。でもこれは仕方ないことだと思つんだ。エヴァちゃんつてからかつと反応が素直だから可愛くてさー

おう……。オーケー、わかった。おふざけが過ぎた。悪かった。落ち着こう皆。だからその手に込めた魔力を解除しようじゃないか。そのままでは部屋が吹き飛ぶよ……。え？添い寝するの？……はい？それで許すって？

もう可愛いなあ。いいよいいよ。何か怖いことでもあったんだね。添い寝くらいお安い御用だ。何を許すのかはわからないけど俺達は家族だから遠慮はいらないさ。あはははっ。

……なんで皆に呆れた目で俺は見られているのでしょうか？

……？？？どうしたの、ユエ？あー、そうだね。学園の引継ぎの話しがしたいから近衛翁とタカミチを呼んだんだった。それは間違いない。だけどエヴァちゃんを呼んだ覚えが俺にはトンとないのだが……。

「なんだ？私がここへ来てはイケナイ理由でもあるのか？」

あれ！？何事もなかったかのように！？今までのことはなかったことにするんですね！！

図太い神経してんなあ……。流石は六百年を生きた真祖の吸血鬼と言ったところか。いやいや、でもここでは触れないであげるのが優しき、なのかな？なによりも彼女の背後で茶々丸ちゃんが見た目必死に頭を下げているのが涙を誘うのよ……！

「……いや、そういうのはないけど。ただ、なんでかなって思ってた」

「なに、ただの暇潰しだ」

暇潰し、ねえ。まあこれは本当だろうな。でもエヴァちゃんって寒いのも暑いのもダメだったと記憶してたんだけどな。今の冬の寒い中わざわざ来るなんて物好きな子だな。家でゲームでもすればいいのに…。

「……………」

「ハオ、ユエ。そう睨まないの。もう終わったんだから」

「はっ……………」

二人とも、エヴァちゃんに向ける視線に棘がないか？俺が氷付けにされた一件が相当に気に入らないようだったけどもう終わったことじゃない。気にすることないよ。俺は気にしない。

「…さて、今日二人を呼んだ用件だが……………引継ぎについてだ」

「フオフオ。なるほどのう。…して、どのようにかの？」

この狸ジジイ…。本題に入った途端にさっきまでの好々爺然としていた雰囲気からガラリと変わりやがった…。

一応自分達が敗者だという認識はあるようだけどタダでは従わないという意志を態度で示してきやがった。しかもそれはタカミチもだ。いざとなれば玉碎覚悟で俺の首を取りに来そうな雰囲気も放っている。

……………どちらにしてもコイツらの覚悟は無駄だけどね！！

「…いや、特に変更はない。今まで通り学園を経営してくれてかまわない」

「むうう……………。こちらは喜ばしいが……………葵君はそれでいいのの？」

「良いも悪いもこちらにこれ以上のメリットがない。俺は麻帆良な

どいらんよ」

「「……………は？」」

おいおい。二人してマヌケな顔をしているんじゃないよ。当然だろうが。だいたい、俺達の最大の目的は達した。それ以上のものを求めようとは思わない。何よりもそんなもの俺達には無駄で無用なものだ。

…ほら、見てみるよ。エヴァちゃんなんかすごい悪い顔して笑ってるよ。よっぽどキョトンとした二人の姿がマヌケに思えて愉快だったんだろっね。

はあ、こんな面倒そうな土地、俺はいらないよ。地下には破棄されたゲートがあるとか。しかも繋がっている先が旧オステイア？正確な位置は覚えてないけど記録を探せばわかるだろ。探さないけどね！面倒事の匂いしかないし！

……………他にもゴロゴロあるけどそこは省く。面倒なことは無視だ、無視。

馬鹿を排したお陰で麻帆良も組織として風通りが良くなった。人材不足は相変わらずだが馬鹿な思想を持つ者はもういない。今までよりも健全な組織運営ができることだろうよ。

「ふむ…、よからう。ワシとしても不満はない。それで倉持君らのことじゃが…」

「それ以上言うな。その件については一切妥協する気はない」

「さようか…。しかしのう、本国が黙っていないと思うのじゃが？」

「くくくっ、いらぬ心配だ。“存在しない者”のためにどうして動くことができる？」

既に今回捕らえた倉持を始めとした十四人の存在は紙媒体、電子情報、個人の記憶などあらゆる記録記憶は消去した……とダチュラに聞いている。押さえた身柄も今は情報部本部に幽閉中だ。何をしているかは教えてもらえなかった…。

でもまあ、これで倉持<sup>アレ</sup>らは記録上では存在しない者となった。アレらに帰る場所も帰りを待っている者も存在しない。

現代社会で戸籍がないのは実はとても痛いんだよ。法治国家と呼ばれるこの日本では特にね。それがないと住む場所も仕事も真つ当なものは得られないのだから。戸籍を偽造するか裏の仕事ならできるかもしれないけど。

まっ！アレらが表の世界に出ることは二度とないだろう。情報部に引き渡した時点でアレらがマトモな精神を保てるはずもないし。生きていたらラッキーと言えるくらいじゃないかな。くくくっ！…あれ？逆、なのか？

「存在、しない？葵さん、それはどういう意味…まさかっ！？」

「タカミチ、それ以上は考えるな。それがお前のためだ」

「しかしっ…！！」

「タカミチ。最早状況は覆らない。俺の名に誓い、これは“絶対”だ」

「ッ…！！」

こんなことくらいで取り乱すなよ。ジジイを見なさい。落ち着いているだろう。状況が覆らないとわかった途端にジジイの頭の中じやもつ次の最も利益になることを考えているじゃないか。

まあ法律とか秩序関連から考えれば俺達の行なったことは復讐という名を借りた人攫いだからな。世間的常識的に考えれば俺達は間違いなく“悪”なのだろうよ。

だがな？タカミチよ。俺は正義だの悪だのに興味はない。欠片もない。塵ほどにもない。俺が興味あるのは大切な家族のみだ。俺は臆病だからさ、家族に迫る脅威は排除するし動かぬ障害があれば踏み潰すのみなんだよ。

「しかし、葵君。例えそうだとしても君が麻帆良を襲撃したことは直ぐに知れるぞい。そのことはどうするのじゃ？」

うむ。やはり伊達に学園長などと呼ばれてはいないな。こういうことは年の功が物を言うようだ。事実を事実として受け入れてからその先の利益を最大限得ようとするそのスタンスを俺は評価するよ。

「それについても問題はない。アイリ」

「ハッ。前提として我々は“麻帆良を襲撃していません”。そのような事実は存在しません」

「「っ！！？？」」

「ほう…？」

学園長とタカミチは驚いてくれているようだ。エヴァちゃんは面白そうだとも言いそうなほど悪い笑い方をしている。もう、そんな笑い方していたら可愛い顔が台無しじゃないか。どうせ笑うなら思いっきり笑おうよ。

「続けます。先頃の戦闘は“麻帆良の防衛評価演習”としてMM本国、ヘラス帝国、アリアドネーの三国・都市によって決議され承認されたものとして処理いたしました」

ふふんっ これくらい用意しておかないとね。まあこれを事前に用意してくれたのは例によってアイリ達なんだけどね。お陰で結果的に面倒な書類手続きが一気に減った。

……俺の最大の敵は紙束（書類）なのかもしれないな…。

「この短期間で…！そんな時間はなかったはずじゃが？」

「こちらにコピーですが正式な書類一式もございます。…ご確認なさいますか？」

「いや、結構じゃ。君達のことじゃから“方法はともかく”として本物じゃろっ」

「ふふふ、ご理解が早くて助かります」

「フオフオフオ。それくらいは、の」

入手した方法？そんなものはどうとでもなるさ。あ、MMだけは洗脳したらしいけど…。

帝国のように誇り高く、アリアドネーのように探究心を忘れない。それらの思想や姿勢は評価されて然るべきものだ。まあハッキリ言ってしまうえばコネだし。古い知人友人が多いと何かと便利なのよ。借りもあるしさ。

逆にMM本国はダメだ。国家連合と言えは聞こえはいいが用は大様々な国の集まり。そこに意思の統一など迅速にできるはずもない。一長一短があるとは思いますが身内で足の引っ張り合いをしているのだから更に救いが無い。

「聞いての通り、今回のことは敵対した襲撃ではなく抜き打ちの防衛試験ということだ」

「フオフオフオ。相わかった。それでは今まで通りに、じゃな」  
「……………っ」

これなら問題あるまい、と二人に確認するとジジイいや学園長は利益を考えているためにある程度は汚濁を飲み込むことにした様子だ。組織の長とはどこもこういうものだ。清濁合わせて飲み込めないといつか破綻するのよ。

清濁併せ呑むか…。俺にはできそうにない。だからこそ俺は家族しか守れない。目の前の学園長のように時には冷徹に人員を切り捨てるのが難しい。

しかしタカミチはまだ不服そうな顔をしている。なまじ身近に“英雄”が居たからそういう理想は人一倍強いようだしね。それでもタカミチ本人も綺麗事だけで組織や世界が回らないことを知っているから文句も言い難いのだろう。

「用件は以上だ。二人とも帰っていい」

必要なことは伝えたから二人にはそのまま帰ってもらった。タカミチの中ではなにやら葛藤のようなものもあつたようだし今夜はゆっくり休んでもらいたいものだ。

まったくタカミチも気にしすぎなんだよ。無駄な犠牲は出してないじゃないか。己が正義を掲げるならば“悪・即・斬”は基本だろ。その正義から考えれば俺は間違いなく悪だと思いがね。十数人の存在が一夜にして消えたしさ。

その点、俺は簡単なものだ。俺の正義は家族を守ることだからね。それを守るためなら躊躇もない。…いやゴメン、色々配慮はする

かも。できるだけスプラッタは勘弁です。俺、臆病者なので。血生臭いのは苦手です。

「あ、エヴァちゃんゴメンね。途中からかまってあげられなくて」「ふんっ！そんなこと、って！おいコラっ！撫でるな！子供扱いるんじゃない！」

「くくくっ、俺から見ればエヴァちゃんも子供だよ。茶々丸ちゃんももう少し待っててね」

「はい、葵様。さ、マスター、あちらでお待ちしましょう」

「あ、おい！茶々丸！なんで私は手を引かれているのだ！？ええいっ！放さんか！」

彼女達を見ていて特に最近茶々丸ちゃんがエヴァちゃんの母親に見えて仕方ないのです…。どんなにいい目に見てもお姉ちゃん？まあエヴァちゃんも何だかんだと言いつつも茶々丸ちゃんのこと好きなようだけどね。

「相変わらずエヴァちゃんはからかい易いなあ。…ん？こほんっ！総員撤収準備！」

「既に完了しております、閣下」

「……仕事早いね、アイリ……」

「これくらいはメイドの嗜みでございます」

「えー……」

いつの間にかアイリ達メイド服組みはメイドの嗜みをマスターしていた！？それ着始めてから一日も経ってないはずなのに！？練習したの？俺の知らない間に練習したの！？どこまで完璧主義なんだろう、この子達は……。

「…それじゃ帰ろう。今日はもう疲れた」

「はい、閣下。あとのことは私共にお任せください」  
「うん、任せる」

ういうい。彼女達に任せておけば机とか必要な書類は司令部本部に一時的に運び込むとして、そこで他部署へ分別配送してくれる。細かに指示しなくてももしてくるって本当に助かる。

あ、ミリー達は皆と本部に戻って必要事項のまとめと今後の宇宙進出なんかの計画の草案を大雑把でいいからまとめおいてくれる？…うん、そう。ごめん、ありがとうね。え？情報部？今向こうはお客さんが居るからあとでいいよ。

それとオリビエ達は作戦部本部へ出向いて今回の被害報告と改善案や要望などの陳情書を回収または作成をお願い。…うん、長引きそうなら偽体使ってくれていいから。君達三柱の召喚コストって本当ならシャレにならないしね。

ハオとユエはいつも通り俺の側で護衛をよろしく。まだ今回のことを学園側に布告してないからトチ狂ったバカが居ないとも限らないからさ。…そうそう、ハオ達が居ると安心できるからね。

「…エヴァちゃん達帰るよー。晩御飯はウチで食べていくといいさ」  
「むっ、それは葵の手作りか？」  
「は？まあそれがいいなら作るけど…」

ええ、疲れてはいるけど作るのはかまわない。でも…お残しは許しまへんで。食材を無碍にしたら天誅…いや俺自ら人誅を下してやるから覚悟して食べなさいね。まだ滅ぼされたくないでしょ？ふふのふ…。

「　　ッッ！（?????なんだかイヤな寒気が：？）気のせい、か？」

学園長質からの帰り道でエヴァちゃんがビクツとしたと思ったらブルブル震えて何かを警戒した。でも何もないと力を抜いた時にポソツと何かを言ったようなんだけど何を察知したのかね。

「ん？エヴァちゃんキョロキョロしてどうかした？」

「む…いや、なんでもない。それよりも早く行くぞ！」

「はいよ。……くくくっ（そんなにお腹を空かせていたのか。腕を振るうとしますかね）」

……まあ皆で食べられるように大皿系を作るから大丈夫かな。

エヴァちゃんという舌の肥えた友人も来ることだし量だけではな  
く質も伴うように調理するのが料理人たる俺の腕の見せ所だ。

「お手伝いいたします、葵様」

茶々丸ちゃんは本当に気の回る子だ。この子ったらいつも率先して  
て手助けやお手伝いを申し出てくれるのよ。本当にできた人いやガ  
イノイドさんだね。

「そう？ありがとね茶々丸ちゃん。いやーこの子いい子だ。エヴァ  
ちゃん…」

「茶々丸はやらんっ！！絶対にやらんからなっ！！！」

「まだ言い切っていないのにそれは酷くない？娘に欲しいなと思った  
だけだっつて」

こんな心優しい娘なら世のお父さんは溺愛することは間違いない  
と思う。これは確信を以って言えることだ。寧ろ俺が娘に欲しい。

いやエヴァちゃんの家族を取るようなことは絶対にしないけどさ。

「なに？娘か…。それなら…いやいや待て待て…そうになると私よりも葵に近付くことにならんか？…娘と言うからには一つ屋根の下…これは…同棲！？イヤイヤ待て待て！娘と言っているのだからそれは家族という認識であって決して疚しいものはないという確かな事実を伴っているということ…なんだ安心…ん？そうになると私はどうなる？私だけノケ者か！？認めん！断じて認めんぞおお！！！」

「エヴァちゃん？おーい？…ダメだ。なぜか錯乱しているようだ」

なんだか知らんが突然エヴァちゃんがブツブツ言い出して終いは叫びだしたんですけど…。この子は本当に何をしたいのだろうか？大半の台詞は良く聞こえなかったし。しかし一体何を認めないのだろうか？

……んむ？茶々丸ちゃんは一体何をするつもりかね？

「…マスター……………っ」

「いたいっ！？ん？私は何を…んん？？？」

あー…壊れたテレビを直す秘儀“斜め四十五度で叩きましょう”ですな。まさか茶々丸ちゃんがあ秘奥義を会得していたとは思わなかった。だけどそれは人の、それもエヴァちゃんの頭を治す技ではないのですよ？

「エヴァちゃんほらうんうん唸ってないで行くよ。もう店はそこだからさ」

「おお？うむ、そうだったな。今晚は貴様の手料理だった。しかしなぜ頭が痛いのだ？」

「…マスター、急ぎませんと葵様が行ってしまわれます」

「む、それはいかん。おい！葵！待たないか！」

「……………（…クスクス）」

葵です。最近、茶々丸ちゃんがエヴァちゃんのあしらい方を覚え始めたように感じられるとです…。主従なのだから別におかしいことではないのですが先程の茶々丸ちゃんの雰囲気がとても黒かったとです…。葵です、葵です、葵です…。

…………… あつ、丁度いいから今の内に二人に言っておつかないと…。

「エヴァちゃん、茶々丸ちゃん。俺、一年くらい麻帆良を出るから」

「そうかそうか。旅先では生水に気をつけ…ッ！！なにっ！？どこへ行く気だ！？」

「どこって…………… ちょっと木星まで？家族皆で骨休めに」

「なんで疑問系なんだ！？それにもくせい？もくせいってあれか？惑星の木星か！？」

「うん、その木星だ。というかそれ以外に木星ってあるのか？」

いや探せば並行世界や次元世界にはあるかもしれないのか…。これはなかなか興味深い内容ではあるな。是非とも世界間移動論を木星までの航行中に改めて研究しよう。

他世界へ移動するための試作次元エンジンの設計はできているから向こうで完成させて実験もやればいいよな。下手に地上でやるよりも失敗した時の被害は少ないだろうしさ。

「因みに出発は一週間後を予定しているんだな、これが。あははははっ」

「あははははっ、ではない！おいっ！茶々丸からも何とか言っつてやれ

「！！」

「…お早いお帰りをお待ちしております。葵様…」

「そうじゃない！そうじゃないだろっ！茶々丸うう！！」

「茶々丸ちゃん…」

「葵、様…」

「だ・か・ら！私を無視するなど言っているだろっがっ！？」

やはりエヴァちゃんはからかい甲斐があると思うんだ。ピヨンピヨン跳ねたりしている姿やキャンキャン喚いている姿を見ていると必死に自分の存在を誇示してアピールしようとしているんだから。可愛いものだね。

…なんて思っていたら思わぬところもヤキモキさせたようだ…。

「「ごほんっごほんっ！！」」

「「ッ！！」」

「「……………」」

陽月姉妹の視線が心に痛いです。表情に大きな変化はないんだけどちょっと拗ねた感じの視線が特に俺ハートにクリティカルを与えてくるのよ。これが、また効くねえ…。何でかはわからないけど罪悪感がバリバリするよ。

「あ、あはは、二人ともごめんね。決して忘れていたわけじゃないんだよ」

「いえ、別に我が君が謝罪なさることはないのですが…」

「それよりも我が君と茶々丸の顔が近いといえますか…」

「おうふ…」

ちよっとエヴァちゃんをからかおうとおぶざけしただけのつもり

なのに矛先を間違えたぜい。ここで二人が反応してくれるとは思わなかった。確かに茶々丸ちゃんと顔を近づけはしたが…いつもの昼メロ的な冗談じゃないか。

……それに肝心のエヴァちゃんはどうと…。

「……………」

「えー…」

エヴァちゃんの冷たい眼差しが俺のガラスのハートを射抜いていた。いやマジで。咄嗟に氷と闇の女王という単語が頭の中で思い浮かんだほどだ。

気のせいだとはわかってはいるんだけど気分的には気温が下がったように感じた。真冬から極寒になった、と言えはわかるだろうか。心情的にはここは北極かと小一時間問い掛けたい。

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

ああ、苦し紛れに出た言葉はこんなものだったさ。でも仕方ないだろ？エヴァちゃんというお子様兵器が目の前でへそを曲げていたんだから。ここでご機嫌を取ろうとするのは間違いじゃないはずだ。

最近、この子に逆らえなくなっている気がするなあ。なんと言っか娘や孫の我侬を見ているおじいちゃん的な気分だ。

Side out 葵



第七十四話「事後処理と癒しとご飯と」(後書き)

はい！というわけでやっと葵君を宇宙へ打ち上げる準備ができてきました！

本編に入らずに何をしとるんだ！？という意見は見ない方向で(泣)これでも作者は一生懸命なのですよ…。

それにここまで引っ張ったのならもう少しくらい遠回りしてもいいかなあって(チラチラ)

すみません。調子乗りました…。今後もがんばるのでお許してください。

ではでは！

番外編「あかいとアカイと赤いと」(前書き)

色々と更新が遅れて申し訳ないです…。

今話はちよと練習の意味で書いてみました。

内容的にはちよとアレな感じになっている気がする。

因みにツンもなければデレもない。だって葵は出てこないから(キラッ)。

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

誤字報告も歓迎。

8 / 5 誤字修正

## 番外編「あかいとアカイと赤いと」

?????  
……。

Side ????

麻帆良の騒動から二日が経った。ここは葵謹製魔法球「工房」、その中にある建物の一つ。外観は特徴のない真っ白なビル。特徴と言える特徴を極力排したこの建物は入り口にも何も示されてはいないが一步中へ入ることができれば一変する。

その中は最先端の情報エリアであり収集された情報の集積場所。収集された情報の分析、そこから対応策の構築をもする部署だ。

事前に脅威の排除なども担当しているがそれは主に作戦部が担当している。ただし、作戦部などでは不可能な、具体的には表立つて行動を起こせない状況などでは情報部が秘密裏に対応、処理することで事態の解決を図ることがある。

その建物は建築時の書類上では地上三十階、地下十五階とある。

その建物はこう呼ばれていた。ファミリー組織所属情報部本部、と……。

……。

情報部にはその性質上、多くの諜報活動の他に扱う案件に暗い部分が少ないから存在する。それは拉致に誘拐、尋問や拷問、それに極秘裏の暗殺も仕事に含まれている。どれも滅多なことでは実行さ

れないが…。

それでも必要とあれば実行できるように幾つもの作戦計画と事前準備はされている。そしてそれら全ては彼女達の至上存在と言える葵に害なすモノに限り行なわれることだ。決して無差別ではない。必要ならやる、それだけだ。

これら裏の事情は一本気のある者や堅物には絶対に認められないかもしれない。だが、このような裏事情も行使するのが情報部の一側面でもある。

そもそも組織<sup>ファミリー</sup>所属の情報部は事前に脅威を察知したならばまずは独自に動き、敵の情報を収集し分析するなど全ての情報を整理して過程と結果を予測する。そこで初めて作戦内容が提示されるのだ。

情報部単独で事に対処できればそれでよし、不十分ならば作戦部や司令部へ支援を要請し共同作戦を布くこともある。そしてその逆も然り。場合によっては司令部や作戦部からも要請されることもある。

要は、だ。三部は強固な一つの意志の下でお互いに支え合っている、持ちつ持たれつの関係であるのは間違いない。

そして今の組織体制を一から作り上げた現親衛隊長アイリスは三部を創り上げた時に相互協力の最大理由を“葵を守る”という確固とした意志が存在している。これは肉体的精神的他にも様々な意味で守護するというものだ。

話しが脱線したので戻そう。

……。

そんな三部の一つであるここ情報部本部のエントランスホールを今、一人の少女が真っ直ぐに歩き抜けて行く。数台あるエレベーターの一つに乗り込むと階数ボタンの隣に目立たないようにあるパネルを秘密の手順で操作すると下降を始めた。

デジタル表示された数字は順調に下降していることを黒色の数字で示している。そして最下層である地下十五階を表示した。

「……………」

それなのにエレベーターは下降を続ける。中に居る少女は気にした風もなく“本当の最下層”に到着するのを静かに待っている。デジタル表示は特別エリアを示す赤色の数字で十七、十八とエレベーターは下降を続けていた。

ポオオンという到着音が本当の最下層である地下二十階に到着したことを少女に知らせた。そのままエレベーターの中から出た少女は目的の場所を目指して歩き出す。

ここは情報部の表には出せないエリア…いや、存在自体が記載されていない場所だ。つまり表向きは存在してないはずの場所がここ情報部地下の地下十六〜二十階には存在する。数少ない葵すらも知らない秘密の場所でもある。

この秘密の階層は病院のように真っ白な壁、廊下、天井、明かりも白く点っている。白い廊下を迷うことなくコツコツと歩く靴音が響く中、少女はこの階に着いてからクスクスと楽しそうに嗤っている。



た。その身体は暗い快感に、その精神は歪んだ悦楽で高ぶらせていた。その証拠に愉悦の表情を浮かべ、頬を上気させ真っ赤な舌が口腔内で妖しく濡れて蠢いている。

「…ふふふ、本当だね。今日も皆が楽しんでくれるといいな」

「はっはっはっ！それは保障しますよ。ここで楽しまない奴、楽しいめな奴が居るわけがないじゃないですか」

「ふふ、ふふふっ、そうだね。それじゃ開けてくれる？」

「ハッ！それでは部長も存分にお楽しみください」

「ええ、ありがとう。ふふ、ふふふ…」

真っ白の扉が開かれる。開かれた扉の奥へ進むと室内は照明が落とされていた。薄暗い中は結構な広さがあるのが伺える。ダチュラはその中へ躊躇なく歩を進めて行く。僅かな時間を愉しむために…。

……。

背後で扉が閉まる気配がある。やがて扉が完全に閉まると室内は薄暗い闇に包まれた。薄暗い室内は亜空間技術を使用して引き伸ばしているため本来の十倍から十三倍の広さをしていた。

縦横数百mと広大な室内は全体的に薄暗いことからわかり難いが広間と幾つもの小部屋からなる。奥のほうの小部屋から小さな明かりが洩れていた。

先程聞こえた苦悶の声はそこからしているようだ、と確信したダチュラは明かりの洩れ出る小部屋を目指して近付いて行く。近付くにつれて中から声が良く聞こえるようになってきた。

いざ扉を前にしたダチュラは、ここに来て悪戯心と好奇心が湧き出して僅かに開いている扉の隙間から中を覗いてみた。受付に居た監視役の子が言うには今中にはダリアが居るらしい。

情報部副部長であり自分の妹でもある彼女が中でどのような“遊び”をしているのか単純に興味があつたのだ。…決して普通に入るのがつまらないなどは考えていないつたらない。

「んふふふ どれどれー…？お、おあ…？」

開かれている僅かな隙間から覗く。この時のダチュラは気配を殺すのではなく敢えて自分のから発する気配を周囲と同化させるといふ無駄に高度な隠行術を行使している。

覗いた小部屋の中からはピチャピチャと派手に水が飛び散るような音とベチャツと何かの塊が落ちる生々しい音。そして聞こえていた弱々しいが今ではハッキリと聞こえる苦悶の声がしていた。

照明に照らされた室内は咽返るほど赤錆びた臭いがした。これは…とダチュラは考え 血の臭いだ、と本能的に感じ取った。血の香りに興奮したダチュラは中で起きていることを良く見ようと更に目を凝らす。

「…うわあー…これは…んっ（ごっくっ）。へえ…」

中ではダリアが一人の捕虜で遊んでいた。捕虜の男は冷凍肉を吊るすように鎖で吊り下げられている。

男はボロ布しか纏っていないというみすばらしい姿だが辛うじて不潔ではない。ただし今の男の状態で不潔も何もあつたのもではな

いが……。男の身体は大小様々な傷があり左足は股関節から千切られたようになくなっていった。

今も千切られた足の付け根からは夥しいほどの出血が見える。身体中にある傷からも出血が酷い。通常ならば既に出血死しているはずだ。それなのに男は幸か不幸か辛うじて生きている。

吊るされた男の真下に淡く点滅する魔方陣がある。男が辛うじて死なないのはこの魔方陣のせいだ。魔方陣は魔力を注ぎ込むことで魔方陣の範囲内に居る生物を少しずつ回復、再生、本当に僅かだが復元もしてくれるのだ。

この魔方陣のお陰で男は失った血液を再生し、低下した体力を回復し、傷付き欠損した肉体を復元することで首の皮一枚で生にしがみついていた。否、しがみつかざるを得なかったと言える。

男を死刑とも言える拷問をしたであろうダリアは殺すギリギリのところでは必ず手を止めている。その絶妙な匙加減で男は安らかに死ぬことも許されずいつ終わるともわからない責め苦を受けている。

彼らが捕虜になって実時間で二日と数時間になる。当然ここは魔法球の中だ。実時間とは違い引き伸ばされた時間は長い月日にも等しい。実に二ヶ月近く凄惨な“遊び”が繰り返されている。

「ダリアったらすごーい……………濡れちゃいそう……」

ダリアが主催するアカイ宴をダチュラはもう少しだけ見ることにしたようだ……。

……。

一方、室内に居るダリアは捕虜が気絶したことで責める手を休めていた。実はこれで五回目の気絶だ。

ダリアは少しの休憩がてら小部屋内を見渡してみると床一面は数人分の血で文字通りの血の池のように濡れていたことに気付く。薄暗くて気付き難いが元は白い内装だった。それが今では飛び散った鮮血で真っ赤に染まっていた。

鉄錆びた血の臭いが鼻に残るが元悪魔であり戦いが日常だったこともある彼女はどうとも思わない。：考えるとすれば血の臭いがごびり付いてしまうことで葵に感づかれるかもという懸念くらいか。

吊るされ気絶した男を前に彼女は考える。これで気絶するとはやり過ぎたのか、と反芻する。だが、まだ左足しか千切っていない、と考えそれはないと一笑した。

なににせよ。魔方陣の効果で男はある程度回復したはずだ。仮に十分ではなかったとしても最悪でも死ぬことはない……：はずだ。理論上はだが即死以外はどつとでもなる。

「ああ…まだ寝るのですか。眠るには早いですよ？　ほら、起きなさいっ！」

まだ眠るように気絶している男を冷たく眺める。ダリアは男の右腕と肩を無造作に掴むと一気に左右へ引っ張った。その力は分厚い鉄板を引き裂くが如く臂力を持っている。

「…!? ああああ!?!? ああ、 あああああああああつ!?!?」

気絶していた男は突然の激痛に何が起きたのかわからないで混乱する。ただ自分の右腕に走る激痛だけを理解して意識を強制的に覚醒するしかなかった。叫ぶことで痛みを誤魔化そうとする。

そして耐え難い苦痛に叫びながらも痛みを訴える右腕を見る。男はこの時に後悔した。今まで自分が味わった凄惨な行為を思い出したのだ。今の自分に左足がないことそして今は右腕もなくなるうとしている現実を直視した。

男はそこに居た者を、自分の右腕と肩を掴む者を視界に収めて顔色が蒼白となった。この女が自分をボロ雑巾のように私刑リンチを加える者の一人。もう何度、この悪鬼共に自分は殺されかけただろうか。

何度手足の爪を剥がされ指を捻り切られただろうか。何度腕を、足を今のように人間とは思えない膂力で千切られただろうか。何度首を絞められ窒息させられただろうか。もう数え切れないほど殺されかけたのは覚えている…。

ある種の諦観を覚えた男はブチブチと自分の筋肉が千切れる音を聞こえた。それは腕がなくなる予兆でもあると男は痛みに叫びながらも理解していた。

「あああッ!! あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝッ!!!」

そしてその時は来た。一際大きくブチィィという音がしたと同時に鮮血が舞った。室内にまた新鮮な血の臭いが漂う。



「あ、あ……ああ……ああ、ああ……」

「????ああ、血が足りないのね。でも大丈夫よ。ちゃんと千切れ腕も足も……何なら首も繋げてあげるわ。回復魔法も掛けてあげる。輸血もしてあげる。ご飯も三食出してあげる。でも」

「うう……う……ああ……や……やめ……」

「ああ……あう……ああ……っ……あう……あ……」

「ころ、して……こ、ろして、くれえ……」

ダリアは優しく語り掛ける。その時、室内で吊るされた男以外にも数人の呻く声があった。一瞬、眉をしかめその声の主達を見る。彼らは部屋の四隅に散乱していた。どの男達も腕か足、またはその全てがなかった。

「でも、貴方達は殺さない。殺してくれ？ふふふ、殺すものですか。簡単に楽になんかさせない。身体も心もその魂までも全てが壊れるまで苦しみ、楽しみなさい。それが……それだけが葵様の手を煩わせたことに対する唯一の贖罪となるのだから……」

「ああ、ああ……あああつ……」

「ころ、して……ころし、て……こ、ろして……」

ただ静かに殺してくれと懇願する彼らを意に介することなくダリアは優しく語り掛ける。その姿は冷たくも慈愛に満ちた紅の聖女のようにだった。

……。

……。

つい見入ってしまったダチュラはというと……。

「……はっ？あはは。いけないいけない、つい見入っちゃった……」

誰も見ていないのに意味もなく照れていた……。彼女はキヨロキヨロと周囲を確認すると軽く身嗜みを整え、扉に手をかけた。

「こほんっ。……ダリアっ、楽しそうだね！」

「これは、部長……。いらしてましたのですね。申し訳ありません。思いの外、飲み込みが悪いのでつい狂育に熱が入ってしまったようです」

濃厚な血臭漂う部屋の中央でダリアは振り返る。その表情はいつも通りの無感情なものだった。ただし彼女の頬を僅かに垂れる赤色が一際際立って見えることで慣れないと静かな不気味さを感じる。

「えっと……教育？」

「ええ、狂育です。やや覚えが悪くて苦労します」

「……あれ？（なんか違うような……）えっと……教育、だよな？」

「????はい、狂育です。あの、それが……何か？」

「……????（ううん？これは私の勘違い？）」

何か決定的な齟齬が発生している気がしなくてもないダチュラだった。ダリアはダリア頭の上に疑問符を乱舞させながらも何を当たり前のことを、とでも言いたそうな顔をしている。

「……まあいいかな。ん？……一、二、三、うわー……五人も？すごい」

ここに来てダチュラは諦めた。それは別に重要なことでもないからだ。仮にダリアの言う教育で何かあったとしてもタカが虫ケラの一匹が廃棄されるだけなのだから、と考えを改めた。

そう判断したダチュラは部屋に転がる“残骸”を数えた。いくつかは欠損が激しくて難しいが全てに共通している首らしきモノを数えることで正確な個数を割り出した。

「いえ、それ程でも…。んんっ！それで部長もここへいらしたということは？」

「うんっ、その通りだよ！もう書類とかでストレスがすごいのだからここで少し発散しようかな、って」

少しからかう意味も込めて言った賞賛の言葉にダリアは照れたようだ。無表情ながらも視線は左右へ泳いでいた。が、咳を一つすると元通りの表面上は厳格な副部長の姿になった。多少頬が赤いのは気のせいだ。

「……あまり私情でなさるのは感心しませんね。ダチュラ部長？」「ぶうう！そんなことないもんっ。それはほんの少しだから問題ないもの」

「…まあいいでしょう。ですが、あくまでも名目は“情報の抽出”であることをお忘れないように。いいですね？」

そう、表上は“捕虜の取り調べ”と書類に記載されることになっている。それを理解しているダチュラも「わかってるわよー…」などと拗ねながらも了解の意を示している。

実際は尋問や拷問、果ては先程ダリアがしていたような拷問とも呼べないような暴力も含まれる。

勿論最初は形だけでも取り調べを行なった。万が一を見逃さないためにも必要だったからだ。単純な事情聴取に始まり、薬物や魔法による記憶透視、尋問をした。だが案の定と言うべきか必要な情報はなかった。

あとは 今の通りだ。

葵と敵対した。ただそれだけ、と言えばそれまでだ。しかし、それこそが彼女達には許し難い事実だった。これは情報部だけではない、葵を除く組織全体に言えることだ。

因みに葵は葵で無意識に家族を優先することがある。それが目下彼女達の嬉しいところであり不安要素でもあるのは……笑うべきだろうか。いや笑った途端に額に第三の目を作ることになるだろうが……。

「…あれ？ダリア、もう行くの？」

「ええ、今日はここまでです。捕虜の治療を済ませたら仕事に戻ります。…あ、機材はこのまま使われますか？」

ダリアは言うが無造作に使用したと思われる拷問道具を片付け始めた。鎖、男を吊るしていたフック、刃物、焼き鑊、有名なものは鉄の処女アイアンメイデンなどもある。他にもゴロゴロと。どれも血臭が残っている。

「んー？…ううん、いらなかな…。あ、これ以外は全部片付けちゃって」

「これ…肉切り包丁ですか？わかりました」

「」

「　　ッ！！（もう！もうもう！姉さんはいつでも可愛いな！）」

幼女体け、んんっ！小柄な少女のダチュラにはやや大振りの肉切り包丁をダリアは手に取り彼女に手渡した。受け取ったダチュラは場所も雰囲気もお構いなしにキヤツキヤツとはしゃいでいる。

「……………（はっ！？）んんっ！誰かあるっ！来てくれっ！」

今居る場所がアレだが愛する姉の無邪気にはしゃぐ姿にダリアの胸中はキョンキョンして止まらない。言い表すなら「姉さん可愛い姉さん、はあはあ」か…。断じて変態ではない、愛でているだけだ。

「ハッ！副部長、何用でしょうか？」

「ああ、捕虜がまた“自殺を図った”。直ぐ治療を施せ。いいな？絶対に死なせるな」

自殺。勿論書類上に記載する記号のようなものだ。葵も見る可能性のある記録データだからそこは最大限に配慮している。ただし葵を騙すつもりは皆無だ。彼女達は純粹にこの程度の些事など葵の目や耳に入れる価値もないという判断の下そうなっているだけだ。

最も葵自身は何かしらあることを薄々感じ取ってはいるようだ。ただし家族に対して害意があるわけでもないのであまり重要視もしていないが。

「ははははっ！“また”ですか。わかりました。あとはお任せください。…おい運び出せ！」

「ハッ！」「」

四人の武装した女性が駆けつけた時と同じく素早く作業に入る。

担架へ散乱した肉片を無造作に載せていく。五つある胴体部分を載せる時は呻き声が煩いことこの上ない。一度ナイフを突き刺したのは仕方ないことだ。

「では部長、私は仕事に戻りますのでここで失礼します」

やがて血肉が全て洗い流されたところでダリアはダチュラに仕事に戻ることを伝える。

「はい、またね」

「ハッ、部長も仕事はまだあるのですから“ほどほどに”お願いしますよ」

「もー、わかってるってばー…」

ダリアは表面上では無表情だが幼い反応をする小さな姉を見て内心では苦笑する。無邪気に肉切り包丁を振り回す姉を見てから部屋を出る。

少し困ったな、と考える。ダチュラが楽しそうにしていたから彼女が残りの仕事に少し遅れることも計算に入れて今後の予定を組み直そうと、彼女は密かに頭の中でスケジュールをまとめていた。

……。

……。

「ふふふ。…さて、と」

ダリアや他の武装兵が部屋から退出してからダチュラは小さく微笑む。歩き出す彼女が目指すのは“まだ”五体満足の捕虜が収容さ

れている大部屋だ。その部屋には今回捕らえた捕虜の全員が収容されている。

然程離れていない大部屋に着くと扉の横にあるパネルを操作し口ツクを解除した。

大部屋の中に入ると捕虜の全員が拘束されていない状況だ。共通しているのは捕虜全員が首に黒いチョーカーを巻いていることと皆一様に無気力で虚ろな目をしていることだ。これまでの過酷な責めに生きる気力そのものが衰弱している。

そして先程の黒いチョーカー。チョーカーは反逆防止用だ。対象に神経系の毒物を注入する機能が内蔵されている。この神経毒は僅かでも過剰投与すれば死に至るほどのものだ。オマケで縮まり絞める機能もある。加減を間違えると絞めて捻じ切ることもある。

「くつらもちくうん！また君“で”遊びに来たよお。サツサとおいでよ」

寒々しい場所へダチュラは一切の躊躇もなく大部屋へ入った。呼び掛ける内容や態度は小学生が友達を遊びに誘う姿だったが大振りの肉切り包丁を片手に持っているのが全てをブチ壊しにしている。

彼女が現れた途端に室内の空気が激変した。

捕虜達全員が怯えた。ある者は突然泣き出す。ある者は凍えたように震える。ある者は神経質にまで爪を噛む。ある者は死人のような土気色の肌になる。ある者は、ある者は、ある者は……。

だがそれも捕虜の一人に指名が掛かったとわかると騒ぎは収まり、

ざわつき一つなくなった。あるのは多数の安堵と僅かな哀れみ。  
ただ一人を除いて…。

「ああ…！ああっ…！いや、だ…！いやだああああっ…！！ああっあああああっ…！！？」

「わああ 今日も元気なんだね？いいねいいね　　これなら今日も遊べそうだよ」

指名された本人である倉持・K・アルフォードだ。錯乱し泣き喚く倉持。元気だねー、と無邪気に喜ぶダチュラに首根っこ掴まれて床を引き摺られる彼の姿はある種滑稽である。

両手に肉切り包丁と大の男を持つ幼じ…少女。そして錯乱して暴れる男をか細く小さな腕で捻じ伏せ引き摺り連れて行く。とてもシユールだ…。

そのまま彼女達は大部屋を出て（一人は引き摺られて）先程までダリアが遊んでいた小部屋まで移動する。

「いやだっ、放せ！放してくれっ…！ああ、ああっ…！！」

「もう、大げさだなあ。いつも上手にやってあげてるでしょ？何が不満なのよ。もう…」

「いやだいやだいやだイヤだイヤだイヤだイヤダイヤダイヤダ…！

！…！！」

「もー、うるさいなあ…」

「ッ！？ぐっ！かはっ　　ごほごほっ…！！」

僅かな距離を移動し終わり小部屋に倉持を小石のように投げ入れる。あまりにも喚くのでダチュラもイライラし始めてきたようだ。最後の扱いが乱暴になっている。

数メートル先まで転がり倉持が気付くと小部屋の中央に居た。そこへ突き付けられる肉切り包丁の尖端。妙に怪しく光っているのがまた怖い。

「……いい加減にしないとまた生きたまま殺すよ？」

「つつつ……！」

もう何度同じことを繰り返しただろう。チョーカーの神経毒を少量投与することで身体の自由を奪い生きたまま少しずつ……少しずつ肉を削り落とされる。しかも神経毒で痛覚が麻痺しているから大きな痛みを感じない。

そして身体を削り取られる行為を抵抗もできずにただ見ることにできない。その恐怖が想像できるだろうか。……痛みを感じない。でも痛いのは嫌だ。でも血も出るし肉も削られる。徐々になくなる身体。このままでは死ぬ。

「あはっ もう、そんなに怯えなくてもいいのに、クスクス。今日はおままごとしようか」

「っ……！あ、ああ……！ううっ……！」

「私は優しいお肉屋さんで倉持君は可哀想な食用牛さんの役ね。それじゃ始め」

「や、やめやめて、くれ……！やめ っ……！」

おままごと。行為自体は子供のお遊び。しかしここで言うおままごととは血生臭いアカイ宴のことだ。会場も生贄もホストも揃った。そして今ここに赤い……あかい……アカイ宴の開演が発せられた。

「うわあ！大きな牛さんだ！これなら今日もいいお肉が取れそうね







つっていた。耳を斬り落とした。指を斬り落とした。手足は既にない。全部斬り落とした。

「…だけど　貴方達は別よ。多少強引だろうと構わない。貴方達のような不穏分子は情報部として見逃せるものじゃないの…。現に貴方達はマスターに弓引いたのだから私達の考えは間違つてなかつたわ…。クスクス、馬鹿な人…」

「ああ…ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

それでも死ねない痛み、苦しみ、悲しみ…。正にこの世の地獄を表したかのような場所。手足もなくなり、耳は削ぎ落とされた。真正銘の“ダルマ”だ。一時期は手足を切り落として生きたまま塩水に漬けるという残虐な拷問方法。

「クスクス…今更自らの行いを悔いているの？あはっ　あはははははははっ！！　でも、ダメよ…！！貴方達は越えてはならない一線を越えてしまっているのだから！！ああ…！許せない！許せるものですか！！憎くて…！憎くて堪らない！！！」

「あ、う…！ああ…！ごめっ、ごめんなさいっ…！！も、う…しま、せん…からっ…！た、たすっ、たすけ、て、くださいっ…！！」

憎い憎いと語りだしてからダチュラの表情が徐々に憎悪に染まる。楽しげな笑顔が狂笑に変わりつつあった。あと一步、もうあと一步踏み出せば今まで以上の方法で虐殺劇が開幕するだろう。

彼女の憎悪と怨嗟の聞くのは腕も足も耳もなくし芋虫のようになった倉持だ。彼は死ぬことも許されない。ただ自分の血でできた血溜りに横たわり、ありえない許しを請うのみ。

「…ねえ、私の話しを聞いていたのかな？聞いていたよね？…ダリアじゃないけど貴方達の身体も心も魂も全てが壊れるまで楽になんかせせない。いいえ！例え本当に壊れたとしても何度でも！何度でも！何度でも！治してあげる！！」

うつ伏せで転がっていた倉持をダリアは蹴り付けて反すと腹部を軽く踏みつける。踏まれた時に千切れた手足の付け根からビチャツと血が吹き出たのを彼女が見て黒い笑いをしている。

「あぐつ、ああ…そんな…っ！くっ…ああっ…！かえして…！うち、に…かえして、くれ…っ！あ、あああ…！」

ここに投獄されてから二ヶ月近く。自分達の救出はどうなっているのか。外ではどうなっているかもわからない。それどころか今居る場所がどこののかもわからない。わからないこと尽くしだった。

「家？帰して？クスクス、あははははっ…！どこへ帰ると言うの？もう地球上の…いいえっ、世界のどこにも貴方達が存在した居場所も記録も記憶もないというのに！あはっあははははっは、はは…貴方達の存在全てを消しても憎悪が収まらないのよっ…！」

踏み付けてい血が噴き出す様を延々と続けていたダチュラは足を退けて後ろへ大きく振り上げる。狙うは倉持の…。

「　　ツツツ…！ま、さか…うう…あ、ああ…！そ…そん、な…！  
がっ！？ががあああ…あ…ッ…！あ…あ…あ…あ…あ…あ…あ  
あ…あ…あ…あ…ツツ…！あ…！」

鋭く振り切った彼女の足が獲物を捕らえた。瞬間。グチャツという血生臭い音とナニかが割れる鈍くも軽い音がした。ダチュラ



S  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t  
  
?  
?  
?  
?

番外編「あかいとアカイと赤いと」（後書き）

書いたはいいけど……もしかしたら失敗だったかもしれない。

R15ではなくR18じゃね？血生臭いな意味で。

でもこの程度でR18はないか。これくらいならよくあるよね！

ただ、どうもその辺りが作者は把握し切れていない気がするのですが…。

まあだからこそその練習だったのですがうまくいかないツスねー…。

r z

ちよつと本編に力入れて葵を木星まで飛ばそうかなと思います。

………時間ないけどね!?

ではでは！

第七十五話「宴会と約束と混乱（笑）」（前書き）

いや…もうホントに…こんなに遅れて申し訳ない。  
続きをどうぞ。

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。  
誤字報告も歓迎。

## 第七十五話「宴会と約束と混乱（笑）」と

喫茶店クレイドル…。

Side 葵

麻帆良出発を明日に控えた今日は出発前の最後の宴会だ。会場は当然、喫茶クレイドルを用意した。

あ勿論、ただ旅立つと言っても一年後には帰ってくるつもりだからこの土地も店舗も売る気は全く無い。店の所有権は俺名義だが旅行中何かあった時のために代理人をエヴァちゃんに指名してあるから安心だ。

引き受ける代わりに大量の飴ちゃんを要求されたけど…。彼女の何がそんなに飴ちゃんを欲しがるのか？製作者としては嬉しいけど。

もしかして………中毒？いやゴメン自分で言っていてこれはないな。なんだよ、飴ちゃん中毒って。どれだけ甘党なんだよ。そもそも俺の作る飴はハーブや薬草を使った香り高い飴であってそこまでジャンキーな甘さじゃ…あ。

……こほん。すまない、話を戻そう。

あー、それでだ。流石に誰にも何も言わずに出掛けるのは俺でも薄情だと思っただけよ。例えば木乃香ちゃんや明日菜、それに刹那

ちゃんのこともあるわけだしさ。何も言わずに出て行ったら再会した時に何をされるか…（ガクブル）。

だ、だからあの日エヴァちゃんと晩御飯を一緒に食べた次の日に主な親しい連中へ、まあ内容は省くが「宴会やるから来い」という招待状を送りつけた。一応、本人の予定もあるだろうから無理に來なくていいとも書き添えている。

……そして宴会当日、今日の昼頃ここに集まったのだよ！

まあメンバーは木乃香ちゃん、明日菜、刹那ちゃんを始めとしたパワフル中学生A組の皆。前三人はいいとしても後ろの面子はどこから話しを察知しやがった？まあ過去の経験上、来ることは想定していたからいいけどさ。

で、だ。高音の嬢ちゃんや愛衣ちゃん、それとタカミチと刀子さんといった比較的やーらかい思考の持ち主である数名の学園関係者達だ。一度敵対しても死者も出してないし、怪我人も迅速に治療されたから大きな溝もないのよ。

あ、当然エヴァちゃんと茶々丸ちゃんは言わずもがなと言うやつだ。彼女達も呼ばずして誰を呼ぶのか。いや木乃香ちゃん達三人は即効で呼び出すけどね。

……こうして見ると意外と大所帯になっている気がする。事実だけど…。

呼んでから気が付いたけどさ。この人数は店内に入りきらない…。ウチの最大収容人数はちよっと詰めて五十人入ればいいほうだ。ここに陽月姉妹、精霊・悪魔・親衛隊三人娘、数十名の家族が参加す



ううむ？A組の皆は感情表現豊かだねえ。俺如きでここまで悲しんでくれるなんてねえ。嬉しいも、うおっ！？お前から少しは落ち着けよ！押すな！押すなっの！？料理を取りに行けないだろうが！

痛いよっ！？後ろからイタイっ！？だ、誰だ！？今足蹴ったヤツは誰っ！？あっ！いてっ！？ちよっ！？明日菜だな今のはっ！？な、なんで真っ赤になって涙目してん…っ！？いたいて！？え！？だから無言で蹴るな！足癖悪いぞお前！？

いたいてっ！？いたいてっ！！今度は誰！？俺の腰を鋭く突くのは誰よ！？つて！刹那ちゃん！？目尻に涙を浮かせて無言で突くのはどうかとお兄さんは思、つて痛いつて！夕凧の鞘で突きを放つなっ！！何か言っつてお願いだから！！

……まったく、少しは大人しい木乃香ちゃんを見習って、げっ！？！？

「な、なんで兄様行ってしまうの？あ、旅行かー。もう兄様が大げさに言っつから驚いたわ。…いつ帰ってくるの？三日後？それとも五日後？」

ち、ちよっと目のハイライトが半分消えた木乃香ちゃんが目の前に居ます！それもケーキを食べていた時に持っていたフォークを硬く、硬く握り締めて！握り過ぎて手が白くなっています！

……え？俺刺されるの！？えっ？フォークで！？えっ！？なんでッ！？！？

「……（ゴクン）い、一年を予定、し、しています……」

「……え？」

カラン、とフォークの落ちる音がした。チラツと木乃香ちゃんの顔を見てみると完全に目からハイライトが消えていました！というか無気力状態？なんだか俺すごい悪いことをしたような気分させられます！

「…………い、一年を、よ、予定、し、しています」

もう一度言いました。ええ、大事なことなので二度言いました。ドモッてなどいない！少し噛んだだけだ！堂々と言いましたとも！ええ！…………ごめん、ウソです。メガツサ怖いとです…。

「あ、アハは、はハは…。じ、冗談やる？もう兄様ったら冗談キツイわー…」

…………かのじよの　こわれた　わらうかおが　こわいです。

「い、いや違うから…。うん、じ、冗談じゃない、から…ね？こ木乃香ちゃんっ、とりあえず落ち着こう？ね？ねっ？あ、こつちに…」

流石に見ていられないので奥の応接部屋に連れ出した。その際に扉の前には陽月姉妹を配置しておくことを忘れない。こうしておかないと押しかけてくるのがA組だ。話しが拗れたらイヤとは言えゴメン皆。

でも俺がんばった！メガツサがんばった！少しヤンデレっぽくなつた木乃香ちゃんをよくぞここまで連れてきた！あんな人目のあるところで殺傷事件とか勘弁だし！

…………あれ！？この場合、密室だから刺されるのは俺か！？俺なの

か!?

「……………ふえ……」

「ちよつ!？木乃香ちゃん!？泣くのは待って!！ほ、ほくら?い  
ーこ、いーこ」

……………刺されるフラグは折れたが号泣フラグが立ったとです!?!?

部屋について早々に泣くとか勘弁してほしい!本当に俺が悪者じゃないか。ん?美少女な女子中学生を泣かせる二十代の男性…。もしかしなくとも俺が悪い人に見えないかね!?流石に俺も中学生に手は出さないよ!!

「……………ぐすつ、ふええええ……………うぐつ…に…い…ざま…あ…うえええ……」

「おうふ…。あーもー、今生の別れってわけじゃないんだからそんなに泣くなよ……」

「だ、だつで、うぐつ…に…い…ざま…まで居なくなつてまう…う、ううう……」

あー…なるほど、親しかった刹那ちゃんとも今は表面的には疎遠になっっているから俺とはいえ古馴染みが遠くに行くのが不安なのか。いい加減刹那ちゃんも開き直って木乃香ちゃんとイチャラブすればいいのになー。

……………でも刹那ちゃん達とは違う印象を感じなくも?なんだろ?お友達以上の感覚が……。

なんだろか?今の状況を客観的に見て……………昼メロ?夫(刹那ちゃん)の妻(木乃香ちゃん)と不倫している間男(不本意だが…俺)

という状況に見えなくもならない？この部屋には今俺達二人しかないし……。いや、でもこの場合は…？

……あ、わかった！これは家族の情ですね？俺も理解しましたよ。ふふふ！

いやー兄貴分のような役割をしてきたけど本当の意味で兄になつていたようだ。木乃香ちゃんはこんなに俺のことを思っていてくれたとは嬉しいね！今日から木乃香ちゃんのことを“新 妹分R”として可愛がるうと思つ！

「あー、よしよし！ほら、泣き止め！なっ？」

「ふええええ…ずずつ…に…いつ、ざまっ…」

“新 妹分R”と認識したからには遠慮はいらないだろ。もう正面からぎゅっと抱き締めました。胸の辺りが涙やその他諸々のモノで湿るけど、それを気にするのは野暮というものだろ。

「うー…そっだ！約束しよう！一年後には必ず帰ってくる！な？それどうよ？」

「ぐすつ…本当お？…必ず帰ってくる？ウチを置いて行かん？」

「あ、ああ。本当だとも。約束だ」

「うぐつ、うん、約束…」

や、やっと泣き止んだー…。今まで可愛がってきた子の泣き顔を見るのは激しく動揺を誘うから困る。いや嬉しい気持ちも多分にあるんだけどね。ここまで懐かれていたのかと思つと嬉しいものだよ、うん。

……。

部屋から会場に戻ってからが大変だった。気にしてなかったけど会場から離れて一時間も経っていたらしい。その間部屋の中で何があったのかと皆が問い詰めてくるんだ。主に明日菜と刹那ちゃんが怖かった…。

仮に俺が何をしたというんだ、と逆に聞いてみれば二人してゴニョゴニョと小さな声で「キ、キス…とか？」じゃねえよ！？俺が泣いている少女、失礼、美少女に何かするわけ無いじゃないか！

中学一年の美少女に何かするわけないじゃないか。俺だってそれくらいの分別はあるっての。するとしても愛でるだけだ！む！俺はロリコンじゃない！どちらかと言うとお姉さん好きなんだ！お淑やかなお姉さんが好きなんだよ！！

あれ？でもでも、あと十年くらい経てば木乃香ちゃんがそんな感じ、に…？それなら今からツバを……ってダメだろ！？せめて今の年齢が刀子さんのようなできるお姉さんみたいだったら…。

いや今のは仮の話しだからね？真に受けるなよ！大体相手が刀子さんのような美人さんだったら、こう…：ムラムラつとすることもあるかもしれないけど今の彼女には一般人の彼氏が居るから論外だ。そもそもくつつけたの俺だし！

失礼。あまりにも理不尽な言い掛かりを明日菜と刹那ちゃんにつけられたから軽く現実逃避をしてみましたよ。人間誰だって理不尽なことからは目を逸らしたい時くらいあるだろ。うん。

さて、目の前で赤くなっている二人と俺の隣で同じかそれ以上に赤くなっている木乃香ちゃんをどうしたのもか…。まったくキスな

どとしたこともないくせにマセタことをぬかすからこうなるのだよ。

……とりあえず何か食べるか。お、鳥力ラだ！んぐんぐ……うまー。

……。

木乃香ちゃんの一件があつてからも代わる代わる言葉をかけてくれる子達の相手をしていたら料理を食べ損ねていた。なんで作った一人である俺が食べられないのか。俺が食べたのつてカラ揚げ一つだよ……。

……ちよつと理不尽じゃね？

なんて思い至つたから皿に料理を載せられるだけ載せて壁際に移動した。壁際には立って疲れた招待客のために休憩用の椅子と小テーブルを設置してあるのだよ。ここなら邪魔にはなるまいと思いがたわけだ。

そこで暫くの間、空いた腹を満たしていたわけだ。食事の最中も破天荒なA組の連中が無遠慮に突撃してくるから困つたような、嬉しいような……いや微笑ましかつたかな。生物とはこうあるべきだと改めて思ったほどだ。

だつてそうだろう？若く力強い生命力こそが未来を切り拓く最良の剣となると俺は考えるんだ。若さ、命は有限だ。寿命に限りがあるということはただそれだけで命の輝きを増すスパイスになる。

不老のこの身でそのことを理解した時は何とも言えない寂しさのようなものを感じたな……。つと、そうじゃないな。とりあえず食事中は程々に相手しながらやり過ごしていたわけだ。

それでまあ食欲がある程度満たされた時に思い出したことがあった。刹那ちゃんに言っておかないといけなことがあったんだ、とね。

……肝心の刹那ちゃんはどこかな、と……あ、居た居た。

刹那ちゃんは出入口近くの壁際に立っていた。何かあった時に入り口を塞ぐこともできるし外へ討って出ることも可能。そしてその場所は木乃香ちゃんを視界に収められる位置だけど決して本人には近寄らない。そんな位置だった。

木乃香ちゃんも刹那ちゃんのことを気にしているのかチラチラと見ている。しかし刹那ちゃんは我関せずを貫いていた。それに木乃香ちゃんは半笑いです。ちよつと泣きそうな雰囲気です……。

……マジで刹那ちゃんあの悪癖をどうにかしないといけないかもしれない。

でも俺達は明日には麻帆良を出るから無理……というか、今までもさり気なく注意しているのに刹那ちゃんのはらりくらりとかわすれ始末だったし。はあ、あの子って意地っ張りなくせに変なところで臆病なんだよな。

しかし……むう、明日ここを出るとして帰還は一年後か。皆が二年の三学期くらいには帰れる計算だな。できればそれまでに自力で歩み寄ってほしいところなんだけど……今までを考えると難しいよな。ま、それは帰った時にでも考えよう。

では、こほんっ、まずは念話で……むによんむによーん……。

ちよいちよい。刹那ちゃんこつちおいで。…は？木乃香ちゃんの護衛がある、だと？刹那ちゃん…あのさー、ここを襲うなんて愚を犯すヤツが今の麻帆良に居ると思う？…居ないでしょ。…でも、じやないの、いいからおいで。

そもそも店から半径数百メートルに渡ってウチの子達が警戒しているんだからある意味世界で一番安全だって。

「……それで何の用ですか？」

「護衛の件なんだけどね。まあ大したことじゃないけど今回のことで麻帆良の毒はなくしたから。二丁三年は刹那ちゃんも少しくらい動き易いと思うよ」

……西から来た彼女には肩身の狭いこともあっただろうしさ。

過程がどうであれ結果的に倉持一派という正義に凝り固まった人間は麻帆良の地から消し去った。これに関西呪術協会の長である近衛・詠春の娘、木乃香ちゃんにちよつかいを掛けるかもしれない存在は少なくとも内側は皆無になった。

うん。こればかりは想定していなかったけど結果的に、というか副次的に木乃香ちゃんを始めとした力ある存在の安全の率を底上げすることになった…らしい。アイリとアンにそう説明された。結果良ければ全てよし、だな。

「っ……どづいうことでしょう？」

「詳しくは聞かないでくれる？この業界で余計な詮索は嫌われるし、最悪は…わかるよね」

刹那ちゃんはそういう駆け引きはまだ苦手のようだ。裏に限らず下手な詮索をする者は嫌われるか消されるって。その辺は彼女もわかってはいるはずだろうに。

ん？…あれ？そつえば俺もそれほど得意じゃない！？確かに俺も根回しや駆け引きはするけど場合によっては圧倒的な力（質、物量、技術etc）で相手を捻じ伏せるからな。あ、“俺が”じゃくて“家族が”だけだな…。

「それはつ…いえ、わかり、ました」

「うん。刹那ちゃんはいいい子だね」

「や、やめてくださいっ。私はもう子供ではありません」

「くくくっ、そう言っている間はまだまだ子供だよ」

なんだなんだ？少し前までは頭撫でられて喜んでたのに、今ではイヤがるか。これはまさかの反抗期か！？いや、でも…イヤがる割りには頭に乗る手を払おうともしないし。あー、そうか。これが難しいお年頃というものか…。

「…まあそんなわけだから学園内では多少肩の力を抜いていいから」

「はい、葵さんの配慮は無駄にはしません」

刹那ちゃん…言葉では澄ましているけどまだ顔が赤いよ。おー、一丁前にテレてんのか？真っ赤になって可愛いですね！もう兄貴分としては愛でるしかないと思うのですよ！

…可愛い刹那ちゃん可愛い！

ん？待てよ…。今刹那ちゃんは「配慮は無駄にはしない」と言い切ったよな。つまりできた時間的精神的余裕を他へ向けることがで

きるといふことだろ。…ニヤリ。その余裕は俺の都合で使わせてもらおうじゃないか！くくくっ！

「……くくくっ、無駄にはしないんだよね？神鳴流剣士に二言はな  
いよね？」

「え、ええ…。その、それが…なにか？」

「なに、簡単なことだ。俺が帰ってくるまでに木乃香ちゃんと和解  
しな」

「なっ！？それはっ！！」

「できなかつたら！……その捻じ曲がった根性を今度こそ叩き直す」

ダメだった場合…とりあえず八才とユエの軍事演習に直接放り込  
むことから始めるか。精神的に鍛えられることは間違いない。多少  
精神にトラウマを刻み込む可能性が無きにしても非ず、と言ったこ  
ろだが……なんとかなるよね！

「捻じ曲がった！？葵さんそれはヒドイです！私は捻じ曲がってな  
どおりません！」

「やかましい。木乃香ちゃんが刹那ちゃんに無視される度に悲しそ  
うにする。それを無視する根性を捻じ曲がっていると言って何が悪  
いか。いいから和解しろ」

なんかすごい強引なこと言っている気がするけど今それを気にす  
るのはダメだよね。ここで諦めたら木乃香ちゃんがまた泣いちゃう  
かもしれないしさ。

「しかし私は…それにお嬢様の側に私は相応しくは…」

「悪いが今回ばかりはマジだ。諦めろよ。……………（ボソツ）まだ死  
にたくないだろ？」

「最後の聞こえましたよ！？一体、私はナニをされるのですか！？」

なにつて……ナニですが？その時は立派な武士になっていること  
だろうね（笑）。

……。

……。

うん、一応だがパーティーは無事（？）に終わった。タカミチか  
ら何やら一、二年内にナギ達の息子であるネギ君が何らかの理由で  
来るみたいなこと言っていたがそれどころではなかったので俺はキ  
チンと聞いていなかった。

まあどうせ行くとか、行くならせめて事前に言っておいてくれ  
とか、出来るだけ早く帰ってこいとか。……おい、予想がどれも麻  
帆良に縛るようなことしか言われてないようなものばかりなのはど  
ういうことだろうか。

まあどの道、俺のすることに変更はない。俺は気紛れで臆病者で  
我侭で小心者でどうしようもないヤツだが一度発動した計画は何が  
何でも遂行する。ただ独りではどうしても無理があるから家族の皆  
に協力してもらっているけどさ。

……今、月基地では“そつだ、木星へ行こう計画”がスタートし  
ている。

もう月には大型移民船を建造するように指示も出してあるし止ま  
らないよ。いやまあ何度も言うが月に居る自動人形達オートマタはニコニコし  
て「楽しみにしててください」と通信先で言っていたけどね。

時間特区を最大限使用して今から大急ぎで建造するとしても最大で三ヶ月は掛かる。木星までの航行はワープ航法かフォールド航法で移動時間を短縮するとして往復でおよそ二ヶ月強くらいを想定かね。木星まで一月とか何気に技術チートだな…。

……そして木星付近に最大で滞在できるのは六ヶ月から七ヶ月と考えるべきか。

目安としてネギ少年が来る二年の三学期辺りには帰還できる……予定だ。もしかしたらズレ込んでイベントを逃すなどという際どいスケジュールになるか？いや技術関係はチートなんだ。何とかなる、何とかなるさ。

……。

……。

明けて翌日、喫茶クレイドルを暫く休業することにした俺達は地下にある転移門<sup>ゲート</sup>を通じて事実上俺の城であり領地でもある月基地へやってきました！

……この自動人形達って無駄にスペック高くない？

自由にしろとは言ったけど…これは、ねえ？建設当初よりも基地も拡張されているし。これは基地と言うよりも都市じゃないかね。月面都市国家とでも言えはいいのか？え？収容人数は百万人以上を想定しておりますって？

……はは、笑えるね。今の家族だけでも二万も居ないのに。ははは、って笑えないよ!？

基地内には景観を考えて植林もしていた。こうなるともう地球や星が見える天蓋を見上げなければここが月とは思えないほどだ。水とか地球から運んできて川や湖、果ては海なんかも小さいながら創り上げてあった。

……この子達はマジで何がしたいんだ。国でも創る気だろうか？

それでも今までの人口は自動人形オンリーでしたけどね！しかも俺達がここへ来たとしても純粹な人間はゼロだよ！いや純粹な人間に特に価値を見出したことなんて皆無ですけどね。そういうのはどちらでもいいよ。

それとまあ俺自身が人間と言えるのかそれこそ自信が持てないから例外だ。ただの人間は不老ではないのだよ。別に死んでこの世界へ来たわけじゃないから死者とも違うし。敢えて言うなら女神（幼女）に送られたから女紙もとい女神の使者（笑）かも。

……まあなんだ。今は気を取り直して早速やろうと思う。

「さ！皆、大きな船を造るぞ！これまでにないくらい大きなのをな  
「！」

夢は大きく10km級艦船だ！今までで一番大きな艦船は550m級ドッグ艦だからな……。限界に挑戦だ！あ、時間は三ヶ月間と限られているから限界じゃないけどね！

「……………」

あ、あれ？反応がない？お、おかしいなあ俺は何か間違えたこ

とを言ったただろうか？いやそんなはずはないはずだ。あれえ？俺何かハズした？受けを狙ったわけでもないんだけど…。

……はっ！？まさか俺は自分でも知らない内に嫌われたとでも！？

あ、ありえる…。今まで皆には色々は無茶なこと言ってきた気がするし…。各部署から人員増強の要請があったとは言っても当初の予定よりも少し…大分多めになってしまったのは逆に彼女達に負担をかけてしまったかもしれない。

最近ではCOS MOSのことだ。身代わりとは言えそれを操作していたのは彼女自身…。内心で複雑な思いに駆られても不思議じゃない…。

……おうふ、俺の唯一の拠り所である家族から嫌われる？い、イヤ過ぎるorz

皆の反応がないことに不安を感じて色々と想像していた。それで少しどころか大いに鬱状態へ突入しかけていたらクスクスと楽しそうな笑いがあちらこちらから響いていた。

「お、おお…。皆に嫌われただけでなく嘲笑われるとは……ぐすつ」「……なっ！？違いますっ！断じて違いますから！」「……」

ダメだ…。俺はもう立ち直れないかもしれない。ハハハ…。

Side out 葵

月面基地改め月面都市、同場所…。

Side ????

「お、おお…。皆に嫌われただけでなく嘲笑われるとは…………ぐすつ」  
「…………なっ!? 違いますっ! 断じて違いますから!」

葵が遠い目をして半放心状態にある最中、葵の家族であり臣下であり友である二万近い数の精魔奇兵やミリエールやオリビエらなど少数の側近達が混乱した。

彼女達は直ぐに葵の誤解を察知したので否定したが件の葵は最愛の家族達に拒否されたと勘違いして軽く茫然自失状態…。瞳の色は濁り気が減衰している。こんな状態の彼にいくら声を張り上げようともしその声自体が届かない。

さて、こうなると“困ったちゃん”が現れる。それは葵の一部の側近達だ。敬愛する主人が誤解とはいえ落ち込んでしまった。その彼の姿だが見た目には絶望のどん底に叩き落されたかのように彼女達の目には映る。

つまり…。

「わ、我が君!? おのれ!! 誰だ!? 恐れ多くも我が君に牙剥く者は!? 吾らが叩き斬ってくれる!!!」

「今名乗り出るならば首を落とすだけで済ませよう…! 出なければわかるな…!? サツサと出てこぬか!!!」

「こらこらこらこら!? 二人とも落ち着かないか! 今はそれよりも

主の誤解を解かなければ！！なんだかスゴイ曲解されておられそう  
だぞー!?」

「マリーちゃんの言う通りよお！ハオちゃんもユエちゃんも落ち着  
いてえ！ここに居る誰もがそんなことしてないし考えてもいないか  
らあ！ねえ!?」

こつなるのだ…。

葵LOVEを公言して憚らない陽月姉妹のハオとユエが代表的な  
のはお約束だろう。ただし今回はユエまで、というのが意外だった  
が。彼女も何だかんだで葵スキーなのは変わらないということなの  
だろう。

さて、この二人だが先程の台詞を無視して普通に見れば静かに立  
つ姿だ。その姿からは無闇に暴れることは無い。だが一点だけ問題  
がある。身体から溢れ、巻き起こる魔力放出や禍々しい狂気は身も  
凍らせるほどの威圧感が放たれているのだ。

そんな時に彼女達を必死になって止めるのは葵ファミリーの良心  
たるミリエールとマリエールだ。特性や属性は異なるが莫大な魔力  
を保有という点では側近達（AI娘達は除外）は拮抗している。

ただし精霊の性質か元から彼女達の性格か純粹に心優しい彼女達  
は攻勢的な戦闘ではなく守りが得意だ。火の精霊マリエールは例外  
と言えるかもしれないがそれでも好戦的ではない。キレると怖いが  
…。

悪魔とは違うのだよ悪魔とは、とは元精霊のとある精魔奇兵の言  
葉だ。後に元悪魔の精魔奇兵達がイラッ として鎮圧した。

因みに最後の良心たるミリエールとマリエールの二人は葵の心の癒し的な意味合いを多分に占めている。いつもは宴会場となる魔法球「桜の苑」の中で彼女達に膝枕されながら舞い散る桜を見ることで心のリフレッシュをしているのは秘密だ。

話しを戻そう。要は何が言いたいかというのだ。

「いや、いいんだ、いいんだよお……。今まで何だかんだと皆に無茶振りしてきたしね。今思えば愛想つかされても仕方ないし……。アははハハ……。う、うえええええ……」

「ちよ！？主いいい！？今ここでそんなこと言われたら二人が更に暴走……ッ！？」

誤解した葵がいい感じに壊れ、マリエール達がそれに巻き込まれる。と言うよりもいい加減に寂しがりやを直せと思わないだろうか。小者とか臆病者などはまだいい……。いやよくないけど。

とにかく、だ。現在八百二十歳の男が誤解とはいえ家族の態度一つで泣くなと思う。うん、見事な男泣きだ。見方によっては深い愛情を感じさせる。これが依存であったなら救いが無いほどに……。

「誰ぞ！？どこの下郎が我が君を悲しませた！？おお……！憎い、憎いぞ……！！！」

「もうイヤッ！このままじゃ魔剣化するかも！？それも暗黒剣の類に！？ミリー……！二人を止める……！このままではここが壊れる……！」

そして巻き込むのは更なる誤解をした葵フリークスの葵ファミリーの一部の側近達だ。

魔力放出よりも更に強力に禍々しい魔力の暴風が八才とユエを中心に吹き荒れる。いつもの凜とした魔力は感じられない。憎しみを具現化させたかのような黒々としたドロドロとしか感じられない怖いほどに濁った魔力だ。

ミリエールとマリエール、更には遠巻きに見ている精魔奇兵達も流石にこの事態には若干どころかメートル単位で引いている。

「わ、私一人で二人を止めるのは難しいと思うのよねえ…。そうだ！オリビエちゃん達も手を貸し…ええー…」

二人では手に余ると考えて応援を頼もうと振り向いたミリエールだがそこに見たものは信じたくない光景だった。だって…。

「おい？貴様か？貴様が葵を泣かせたのか？おい、どうなんだ？答えろ…！」

「の、ノーサー！わ、私は何もあうとびっしゅ！？」

「嘘を吐くな！本当のことを…チツ！気絶しやがったか。次！その貴様！」

「えっ！？私っ！？？」

「そつだ！脳タリンな貴様だ！！貴様か？葵を泣かせたのは？どうなんだ？答える…！」

「私、い、いえ、自分は…そんな、そのやってぐれいぶにる…！」

「ハッキリ喋らないか！！ってまた気絶か。軟弱な…。次！貴様だ、貴様…！」

「はいいい！？今度は私ですか！？？」

オリビエが精魔奇兵を一人また一人と尋問しながらも途中で手を出して気絶させるという意味不明な強行に出ていたのだから…。

だが精魔奇兵の彼女達も相当なものだ。本来ならオリビエが殴っただけでその部分が抉れるか粉微塵に吹き飛ぶことになるのは確実。それなのに殴られた彼女達は皆、気絶だけだ。更に言うなら頭にマンガコブが出来ているくらいか。

「ええー……」

ミリエールは絶望した。それはもうどうしようもないほどに。だけど諦めない。オリビエがダメでもおっとりした自分と気の合うリビエラならば、と期待を込めて探した。そう、探したのが間違いだっただのに探してしまった。

そして精魔奇兵達の少し奥のそこに探し人の彼女リビエラは居た。そう、なぜかプラズマを宿らせる霧を纏いながら彼女はそこに居た。

「ね〜？ 貴女なの〜？ 貴女が葵ちゃんを悲しませた悪い子なの〜？」  
「そそそそんな恐れ多いこと私にはできませんよ！！ ち、違います！！！」

「そうなの〜？ ……でも口ではいくらでも言えるわよね〜？」

「ええ！？ いえ、そんな！ ええっ！？」

「だから〜。 ふふふ　貴女の身体に聞くことにするわ〜」  
「……………はあああ！？！？！？」

「まずは少しずつ燃やしちゃいましょね〜？ ウフ、ウフフフ……」

「い、いや……いやああああああああつ！！？！？！？」

「逃げるということとは〜　貴女が葵ちゃんを泣かせたのね〜？」  
「違いますううー！！ あち！？ かすった！！ ってあちゃー！！？！？」

プラズマを纏う霧が舞う中、それを紙一重でほぼ全てを避け続ける精魔奇兵。霧を避けることなど普通ならできない。それなのに“それ”をやってみせる……。日頃の鍛錬の賜物です、と言われてしま

えはそこまでだが、これは…。

こほんっ。…そんな光景がミリエールの眼前で起きている。現在進行形で起きている。ただ…燃やされた者は須らくアフロになるという不可思議現象付きで。そんなことが他でもない彼女の探し人であるリビエラの手によって引き起こされている。

「ええー…」

ミリエールは再度絶望した。オリビエ以上の期待だったのに…。一度目よりも期待が大きかっただけに更に絶望したのは仕方のないことかもしれない。ここでフラツとしたミリエールは軽い眩暈を引き起こした。

「なによあ？これえ…。貴女達も暴走してどうするのよあ…」

愚痴に近い台詞だがそれも仕方あるまい。誰が彼女を責められるものか。今一番泣きたいのは彼女なのかもしれない。実際に滂沱の涙状態の一步手前だ。

それでも救いは現れる時には現れるものでもあることもまた事実だ。肩を落とすミリエールの背後に立つのは二つの小柄な女の子の姿だった。

「本当だねー。今はあるじの誤解を解くのが先決なのにー。シルビアもそう思わないー？」

「????んー?…………ん(コクン)。お兄ちゃん…大事…だよ」

「ウーリちゃんにシルビアちゃん！よかったわあ！二人は冷静なのねえー！」

「うん。こっちは任せてミリーはあるじをお願いー。マリーは私達

と一緒に鎮圧ねー」

ミリエール達は百万の援軍を得た！というテロップが彼女達の頭上に出たような気がした。事態はそこまで深刻だ。切欠がギャグだし現在進行形でギャグだが、それでも深刻だった。

冗談抜きで力を全力解放しそうな陽月姉妹が勢いで月面都市を破壊しそうだから。容赦なく手近な精魔奇兵達を昏倒させていくオリビエ。プラズマの霧で燃やしアフロに変えていくリビエラ。

状況はギャグだがこれ以上ないほど事態は混乱している。切欠が葵の誤解というのがまた泣けてくる。いい加減に泣き止め八百二十歳の大人の大人が恥ずかしくないのか、と小一時間問い詰めたくもなる。

「ええ、お願いねえ！できるだけ早く主様には立ち直ってもらおうからあー！」

「行ったな。して？どのように鎮める？どれもこれも一騎当万の兵揃いだが」

「なーに簡単なことよー。我に秘策アリー。その名も“即売会”ってねー」

「なに？即売、会…だと？」

ウーリは早速準備を開始した。どこからともなく受け付けようの長机や誘導用のカラーコーン、商品用の棚など…。肝心の商品はまだだ。

「何かを売る、いや、ウーリ…貴様、“ナニ”を売るつもりだ？」

「ナニって…えへへー、あるじ関連のモノに決まっているよー」

「アレらか。……………ウーリ、先取りは可能か？」

「これ次第かなー？」

「……………頼む」

「んふふー、毎度ありー」

商品が並べられていく。品物は明らかに隠し撮りとわかる葵の寝顔や屈託のない笑顔、仕事中の真剣な表情を映した写真の数々。

その中でも極め付けなのが風呂から上がった直後の大胆な姿の写真だろう。上半身が裸だ。水滴がイヤンなどところに流れるという一瞬を撮り収めた貴重な写真もあった。因みに全て非公式品だ。葵自身は何も知らない。

「はーい！今から緊急即売会を始めるよー！」

ウーリのこの一言から混乱は即座に収まった。全ての精魔奇兵やオリビエ、陽月姉妹といった困ったちゃん達は黙った。黙った、のだが…その目が尋常じゃないくらいイヤバイ。まるで獲物を狙う猛獣だ。葵のレア物写真を狙う狩人達。

こうして混乱は思わぬ方法で収まった。葵や他の困ったちゃんも正気に戻った時には全てが終わっていた。因みにその日の売り上げは過去最高額を記録したとだけ記しておこう。

Side out ????

第七十五話「宴会と約束と混乱（笑）」（後書き）

もう一度。ごめんなさい。

月まで来たのにまだ旅立たないなんて作者も予想外です。

なんと言つか葵の精神的弱さを今一度表したかったのもあるのですが…。

ちよっとギャグに走りたかったただけだったりします。アハハ…。

いやマジでごめんなさい。

次か、その次くらいには……………ムリだな（キリッ）。

ではでは！

## 第七十六話「白い壁と嫉妬と出航と」(前書き)

漸く更新できた…。いやはや遅れて申し訳ないです。

今年の夏は節電が奨励されているので夏バテが昨年以上に影響している気がしますねー。

冷たいアイスとかー、ひんやりとしたゼリーとかー、シュワシュワ炭酸飲料とかー…。

やめられないですね！それらがないと身体が持たないわー…。  
では続きをどうぞ！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。  
誤字報告も歓迎。

## 第七十六話「白い壁と嫉妬と出航と」

月面都市広場…。

S i d e 葵

月に来て驚いたことに気が付いたら翌日になっていた。マジで驚いた…。

昨日は確か？あー…そうそう、超大型艦船を造ろうって言って、それから…えー…なんだ？なにか受け止めがたいことがあった気がしたんだけど…ダメだ、ほとんど覚えてない。なにか最後に騒がしかったことだけは感じたんだけど。

…昨日本当に何があったし…。

とりあえず覚えていないものは仕方ないから当初からの予定であった超大型艦船建造計画を実行しようと思う……っと、その前に昨日何があったかはわからないけど皆の時間を無駄にしたことは謝らないといけない。

丁度今は家族全員が広場に集まっている。これだけお膳立てがされているのだからやるしかない。謝るなら早いほうがいい。

「ごほんつ、あー、皆昨日はゴメン。俺の早とちり（？）で一日を無駄にさせた」

皆の前で来たらずは謝罪だ。キッチリ九十度頭を下げた。俺な

んかのために昨日一日を無駄にしちゃったから申し訳ないしね。

陽月姉妹を始めとして精霊・悪魔・AIそれぞれの三人娘。アイリ、ファレノ、リチラを筆頭とした親衛隊や他精魔奇兵や自動人形の子達が勢揃いだ。今回は家族の全員が集まっている。

……こうして改めて見ると女の子しか居ないなあ……。今って何人居るんだろ。

「……いえいえ！無駄ではありませんでしたから！」

え？気にしてないの？よかったー、貴重な時間を無駄に……あれ？“無駄ではない”ってどういうこと？皆の雰囲気から察するに嬉しいことがあったとは間違いなさそうだけども。俺の知らない間に何かあったの？

「そうだよなー？無駄じゃなかったよなー？先を争うように………ねー？」

「……ッ！それは言わない約束じゃ！？」

「えー？ウーリは“誰が”、“どこで”、“何をした”なんて言うてないよー」

「……ハメられたっ！?!？」

……ウーリの一言で皆が動揺しております。マジで何があったし。

まあよくわからないけど女の子が“ハメられた”なんて言わないほうがいいと思う。少し品がないよ？一体何がどうしたのかは知らないけど皆可愛いんだからそんな言葉使うのはお兄さん的にはどうかと思うのよ。

……ここは話しを進めて場の空気を換えるとするか。

「あー…何があったかは知らないけど今日から早速作業に…」

「お話中に申し訳ありません、閣下…」

場の空気を換えようとした途端に躓きました！背後から掛けられたこの声はアイリだな。この俺が家族の声を聞き間違えることはない。ほぼ確実に。

「何？何があったの？」

「…はい、月面都市駐在の自動人形一同が閣下にお見せしたい物があると」

「え？あの子達が？なんだろ…というかアイリ達は…：…：おうふ？」

お、おお…振り返った先にはメイド姿のアイリ達が居た！でも…おかしい。さつきまでは黒くてナチっぽい親衛隊服だったのに。それなのに今では完璧にスタンダードなメイド服を纏っていらっしやる…だと！？

基本はスタンダードなメイド服だが良く見ると白いエプロンドレスのフリルがさり気ない可愛らしさを演出している。そしてヘッドドレスも下品にならない程度にフリルが飾り立てられている…。

…：…可愛いじゃないか！皆が魅力的で俺の情熱やその他諸々がハチ切れそ。

こほん…失礼。それにしても、これは俺の性癖情報が加速度的に家族へ伝わっているという確かな証拠ではなかるうか？アンよ、ニコニコしているけど君はそんなに俺の趣味を暴露して楽しいのか？

……目の保養にはなるけどお兄さんのライフはもうレッドラインだよ……。

「皆待機しております。そしてこれからはこれが私共の正式な制服となります。……閣下はお気に、召しませんか？」

「そんなことはない」 間髪入れずに即答した俺。

「……」 (ドキドキそわそわ) 「……」 何も答えない  
アイリ達親衛隊一同。

おうふ……。いきなり聞かれたからつい即答してしまった。自分の欲望というか一部の性癖を暴露したようで恥ずかしいな！うんっ！  
……じゃないよ！？早く誤解を解かないと！ 好きだけどね！

「いやっ、あの……誤解しないでね？やましい気持ちはない(と思う)よ？ただ本当に可愛いねって思ったただけでっ」

皆を変な目で見ているなんて誤解されたら俺……ハハハ、三百年くらい……いやプラスもう二百年くらい引き籠もるんじゃね？それも「工房」内の研究室で。もう、あれだ、万年単位で引き籠もる自信があるね！鬱だ……。

「か、閣下落ち着き下さい。……ちゃんとわかっておりますから。ええ」

「そっ、そう？それならよかった……」

よかった……マジでよかった！俺引き籠もらなくていいみたいだ！いやいやいや！それよりも家族に変な目で見られなくて安心した……。

「ええ。それで、その…閣下？本当にやましい気持ちにはなりませんか？」

「え？………はあ！？」

疑われた！？安心するのはまだ早かったとでも言うつもりか！？恨むぞ神（あ、女神様（幼女）じゃないよ？その他の神様だからね）よ！！八つ当たりだとわかっていても潰すぞコラーツ！？

考えてもみてくれ。俺以外家族全員が女の子なんだ。そんな中で「イヤらしいこと考えてますか？」みたいなことを聞かれるんだ。こんな時俺はどうしたらいいのよ？首吊れってか？ハハハ、笑えないよ！？

「その…“ご無理”をされておられるなら私は…ッ！？（わかってるから！睨まないで！）こほん…私共は、こ、ここ今夜にでも閣下のお部屋へ伺うのも吝かではないっ、と言いますか…！」

アイリはどうしたのだろうか？一瞬だけ彼女に対してファレノトリチラがすごいプレッシャーと目で睨んでいたように見えた気がしたんだけど。………んー、今はなんともないな。気のせい、か？

いや、それよりも“ご無理”か…、彼女の言うそれは、つまり……俺の性癖のこと？そして今夜云々とは……お仕置きに来るということか！それも複数人で！？いやー、それは勘弁してほしい！俺はちよいSであってMっぽい性癖は皆無なんだ！マジでムリ！

………なんとかしてもこのお誘いは回避しなければ…ならない！

「えっ？いや、その……あは、あははは…そ、その話しはまたいつ

か、ねっ？そうしようっ！今はっ…えっと…そうっ！あの子達が待っているからさっ！」

お願い！お仕置きはイヤなんです！完全に非があるなら認めるけど、これは性癖だろ？俺だって男なんだ。皆美人さんなんだぞ？これは仕方ないんだよ…。

「………そうですか。申し訳ありません。出過ぎた真似を致しました」「………申し訳ありません、葵様………」「………」「あー…うん、ゴメンね。皆の気持ちは受け取らせてもらうから今は移動しようか」

残念がつてる！言葉では謝罪しても態度が残念がつてるよ！…そんな俺にお仕置きがしたかったのか。なんか彼女達に悪いことしたか？そして…。

「皆はどうしたの…？」

「………いえ、別に………」

アイリ達の今夜云々の台詞を聞いた途端から陽月姉妹、精霊・悪魔・AI三人娘が少し不機嫌になっている気がする。今もアイリ達親衛隊員をジト目で睨んでいるし。まあ陰湿な雰囲気じゃないから難しく考えなくてもいいのかな。

「ほらほら！あの子達が待ってるんでしょ？皆行くよ！」

早く船を造りたいけど明確な意思もないはずの自動人形である子達が態々見せたい物があるなんて言ってきたんだ。生み出した者としてはそのくらいの願いは叶えないとね。

……それに……この場の微妙な空気に耐えられないのよ。

そのまま大多数に指示あるまで自由待機としてから自動人形の皆が待つ場所へアイリ達に案内してもらった。

道中アイリ達を牽制する（ジト目で見る）ようにハオやユエを始めとした側近達のやや過剰なスキンシップが俺の神経を磨り減らしたのは別の話したら別の話し。ただ一言……やーらかかった。ナニが、とは言わないが。

……。

……。

そんなわけで今俺は月面基地から月面都市へグレードアップした宇宙港にある造船エリアへ来た……のだけど俺の目の前には船などどこにもなくただの“白い壁”が左右に広がっているのみだ。

姉さん！事件です！！……いや姉など居ないけどね。ただそう叫ばずにはいられない現実が目の前にある！だって……それは、だって……！宇宙港がただの狭い倉庫に成り果てているのだから！

「……え？なにここ？宇宙港じゃないの？」

他の艦船はどこ行ったよ？看板には第二宇宙港ってあるけ……ん？“第二”ってことは第一や三以降もあるってこと？なんだか俺の知らない間にも月面は開発されているんだなー、と改めて思う。

「……はい、マスター葵。こちらは月面に駐在する私達全員から貴方様への贈り物として設計、建造いたしました。こちらがスペッククデ

「タとなります」

「はあ、贈り物？もしかして皆が散々「楽しみにしててくれ」と言っていたのはこれのことだったと？でも俺贈り物をされるようなことをした覚えがないような。精々が生まれてくれてありがとう、って言ったくらいか。……え？なんで？」

「……まあ今はそれよりスペック確認だ。何なのかを知らない」と。

「えーと…どれど、れっ!？」

「ちょ！50km級戦闘移民艦!？……マジで？え？本当に？目の前の壁は船？なんでこれが目の前にあるの？昨日の俺の意気込みは無駄なこと？何よりも俺の考えたものよりも五倍も大きい…だとorz」

空間モニターに表示された情報を読み取る。詳しい詳細は流し読みで省くが外観は超弩級のアングレカムかね。こっちのほうが巨大な分多少ずんぐりした印象だ。それに艦体後部に何かがドッキングできるようになっていような設計っぽいのか？

「いやー、しかし真っ白な船体がすごくグラマラスで美艦（美人）だ。ツ！！なにっ？なにっ？ ……なんだろう？なぜか背後から冷たい、気配、が…？」

チラッと気配のほうへ視線をさり気なく、そう！さり気なく覗くようにして見てみた。そしてそこに居たのは ……。

「 ……（ニコニコ）」 ハイライトの消えた目と太陽のように輝く笑顔のアン。

「 …… (ダラダラ) 」 なぜかガタガタ震えて滝のような汗を流す俺。

不自然なまでニコニコした笑顔を浮かべた“アン…?” 的なAI娘のアンが居ました…。

こほんっ！話しを続けよう。…待って！続けさせて！なぜか今のアンからはよくわからないプレッシャーを感じるの！

んんっ！あー…主砲に相転移砲つてあるけど砲口とか戦艦丸ごと飲み込めそうなのが六門あるとかどんだけー、ってツツコンだら負けかね？副砲はグラビティブラストが数十門、艦の各所に設置されている。

実弾・エネルギー系統の対空ガトリング砲や速射砲などの迎撃兵器が数えるのもバカらしいほど搭載されている。大小様々、用途も様々なミサイル発射口も死角をなくすように無数に船体に設置されている。ハリネズミ？

宇宙港も艦体後部に二つと中間に一つ前部下方に一つの全部で四箇所ある。一つの宇宙港に五个艦隊入港可能だから今後艦隊はそれぞれに入港することになるか。また艦載機の格納庫は別にありそれぞれ第一〜十六まである。

戦闘“移民”艦と言っただけあり船体内部に亜空間技術を用いた空間拡張を施すことで艦の外観以上の内容量(国が入りそうだ…)を確保している。大まかに都市部を中心に平原や森林エリアが形成されており、オマケで山や海もあるようだ。

…月の子達は剛毅だね！俺も似たような物を造ろうとしたけど先

に造っていたとは驚きだ。でもこの艦は名称が未定らしい。あ、メモ書きがある、なにになに…「PS・マスター葵がお決め下さい」…か。名前考えないと…。

「…マスター葵。こんなこともあるのかと思いましたがお気に召していただけでしょうか？」

「あ、ああ、素晴らしい性能だ。気に入った。ありがとう。それによくやってくれた。大変だったでしょ？」

「…ああ、マスター葵：勿体無いお言葉です。ですが大したことでございます。私共自動人形オートマタは貴方様にお喜びいただくことこそ喜び（悦び）であり存在意義でございますれば」

多少自己犠牲が過ぎるところがあるけど嬉しいこと言ってくれて。でも面と向かってハツキリ言われると恥ずかしいし照れてしまう。それでもお礼は言うべきだからもう一度ありがとうと言うのは忘れない。

……キチンと感謝も謝罪もできないヤツに碌なのはいい。俺はそう思う。

しかし、この子…いや月の自動人形達は本当にスペック高いなあ。既存のデータのみとは言え量産を改良くらいなら勝手にやってくれそうな気さえする。それに“時間加速特区”の生産力も凄まじい効果齎してくれたようだ。

改めて目の前に広がる“壁”と思っていた50km級戦闘移民艦の設計図を見た。これを見る限り今後の拡張性も考えて意図的なデッドスペースがいくつもあるのがわかる。…だが、これは俺に改造または改良しろ、と言っているのだろうか？

自由にしているとは言ったけどここまでハツチャケテくれるとは思いもしなかった。でもまあ、本当は三ヶ月で建造するつもりだったから丁度よかった。その分を向こうでの滞在期間に追加できる。

建造期間が省けたから直ぐにでも準備しないと。とりあえず出航前に必要な検査項目は粗方終わらせてあるようだから、あとは一ヶ月間の試験航行で問題点の洗い出しやその他諸々の改善、検査が必要か…。航行中に重大な問題発生なんて笑えないし。

……これなら思ったよりも早く木星へ旅立ってそうだ。

「お父さん…あとでオハナシ、しようか？」

「あ、ああ。わ、わかった…っ」

アンはなんで不機嫌そうなの？あ、これはもしかしてアレか？遅蒔きながら反抗期…か？相変わらず子育ては難しいものだ。

Side out 葵

一ヶ月後…。

一ヶ月間の試験航行を終えた彼らはついに木星へ向けて出航する。今は最終確認の真っ最中であり全ての精魔奇兵が割り振られた担当部署で忙しく出港準備に追われていた。

この一ヶ月間で洗い出された問題点は数多く、だがそれも小さな

問題ばかりという完成度の高さだった。そして準備もほぼ終わり今は出航のカウントダウンに入っていた。

先程も言ったように試験中は船体に大きな問題はなかったが小さな問題は多々あった。その問題があったのは艤装や表向きのことではなく内部に存在する都市部や内部構造についてだ。

別格と言ってもいいほど巨大な船体と亜空間技術を使用し空間拡張が施された広大な内部空間は単純な移動距離が莫大だった。あまりに単純なことだったのでその辺りの整備がされていなかった。

……月面所属の自動人形は優秀だが意外とうっかり属性持ちなのかもしれない……。

それらの解決策として緊急時を想定した艦内限定の転移門ゲートを各所に設置することと通常時に使用される電気自動車やバス、列車などの交通手段を確保した。都市部ゆえの単純だが効果的な対処だった。

最も皆個人で転移魔法を行使可能なので問題ないと言ったらそこまでなのだが、これに対して大多数から異議が挙がった。セキユリティ上の問題で艦内に置ける個人の転移は望ましくない、とのことだった。よって個人の転移魔法の使用は本当の意味で緊急時用だ。

残りの目立つ問題と言えば……アンが拗ねたことか。アンは自分に似ていて大きな戦闘移民艦に嫉妬してしまったのだ。何よりも葵が“彼女”に見惚れたのが許せなかった。彼の「なかなかの美艦（美人）だな」と言う言葉もそれに拍車を掛けた。

当然だが葵は謝った。それはもう必死に。だがアンは「どうせ私は小さいもん……。色々小さいもん」とますます拗ねてしまう始末

で取り付く島もない状況だった。この時に“の”の字がアンの手によって大量に生産された。

葵はそれを見かねてそれならば、とアンの本体を戦闘移民艦に移植することにした。幸いにも言うべきか戦闘移民艦には特筆する管理AIを搭載していなかったから渡りに船だったのもある。

これにアンは「し、仕方ないよね？だってお父さんのお願いだもんね」といかにも不満気に仕方ないと言った風に取り繕っていたが赤く染める頬が嬉しさとテレしていることを照明していた。

何だかんだと言いながらも新しい身体（船体）、それも今までのスレンダーな身体よりもグラマラスな身体になったことが嬉しいらしい。やはり女の子のアンはオトナな身体（船体）に憧れがあったようだ。

だからか、本体（船体）も彼女自身の理想に見合ったものになることが何よりも嬉しい出来事だった。アンも二十年近く経って漸く世間で言うところの所謂“難しいお年頃”という時期に入ったということだろうか。

ただし、彼女は忘れている。少女の姿をした移動端末は所詮仮初の身体だということ。ある程度身体情報の書き換えが可能とはいえ今の移動端末スレンダーなの身体が変わるわけではないと言うことに気が付いていない。

月面軌道上…。

S i d e 葵

「閣下、全ての準備が整いましてございます」

……漸く、か…。

流石にこれだけ大きな規模の艦船だから本格的な出航には相応の準備と時間が掛かる。今アンは移植直後で眠っていて居ないのだからこればかりは仕方ない。

いや、それでもこの一ヶ月の期間で試験航海を始めとして行い、その間にアングレカムからアンの本体を戦闘移民艦へ移送と移植、それに平行して様々な準備もしてきたのだからこれでも短時間で用意できたほうだ。

「…よし。それじゃアイリ。総員出航準備」

「ハッ。司令閣下より総員へ通達！出航準備！繰り返す、総員出航準備！」

「…………アイサー！…………」

……その手間も今日この時のためだ。

巨大なブリッジに居る数十人のクルーがアイリの命令に慌しく動き出した。戦闘移民艦は50km級という艦船では過去最大の大きさを誇ることからブリッジ自体もそれ相応に約400mという巨大な造りになっている。

ここ第一艦橋は艦を統括する重要な場所だ。この他に準指揮権を

要する第二艦橋と予備である第三艦橋がある。これらは通常航海や戦闘時における指揮所として機能している。艦の全てを統括していると言っても過言ではない重要ブロックだ。

ただし艦内にある都市部を中心とした生活居住ブロックは平常時と緊急時の効率化を図るために統括を区別化している。現在の都市を統括するのは司令部に存在する生活班がこれらを取り仕切っている。

……都市があるんだから役所関係も設立しないと、かな。

出航準備が始まってから俺の腰掛ける司令席の前には出航状況を詳しく表した空間モニターが激しく乱舞している。表示されては消えて、次のモニターが表示される。上位の認証が必要なものには承認印を添付しておくのも忘れない。

ただ：瞬間的に空間モニターが百近く表示された時は軽く引いた。とてもじゃないけど並列思考能力と高速思考能力にプラスしてIFSがないと把握できそうもない。紙媒体の書類よりは万倍マシだけどね！

「カートリッジ、ロード。カウント3…2…1…今、イグニッション：成功。大規模相転移機関、第一〜十四基の起動を確認。機関出力、上昇中。エネルギー供給が規定値へ突入しました。続いて第十五〜二十八基の起動を開始」

「システムチェック：問題なし。エネルギー、各部へ正常に供給中。初期過剰エネルギーはバイパスからプールへ。出力調整を開始。…エネルギー供給の平均化を確認。機関出力安定中」



ンスというものが欠如しているように思えてならない！と言つかそんなのどうでもいいし！

あ、でもこの艦って内部を亜空間技術で拡張しているから居住区に限れば北海道の三分の二くらいの面積を誇っているのよ。今思っただけどこれって意外と広くないか。これだけあれば小国としてもやっつていけそうだ。

「艦内の重力制御システムに問題なし。“都市部”の生命維持システムも正常に稼働中。動植物への問題は見られません。各種生産プラントも異常なし。順調に稼働中です」

宇宙空間では何が起きても不思議じゃない。生命維持だけはシツカリと管理しないとね！そうじゃないと危険だしさ。重力制御や生産プラントの管理は徹底して安全を考慮しておかないと小さなミスを、なんて笑えない結果に繋がるかもしれない。

はあ、これらの発進準備もアンが居ればほぼ一瞬で完了するんだろうな。この艦に移植するのも終わったばかりで規格の互換性を調整するために眠っていた。それも昨日終わったからあとは起こすだけだ。

AIに様々な管理を一任するのはそのほうが効率もいい、何よりも即応性が段違いだ。アンの居ない初回は大変だけど、目覚めたら次回からは即時発進とかできるようになる。

「AIの初期起動を確認。形式番号X 01“改”次世代電子精霊融合型統合制御AI「アン」が稼働準備に入ります。情報ネットワークへアクセスを開始。第一、二、三…全回線の接続を確認。システムチェック…全て異常なし。アン、起動します」

『たいへんよくできました』『おはよう』『だいすき』『はなまる』『おとうさん』『がんばろう』などの文字表記が空間モニターで表示されアンが目覚めたことがわかった。

起動して直ぐに俺の真横に移動端末を構成するナノマシンが集まり塊となり瞳の色は金色、銀髪をポニーテールにした少女の姿を形作る。二十年近く経った今、アンの姿は十五、六歳の外見年齢になっている。

……それでも不思議なことに成長してもなぜか女性の象徴的な部分は……くっ。

「んっ、んーっ！はふう…おはよう、お父さん。何か…言ったかな？」

「うん、おはよ。何も言ってないね。…それで新しい身体（船体）の調子はどう？システムチェックでは異常はなかったけど」

「ん、んー？…うん、“いい感じ”かな。さっすがお父さんだね！前よりも調子がいいくらいだよ！」  
「…そっか。それならよかった」

なるほど、調子がいいのか。えーとメモメモ、大きな問題点はなし。他の艦でも改良は可能、と。んー…ただし一定以上の高性能AIが必須、と。あとは…時間くらいか。

やはり、プログラムやCPUなどをヴァージョンアップさせたことに間違いはなかったか。超弩級艦になるから移植する時にできる限り処理速度の向上や新プログラムの追加も必須だったからやったけど…いやはや、問題なくてよかった、よかった。

……でもまあ、念のためにあとで個人的に再チェックしてみるか……。

「????お父さんどうしたの?難しいお顔してるよ?」

「ん?ああ、アンは可愛いねって考えていただけだから気にしなくていいよ」

「えっ!?そっ、そうなんだ。へ、へえ……。えへ、えへへ」

「????それじゃ早速で悪いけどアンはいつも通りに皆のサポートお願いね」

「えへへ、りよーかいであります!」

おお…アンがオペレートに加わっただけで処理速度が格段に上がった。しかも前よりもずっと速くなっている。それに処理する情報量が増大してもまだまだ余裕がありそうだ。これは本当に調子がいんだな。

……うわー、もう準備終わりそうだ。早っ!

……。

それからアンの移植後の航海準備は僅か数分で終わった。本来であればこの超弩級艦なら一時間以上掛かる残りの作業がアンの手に掛ければ瞬く間に、ってやつだ。

「 最終確認…オールグリーンかな。いつでも行けるよっ」

「よろしい。…閣下、出航準備完了致しました」

「それじゃ戦闘移民艦“デイモルフオセカ”発進。目的地は木星宙域」

「ハッ。デイモルフオセカ発進!目的地は木星宙域だ!航海班は進路の選定!閣下をご覧になっているのだ!こんなところでつまらな

いミスなどするなよ!!」

「『『『『アイアイマム!!』』』』」

こうして見てみるとアイリのほうが俺よりも艦長らしくない？副長のような役割だけど実質的には彼女が取り仕切っているしさ。いやまあ、精魔奇兵の全権は既に彼女にあるんだけどさ。

人間なら大きな戦力を行使する権限を丸々任せるなんて不安で仕方ない。でもまあ…。

「…アイリ」

「???ハッ」

「信頼している」

「ッ！　ハッ！……（この身この魂が朽ち果てるその時まで閣下と共に！）」

こうしてアイリと信頼の再確認をした…のだけど、これを横で見ていたアンが不満気に膨れていた。それだけでなくどこから察知したのか陽月姉妹、精霊・悪魔三人娘がブリッジに駆け込んできた…。

「お父さんが悪いと思うの」

アン…。知らせたのはお前か…。

Side out 葵



## 第七十六話「白い壁と嫉妬と出航と」(後書き)

そんなこんなで葵を念願の宇宙へ送り込むことができたぜい！  
やったね！作者(俺)！がんばれ葵(えっ！？)！！

あ、知っている人は知っていると思いますが、ここで一つ宣伝を…。  
こほんつ。えー、当作品とコラボしてくださった作者さんがいます。  
なかなかの長編で尚且つ楽しかったのでそちらもおススメです。  
よろしければ探してみてくださいね？

ではでは！

## 第七十七話「木星と衛星と探掘と」(前書き)

作者にしては展開が珍しく早いです。……どういうことだ？

ちよつと背景描写とか心理描写とか省いたダイジェスト構成を一部取り入れてみました。

ちよつとした実験ですね。

まあこういうのは多用すると中身が希薄になる恐れがありますし今後は使わないかも…。

書き易いんですけどね！とても書き易いんですけどね！

それとコラボでありましたちよいとした切欠的なものもこちらでも表現してみました。

これにより一層なにかしらの繋がりができるのではないのでしょうか？  
まー、ちよつとしか触れてないから程度の問題ですがねorz  
ごほんっ！では続きっ！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。  
誤字報告も歓迎。

## 第七十七話「木星と衛星と探掘と」

地球⇨木星間航路上…。

Side 葵

月を旅立つてから今日で一月近くが経つ。現在は木星まで二日の位置だ。これも転移航法や亜光速度航行で最短の航路を突き進むことができたからこそだ。ここに来るまで色々あったようななかったよ。うな。うん…。

航路上にあった火星の衛星フォボスとダイモスに探掘用無人機器を投下して月へ輸送するように皆で調整もした。ただ木星宙域に行くだけじゃアレだから行き掛けの駄賃というやつですよ。

火星⇨木星間にある準惑星ケレスや小惑星帯にも探掘用無人機器をいくつかバラ撒いてきた。これらから探掘されるものも月へ輸送されるようになっていく。資源はいくらでも蓄えておいて損はないからな。

これまで火星の衛星やケレス、小惑星帯にバラ撒いた探掘用無人機器は適度に採掘したら月へ帰還するようになっていくから下手な証拠も残さないはずだ。

あ、その小惑星地帯に調査に行った時に見つけた“謎の鉱石”が原因でちょっとした事故があつて俺とラミエルさんが巻き込まれて強制転移しちゃったし。まあだけど結果的には問題なかったから気

にしない。

……まさか意図しない並行世界へ転移することになるとは驚きだった。

向こうの“麻帆良”で出会った人達は皆パワーリヤーな人ばかりだった…。白いお姉さんとか、人外人力車とか、見た目若いのに強い男性忍者とか、幼女っぽい変質者とか、他にも色々…。

それから色々あつて帰還してみれば“謎の鉱石”は全て消失していて俺達の身に起きた現象も究明は困難であつて今を以つてしても原因不明だしね。本当にあの不思議な鉱石はなんだつたのかね？答えが出ないし…。

……でもまつ！綺麗なお姉さんとお知り合いに慣れたから結果才  
ーライだけどね！

「……っ（ん？なぜかイラツとした…？）…閣下？」

「…あれ？（なんでムムツとしたの…？）…葵ちゃん？」

「あら？（なにかしら？…気になりましたわ）…葵様？」

アイリ？ファレノにリチラ？

「……？（なんだろ？演算素子がバチツとしたような…）…お父さん？」

「……？（なにやら気に入らぬ気配が…）…我が君？」

アン？ハオにユエまで？

「あらあらまあまあ…（イラツとしましたわあ…）…主様？」

「…むむむ？（突然イライラと…なぜだ？）…主？」

「ムウー？（なんかイヤな気配がしたよーなー…）…あるじー？」

ミリーにマリー？それにウーリ？

「あん？（ムカツとした？…なんだ？）…葵？」

「あら？（突然ムカツとしやがりましたわ）…葵ちゃん？」

「…ん？ん？ん？（ヤな、感じ…？…ん？…なに？）…お兄ちゃん？」

オリビエ？リビエラ？…シルビアも？

「…なに考えた」「…」

「えっ？断定？！？疑問系じゃなくて断定なのかつ！？」

「…いいから！なに！考えた！」「…」

「いつもより押しが強い！？何も考えてないって！」

「…（ジトー…）」「…」

「…くっ（皆の視線がイタイ！なぜかわからないけどすごくイタイ！）」「…」

ああ…今の俺の癒しはCOS MOSとラミエルさんだけだよ。

なぜに皆から尋問紛いのことをされているのだろうか？身に覚えが何もないのだけど…。

「…ゆっくり…オハナシ、しよう」「…」

「……………」

ああいは にげだした。しかし まわりこまれた。まおうたちが  
らは にげられない…。

……。  
……。

木星まで残り二日の辺りからここまで色々あった。…本当に色々あった！それでも俺は辿り着いた！ここ木星宙域に！なんか様々なものを犠牲にした気がするけど…気にしたら負けだよな！

「木星って初めて見たけど大きいな…。アンも見てよ、衛星もゴロゴロある」

衛星が沢山イコール資源がガツポガツポですね！何があるのかは調査してみないとわからない。それでも最悪でも鉄鉱石くらいはあるだろうしね。

「そうだねえ。お父さん、目的地には来たけどこれからどうするの？」

「ああ、最初に衛星カリストへ行こう。そこで資源調査をしたい」  
ガリレオ衛星の一つ衛星カリストは当初からの目的地だった。一番厚いところでも200km前後の氷の層が惑星表面を覆っている。この衛星を採掘するのが目的だった。

もしかしたらメタトロン鉱石が出るかもしれない。そんな思い付きから態々ここ木星宙域まで来たんだ。…コラそこ酔狂な、とか言うんじゃない。湧き出る好奇心は押さえようがなかったんだよ。それができるだけの力もあつたしさ。

「カリスト、ね。りょーかいっ！ん？でもでも、この艦船で近付くのは難しいから一定距離まで行ったら護衛艦隊の一部で向かうのが

いいと思うんだけど、どうかな？」

言われてみればそうだった。今乗っている艦は全長50kmという超弩級艦船だ。そんな艦船で巨大な衛星が飛び交う場所に接近するなんて自殺行為もいいところじゃないか。

……それに邪魔だからって相転移砲で衛星を吹き飛ばすなんてしたくないし！

「…それがいいね。それじゃ通常と大型の輸送船を二隻ずつで行くとして必要な人員と採掘用無人機と調査機材を満載してできる限り調査するか」

「その積載リストだと採掘したものは別に派遣した輸送船で運び出すのかな？」

「そうそう。仮にこれを第一次調査隊とするなら第二次以降は採掘品を輸送することを優先しようと思う」

たぶんだけど巨大クレーターであるヴァルハラ盆地辺りを調査、採掘してみれば何かしら発見できるかもしれない。それこそ冗談半分でここまで来たけどメタトロン鉱石が掘り出されるかもという期待もある。

……ネギま！の世界つてのもあるからナニがあっても不思議はないしね！

「うーん？でもカリスト自体が大きいから最低でも調査隊は第一〜五次まで拡張して輸送艦隊は別で組織するのはどうかな？」

おうふ…ヴァルハラ盆地のことしか考えてなかった。そうだよな…。一箇所だけ採掘しても出てこなかったらアウトだ。五つの調査

採掘部隊を展開するべき、か…。

最初に多少荒くても衛星全域に広域サーチを掛けて各種鉱石反応をある程度割り出してから最も採掘効率のいい場所を精密サーチしてその中でアンの言う通り最低でも五箇所は採掘場を設ければ余裕ができて安心できる…かもしれない。

「それじゃアンの提案通りにしよう。採掘場所は最良と思われる場所を最低でも五つ確保すること。それ以外は事前に用意した計画を修正して遂行する。どうよ？」

「うんっ、それでいいと思う。調査部隊の準備は航海中にほとんど終わってるから遅くても明日には出発できるかな」

航海中に調査のためにできる準備はほぼ万全にしてきたつもりだから出航は人員と機材を選定すれば完了だ。まあ乗り込む人員自体が多いからそれで時間が掛かるのは仕方ないことなのかな。

「よしよし。だが本番はこれからだ。…アイリ」

「ハッ、事前に手配は全て済ませてございます」

「流石だ、アイリ。君は素晴らしい」

「ふふふ、感謝の極み、です」

その準備もアイリが先回りして手を打っている。子守から一国の宰相までなんでもできる彼女の手腕は精魔奇兵の中で随一だ。まあそうじゃないと癖の強い精魔奇兵を纏め上げるなんてできないよね…。

衛星カリスト…。

調査一日目…。

「アイリスより調査艦隊全艦に告ぐ。これより広域サーチを行なう。  
無人偵察機を全機投入せよ」

「トング  
『『『『『アイサー！』『』『』』』』』」

「アン、サーチで場所を絞り込めるのはいつかな？」

「何の障害もなければ48時間あれば終わるよ」

「そうか。アイリ、四交代制で調査を24時間体制で行なうように  
通達して」

「ハッ、了解いたしました」

調査三日目…。

「広域サーチ終了。続いて情報分析を開始。アンと科学班にこれは  
任せるがいいか？」

「まっかせてっ！私達なら直ぐに終わるよっ！」

「アン、因みにどのくらいで終わりそう？あ、大凡でいいから」

「んー？情報を比較して予測位置を出すだけだから…一日もあれば  
十分かな」

「それじゃ明日から本格的な調査開始か」

調査四日目…。

「情・報・分・析・完・了っ！あとは採掘候補を詳しく調べればい  
いかな」

「ご苦労、アン。通信班！調査艦隊へ通達！より上位の候補地から精密サーチを開始。条件を絞り込め！」

「アイサー。…総司令部より調査艦隊へ通達。ファイルデータPD5Wをダウンロード。参照したのちに上位の候補地から精密サーチを開始。規定値以上の条件を絞り込め。繰り返す。ファイルデータPD5……」

「あとは調査結果次第で上位候補地に採掘場を建設か。最低でも五箇所は欲しいね」

「閣下、最初の採掘は氷ばかりですので本格的な採掘は暫くあとになるかと思われます」

「そーですねー……」

調査十四日目。…。

「閣下、最良の候補地が七箇所発見されました」

「七箇所も？因みに一番有力なのはどこ？」

「ハッ、確か地球名称でヴァルハラ盆地と……」

「そこだ！そこばかりは外せない！掘るべきだ！」

「！？は？あの、閣下？どうされたのですか？」

「いや、ゴメン、なんでもない。とりあえず七箇所全てを採掘させて」

「全てとなりますと当初の作業予定が遅れることになりましたが、よろしいのですか？」

「遅れると言っても全体の計画から見れば僅かだ。問題があれば増員も検討しよう」

「ハッ、ではそのように取り計らいます」

調査から三十日。採掘開始から七日目。…。

「…氷ばかりだね」

「ハッ、ですが想定内です。問題はないかと」

「…今どのくらい掘ったって？」

「今は全体平均で150km通過致しました。一番は約174kmです」

「採掘した氷はどうするか。…宇宙線なんかの汚染状況はどう？」

「汚染はありますが除去は可能。毒物も同様です」

「そっか。…じゃあ艦内の水の供給に使いそうなら補充も検討しよう」

「ハッ、了解いたしました」

採掘十日目…。

「閣下、第四採掘場から報告です。約182km地点で氷層部分の突破を確認。現場調査で大量の岩石と微量な鉱物を発見、とのことです」

「いいねいいね。僅かでもあると言うことは近くに鉱脈があるということだ。現場の子達は一休みしたあとに作業続行だ。それと…よくやった、ありがとと伝えて」

「ハッ、閣下のお言葉があれば彼女達も喜びましょう。そしてなお奮起致しましょう」

採掘三十日目…。

「それでまあ全ての採掘場が資源採掘を始めたわけなんだけど…在り来たりな鉱石しか出てこない、だと…？なぜだ…？」

「ですが閣下大して落ち込むことはありません。今まで以上に鉄鉱石やレアメタルなどの資源も入手致しました。そのため組織ファミリーの資源保有量は過去最大となっております。決して無駄ではありません」

「いや、でもなあ…。折角ここまで来たんだから何か未知の鉱石なんかを見つけないじゃないか」

「未知の鉱石…ですか。それは閣下とラミエルが事故に遭う直前に見つけたと言う謎の鉱石のようなものでしょうか？」  
「あ…そこまで不可思議なモノはもう見つからないと思うけどね。でも…そんな感じかな。未知の鉱物を発見！ってなんかロマンを…」  
「ふふふ、左様ですか」

採掘四十五日目…。

「お父さんお父さんっ」  
「おう？なにになにつ？アンどうしたのっ？」  
「えっとえっとっ！あのねっ！」  
「アン、落ち着かないか。閣下が困惑されている」  
「あ、ゴメンね、アイリお姉ちゃん…」  
「自分に謝罪してどうするか。相手が違う」  
「あ、そうだね。えっとゴメンね、お父さん」  
「あー、うん大丈夫、なんでもないよ。それで何があったのさ？」  
「え？……ッ！そうだよっ！あのね、変な鉱石を見つけたの！」  
「変な鉱石？それはどこから見つけたのさ？」  
「えっと、構造としてはシリコンに似た高分子金属の複合体みたい。発見場所は第一採掘場のあるヴァルハラ盆地だけ…」  
「アン！アイリ！それは最優先で採掘決定だ！掘れるだけ掘って！」  
「え？え？え？わ、わかつた、けど…お父さん嬉しそう、だね？」  
「畏まりました。以後はその鉱石を最優先で採掘するように予定を調整いたします」

戦闘移民艦ディモルフオセカ…。

花言葉に“元氣”“富”“豊富”などの意味を持つ戦闘移民艦“デイルフォセカ”。その艦内にある俺の研究室で先日発見した“とある鉱石”を研究している。

……まあブツチャけるとメタトロン鉱石らしきモノを確認しているだけなんだけどね。

やろうと思えば錬金で創れないことはないんだけど、やっぱり生産効率が悪過ぎる。需要と供給が追いつかない。対応策として工業プラントエリアでは原子単位で再構成するプラントが稼動しているけど再構成って時間も掛かって効率が悪いからなあ。

いやはや、だからと言うわけじゃないけどこうして採掘場所が発見できたことは僥倖だった。今のうちに採掘できるだけやってしまおう。メタトロン鉱石が枯渇するまで掘る勢いで掘り続けてやる！  
ってそこっ！？

「ラミエルさん何しているのさっ！？」

『んむ？んぐんぐっ…んぐっ。何とはいきなりだな。ただこのメタトロン鉱石、だったか？それを我が内に摂りこんでいるだけだ。これがまた美味であってなかなか…』

「美味！？ラミエルさん味覚あったの！？いや！そうじゃない！そうじゃないだろ俺！」

味覚があつたことは俺も知らなかったから驚いた！しかもメタトロン鉱石って美味しいの！？メタトロンってどんな味だろ…。名前からしてメロンっぽい味か？

いや、今それはいいんだ。問題はラミエルさんが生成前のメタトロン鉱石をガリボリと摂取していることだ。しかも余分な岩石部分は骨を吐き出すようにペツとしてしているし…。

もしかして文字通り“食べて摂取している”のか？ということとは彼女の中に格納されている俺の愛機であるプロテアにもその影響、というか改造される可能性が？ラミエルさんには前科があるからなあ。否定しきれない…！

今でさえブルーフ　ウヤパワー　ール、エステバス、アップル　ードなどの技術が詰め込まれた俺の愛機に今度はメタトロン技術が加わるのか…。

何気にこの子の中ってプチ格納庫になっているから色々詰め込まれているからな…。俺でも中に何かがあるのか把握してないんだよ。ラミエルさんも勝手に何かしら取り込んでるしさ。

『???なにやら取り乱しておられるが我が主は何が言いたいのだ？…ああ、なるほど、そういうことか。ふふふ、我が主も仕方のない。　食べるか？』

「食べないよ！？流石の俺でも身体ベースは人間なんだから鉱石は食べられないよ…！」

言うに事欠いてそれっ！？美味しそうに食べていることが羨ましいわけじゃないよ！？俺も無機物は食えないよ！！ラミエルさんは俺のことなんだと思っっているのさ！？そんなに食いしん坊じゃないよ…！

それにしてもプチ倉庫になっているラミエルさんの中はどのくら

いの内容量を誇っているのだろうか？一度何を取り込んだのか目録を作らせてみるか…。

あ、倉庫と言えば「工房」にある「格納庫」は自己進化と言うか自己増殖と言うか空間拡張を続けて行く仕様なわけだが…。ついに命名を「無限倉庫」に改名した！もう倉庫内で向こう側の壁が見えないのよ！品物の目録と地図とナビがないと迷うことは確かだ…。

『ふむ？我が主もなかなか我俣であるな。普段は好き嫌いをするなと仰っておられるというのに。ふう…何が不満なのだ？』

「だから食えないよ！？俺は人間ベースだから鉱石は食べられないの！ラミエルさんはナノマシンと有機液体金属で構成されてる電子情報生命体でしょ！？それと！タメ息吐きたいのは俺のほうだよ！？」

確かに！ラミエルさんの言う通りだ！まあそれがアレルギーとか身体に悪影響があるならその限りじゃないけど。でも！それがただの好き嫌いならば許しません！食べ物が無駄にすることは神が許しても俺が許しはしない！！

しかし！何度も言うが俺の身体は人間がベースなの！女神（幼女）の力で強力な身体と不老という特徴があるけど！あ・く・ま・で・もっ！人間がベースなの！！故に！鉱石なんかの無機物は食べない！

『なに、些細な違いではないか。んぐんぐつ…あぐつ。うむ…美味っ！』

「ちよつとー！？勝手に研究素材を食べないでくれるかな！？研究素材を紛失したらまたアイリに…」

食うなよ！？俺が内心で葛藤しているのに食うなよ！！しかも研

究用のメタトロン鉱石を全部食いやがった！？この子なにしてくれやがったのかな！？軽く2t近くあったのにさ！！それ全部食いやがった！！

あ、ああ…どうしてくれるんだよ。さっき運び込んだばかりなんだ。それがものの数分でなくなったなんて言えないじゃないか…。

ただでさえアイリに保管している資源を使用する場合は申請書を提出するように言われているのにさ。しかもその使用用途も記載するように言われているんだ。

この場合はなんて言えばいいの？素直に「いやー、ラミエルさんが全部食べちゃった。てへっ」とか言えと？無理無理！と言うかなんだよ！？「てへっ」「って！！キモイよ！！自分で言ってるよ！！」

……ああ、本当にどうしたら…。

「自分が、何か？」

っ！！ビクツとした！ビクツとしたよ！！噂をすれば何とやらと言うがこのタイミングで来るとは思わなかった！

「ア、アアイリっ？なんでここにっ？」

「…自分はメタトロン鉱石の総採掘量の報告に来たのですが。一体どうされたので？」

「そ、そうなんだ。いや、実は研究用に運んでくれたメタトロン鉱石なんだけど…」

『我が主の手違いで消失したのだよ。アイリも察してやれ我が主も言い出し難いこともあるのだから』

「ふむ…なるほど…いや、しかし…むむむ？」

ラミエルさん！？貴女っ、なに人のせいになっているのかな！？消失も何もラミエルさんが食ったよね！？2tも量を！最後の1欠けらまで！！食い切ったじゃないか！？それがなぜに俺のせいになるのかな！？

「…コソコソっ！（ラミエルさん！何言ってくれちゃってるのさ！？）」

『…コソコソ（我が身は全て我が主のものだ。あながち我が主の間違いと言っても違いではあるまい。この程度のことごとつと言つことはあるまい。我が主の甲斐性の見せ所ですぞ）』

「…コソコソっ！（なにそれ！？ヒドイ！ラミエルさんヒドイ！甲斐性とかどうでもいいし！！）」

『…………がんばれ！我が主！！』

この子言つに事欠いて俺に責任の一部どころか全部擦り付ける気満々だ！！がんばれ、じゃねえし！！も、もうヤメテよねえ…。自分のことは自分で責任持とうよ…。

「????閣下？なにをコソコソとしておられるのですか？」

「ッ！？い、いや、なんでもない、よ？その、ゴメンね？」

「ああいえ、申請や報告書が出ていれば自分が言つことはありませんので」

「そ、そうっ？あはははっ…」

申請はしたけど使用した時の報告書はどうしよう。…言えない。とてもじゃないけど言えない。だって「ラミエルさんがペロツと食べた」なんて馬鹿げた理由言えないだろ。

正直アイリが具体的に理由を聞いてこなくてホツとした。こんなアホな理由は早く忘れたいものだ。いや、忘れた。もうー覚えーてーなーいーのー。……………ふっ、これで完璧だ。

「それで運び込んだばかりのメタトロン鉱石が消失したと聞きましたが一体何が？」

「あはははっ。うん、ラミエルさんが食べた。困っちゃうよねー？」

『ッ (我が主…！)』

「ふふふ、そうなのです。ラミエルが、ね…」

あ、あれ？今ラミエルさんから何やら悲痛な意思を感じたような？

「……………」  
「……………」  
『……………』

え？なに？この沈黙は？何かあった……………。

「????……………あ……………」

しまったーっ！？油断したらボロツとゲロツちゃった！！ラミエルさん、ゴメン！！悪気はなかったんだ！

そして、今思えば……………ここからラミエルさんの地獄は始まったんだ……………。気が付いたらアイリの姿が消えていて次の瞬間にはドガンツという轟音がしていた。

何が起きたのか、それを確認しようと思っただけの方向を見るとメイド服を翻して足を振り抜いた姿のアイリと壁に叩き付けられめり込んだラミエルさんが居た。アイリが蹴り上げた時にスカートの中が

見えそうで見えないこの不思議！つて違っ！？

……なにっ？何があったの！？と言うかアイリが怖っ！？

『ぐっ！？ア、アイリ…何を…』

「ラミエル…詳しく報告なさい。…貴様に拒否権などという上等なものはないぞ」

ナノマシンと有機液体金属を主成分とするラミエルさんは痛覚がないはずなのに痛そうに見えるし、錯覚だらうけど壁にめり込んでいる姿が震えているように見える。

『あ、う…それは、その…な？わかるもの、だろっ？…な？』

「報告は明確にしる！！わかったか！？」

『サ、サーイエツサー！つまみ食いしました！サー！！』

「ラミエル…貴様っ…虚偽を述べるばかりか閣下の御名を穢すようなことッ！！」

『ぐっ…があああああッ！割れるわれるワレルーツ！！』

大きさ10cmのラミエルさんをアイリが壁から掴みだしてグワシッ！とアイアンクローした。グググっと握られたラミエルさんの身体からギシギシという嫌な音がしている…。

あ、欠片が零れてる？流石にこれは止めるべきだろうか？ラミエルさんを壊されたりしたら俺が困るし…。でもなあ、彼女を掴むアイリの目がキュピーンと光っているのがマジで怖いしなあ…。

とりあえず…研究用のメタトロン鉱石を追加申請するとするか。

このままじゃ何の成果も出せやしないし。次は生成済みのメタトロンを4tほど申請しよう。そうすると…。

「はあ、まずは……書類だな」

俺の生涯の敵は、この紙っぱらなのかもしれない…。

S i d e  
o u t

第七十七話「木星と衛星と探掘と」（後書き）

てれてれってれ〜

あおいは メタトロンを てにいった。

なんてね！今回はラミエルさんとアイリの回と言っても過言ではない！

葵とアンは準ですかね。

木星の衛星カリストにてメタトロン鉱石を手に入れました。

葵の愛機であるプロテアがOF化する日も近い……………かも？

あー、そうそう葵を別世界に送る分岐みたいのは次話かその次です。作者が”IS”を題材に葵を別世界へ投下したように色々と書きたいですねー。

時間と気力と妄想力があればですがね！！

ではでは！

第七十八話「稼働実験とじゃれ合いと次は…」(前書き)

おはようこんにちはこんばんは。鉄 桜でございます。

いつの間にかPV3、346、932アクセス！ユニーク312、  
216人！でした!？

ありがたいですね！。今後もがんばりたいと思いますよ！。

いやー、暑いと思っていたら今では夕方になると涼しくなりました。

S県T市在住の作者には嬉しい限りです。

暑いとアイスがうまうま、寒いと熱いお茶がホクホクなのですよ！。

でもでも作者は暑いのも寒いのも苦手なのですね！。

弱い子ですみません。ええ、本当に…。

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。

誤字報告も歓迎。

## 第七十八話「稼働実験とじゃれ合いと次は…」

戦闘移民艦ディモルフオセカ…。

Side 葵

どうも、九重・葵です。月を出発してから半年近くが経ちました。地球時間で大体九月ごろかね。季節感が乏しいから実感が無い。木乃香ちゃんとの約束通りに帰還することを考えるとあと三ヶ月と数週間しか居られない。

それでも現在は相も変わらず木星宙域にて資源採掘の日々を過ごしている日々です。とりあえずカリストを採掘拠点にして残るガリレオ衛星“イオ”、“ガニメデ”、“エウロパ”の三つを今後の採掘場所として計画している。

カリストの採掘資源はこの艦にも運び込まれている。そして艦内にある超超長距離転移門を中継して月に運び込んでいる。火星の衛星二つと火星、木星間にあるケレスと小惑星帯などは大型輸送船で採掘資源を月へとピストン輸送中だ。

いやー、無人機械技術が発達すると作業が楽にはなるし物量戦が可能になるからいいね。人類社会全体で言えば雇用関係とかでむづかしいオハナシになるんだろうけどさ。俺達みたいに特殊な環境化ではとても重宝する。

とまあある意味変わらない日々を過ごしていたわけだけど俺も無

為に時間を過ごしていたわけじゃない。簡単に言えば天然のメタロニ鉱石を使用した技術確認というものだ。

知識としてはあるメタロニ技術を実際に実験して確実に使いこなせるように繰り返し実践した。何度も何度も同じようなことの繰り返しだったが好きなことだから飽きもなかった。

……それに、ただ“使える”のと“使いこなせる”のでは雲泥の差があるからね。

簡単に言えば“力だけ強くてそれに振り回される愚者”と“強い力の揮い方を心得ている賢者”という違いだ。……ん？微妙に違うよ。うな気がしないでもないが………まあいいか。

それで、だ。メタロニはエネルギーとスピンを加えることで周囲の空間を引き込むように圧縮する性質がある。

これを基本格子として応用したもので宇宙船や無人の貨物などを打ち出す射出装置であるウーレンベック・カタパルトや、厳密には違うが影魔法のような格納装置のベクタートラップがあるのよ。

また、エネルギー兵器や実体弾をある程度逸らす障壁などの防御兵器もある。機体とパイロットに掛かるGを緩和する耐G緩衝機構。そして一際特殊なのはステルスシステムの一種などに応用できることだ。

そして純度の高いメタロニは装甲や動力源、果ては量子コンピュータなどの素材に応用でき、それらの産物としてオービタルフレーム（以下OF）が実用化されたと俺の頭に刷り込まれた知識で理解している。

現実世界はともかく今俺が居るここは所謂“空想科学”が罷り通る世界だ。その証拠に俺は本来なら存在しないはずのメタトロンなどというトンデモ鉱物を発見してしまった。魔法もある世界で何を言っているんだ、と言われてしまえばそこまでだけどね。

……だけど“ない”と思っていたものがある”。

これ以上に自分の認識を改めるものはないと思うんだ。…まっ！少しマジメに語ってみただけど今まで散々好き勝手に色々作ってきたけどね！その極め付け…まあ直接俺が造ったわけじゃないけど…が50km級戦闘移民艦だよな。

「まあそれはともかくとして次はアレを造ろうかね」

『む？我が主は次に何を造るのだ？』

「うん？んふふっ、メタトロンを使った半永久機関を、ね」

『半永久、機関だと？』

艦内にある研究室でラミエルさんに告げたこと、それは次に試作するアンチプロトンリアクター（以下APR）だ。メタトロン技術を語るには最もポピュラーな物だと俺は思う代物だ。

「その名もアンチプロトンリアクターだ」

『ふむ…リアクターと言うからには原子炉並みの出力を期待して良いのか？』

「勿論だ。見事に成功すれば最高クラスの性能を持つと俺は考えるね」

『なんと…我が主がそこまで確信を持って言える代物か』

APR、これは反陽子生成炉。メタトロン製のリアクターによっ

て反陽子を生成、これを陽子と衝突させることで対消滅を起こし、発生したエネルギーを動力や電気エネルギーに変換する半永久機関。

ある意味エネルギー問題を課題とする人類には夢のような機関だ。それに同じく半永久機関とも言える相転移機関と並び立つエネルギー供給源となるもの。無限の可能性を示してくれるものだ。

「今まで採掘してきたメタトロンと工業プラントで原子変換して生成しなおしたメタトロンも当面必要な量は確保できたからね。これが成功したら機動兵器の主機関を交換することも検討することになるだろうね」

『うむ、成功すれば我が主の言う通りになる可能性が高いな』

APRは先に挙げたOFの動力源とすることで超高出力と小型化を実現できた。そしてそれはなにもOFだけに搭載できないと言うわけでもない。例えばウチの量産機である“イキシア？”に搭載してもいいはずだ。

大型常温超伝導バッテリーで駆動していたイキシア？がAPRを搭載することで稼働限界を大幅に改善できるどころか半永久的に駆動できることになる。ただし、消耗品などの整備は必要だろうけどね。

「まあ何はともあれ、だ。まずは実物を作るところから始めるかね」  
『うむ！完成を楽しみにしておるぞ！』

ハハハ…完成したらラミエルさんの中でAPRを単体で作り上げて俺の…俺…の！愛・機…を！勝・手…に！改造や改良を施すんだろうね！ただでさえOF二丁三機分のメタトロンを食べているんだからそれくらい可能だろうよ。

.....。  
.....。  
そんなわけで時間の有効活用で「工房」に籠って実時間で一週間掛けて試作APRの一号基が完成したわけだ。大きさは試作と言うことで計測機器や大げさなくらい安全装置も付いているからゴチャツとしていて本来の物よりも大きくなってしまった。

この計測機器に必要なデータを取り終わってから改善点を洗い出して改良からようやく先行量産機の製造に踏み切ることができるよう。ウチはこれでもかなり簡略化しているからよそ様よりはだいぶマシだけど。

「実時間で一週間……！開発期間五ヶ月と少し！試作品ができたどーっ！」

『我が主……いきなり叫んで一体どうしたのだ？』

「いや、ゴメン。ちよつと連日の徹夜でテンションがマツハで天元突破していたようだ……」

『そうか……あまり無理するでないぞ？我が主の身体は一人のものではないのだからな』

「うん、気をつけ、って俺は俺のものだからね？他の誰のものでもないからね？」

なんだか盛大な誤解を招きかねないことをラミエルさんに言われた。まったく彼女も冗談が過ぎて困ったものだ。それにしても、やはり月単位の徹夜はこの身を以ってしても少しだけ堪えたようだ。眠気はないが疲れた……。

今俺達はデイルフォセ力艦内にある実験施設に居る。早速だが試作APR一号基の稼働実験をするために来たわけよ。今も整備班の子達が忙しなく走り回っている。…なんか楽しそうだなー…。

『それでこの“APR”は想定通りに稼働するのだろうか？』

何もなかったことにされた！？あれ？俺の身は俺のものだよな？まさか知らない間に誰かが俺に“ナニか”した、のか…？いやいやいやいや！ないないない！ふう…ふう…。ない、よな…？

「…ま、まあいい。こほんっ、十分に稼働するはずだ。安全装置や計測機器も付いているから安全だしね。たぶんだけどラミエルさんが想定している以上に出力は安定するし本体も頑丈なはずだ」

『なるほど。…うむ！我が主に何かあつては一大事であるからな。最低限それくらいの安全対策は必須だろう』

いやいや、元々俺は怖がりだから安全対策は万全ですよ？余程のドジでも踏まない限り失敗なんてないと思う。そんなことするわけがないじゃないか。ハハハッ！

…あれ？なんかフラグ的なものを立てた気がする。それも複数…。

「これが上手く稼働したら科学班と研究班で改良してもらおうかね」  
『む？その物言いだともう次に作るものを決めているように聞こえるな』

「くくくっ、まあね。実は世界間を越える手段を作ろうと思っっているのよ」

世界と世界の“壁”を越え得る手段の一つ。リリなの的に言えば

次元世界間を渡るために必須である“次元エンジン”みたいなものだ。いつか作ろうと思っただけで今の今まで後回しにしてきた。

『世界間を越える？つまりタイムマシンでも作るのか？』

「いや時代と言つ世界を越えるんじゃないやなくて文字通り“世界と世界の間にある壁を越える”手段を作るんだよ」

それもある意味では世界（時間）を越えるものだと思うけど、それは違う。俺は世界“を”越えるんじゃないやなくて世界“間を”越えたんだ。その世界の時間軸上に存在する世界じゃなくて“並行”に次元を超えて移動したいのよ。

……本音を言つと他の世界も見てみたいのが半分ある。

『ふむ？…なるほど、“今居るこの世界”から“どこか別の世界”へ、ということか』

「その通り！将来何があるかわからないからさ。今の内に避難手段を一つでも多くあれば、と思っただけね」

“できる”か“できない”かじゃない。“やる”と決意して実行する。小心者の俺は逃走手段と逃避先の見当と確保に余念はないのだよ。まあ今回ののはできればいいな、というくらいだけだね。

一応だが俺をここへ落としたり女神様（幼女）だつて“世界へ送る”なんてことができるんだから似たような不思議ばわあを手に入れた俺なら“世界間を越える”くらいはやってやれないこともない！  
……はずだ！

それに多分大丈夫だと思うけど、やってダメだった場合はそれでもいいと思う。長い人生だし、いい暇潰しになつただけでも考えるさ。

『要するに万が一の時のための保険というわけか。…しかし、解せぬな。我が主は我が完膚なきまでに敗北するとも言うのか？ならば心外であるぞ』

「いやまあ簡単に負けるとは思わない。だけど、それは今だけかもしれない。未来では俺達を打倒する何かがあるかもしれない。そんな時のための保険だよ」

『む、むう……我が主の言うことは我も理解できる。だが、しかし、だな』

やー、ラミエルさんは理解しても納得はできない、と言ったところか。ウチの子達は何だかんだと言いながらも自分の力に絶対の自信を持っているから認め難いこともあるか。

意識改善されたのは精魔奇兵の子達かね。あと陽月姉妹は自分にも他人にも厳しい己を律しているから問題は…ないか。ミリー達はそもそも戦いに積極的じゃないから別問題。オリビエ達は戦闘本能を抱えた悪魔だから問題以前の話だ。

……力に溺れることはない。それでも油断も慢心も怖いものだ。

「ラミエル…俺達は“不敗”かもしれないけど“無敵”ではないんだ。何かあるかなんてわからないんだよ」

『……………は？』

え？なにその間は？俺はおかしいこと言ってないはずだ。この世界に来てから勝利や引き分けはあったけど負けはなかった。これは不敗でしょ？引き分けがある時点で無敵じゃないよ。……だよな？

????作業中のはずなのに静かだなと思ったら皆が手を止めて俺

を凝視しているとはどういうことだ？ラミエルさんと似たような思いとかではないだろうな？

「……………なに？そのお前が負ける？ないない（笑）、みたいな雰囲気は…。いや、皆も止まってないで作業を続けて続けて」

整備班の皆はまだこちらを気にしていながらも動いてくれた。ラミエルさんはまだフリーズしている。今日の彼女はなかなか失礼な気がする。

それとこれは被害妄想かもしれないけどさっきの皆の視線と態度が「お前が死ぬ？ハ！ワロス（笑）」みたいな失礼な感情を察知した気がする。何度も言うが俺は不老であって不死ではないというのに、もう…。

「いや、我が主が負ける…ことなどあるのか？小規模ながら世界すら飲み込むほどの魔力量がある我が主が？卓越したありとあらゆる技術を身につけている我が主が？不変の概念であつてもそれを“面倒だ”の一言で破壊した我が主が？最早組織内で常識外れのバグであると思われている我が主が？」

「……………お前そんな目で俺を見ていたのか。…てか！誰だ！俺をバグと呼んだのは！？バグはジャックのほうだろうが！？」

……………失礼な！俺は世界のバグなどではない！断じてないったらない！

確かに魔力と身体能力は十二分に高いだろうけどその他は技術チート（把握している限りでは！）だけだ！あ…ゴメン、操縦関係も補正があつたような…。それにゼロ魔の錬金も意識していなかったけど使っているような…。

……意外と俺は何でもできるような気がする。あの時のドラゴンめエ…。

「我が主よ、不敬ながら物申すが許すが良い。 笑えぬ冗談だ。」

僭越ながら我が主に冗談の才能はありませぬぞ？」

「不敬とかはいいけど。そこまで言うか？普通…。俺のハートは繊細なガラスなんだぞ…」

「いや、しかしな…。我が主が倒れる姿は想像し難いのだが…」

あれ？無視？後半の俺の訴えは無視ですか？ちくせう…マジでガラスハートなんだぞう。寂しいと泣くぞ？ううう…！

あ？誰だ？今「泣いてる葵君可愛い」と言ったのは！イジメか？これがイジメなのか？お置きしちゃうぞ！？有象無象に無視されるのはどうでもいいけど家族に無視されると精神ダメージが甚大なんだよ！？

……ふう…ふう…失礼、少し取り乱した。

しかし、俺が倒れるか…。小心者の俺が戦闘の矢面に立つことこそが仕事か家族のため以外にありえない。それなのに俺が倒れる？…あ？あー、なるほど。ラミエルさんは俺個人が倒れることが敗北と考えているのか…。

確かにそれも敗北の一つではあるけど俺個人としては決定的な敗北じゃないな。あ、勿論怖いのは苦手だから助けてはほしいけどね。俺だって好き好んで痛い思いしたいわけじゃないし。

……でもなあ…そもそも敗北の根本定義が違うよ。

「あー…根本的にラミエルさんの…この場合は皆も？…考える“敗北”と俺の考える“敗北”は意味が違う」

「なに？意味が違うとはどういうことか？」

「確認だけドラミエルさんの考えるのは俺が死ぬことを言っているんだよね？」

「う、うむ、相違ない。むう、しかし例え話でも我が主がお倒れになると言うのは抵抗があるのだが…」

例え話でも俺の死に抵抗があるわけか。冗談の時はズイズイ攻めてくるのに少しでもマジメな話しというかラミエルさんに言わせれば不謹慎な話しがあると途端に態度が変わる。

……いいじゃない。俺は好きだよ？“もしも”の話は、さ。

まあ勿論不快なものはその限りじゃないけどね。後悔の話とかあの時あーしていればとか、こーしていればとか、そういう後ろ暗いものは苦手だ。…うん、どうせなら楽しい未来を見詰めた話しいいし好きだ。

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、まあ今は横に置いておこう。

…で、だ。俺の言う敗北とは家族の誰かが傷付き倒れた時だ」

「我がが？だが、それは」

「いや勿論それが難しいことくらい理解してる。ただ…そのくらいの気持ちを持っているというだけは覚えていてほしいな、ってことだ」

誰一人欠けることなく。そんなことは夢物語であることは理解している。だけどそれに限りなく近付けることは可能だ。

あまり魔法使いサイドに精魔奇兵である彼女達の力を公開したくない。単体で上手くやれば「紅き翼」の個人に匹敵する実力を有している。それを隠すために各種装備でカバーしているわけだ。

それに彼女達は肉体こそ作り物だがヒトに限りなく近いものだ。

肉体が消滅したとしてもその魂は契約した俺の中へと帰り時間を掛けて再生するはず。…ん？あー…はず、というのはまだそんな凶行が起きていないから確かめてないからだ。

『むむむ！それは承服しかねる！我らの存在など我が主お一人に比べれば些細なことですよ！これは家族（組織）の誰もが覚悟し納得し願うしことである！』

「いやいや！なにそれ！？初めて聞いたよ！自己犠牲が強過ぎやしないかね！？」

『初めて言ったから当然だ！だが！それが事実であり 真 実 だ！！』

そのハスキー女性ボイスで男前に断言しないでくれる！？惚れてまうやる！！って！違った！

「待て待て待て！ちょっと待て！！」

『だが断る！！』

「なぜにお前がそれを知っている！？」

『我が主がよく言うから覚えたのだ！！』

「そうだった！忘れてたああ…！！」

気に入らない時にギャグとネタも織り交ぜられる一言つて「だが断る！」に限るものね！持ち上げるだけ持ち上げて、期待させるだけ期待させて断る時のあの快感はやめられません！！変な癖をラミエルさんが身に付けてしまったではないか！！

「ええいつ！我俣を言わずにいい加減に認めぬか！！我らのことなど気にする必要などないのだと！！」

「おいしい！？この子は何を言ってくれてるの！？だから認められないよ！？」

……大事な家族のことだから俺も退けない話した。俺は皆が傷付くのがイヤなのよ。

最初はただ俺の身を守るために、と考えた。当時、親交のあった精霊や悪魔達に“存在を昇華し強化する”提案を話した。それで彼女達の協力の下に全員が精魔奇兵になることを承諾して今も協力してくれていることも知っている。

そのせいで色々と皆に役割があるのも理解している。だが、いやだからこそか。協力してくれている彼女達の潜在的力を隠蔽し尚且つ安全を最大限に図るのが俺の義務であり責任だと思う。

そして……って！その子達っ！なんで作業中の皆も手を休めてまでラミエルさんの言葉が正しいとでも言うように頷いているのかね！？俺のお前らを思う気持ちは間違っただけは？

「いえ、それは……。ですが彼女が正しい。これは当然です」

整備班の一人が代表して当然のことを言うように言ってきた。それに周りの皆も大きく頷いている。同意、ということか？

いや、そうじゃなくて！そこまでハッキリと心を読まないでくれるかな！？口にはしてなかったのにさ！皆ってそんな能力なかったよな！？シックスセンスでも目覚めたのか！？だとしたら恐ろしい

事態だ…。

「いえ、「愛」の力かと…（もじもじ）」

待つて！一際大きく“愛”の部分を強調するのはこの際いいとしてよう！ただど恥ずかしそうにテれるのはやめて！チラチラと伺うように見ないで！俺も恥ずかしい気持ちにさせられるから！！

……しかし皆の溢れんばかりの“家族愛”には感動した！もう大好きだ！！

『……………』

「……………」

「え？なにこの沈黙は？」

さっきまでの喧騒はどこ行ったよ？ラミエルさんも剣幕に近い言葉の応酬はどうした？それと一番に気になるのは皆のその複雑そうな表情は何よ？なんと言うかすごく嬉しいことを言われたはずなのに肝心ところが相手に伝わってない、みたいなの…。

「……………はあ……………」

『……………はあ……………コソコソ（そこまでわかっていながら…）』

「……………コソコソ（仕方ないです。だって葵様ですし）」

「タメ息吐かれた！？なんで!？」

今度はガツクリと頂垂れたと思えば苦笑している。もう訳がわからない。…くっ！これは俺の家族愛度が足りないと言っても言うのか!？

『ともかく、だな。我が主のお身体は最早一人のもではないことは

理解してくだされ』

「俺も家族の皆が大事なの。それは変わらない」

『……………』

「……………」

いや、睨むようにしてもダメだし、あと無言でプレッシャー掛けてもダメだからね？こればかりは俺も引かない。いや、引けない。

『……………ふう、妥協点では？』

「……………ああ。じゃあ“互いを大事に”というのは？」

『仕方がありません。それで手打ちとしましょうぞ』

むむむ？ラミエルさんが先に折れたか。ものすごく渋々といった感じだけど。でもこれでは俺が意地を張った子供みたいで大人気ない感じにならないか？

「……………むうう……………」

「はい！それじゃ作業再開して……………って、なんで皆は不満そうにしているかね……………」

『我が主よ、そこは察してやれ。……………（皆は“我が主を守りたい。でも守られるのも嬉しい”という複雑な想いがあるのだよ）』

ふむ？察しろと言われてもな……………。なんとなく整備班の子達はラミエルさんと俺の判断に不満そうな気がするが……………。

「……………」

わからん！いや、なんとなく複雑な心境であるのは感じ取れるんだけど、さ。具体的に何を考えているのかわからん。

『はあ、いや、良いよ。それよりも仕事に戻るとしようではないか。皆も良いな?』

「……了解、です」

「「「「「むううう……」「」「」「」

ラミエルさんが現場を仕切っているけど彼女達の目はまだ不満を表している。その視線の先はラミエルさんか? いくつかは俺にも向いている気がするが……気のせいだ。気のせい。気のせい。気のせいだ。

……しかしこの低いテンションでは作業の士気に関わるな。ふむ……。

「……無事に終わったら皆でお茶会にしよう。お茶菓子にチェリーパイを作ったからさ」

「了解です! …… やたっ」

「おっかし おっかし えへへ」

「お茶会なんて久しぶりね。この前は……」

ファミリ

「家族も増えましたものね」

「葵君とお茶会だ」

女の子は甘い物が好きと良く聞くけどウチの子達はそれに輪を掛けて好んでないか? まあ俺も皆と家族団欒ができるから文句はないんだけど。なんにしてもこれで士気は上がったから順調だ。

……多少俺とラミエルさんのせいで作業が滞ったけどね。本当に申し訳ない……。

『はっはっはっ、どいつもこいつも現金な者達だ』

「くくくっ、例えそうでも俺にとっては可愛い子達であり家族だからいいんだよ」

『ふむ？そうか…』  
「ああ、そうだ」

現金で大いに結構。これくらいの労力は安い物だ。それに家族のためだと思えばそれほど苦でもないしね。

…人間社会は本当に柵が多過ぎる。こればかりは今直ぐにはどうしようもないことだからばやいても仕方のないことだけどさ。ある程度この世界で過ごしたら本格的に世界を飛び出すことを考えるか。

……。

「葵様！実験の準備が整いました！いつでもいけます！」

「はい、ご苦勞様。それじゃ稼動試験始めるから皆よろしく」

「……ハッ！」「……」

広い実験室内で開始の合図と同時に皆が慌しくなる。研究室は俺達の居る管理室と特殊強化ガラスで区切られた実験室がある。そして今試作APRの一号基は実験室にあり今か今かと起動する時を待っている。

むう…漸く稼動実験開始か。ラミエルさんと少し意見の相違があったからそれに時間が取られてしまったからな。まあそれはそれで貴重だったし少し楽しかったからいい。今までは言い合いとか割と少なかったしね。

……さて、準備もできたようだし稼動実験開始だ。

……。

……。

結果的に言えば試作APR一号基の稼働実験は成功したと言える。発明のお約束とも言える爆発なんてこともない。初期稼働時の各種数値がやや乱れていたけどそれも直ぐに安定していた。

これを以ってAPRは一応の完成をみたことになる。あとはこれをより安定性や安全性などの向上を目指すことになる。それらによつては組織は相転移機関フアマリに次ぐ新たな半永久機関を手に入れることになる。

……こつちのほうカブトムシが小型で高出力なため使いどころが多岐に渡ることは確実だ。

例として今後はイキシア？を始めとした人型機動兵器や無人兵器類の動力炉として搭載される。とは言えいきなりじゃ規格が合わないから改造や改良、または新規に再設計し直す必要があるけど。

例えば…今までの無人機動兵器カブトムシを旧式のA型とする。既存のA型を改造してAPRを搭載できるようにして強化したものがA？型と呼称する。そしてAPR搭載を前提として再設計しなおしたものを新型のB型となる。

今ある機動兵器各種を“ A？型”や新型の“ B型”の二系統へ更新することを中心に管理、生産していこうと計画中だったりする。

そしてこれからはこれらが我が戦力の標準装備の一種となる予定だ。これはメタトロンが発見された時には俺が草案をまとめてあるから粗方の準備はできている。だから問題はない……よな？

「こほんっ…何はともあれAPRは完成した。…明後日からは次を始めるか」

『む？それは“世界間を渡る手段の模索と構築”であつたか？』

「ああ。ただ、モノの構築はもう頭の中にはあるからあとは設計図に書き出して実物を作るだけだつたりするね」

できているのは当たり前だ。元より“リリなの”に登場する全ての次元航行艦に搭載されている次元エンジンだ。でもただそれだけだと“同じ世界の同じ時間軸、そして平行した世界にしか移動できない”のだから俺の希望に副っていない。

これではダメだ。俺が行きたいのは“違う世界の違う時間軸、そして平行した世界の更に向こう側の世界へ移動すること”なのだから。

今回作るうとしていているのは既存の次元エンジンを改造したものだ。この場合中身が別物なのだから名称も変える必要があるのだけど…  
…面倒だから名称は変えない。…え？面倒臭がらずに考える？…  
フッ。

…いいじゃん！世界違いとは言え移動することには変わらないだろ！？

失礼、少々取り乱してしまった。だがまあ無理して名称を変更する必要はないというのも事実だ。世界を渡るといふ過程も結果も違うけど“移動する”ということは同じだろ。…同じ、だよな？

『ほう…それでソレの名称は決めているのか？』

「とりあえずは簡単に“次元エンジン”と仮呼称しているね。多分だけどこれが正式名称になるかな」

『次元エンジン、か……。言い得て妙だが……。微妙に意味合いが違うのではないか？』

「まあ勿論厳密に言えば違うけど無駄に長ったらしい名前よりも簡潔に尚且つわかり易いほうがいいでしょ」

『そうか。理由はアレだが我が主がわかっているならば良い……ふんっ』

んー、なんつか含みのある言い方だな……。さてはさっきのことをまだ納得していないのか？理解はしても納得できない、という気持ちなのかもしれないけど……。どうしたものかね。

……もう！拗ねちゃってるラミエルさんも可愛いなっ！もう！もうもっ！

『……我が主がなにやら不埒なことを考えておるような気配が……。？』  
「不埒とはヒドイな。ただ拗ねてるラミエルさんも可愛いなと思ってるだけだよ」

『なっ！？なななな、につをつ つ！！ごほんっごほんっ！んんっ！……なにを言っているのか意味がわからぬな。……ふ、ふんっ』

うわー…わかり易い。興味ない振りしてチラチラと俺を伺っているところなんて特に、ね。かーいーなー！なんと言っか、こっ……小動物のような愛らしさがあるね！

「よしよし。ラミエルさんの気持ちはキチンと理解してるからさ。機嫌直してよ」

『はふう……はっ！！ん、んっ！優しくな、撫でてもらってもっ』

「ねっ？」

『むぐっ……くうう、わかった』

撫でるなど言うわりにラミエルさんは決して逃げない。こういうところが可愛いと思うわけですよ。それに何だかんだと言いつつも許してくれる辺りは彼女の優しさを表しているとも思う。それに…。

……んふふ。よしよし、これで…。

『だ、だがっ、我が主もご自愛願いたい！心配する我らの身にもなっ…』

「あー、それを言われると弱いね…。まあ善処する、とだけ言うておこうか」

『ふ、ふんっ！政治家発言は信用が離れるぞ！』

「いいのいいの。いざとなったらラミエルさんや皆も守ってくれるわ」

『当然だ！我が主の御身は何があっても我が…我らが守り抜いてみせる…！』

……くくくっ！その発言…確かに頂きました！！

「じゃあ問題ないね！くくくっ」

『ん？…あー！？待て！だからと言って無茶するのは無しですぞ！』

「だが断る…！」

『返された！？』

当たり前だ。やられたらやり返したくなるのはヒトの情というものだろうよ。んふふふ！それにこれくらいは家族のコミュニケーションだ！俺は寂しがり屋でもあるんだ！構ってくれないと…その、アレだ…困るっ！

「さあ皆ー！実験も成功に終わったからお茶会にするよー！」

「「「「「はーいつ！」「」「」」」」」

『だ・か・らっ！暫し待てと言っておるではないかああ！?!?!?』

……あーあー！聞こえないーいったら聞こえない！ルールールー！

S i d e o u t 葵

第七十八話「稼動実験とじゃれ合いと次は…と」(後書き)

葵は アンチプロトンリアクターを 手に入れた。  
これで機動兵器関連で稼動限界は皆無だぜい！  
消耗品はあるから整備は不可欠だけどね…。

ラミエルさんも他の家族と一緒に葵が心配なのです。愛されてます  
ねー。  
臆病だ小心者だと言っている彼が好奇心の赴くままに行動するので  
不安なのです。  
だからこそその苦言だったのですねー。愛されまくりですよー。  
葵もわかっているので無理はしません。無茶はするけど…。

オマケ劇場

葵「皆作業お疲れ様ー！ささやかだけどお茶会を用意したから楽し  
んでくれ！」  
整備班の皆さん「はいっ！」  
ラ「皆も仕事終わりなのに元気であるな…」  
葵「ほらほらっ！ラミエルさんにもあるよー！」  
ラ「なに？いくら我でも生ものは…こゝこれは！？」  
葵「そう！ガンダニウム合金だよ！これで白いファーストも作れる  
ねー！」  
ラ「(いや、恐れ多くて作らないが…)ま、まあまずは一口…あぐ  
っ、んぐんぐっ」  
葵「どう？ラミエルさん、どうよっ？」  
ラ「むぐむぐっ、んむっ…うむ！美味っ…！」  
葵「よかったー」

ラ『お代わりを所望するぞ!』

葵「あいあい」

完っ!

……本編には関係ないですのことよ?

P S .

とある番外編を考えなくては、と軽く使命感(笑)が湧きました。  
まあ暗黙的なことですがコラボ返しですね。

せ、責任が重いぜい……orz

だが……今まで提供されてきたネタを消費するいい機会と思いきや  
みることにしました!

上手くできるかは……神のみぞ知る、という感じですけどね(え  
ー……)。

ちよっと……うん、本当にちよっとだけどがんばるぜい!

ではでは!

第一回コラボ企画「近衛の守護者？」by彼岸花さん。前編（前書き）

サブタイトルは「雛さんディモルフォセカ大地に立つ！」なんてね。

さあ！コラボです！初コラボですよ？

コラボの相手はタイトルで丸わかりですが”ネギま！”の二次を書いている彼岸花さんの作品で「近衛の守護者？」です。

彼岸花さんは前に私の「葵と精霊と九十九神と悪魔と…」と恐れ多くもコラボしてくれたので感謝と一部の要請に応えてみました。

うん、コラボ返しですね。

熱い思いが溢れ出て許容量の四万字を越えてしまったので前後編に分けて投稿となりました。

上手くできているか戦々恐々ですよ？ええ。

では、どうぞ！

誤字報告も歓迎ですよ？寧ろお願い。多過ぎて探せない…。

## 第一回コラボ企画「近衛の守護者？」by 彼岸花さん。前編

葵ファミリーが木星宙域へ来てから十一ヶ月以上の月日が流れていた。この話しはそんな時期に起こる一つの騒動の記録である……。

……。

……。

戦闘移民艦デイモルフオセカが木星宙域へ到着してから十一ヶ月が経った。今でこそ艦は落ち着いているが到着直後はそれこそ蜂の巣から飛び立つ働き蜂の如く大中小の輸送船や作業船が四つの宇宙港から休むことなく出入りしていた。

これまでに全十六の艦載機格納区画からも総数百二十七万機余りの無人偵察機<sup>トシボ</sup>、無人偵察機<sup>アカトシボ</sup>ステルス仕様、無人機動兵器<sup>カブトムシ</sup>、イキシア？などが木星宙域を調査、監視、警戒をしていたものだった。

だが、それも今では定期的な監視や警戒と資源衛星の仮調査が行なわれるくらいに落ち着いている。緊急を要する事柄も無い、ここ50km級戦闘移民艦デイモルフオセカはいつも通りの平常運転だ。

そして艦橋でもいつも通りの監視、警戒や接近する危険なデブリの排除という退屈な作業が続いていく　　はずだった…。

ビーンツ！ビーンツ！ビーンツ！ビーンツ！

「　　ツツ！！」

艦橋に鳴り響く耳障りな警報音と緊急事態を色で表すレッドアラート。突如として艦橋内に居る乗組員は現状行なっている全ての作業を一時中止して事態の把握に務めるべく動き出した。

艦橋内はまさに慌しい空間と言える。そんな中、艦橋後方にある扉が左右にスライドして開いた。そこは数ある扉の中で艦長席に最も近い扉だ。その扉から一人の人物が駆け込んでくる。現れたのはメイド服を完璧に着こなしたアイリだ。

「オペレーター！今わかつている範囲でいい！現状を報告しろ！」  
「アイマム！！数分前、本艦前方の約700km地点に正体不明の高エネルギー反応あり！発生元は現空間のものではありません！現在、詳細を確認中！！！」

宇宙空間で言う700kmなど目と鼻の先ではないか。どうしてこんなに接近するまで気付けなかったのか。オペレーターの報告を聞いたアイリはそこまで接近を許すとは…！と内心で歯噛みする。

過去、麻帆良の地下基地を自身の油断と慢心から襲撃された苦い記憶が思い出された。またなのか、と彼女の腸は後悔と情けなさで煮え繰り返り返りそうになっていた。今なら睨むだけで人を殺せそうな気がする。

「…通信班！総員、第一種戦闘配備！ただし、閣下には伝えるな！この程度のことでお心を煩わせたくはない！！特殊回線B2を使用しろ！」

「…アイマム！！！！」

「…緊急！緊急！総隊長より通達！総員、第一種戦闘配備！乗組員

は所定の配置に着かれたし！繰り返す！総員、第一種戦闘配備！乗組員は――

通信班はアイリの命令通りに特殊回線B2…葵以外全員に秘匿通信で知らせる…を使用して第一種戦闘配備が宣言された。緊迫した艦橋は戦闘態勢へ即時移行する。

喧しく警告していたアラームは切られた。しかし緊急事態を示すレッドアラートだけはまだ止まらない。ここだけ赤と白が交互に織り成す世界になったかのような印象を抱かせる。

「オペレーター各員はこの現象の発生元を全力で洗い出せ！いいな！？座標特定を最優先で行なえ！！」

「……アイマム！」「……」

「他の者も事態の把握に務める！！これが敵性存在であるとは限らないが、こんなフザケタことをしたんだ！！絶対に逃がすな！！」

「……アイアイマム！！」「……」

敵意を持った行いか何らかの事故か、はたまた気紛れな悪戯かは別にして無断でこちらの領域に入ってきたのだ。それ相応の対応を取らなければ相手に嘗められることに繋がりがかねない。

ファミリ組織が嘗められるということは絶対に許してはならない。それは即ち頂点に立つ葵を侮辱されることに他ならないからだ。

故に ……こんなフザケタことを仕出かしたヤツに思い知らせなければならぬ。もう二度とこんなことをしない…できないようにするために。

「っ！？」 ……？総隊長！エネルギー反応が収縮しています！予想

される反応消滅まで約180秒!!」

「ツ……このまま逃がすな!最大限原因の調査を急げ!特に発生源の追跡は絶対だ!!」

「アイمام!!」

アイリは考える。180秒と告げられてからエネルギー反応が揺らぎ始めた。このまま逃がすものか、と内心で愚痴るのを止められない。指示しておいてアレだが発生元を捕捉できるかも正直ギリギリとは思えない。

「エネルギー反応の減衰を確認!目標反応の完全消滅までカウント3...2...1...目標消滅しました!」

「……ツ!」

想定していたよりも十数秒収縮するのが早いことと解析できたかは微妙なところであること。この二つが艦橋に居る彼女達全員を焦らせる。

「調査は、観測結果はどうか!!」

「現在、集めた情報を鋭意解析中です!もう暫くお待ちください!」

「遅い!多少精度が荒くても構わない!10分、いや7分で報告を拳げる!!」

「ツ、アイمام!全力を尽くします!!」

無茶な指示だ。だが、指示したアイリも、動き出したオペレータ―と解析班のメンバーもそれをわかっていて自分達のできる範囲で最大限努力することをやめない。

「……………」

現在、精魔奇兵の全権を持っているアイリは誰にも気付かれなように静かに息を吐く。出せる指示は全て出した。あとは結果を待つのみだった。

クタツと艦長席の背凭れに気持ち身体を預けて力を抜いた。今の彼女は月を出発した時に組織の全てを任されている。日々の重責はあるがそれも各部署が仕事をほぼ処理できるので大きな問題もない。

「……アン。お前のほうでは何か感知できないか？」

「んー…んん？記録を遡って分析してるけど、これはなんと云うか…亀裂、かな」

「亀裂…？ふむ…詳しく頼む」

ンー、と小首を傾げて答えるアンは判り易く説明するために艦長席に座るアイリの前に空間モニターを展開した。

空間モニターに映し出されているのは高エネルギー反応のあった宙域の3Dマップと激しく変動する数値。数値をグラフ化したものがある。アンはグラフと3Dマップを秒刻みで再生してその都度、数値とグラフを示唆して説明する。

「うん、この重力波と素粒子やボース粒子の波形を見てみて。…空間そのものが歪んでるでしょ？」

「ああ、確かに。…この部分から急激に数値が高まっているな。…そしてここで歪んでいるのか？」

「そう。これらから推測すると…なんと云うか“何か”がこちら側へ来ようと空間を無理矢理に抉じ開けようとしていたような…」

ここで真先にアイリの頭に浮かんだのは“ここまで接近を許したばかりかこちらの宙域へ侵入された”という不快感だった。この矢

態をどうやって取り戻すべきか、とも考える。

「……ということは既にこの宙域のどこかで、その敵性存在かもしれない“何か”が顕現している可能性が」

「あ、でも、肝心のところでポシヤツたんだと思うよ？ほら、ココ。ここから全ての数値が突然消失して元に戻ってるから」

「……………」

アンの余りにも余りな発言と事実にアイリが無意識に頭を抱えた。突然感知されたエネルギー反応が未確認物体か、敵性体かと考えていた時に彼女の“ポシヤツた”の一言に不覚ながら集中力が途切れた。

「ア、アイリお姉ちゃん？額を押さえてどうしたの？なんかガツクリしてるけど…」

「すまん。今は何も言うな…。少し、そう、ほんの少しだけ脱力しただけだから」

「そ、そうなんだ。……（アイリお姉ちゃんどうしたんだろ？私、なにかイケナイこと言ったのかな…？）」

散々だった。ここまで「敵か！？敵なのか！？ヤツフウウウ！！」などと盛り上げておいて最後にはアンの推測で言うところ“ポシヤツた”だ。つまり肝心のところで相手は失敗したということ。

アイリがガツクリするのも仕方ない気がしなくてもない。失態云々で言えば警戒だけで何事もなく良い方向へ向かっている。だが、脅威云々で言えば……………脱力ものだった。自分の頑張りを返せと思うアイリを誰が責められようか。

「総隊長。先程の報告データです。……………???総隊長？」

「…ん？ああ、すまない。こちらの端末へ送ってくれ」

気の抜けていたアイリは一次報告を挙げてきたオペレーターの彼女に自分の座る艦長席の端末へデータを転送するように指示した。

「アイマム。……今データを送りました。確認お願いします」

「ああ。……よし、確認した。ご苦労だった。急がせてすまないな」

「い、いえ。お気になさらないでください」

「そうか。では引き続き調査、解析を頼む」

「アイマム！」

報告書の中身は大まかに読み進めると内容はほぼアンの推測と同じものに辿り着いたようだ。観測されたエネルギーパターンにどことなく見覚えがあるのは気になるところだが…。

この報告書の最後にある備考によると観測された膨大なエネルギー量から推測すると事故のようなものであり、仮に意図的な行為であろうと暫くの間はあのようなことは早々起きないだろうという予測も立てられていた。

「ふむ……通信班！現時刻を以って第二種警戒態勢へ移行だ！ただし三十分経過して何も無ければ順次通常任務に戻れ！」

「アイマム！…総隊長より総員へ！現時刻を以って第二種警戒態勢へ移行する！尚、三十分経過後、問題が見られない場合は順次通常任務へ戻られたし！繰り返し！現時刻を以って第二種警戒態勢へ移行」

戦闘配備は解除しても警戒態勢だけはまだ解かない。油断がないように最低限の備えは必要だ。

それにしても思考に引つ掛かるものがある。報告書にあったエネルギーパターンを見て感じたこと。あれは……とここまで考えて

あ。思い出した……と艦長席に背中を預けながら心当たりに行き着いた。

「…アン、率直な意見を聞かせてくれ。お前はこのエネルギーパターンを、または似た固有波形を見たことがあるか？」

「え？…これだよな？んー…んん？このエネルギーパターン…どこかで…？」

「見覚えがないか？…自分はこの記録に覚えがある。…ここに来る時に見た」

「え？ここへ？ん、んー、そう言われてみるとどこかで…？ ああ、ラミエルのログに残されてた記録に似てるんだっ」

「ああ…」

その通りだ…とアイリは続けて、先程思い出したことを脳裏に思い浮かべていた。

アイリは心の中でニイイと口角を吊り上げて笑った。ただし表情では慈悲を体現したような素晴らしい笑顔だ。それはアンも同様のようでイイ笑顔だった。

「いいだろう。あちらがこちらに来たいのなら」

「招待すればいい。クスクス そう。例え、無理矢理にでも」

「ふふふ。その通りだ、アン。招待する方法は…」

「それは心当たりがあるから私のほうで用意するよ。大丈夫、旨くヤルから…ふふふ」

「そうか。では任せる。閣下へは私から報告しておこう。…ふふふ」

「…ふふふふふふ…！」

黒い。そして暗い。そんな嗤い声が艦長席から響いてくる。艦橋に居る全員は何もないかの如く仕事を続ける。気にしたら巻き込まれる…なんて考えてないっつたらない。怖いわけじゃないっつたらない。おそらく。きっと。めいびー。

……。

……。

ここはとある日本家屋。大きさもさることながら作りも立派なものだ。家屋や広い敷地はよく手入れされているため塵一つ落ちていない。

その家屋の一角にある縁側に一人の女性が腰掛けて柱に身体を預けていた。女性の名は近衛・雛。サラサラとした白い髪に映える水色を基調とした清楚な印象を抱かせる和服を着ている。

雛の居る中庭に面している縁側は日当たりもよく絶好の茶飲み場所になっている。実際に彼女の横には茶碗がある。ただ、長時間放置されたことで既に冷え切っていることがわかる。尚且つ、一口も口をつけていない。

「はあ……………葵さん……………」

どこか呆けたように零す言葉は寂しいような、懐かしいような、そして何かを求めるような感情があるように思えた。

そんな彼女を側仕えの者が心配するようにただ静かに控えていた……。

……。

雛の居る家屋から幾許か離れたところにある広場に黒装束の忍者十数名が重装備で待機していた。この場で特に目立つのは直径25m程あるUFOだろう。一般人が見ればどこの未知との遭遇だと小一時間問い詰めたくなる情景かもしれない。

そして彼らの前に立つのは左目に眼帯をした一際覇気のある青年も同じく黒装束を身に纏っている。荒川・勘助と白衣を着た杉白・F・ダズゲニーだ。後者は何の意味があるのか白ダースベーダーの被り物をしていた。

「……（雛様……）。……準備は？」

「ハッ。全て滞りなく用意できております」

「行くぞ……！」

「……オウツ……！」

勘助が作戦開始の号令を変えると一糸乱れない動きで彼らは下部ハッチからUFOに乗り込んでいく。最後に勘助とダズゲニーが乗り込むとハッチが閉まった。

各々が座席に着座する時には勘助も着座しておりダズゲニーが操縦席に陣取り発進準備を整えていた。最後にデンジャーで真赤なボタンの横にあるセーフティな青いボタンを押せば出発だ。

この青いボタンはとある世界へ渡るための機能を稼働させるためのものだ。ザックバランに言えば不思議な空間を作り出し、そこへ飛び込めばアラ不思議、目的の世界へ行けるといふものだ。端折り過ぎな気がする……。

「じゃ、ゲート開くぬ ポチツと………あ」

ここでギャグ体質のダズゲニーがやってくれた。青いボタンを押すはずだったのに白ダー ベーダーの被り物がずれて直ぐ横の真赤なボタンを喜んで、もとい誤って押してしまった。こうなると当然。

「は？」

「……あつ!?」「……」

チユドオオオオンツ

お約束の爆発ネタだ（笑）。景気良くキノコ雲ができてUFOが吹き飛んだ。しかし、これだけやっても気が付いたらUFOは直っているのだから不思議である。

……よくやった！ゲニーちゃん！君は救世主だ！ギャグ的な意味で！

ダズゲニーは愉快犯なのでダメージらしいものは皆無だが爆発に巻き込まれた近衛忍達は堪ったものじゃない。勘助を除いて、だが。

「こんのつ大馬鹿者がーツツ！!!」

「失敗しちゃったお てへっ」

「……てへっ」じゃねえーっ!?」「……」

勘助の激怒に大して堪えた様子のないダズゲニーは反省の色が見られない。白ダー ベーダーの被り物がそれに拍車を掛けているのだが彼女にそれを取る気は皆無のようだ。飛び出ているアホ毛が愉快そうに揺れている……。

.....。

キュピーン！

「は！？何やら電波が.....ま、負けませんっ！！」

ダズゲニーらが爆発事故(?)を起こしたと同時に突然何かを感じ取った雛だが事の詳細がハッキリしないため言ってから首を傾げることになる。一体何に負けないと言ったのか自身でも意味がわかっていない。

「?????…雛様？」

「い、いえっ、何でもありませんよ?.....そ、それよりも先程の爆発音は？」

「ハッ。原因はゲニーちゃん様の実験にあり、これに荒川様と近衛上忍数十名が巻き込まれた模様です」

ダズゲニーの奇行はいつものことだがこれに勘助達が巻き込まれたにせよ関わっていることに雛は意外と思いつながらもこういうこともあると考え直した。

「.....では私も治療に行きましょう。勘助達に何かあっても大変ですしね」

「雛様、それはっ.....」

「行きますね?(ニコニコ)」

「っ.....行つてらっしゃいませ」

流石は近衛・雛。笑顔の中に恫喝を潜ませるとは.....。美人だからまた余計に迫力がある。先程まで人恋しくて呆けていた人物とは

大違い「何、か……？」イエ、ナニモ……。

……。

……。

場所は変わってデイモルフォセ力艦内の都市部にある洋館。ここは都市内に用意された九重・葵の家だ。洋館の大きさはドーム球場くらいあり、上空から見るとH字の形状をしている。

これに中庭と広い敷地があり、それらを高く頑丈な塀が周囲を囲っている。門は正面と裏門、その他に左右に乗用車一台分が通れる小門が計四つある。

その洋館の中にある一室では現在この洋館の主人である九重・葵とメイド服姿のファレノプシス・S・アニメスと同じくメイド服姿のフリチラリア・D・スタニツクが長閑な雰囲気の中お茶会をしていた。

「ん？…何かあったようだけどファレノは何か聞いてる？」

「？えーっと…大したことじゃないのっ。気にしなくてもいいと思うのっ」

いやいや、そんなに慌てなくてもいいっての。ファレノはもう少し落ち着こうね。大したことないとか、気にしないでとか言われると逆に気になるのが人情だろうに。

「そう…。あ、リチラは何か聞いてない？」

「申し訳ありません。わたくしも詳しくは…。アイリが戻られたらお聞きになられてはどうでしょう？」

「……それがいいか。それじゃ今は……」

「はい。まずは紅茶のお代わりはいかががかしら？」

「ん、貰おうかな」

それから暫くリチラの入れてくれた紅茶とミリーが焼いてくれたマカロニに舌鼓をうっていたら部屋に扉をノックする音がした。「閣下」と呼ぶ声でアイリだとわかったので入ってくるように呼びかけた。

「閣下、お寛ぎの所をお邪魔して申し訳ございません」

「構わない。こっちに来てお茶はどうかな？」

「はい。…ファレノ、リチラ。変わりないか？」

「うん？こっちは何もなかったの」

「ええ。ファレノの言うとおり何もありませんでしたわ」

「そうか……。時に閣下、少々ご相談したいことがあるのですが」

戻ったとたんに相談事？アイリにはそれなりに裁量を任せているのに？宇宙に来てまでまたや面倒事か……。

「……何が起きたよ？」

「確証はまだですが近衛・雛の世界から何者かが干渉してきた疑いがあります」

「は？雛さん…の居る世界から？それってつまりは平行世界間移動をしたと？」

「はい。ですがそれは失敗に終わったようです。対象の顕現には至りませんでした」

「失敗？失敗ねえ。ふむ……」

意外や意外。なんと雛さんの世界から干渉を受けたとアイリは報告してきた。詳しく聞くと失敗したとは言え割と強引な方法だった

らしい。流石は雛さんだ。いや彼女がやったかは判断できないけど、たぶん雛さんじゃないかなー、なんてね。

なにかこつちの世界に用事でもあったのかね？雛さんの居る世界に問題らしい問題は見られなかったと思っただけどなんかあったのかね？世界が崩壊するから避難しよう、とか…。

「……（さてさて、どうしたものか……）」

「…そこで提案なのですが雛様をご招待して差し上げるのはいかがでしょうか？現在はアンと開発班、研究班が手段を構築中ですので、もう間もなく可能かと思われませう」

「む……仮に招待したとして帰還は可能？」

「可能です。追跡の結果、あちらの世界座標に楔も打ち込みましたので問題ありません」

「……それじゃ」

俺の答えは決まっていた。久しぶりの再会にちよつと心が躍る思いでもあったし、本音を言えばもう一度だけでもいいから会いたいなとも思っていたから……。

……。

……。

それから直ぐに準備は整えられた。安全のために都市部から離れた平原エリアに調整された次元エンジンを中心に機材は組み立てられている。

対象の出現地点を中心に古参を含む250名弱の親衛隊（メイド服仕様）が取り囲み、その外を作戦部と情報部三課から人員を出し

て二重に取り囲むと言う念の入れようだ。

これらは第一目標（近衛・雛）が敵対者と戦闘中だった場合にその敵を巻き込んでしまった場合に備えたものだ。万が一の場合は即座に武力介入して即鎮圧するために。

「…準備は整っているな？」

アイリは少々緊張しているのか硬い表情で開発班の一人に聞いた。近くに居るリチラ、こちらも表情が硬い。彼女の場合はこれから来るであろう近衛・雛に対する溢れる嫉妬を抑えるのに苦労しているだけかもしれないが。

「はい。ウーリ様とマリー様のご協力もありましたので滞りなく進めることができました」

「ご苦労だった。では早速作業に取り掛かろう。閣下もお待ちだからな」

「ハッ！総員、状況を開始せよ！」

「……アイマム！」「……」

司令部所属の開発班と研究班がアイリの号令で動き出した。複数の空間モニターに映し出される数値が操作する彼女達のIFSの輝きに合わせて目まぐるしく変化、変動する。

「次元干渉実験、フェイズ1を開始。本艦機関部よりエネルギーバypassを構築。各部連結を確認。全て異常なし。第一、第二、第三ラインよりエネルギー供給を開始します」

「エネルギー供給を確認。次元エンジンの出力上昇…一万…一万五千…二万…各数値、次元転移門<sup>ゲート</sup>展開の理論値に到達。出力調整……安定を確認。全て問題無し」

「現在座標を絶対座標軸として構築：展開準備。対象世界座標を入力：完了。絶対座標を展開。次元転移門を展開……順調に構築中……」  
「次元転移門の予想開通までおよそ240秒。また開門まではおよそ300秒を予定」

推移は良好。何事もなく工程は進んで行く　はずだった。空間モニターでは作業内容にエラーが飛び交い、耳障りな警報が鳴り響いた。

「緊急！次元空間に乱れあり。危機回避のために空間補強を開始。緊急展開プログラムの一番：二番：三番：構築完了。……空間の安定を確認。危機を回避しました」

「作業を続行します。各フェイズ、30秒の遅延を確認。修正を開始：緩和を確認。予定作業を12秒遅れで作業を再開します」

だがそれも些細なことだ。想定される事故、事件、災害などの対応は大半がマニュアル化されているため即座に収束した。それでも突発のことで予定に僅かに遅延を出してしまった。

前に起きた向こう側からの干渉と今こちら側から干渉しようとしたことで同空間上に過剰な圧力が掛かり次元を圧迫させてしまったらしい。やはり初めての行いというものはどんなに小さくとも失敗があるものだった。

「3……2……1……次元転移門の開通を確認。続いて次元転移門の構築を開始」

「次元転移門の構築まで3……2……1……完了。次元転移門、顕現します」

現れたのは光の集合体。次元転移門はその一言でしか言い表せない

い。それは徐々に大きくなり全長4〜5m程で固定された。

「次元転移門の完全構築を確認。開門します。これよりフェイズ2へ移行します」

「了解。対象世界のサーチ開始……到達まで3……2……1……エンゲージ。対象座標軸周辺に生命反応を確認……」

「データバンクにて対象データ参照中……一致、該当データを多数確認。……第一目標を確認。目標を捕捉しました。これより確保行動を開始します。トラクタービームを送信……」

光の門に射出されるトラクタービームとは主に宇宙空間で牽引や船体の固定に用いられるエネルギー状のアンカーだ。今回はそれを応用して捕縛ネットのように改造されている。

……。

……。

爆発現場に来た雛が真っ先にしたこと、それは……。

「それでゲニーちゃん。これはどういうことですか？（ニッコニコ）」

「Noooツツ!?腕はそんなに曲がらないおっ!?あつ!曲がる曲がる曲がるうう!?!それ以上はら、らめーっ!!!」

首謀者と確信しているダズゲニーを締め上げて事情を問い質すことからだ。色々と覚悟を決めていた勘助を除いて近衛忍達は雛による笑顔の圧力によって戦々恐々していた。

「今一度聞きます。どういうことですか？（ニツ

「コニツコ」

「いやはーっ!?今度はアイアンクローっ!?雛様が鬼だね!ゲニ  
ーちゃんの頭蓋骨がピン、いたたたたたたふおわったーっ!?!  
?」

雛の絶妙な力加減によるアイアンクローにダズゲニーが痛みを悶  
えている。彼女の灰色の短い髪にある特徴的な一房の長い髪、所謂  
アホ毛がビチビチと彼女の心境を表すように暴れている。

わんわんっ!にやーにやー!しゃーっ!

「ただいま折檻中につき今しばらくお待ち!NO!ノオオオツ!?雛  
様っ、待って!待つんだお!?そ、それ以上は 「えい」「ぎに  
やああああっ!?!」……失礼しました。今しばらくお待ちください」

わんわんっ!にやーにやー!しゃーっ!

数分ほど折檻されたダズゲニーは地に倒れ伏してピクピクしてい  
た。被り物からはみ出しているアホ毛が力なく倒れているのがなん  
とも哀愁を誘う光景だった。

対照的にダズゲニーの横では何かを遣り遂げてお肌が艶々になっ  
た雛が何やらとても満足そうにしていることが印象的だったのは勘  
違いだと思いたい勘助達だった。

「……ひ、ヒドイ目にあつたぬうっ」

「当然の報いだ。馬鹿者が」

結局、ダズゲニーは雛の拷もっ……質問に洗いざらい話すことにな  
った。話を聞き終わった雛が、意外なことに今回の発案者が勘

助であることには内心で驚いていたのは秘密だ。

「ふう…それにしても葵さんの居る世界に行こうとして失敗したのですか」

「ハ…」

「勘助。なぜそのようなことを？ゲニーちゃんは…：…：なんとわかりませんが」

発案者が勘助だったのは驚いたがダズゲニーはただ面白そうだという理由で間違いない、と確信しているのは雛だけではないはずだ。

「…：…：ただ…：九重・葵殿を拉致ごほんごほんつ、連れて来ようかと」

勘助は素直に目的を話した。ここまで来て意地を張っても意味はない。仮に黙秘しても“ひななんの楽しいOHANASI尋問編”アナタはもう話さずにはいられない…！？”が待っているだけだから。

「え、えーと…：…：なぜ、そのような？」

対する雛は最初キョトンとしていた。その次に視線をあっちこっちにやって挙動不審になりながらその理由を問い質す。この時の雛は内心でとてもドキドキしていた。頬も若干熱を持って赤くなっている。

「ここ最近の雛様はどこか上の空のようでしたので少しでも元気になられるのでは、と…」

「…：…：…：へう」 1へう頂きました！

「雛様？雛様っ？雛様っ！？」 取り乱す勘助。

瞬間沸騰。雛のとあるメーターが振り切れた……。これに驚いて取り乱したのは無自覚に追い詰めた勘助だ。流石鈍感。自身のことでも鈍感だからか恋愛事では無意識に相手の痛いところを的確に突いてくるとは……。勘助、恐ろしい子!?

瞬間沸騰した雛が思い当たることがあった彼女は周りに心配されていたことに申し訳なさもあつたが、何よりも何を悩んでいるのか皆にバレていたことが恥ずかしかった。それで意識がシャットダウンしたのだが……。

雛としては絶対にバレていないと思っていたのだが、そう思っていたのは彼女だけだった。周知の事実。暗黙の了解。言い方は数あれど最早皆の知るところだった。

「ぬお!? 雛様の体温が急上昇中だぬ!? ……おお!? これは乙女指数も上昇中っ!?!」

「おと、おとめしすう…? なんだ、それはっ!?!」

「イゝヒツヒツヒツヒツ …… ツッコみがないのはそれはそれで寂しいお」

いつの間にか復活していたダズゲニーがみよおおんみよいいんと電波を飛ばしている摩訶不思議な機械を手になにやら驚愕していた。白ダー ベーダーの両目がピカピカと光っているがこれは何?

勘助は突然のことで、と言うか現状で雛のこと以外どうでもよくなっている彼はダズゲニーが復活したことなど眼中にないため大したツッコみもしないまま彼女に何があつたのか問い質した。

「どうでもいいのだが勘助も問い質した乙女指数とは本当に何なのだろうか?」

ここまではある意味いつも通りのボケを騒がしくも楽しい喧騒だった。だがしかし、それを突き破るように事態は急変した。突然発生した光の渦から巨大なエネルギーの突風が巻き起こったのだ。

光の渦は極光に満ち満ちておりその膨大なエネルギー量に誰もが圧倒された。

「えへへ　はっ！なんと凄まじい力……きゃ！これは一体っ！  
？ひ、引き摺り込まれ　……！」  
「ヒヤッハアアア……！おっもしろそうだぬう……！新たなる世界への旅立ちだあああ……！」

少しアツチの世界に旅立たれていた雛が気付いた時には遅かった。彼女の身体に巻きつくのは光の帯であり、それは異常なまでの強固さを持ち合わせていた。

雛達はまだ知らないが、この光の帯……トラクタービームだが本来は宇宙空間で数万数億トンのものを牽引するもので出力次第では引き裂くほどの強度もある。ただし今回は一生物を捕獲するために改造されているので問題ない。

「雛様あーっ……！」　最早ゲニーちゃんのこと眼中にない。

光の渦から伸びた帯に絡め取られた雛……とダズゲニー（こちらは自ら飛び込んだが）に叫ぶように呼びかけるのは勘助だ。突風で動くこともままならないが視線だけは引き込まれる雛達を必死なまでに凝視していた。

……。

……。

「 目標捕獲まで3…2…1…捕獲完了。 ?警告。 予定外の者まで捕獲した模様です。 重量から逆算…想定人数は捕獲対象を含めて二名」

「(オマケが?誰か知らないが仕方ない、か)…総員第一種警戒待機!迅速に展開せよ!」

「『『『『アイマムツ!!』『』『』『』」

アイリの号令により包囲していた部隊が一斉に展開し始めた。 周囲を包囲する陣形から銃撃し易い半包囲陣形へ。 各々が格納機能を持つ腕輪から武器を呼び出した。

そして今、彼女達が手に持つ武器は旧世界でも使用されているものばかりだがその性能は葵の脅威の技術力にて改造されたものばかりだ。 どれもこれも基本的に重力制御技術を応用したものであり射出時に銃弾を加速強化し初加速と貫通性を向上させたものだ。

ここから派生させライフル系は先に挙げた基本を更に強化したものであり貫通性能と集弾性能、命中率が軒並み向上している。 ショットガン系は銃弾自体を互いに反発させて広範囲に分散させて近距離面制圧力を向上させた。

以上のように強化された銃器で対象の顕現場所を中心に半円形に包囲している。 予め用意していた塹壕には土嚢が敷き詰められており、その上に重機関銃M60(改造済み)が置かれて広範囲支援射撃ができるようになっていいる。

「来たか …!」

瞬間、一際強く次元転移門が光りだした。その時に「きゃああっ!?」という女性の悲鳴のような声があったのをアイリ達は聞いた。

流石に改造したとは言え宇宙空間用の牽引ビームで捕縛したのはやり過ぎたか…と反省はしていない。

近衛・雛はご主人様（九重・葵）の貞操を脅かしたのだ。これくらいは、と思わなくもなかった。彼女達にとって葵の唇は至上なのだから仕方ないのだ。ちよっとした可愛い嫉妬だ。許容範囲（だと思っっている）だ。

光が徐々に収縮していく。最精鋭であるアイリ達メイド部隊は悠然と事態に構えており、他千五百名強の戦闘部隊員は各々が銃器を構え、狙いを定めている。

やがて眩いばかりの光量は突如として止んだ。

「……………はて？ここは？      どちらにしてもイキナリ包囲するとは穏やかでないですね……………」

「コー、ホー……………コー、ホー……………うにゃむにゃ……………もう……………入らないお……………コー、ホー……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

中心点に現れたのは丁寧に手入れされた白い長髪の美しき女性、近衛・雛となぜか白ダー ベーダーの被り物をした白衣姿の杉白・F・ダズゲニー……………は倒れ付して気絶しているのかピクリとも動かない。

雛は静かに立ちあがり、女性達を警戒しながらいつでも対応でき



「ブツハア！？目が覚めたら美人さんが大量だお！否！あつちには可愛い系も！？ここは天国かぬ！？…まあ天国なんざ信じてないけどね！！いいいいやつふうううう！！」

「ちよ！？この子つたら何なの！？つかいつの間に！？」

「きゃ！！そんなところ触らないですよ！！やんつ！？」

「このっ！！大人しくしなさい！！あつ！そつちに逃げたわよつ！！」

ダズゲニーは華麗（？）にルパンダイブをすると女性達に踊りかかった。白ダー ベーダーの被り物と翻るダボダボの白衣が眩しい。確かにここに居る彼女達は美人揃いだがこの子は本当に22歳のなのだろうか？まさか……両刀？

「ゲニーちゃん、それは……えええ」

「雛様。不躰ではありませんが、アレは……？」

「申し訳ありません……」 なんかもう色々と申し訳なくて謝る人。

ダズゲニーの突発的な行動には雛も慣れている。慣れているがゆえに耐性もあるが、これは予想外だった。なぜにこの状況で襲い掛かることをするのか……。雛は一瞬呆然となり頭を抱えかけた。

「ふむ……。よくわかりませんがアレは敵ですね？お任せ下さい。多少強引ではありますが実力で制圧致しましょう。これ以上は閣下をお待ちさせてしまいますので」

「えっ？葵さんが待つて……えっ？」

「総員！第一種戦闘配備！実力にて制圧！捕縛せよ！！ただし使用武器は既存の銃器を改造したものに限定！！魔法、能力の使用は極力控える！」

「……アイマムツ！！！！」

僅かに混乱していた者達がアイリの命令で迅速に動き出した。動き回るダズゲニーを惹きつける小隊（一小隊50名以上）と逃走防止のために退路を断つ四個小隊、準備ができ次第攻勢に出る一個中隊（500名以上）が各自の役割を果たすために動き出した。

アイリの「葵を待たせている」という言葉に雖は気をやつてしまひ彼女達が動き出すことを止め損ねてしまった。ただ、止める時間があったか、と聞かれれば“無い”とハッキリ言えるが。

「はっ！？そんなっ！お待ちなさい！！私が言い聞かせます！ですからそんなっ……」

「ご安心下さい。彼女達は訓練された淑女（兵士）にございます。必ずや（武力的に）制圧して見せましょう」

「はあ、それはすごい……はっ！ですからっ！そうではなくてですね！？あのっ」

「離様。どうかお静かに。始めました」

「あわっ、あわわわわわっ！？」

ここで戦闘開始を知らせる一発の銃声が鳴り響いた。

……………。

ダズゲニーと部隊員達の戦闘は確実に激化していた。ダズゲニーの被り物（白ダー ベーダー）の両目がチカチカと点滅している。

「くっ！なんなんだ！この少女は！？妙に身体が柔らかい！！」

「幼女言っなし！？ゲニーちゃんは22歳だお！それに貧乳こねはステータスなんだお！！」

「ウソおおっ！？てっきりオマセな小 生かと……ってそこっ！死

に曝せええっ!!」

ピンポンパンポーン 注意：ここで使用されている銃弾、爆薬、その他は全て非殺傷です。あくまで歓迎会なので死傷者はできません。ピンポンパンポーン

「ああっ!!また外した!!いい加減に当たれよな!」

「この子何気に無茶言うお!?ゲニーちゃんの直接戦闘力はゼロなんだお!?当たったら死んじゃうって!?あうっ!?今カスツたお!」

「チツ!」

どうやら今のはダズゲニーの勘違いだったようだ。舌打ちしたのは曹長の持つM4カービン銃の弾が切れたことに対してだった。無駄に弾薬を消費してしまった自分に腹が立ったのだ。すぐさま空になったマガジンを交換する。

「今あからさまに舌打ちしたお!?失礼だと思うな!?特殊加工された白衣が焦げるってどんだけ殺傷力高いんだぬ!」

「曹長!無駄弾を撃つな!よく狙え!!」

「アイマム!中尉殿!」

「華麗スルトに無視されたっ!?!?おまいら鬼だぬ!!!」

「いいえ、元悪魔の精魔奇兵です」

「せいまきへい?...ってなんだぬ???おおっ!?またカスツたぬ!?!?!?」

知らない単語に疑問を感じたダズゲニーだが、それに構わず飛び込んできた銃弾を避けることに必死になる。流石はダズゲニー謹製“白ダー ベーダー”の被り物だ。電気信号で脳を刺激して反応速度を向上させるとは……。

ただし、その回避方法が某ジャングルの王者並の変な踊りなのが相手の戦闘意欲をガリガリと削られていく。ある意味とても効果的なのがイラツとさせる。

「はあ…（チラツ）はあああ…」

「今度はタメ息かぬ！？それも結構深いお！？ゲニーちゃんが何したと言うんだぬ！？」

「貴様は！部隊の者に！セクハラを働いた！！それは葵様のものを汚したも同義だ！！」

無茶苦茶な理論だが曹長はマジメにそう信じている。精魔奇兵の面々は個性が強く大抵のことでは動じないが基本的に根が純情と言うか乙女なのだ。勿論個体差はあるが元悪魔や元精霊関係なく事実だった。

「セクハラじゃないぬ！？ちょっとした味見、じゃない！お茶目なスキンシップだお！？」

「そんな被り物をしていて信じられるかあーっ！！！」

「イッヒツヒツヒツヒツ バレたかwwイツツジョククなんだお！？」

「クツ！またか！？またその変な動きなのか！？ええいつ！腹が立つな！？もう！！」

「曹長！口よりも手を動かせ！！」

「わかってますよ、中尉殿！そろそろそらっ！私の鉛玉をたらふく食らいな！！」

曹長は腕輪から新たに取り出したM4カービンを構えて、二丁でダズゲニーに射撃を加えていく。他の者も彼女の動きを牽制するた

めに威嚇射撃をしていた。閃光弾も投入したが被り物の性能かわからないが効果が見られない。

「によほーっ!? 甘いつ! ホットケーキに蜂蜜とスリーベリーをトッピングして飲み物にココアがセットで出てくるよりも甘いおっ!  
! イッヒッヒッヒ」

ストロベリーとブルーベリーとラズベリーがトッピングされた三段重ねのホットケーキに芳醇な香りのする琥珀色の蜂蜜をタップリとかけ、飲み物に甘いココア…。普通に美味しそうだ。この上なく甘そうだが。

「ちよこまかと動きやがって。これでは埒が明かないか…。通信兵! 支援砲撃を要請! ポイントNW10!」

事ここに来て前線で指揮を取る中尉が暴挙に出た。艦内にある有事の際に対応する指揮所へ大規模な砲撃を要請した。これはデイモルフオセカだからできることだが普通の艦では爆沈してもおかしくない行為だ。

「アイマム! 前線よりCP! 支援砲撃を要請! ポイント…っ! なに、却下!？」

「なにっ!? 却下だと!? どういうことだっ!？」

「いえっ「バカか?」の一言で一刀されました。以後CPとは通信拒絶中です。…いやー、よく考えなくともこれは当然ですよー!。  
あはははっ」

「え? なんで? 砲撃はダメなの? こう…銃弾や砲弾をバラ撒くのは…?」

「いや、中尉殿? 招待した相手に砲撃って…普通に考えてダメじゃないですかね?」

「な、なに？そう、なのか…？これも歓迎の一環ではないか？スリル的な意味で…」

「……（ダメだ、コイツ。早く何とかしないと……）」

曹長と通信兵の心が一つになった瞬間だった。いや、なりたくてなったわけではないが。

こんなフザケター幕があつたが戦況に影響は無い。未だに銃撃はまだ止まない。ダズゲニーを仕留め……失礼、捕まえるまでは、だ。

「なぬおっ！？想定よりも射出速度も弾速も速いお！？なんで！？見た目はただのUZIウージーなのにつ！！ぬあっ！？あつちはFN-TPS！こつちも速い！っ、だけじゃない！？広範囲になつてるぬ！？」

ウージー。正式名称はIMI UZI。コンパクトな箱型サブマシンガンだ。イスラエルの国産兵器第一号として開発され53年から量産されたものだ。ライフルに比べて生産も取り扱いも簡易なものであるのも特徴だ。

FN-TPS。こちらはFN社の最新型ショットガンだ。主に警察や特殊部隊で用いるように設計された銃器である。銃弾の固定と速射における安定動作の確保に重点を置いている。

今まで被り物の両目がチカチカと光っていたのは彼女達の使用する武器の性能や何かを計測していたようだ。先程のダズゲニーの言葉がそれを証明している。弾速など人の目で測れるものではないのだから。

「今使用しているのは現行兵器だけだね！キッチリ改造されてるの

よー！つてか、なんで当たらないのよー！変な動きしてー！

「当たらぬ！当たらぬー！当たらぬー！イッヒッヒッヒッヒッ

きゃっ

「……………え？」「……………」

ここで“びだーんっ”とコケて地面にダイブしたダズゲニーの口から小さくて可愛らしい悲鳴があがった。予想外に可愛らしいのが意外だったのか今まで激しい銃撃をしていた彼女達の手が思わずと言った感じで止まっている。

そして今、彼女達の目に宿るのは女性らしいからかいのネタを見つけた時の妖しい目だ。猫のように「にしし」と笑っているような雰囲気 battlefield を包み込んだ。

「い、意外と可愛い声を上げるのね……」 優しく言いつつもニヤニヤする人。

「っ……………！！！」 ボツと赤面するゲニーちゃん！

「……………うわっ 照れちゃってかわいいのっ……………」 か

らかう気満々の人達！

「て、てててテレてないおっ！！バカなの！？バカなんじゃないかぬ！？今のは何かの間違っ、もとい！か、勘違いだお！？」

「……………お顔が真赤っ お顔がまつか お顔がマツカ……………」

「……………っっ！?!?!」 グルグル目になって光線銃と取り出した！

言葉だけ聞けば普通に女の子が友達をからかう馬鹿なやり取りと考えるが実際は戦闘が激化したの言うまでもない。

ダズゲニーを襲う銃弾が倍化したし、それを回避するダズゲニーからも謎の光線銃から不可思議な光線を射撃している。最もやや取

り乱している今の彼女では光線が明後日の方向に飛んで行くことが多々あった。

……。

目の前の苛烈な戦闘（？）に色々な意味でヒヤヒヤしている雛は何とかこの場を脱しようとさり気なく視線を周囲へやる。

「っ……（このままではゲニーちゃんが。なんとか加勢しなければ……でも、それには……）」

「……ふふふ。雛様、何かございましたか？」

「っ、これは……!?!？」

驚くことに雛が気付いた時には身動きを封じられていた。何が、と目を向けるとウネウネ動く縄が自分の身体を縛っていた。よく見ると縄のタグがある。そこには“縛るんですのっ！EX”と商品名が書かれていた……。

これに雛が脱力したのは言うまでもないことだ……。

これは、元はただのイタズラ用パーティーアイテムであり新世界で売り出そうとしたのだが失敗。理由の一つとして予想以上に高い捕縛率を誇ることから犯罪に使用されることを考えお蔵入りした品だ。

こんなところで無駄に高い技術力を注ぎ込んだためにジョークの域を超えてしまったがために日の目を見ることなかったバカアイテムの一つである。

「……あまりそこから動かれませんかように。不慮の事故でお怪我など

ツマラナイでしょう？ふふふ…」

「そうですね。不老不死とは言え痛みはあるのですから大人しくなさいませ」

「貴女達は一体何を…んっ！？」

「わたくし達にお任せ下さい。うふふ、安心なさいな。彼女達なら旨くやりますわ」

雛が身動きをすると“縛るんですのっ！EX”がキュツと更に締め付けてくる。因みに今の雛は縛られているわけだがその縛り方に問題があつた。変則的な亀甲縛りになつているのだ。

これは“縛るんですのっ！EX”を売り出せなかつたもう一つの理由だ。どうやってもこの縛り方を変更できなかった。こんなのは子供も居るかもしれないパーティーで使えるわけがない。教育に悪すぎるというものだ。

「…んんっ（擦れてっ…ん！こ、こうなれば！）　っ！！」

「むっ！」

「あらっ？」

雛は無事(?)に“縛るんですのっ！EX”の呪縛から脱出した。忘れてはいけない。雛も葵と方向性は違うがチートだということ。これくらいなら脱出するなんて訳がない。同じチートの作成物ゆえに多少手間取つたが脱出は不可能ではないのだ。

なにやら頬を紅潮させ甘い吐息が雛を妖しく艶やかに魅せているが、それは気のせいだ。着崩れた水色を基調とした和服から白い肌を覗かせて色っぽいが気のせいっいたら気のせいだ。

「はあ…はあ…んっ！ゲニーちゃん！ここからっ、離れますよ！！！」

「えう！？ちよっ！？まだデータ取り終わってっ！？ぐびっ！首が絞まってっ！？」

普通なら身体へ負担の大きい連続瞬動でダズゲニー（の襟）を左手に掴んで雛は精魔奇兵の包囲網から雛達は脱出した。

この時の雛は今居るここがどこなのか知らないために一か八かの博打だが平原に舗装されている道なりに移動することにした。遠くに都市が見えるからそこで身を潜めて後に葵と合流することを考えていた。

「<sup>ゲスト</sup>目標が逃げたぞ！追えっ！……（相手もなかなかやる。これなら新兵の訓練には好都合か……）」

「小隊単位で追撃しなさい！連携して目標の退路を限定して追い込むのですわ！！」

「……アイマムっ！！」「……」

アイリとリチラの激励とも取れる命令に部隊（メイド服以外）は設置火器を放棄して腕輪に格納された手持ちの武器だけを持ち直ぐに追撃行動に移った。

ここから盛大な鬼ごっこが開始された。都市まで移動する間に銃撃音が止むことも無く榴弾（非殺傷ですのっ）が砲弾の如き速度で投げられる。既にこれは当たれば非殺傷などと言っていられない気がするのは気のせいだろうか……。

かと言って無差別に攻撃しているわけでは決してなく。無闇に攻撃しているようでその実、雛の逃走経路を極力妨害、限定していた。そのため雛は移動が妨げられているため予想よりも要として進まないことに焦りを見せる。

「なかなか優秀ですね……とは言っても、うむむむ……」

あのアイリの言ったことが事実ならばこのどこかに葵が居ることになる。そして話しから推測するに彼女達は葵の家族だ。今ここで撃退することは容易い。だが攻撃すれば葵の家族を傷付けることになる。

「下手に反撃しては色々とマズイですよね……」

葵が家族を溺愛していることは初めて出会った時に聞いていた。

そのことで大事にされている家族へ多少の嫉妬心が芽生えたのも事実だ。その家族に攻撃するとなると葵に……き、ききき嫌われる可能性がつ……！

「それはちょっと……いえ、非常にマズイです……」

ここまで包囲網を一足飛びに飛び越えて一目散に駆け出してから本人にとっては程々の速度で走りながら移動してきた。ここから見える都市まで目測で……およそ17〜9分ほど。もう少し速度を出せば15分弱……。

今も背後から襲い来る銃撃、砲撃、爆撃を避ける。さて、これからどうするかを考える。そのせいで、ゲニーへの注意が散漫になるのは仕方のないこと。……仕方のないことですよ？

「それよりもぐび……ばなじでっ！びなぎまつ……！」

「あ、あら？すみません。大丈夫ですか？ゲニーちゃん……」

ポイツと手を放してダズゲニーを投げ捨て、もとい解放した。

「けほっけほっ…ふう。危うく雛様にデストロイされるかと思っただお！　　っと、こうしちゃ居られないぬ！あの未知の技術で改造された銃器を解明しないとならないお！！ヒヤッホオオイッ！！」  
「ゲニーちゃんっ！？そっちにはあの人達が！！」

ダズゲニーはまるでバビューンツと音がするほどの勢いで嬉々として引き返していく。ある意味で予想外でまたある意味想定内であるダズゲニーの行動に雛は驚いた。見捨てることもできないのでその場で防戦に徹することになる。

「うわっ！？白ダー　ベーダー幼女が来たぞ！！弾幕だ！弾幕を張って足止めしろ！！」

「目標2（ダズゲニー）は第二中隊がやれ！中隊構え！狙え！撃ええ！！」

「……撃つべし！撃つべし！撃つべし！！」「……」

「オオ！？その武器はなんだぬ！？はあ…はあ…もつと見せたまへ！！スイイツチオオンっ！！レッツお持ちかえりいい！！」

「グッ！これはっ！？銃が引張られっ！？んぐぐっ！！　　あっ！！？」

マグネットファイールド

MFを展開し、金属製の武器は強烈な磁力に引き寄せられる。そして痛いことに今使用している大半の銃器が現行兵器の改造品だったためにその殆どが引き寄せられていた。

「ぼっしゅうとっ！！大量にゲエエエツトだぜええ！！！！」

「こんのっ！？ふざけたマネをつ！くうう…！！そっだ（ニヤリ）」

ダズゲニーはMFで引き寄せた武器を手の一つだけ持ち興味深げに眺めていた。それでも攻撃は避けるのだから脱帽ものだ。持ち切

れない武器は格納庫（白衣のポケット）に収納することも忘れない。  
あとでバラして説明するためだ。

「イッヒッヒッヒッヒッ　ヒッ？……あ？ぬおおっ！！？？  
ピンの抜けた手榴弾が　！！？」

ドガーアアアッ！！！

「ゲニーちゃん！？」

「やったぜ！ザマー見ろ！！……まあ武器の代金にしたら高いけどな。  
私のボーチャードが……ううう」

ボーチャード。ドイツの銃工ヒューゴ・ボーチャードの手によつて1893年に開発されたもので曲線美を持つ世界初の実用自動拳銃だ。ただしとても重い。自動拳銃なのに1310gもする。

部隊員の一人が自分のコレクションが飲み込まれたことに涙する横で雖は突然の爆発にダズゲニーが巻き込まれたことに驚きを露わにする。だがしかし、繰り返して言うがこれらは全て非殺傷兵器だ。その証拠に……。

「けほっけほっ！ごほごほっ！……あー、ひどい目にあつたお！！……ん？なんか白くてネバネバするぬ！？……んにゅうう？（ぬちやぬちや）……な、なんだかとってもえっちいお！……お、おお？なんだか動き難くなつたよーな……」

爆発の煙が晴れた時にはお約束のアフロヘアになったダズゲニーの姿があつた。白ダー　ベーターのアフロ（でもアホ毛は健在）……ギャグになっていた。頭のネジ的な何かがどこかに飛ばされたのかもしれない……。

他には捕縛用の白い粘着溶液が彼女の身体に付着している。これは空気に触れると徐々に硬化する特性がある。その名も“もう逃がさないんですの…ウフフmk?”だ。捕縛に適しているのだから、う時は意外と重宝されている。

「誰かが一矢報いたか…。チツ、大尉！現状報告！どれくらい持っていていかけた!?」

「七割方持っていていきました！鉄製の銃器はほぼ全滅です！無事なのは強化樹脂や強化プラスチックで構成された銃器くらいです！」

それでも大半の武器は既にダズゲニーのポケット（最早これって不思議空間じゃね？）の中だ。まだ各自の腕輪に銃器があるとは言えまたMFを使われたら厄介だ。出したとしても現行兵器の大半はまた持っていていかれる可能性がある。

「…仕方ない、か。通信兵！CPに魔法戦闘の許可申請を出せ！」  
「アイマムっ!!!」

武装を無闇持っていていかれるのならば元精霊は己が属性魔法で、元悪魔は固有能力で戦えばいい。単純だが効果的ではある。勿論、それは捕縛系統か動きを阻害するもの、直接ダメージにならないものに限定されるが。

「……今のうちに逃げたほうがよさそうですね。…ほら、行きますよっ、ゲニーちゃん！」

「ぬなななっ!? 雛様っ、離してっ！まだ盗ってないモノがあるんだお!!! ちよっ!? また首がっ!!! ああああーっ!!!」

ダズゲニーのお陰で好機がやってきた。雛はこのチャンスを逃す

ことなくダズゲニーの襟首をグワシツと掴んで一目散に都市方面へ走り出した。またダズゲニーは犠牲になるのか……。

「もう…ゲニーちゃん逝っても、いいよね…?」

……本当に大丈夫だろうか？

……。

……。

COS・MOSの運転する車（装甲リムジン）で移動しているとパンパン、ドカンドカンという音が目的地方向から聞こえてきた。爆竹のような、銃声のようなこれは…花火か何かをやっているのかもしれない。

途切れることの無い音から考えるにあの子達は随分と派手に歓迎しているようだ。雛さんの“歓迎”はアイリが「お任せ下さい」と自信満々に言うから任せてみたけどどうやら成功のようだ。

「くくくつ、賑やかなものだ。雛さんも喜んでくれるといいけど」

「そうですね。我が君がお世話になられたので吾らからも一言礼を

……ん?」

「姉上、この強き気配。これは……」

「うむ。なんぞ、あったようだな。……COS・MOS、ここで止めてくれぬか」

「…了解」

いや、確かに強い気配を感じるけどこれは雛さんでしょ？何を警戒することがあるか。報告によると白ダー ベーダーの被り物をし

た幼女が居るとあったけど……思い当たる点がありすぎる。それは……ゲニーちゃんだ。それ以外にありえない。

雛さんだけじゃなかったのか……と思った俺は悪くないと思う。あの子って何気にイタズラが過激すぎて対応に困る時があるからな。向こうに居た時に一度温泉で……いや、この記憶は封印しておこう。一言言っただけなら綺麗で柔らかかった、かな。

とと、それは置いておいてだ。車が止まるとハオとユエがサツと降りた。訝しく思っても信賴する二人が何かを感じ取ったなら何かがあるんだろう。俺も車から降りて二人の睨み付ける方向を眺めてみた……けど、よくわからない。

「……何があった？」

「我が君……あれをご覧下さい」

「???? えっ？何あの砂煙？なんかこっちに近付いている気がするんだけど……」

今度は視力を魔力とナノマシンで強化してハオに示された方向を凝視してみた。そうすると土煙で詳細はわからなかったけど何かはこちらに近付いてきているのがわかった。それも猛烈な速度でもつてだ。

「わかりませぬ。……ですがなにやら問題が発生したのは間違いなさそうですね」

「我が君。決して吾らの側を離れぬように。……ラミエル。貴様もわかってるな？」

「あ、ああ」

『承知しておるっ！だ、だがなぜだろうか？とてもイヤな未来予測がするのだが……』

えええ、やめてよねー…。ラミエルさんの未来予測はよく当たるからマジで勘弁してほしいんだけど。厄介事とか今はいらなくて。

しかし、問題ね…。もしかしたら雛さんを招待する時に何か互いに誤解があったのか、それともただ単に報告漏れで雛さん達以外に連れて来てしまったのか。それとも他に何かあったのか。

「……はあ（これ以上は推測の域を出ないから無駄か…）」

「…マスター、先程追加報告が現場から拳がつて来ました」

「追加？やっぱり何かあったのか…」

「………！」

車内から降りてきたCOS・MOSが詳しく報告しようとした時に聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「………！！………！！？」

また聞こえた。これは、と思ひ声のする方向を凝視すると、なんと土煙の上がる先頭から聞こえるじゃないか。そこをジッと目を凝らして観察すると連続瞬動を繰り返す白い長髪の女性と幼女…て？

「………ん？あれは…？あつ！雛さ　ぶんごろがじつ！？！？」

「「我が君つつ！？！？」」

葵が雛を認識した時、同じく雛も葵を認識した。その瞬間彼女は……光になった。ズバリ言うところ雛は久しぶりに再開した葵を見て歓喜の余り、普段無意識に加減していたものが切れて音速以上の速度で走りながら条件反射で抱きついてしまったのだ。

結果は葵を10m以上の距離を吹き飛ばす（なのに葵を拘束することはやめない）という一層見事なボディタックルを試みさせた。

因みに陽月姉妹だが反応も対応もできた。その気にならなくとも迎撃も撃退も不可能ではなかった。ただし今回は相手が雛とわかり尚且つ傷つけることを葵自らが禁じたことで陽月姉妹は手を出せなかったのだ。

「うごっ…ったああ…なにが、ひゃっ！ちょっと雛さん！くすぐった、ははははっ!？」

「我が君!?!ええいつ!こやつ!離さぬか!!ユエ!お主も手伝え!?!」

「うむっ!　っ!?!くっ!張り付いて離れぬだど!?!梃子でも動かぬつもりか!?!」

今まで我慢に我慢を重ねていた葵スキスキ病の発症のため、周りの事なんて気にしない。今の雛は腕力100万馬力だ!もう彼女が満足するまで放すことはないだろう……。

「ラミエルさんだお!じゅるりっ　ハグっ、プリーイイズっ!!!によほーっ!!!」

『　ッ!?!緊急回避ッッ!?!やらせはせんっ!?!やらせはせんよっ!?!』

「そんなっ!避けるなんてヒドイお!?!あの激しかった日はウソだったため!?!」

『っ!相手が貴様でなければ避けたりせぬわ!?!それとアレは貴様が我を分解しようとしただけであろうが!?!』

対してこちらはある意味で愛しのラミエルを見つけたダズゲニー

は走りながら条件反射で頬擦りや手でワキワキ弄り倒そうとした。だが迫り来るダズゲニーをニュータイプの如く察知したラミエルは回避してみせた。

見詰め合う（睨み合う）ダズゲニーとラミエル。ここだけ雰囲気は世紀末の世界に対峙する宿敵同士のようだ。

「そつ、そんなつ!? ラミエルたんヒドイお!? あんなに熱い（戦いの）時間を過ごしたのに！ 忘れたのかぬ!？」

『だ か らつ!?! アレは我の与り知らぬ行いであるうが!?! 我は知らん!?!』

「そんなああ……イヒツ、イッヒツヒツヒツ! もうね? そんなこと言う悪い子はバラしていいよね? イヒツ: ねえ? バラしても

イイヨネエ? イッヒツヒツヒツ!」

『やめつ! やめぬかつ! 馬鹿者がつ!?! ち、近付くでないわ! やめるのだ! ダズゲニー! ブツ放すぞおお!?!?』

この時のダズゲニーは若干ヨダレを出しながら最早お馴染みとなりつつある手をワキワキさせて変態染みたもトい変態トがラミエルに迫る。彼女の目から光が消えかけてハイライト化している。

逆にラミエルは自身の大きさを全長5mほどに巨大化して大出力の荷電粒子砲をブツ放そうと準備している。もういつでも撃てるようにしているのはそれだけダズゲニーのことが天敵トラウマとなりつつあることが窺い知れるというものだ。

「……援護します」

『……礼を言っ』

「うによによによ!?! ロボ娘つ!?! ニユウフェイスだお! はっ

! そつか! ここがヴァルハラか!?!」

『ぬぬぬっ！またよからぬ気配が！？』  
「…危険度上昇。…目標の殲滅を最優先にします」

戦いの火蓋は切って落とされた……。

わんわんっ！にゃーにゃー！しゃーっ！

く暫くお待ち下さい。ただ今事態收拾の『屍を曝すが良いわああっ！』「当たらぬ！寧ろ当てに逝くお！」「…させません。シートっ！」どんがらがっしゃんっ！どがんどがんっ！失礼しました。事態收拾のために全力を尽くしておりますく

わんわんっ！にゃーにゃー！きしゃーっ！

二時間後…。

所々焼け跡がある平原のど真ん中でボロボロの姿で数人（なぜかダズゲニーは無傷…）が力尽きていた。事情もわかったので大多数は荒れた草原の整地と使用した銃器の撤去作業に行かせた。

「お騒がせして申し訳ありません……」

「いやいや、俺のほうこそ堪能もとい家族が迷惑をかけたようで申し訳ない」

俺が「騒いだのは家族達とゲニーちゃんですしねー」と雛さんに笑いながら言うと苦笑しながら「それもそうですね」と返してくれた。

「とりあえず……着替えが」

「閣下。既にご用意しております」

「きゃっ…!？」

「必要、と思ったらアイリは気が利くなあ」

「感謝の極み、です」

いつの間に簡易更衣室という名の大規模なテントを設営したし…。俺でも気付かなかった。…え？皆は気付いていたの？あ、雛さんは俺と同じ？そうか……。チートって俺よりも彼女達のことを言うのではなからうか？

しかも中には皆の服は勿論のことだが不思議なことに雛さんの服まである。それも今着ている水色の和服と同じ物が、だ。いつサイズを測って、いつ作ったのが疑問だ。実はメイド職ってリアルチートなのではなからうか。

「お、お待たせしました。…どうですか？」

「うん、いいね。綺麗だ。雛さんの髪に緋色の生地に紅葉をあしらった和服は似合うね」

「そうですか？ありがとうございます」

言葉だけはシラツと答える雛だがその内心は二頭身にデフォルメされた子雛達が嬉しさの余り踊り狂っていた。現実の彼女も心なしか顔が紅潮しているように見える。

「…でも葵さんは相変わらず黒スーツなのですね」

「くくくっ、これが一番着慣れているからね」

「むうう…」

それを誤魔化すために雛はジトツとした視線で葵を見て言った。それを葵は苦笑して返すが雛は納得していない。どうせなら違う服装の葵を見たいという女心、と言うか乙女心だった。

「「ごほんっ!!」」

「ッ!」

「ハオ?ユエ?」

「我が君。そろそろ紹介していただけないものでしょうか?」

「然様。吾らは未だに面識が無いゆえに紹介してもらいたいのです  
が」

「ご、ごめん。そう言えばまだだった。えっと、こちらが」

俺が紹介しようとしたら雛さんが一步前に出て深く腰を折ってお辞儀をした。その姿勢がまた綺麗でお手本のようだった。

「ご挨拶が遅れて申し訳ありません。近衛・雛と申します。今後ともよしなに」

「うむ。私はハオ。我が君の守護刀陽月の片割れにして懐刀だ」

「同じくユエだ。姉上ともども(短い間だが)よろしく頼む。ふふ  
ふ」

「ええ、こちらこそ。うふふふ」

あれ?なんだか雰囲気怪しいような?黒い...?何が起きた.....。

「フフフフフフ」

「ガクガクブルブル... (何この子達コワイ...)」

それから雛さんとここに居る主要なメンバーと自己紹介しあつて親睦(?)を深めることになった。一応ここに居たのは陽月姉妹、ラミエルにCOS・MOSだ。アイリとリチラはここに来る前に名乗っていたけど改めて自己紹介したらしい。

親睦(?)を深めたよな?ラミエル達の見るゲニーちゃんの目が

怖かったのが印象的だったのは忘れたいな……。だがしかし！二人は渡さんぞ？（ゴゴゴゴッ！）

「とりあえず移動しようか。前の雛さんみたいに今度は俺が案内するよ」

「ありがとうございます。実は楽しみだったのですよ」

「余り期待されてもなあ。でもまあ精一杯エスコートしようか」

「ふふふ。よろしくお願いしますね？葵さん」

COS・MOSの運転する車に乗り込み順々に移動して観光を楽しむことにした。本来なら魔法球内でもよかつたかもしれないけど組織が巨大化するに従って軍事、研究施設が建設されている。

今の魔法球「工房」は十数年前と違って警備上、軍事上の問題で機密だらけになってしまったから見る場所がない。だから、せめてこの戦闘移民艦ディモルフオセカの艦内だけでも楽しんでもらえればいいな。

「ぐすつ…ゲニーちゃん空気だお…！」

「ごめんなさい……」。

……。

後編に続く……。



第一回コラボ企画「近衛の守護者？」by 彼岸花さん。前編（後書き）

続きは後編へ！ですのっ！

ではでは！

第一回「ロボ企画」「近衛の守護者?」「b y 彼岸花さん。後編(前書き)

後編、  
ですのっ!

第一回コラボ企画「近衛の守護者？」by 彼岸花さん。後編

.....。

ここは草原だ。ここから円形に右回りに移動してここ草原から山岳地帯、海、そして中心部の都市部へと順繰りに行くつもりだ。そういうわけで一番手近な場所から案内して行くことにした。

勿論、各エリアへの移動はCOS・MOSの運転する車だ。山岳地帯に到着したら小型艇に乗り換えて上空から観光するから車両があるからCOS・MOSとは一旦別れることになるが海エリアへ移動する時には合流する予定だ。

メンバーはゲストの雛さんとゲニーちゃん、ホストの俺と護衛の陽月姉妹、お世話にアイリとリチラが行動を共にすることになった。他の皆は後片付けしてもらうことになった。まさかあんなにはっちゃけてくれるとは予想外だった。

.....皆も雛さんに会えて嬉しいんだね！ 微妙に勘違いしている。

因みにファレノが居ないのは都市部にある俺の洋館で“色々”準備するらしい。これにはミリー達も関わっているらしい。オリビエ達は、確かどこかで訓練だったかなんだったか。キチンと加減できればいいのだけど.....。

というわけで、だ。今皆で車に乗って草原エリアの道路を移動中です！

「皆さんから逃げている時は気にしませんでしたが長閑な風景ですね。それに、うん…風が気持ちいい」

雛さん…ごめん。皆の歓迎が割と過激だったんだね。やはり、イキナリ花火を使うのは引かれたようだ。何かを決定的に勘違いしている人。

車内から見える風景は草原エリアの名前通りに一面草原と所々に木々がポツンと生えている。雛さんは開いた窓から流れてくる風に身を任せていた。時折彼女の甘い匂いにドキッとさせられるのは秘密だ。

「あはは…そうでしょうか？草原に寝転がってお日様（人工）に照らされているといい感じにお昼寝できるんだ。…あつ。あつちに見える一本木の木陰がお気に入りなんだよ」

「ふふふ。そうなのですか？それはいいですね。私も自分の屋敷の縁側で日向ぼっこするのは好きですよ。それでついつい眠ってしまうって勘助に心配を掛けてしまうのです」

「あー、勘助君か。彼は雛さん第一だから…ね。そう言えば雛さん。勘助君は今？」

今の今まで忘れていた。荒川・勘助…。彼は雛さん第一主義と言ってもいいくらい彼女のことを大事にしている。向こうで「泣かせたら許さない」みたいなことを言われた時は雛さんのことを女性として好きなのかと思っただほどだ。

いや今それはいい。それよりもそんな彼だが雛さんが居なくなれ

ばどう行動するかなんてわかりきったことだ。それで雛さん？その辺りどうなのよ？

「えっ？ああそれは、まあ……心配しているのではないかと……えへ」

「Oh……！神は死んだ！“あの”勘助君のことだ！近衛忍の総力を挙げているに違いない！！……俺も部隊や艦隊なんかの戦力を準備したほうがいいだろうか？」

どこからか幼女声で「死んでませんよおおっ！？」と言う声が聞こえた気がしたが気のせいだ。

マジメな話し今回のようにゲニーちゃんが干渉してくることが無きにしても非ずと言える！今後はより一層組織としての地力と兵器や技術力を飛躍的に高める必要がある……！主に俺の身の安全のために……！！

「だ、大丈夫ですよっ！葵さんは（私が）守りますから！」

「そ、そう？ああ、そうだよね！（家族が）守ってくれるよね！」

「ええ！そうですよ！」

「あっはははっ」

「うふふふふっ」

……なんか話が噛み合っていない気がする。これは気のせいかな？

「はあ……観光を続けようか？」

「ふう……はい」

気分が重いなー……。雛さんの態度から考えるにこちらへ招待する時に勘助君が側に居たっばい。何も言わずに雛さんを連れ出したか

ら勘助君が暴走していなければいいんだけど。マジで俺ゲンナリです……。

「閣下。よろしければここからは自分がガイドを務めさせて頂きますが。いかがでしょうか?」

「うん、少しお願い……(マジで何か対策を考えておいたほうがいかもしれないし)」

雛さんの手前いけないとわかつてはいてもお願いした。対策は練っておきたい。勘助君だけじゃない。他のトリッパーや転生者が干渉してきた時のために対応マニュアルを作っておく必要があるかもしれない。ほぼ無駄になるだろうけどね!!???

「承知いたしました。それでは、こほん。……雛様。左手をご覧下さい」

「????森、ですか?」

アイリは車内マイク片手に毅然としたバスガイド風の体で解説を始めた。アイリの言うとおり雛は走行中の車内から左側に見える草原の奥に存在する鬱蒼とした大森林を見た。

「はい。あれは平原エリアに群生いたします大森林でございます。あの森には魔法の触媒、薬になるものは勿論、他にも希少な動植物などが豊富に存在します」

「はああ……すごいですね。あつ、あの大きな木々はまるで私の持つ“夏”みたいです。動物は居るのですか?」

「……居りますが現在は小動物が主です。閣下の所有する接続魔法球「牧場」内に存在する“奴ら”に比べれば可愛いものです。ええ、本当に……」

この時のアイリは背中にドンヨリとした霧困気を纏っていた。心なしか表情にも線が入っている。余程「牧場」にいい思い出がないのだろう。

「可愛い？え？……「牧場」には何が居るのですか？」

「あそこは……ふふふ、真の意味で人外魔境にございます。今では独自の生態系が構築されたことで何があっても不思議ではありません。ですがそれゆえに「牧場」は部隊のサバイバル訓練に適しているとも言えます」

「……………そうですか」

先生、空気が重い、です。いや、先生って誰だよ……。対転生者&トリッパー（プラス勅助君）マニュアルをある程度考え終わったからアイリのガイドを聞こうとしたら、これだよ。何があつたし……。

確かに今の「牧場」は名ばかりの弱肉強食の世界に成り果てているから否定もフォローもできない。だが一応“人外”魔境だから俺に被害はないから中の動植物は自由にさせていた。放任主義は失敗だったのだろうか……。

「…あ、失礼しました。説明を続けさせて頂きます。あの大森林の中央には湖が存在します。そこは」

「なるほど。そのようなことが」

「ええ、そうなのです」

「ふふふ」

「ふふふ」

そのままアイリのガイドを聞きながら草原エリアの案内は進んでいく。COS-MOSの運転する車も軽快に走っている。こうものんびりしていると眠くなるね……。

あれ？そう言えばゲニーちゃんが大人しい？はて？何をしているのか。

「フリちゃん！喉が渴いたお！お茶頂戴ちようだいチヨウダイ！」

「フリちゃんなどと呼ばないで下さいまし！？はあ…ただいまお淹れしますわ」

「センキュー！フリちゃん！」

「だから！フリちゃんと呼ばないで下さいまし！！」

「アチャー！？弓兵それはアーチャー！？…む？ツマラナイぬ！？そして今更ながらお湯は投げるものじゃないお！！フリちゃん！？」

「ふんっ！！！」

……訂正。とても元気だった。

……。

ところ変わってやって来ました、ここは山岳地帯だ。予定通りに小型艇に乗り換えて空中散歩と洒落込んでいたりする。車はCOS-MOSがしていたので小型艇の操縦はリチラがしている。

時間があればゆっくりと登山してもいいんだけど、それができない理由がある。そう、勘助君だ。彼の存在があるから観光に余り時間を掛けられないでいる。多少急ぎ足でもこればかりは仕方ないのよ。

俺も死にたくないし雛さんも勘助君に怒られたくない、って…え？気にしなくていい？いや雛さん？早めに帰らないと皆に心配されて…え？一緒に居たくないのかって？それはまあ居たいに決まって…ごほんごほんっ！それよりも、だ！

「雛さんって実はアグレッシブな人だったんだねー？」

「あうあうあう……」

「にやにや（テレル雛さんもかーいーなー）」

冷静に考えてみるとこちらに来て出会いがしらに取った行動は少々（大分）はしたなかったかもしれない。今思い出すと顔が真っ赤に染まり、両手を頬に当てていやんいやんと首をぶんぶん振っている。

ふむ…これが所謂“スーパー雛タイム”に突入したということか。

「こほん……結構高いんですね。標高はどれくらいなのですか？」

「はい。一番高い物で、はい、右手に見えます、あちら山脈が標高5284mを記録しております。こちらは道程も険しいことで徒歩による登頂は危険を極めます。また、山岳訓練にて使われることもしばしばございます」

中国⇨ネパール間にある標高8844mのエベレストよりも低い  
がトルコ共和国とアルメニア共和国の間にある標高5137mのア  
ラト山より少し高い山岳地帯だった。因みに富士山の標高は37  
76mだ。

ここでもアイリのガイドが続く。割と名所を押さえた説明をして  
くれるから俺も楽しめるのもいいね。よく考えたら俺も艦内のこと  
って詳しくないのよ。まだ暮らして一年も経ってないしさ。

「立派な山ですね。これだけ立派なら何か靈的に優れている場所が  
？いえ、でもこれは……？」

「むう…山岳訓練？それは初耳だ。ただの登山ハイキングだとばか

り

「葵さんでも知らないことがあったのですね…」

それはまあ…ねえ？先程にもあるように俺はここで暮らして一年も経ってないんだよ。しかも今日まで研究研究また研究で碌に艦内を見回ってない。精々が機関部や艦橋、宇宙港などの重要区画くらいだ。

生活区画であるここは流石に広くて全部は見えてない。見ている時間もなかった。それよりもメタトロンの研究が楽しくて夢中になったのもあるんだけどね……。

「いえ、雛様。閣下の認識も間違いではございません。あれらは訓練とは名ばかりの散歩です。<sup>ハイキング</sup>道程の所々に罠<sup>トラップ</sup>があるだけです。楽なものですよ」

えええ…罠って…えええ…。フオーしてくれたのかと思ったらこれだよ。アイリ達のやることだから妥協は無いはずだから単純な落とし穴から対地雷<sup>クレイモア</sup>のような爆発物まで様々な物があるということでしょう？

それって地獄じゃね？徒歩による登山で肉体的に疲労するのは勿論なのに罠を警戒しているから精神的にも追い詰められる。しかもこれってたぶんだけど気も魔力も使わないんだよ。地力を上げるために。きつと。

「…葵さん、これは散歩と言うのですか？私の認識が間違っていたのでしょうか？」

「ごめん、雛さん。俺も自信がなくなってきた。散歩ってもっとのんびりしたものだっただよね…」

雛さん、もう一つゴメン。実は久しく普通の人と接触することが無いからもうこれが日常として定着しているんだよ、ここでは。何があっても訓練や演習だし。

俺も今では違和感ない。…いや、少しウソ。それでも800年以上生きているんだ。赤の他人がどれくらい傷付こうが死のうが笑っていられる。いや、女子供にはちよつと気を掛けるかもしれないけど。それでもまあ正直に言って善悪とかどうでもいい。

だけど身内だとその限りじゃない。心配するって。あの子は怪我してないだろうとか、行軍中はご飯食べているのかとか、体調管理はできているだろうとか、睡眠はキチンと取れているだろうとか。挙げれば切りがない。

と、とと？家族のことだったから思わず話しに熱が入ってしまった。……あれ？それにしても静かだ。こういう爆発ネタ的な話には間違いなく絡んでくる幼女が、<sup>ゲニーちゃん</sup>ってあれ？

「……そう言えばゲニーちゃんは？妙に静かだけど」

「あ、あら？本当に。いつもなら賑やかに飛び回っているはずなのですが」

「小型艇に乗り換えた時には一緒だったよね？」

「え？え、ええ、そのはず……なのですが。はて？」

「いつの間にか居なくなってるし……。どこで逸れた？」

首を傾げて二人で頭を悩ませる。雛さんも気付いてなかった。いや忘れていたのか。俺も忘れていたけどね！だってつきりついて来るものだとばかり思っていたし。

「閣下。ダズゲニー様ですが【…現在位置は第6機関部です…】COS・MOSとアン、両名と行動を共にしております」

「はあ？また何で…いや、あの子なら当然かもしれない、か」

この艦には正、副、予備合わせて大規模相転移機関が28基ある。COS・MOSと別れた場所から一番近いのが第6機関部だ。なぜアンが一緒なのはわからないけど、たぶん待ち合わせか何かしていたのかもしれない。

「必要でしたらこちらで手を打ちますが？それ相応の用意もできております」

「ふむ…。雛さんはどう思う？俺としてはさっきみたいに混乱するよりは事前に確保したいんだけど」

「はい。そういうことでしたら。ただし……」

「承知しております。ダズゲニー様は無傷で連れてきましょう」

「よろしくお願いします。……（ボソッ）ゲニーちゃんオシオキです……」

「……っ！」「」

ゾクツとした！あ、アイリも？そうだねえ、今の雛さんを前にしたら背筋がゾクツとしたよ！ハッキリとは見えなかつたけど今のは黒<sup>ブラック</sup>雛さんだ！？黒いモヤが立ち上るのが幻視できた！……ような気がする……！

「……こほん。前は私共もおふざけが過ぎました。穩便に終わらせましょう……（言えない。新兵の実戦訓練に丁度いいと考えたとはとても言えない。あまつさえ、近衛・雛をからかおうとしたなど閣下だけには言えません！）」

「まあ何があつたかはあとで聞くとして何事も慎重に、ね？」

「……了解です、閣下」

これでもう大丈夫だ。ファーストコンタクトと違って誤解による衝突もないしね。とりあえずイキナリ戦闘に突入ということはないはずだ。

「…とまあ、アイリ達に任せて大丈夫だ。次の案内場所に行った時には合流しているよ」

「そうですか……（それでも皆さんとの出会いが会いだっただけに不安です…）」

「うわー、すごい不安そうだー……。まあイキナリ呼び出されたかと思えば追い掛け回されたんだから当然か。俺もまさか皆がそんなことを仕出かすとは思ってなかった。まあ切欠がゲニーちゃんだったのがまた笑えたけど。」

……。

……。

山岳地帯と平原エリアの中間にあたる場所。そこではCOS-MOSの運転する車両が近付くと秘密基地よろしく地面がガゴンとスライドして開き隠された通路が現れた。彼女は予定していた通りに通路へ入ろうとした。

この時だ。本来なら葵や雛達と居るはずの人物がここに居るとわかったのは。葵達と別れてから目的地へ向けて移動していたがダズゲニーが付いて来てしまっていた。

当然、不手際があったのだと考慮して引き返そうとした。だがダズゲニーは拒否。このままCOS-MOSについて行くと言い出し

た。理由として葵と雛の間に流れるほんのり甘い雰囲気とアイリ達のドス黒い嫉妬の空気に少しゲンナリしたらしい。

COS・MOSもダズゲニーの言うことを少し理解できた。葵と雛。この二人はさり気なく手を繋ぐことがあった。それも雛が葵の小指と薬指をちょこんと握るのだ。葵も満更ではないのか苦笑してシッカリと握り直すのだ。

その時にCOS・MOSは主魔動力炉が小さく異常発熱したのを覚えている。これは感情で言うところの苛立ちや嫉妬だがまだ生まれて間もないCOS・MOSには理解できていなかった。ただそれでもシコリのようなものは感じていた。

それはともかく付いて来ると言われても困った。今から行くのは艦船で言うところの重要区画に当たる機関部だ。葵が招待したとは言えそう易々と連れて行っていいものか。

無論、問題ありだが過去には関係者以外許すことのなかった魔法球「工房」にヘラス帝国第三皇女であるテオドラが踏み入ることを葵自ら許可した事例もある。一概にダメとは言えない。

とりあえず自分よりも先に生産された姉のような存在であるアンゲレカムに亜空間通信で呼び掛けて相談することにした。自分だけでは判断できないのでこれから合流する彼女の指示を仰ぎたかったのだ。

結果は肯定。<sup>アクティブ</sup>大きな問題もなさそうだから同行を許可された。あつさり許可が下りたとは思いが、深読みしてその裏は“問題があれば処理する”という風に取りえないこともない。

「艦………だと？え？マジで宇宙船かお！？」  
「…肯定」

マツドな科学者でエキサイトな研究者であるダズゲニーは解体してみたい、と溢れ出る探究心から即座にそう考えた。

そんな考えだとは知らないCOS・MOSは結果的に今運転しながらダズゲニーに戦闘移民艦デイモルフオセカのスペックを機密に触れない範囲で簡単に説明していたのだった。

「…先程まで居たのはこの艦、50km級戦闘移民艦デイモルフオセカの一生活区画でした。そして現在この艦の管制AIであるアングレカムと合流するために機関部へ移動中です」

「管制AIっ！？機関部！？いやっふうううう！！興奮が止まらないお！！ハア…ハア…じゅるり…は、早く逝かないか？」

「……了解……（危険度上昇。警戒度上昇。杉白・F・ダズゲニーを要注意人物と断定。対応策を検討中……成功率10…%以下っ！？再計算！再計算！！）」

興奮状態にある今のダズゲニーをCOS・MOSが相手取るにはやや経験不足のようだ。人海戦術を使うかここは艦内では圧倒的アドバンテージを誇るアンが居れば確率はこの上なく上昇する。

何事も物量や圧倒的な戦闘力の差があるなら敵う者など居ないのだから。

そうしてダズゲニーの質問に答えるという形で説明しつつ到着したのが数ある機関部の一つ、第6機関部だ。車を降りて歩く先には目的の姿があった。



ッ  
」

ただし静かな時間は一瞬だった。相転移機関の巨体の下からカンカンと金属の甲高い音やキキツキキツと金属の擦れる音がする。時折、バチバチと電流の洩れる音がするのは気のせいだと信じたい。

「ちょっとおおっ!?なに勝手にエンジン弄ってくれちゃってるのよおおっ!?!」

「つくなくいでっ!むゝすゝんゝでっ!イヒツ あいたっ!?!痛いおっ!?!誰だ!?!」

華麗な飛び膝蹴りがダズゲニーの側頭部にクリーンヒットした。当然、そのような場面を目撃すれば温厚なアンと言えど叱らずにはいられない。事によってはこの区画の空気を全て排出してでもダズゲニーを止める覚悟を持っていた。

「痛くしてるのよ!それと誰だ、じゃない!!なに勝手に弄ってくれちゃってるわけよ!?!停止させてないまま相転移機関をバラすなんてなに考えてるの!?!下手したら爆発!最悪で周囲を巻き込んで、まとめて相転移して消滅しちゃうでしょ!?!」

そんなことになれば一大事だ。何があってもいいようにいつでも沈む覚悟があるアンだがこんなことで沈みたくはない。

「アイヤー!?!ゴメンちゃい!!興奮して周りが目に入らなかった!?!」

「堂々と胸張って威張らないですよ!?!胸ないけど!?!」

「それはヒドイお!?!ゲニーちゃんのこれはステータスなんだお!?!そう言うアンちゃん中途半端じゃね!?!」

「ち、中途半端ああっ!?!貴女失礼ねっ!?!これでいいのよ!お父

さんはす、すすす好き…だって言ってくれたもん!!」

「……………フツ」

「鼻で笑われた!? フフ、フフフフ!! ど、どうしようか、COS - MOS うう…!? なんだかとってもイラツとしたんだけどおっ!!」

嘲笑されたアンは流石にイラツとしたようだ。どこからともなく警備用の無人機動兵器を呼び出していた。彼女の号令でいつでも捕縛ネット、電気ショック、特殊硬化溶液などを射出、放出できるようになったている。

そして気になるアンが今後成長する確率はぜ……………こほんっ、こはノーコメントだ。

「…落ち着いてください、アン。杉白様の術中に嵌っていますよ」

「えっ!? ……はっ!!」

「チツ! もう少してウヤマヤにできると思ったのに!!」

「貴女! 考えていた以上にアクドイわね!？」

そこから追いかけっこの始まりだった。逃げるダズゲニー、追うアンと無人機動兵器。COS - MOS はこれを見て頭を抱えている。その仕草が妙に人間くさいことから今回一番成長しているのは彼女かもしれない。

「っ、疲れた…なんかもう色々…」

「…アン。元気を出して下さい。貴女はよくやりました」

「う、ううう…COS - MOS う、私汚されちゃったよ…ぐすっ…

こうなったらお父さんにぎゅっと抱き締めてもらっしか」

「…否定。それだけは断固阻止させてもらいます」

「即否定された!? あの素直なCOS - MOS はどこに行ったの!

？」

「もうゲニーちゃん……ここに住んじゃっていいや……」

そして盛大な追いかけてこも終わってみればこの通り。いい加減に移動しないと葵達との合流が遅れるのでアンの自動運転で走る車に乗ったのだが、ダズゲニーはなぜか両側にアンとCOS・MOSを侍らせて悦に入っていた。

結局ダズゲニーは逃走中に色々エンジンを弄っていた。そして驚いたことにエネルギー効率が上がったのは嬉しい誤算(?)だった。最終的には細かな調整や他の相転移機関との同期などやることはあるが数%とは言え向上したのは大きい。

「……(ヒソヒソ)アン。ひとつ問いたい。彼女が当然のように肩を組んでくるのはなぜなのでしょう？」

「……(ヒソヒソ)えと……な、なんでだろうね？今更だけど、この子って杉白・F・ダズゲニーさんだよな？」

「……(ヒソヒソ)肯定。マスターと近衛様の空気に耐えられなかった、と言つてましたがそれだけとは思えません。おそらく技術情報収集が目的かと……」

「……(ヒソヒソ)普通ならそうだけどダズゲニーさんだよ？そんなせこいことするのかな……？」

「……(ヒソヒソ)報告では磁力結界によって改造した銃器を確保していたとあります。これから考慮するに十分にありえるのでは？」

「……(ヒソヒソ)でも……」

当然だが葵からダズゲニーへ返還要請は出していたので物自体は既に回収している。ただ、迷惑を掛けたのも事実なので数点の銃器は譲渡という形で引き渡すことになっていた。

「およ？何をさつきからヒソヒソしてるのかぬ？ゲニーちゃんも混ぜてませてマゼテ！」

「やああ！？イキナリ抱きつかないでよ！ビックリするじゃない！」

「杉白様。お戯れも程々にされたほうがよろしいかと」

「いたいつて！？イキナリ叩くのはヒドイお！！」

「……………必要な手段でした」

「開き直った！？ロボ娘にも関わらずなかなか強かだお！！」

>>ピシツくくってピシ???によおおっ!?によによ!?白ベエダ

ーが!?ゲニーちゃんの白ダー ベーダーが割れたぬ!??」

「 (ジイイイ)……………フツ」

「ゲニーちゃんが困ってるのに鼻で笑われたぬ!??」

正直言つて白ダー ベーダーはただの被り物ではない。各種計測機能が搭載されているは勿論、装着者の脳を直接電気刺激して反応速度や身体能力を強制的に底上げする代物だ。つまり白ベーダーのない今のダズゲニーの戦闘力は5以下だった。

「くおおっ!?このままだと呼吸が」

「艦内の空調、生命維持装置は正常に機能しております」

「……………くおおっ!?このままだと視力が」

「スキャンから推測しますと杉白様の視力は正常です」

「……………くおおっ!?このままだと純白の柔肌が光に焼かれて」

「それは単に引き籠もりがちで太陽に当たっていないだけでは?そもそも人工灯です」

「……………ぐすっ!もう何なんだぬ!?せめて最後まで言わせてくれてもいいじゃまいか!??」

「……………いえ、なんとなくこうしなければならぬと考えまして。他意はないのです、他意は」

「なんとなくだと!?理由がトコトン酷かった!?……………ほ、惚れそっだー」

それでもギャグをやめないのはダズゲニーらしいと言えらしいのか。ただし今回はCOS・MOSが彼女のボケの尽くを先回りして潰していた。

「こ、COS・MOSが黒い……？お父さん、この子は立派（？）に成長しているよ……」

「……どうでもいいですが、そろそろマスターと合流しますよ？それともアンは車内に残りますか？」

「えっ！？それはダメだよな！？ダメじゃないかな！？うんっ、ダメだよ……！」

スゴイ気合の入りようだった……。

……。

……。

ここは海エリア。水質は地球の海とほぼ同じ組成でできている。通常は水源として貯蔵、使用されることを目的として専用処理された区画である。勿論、水生生物や海藻も豊富に存在している。

因みに艦内をくまなく巡回している水は膨大なエネルギーを供給する相転移機関のお陰で水質処理を万全に行えるので上下水ともに潤沢に使用できる。これは閉鎖空間である宇宙空間では嬉しいことだ。

そしてこの海エリアは宇宙空間という閉鎖空間で乗組員の心身をリフレッシュできるように一部が遊泳区画として開放されているエリアでもある。

「…それでゲニーちゃんは何をしていたのさ？」

「いや、アンちゃんが寝かしてくれなくて……激しかったんだお！嫌がるゲニーちゃんに何度も何度も……」

「違っ！変なこと言わないでよねっ！？お父さんに誤解されたらどうするのよっ！？お父さん、違っよ？アンはお父さんだけのアンだからね？信じて？」

「は？あの、アン？落ち着いて」

「おおおっ！？アンちゃんはファザコンだったのかぬ！？近親姦は感心しないお！？……でも背徳感がおおおっでもベリイグウウッドだお！！禁忌とかイイヨネ禁忌とか」

「ダズゲニーさん！？今は黙っててよ！！お父さんが変に思うでしょ！？」

「おおっ！？これがツンデレですね？わかります！！ゴチです！！」

「ああ！！もうイヤああっ！！」

コラ？何があったかはわからないけどゲニーちゃんが何かしたのは察したぞ。アンに何した？それとも相手はCOS・MOSか？彼女もなんだか頭抱えているし……。

「……ゲニーちゃん？」

「っ！っ！……（ぞくぞくぞくっ！！）ひ、雛……さ、ま？どうしたぬ？なんか……こわいよ？」

「あまり……葵さんのご家族に迷惑を掛けるものではありませんよ？」

（ここにここに）」

「い、いえっさー……」

「すみません、葵さん。ゲニーちゃんが色々……」

「い、いやー、そこまで気にしなくてもいいよっうん……。そ、それよりも海だよ？泳がない？」

ふ、ふんっ！話題を逸らしたわけじゃないんだよ！？黒雛さんが怖かったわけじゃないんだからね！？海に入りたかっただけなんだからあっ！！

「海ですか？はい、いいですね。ですが生憎水着がないので…」

「ご安心下さいませ。色、種類、サイズを様々ご用意しております。ご試着はあちらの更衣室をご利用ください」

「……アイリスさんは本当に用意がいいですね」

「メイドの嗜みでございます。…さあ、閣下。こちらに水着をご用意しております。早速お着替えを。ささっ」

「は？あ、いや、ア、アイリ？ちよっ」

着替えるのはいいけどなんでアイリが背中を押してくる？なぜ同じ更衣室にそのまま入ろうとする？なぜ俺の服に手を掛けるのか？…。

「ちよっ と 待 ち な さい」

「何をなさるのですか？雛様…。自分は閣下のお着替えをお手伝いするのですが」

「なんでアイリスさんまで行く必要があるのですか！？寧ろ私が行きたごほんごほんっ！あまりにもハレンチです！えっちなのはイケナイと思いますっ！」

「何か不思議でしょうか？これくらいメイドとして当然ですが…」

今のうちに着替えてこよう。なんか知らないけど今を逃すと次が無いような気がするし。気配遮断や自分の気配を周囲へ溶け込ませて存在感を一定にして馴染ませて……いざ！ぬつきあっし。さっしあっし。しっのびあっし。にんにんっ。

「くっ！この人、素でわかってない！？実は天然さんだった！？ふ

う…いいですか？葵さんは男性です。故に女性のアイリスさんが一  
緒の更衣室に入るのはハシタナイと思うのです。あとは…：わか  
りますね？」

「???？自分は閣下“だけ”のメイドなのでご主人様のお世話をす  
ることは当然だと思つのですが。寧ろ個人的にはバツチ来いですし、  
何がイケナイのでしょうか？」

「この人、本当にわかつてない!?それに無自覚で積極的ですよ!  
?それとも狙つてコレなのでしょうか!?いい、意外に強敵ですね…。  
ですから」

着替えて戻つてくるとまだ何かを言い合つていた。水着に着替え  
ていたから何を言い合つているのか知らないけど時間も限られてい  
る(激怒しているだろう勘助君的な意味で)んだし早く着替えれば  
いいのに…。

「おおいつ!早く着替えなよ!俺は先に泳いでるからさ!」

「……………」

言っただけ言つて海へ駆け出した!だつて、なんだか二人とも表情  
が希薄だったような…：?まるで許容以上にショックを受けてシャ  
ツトダウンしたような感じ?微妙に口元が引くついているのがまた  
不思議と言つかコワイ?

「……………雛様のせいです。閣下のお着替えを手伝えなかつたではない  
ですか」

「ふふふ。それは何より。ですが私も出遅れているので早く着替え  
ないと…」

葵が立ち去つたあとで交された会話はこんなものだった。激戦と  
言つには熱くない、冷戦と言つには冷たくもない。不思議な熱を持

った言葉だった。

……。

色々と案内して回った最後に都市部へ到着した。地球時間で言えば今は午後6時過ぎくらいだ。生活区画の天蓋も時間スカイスクリーンに合わせて鮮やかな夕焼けに変わりつつあった。

ここでアイリとリチラが時間的には丁度いいかもと言うので自分の洋館に戻ることにした。ここでは今、ファレノやミリー達、他に料理が得意な子達の手で雛さん達の歓迎会という名の食事会パーティーが用意されている。

「お帰りなさいなの、葵ちゃん！歓迎会の準備は万全なの！」

洋館の表門から入り玄関を潜るとファレノが満面の笑みで出迎えてくれた。彼女がここに居るということは歓迎会の用意は終わっているらしい。

「うん、ただいま。それじゃあ早速……」

「閣下。雛様もダズゲニー様も長い時間ご観光なされたのでお疲れかと思われます。ここは暫し休憩を挟まれたほうがよろしいかと」

「え？いえ、私は疲れてなど……」

「ゲニーちゃんも疲れてなあべしっ！？」

アイリ……。今日半日でゲニーちゃんの扱いが雑になってない？何も言わずにレバーブローって……。ドンって聞こえたよ、ドンって。ゲニーちゃん床で悶絶してるよ？

この子があの苛烈な追跡を掻い潜った人物とはとても思えない。あの時と今で違うのは白ダー ベーダーの被り物をしてないくらい……。もしかしてアレに何か仕掛けがあったのだろうか？身体機能を強化するの何か？

「お二人とも海水に入られたので一度ご入浴されたいかがでしょう？……（ヒソヒソ）海水で御髪が痛みますし、そのような姿を閣下に見せる気ですか？」

「っ！そ、そうですね。では少し休ませて頂いてもいいですか？」

「????いいよ。それじゃ休憩にしようか」

「え〜？ゲニーちゃんは別に気にしなごつぺる!？」

えええー、今度は雛さんがゲニーちゃんを沈めたし……。息を吐き出したタイミングで双打掌って…痛くね？白目剥いているように見えるんだけど……。一体アイリは雛さんに何を言ったのか。

「はい。お部屋はご用意しております。案内はこちらの……」

「ファレノプシス・S・アニメスなの！うわあ、葵ちゃんからお話しには聞いてたけど綺麗な人なの！。白い髪がキラキラしていいの！」

「えっ？そんなことは…。ふふふ。ファレノプシスさんこそお綺麗ですよ。ウェーブした茜色の髪が愛らしいですし、オレンジ色のパレットが可愛いです」

「あははは。ありがとなの。あつ、それと私のことはファレノって呼んで！」

「ふふふ。はい。では私は雛とお呼び下さい」

「了解、なの！それじゃお部屋へ案内するの！ついて来てなの！」

「はい。お願いしますね、ファレノさん」

去り際に「それではまた後ほど」と雛さんとゲニーちゃん（雛さんに引き摺られている）はファレノの案内で用意した部屋へ移動した。

「……………あれ？」

このままだと雛さん達ってお泊りコース？……………これは色々とマズイのではなかるうか。主に怒り狂う勘助君的な意味で。能力的に負けはしないが精神的にクルからすごく逃げたい。

古来より忍者という存在は一度敵と認めた標的はトコトン追い回して必ず仕留める執念深さを持っていた。あ？と言うか掟だったか？どちらにしても相手したくないなあ……………。酒の席なら歓迎なんだけど。

「閣下？」

「いや、なんでもない。俺も一休みするよ」

「承知いたしました。歓迎会の準備が出来次第お迎えに上がります」  
「よろしくねー」

とりあえずお風呂入ってサッパリするか……………。

……………。

……………。

休憩するために一時的に葵達の前から辞した時。

「……………ファレノさん。私の髪って痛んでいますか？」

「え？んー？そう言えばガビガビしてるような…。ああっ！海に入ったの？シャワーだけだと塩分が落ち切らないからちよつと厳しいと思うの」

「ううう…アイリスさんに言われて気が付いたんですね。ちゃんとシャワーで流したと思っていたのですが。……枝毛とか心配です」

「あははは。だいじょーぶだいじょーぶ！葵ちゃん謹製ナノマシン配合シャンプー“落ちるんですZ”シリーズがあれば枝毛も髪の毛の痛みどころかトリートメントも可能！即解消なの！」

「おおっ！それはすごいです！！それで気になるお値段は！？」

「良く聞いてくれたの！この“落ちるんですZ”！なんとお値段据え置き298円！298円なの！しかも！今ならシャンプー、リンス、ボディソープと！もう一組オマケしてるの！！」

「わああっ、とても、とってもお得ですね！！」

「……………」

二人ともニコニコ笑顔なのに空気が停滞した。

「……………雛ちゃん、意外とノリがいいの。驚きなの」

「……………私自身が驚いてます。なんでこんなことをしたのか」

「とりあえず“落ちるんですZ”は浴室にあるから使うことをオススメするの」

「あつ、“落ちるんですZ”自体は本当にあるんですね」

「当然なの！これがあるお陰で私達全員の髪は艶やか且つサラサラを維持してるの！枝毛も髪の毛の痛みも無縁なの！」

「……………いくつか譲っていただくわけにはいきませんか？最近、向こうの世界で東西の確執があつてストレスが酷くて、うううう」

「…帰る時に2ダースお土産に持たせるようにしておくの。だから元気出して？雛ちゃん」

「ありがとうございます、ファレノさん…」

変なところで友情が生まれたりしていた。因みに気絶したゲニーちゃんはずっと雛さんが襟首を掴んで引き摺って運んでいたとか。不憫である……。

……。

……。

そして歓迎会の時間。俺も雛さん達も改めて入浴したようです。灰かに肌が上気していた。心なしか髪や肌艶がシットリぷるんとしている。

雛さんはこちらで用意したパーティードレスを着ていた。ピンクを基調としたもので所々に大小のリボンがあり遊び心と可愛らしさが強調されたものだった。

ゲニーちゃんは……なんで丈の短いチャイナドレスの上に白衣を着ているのだろうか？見た目幼女の彼女がチャイナドレスって、白衣って……。いや、なぜか違和感無く着こなしているけどさ。本当に不思議なんだけど。

それで俺の服装だがこれはいつも通りだ。黒のスーツに赤ワイシャツ黒ネクタイだった。……いいんだよ。これが一番着慣れているんだから。

洋館らしく立食パーティー方式で用意されていた。ローストビーフ、サラダ、スープなどや色取り取りのオードブルが各テーブルの上に並べられ、各種デザートも用意されている。

葵の乾杯の合図で歓迎会は始まった。雛も大げさなまでの歓迎振

りに照れ臭いのか仄かに頬を上気させていた。ダズゲニーは開始の合図と同時に料理の載っているテーブルへ奪取していた。花より団子という言葉を思い浮かべたのは葵だけではないはずだ。

葵と雛。二人で料理を突いている時、まだ名前どころか言葉すら交していない葵ファミリーの面々が代わる代わるに雛と、その側で料理をかつ食らうダズゲニーお挨拶していく。

勿論、歓迎会の主役は二人なので食事や葵との団欒に差支えがないように適度に会話の間を図って話していった。気のせいかな、その度に雛とファミリーとの間に火花が散ったように葵が感じたとか。

そして粗方主要なファミリーと顔合わせが終わった頃になると食事事も終わり各々が食後のお茶や酒盛りをしていた。

「いやー、回った、回った。ここまで本格的に生活区画を見て回ったのは初めてだ」

どうも！少しお酒が入って気分が高揚している九重・葵です！適度なお酒は気分がいいね！なんだか楽しくなってくるよ！……飲み過ぎると後日数人から真赤な顔して拗ねたように睨まれるから気を付けないとイケナイけどね。

「ふふふ。もう葵さんったら。それでしたら普段どこを見ているのですか？」

「んー？普段は開発兼研究区画か艦橋、それに機関部：あつ、あとは衛星カリストや他衛星の資源調査くらいかな。この艦の中を見て回ったのは初めてかも」

本当にね。渡された取り説的なものくらいでしか確認してなかつ

だから新鮮だった。それでも今日回ったのは生活区画だけだ。重要区画はそこそこ見てるけど具体的には見ていないから今後はできるだけ見て回ろうと思う。

「ふふふ。そうなのですか。ふふふ。　ん??」

「どうしたの？雛さん。いきなり固まって…」

表情がなんか引き攣ってるよ…？ポンポン痛いのか？なんでしたら医務室まで俺が直に連れて行くが。医務室に二人きりとか、なんだか背德的だと思うのは俺だけだろうか…。

「…葵さん？今“艦”って言いましたか？いえ、気のせいだと思うのですが念のために」

「ははははっ。いやだなー、雛さんったら」

「あ、ふふ、ふふふ。そうですね。そんなの気のせい」

「当然じゃないか。今居るのは木星宙域ガリレオ衛星の近く、つまりは宇宙だ。そして俺達の居るここは50km級戦闘移民艦ティモルフオセカ。アイリ達かゲニーちゃんに聞いてない？」

因みに今現在も四つある宇宙港は資源を満載した輸送船がピストン運搬してほぼ八割の稼働率を誇っている。同時に無人採掘基地を建設中だから完成すれば黙っていても月へ資源は蓄積されていくことになる　予定だ。

「ええええ！??わ、わたつ私聞いてませんっ！ゲニーちゃんからも！葵さんからも！皆さんからも！…え？ハブ？これってハブられて…えっ!??」

「え？だつてゲニーちゃんは機関部の一つに行つたつてアイリから聞いたけど。それに海では合流したから…本当にゲニーちゃんから聞いてない？」

「ええ。ちよつとお話ししたらゲニーちゃん震えるんです。寒くないのにおかしいですよ？ふふふ……」

「ハハハ。そ、そうだねー……」（ふるふるふるふるふるふる）

雛さんのオハナシでゲニーちゃんがマトモに話せなかったのか。

それなら仕方ない、かな……。俺だけでもゲニーちゃんに優しくしよう。彼女の扱いが時間毎に雑になっている気がするし。これじゃ余りにも……ねえ？

「そ、それじゃ簡単に我が艦隊の説明しようか？」

「はい。楽しそうですね、是非」

「じゃあ、まずは」

「閣下。雛様にご説明されるのは構いませんが機密関係に抵触される部分はお控え下さいますようお願いします」

「……はい。と言うかここ最近は特に思うんだけどどこから現れていつから居たの？」

「本当に……。私も気付きませんでした」

俺だけじゃなくて雛さんもビックリしているじゃないか。それと言われなくともわかってるって。少しお酒が入っているとは言え公私は分けているし開示できる情報レベルも区別もしている。

いやまあ久しぶりに雛さんに会えて気分がいいから口が滑るかもしれないけどさ。

「閣下のメイドたるもの影に日向に付き添いサポートするのは当然です。ご命令でしたら子守りから暗殺まで確実にヤツてみせましよう」

ふふん、と幾分得意気にその豊かな胸を張るアイリだった。言っ

ている内容はアレだけどこういうと行動を見ると可愛らしく思えるから不思議だ。

「なんと言っか……私のところも似たようなものですが葵さんのところのメイドさんってすごくオールマイティなんですわね」

「ははは。でも雛さん。これって始めてから一年くらいなんだよ？信じられる？」

「え？ええっ！？」

驚愕する雛さん。わかる。わかるよ。その驚きは理解できる。でもね？

「ふふふ。服装がメイド服になった以外は変わりませんから」

そうなんだ。よくよく考えると親衛隊服からメイド服へ代わっただけで仕事の内容に代わりはなかった。……とここで終わってくればいいのに次のアイリの言葉が波紋を呼んだ。

「それに閣下はメイドがお好きなようですので苦ではありません。寧ろ誇りですよ」

「へ、へええ……？葵さんメイドさんが好きなんですわ……」

「大好きです！ あっ。今の無し。いや事実だけど。あ、タンマ。雛さん待って。お願い刀を置いて」

アイリは事もあるうに俺の性癖を暴露してくれやがった。お陰で雛さんは俺の認識外の速度を持って刀を構えて突きつけてきた。しかも涙目で。拗ねるならもう少し可愛らしいやり方にしてほしいと思った俺は悪くないはずだ。

「むむむむむっ！！アイリスさん！私にもメイ」

「申し訳ございません。在庫がありません（ニツコリ）」 したり顔でキツパリ断る人。

「……………」 即答でガツツリ断られて愕然とする人。

雛さん…。なにもそこまでガツカリしなくともいいじゃないか。雛さんのメイド服姿とか俺も見たかったけど在庫が無いんじゃないよ。

「雛さん元気出そう？ほら、この艦の説明をするからさ。ね？」

「うううう…はい。お願いしますう」

「えっと、それじゃまずは」

艦の大雑把な説明と艦隊などの保有戦力数、それと科学技術と魔法技術を融合して現在可能とし確立した理論などをアイリに言われたように機密の部分はボカして話した。見せられる所は空間モニタ―で追記しながらね。

足りないところや雛さんが疑問に思ったことなんかは時々アイリ本人から補足や注意が入ったけど雛さんは真剣に聞いてくれた。

俺達の話しを聞いて雛さんは自分の別荘と比べて至る所でその違いに感嘆していたようだ。根本的な技術が違うから驚くのも無理は無いと思う。

「これが科学の力ですか…………。発展した科学は魔法と変わらないと言言葉がありますが…」

「科学だけじゃなくて魔法技術とか他世界の技術もあるけどね。まとめて魔導科学と一括りにしているかな」

「ふう…葵さん。何事も自重は必要だと思えますよ？」

「いや、向こうの世界で歴史に干渉した雛さんだけには言われたく

ないって」

「あう……それを言われてしまつと弱いです」

まあいくつかは雛さんも直接手は出してないしセーフって言えばセーフかもしれないけど。俺の場合は今でこそ月を半ば占領して私有化しているけどこれまで生きてきた中のその殆どがひっそりと暮らしているだけだったし。

「まあこればかりは雛さんのチートと俺のチートの方向性の違いだよな」

「内的指向性を持った力と外的指向性を持った力の違いですか」  
「多少の語弊はあるけどそんな感じだろうね。雛さんは近衛の組織を半ば率いる長的存在だけどどちらかと言うと極限まで個人技を高めたタイプ。逆に俺は付与された身体能力を更に科学や魔法に他技術で高めて集団としての“群（軍）”を極めたタイプだ」

最も！俺の場合はこの世界に来た時に遭遇したドラゴンに驚いて何の能力を付与したのかいくつか忘れていたけどね！今は大半（？）を思い出したから問題ないけど……。

それと軍団云々というのも雛さんのように単独最強か、一人だと怖いから俺の力で存在強化や特化などを施した（群）軍で最強かの違いというだけだ。

何度も言うけど俺は臆病で小心者なのよ。チートという存在的強さは持つていても単体だと怖くて戦えないんだよ。まあ一人でも家族が居れば自己暗示でも掛ければ「俺様最強おっ！！」とかできなくもないけどね。

ISの世界で教師をした時は“ちーちゃん”をモデルとした暗示

を自分に掛けたし。そうじゃないと気が持たなかった。俺の担当したクラスは確かに兵士として優秀な成績を示したけどなぜかM属性の娘になってしまったし……。

閑話休題……。

「なるほど……私自身も今まで以上に近衛忍を強化してみましょ  
うか……ふむ」

「くくくつ。雛さんがやらなくとも勘助君達なら自分達で自らを高  
めようとするとと思うけど？今でも準チートな感じだし」

「…ふふふ。そうですね。言われてみれば確かにそうです」

勘助君なんてある意味準チートじゃないか。雛さんという影響が  
無かったとは言わないけどほぼ自身の努力だけで今の力を身に付け  
たとか、もうね？それに俺が行った時に見た彼って若返っていたら  
しいじゃないか。まだ伸び白があるとか……ないよ。泣ける。

「まあ追い詰められているならやるのもありと言えばありだけどね  
くくくつ」

「まあ！私がそう簡単に負けるとでも？だとしたら心外ですよ」

「いや、雛さんって不老不死じゃないか。ただの不老の俺と違って  
事生き残ることなら最優秀だと思うよ？俺の場合は家族に助けても  
らわないと生き残れるかも怪しいしね」

「葵さんは単独でも保有魔力が多いのですから十分戦えると思うの  
ですが。修練も欠かしておられないのでしょうか？」

「修練は一応の護身術程度はね。保有魔力が多いのは俺の身の内に  
“小さくとも世界を内包している”からだ。その気になれば新しい  
世界すら創れるかもね」

面倒だからやらないとは言えない。神モドキになんてなりたくな

い。足かせにしかならないし、俺の将来の夢、と言うか目的は異世界間を家族と共に旅することだしね。

雛さんの談笑はそのまま続いた。途中からゲニーちゃんも加わって騒がしくも賑やかな楽しい時間は瞬く間に過ぎて行き、その日はそのまま夜は更けていった。

因みにだが各人が部屋に戻った夜に俺の部屋の前から雛さんと陽月姉妹の言い合う声が聞こえた気がしたけど気のせいと思い込んでそのまま寝ることにした。

……あれ？勘助君のこと忘れてね……！？……大丈夫だろうか。

……。

……。

そして翌日。雛さん達をお泊りさせてしまったことで勘助君が雛さんの無断外泊に怒髪天になっていないかと不安に思う夜が明けた日だ……。

なんで俺は父親に黙って娘さんと泊りがけの旅行に行った時のような心境になっているのだろうか？いや雛さん達を招待したのも泊めたのも後悔なんてしてないけどね。

雛さんは招待した時に来ていた水色の和服姿でゲニーちゃんも白ダーク ベーダーの被り物がないこと以外は来た時の服装のままだ。来た当初のことで傷んだ服は司令部の後方物資担当課にある被服部門が修繕していた。

そして今は草原エリアの一角にて物々しい機械機材に囲まれた雛さん達と、それを見守る俺と陽月姉妹、AI三人娘、アイリ達親衛隊が居る。それと帰還させるための次元転移門を調整操作するための研究班と開発班が別れに立ち会っている。

この場に居ない精霊・悪魔三人娘は予め与えられた仕事があるからここに居ない。あの子達は朝出る時に雛さん達と別れの挨拶をしていた。

「それでは葵さん、皆さん。この度はお世話になりました。皆さんの温かな持て成しに改めて感謝を」

「いやまあ、招待したと言っても半ば無理矢理だったけどね。喜んでくれたなら嬉しいよ」

逆に本格的な追撃戦闘になりかけたことが申し訳ない。アイリ達も何を考えたのか目標を捕縛する訓練になるとして新兵をけし掛けるのはなしだと思うんだ。訓練も演習もできる限りしているじゃないか。ほぼ実戦形式で……。

「ふふふ。確かに最初は驚きましたけど滞在していた時間はとても有意義なものでした。機会があればまた是非来たいものです」

「ハハハ……。それは無茶じゃないかな……。また来ようとしても勘助君が許してくれないよ」

俺の中で勘助君は既にお父さんの存在になっている。雛さんが娘的な意味で。絶対に許してくれないと確信できる。……いや雛さんが言えば許してくれると思う、表向きは。絶対に裏では見張りを立ててくる。もしくは本人自ら見張るだろう。

キラキラした目で監視されて殺気をピンポイントで飛ばされると

かマジで勘弁だー…。大体そんなことされたらウチの家族と正面衝突が……………今思ったけど最悪の場合、戦争が起きるんじゃない？

やっぱり雛さんと気軽に会うためには勘助君や近衛忍達、それにウチの子達を説得する必要がある。だから……………。

「大丈夫だと思いますよ？最初にここへ来ようとしたのはその勘助なんですから」

「は？あの勘助君がこつちへ？またなんで彼が？」

「それは……………ふふふ。秘密、です」

そう言うと雛さんがサツと近付いてきて俺の目の前に来て……………顔を近づけて別れ際の熱い接吻を。

「……………ふふ、ふふふ。ハオさん？ユエさん？この首に当たっている剣は何なのでしょう？」

されようとしたけど陽月姉妹が間に立ちはだかって未遂に終わった。ご丁寧に雛さんの首にそれぞれ白と黒の剣を突きつけて。表情は静かな笑みを湛えているのにその視線はどこか挑戦的と言うか冷たい？

「……………わからぬか？わからぬならば今のお主の行動を考えてみるが良い」

「今までならば我が君との接触は見逃していた。だがしかし……………」

「接吻ばかりは何人たりとも見逃すわけにはいかぬ！！」「」

ええー…。キスくらい家族間では挨拶みたいなものじゃないか。

こつち……………おはよう。ん（ちゅっ）「みたいな。この習慣は雛さんの世界から帰って来た時になぜか始まったものだった。まあ皆のこと

は大好きだから拒否することなんてしないけどさ。

そもそもの話したがハオもユエも今朝起きた時にしただろうが。  
ある意味爆弾発言したことに気付かない人。

「ふふふ…例えお二人が相手とて我が道を阻むというならば、押し通るのみ……!!」

「来るが良い！小娘が!!」 溢れ出た魔力だけで地面が陥没した。

「はあああつ!!やああつ!!」 地面が斬れて割れた。

「 シツ!!そこだ!!」 無数の剣を飛ばして山が削れた。

「そこですっ!!はああつ!!」 衝撃でクレーターができた。

「なんの！甘いっ!!せいつ!!」 迎撃したはいいが余波で若干海が蒸発した。

戦闘は苛烈にして過激だった。黙示録の五歩手前くらいには。少なくとも三人の争う理由は他人から見ればとても小さなことで、でも本人達にはとても大きなものだった。

「なんか知らんけど最終決戦的な何かが始まったような気がする…

…」

「ご安心を、閣下。どちらも加減されています。ですから艦が沈むことありません」

「加減……え？アレで？地が割れて山が削れて、海が蒸発しているんだけど…本当に？」

あれを加減していると言うアイリの感性に激しく疑問を持った俺は間違えているのだろうか？いや、本人達も“ただの”斬り合いだけで技らしいものは繰り出してないけどさ。

「はい。どれも修復可能なレベルです。問題ございません」  
「自分で乗っていてあれだけこの艦こそある意味常識外チートだよね」  
「閣下をお守りするためにはこれでも不足なくらいです。出来得ることなら惑星艦を推奨したいくらいです。そこで今当初の予定通りにドッキング艦を月で建造を……」

前半の台詞はいいよ。彼女達が守ってくれるとよく理解しているからさ。でも後半の惑星艦とかドッキング艦がどうと違って聞いたことが無いんだけど……。いやディモルフオセカの後部にドッキング部分があるのは知っていたけどね。

でも惑星艦って……それ無いねー…うん、無いよ。……はあ。まあ今その話しはいいか。

「アイリってさり気なくとんでもないこと言うよな……」  
「?????」

「……いや、わからないならいいんだけどね」  
「然様でございますか……」

理解しているのかしていないのか。慈愛すら含ませた小さな笑みを浮かべていた。近い将来アイリが自重というものをかなぐり捨てそうで戦々恐々する日々を送りそうです……。

現実（ネタバレ 雛、陽月姉妹の最終戦争編）から現実逃避したくてもう一方の招待客であるゲニーちゃんを見るとそこでは雛さん達とはまた違った別れ（？）があった。

「ラミエルたん！COS・MOSたん！アンちゃん！一緒に行かないか？」

バツと白衣を翻していつに無く真剣に言い放つゲニーちゃんだつた。てか三人を連れて行こうとしたら臆病者の俺と言えども流石に許容できないよ？侵略行動？バツチ来い、だ。

まあ行く行かないにしても本人達の意思が大事だけだね……。

「…お断りします。理由がありません」

『行くわけがなからう。我は分解バラされたくなどない』

「ちよつと、ね…。お父さんと離れたくないし…」

皆ありがとう！俺は信じていたよ！と言うか見捨てられたら月面都市に引き籠もるね！軽く千年くらいは！……鬱だ……死のう。あ？あー、ゴメン、アイリ。ちよつとイヤなこと想像したら鬱になっただけだから気にしないで。

「全部即答で断られたお！？ゲニーちゃんの一世代の告白を！？やべー…やべーよ！！ますます惚れそうだね！！」

『はあ…相も変わらず無駄にテンションが高いヤ「ぱつくんちよ」』

志 後ろ後ろっ！（笑）じゃなくてラミエルさんが食われた！？げ、ゲニーちゃん！ペツしなさい！お腹壊す、じゃなくて！人の家族になんばしよつとか！？

「んん？ああん、コロコロ…んぐんぐっ…ん？…あぐあぐ。ぺろぺろ…」

『ぬおおっ！？暗い！？ネトい！？ここはどこ…アヤツの口の中だど！？』

別れ際、この変態マッドは事もあろうにラミエルを口の中に入れられて

飴を舐めるように転がし始めた。

「んー…あるある…???んごっ!??」

体当たりしたのか知らんけどゲニーちゃんの頬が漫画のように伸びた。それとなんかすごく鈍い音がしたけどゲニーちゃんの口内は無事だろうか?ここから見る限りだともものすごく吐血しているように見えるんだけど……。

『はあ…はあ…くっ!油断した!まさか食べられそうになるとは…!!アイツは本当に人間なのか!??』

「…ラミエル。すみません。イキナリ食べられたのを見たので反応できませんでした」

「本当、本当。私も気付かなかつたよ。アレは最早執念だね、うん」  
「皆ヒドイお!?これは愛だよ!暫く別れるから熱いベエエゼを少ししただけだぬ!!!」

いやべーぜってゲニーちゃん……。それって口付けじゃない?今のはどう見ても捕食しているとした見えなかつただけだ……。

『喧しい!!我はいつ飲み込まれるのかとヒヤヒヤしていたのだ!貴様は帰れ!バラバラになって帰れ!!』

「惨殺宣言!?それもバラバラ殺人を宣言したぬ!?そんなにゲニーちゃんが嫌いかぬ!??」

『少なくとも好きにはなれぬ!』

「マッドな感じがちよつと……」

「…二人とも言い過ぎでは?……いえ同意見ですが」

「ぐはああつ!!言葉が心に突き刺さるおおおつ!?!?」

ラミエルとCOS・MOS、そしてアンの言葉責めでダズゲニー

シットストリーム・アタック

は撃沈した！！

す、すげええ。あのゲニーちゃんを言葉だけで倒しやがった。俺にはできないことを平然とやってくれる！そこに痺れもしなければ憧れもしないけどね！？いや頼もしくはあるけどさ。

それでまあいい加減現実逃避をやめた時には最終戦争的な何かは一応の終結を見せていた。三人とも服や身体を剣で斬られてボロツとしていたし、巻き上がった土埃や泥で汚れていた。

「あーもー…雛さんもあそこまでムキにならなくてもいいのに。ほらここ土汚れが」

そんな三人の汚れだけでも拭い取ろうとハンカチ片手に近付いていった。まずは雛さんからね。はい、拭き拭き。こういう時は小さな子供に見えなくもないかな。……可愛いからアリだね！！

「むぐつ……仕方ないじゃないですか。女には退けない戦いというものがあるのですから」

「はいはい。あっ、ほらハオも」

「あうつ……わ、我が君。これくらい自分でできます……」

子供じゃないんだから我儂言わないの。そもそも話しただけで汚さなきゃいいことでしょうに。

「いいからじつとしてる。次はユエだ。こんなに汚れて、もう……」

「ひゃつ……そ、そこは……！我が君つ、首筋は……んっ！」

まったくユエもこんなに汚れて、本当に仕方ないんだから。ほら、「こんなところ」まで……。くくくつ。つて？あれ？なんが突き刺

さるような視線を感じる？

「……………(ジイイイ)」

「……………何か、二人とも何か？」

「いえ……………」

「別に……………」

「ふう……………ふう……………んっ」

「まあいいけど……………」

雛さんと八才の視線が痛かった！なんでもないと口では言っているのに視線に込められた意味が真逆のような気がするのは俺の気のせいだろうか！？

三人ともどんだけはしゃいだのか知りたくもないけど、まあ丁度いいと言えば丁度いいのかな。雛さんにお土産を用意した甲斐があった。

「……………雛さん、これを」

空間内から取り出したのは一つの紙包みに入った紙袋だ。中の包みは丁寧に包装されたものが三つばかりある。

「?????これは？お洋服、ですか？」

「うん。雛さんって和服姿はよく見るけど洋服は余り見ないから。これを機にプレゼントでも、ってさ。いらなかったら捨ててくれても……………」

「捨てません！そんな勿体無いことするものですか！大事にします！飾らせてもらいます！」

「ははは。飾るよりはキチンと着てくれたほうが俺も、それに服も嬉しいかな」

「……はい。大事に着させてもらいます。ええ、本当に。……ふふふ。似合いますか？」

雛が自分の身体に当てた洋服は薄い水色を基調としたワンピースだった。ワンポイントに腰の部分で藍色のリボンでキュツと結っていて腰を細く見せるような作りとなっている。シンプルだが雛の髪が映えるように清楚な印象がある。

更に袋の中にはオマケで白いツバ広帽子と白い網目状のミュールが入っていた。どちらも藍色のリボンと紐がワンポイントとなっている。

「うん。似合ってる。想像通り、ううん、想像以上に綺麗だよ、雛さん」

「……（ポー……）」 ストレートに褒められて昇天中の人。

やっぱり雛さんは清楚な感じのものが良く似合う。膨脹色である白系統の服を着ても身体の線は細く見えるからいいね。うん、いい。

「……？？？雛さん？おおい？……雛さんってば！」

「はっ！？私は、何を……？」

「大丈夫？雛さんは……」

「これから元の世界へご帰還されるのですよ。雛様」

「ちよっ？ここで割り込まないでよ、アイリ」

話している時に割り込むのはマナー違反だと思うよ？まあアイリの言う通りではあるんだけどさ。いやいや、それでももう少し会話を楽しむ時間くらいあってもいいんじゃないかと思うわけで……。

「申し訳ございません、閣下。ですが準備も整いましたので急がれ

たほつがよろしいかと」

「例えそうでも…んー…」

「葵さん、いいのですよ。私も何も言えないままこちらへ来ているのです。早く帰って安心させてあげないといけませんしね」

「そう？……なんか招待したのにバタバタ慌しい感じでゴメンね。それと向こうに帰っても怪我とかしないように。わかった？」

「ふふふ。ありがとうございます。絶対、とは言えませんが出来る限り気を付けますね」

イエスともノーとも取れる言い回しだ。雛さんってたまに自己犠牲の精神が天元突破する時があるから心配だ。もう少し自分の身を大事にしても罰は当たらないと思うんだけど。

「なんか心配が拭えない返答だな……」

「ふふふ。すみません。こういう性分なので」

「まあ雛さんがそう言うなら……なんて言うと思ったか。甘いよ……んっ」

「あっ……（ボンツ）」 不意打ちで頬にキスされて瞬間沸騰した人。

ちょっとだけ不意打ちで雛さんの右頬を啄ばむようにキスしてみた。やっぱいつて！表面上は冷静と装っているけど内心ではお祭り状態だ。もう「なにこんな気障なことしてんの自分？」と小突き回している。

ただね？言い訳をさせてもらえるなら一応これには理由があるんだ。ちょっとした祝福儀礼と言うかなんと言うか、ともかくそんな感じの“少しだけ幸運に恵まれるように”という願いを術式に込めたものだ。

「お守り、ってわけじゃないけど多少の加護はあると思う。これでも小さいとは言え世界を内包した身だからさ」

「は…はい…その…ありがとうございます…えへへ」  
「う、うん……」

本当に気休めだけどね！死ぬような怪我を瀕死の状態で生き残る程度になるようなものだよ！

それと直接唇にキスしなかったのは…：恥ずかしかったんだよ！？そんなんでできるかい！？今の雛さんを見てみるよ！真赤になつて「えへへ」とか頬と言わず顔全体がテレからか恥ずかしさからかわからんが幸せそうに崩れてるんだ！

もうね？俺の中は「きゃーきゃー！わんわんっ！にやあにやあ！」てなもんです。雛さんは何？俺を悶え殺す気か？それとも萌え殺す気？頭撫でるぞ！？俺の撫でスキルを舐めんなよ！？

失礼。少し、いやとても興奮していた。申し訳ない。

そしてついに別れの時間が迫った。次元エンジンにも起動に十分なエネルギーを回されていつでも次元転移門を顕現させて稼働させることができる段階に入っている。

まだ名残惜しいけどいつまでも雛さん達を留めておくわけにはいかない。少し抵抗感を感じるが俺は右手を上げて開始の合図を送った。

すぐさま周囲を取り囲んでいる機械が唸りを上げて起動し中心地に爆発的光量が発生。そこに次元転移門が現れた。

最後に小さく触れる感触を右手の指先に感じた。その先には雛さんの白くて細いけどシツカリした綺麗な手があった。更に上を見るとなんとなく寂しそうな目をした雛さんの顔。

薬指と小指をちょこんと握る。相も変わらずその握り方は恥ずかしさを感じるが、それでも心地よさも感じた。

「それじゃ、雛さん……」

「はい……葵さん、それでは……」

もうここまで来たなら多くの言葉などいらさない。小さく触れる右手から雛さんの思いを感じ取ることができるから。

次元転移門が輝きを増していく。もう時間はない。光は帰還する者達の姿を覆い始めた。ここが別れの時だった。最後に見えるその姿はとても尊いものになる。記憶と思い出と、それから……。

そう、それは……。

「「また、会うその日まで……！」」

二人の思い（願い）はまだ繋がっている。“また会う”という小さくとも叶えたい願いが。

オマケ……。

「ゲニーちゃん最後は空気どころか存在感が抹消されてたぬ！？ 雛様ヒドイおー!!」

「す、すみません。葵さんと気分が盛り上がって……つい」

「ヒドイ酷いひどい!!! って…その二つのダンボールは何だぬ？」

「え？ ああ、これはファレノさんから頂いたシャンプー、リンス、ボディソープ一式です」

「え？ なにそれ？ お土産？ そう言えばゲニーちゃんだけマトモな O M I Y A G E を貰ってないお!？」

「あれ？ 一部の銃器を譲り受けていませんでしたか？」

「アレはアレ!!! これはこれだお!!! こうなったら奪う気持ちでもう一度…!!!」

「ゲニーちゃん？ あまり迷惑を掛けるものではありませんよ……？」

（ここにこ）

「ママ！ イエス！ マム！」

第一回コラボ企画「近衛の守護者？」by彼岸花さん。後編（後書き）

うん。色々やりすぎた。

詰め込みすぎたかもしれない。でも後悔はしていません。

納得できなかったら加筆修正してでも…いやそれやるとまた字数が増えそうな気がする。

いやでも書いている時は楽しいものですよ。

脳汁垂れ流しながら書いていると、こっ…意識がポーンと……。

はい知恵熱でした。考えすぎて、妄想のし過ぎで脳がアボンしてたしww

なんと言うかやり遂げた感と言うか自己満足ですね。

満足ではないけど今できるものは出し切った気がする。

寧ろそうじゃないとまた脳汁を垂れ流すことになりかねないww

ではまた！

誤字報告も歓迎ですよ？寧ろお願い。多過ぎて探せない…。

第七十九話「休息と故郷とそれぞれの想いと」(前書き)

やっべ!?

…いや特に意味は無い。気にしないでいいですよ？

今回はほのぼの系がメインです。

では続き！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。  
誤字報告も歓迎。

第七十九話「休息と故郷とそれぞれの想いと」

木星宙域…。

S i d e 葵

おはようからおやすみまで。どうも、九重・葵です（キリッ）。現在はディモルフオセ力艦内にある平原エリアを散策中です！同行者は例の如く陽月姉妹とラミエルさんだよ！

この平原エリアでは色々あつたなあ…。

んんっ、それはともかく。いつもなら今もメタトロンの研究と活用方法の模索と考察で連日徹夜する勢이었다。ではなぜ俺がここに居るのか？それは。

……久しぶりの休みだからだーッ！！！

「????我が君どうかなされましたか？吾らにできることならお手伝い致しますが」

「姉上、我が君は毎夜なにやらしておられたのだ。……察してやるが良い」

「うむ…？毎夜、とな？ふむ…いや、しかし何をしておられんぐつ。何をするのだ、ユエ？」

「ふふふ、それを聞くのは野暮というものだ。我が君も男おのこであるからな。色々あるのだ。色々、な」

「ふむ、そうか。我が君も色々あるのだな…。承知した！もう聞くまい！」

おうふ…なんだか知らないけどハオとユエに心配された気がする。それだけならいいけどユエの疲れたお父さんを気遣うような目が特に気になる！視線がなぜかイタイ…！優しいのに痛いとはこれいかに！？

……まあ気遣ってくれていることは理解しているからいいけど。

そんなわけで久しぶりの休み、というかいい加減に休めとアイリから強制休暇を言い渡されてしまった。

いやー、ここ最近はずっと研究室か実験室に籠り気味だったからねー。だからこそ久しぶりに森林浴でもしようところまで来たわけだ。

あははは…流石に二ヶ月間徹夜はやり過ぎたかもしれない。…いや、でもね？正直言って時間が足りない。とりあえず宇宙でやりたいたいことやできそうなことをやっていたら時間の足りないこと足りないこと。いや、まいった。

まあ待て。時間が足りないなら「工房」使えよ、って思うだろ？わかっている。俺も始めはそう考えた。でもそれじゃ意味がない。無重力下による実験ができないじゃないか。重力魔法を使えばいいとか意見があると思うが却下だ。ロマンがない。

そんなこんなで地球帰還まで残り一月を切ったし…。木乃香ちゃんとの約束があるから戻らないといけないよな…。えと、一応どんなにオーバーしてもあの子達が二年の三学期までには戻らないとね。

……木乃香ちゃんにまた泣かれるのだけは勘弁だからな！！

ふう…昨日まではずっとメタトロン関連の技術力向上と俺の趣味と実益を兼ねた次元エンジンの作成に費やしてきたわけだ。特に次元エンジンの試作が完成した時は…うん、色々あったんだよ。

一度目は、コーヒー零してそれに足を滑らせて稼動していた次元門に落ちるとか。この時は皆に心配掛けた…。帰って来た時皆に泣かれたのが一番きつかった…。

二度目は…これはまだいいか。

どれもこれもドジ踏んだというマヌケな話しだったのが泣けてくる。それに数々の世界へ行った先では累計して数十年も過ごしたのか。それなのにこちらの時間は殆ど進んでないとか…。もうね？なにこの不思議って考えちゃったよ。

…時間の流れと空間の違いがなければネギも麻帆良もないてなものですね。

新技術を導入するということは選択肢を広げてくれるし、より良い結果へ辿り着く手段が幅広く取れることにも繋がる。トンデモ空想科学が罷り通るこの世界群ならそれは正に無限大だ。

…まあ魔力も気もある世界だからそれくらいないと何もできない、とも思っただね。

俺もこの身体にイヤと言うほどバカ魔力を保有しているし、今も月では魔力を汲み上げて月面都市の倉庫や「工房」の「無限倉庫」に資源と同じように保管され続けている。

保有する魔力が今一番に割り振られているのは特殊な儀式で精製することができる霊薬に使われている。昔は俺の血液を媒介にして魔力を昇華して霊薬を作成していたのだけど流石に効率が悪いし大量も作れない。

それにさ…オリジナルの霊薬は長年服用することで陽月姉妹や精霊・悪魔三人娘のようなバグ娘が量産可能とか他から見たら悪夢じやね？周りが強いと俺の存在が霞んじやうし。

俺は弱いからね。惑星<sup>ホシ</sup>の二〜三個を砕くことくらいしかできないし。ハハハ…俺ザコですよ？もう死ぬしかなくね？…身体鍛えようかな。格闘戦とかジャッククラスまでしか勝てないし。あのバグに勝てても大した自慢にもならないし…。

……おっと…話しを戻そう。今のはマジでどうでもいいことだった。

霊薬や魔法関連の特殊な儀式場ができてからは多少効果が劣化しようとも生産効率を上げることにした。そうじゃないと家族の皆に行き渡らないしね。

霊薬の味付けもいつの間にか増えていた。スタンダードのイチゴ、メロン、リンゴ、ヨーグルトなどの味付けがある。変り種は“俺とお前のダイゴロウ”とか“黄ばんだ青春”とか“白と赤の交じり合い”などがある。

これらを他の人が飲んだら拒絶反応くらいは出るんじゃない？元々これは悪魔や精霊、精魔奇兵を強化するものだから他がどうなるかわらんのよ。それに新しい家族が増えたから今ある霊薬の在庫がなくなりそうだしね。

とまあ、難しいことを考えるのはここまでにしよう。折角アイリが（無理矢理）くれた休暇だしね。そうなると有意義に過ごさないと休ませてくれた彼女に申し訳ない。

「…それでユエ、目的地はこのまま道なりに行けばいいの？結構歩いているけど」

「ハッ。リチラとファレノの話ではこの先には小さな森と湖があるそうです。そこは花々が咲き乱れ落ち着いた雰囲気なので皆の憩いの場になっているとのことでした」

穴場的な場所か…。ハイキング（普通の）や森林浴だったら大体は大森林方面へ行くから。

「へえ、知らなかった。そんな場所があったのか。少し楽しみだ」

と言うか俺の知らないことが最近多くなっている気がする。技術的なものは脳内で自動更新されるからいいけど。こつこつ日常的なちよつとしたことでわからないことが出てくるし…。

「話を聞いた二人の様子を見るに良き場所のようです。きっと我が君もお気に召すのではないかと思われます」

艦内環境は暑くもなければ寒くもないという常春になっているから過ごし易いんだけど視覚から避暑を感じるのも悪くないよな。因みに俺は春が一番大好きです！桜とか儂いけど綺麗だよな。

……今の地球は十一月下旬頃だけどね！夏どころか冬真只中だし！

「そのようなものがあったのか。その湖とはもう近いのか？」

「艦内マップで確認するに湖は…おおあれだ。あの木々が囲っている場にあるはずだ」

「アレ、か。……ふむ？確かに水の匂いと音がしているな」

え？ここから目的地まで離れているのに水の音に匂いつて…。ハオとラミエルが言うけど、よくもまあ…。

「この距離でよくわかるね、ハオは。…少し驚いた」

「はっはっはっ！これも日頃の鍛錬の賜物ですよ、我が君！」

「うむ、然りだ。真に姉上の言う通りでありますよ。ふふふ」

鍛錬つて…。今まで疑問に思わなかったけど二人の鍛錬つて何をしているのかね？集団の訓練や演習をしているところは見たことあるけどこの子達個人の鍛錬は見たことなかった。

「…因みに二人はどんなことしてきたのさ？」

「……知りたい」「ですか？」

「……………」

何も言えなくなった俺を許してほしい…。でもこればかりは聞いちゃいけないような気がしたんだ。ハオとユエの微笑みの向こう側は覗いちゃいけないんだよ。

例えて言うなら白鳥のようなものだ。水上では優雅に水面を進む白鳥も水中では必死に足かきしている。この姉妹も同じだ。日頃から鍛錬を疎かにすることなく常に上を目指すからこそ今のこの子達がある。道具に頼る俺とは大違いだ。

……ん？そうこうしている内に着いたようだ。

目の前には小さな湖があり水面が静かに揺れている。それを囲むように色とりどりの花々が咲き乱れており、植えられている木々の優しい音が鳴り響く。木漏れ日の穏やかな光が降り注ぐという光景が目の前に広がっている。

「ここが、その湖か。想像していたのと違って広いね…」

「いや、実際はそれほどでもない。総面積は琵琶湖の四分の一ほどしかないのだ。水深も一番深いところで150m前後…と艦内マップのワンポイントアドバイスに記されている」

これはアンの手によるものだな、と最後に説明してくれたラミエルさん。木星までの航海中にアンが何かコソコソやっていると見えばそんなことをしていたのか。

お茶目だな！本人（本艦？）が可愛い上にこんな親切設定なんだから家族の鼻屑目をなくしたとしてもいい子じゃないか！因みに異議は認めない！挙げても粉碎殲滅ゴートウヘルするので悪しからず！

ラミエルさんが映し出す艦内マップを見て察するに、どうやらデフォルメされたアンがナビゲーションもしてくれる機能があるらしい。…やばいね、これは。ちっちゃなアンが愛らしいね！

小さなアンのお手伝いアンドロイド。略してプチアンドロイド！なんかそのままのような気がするけど、単純なほうがりわかり易いからいいか。プチアンとか呼んでみるのもいいかも。うん、いいよ。

ともかくプチアンを作ってみるのもいいかもしれない。ただの愛玩用ではなくお手伝いロボとしても使える汎用性を高めたアンドロイドを、ね。可愛いは真理だよ！姉さん！…いつも思うけど誰だよ、

姉さんって。

「うむ、良き場所である。ここならば我が君もごゆるりとできような」

「ユエよ、向こうに手頃に拓けた場所がある。そこを拠点としよう」  
「承知した。我が君もそれでよろしいですか？」

俺もそれに了承して拠点<sup>レジャーシート</sup>を構築して荷物を王の宝物庫から取り出した。

今更だけど俺の宝物庫って中身は宝物じゃなくて資材とか実験機材、無人機動兵器と自動人形がいくつか、それに他雑貨（食材とか食材とか食材とか）だから宝物庫と言うよりも“俺の秘密倉庫”って感じだけどね。

拠点（笑）を建設したから靴を脱いでレジャーシートの上にゴロンと寝転がってみた。チラッと視線を動かして横を見るとハオとユエも履物を脱いで綺麗に正座している。ラミエルさんは……フヨフヨと浮いて周囲を散策しているね。

『……（うむ、念のために周囲をサーチしてみたが不埒な反応はないようだな）』

あー、寝転がるとここまで歩いてきた疲れが癒されるね……。それに艦内には環境調整用の空調が働いているから微風が右から左、左から右と流れて気持ちがいい。

「……うん、ここは、いいね」

「はい、真に。風が気持ちよすごいです」

あ…チチチと小鳥の鳴き声が聞こえる。気温も適度にポカポカと暖かいし肌を撫でる微風も気持ちいいしで言うことないね。隣に座る八才も静かに目を閉じて心穏やかにしている。ユエは少し大きめのバスケットを取り出していた。

ん？……え？ちょつと待て。

ユエよ、どこからそのバスケットを取り出した？今さっき黒剣を軽く振るつたら空間が裂けてたよな？そこからバスケットを出したよな？あれって京都で一度だけ見たことあったけど移動用の空間移動技法というだけじゃなかったのか。

「我が君。ミリーから弁当を預かっております。もう昼餉ですがいかがですか？」

「あ、ああ、食べる食べる。久しぶりに外を歩いたからお腹空いちやった」

「ふふふつ。では早速準備いたしましょう」

何事もなくバスケットに入ったサンドウィッチを手にとったよ。直接触れるものだからキッチンとウェットティッシュで手洗いを済ませてからな。

空間のことは怖くて聞けなかった。そこまで興味津々というわけでもなかったし。…それに世の中には触れないほうがいいことが多いあるんだよ。特に陽月姉妹、精霊・悪魔三人娘、アンは敵に回しちゃいけない。これは絶対だ…。

そう考えると俺の癒しはラミエルさんとCOS・MOSくらいか。いや、他の家族も愛している。これだけは不変だ。他は許容するがそこだけは間違えてくれるなよ？

「ほら、二人も食べよう。ミリーの作ったサンドウィッチ美味しいよ。んむんむ…」

サンドウィッチは肉や野菜、魚のフライにフルーツと色とりどりに挟んでいてどれもとても美味しそうだ。彩りもよく、視覚から食欲を刺激してくる。ミリーらしく非常に丁寧にできている。

「うむ、然らばいただきますよ。どれ……っ」

「…ん、美味しゅうございますな。ピリッと辛いこれはチリソースでしょうか」

「歩いて火照った身体には丁度いい辛さだよ。あ、でもハオは気を付けて……」

ユエと俺が始めに手に取ったのは白身魚のフライと温野菜を挟んだものでチリソースのピリツとした辛さが効いていていい感じに食が進む。うまうま。まあ辛いものも好きだ。…俺とユエは。でもハオが……。

「我が君いい、ユエええ、舌がピリピリ致します…。ううう」

遅かった…。運が悪いことにハオも俺達と同じ物を食べてしまったようだ。涙目のハオとか可愛いね！普段とのギャップが堪りませんな！でも一度口をつけたものは捨てちゃダメだ。残すくらいなら俺がもらおう（キリッ）。

それよりもこのチリソースはそんなに辛くないはずなのに、これでもまだダメなのか。彼女がお子様舌なのは割と知る人ぞ知る事実だったりするのは公然の秘密というやつだね。

「ふふふ、仕方のない姉上だ。ほら茶だ、飲まれよ」

「う、うむ、すまない。んぐっ熱いつ!？」

「何をしておるのだ、姉上……」

『ハオめ、何をしておるのか……』

まだ熱く湯気の立つ紅茶をぐいっと仰いだハオをユエは呆れと心配を半々にしたような表情で苦笑している。それでも姉の背中を優しく撫でているのは彼女の性格が出ていると思う。

「ほら、ハオ落ち着いて」

「あ、ああ、我が君のお手を煩わせて申し訳ありません」

「いいからいいから。俺とハオの仲なんだから気にしないで」

俺もただ見ていたわけじゃない。ハオが零した紅茶をタオルで拭いたり、ハンカチでハオの口元を拭ってやったりと世話していた。こういうお世話って割と得意だったりするのよ、俺は。

「わ、我が君と私の…仲…ふふふ」

「????どうかしたの?」

「姉上……」

『ハオめ……』

よくわからないけどハオがクネクネし始めた。それに呆れた視線を送るのはユエとラミエルさんだ。

なんでユエとラミエルさんは互いに見合ってタメ息を吐くのさ? ハオもいい加減帰ってきてくれ。はあ、本当に何があつたし…。俺にも理解できるコミュニケーションをしてほしいと思いつつながら人工的に投影された晴天を見上げて考える。

……木乃香ちゃんや明日菜、そして刹那ちゃんは元気にしている  
だろうか、と…。

Side out 葵

麻帆良学園中等部女子寮…。

Side 刹那

残り一ヶ月。これは葵さんが麻帆良へ帰ってくるとこのちゃ…お嬢様と葵さんが約束した期日だ。

今は寮の自室にあるキッチンで夕飯の準備をしている。手は食材を調理するために動いている。しかし考えることは別のことだった。

「どうしよう…」

葵さんは麻帆良を旅立つ前に私に“とある事”をするように無理矢理約束させた。私を思っただと理解はできても感情が納得できないでいる。それは私にとって単純なようで複雑なことだった。

約束の内容はお嬢様：“このちゃんと昔のように接すること”というものだ。お嬢様を慕う気持ちや守りたいと思う気持ちに嘘はない。

だが、私は昔…お嬢様を守れなかった。まだ小さく幼い頃の話し

だ。お嬢様と共に川の側で遊んでいた時、お嬢様が足を滑らせて川に落ちてしまった。その時の私はただただオロオロと泣き喚くだけでお嬢様を助けることもできなかった。

結果的にお嬢様は近衛家の者達に助けられたので事無きを得ることができた。でも、その時の私はそれがとても悔しかった。耐え難いほどに自分の無力さが許せなかった。お嬢様を守りたかったのにその力すらなかった自分に腸が煮え繰り返った。

それからだ。お嬢様を守る力をつけるため、ほぼ全ての時間を神鳴流の修行に費やした。そのことでお嬢様が寂しい思いをしていることは葵さんから聞いていた。それでも……やめるわけにはいかなかった。

……お嬢様のために……やめるわけにはいかなかった。

そして一定の修行を終えたことで神鳴流の技を修めることができた。流石に本家筋のみに許される“二の太刀”という奥儀は教えてもらえなかったけど……。それでも十分な実力をつけられたと思う。

ここ麻帆良でお嬢様を見た時は嬉しかった。私を見ると笑顔を見せて駆け寄って来られた時は思わず抱き締めそうになった。……でも、それはできなかった。否、できないというべきか。

私のような混ざりものが高貴なお嬢様の隣で笑うことなど許されるはずがない。穢れた忌まわしい私がお嬢様の隣になど立っていないわけがない……。私は影からお嬢様をお守りできればいいのだ。

そう思っていたのに葵さんはお嬢様と仲直りしろ（いや決して喧嘩しているわけではないが）とそう言う。私の護衛としてのケジメ

で必要なこととは言え、お嬢様のご厚意を無碍にし続けた私に対してだ。

今頃になってどの面下げて話しかけると言うのか。こうなると“お嬢様に話しかける”、ただ単純なそれだけでも私にとって過度な緊張から多大な労力と気力が必要だ。

だが…葵さんに言われたことを実行できなかったとしたら？このままでは座して無為に過ごせば……。

「葵さんに何をされるか…」

それなのに私は約束の期日が迫っているのに達成できないでいる。このままでは本当に大変なことになる。あの時の葵さんの表情から読み取るに絶対に碌な事にならないのは確実だと私の勘が最大限の警鐘を以って訴えてくる。

「どうにかしなければ、マズイことに…」

「何がマズイのかな？」

「ひゃはあああつ！?!?!？」

お、驚いたつ…！イキナリ背後から声を掛けるとは何をするか！？今の私は調理中だ！手元が狂い包丁で手を切ってしまったらどうするんだ！

「……イキナリ叫ぶとはヒドイじゃないか」

「た、龍宮っ！？気配もなく背後に立つなっ！」

「何を言っているんだ。何度も声を掛けたのに気付かなかったのは刹那じゃないか」

「なっ、なに…?!?!それはすまない。少し考え事をしていて気付か

なかった…」

イキナリはお前だ！と怒鳴り返しそうになったが龍宮に何度も呼んでいたと言われた。こうなると気付かなかった私が悪いと思いつみ止まるしかない。実際に背後に立たれ声を掛けられるまで気付かなかったし…。

龍宮に謝った。悪いことをしたと思ったなら素直に謝罪する。これは私が幼い頃、葵さんに教えられたことだ。同じように嬉しいことをされたら感謝するようにとも教えられた。

「構わないよ。ところで鍋が沸騰しているようだけど…いいのかな？」

「えっ？ああっ！？って熱ッ！」

龍宮の言う通り、コンロを見ると火に掛けた汁物の鍋が沸騰していた。慌てていたのが悪かったのか鍋蓋に手を掛けた時に熱い水滴が私の手の甲に飛んできた。熱い！そう感じた時には水道で洗い流していた。

最も熱さを感じるだけで火傷にもなっていない。多少赤くなっているがこれくらいなら問題ない。気を流せば直ぐに治る。

「大丈夫か？救急キットならあるが」

「だっ、大丈夫だっ！火傷などしていないから…あっ！炊飯器のスイッチ入れるの忘れていた！」

バツと振り返った時に気が付いた。視界に入った炊飯器に電源が入ってないことに。お米を研いで炊飯器に設置したまではよかったが肝心のスイッチを入れ忘れていた。これから炊くとしたら一時間

近く掛かる。失態だ…。

「はぁ……刹那、今日の当番は私が代わろう。だから君は休むといい」

「いやっ、私は大丈夫だ！問題ないっ…うわっち!？」

くうう…！出汁巻き卵を作ろうとしたら指が熱したフライパンに触れてしまった。何を焦っているのか。理由は葵さんとの約束のことだとわかっているが調理している今は関係がない。私はまだまだ未熟だ…。

「そんなに注意力散漫で居られたら信じられるわけもないだろう。いいから休め」

「ぐっ…わかった。…すまない。…その…あ、ありがとう」

「なに、構わないとも」

龍宮の言葉に今は甘えよう。この借りは仕事の時にでも返そう。いや、彼女のことだから好物の餡蜜を奢るほうがいいかもしれない。

「……（お嬢様…葵さん…）私はどうしたら…」

「何か言ったかい？」

「い、いや、なんでもないっ」

「???？」

……約束、守れそうにないかもしれないです…（ガクガクブルブル）。

Side out 刹那

麻帆良学園中等部女子寮…。

S i d e 木乃香

少し早いけど夕食の下拵え中や。ちょい手間の掛かるものは作ってラップしてある。余ったら明日の朝ごはんにしよ思うんや。

思えばこの十一ヶ月間は長かったわー。小さい頃から一緒に居てくれた兄さまがどこかへ出掛けてからは残された私はとにかく長く感じたわー。本当に…本当に長かったんやー。

兄さまと離れるなんて考えたこともなかったから尚更そう思うわー。昔ちよつとしたことがあってからせつちゃんは私に素っ気無くなって寂しかった。今もやしなー…。その寂しさを今度は兄さまが離れることで痛感したわー。

でもなー？それも終わりが近いんよ！約束の期限が残り一ヶ月を切ったんや！もう直ぐ兄さまが帰ってくるえ！やったわー！

「兄さまが帰ってくるまで残り一月を切った…。もう直ぐ帰ってくるな、アスナ」

「ああ、はいはい。そうね。毎日同じようなことを言わなくてもわかってるわよ…（いつにも増してテンションが高いわね。このかったらどうしたのかしら？）」

…あ、でもあの兄さまのことやから一ヶ月は誤差の範囲だ！とか言って遅れて来るかもしれんわー。確かに約束する時に一年と

は言ったけど具体的に帰ってくる日にちは決めんかったからなー。

そうそう、そーなんよ！なあなあ信じられる！？兄さまったらヒドインよ！兄さまが出掛けてから今日まで一度も電話どころか手紙すら連絡がないんよ！？これは怒ってもええと思うんや！

アカンわ…アカンよ。私、兄さまに嫌われてるんやるか？一度も連絡くれんのはそういうことかもしれんわー。兄さまは私のことどう思ってるんやろな？

「……………そこんとどう思う？」

「えっ！？どう思うって…イキナリ聞かれても意味わからないわよ（こ、今度はイキナリ落ち込んだわね。ホントにどうしたのかしら？）」

ううう、でも兄さまは私に優しくしてくれる。兄さまが旅立つ前日にあった宴会では泣いた私を抱き締めてくれた。寂しい時は気が付いたら側に居て頭を撫でてくれた。嫌われてるってことはない…よね。うん、大丈夫や。

兄さまが居なくて寂しい。それでもルームメイトのアスナ、図書館探検部の夕映、ハルナ、のど…本屋ちゃんという仲間クラスの皆が居るから楽しい毎日を送ってたんや。そやから兄さまの居ない今も我慢できる。

それでも…父さまと同じ、でも少し違う暖かさを持った兄さまの腕の中は麻帆良に来てからも安心できる場所やった。今はそれが遠くに行ってもたから無い…。それが寂しい。

で・も！それも残り僅かや！あと一ヶ月もしたら愛しい兄さまが

帰ってくるんやーっ！もう今から待ち遠しいわー。兄さま早く帰ってこんかなー？んふふふ。

「もう、アスナは嬉しくないん？兄さまが帰ってくるんよ？」

「えっ？それは、まあ？嬉しくないわけじゃ、ないわよ？うん…）え？さっきの質問はそーゆーこと？って！なんで私は動揺してるのよ！？」

「……………なんかアスナからラブ臭がしたような？」

おかしい…。アスナの反応がオカシイ。なんで目そらすの？なんで頬が赤いの？なんで嬉しいの隠すの？　なんで仄かに想うような瞳なんよ？

……………これは問い質さなアカンかもしれんわ。なあ？そう思うやろ？アスナ…？

「き、きき気のせいよ！！私は高畑先生一筋なんだから！！ねっ！？（夕飯前にこのかのオハナシは勘弁願いたいわ！）」

「……………そうやね。そういえばそうやったわ。私なに言ってるんやろ？」

ううう、アカンのは私やったわー。何トチ狂つとるんや。アスナは高畑先生のが好きやって知ってたはずやのになー。ゴメンなー、アスナ。

「（ホッ、助かった。…………？何が助かったのかしら？）…それで何してるのよ？夕飯のオカズなんか詰めて」

「ん？これ？えへへ、これはせっちゃんにお裾分けしよ思ってたな」

そうなんよ。最初に言ったと思うんやけど今お夕飯の準備中やっ

たんよ。こうしてアスナと話している時も調理する手は止めとらんよー。今はお料理の殆どができたからタッパーにちよちよいつと多めに作ったオカズを詰めてるんやー。

「あー、幼馴染、なんだっけ？（ん？今までは何もしなかったのに今日に限ってお裾分けに行くの？）」

せつちゃん、どないしたんやるな？いつもなら無視されるだけ（兄さまが言うにはせつちゃんは私をすごく気に入っているらしい）やったのになー。

これというのも最近のせつちゃんは挙動不審やねん。私と目が合うと逸らすのは相変わらずやねんけどそのあとは急にソワソワしだすんや。今までにない反応で私も戸惑ってるわー。

兄さまが居なくなって暫くしたら今みたいになってんよー。……んむ？兄さまが居なくなって、から……？そういえばせつちゃん、兄さまとは普通に話してた……。それもものすごく親しそうに……！

まさか……そーゆーことなんか？せつちゃんも兄さまに？困ったな……。兄さまのことは大好きやけど私はせつちゃんも大好きなんや。どっちかなんて選べんわー……。

……んー？んん……？うんー？……っ！

ああ！？そうや！二人で兄さまをわけわけしたらええやん！これなら私も幸せ！せつちゃんも幸せや！兄さま……の気持ちは確認しとらんけど嫌われてはないはずやし……。大丈夫かなー？

……んー、せつちゃんの気持ちは気になるわー……。

作り過ぎたオカズをお裾分けするだけのつもりやったけど…これは本当に確認したほうがええかもしれん。問題はせつちゃんがちゃんと私の話を聞いてくれるかがわからんことやな…。

「…そうや。兄さまが出掛けてからせつちゃんが落ち着かんよ。

やからついでに偵察…やなかった様子を見に行こう思ってたな」

「へ、へええ……………（偵察…って言ったわよね？絶対言ったわよね？）」

これは決して…断じて…絶対に偵察やないんよ？これはお裾分けのついでにせつちゃんの様子を見てくるだけや。心配してるだけなんよー。

「そやからこれからちよい行ってくるわ」

「はいはい、いつてらっしゃい。…気を付けて行ってくるのよ？」

「もー、アスナは心配性やな」

「……………まあ無理しないでね（そつでも言つとかないと心配で仕方ないのよ…）」

「あははは、おかしなアスナやな。無理なんてすることあらへんよ」

これは…そう！必要な確認なんや！もしかしたらせつちゃんトラブることができるチャンスかもしれんのや！

「がんばるえー！」

……………。

結果

うう、ううう…！話しすら聞いてもらえんかったわー…！お裾分けのオカズもルームメイトの龍宮さんが受け取りに出てきたしな…。

「むー！気になるやないかー!？」

「イキナリ叫ばないでよ、このか!??」

ゴ、ゴメンな、アスナ…。

Side out 木乃香

## 第七十九話「休息と故郷とそれぞれの想いと」(後書き)

ほのぼの系です。決して鬱系やヤンデレ系ではありません。(キツパリ)

一度は麻帆良ではこんな感じ…?というものを書いておきたかったのですよ。

それですね?今話は本編と別編の分岐点であるのですよ。

<<

一度目は、コーヒー零してそれに足を滑らせて稼動していた次元門に落ちるとか。この時は皆に心配掛けた…。帰って来た時皆に泣かれたのが一番きつかった…。

>> 二度目は……………これはまだいいか。

>>

例えばこの部分ですが一度目は今書いている”IS”の世界のことですね！。

次に「二度目は…」とありますよね？

これは今後別編が増えたら書き足していくことになりますよ！。

注意：本編系統で作品が増えたら今話を加筆修正することになります。

ではでは！

第八十話「帰還と整理と黒電話と」(前書き)

これを書いていた考えたことがある。

一度改訂する必要があるのではないかと…。

とりあえず直すだけ直してアップするかはあとで考えようと思っ  
では続き！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。  
誤字報告も歓迎。

## 第八十話「帰還と整理と黒電話と」

デイモルフオセカ内…。

Side 葵

地球時間で今は一月だ。突然何を言うかと思うだろ？俺でも言われたらそう思う。それじゃなんで俺がこんなことを言っているかを言おうとだな？それは…。

「????我が君？いかがした？」

「ちよつと、ね。木乃香ちゃんとの約束した期限をオーバーしちゃった、と……あ」

「約束？ふむ……」

… ということ。都市部のある日の夕方、自宅である洋館の一室で思ったことだった。ユエに聞かれて即白状しちゃった！気が振けている証拠だな……。

いやー、宇宙こそが珍しくて楽しいから俺もいつい時間忘れてしまった。木乃香ちゃんも何だかんだと長年一緒に居た一人だから俺の性格も少しは知っている。当然こうなることは予想している……かもしれない？

「ならば木乃香との約定を果たされるが良いかと。……お気になれるのでしょうか？」

「まあ……ね」

うん、実験とかあったし当初はちょっとオーバーしちゃってもい  
いかなって甘えた考えをもっていた。けどな、いざなってみると  
俺の中にある良心がチクチクと痛みだしてくるんだ。

流石にそろそろ帰らないとダメかな。口約束とは言え木乃香ちゃ  
んに一年で帰ると約束しちゃったわけだしね。約束の時期を過ぎて  
も帰らないとか木乃香ちゃんや明日菜に心配掛けちゃってるかもし  
れない。

それに刹那ちゃんが俺との約束を守っているとかも気になるし…  
…。

「……というわけで月へ帰ろうと思う。アイリ……」  
「はい。今からですと遅くとも二日程あれば十分かと。もしもお急  
ぎならば今直ぐにでも出航いたしますが……」

まあ大体それくらいか。今は全ての採掘場が無人稼働しているか  
ら出航準備に然程時間を掛けなくともいけるだろうし。人員も全員  
がここディモルフオセカにてそれぞれの役割を果たしている。

まあ今はそこまで追い詰められているわけじゃないからキチンと  
準備をしてから出航するけどね。

今では資源運搬用の超超長距離転移門をカリストにある第一採掘  
場ヴァルハラ盆地に設置してあるし。一応は適度に無人作業機をバ  
ラ撒いているから採掘関係にも問題ないわけだ。ハッキリ言っても  
うここは無人採掘場となっている。

……ぶっちゃけて言つと形振り構わなければ今直ぐにでも出航で

きるわけだ。

「よし。二日後の午後七時に出航しよう。アイリには準備の総指揮を任せる。ファレノはアイリの補佐を。…リチラは俺の補佐を頼む。少し頼みたいことがあるからさ」

これで二日後には地球へ向けて出航だ。準備はアイリ達に任せておけば万事滞りなく進めてくれるから安心して待てばいい。その間にリチラには俺の手伝いをしてもらおうと思う。

実は「工房」からこの研究室へ持ち出した試作品が乱雑に溢れているから整理したいんだよ。こういうのって人手が欲しいものだよな。あ、リチラだけじゃなくてハオとユエにも手伝ってもらおう、つと。

「ハツ。私共に万事お任せください、閣下」

「了解したの。ここはファレノにお任せなのっ！」

「承りましたわ。……（葵様と二人きり……やりましたわー！）うふ、うふふふ」

な、なぜか一人だけ欲望が透けて見えるのは気のせいかな…なんて。

……。

……。

そのままアイリ、ファレノと別れて研究室の整理をしに移動を開始した。ハッキリ言って航行中にやってもいいんだけど、やはり思い立てば吉日と言うし今から始めることにした。

「……どおおおしてハ才様とユ工様までいらっしやるのかしら？」  
「ふん、愚問だな。貴様と我が君とを二人きりなぞにできるものか」  
「姉上、口が過ぎるぞ。すまないな、リチラ。だが、吾らもお声を掛けられたのだ」

「あら？葵様から？それは」  
「……???何か言った？」  
「うふふふ。いいえ、なんでもありませんわ。ただ何をお手伝いするのかが気になっただけですわ」

なんか今のリチラは普段以上にキラキラした笑顔だな。何かいいことでもあったのか？だとしたら俺も嬉しくなるね。

「……（ヒソヒソ）相も変わらず変わり身の早いヤツだ。ある意味敬意に値するな」

「……（ヒソヒソ）そう言ってやるな、姉上。これでなかなか可愛らしいではないか」

「……（ヒソヒソ）その方々っ！うるさいですわ……」

あははは。良く聞こえないけど仲がいいね。仲良く内緒話か。こういう時って女の子の話しに加わるのはマナー違反だよな。あと聞いたりするのも。

だからここは聞かなかったことにするのが紳士（笑）の努めです。  
（キリッ）

「うん？ああ、ゴメンね？少し研究室を整理するのに人手が欲しくてね」

「あらあら。うふふふ。そうなのですか」

俺の宝物庫にまとめて放り込んでおけばいいんだけどそれだと研究開発する度に一々取り出すのが面倒だった。しかも取り出す時に分類検索はできるけどまとめて取り出すと分類別で山になるという理不尽……。

これだから某慢心王は大雑把で困る。なにが「慢心せずして何が王か！」だ。不器用なだけだろ。いくらクラスが弓兵だからって何でもかんでも投げればいいというものではないだろうに。まったくあのキンピカは……。

八つ当たりだけどね。うん。

そしてやってきました。ここは俺が個人的に使っている研究室だ。中は大広間のようになっていて図書館のように棚が立ち並んでいる。その中に機械や資材、作り終わった作品にまだ作りかけの物が収められている。乱雑に……。

「それじゃ大まかな指示は出すから手分けして……どうかした？」

「我が君。確かここは研究室……でしたな？」

「え？うん、そうだけど……それが？」

「では、なぜ武器庫のように銃器、刀剣、その他火器で埋め尽くされているのですかな？」

「あ……これか。ここにあるのは全部今まで作られてきた武器の試作品だよ」

総合スペックデータ上は一人ひとりが「紅き翼」並に強化されている皆から目を逸らすために強力な火器類を開発していたらいつの間にか目の前の惨状に……うん、武器が山のように積み重なっていた。

「……試作品関係が武器保管庫に無いと聞いていましたが原因は葵様でしたのね」

「えっ！？それは誤解だ！キチンと書類に……書類、に？……っ！忘れてたー……」

「我が君……」

「葵様……」

ううう……そんな目で見るなよお。しょーがないじゃないか！皆をいかに世間の目（主に魔法使い）から守るかしか頭になかったんだからさあー……。

「ふう……関係書類の届出はわたくしが手配いたしますわ。今はここにあるものの目録をお作り致しましょう」

「ありがとおお！リチラは優しいなあ……！」

「きやつ！あ、ああ葵様っ！？イキナリ抱きつかれるなんて！あんっ、そ、そこはっ！（こ、これはまさかの役得ですわ！）」

もう！リチラはほんつとに優しいなあー！嬉しさを伝えるために正面からハグした。それはもうぎゅっとな。ついでに頭を撫でるのも忘れない。いやー、フォローしてくれてありがとね！感謝感謝！

「うぬう、リチラめ……羨ましいな。ここは対抗して私も行くべきであろうか……？」

「ふふふ。そうであるな。だが今は我が君から任された役目を全うするのが先であるよ」

「う、うむ。そうであったな……（我慢……我慢……我慢……）」

ああ、いけないいけない。つい書類仕事を代わってもらえた喜びから周りが見えてなかった。

「あ、ゴメンね。今俺もやるから」

「なに、構いませぬよ。……ああ、刀剣類は吾らがまとめますので我が君は銃器や他をお願いしてもよろしいか？」

「うん、わかった」

銃器に他の特殊、と言うか変り種を分類整理しないと。そのまま銃器関係が密集している棚の前へ移動した。さて、まずは比較的簡単なところから手をつけるか……。

「はあはあ……ふう。出遅れてしまい申し訳もありませんわ。お許してください」

「ふふふ。なに気にせぬとも構わぬよ。リチラは我が君を手伝うと良い」

「ええ。ではそうさせていただきますわ」

直ぐ側で手伝ってくれるリチラにありがとね、と伝えてから作業を再開した。拳銃はこっち…小銃はこっち…携行型ロケットはこっち…機関銃はこっち…銃弾関係はあとで…と分類していく。

ここにある銃器の殆どは現在使用されている銃器を改造したものだ。S & W系統やベレッタM93Rを始めとした拳銃。ロシアの傑作銃であるAK-47を始めとしたライフル銃など。少し変わった銃だとキャリコム100などの機関銃もある。

様々な銃がごっちゃで棚に収納されている。いや、収納と言うか押し込まれているのか。作ったら作ったで手近なところに置いていったからこんなになっただんだよな…。

で、だ。中には他作品を題材にしたネタ銃だつてある。某巨大十字架型とか、某吸血鬼達の使った某大型二丁拳銃や某大型支援重火

器とか、赤いコートを着た某お尋ね者の回転拳銃とか、他にも色々……。

原作が始まったらいくつかは実際に使ってみたいものだな。うん。

「あ、刀剣を扱う時は間違っても自分を斬るようなことがないようにね」

「はっはっはっ。二刀小太刀の九十九神、それも我が君らの手による最上級の個体である吾らがそこらの刀剣に斬られることなどありえませぬ」

「いや、まあ……ね？この試作品は自重を半ばかなぐり捨てたような代物が多いからなあ……」

「こちらは他作品を参考にしたものが殆どだから物騒なのが多いんだよ。」

刀剣だけでも切断力強化とか。折れない、曲がらないとか。傷つけた相手に何某かの呪詛を傷口から流し込むとか。身動きを拘束する影縫いの効果とか。変幻自在に姿を変えるとか。……と、まあ様々ある。

そんな“概念”を定義し構築し蒐集し抽出し濃縮し結晶化し加工し作り出したのが“概念武装”、または“概念兵器”と言うものだ。これは例えるならば某運命のゲームに登場した宝具とかがそれに当たる。

「我が君。この真紅の槍はどこへ？」

「あー、それは奥の棚へ立て掛けておいて。槍用のラックがあるから」

「承知。他の槍もそこへ持って行きますぞ」

「お願いねー」

はいっ！今ユエが持っていた真紅の槍は試しに作ってみたゲイボルグ・偽だ。<sup>レブリカ</sup>一応は槍に込められたという“呪い”はできる限り再現した。尤も呪いとか物騒だから中身は根気よく抽出した概念結晶だけだ。

俺がこれに込めた概念の内容は“当たるまでの過程をスツ飛ばして結果として当たっている”という必的必中だ。これは“心臓に命中する一撃必殺”ではなく“相手の身体に命中する一撃必中”というある種、宝具の劣化版になったと言える。

まあ所詮は再現品だ<sup>レブリカ</sup>と言うことだ。頑丈さ以外はオリジナルには遠く及ばないさ。概念はあっても神秘性が皆無だし。

「あら？葵様。これは何なのかしら？」

「んー？どれどれ？……ああ、また懐かしいものが出てきたなあ……」

リチラが柵から取り出したものは革袋だった。中にはビー玉くらいの大きさをした水晶球が十数個入っている。色は無色透明、とても透明度の高いものだ。

「これはゴーレムの核だ<sup>コア</sup>」

「ゴーレムの、核？」

うん、そう、とりチラに答えてから俺は革袋から一つ取り出してそれを眺めた。

「これはリチラ達と出会う前に作ったものだ。ほんと懐かしい……」「出会う前……。そうなりますと葵様の初期の発明品ですね。」

ゴーレムの核とのことですが使い方は通常のように土人形に埋め込むのかしら？」

「いや、これは種蒔きするようにすればいい。身体の構成は接触したもので構成される。例えば土、泥、鉄、岩など個体、液体：気体は無理だけど何でもいいからさ」

この世界に落ちてきて割と直ぐ作った気がする。落ちた先にドラゴンが目の前に居た。あの時は怖かったから…身を守る手段として護衛を作ろうと思ったんだよ。

水晶球のアイテム名は万能の守護者オウルマイティ・ガードナーと言う。名前負けしてるけどね！？因みにこれが俺の“身を守るシリーズ”の第一弾だった。うっわ、今思い出すとトコトン人任せだ……。

使用する前に魔力と作り出すイメージを水晶球に込めて蒔くだけで一定質量を持ったゴーレムを作ることができる。一つの水晶球で最大500kgまでのゴーレムが作成可能であり質量は取り込んだ水晶球の数に比例し依存する。

まあこの世界では自分の身を守るなら根本的に自分の身体を鍛えるほうが確実だったんだよ……。お陰で合気道、柔術、刀剣術など、特殊なものは鋼糸術なんかも修めたものだ。時間に余裕があるってイイヨネ。はっはっはっはっ……はあ。

「こちらはもうお使いになられないのですか？」

「……………そうじゃないけど一つだけ欠点があるんだ」

「あら？お聞きした限りではそのような印象はなかったのですが……。それは何なのかしら？」

「姿形、質量は変えられるのに全体的な印象が女性型にしかならな  
いんだ」

「……………はい？え、ええと……………え？」

「勿論性能に問題はない。誰が使っても一定の性能が得られる。…  
…だけど俺が使つと、なぜか女性のような印象を持つゴーレムにな  
るんだ」

本当に不思議だよねー…。人型を作れば戦乙女ヴァルキリアのようになるし…  
ケンタウロス  
人馬を作ろうとすると女性の上半身になるし…鳥人は人鳥になるし  
マーマン  
マーメイド  
…鳥人は人魚になる…。

もうこれは呪いのレベルではなからうか、と悩んだものだ。当初  
はあの女神（幼女）は俺に何をした、と小一時間ほど問い詰めたく  
なったな。精魔奇兵の再誕時でも呪いそれは健在だったし…。

「そ、それはなんと言いますか。その…ええー？（あれかしら？感  
情の存在しないゴーレムすら葵様の魅力にやられたとでも言うの？  
な、謎ですわ……………」

「フフ、フフフ…でも力をつける前の当時は重宝したものだよ。姿  
に目を瞑れば性能は優秀だったし」

ただしどんなに数を揃えても「紅き翼」クラスやアーウエルンク  
スシリーズには到底敵わない。誰でも使える汎用性を追及した魔法  
具だから正面切つて戦つとしても精々が物量で押して足止めできれ  
ば御の字だ。

「わたくし達の前はこの子達が葵様をお守りしていたのですね…………。  
もうご使用になられないのかしら？」

「使わないってことはないと思う。でも、細かな命令がこなせない  
から難しいかな」

昔ならともかく今では役目に特化した自動人形オートマタやりチラ達がいる。

それに新しくはC O S - M O Sを筆頭にしたシュワさん達が居る。緊急用にはラミエルさんも居るし、彼女の中には自動人形や無人機動兵器も格納されている。

このほぼ万全の体制化の中で使うとしたら……新人の修行相手？因みにウチの子達じゃない。魔法使い達のことだ。刹那ちゃんに茶々丸ちゃん、それに愛衣ちゃんや高音君とかの相手にはもってこいかもしれないね。

「でしたらこれは保管庫へ」

「いや、麻帆良に帰還したら使う機会もあるだろうから俺が持つてるよ」

「そうなのですか？葵様がそうおっしゃるならわたくしは構いませんわ」

俺はそのまま水晶球の入った革袋を宝物庫にしまい、リチラと一緒に整理作業を再開した。はあ、まだ先は長いよおお……。

終わったらこの子達とお茶でも飲むとしよう。そうしよう。お茶菓子には桃のタルトを作つてあるからそれにしよう。

……。

……。

時は経つて二日後。ついに地球圏へ帰還することになった。

俺は自分の洋館で出発を今か今かと待っている。空間モニターにはアイリが映し出されていて、画面の端に見える艦橋は出航作業の報告が飛び交っていた。特にファレノの指示を飛ばす声がよく聞こ

えたな。

「今から帰ると二月頃かな……」

『閣下。それには及びません。超超長距離転移門も完成し正常に稼動しております。目標座標も判明しておりますので拠点である月へはワープなどと違い一瞬で到着致します』

ポソツと口から出たと思えばこの答えだ。もうこれには「そうか……」としか答えようがないだろ。なんでそういう重要そうなことを俺が知らないのかな？かな？

いや、一応は採掘資源を月へ輸送するために超超長距離転移門が稼動していることは知っていたけどさ。だがしかし、全長50kmのディモルフオセカ級を飛ばせるなんて知らなかったし……。

「……それじゃアイリ到着したら知らせてくれる？」

『かしこまりました、閣下。それでは失礼致します』

アイリとの通信が切れて思う。知らされないってことは何？俺ってここではないらしい子なの？知らせる価値も無いと？……ん？ああ、これは楽と言えば楽だからいいのか。これはこれでいいのか。うん。考えてみればこれは研究開発を邪魔されない理想の環境じゃないか！そもそもその話したがそうなるのを期待してアイリ達に全権を与えたのだった……。

「リチラ。下船準備はできてる？」

「既にできていますわ、葵様。いつでも下船可能ですよ」

よしよし。持って行く荷物は収納魔法具の中へ既にまとめてある

のでオーケー。研究室を整理していたら出てきた魔法具だ。これはサイコロ状の黒い六面体で収納する対象を魔法具内部に格納することでコンパクトに持ち運びするためのものだ。

アイテム名は収納空間ザ・ルームと言う。これは試作品だけど今でも問題なく使える。ただし、サイコロくらいの大きさだから紛失し易いのがネックだ。壁と家具の間に落としたとか……。

今では使い易いように家族の一人ひとりに腕輪型の魔法具として配布している。収納できる質量限界は2t強だったか。元の種族的に影魔法が使えない子も居たからこの収納魔法具を作ったんだよ。割と最近に。

俺は個人的な荷物は宝物庫に放り込んであるから問題ないしねー。  
あははは。

『閣下。お寛ぎの最中に申し訳ございません。地球宙域に転移致しました。現在はステルス航行にて月面都市へ移動中。到着は一時間後の予定です』

「それじゃ第二宇宙港から」  
『申し訳ございません、閣下。第二宇宙港は現在総点検中で入港規制下にあります。よって下船には第二宇宙港をご利用下さいませようお願いしますのですが』

第二宇宙港が総点検？……まあ就航一年の新造艦だからそういうことは小マメにやることは間違いじゃないか。点検自体は区分けして少しずつやっているし。

「……ふむ？それなら仕方ないか。あいあい、了解。第三から降りるとしよう」

『ありがとうございます、閣下。それでは後程』

さて、この洋館から第三宇宙港まえゆっくり移動して一時間弱くらい掛かる。のんびり行くか。

……。

……。

はい。デイモルフォセカが誘導に従って月面都市の第一宇宙港へ入港して無事に到着した。なにやらお隣の第二宇宙港からガンガン、ドンドン、ジジジと大きな音が聞こえるから大規模な作業をしているらしい。

そして今、宇宙港から月面都市を目指して電気自動車エレカーに乗って移動中だ。因みに外観はリムジンだが中身は装甲車並だ。実はこの車、デイモルフォセカ艦内でも乗っていた。

運転席にCOS・MOS。車内には俺（最早ラミエルはセットだ）、陽月姉妹、精霊三人娘、悪魔三人娘、精魔奇兵三人娘が乗っている。このリムジン、外観は普通だが内部にはまだ余裕がある。亜空間拡張技術万歳だ。

皆、思い思いにお喋りしたり、車内に備え付けられていた飲み物やお菓子をパクついたりしている。

「ここに来るのも一年ぶりか……」

それでまあ無駄に高度な技術をつぎ込んだ車内で俺が考えたのはそんなことだった。よくよく考えたら月面都市に直接来たのって数

えるくらいしかなかった。ここまで造っておいてなんだかなー…。

あつ！都市に名前すらないし！？あー…デイモルフオセカにある都市部も名前ないや。なんか考えておかないといけないかなあ。何か神話関係からヒントを貰って、もじってつけてみるか。

でもなあ、家族と世界間移動する時に月面都市は放棄するかもしれないし、無駄かな。……いや、ここを離れる時は一時的にでも魔法球に封じればいいのか。そうすれば「工房」のように顕現させることも可能になる。

よし！今は資源を集積するから封じられないけど世界を旅立つ時はそうしよう！うんっ！

「閣下。麻帆良へはいつ赴かれますか？」

「ん？んー…明日か明後日、かな。今日はここに泊まるよ。木乃香ちゃん達へのお土産は用意してあるけど行く前に連絡しておかないとだし」

ふふんっ！木乃香ちゃん達の対策は万全よ！アクセサリー関係や手作りお菓子を土産に彼女達のご機嫌を取るのさ！……何て言っただって一年間も連絡もしないで放置しちゃっていたからね。これくらいしないと言われるか……。

「かしこまりました。同行される人数はいかが致しましょう？ご要望がないのでしたら私のほうで見繕っておきますが」

「同行者は側近連中全員…あつ、アンだけは月に待機で。それと親衛隊から数人、店の手伝いに出してくれると助かる。こっちの人数はアイリに任せるから」

アンを月に残す理由としてはアイリ達をバックアップしてもらいたいからだ。今の彼女の本体はディモルフオセカだから地球圏で行動するには目立ち過ぎる。前の500m級戦艦とは訳が違うのよ。

もう一つの理由としては「工房」にあった三部の本部がディモルフオセカに移転済みというのもある。つまり、作戦部の総合戦力、情報部の情報統括、司令部の生産管理の中枢機能を丸々移したということだ。

あとで気が付いたけど、いつまでも魔法球を本部とするには流石に無理があったからな。超弩級艦船だとしてもキッチンとした拠点欲しかったんだ。だから、ディモルフオセカの完成は喜ばしかったのが正直なところだ。

「承りました。最善のメンバーを選出いたしましたよう」

「ありがとうございます。アイリ達は」

「承知しております。……私共は月で待機しております。閣下のご用命がありましたら間髪なく出撃できるように準備は整えておきますのでご安心下さい」

「……うん。アイリ達が居てくれると心強いよ。背後は任せた」

「ハッ。勿体無きお言葉にございます、閣下」

もうツッコまない。俺の考えの常に先に行くのが今のアイリだ。<sup>メイドさん</sup>

もう驚かないよ……。

こんなことは言いたくないけどメイド職は素でチート職なのではなかるうか？いや、精魔奇兵であるアイリの基本スペックが高いのは自信を持って言える。だけどメイド服を着るようになってからはますますチート臭くなった気がしてならない。

そこんとこ他の転生者&トリッパーな人達は どう思います？俺は今言ったようにメイドさんはチート職だと思います。ハハハ……。

「くくくつ。アイリは堅いなあ、もう……。あつ、今日は地球の日本時間でいつ頃かね？」

「性分ですし今は仕事ですので。こほん……現地時間で日付と時刻は一月六日、午後八時三十分前にございます」

「ふむ……（部屋に着いたら一度木乃香ちゃんに電話しよう。うん……）」

ふふふのふ。十年以上前から地球上に存在する通信ネットワークは密かに制圧済みよ。……アンがな！これによって常時接続状態になっているから一般の電話回線から軍用の特殊回線まであらゆる回線を使用可能だ。

「よし。とりあえず宿泊先へ案内してくれる？」

「かしこまりました。……COS-MOS」

「……了解。到着まで20分を予定」

何気にこの月面都市は広いようだ。都市内には通行人やお店の店員が……。……って、は？おかしくない？二万未満の家族達は皆ディモルフオセカ内の都市部に住居がある。それなのになぜにこの月面都市に自動人形以外の住人が居るのか？

いや待って。わかっている。わかっているんだ。ふふふ……。……どうせアレだろ？俺の知らない間に月で勧誘を続けていたら増えた、つてところだろ？わかっているんだよ。前に募集した時も似たようなことがあったしさ。

後日。アイリと月面都市の維持管理をしていた自動人形に聞いたところ大よそ予想通りの答えだった。笑えたね。現在の総家族数が十萬未満だって。より具体的には九萬八千飛んで二十八人だ。しかもまだ増加中らしい。

ハハハ。もう俺、月人って名乗ろうかな？フフフ……。

……。

……。

時刻は午後九時五分前。新聞配達のアルバイトをしている明日菜は早ければもう寝る準備をしている頃だ。木乃香ちゃんも不都合がなければこの時間に寝ている。彼女は朝ご飯も作っているから早起きしないとならんのよ。

どっちも今時の女子中学生とは思えないくらい健康的な生活をしていると思う。まあお祭り騒ぎがあれば遊ぶ意思もあるらしいから一概にそうとも言えないが……。

そして俺は今、ダイヤル式の黒電話を前に頭を悩ませている。こんな時間にイキナリ電話していいものだろうか、と。仮にも思春期真っ盛りの女子中学生に電話するのだ。歳を経た俺でも少しは躊躇する。

だって考えてもみるよ。IFの話しだが木乃香ちゃんか明日菜が男の子とデートしている時に他の野郎から電話があったとしたら両者が気まずいだろ。苦い思いをさせてしまったら。

でもなあ……。黙って帰ったら帰ったでどんな文句を言われるかわかったものじゃない。この一年近く一度も連絡してないから呆れられているかもしれない。怒っているかもしれない……。忘れられている、とは思いたくないなあー……。

よし！やらずに後悔するよりはやって後悔しよう！と言うことで木乃香ちゃんのケータイ番号をジーコ、ジーコとダイヤルを回してつと。

トゥルルルル。呼び出し音が聞こえた。待っている間、一度も連絡しなかった後ろめたさからゴクツと喉を鳴らしていた。トゥルルル、チ……。呼び出し音が止まった。

『はい。もしもし？どちら様で』

「あ、木乃香ちゃん？俺だよ、俺。葵だ。今、電話して大丈夫……」

『ほう！葵兄さまっ！？一体今まで連絡も寄越さずにどこほつつき歩いてたんや！！』

「つつっ！？！？！？！？」

み、耳がキイイインってするうう……。イキナリの不意打ちで聴覚防御が間に合わなかったぜい……。

「……お、おおお……。つう……。木乃香ちゃん少し落ち着いて。連絡しなかったのは俺も悪いと思うけど」

『けど！？けど、なんなん！？私がどれだけ寂しかったと……。心配した思っんや！？うう、うううう……。！』

えっ！？泣いたっ！？そんなイキナリ……。えええ……。？これ俺が悪いのか……？

「おうふ……！？ち、ちょっと待って。いや、待ってください。な、泣かないで？ね？」

『うづうづ……ぐすっ……にい……さま……うづっ……』

「あーうー……。ええと、そうだ、明日！明日、麻帆良に帰る！だから泣きやも？なっ？」

『……うづっ……ほんとう、に……？ウソや、ない……？』

「あ、ああ。本当だ。だから、泣くのは勘弁してくれ……」

受話器越しにえぐえぐ、と泣き喘ぐ木乃香ちゃんの声を聞いて思う。これくらいで泣き止んでくれれば御の字だ、と。ただでさえ置いて行ったことでこの一年間寂しい思いをさせてしまったのだから。

『えへ、えへへ。明日待ってるえ。あっ、いつ頃帰ってくるん？』

「立ち直り早いな！おいっ！」

今までのやり取りはなんだったのさ！？ はっ！！もしかして

……ウソ泣きっ！？……いつの間にそんな高度な技を身に付けたのやら。驚いたね！！

『……一年間も私をほったらかして寂しい思いさせた罰や。えへへっ』

「そうか。それはすまなかつたな……」

『もうええよ。……それで何時くらいなん？』

「大体お昼前だな。学校が終わったら来るといい。久しぶりに俺の手料理を振舞おう」

『……うん……うんっ！私楽しみに、してるわ！でもまだ冬休みやから直ぐに行くえ！』

「そうか……」

言葉の空白部分で微かにだが鼻声になっているのがわかる。泣きマネじゃなかった。本当に泣いていたらしい。その証拠に……。

「ちよつと貸して！葵さん！何このか泣かしてんのよ！？」

「きゃーっ！きゃーっ！アスナ何するん！？返してえな！葵兄さまにバレるやないか！」

「……………」

ゴメン、木乃香ちゃん。バレるも何も丸聞こえだったりするんだな、これが。最近のケータイの集音性能はバカにならないものがあるね。

何？黒電話？俺謹製の黒電話ですが。……これ以上言う必要があるかね？ふふん。

「あつ！このか待つてよ！ちよつと！葵さん！聞いてるの！？ねえ！」

「……………くくくつ。ああ、聞こえているよ、アスナ。電話越しだが久しぶりだな。元気にしていたか？」

「も、勿論よつ！元気に決まってるじゃないっ！葵さんこそ……その……どうだったのよ？」

「俺か？ああ、俺も変わりないよ。家族も皆元気だ。明日菜が元気で俺も嬉しいよ」

「あ、う、うん……うう……」

受話器越しだが木乃香ちゃん、それに明日菜も元気であることが確認できた。あとは刹那ちゃんを確認できればいいのだが……ふむ。残念ながら今近くには居ないようだ。いや、この時間だから仕方ないと言えば仕方ないか。

下手すると学園防衛と言う仕事中に電話してしまうことになりかねないから明日の日中に改めて話しをしようと思う。キチンと俺との約束を守ったのかも直接本人に確認したいしな。場合によっては……くくくっ！

『ちよお！？アスナ電話代わってえな！つて、ん？これは………なあ？なんでアスナはラブ臭させてるん？なあ？なんで？』

『なっ！？ラ、ララブ、ラブ臭なんてさせてないわよ！何言ってるの！？このか！！』

『だって……顔赤いやんか。急に髪の毛先を弄りだしてなんやソワソワしとるよ？』

『そ、それは！…その…葵さんがイキナリ電話してきたからなに話したらいいかわかんなかっただけで……なんでもないわよ！』

『本当？本当にそれだけ？』

『そ、それだけよ！』

『（ジイイイイ）………本当に？』

『本当よ！ほ、本当に……それだけなんだからね！？』

まあ…なんだ？話している内容の意図が掴めないが二人とも仲良くしていることだけはわかった。所々が聞こえなかったけど賑やかなのはこっちにも伝わってきたし。

だが……。

「なあ？おい。何を言い争っているか知らないが受話器奪い合うくらいならスピーカーフォンにすればいいんじゃないか？」

『あ………』

「気付けよ。現代っ子どもが……」

『アハ、アハハ………』

俺も居ることを忘れないでくねると嬉しいんだけどねっくくくっ。

S i d e o u t 葵

第八十話「帰還と整理と黒電話と」(後書き)

はあ……。

できるなら二、三話後には原作に突入したいなあ……。。

ではでは！

## 第八十一話「再会とお茶会と飛び蹴りと」(前書き)

甘いのか？病んでいるのか？ハニカミなのか？

それが問題だ……。

作者が書くとなぜか重度のヤンデレ系になるので修正が大変なので  
す。

では続き！

皆の感想&評価&ネタ提供が作者の力になっております。  
誤字報告も歓迎。

## 第八十一話「再会とお茶会と飛び蹴りと」

喫茶店クレイドル…。

S i d e 葵

明けて翌日。朝から喫茶店の地下にある転移門ゲートを通って麻帆良に来ていた。電気や水道、ガスは変わらず維持させていたから問題なく使えるということなので早速店内の清掃や食材などの仕入れの連絡を行っている。

あ？学園長達への挨拶？そんなのはあとだ、あと。最悪、電話で終わらせる。

結局あの上とは木乃香ちゃんのケータイが電池切れを起こすまで話し通しだった。深夜に近付いていたから新聞配達のアルバイトをしている明日菜のことが心配だった。……起きれるかの意味で。

ある程度ひと段落した頃、今朝方に暇ができたらここへ来るように連絡した子が喫茶店を訪れた。適当な席に案内して隣り合うように座る。

ウチのメイドさんと書いて現喫茶店の店員さん達は三人を残してお店の清掃や開店準備の作業を続けている。

「で？呼んだ理由はわかっているよな？刹那ちゃん」

「はい……」

「そうか。それで結果は？」

「……………」

葛藤している表情だった。うん、本当にわかり易い子だな。内心で思わず苦笑してしまった。こんなことで木乃香ちゃんを守れるのかとかは別としても刹那ちゃんはもう少しポーカーフェイスを覚えただほうがいい。

このままだと刹那ちゃんの顔色一つで木乃香ちゃんの今現在の状況が読まれてしまいかねない。ただまあ刹那ちゃんは良くも悪くもまだ若い。そういう技術は今後身に付けなければいいさ。

「はあああ…ダメだったならダメでいいからキチンと答える。別に怒っているわけじゃないからさ」

「あう、あう…も、申し訳ありません…あうっ」

余りにも落ち込むものだからガシガシと少し乱暴に頭を撫でてやった。そんなに落ち込むくらいならやって後悔すればいいのに。

知っているか？人間ってのは、やって後悔するよりもやらずに後悔するほうが後悔する度合いが深いんだよ。丁度今の刹那ちゃんのように、な。

「なぜ木乃香ちゃんの隣に立とうとしないのか。刹那ちゃんが気にしていることはまあ、俺も知っている」

「なうっ！？それは……………」

ぐりぐり撫でていたから変な声が出てしまったな、刹那ちゃん。くくくっ、「なうっ！」って……………。

「バカ。刹那ちゃん達が小さい時に誰がお風呂に入れてやっていた

「思っているんだ。それに詠春からも聞いている」

初めて刹那ちゃんが青山の人に連れられて来た時に俺は詠春から聞いた。刹那ちゃんが烏族と人間の混血児ハイブであり、しかも烏族では禁忌の白い翼を持っていることを。

まあ元から知っていたわけだが。こういつのは形式美だと思うわけよ。知らないはずのことを知っていたら気持ち悪いだろ？そういうことだ。

「あつ！？あ、あああ葵さん！お風呂とかそういうことは忘れてください！！」

「くくくつ。気にするな。俺は気にしない」

と言うかそつち！？烏族の秘密云々よりもそつちに食い付くの！？いいじゃん！まだ子供の時のことだって！気にするような歳でもないだろ！……いやいや、そうじゃなくて烏族とか白い翼とかはいいのか！？

「ウチが気にする言うてるんや！！　　はっ！？……と、ともかくです！そんな昔のこと忘れてください！！いいですね！？」

思考が混乱する余り思わず地の言葉遣いが出てしまったようだ。そこまでイヤだったのか？いや、でもなあ…：当時は大喜びで一緒に入っていたじゃないか。それを忘れると言われてもなあ、うん。やっぱり。

「イ・ヤ。大切な刹那ちゃんとの思い出だ。簡単に忘れてなんかやらないよ」

「えっ！？あー…うー…その…ええ？（大切う！？大切う！？大切う！？）

まり……つまりそういうことなん!?このちゃん!ウチどないしよ!  
!?)は、はうう!!」

「なんだ?一丁前にテレてるのか?可愛いやつだな。くくくっ」  
「うう……!うう……!うう……!」

お?おお?なんかあり得ないくらい刹那ちゃんが赤面している。  
トマトやリンゴのようだ。沸騰しているように湯気が……。

何?そんなに恥ずかしいことだったということ?言葉にならない  
ほどイヤだと?え?俺ってウザがられているってこと?マジで?  
…ええー?

う、鬱だ……。こつやって世のお父さん達は大きく育っていく娘に  
嫌われていくんだね……。今その気持ちの片鱗を味あわされた気がするよ。  
フフフフ……。

「……さて!刹那ちゃんが真正銘チキンであることがここに証明  
されたわけだが」

「チキンっ!?ヒドイ!葵さんヒドイ!」

「黙れ。幼馴染と気軽にお喋りもできないへタレが何を言うか」

「はうう!?(イタイ!葵さんの言葉が事実だけにイタイ!?)」

何を悶えているか知らないが俺の話はこれからだぞ?

「俺は言ったな?約束が果たされなかった時は　　って、なあ?  
刹那……」

「そんな!?さっきは怒ってないって……!!」

それはキチンと答えなかったことに対してであって約束云々のこ  
とはまた別だよ。それに世の中にはとても便利な格言があるのだ。

「くくくっ！なあ、知っているか？昔から伝わるイイ言葉がある」  
「な、なんですか？それは……」  
「それはな？“それはそれ、これはこれ”だ！」  
「それは何か違いますよっ！！」

喧し　い！そんなことは俺もわかってるんだよ！言うてから  
気付いたよ！大体今のはその場の勢いなんだから気にするなっ！？

「よつて約束を反故にした刹那には罰を与えないと、なああ？くく  
くっ！」

「ひう……！？（あ、ああ、あ葵さんが黒い！？楽しそうなのに黒  
い！？）」

刹那あ…何をそんなに震えているのかな？ちよつとハオかユエ、  
または二人の鍛錬に放り込もうと考えていただけなのに……ね？く  
くくっ！

お仕置きもできて刹那ちゃんの技量向上にもなる。まさにこれこ  
そ一石二鳥じゃないか。………（ボソツ）無事に生き残ればの話し  
だけ。

「くくくっ！　むっ？来たか……」

現時刻は午前十時過ぎだ。この喫茶店を目指して真っ直ぐに近付  
いてくる二つの気配があった。その二つの気配はもう直ぐそこまで  
来ている。

「は？来た？一体誰が……？」

刹那ちゃんが聞いてくるのと同時に扉が開いた。備え付けられているカウベルがカランコロンと音を鳴らして来客を知らせた。その客は喫茶店の前にはClosedの札を掛けてあるのにも関わらず迷うことなく来店してきた。

「あれ？……桜咲、さん？」

「えっ？　　せつちゃん？」

まあその来客というのが昨夜、電話していた子達…明日菜と木乃香ちゃんだ。

「……っ！？あ、ああ……お嬢、さま……！？　　っ！！」

「逃がすか！逃がさない！逃がすものか！くくくっ！」

二人を、と言うか木乃香ちゃんを見た途端に刹那ちゃんは椅子を蹴飛ばして立ち上がり脱出を図るために走り出そうとした。

扉の前は木乃香ちゃんと明日菜が陣取っているから他の出口を探したかったようだ。

だがしかし……逃がさないよ？くくくっ！俺は即座に刹那ちゃんの背後に回り込み彼女の腕と片足を掴み羽交い絞めにした。後ろから抱きつくようなこの姿勢だが、これで確実に刹那ちゃんの動きは封じた。これでもう動けない。逃げられない。

この際だから多少、身体が密着するのは勘弁してもらおうとしよう。暖かいし柔らかいしいい匂いがするけどそこは鉄の精神（笑）で堪えた。

「はなっ、放してください！葵さん！くっ！？」

「いいから落ち着け！とにかく落ち着け！今落ち着け！（余り動くなつての！！身体が擦れててててて！！）」

「そんなっ！？…でもっ！このちゃ…お嬢様が見てっ！？んあっ…！そんなところを触らないでください！！（そんな強く握らんといて！！そこは優し、違っ！違っ！）」

むっ！すまん。今のは不可抗力だ。だが触ったのは事実だからこは素直に謝ろう。すまん。

しかしまあ……暫く会わない間に刹那ちゃんもシツカリと成長していたようだ。慎ましくも女性らしく膨らんで、ごほんっごほんっ！な、なんでもない。

と、まあバカらしくも賑やかに刹那ちゃんの動きを封じていたら店内の気温が一気に下がったような錯覚が俺の危機感知センサーが察知した。その方向を見たら……。

「楽しそうやん。二人とも何してるん？」

「っっっ！?!?!?!」

直ぐ背後に修羅がげふんげふんっ、失礼、羅刹がごほっごほっ、うん…木乃香ちゃん(?)が居た。この子は木乃香ちゃんだよな？いや、木乃香ちゃんだよ？なんだよ“(?)”って……。

おい……明日菜。部屋の隅で震えてないでこっち来てお願い…え？拒否…だ、と?…は?なにやらジェスチャーで伝えようとしているな。ええ、なにになに?…マ…キ…コ…ム…ナ。え?巻き込むな、だと…!?!?

ごほごほんっ！ま、まあいい！うん！

それにしても今の木乃香ちゃんだがこれまでに見たこともないような“無”表情なんだ。特に…その目が…うん、瞳から色が消えたような？先生。いつもニコニコ笑顔の木乃香ちゃんらしくないです。この子に何があつたのですか？

「なー？なんで黙ってるの？なあ、兄さま、せつちゃん。私もませ  
てえな。…なー？」

「あわ、あわわわわわっ」

なんとということだ！想定外の事態だから刹那ちゃんは混乱してあ  
わわわと処理落ちしてフリーズ状態だ！相変わらず刹那ちゃんは木  
乃香ちゃん関係になるとヘッポコになる。今もあうあう言っている  
し。

何が木乃香ちゃんにあつたのかは知らないがここは俺が対応する  
しかないか……。

「こ、木乃香ちゃん。その……どうしたんだ？」  
「わからの？ウフフフ。わからのやな……。そうやな。兄さま  
はいつもそうやった。私が何をしても子供扱い、妹扱いやったわ…。  
ウフフフ…」

木乃香ちゃんが何を言いたいのかがわからない。子供扱いしたのは  
事実だがそれはまだ幼女だったり小学生だったりしたからだし、  
妹扱いしたのも詠春に頼まれて預かってお世話していたら娘のよう  
な歳の離れた妹のような愛着が湧いたからだ。

それらにしても俺のできる限りの愛情を注いできた。思い浮かぶ  
限りでは俺に落ち度は無いと思う、のだけど……。うむむ？

「ところで……いつまで兄さまはせつちゃんとイチヤイチャラブ  
ブしてるつもりなん？」

「イチヤ？……は？」

「ラ、ラララブ！？」

イチヤイチャラブラブって……。木乃香ちゃん。君には今の俺達  
の姿がそう見えるのか？逃げ出そうとした刹那ちゃんを後ろから羽  
交い絞めになっているのに？今も逃げようとしているからぎゅっと抱  
き締めないといけないのに……。

あつ、こら！刹那ちゃん。暴れちゃダメだつて！てててっ！？  
……なぜ力を込めるとますます暴れるかね！？顔も真赤になってい  
るし！力み過ぎじゃね？はあ、そんなにイヤなら逃げないでよ、も  
う……。

「……（むうう！なんやの！？なんやの！？そんなにくっつい  
てーっ！私もくっつきたいーっ！）」

んむ？なんか木乃香ちゃん視線がまたもや鋭くなったような気  
がする？冷たいような、焦れるような熱が籠っているような……。

「むむむ？（愛情なら家族や木乃香ちゃん達には注いだつもりだけ  
ど、今更怒ることか？）」

「ご、ごご誤解です！お嬢様！私は決して！」

「ごめんな、せつちゃん。今はちよお黙っててや？」

「はいいいいッツ！！」

うわ……。今の木乃香ちゃんの声、感情が感じられないくらい  
限りなく平坦だった。ほら、見てみるよ。俺の腕の中に居る刹那

やんがガクガクプルプル震えて何かに怯えているじゃないか。

あーもー。涙目になってまあ……ほくら。よし、よし。怖くない、怖くない。……むっ？また視線の圧力が強まった気が。

「はあ…何を勘違いしたか知らないけどそれは誤解だよ」

「ウフツウフフ。誤解？……ここまで来て誤解言うんか？ウフフフ」

「そう。誤解だ。大体　　？？？木乃香ちゃん？聞いているか？」

力が抜けてだらんと上半身が前に傾いて顔を俯かせて、その綺麗な髪が木乃香ちゃんの表情を包み隠している。小さく「ウフ、ウフフ…」と嗤う声が聞こえてくる。何か楽しいことがあったのかね？それなら俺も嬉しいことだ。

うん。嬉しいことだ。だがしかし、俺の話しをこの子は聞いているのだろうか？それに木乃香ちゃんがなんで機嫌悪いのかがわかってないし……。

「ウフフ。　誤解や言うなら……抱き締めてるせつちゃん放しいやー！！いつまで抱いてる気や！？（私が抱いてもらいたいくらいやのに！）」

ガックリと俯いていたと思えば今度は地団太を踏んで抗議してきた。なぜか興奮しているようで尻に少しだけ涙が浮かんでいる。

木乃香ちゃんは俺に「刹那ちゃんを放せ」と言うがこれくらい昔と同じでよくあるスキンシップのようなものじゃないか。木乃香ちゃんにも同じようなことをしたことがあるだろうに。

まあ……今は逃げようとしている刹那ちゃんを拘束しているわけですが、ね？くくくつ。

「むっ？いや、これは逃げようとする刹那ちゃんを捕まえるためであつて、決して他意は……」

「いいから！今！すぐに！放しいやー！！」

「わっかかりましたっ！！」

はいっ！なぜか逆らえませんでしたっ！木乃香ちゃんのプレッシャーが襲い掛かると勝てる気がしなかつたぜい！ちくせう……。

そんなわけで木乃香ちゃんの要求通りに拘束していた刹那ちゃんを放すことにした。とりあえず側にある席に座らせて小声で「逃げるなよ」と釘を刺すのも忘れない。ちよつと涙目になっていたが二度手間なんて勘弁だし。ここは我慢してもらおう。

け、決して木乃香ちゃんが怖くて屈したわけじゃないんだからね！？……ホ、ホントなんだから！……やべ。自分で言っておいてアシだがキモイ。鬱だー……。

あつ、でもまあ……刹那ちゃんを解放した時に温かな感触が感じられなくなると一瞬だけど寂しいものがあるな。こつ……娘が旅立つ的な意味で。

「あう……はっ！？（何を残念がっているのだ！私は！？）」

「むむむ？ラブ臭が……（こつちから……？）」

「ひうっ！？（お嬢様の目がギョロツと！？）」

木乃香ちゃん……。君は何を察知した？小さ過ぎてよく聞こえな

かったが、なにやら刹那ちゃんがビクツと反応して怯えているのだけれど……。これだと放そうが放すまいが変わらなくないかね？

「……………ん？んん？気のせいやったか……………」

「木乃香ちゃん。もう機嫌直してよ。ね？俺にできる限りのことはするからさ」

「っ！（これは……………チャンスやないか！？）」

もうこの際だから何が気のせいとか聞かないから機嫌直そうよ。正直言っただけなんでこんなことになっているのかがわからなくて困惑しているのよ。

俺はただこれを機に木乃香ちゃんと刹那ちゃんを多少無理矢理でも仲直り…はよくわからないがせめて話し合いの機会を与えようと考えただけなのに。

なぜに今の俺は木乃香ちゃんから非難の目で見られているのだろうか？これではまるで浮気現場を見られた夫のようではないか。…  
…悪くないはずなのに今ものすごく居心地が悪く感じるし。

「……………だ、だっこ」

「……………は？すまん。もう一度頼む。聞き逃したようだ」

「せやから！だ・っ・こ！それで後ろからぎゅってしてくれたら…

…その…許すわ」

え？マジ？そんなのでいいの？それくらいならお安い御用だ。ふふふのふ。お膝に抱っこなんて木乃香ちゃん達が小さい時からやっていたからこれでも座り心地はちよつとしたものだと思っただよ。

「ふむ……それじゃ。はい、こつちにおいで」

そのまま刹那ちゃんの隣に座って膝をポンポンと叩いて木乃香ちゃんにここに座るように誘った。

この時の俺は小さな木乃香ちゃん達を相手にしていた昔を思い出して心も表情もニコニコと暖かい気持ちになっていた。やはり親しい子の成長を目にすると嬉しいものがある。

「う、うん。し、失礼します……」

「うん。どうぞ」

緊張と恥ずかしさでギギギとぎこちなく腰を預けてくる木乃香ちゃんを見て内心で苦笑した。自分で言い出しておいて恥ずかしがるとは、なんて思ったけど口には出さない。彼女だってもうお年頃だから。

「ん……ひゃ！（うで！兄さまの腕に抱き締められて！あ、でもこれ暖かくて懐かしい……安心する、ん……）」  
「くくくつ。木乃香ちゃんも大きくなったなあ」

腕を彼女の腰に回してぎゅっと引き寄せて座る位置を少し調整する。やはりまだ小さな時とは違い立派に育ってくれたようだ。体重が、なんて野暮なことじゃないぞ？

だが。そう、だがしかした。俺の膝に座っている木乃香ちゃんだけが借りてきた猫のように大人しくなっていた。久しぶりにやったから変に緊張しているのかもしれない。最後にやったのは……小学三年くらいだったか。

そして幻視だとわかっていても、だ。膝の上に座っている木乃香ちゃんだが俺の目には今の彼女が三頭身のプチ木乃香ちゃんに見えるて仕方ない。因みに口はバツテン印な。とても可愛らしく感じる。

やっぱり！可愛いは真理だな！うん！ほーら。撫で撫でてやるぞー？

「はふ……ん……あの……兄さま？私、お、重くない？」

「???……いや、軽くて心配なほどだ。キッチンとご飯食べているんだらうな？ファストフードとかお菓子とか食べてない？」

今時の中学生の中ではそれなりに家事をこなすことができる木乃香ちゃんだからそんな心配は無いと確信しているが一応の確認はする。いつだって子供の心配をするのは大人の務めだからな。

「ち、ちゃんと自炊しとるよ。心配せんといて。ううう（やっぱり、これ恥ずかしい。懐かしいけど、なんや気持ちよくて意識がボーっとしとるし……）」

「……そうか。それならいい」

「うん……（あかん……このままやと、寝、て……）」

期待通りの答えだった。全寮制だから俺の手料理を振舞う機会がないからな。必要ないとわかってはいても心配してしまう。木乃香ちゃんと明日菜にはたまにお弁当を手渡したりとかしたな。

去年までは表立って動くこと面倒になるから自重していたがバレた今は堂々と行動できる。猪突猛進のように頭悪く暴れ回るという意味じゃないぞ？狙われる心配が少ないという意味で、だ。

今は大半の人員が月面都市とディモルフォセカに集中している。

今の麻帆良に居るのは数人、多くても十数人だ。まあ人手は必要になれば随時要請すれば派遣されるから問題は無いが……。

「誰か。紅茶を用意してくれる？ああ、お茶菓子もね」

「かしこまりました。葵様」

……色々考えることはあるが今だけは久しぶりに再会したこの子達と語らうことにしよう。

遅れたが、メイドさんの一人に紅茶とお茶菓子の用意を頼んでおく。ただまあ彼女達はメイドさんとしても優秀であることは間違いない。俺に言われずとも既に用意しており、一声掛ければすぐに出せるようになっていた。

「ん、ありがとね。…ほら、明日菜もそんなところに居ないでこっちに来て座って。刹那ちゃんはまだもう少し楽しみにしな」

「は、はい。わかってはいるのですが……」

「まったく…一時はどうなるかと思ったわよ。イキナリこのかが不機嫌になるんだもの」

「くくくつ。そう言うなよ。未だに俺も意味がわからないんだから」

本当に。今でも「なぜこうなった!？」という気持ちだしね。そんなに寂しい思いをさせてしまったのかと申し訳ない気持ちにもなる。それに今この腕の中にある心地よい存在は愛おしいとも思う。娘や妹的な意味で、だけど。

あつ、当然刹那ちゃんや明日菜も同じくらいに愛おしく思っているよ。うん。

「……それで?いつまでそのまま居る気よ?」

「ん、これ？んー……懐かしい気分だから暫くはこのまま、かな。それに……」

「すう……すう……すう……」

「木乃香ちゃんがこんだからね」

ポンポンと撫でていたらいつの間にか寝ていた。

こうして木乃香ちゃんの寝姿を見ていると思ひ出す。昔、近衛の本山でも同じことがあった。屋敷の縁側でこうしてまだ小さな彼女を膝に乗せていたらぽかぽかのお日様に照らされてうつらうつらしていた。

それをどこか羨ましそうに横から見ていた刹那ちゃんも居たが、その彼女も春の暖かな陽気にやられてしまい、ついにはぼてんと俺に身体を預けて静かに寝息を立てていた。

あの時が一番暢気で穏やかな時間だった。今でも大切な……懐かしい思い出だ。

「ふう……仕方ないわね。昨日は寝るのが遅かったし。そのままでもいいわ」

「くくくつ。ケータイの電池がなくなるまで話し通しだったからね。これも仕方ないさ。明日菜はどうだ？なんだったら客間を用意させるが」

「いいわよ、別に。私は一度起きちゃえば強いもの。それよりこの一年間は何してたのよ？」

うつぐつ。また答え辛いこと聞くなあ……。まさか「いやあ、ちょっと木星まで行ってたんだ。てへっ」なんて素直に言うわけにもいかない。と言うかそんなことしたら頭を疑われる。すっごい不本意

だけど。

「あ、あの…葵さん？私はもう帰ってもよろしいでしょうか？お嬢様もこのような状態ですし」

「あん？それは」

「あれ？桜咲さん帰っちゃうの？このかと話さなくていいの？幼馴染なんですよ？」

ダメだ、と言おうとしたら明日菜に邪魔された。いや、彼女に他意はないとわかってはいるけどね。ええ、わかっているんです。彼女って時々天然で思い込んだら一直線に突っ走る癖があるしね。

「いえ、私などがお嬢様と……。ですから私はここで失礼します。では」

「まあまあ今少し待ってみよう、かつ」

「あうっ！？葵さん！？はな、放してください！」

「バカ。静かにしろ、バカ。木乃香ちゃんが起きちゃうだろうが」

「うっ……（そんなバカバカ言わなくてもいいじゃないですかっ）」

そんな悔しそうな顔してもダメだ。可愛いだけで全くと言っていいほど怖くない。

「勝手に居なくなるなって。久しぶりに会ったのに寂しいだろうが」

「あう……そんな言い方、ヒドイです……。卑怯ですよ、葵さん……」

それは自覚している。理性ではなく感情に訴えているわけだし。刹那ちゃんのように義理堅い人間には効果的な引き止め方だと理解している。それでも少し考えたかった。今日、これから、どうするかを。

はあ…刹那ちゃんを引き止めたまではないとして今日の本題だった木乃香ちゃんがこれだもんな。これじゃ話し合いも何もできない。刹那ちゃんとの話しは別の日に改めてやるしかない、か。

「はあ…まあいい。今日はここまでにしよう。刹那ちゃんとは改めて話そうか」

「何でもいいから今は放してくださいっ……………」

小声で怒鳴るとか器用なことするなあ…………。それでも間違っただことは言っていないし、キチンと言質は取れた。勢いで言っただけかもしれないが。

「くくくつ。確かに聞いたからな？逃げるなよ？」

「逃げませんつ。逃げませんからっ。…………（逃げたら何をされるか…………ううう）」

ここまで釘を刺しておけば呼び出してもすっぽかすことはしないだろ。無意識にド忘れでもされない限りは、な。

次の約束を取り付けることに成功したから刹那ちゃんを掴んでいた左手から力を抜いて解放した。

「よし。それじゃ…………また、な」

「う、はい。…………あっ、葵さん」

「ん？（なにによ？もう今日ここで話すことはないはずだけど）」

出入り口の手前で何かを思い出したかのように振り返った刹那ちゃんは一瞬口籠りながら、その、なんだ？恥ずかしそうに頬を染めていた。

「その……お帰りなさい」

「……くくくつ。ああ。ただいま。またよろしく」

「ふふふ。はい。……では」

刹那ちゃんはそのまま扉を開けて出て行った。ここからじゃよく見えなかったけど耳まで赤くなっていたのだけは見えた。……気がした。でも……くくくつ。

嬉しそうにハニカムんじゃないよ。ちょっと……ほんのちょっと嬉しくなるじゃない。それによくよく考えたら麻帆良に到着して「お帰りなさい」と言われたのはこれが初めてじゃないか。

木乃香ちゃんはなにやら雰囲気がおかしかったし……。明日菜は明日菜で隅で震えて退避していたし……。そう言えば木乃香ちゃんは何で機嫌が悪かったのかね？そのところの理由を聞いてなかったな。

「……なんかいい雰囲気だったじゃない？」

ちょっと小さな喜びを感じて反芻していたら今まで黙って見ていた明日菜がそんなことを言ってきた。心なし、少し不機嫌そう……いや、どちらかと言うと拗ねているように見える。……なんで？

「なんだ？焼いてるのか？俺の記憶が間違っただけなら明日菜は夕カミチ狙いだっただけだが」

「なっ！？ばっ！あのっ……うええ？」

くくくつ。慌てちゃって、まあ。今も昔も相変わらずホントわかり易いのな。いつもの強気な姿勢じゃなくてこういう取り乱す時の可愛らしさを出せばいいのに。

「そついつ可愛らしいところは当の本人に見せてやれよ。俺に見せても撫でるくらいしかできないっての」

明日菜は肝心のところでは無類の強さを見せることがある。ただどこついつ恋愛事になるとたんにへタレになるんだものだ。そこだけはいつもの強気を出せないものか？

はあ……無理だな。できればこんなに悩まないだろ、と考えていると半ば無意識に右隣に座る明日菜の頭をポンポンと撫でていた。こついつ日常の習慣と言つか癖は困ったものだね。うん。

「うつさいわねっ！なにドサクサに紛れて、かか、かわかわ可愛い……とか言つてんのよっ！？う、嬉しくなんかないんだからねっ！？それと！……き、気安く……撫でないでよ」

「だが断る！可愛いものを愛でなくてなんとする？お前が可愛いのは事実だろうが。本当のことを言つて何が悪い」

俺から“撫でる”をなくしたら何が残ると言つのか！！家族とのコミュニケーションの一つでもあるんだぞ！？主に俺が癒されるんだぞ！？癒しなんだよ！それを取り上げようと明日菜！お前はそう言つのか！？

それに！俺は！可愛いものを！愛でることを！やめる気はない！！

「うえ！？あうあう……！（可愛い？私が？そんな、いきなり言われても困る！私には高畑先生が……） てっ！違つわよ！？」  
「なっ？イキナリ叫んでなんだよ。どうした？」

え？なに？何が違うの！？え？俺の存在（撫でる）を全否定する  
と言うのか！？そんな子に育てた覚えはありませんのことよ！？ま  
たお弁当を学校に直接届けに行くぞ！？行っちゃうぞ！？最後にや  
ったのは……小五の時だったか。

「なんでもない！（そうよ！ナニを動揺してるのよ！？私！大体、  
葵さんは無自覚にこういうことを昔から言っただから！もう……）」  
「そ、そうか……？え？」

え！？なんでもないの！？え？俺の勘違いだった！？俺の存在（  
撫でる）理由は守られたのか！？いやっふううう！！明日菜！今度作  
るお前のお弁当は色をつけてやるぞ！おかずを二品サーブスしてや  
る！

……木乃香ちゃんには秘密だぞ？いいなあ？

さて。よくわからないことも多かったが、お喋りしていたらお昼  
近くになっていた。久しぶりに会ったので時間を忘れていたようだ。  
本当に楽しい時間はあつと言つ間に過ぎ去るから困つたものだな、  
まったく。

明日菜と、寝ている木乃香ちゃんを起こしてお昼でも一緒にどう  
か、と考えていた時にもう一騒動が押しかけてくることになった。  
それは……。

「葵っ！！居るか！！！」

「……邪魔致します」

「はっ………？」

先生。健やかに眠る木乃香ちゃんを膝に乗せて、明日菜とお茶し

て他愛無い話しをしていたら幼女吸血鬼に襲撃されました。しかもこの時、理不尽にも幼女吸血鬼は俺を見つけた瞬間に飛び蹴りをしてきたとです。それも助走をめい一杯して。

これは冬にしては麗らかな陽気の日に俺の悲鳴が響き渡った出来事だった。まる。

S i d e o u t 葵

第八十一話「再会とお茶会と飛び蹴りと」（後書き）

木乃香が病みかけて…。

明日菜が怯えて…。

刹那が美味しいところを総取りして…。

幼じ…エヴァが落ちだった…。

なんだかなあ…。

でもでも、微妙なお年頃の心理は表現できたかな？

うまくできていればいいけど、ちよっと自信がないとです。

恥ずかしがる心理描写って難しい。

いやまあ、それだけじゃなく他の心理描写も難しいけどね。

どうも。最近、茶々丸を嫁に欲しいと思ってしまっ鉄 桜です。

何気にどこか疲れているのでしょうか？

自分ではそんなことは無いと思っているのになー！。

茶々丸、可愛いよね茶々丸。

茶々丸の純粹さに癒されています。ふふふのふ。

ではでは！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8915k/>

---

葵と精霊と九十九神と悪魔と...

2011年10月22日06時42分発行